

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査

2

(第1分冊)

2008

国土交通省岡山国道事務所  
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査

2

(第1分冊)

2008

岡山県文化財保護協会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査  
2

(第1分冊)

2008

国土交通省岡山国道事務所  
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査  
2

(第1分冊)

2008

岡山県文化財保護協会





遺跡遠景（東上空から）

## 卷頭図版2

### 南溝手遺跡



1 竪穴住居1周辺（西から）



379



C4



2 河道2出土遺物



1 窪木遺跡遠景（西上空から）



2 窪木遺跡古墳時代集落（南東から）





1 窪木遺跡出土 弥生土器



2 窪木遺跡出土 古墳時代の土器



1 古墳時代 竪穴住居出土遺物



2 土器溜まり 5 遺物出土状況（西から）・出土土器



# 序

一般国道180号総社・一宮バイパスは、総社市及び岡山市西部の交通混雑を解消するとともに、同地域の社会・経済活動を支援することを目的とし計画された岡山市楯津から総社市井尻野に至る延長15.9kmのバイパスです。

岡山市門前から総社市窪木間の約1.8kmについては、平成8年度までに4車線を供用しており、残る区間について引き続き事業を進めています。

国土交通省岡山国道事務所では、当バイパス整備区間が、備中国府推定地にも隣接するなど多くの遺跡が点在することから、バイパス整備に先立ち遺跡の保護、保存について岡山県教育委員会と協議を重ね、工事によって影響を受ける遺跡について発掘調査を委託してまいりました。

本書は、一連の発掘調査の中で平成14年から平成19年にかけて行われた南溝手遺跡、窪木遺跡の調査報告書です。この発掘調査によって弥生時代から近世に至る数々の遺構・遺物が発見されました。特に古墳時代後半期の集落や、多くの土器・瓦・陶馬・木製品が出土した古代の河道は注目すべきものです。

これらの遺跡発掘調査の貴重な記録である本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、また、学術・文化のため広く活用されることを心から期待いたします。

末筆ながら、この発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成20年3月

国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所  
所 長 長 谷 川 朋 弘



# 序

岡山県総社市は、かつて「吉備」と呼ばれた地域の中心地であります。市内には多くの遺跡が点在し、「吉備路風土記の丘」に所在する作山古墳、備中国分寺・国分尼寺、あるいは、吉備高原の南端に位置する古代山城鬼ノ城は全国的にもよく知られているところです。

一方、市内を横断する一般国道180号は、岡山市から総社市を経て米子市に至る主要幹線道路の一つです。このたび国土交通省は総社市および岡山市西部の交通混雑の解消を図るとともに、同地域の社会・経済活動を促進することを目的として総社・一宮バイパスを建設することとなりました。

今回建設が予定された地域は、古代の行政区画では備中国賀夜郡にあたり、当時の有力氏族である賀夜氏の地盤として栄えていたと考えられています。その傍証として、備中国府推定地や、賀夜氏の氏寺である栢寺の存在を挙げることができるでしょう。このため、岡山県教育委員会は今回の予定工事路線内に所在する遺跡の保護・保存について関係機関と繰り返し協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存が困難な部分については発掘調査を行い、記録保存の措置を講じることとなりました。

本書には、平成14年から平成19年にかけて行った南溝手遺跡・窪木遺跡の発掘調査の記録を収載しました。総社・一宮バイパス関連遺跡発掘調査報告書の第2冊目となります。

南溝手遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居が良好な形で見つかり、当時の住居構造を知る手がかりになりました。また、古代の河道からは土器・瓦・陶馬・木製品など多くの遺物が出土し、当時の習俗を考える上で貴重な資料を得ることができました。窪木遺跡においては、古墳時代後半期の竪穴住居や掘立柱建物群が姿を現し、当時の集落景観を復元する好材料となりました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を紐解く資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成に際しましては、一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から、有益な御指導・御助言を賜りました。また、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめ関係各位、さらに地元の方々から御理解と多大な御助力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 高畑 知功



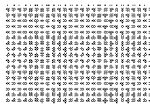
# 例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴い、建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所（現国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所）と岡山県の委託契約に基づき実施した南溝手遺跡・窪木遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化課（現文化財課）が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 南溝手遺跡は総社市南溝手207-1ほか、窪木遺跡は総社市窪木763ほかにある。
- 3 発掘調査は、平成14年度から平成19年度に実施した。調査面積は28,513㎡を測る。
- 4 発掘調査及び報告書作成にあたっては「一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。  
亀田修一（岡山理科大学）  
澤田秀実（くらしき作陽大学）＜平成16年度から＞  
中田啓司（岡山県遺跡保護調査団）  
新納 泉（岡山大学）  
横田美香（岡山大学）＜平成13～15年度＞
- 5 本書の作成は、一般国道180号総社・一宮バイパス関連遺跡発掘調査事務所および岡山県古代吉備文化財センターにて、同センター職員が実施した。担当者は以下のとおりである。  
平成17年度：江見正己・下澤公明・尾崎光徳・松尾佳子・妹尾昌子  
平成18年度：江見・松尾・田中政之  
平成19年度：江見・松尾・上梶武・畑地ひとみ
- 6 本書の執筆は、発掘担当者および整理担当者あたり、文責はそれぞれ文末に記した。また、全体の編集は江見・松尾が行った。
- 7 遺物の鑑定・同定については次の方々に依頼し、有益な御教示を得た。記して御礼申し上げる。  
陶磁器鑑定            大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）  
墨書土器釈読        狩野 久（元岡山大学）  
石材鑑定              鈴木 茂之（岡山大学）  
緑釉・灰釉陶器鑑定   高橋 照彦（大阪大学）  
獣骨・鹿角製品鑑定   富岡 直人（岡山理科大学）  
鉄製又鋏鑑定        松井 和幸（北九州市立いのちのたび博物館）
- 8 土壌分析・樹種鑑定・放射性炭素年代測定・魚骨類同定・玉材質同定については、バリノ・サーヴェイ株式会社に分析委託した。
- 9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

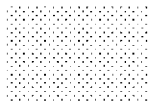


# 凡 例

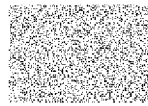
- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高である。
- 2 遺跡の調査に用いたグリッドは旧日本測地系に準拠しており、平面直角座標V系による。  
X = -145.45km、Y = -51.55kmを基準として10m間隔のグリッドを設定し、X軸では北から南にA～Vを、Y軸では西から東へ0～160を付した。(第4図参照)なお、遺構などの位置を表す場合、20m毎を1単位(Y軸は偶数字、X軸はA・C・E…)とし、70Aのように半角数字および全角アルファベットで表し、グリッド名は北西隅を基準としている。
- 3 図面に用いた方位は特に断りがない限り磁北で表示し、古代以降の遺構図については磁北と座標北を併記した。遺跡付近の磁北偏差は西偏7°6′を測る。
- 4 本報告書に掲載した遺構および遺物の縮尺は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。  
遺構 竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列：1/60 井戸・土壙墓・土壙：1/30 土器棺：1/20  
遺物 土器：1/4 瓦：1/5 石製品：1/2、1/3 土製品・木製品・金属製品：1/3  
 銭貨1/2 玉類：1/1
- 5 全体図では遺構名を次のように略称を用いている。  
竪穴住居：住 掘立柱建物：建 柱穴列：列 焼土面：焼 井戸：井 土壙墓：墓  
土器棺：棺 土壙：土 埋置土器：埋 窪地：窪 土器溜まり：溜 河道：河
- 6 掲載遺物番号については、遺跡ごとに土器、土製品、石製品、木製品、金属製品、ガラス製品、骨角製品に分けて通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。  
土製品：C 石製品：S 木製品：W 金属製品：M  
ガラス製品：G 骨角製品：B
- 9 土器実測図における中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性のあることを示す。
- 10 掲載した遺構上のスクリーントーンは以下の範囲を示すものである。



被熱(強)



被熱(弱)



炭

- 11 土器観察表の土色は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)によるものである。
- 12 本報告書で掲載した地形図のうち第7図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「高梁」・「玉島」・「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 13 本書で使用した時代区分は一般的な政治史区分に準拠しているが、古墳時代後半期については『陶邑古窯跡I』における須恵器編年を使用した。また古代以降については、なるべく世紀を併用するよう努めた。

# 目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章	発掘調査の経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘調査の経過	2
第3節	報告書整理の経過	7
第4節	調査および整理の体制	8
第2章	遺跡の位置と環境	11
第3章	南溝手遺跡	15
第1節	遺跡の概要	15
第2節	弥生時代の遺構・遺物	16
1	概要	16
2	竪穴住居	20
3	土壌	24
4	窪地	43
5	柱穴および遺構に伴わない遺物	44
第3節	古墳時代の遺構・遺物	48
1	概要	48
2	竪穴住居	52
3	土壌	56
4	溝	57
5	土器溜まり	58
6	河道	65
7	柱穴および遺構に伴わない遺物	67
第4節	古代の遺構・遺物	68
1	概要	68
2	溝	70
3	窪地	71
4	河道	72
5	柱穴および遺構に伴わない遺物	78

第5節	中世の遺構・遺物	80
1	概要	80
2	掘立柱建物	86
3	井戸	90
4	土壙墓	91
5	土器棺	96
6	土壙	97
7	溝	106
8	素掘溝群	108
9	柱穴および遺構に伴わない遺物	108
第6節	近世の遺構・遺物	110
1	概要	110
2	掘立柱建物	113
3	柱穴列	124
4	井戸	125
5	土器棺	126
6	土壙	126
7	溝	131
8	柱穴および遺構に伴わない遺物	135
第4章	窪木遺跡	136
第1節	遺跡の概要	136
第2節	弥生時代の遺構・遺物	138
1	概要	138
2	竪穴住居	146
3	土器棺	155
4	土壙	158
5	溝	199
6	窪地	201
7	土器溜まり	206
8	下がり	210
9	柱穴および遺構に伴わない遺物	212
第3節	古墳時代の遺構・遺物	216
1	概要	216
2	竪穴住居	221
3	掘立柱建物	255
4	柱穴列	270
5	焼土面	272
6	土壙	272

7	溝	279
8	埋置土器	281
9	柱穴および遺構に伴わない遺物	282
第4節	古代の遺構・遺物	283
1	概要	283
2	掘立柱建物	285
3	土壇	289
4	溝	289
5	埋置土器	290
6	土器溜まり	291
7	下がり	295
8	柱穴および遺構に伴わない遺物	296
第5節	中世の遺構・遺物	298
1	概要	298
2	掘立柱建物	304
3	柱穴列	308
4	土壇墓	308
5	土壇	311
6	溝	318
7	窪地	321
8	柱穴および遺構に伴わない遺物	321
第6節	近世の遺構・遺物	324
1	概要	324
第5章	総括	327
第1節	南溝手遺跡の調査成果	327
第2節	窪木遺跡の調査成果	328
第3節	古墳時代後半期の集落について	330
第4節	古代の瓦について	333
第5節	古代の土器について	336
第6節	「備中国賀陽郡服部郷図」からみえてきたこと	341

(第2分冊)

遺構一覧表

遺物一覧表

窪木遺跡溝12出土哺乳類綱骨鑑定表

掲載遺構新旧名称対照表

写真図版

報告書抄録

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	遺跡遠景（東上空から）	巻頭図版 4	1 窪木遺跡出土 弥生土器
巻頭図版 2	1 竪穴住居 1 周辺（西から）		2 窪木遺跡出土 古墳時代の土器
	2 河道 2 出土遺物	巻頭図版 5	1 古墳時代 竪穴住居出土遺物
巻頭図版 3	1 窪木遺跡遠景（西上空から）		2 土器溜まり 5 遺物出土状況（西から）
	2 窪木遺跡古墳時代集落（南東から）		・出土土器

## 目次

### 〈南溝手遺跡〉

第 1 図	位置図	1	第30図	土壇13 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)	28
第 2 図	遺跡位置図 (1/40,000)	1	第31図	土壇14 (1/30)・出土遺物 (1/4)	28
第 3 図	南溝手遺跡・窪木遺跡		第32図	土壇15 (1/30)・出土遺物 (1/4)	29
	第 1 次調査 (1/7,500)	2	第33図	土壇16 (1/30)・出土遺物 (1/4)	29
第 4 図	南溝手遺跡・窪木遺跡		第34図	土壇17 (1/30)・出土遺物 (1/4)	30
	調査区配置図 (1/6,000)	3	第35図	土壇18 (1/30)・出土遺物 (1/4)	30
第 5 図	南溝手遺跡・窪木遺跡旧地形想定図		第36図	土壇19 (1/30)	31
	(1/6,000 断面縦1/300)	4	第37図	土壇20 (1/30)	31
第 6 図	総社平野を南東より望む		第38図	土壇21 (1/30)・出土遺物 (1/4)	31
	(カシミール 3 D により作成)	10	第39図	土壇22 (1/30)・出土遺物 (1/4)	32
第 7 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	12	第40図	土壇23 (1/30)・出土遺物 (1/4)	32
第 8 図	遺構全体図 (1/2,000)	15	第41図	土壇24 (1/30)	32
第 9 図	弥生時代遺構全体図 (1/1,250)	16	第42図	土壇25 (1/30)・出土遺物 (1/4)	33
第10図	微高地下がり断面図① (1/60)		第43図	土壇26 (1/30)・出土遺物 (1/4)	33
	・出土遺物 (1/4)	17	第44図	土壇27 (1/30)・出土遺物 (1/4)	34
第11図	微高地下がり断面図② (1/60)	17	第45図	土壇28 (1/30)・出土遺物 (1/4)	34
第12図	弥生時代主要遺構図① (1/300)	18	第46図	土壇29 (1/30)・出土遺物 (1/4)	34
第13図	弥生時代主要遺構図② (1/300)	19	第47図	土壇30 (1/30)・出土遺物 (1/4)	35
第14図	竪穴住居 1 (1/60)	20	第48図	土壇31 (1/30)	35
第15図	竪穴住居 1 出土遺物① (1/4)	22	第49図	土壇31出土遺物 (1/4)	36
第16図	竪穴住居 1 出土遺物②		第50図	土壇32 (1/30)・出土遺物 (1/4)	36
	(1/3・1/4)	23	第51図	土壇33 (1/30)・出土遺物 (1/4)	37
第17図	竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	23	第52図	土壇34 (1/30)・出土遺物 (1/4)	37
第18図	土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	24	第53図	土壇35 (1/30)・出土遺物 (1/4)	38
第19図	土壇 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	24	第54図	土壇36 (1/30)・出土遺物① (1/3)	38
第20図	土壇 3 (1/30)	25	第55図	土壇36出土遺物② (1/4)	39
第21図	土壇 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	25	第56図	土壇37 (1/30)・出土遺物 (1/4)	39
第22図	土壇 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	25	第57図	土壇38 (1/30)	39
第23図	土壇 6 (1/30)	26	第58図	土壇38出土遺物 (1/4)	40
第24図	土壇 7 (1/30)	26	第59図	土壇39 (1/30)・出土遺物 (1/4)	40
第25図	土壇 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	26	第60図	土壇40 (1/30)・出土遺物 (1/4)	41
第26図	土壇 9 (1/30)・出土遺物 (1/4)	26	第61図	土壇41 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	41
第27図	土壇10 (1/30)・出土遺物 (1/4)	27	第62図	土壇42 (1/30)・出土遺物 (1/4)	42
第28図	土壇11 (1/30)・出土遺物 (1/4)	27	第63図	土壇43 (1/30)・出土遺物 (1/4)	42
第29図	土壇12 (1/30)	28	第64図	土壇44 (1/30)・出土遺物 (1/4)	43
			第65図	窪地 1 (1/60)	43

第66図	窪地 1 出土遺物 (1/4)……………	44	第114図	中世主要遺構図④ (1/300)……………	85
第67図	柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4)……………	45	第115図	掘立柱建物 1 (1/60)……………	86
第68図	柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/4)……………	46	第116図	掘立柱建物 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)……………	87
第69図	柱穴および遺構に伴わない遺物③ (1/2)……………	47	第117図	掘立柱建物 3 (1/60)・出土遺物 (1/4)……………	88
第70図	古墳時代～古代遺構全体図 (1/1,250)……………	49	第118図	掘立柱建物 4 (1/60)……………	89
第71図	古墳時代主要遺構図① (1/300)……………	50	第119図	井戸 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	90
第72図	古墳時代主要遺構図② (1/300)……………	51	第120図	土壇墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/5)……………	91
第73図	竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/3)……………	52	第121図	土壇墓 2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	92
第74図	竪穴住居 4 (1/60)……………	52	第122図	土壇墓 3 (1/30)……………	92
第75図	竪穴住居 5 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	53	第123図	土壇墓 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	92
第76図	竪穴住居 6 (1/60)・玉出土状況 (1/3) ・カマド (1/30)……………	54	第124図	土壇墓 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	93
第77図	竪穴住居 6 出土遺物① (1/1)……………	54	第125図	土壇墓 6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/5)……………	93
第78図	竪穴住居 6 出土遺物② (1/4)……………	55	第126図	土壇墓 7 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	94
第79図	竪穴住居 7 (1/60)……………	55	第127図	土壇墓 8 (1/30)・出土遺物 (1/3)……………	94
第80図	竪穴住居 7 出土遺物 (1/4)……………	56	第128図	土壇墓 9 (1/30)……………	94
第81図	土壇45 (1/30)……………	57	第129図	土壇墓10 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	95
第82図	土壇46 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	57	第130図	土壇墓11・12 (1/30)……………	95
第83図	溝 1 (1/30)……………	57	第131図	土壇墓13・14 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	96
第84図	溝 2 (1/30)……………	57	第132図	土器棺 1 (1/30)・出土遺物 (1/6)……………	97
第85図	土器溜まり 1 a・1 b (1/60)・出土遺物 (1/4)……………	58	第133図	土壇47 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	98
第86図	土器溜まり 2 (1/60)・出土遺物① (1/4)……………	59	第134図	土壇48 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	98
第87図	土器溜まり 2 出土遺物② (1/4)……………	60	第135図	土壇49 (1/30)・出土遺物 (1/6)……………	99
第88図	土器溜まり 2 出土遺物③ (1/4・1/3)……………	61	第136図	土壇50 (1/30)……………	99
第89図	土器溜まり 3 a・3 b (1/60)……………	61	第137図	土壇51 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	99
第90図	土器溜まり 3 出土遺物 (1/4)……………	62	第138図	土壇52 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	100
第91図	土器溜まり 4 a・4 b (1/60)……………	62	第139図	土壇53 (1/30)……………	100
第92図	土器溜まり 4 出土遺物① (1/4)……………	63	第140図	土壇54 (1/30)……………	100
第93図	土器溜まり 4 出土遺物② (1/4)……………	64	第141図	土壇55 (1/30)……………	101
第94図	土器溜まり 4 出土遺物③ (1/4)……………	65	第142図	土壇56 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	101
第95図	河道 1 (1/120)・出土遺物 (1/4)……………	66	第143図	土壇57 (1/60)・出土遺物 (1/4)……………	101
第96図	柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/3・1/2・1/4)……………	67	第144図	土壇58 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	102
第97図	古代主要遺構図 (1/300)……………	69	第145図	土壇59 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	103
第98図	溝 3～5 (1/60・1/30)……………	70	第146図	土壇60 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	103
第99図	溝 6・7 (1/30)……………	70	第147図	土壇61 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	104
第100図	溝 6・7 出土遺物 (1/4・1/5・1/3)……………	71	第148図	土壇62 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	104
第101図	窪地 2 (1/30)……………	71	第149図	土壇63 (1/30)・出土遺物 (1/4)……………	105
第102図	河道 2 (1/150・1/60)……………	72	第150図	溝 8～12 (1/30)・溝 9 出土遺物 (1/4)……………	106
第103図	河道 2 出土遺物① (1/4・1/3)……………	73	第151図	溝13・14 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	106
第104図	河道 2 出土遺物② (1/4)……………	74	第152図	溝15～17 (1/30)……………	107
第105図	河道 2 出土遺物③ (1/4・1/5)……………	75	第153図	溝18・19 (1/30)・溝18出土遺物 (1/4)……………	107
第106図	河道 2 出土遺物④ (1/5)……………	76	第154図	溝20・21 (1/30)……………	107
第107図	河道 2 出土遺物⑤ (1/5・1/4)……………	77	第155図	溝22 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	108
第108図	柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/3・1/4・1/5)……………	78	第156図	素掘溝群 1・2 (1/150・1/60)……………	108
第109図	柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/5)……………	79	第157図	柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2・1/3)……………	109
第110図	中世遺構全体図 (1/1,250)……………	81	第158図	近世遺構全体図 (1/1,250)……………	110
第111図	中世主要遺構図① (1/300)……………	82	第159図	近世主要遺構図① (1/300)……………	111
第112図	中世主要遺構図② (1/300)……………	83	第160図	近世主要遺構図② (1/300)……………	112
第113図	中世主要遺構図③ (1/300)……………	84	第161図	掘立柱建物 5 (1/60)……………	113
			第162図	掘立柱建物 6 (1/60)……………	114

第163図	掘立柱建物 7 (1/60) ……………	114	第211図	竪穴住居 3 出土遺物② (1/2・1/3) ……………	150
第164図	掘立柱建物 8 (1/100) ……………	115	第212図	竪穴住居 4 (1/60) ……………	150
第165図	掘立柱建物 9 (1/60)・出土遺物(1/3) ……………	116	第213図	竪穴住居 4 出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	151
第166図	掘立柱建物10 (1/60) ……………	117	第214図	竪穴住居 5 (1/60)・出土遺物① (1/4) ……………	152
第167図	掘立柱建物11 (1/60) ……………	118	第215図	竪穴住居 5 出土遺物② (1/4) ……………	153
第168図	掘立柱建物12 (1/60) ……………	118	第216図	竪穴住居 6 (1/60) ……………	153
第169図	掘立柱建物13 (1/60) ……………	119	第217図	竪穴住居 6 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	154
第170図	掘立柱建物14 (1/60) ……………	120	第218図	竪穴住居 7 (1/60) ……………	154
第171図	掘立柱建物15 (1/60) ……………	121	第219図	竪穴住居 7 出土遺物 (1/4) ……………	155
第172図	掘立柱建物16 (1/60) ……………	122	第220図	土器棺 1 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	155
第173図	掘立柱建物17 (1/60) ……………	123	第221図	土器棺 2 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	156
第174図	柱穴列 1 (1/60) ……………	124	第222図	土器棺 3 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	156
第175図	柱穴列 2 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	124	第223図	土器棺 4 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	157
第176図	柱穴列 3 (1/100) ……………	125	第224図	土器棺 5 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	157
第177図	井戸 2 (1/30) ……………	125	第225図	土器棺 6 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	158
第178図	土壙 2 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/6) ……………	126	第226図	土壙 1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	158
第179図	土壙64 (1/30) ……………	127	第227図	土壙 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	159
第180図	土壙65 (1/30) ……………	127	第228図	土壙 3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	159
第181図	土壙66～69 (1/30) ……………	127	第229図	土壙 4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	159
第182図	土壙70・71 (1/30) ……………	128	第230図	土壙 5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	160
第183図	土壙72 (1/30) ……………	128	第231図	土壙 6 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	160
第184図	土壙73 (1/30) ……………	128	第232図	土壙 7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	161
第185図	土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4・1/6) ……………	129	第233図	土壙 8 (1/30)・出土遺物① (1/5) ……………	161
第186図	土壙75 (1/30) ……………	129	第234図	土壙 8 出土遺物② (1/4) ……………	162
第187図	土壙76 (1/30) ……………	129	第235図	土壙 9 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	162
第188図	土壙77 (1/30) ……………	130	第236図	土壙10 (1/30)・出土遺物① (1/5) ……………	163
第189図	土壙78 (1/30) ……………	130	第237図	土壙10出土遺物② (1/4・1/2) ……………	164
第190図	土壙79 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	131	第238図	土壙10出土遺物③ (1/3) ……………	165
第191図	溝23・24 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	132	第239図	土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	166
第192図	溝25 (1/30) ……………	133	第240図	土壙12 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	166
第193図	溝26～29 (1/30) ……………	133	第241図	土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	166
第194図	溝30 (1/30) ……………	133	第242図	土壙14 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	167
第195図	溝31 (1/30) ……………	134	第243図	土壙15 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	168
第196図	溝32 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4・1/2) ……………	134	第244図	土壙16 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	168
第197図	柱穴および 遺構に伴わない遺物 (1/3) ……………	135	第245図	土壙17 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	169
<b>&lt;窪木遺跡&gt;</b>					
第198図	遺構全体図 (1/2,000) ……………	137	第246図	土壙18 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	169
第199図	礫層出土遺物 (1/4) ……………	137	第247図	土壙19 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	170
第200図	弥生時代遺構全体図 (1/1,250) ……………	139	第248図	土壙20 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	170
第201図	弥生時代主要遺構図① (1/300) ……………	140	第249図	土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	170
第202図	弥生時代主要遺構図② (1/300) ……………	141	第250図	土壙22 (1/30) ……………	171
第203図	弥生時代主要遺構図③ (1/300) ……………	142	第251図	土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	171
第204図	弥生時代主要遺構図④ (1/300) ……………	143	第252図	土壙24 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	171
第205図	弥生時代主要遺構図⑤ (1/300) ……………	144	第253図	土壙25 (1/30)・出土遺物 (1/5・1/4) ……………	172
第206図	弥生時代主要遺構図⑥ (1/300) ……………	145	第254図	土壙26 (1/30) ……………	172
第207図	竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	146	第255図	土壙27 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	173
第208図	竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	147	第256図	土壙28 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	174
第209図	竪穴住居 3 (1/60) ……………	148	第257図	土壙29 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	174
第210図	竪穴住居 3 出土遺物① (1/4・1/3) ……………	149	第258図	土壙30 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	175
			第259図	土壙31 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	175
			第260図	土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	176

第261図	土壙33 (1/30) ……………	176	第311図	溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	201
第262図	土壙34 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	176	第312図	窪地1 (1/60) ……………	201
第263図	土壙35 (1/60)・出土遺物① (1/4) ……………	177	第313図	窪地1出土遺物 (1/4) ……………	202
第264図	土壙35出土遺物② (1/4・1/3) ……………	178	第314図	窪地2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	202
第265図	土壙36 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	179	第315図	窪地3 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	203
第266図	土壙37 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	179	第316図	窪地4 (1/60) ……………	203
第267図	土壙38 (1/30) ……………	180	第317図	窪地4出土遺物 (1/4・1/2) ……………	204
第268図	土壙39 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	180	第318図	窪地5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	205
第269図	土壙40 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	181	第319図	土器溜まり1出土遺物 (1/4) ……………	206
第270図	土壙40出土遺物② (1/4) ……………	182	第320図	土器溜まり2・3出土遺物 (1/4) ……………	207
第271図	土壙41 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	182	第321図	土器溜まり4出土遺物① (1/4) ……………	208
第272図	土壙42 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	183	第322図	土器溜まり4出土遺物② (1/4) ……………	209
第273図	土壙43 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	183	第323図	下がり1 (1/60)・出土遺物① (1/4) ……………	210
第274図	土壙44 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	183	第324図	下がり1出土遺物② (1/4) ……………	211
第275図	土壙45 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	184	第325図	下がり2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	212
第276図	土壙46 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	184	第326図	柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	212
第277図	土壙47 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	184	第327図	柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/4) ……………	213
第278図	土壙48 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	185	第328図	柱穴および遺構に伴わない遺物③ (1/2) ……………	214
第279図	土壙49 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	185	第329図	柱穴および遺構に伴わない遺物④ (1/2・1/3) ……………	215
第280図	土壙50 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	185	第330図	古墳時代遺構全体図 (1/1,250) ……………	216
第281図	土壙51 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	186	第331図	古墳時代主要遺構図① (1/300) ……………	217
第282図	土壙52 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	186	第332図	古墳時代主要遺構図② (1/300) ……………	218
第283図	土壙53 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	186	第333図	古墳時代主要遺構図③ (1/300) ……………	219
第284図	土壙54 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	187	第334図	古墳時代主要遺構図④ (1/300) ……………	220
第285図	土壙55 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	187	第335図	竪穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	221
第286図	土壙56 (1/30) ……………	188	第336図	竪穴住居9 (1/60) ……………	222
第287図	土壙57 (1/30) ……………	188	第337図	竪穴住居10 (1/60) ……………	222
第288図	土壙58 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	188	第338図	竪穴住居10カマド (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	223
第289図	土壙59 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	189	第339図	竪穴住居10出土遺物② (1/5) ……………	224
第290図	土壙60 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	190	第340図	竪穴住居11 (1/60) ……………	224
第291図	土壙60出土遺物② (1/4) ……………	191	第341図	竪穴住居11カマド (1/30) ・出土遺物① (1/3・1/4) ……………	225
第292図	土壙61 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	192	第342図	竪穴住居11出土遺物② (1/4・1/3) ……………	226
第293図	土壙62 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	192	第343図	竪穴住居12 (1/60) ・被熱面 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	227
第294図	土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	193	第344図	竪穴住居13 (1/60) ・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	228
第295図	土壙64 (1/30) ……………	193	第345図	竪穴住居14 (1/60) ……………	229
第296図	土壙65 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……………	193	第346図	竪穴住居14カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	230
第297図	土壙66 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	194	第347図	竪穴住居15 (1/60) ……………	230
第298図	土壙67～69 (1/30) ……………	194	第348図	竪穴住居16 (1/60) ……………	231
第299図	土壙70 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	195	第349図	竪穴住居16カマド (1/30) ・出土遺物① (1/4) ……………	232
第300図	土壙71 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	195	第350図	竪穴住居16出土遺物② (1/4) ……………	233
第301図	土壙72 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	196	第351図	竪穴住居17 (1/60)・カマド (1/30) ……………	233
第302図	土壙73 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	196	第352図	竪穴住居18 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	234
第303図	土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	197	第353図	竪穴住居18カマド (1/30) ……………	235
第304図	土壙75 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	198	第354図	竪穴住居19 (1/60) ・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	236
第305図	土壙76 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	198	第355図	竪穴住居20 (1/60)・カマド (1/30) ……………	237
第306図	土壙77 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	199			
第307図	土壙78 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	199			
第308図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	200			
第309図	溝2 a～c (1/30) ……………	200			
第310図	溝3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	200			



第356図	竪穴住居21 (1/60) ……………	238	第400図	土壇79 (1/30) ……………	272
第357図	竪穴住居22 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	238	第401図	土壇80 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	273
第358図	竪穴住居23 (1/60) ・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	239	第402図	土壇81 (1/30) ……………	273
第359図	竪穴住居24 (1/60) ……………	240	第403図	土壇82 (1/30) ……………	273
第360図	竪穴住居24カマド (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	241	第404図	土壇83 (1/30) ……………	274
第361図	竪穴住居25 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	242	第405図	土壇84 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	274
第362図	竪穴住居25カマド (1/30) ……………	243	第406図	土壇85 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	275
第363図	竪穴住居26 (1/60) ・出土遺物 (1/4・1/3・1/1) ……………	243	第407図	土壇86 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……………	275
第364図	竪穴住居27 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	244	第408図	土壇87 (1/30) ……………	276
第365図	竪穴住居27カマド (1/30) ……………	245	第409図	土壇88～90 (1/30) ……………	276
第366図	竪穴住居28 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	245	第410図	土壇91 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	277
第367図	竪穴住居28カマド (1/30) ……………	246	第411図	土壇92 (1/30) ……………	277
第368図	竪穴住居29 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	246	第412図	土壇93 (1/30) ……………	277
第369図	竪穴住居30 (1/60)・カマド (1/30) ……………	247	第413図	土壇94 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	278
第370図	竪穴住居30出土遺物 (1/4) ……………	248	第414図	土壇95 (1/30) ……………	278
第371図	竪穴住居31 (1/60) ……………	248	第415図	土壇96 (1/30) ……………	278
第372図	竪穴住居31カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	249	第416図	土壇97 (1/30) ……………	278
第373図	竪穴住居32 (1/60)・カマド (1/30) ……………	250	第417図	土壇97出土遺物 (1/3・1/4) ……………	279
第374図	竪穴住居32出土遺物① (1/4) ……………	251	第418図	土壇98 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	279
第375図	竪穴住居32出土遺物② (1/4・1/3・1/1) ……………	252	第419図	溝5・6 (1/30)・溝6出土遺物 (1/4) ……………	280
第376図	竪穴住居33 (1/60) ・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	253	第420図	溝7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	280
第377図	竪穴住居34 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	254	第421図	溝8 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	281
第378図	竪穴住居35 (1/60) ・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	254	第422図	埋置土器1 (1/30)・出土遺物 (1/5) ……………	281
第379図	掘立柱建物1 (1/60) ……………	255	第423図	柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3) ……………	282
第380図	掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	256	第424図	古代遺構全体図 (1/1,250) ……………	283
第381図	掘立柱建物3 (1/60) ・出土遺物 (1/4・1/3・1/1) ……………	257	第425図	古代主要遺構図 (1/300) ……………	284
第382図	掘立柱建物4 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	258	第426図	掘立柱建物17 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	285
第383図	掘立柱建物5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	259	第427図	掘立柱建物18 (1/60) ……………	286
第384図	掘立柱建物6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	260	第428図	掘立柱建物19 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	287
第385図	掘立柱建物7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	261	第429図	掘立柱建物20 (1/80) ……………	288
第386図	掘立柱建物8 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	262	第430図	土壇99 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	289
第387図	掘立柱建物9 (1/60) ……………	263	第431図	土壇100 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	289
第388図	掘立柱建物10 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	264	第432図	土壇101 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	289
第389図	掘立柱建物11 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	265	第433図	溝9 (1/30) ……………	290
第390図	掘立柱建物12 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	266	第434図	溝10 (1/30) ……………	290
第391図	掘立柱建物13 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	267	第435図	溝11 (1/30) ……………	290
第392図	掘立柱建物14 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……………	268	第436図	埋置土器2 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	290
第393図	掘立柱建物15 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	269	第437図	土器溜まり5 (1/60)・出土遺物① (1/4) ……………	291
第394図	掘立柱建物16 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	270	第438図	土器溜まり5出土遺物② (1/4) ……………	292
第395図	柱穴列1 (1/60) ……………	271	第439図	土器溜まり5出土遺物③ (1/4・1/5・1/3) ……………	293
第396図	柱穴列2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	271	第440図	土器溜まり5出土遺物④ (1/4) ……………	294
第397図	柱穴列3 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	271	第441図	土器溜まり6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	295
第398図	焼土面1 (1/30) ……………	272	第442図	下がり3・4 (1/30) ……………	295
第399図	焼土面2 (1/30) ……………	272	第443図	柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4・1/5) ……………	296
			第444図	柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/3) ……………	297
			第445図	中世遺構全体図 (1/1,250) ……………	299
			第446図	中世主要遺構図① (1/300) ……………	300
			第447図	中世主要遺構図② (1/300) ……………	301
			第448図	中世主要遺構図③ (1/300) ……………	302
			第449図	中世主要遺構図④ (1/300) ……………	303

第450図	掘立柱建物21 (1/60) ……………	304	第479図	土壙117 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	316
第451図	掘立柱建物22 (1/80) ……………	305	第480図	土壙118 (1/30) ……………	316
第452図	掘立柱建物23 (1/60) ……………	305	第481図	土壙119 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	316
第453図	掘立柱建物24 (1/60) ……………	306	第482図	土壙120 (1/30) ……………	317
第454図	掘立柱建物25 (1/60) ……………	307	第483図	土壙121 (1/30) ……………	317
第455図	掘立柱建物26 (1/60) ……………	307	第484図	土壙122 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	317
第456図	柱穴列 4 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	308	第485図	土壙123 (1/30) ……………	317
第457図	柱穴列 5 (1/60) ……………	308	第486図	土壙123出土遺物 (1/4・1/3) ……………	318
第458図	土壙墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	309	第487図	溝12 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4・1/3) ……………	319
第459図	土壙墓 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	309	第488図	溝13 (1/100・1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	320
第460図	土壙墓 3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	309	第489図	溝14 (1/30) ……………	320
第461図	土壙墓 4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	310	第490図	溝15 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	320
第462図	土壙墓 5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	310	第491図	溝16 (1/30) ……………	320
第463図	土壙墓 6 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	310	第492図	窪地 6 (1/30) ……………	321
第464図	土壙102 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/5) ……………	311	第493図	窪地 7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	321
第465図	土壙103 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	311	第494図	柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4・1/5・1/3・1/2) ……………	322
第466図	土壙104 (1/30) ……………	312	第495図	柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/3) ……………	323
第467図	土壙105 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	312	第496図	近世遺構全体図 (1/1,250) ……………	325
第468図	土壙106 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	312	第497図	近世出土遺物 (1/1・1/3) ……………	326
第469図	土壙107 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	312	第498図	古代三郡位置関係推定図 ……………	328
第470図	土壙108 (1/30) ……………	313	第499図	竪穴住居変遷図 (1/2,000) ……………	330
第471図	土壙109 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	313	第500図	掘立柱建物変遷図 (1/1,000) ……………	332
第472図	土壙110 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	313	第501図	遺跡周辺図 (1/5,000) ……………	333
第473図	土壙111 (1/30) ……………	314	第502図	杯・皿法量分布図 ……………	338
第474図	土壙112 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	314	第503図	土師器杯・皿分類図 (1/10) ……………	339
第475図	土壙113 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	314	第504図	バイパス周辺畠占地部分図 ……………	342
第476図	土壙114 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	315	第505図	「服部郷図」周辺地形図 (1/20,000) ……………	343
第477図	土壙115 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	315			
第478図	土壙116 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	315			

## 表 目 次

(第1分冊)	
表1	調査一覧・経過一覧 …………… 3
表2	会議・現地説明会一覧 …………… 5
表3	文化財保護法に基づく文書一覧 …………… 6
表4	整理工程 …………… 7
表5	南溝手遺跡出土古代瓦集計表 …………… 334
表6	「服部郷図」記載の川畠内容一覧 …………… 342
(第2分冊)	
表7	南溝手遺跡竪穴住居一覧 …………… 348
表8	南溝手遺跡掘立柱建物一覧 …………… 348
表9	南溝手遺跡柱穴列一覧 …………… 348
表10	南溝手遺跡土壙墓一覧 …………… 349
表11	南溝手遺跡土壙一覧 …………… 350
表12	南溝手遺跡溝一覧 …………… 351
表13	南溝手遺跡土器観察 …………… 352
表14	南溝手遺跡石製品一覧 …………… 362
表15	南溝手遺跡土製品一覧 …………… 362
表16	南溝手遺跡金属器一覧 …………… 363
表17	窪木遺跡竪穴住居一覧 …………… 364
表18	窪木遺跡掘立柱建物一覧 …………… 364
表19	窪木遺跡柱穴列一覧 …………… 366
表20	窪木遺跡土壙墓一覧 …………… 366
表21	窪木遺跡土壙一覧 …………… 366
表22	窪木遺跡溝一覧 …………… 368
表23	窪木遺跡土器観察 …………… 369
表24	窪木遺跡石製品一覧 …………… 384
表25	窪木遺跡土製品一覧 …………… 385
表26	窪木遺跡金属器一覧 …………… 386
表27	窪木遺跡溝12出土哺乳類網骨鑑定表 …………… 387
表28	掲載遺構新旧名称対照表 …………… 389

# 写真目次

写真1	対策委員会 H17.1.25	5	写真28	土壙59調査風景(西から)	189
写真2	対策委員会 H18.11.19	5	写真29	窪地1調査風景(北から)	201
写真3	現地説明会 H16.11.27	5	写真30	窪地4調査風景(北西から)	203
写真4	現地説明会 H18.12.9	5	写真31	窪地5調査風景(南東から)	205
写真5	国土交通省主催センター見学会	7	写真32	土器溜まり1調査風景(北から)	207
写真6	刊行したパンフレット	7	写真33	土器溜まり4(北から)	207
写真7	微高地下がり土器出土状況(北東から)	17	写真34	竪穴住居10(北東から)	223
写真8	竪穴住居1・2(北から)	21	写真35	竪穴住居14調査風景(西から)	229
写真9	土器溜まり2土器出土状況(南東から)	49	写真36	竪穴住居16調査風景(南から)	231
写真10	竪穴住居6作業風景(東から)	49	写真37	竪穴住居16カマド周辺(南東から)	231
写真11	河道2(北から)・陶馬出土状況(南から) ・軒丸瓦出土状況(南東から)	68	写真38	竪穴住居19カマド(南東から)	235
写真12	W1出土状況(南東から)	77	写真39	竪穴住居19調査風景(西から)	235
写真13	土器棺1調査風景(北から)	80	写真40	竪穴住居17~20周辺(南東から)	236
写真14	土壙墓13・14調査風景(北東から)	81	写真41	竪穴住居24調査風景(西から)	240
写真15	井戸1・土壙63調査風景(北西から)	81	写真42	竪穴住居25調査風景(北から)	241
写真16	掘立柱建物2・3周辺(南から)	86	写真43	竪穴住居32調査風景(北西から)	249
写真17	掘立柱建物4調査風景(東から)	88	写真44	M8出土状況(東から)	249
写真18	土壙47調査風景(北から)	97	写真45	竪穴住居35調査風景(南西から)	254
写真19	土壙58(南から)	102	写真46	掘立柱建物3(西から)	256
写真20	掘立柱建物17周辺調査状況(北西から)	122	写真47	掘立柱建物10周辺調査風景(北から)	263
写真21	井戸2調査風景(南東から)	125	写真48	掘立柱建物11調査風景(南東から)	264
写真22	溝23(北西から)	131	写真49	掘立柱建物14~16周辺調査風景(東から)	268
写真23	窪木遺跡遠景(南西から)	137	写真50	掘立柱建物14周辺調査風景(南西から)	268
写真24	土壙35調査風景(東から)	138	写真51	土器溜まり5調査風景(北東から)	283
写真25	竪穴住居3調査風景(西から)	138	写真52	掘立柱建物18・19周辺(北から)	285
写真26	竪穴住居5調査風景(南東から)	151	写真53	下がり3・4(南から)	295
写真27	土壙10調査風景(南西から)	163	写真54	溝12・13調査風景(西から)	298

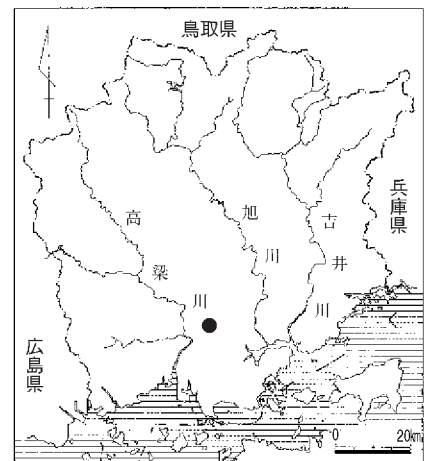
# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道180号は、岡山市西部から総社市、高梁市、新見市を経て鳥取県へ至る主要幹線道路で、特に岡山市西部から総社市の間は利用頻度が高く、昭和40年代以降、交通量は飛躍的に増大している。この交通量の増大に対応し、交通渋滞の解消を目的として岡山市橋津から総社市井尻野間の延長15.9kmのバイパスの建設が計画され、昭和48年に総社市長良～井尻野間の総社地区が事業化された。

以来、路線内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が重ねられたが、昭和63年には総社地区の都市計画決定がなされ、平成3年には一部用地買収や工事が着手された。一方、文化課（現文化財課）は協議を続けるとともに計画路線内の現地踏査を行い、バイパス関連事業にかかわる遺跡の把握に努めていた。そのような中で平成4年9月に建設省（現国土交通省）中国地方建設局から総社市長良～窪木間について文化財保護法第57条の3に基づく協議書が岡山県教育委員会に提出され、文化課が立会等の対応を行い、総社IC～総社市窪木間の1.75kmについて平成8年度までに、現道を拡幅する形で4車線の供用が開始された。

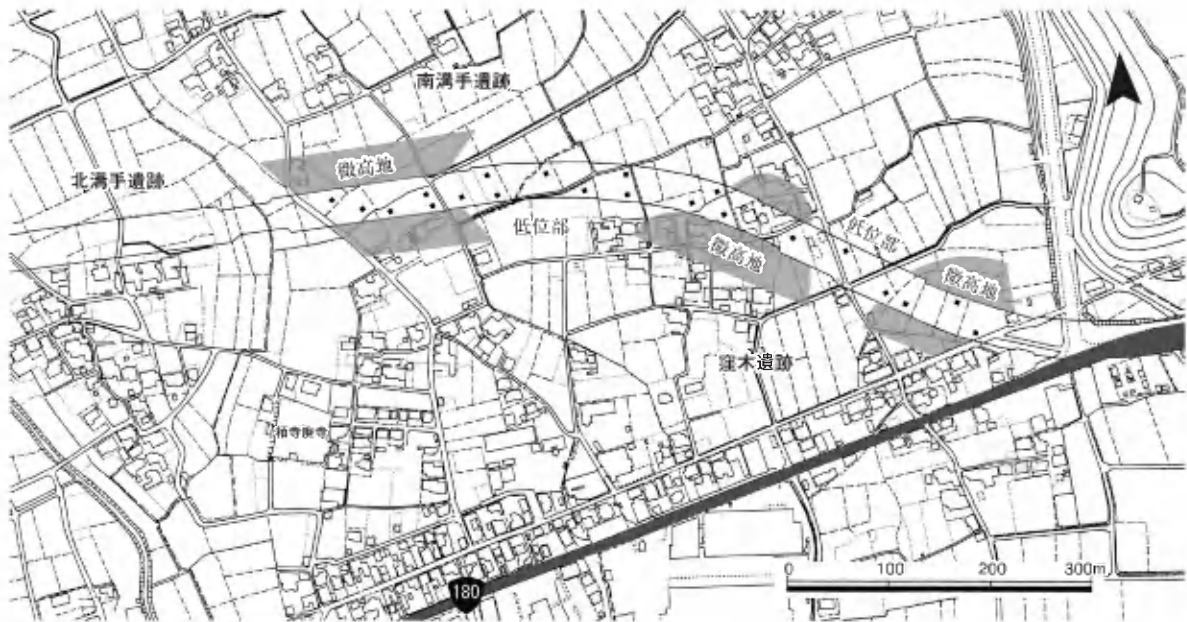
さらに平成10年には総社市窪木～総社の埋蔵文化財包蔵地の有無の照会が行われたが、総社市窪木から総社地区一



第1図 位置図



第2図 遺跡位置図 (1/40,000)



第3図 南溝手遺跡・窪木遺跡第1次調査 (1/7,500)

帯は服部条里が良好に遺存する地域であり、用地内にも周知の遺跡が存在するほか備中国府推定域にも隣接するなど埋蔵文化財の取り扱いに格段の注意を要する地域であった。そこで埋蔵文化財の保護について協議、交渉を重ねたが、諸般の事情から現状保存が困難であるとの結論に達し、平成13年2月20日付けで埋蔵文化財発掘の通知（埋蔵文化財保護法第57条の3）を受理し、やむなく用地内全面を対象として発掘調査を開始することとなった。

以上の経緯に基づき、岡山県教育委員会は平成13年度から用地買収等の条件整備の整った部分から発掘調査に着手し、平成15年度までに総社遺跡、金井戸遺跡、北溝手遺跡の調査は完了し、この3遺跡については平成19年3月に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209で明らかにしている。

一方、東に続く南溝手遺跡、窪木遺跡については、主に金井戸および総社遺跡の調査を実施していた平成14年の秋10月、両遺跡の遺構密度や広がり把握するため22か所にトレンチを設定し調査を実施した。その結果、南溝手遺跡には1か所の微高地、窪木遺跡には2か所の微高地が明らかとなり、微高地上からは弥生時代中期から中世に至る遺物とともに多くの柱穴が検出され、また、2か所の低位部からも古墳時代～近世に至る遺物包含層とともに柱穴が検出される箇所が見つかるなど、用地内全域にわたって遺跡の広がりが認められ、全面発掘を実施することとなった。（渡邊・江見）

## 第2節 発掘調査の経過

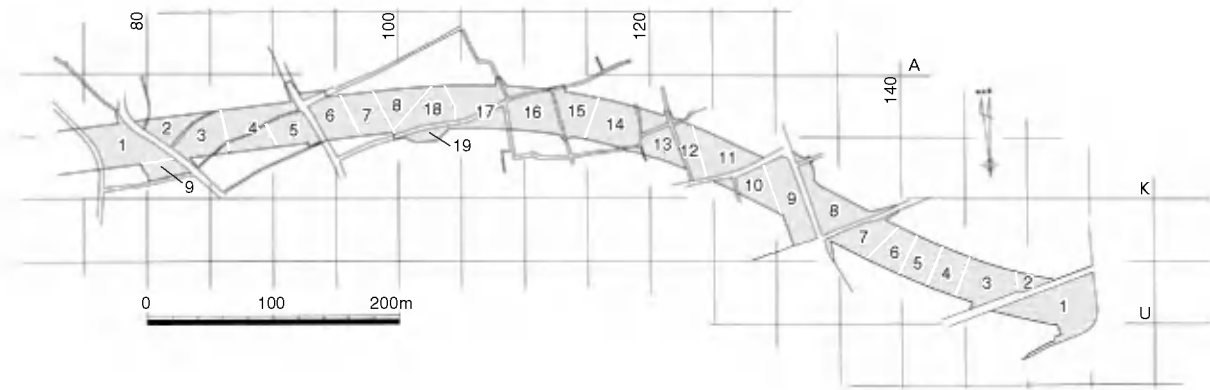
南溝手遺跡の発掘調査は、昨年来実施していた金井戸遺跡発掘調査終了後の、平成15年6月から1班3名の調査員によって本格的に開始した。調査に当たっては、水田および農道などを基に西から東に向け1～8区を設定し西から調査を進め、遺跡を縦断する県道服部停車場線の西側に当たる1区では古代の河道から瓦をはじめ陶馬が、道を挟んだ2区からは同じ河道から墨書土器が出土した。また、3区からは堀で囲まれた近世の屋敷跡などが検出された。

翌平成16年度は道路の工事行程の都合で2班体制6名に増員された。1班は昨年に引き続き南溝手

表1 調査一覧・経過一覧

	地区名	年度	面積	遺構数	遺物数	担当者
南溝手遺跡	1～3区	15	3,589	103	150	徳田正紀 渡邊恵里子 石田爲成
	4～6区	16	3,259	142	73	江見正己 尾崎光徳 渡邊恵里子 水田貴士
	7・8区	18	1,830	27	13	江見正己 松尾佳子 田中政之
	9区(県道)	19	377	7	30	福田正毅 梅武
			9,055	279	266	
窪木遺跡	1～8区・15区	16	8,448	75	114	尚田恭一郎 氏平昭則 妹尾昌子 小松原基弘
	16区～17区	16	1,450	43	20	江見正己 尾崎光徳 渡邊恵里子 水田貴士
	9・10区 12～16区	17	7,700	220	140	江見正己 尾崎光徳 妹尾昌子 松尾佳子 下澤公明 水田貴士
	10区・11区 18・19区	18	1,860	40	50	江見正己 松尾佳子 田中政之
			19,458	378	324	

	平成 15					16					17					18					19		
	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
南溝手遺跡(区)	1																						
	2																						
	3																						
	4																						
	5																						
	6																						
	7																						
	8																						
	9																						
窪木遺跡(区)	1																						
	2																						
	3																						
	4																						
	5																						
	6																						
	7																						
	8																						
	9																						
	10																						
	11																						
12																							
13																							
14																							
15																							
16																							
17																							
18																							
19																							

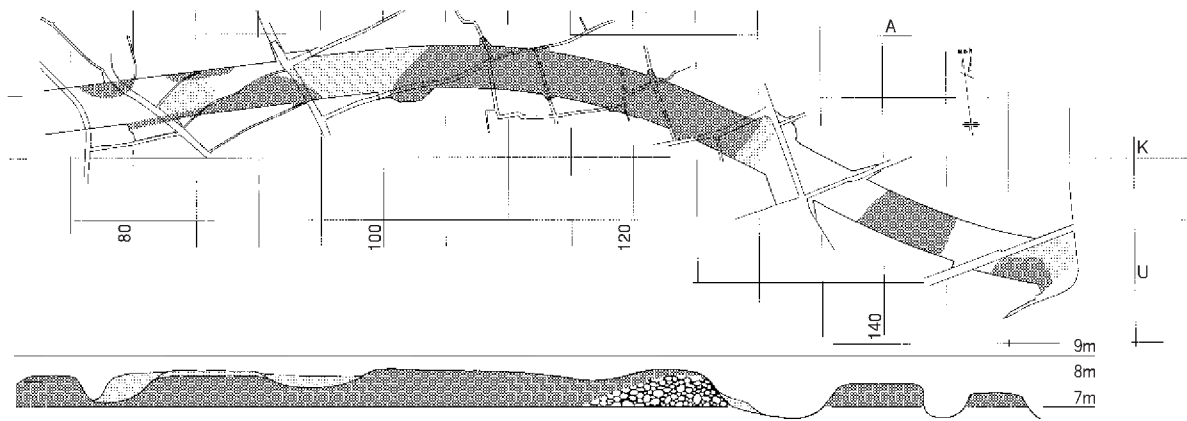


第4図 南溝手遺跡・窪木遺跡調査区配置図 (1/6,000)

遺跡4区から調査を開始し東に向かい、残る1班は新たに調査区を設定した窪木遺跡の東端から調査を開始し、11月からはさらに調査員2名を増員し進捗を図った。

南溝手4・5区では調査区を横断する用水路を境に南側は弥生時代の遺構が所在する微高地に当たるのに対し、北側は微高地斜面から河道部分になることが判明したが、北側は度重なる用水路の決壊のため調査は途中で断念せざるを得なくなった。しかしながら、4・5区微高地部分からは残存度の良い弥生時代後期の竪穴住居の検出をはじめ、中近世の遺構を多く検出し、続く6区は低位部に当たるものの、古墳時代から中世の遺構・遺物の検出を見た。12月まで南溝手遺跡の調査を担当した1班は平成17年1月、未買収地の南溝手8区および周辺を飛び越え窪木17区に調査区を移した。以後16区の西部分まで調査を進めたが、予想を遙かに超えた古墳時代後半期の竪穴住居群および掘立柱建物群の発見は、この期の新たな大集落の存在を予見させるものであった。

一方、弥生時代の大集落を予測しつつ窪木遺跡の東3区から調査を開始した2班は、まず当該区から2区にかけては後世の洪水などによる南北方向の河道が走り、本来、1区から7区までの一微高地とされていたものが、二分されていることを明らかにした。以後、微高地部分の調査に入り、古代の建物群や土器溜まりをはじめ古墳時代後半期の竪穴住居、弥生時代後期の竪穴住居群、中期の土器棺など



第5図 南溝手遺跡・窪木遺跡旧地形想定図 (1/6,000 断面縦1/300)

を次々と検出した。なお、11月には窪木4・5区を中心に現地説明会を開催し、これまで実施してきた総社遺跡・金井戸遺跡・北溝手遺跡・南溝手遺跡の調査成果も併せ紹介し、好評を得た。その後2班は微高地斜面から低位部にあたる7・8区を調査し、当該年度の調査を終えた。

平成17年度の調査は昨年同様の2班集体6名の調査員で窪木遺跡の調査を進めた。当初1班は16区から15区の調査に入り、前年度同様に古墳時代後半期を中心とする遺構群と中世以降の建物や溝などを検出した。なお、8月には国土交通省主催の子供道路見学会の一環で竪穴住居を中心に見学会を実施した。その後1区の見童通学路部分へと移動し、昨年度検出した弥生時代中期竪穴住居の未調査部分や、新たに検出した弥生時代後期竪穴住居などの調査を行った。

2班は12・13区から14区へ、再度12・13区と調査を進め、主に中近世の遺構が広がるなか、弥生時代中期の土壙群を多数検出した。なお、その後9・10区と進めたが、9区～13区にかけては微高地の基盤が拳大の円礫を中心とした層からなり、後世の洪水による堆積と基盤との判別に苦慮した。9区においては微高地斜面と低位部を確認し、12月末には当該年度の調査を終了した。

平成18年度の調査は未買収地およびその周辺が対象で、1班集体3名の調査員が7月より開始した。宅地部分に当たる11区および10区の調査では、後世の洪水などにより微高地上部を削平されたためか、遺構密度は高くはなかったが、古墳時代の土器棺をはじめ弥生時代の土壙数基が検出された。なお、昨年同様8月には国土交通省主催の現地説明会を実施した。

その後調査区を18・19区に移し、前年度同様の古墳時代遺構を多く検出した。これによって幅40mあまりの調査区ながら、東西約150mの間の古墳時代後半期集落の実態が明らかとなった。また、平成13年以来実施してきたバイパス関連の発掘調査も今年度で終了を迎えると予定されていたため、11月には再度現地説明会を実施した。当日はあいにくの小雨模様となったが、多くの見学者が集まった。以後、南溝手遺跡の低位部にあたる7・8区に入った。遺構は希薄ながらも中世の掘立柱建物をはじめ、古墳時代の溝・土壙などを検出し、3月末にはバイパス予定部分の調査はすべて終了した。

なお、発掘調査の実施に当たっては平成15年7月31日以来、8回にわたって一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、会では遺跡調査の現況および今後の予定などを報告するとともに、委員各位からは現地指導を仰いだ。

一方、発掘調査も終盤にかかった平成18年12月に新たな協議が持ち上がった。バイパスを縦断する現県道服部停車場線との交差箇所において、信号設置のためにはバイパスから南に県道を一部拡張す

る必要が生じた。このため、国土交通省と文化財課を交え協議を行い、次年度に新たに発掘調査を実施することとなった。

平成19年度の調査は新たな県道拡張部分を南溝手遺跡9区として、1班2名の調査員が担当することとなり、4月から2か月の予定で実施した。調査区からは予想通り初年度調査した陶馬出土河道の延長部分が検出されるとともに、河道内からは古代の瓦をはじめ土器・木製品などが出土するほか、弥生時代遺物包含層なども確認され、平成19年5月末をもって今期のバイパス工事関連発掘調査はすべて終了した。

なお、発掘調査の結果、明らかとなった微高地と河道・低位部の想定図を第5図に示しておきたい。南溝手遺跡には2か所の微高地と低位部、河道が確認され、河道の一部には近世の造成がなされ屋敷地が広がった。窪木遺跡においても微高地は大きく2か所確認されたが、東の微高地は後世の削平によりさらに分断され、現状では3か所の微高地からなっていると理解された。また、南溝手に続く微高地は東西幅約300mを測る比較的規模の大きな微高地であったが、微高地東半上部は後世の洪水などにより大きくたわむ状況が認められるとともに、東端部の基盤は微高地特有の粘質土層から円礫層へと変化していた。(江見)

表2 会議・現地説明会一覧

平成	遺跡保護対策委員会	窪木遺跡現地説明会	国交省・文化財課・センター現地協議
15年度	7月31日(木) 2月13日(金)		12月18日(木)
16年度	7月20日(火) 11月4日(木) 1月25日(火)	11月27日(土)	5月10日(月) 6月25日(金) 11月12日(金) 3月16日(水)
17年度	7月12日(火) 11月18日(金)	8月22日(月) (国交省子供道路見学会)	4月28日(木) 12月20日(火)
18年度	11月9日(木) 2月26日(月)	8月8日(火) (国交省子供道路見学会) 12月9日(土)	6月30日(火) 12月20日(水) 2月8日(木)



写真1 対策委員会 H17.1.25



写真3 現地説明会 H16.11.27



写真2 対策委員会 H18.11.19



写真4 現地説明会 H18.12.9



表3 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財発掘の通知（第94条/旧第57条の3）

岡山県文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	期間	処理の内容・理由
教文理第3948号 H4.9.8	散布地・水田跡 鬼畑遺跡・服部 条里関連	総社市長良地内	1,500	道路 改良	建設省中国地方建 設局長 豊田高司	H4.8.1～ H5.3.31	・工事施工に際して岡山県教育委員会 職員が立ち会う。 ・立ち会いの結果重要な遺構等が発見 された場合は別途協議する。
教文理第1556号 H13.2.20	集落跡 総社遺跡ほか	総社市北国府、金井 戸、北溝手、南溝手、 窪木地内	5,500	道路 工事	国土交通省 中国地方整備局長	H13.4.1～	・工事着手前に発掘調査を実施する。 ・調査の結果重要な遺構等が発見され た場合は別途協議する。

埋蔵文化財発掘調査の報告（第99条/旧第58条の2）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調第112号 H14.6.13	集落跡 南溝手遺跡	総社市南溝手208-1	490	道路工事	岡山県古代 吉備文化財 センター 所長	宇垣匡雅・窪津幸司・石田爲成	H14.6.7～ H14.9.30
岡吉調第26号 H15.4.1	集落跡 金井戸遺跡	総社市金井戸32ほか	3,148			徳川正紀・渡邊恵里子・石田爲成	H15.4.1～ H16.3.31
岡吉調第15号 H16.4.2	集落跡 南溝手遺跡 窪木遺跡	総社市南溝手・窪木	13,440			江見正己・尾崎光徳・高川恭一郎・ 渡邊恵里子・氏平昭則・妹尾昌子 小松原基弘・水田貴士	H16.4.1～ H17.3.31
岡吉調第27号 H17.4.7	集落跡 窪木遺跡	総社市窪木763ほか	7,770			江見正己・下澤公明・尾崎光徳・ 松尾佳子・水田貴士・妹尾昌子	H17.4.7～ H17.12.31
岡吉調第42号 H18.7.5	集落跡 窪木遺跡 南溝手遺跡	総社市窪木718ほか 総社市南溝手143-1ほか	3,690			江見正己・松尾佳子・田中政之	H18.7.1～ H19.3.31
岡吉調第1002号 H19.4.12	集落跡 南溝手遺跡	総社市南溝手207-1	377			福田正継・上橋武	H19.4.9～ H19.5.31

遺物発見通知（第100条/旧第59条）

岡山県文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	現保管場所	土地所有者
教文理第1206号 H16.3.19	(総社遺跡) 土師器・鉄器 1箱	総社市総社1766-1ほか	H15.4.7～ H16.3.19	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県古代 吉備文化財 センター	国土交通省
	(金井戸遺跡) 弥生土器・須恵器・土師器・陶器・磁器・ 瓦・石器 8箱	総社市金井戸32ほか				
	(南溝手遺跡) 弥生土器・須恵器・土師器・陶器・磁器・ 瓦・石器 150箱	総社市南溝手207-1ほか				
教文理第1438号 H17.3.23	(南溝手遺跡) 弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器ほか 73箱	総社市南溝手247ほか	H16.4.7～ H17.3.18	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県古代 吉備文化財 センター	国土交通省
	(窪木遺跡) 弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器ほか 135箱	総社市窪木846ほか				
教文理第1027号 H17.12.27	(窪木遺跡) 弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・金属 製品ほか 140箱	総社市窪木763ほか	H17.4.7～ H17.12.20	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県古代 吉備文化財 センター	国土交通省
教文理第1369号 H19.3.20	(窪木遺跡) 土師器・須恵器・土製品・金属製品など 50箱	総社市窪木718ほか	H18.7.3～ H19.3.15	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県古代 吉備文化財 センター	国土交通省
	(南溝手遺跡) 土師器・須恵器・土製品・金属製品など 13箱	総社市南溝手143-1ほか				
教文理第289号 H19.5.31	(南溝手遺跡) 弥生土器・土師器・須恵器・瓦・石製品 など 30箱	総社市南溝手207-1ほか	H19.4.9～ H19.5.31	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県古代 吉備文化財 センター	国土交通省

### 第3節 報告書整理の経過

報告書作成のための整理作業は、用地買収の遅れによる工事工程との調整の中で変則的な開始となった。初年度の整理作業は、発掘調査が未買収地およびその周辺を残し終了した後の平成18年1月から3か月間実施し、作業にはそれまで発掘調査を担当していた調査員6名のうちの5名が従事した。作業内容は、これまで検出された遺構の検討とトレース作業を中心に行った。

続く18年度においても4月当初からは現場に入ることができず、調査員3名によって整理作業を進めた。作業内容は主に遺物の復元・実測・トレース作業を実施するとともに、これとは別にパンフレット「過去と未来を結ぶ道」一般国道180号総社・一宮バイパス関連発掘調査の作成にも従事し、これまでの発掘成果を紹介した。

平成19年度の整理は調査員3名で再開された。これまで作成された遺構・遺物図面の確認と、その後の図面作成に当たったが、断続的な整理の方法から来る後戻りは否めず、全体図作成に着手したのは7月であった。その後、9月に割付作成を開始し、執筆者に原稿依頼できたのは11月に入ってからであった。以後、校正を重ね3月ようやく刊行の運びとなった。なおこの間、8月には二度にわたって国土交通省主催による古代吉備文化財センター見学会が実施され、また、10月には当事業最終の対策委員会が開催された。(江見)

表4 整理工程

年	17			18												19											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
期間	←→			←→						←→																	
内容	遺構図面整理			遺物整理			パンフレット作成			パンフレット刊行			整理再開				編集会議		対策委員会		割付開始		編集会議		報告書刊行		



↑写真5 国土交通省主催センター見学会



→写真6 刊行したパンフレット

## 第4節 調査および整理の体制

<b>平成14年度</b>		主 事	浜原 浩司
<b>岡山県教育委員会</b>		<b>岡山県古代吉備文化財センター</b>	
教育長	宮野 正司	所 長	正岡 睦夫
<b>岡山県教育庁</b>		次 長	藤川 洋二
教育次長	三浦 一男	文化財保護参事	松本 和男
<b>文化財課</b>		<総務課>	
課 長	西山 猛	課 長	中田 哲雄
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男	課長補佐(総務係長)	笈本 弘忠
課長代理	宮田 正彦	主 任	小坂 文男
文化財保護主任	尾上 元規	<調査第一課>	
主 事	浜原 浩司	課 長	岡田 博
<b>岡山県古代吉備文化財センター</b>		課長補佐(第一係長)	光永 真一
所 長	正岡 睦夫	文化財保護主査(調査担当)	徳田 正紀
次 長	藤川 洋二	文化財保護主任(調査担当)	渡邊恵里子
<総務課>		主 事(調査担当)	石田 爲成
課 長	安西 正則		
課長補佐(総務係長)	田中 秀樹	<b>平成16年度</b>	
主 任	小坂 文男	<b>岡山県教育委員会</b>	
<調査第一課>		教育長	宮野 正司
課 長	高畑 知功	<b>岡山県教育庁</b>	
課長補佐(第一係長)	平井 泰男	教育次長	釜瀬 司
文化財保護主幹(調査担当)	宇垣 匡雅	<b>文化財課</b>	
文化財保護主任(調査担当)	窪津 幸司	課 長	芦田 和正
主 事(調査担当)	石田 爲成	参 事	田村 啓介
		総括副参事(埋蔵文化財班長)	平井 泰男
<b>平成15年度</b>		主 任	小林 利晴
<b>岡山県教育委員会</b>		主 事	秋山 良樹
教育長	宮野 正司	<b>岡山県古代吉備文化財センター</b>	
<b>岡山県教育庁</b>		所 長	正岡 睦夫
教育次長	三浦 一男	次 長(総務課長)	内田 猛
<b>文化財課</b>		参 事	松本 和男
課 長	西山 猛	参 事	伊藤 晃
課長代理	田村 啓介	<総務課>	
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 泰男	総括副参事(総務班長)	笈本 弘忠
文化財保護主任	尾上 元規	主 任	小坂 文男

主任 小川 紀久  
 <調査第一課>  
 課長 岡田 博  
 総括副参事(第二班長)(調査担当) 江見 正己  
 主幹 (調査担当) 尾崎 光徳  
 主査 (調査担当) 高田恭一郎  
 主査 (調査担当) 小松原基弘  
 主査 (調査担当) 渡邊恵里子  
 主査 (調査担当) 氏平 昭則  
 主事 (調査担当) 水田 貴士  
 主事 (調査担当) 妹尾 昌子

平成17年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 釜瀬 司

文化財課

課長 芦田 和正  
 参事 田村 啓介  
 総括副参事(埋蔵文化財班長) 平井 泰男  
 主任 小林 利晴  
 主事 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男  
 次長(総務課長) 内田 猛  
 参事 平松 郁男  
 参事 高畑 知功

<総務課>

総括副参事(総務班長) 若林 一憲  
 主任 小川 紀久

<調査第一課>

課長 岡田 博  
 総括副参事(第二班長)  
 (調査・整理担当) 江見 正己  
 副参事 (調査・整理担当) 下澤 公明  
 副参事 (調査・整理担当) 尾崎 光徳  
 主査 (整理担当) 渡邊恵里子

主事 (調査・整理担当) 松尾 佳子  
 主事 (調査・整理担当) 水田 貴士  
 主事 (調査・整理担当) 妹尾 昌子

平成18年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 高畑 知功  
 参事 田村 啓介  
 総括副参事(埋蔵文化財班長) 光永 真一  
 主任 小林 利晴  
 主事 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男  
 次長(総務課長) 安西 正則  
 参事 岡田 博  
 副参事 中島 謙次

<総務課>

総括副参事(総務班長) 若林 一憲  
 主任 小川 紀久

<調査第一課>

課長 中野 雅美  
 総括副参事(第二班長)  
 (整理・調査担当) 江見 正己  
 主事 (整理・調査担当) 松尾 佳子  
 主事 (整理・調査担当) 田中 政之

平成19年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 藤井 守雄  
 参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長） 光永 真一  
 主 任 小嶋 善邦  
 主 事 金出地敬一

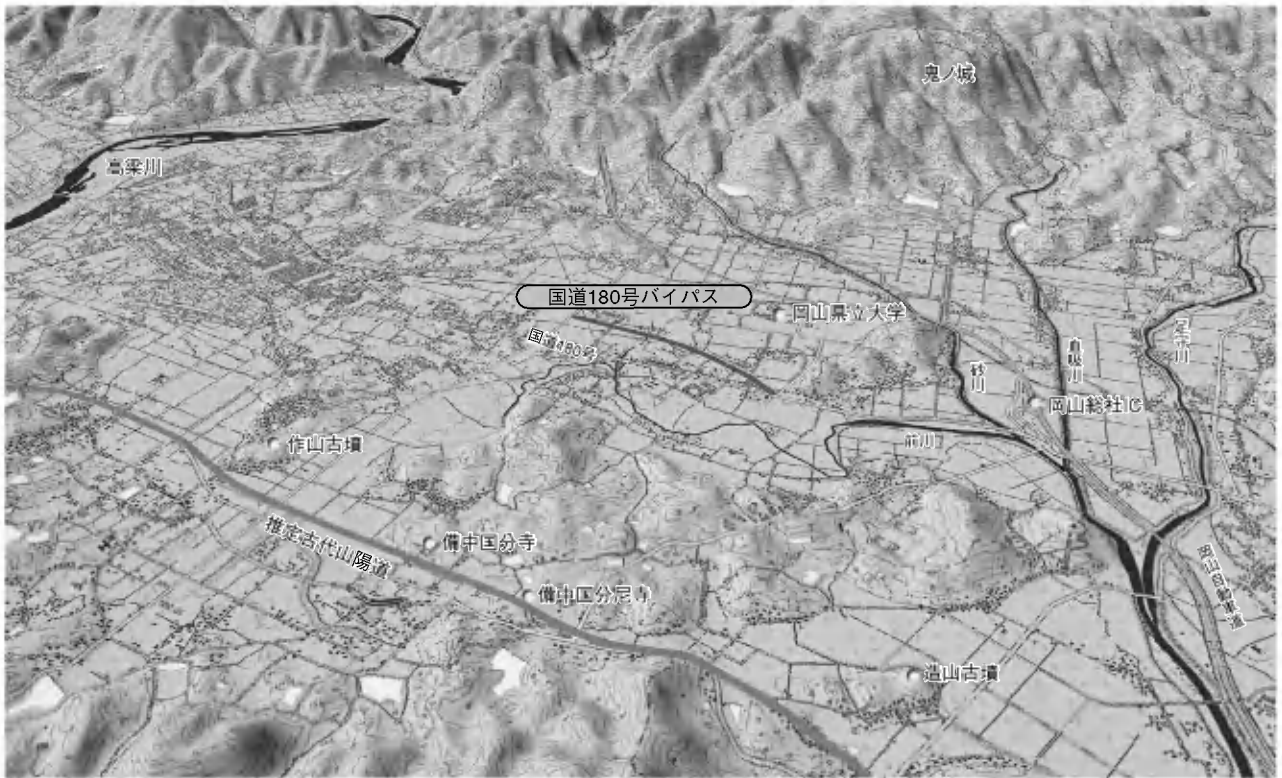
岡山県古代吉備文化財センター

所 長 高畑 知功  
 次 長（総務課長） 小林 勝  
 参 事 岡田 博  
 副参事 中島 謙次  
 <総務課>

総括副参事（総務班長） 若林 一憲  
 主 任 福池 光修

<調査第二課>

課 長 島崎 東  
 総括副参事（第二班長）（整理担当） 江見 正己  
 副参事 （調査担当） 福田 正継  
 主 事 （整理担当） 松尾 佳子  
 主 事 （調査・整理担当） 上梶 武  
 主 事 （整理担当） 畑地ひとみ



第6図 総社平野を南東より望む（カシミール3Dにより作成）

## 第2章 遺跡の位置と環境

### (1) 地理的環境

南溝手遺跡(1)、窪木遺跡(2)、の所在する総社平野は、岡山県の南西部に位置する。北は吉備高原の南端にあたり急峻な山塊が連なる鬼城山や経山に画され、南は福山や仕手倉山からなる緩やかな山塊にはさまれた、南北約2.5km、東西約7.5kmの東西に細長い平野である。総社平野は古高梁川の東分流によって形成された平野で、東分流は平野の東端で南流する古足守川に合流し、現在の岡山市吉備津付近で「吉備の穴海」と呼ばれた内海に注いでいたと考えられる。総社平野をはじめとする、これらの旧河道流域には大小多くの自然堤防や後背湿地が残され、自然堤防などの微高地上には古くから現在に至るまで集落が連綿と営まれている。

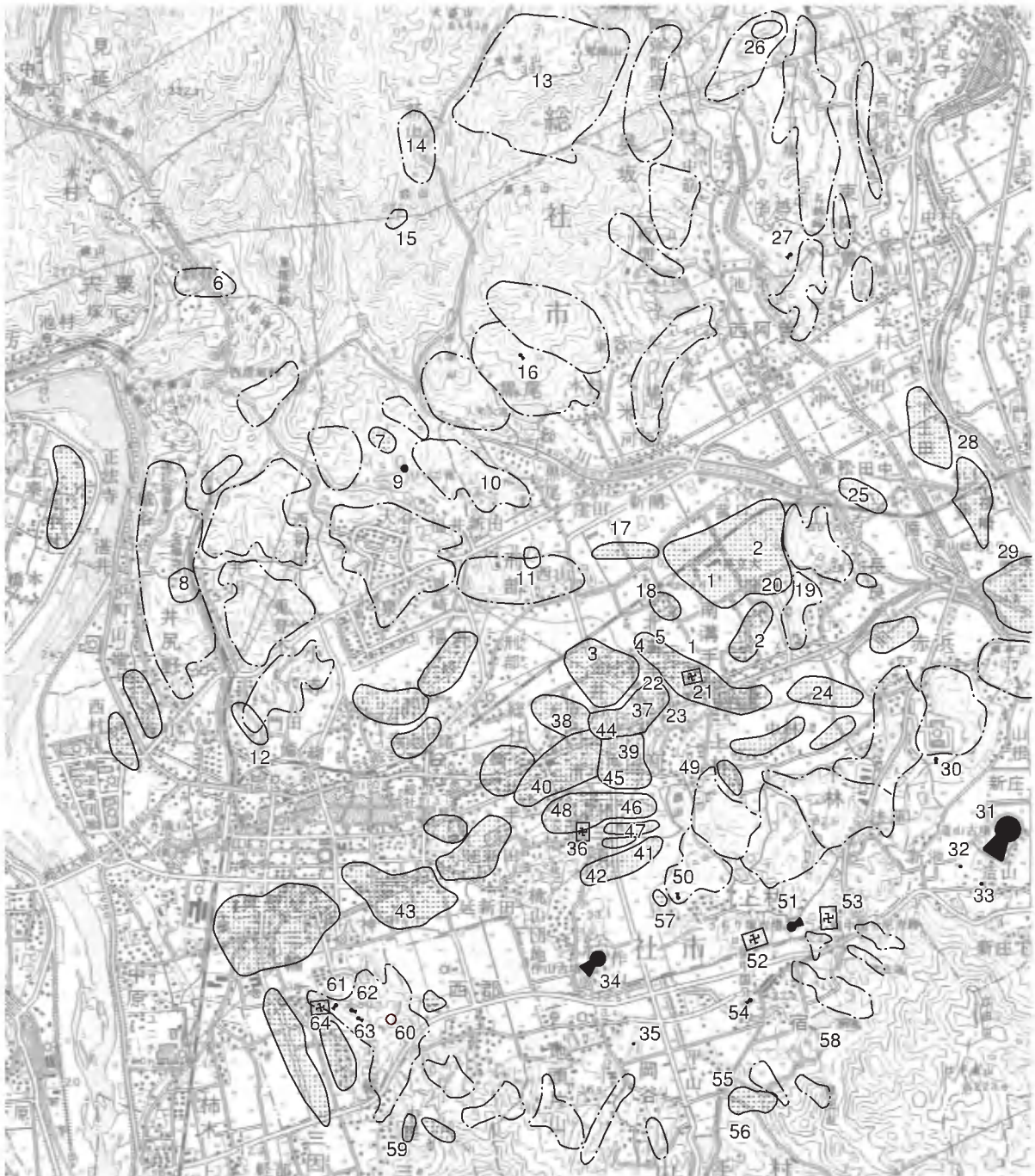
### (2) 歴史的環境

総社平野周辺で確認されている旧石器時代の遺跡は高梁川東岸の台地上に位置する宝福寺裏山遺跡(8)や浅尾遺跡(12)のほか、窪木薬師遺跡(24)出土のナイフ形石器があるのみで、平野内に人々はまだ本格的に進出していないようである。

縄文時代早期においても長良山遺跡(19)、真壁遺跡(43)などが散見できる程度であるが、縄文時代後期以降になると平野の安定化に伴い遺跡が増加する。中でも県立大学の建設に伴って広範囲にわたって調査された南溝手遺跡では後期後葉の粘痕のある土器が出土しているほか、後期中葉の土器胎土中からイネのプラントオパールが検出されており、出土した打製石器群とともに縄文時代の農耕について具体的な資料を提供している。

弥生時代前期から中期中葉にかけての代表的な遺跡は南溝手遺跡、窪木遺跡、真壁遺跡がある。南溝手遺跡では「松菊里型」の住居が見つかったほか、竪穴住居の一軒で玉作りを行っていることが明らかになっている。弥生時代中期後半から後期になると、三須島田遺跡(46)など新たな遺跡が出現し、また、これまで継続してきた遺跡においても、集落が拡大するなど、飛躍的な発展が顕著に認められるようになる。このような傾向は、県内の多くの地域でも見られるが、弥生社会の成熟、安定化を示すものとして受けとめられる。また、周辺の丘陵上に前山遺跡(56)、鋳物師谷遺跡(59)、宮山墳墓群(61)のような集団墓が営まれるようになるのもこの時期で、やがてその中から隔絶した首長墓として墳丘墓が出現することとなる。

古墳時代前期になると、総社平野周辺には墳長約55mの天望山古墳(62)や墳長約70mの三笠山古墳(63)のような前方後円墳が築かれるが、大規模な古墳の造営は認められない。しかし中期になると墳長350mの造山古墳(31)、墳長286mの作山古墳(34)、墳長114mの宿寺山古墳(54)といった全国的にみても最大級の前方後円墳が築かれるようになる。また近年、通称御灰山の標高160mの尾根上で墳長約55mの前方後円墳である久米大池1号墳(16)が発見されている。古墳時代後期になると、周辺の丘陵部では横穴式石室を採用した古墳群が営まれようになり、こうもり塚古墳(51)や江崎古墳(50)、緑山8号墳(49)といった大型の横穴式石室を持つ古墳も築かれている。また、当地域では鍛冶道具一式を副葬した随庵古墳(27)に見られるように、古くから鉄器生産が行われていた。そして、6世紀後半から7世紀前半にかけては、千引かなくろ谷遺跡(26)で製鉄がはじまり、窪木薬師遺跡のように近



- |                |                |             |             |
|----------------|----------------|-------------|-------------|
| 1. 南溝手遺跡       | 17. 服部遺跡       | 33. 千尾古墳    | 49. 緑山古墳群   |
| 2. 窪木遺跡        | 18. 深町遺跡       | 34. 作山古墳    | 50. 江崎古墳    |
| 3. 総社遺跡        | 19. 長良山遺跡・長良山城 | 35. 角力取山古墳  | 51. こうもり塚古墳 |
| 4. 金井戸遺跡       | 20. 窪木宮後遺跡     | 36. 三須廃寺    | 52. 備中国分寺   |
| 5. 北溝手遺跡       | 21. 栢寺廃寺       | 37. 金井戸天神遺跡 | 53. 備中国分尼寺  |
| 6. 藪田古墳群       | 22. 伝備中国府跡     | 38. 金井戸新田遺跡 | 54. 宿寺山古墳   |
| 7. 金黒池東遺跡      | 23. 御所遺跡       | 39. 金井戸鴻崎遺跡 | 55. 鎌戸原遺跡   |
| 8. 宝福寺裏山遺跡     | 24. 窪木薬師遺跡     | 40. 井手村後遺跡  | 56. 前山遺跡    |
| 9. 奥ヶ谷祭跡       | 25. 高松川中遺跡     | 41. 美濃川遺跡   | 57. 山津川遺跡   |
| 10. 中山古墳群      | 26. 千引かなくろ谷遺跡  | 42. 天満遺跡    | 58. 末の奥窯跡   |
| 11. 西山遺跡・西山古墳群 | 27. 随庵古墳       | 43. 真壁遺跡    | 59. 鑄物師谷遺跡  |
| 12. 浅尾遺跡       | 28. 生石神社弥生墳丘墓  | 44. 井手天原遺跡  | 60. 岩屋遺跡    |
| 13. 鬼ノ城        | 29. 高塚遺跡       | 45. 井手見延遺跡  | 61. 宮山墳墓群   |
| 14. 新山廃寺       | 30. 小造山古墳      | 46. 三須畠田遺跡  | 62. 天望山古墳   |
| 15. 経山城跡       | 31. 造山古墳       | 47. 三須河原遺跡  | 63. 三笠山古墳   |
| 16. 久米大池1号墳    | 32. 榊山古墳       | 48. 三須中所遺跡  | 64. 三輪廃寺    |

第7図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

辺で生産した鉄を加工する専門化した鍛冶集団の集落が出現する。また、奥ヶ谷窯跡(9)のような初期須恵器の窯跡も存在し、当地域が早くから朝鮮半島と密接な関わりを持ち先進技術を獲得していたことは注目される。

飛鳥時代には、高梁川西岸には秦原廃寺が7世紀前半にいち早く造営されている。周辺でこの時期の遺跡は少ないが、総社市山手の末ノ奥窯跡(58)で生産された瓦が飛鳥の平吉遺跡に運ばれたことがわかっており、畿内政権中枢である蘇我氏との深い関わりが指摘されている。

やや時期が下り7世紀後半になると、遺跡周辺でも栢寺廃寺(21)、三須廃寺(36)などが建立される。当時、当地域は賀夜(賀陽)郡にあたり、遺跡周辺は吉備の有力氏族の賀夜(賀陽)氏の地盤として、賀陽(賀夜)郡衙も周辺に存在したと想定される。また、同時期に総社平野を眼下におく標高約400mの鬼城山山頂には、遠くは四国まで眺望が利く古代山城の鬼ノ城(13)が築かれ、当時の緊迫した国際情勢の一端をうかがい知ることができる。古代において、この地域は備中の中枢地域であり、『和名抄』には備中国府が賀夜郡に所在していたことが記されている。総社市金井戸地区には今も「国府」「北国府」「南国府」等の地名が残り、その所在地がいまだ確定的でない国府の有力な推定地の一つである。近年、御所遺跡(23)では国府に関連する可能性のある遺構が発見されており、謎の多い備中国府像の解明の糸口として期待されている。また、窪屋郡にあたる三須丘陵の南側には古代山陽道が整備され、沿道には備中国分寺(52)、備中国分尼寺(53)が造営された。周辺では郡衙に推定される遺跡も調査され、三須河原遺跡(47)では「郡殿」、三須中所遺跡(48)では「賀夜」と記された墨書土器が出土したことから、窪屋郡衙の一部と推定されている。

平安時代になると福山山頂の福山寺や鬼城山周辺には新山廃寺(14)や岩屋寺など山上寺院が建立され、広く信仰を集めている。鎌倉時代末期の永仁6(1298)年以前に作成された「備中国賀夜郡服部郷図」から、周辺は条里で区画された水田を中心とした景観が広がっていたと思われ、基本的にはその景観を現代に至るまで引き継いでいるものと思われる。

南北朝時代になると当地域も動乱に巻き込まれ、福山城に拠る新田方の武将、大江田氏経と足利直義との間で福山合戦が行われ、周辺は焼け野原となり福山寺や備中国分寺も戦火に遭ったと伝えられている。天正5(1577)年には、織田信長の命を受けた羽柴秀吉が中国侵攻をすすめて、天正10(1582)年、著名な備中高松城の水攻めを行うこととなる。信長が本能寺の変で急死したことを知った秀吉は、毛利輝元との和議を急いだ。その結果高松城主清水宗治は自害し、和議の条件に基づき高梁川以西は毛利氏に以東は宇喜多氏の領地となる中国国分けが行われた。この間、周辺には城砦が多く築かれたようで、幾度となく戦禍を受けてきたことは想像に難くない。(石田)

#### <主要参考文献>

- 『岡山県史』考古資料 岡山県 1986
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34・86・100・115・120・121・156・162・198・203 岡山県教育委員会 1979・1993・1995・1997・2001・2002・2006
- 『総社市史』考古資料編 総社市 1987
- 『総社市史』通史編 総社市 1998
- 『総社市埋蔵文化財調査報告』1～19 総社市教育委員会 1984～2006
- 『総社市埋蔵文化財調査年報』1～14 総社市教育委員会 1991～2005
- 『山手村史』本編 山手村 2004





## 第3章 南溝手遺跡

### 第1節 遺跡の概要

総社市南溝手は岡山県立大学から南の栢寺廃寺を含み、さらに南の国道180号線を跨いだ総社東小学校付近までの、南北に長くて広い一帯の地名（大字）で、今回報告する南溝手遺跡はそのほぼ中央に当たり、北東に位置する県立大学地内および周辺に広がる南溝手遺跡の微高地とは全く異なる場所である。

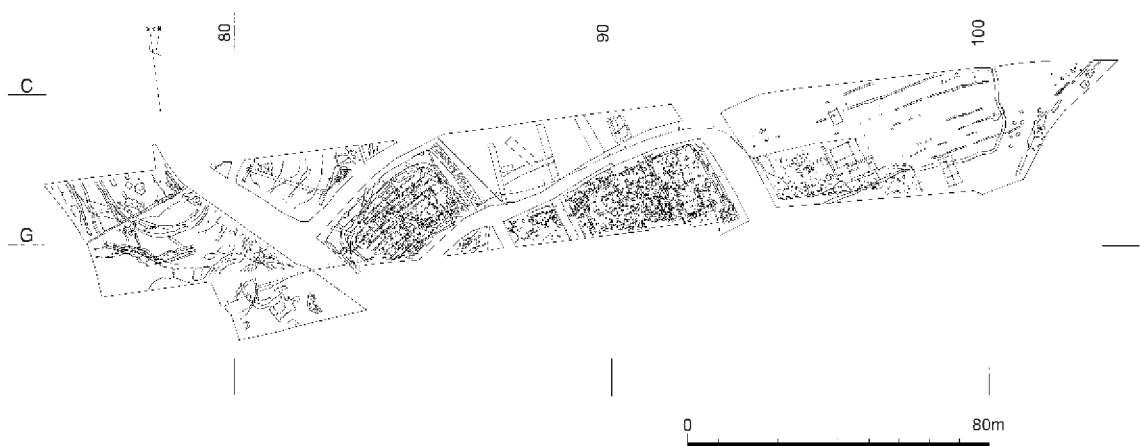
前章でも述べたように、この一帯の南溝手遺跡は大きく2か所の微高地からなる。南北に走る県道服部停車場線と調査区の間には、弥生時代以降の遺構を刻む北に延びる微高地端部が確認されており、この微高地本体は現在の深町集落に続いていくものと考えられる。

一方、南および東の水田部分には東西に延びる旧河道と、その南からも微高地が現れ、これもまた本体は南の溝手東の集落に広がっていくものと思われる。さらにその東の窪木遺跡と接する一段低い水田にも遺跡は広がっており、粗密の差はあるものの調査区全体長さ約500m間は何らかの遺構の所在することが明らかとなった。

特に、東に検出された微高地からは弥生時代後期の住居の周囲に柵を巡らす竪穴住居が検出されたのははじめ、古墳時代後期の竪穴住居群、中世の土壙墓群、近世の掘立柱建物群と連綿と遺構が掘り返され、また、微高地北側から検出された古代の河道からは、陶馬をはじめ墨書土器、白鳳期の瓦などが出土しており、南方約200mに位置する栢寺廃寺との関連が注目される。

一方、微高地の東、窪木遺跡の微高地との低位部においても古墳時代後半には竪穴住居や溝の掘削が開始されるようで、以後、中世の掘立柱建物や土壙墓が掘られ、中世末に至って耕地化されていったようである。

(江見)



第8図 遺構全体図 (1/2,000)

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

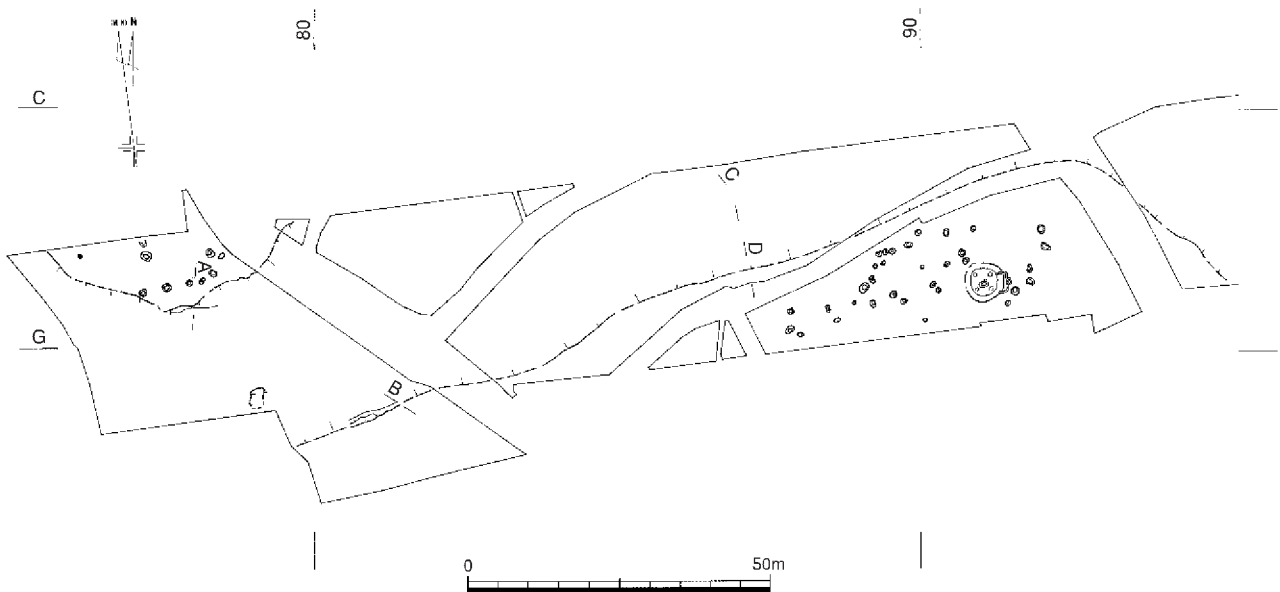
### 1 概要

弥生時代の南溝手遺跡は大きく二つの微高地とそれを挟む河道からなる。76Cからは推定される北へ延びる微高地の南端部が明らかになった。微高地上からは弥生時代前期に遡る土器が出土するとともに、中期の土壙9基を検出しており、土壙はその内の3基が断面袋状を呈すものであった。

一方、80G～92Eからは南に広がる東西幅約140（推定160）mを測る微高地の北端部を明らかにしており、ここからは後期前半を中心とした土壙35基、後期中葉の、住居の周囲に柵をもつ竪穴住居1軒などが検出された。

河道は南北幅約30m、深さ約1mを測り、地形上から西から東へ流走していたものと考えられる。河道上部には後述する古墳時代前期の土器を含む堆積土に覆われていたが、下部からは弥生時代中期から後期末までの土器片が出土している。特に、微高地北斜面にあたるB断面付近からは壺1・甕2・3・高杯4・製塩土器5などが出土している。いずれも後期の土器であるが、前半の特徴を示す1～3・5に、後半の4が混じる状況であった。なお、C断面から明らかなように、河道は北に向かって上がっており、調査区の北側には微高地の広がっていることが理解されるが、この微高地と西端の微高地が一体のものか、新たな微高地になるのかは不明である。

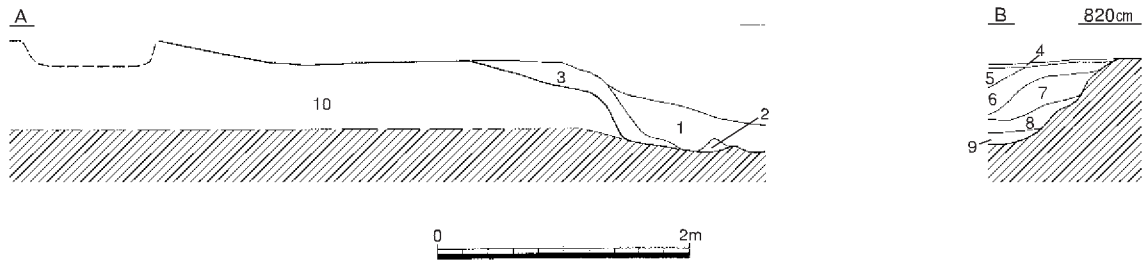
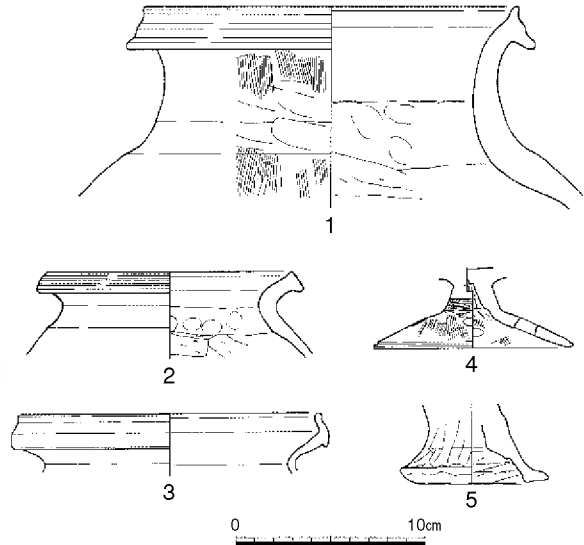
しかしながら一方で、微高地の東斜面部では基盤は緩やかに東に向かい下がってはいくものの、斜面堆積土は粘質土あるいは粘質微砂を主体とする微高地基盤に類似するもので、河道特有の粗砂・細砂の堆積は認められなかった。いわゆる微高地縁辺の低位部の状況を示すもので、弥生当時には集落には適さないものの水田などに利用されていた可能性は推定される。（江見）



第9図 弥生時代遺構全体図 (1/1,250)

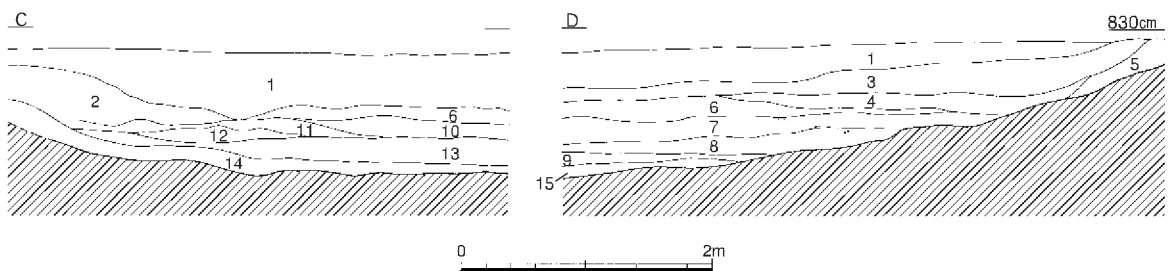


写真7 微高地下がり土器出土状況  
(北東から)



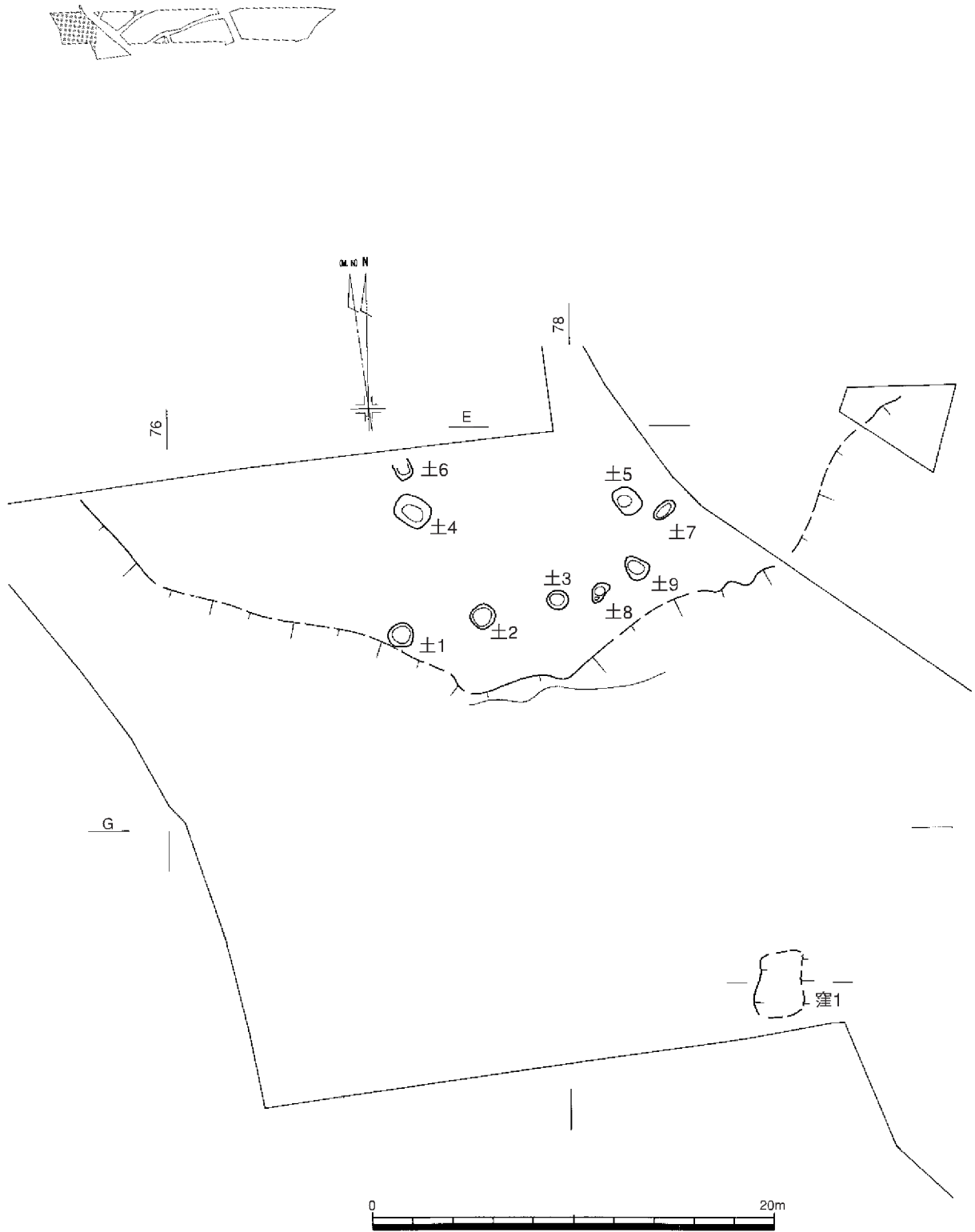
- |                                  |                        |                               |
|----------------------------------|------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2)<br>(Fe・炭・土器含) | 4 灰砂質土 (10YR6/1)       | 8 灰オリーブ粘性砂質土 (5Y4/2)<br>(土器含) |
| 2 オリーブ褐色粗砂 (2.5Y4/3)             | 5 灰砂質土 (10YR5/1)       | 9 灰粘性砂質土 (5Y4/1)<br>(土器含)     |
| 3 暗褐色微砂 (10YR3/4)                | 6 灰オリーブ粘性砂質土 (7.5Y6/2) | 10 暗褐色粗砂 (10YR3/)             |
| (粗砂・Fe含)                         | 7 灰オリーブ土 (5Y5/3)       |                               |

第10図 微高地下がり断面図① (1/60)・出土遺物 (1/4)

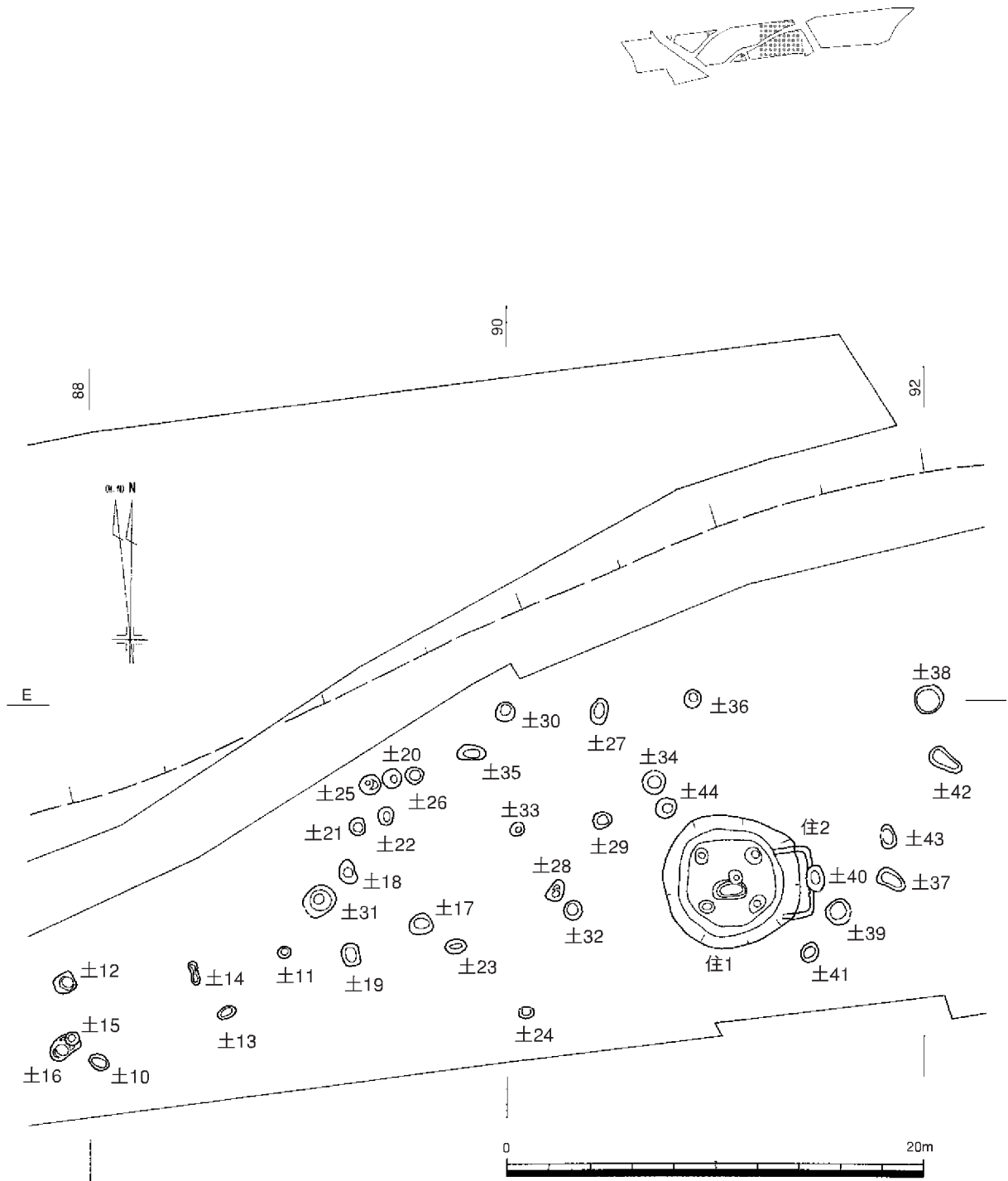


- |                                |                                |                                 |                                   |
|--------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1 鈍黄褐色細砂 (10YR5/4)<br>(上面Mn沈着) | 5 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y5/2)           | 9 黄褐色粘質微砂 (10YR5/6)<br>(土器含)    | 13 鈍黄橙色細砂 (10YR6/3)<br>(土器含)      |
| 2 鈍黄橙色粗砂 (10YR6/3)             | 6 鈍黄褐色細砂～粗砂 (10YR5/3)          | 10 鈍黄褐色細砂～粗砂 (10YR5/3)          | 14 礫 (土器含)                        |
| 3 灰黄褐色粘質微砂 (10YR6/2)           | 7 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)<br>(炭・土器含)  | 11 暗灰黄色細砂～粗砂 (2.5Y5/2)          | 15 暗褐色砂質土 (10YR3/3)<br>(炭・焼土・土器含) |
| 4 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)           | 8 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)<br>(炭・土器含) | 12 灰黄褐色粘質細砂 (10YR5/2)<br>(焼土粒含) |                                   |

第11図 微高地下がり断面図② (1/60)



第12図 弥生時代主要遺構図① (1/300)

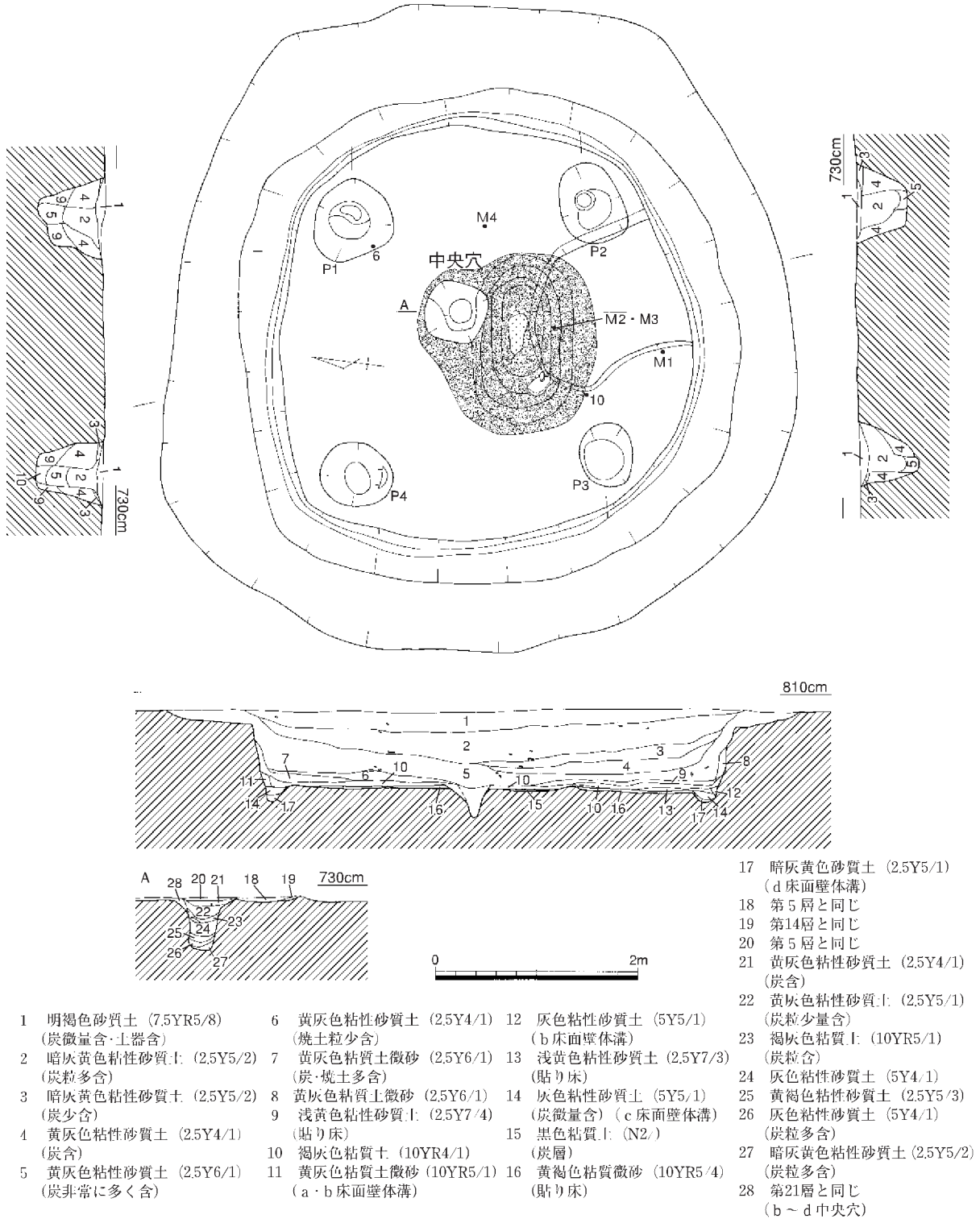


第13図 弥生時代主要遺構図② (1/300)

## 2 竪穴住居

竪穴住居1 (第13~16図、写真8、巻頭図版2、図版2・39・52・54)

90Eの中央部に位置し、推定される微高地北東部から検出された、住居周囲に段(棚)の施設が巡る竪穴住居である。平面形態は不整形円形を呈し、棚部分を含めた検出面での規模は6.4×6.2m、床面



第14図 竪穴住居1 (1/60)

までの深さは約80cmを測る。一段下がった竪穴部分のそれは約5mを、床面積は約15.5㎡を測る。主柱は4本からなり、柱穴は大きく、深く掘り込まれていた。径約50～80cm、深さ50～70cmを測り、いずれも柱の抜き取り痕跡の明瞭なものであった。柱穴間の距離は東西が約2.6mに対し、南北方向は約2.3mとやや短いものの、ほぼ直角な位置に柱が配置されていた。

床面は部分的に把握されたものを含め4面検出している。便宜的に新しいものaからdへの移行を平断面図をもとに説明を加える。第1～8層は最終的に埋まった覆土で、特に第5層には炭および炭粒が異常に多く含まれ、下層に当たる第6・7層は壁際から床面にかけては炭粒のみならず、焼土粒も多く含むもので住居廃棄時に焼却された結果の状況と理解している。なお、南壁の第8層は壁がずり落ちたものと判断された。その下層からは南部のみであるが、最終床面aに当たる第9層の貼り床が検出された。平面では住居南部に幅約1.4mの中央に向かって舌状の広がりを検出しており、後述する楕円形の窪地を一部覆った状況であった。第9層上面のa床面ラインと北部断面との対応は第10層上面、第7層下部がそれに当たると考えられる。次にb床面はa床面と同じく南部の断面で顕著であった。a貼り床層にあたる第9層の下方約5cmから間層の第10層下に第13層（b床面貼り床）が検出されている。これには第12層の壁体溝を伴い、これに対応する北部はa床面と同様の第10層上面が共有されたと思われる。なお、北部端の第13層が第12層に対応する壁体溝と考えられる。さらにb床面下からはc床が検出された。南部ではb床面貼り床層に当たる第13層とc床面貼り床層に当たる第16層は接しているが、北部に向かうにつれ、間層である第10層が堆積し、その下部がc床面になるようであり、南北両端にはこの床面に伴う壁体溝の第14層が巡っている。そして、最古のd床面には特に貼り床状の堆積は認められず、c床面に伴った壁体溝下部より、ほとんど重複するように第17層の壁体溝が巡らされていたようである。以上、床面は3度の補修により、当初より約10cm上昇していたが、床面積においては若干の拡張はあるもののほとんど変わらず推移していったものと考えられる。

中央穴については最終のa床面に伴うものが明らかになった。しかしながら、それ以前のはわずかに断面第28層に残すのみであったことから、中央穴はこの場所に何度も掘り返されたものと思われる。径約70cm、深さ約50cmを測る。埋土は8層からなり、大半に炭粒が混じるものの、焼土粒はほとんど見られず、また、壁などにも被熱箇所は全く確認されなかった。

一方、中央穴の周囲から南にかけては炭粒で覆われた部分が広がり、その中心に断面「カマボコ」状の土手をなした平面楕円形の窪地が検出された。ほぼ東西に主軸をもつ窪地は1.05m×60cm、深さ10cm余りの規模で、底部には数cmの厚みの炭層が堆積しており、それを取り除けば40×15cmの範



写真8 竪穴住居1・2（北から）

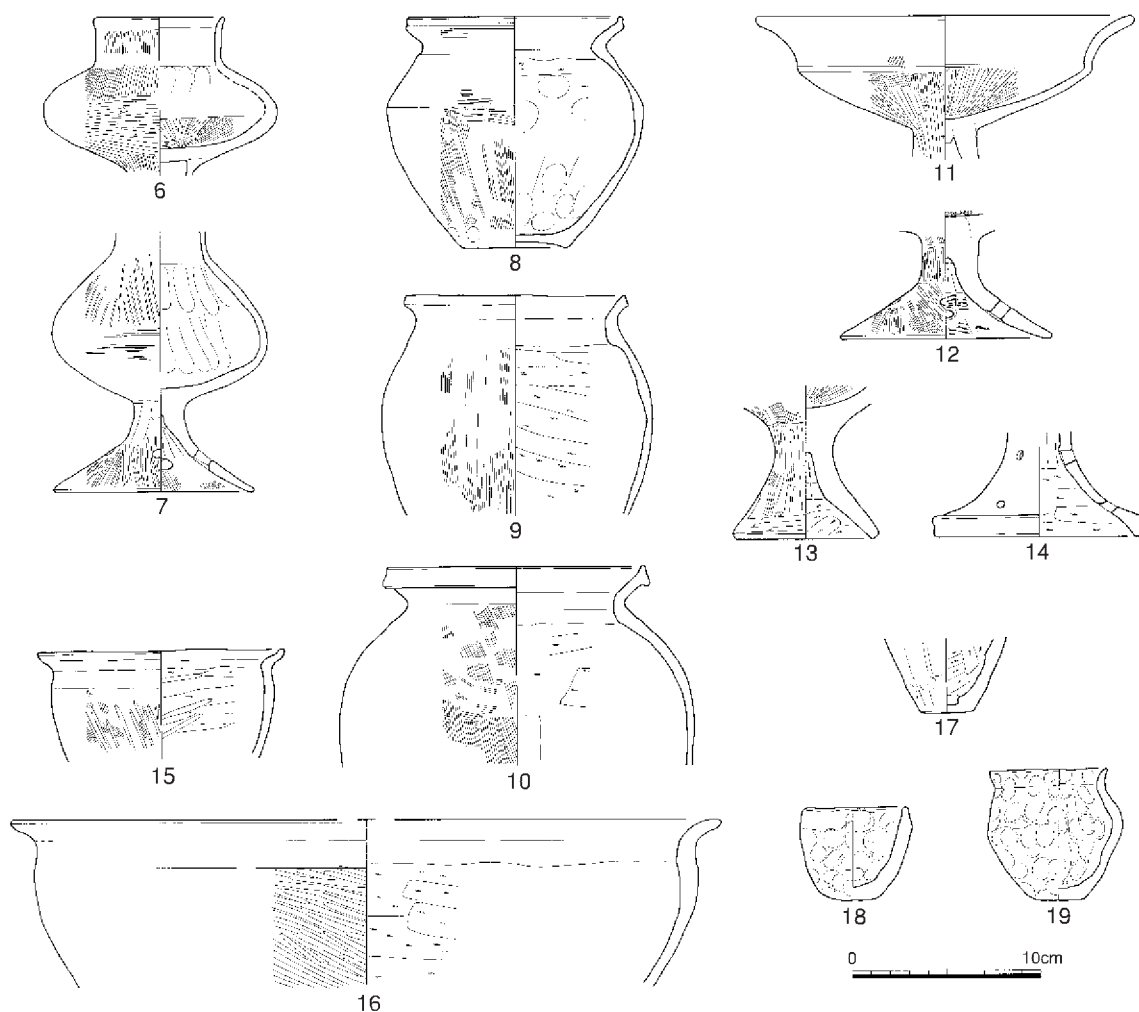


囲に被熱面が広がっていた。また、炭粒に混じってカエル類・モグラ類・魚類（カレイ類？）などの小骨片が出土している。なお、断面から明らかなように、中央穴と楕円形窪地とのセット関係はd床面に伴っており、c床面にも利用されたと考えられるが、a・b床面の時期には中央穴のみで、このような楕円形の窪地は所在しなかったと考えられる。

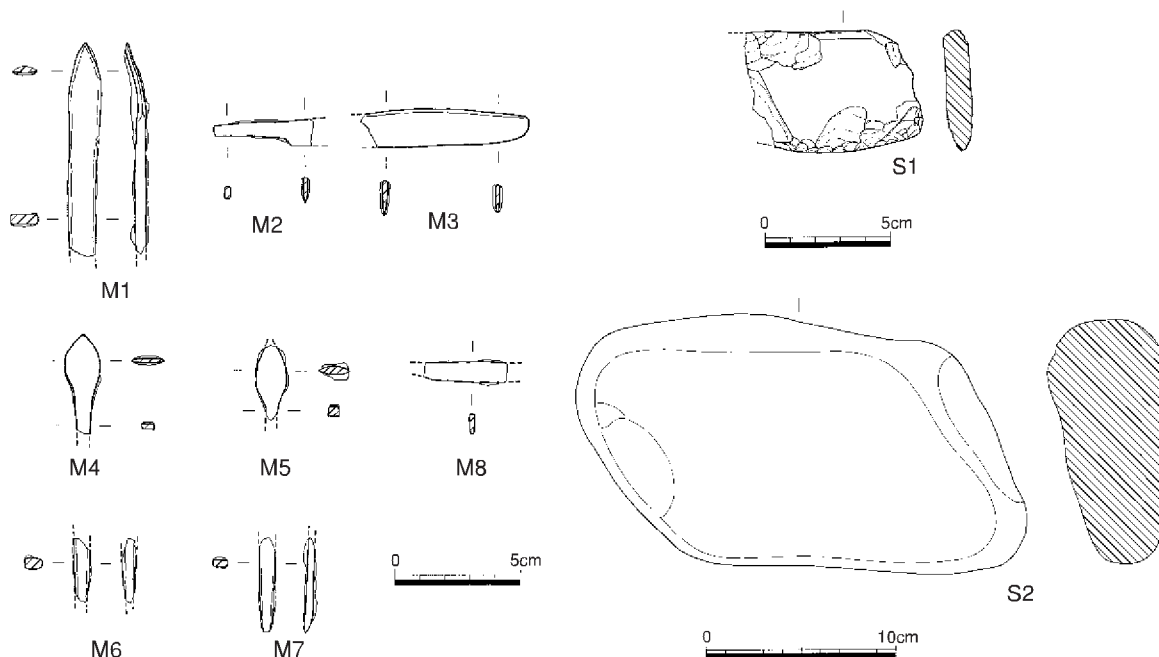
次に、住居を巡る柵とした段であるが竪穴の調査当初、段の部分は本来周堤が巡る部分で住居の壁が壁体溝から壁に沿って立ち上がることが一般的であると理解していたため、段部分の堆積土と住居壁内側の堆積土との分層が出来ないのに途惑いをもちながら調査を進めた。しかしながら、段の掘り方が、竪穴住居のそれと併行するように巡ったことから、住居に伴うものと判断するに至った。段の幅は60～80cmを測り、東部の壁際がやや広がっていた。また、北側の段はほぼ平坦な面も認められたが、南側のように内側に向かって傾斜する箇所も多くみられた。

遺物は直口壺6・7・甕8～10・高杯11～14・鉢15～17・手捏ね鉢18・19、石包丁S1・砥石S2、鉈M1・刀子M2・鏃M4～M7・不明鉄製品M8などが出土している。なお、6・10はa住居床面から、S2はc住居床面から、他の土器およびS1、鉄製品はいずれも覆土中からの出土であった。

以上、土器の特徴から当住居は後期中葉に廃絶したものと考えられる。 (江見)



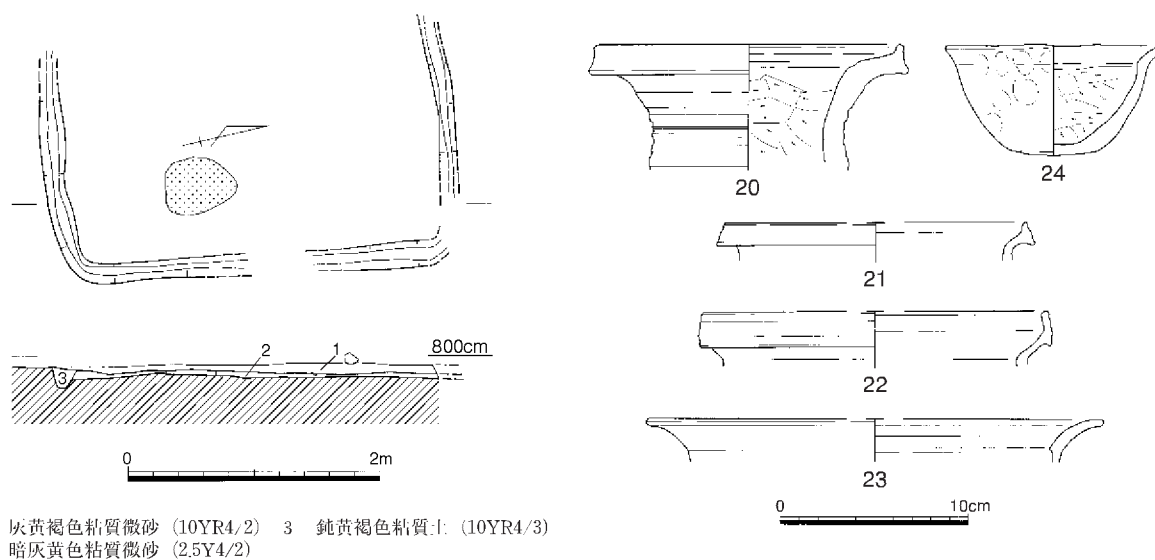
第15図 竪穴住居1出土遺物① (1/4)



第16図 竪穴住居1出土遺物② (1/3・1/4)

竪穴住居2 (第13・17図、写真8)

竪穴住居1の東に位置し、住居の大半は竪穴住居1に、北東部は近世井戸に、さらに東部は土壇32に切られて検出された。平面形態は方形を呈し、周囲に壁体溝を巡らせていた。残存する東辺は南北3.3mを測り、これから推定される床面積は10㎡余りの小規模な住居である。主柱は不明で、住居南東部からは60×40cmの被熱面が認められた。埋土はわずかで、第2層の暗灰黄色微砂は締まり、貼り床となっていた。遺物はわずかながら第1層から出土している。いずれも小破片であるが長頸壺20・甕21・22・高杯23などで、20は外面に沈線が巡り、頸部内部には稚拙なヘラケズリの痕跡を残すものである。21は口縁が肥厚し、22は口縁が上方へ拡張されるものである。23の口縁内面には稜線が走り、段となっている。これら土器の特徴から当住居は後期前葉に廃絶したものと考えられる。(江見)

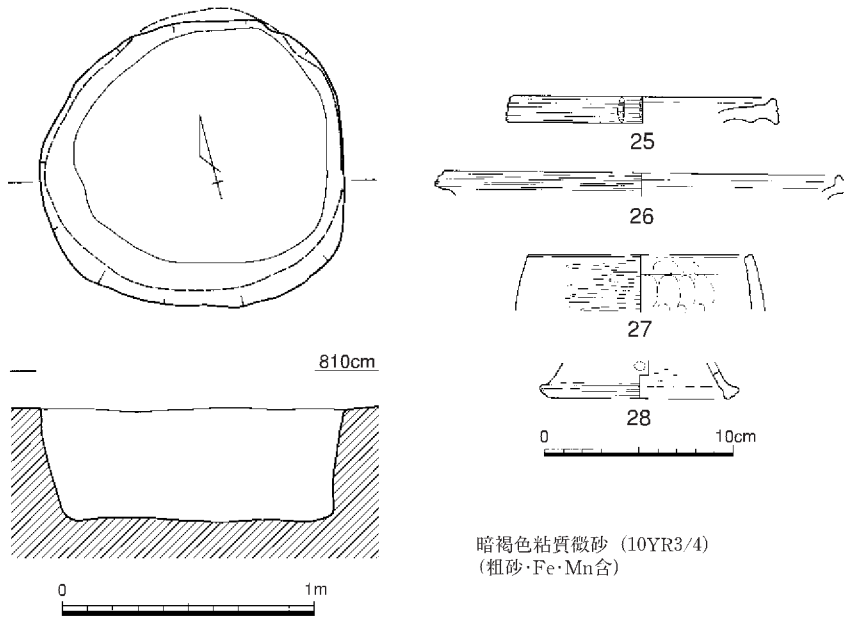


第17図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

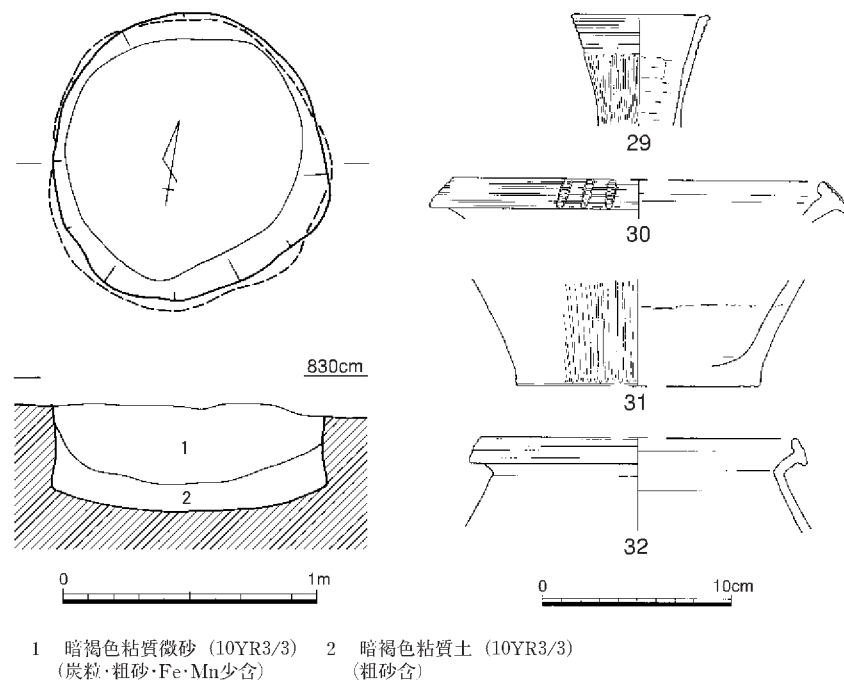
### 3 土壙

#### 土壙1 (第12・18図、図版3)

76E～78Eにかけて計9基が検出された弥生時代の土壙群の中の最も南西に位置する土壙である。規模は長軸1.19m、短軸1.18m、深さ45cm、底面の海拔高は7.51mを測る。平面形は円形を呈し、



第18図 土壙1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第19図 土壙2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

壁は直立気味に立ち上がる袋状の土壙である。埋土中から、広口壺25、甕26、鉢27、高杯の脚部28が出土している。土壙の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(石田)

#### 土壙2 (第12・19図、図版4)

76Eに位置する土壙で、西側2.9mには土壙1が存在する。長軸1.18m、短軸1.11m、深さ42cmを測り、底面の海拔高は7.76mである。平面形は円形、断面は底部付近が広がる袋状土壙である。埋土中から細頸壺の口縁部片29、壺30・31、甕32が出土している。時期はこれらの土器から弥生時代中期後葉と考えられる。(石田)

#### 土壙3 (第12・20図、図版4)

76Eに位置する土壙で、西側2.5mには土壙2が存在する。長軸は1.05m、短軸91cm、深さ20cmを測り、底面の海拔高は7.86mであ

る。平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。図示できる遺物は無かったが、弥生時代後期に属すると考えられる。(石田)

**土壌 4** (第12・21図、図版4・5)

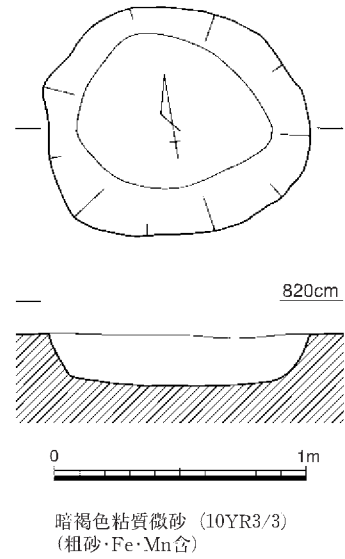
76Eの北東隅、土壌6の南60cmに隣接する土壌である。規模は長軸1.73m、短軸1.37m、深さ30cmを測り、底面の海拔高は7.90mである。平面形は隅丸方形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。東側に9m離れた位置に存在する土壌5と形態が類似している。埋土中から口縁端部に凹線文を施す甕33が出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(石田)

**土壌 5** (第12・22図、図版5)

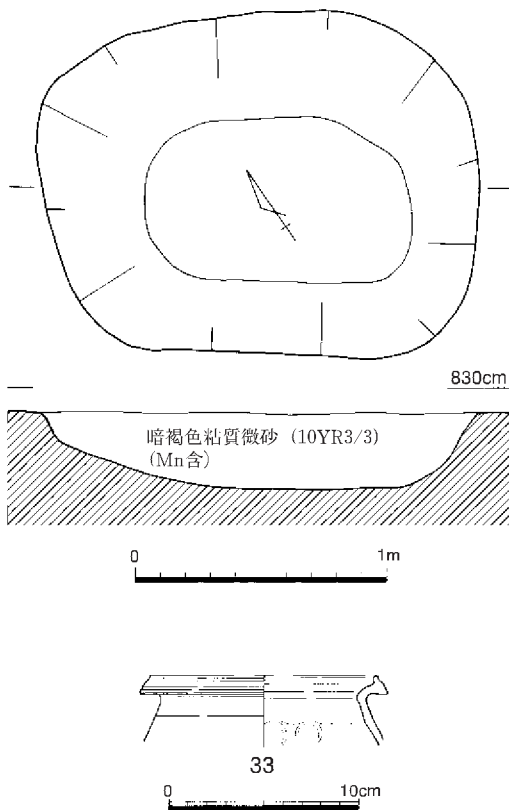
78Eに位置する土壌で、南東70cmには土壌7が隣接する。規模は長軸1.42m、短軸1.12m、深さ9cmを測り、底面の海拔高は7.97mである。平面形は隅丸方形で、断面形は浅く皿状を呈する。埋土中から竹管文を外面に巡らす高杯34が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(石田)

**土壌 6** (第12・23図、図版4・5)

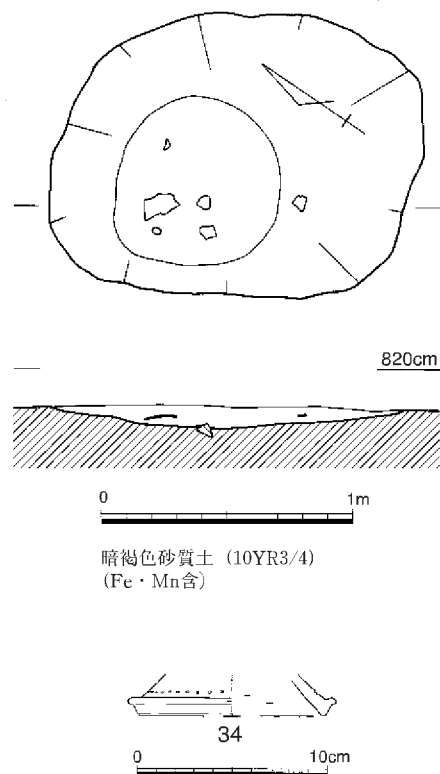
76Eの北東部に位置する土壌である。調査区境のため北半を欠き全形は不明であるが、短軸で80cm、深さ18cm、底面の海拔高は8.03mを測る。平面形は不整であるが長方形を呈するものと考えられる。



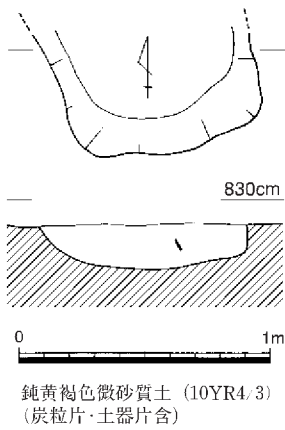
第20図 土壌 3 (1/30)



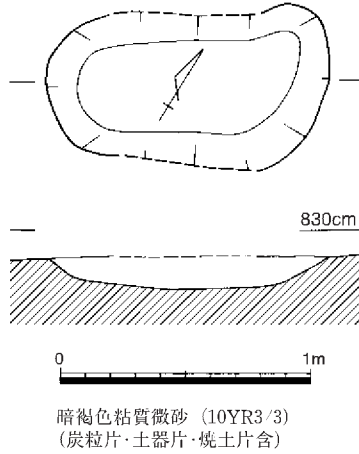
第21図 土壌 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第22図 土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第23図 土壙 6 (1/30)



第24図 土壙 7 (1/30)

埋土中から弥生土器片が出土しており、当該期の土壙と考えられる。(石田)

土壙 7 (第12・24図、図版 4)

78Eに位置する土壙で、西側に土壙 5 が存在する。規模は長軸1.13m、短軸60cm、深さ13cmを測り、底面の海拔高は8.06mである。平面形は不整な楕円形、断面は浅い皿状を呈する。埋

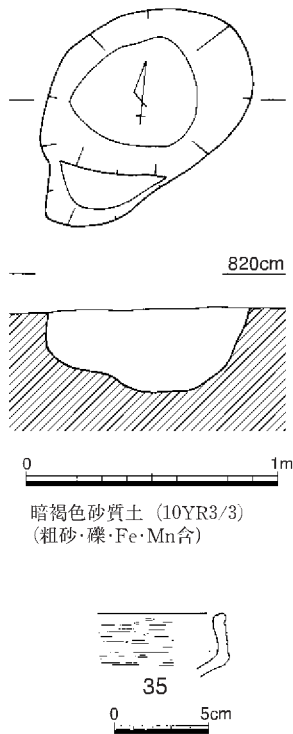
土中から炭粒片・焼土片とともに弥生土器片が出土しており、弥生時代の土壙と考えられる。(石田)

土壙 8 (第12・25図、図版 6)

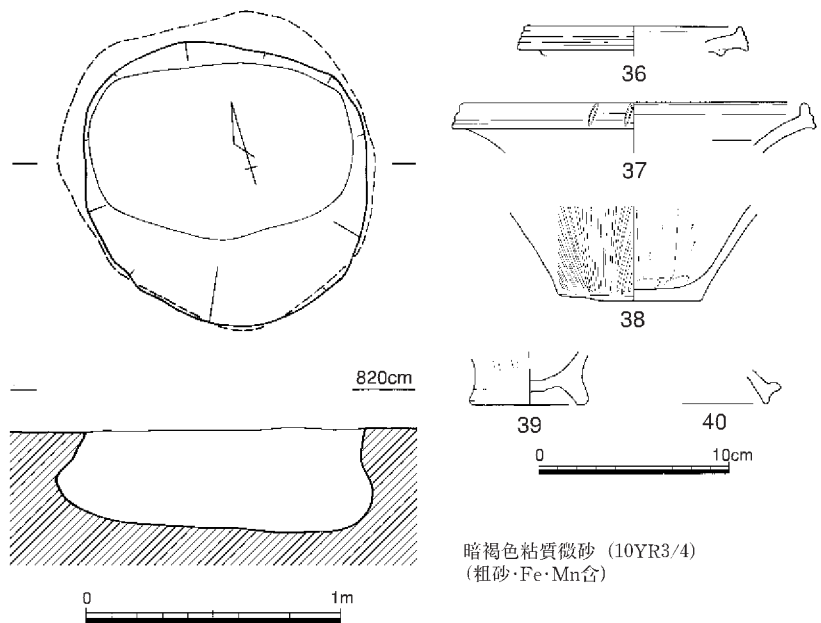
78Eに位置する土壙で、西側 1 mには土壙 3 が存在する。長軸81cm、短軸79cm、深さ33cmを測り、底面の海拔高は7.72mである。平面形は不整形で、断面は椀状を呈しており、底部は南側に平坦面をもつ。埋土中から高杯35が出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(石田)

土壙 9 (第12・26図、図版 6)

78Eで検出された袋状土壙で、土壙 8 の北東 1 mに位置する。規模は長軸1.26m、短軸1.26m、深さ41cmを測り、底面の海拔高は7.64mである。平面形は円形、断面は底部付近が大きく広がり袋状を呈する。埋土中からは壺の口縁部片で貼付突帯をもつ36、口縁端部に棒状浮文を施す37、底部の破片



第25図 土壙 8 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

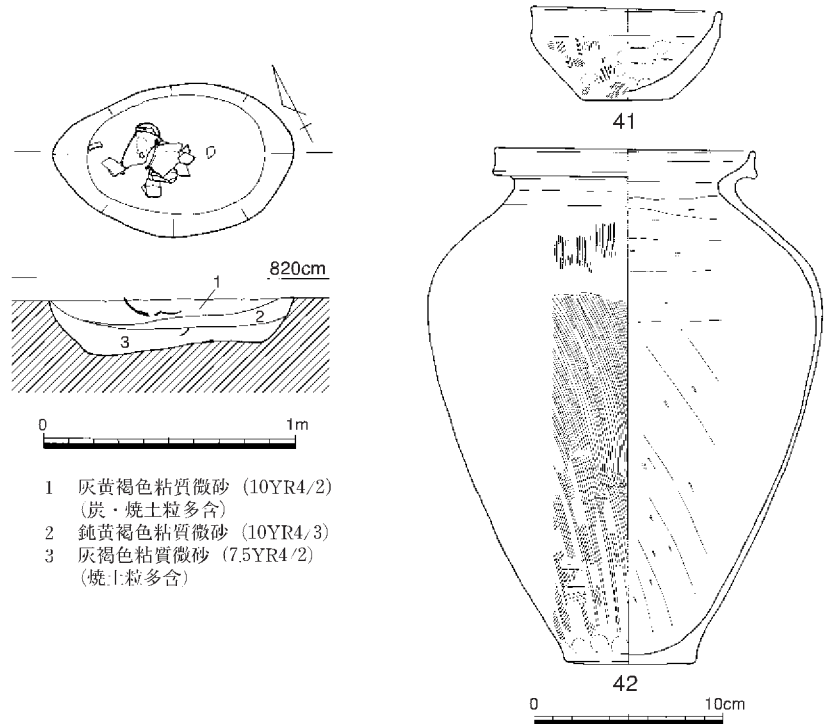


第26図 土壙 9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

38・39、高杯の脚部片40  
 が出土している。時期は  
 弥生時代中期後葉と考え  
 られる。(石田)

**土壙10** (第13・27図、  
 図版7・39)

88Eの南西角から検出  
 された平面楕円形を呈す  
 規模は96×56cm、深さ21  
 cmを測る。壁は斜めに立  
 ち上がり、底部はほぼ平  
 坦である。埋土は3層か  
 らなり、自然堆積の状況  
 を呈していた。第1層か  
 らは流れ込むように甕  
 42・鉢41が出土してい  
 る。甕は肩が張り、底部  
 は逆反りする。鉢は小振  
 りで、凹部を形成する口縁をもつ。これら特徴から後期中葉に埋没した土壙であろう。(江見)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
 (炭・焼土粒多含)
- 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)
- 3 灰褐色粘質微砂 (7.5YR4/2)  
 (焼土粒多含)

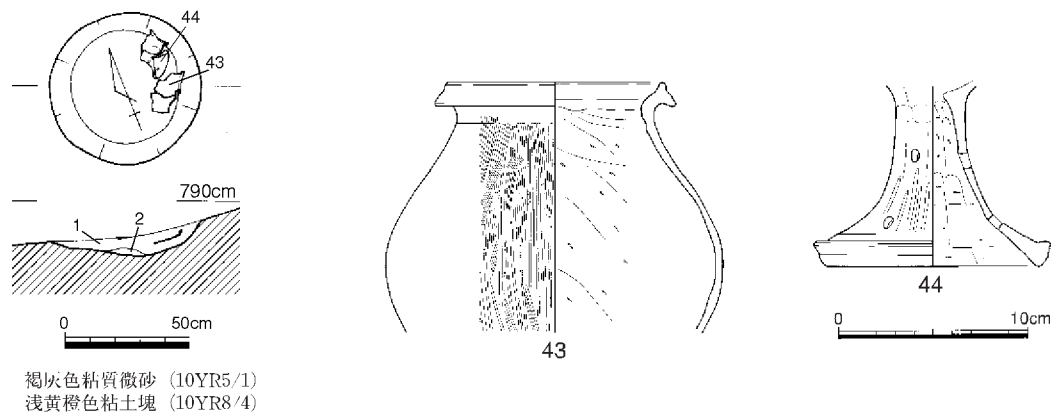
第27図 土壙10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙11** (第13・28図、図版7)

88Eの中央南寄りに位置し、土壙10の北東約10mから検出された、平面円形を呈す土壙である。上部は近世溝に削平を受けるものの、規模は径約60cm、深さ8cmを測り、平坦な底部に、壁は斜めに立ち上がりを残すものであった。土壙底部には粘土塊が密着しており、東部からは甕43・高杯44が出土している。土器の特徴から弥生時代後期前葉に埋没した土壙と考えられる。(江見)

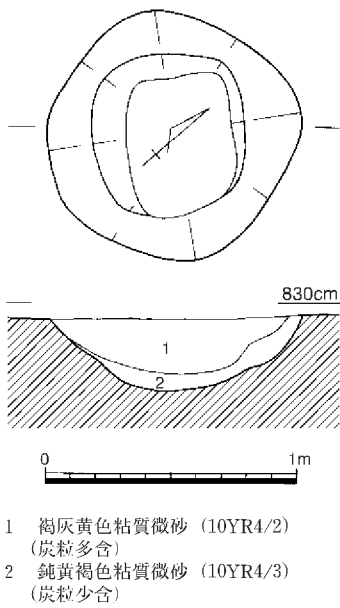
**土壙12** (第13・29図、図版7)

86Eの南東に位置し、土壙11の西約10mから検出された、平面隅丸方形を呈す土壙である。一辺約1m、深さ約30cmを測り、底部はやや窪みを呈し、壁は緩く2段に立ち上がる。埋土は2層からなり、



- 1 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)
- 2 浅黄橙色粘土塊 (10YR8/4)

第28図 土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第29図 土壌12 (1/30)

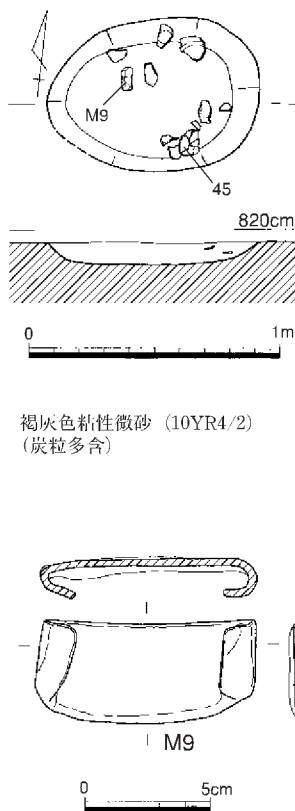
上層には炭粒が多く含まれていた。遺物は弥生後期前半を示す土器片が出土している。(江見)

土壌13 (第13・30図、図版8・54)

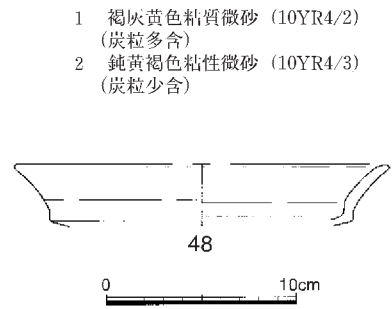
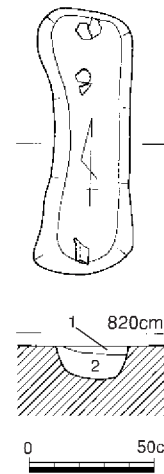
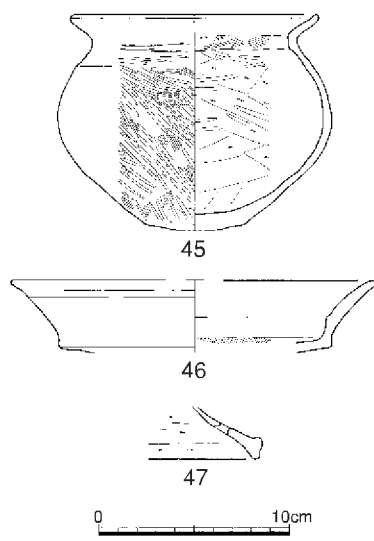
88Eの南西に位置し、土壌11の南東約4mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は84×60cm、深さ9cmを測り、底部は平坦で壁は緩く立ち上がる。遺物は鉢45・高杯46・47、鋤先M9が出土している。小振りの鉢は土壌南部から割れた状態で、鋤先は土壌中央北寄りから底部から浮いた状態で出土しており、いずれも自然堆積の状況を示しているものと判断される。M9はほぼ完形で幅87.5mm、重量52.9gを計る。高杯の特徴から当土壌は後期前葉に埋没したものと考えられる。(江見)

土壌14 (第13・31図、図版8)

88Eの南西に位置し、土壌13の北西数mから検出された平面隅丸長方形を呈す土壌である。規模は1.05m×30cm、深さ13cmを測り、ほぼ平坦な底部に、壁は直立気味に立ち上がる。遺物は壺・甕・高杯48などが、いずれも底部から浮いた位置に流れ込んだような状態で出土している。壺・甕はいずれも胴部の破片で、図示し得たのは高杯片のみであった。口縁は直立して立ち上がり、内面に稜線を残し急に外反する特徴は後期前葉を示す。(江見)



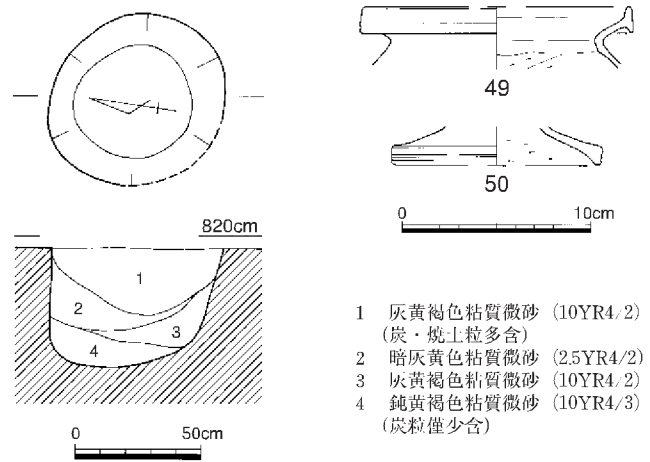
第30図 土壌13 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)



第31図 土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌15 (第13・32図、図版8)

86Eの南東に位置し、土壌12の南約4mから検出された平面円形の土壌である。規模は径約70cm、深さ47cmを測る。底部は平坦で、壁は急に立ち上がる。埋土は4層からなり、いずれも比較的締まっていた。遺物は少なく土器細片に混じって甕49・高杯50が出土している。甕の上下に摘み出された口縁外面には条線が走り、肩部外面には煤が付着していた。高杯の脚端部には2条の凹線が巡る。これら遺物の特徴から当土壌は後期前葉に埋められたものと考えられる。(江見)

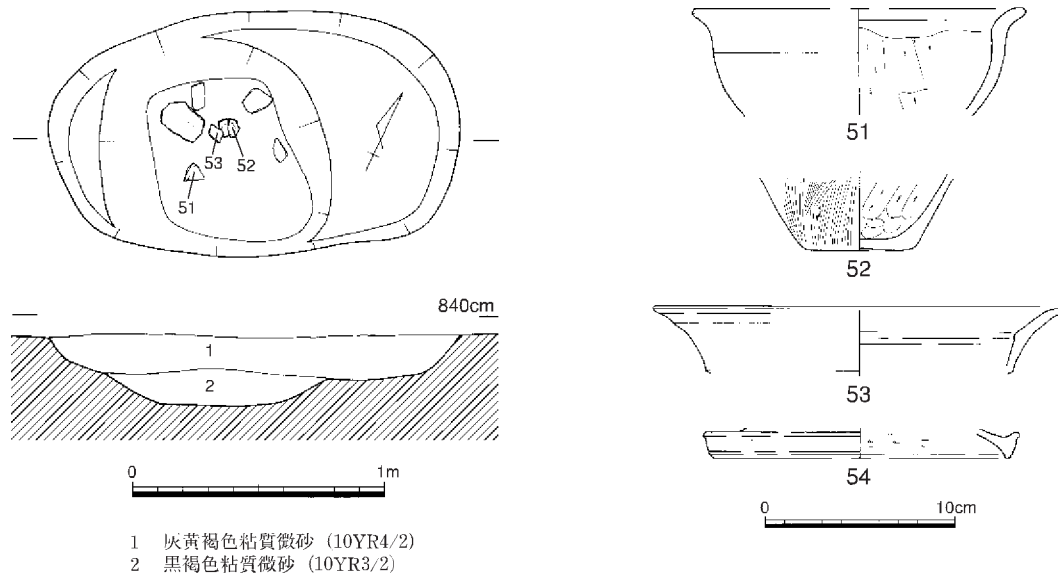


- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭・焼土粒多含)
- 2 暗灰黄色粘質微砂 (2.5YR4/2)
- 3 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
- 4 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭粒僅少含)

第32図 土壌15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌16 (第13・33図、図版9)

86Eに位置し、前述土壌15に北東部を一部切られて検出された。平面楕円形を呈し、規模は1.63m×97cm、深さ27cmを測る。上下2段の平坦面をもち、2層からなる。上下別土壌の可能性もあるが、その差は明瞭でなく、一土壌として取り扱った。遺物は主に土壌中央の2層上部から出土している。鉢51・甕52・高杯53・54などいずれも破片で、後期前葉に埋没した土壌と考えられる。(江見)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)

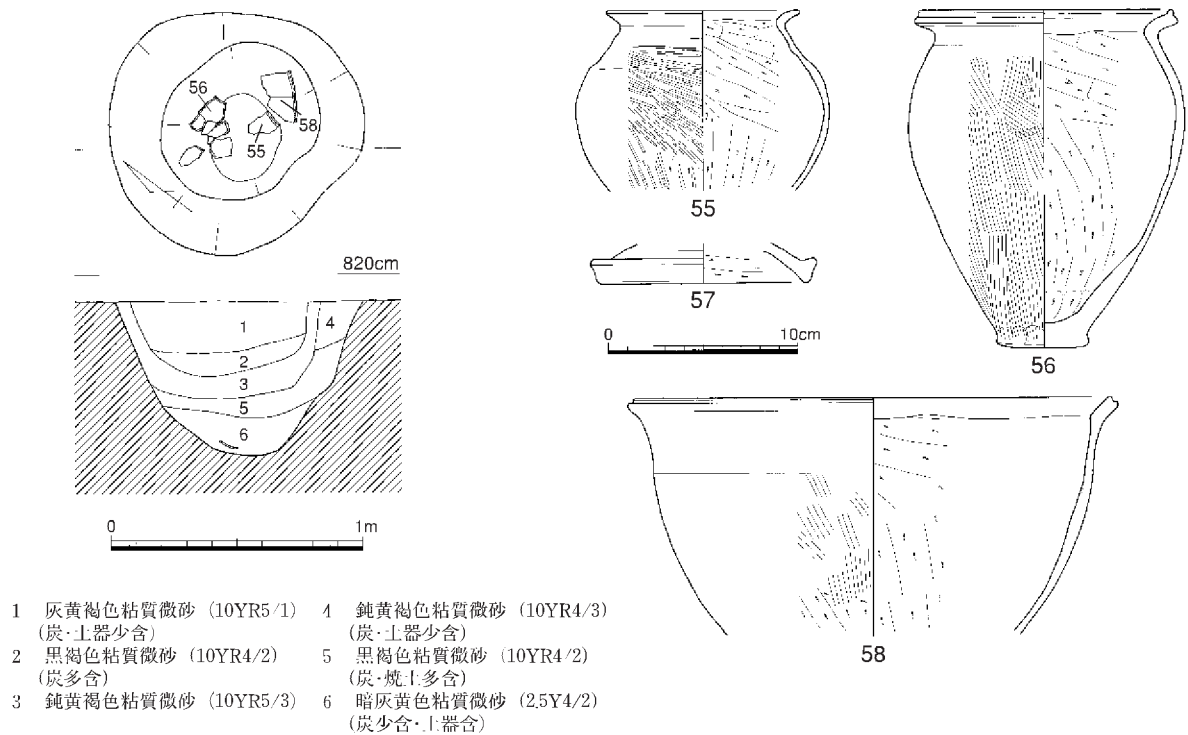
第33図 土壌16 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌17 (第13・34図、図版9・39)

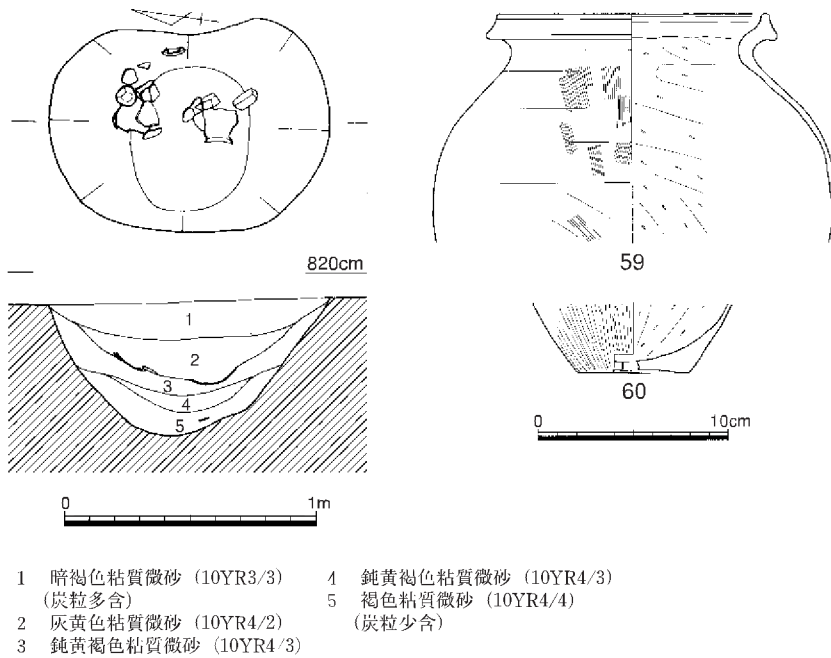
88Eの南東部に位置し、土壌16から北東約17mから検出された平面不整円形を呈す土壌である。規模は径約1m、深さ96cmを測る。底部は窪み、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は6層からなり、上部3層は陥没堆積した状況を呈していた。遺物は主に最下層の第6層の底部付近から出土しており、



いずれも押し潰された状態であった。甕55・56・高杯57・鉢58が出土しており、その特徴から当土壌は後期前葉に埋没したものと考えられる。(江見)



第34図 土壌17 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第35図 土壌18 (1/30)・出土遺物 (1/4)

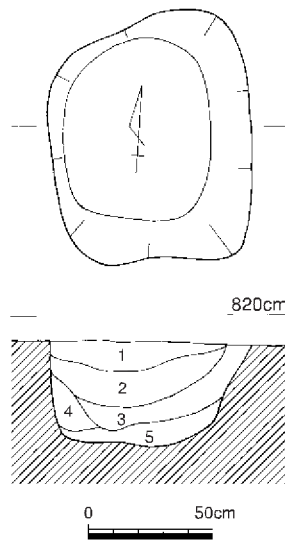
土壌18 (第13・35図、図版9)

88Eの南東部に位置し、土壌17の北西4mから検出された、平面不整楕円形を呈す土壌である。規模は111×79cm、深さ53cmを測る。底部は窪み、壁は緩く湾曲気味に立ち上がる。埋土は5層からなり、自然堆積の状況を示していた。主に遺物は第2層下部から、土壌中央に流れ込む状態で出土している。遺物は甕59・60をはじめ土器細片、それに混じって川原

石などで、土器の特徴は後期前半を示す。(江見)

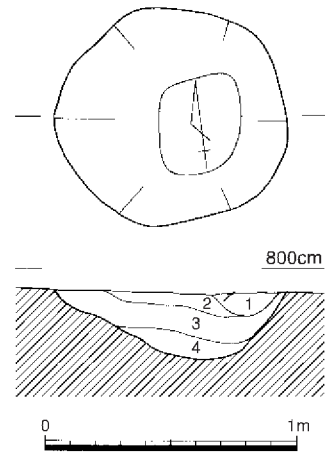
**土壙19 (第13・36図)**

88Eの南東部に位置し、土壙18の南約4mから検出された平面不整形方形を呈す土壙である。規模は95×80cm、深さ40cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。埋土は5層からなり、自然堆積の状況を示していた。遺物は少なく、わずかに後期土器片が出土するのみであった。(江見)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭粒多含)
- 3 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)  
(炭粒多含)
- 4 褐色粘質微砂 (10YR4/4)
- 5 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭粒少含)

第36図 土壙19 (1/30)



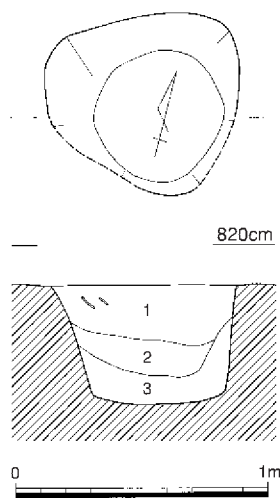
- 1 黄褐色粘土塊 (10YR8/6)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭粒多含・焼土粒僅少混)
- 3 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
- 4 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)

第37図 土壙20 (1/30)

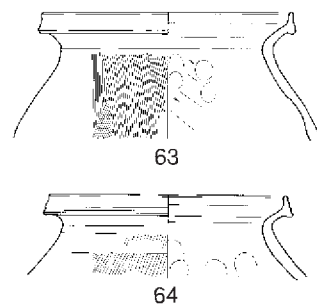
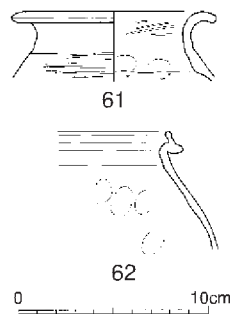
**土壙20 (第13・37図)**  
88Eの北東部に位置し、土壙18の北約5mから検出された平面円形を呈す土壙である。規模は径約90cm、深さ26cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は緩く外方へ立ち上がる。埋土は4層からなる。遺物は少なく、わずかに後期土器細片が出土するのみであった。(江見)

**土壙21 (第13・38図)**

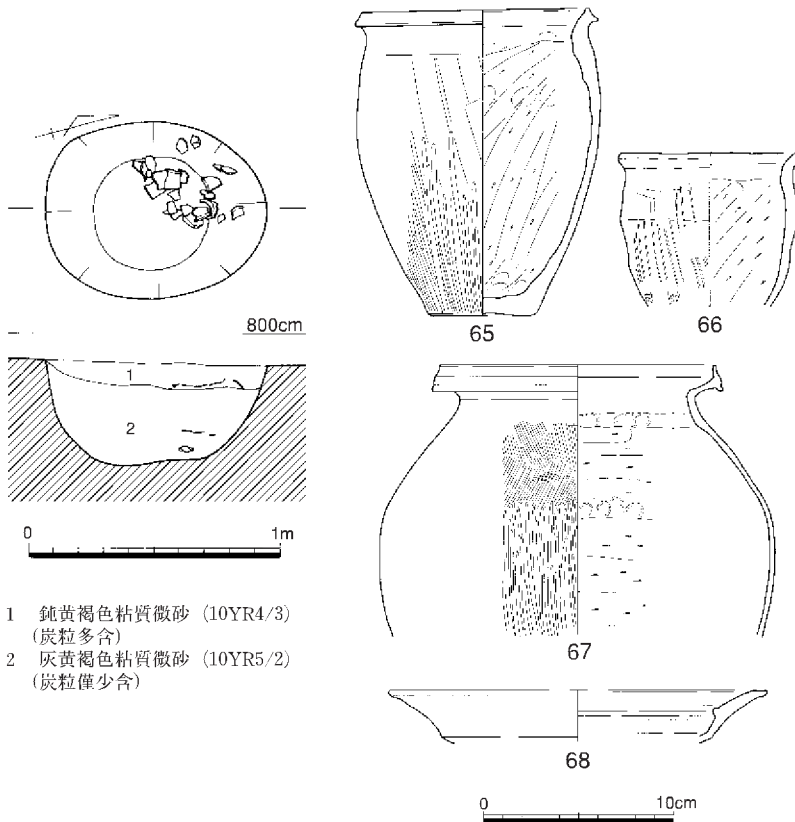
88Eの北東部に位置し、土壙20の南西4mから検出された平面不整形円形を呈す土壙である。規模は径約70cm、深さ約50cmを測る。底部は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。埋土は3層からなり、埋め戻されたものと思われる。遺物は甕61～64が出土しているがいずれも破片で、62の中期の様相を呈すものの、他は後期前半を示しており、土壙はこの時期に埋められたものであろう。(江見)



- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭・土器含)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭多含)
- 3 オリーブ褐色粘質微砂 (2.5Y4/3)



第38図 土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/4)



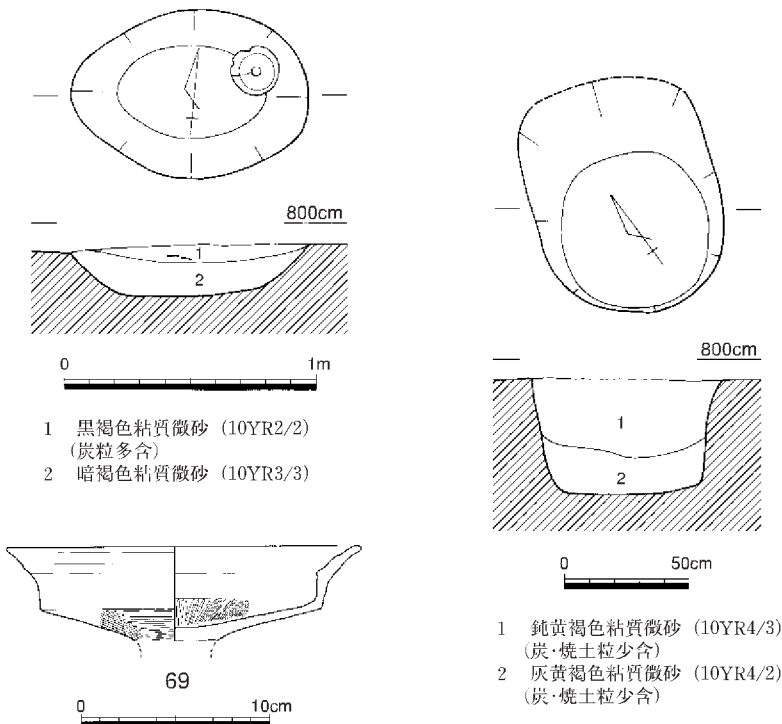
- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭粒多含)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)  
(炭粒僅少含)

第39図 土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙22 (第13・39図、図版10)

88 E の北東部に位置し、土壙21の東数mから検出された平面円形の土壙である。規模は径約80cm、深さ40cmを測る。底部はほぼ平坦で壁は湾曲気味に外方に立ち上がる。埋土は2層からなり、埋め戻された状況と思われた。遺物は第1層、2層のいずれも北部下層に集中しており、川原石に混じって甕65~67・高杯68が出土している。65・66の作りは稚拙で、67の肩部にはタタキ痕跡が認められる。68の口縁内側には段が巡る。土器の特徴から当土壙は後期前葉に埋められたものと考えられる。(江見)

土壙22の北東部に位置し、土壙21の東数mから検出された平面円形の土壙である。規模は径約80cm、深さ40cmを測る。底部はほぼ平坦で壁は湾曲気味に外方に立ち上がる。埋土は2層からなり、埋め戻された状況と思われた。遺物は第1層、2層のいずれも北部下層に集中しており、川原石に混じって甕65~67・高杯68が出土している。65・66の作りは稚拙で、67の肩部にはタタキ痕跡が認められる。68の口縁内側には段が巡る。土器の特徴から当土壙は後期前葉に埋められたものと考えられる。(江見)



- 1 黒褐色粘質微砂 (10YR2/2)  
(炭粒多含)
- 2 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)

- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭・焼土粒少含)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭・焼土粒少含)

第40図 土壙23 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

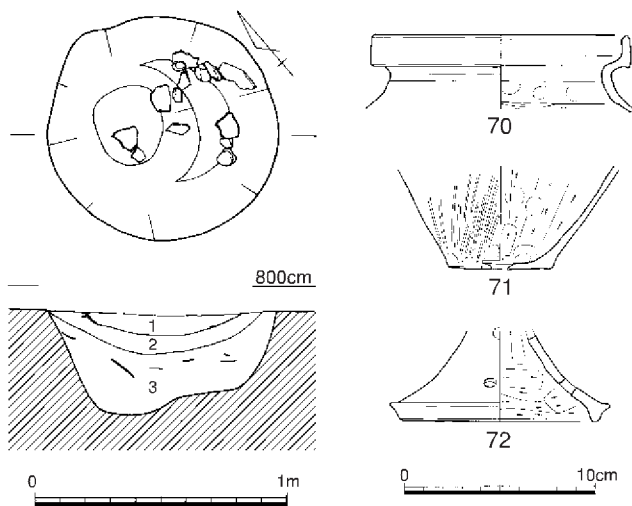
第41図 土壙24 (1/30)

土壙23 (第13・40図、図版10)

88 E の北東部に位置し、土壙22の南東約10mから検出された平面楕円形を呈す土壙である。規模は94×67cm、深さ20cmを測る。底部は平坦で壁は斜め外方に立ち上がる。埋土は2層からなり、遺物は上層から土器破片が、東部下層から一部が底部に接するように高杯69が出土している。高杯は外面蜘蛛の巣状、内面放射線状のヘラミガキが施され、後期前葉の特徴を示すものである。(江見)

**土壙24** (第13・41図、図版10)

90 E 南西部に位置し、土壙23の南東約5 mから検出された平面不整楕円形を呈す土壙である。規模は90×77cm、深さ40 cmを測る。底部は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は2層からなり、埋め戻された状況と判断された。遺物は少なく、わずかに後期土器細片が出土するのみであった。(江見)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2) (炭粒多含)
- 3 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3) (炭粒少含)

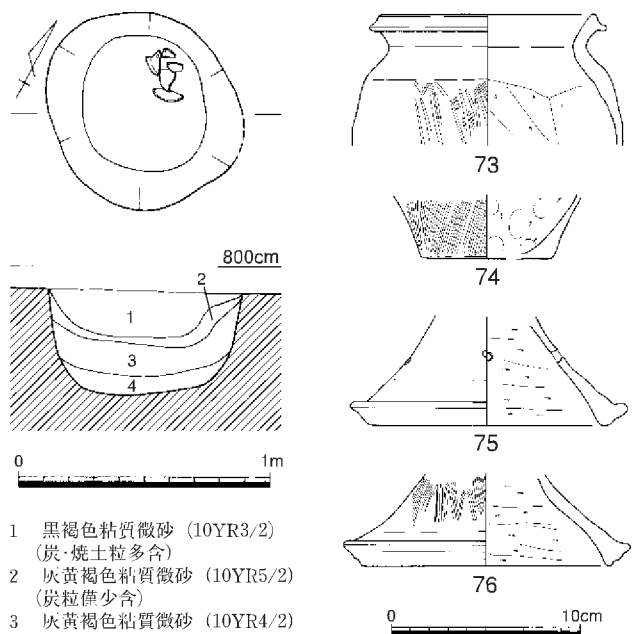
第42図 土壙25 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙25** (第13・42図、図版11)

88 E の北東部に位置し、土壙22の北数mから検出された平面円形を呈す土壙である。規模は径約90cm、深さ40cmを測る。底部は2段からなり、壁は急に立ち上がる。平断面の形態から柱穴の可能性も否めないが、3層からなる埋土の状況から土壙として掲載した。遺物は主に第3層から、中央部に流れ込むような状態で甕70・71・高杯72などが川原石とともに出土している。後期前葉を示す72、中葉を示す71などから、当土壙は後期中葉に埋没したものと判断される。(江見)

**土壙26** (第13・43図、図版11)

88 E の北東部に位置し、土壙25の東約2 mから検出された平面不整円形の土壙である。規模は径約80cm、深さ約40cmを測る。底部は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は下部が埋め戻され、上部は自然堆積の状況を呈していたと判断された。遺物は主に上層から甕73・74・高杯75・76が出土している。遺物の特徴から当土壙は後期前葉に埋没したものと考えられる。(江見)

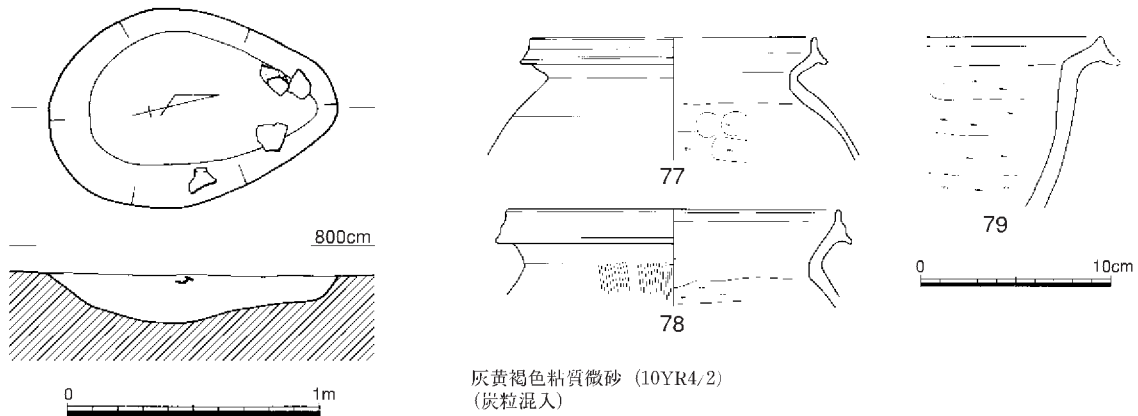


- 1 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2) (炭・焼土粒多含)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2) (炭粒僅少含)
- 3 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2) (炭・焼土粒多含)
- 4 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3) (炭粒僅少含)

第43図 土壙26 (1/30)・出土遺物 (1/4)

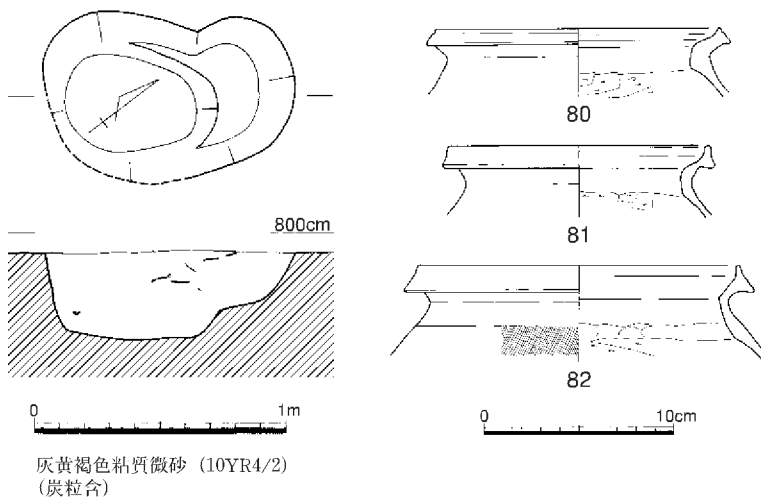
**土壙27** (第13・44図)

90 E の北西部に位置し、土壙26の北東約10mから検出された平面不整楕円形を呈す土壙で、規模は114×80cm、深さ20cmを測る。底部はやや窪み壁は斜め外方に立ち上がる。埋土は1層からなり、遺物は甕77・78・鉢79などが、いずれも土壙中央に向かって流れ込む状態で出土した。遺物の特徴から後期中葉に埋没したものであろう。(江見)



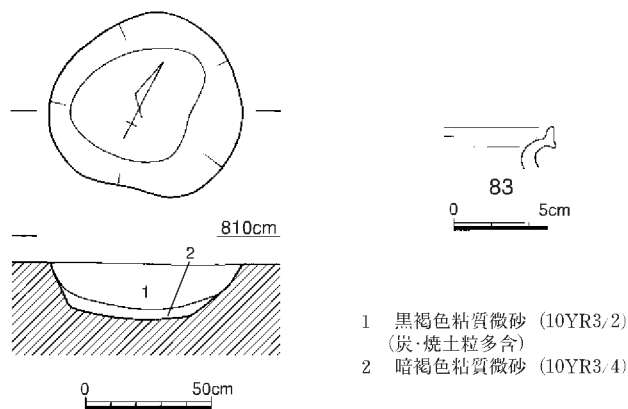
灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒混入)

第44図 土壙27 (1/30)・出土遺物 (1/4)



灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒含)

第45図 土壙28 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭・焼土粒多含)  
2 暗褐色粘質微砂 (10YR3.4)

第46図 土壙29 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙28** (第13・45図、図版11)

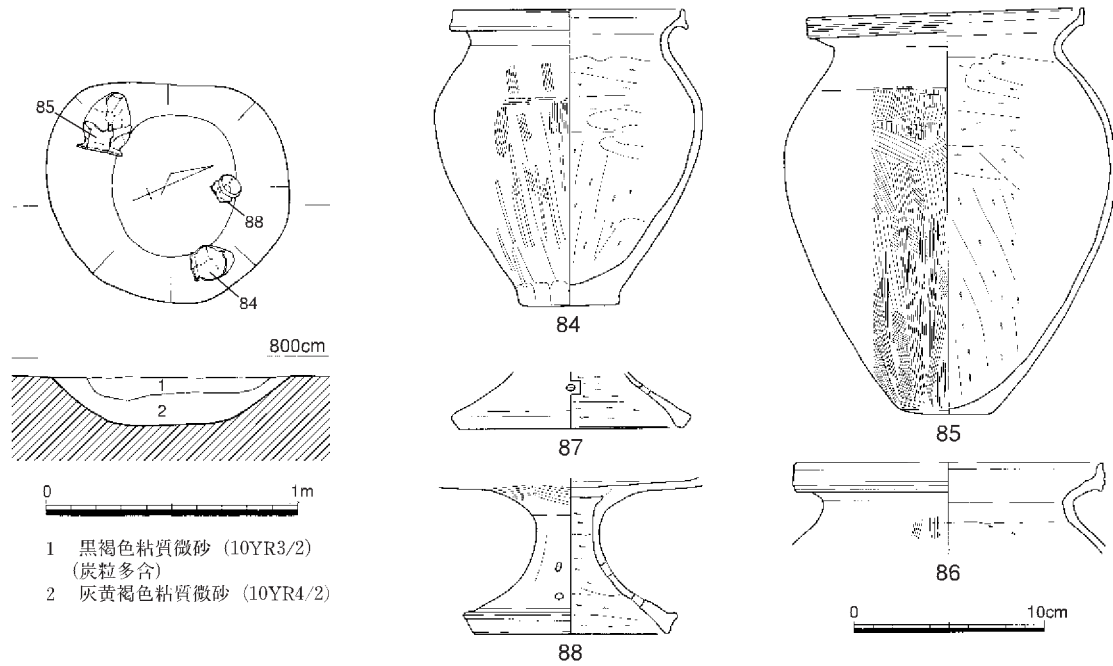
90 Eの北西部に位置し、土壙27の南方約9 mから検出された平面不整楕円形を呈す土壙である。規模は97×65cm、深さ45cmを測る。底部は2段からなり、いずれも平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は1層で、遺物は土壙中央へ向かって流れ込むような状態で出土している。なお、平断面の状況から土壙として記載したが、柱穴として利用された後に埋没していった可能性も否めない。遺物は少なくいずれも破片で、口縁端部を肥厚させる80や、上方へ摘み出す81・82がある。土器の特徴から当土壙は後期前半に埋没したものと考えられる。(江見)

**土壙29** (第13・46図)

90 Eの北西部に位置し、土壙28の北東5 mから検出された平面不整円形を呈す土壙である。規模は径約75 cm、深さ23cmを測る。底部は平坦で壁は斜め外方に立ち上がる。埋土は2層からなり、特に第1層には炭および焼土粒が多く含まれていた。遺物は少なく、図示し得たのはわずかに甕片83のみであるが、その特徴から当土壙は後期前半に埋没したものであろう。(江見)

土壌30 (第13・47図、図版12・39)

88Eの北東角に位置し、土壌北西9mから検出された平面不整円形を呈す土壌である。規模は95×87cm、深さ20cmを測る。底部は平坦で、壁は緩く外方へ立ち上がる。埋土は2層からなり、上層に

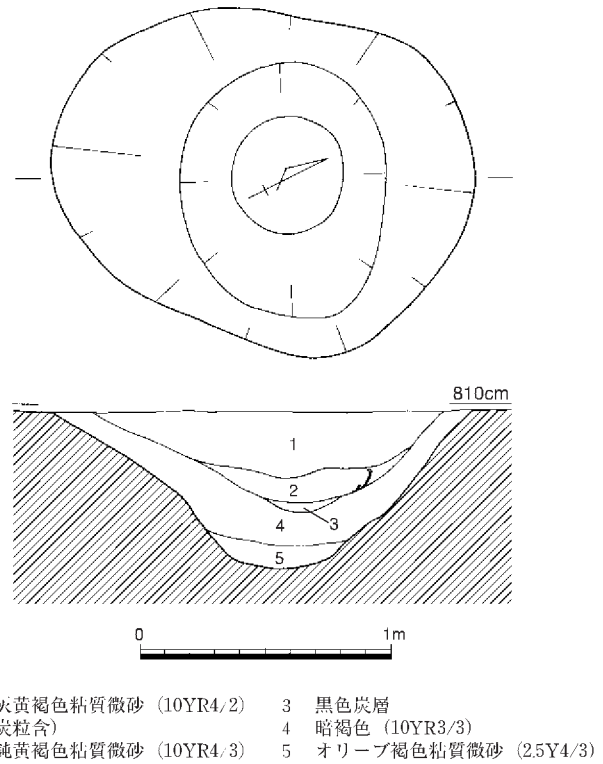


第47図 土壌30 (1/30)・出土遺物 (1/4)

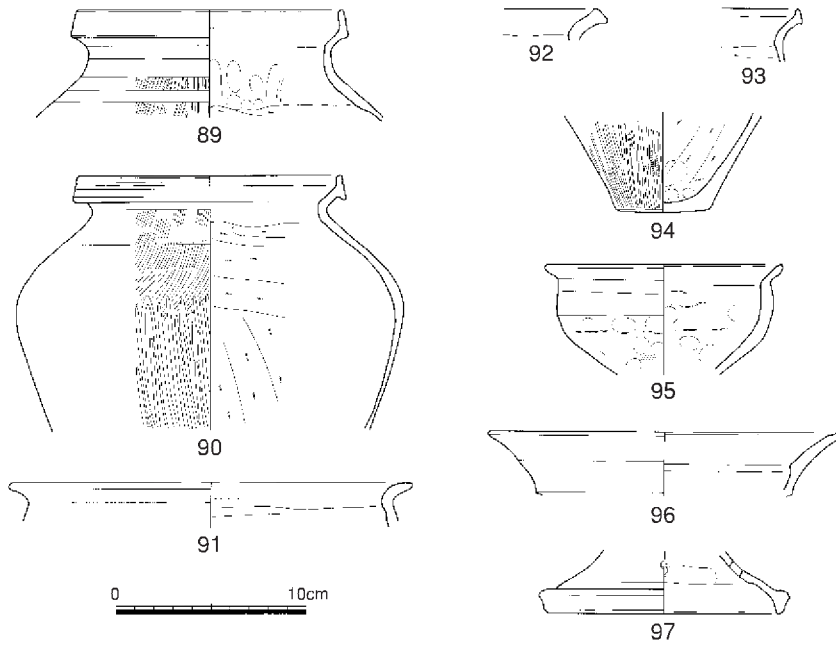
は炭粒が多く含まれていた。遺物は甕84～86・高杯87・88などで、これらはいずれも転倒した状態であるが、85はほぼ底部付近から、84・88はやや浮いた位置からの出土であった。古い様相を示す高杯が含まれるものの、甕の特徴などから、当土壌は後期前半には埋没したものと考えられる。(江見)

土壌31 (第13・48・49図、図版12)

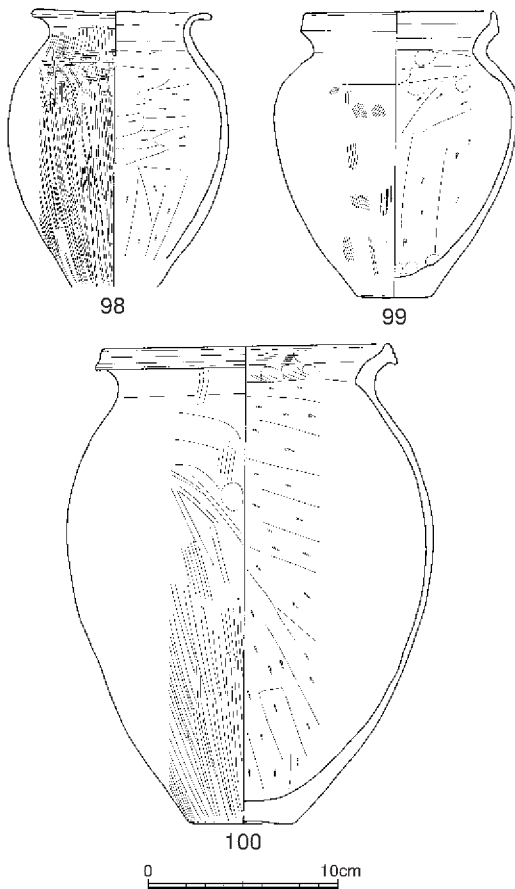
88Eのほぼ中央に位置し、土壌30の南東17mから検出された平面不整楕円形を呈す土壌である。規模は168×135cm、深さ63cmを測る。底部は狭く窪み、壁は緩く外方に立ち上がる。埋土は5層からなり、自然堆積した状況が窺える。平断面のあり方から井戸としての利用も想起されたが、前述の竪穴住居1の床面の方が



第48図 土壌31 (1/30)



第49図 土壙31出土遺物 (1/4)



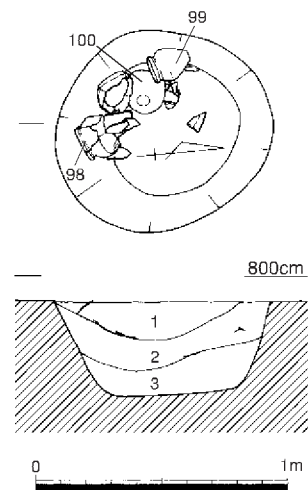
第50図 土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/4)

低く、土壙として取り扱った。遺物は甕89～94・鉢95・高杯96・97などが出土しており、その年代観は後期前葉を示す。(江見)

**土壙32** (第13・50図、図版12・39)

90Eの南西部に位置し、土壙32東12mから検出された平面円形を呈す土壙である。規模は径約85cm、深さ38cmを測る。底部は平坦で壁はやや急な角度で外方に立ち上がる。埋土

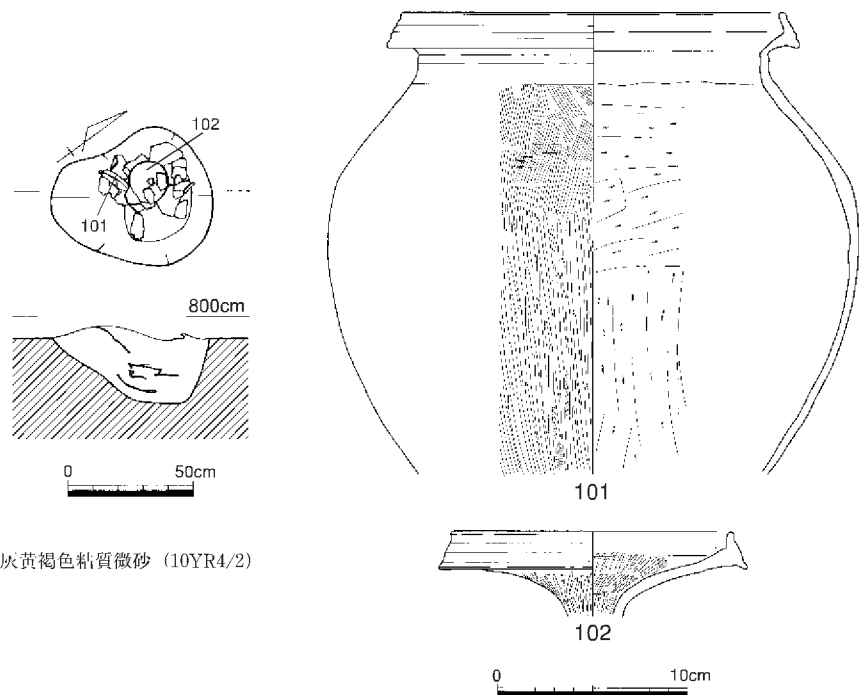
は3層からなり、特に第2層には炭を多く含んでいた。遺物は1・2層から多く出土しており、特に南西部からは横転した状況で甕98～100が出土しており、その年代観は後期前半である。(江見)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒僅少含)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭粒多含)
- 3 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y4.2)  
(炭粒僅少含)

**土壙33** (第13・51図、  
図版13)

90Eの北西部に位置し、土壙32の北西5mから検出された平面不整円形を呈す土壙である。規模は64×54cm、深さ26cmを測る。底部は平坦で壁は南西部が緩く立ち上がるものの、他は急である。遺物は土壙西側から中央に向かって流れ込むような状態で出土している。主に甕101の破片が多く、これに混じて器台102も出土している。101の肩部にはハケ調整前のタタキが



灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)

第51図 土壙33 (1/30)・出土遺物 (1/4)

認められ、古い様相を残すものの後期前葉に埋没した土壙であろう。

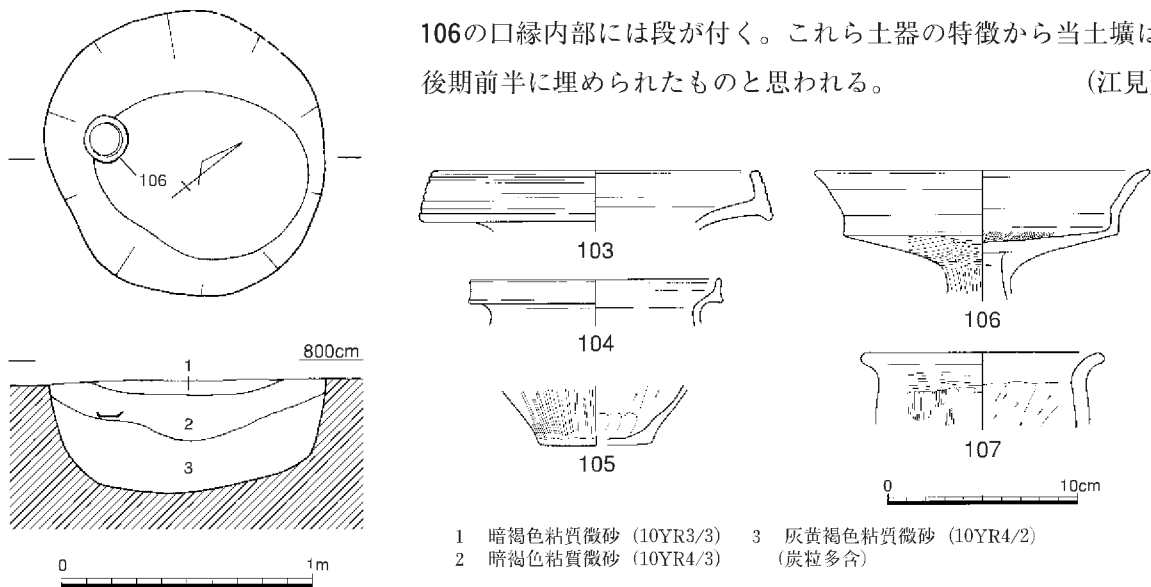
(江見)

**土壙34** (第13・52図)

90Eの北西部に位置し、土壙33の東方7mから検出された平面円形を呈す土壙である。規模は径約1.1m、深さ44cmを測る。底部はほぼ平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は3層からなり、全体に締まった埋め戻された状況に理解された。遺物は主に第2層から壺103・甕104・105・高杯106・鉢

107などが出土している。103の口縁部には凹線文が巡らされ、106の口縁内部には段が付く。これら土器の特徴から当土壙は後期前半に埋められたものと思われる。

(江見)

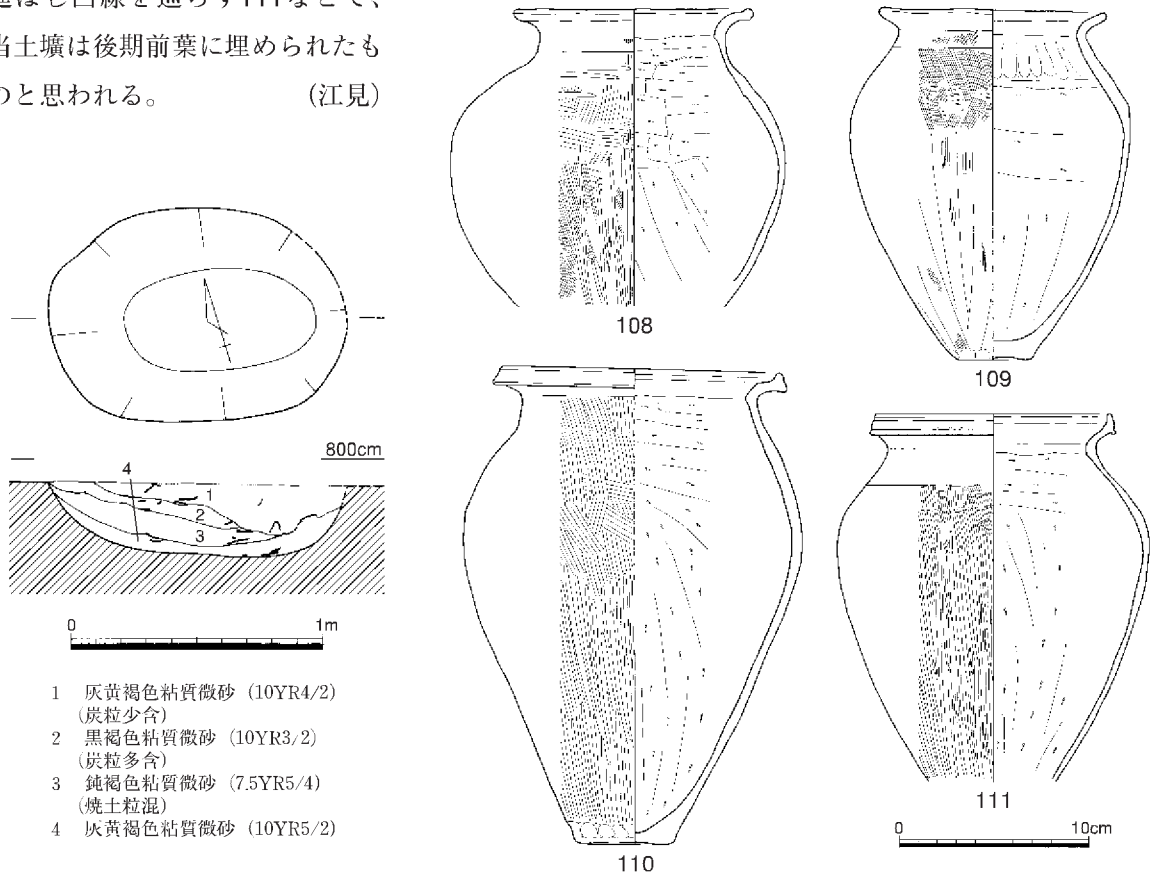


第52図 土壙34 (1/30)・出土遺物 (1/4)



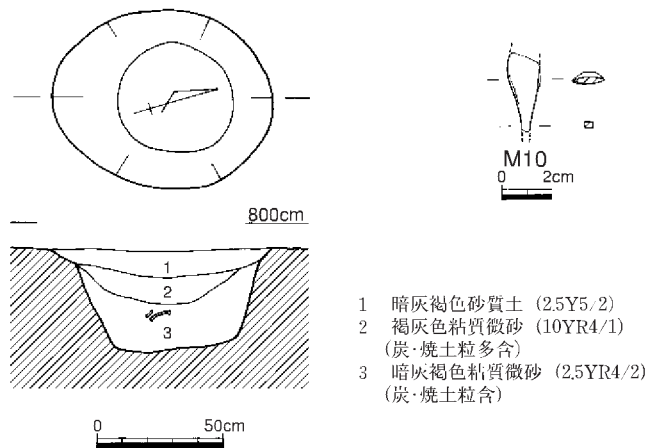
土壌35 (第13・53図、図版13・40)

88Eの北東部に位置し、土壌34の西方9mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.2m×85cm、深さ28cmを測る。底部はほぼ平坦で、緩く外方に立ち上がる。埋土は3層からなり、第1・2層に炭粒を含み、第3層には焼土粒を含んでいた。遺物はいずれの層からも出土しているが、特に第1層からは多くの破片を投棄した状況が窺えた。遺物は甕が大半を占め、口縁端部を丸く収める108・109、肥厚する110、引き延ばし凹線を巡らす111などで、当土壌は後期前葉に埋められたものと思われる。(江見)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒少含)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭粒多含)
- 3 鈍褐色粘質微砂 (7.5YR5/4)  
(焼土粒混)
- 4 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)

第53図 土壌35 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗灰褐色砂質土 (2.5Y5/2)
- 2 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)  
(炭・焼土粒多含)
- 3 暗灰褐色粘質微砂 (2.5YR4/2)  
(炭・焼土粒含)

第54図 土壌36 (1/30)・出土遺物① (1/3)

土壌36 (第13・54・55図、図版54)

90EのEライン上中央で、土壌34の北に位置する。平面形は87cm×71cmのやや南北に長い楕円形を呈する。深さは40cmとさして深くないが、底面はほぼ平らで、断面台形を呈するしっかりした土壌である。埋土は3層に分かれ、第2層には炭・焼土が多く混じっていた。

出土土器は細片であるが比較的多く、甕、鉢、高杯、製塩土器などが

あった。第3層上半の断面に示した土器は高杯114である。また鉄鏃M10も出土している。時期は弥生時代後期前半と考えられる。(渡邊)

土壙37 (第13・56図、図版13)

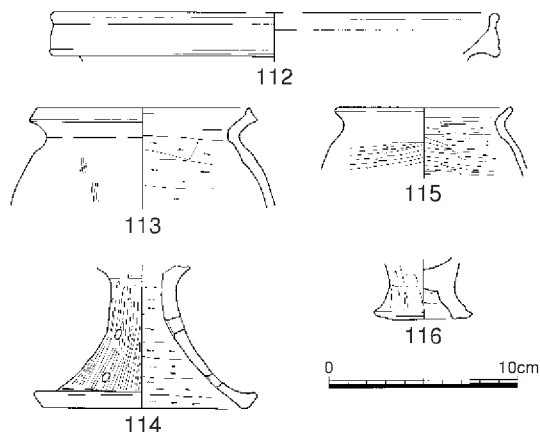
90E東端で、竪穴住居2の東に位置する。柱穴で西端が切られているが、約1.33m×89cmの東西に長い不整楕円形を呈する。

埋土は2層に分かれ、土器の多くは第1層から出土している。甕117の口縁は上方への拡張が顕著であるが、高杯の器形から弥生時代後期前半の範疇で捉えておきたい。(渡邊)

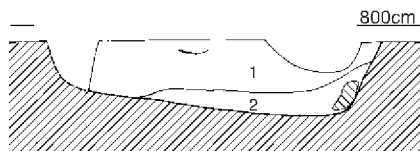
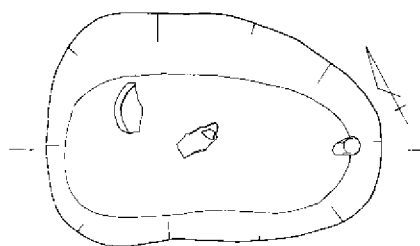
土壙38 (第13・57・58図、図版14・40)

92E交点近くで、土壙37の北に位置する土壙である。1.33m×1.19mの不整円形を呈する。埋土は3層に分かれるが、第3層は中央の一段くぼんだ部分に堆積している土で、第2層より上位の状況とは違和感が感じられ、2つの遺構が重複している可能性も考えられよう。

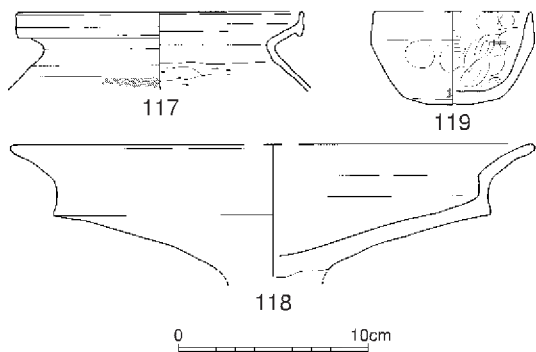
第57図は上半部での出土状況を反映したものである。破片での出土が多いが、壺120・121は頸部より上が完存していた。ミニチュアの鉢126も含まれており、意図的に埋置した状況が看取される。120～124・126は第1・2層より、125は第3層より出土している。



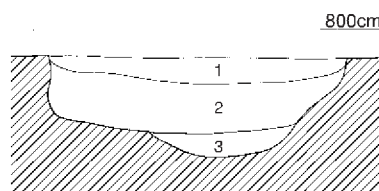
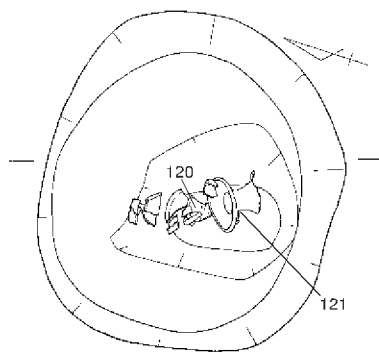
第55図 土壙36出土遺物② (1/4)



- 0 1m
- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2) (炭粒多含)
  - 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3) (黄灰色粘質微砂塊混) (2.5YR5/1)

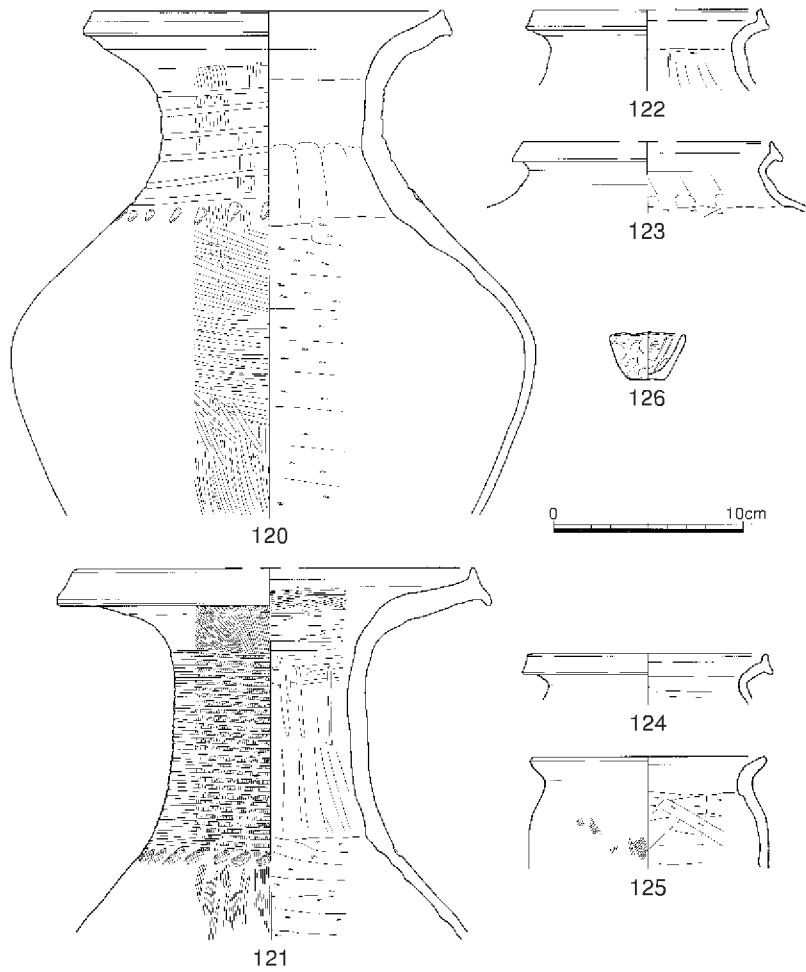


第56図 土壙37 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 0 1m
- 1 暗灰黄色粘質微砂 (2.5YR4/2) (炭粒少含)
  - 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
  - 3 オリーブ褐色粘質微砂 (2.5Y4/3)

第57図 土壙38 (1/30)



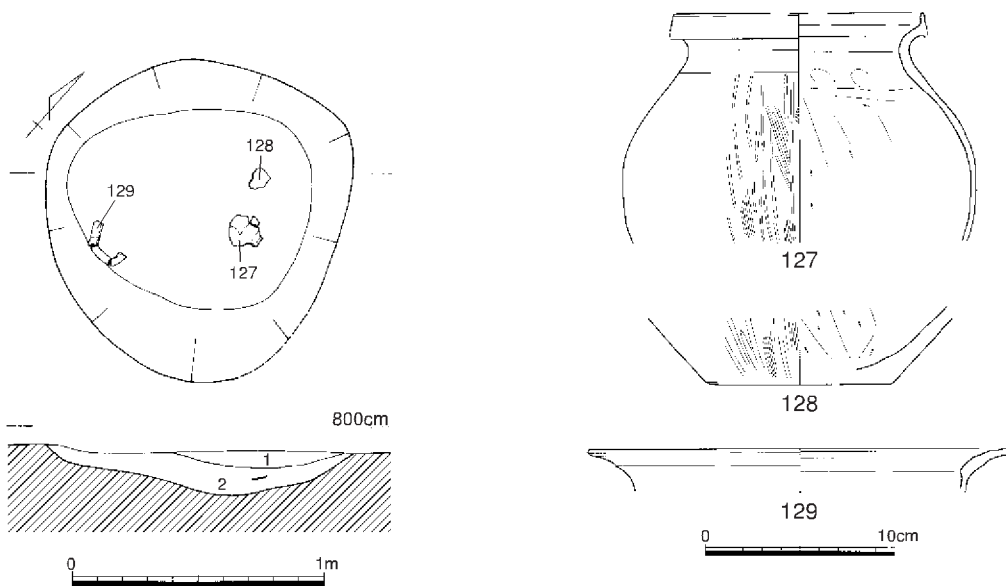
各層間での明確な時期差は認められず、弥生時代後期前半に位置付けられる。(渡邊)

土壙39 (第13・59図、図版14)

90 E の東部で、竪穴住居 2 の南東、土壙37の南西に位置する土壙である。1.29m×1.22mの不整円形を呈する。深さは17cmと浅く、底面も凹凸がある。

埋土は2層に分かれており、第1層には比較的多くの炭が含まれていた。遺物の多くは第2層から破片の状態出土している。遺物には甕127・128、高杯129があり、時期は弥生時代後期前半と考えられる。(渡邊)

第58図 土壙38出土遺物 (1/4)



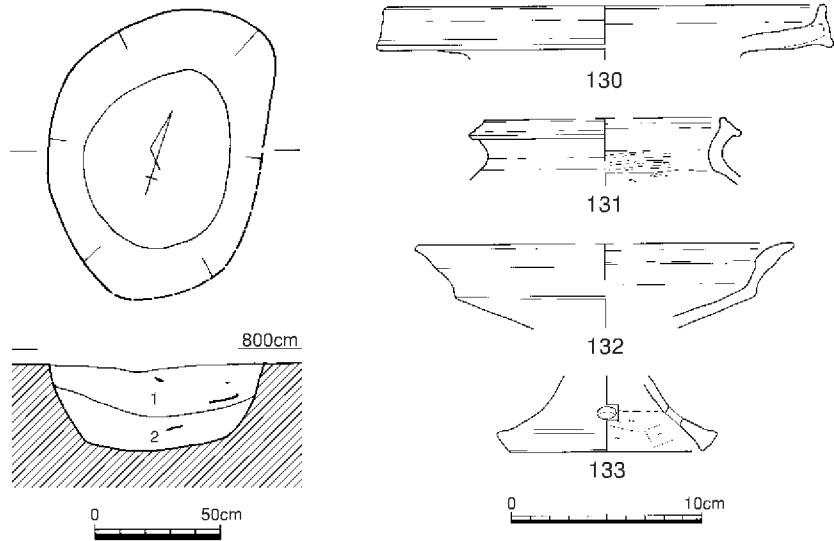
- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒多含)
- 2 鈍黄褐色粘質微砂 (2.5YR4/2)

第59図 土壙39 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙40** (第13・60図、  
図版14)

90Eで、土壙39の北西に位置し、  
竪穴住居2の東壁中央部分を切  
っている。南北1.13m×  
東西86cmの楕円形を  
呈し、深さは32cmを測  
る。

出土遺物は少なく、  
細片であったが、壺  
130、甕131、高杯132・  
133が図化し得た。時  
期は弥生時代後期前半  
と考えられる。



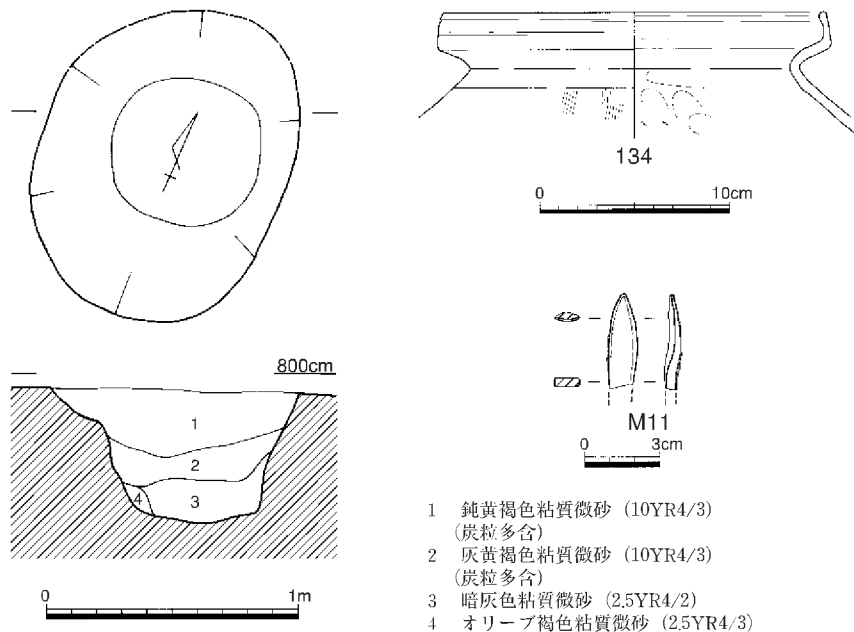
1 暗灰黄色粘質微砂 (2.5YR4/1) 2 黄灰色粘質微砂 (2.5Y5/1)  
(炭・焼土粒少含) (炭粒少含)

第60図 土壙40 (1/30)・出土遺物 (1/4)

切り合いから竪穴住  
居2より新しいと考え  
られるが、高杯の様相  
を比較すると、竪穴住  
居2とは差がなく、竪  
穴住居1よりは古く位  
置付けられる。(渡邊)

**土壙41** (第13・61図、  
図版15・54)

90Eで、土壙39の南  
西に位置する。検出面  
では上面を他遺構で削  
平されているため楕円  
形を呈しているが、底  
面は径約70cmの円形を  
呈する。さらに土壙底  
面では径25cm程度の浅



1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭粒多含)  
2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭粒多含)  
3 暗灰色粘質微砂 (2.5YR4/2)  
(炭粒多含)  
4 オリーブ褐色粘質微砂 (2.5YR4/3)

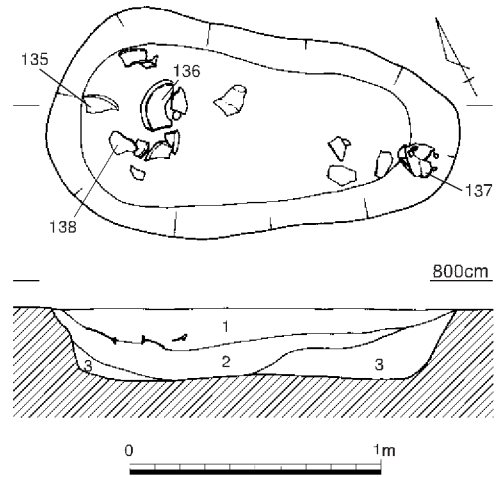
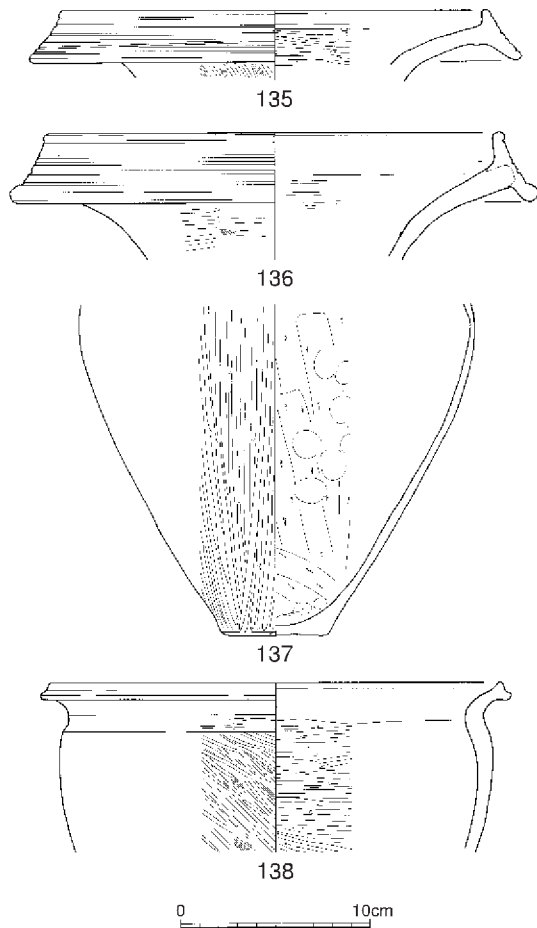
第61図 土壙41 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

いくぼみも検出されており、規模の大きな柱穴の可能性も考えられる。埋土は4層に分かれ、第1・2層には土器片・炭粒が比較的多く混在していた。

出土遺物には甕134、鉢M11があり、弥生時代後期後半と考えられる。(渡邊)

**土壙42** (第13・62図、図版15)

92E北西角付近で、土壙38の南に位置する。1.65m×90cmの東西に長い楕円形を呈する。深さ29cmとさほど深くはない。埋土は3層に分かれ、第1層には炭粒が比較的多く混在していた。



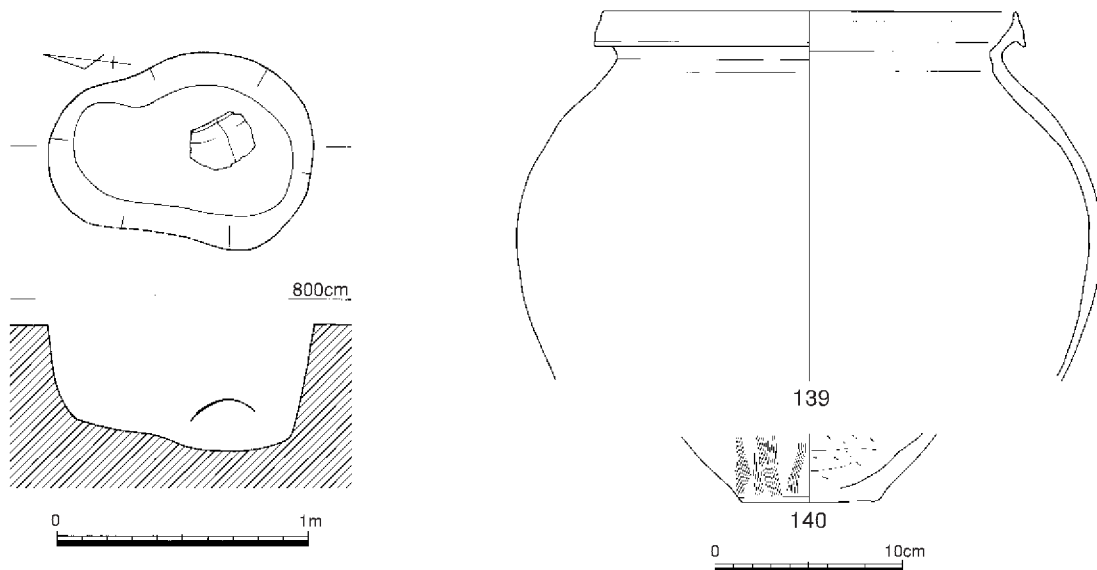
- 1 黒褐色粘質微砂 (10YR3/1)  
(炭粒多含)
- 2 黒褐色粘質微砂 (10YR3/2)  
(炭粒含)
- 3 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒僅少含)

第62図 土壙42 (1/30)・出土遺物 (1/4)

出土遺物はほとんど第1層に含まれており、壺135・136および鉢138は西端部から、甕137が東端部から破片の状態ではあるが、まとめて出土した。第3層には炭・土器共にほとんど含まれない。時期は弥生時代後期前半と考えられる。(渡邊)

土壙43 (第13・63図、図版15)

90E東端で、竪穴住居2の東、土壙42の南西に位置する。1.05m×76cmの南北に長い不整楕円形を呈する。北側が一回り小さいひょうたん形であり、北半と南半で底面の高低差が10cm近くあることから、2つの柱穴が重複している可能性も考



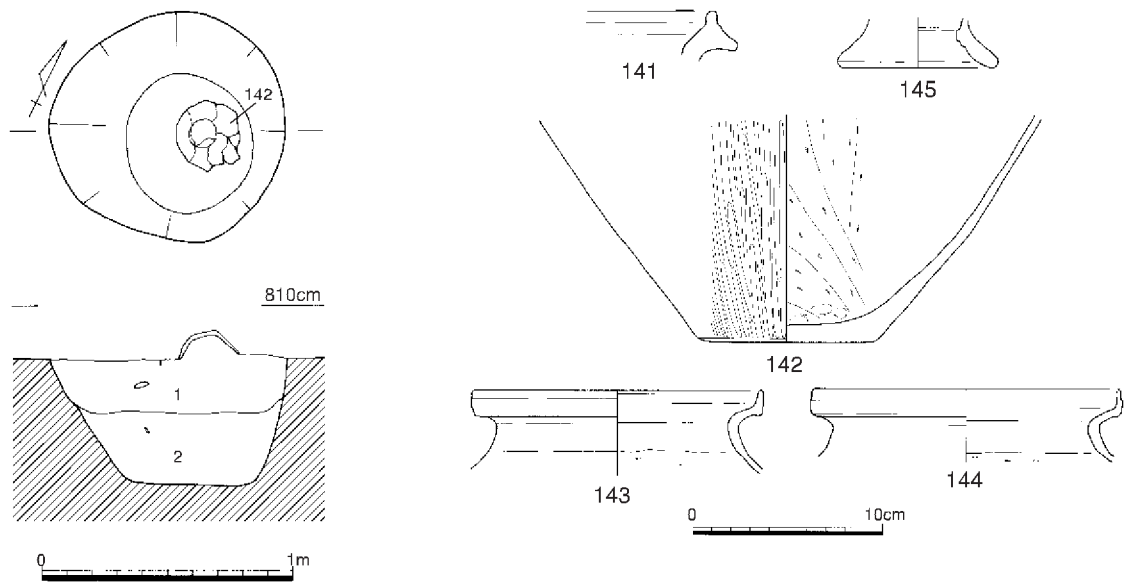
第63図 土壙43 (1/30)・出土遺物 (1/4)

えられる。遺物は土器細片がわずかに出土したのみであるが、甕139が南半の底近くから出土している。外面の摩耗が著しく器表面の調整も不明瞭だが、弥生時代後期前半に属すると考えられる。(渡邊)

**土壇44** (第13・64図)

90Eの北半で、竪穴住居1の北西に位置する。径90cmあまりの円形を呈する。断面は逆台形で、底面はほぼフラットである。埋土は2層に分かれるが、第1層には比較的多く炭・焼土および土器片を含んでいた。壺142は土壇上面で検出されている。

遺物には壺141・142、甕143・144、製塩土器145などがある。壺、甕ともに口縁端部の上方への拡張が認められることから、弥生時代後期前半でも新しい時期に比定できよう。(渡邊)



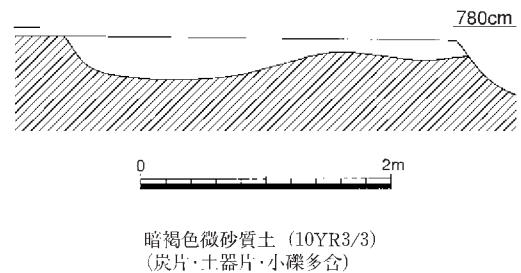
1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3) (炭粒多含・焼土粒含)    2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2) (炭粒少含)

第64図 土壇44 (1/30)・出土遺物 (1/4)

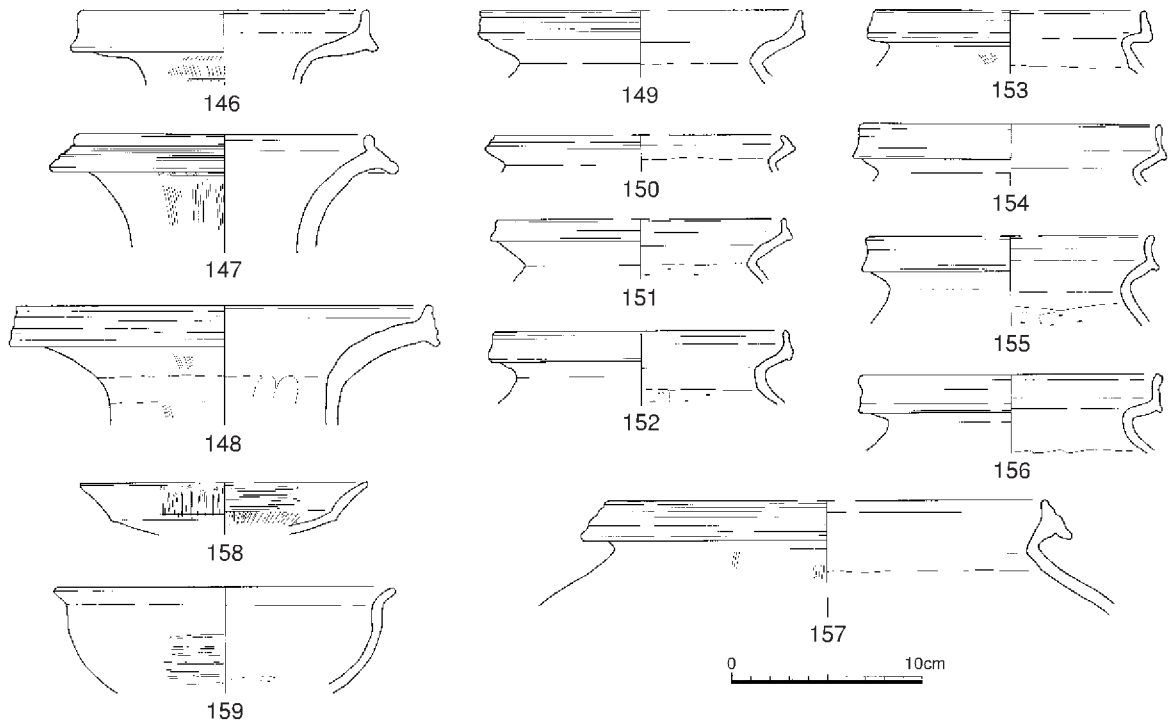
#### 4 窪地

##### 窪地1 (第12・65・66図)

78Gで検出した窪地状の遺構である。後世の削平や調査区境のため、残存していたのは西辺の一部で、全形は不明である。残存長で3.1m、深さは最大で35cmを測るが、底部は東に向かって上がり浅くなる。埋土は炭片や小礫を含む暗褐色微砂質土で土器片を伴って出土しており、いずれも破片ではあるが壺146~148、甕149~157、高杯158、鉢159がある。これらの出土遺物は弥生時代中期末葉~後期後葉のもので、時期幅をもつが、窪地が徐々に埋没した過程を示すものと考えられる。(石田)



第65図 窪地1 (1/60)



第66図 窪地1出土遺物 (1/4)

### 5 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第67~69図、図版40・52)

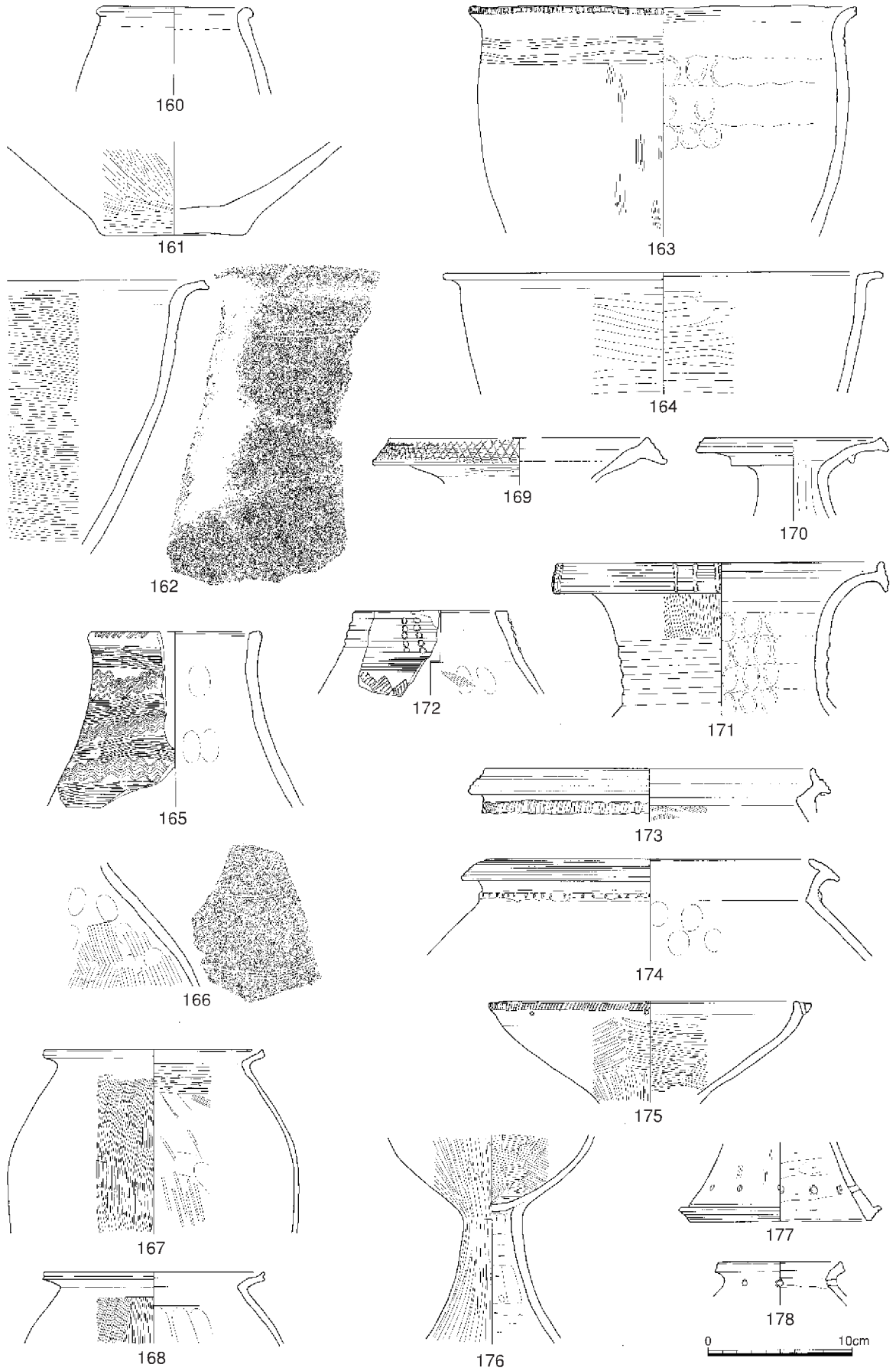
南溝手遺跡からは遺構には伴わないものの弥生時代前期の古段階と思われるものから、後期末に至るものまで出土している。

前期に遡る160~164はいずれも遺跡の西端に所在する微高地から出土したものである。壺160は「ハ」字状にすぼまる頸部に、口縁部はわずかに外側に屈曲し端部を丸く収めるもので、内外面にはヨコナデが施されている。焼成の良好な破片であり、古段階に遡るものと思われる。甕162には浅い沈線3条が、甕163には沈線4条と、端部には刻み目を巡らすものであった。甕164の口縁部は逆「L」字状を呈し、新段階のものであろう。

中期の土器165~178は、前葉を示す壺165・166・甕167・168・高杯176などが、中葉を示す壺169・高杯175などが、後葉を示す壺170~172・甕173・174・高杯177・壺?178などが出土している。165の口縁端部には刻み目が巡り、頸部には櫛描き直線文と波状文が交互に施され、後葉の172の口縁下部に巡る凹線文上には円形浮文が配され、その下部には5条の沈線と鋸歯文が施されている。

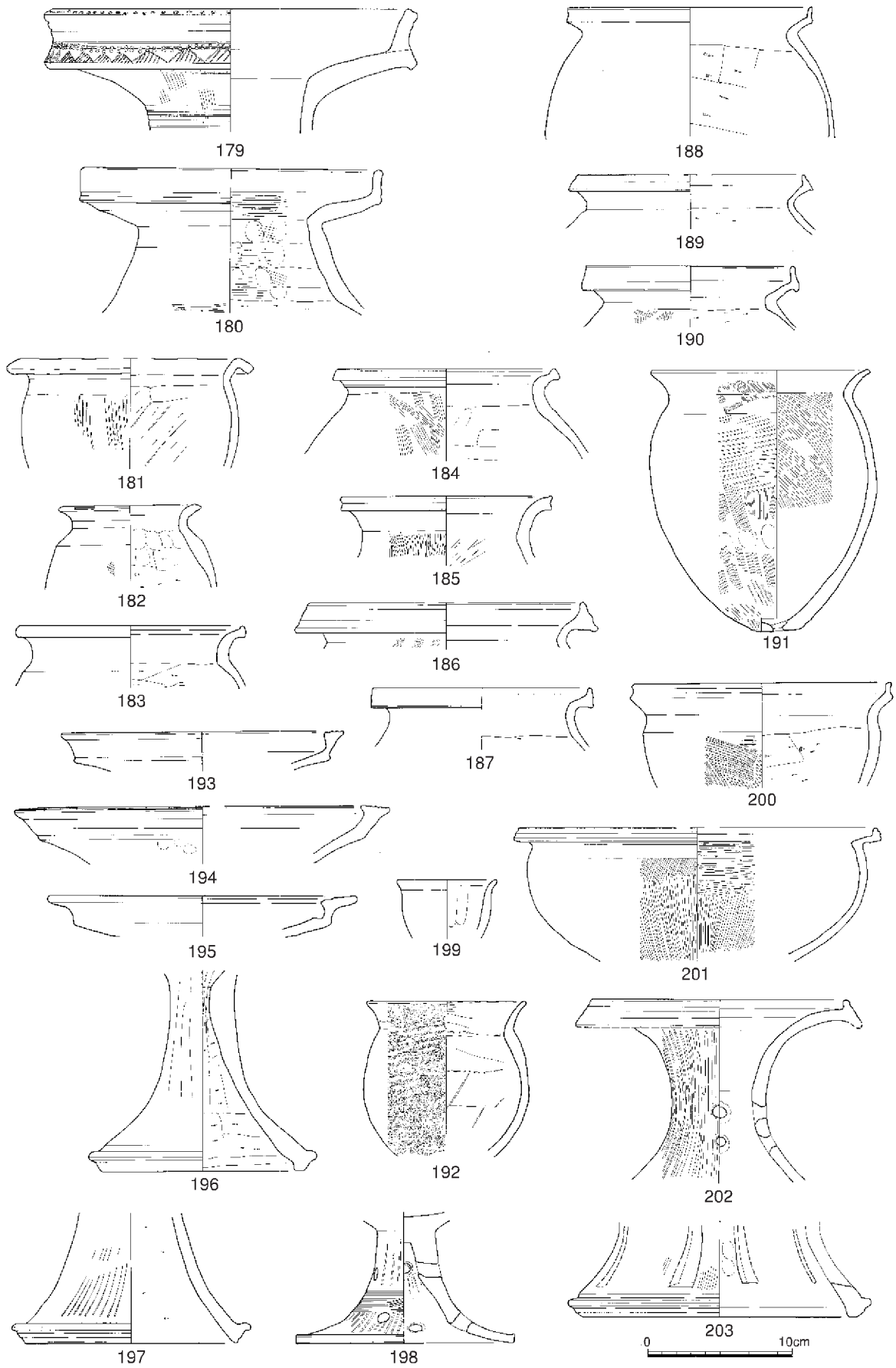
後期の土器179~203には、前半の甕181~186・高杯193~198・鉢201・器台202・203、後半の壺179・180・甕188~192・鉢199・200などがある。前半の高杯は口縁端部が肥厚し面をもつ193や、斜め外方に拡張する195などがある。また、器台には胴部がすぼまり、大きく外反して開く口縁に続く202や、長方形透かし孔が巡る203などがある。後半の壺179の頸部には沈線が、口縁部には竹管文および鋸歯文が巡る。また、壺180・甕191・192は後期末のもので、甕はいずれもタタキが施されており、191は甑として利用されたものである。

石器はいずれもサヌカイト製で、石鏃S3~S8・打製石包丁S9~S13・U.F.S14などである。石鏃はS3(凹基式)の他は平基式で、S9には珪酸の付着が顕著であった。(江見)

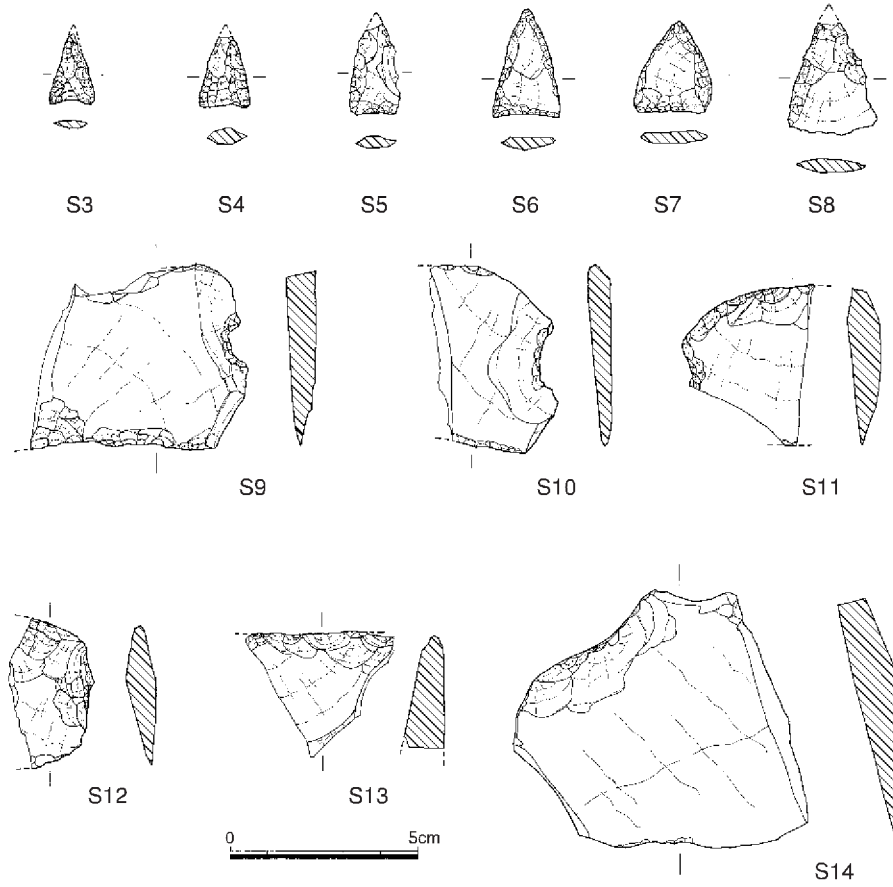


第67図 柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4)





第68図 柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/4)



第69図 柱穴および遺構に伴わない遺物③ (1/2)

### 第3節 古墳時代の遺構・遺物

#### 1 概要

古墳時代の南溝手遺跡は、弥生時代と同様の地形を踏襲しており、中央部を東西方向に流れる河道と、その両側の2つの微高地からなる。

西側の微高地は北から舌状に延びる微高地の先端部で、弥生時代には中期の袋状土壙などが確認されていたが、古墳時代の遺構は皆無であった。しかし、河道上面ではあたかもこの微高地部から投棄されたような状況で古墳時代前期の土器溜まりが検出されており、また微高地から西に向けて下がる堆積土中には古墳時代後期の須恵器も含まれるなど、本来はこの微高地にも古墳時代以降の集落が形成されていた蓋然性は高い。

東側の微高地は河道の南岸にあたり、須恵器を伴う古墳時代後期の竪穴住居が5軒、土壙2基、溝2条が検出された。竪穴住居のうち、最も新しいと思われる竪穴住居6のみカマドが確認されており、カマド導入期の様相の捉えられる資料として注目される。

さて、第70図に微高地の下がりを破線で示しているが、北への下がりは弥生時代の河道流路を踏襲したもので、現在の地形にも反映されている。しかしながら東側の下がりの堆積状況は湿地状を示し、河道が南に回り込んでいなかったと推察される。なお古墳時代後期の明確な流路は捉えられていないが、トレンチ断面での堆積状況や土器の出土状況から、後述する古代の河道のように微高地縁辺を取り巻くように北に屈曲していたのではないかと想定される。東に隣接する窪木遺跡では竪穴住居や掘立柱建物が多く営まれており、これらの状況を考慮すると、溝2は微高地と低位部の間に掘削された排水路として位置付けられよう。(渡邊)

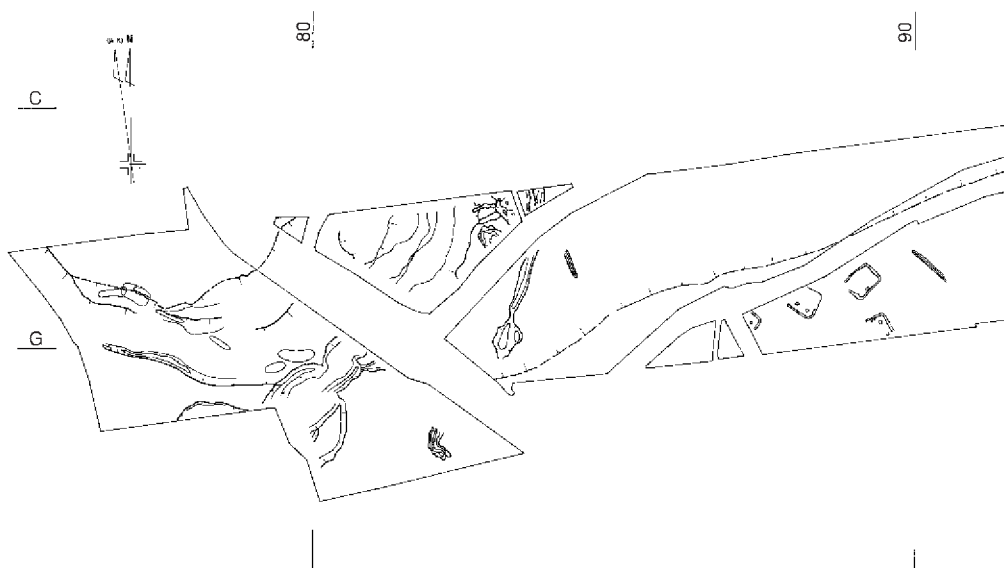
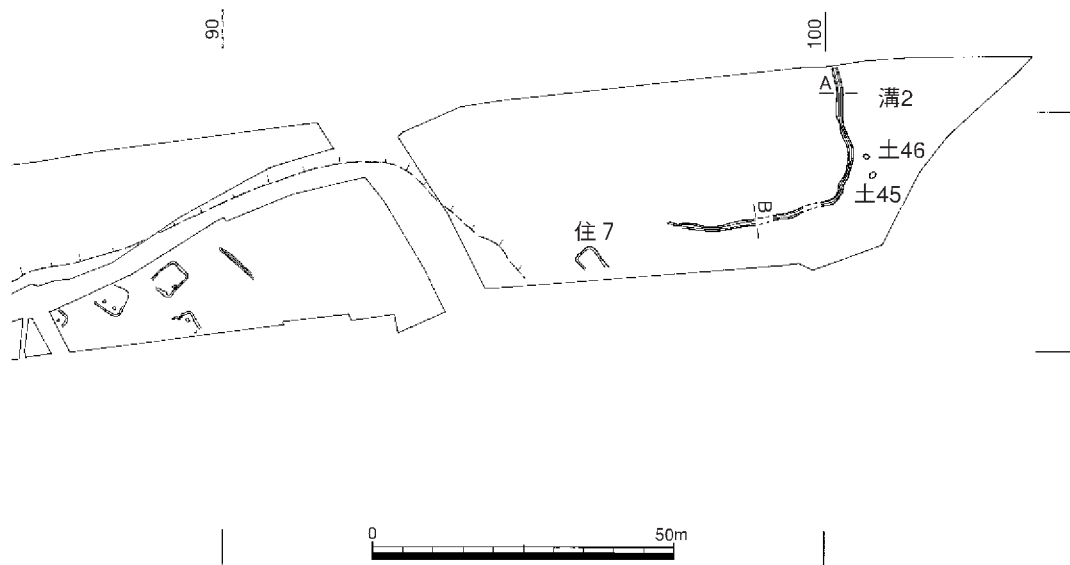




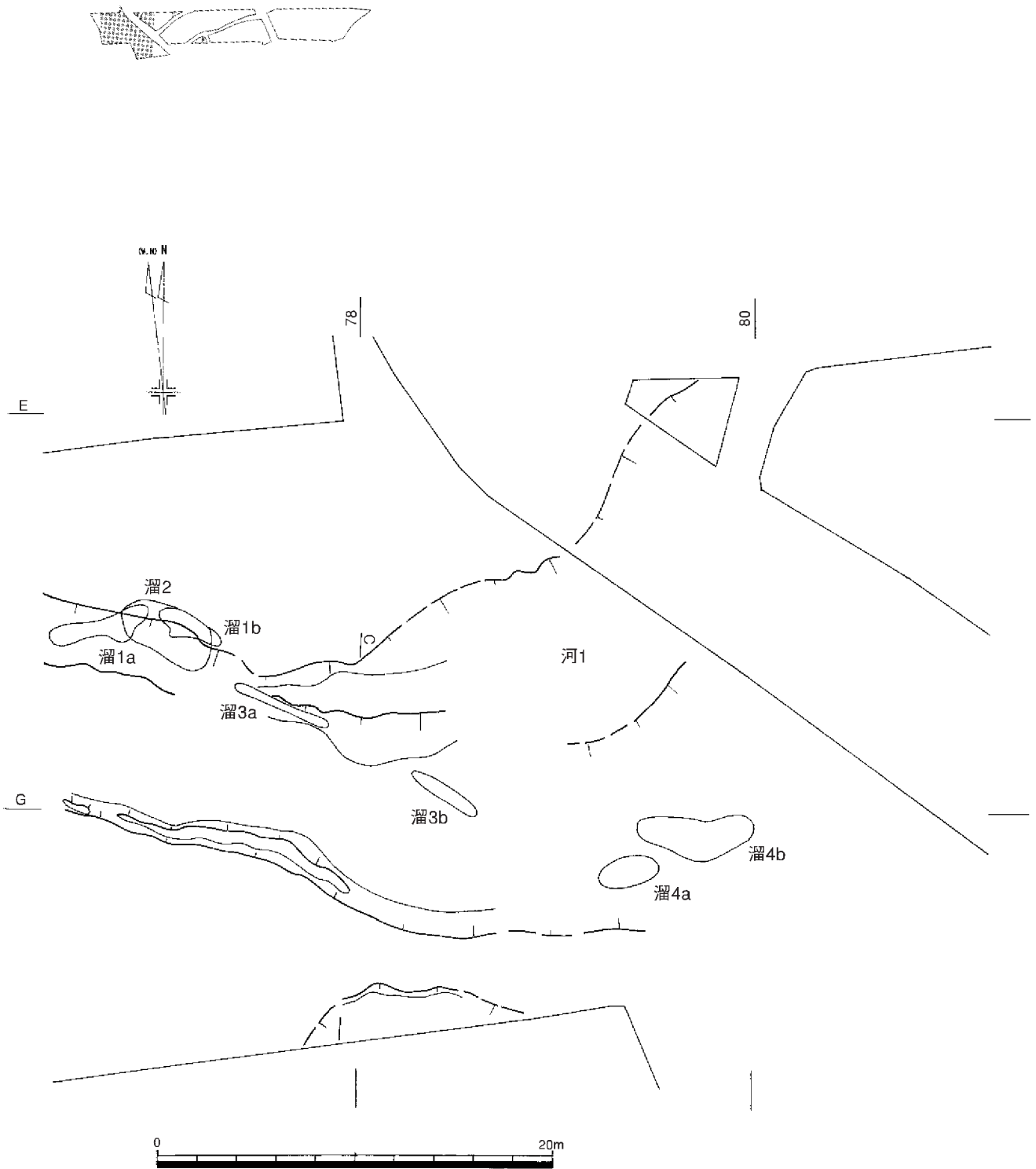
写真9 土器溜まり2土器出土状況（南東から）



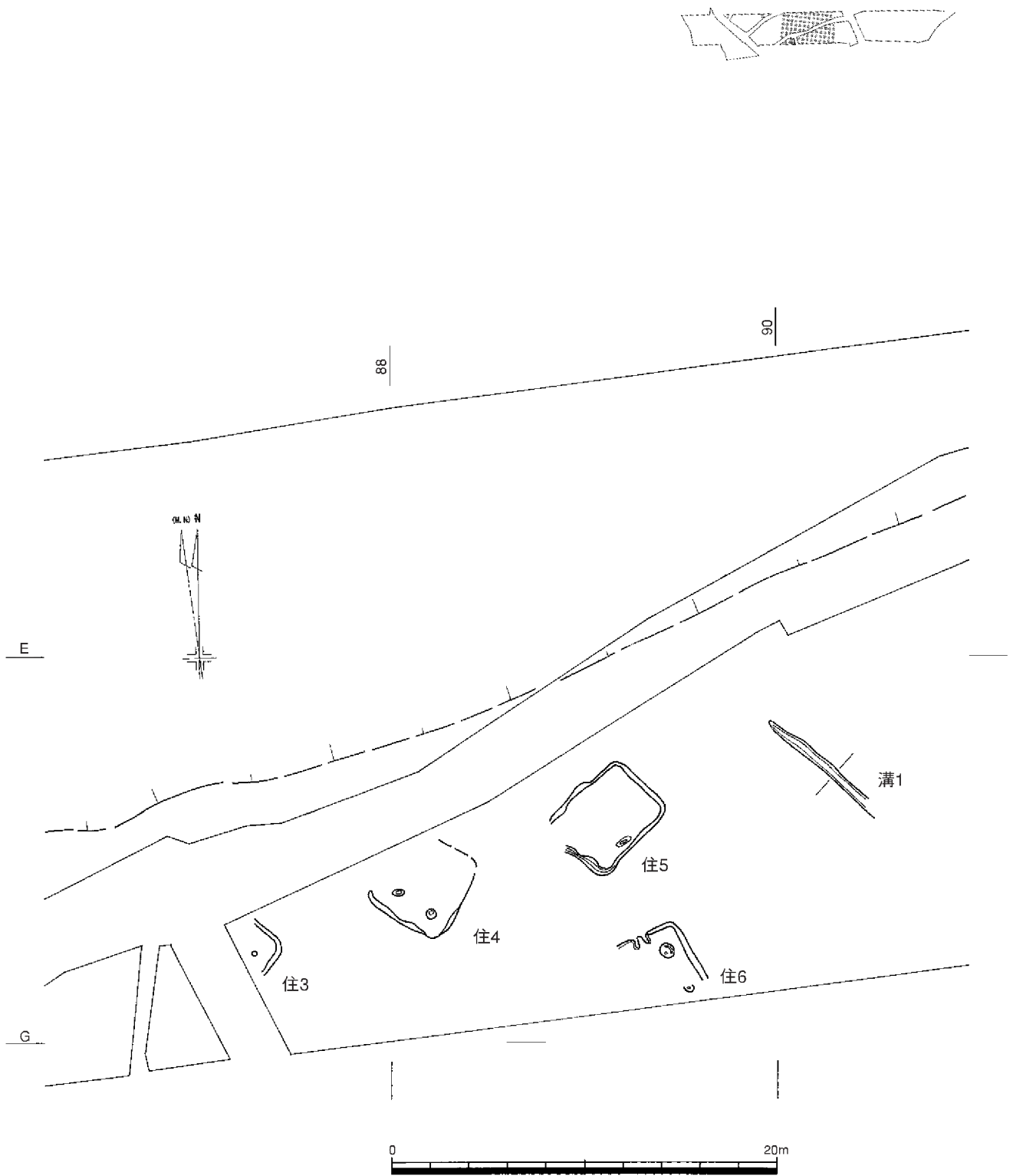
写真10 竪穴住居6作業風景（東から）



第70図 古墳時代～古代遺構全体図（1/1,250）

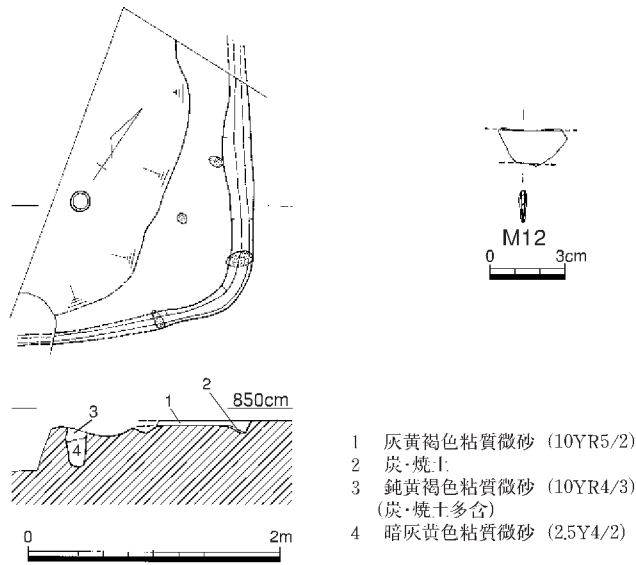


第71図 古墳時代主要遺構図① (1/300)



第72図 古墳時代主要遺構図② (1/300)

2 竪穴住居



第73図 竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/3)

竪穴住居 3 (第72・73図、図版16・54)

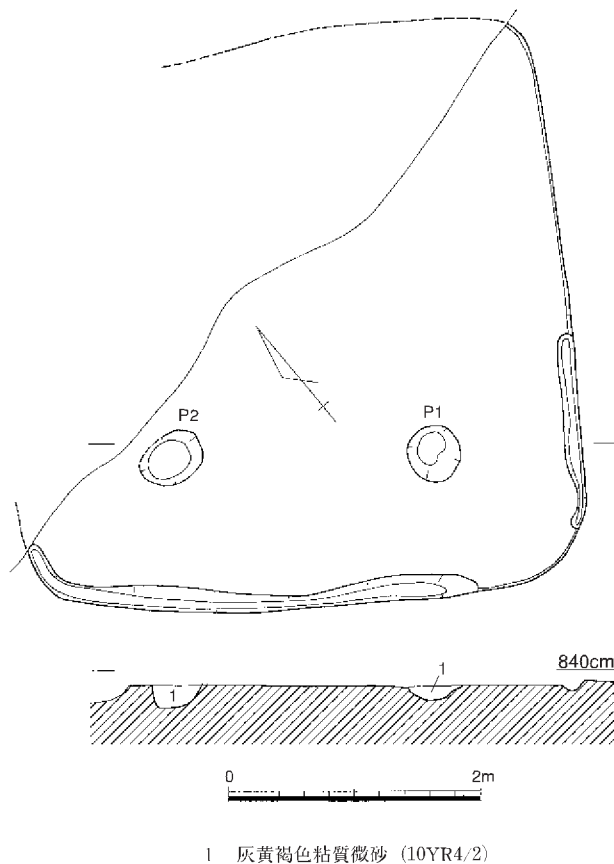
86Eに位置する。水路や畔路により大部分が調査できず、南東角を検出したに過ぎない。またその大部分が近世以降の削平を受けていたため全容は明らかでないが、隅丸方形で、4本柱の竪穴住居と推察される。

検出面からの深さは4～5cmしかないが、床面近くに炭・焼土が堆積しており、屋根垂木と思われる炭化材も、壁体溝上で検出されている。焼失住居の可能性が高い。

遺物は刀子らしきM12のほかは土師器細片がわずかに出土したのみで断定できないが、周辺の状態より古墳時代後期に属すると考えられる。(渡邊)

竪穴住居 4 (第72・74図、図版16)

88Eの南東に位置し、住居北半分を近世溝30に切られて検出された。平面形態隅丸方形を呈すものの、上面も後世の削平を受けており、わずかに住居の掘り方の検出と壁体溝の一部、柱穴2個を検出するにとどまった。規模は一辺約4.5mを測り、想定される床面積は約20㎡を測る。主軸はN-50°-Eを示す。主柱は4本からなると思われるが、2本のみ検出し得た。柱穴は壁から約1mの位置に穿たれ、径は約50cmを測るものの深さは10～20cmと残りは悪い。柱穴間距離は2.1mを測る。遺物は皆無であったが、周辺の状態から、後期の住居と思われる。(江見)

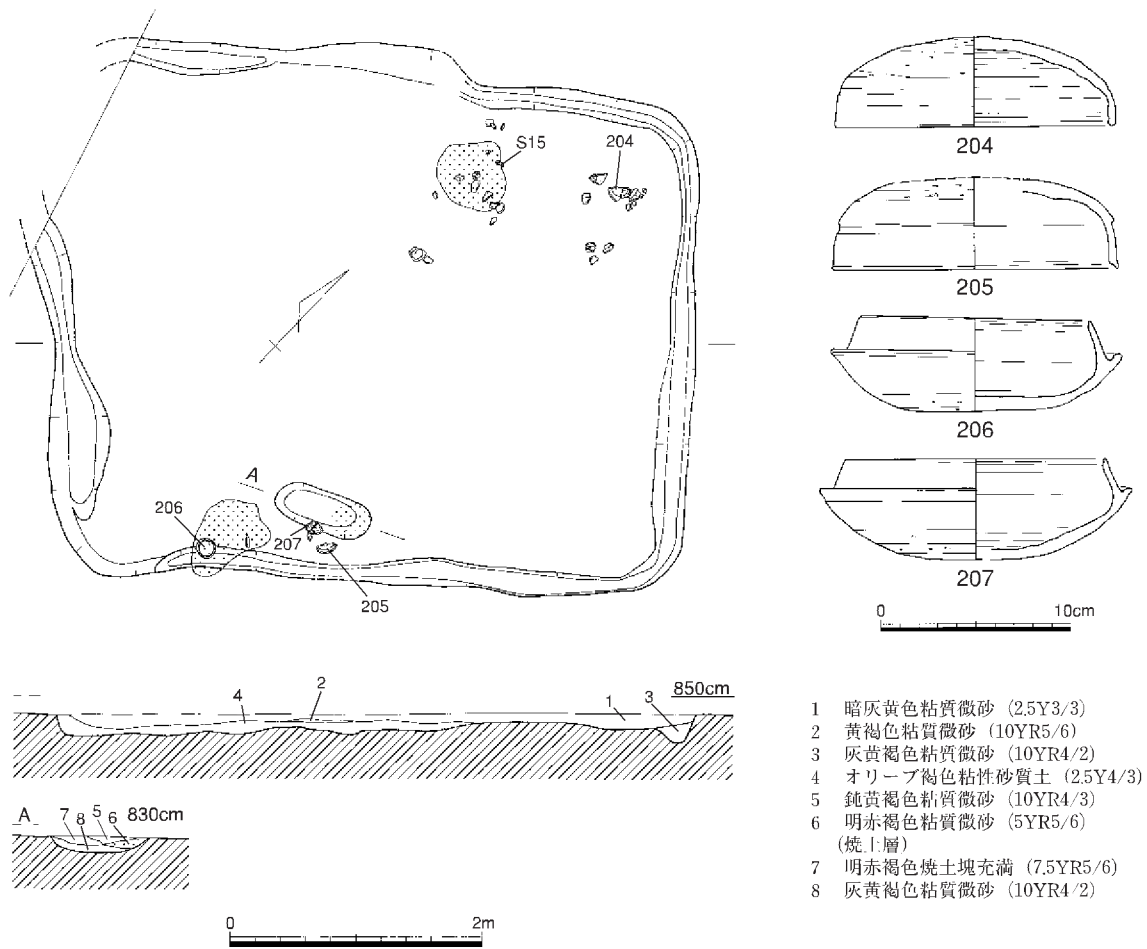


第74図 竪穴住居 4 (1/60)

竪穴住居 5 (第72・75図、図版16・41)

竪穴住居 4の東10mに位置し、住居の西隅を近世溝32に切られて検出された。平面形態は不整長方形を呈し、西

辺がやや歪な形状を示している。規模は5×4m、推定床面積は約20㎡を測る。主軸はN-50°-Eを示すものの支柱穴は不明であった。床面には南北2か所に被熱面が認められ、南の被熱面の東からは焼



第75図 竪穴住居5 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

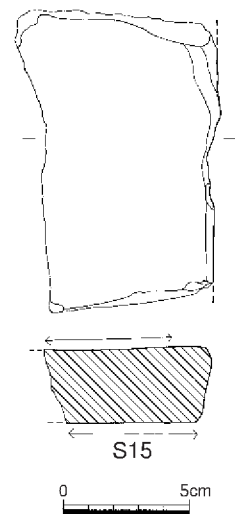
土層の認められた楕円形を呈す浅い土壇が検出されている。

遺物は南の被熱面に接するように正位置で出土した杯206をはじめ、蓋204・205・杯207などの須恵器が、床面に散在する状況であった。他に、砥石S15も北の被熱面から出土している。これら遺物の特徴から当住居は後期、MT15～TK10期に廃絶したものであろう。(江見)

竪穴住居6 (第72・76～78図、写真10、図版17・41・52)

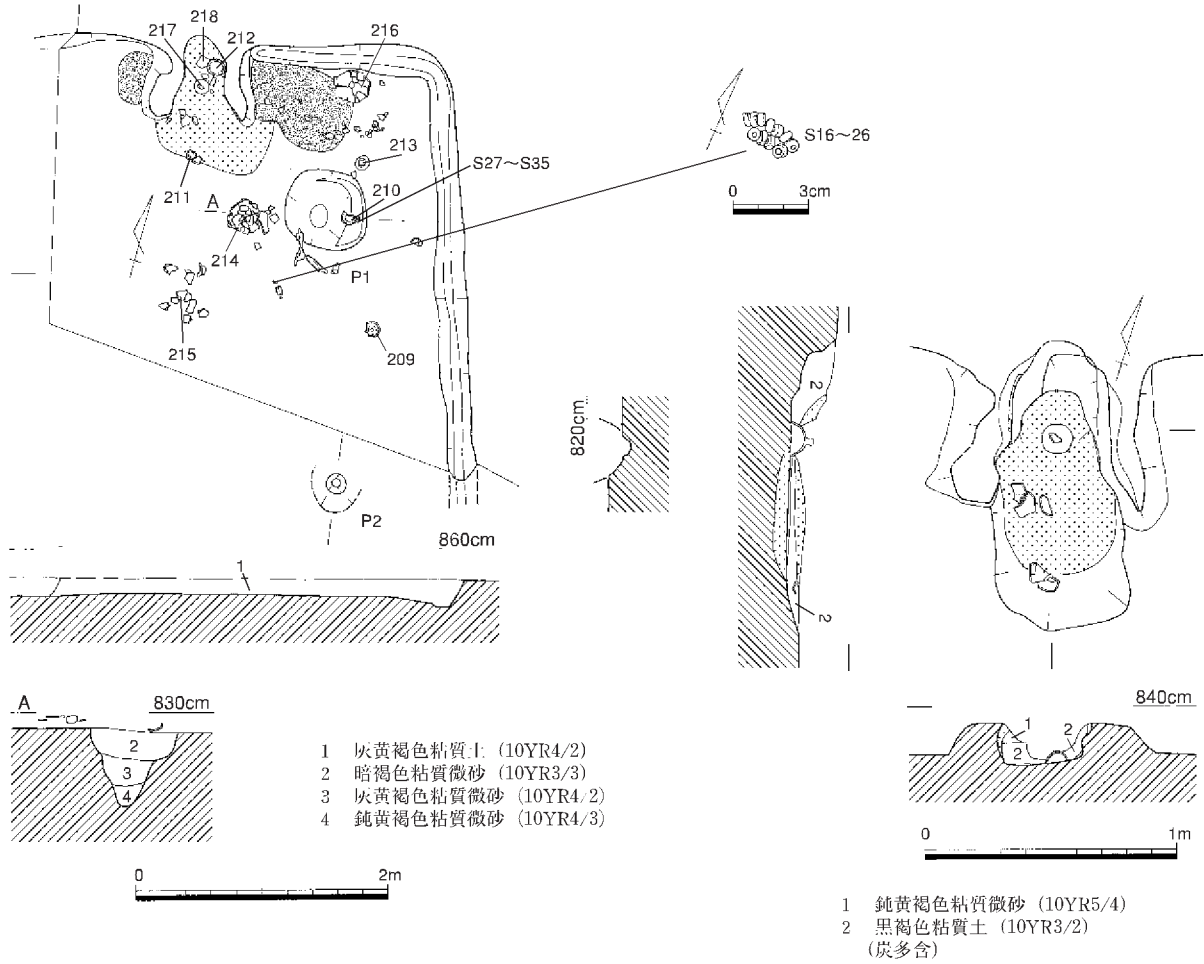
88Eの、竪穴住居5の南に位置する。西側を近世の溝32に切られ、南側は調査区外となるため、全体の1/4程度しか検出できていないが、方形を呈する4本柱の竪穴住居と推察される。北辺にカマドを有し、カマド周辺には著しく焼土・炭が散布していた。

遺物の多くはカマド周辺および住居北東部分に集中し、当時の状況を比較的良好にとどめていた。須恵器杯蓋212はカマド掛け口から中に落ち込んだ状態で出土している。高杯217はカマドの支脚に転用さ

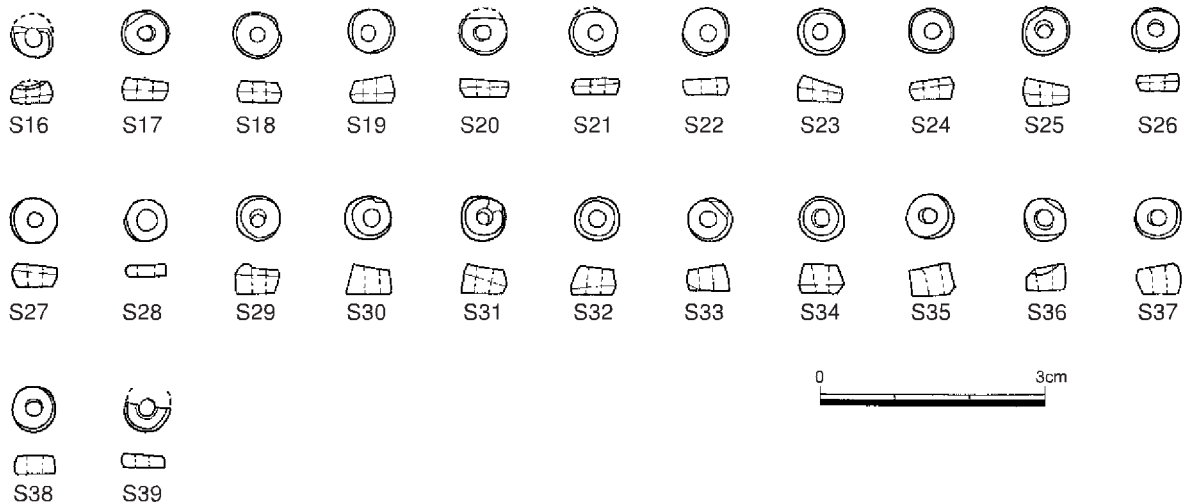




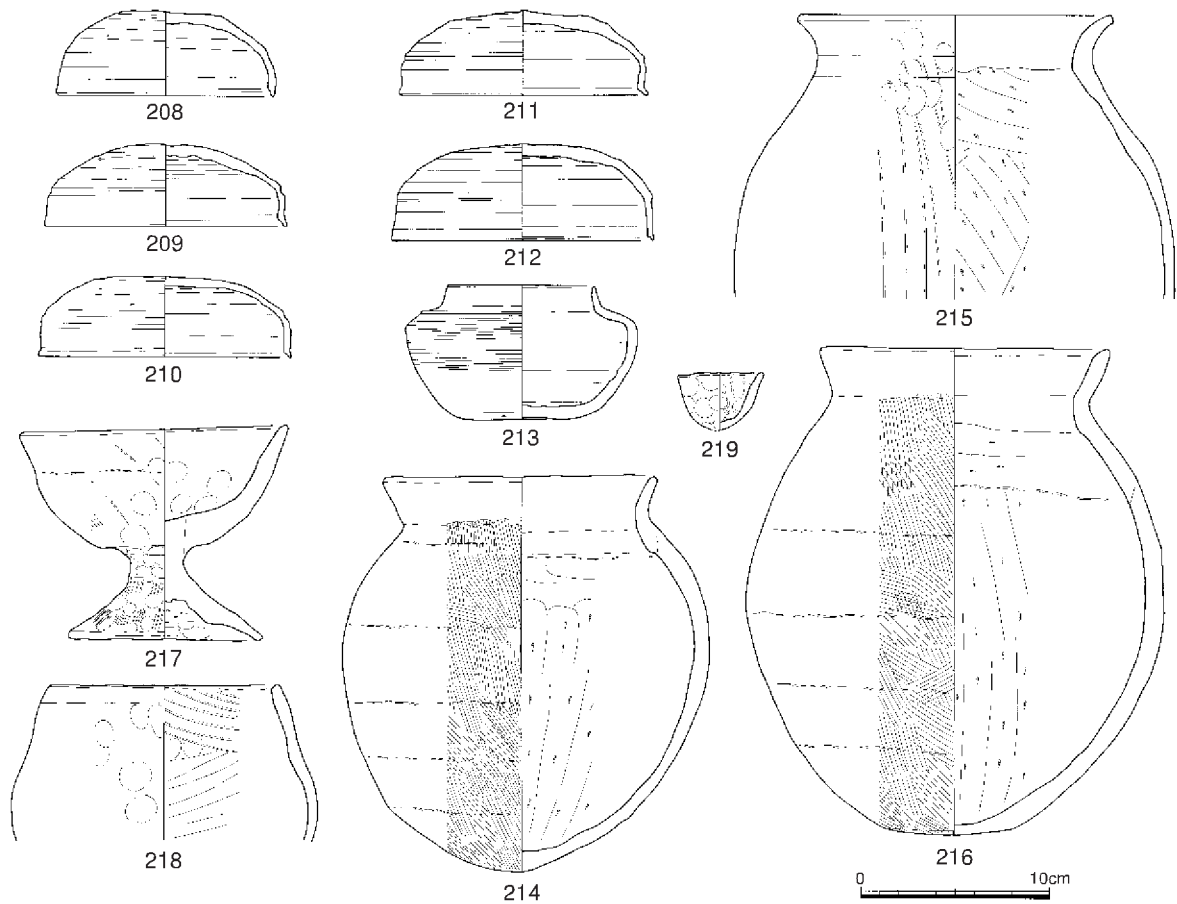
れたものである。高杯前方が特によく焼けており、燃焼部と考えられる。製塩土器218はカマド奥および袖東側の破片が接合しており、カマド掛け口上部に置かれていた可能性がある。白玉は24個中11個が連なった状態で出土した。須恵器の特徴から竪穴住居5より古く位置付けられる。(渡邊)



第76図 竪穴住居6 (1/60)・玉出土状況 (1/3)・カマド (1/30)



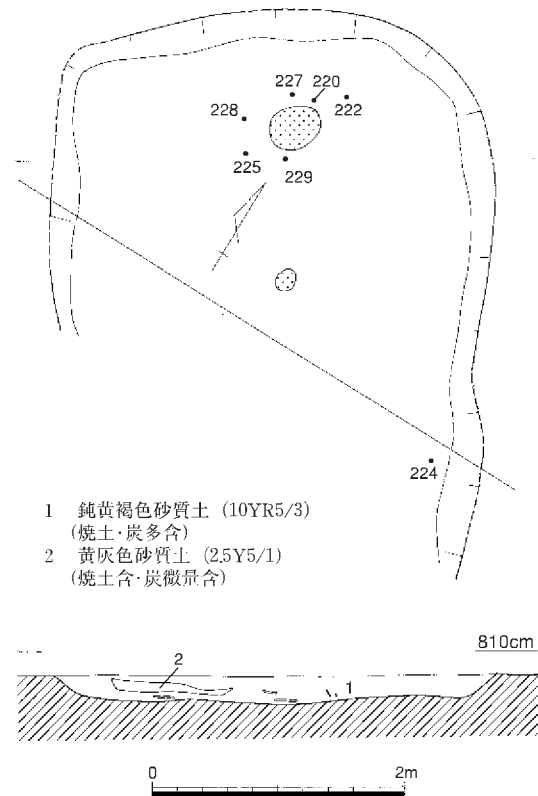
第77図 竪穴住居6 出土遺物① (1/1)



第78図 竪穴住居6出土遺物② (1/4)

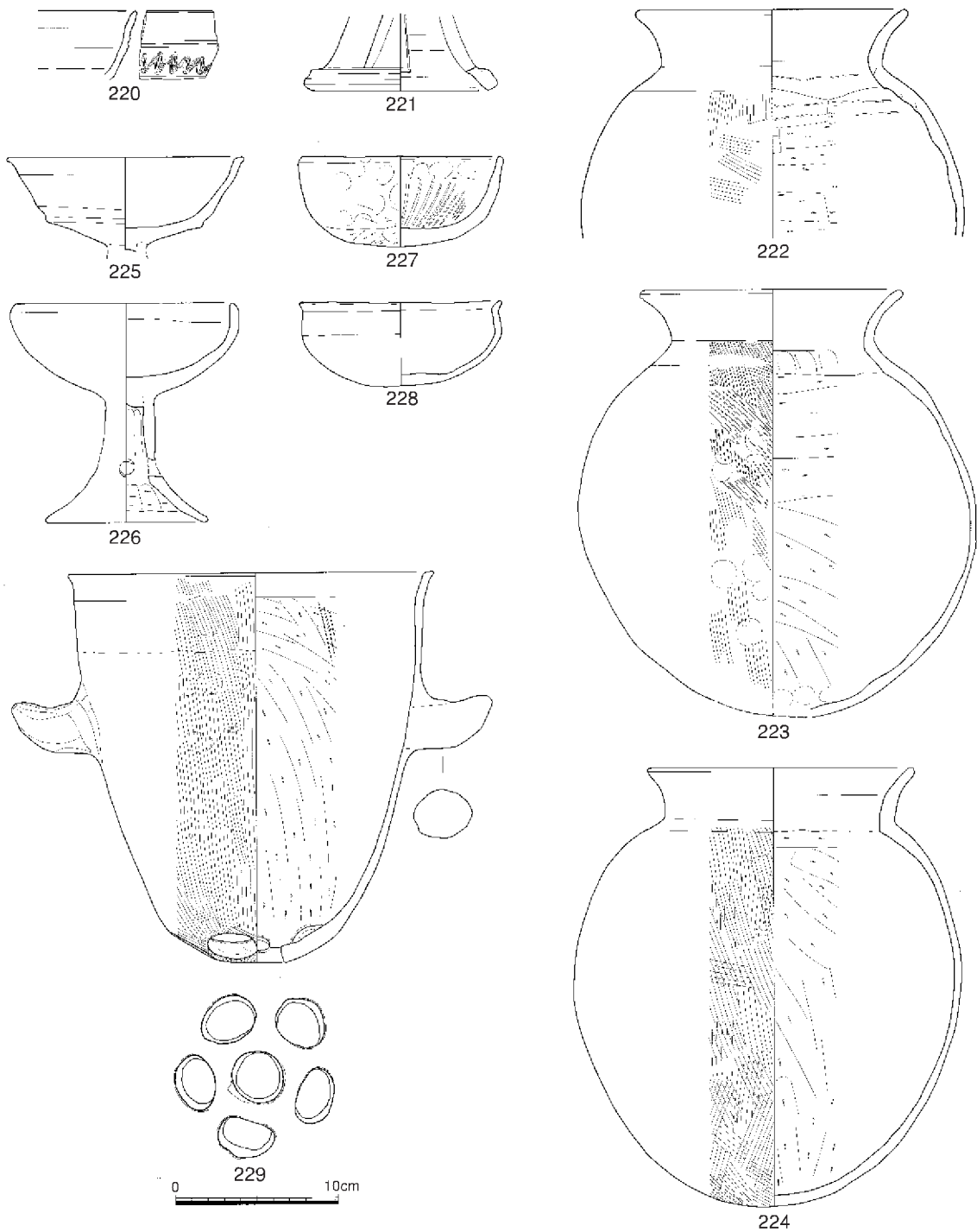
竪穴住居7 (第70・79・80図、図版17・42)

96Eの北西角に位置する。当該箇所は弥生時代以来の微高地から東に一段下がった低位部に当たる。平面形態は不整の隅丸長方形を呈し、南半部は調査区外に延びている。推定される規模は4.5×3.5m、床面積16㎡余りを測る小規模なもので、支柱および壁体溝は検出されなかったが、被熱面2か所が検出された。北側の被熱面は径約40cmを測り、その位置から造り付けカマドの可能性も考えたが、北壁から被熱面の中心までの距離約1mと長すぎるように思われた。遺物は北の被熱面を中心として径約80cmの範囲から須恵器高杯220をはじめ221、土師器高杯225・226・鉢227・228・甕222・223・甕229などが集中して出土する一方、南東部からも甕224が出土している。また、埋土中から鉄滓の小塊数個112gも出土している。甕が古い様相を残すものの、TK23の範疇か。(江見)



- 1 鈍黄褐色砂質土 (10YR5/3)  
(焼土・炭多含)
- 2 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)  
(焼土含・炭微量含)

第79図 竪穴住居7 (1/60)



第80図 竪穴住居7出土遺物 (1/4)

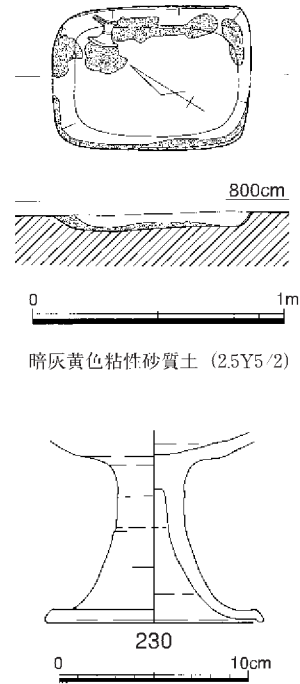
### 3 土壙

#### 土壙45 (第70・81図、図版18)

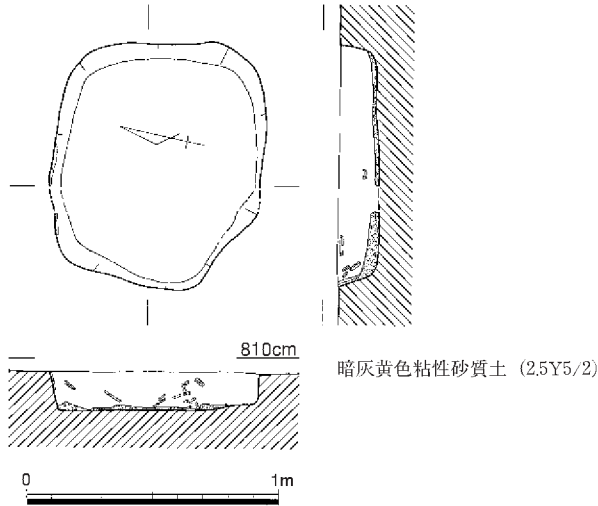
100Cの西側中央付近で検出した。底面は平坦で炭が堆積しており、埋土中にも炭および焼土塊が多く混じっていた。本来は、近接する土壙46と同様の規模・構造の土壙であったと思われる、その役目を終えた後に攪乱をうけたと思われる。時期は土壙46同様、TK217古段階であろう。(松尾)

土壙46 (第70・82図、図版18)

100 Cの西側中央付近で、先述の土壙45北西に位置する。底面には炭の堆積があり、側面内側は著しく被熱していた。



第82図 土壙46 (1/30)・出土遺物 (1/4)



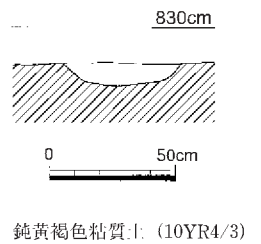
第81図 土壙45 (1/30)

土壙45とは異なり攪乱をうけた様子はなく、側面内側の被熱面が厚さ2cm程度残っていた。出土遺物は230の須恵器高杯のみで、底面よりやや高い位置で出土している。時期はTK217古段階。(松尾)

4 溝

溝1 (第72・83図)

90 Eの北西部から検出された、北西から南東に向かう浅い溝である。幅約50cm、深さ約10cmを測り、長さ約8mを検出したが、それより南は判然としなかった。遺物はわずかに土師器細片が出土

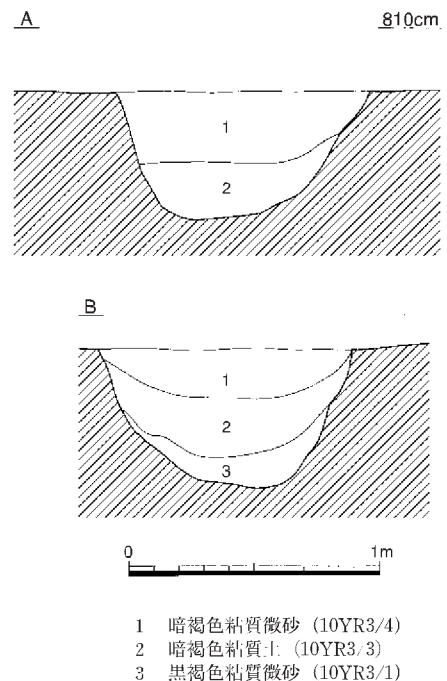


第83図 溝1 (1/30)

するのみであったが、竪穴住居5の東辺と同様の方向を示していることから、この時期の区画溝と判断した。(江見)

溝2 (第70・84図、図版18・19)

96 Cから100 Aに位置し、南西から北方向に向かって流れる溝である。幅は約1m、深さは約50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。南西端ははっきりしないが、ここより西には延びないと思われる。出土遺物は極端に少なく、細片のみであった。古墳時代後期の範疇であろう。(松尾)

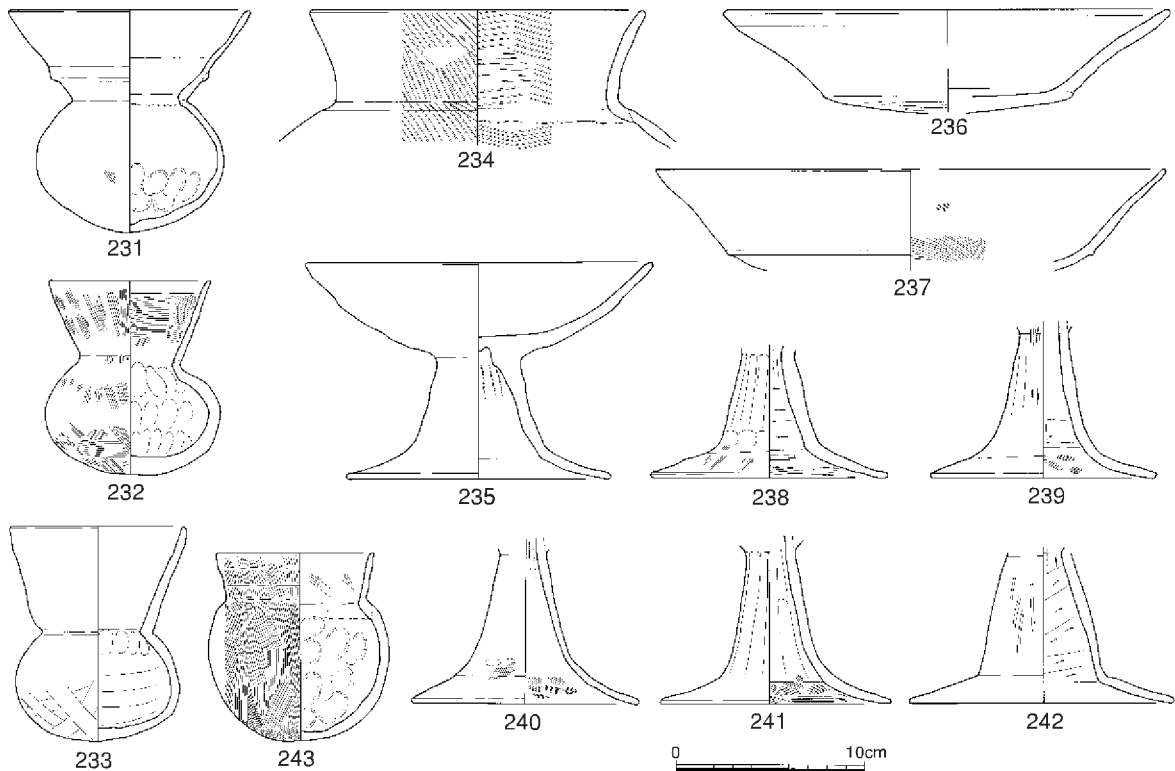
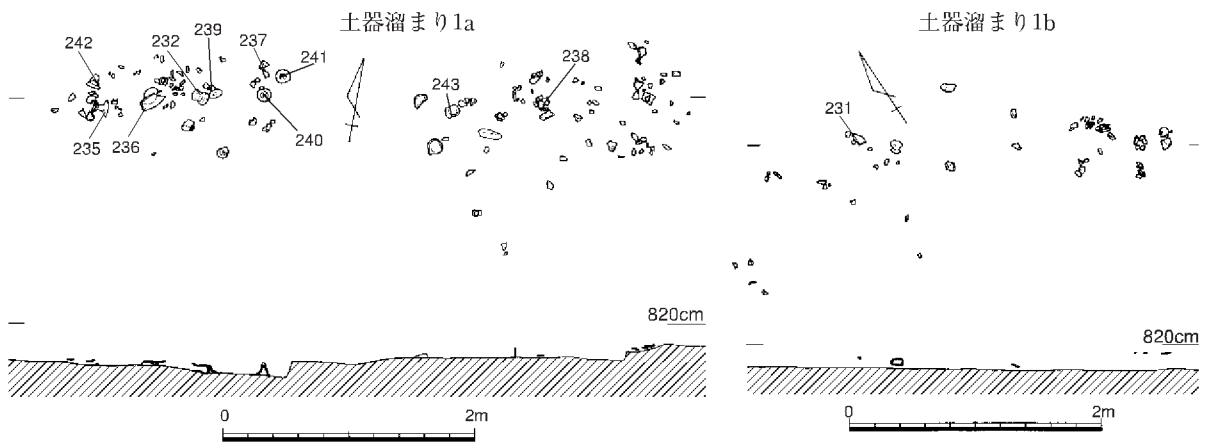


第84図 溝2 (1/30)

## 5 土器溜まり

### 土器溜まり1 (第71・85図、図版43)

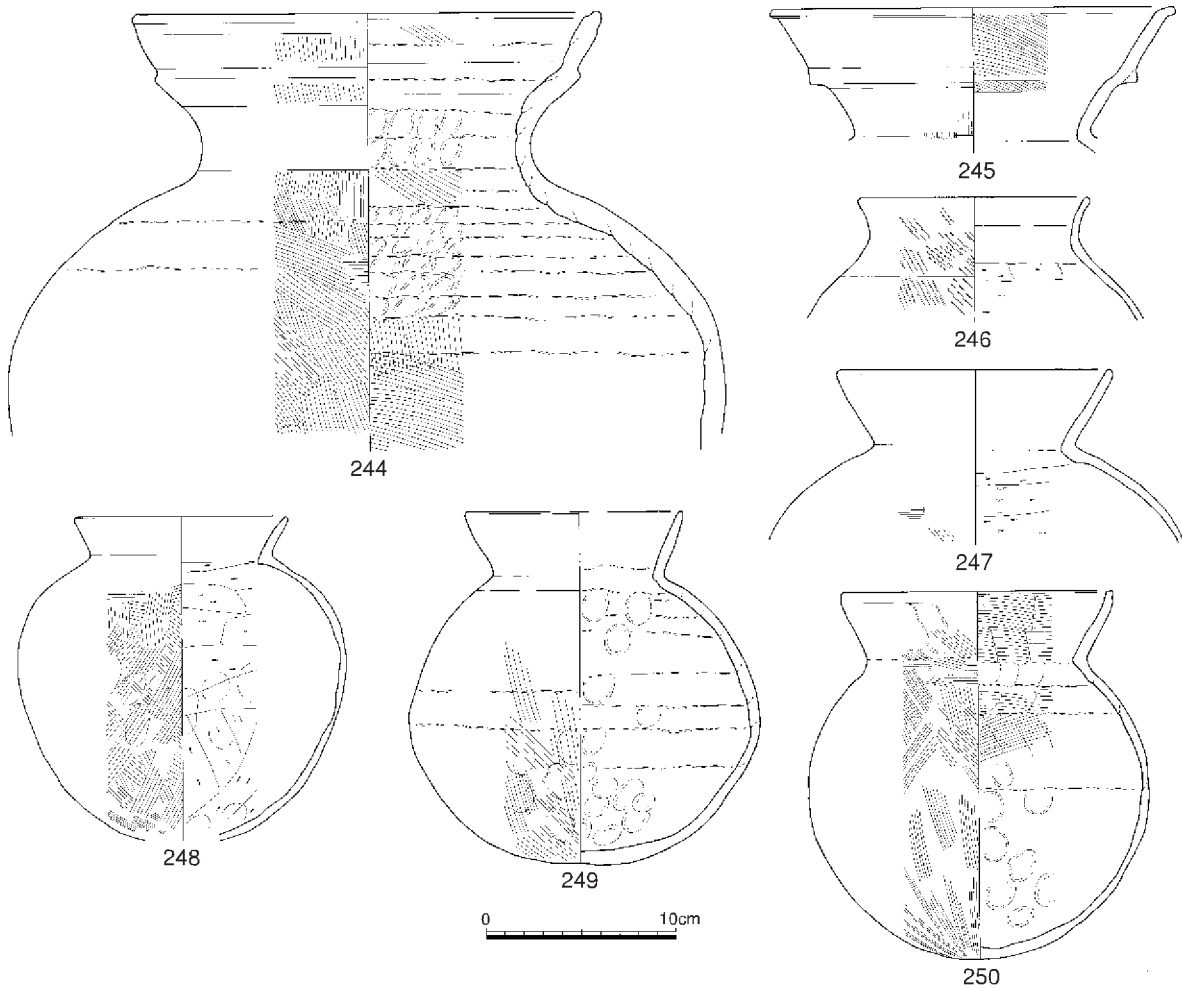
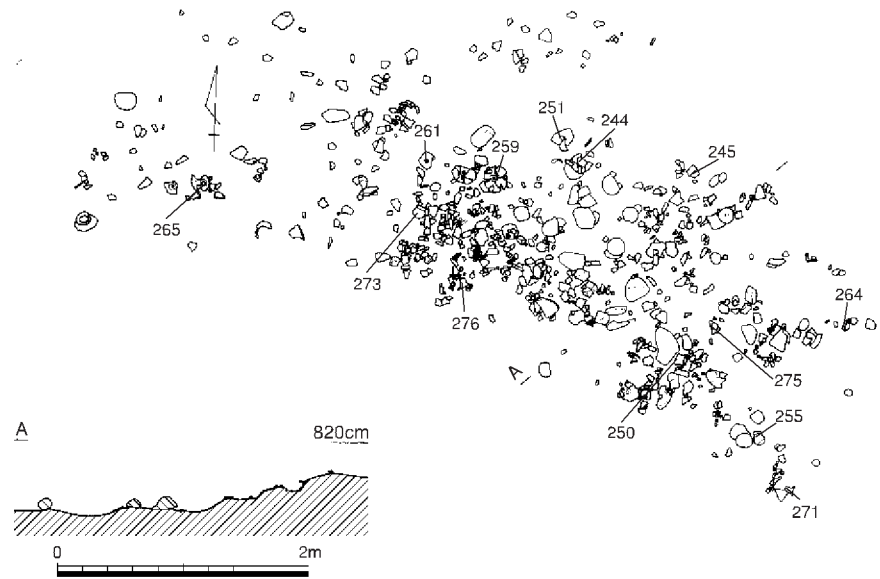
76Eで検出した土器溜まりで、微高地から低位部への下がり際の肩口で多くの土器が集中して検出された。大きく東西の二群に分かれるが、長さ9m、幅1.4mの範囲に及んでいる。出土した土器は完形に近いものを多く含んでおり、一括して投棄された状況を呈している。図示できた土器には小型丸底壺231～233、甕234、高杯235～242、鉢243があり、器種が小型丸底壺と高杯に偏る傾向が顕著に認められ、これらの土器群の特殊な用途が想定される。時期は5世紀前半である。(石田)



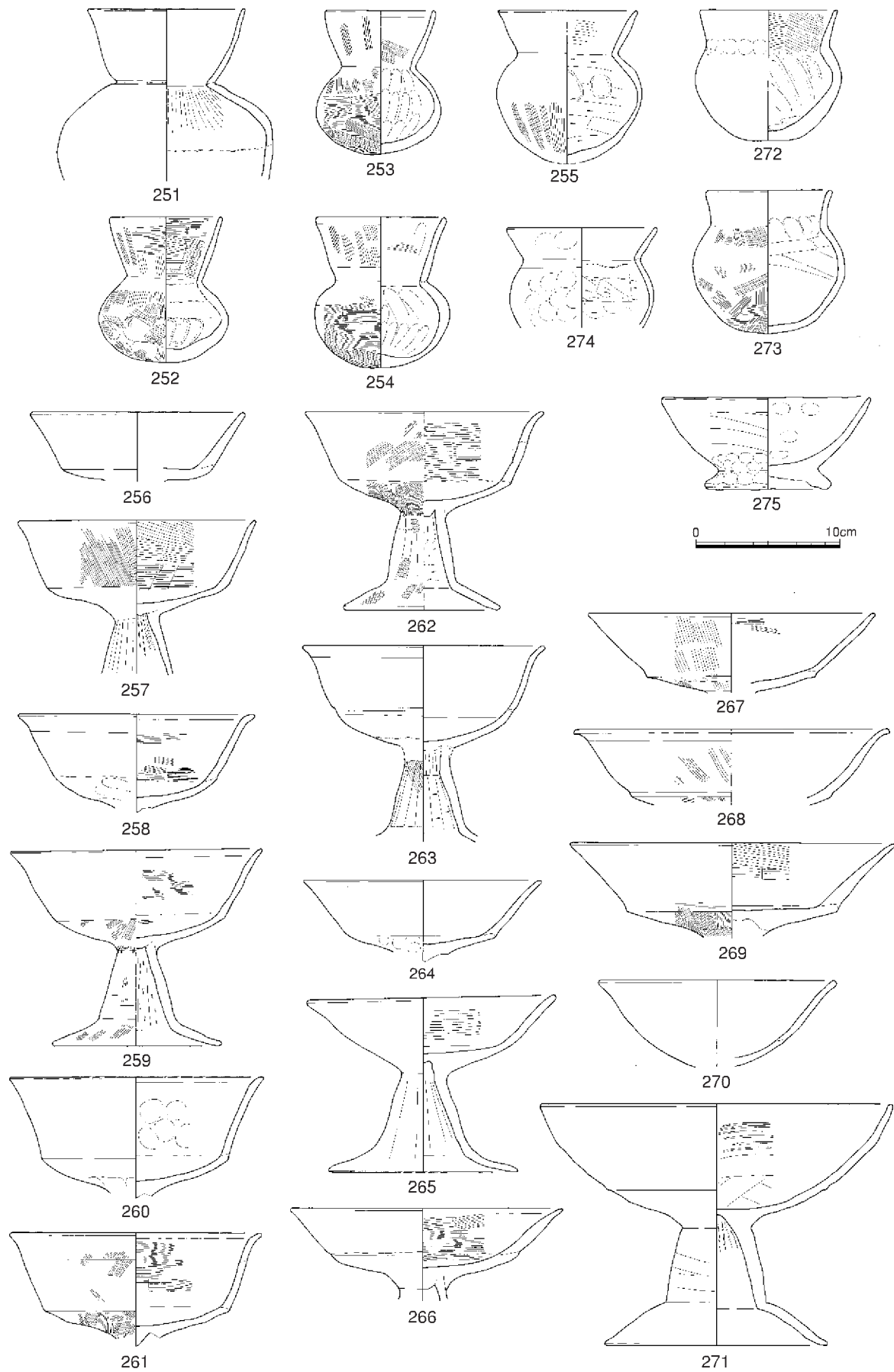
第85図 土器溜まり1a・1b (1/60)・出土遺物 (1/4)

土器溜まり2 (第71・86~88図、写真9、図版19・20・43・54)

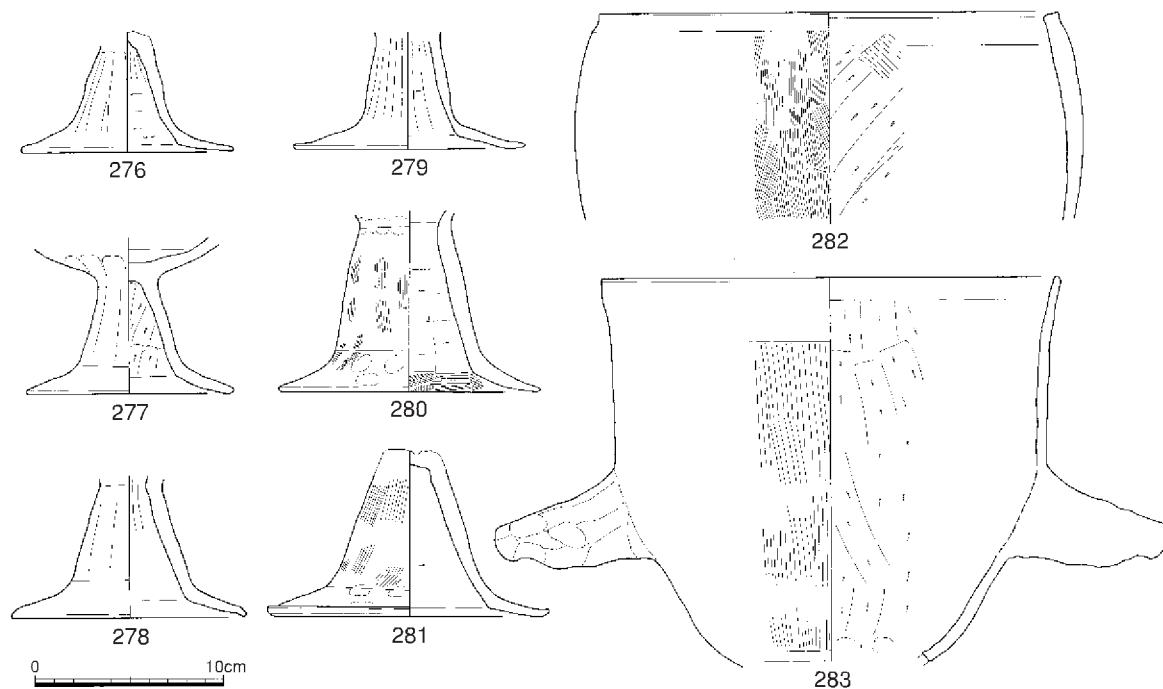
76Eに位置し、土器溜まり1の下層で検出された。長軸5m、短軸2.2mの範囲に多くの土器が密集した状態で出土した。いずれの土器も残りが良く、図示できたものに小型丸底壺252~255、壺244~246・251、甕247~250、鉢272~274、高杯256~271・276~281があり、台付鉢275、甕282・283も伴って出



第86図 土器溜まり2 (1/60)・出土遺物① (1/4)

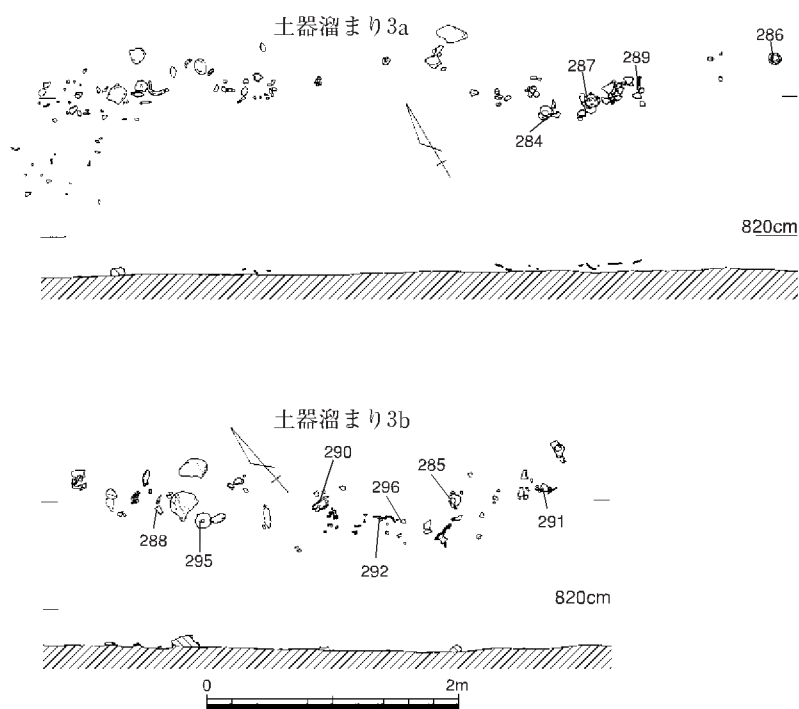


第87図 土器溜まり2出土遺物② (1/4)

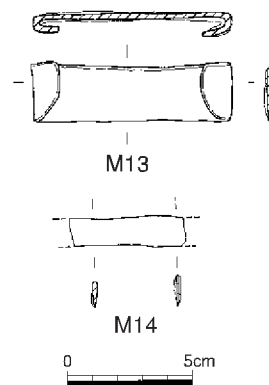


第88図 土器溜まり2出土遺物③ (1/4・1/3)

土した。また、土器とともに摘鎌M13や刀子状のM14が出土している。出土土器に占める高杯の割合が多いのが特徴的である。土器溜まり1とは時期差はあまりなく、投棄の段階が異なるものと考えられる。これらの土器の時期は5世紀前半であろう。(石田)



第89図 土器溜まり3a・3b (1/60)

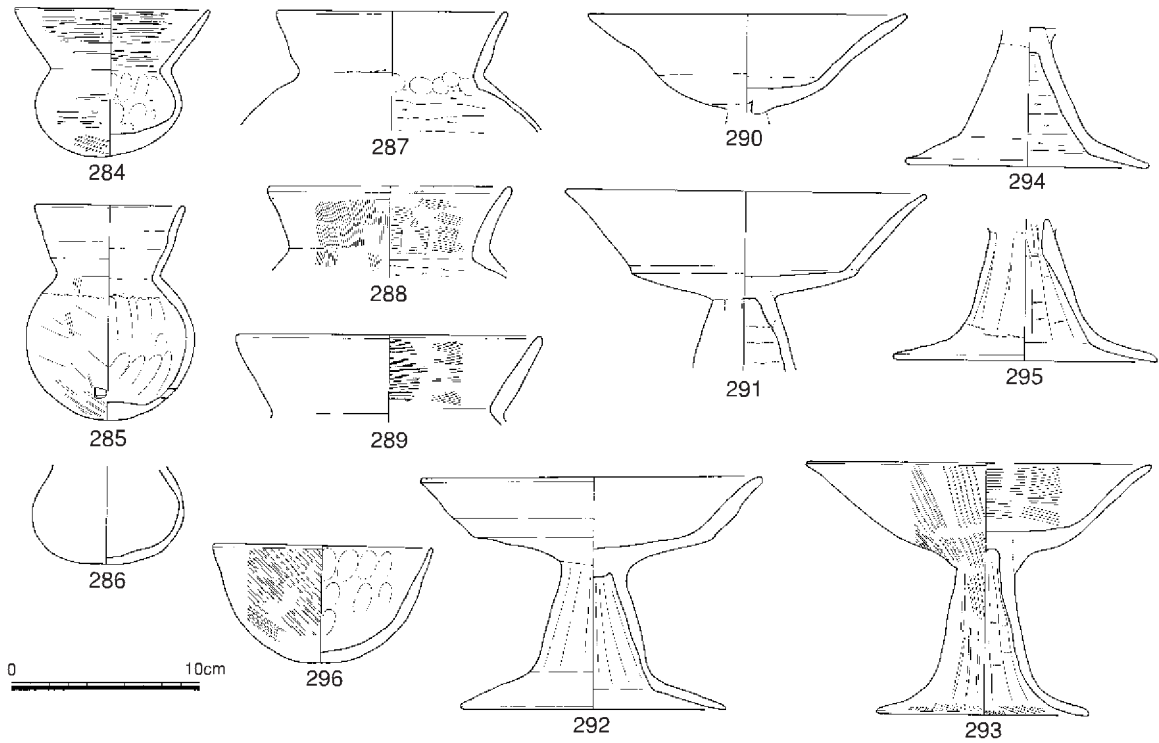


土器溜まり3 (第71・89・90図、図版43)

76E~78Eにかけて検出された土器溜まりで、西側の3a群と東側の3b群の二群に分かれる。

3a群は長さ5.2m、幅は20cm、3b群は長さ3.8m、幅60cmの範囲で土器が集中した状態で検出された。図示できたものには小



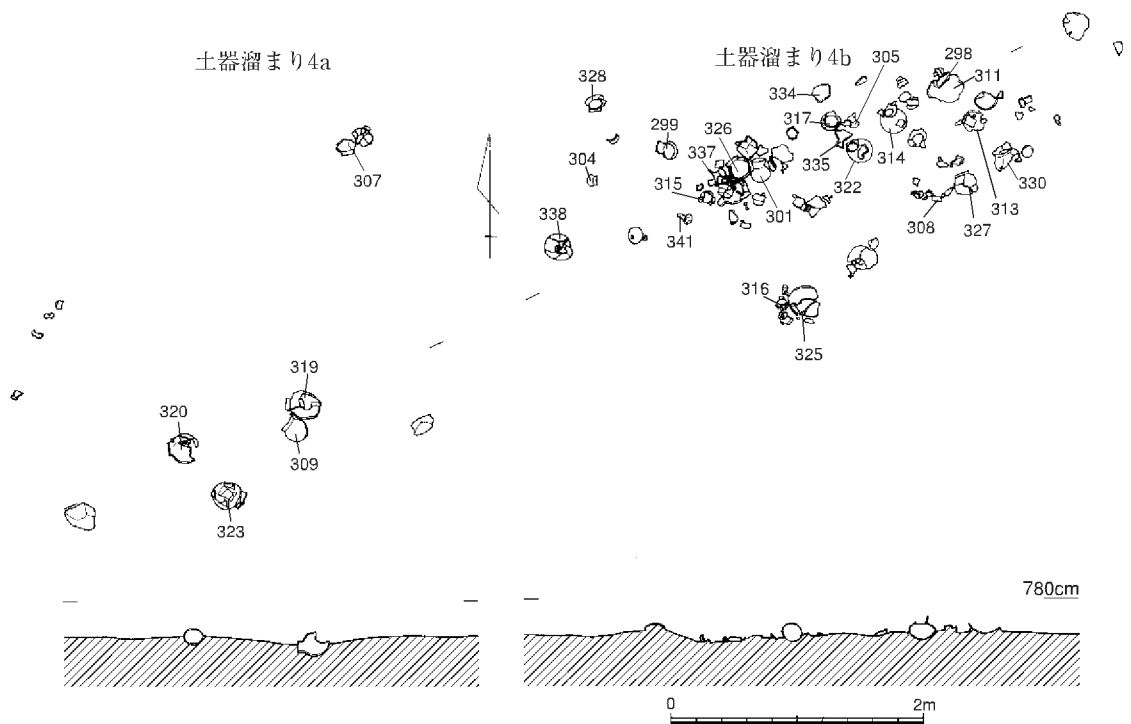


第90図 土器溜まり3出土遺物 (1/4)

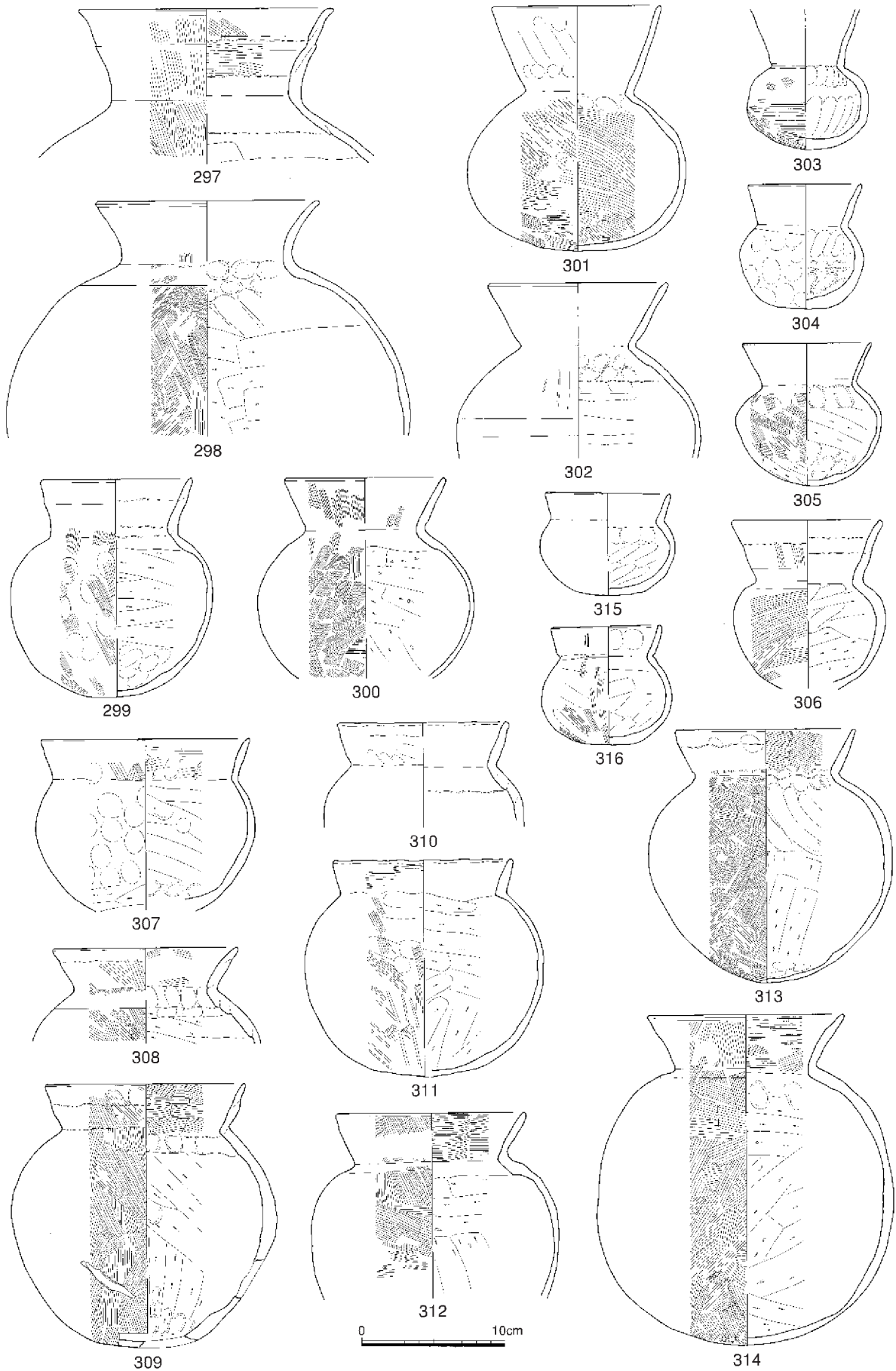
型丸底壺284~286、甕287~289、高杯290~295、鉢296がある。これらの出土土器の時期も5世紀前半と考えられ、他の土器溜まりと一連のものであろう。(石田)

土器溜まり4 (第71・91~94図、図版20・43~45)

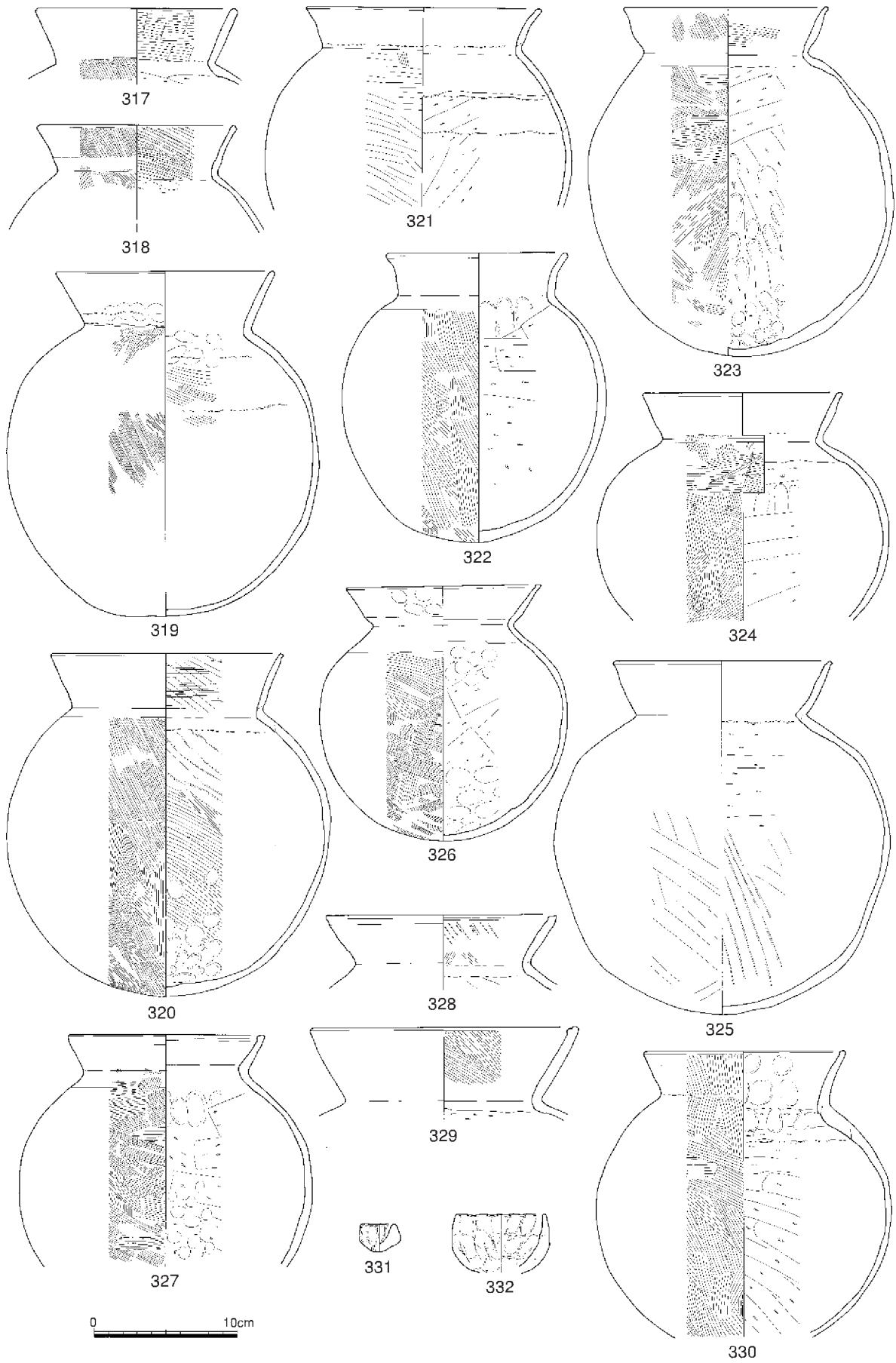
78Gで検出した土器溜まりで、南西側の4a、北東側の4bの大きく二群に分かれている。長さ



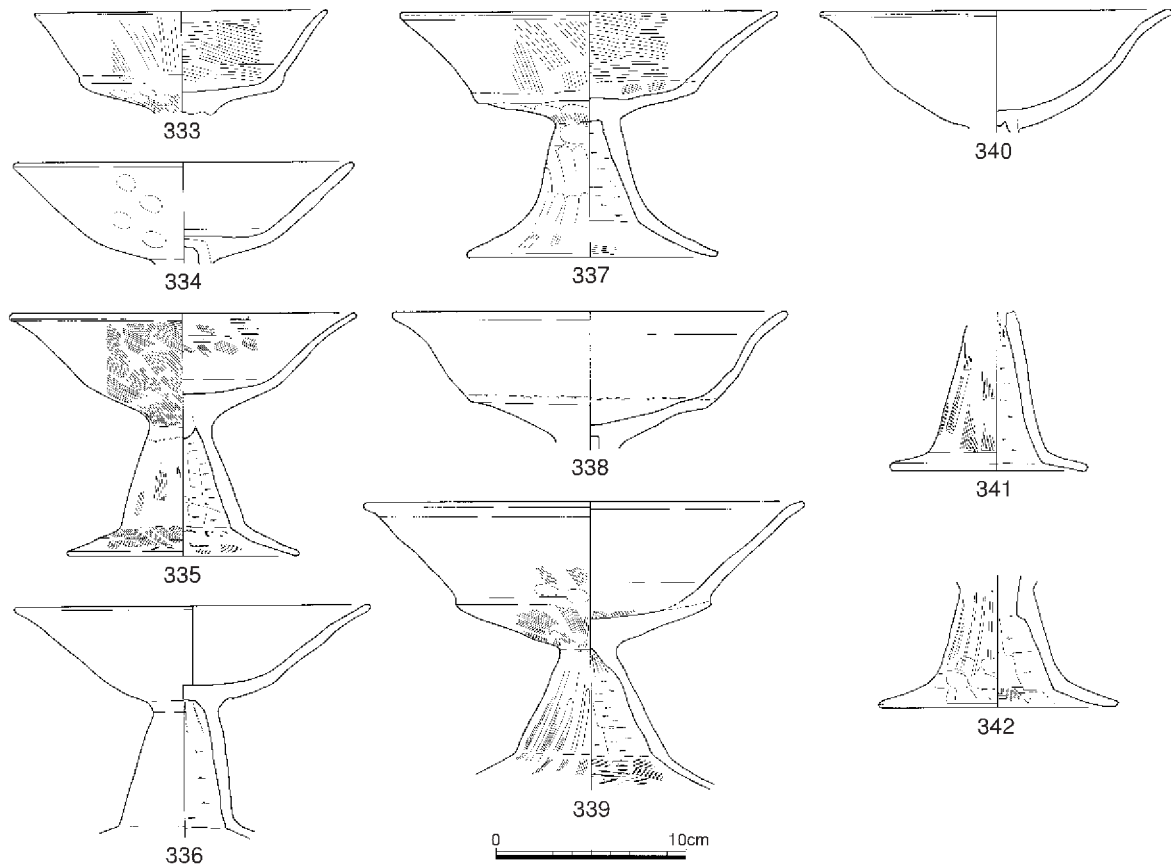
第91図 土器溜まり4a・4b (1/60)



第92図 土器溜まり4出土遺物① (1/4)



第93図 土器溜まり4出土遺物② (1/4)



第94図 土器溜まり4出土遺物③ (1/4)

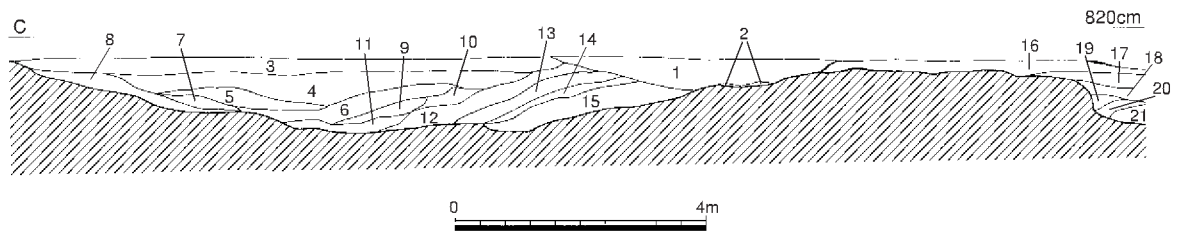
8.2m、幅2mにわたって完形に近い土器が多く検出された。壺297～302・322・325、小型丸底壺303～306、甕307～314、317～321、323～324、326～330、鉢315・316、手捏ねの鉢331・332、高杯333～342が図示できた土器で、壺・甕の占める割合が高く、他の土器溜まりの器種構成とは様相を異にしている。この土器溜まりで検出された土器の時期は土器溜まり1～3と同じく5世紀前半と考えられる。土器溜まり1～4は古墳時代中期前半の限られた時期に、河道等の低位部へ向かう微高地の肩口で行われた祭祀行為の一端を示すものと考えられ、複数回に分けて行われたものであろう。(石田)

## 6 河道

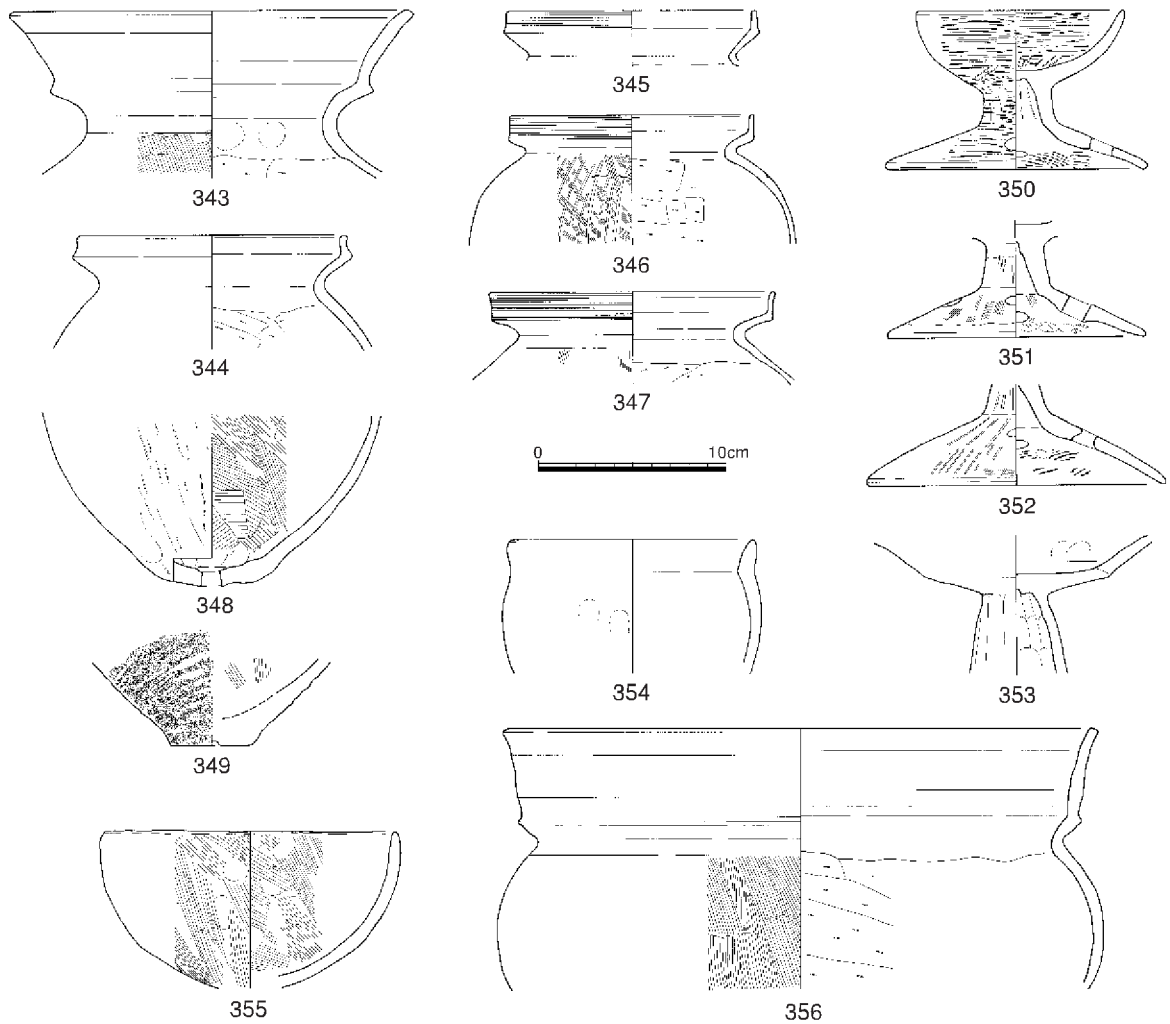
### 河道1 (第71・95図、図版21)

遺跡西端の76Gから中央部90Cにかけて検出された河道で、おおむね弥生時代の河道の流路を踏襲している。西端の微高地にかかる肩口を検出したのみで規模は確認できていないが、竪穴住居のある微高地からの下がりを見れば南端と捉えるなら、幅45～50mと推定されよう。また第70図に示したように、下部には幾筋かの流れがあり、最終的に一連のものとして停滞し、埋没したと考えられる。土器溜まり1・3は第3層上部で検出されており、河道が埋没した後に投棄されたと考えられる。

河道内からは整理箱10箱を越える大量の土器が出土した。9割以上が弥生時代中期～後期の著しく摩耗した土器片であるが、最下層から古墳時代初頭の甕が出土していることから、混入と考えられる。甕347が第15層から出土するなど、層と出土遺物の時期は対応関係が認められなかった。古墳時代初頭～前期にかけて比較的短期間に流れ、埋没したと考えられる。(渡邊)



- |                                |                                    |                                |
|--------------------------------|------------------------------------|--------------------------------|
| 1 鈍黄褐色微砂 (10YR4/3)             | 8 暗褐色砂質土 (10YR3/4)<br>(Fe・土器片・炭片含) | 15 粗砂 (礫含)                     |
| 2 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3)<br>(粗砂含) | 9 暗褐色砂質土 (10YR3/3)<br>(礫少含)        | 16 暗褐色微砂 (2.5Y4/2)<br>(粗砂含)    |
| 3 褐色微砂 (10YR4/6)<br>(Mn・Fe含)   | 10 褐色微砂 (10YR4/4)<br>(Fe含・粗砂多含)    | 17 鈍黄褐色砂質土 (10YR4/3)<br>(Fe含)  |
| 4 褐色砂質土 (10YR4/6)<br>(Fe含)     | 11 粗砂層 (礫含)                        | 18 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)<br>(Fe少含) |
| 5 褐色微砂 (10YR4/6)<br>(Fe含)      | 12 暗褐色粘質土 (10YR3/3)<br>(礫少含)       | 19 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)<br>(Fe少含) |
| 6 褐色微砂 (10YR4/4)<br>(Fe含)      | 13 暗褐色微砂 (10YR3/3)<br>(粗砂含・礫含)     | 20 黄褐色粘質土 (2.5Y4/1)<br>(Fe少含)  |
| 7 礫層                           | 14 暗褐色微砂 (10YR3/3)<br>(礫含・Fe含)     | 21 礫層<br>(黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 含)  |

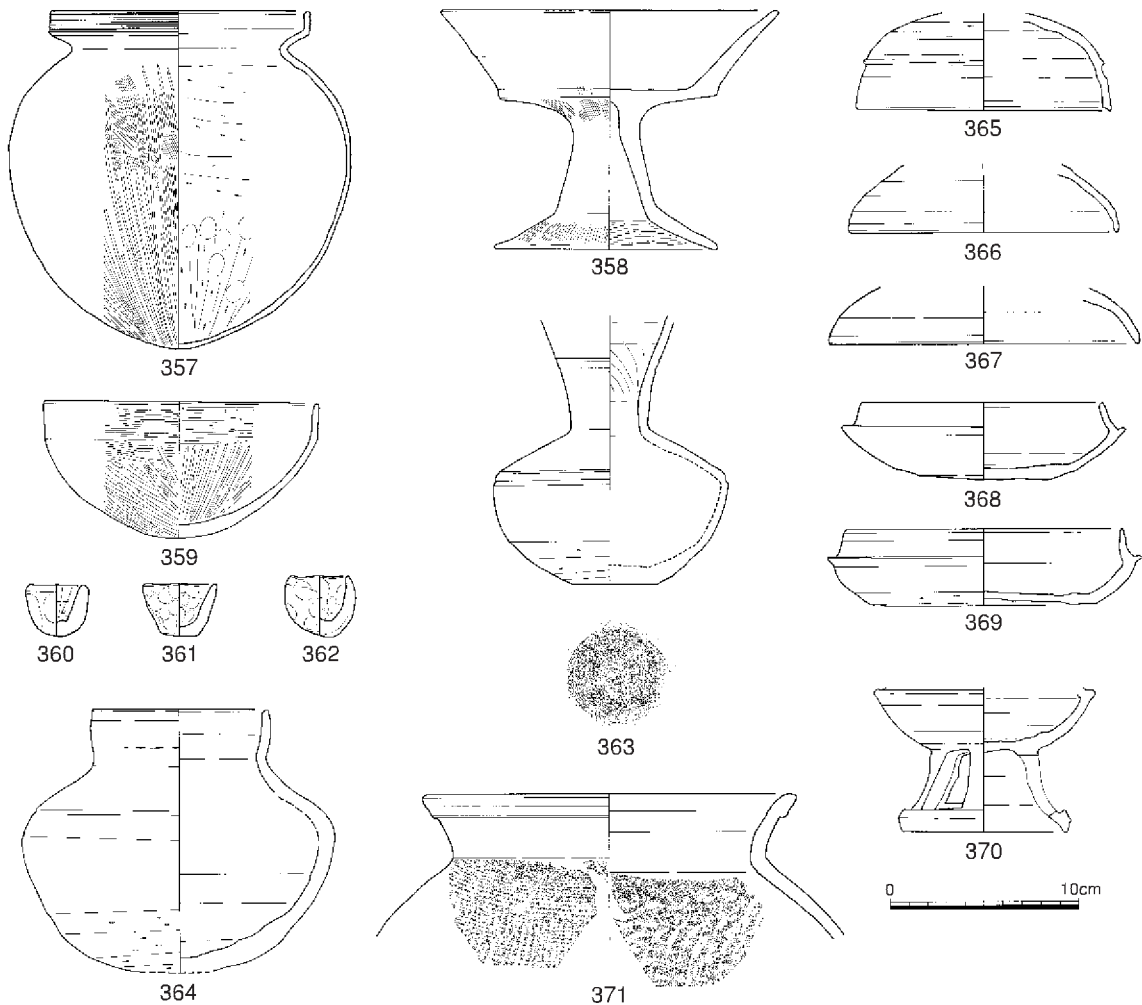
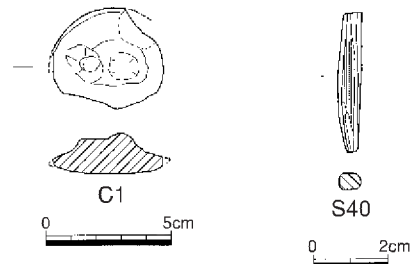


第95図 河道1 (1/120)・出土遺物 (1/4)

7 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第96図、図版45・52・53)

ここに掲載した遺物はすべて他時期の遺構に混入していた、もしくは出土地不詳の出土品である。土師器のうち甕357、高杯358、鉢359は河道1上部に堆積した砂層内から、手捏ね鉢360・362は須恵器杯身368と共に古代の河道2の南端から出土した。須恵器では杯蓋366が土器溜まり2上部から、甕371は河道1上層から、短頸壺364は河道2北端から、杯蓋365・杯身369・高杯370は河道2の中央部から出土している。古墳時代前期もしくは後期のもので、集落の示す年代と合致している。

鏡形土製品C1は本調査着手前のトレンチから出土したが、地点や層位から河道1に伴う可能性が高い。手捏ねで、紐が2つの突起で表現されている。滑石製のS40も包含層から出土したもので、前面を縦方向に研磨し、片方の先端はやや細く整えている。模造品としているが、その用途や使用目的は不明である。時期もわからないが、滑石製模造品のひとつにあげられるなら古墳時代後期に属する可能性が高く、先にあげた土器の年代観との矛盾はきたさない。(渡邊)



第96図 柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/3・1/2・1/4)

## 第4節 古代の遺構・遺物

### 1 概要

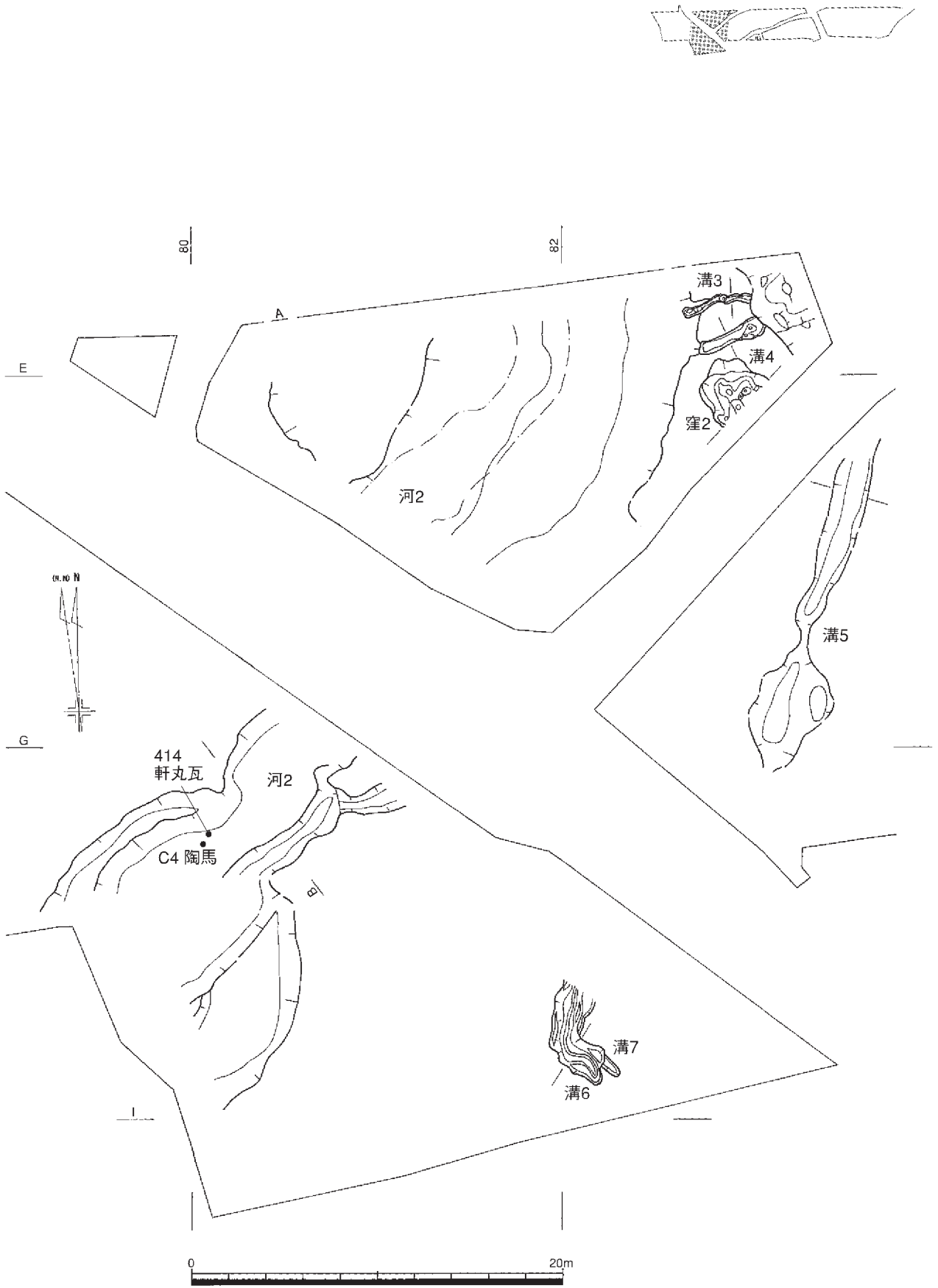
当期に属する明確な遺構は、84ラインより西で検出された河道と溝5条、窪地1か所にすぎず、非常に希薄である。しかしながら東西両微高地上の中世以降の遺構や耕作土層には少なからず古代の遺物も混入しており、本来は集落が存在していたが、削平により消滅したと見る方が妥当であろう。ここで報告する遺構もすべて古墳時代以前の旧河道上で検出されたものであり、比較的低い部分の遺構のみが削平を免れ、残存していたと見られる。

河道からは7世紀末～9世紀段階の遺物が出土しているが、隣接する白鳳寺院栢寺と同範の平城宮6225式垂式軒丸瓦当や陶馬、畿内産土師器など律令的な色彩の濃いものが多く、近隣に公的施設の存在を示唆させるものである。

なお、旧南溝手遺跡1区にあたる範囲では河道上面に中世以前の耕作土と思われる水平堆積層を確認している。低地における農地利用の開始が、平安時代に遡る可能性が考えられる。(渡邊)



写真11 河道2（北から）・陶馬出土状況（南から）・丸瓦出土状況（南東から）



第97図 古代主要遺構図 (1/300)



## 2 溝

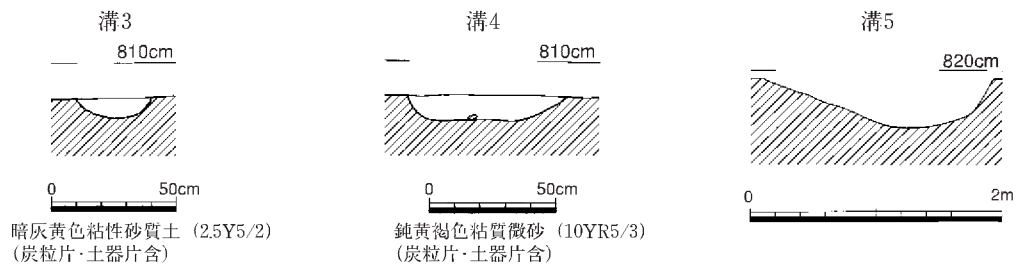
### 溝3・4 (第97・98図)

82C南西角に位置する。河道2と溝5の北端部の間の東西方向に平行する2条の溝で、北を溝3、南を溝4としている。検出状況では東端を溝5に切られていたが、西端は河道と一体となっており、前後関係は定かでない。溝3は幅31cm、深さ8cmを測り、溝4は幅64cm、深さ10cmを測る。両者とも浅いが、底面に凹凸がある特徴を有する。底面の高さは西の河道側へ傾斜している。

時期を特定できる遺物は出土していないが、検出状況より溝5や河道2とは近い時期と考えられ、両者を繋ぐ溝であった可能性も考えられる。 (渡邊)

### 溝5 (第97・98図)

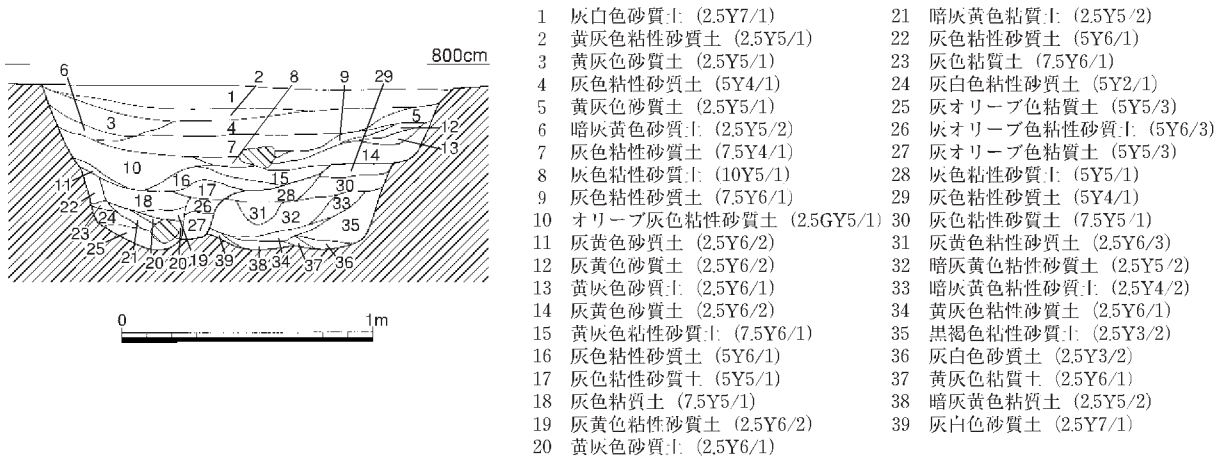
河道2の東に位置する南北方向の溝で、長さ27mあまりを検出した。幅は北端部では8m以上を測るが南へ行くにつれ細くなり、底面のレベルも、北端では海拔7.5m、南端では7.9mと浅くなっている。溝の方向は河道2に沿っており、溝3・4も含めて河道と一連のものと思われることから、河道2から一時的に分かれた流れの痕跡と考えられる。 (渡邊)



第98図 溝3～5 (1/60・1/30)

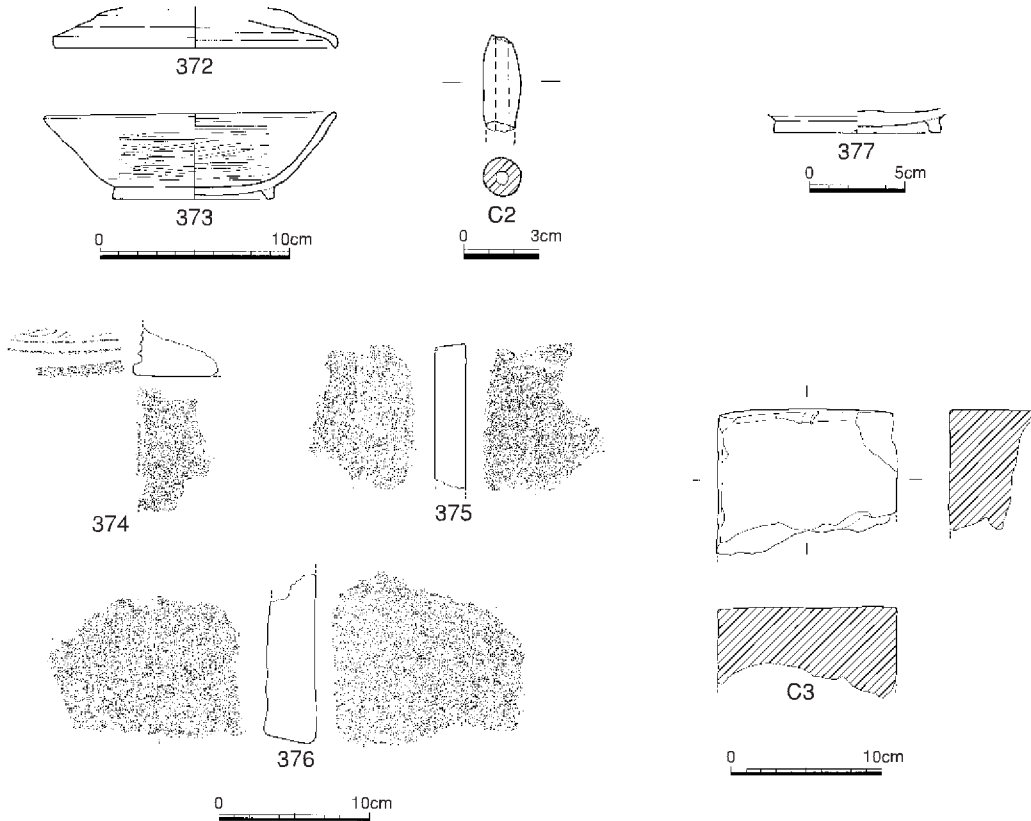
### 溝6・7 (第97・99・100図、図版45・53)

82Gに位置する溝である。北東端は町道へと延びるため不明である。南端は調査区内で確認でき、徐々に深さを減じるといった様子ではなく、途切れるといった状態を確認した。溝6・7ともに溝さらえを繰り返したようで、最終段階には2条分の幅で1条の溝として機能していた。遺物には須恵器や



第99図 溝6・7 (1/30)

土師器、黒色土器、瓦、埴などがある。溝7からは須恵器377が、溝6の最下層からは瓦や埴が出土し、溝6の最上層で黒色土器373が出土した。これらのことから溝6・7は少なくとも8世紀中頃以降には掘られており、補修を繰り返しながら機能し続け、9世紀後半には廃絶したと考える。(上村)



第100図 溝6・7出土遺物 (1/4・1/5・1/3)

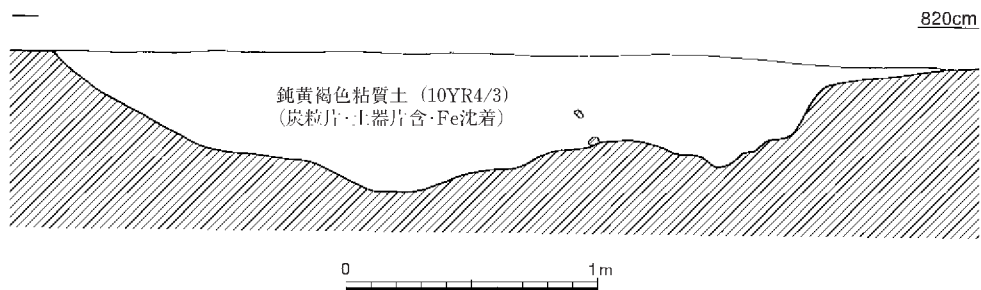
### 3 窪地

#### 窪地2 (第97・101図)

82E北西角で、溝4の南に位置する。検出面からの深さ約60cm、底面の海拔7.4mを測る。形は不整形で、底面の起伏も激しく、人為的な遺構とは考えがたい。

堆積土中より古代と思われる土器細片が出土している。

(渡邊)

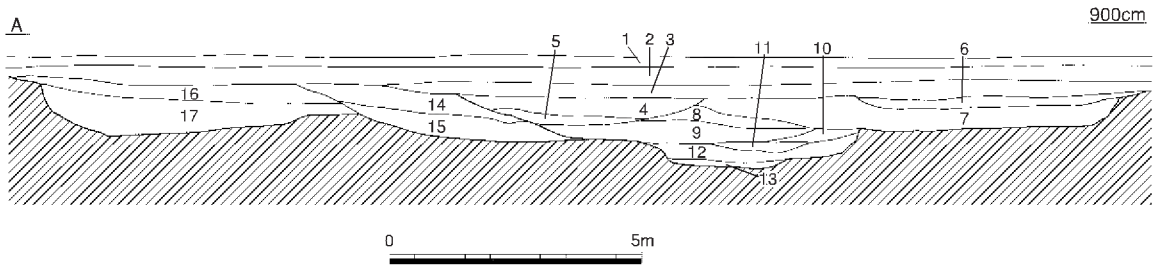


第101図 窪地2 (1/30)

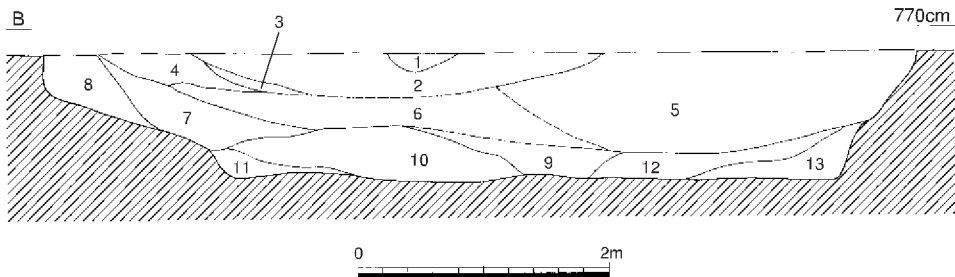
## 4 河道

### 河道2 (第97・102～107図、写真11・12、巻頭図版2、図版21～23・45～47・52・53)

西側微高地にほぼ沿う方向に流走し、弥生時代～古墳時代の旧流路を踏襲していると思われる。大きく上層・下層・最下層に分かれ、A断面の第3～第9層およびB断面第1～8層が上層に、A断面第10・11・14・15層およびB断面第9・12・13層が下層に、A断面第12・13層およびB断面第10層が最下層に相当する。なお、A断面第12層とB断面第10層を同一層と考えている。上層からは378～389・396・397・399・406・409・422が出土した。8世紀前半の390・397を除いて、8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯396や9世紀代の土師器杯および黒色土器碗・皿など新しい様相が認められる。土師器

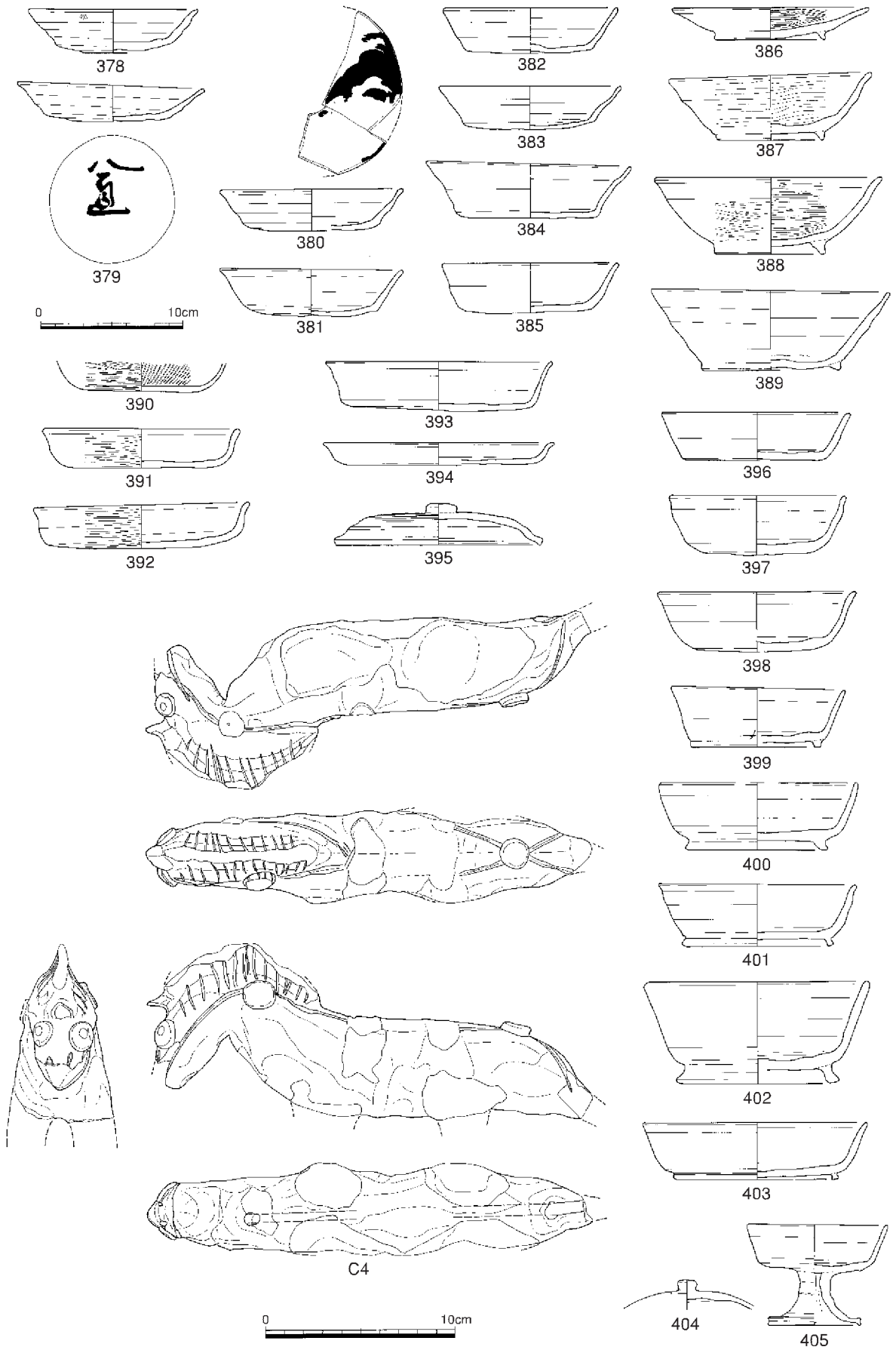


- |   |                                       |                                     |
|---|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3)<br>(微砂少含、現代耕作土)  | 7 オリーブ褐色粘質微砂 (2.5Y4/3)<br>(Fe多含)      | 13 灰色粗砂 (10Y4/1)<br>(土器・礫多含)        |
| 2 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)<br>(微砂・Fe多含、中近世耕作土) | 8 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y4/2)<br>(炭含)          | 14 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)<br>(微砂・Fe・Mn含) |
| 3 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)<br>(Fe含・Mn少含)       | 9 暗オリーブ褐色粘質微砂 (2.5Y3/2)<br>(Fe含)      | 15 黒褐色粘質微砂 (2.5Y3/2)<br>(Fe含)       |
| 4 鈍黄褐色砂質土 (10YR4/3)<br>(微砂・Fe含)         | 10 灰色粘質微砂 (7.5Y4/1)<br>(粗砂・礫多含)       | 16 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)<br>(微砂・Fe・Mn含)  |
| 5 暗灰黄色微砂 (2.5Y4/2)<br>(細砂・Fe含)          | 11 灰色粘質微砂 (7.5Y4/1)<br>(粗砂少含)         | 17 黄灰色粘質微砂 (2.5Y4/1)<br>(Fe多含)      |
| 6 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)<br>(微砂・Fe含)         | 12 オリーブ黒色粘質微砂 (7.5Y3/3)<br>(粗砂含・土器多含) |                                     |



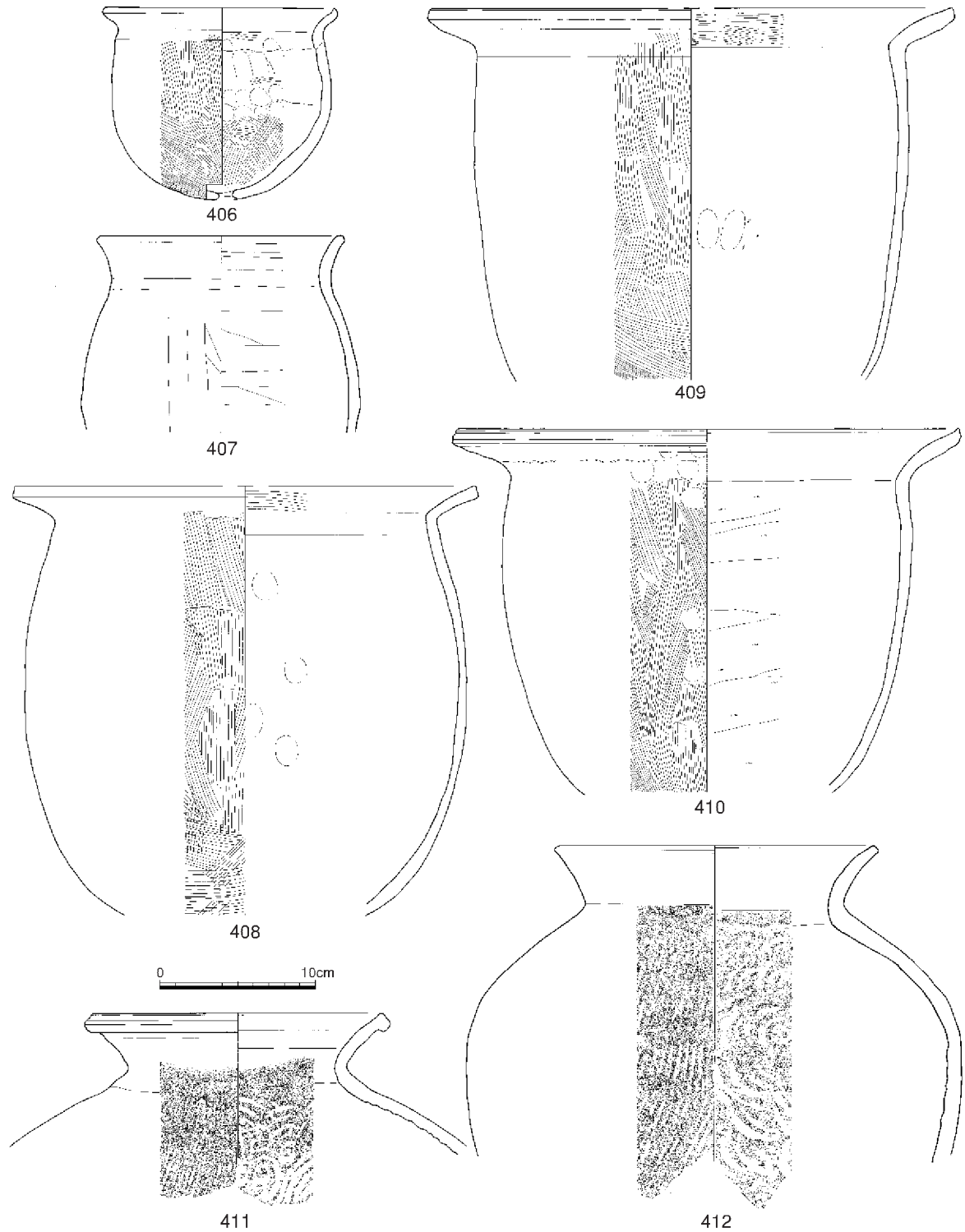
- |  |                                 |
|--|---------------------------------|
| 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)                              | 7 褐灰色粘性砂質土 (10YR5/1)<br>(土器含)   |
| 2 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y5/1)<br>(Fe含)                    | 8 褐灰色砂質土 (10YR4/1)              |
| 3 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)                               | 9 灰色シルト (7.5Y4/1)               |
| 4 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)                               | 10 灰色粘質土 (10Y4/1)<br>(炭・木片・土器含) |
| 5 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4.3)                            | 11 灰色細砂 (10Y5/1)                |
| 6 暗灰黄色細砂 (2.5Y5/2)<br>黄灰色粘性微砂質土 (2.5Y4/1)<br>の互層 | 12 灰色微砂 (5Y5/1)                 |
|  | 13 灰色粘性砂質土 (5Y6/1)              |

第102図 河道2 (1/150・1/60)



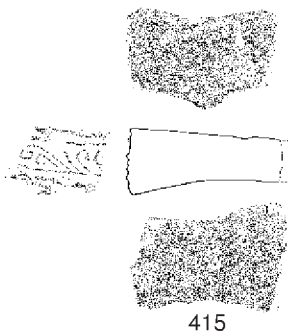
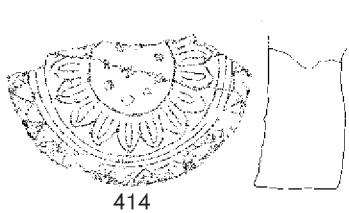
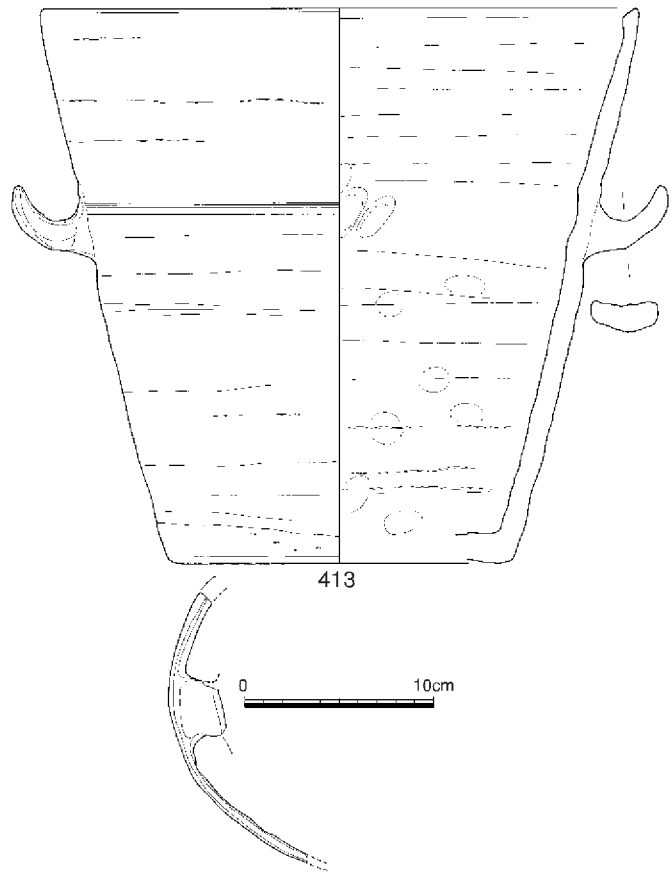
第103図 河道2出土遺物① (1/4・1/3)

杯379底面には「八□」の2文字の墨書がある。狩野久氏に釈読いただいたところ、下の字について邊（辺）の可能性を指摘された。くわえて、現在の総社市市街地の旧国郡名は賀陽郡八部郷であるが、八部を八辺と表記した例はないとの教示も受けた。須恵器杯399は備前産である。下層から390・393～395・398・404・408・410・411・416・421、最下層から391・392・400～403・414・C4が出土した。395が8世紀末～9世紀初頭、ほかはおおむね8世紀前葉に比定される。404・405は7世紀後半

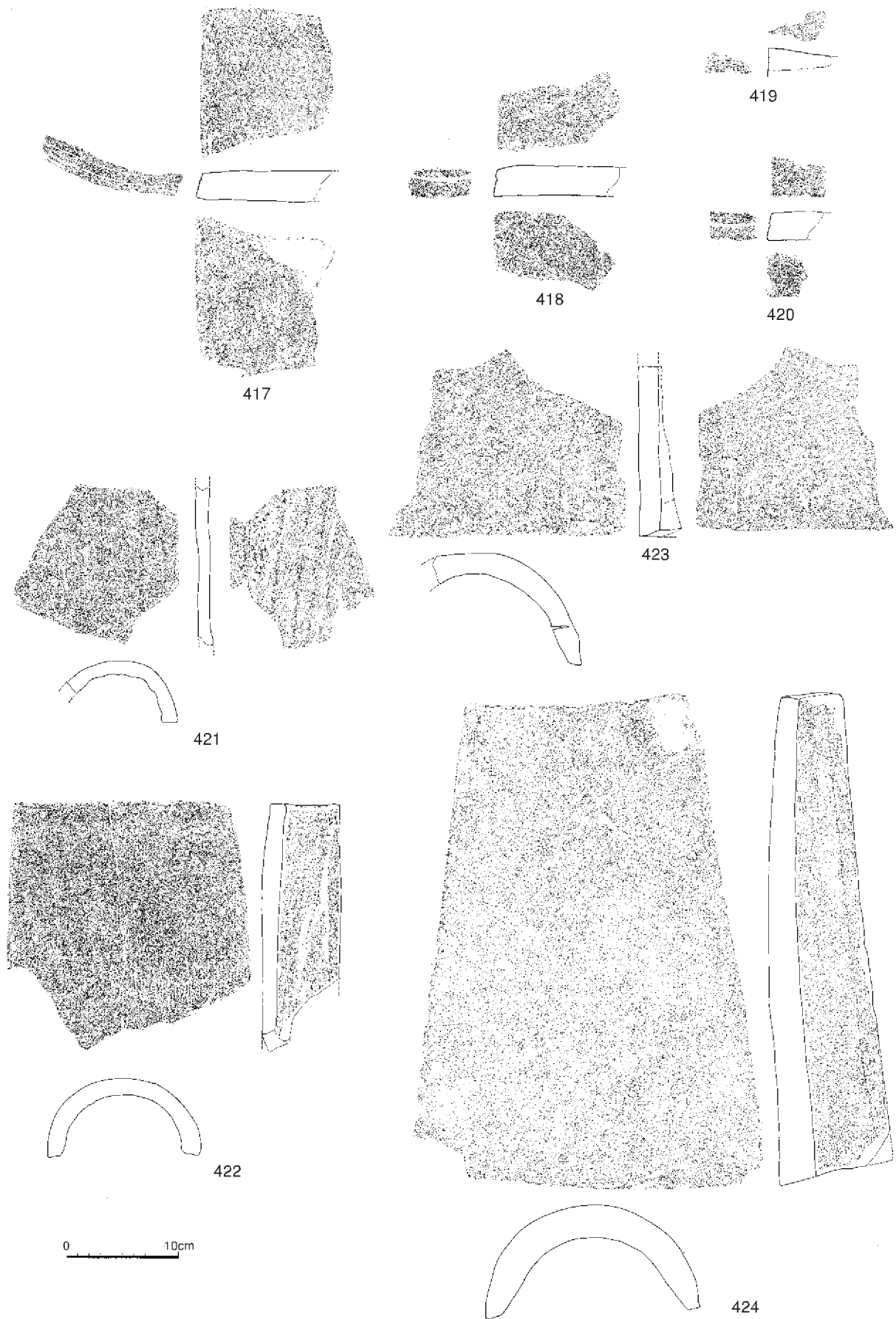


第104図 河道2出土遺物② (1/4)

に遡りうるが、A断面第17層より下部で古墳時代後期の堆積層を確認しており、混入の可能性も考えられる。**390**は内面に暗文を有した畿内産土師器の搬入品、**391・392**は底部外面に磨きの加えられた畿内産土師器の在地模倣品である。軒丸瓦**414**は范傷が栢寺廃寺出土の平城宮6225式垂式の4類と一致し、同範と考えられる。陶馬**C4**は棒状の粘土塊先端を折り曲げて頭部とし、鼻と口をヘラで刻み、目には円形の粘土を貼り付け、さらに刺突を加える。また馬具のうち革紐部分は線刻し、鞍や辻金具・雲珠は粘土を貼り付けている。胎土と焼成から総社市末の奥窯で焼かれた可能性が指摘されている。つくり方からは小笠原氏の第一段階B形式に分類されるが、窯の年代観とも矛盾はなく、製作年代を7世紀末



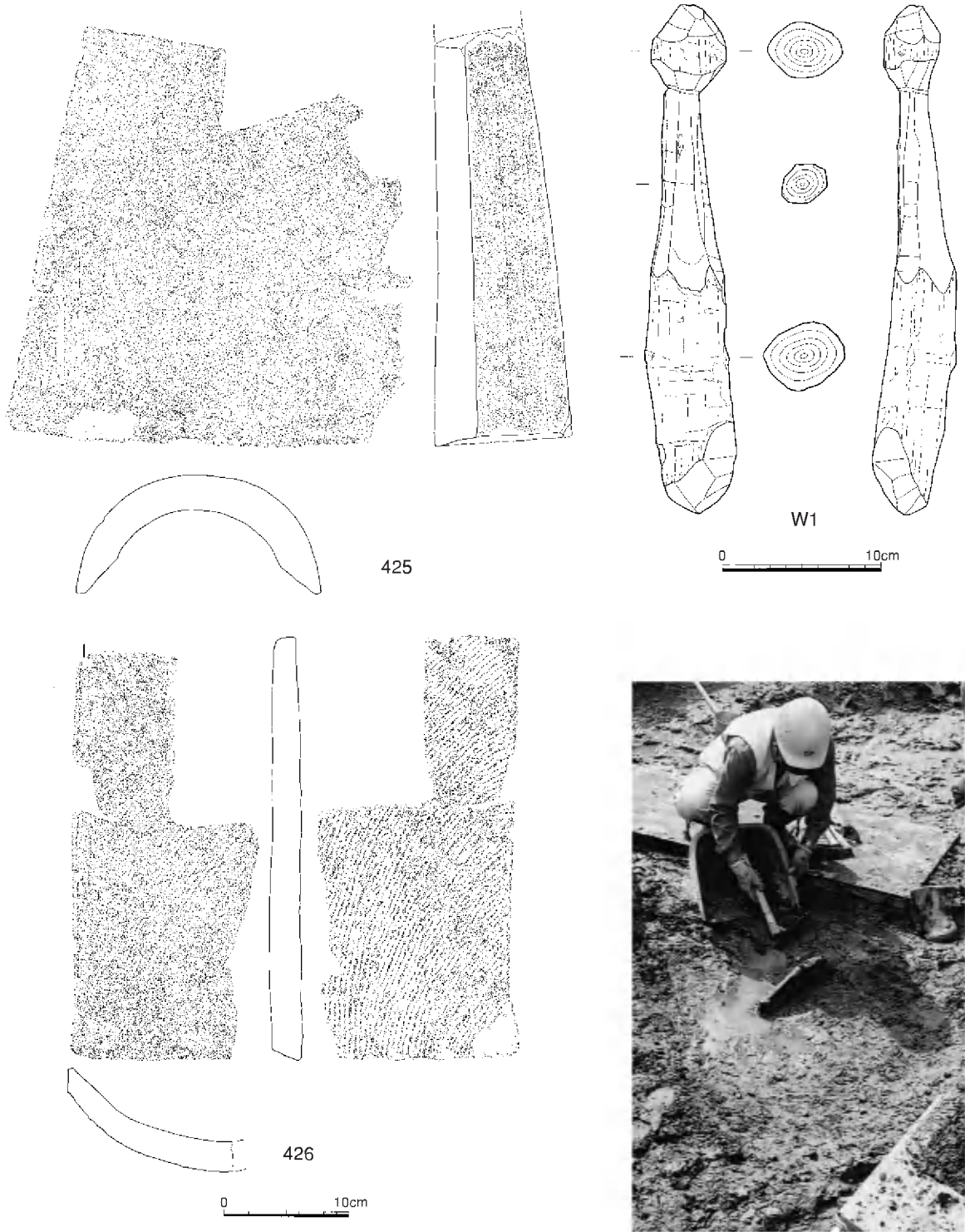
第105図 河道2出土遺物③ (1/4・1/5)



第106図 河道2出土遺物④ (1/5)

～8世紀初頭の範疇で捉えておきたい。402・405・413はA断面第16・17層に対応する流路から出土した。413が平城Ⅲ古段階に比定されることから、下層および最下層が8世紀初頭から前葉にかけて埋没したと考えられる。423・424・W1は河道底から出土した。丸瓦424はほぼ完品で摩滅もなく、意図的に投棄された可能性が考えられる。407・412・415・417～420は河道南端東部から出土した。

(渡邊)



第107図 河道2出土遺物⑤ (1/5・1/4)

写真12 W1出土状況(南東から)

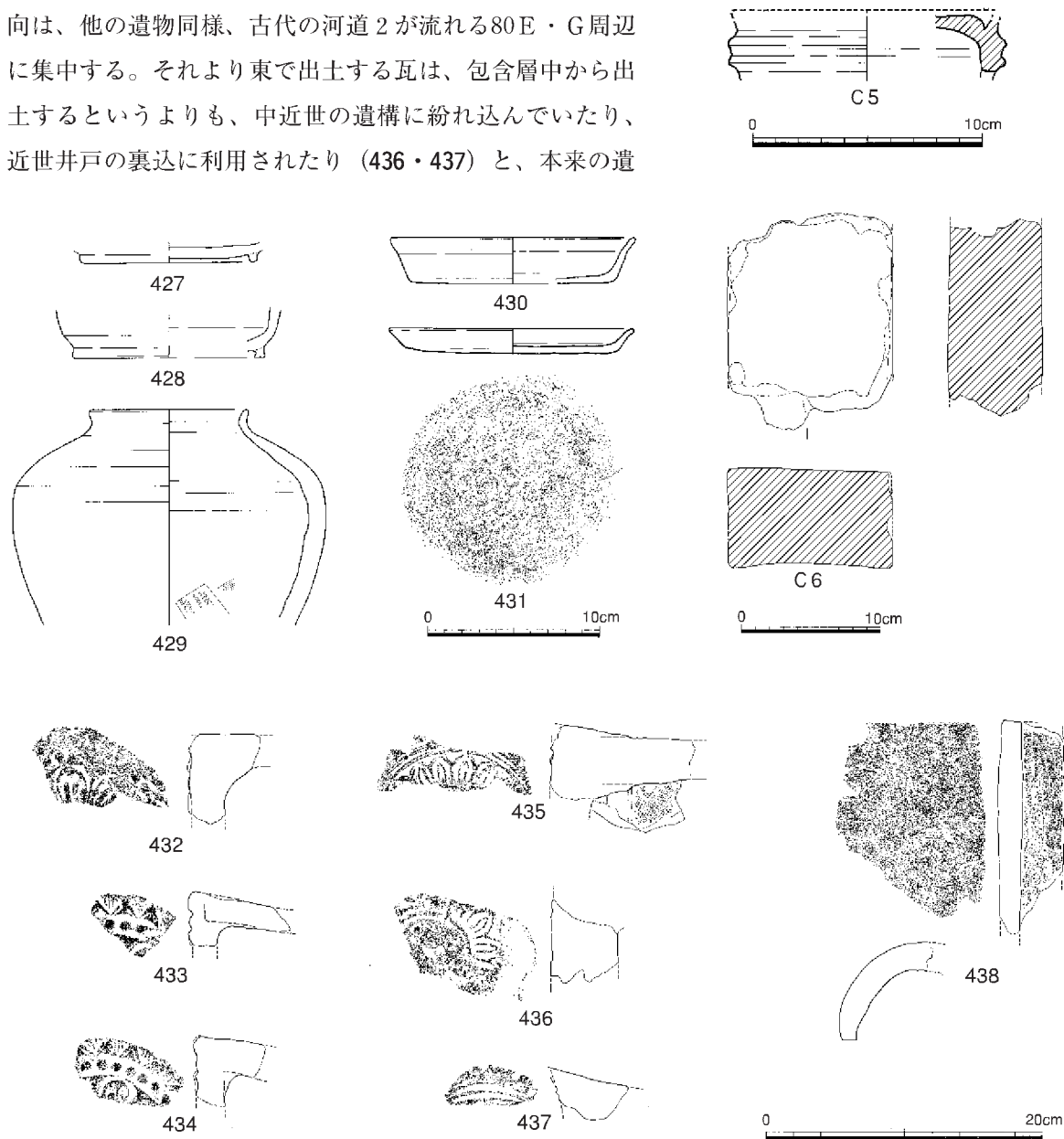


4 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第108・109図、図版47・53)

8世紀から9世紀にかけての遺物が見られる。出土傾向は、古代の河道2が流れる80E・G周辺に集中していることと、それより東からは多く出土しないことの2点がある。

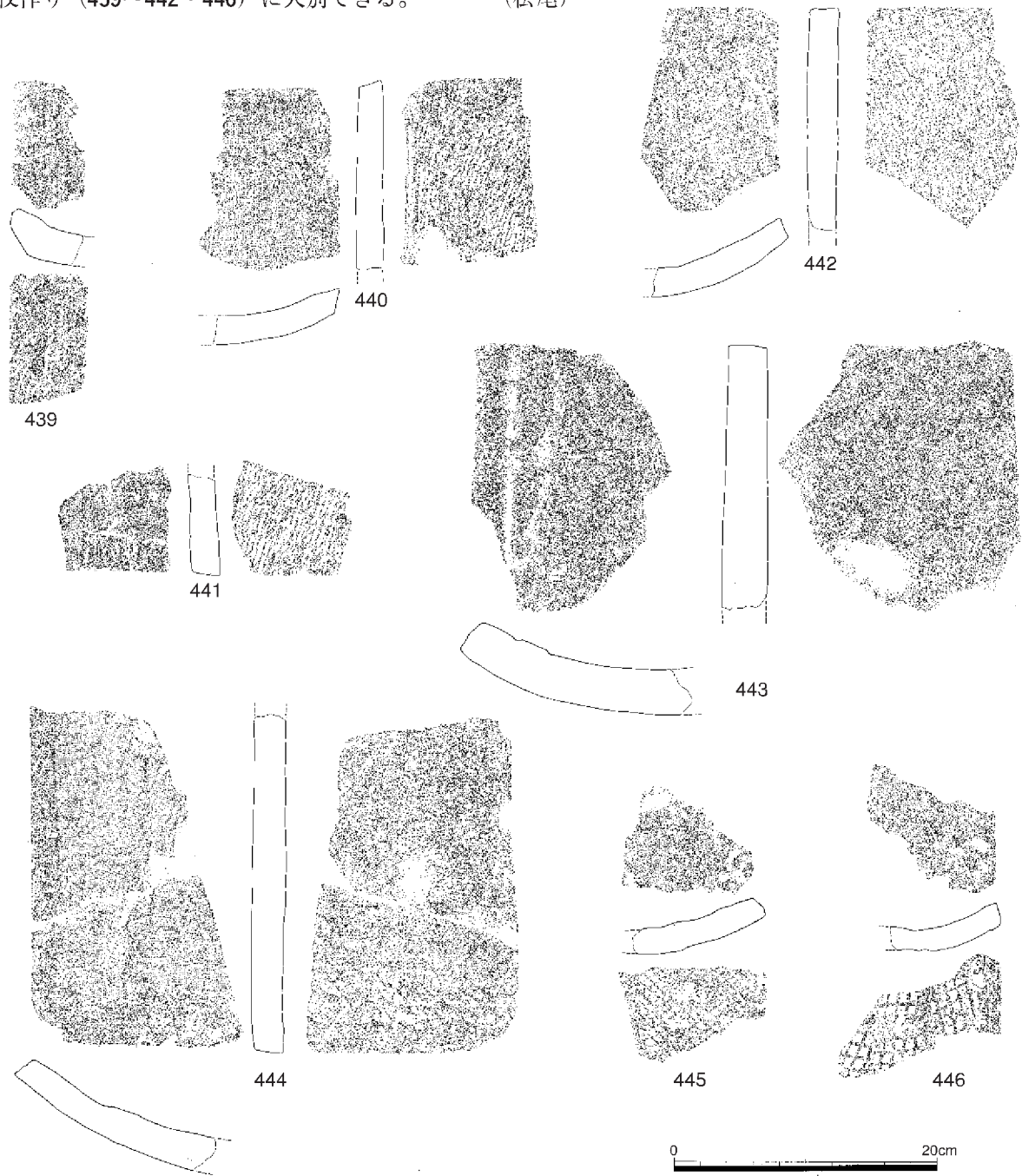
427~429は須恵器、430・431は土師器の杯と皿。430の外表面は丹塗り。431の底部外面には指頭押圧痕が顕著に観察できる。C5は円面硯で80G南西で出土している。全体の1/9程しか残っていないが、一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査では初出。C6は磚、80G区南西からの出土。後述の瓦と共に、南西200mほどの地点に存在する栢寺廃寺と関連したものであろう。

432~446は瓦。瓦に関しては第5章においてまとめをおこなっているのので、ここでは概略のみを記す。瓦の出土傾向は、他の遺物同様、古代の河道2が流れる80E・G周辺に集中する。それより東で出土する瓦は、包含層中から出土するというよりも、中近世の遺構に紛れ込んでいたり、近世井戸の裏込に利用されたり (436・437) と、本来の遺



第108図 柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/3・1/4・1/5)

構の時期や性格とは関係ない、いわゆる「混じり」として出土している。軒丸瓦は432～437で、432～434は複弁八葉の備中式。435～437は河道2出土軒丸瓦414同様、平城宮6225系。438は行基式の丸瓦。439～446は平瓦。粘土板桶巻作り（443～445）と一枚作り（439～442・446）に大別できる。（松尾）



第109図 柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/5)

## 第5節 中世の遺構・遺物

### 1 概要

中世の南溝手遺跡は調査区中央の微高地上および東の低位部に集落が広がり、西の遺跡縁辺には水田が展開し、東の縁辺にあたる低位部からは素掘溝群が形成された。また、低位部からは掘立柱建物4棟が土壙墓に隣接して建てられるなど興味あるあり方を示している。

一方、中央部の安定した微高地からは土壙墓10基をはじめ、土壙10基余りを検出している。なお、当微高地からは数多くの中世に属すと考えられる柱穴を検出しているが、掘立柱建物として把握するまでには至らなかったものではあるが、何棟か建物が建てられていたことは想像に難くない。また、遺跡の東端から検出された井戸と土壙からは13世紀の好資料となる遺物が出土している。（江見）



写真13 土器棺1調査風景(北から)

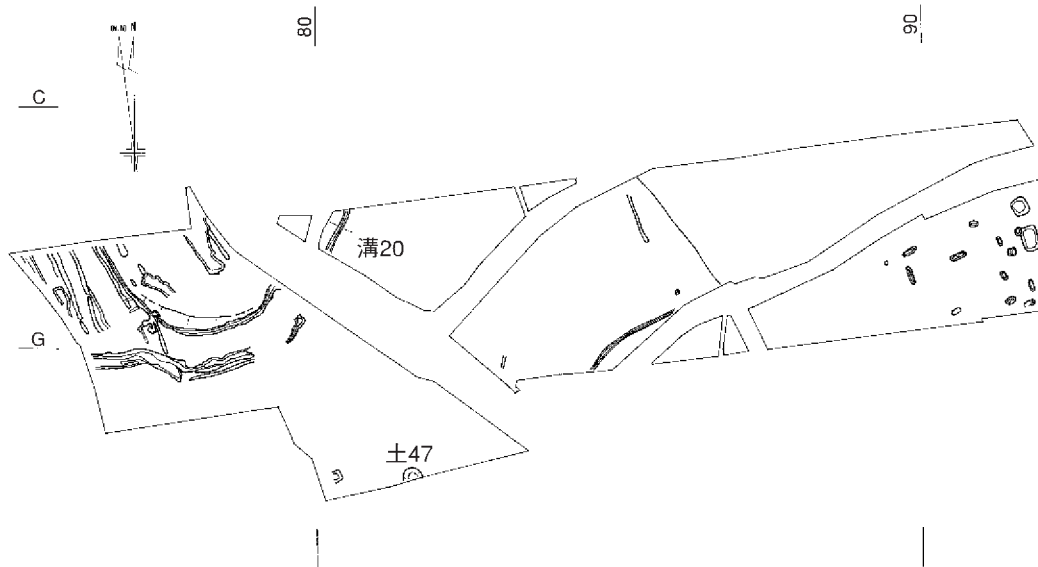
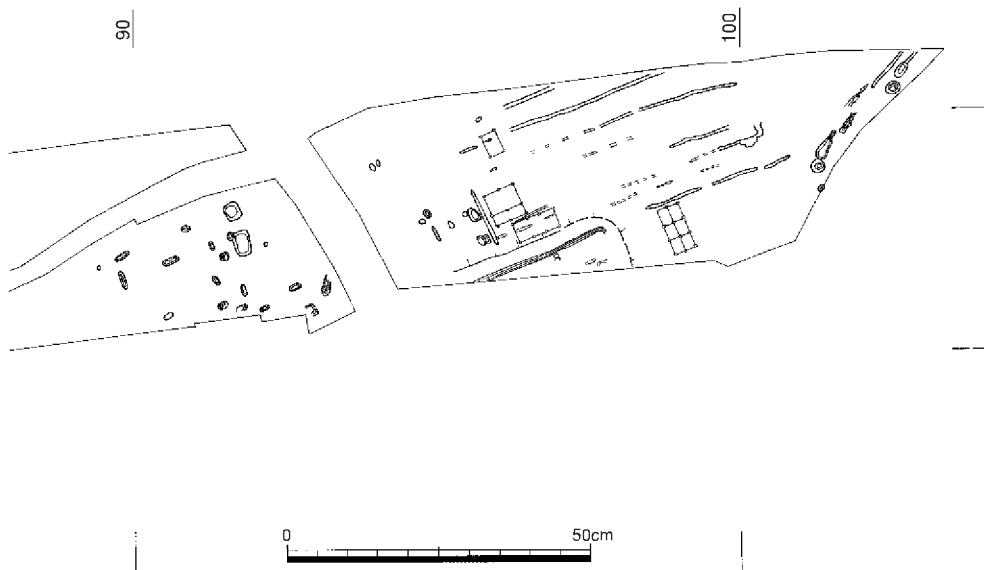




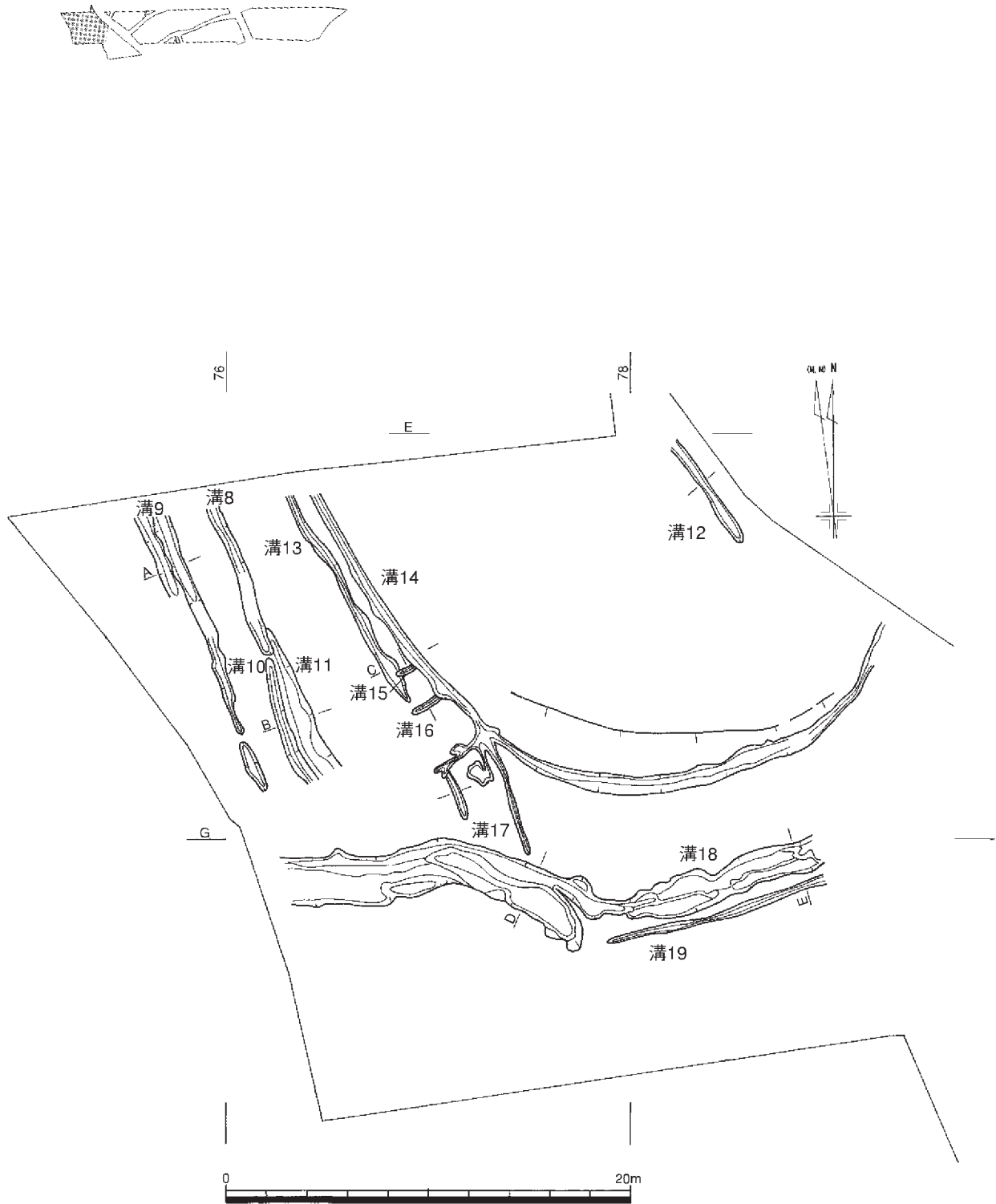
写真14 土壙墓13・14調査風景(北東から)



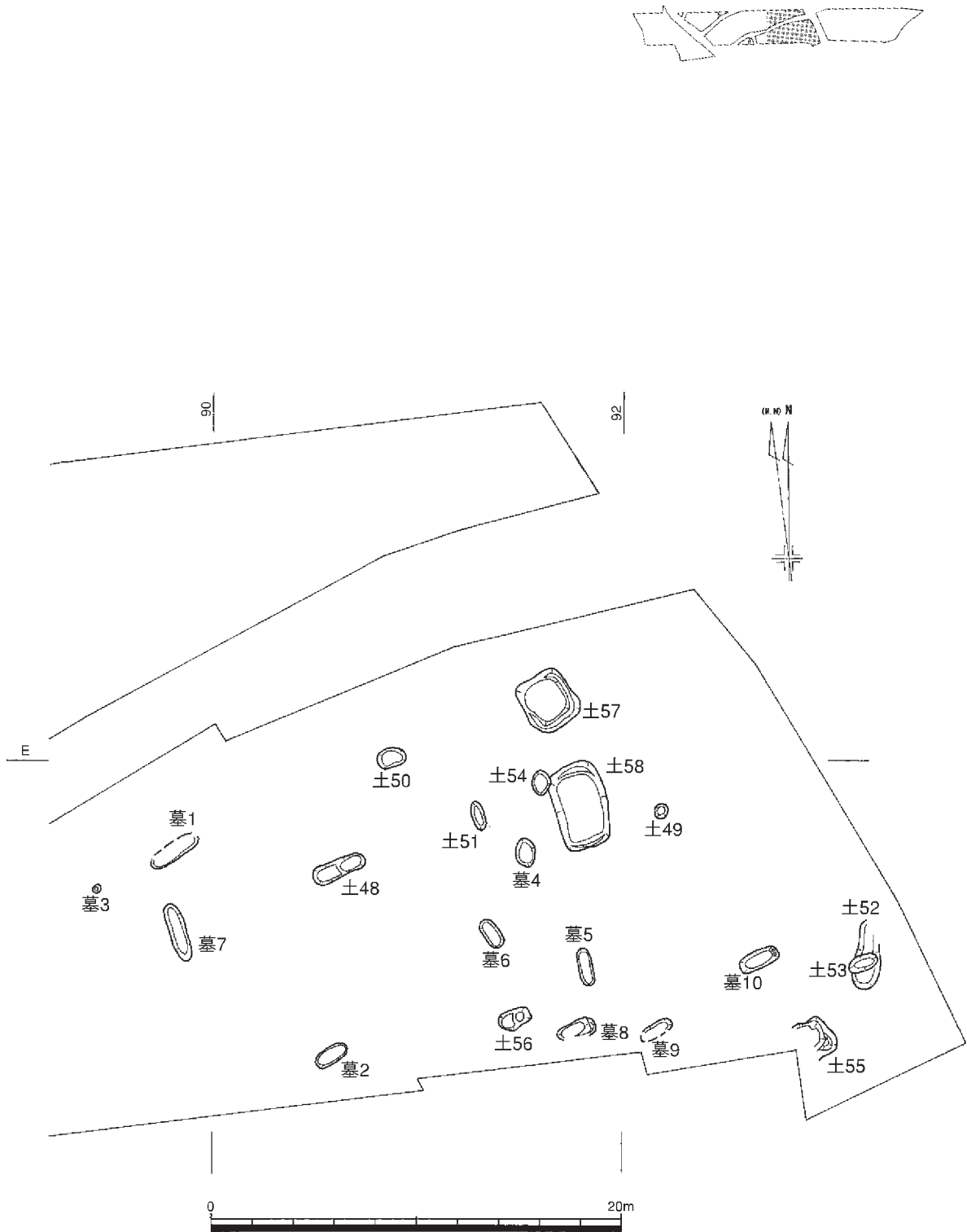
写真15 井戸1・土壙63調査風景(北西から)



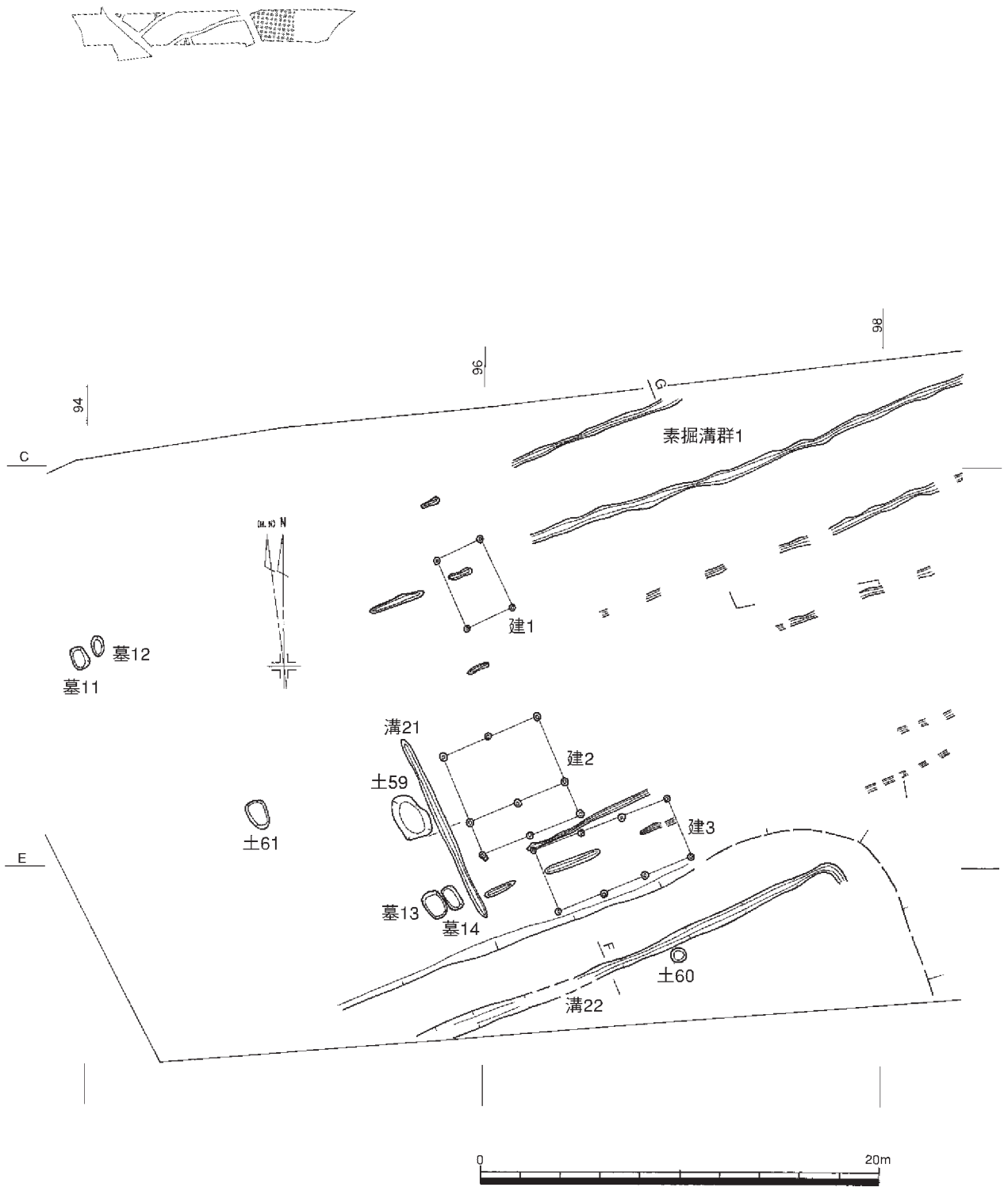
第110図 中世遺構全体図 (1/1,250)



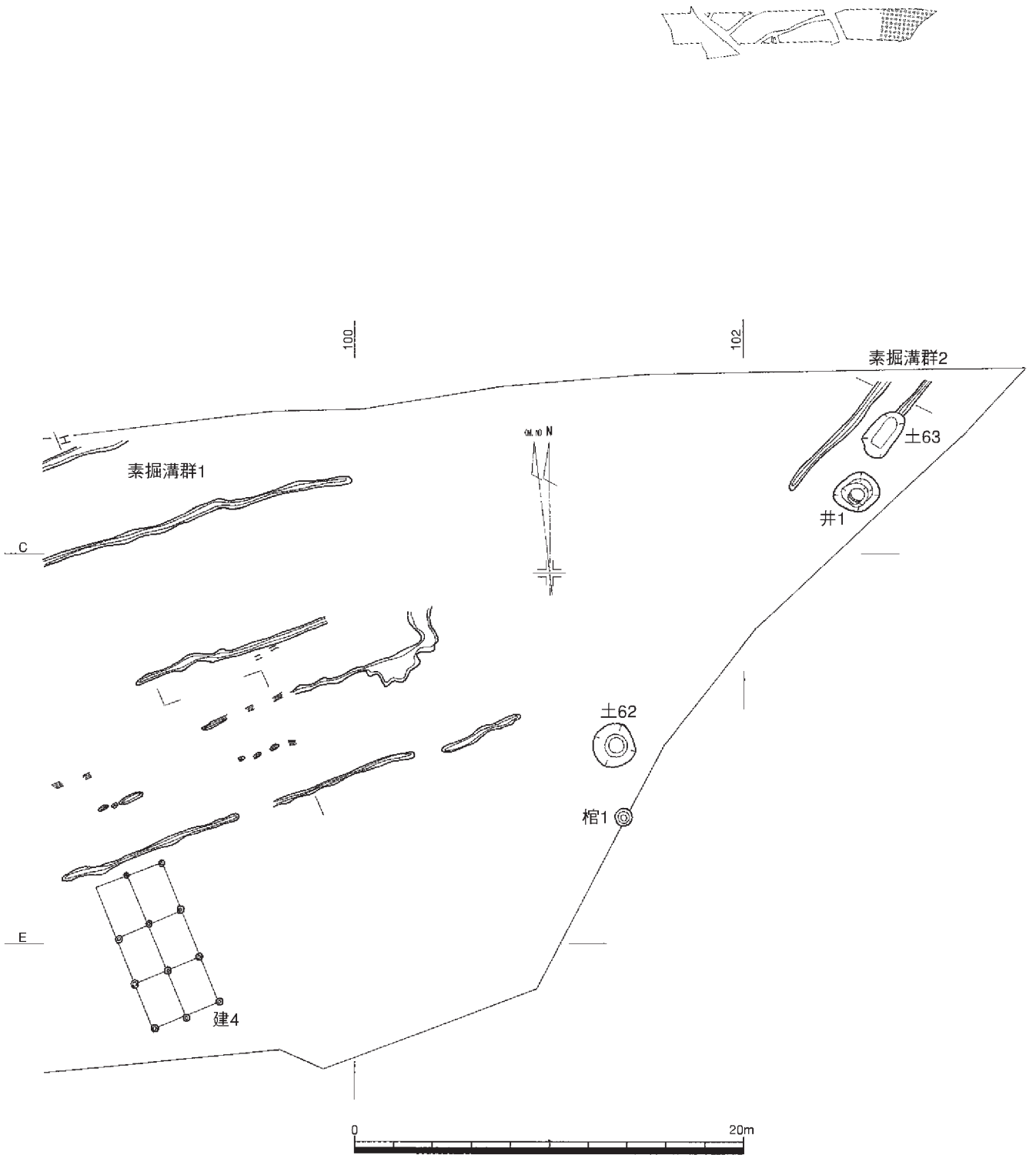
第111図 中世主要遺構図① (1/300)



第112図 中世主要遺構図② (1/300)



第113図 中世主要遺構図③ (1/300)



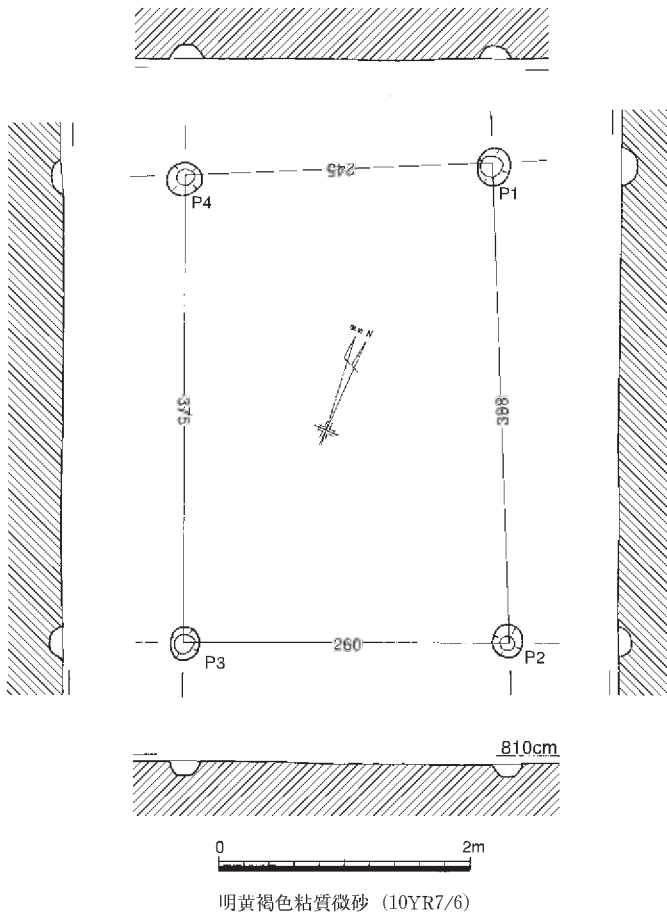
第114図 中世主要遺構図④ (1/300)



## 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物1 (第113・115図)

94～96Cの低位部から検出された桁行1×梁行1間の南北棟である。柱穴掘り方は円形で径約30cm、深さ10～20cm測る。桁行3.88m、梁行2.6m、床面積9.6㎡の小規模な建物である。遺物は皆無で時期



第115図 掘立柱建物1 (1/60)

決定が困難ではあるが、後述する掘立柱建物2・3などと棟方向が直交することなどから、13世紀代の建物ではないかと考える。また、建物を貫通する素掘溝との新旧関係は、建物廃棄後に素掘溝が掘られたものと推定している。(江見)

### 掘立柱建物2 (第113・116図、写真16)

掘立柱建物1の南10mから検出された桁行2×梁行1間の身舎に庇が付く東西棟建物で、棟方向はN-75°-Eを向く。柱穴掘り方は円形で、径約30cm、深さ25～50cmを測り、庇の柱穴は身舎に比べるとやや小振りで、浅いものであった。桁行5.4m、梁行3.6m、底部分1.8mを加えた床面積は28.4㎡を測る。遺物はP5から土師器小皿447が出土している。口径8.5cm、器高1.5cmを測り、底部はヘラ切りしている。

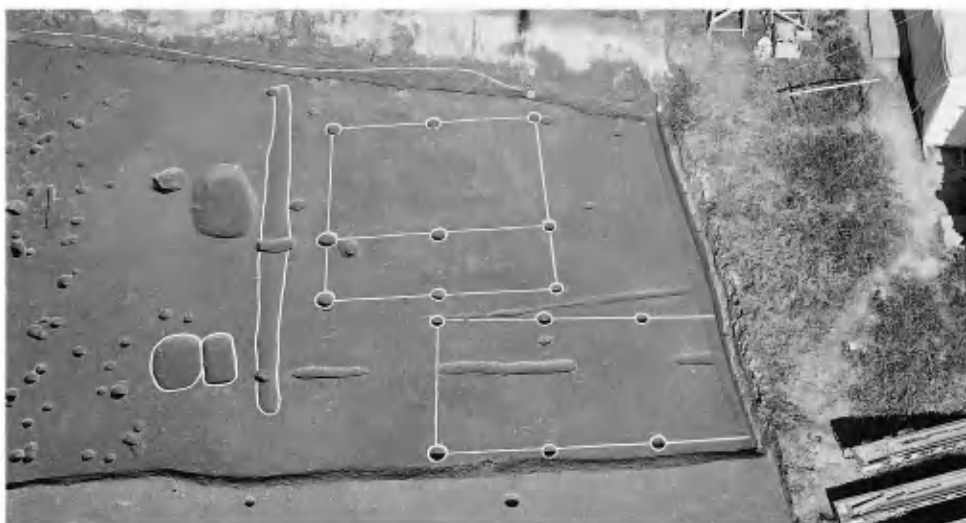
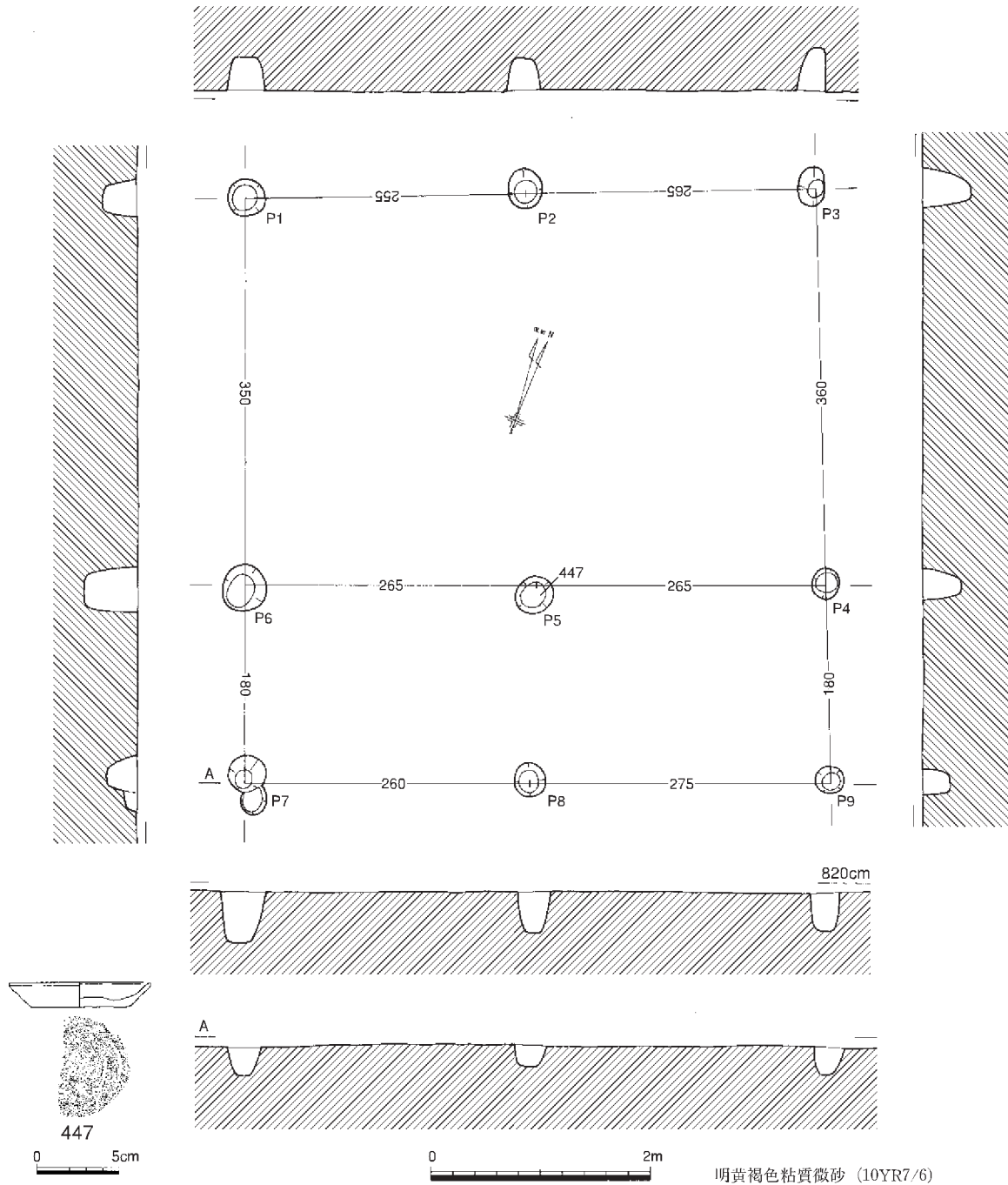


写真16 掘立柱建物2・3周辺(南から)

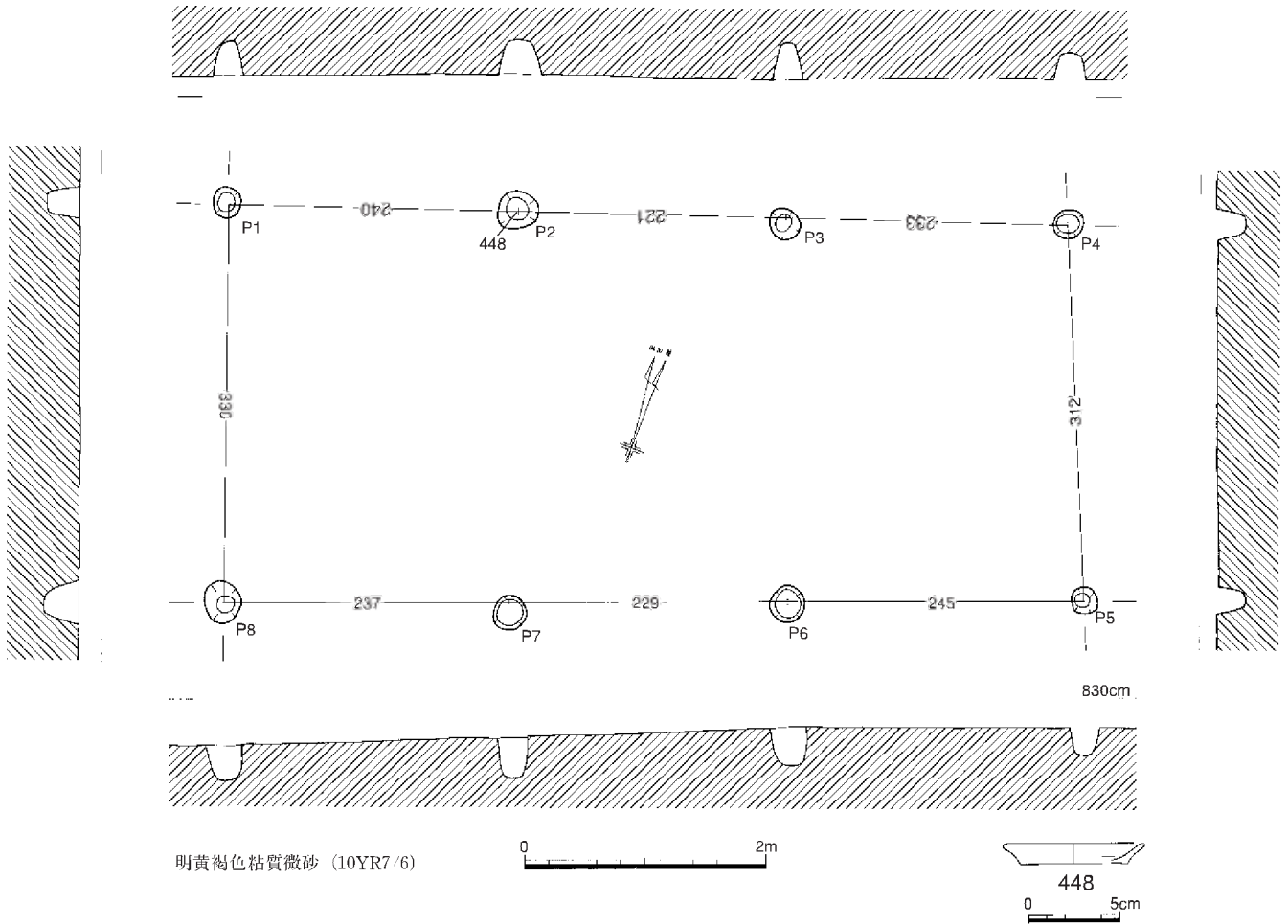


第116図 掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

この特徴から当建物は13世紀中葉以降に建てられたものと考えられる。(江見)

**掘立柱建物3** (第113・117図、写真16)

掘立柱建物2の南から検出された桁行3×梁行1間の東西棟建物で、棟方向は掘立柱建物2と同様のN-75°Eを向く。柱穴掘り方は円形で、径25～35cm、深さ20～35cmを測る。柱穴間距離は桁行が2.21～2.45mとややばらつきが認められ、梁行においても3.12・3.3mと西側がわずかながら長い。なお、床面積は22.7㎡を測る。遺物はP2から土師器小皿片448が出土した。口径7.5cm、器高1.1cmと掘立柱建物2の小皿より小振りである。また、掘立柱建物2・3は近接しており、併存は無理と判断されることなどから、当建物は13世紀後半以降に建てられたものと考えられる。(江見)



第117図 掘立柱建物3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

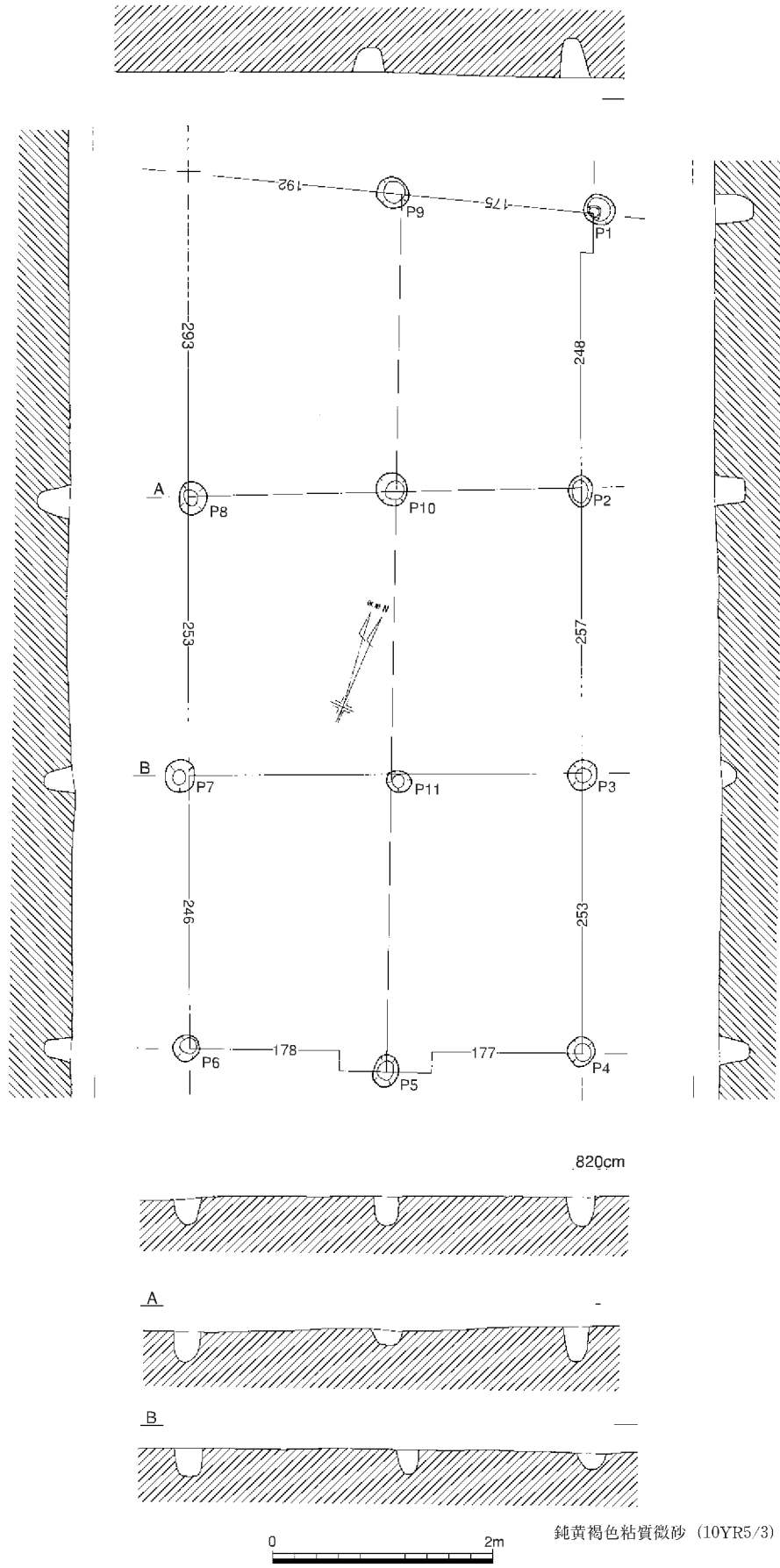
掘立柱建物4 (第114・118図、写真17、図版24)

98C・E境において検出した掘立柱建物で、柱穴の直径は約20~30cm、深さは約10~30cmを測る。掘り方の平面形は円形を呈しており、規模はほぼ一定している。また、断面形はいずれも上部に開くU字形であった。建物の規模は3×2間の総柱建物であり、建物北辺においてやや西に開く形になる。

柱間距離は桁行が2.46~2.93m、梁間が1.66~1.92m、床面積は28.1㎡を測る。建物の主軸方向は磁北より西に約16°振っており、若干西に傾く形となる。柱穴から遺物は出土しておらず、検出層位等から建物の時期は中世である可能性が高い。(田中)



写真17 掘立柱建物4 調査風景 (東から)



第118図 掘立柱建物4 (1/60)

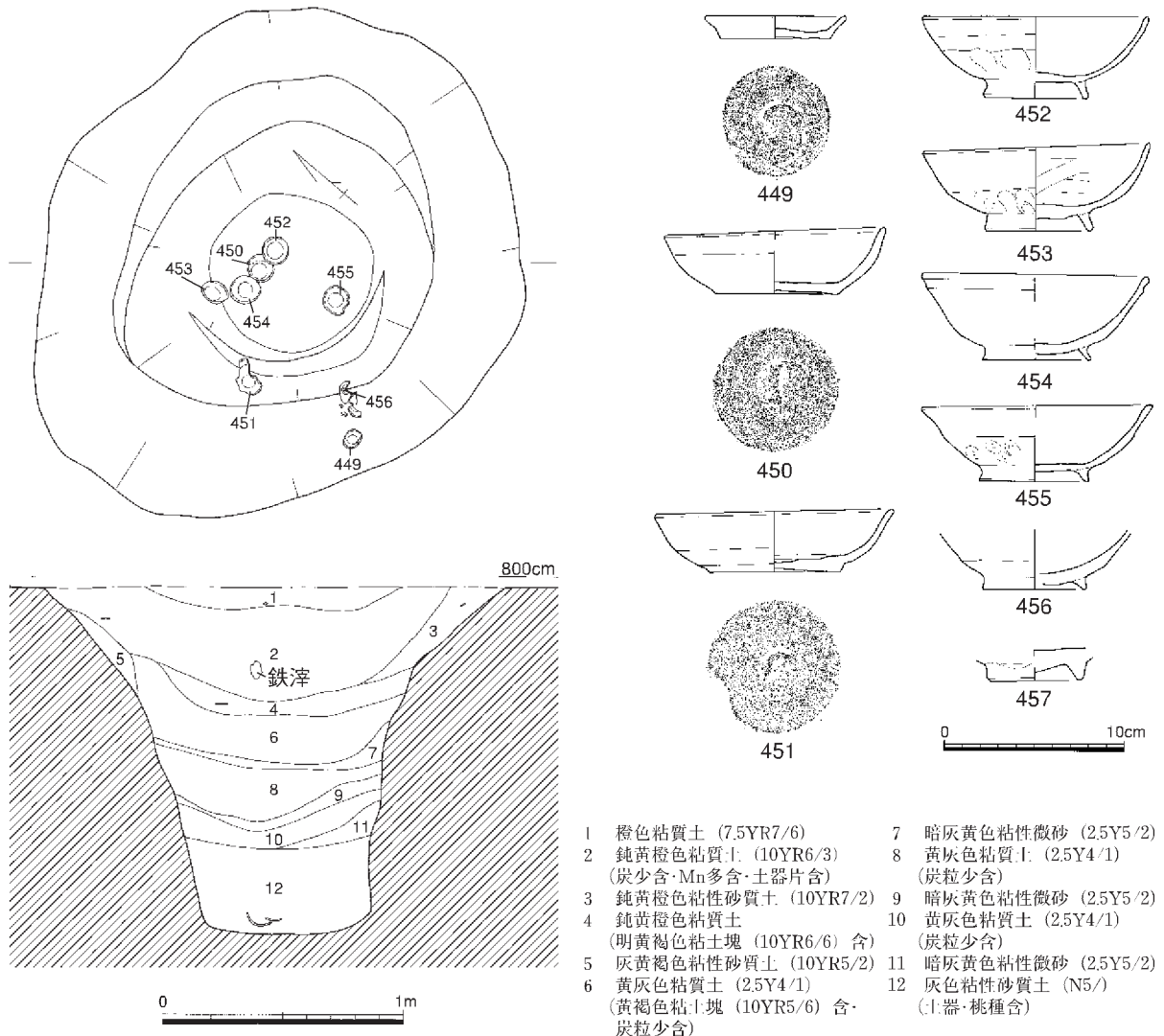
### 3 井戸

#### 井戸1 (第114・119図、写真15、図版24・48)

102Aの南西隅で検出した素掘りの井戸である。平面形は直径約2mを測る不整円形で、断面は検出面から約40cmの深さまでが逆台形、それより下は垂直におちる。底面までの深さは、検出面から約1.4mを測る。遺物取り上げの際の目安として、1～4層を上層、5～11層を中層、12層を下層と呼称した。中層は砂と粘質土の互層であり、下層である12層は掘り下げていくと徐々に水がしみ出てくる状況であった。

遺物は、土師器の椀・杯・皿および青磁の碗などの土器が出土した。449・451・456・457は上層からの出土。453～455は中層の10・11層から、450・452は下層から出土している。449・450・451の皿および杯は底部ヘラ切り。452～456の椀は、内面をヘラなどの工具でていねいになでつけ、外面は指頭圧痕がよく観察できる。出土した土器から、井戸1は13世紀後半にその役割を終え、短期間の内に埋没したと考えられる。

(松尾)

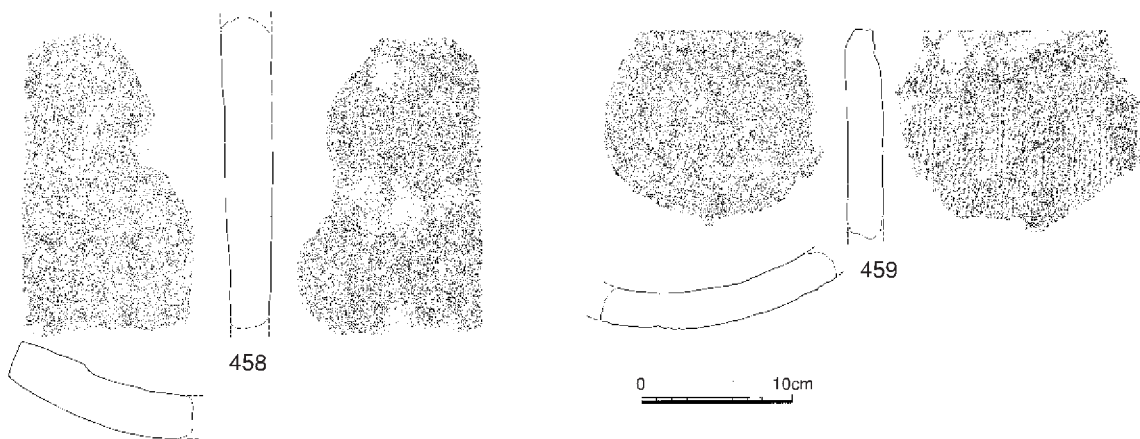
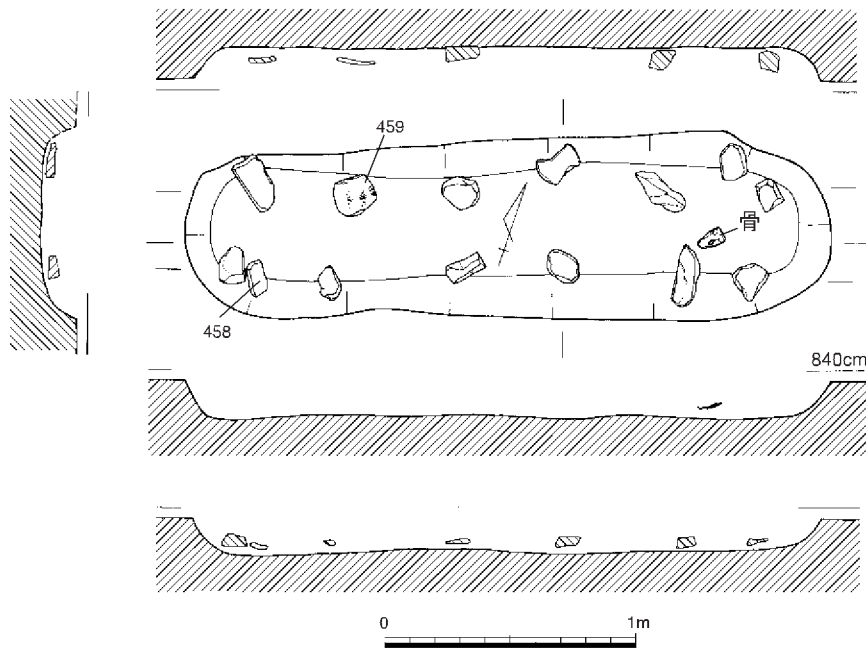


第119図 井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 4 土壙墓

## 土壙墓 1 (第112・120図、図版24)

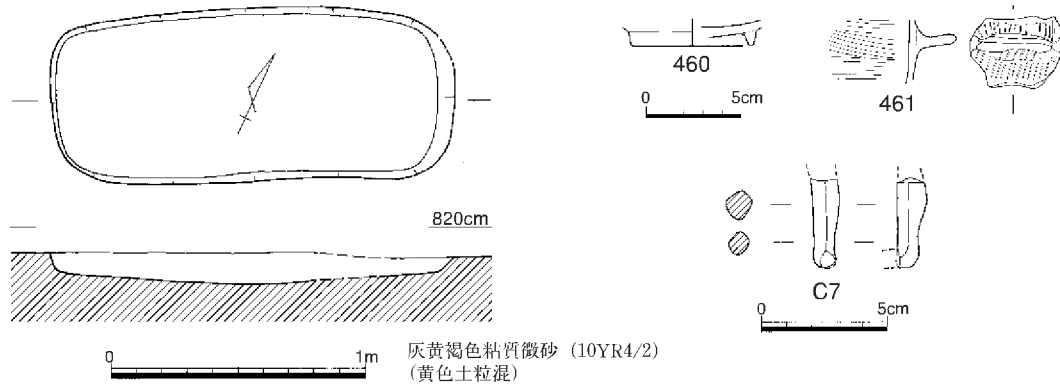
88Eの北東部に位置し、北辺一部を近世溝31に削平を受けて検出されたもので、平面長楕円形を呈す。主軸はN-70°-Eを向く。墓壙内には棺台に利用されたと推定される扁平な川原石および平瓦片が2列に並べられていた。墓壙東部中央南寄りからは頭蓋の一部と思われる骨片が墓壙底部からやや浮いた状態で検出されたことから、東部に身体を向けた伸展葬であったものと思われる。棺台に利用された瓦458・459は古代に属するものであるが、周囲の状況から中世墓と判断した。(江見)



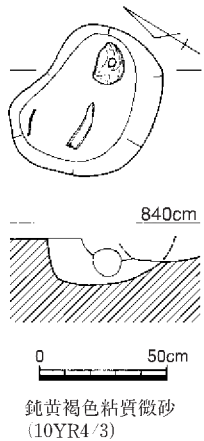
第120図 土壙墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/5)

## 土壙墓 2 (第112・121図、図版25)

90Eの南東部に位置する平面長方形を呈す。主軸はN-64°-Eを向き、規模は1.58m×68cm、深さ12cmを残す。埋土は灰黄褐色粘質微砂に黄色土粒が含まれる。遺物は土師器碗460・鍋461・土製脚C7が



第121図 土壙墓 2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



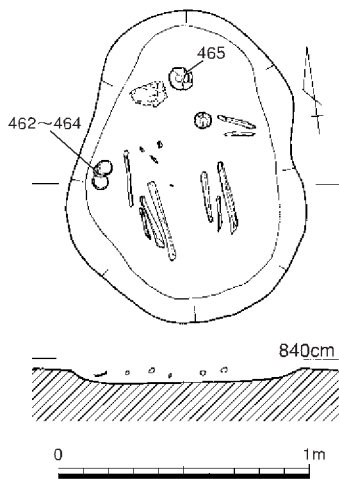
第122図 土壙墓 3 (1/30)

出土している。C 7は長さ3.5cm、径1.2cmを測り、動物の脚片と思われる。いずれにせよこれら遺物は混入したものと判断され、その特徴から、当土壙墓は13世紀以降に造られたものと思われる。(江見)

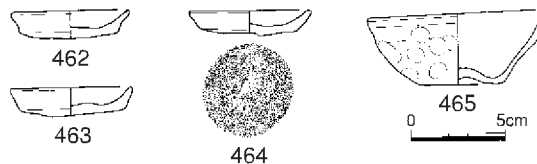
**土壙墓 3** (第112・122図、図版25)

88 Eの北東部に位置し、墓壙の南東部を溝31に削平を受けて検出された。平面不整楕円形を呈し、主軸はN-88°-Wを向く。規模は61×48cm、深さ18cmを残す。東に頭蓋が、西に下肢骨片が検出していることや、墓壙の規模から、身体を西に向け座位屈葬させたものと思われる。(江見)

**土壙墓 4** (第112・123図、図版25・48)



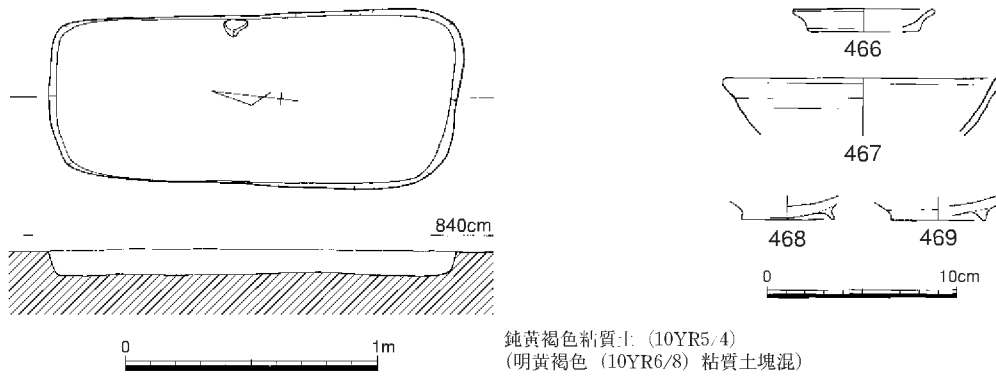
90 Eの北東部から検出された、平面不整楕円形を呈す墓壙で、主軸はN-9°-Eを向く。規模は1.25m×92cm、深さわずかに5cmを残す。墓壙北部に頭蓋痕跡を残し、南部に下肢骨が検出されている。頭蓋の東に土師器碗465、下肢骨の西側に小皿462～464が副葬されていた。土壙の規模および遺骸の状況から、14世紀中葉に仰臥屈葬された墓壙と考えられる。(江見)



第123図 土壙墓 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙墓 5** (第112・124図、図版26)

90 E東端中央で、土壙墓 4の南に位置する。長1.62m、幅68cmの南北に長い長方形を呈し、深さは10cmを測る。埋土は1層で、基盤に由来すると思われる黄色粘質土が斑状に混在していた。底面はほぼ平らで、壁面も垂直近く立ち上がる。箱形の棺ないしは板にのせて埋葬していたと想定される。

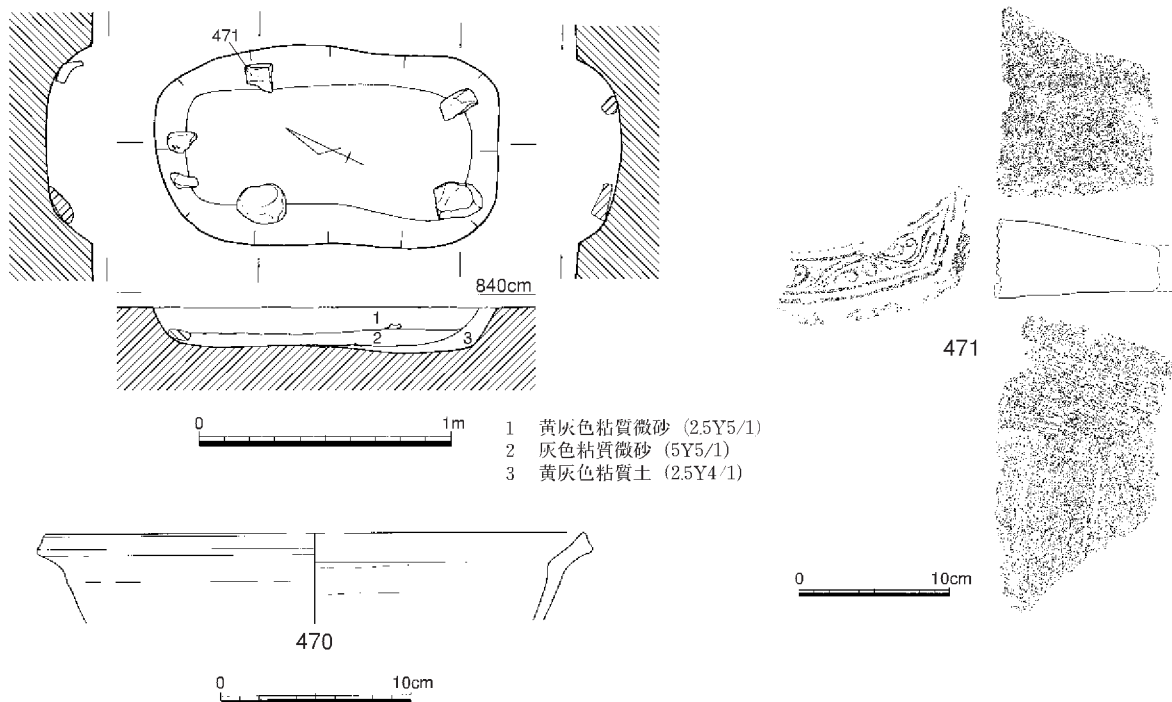


第124図 土壙墓5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

図示した土師器小皿や碗のほか青磁細片が出土している。13世紀中葉頃に比定される。(渡邊)

**土壙墓6** (第112・125図、図版26・48)

90E中央付近で、土壙墓5の西に位置する。長1.36m、幅78cm、深さ18cmを測る。平面形は隅丸長方形で底面と側面の境も不明瞭だが、境近くに石や瓦が置かれており、棺台であったと思われる。北端中央の2個1対の石は枕石であろう。軒平瓦471は棺台に転用されたもので、備中国分寺3類と同



第125図 土壙墓6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/5)

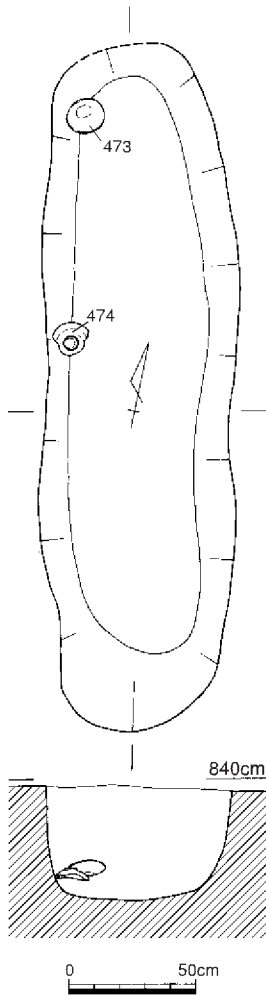
範の可能性がある。

第1層からは近世の備前焼甕細片が出土しており、棺腐朽後のくぼみに堆積した土と考えられる。土師器470の出土から中世と考えた。(渡邊)

**土壙墓7** (第112・126図、図版26・48)

88Eの東端中央で、土壙墓1の南に位置する。長2.72m、幅73cmの長大な掘り方で、深さも45





鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3)  
(炭粒・焼土多含)

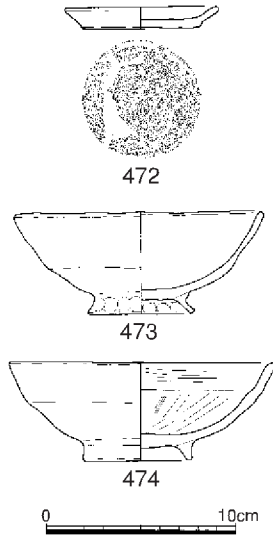
第126図 土壙墓7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

cmと深い。埋土は1層であるが、下半は粘質を帯びていた。

完形の土師器碗473・474が副葬されていたが、2点間には1m程の距離があり、2体の遺体を埋葬した可能性も考えられる。13世紀前半に比定される。(渡邊)

**土壙墓8** (第112・127図、図版27・54)

90E東端で、土壙墓5の南に位置する土壙墓である。東側と南側に約5cmの浅い段を有す。下部の規模は長1.4m、幅66cmの長方形を呈し、深さは32cmを測る。鉄釘M15が出土しており、箱形の棺を埋置していたと思われる。

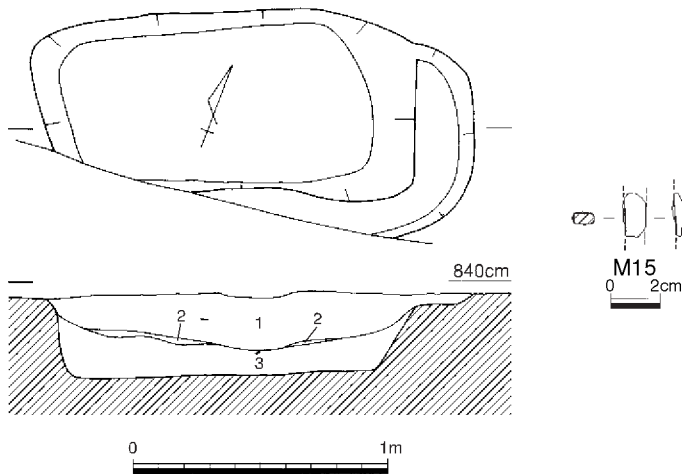


土師器碗・小皿細片が出土しており、中世と考えられる。(渡邊)

**土壙墓9** (第112・128図、図版27)

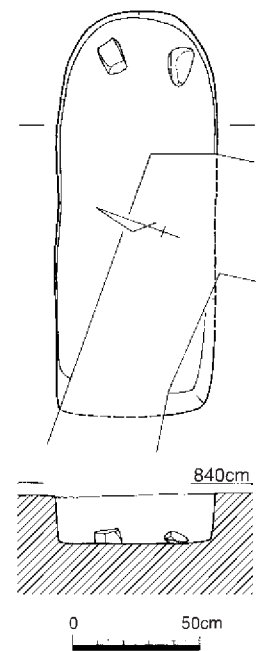
92Eで、土壙墓8の東に位置する土壙墓である。調査区南側溝により一部欠失するが、長1.61m、幅62cmの隅丸長方形を呈する。深さは19cmで、東端底面には棺台と思われる石が残存していた。

主軸方向が土壙墓8と一致するこ



- 1 灰色粘質微砂 (5Y5/1)  
(炭粒少含)
- 2 褐色粘質土 (10YR4/4)
- 3 黄灰色粘質微砂 (2.5Y4/1)  
(炭粒含)

第127図 土壙墓8 (1/30)・出土遺物 (1/3)



黄灰色粘質微砂 (2.5YR4/1)  
(炭粒少含)

第128図 土壙墓9 (1/30)

とから、ほぼ同時期に埋葬されたと想定される。中世に比定される土師器碗細片が出土している。(渡邊)

**土壙墓10** (第112・129図、図版27・49)

92E中央近く、土壙墓9の北東に位置する。西端および東端がテラス状に一段高い。上面で長1.85m、幅68cm、下部で長1.35m、幅約50cm、全体の深さ21cmを測る。中央部は柱穴で削平を受けている。

土師器皿475~477は手捏ねで成形しており、京都系の土師小皿と考えられる。特に477の胎土は精良で、内面も丁寧になでている。477は掘り方底より少し浮いた状態で壁面にもたれかかるような状況で、碗高台破片479は477の下から出土している。13世紀後半に比定される。(渡邊)

**土壙墓11** (第113・130図)

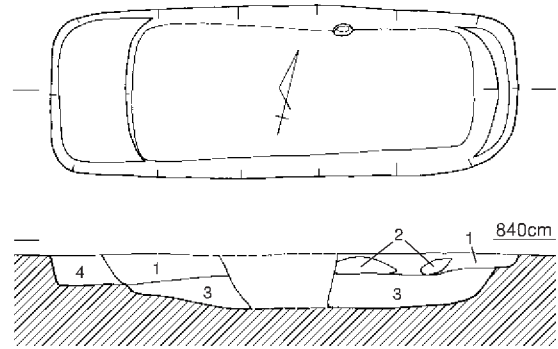
92Cの北東部から検出された平面楕円形を呈す墓壙で主軸はN-23°-Wに向く。規模は1.06m×71cm、深さ15cmを残す。墓壙北部中央から顔面を西に向けた状態の頭蓋が検出され、南部から同じく膝頭を西に向けた下肢骨が検出されている。墓壙の規模および遺骸の状況から身体を西に向け横臥屈葬されたものと思われる。副葬品は無かったが周囲の状況から中世墓と判断される。(江見)

**土壙墓12** (第113・130図)

土壙墓11の東に接して検出された平面楕円形を呈す墓壙で、主軸はN-12°-Wを向き、土壙墓11よりわずかに北に振れている。規模は93×62cm、深さ10cmを残す。墓壙北部中央から歯を数本確認したが、調査中に台風に遭い水没し、現位置を留めず流れたため詳細を把握することは出来なかった。(江見)

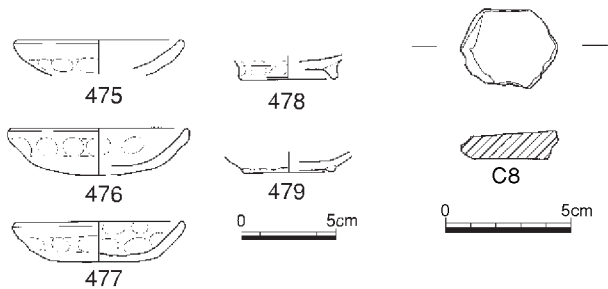
**土壙墓13** (第113・131図、写真14、図版28・49)

94Eの北東に位置し、後述する土壙墓14と並んで検出された、平面隅丸方形を呈す墓壙で、主軸はN-27°-Wを向く。1.3×1.08m、深さ20cmを残す墓壙

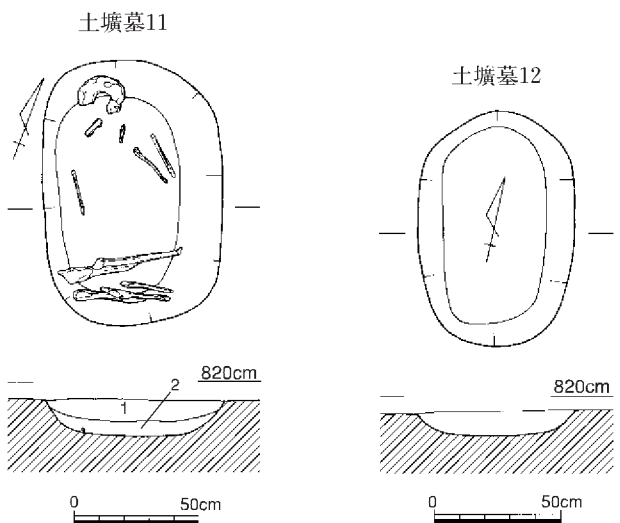


0 1m

- 1 灰オリーブ色粘質微砂 (5Y4/2)
- 2 黄褐色砂質土塊 (10YR5.6)
- 3 灰色粘質微砂 (5Y4/1)
- 4 黄灰色粘質微砂 (2.5Y5/1)

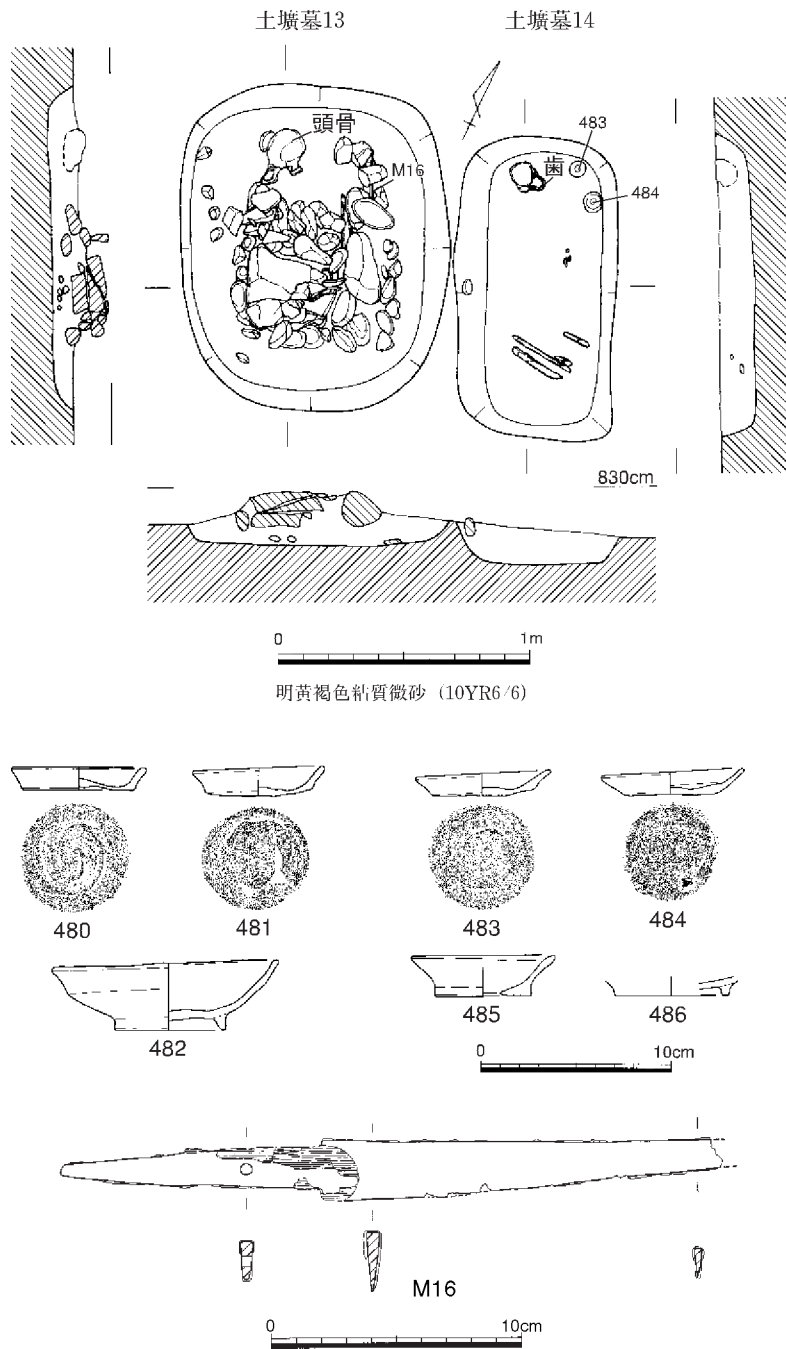


第129図 土壙墓10 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4.2)
  - 2 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)
- 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)

第130図 土壙墓11・12 (1/30)



第131図 土壙墓13・14 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

に、長さ約90cm、幅約70cmに拳大の川原石で囲いを設け、その中に遺体を納め、平石あるいはやや大きめの円礫で覆った状況であった。頭蓋は正面からやや東に向き、膝頭も東に向けた状態であったため、身体を東に向けた横臥屈葬であったと思われる。遺物は遺骸の東から切っ先を北に向けたM16、また、土師器小皿480・481・椀482などが、

西から出土している。遺物の特徴から13世紀前半に埋葬されたものであろう。(江見)

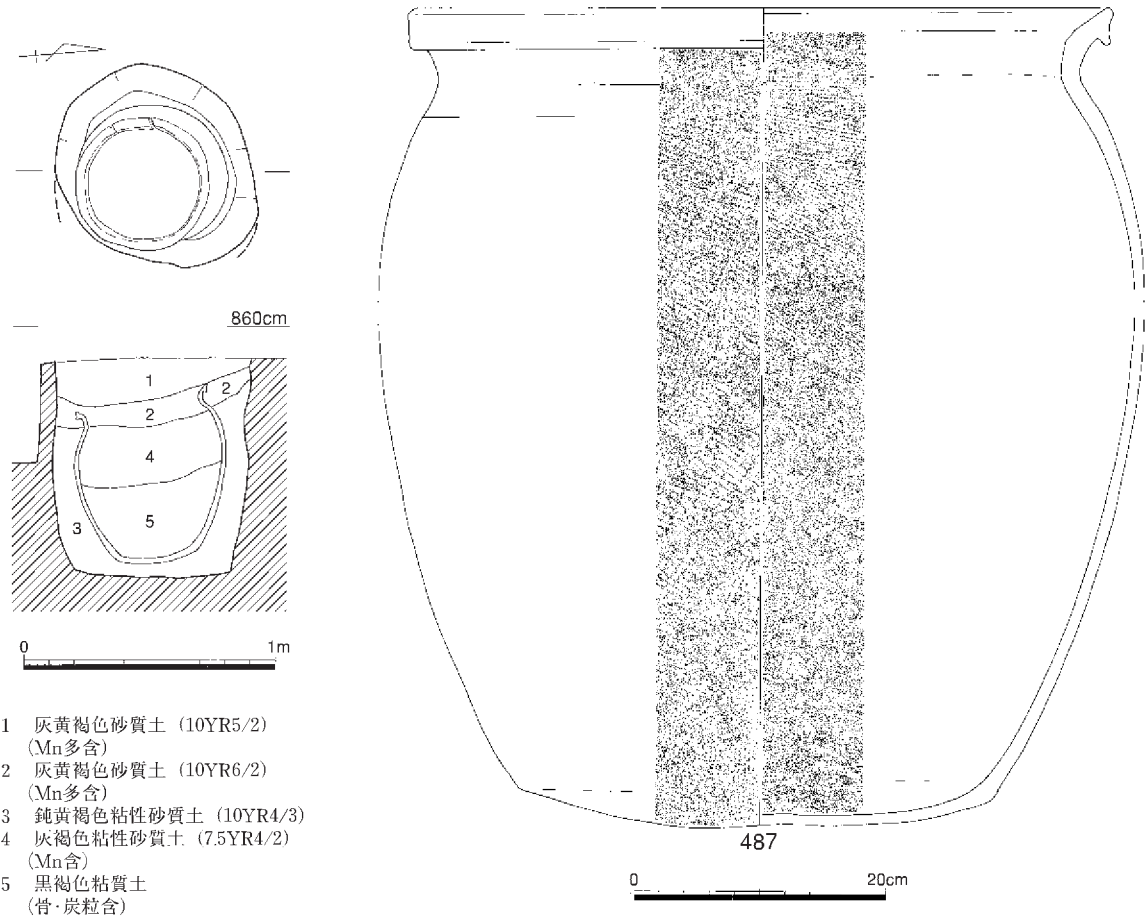
**土壙墓14** (第113・131図、写真14、図版28・49・54)

土壙墓13の東に接して検出された、平面長方形を呈す墓壙である。規模は1.2m×65cm、深さ15cmを残す。墓壙北端からは東に向く頭蓋が、南部からは膝頭が西に向く下肢骨が検出されたことから、身体を西に向け横臥屈葬されたものと判断される。また、副葬された小皿483・484の特徴は土壙墓13とほぼ同様である。(江見)

## 5 土器棺

**土器棺1** (第114・132図、写真13、図版28・49)

100Cの中央やや南東寄りで、大字南溝手と窪木を画する畦上に位置する。掘り方の平面形は不整形円形で、直径約80cmを測る。断面形は筒状を呈し、底面までは約85cmを測る。棺として用いられた亀山焼の大甕は、東南にやや傾いた状態で出土した。調査当初、農業用の水甕等であると推測したが、5層である粘性の強い黒褐色土と共に人骨が出土したことから、土器棺と判断した。なお、大甕内からは、銅銭などの遺物は出土していない。16世紀後半と思われる。(松尾)



- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)  
(Mn多含)
- 2 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)  
(Mn多含)
- 3 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)
- 4 灰褐色粘性砂質土 (7.5YR4/2)  
(Mn含)
- 5 黒褐色粘質土  
(骨・炭粒含)

第132図 土器棺 1 (1/30)・出土遺物 (1/6)

## 6 土壌

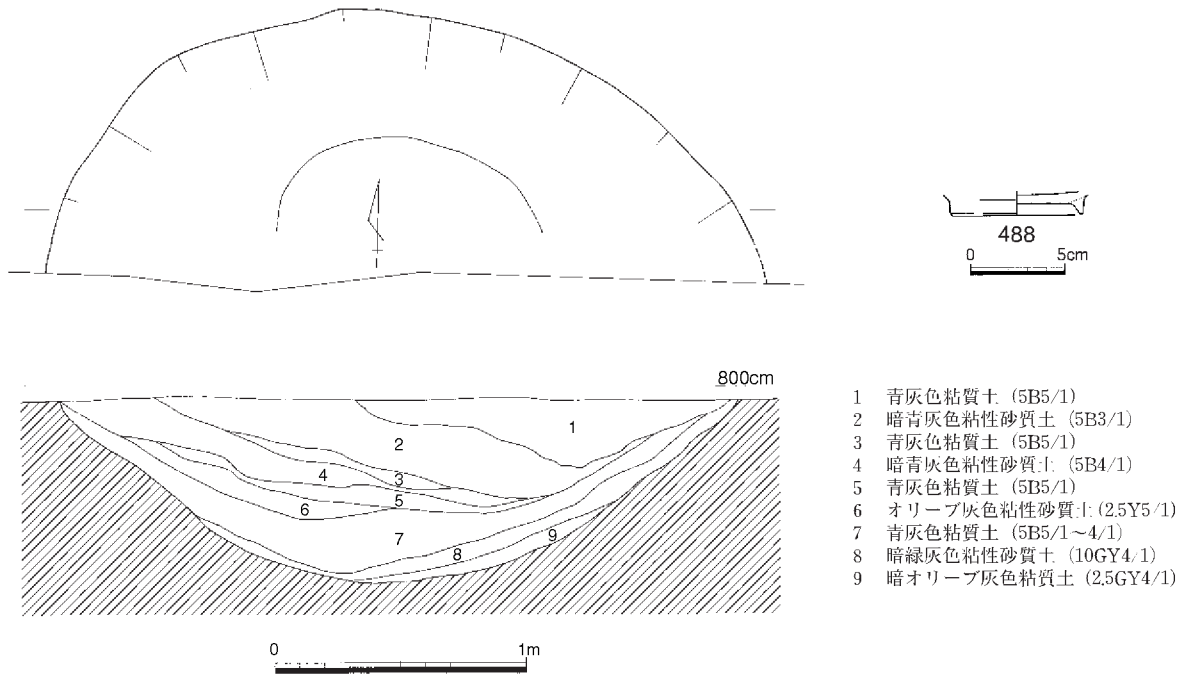
### 土壌47 (第110・133図、写真18)

80 I に位置する土壌で、南側半分以上は調査区外に延びるため、完全に調査はできなかった。埋土は青灰色系の粘質土や砂質土で、いずれも締まりはない。断面の様子から何度か掘り返した様子がうかがえた。

出土遺物は土器の小片のみで、488を図示し得た。488は土師器碗の底部で、貼り付け高台が巡る。時期は12世紀後半と考えられる。  
(上椀)

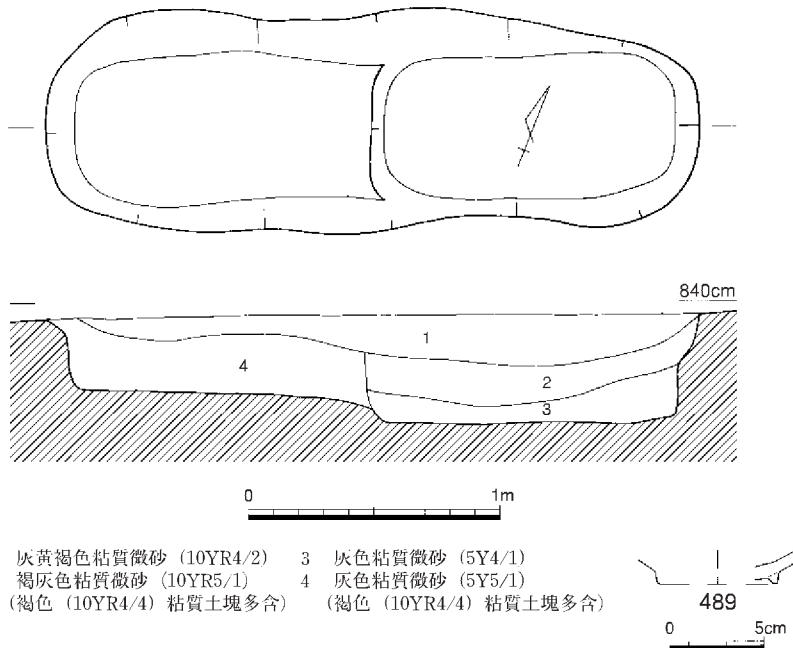


写真18 土壌47調査風景(北から)



第133図 土壌47 (1/30)・出土遺物 (1/4)

- 1 青灰色粘質土 (5B5/1)
- 2 暗青灰色粘性砂質土 (5B3/1)
- 3 青灰色粘質土 (5B5/1)
- 4 暗青灰色粘性砂質土 (5B4/1)
- 5 青灰色粘質土 (5B5/1)
- 6 オリーブ灰色粘性砂質土 (2.5Y5/1)
- 7 青灰色粘質土 (5B5/1~4/1)
- 8 暗緑灰色粘性砂質土 (10GY4/1)
- 9 暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY4/1)



第134図 土壌48 (1/30)・出土遺物 (1/4)

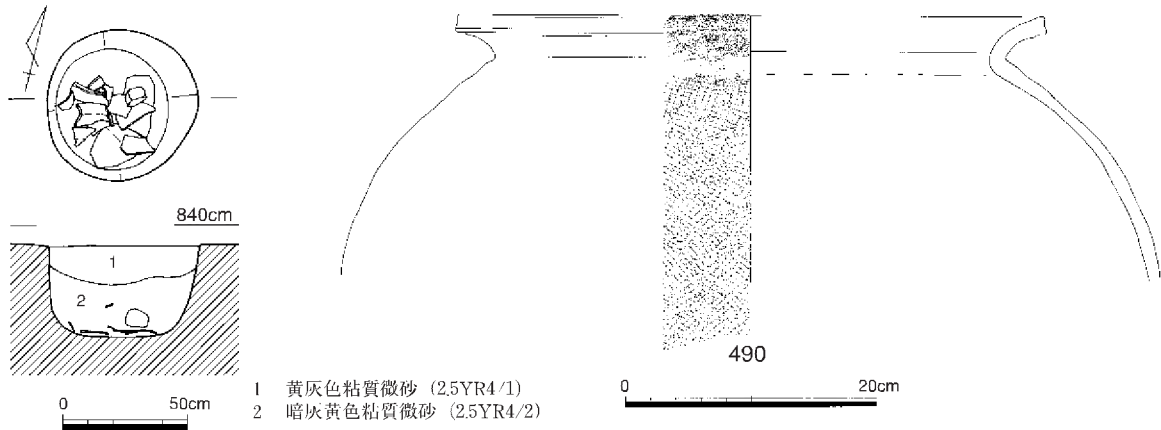
- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
  - 2 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)
  - 3 灰色粘質微砂 (5Y4/1)
  - 4 灰色粘質微砂 (5Y5/1)
- (褐色 (10YR4/4) 粘質土塊多含) (褐色 (10YR4/4) 粘質土塊多含)

土壌48 (第112・134図、  
図版29)

90Eの北西部から検出された、平面不整長楕円形を呈す土壌で2個の土壌からなり、最終的に同時に埋まったものである。西側に長さ1.7m以上の土壌が掘りこまれ、これが第4層によって埋め戻された後に新たに東側に土壌が掘り込まれたもので、最終的に同時に埋まったものである。遺物は少なく、図示し得た土師器椀489の年代観は13世紀代を示す。(江見)

土壌49 (第112・135図、図版29)

92Eの北西部から検出された平面円形を呈す土壌である。底部は平坦で壁は急に立ち上がる。規模は径約60cm、深さ36cmを測る。埋土は2層からなり、土壌下部には亀山焼の大甕片490が廃棄されたように重なり合って出土している。なお、遺物は甕の上半部のみであった。外面に細かな格子目タタキの残るもので、14世紀中葉の年代観をもつものである。(江見)



第135図 土壌49 (1/30)・出土遺物 (1/6)

**土壌50** (第112・136図、図版29)

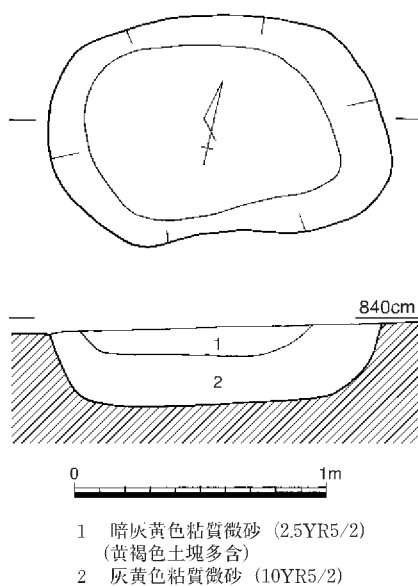
90Cの南端中央に位置し、土壌49西方約14mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部は平坦で壁は斜め外方に立ち上がる。規模は1.32m×87cm、深さ31cmを測る。埋土は2層からなり、遺物はそれに混じって中世土器細片が出土するのみであった。(江見)

**土壌51** (第112・137図、図版30)

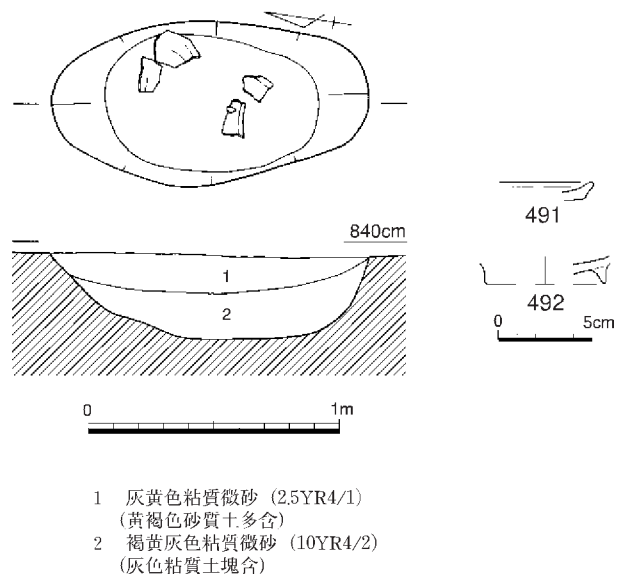
90Eの北東部に位置し、土壌50の南東5mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部は平坦で壁は斜め外方に立ち上がる。埋土は2層からなり、遺物は土師器の鍋・小皿491・碗492の破片が出土しており、その年代観は13世紀代を示す。(江見)

**土壌52** (第112・138図、図版30)

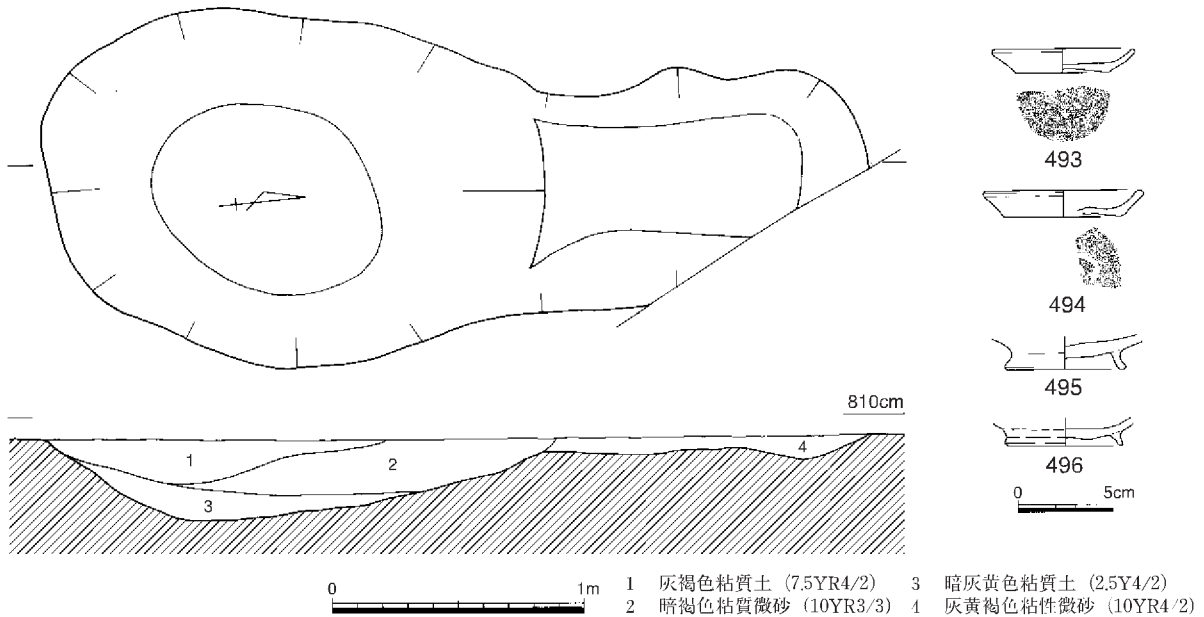
92Eのほぼ中央に位置し、土壌51の南東約20mから検出された楕円形を呈す土壌である。南北2個の土壌からなり、南の土壌は底部が窪み壁は緩やかに外方に立ち上がっている。埋土は4層からなり、遺物は主に南の土壌から土師器小皿493・494・碗495・496などが出土している。小皿の口径は7.4～



第136図 土壌50 (1/30)



第137図 土壌51 (1/30)・出土遺物 (1/4)

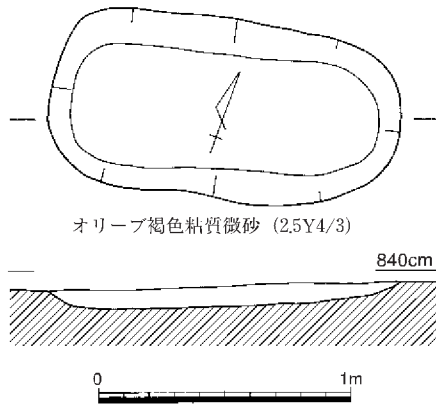


第138図 土壌52 (1/30)・出土遺物 (1/4)

8.1cm、椀の底径は6cm余りを測り、これらは13世紀代を示すものと考えられる。(江見)

土壌53 (第112・139図)

土壌52の上部から検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.4m×72cm、深さ8cmを測る浅いものであった。底部は平坦で、壁は緩く外方に立ち上がる。埋土は締まったオリーブ褐色の粘質微砂であった。遺物はわずかに中世土器細片および瓦片が出土したが、図示し得るものは皆無であった。(江見)



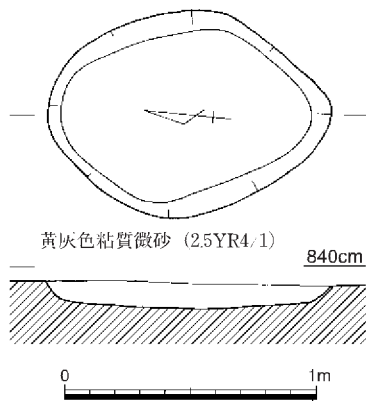
第139図 土壌53 (1/30)

土壌54 (第112・140図、図版30)

90Eの北西部に位置し、土壌53の北西18mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.13m×82cm、深さ10cmを測る浅いものである。底部は平坦で壁は斜め外方に立ち上がる。埋土はわずかに炭粒の混ざる黄灰色粘質微砂であった。遺物はわずかに中世時細片が出土するのみで、図示し得るものは皆無であった。(江見)

土壌55 (第112・141図、図版31)

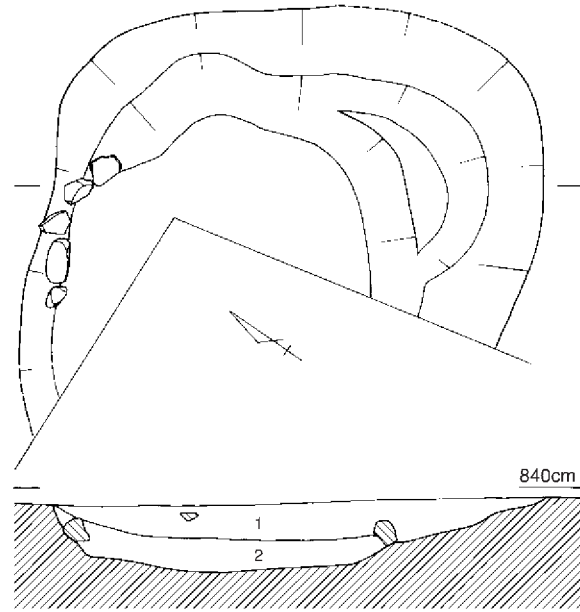
92Eの南西部に位置し、土壌54の南東18mから検出された平面不整隅丸方形を呈す土壌である。底部はほぼ平坦で壁は北側が比較的急に立ち上がるのに対し、南側は緩やかに外方に立ち上がっていた。規模は一辺が2m余りを測る比較的大きなもので、壁の傾斜変換点からは故意に配置されたのか、礫を並べたように検出された。埋土は2層からなる。遺物は土器細片が出土するに留まった。(江見)



第140図 土壌54 (1/30)

土壙56 (第112・142図、図版31)

90Eの南東部に位置し、土壙55の東方15mから検出された平面楕円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で段が付き、壁は斜め外方に立ち上がる。規模は1.58m×98cm、深さ約80cmを測る。埋土は2層からなり、いずれも小土塊を混入するもので、意識的に埋められた土壙である。遺物はわずかに土師器椀片497が出土するに留まった。高台の特徴から当土壙は13世紀代に埋められたものと考えられる。(江見)

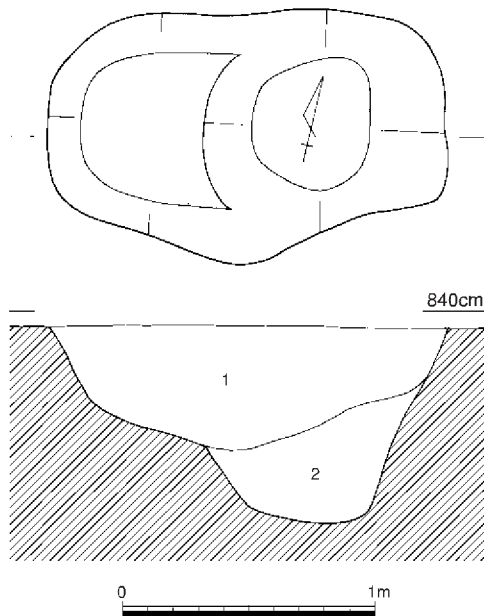


1 黄灰色粘質微砂 (2.5YR4/1) 2 灰色粘質微砂 (5Y)

第141図 土壙55 (1/30)

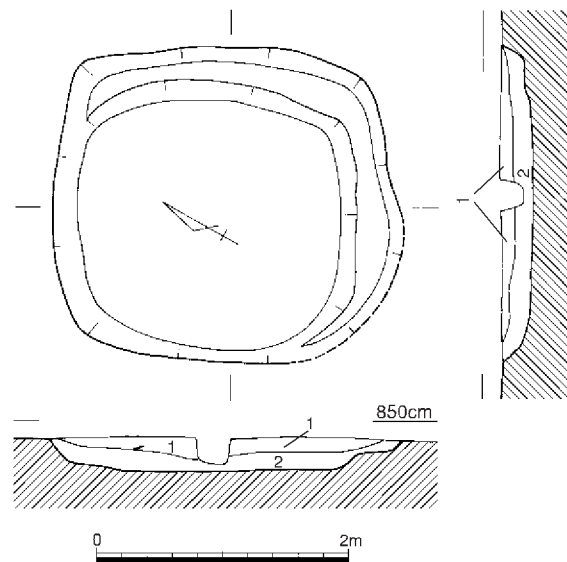
土壙57 (第112・143図、図版31)

90Cの南東部に位置し、土壙56の北方15mから検出された、平面方形を呈す大形の土壙である。底部はほぼ平坦で、東から南にかけて段が巡る規模は2.75m×2.5m、深さは約30cmを測る。埋土は2層からなり、下層に小土塊が多く混入することから、当土壙も意識的に埋め戻された可能性が高い。遺物はわずかに土師器椀片498が出土しており、13～14世紀代の特徴を示す。(江見)



1 黄灰色粘質微砂 (2.5Y5/1)  
(黄灰色 (2.5Y5/4)  
粘質微砂大塊多含)  
2 褐灰色粘質微砂 (10YR4/2)  
(黄灰色 (2.5Y5/4)  
粘質微砂小塊含)

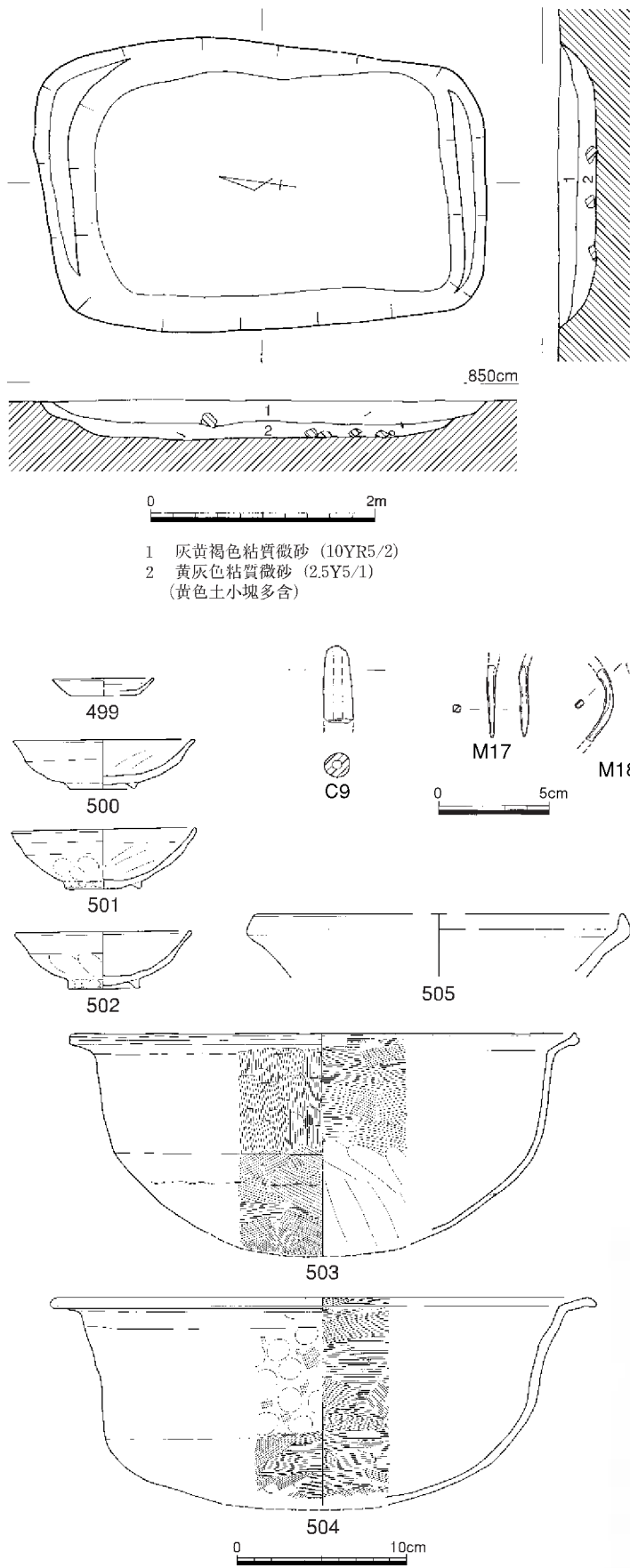
第142図 土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)  
2 褐灰色粘質土 (10YR5/1)  
(黄色土小塊多含)

第143図 土壙57 (1/60)・出土遺物 (1/4)





第144図 土壙58 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

**土壙58** (第112・144図、写真19、図版32・49・54)

90Eの北東角に位置し、土壙57の南数mから検出された、平面長方形を呈す、土壙57と同様の大形土壙である。底部はほぼ平坦で壁は斜め外方に立ち上がる。南北両壁際には狭い棚状の段をもつ。規模は4×2.6m、深さ35cmを測り、床面積は6㎡余りの広さをもつ。埋土は2層からなり、特に下層は多くの小土塊が混入しており、意識的に埋められた土と判断される。また、土壙底部からは投棄されたとと思われる川原石と、土師器小皿499・碗500～502・鍋503・504、東播系こね鉢505、土錘C9、釘M17・M18などが出土している。碗は口径11cmにも満たず、高台は退化しており、こね鉢の口縁は上方に摘み出されたままに仕上げられているなど遺物の特徴から、当土壙は13世紀後半から14世紀前半には廃棄されたものと考えられる。(江見)



写真19 土壙58 (南から)

**土壙59** (第113・145図)

94Cの南東角から検出された平面不整楕円形を呈す土壙である。底部は平坦で、壁は斜め外方に立ち上がる。規模は2.4×1.5m、深さ30cmを測る。埋土は2層からなり、上下層間は埋め戻されたことが明瞭となる状況であった。遺物はわずかに14世紀前半の年代観を示す土師器碗506・507が出土するのみであった。(江見)

**土壙60** (第113・146図)

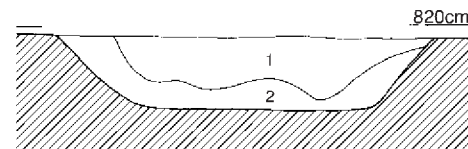
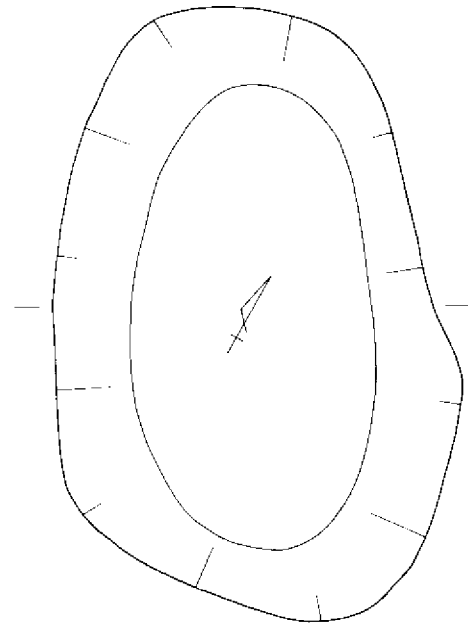
96Eの中央北寄りに位置し、土壙59の南東15mから検出された平面楕円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は緩く外方に立ち上がる。規模は98×72cm、深さ22cmを測る。埋土は3層からなり、自然堆積の状況が認められた。遺物は土師器の小皿508～510をはじめ、青磁細片や鉄滓なども出土しているが、図示し得たのは小皿のみである。口径4.8～5.7cmを測り、いずれも底部はヘラ切りされており、当土壙は13後半～14世紀前半に埋没したのものと考えられる。(江見)

**土壙61** (第113・147図)

94Cの中央南端に位置し、土壙59の西8mから検出された平面長方形の土壙である。底部は平坦で、壁は急に立ち上がる。規模は1.32m×98cm、深さ45cmを測る。埋土は3層からなり、特に第1・3層には小土塊が多く含まれており、意識的に埋め戻されたものと判断された。遺物はいずれも破片で土師器小皿511・碗512・513・東播系こね鉢514などが出土した。碗は口径が9.3cmの小振りなもので、こね鉢がやや古い様相を呈すものの、14世紀中葉には廃絶した土壙であろう。(江見)

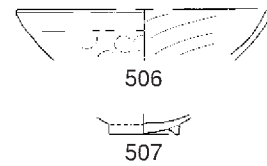
**土壙62** (第114・148図、図版32・49)

100Cの中央やや東寄りで、土器棺1の北側に位置する。平面形は直径約2mを測る円形を呈する。断面形は、底面が平坦の逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは約70cmを測る。出土遺物は、土師器の碗・杯・皿、白磁の碗・皿が出土している。



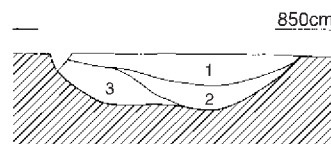
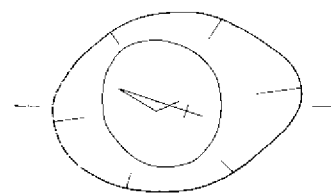
0 1m

- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR5/4)
- 2 灰褐色粘質微砂 (7.5YR5/2)



0 10cm

第145図 土壙59 (1/30)・出土遺物 (1/4)



0 1m

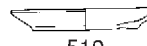
- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
- 2 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)
- 3 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)



508



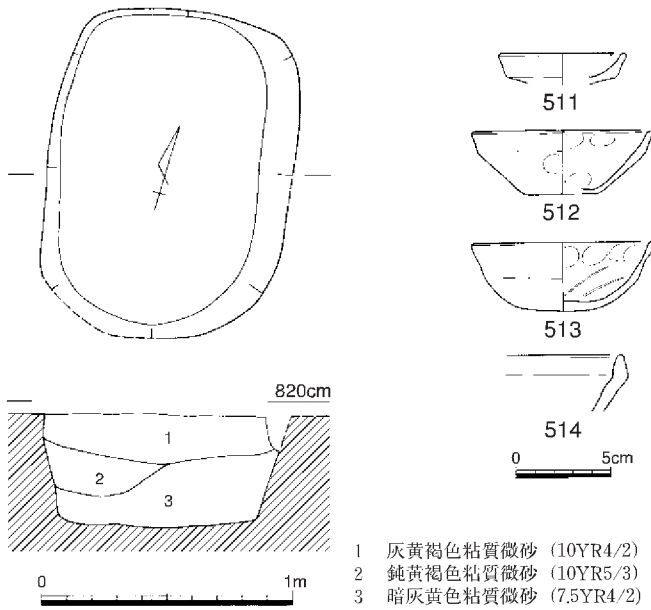
509



510

0 5cm

第146図 土壙60 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)
- 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR5/3)
- 3 暗灰黄色粘質微砂 (7.5YR4/2)

第147図 土壌61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

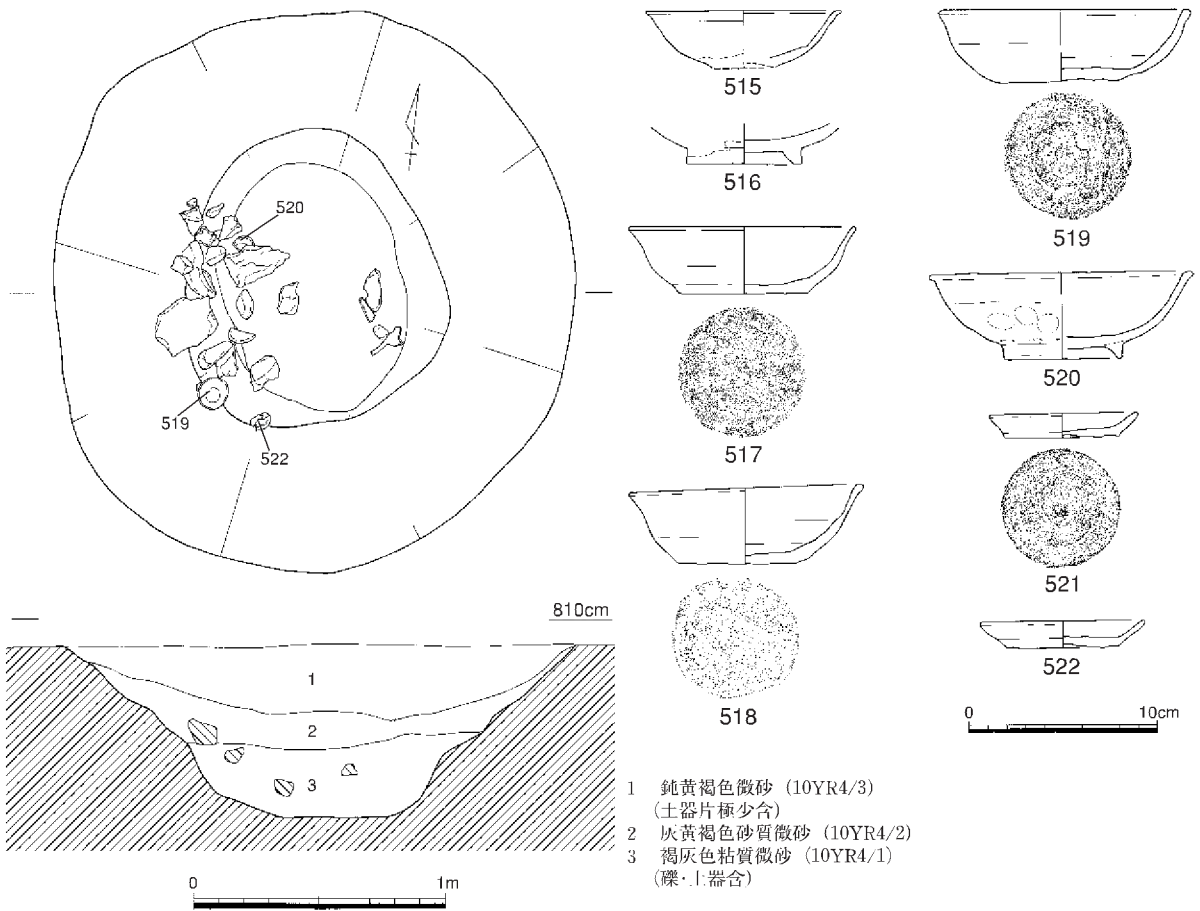
515～518・521は1層から、519・520・522は3層から出土している。なお、3層には多くの自然石（5～10cm程度）が含まれていた。石は土壌の西側に偏って出土していることから、土器等と共に西側より投げ込まれた可能性が大きいと思われる。

土壌の時期は、515・516の白磁が若干古い年代観を有する他は、ほぼ13世紀前半に収まる。（松尾）

**土壌63** (第114・149図、写真15、図版32・50)

102Aの南西で、井戸1の北東に位置する。平面形は楕円形で、長軸2.75m、短軸1.53mを測る。断面形は逆台形で、

検出面から底面までの深さは52cm。遺物取り上げの際の目安として、1・2層を上層、3・4層を中層、5層を下層とした。上層からは528・536の土師器が出土している。中層からは524・526～529・541が、下

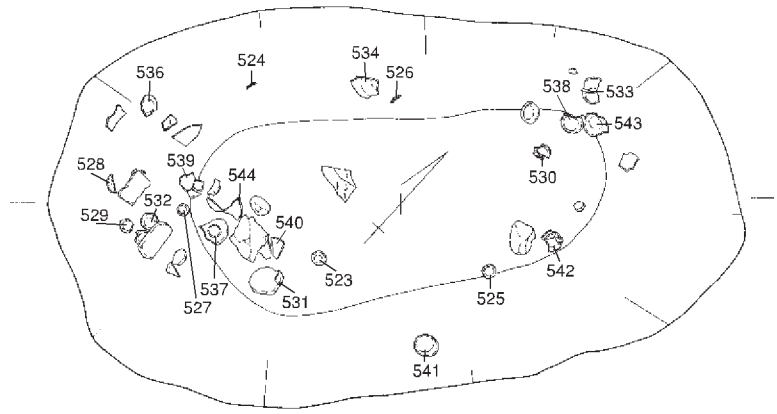


- 1 鈍黄褐色微砂 (10YR4/3)  
(土器片極少含)
- 2 灰黄褐色砂質微砂 (10YR4/2)
- 3 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)  
(礫・土器含)

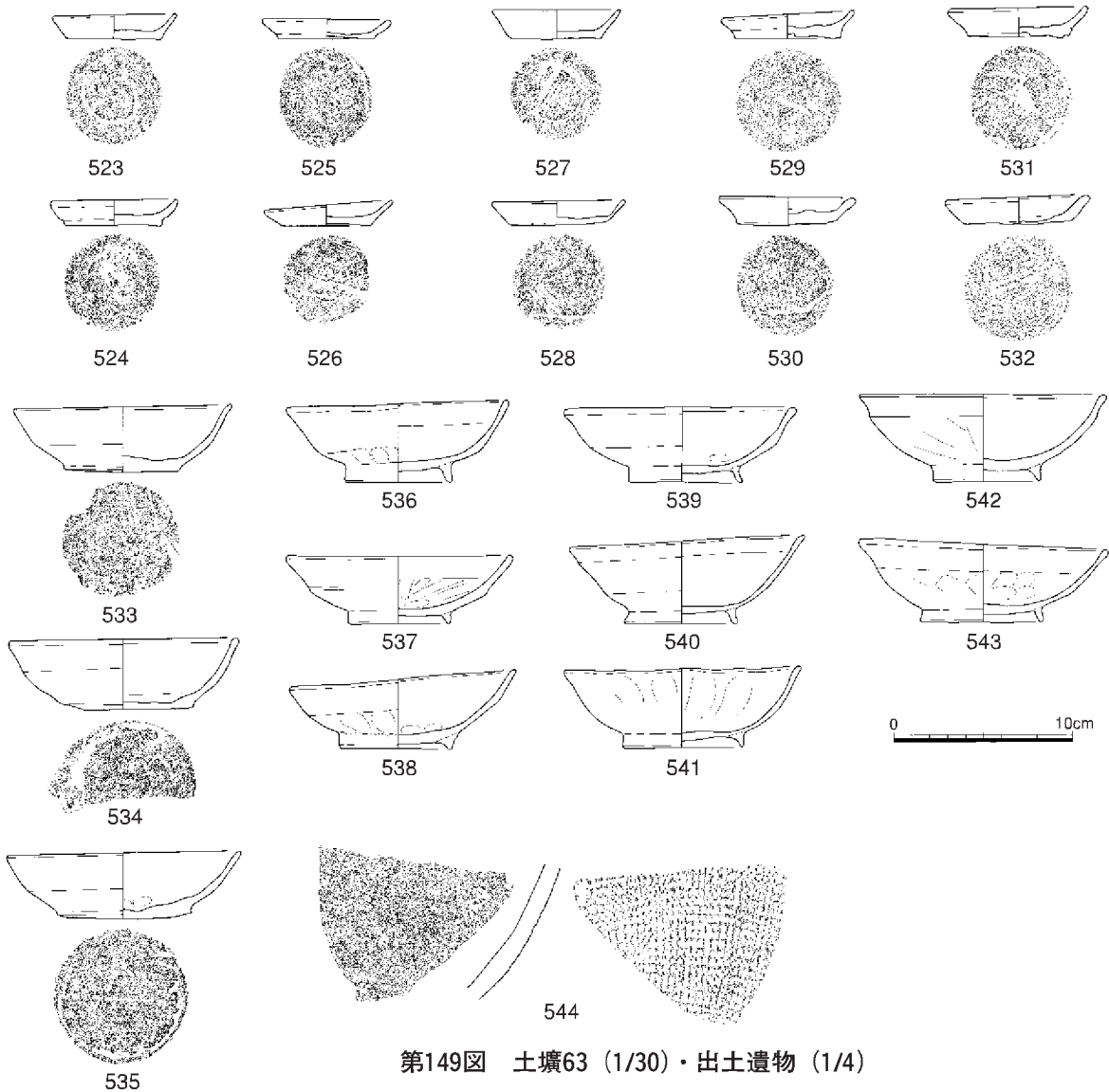
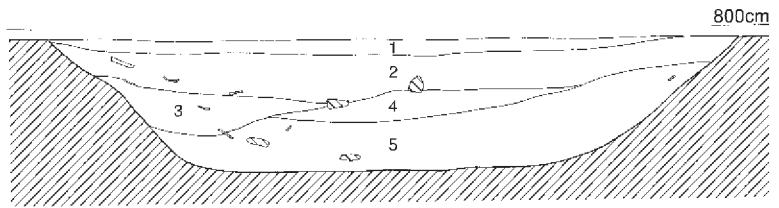
第148図 土壌62 (1/30)・出土遺物 (1/4)

層からは523・525・530～534・537～540・542・543・544が、15cm程の石と共に出土している。土器が石と共に投げ込まれている状況は、先述の土壙62と似ている。

出土した土器から、13世紀中葉の時期を当てはめることができる。(松尾)



- 1 浅黄色粘性砂質土 (2.5Y7/3)
- 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR5/3)  
(炭粒・Mn含)
- 3 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)  
(炭粒含)
- 4 灰色粘質土 (10Y4/1)
- 5 暗オリーブ灰色粘土 (2.5GY4/1)



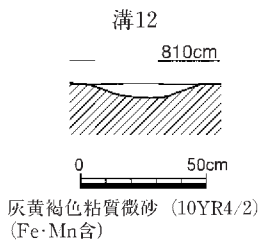
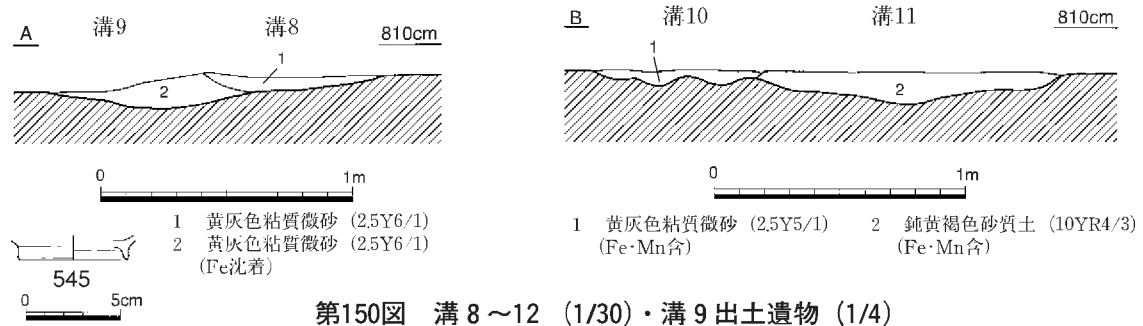
第149図 土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 7 溝

### 溝8～12 (第111・150図)

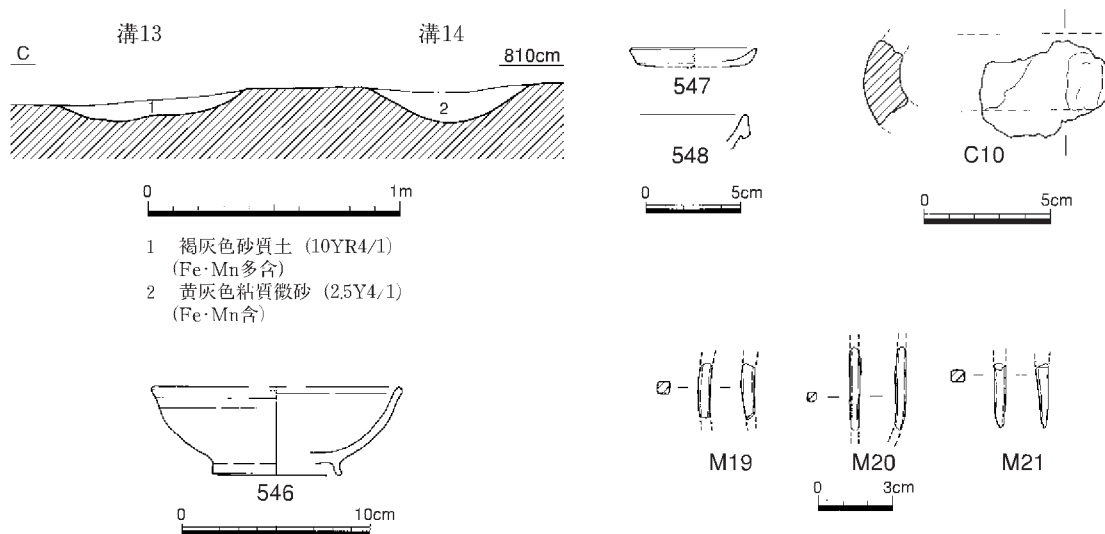
74E東端から78E西端に位置する、南北方向の溝群である。中世～近世耕作土直下で検出された。いずれも幅50～80cm前後を測るが、深さは15cmに満たない浅い溝で、底面の海拔高は7.9m～8.0m前後である。各溝がほぼ並行することから、耕作に伴う素掘溝に類する溝と考えられる。

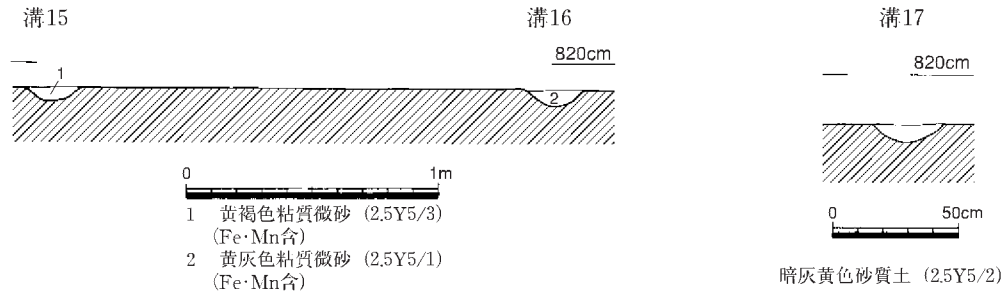
土師器椀高台片545のほか土師器椀や小皿細片が出土しており、中世に比定される。 (渡邊)



### 溝13～17 (第111・151・152図、図版53・54)

76～78Eに位置する。溝14は微高地を取り巻くようにU字にめぐる。この段階でも旧河道上部は低いたわみとして名残をとどめており、溝14は微高地と低位部の境に掘削されたと考えられる。溝15～17は溝14から派生し、低位部には水田層と思われる堆積層が認められることから、溝14～17は一連の微高地の排水を兼ねた用水路と考えられる。なお溝14の三叉に分岐した部分は枡状に一段低くなっていた。溝14北端に平行する溝13は溝15に切られており、溝14の古段階の水路の可能性もある。溝13から出土した土師器椀546は13世紀後半に比定されよう。 (渡邊)



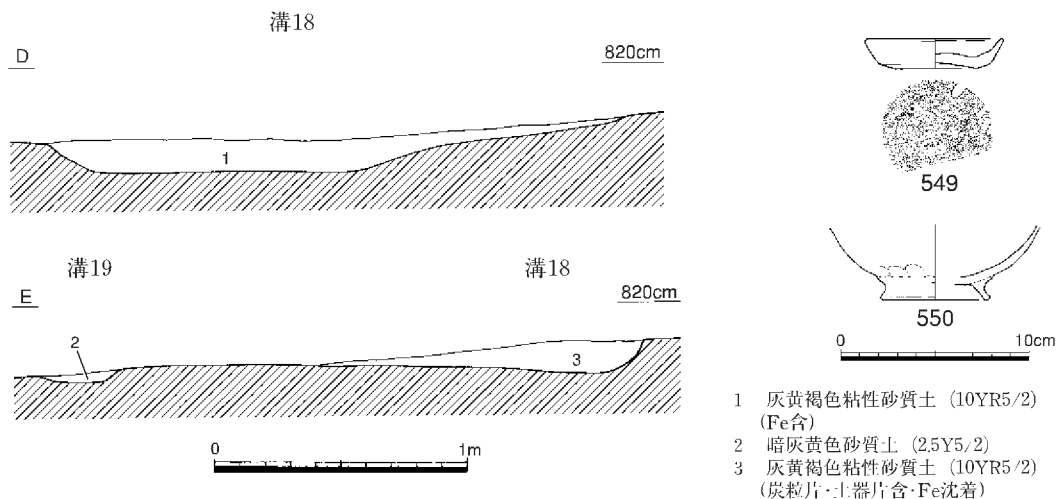


第152図 溝15～17 (1/30)

溝18・19 (第111・153図、図版33)

76～78Gの北端で、溝14の南に位置する。溝14に伴うと思われる水田層の下面で検出された。東西方向をとり、より古い地形を反映していると思われる。底面の海拔高は西端で7.7m、東端で7.9m前後で、西に下がる。なお溝18・19より南側では、溝14に伴うより古い水田層が確認されている。

溝18より出土した土師器549・550は溝13より出土した546とあまり時期差を感じないが、検出状況および層序関係から、より古い段階の水田に伴う可能性が考えられる。(渡邊)



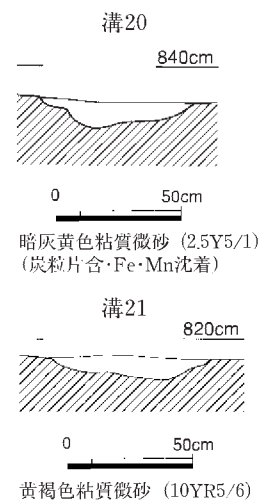
第153図 溝18・19 (1/30)・溝18出土遺物 (1/4)

溝20 (第110・154図、図版33)

78～80Cの西端に位置する。幅50～70cmで、底面の海拔高は8.15m前後である。他の中世溝群とは道路で分断されているが、溝14と同じく微高地肩部に微高地に沿う形で検出され、埋土も溝14同様の黄味があった粘質微砂であることから、溝14と同一の溝と考えられる。(渡邊)

溝21 (第113・154図)

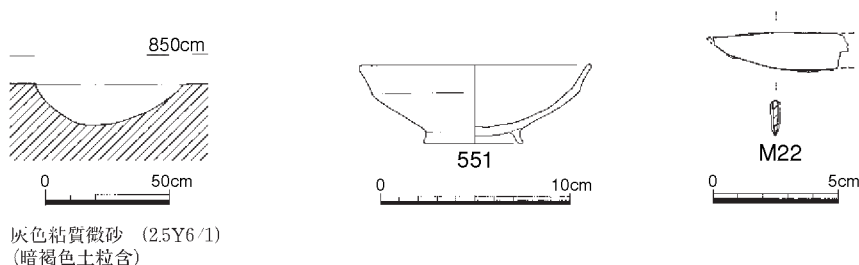
94C～Eから検出された、居住地(建物)と墓域とを区画する溝と理解されるもので、前述した掘立柱建物2と同様の方向を向くものであった。規模は幅62cm、深さ約10cmを残すもので、南北約9mにわたって検出した。断面は底部はほぼ平坦で、壁は緩く外方へ立ち上がる。遺物は皆無であったが建物に付属するものであろう。(江見)



第154図 溝20・21 (1/30)

溝22 (第113・155図、図版54)

溝21の南に位置し、これに直交するように掘られた東西溝で、東端が南に向き、新たな区画をなす溝である。規模は幅約60cm、深さ約15cmを残すもので、約22mにわたって検出した。断面は丸く広がり、埋土からは14世紀前半の年代観をもつ椀551、刀子M22が出土している。(江見)

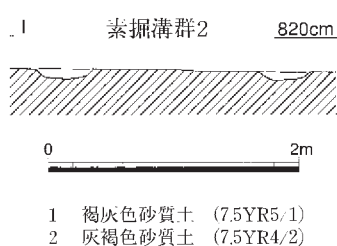
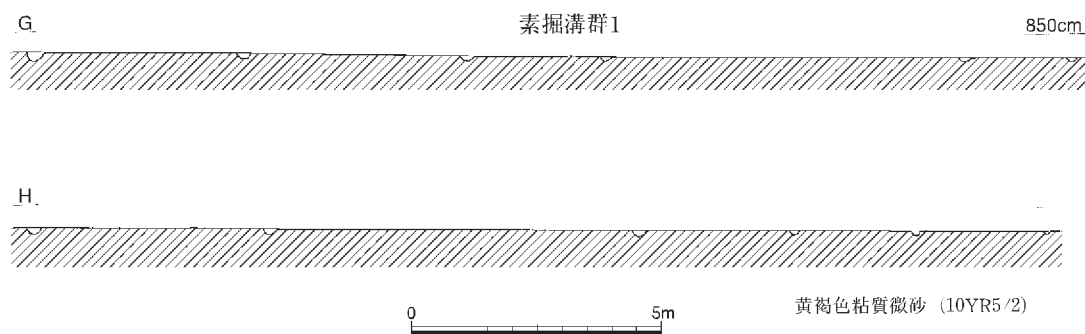


第155図 溝22 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

8 素掘溝群

素掘溝群1・2 (第113・114・156図、図版33)

素掘溝群1は、96A・C、98A・Cを中心として、現在の地割りにほぼ沿うかたちで検出している。各素掘溝群の規模はほぼ同じで、幅30~50cm、深さは5cm前後が残存していた。出土遺物は少なく、

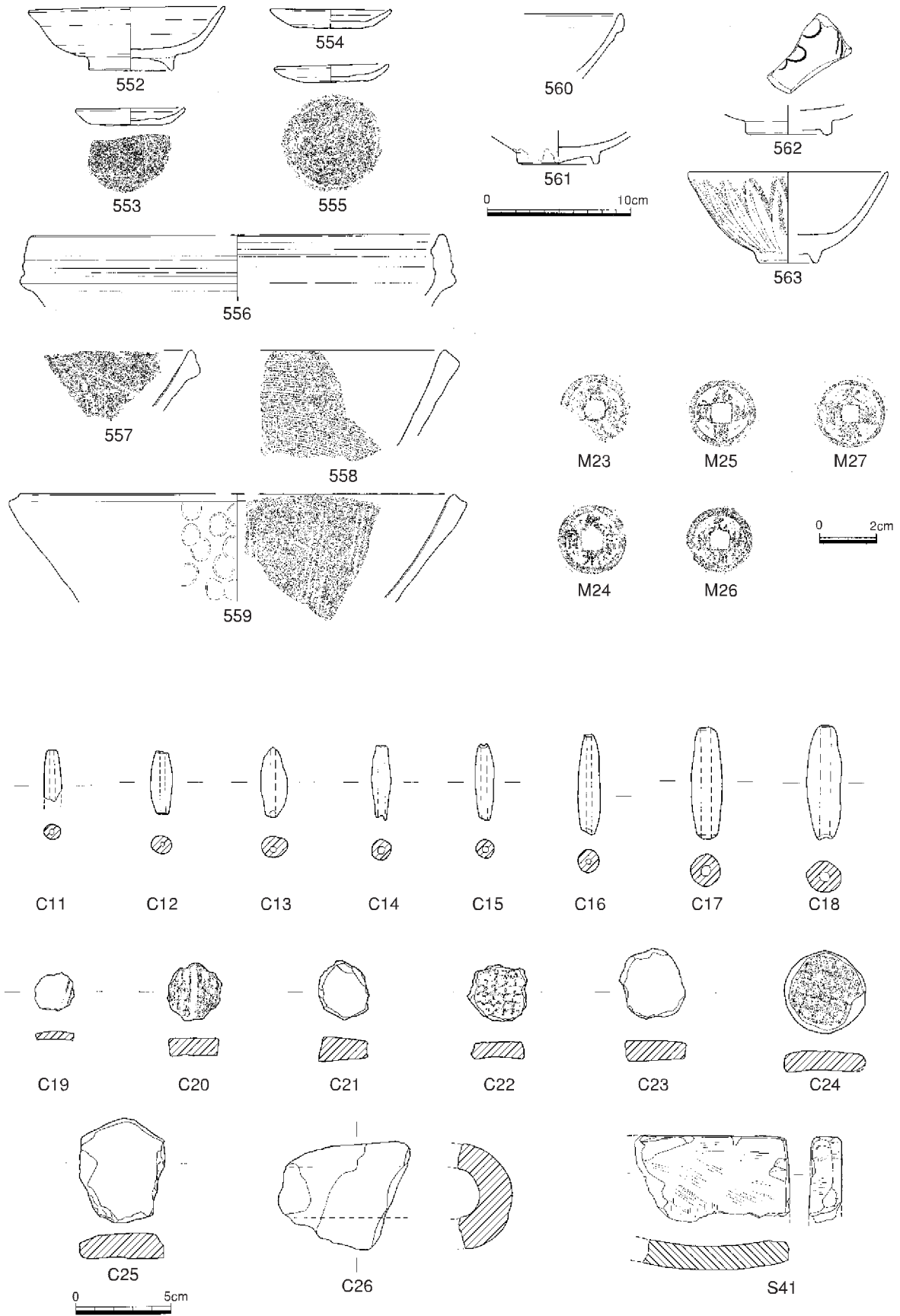


第156図 素掘溝群1・2 (1/150・1/60)

時期決定は難しいが、14世紀初頭頃か。素掘溝群2は、102Aの南西に位置し、字境の畦と方向が一致している。溝の規模は素掘溝群1と同様。出土遺物は少ないが、周辺の状況や溝の埋土などから、15世紀代と思われる。(松尾)

9 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第157図、図版50・52・53)

13世紀から15世紀代を中心とする土器(土師器・白磁・青磁・備前焼・亀山焼)が出土しており、遺構の年代観とも矛盾しない。土器以外の遺物は、M23~27の銅銭、C11~18の土錘、C19~25の土製円板、C26の鞆羽口、S41の滑石製温石がある。銅銭はM23が祥符通宝、M24が熙寧元宝、M25・26が元祐通宝、M27が永樂通宝。(松尾)



第157図 柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2・1/3)

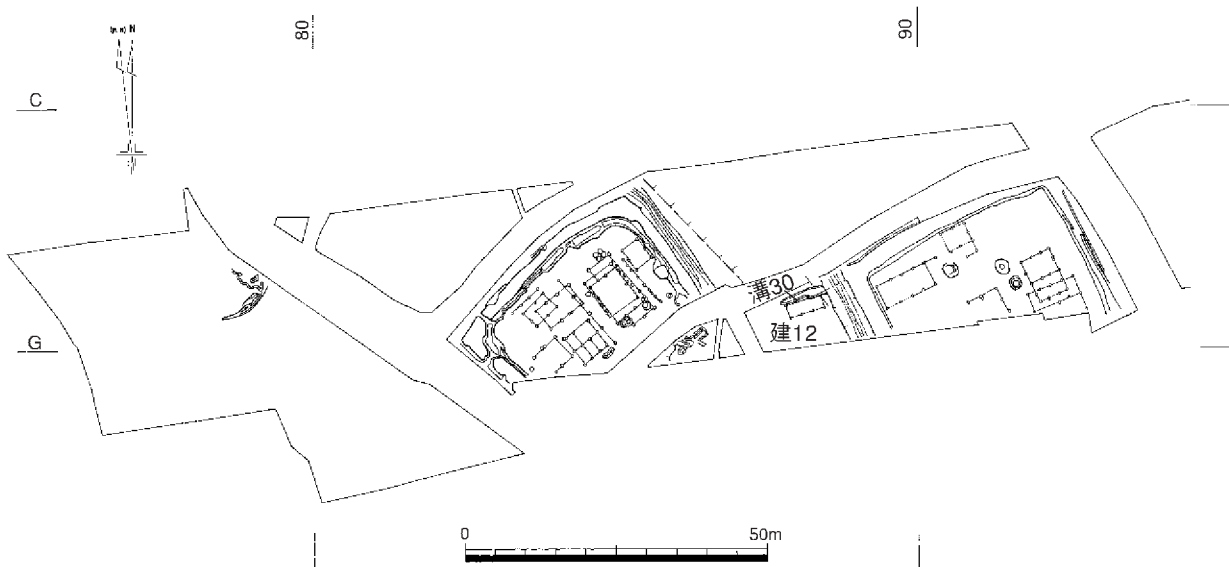


## 第6節 近世の遺構・遺物

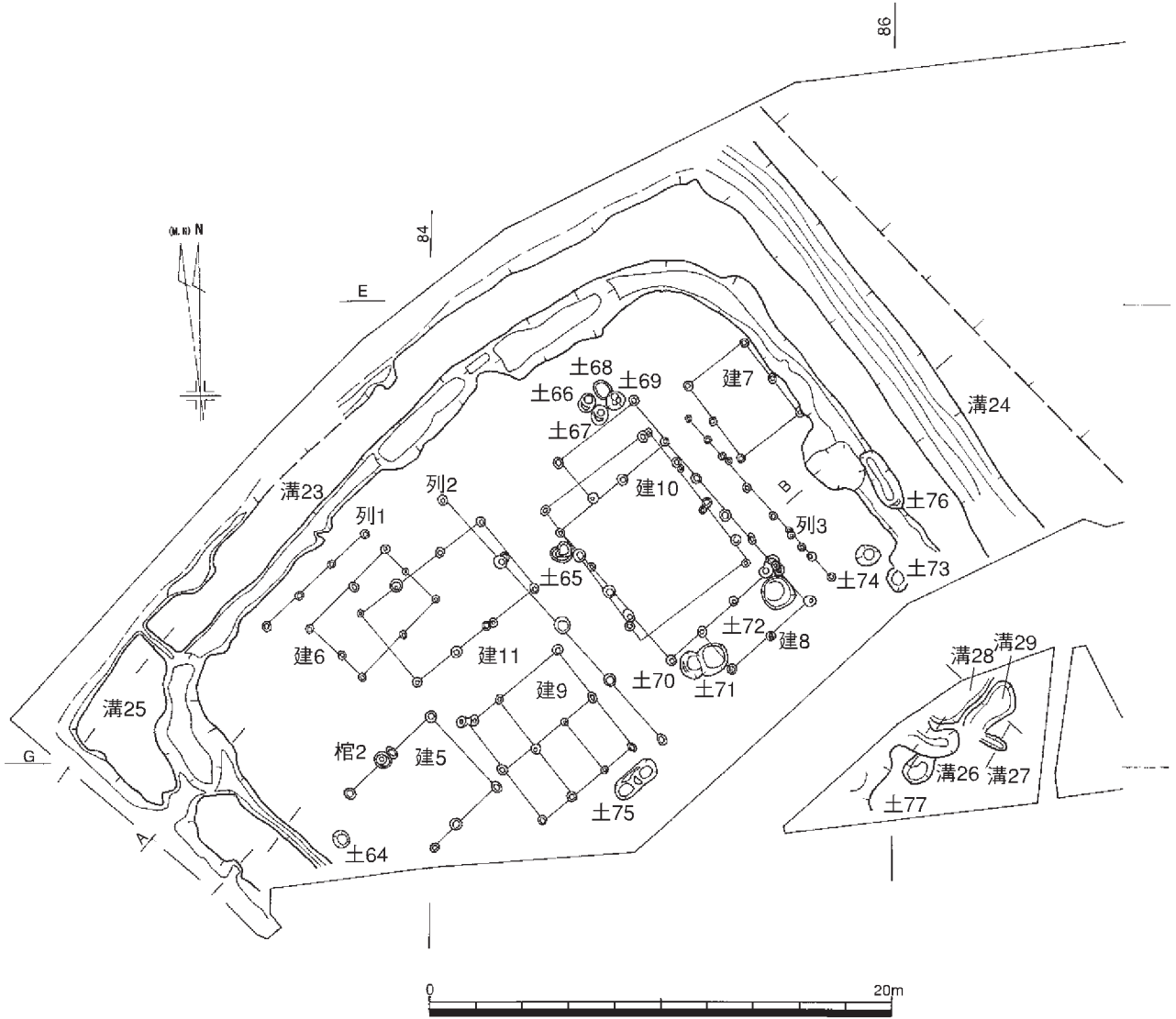
## 1 概要

近世には平野部全域において広く耕地化が進み、当遺跡もその波にのまれていく。調査前の現状における地表面の海拔高は8.7m前後で、以下8.4～8.5mまで近世以降の耕作土層が堆積していた。第158～160図は耕作土直下における検出状況である。大きく2地点に分かれて、溝で区画された屋敷地が確認された。屋敷地の区画溝外ではほとんど遺構が検出されていないが、その大部分は既に水田化されていたようである。なお、溝24の区画内では東西方向の平行する浅い溝群が検出された（第8図）が、屋敷地が廃絶した後に水田化される前の段階で、屋敷地の高まりを畑として利用した痕跡と考えている。また、埋土から近世と思われる柱穴や溝も多くあったが、時期を判断しうる遺物を伴うものは少なく、逆に中世墓6のように古い段階の遺物を伴う現象も想定しうることから、掘立柱建物や屋敷地を構成すると思われる以外の柱穴や溝は図示していない。

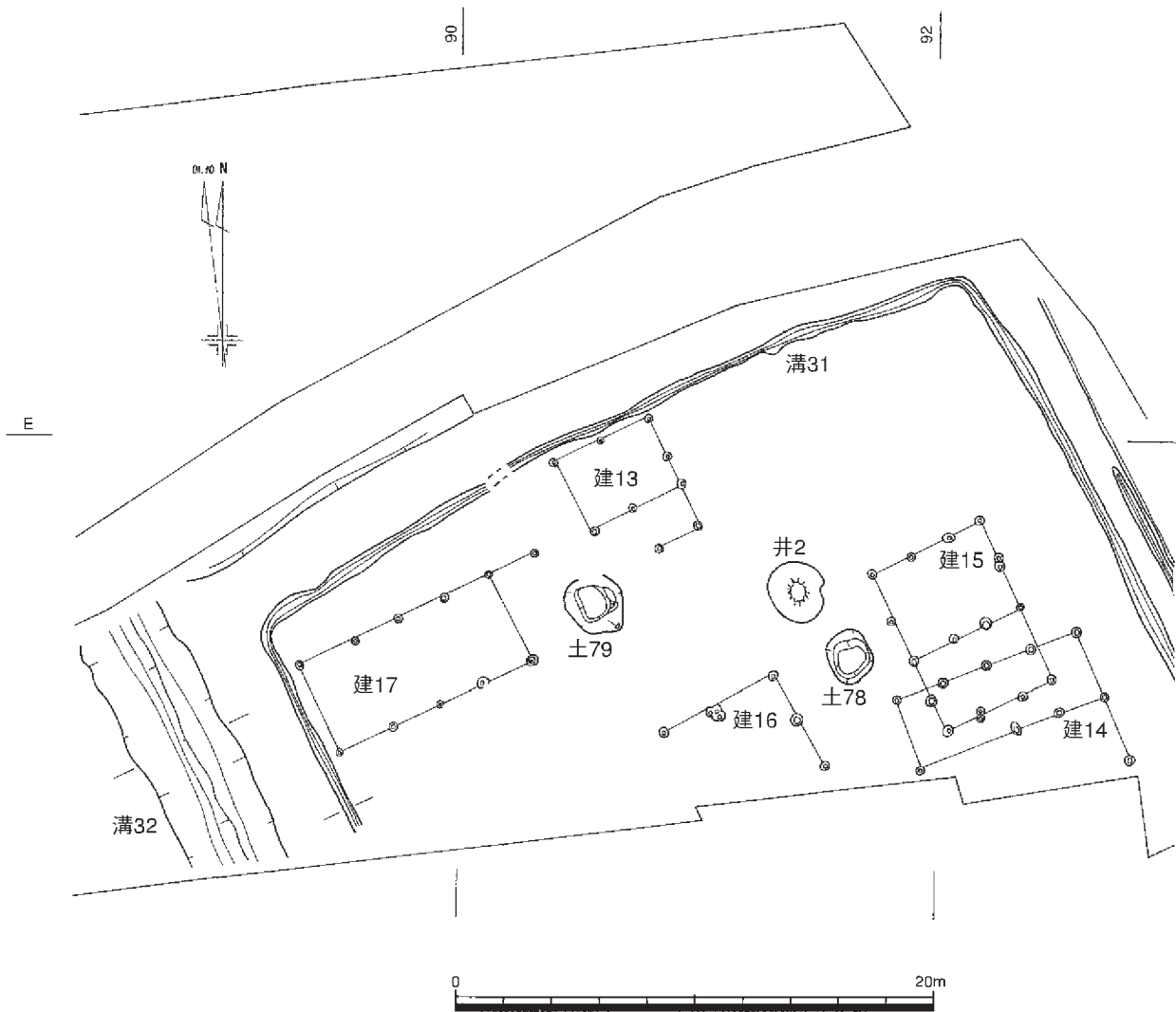
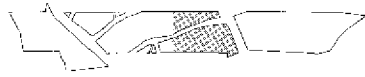
さて、ここで少し屋敷地について触れておきたい。ここでは溝24・25で囲まれた区画を西側屋敷地、溝31で囲まれた区画を東側屋敷地とする。両屋敷地とも南端が確認されていないが、西側屋敷地は溝25内側で東西約28m、東側屋敷地は溝31内側で東西約32mの長方形の区画を有している。後述するように、西側屋敷地外側の溝24および東側屋敷地の溝32は防御的な濠と想定され、現在の水路や道路と重複する位置にその濠が巡り、東側も2重に囲まれていた。この両屋敷地の時間的な前後関係であるが、単純に区画溝の出土遺物を比較すると、西が17世紀代、東が18世紀代であり、西側屋敷地から東側屋敷地に移ったように見える。しかし、近世の遺構の時期については陶磁器で決めることが多いが、16世紀末～17世紀初頭もしくは17世紀後半～18世紀に陶磁器が偏在するのは一般的な傾向であり、遺跡の存続時期を反映するものではないと思われる。また東側屋敷地内にも西側屋敷地の存続期間と平行する時期の遺構も営まれており、溝32には掘り直された様子が看取されることを考え合わせると、東西両屋敷地が一連の屋敷地として併存していた可能性は否定しきれない。（渡邊）



第158図 近世遺構全体図 (1/1,250)



第159図 近世主要遺構図① (1/300)



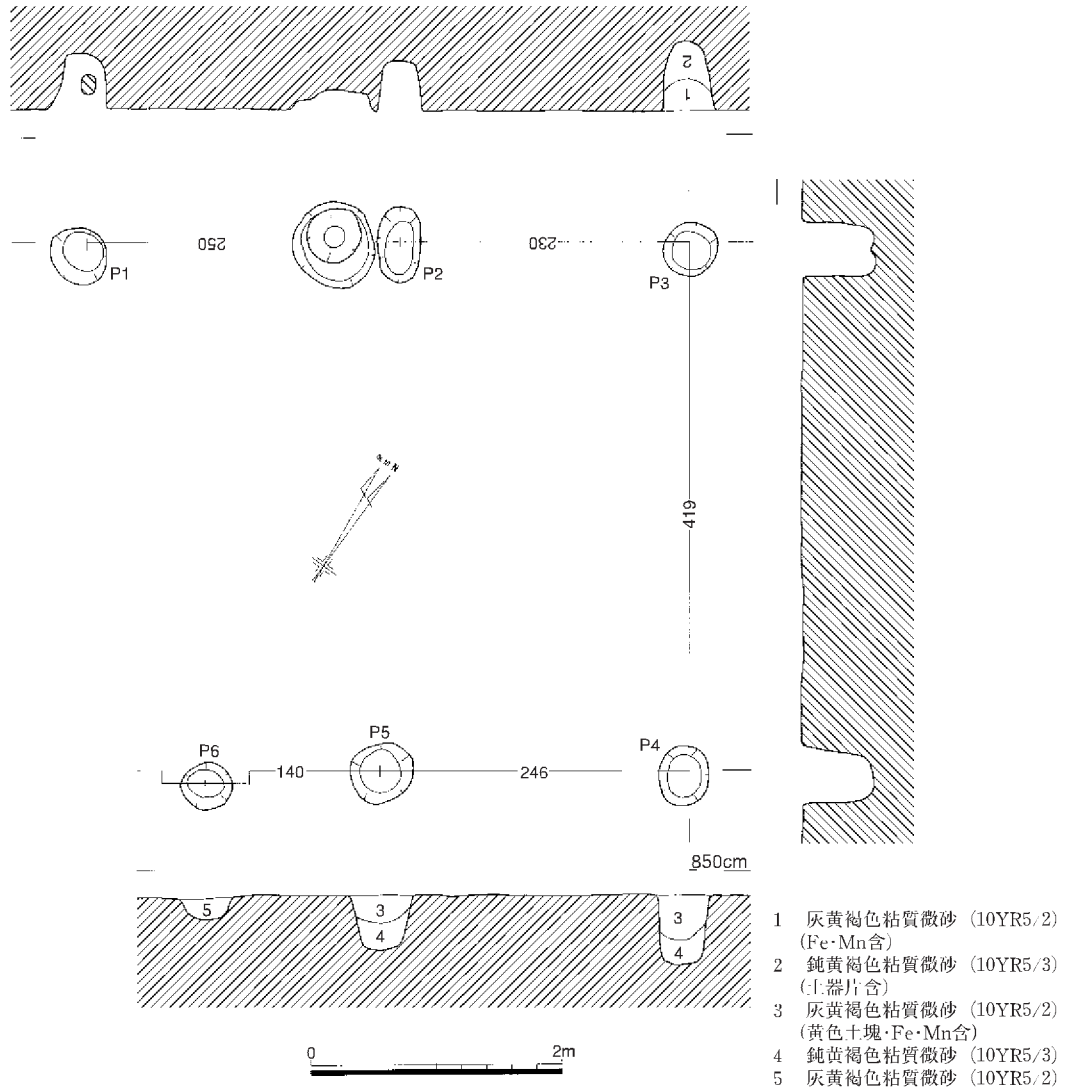
第160図 近世主要遺構図② (1/300)

## 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物5 (第159・161図、図版34)

84G 交点周辺で、西側屋敷地内の西端に位置する。東西棟の建物で、南西角の柱穴を確認できていないが、溝25との位置関係から、2×1間の規模と考えるのが妥当であろう。柱穴は径40～50cmの円形で、深さは50cm前後を測る。P2の西側には土器棺墓2がある。

時期の特定はできないが、近世と思われる土器細片が出土した。(渡邊)

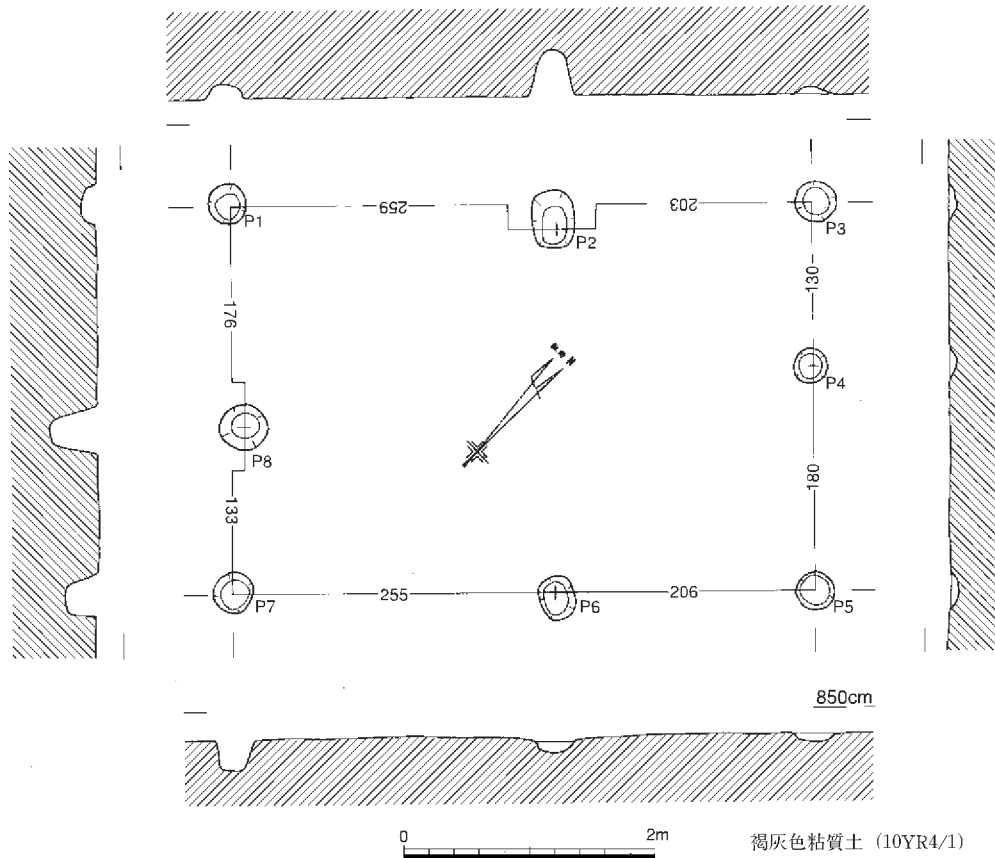


第161図 掘立柱建物5 (1/60)

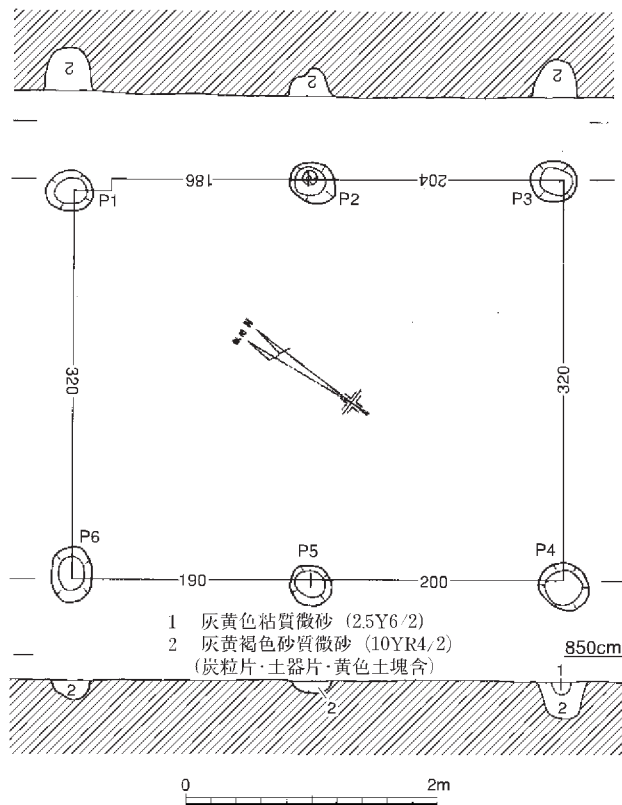
### 掘立柱建物6 (第159・162図)

82E 東端で、掘立柱建物5の北に位置する。2×2間の東西棟の建物と考えられる。柱穴は径30cm前後の円形で、深さは、P2で36cm、P3で6cmとばらつきがある。梁間のP4・8は中央より位置がずれており、この建物に伴わない可能性もある。

出土遺物は土器細片のみで時期の特定はできないが、検出状況や埋土より近世と考えた。(渡邊)



第162図 掘立柱建物 6 (1/60)



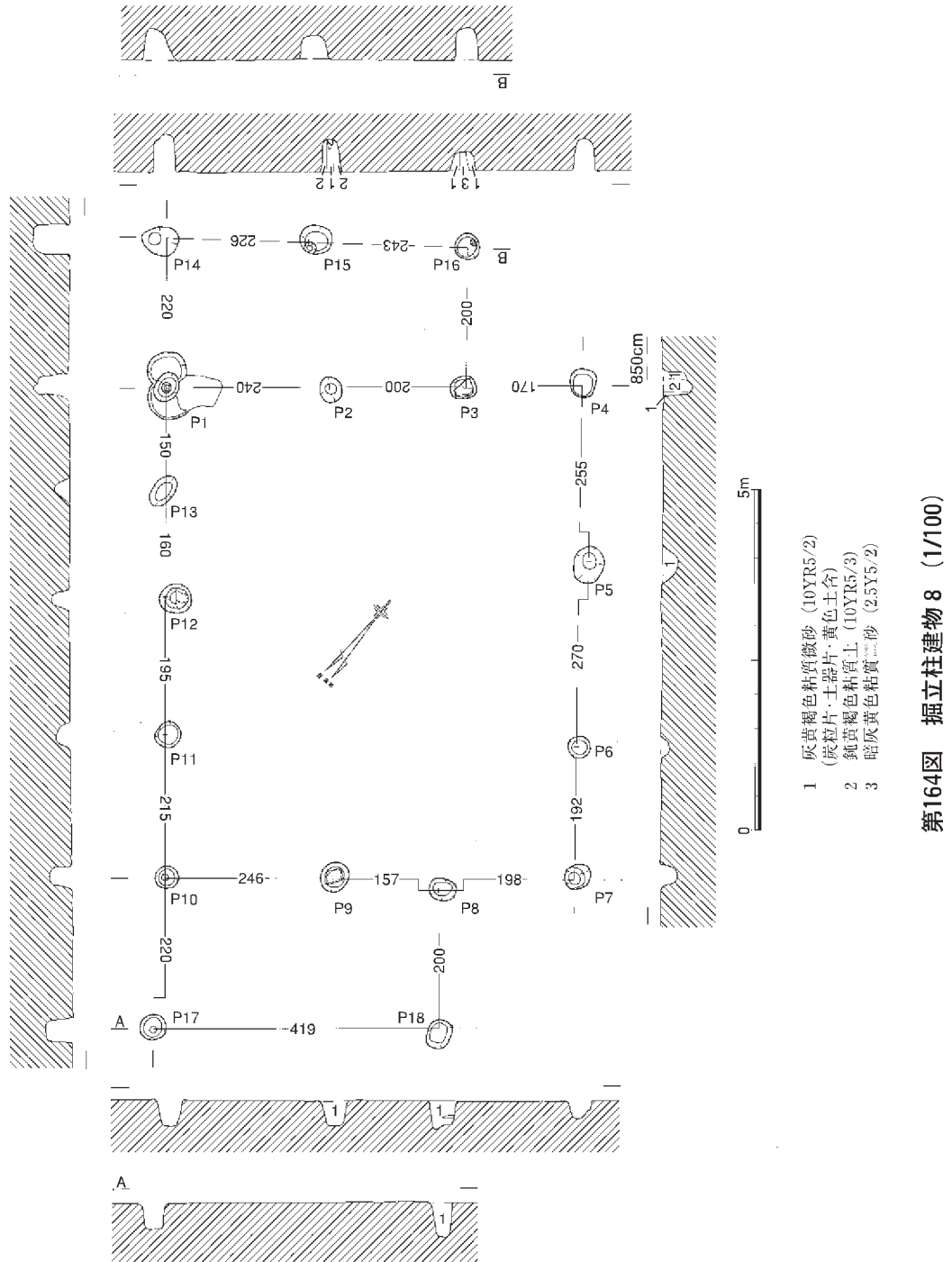
第163図 掘立柱建物 7 (1/60)

**掘立柱建物 7 (第159・163図)**

84Eに位置し、西側屋敷地の北東隅で検出された建物で、西側2mには棟方向が揃う建物10が存在している。桁行2間、梁行1間の南北棟の側柱建物で、規模は桁行で3.9m、梁行で3.2m、面積は12.5㎡を測る。柱穴が屋敷の内側を区画する溝23に切られていたことから、屋敷地内の建物では古いものと考えられる。柱穴内の埋土中から土器片が出土しているが図示できる遺物は無かった。時期は、他の屋敷地内出土遺物も検討して17～18世紀のものと考えられる。(石田)

**掘立柱建物 8 (第159・164図)**

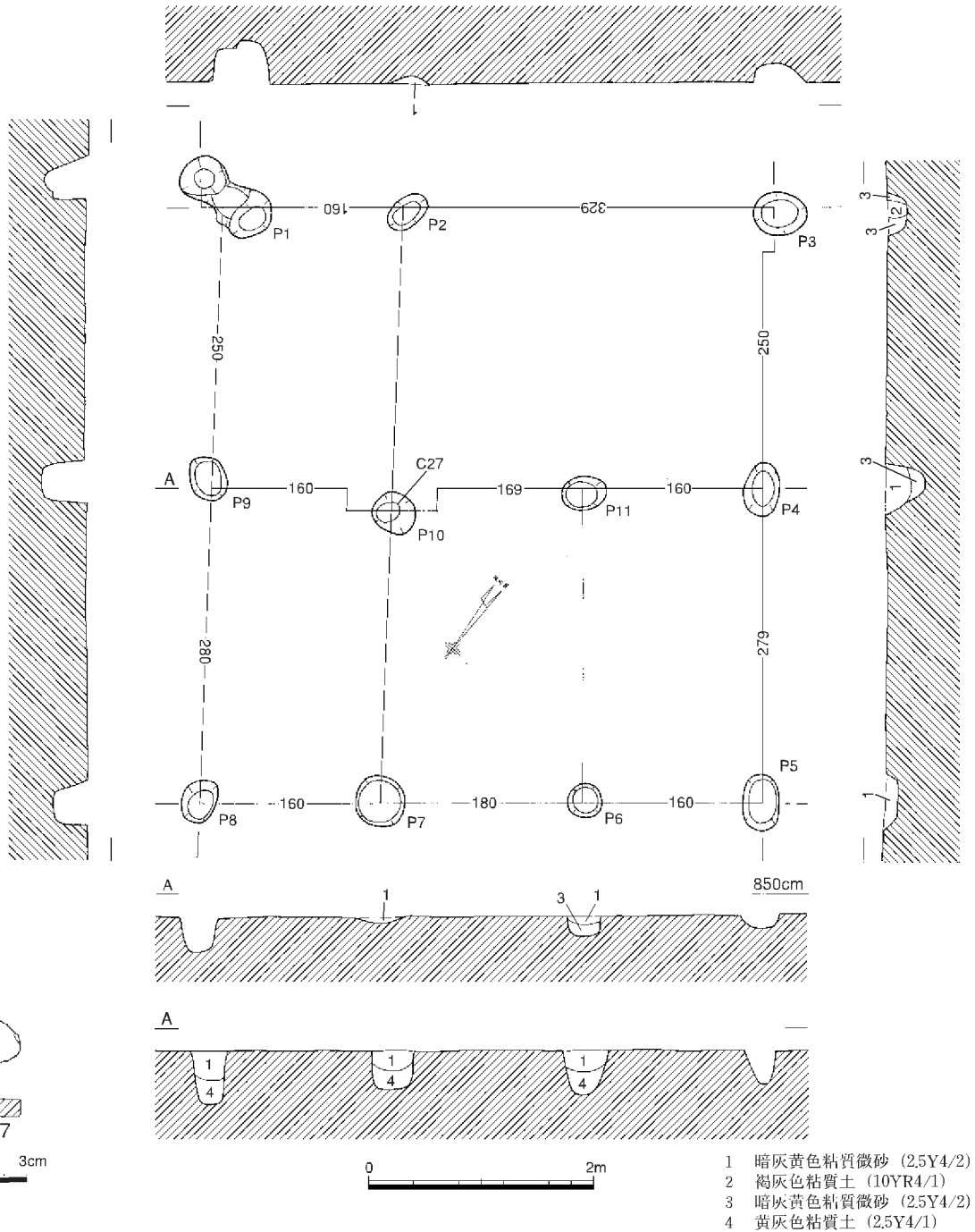
84E、西側屋敷地の東側中央に位置する建物で、東西を柱穴列2・3により画されている。4×3間の側柱建物の北側には、入口を伴い土間と想定される1×



1間の張り出し部をもち、南側には2×1間の縁状の施設を伴っている。規模は桁行7.2m、梁行6.1m、身舎部分の面積は43.9㎡を測る。付属部分の面積を含めると屋敷地内で最大の建物である。その規模や他の建物との位置関係からも、屋敷地の主屋であったと思われる。時期が分かる伴出遺物はなかったが、屋敷を構成する溝や土壇等の出土遺物から勘案して、時期は17～18世紀であろう。(石田)

**掘立柱建物9 (第159・165図)**

84Eに位置し、西側屋敷地の南西の一角に配置された建物である。北側には2.5m隔てて建物11が存在し、建物南東には土壇75が検出されている。桁行3間、梁行2間の建物であるが、北側桁行のP

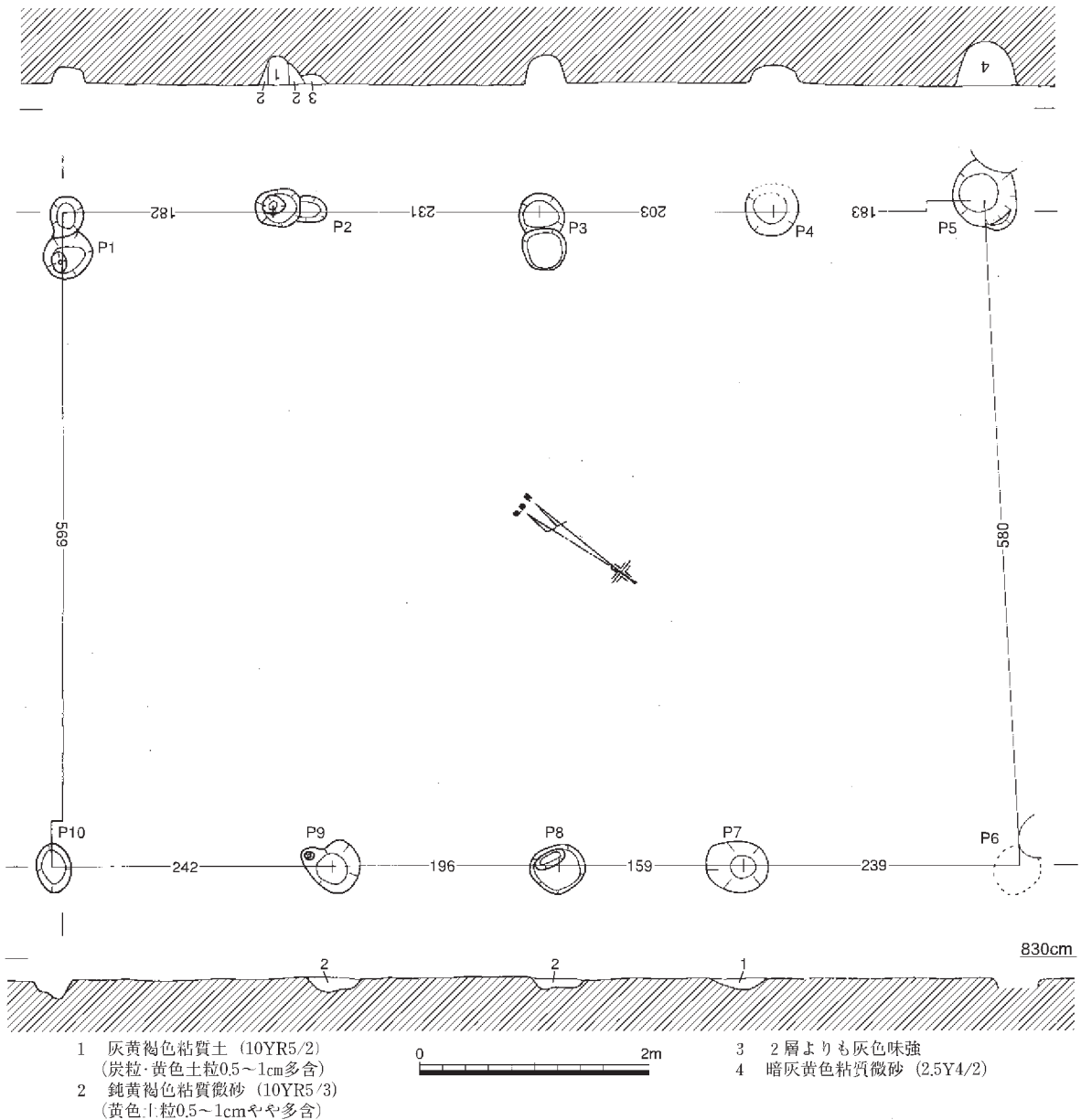


第165図 掘立柱建物9 (1/60)・出土遺物 (1/3)

2-P 3間に柱穴が無く、建物北東部は入口を伴う土間が設けられていたと考えられる。規模は、桁行で5.0m、梁行5.3mと梁行がやや長くなり、面積は26.4㎡を測る。柱穴内より円盤状土製品C27が出土しているのみで、詳細な時期は不明だが、屋敷地内の遺物から17～18世紀と考えられる。(石田)

**掘立柱建物10 (第159・166図、図版34)**

84E、西側屋敷地の東側中央で検出された建物である。建物8と重複しており、建て替えが行われている。桁行4間、梁行1間の側柱建物で、規模は桁行8.36m、梁行5.80m、面積47.4㎡を測り、身舎部分の面積では屋敷地内で最大の建物である。建物内部の空間は広く、本来は床を支える東柱の存在が推定されるが、それらの痕跡等は検出されなかった。時期は17～18世紀と考えられる。(石田)



**掘立柱建物11** (第159・167図、図版34)

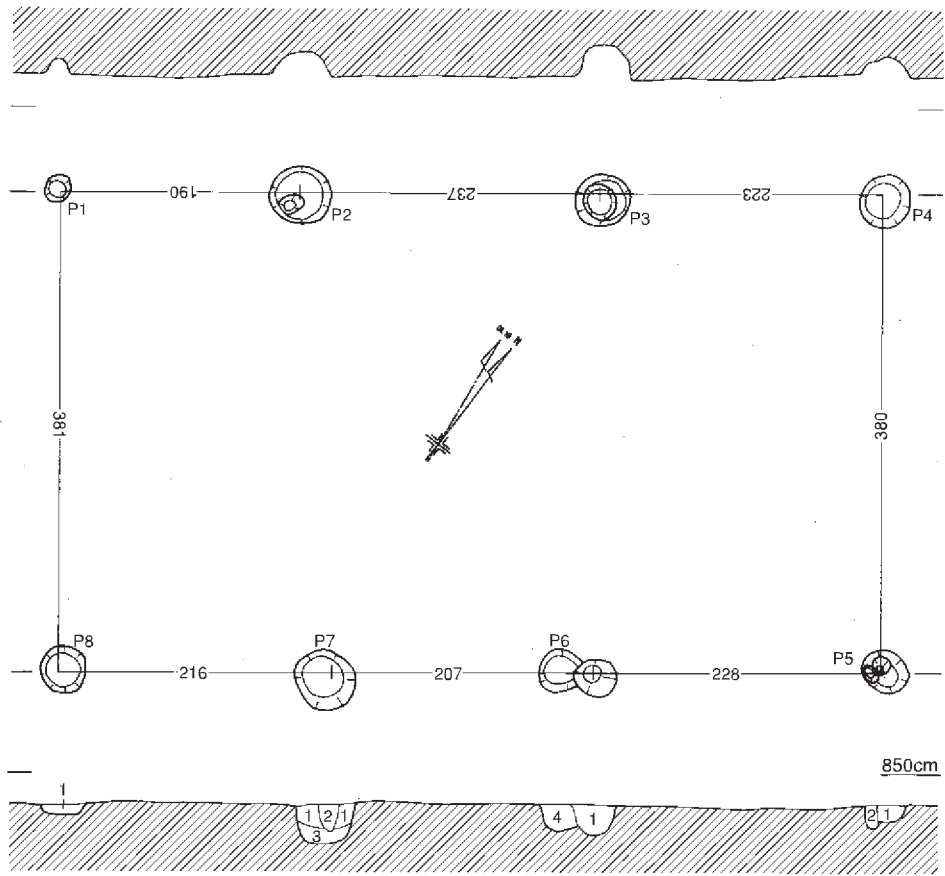
84Eに位置し、西側屋敷地の北西側で検出された桁行3間、梁行1間の東西棟の側柱建物である。南側2.5mに棟方向が揃う建物9が存在しているほか、東側に位置する建物7・10には棟方向が直交しており、これらの建物の同時併存が考えられる。規模は桁行6.51m、梁行3.81mで面積25.0㎡を測る。直接伴う遺物は無かったが、時期は他の屋敷地内の出土遺物から17~18世紀と考えられる。(石田)

**掘立柱建物12** (第158・168図、図版34・35)

88Eで、後述する溝32の西に位置する。3×1間の細長い東西棟である。柱穴は30~40cmの円形で、深さは30cm前後を測る。P2・4では柱痕跡が認められた。P6・7は他の柱穴と比べて浅いことから建物がさらに南に広がる可能性も考えられるが、該当する位置に柱穴は検出できなかった。

近世と思われる土器細片が各柱穴から出土しているが、東西両側にある区画溝内の建物群とは棟方向が異なる傾向を示し、それらとは全く別の時期に建てられた可能性が高い。(渡邊)



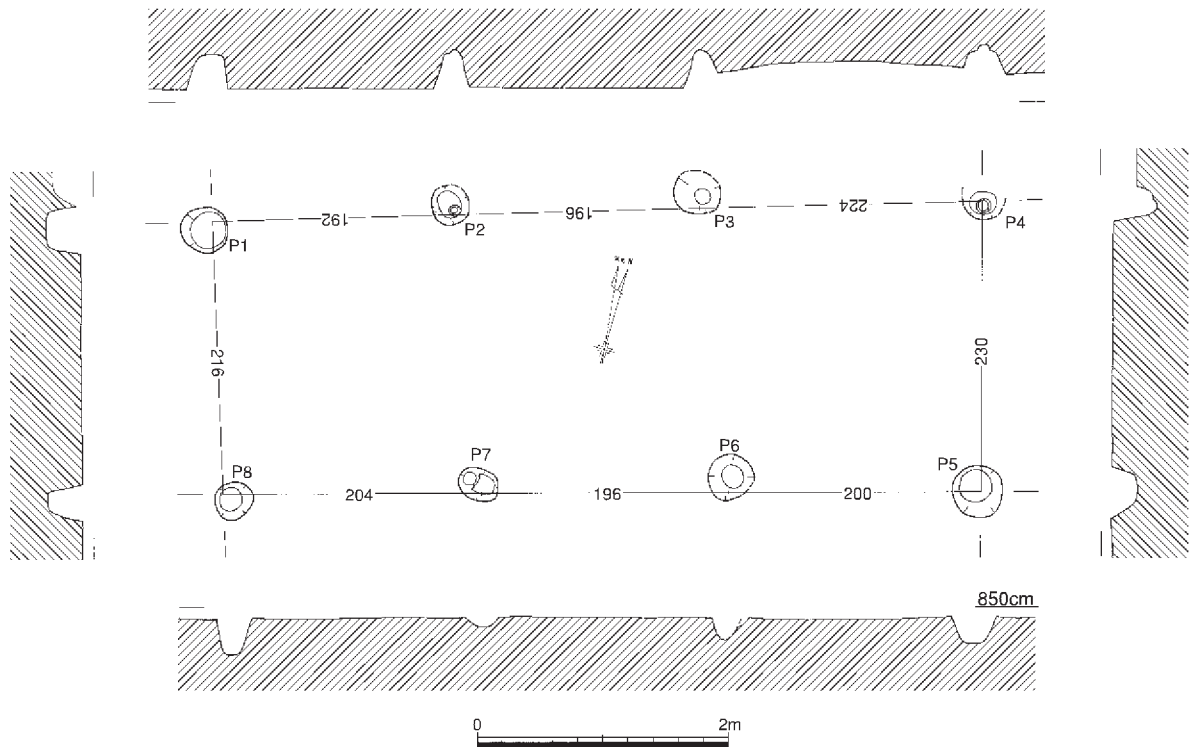


- 1 鈍黄褐色粘質土 (10YR5/3)  
(黄色土粒多含)
- 2 灰黄褐色粘質土 (10YR5/3)  
(炭粒・黄色土粒多含)



- 3 褐色粘質土 (10YR4/4)
- 4 1層よりやや灰色味強

第167図 掘立柱建物11 (1/60)

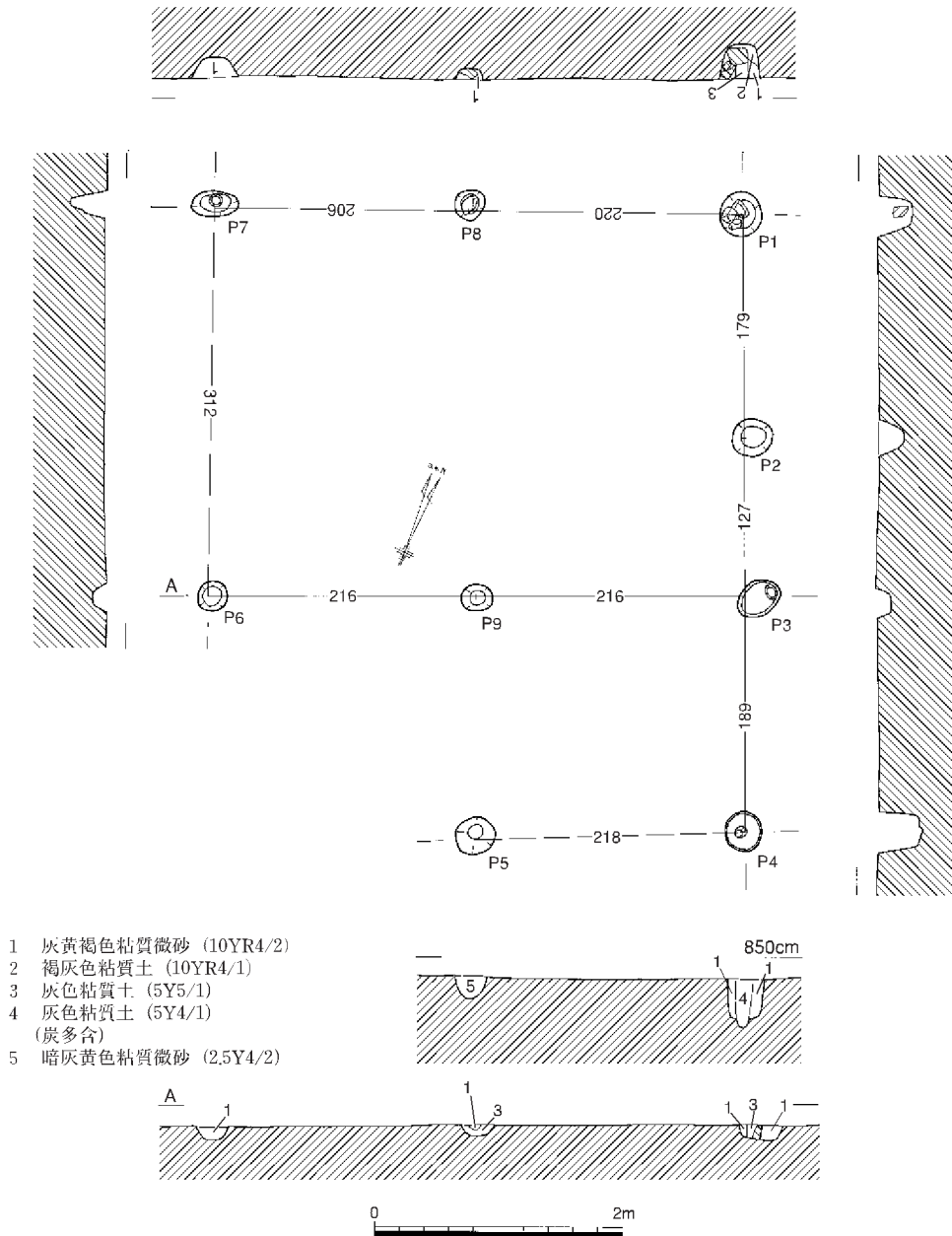


第168図 掘立柱建物12 (1/60)

掘立柱建物13 (第160・169図、図版35)

90Eの北端に位置する。広さの異なる2空間を有する2×2間の建物である。柱穴は30cmの円形で、P1・4・7は深さ30cm、他は深さ15cm前後と四隅が深い。P1・8では根石が、P1・3・4では柱痕跡が確認された。なお南西角の柱穴は中世の土壙48に重複していたため検出できなかった。

出土遺物からは中世以降としか言えないが、区画溝に伴うと考え、近世に含めた。(渡邊)



第169図 掘立柱建物13 (1/60)

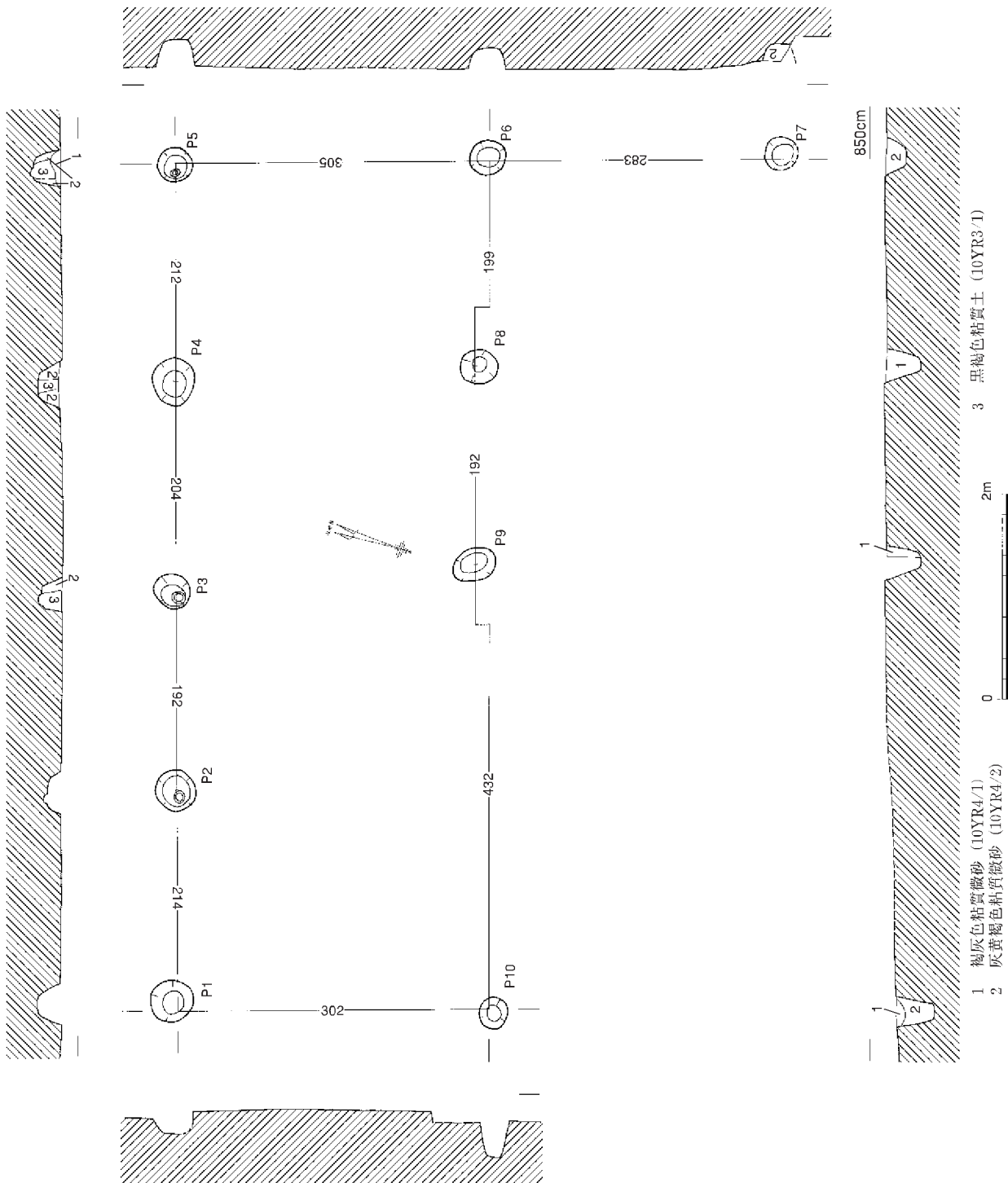
掘立柱建物14 (第160・170図)

92E南西端で、掘立柱建物13の南東に位置し、東西軸がほぼ平行する位置関係にある。東西4間、南北2間分を検出しているが、南は調査区外にさらに広がる可能性がある。P9とP10の間は調査区側溝により削平を受けている。柱穴は30~40cmの円形で、深さはP1~7が約30cm、P8~9が約40cm

と差が認められる。P 2～5では柱痕跡が確認された。

P 1・7から近世の陶磁器細片が、P 3からは鉄器片が出土している。

(渡邊)

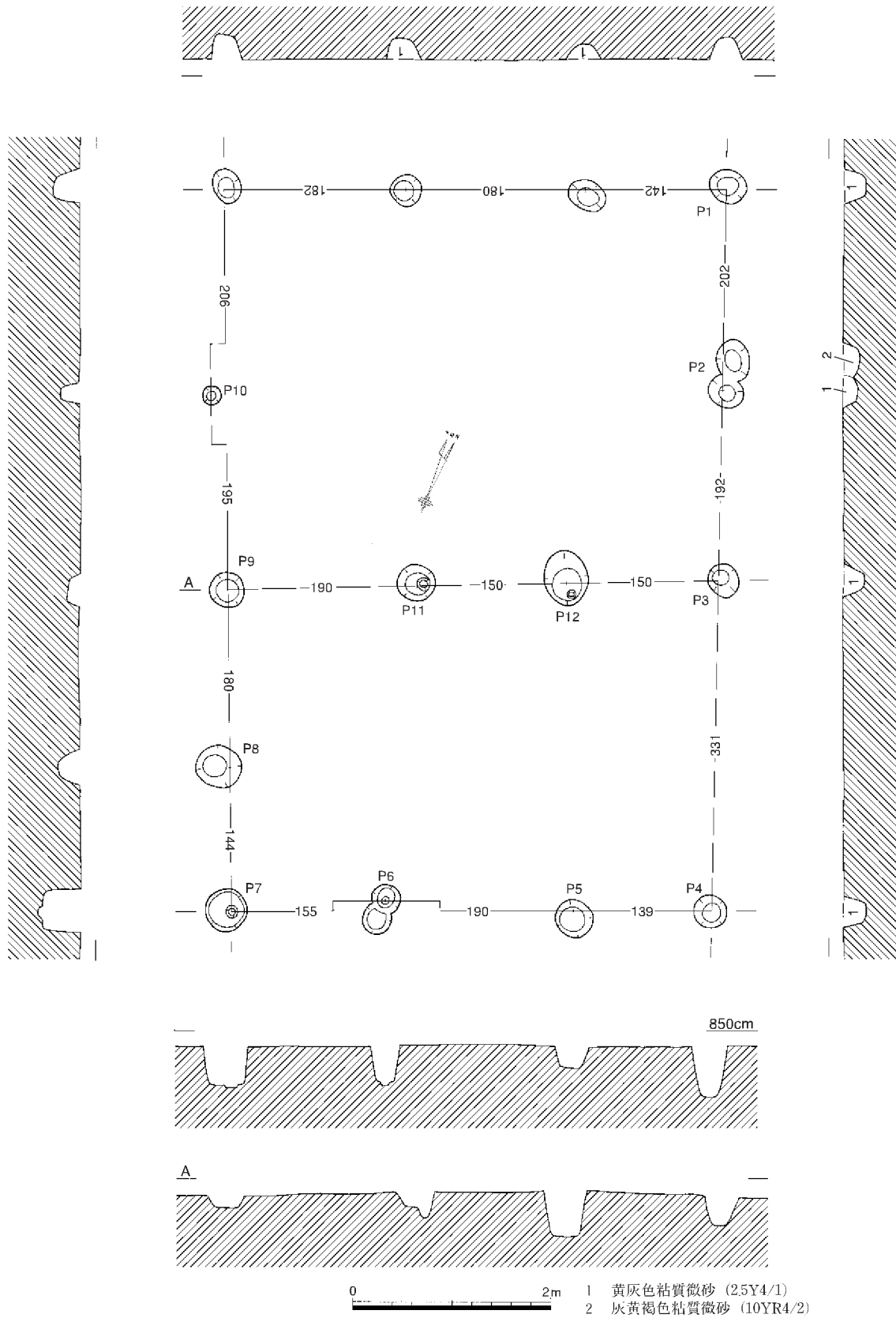


第170図 掘立柱建物14 (1/60)

掘立柱建物15 (第160・171図)

92Eの西端で、掘立柱建物14の北に位置する。掘立柱建物14と一部重複する。4×3間の南北棟で、中央よりやや南に間仕切りがある。柱穴は30～40cmの円形で、深さは15～50cmとばらつきがあるが、四隅が比較的深い傾向が看取される。P 6・7・11・12では柱痕跡が認められた。

中世～近世と思われる土器細片が多くの柱穴から出土しているが、細かな時期の比定はできず、掘立柱建物14との前後関係も判断できない。  
(渡邊)

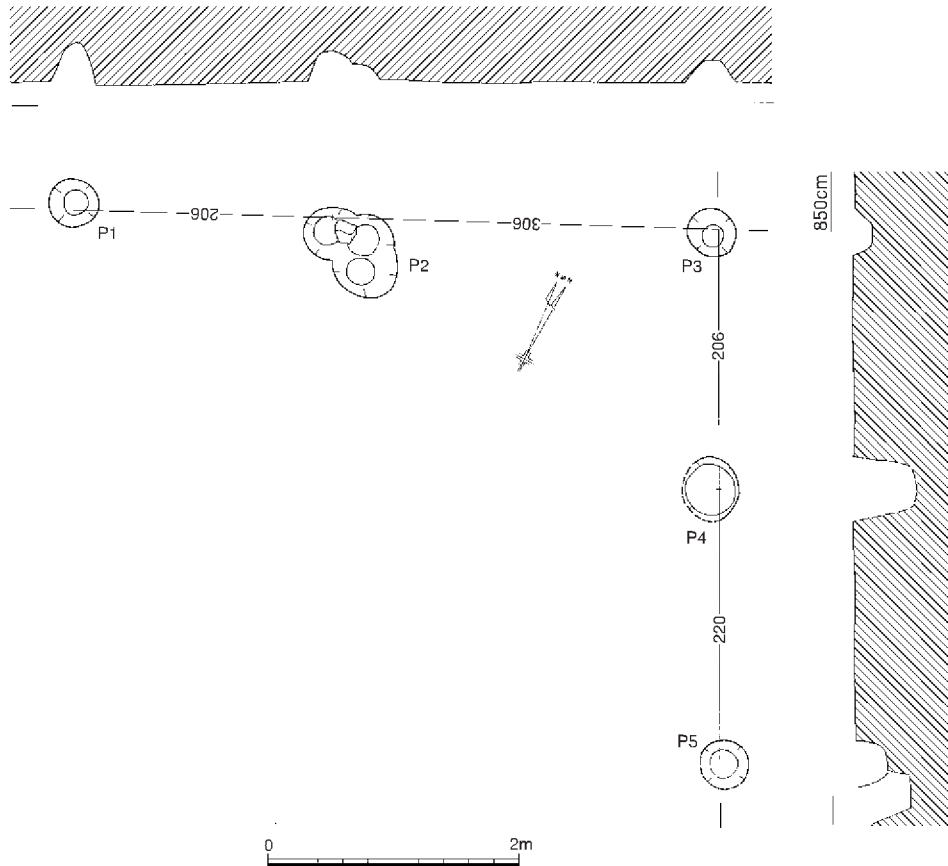


第171図 掘立柱建物15 (1/60)

**掘立柱建物16 (第160・172図)**

90Eで、掘立柱建物15の西に位置する。東西、南北共に2間分を検出したが、大半が調査区外となり、全容は不明である。柱穴は40cm前後の円形で、深さは20~30cmを測る。

出土遺物は皆無で、時期の特定はできないが、南北の軸方向が掘立柱建物15と一致することから、同時期に併存していた可能性が考えられる。 (渡邊)



第172図 掘立柱建物16 (1/60)



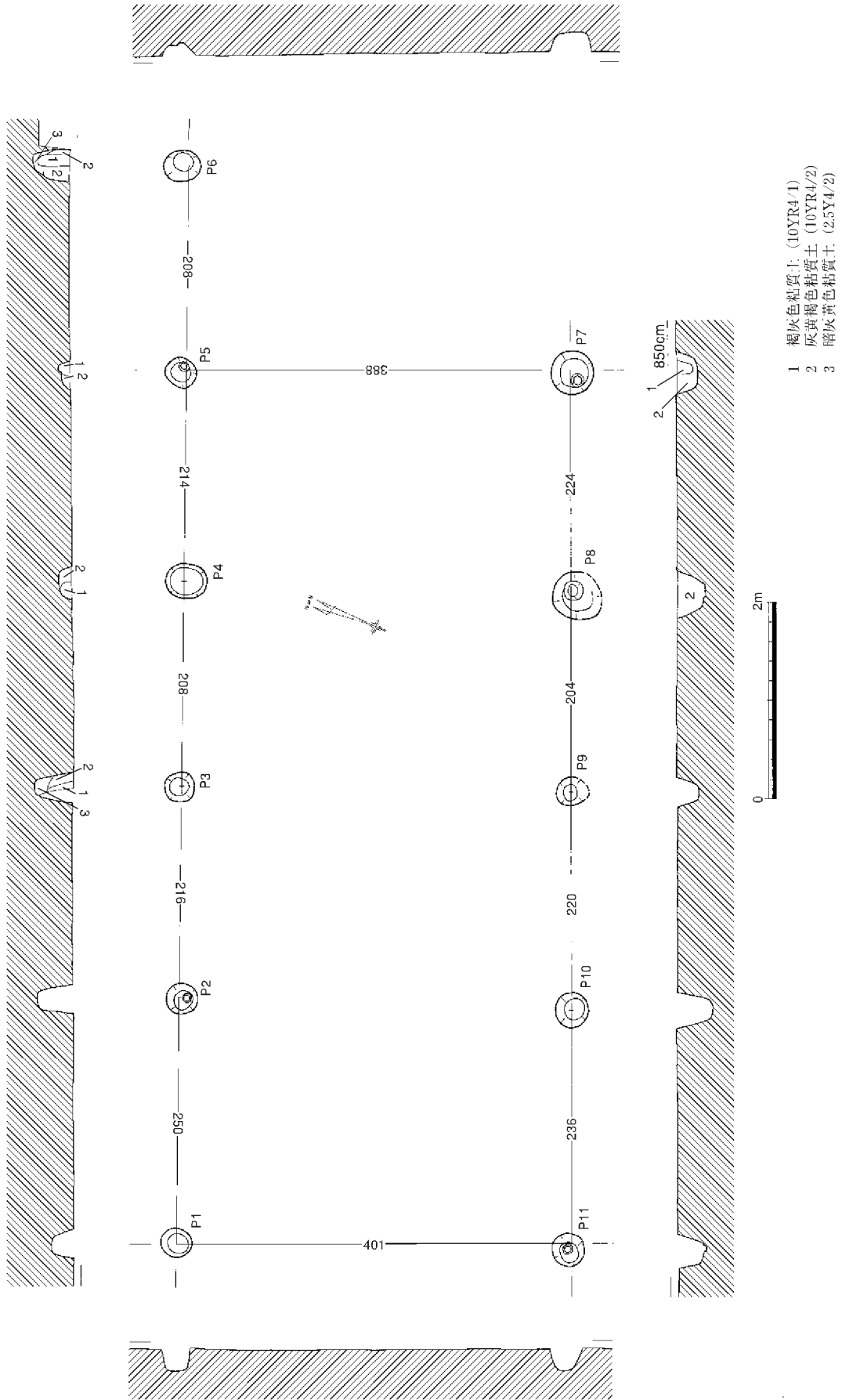
写真20 掘立柱建物17周辺調査状況 (北西から)

**掘立柱建物17 (第160・173図、写真20)**

88Eの東端、掘立柱建物13の南西に位置する4×1間の東西棟である。柱穴は平面径30~50cm、深さ10~40cmとばらつきがある。P2~6・11では柱痕跡が確認された。

なお、P6は建物に付随する堀と考えている。

すべての柱穴から近世の土器細片が出土しており、P11からは陶磁器も出土した。 (渡邊)

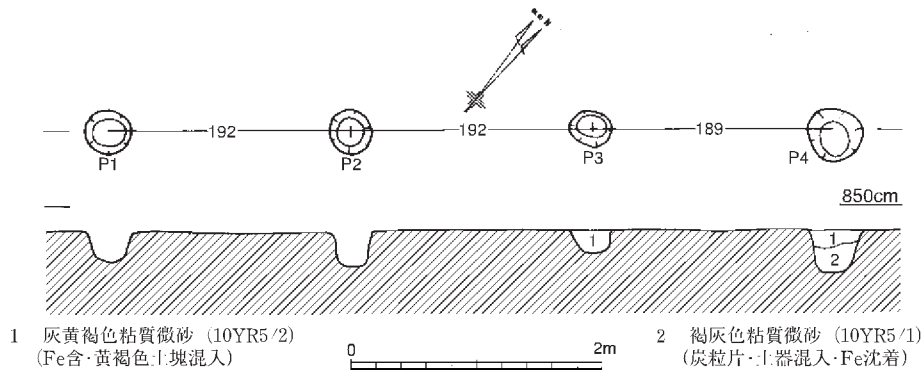


第173図 掘立柱建物17 (1/60)

### 3 柱穴列

#### 柱穴列 1 (第159・174図)

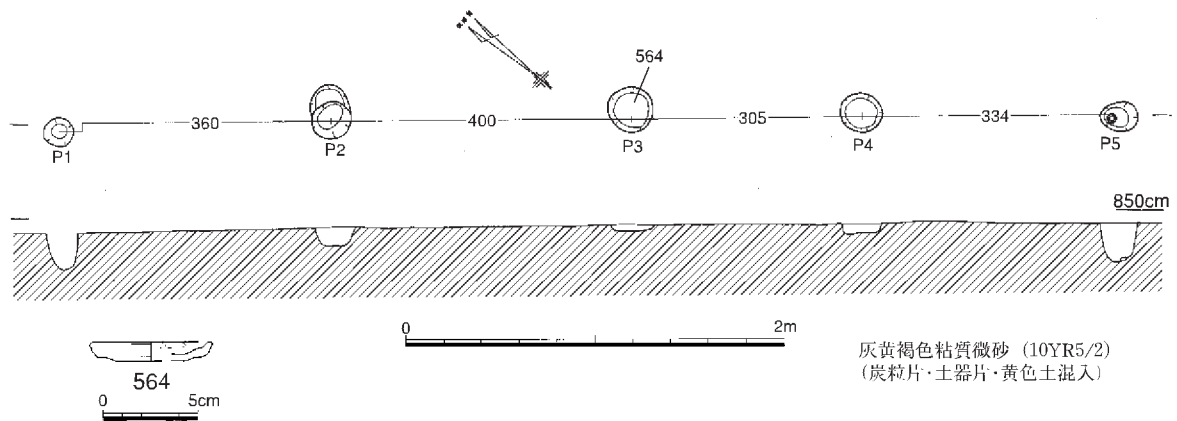
82Eで検出された柱穴列で、建物6の北側1.2mに位置している。規模は3間、全長で5.73mを測る。柱穴の平面形は円形であった。建物6の棟方向と一致することから、この建物の目隠し塀と考えられ、北側には屋敷地の出入口があった可能性も考えられる。時期は17～18世紀であろう。(石田)



第174図 柱穴列 1 (1/60)

#### 柱穴列 2 (第159・175図)

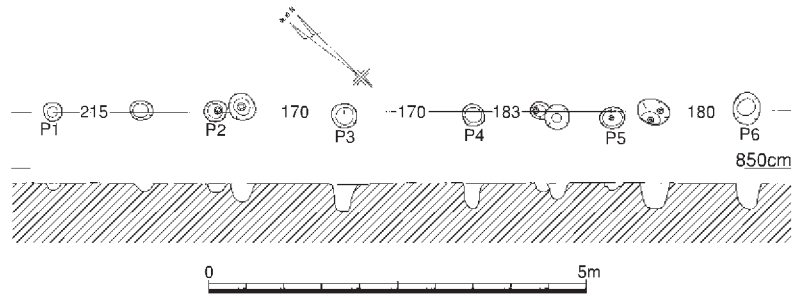
84E、屋敷地の中央部を南北にのびる形で検出された柱穴列である。規模は4間、全長13.99mを測り、柱穴の平面形は円形であった。建物8の棟方向に一致しており、柱穴列3とも軸が揃っている。屋敷地の東西を大きく区画し、建物8の西側の目隠し塀として機能していたものと考えられる。P2の埋土中から小皿564が出土している。時期は建物8と同時期で17～18世紀と考えられる。(石田)



第175図 柱穴列 2 (1/100)・出土遺物 (1/4)

#### 柱穴列 3 (第159・176図)

84Eに位置し、建物8から東側に1.5mの間隔をあけ検出された。規模は5間で全長9.18mを測り、柱穴の平面形は円形である。軸が建物8の棟方向に揃っており、西側で検出された柱穴列2とともに建物の東西を画する目隠し塀としての機能が想定される。埋土中から土器片が出土しているが、図示できるものは無かった。時期は建物8と同時併存しており、17～18世紀と考えられる。(石田)



第176図 柱穴列3 (1/100)

#### 4 井戸

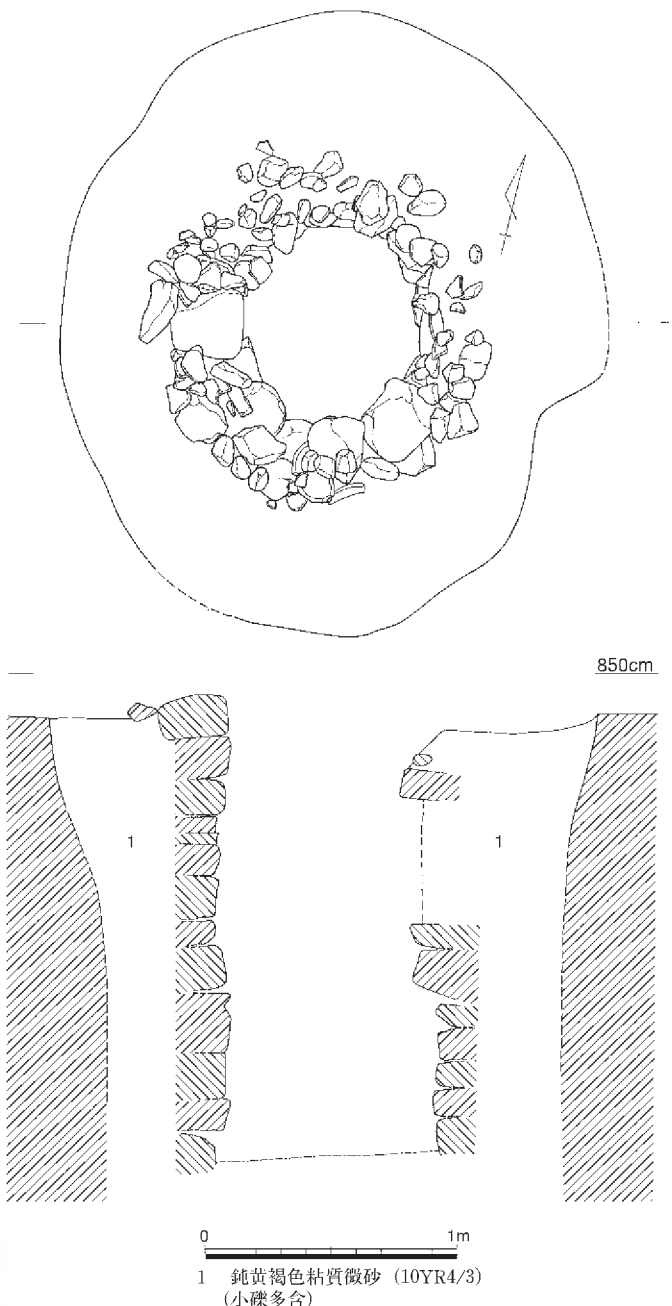
井戸2 (第160・177図、写真21、  
図版35)

90Eで、掘立柱建物13~17の中央に位置する石組みの井戸である。掘り方上面は南北2.47m、東西2.2mの不整円形で、井筒内は径80cm前後を測る。底は、湧水が激しく危険を伴うため、海拔6.6mまで掘り下げたが確認できなかった。内部は人頭大を越える石と土砂で人為的に埋められていた。石組みは比較的大きな石ではあるが垂角礫や川原石で乱雑に積んでいた。

ウラゴメおよび井戸内部から近世の備前焼片が出土しており、屋敷地に伴うと考えられる。(渡邊)



写真21 井戸2調査風景 (南東から)



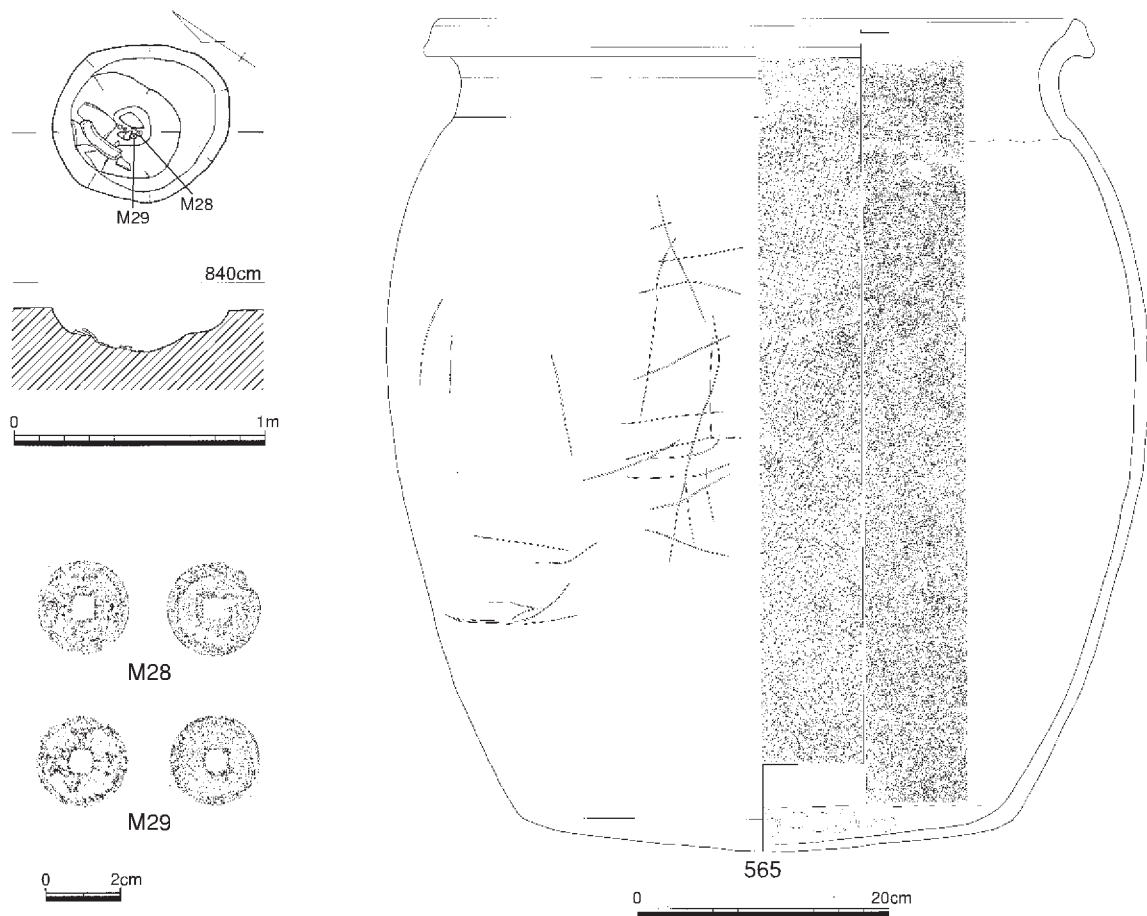
第177図 井戸2 (1/30)



## 5 土器棺

### 土器棺 2 (第159・178図、図版36・50)

82E南東角で、掘立柱建物5のP2の西隣に位置する。検出面上面は65cm前後の円形で、深さは18cmである。底面に径40cmの皿状のくぼみがあるが、銅銭M28・29および亀山焼系の甕565の底部は中央くぼみの底で、口縁部はその上に落ち込んだ状態で出土した。565はその大半が溝23北西角から出土した破片と接合しており、屋敷地整地により上部が削平され、溝23に投棄されたものと考えられる。銅銭が古寛永通宝であることから、17世紀中葉に位置付けられる。 (渡邊)



第178図 土器棺 2 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/6)

## 6 土壇

### 土壇64 (第159・179図)

82Gに位置し、屋敷地の南西隅で検出された土壇である。平面形は円形で、断面は椀状を呈している。土壇の規模は長軸で69cm、短軸で65cm、深さ22cmを測り、底面の海拔高は7.98mである。図示できる遺物は無かったが、時期は屋敷地内の他の遺構と同様で17～18世紀と考えられる。 (石田)

### 土壇65 (第159・180図、図版36)

84Eの中央西寄りで、掘立柱建物8と柱穴列2の間に位置する。東西96cm、南北73cmの不整形円形で、

深さは43cmを測る。

出土遺物からは判断し難いが、埋土の状況から近世と考えた。(渡邊)

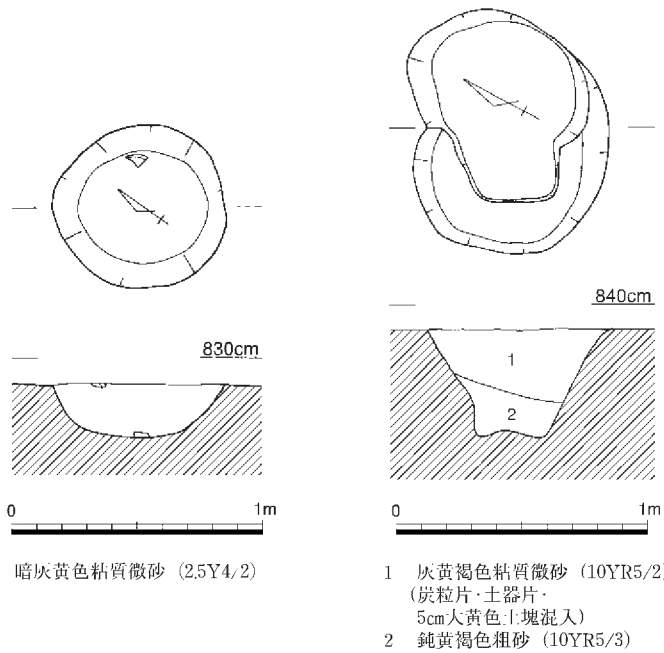
**土壙66・67** (第159・181図)

84Eに位置し、建物8の北側で隣り合って検出された土壙である。東には同じく隣接する土壙68・69がある。二つの土壙は形状、規模ともに類似しており、平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈している。規模は土壙66が85×67cm、深さ20cmで土壙67は87×71cm、深さ23cmを測る。時期は近世。(石田)

**土壙68・69** (第159・181図)

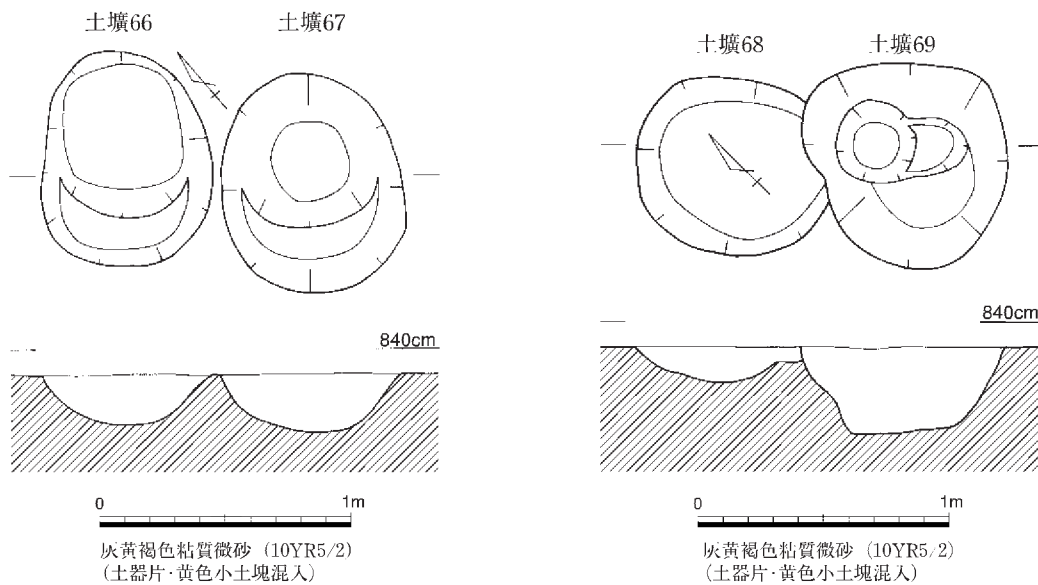
84Eで、土壙66・67と同様に建物8の北側で隣接して検出された土壙である。形状は円形もしくは不整な円形を

呈している。規模は土壙68が71×66cm、深さ14cm、土壙69は82×80cm、深さ34cmである。土壙66～69は、その性格については不明であるが、屋敷地内の一施設の残穴で、近世のものであろう。(石田)



第179図 土壙64 (1/30)

第180図 土壙65 (1/30)



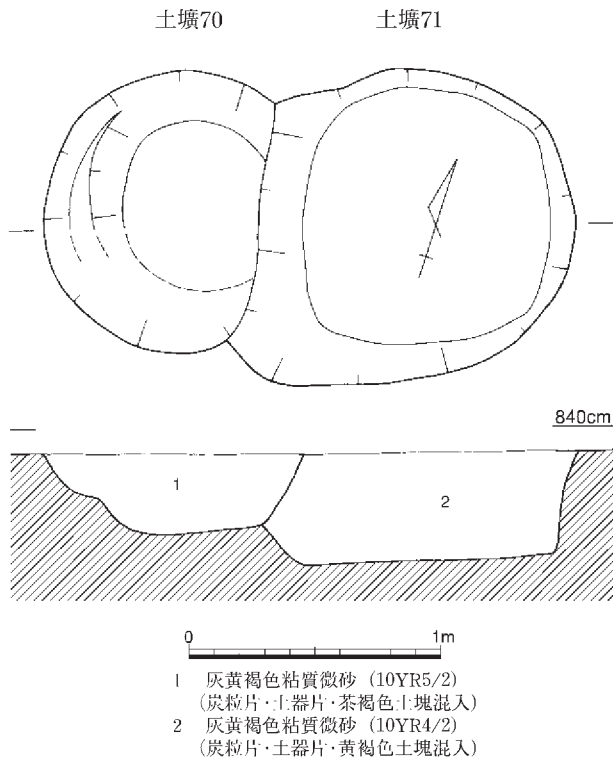
第181図 土壙66～69 (1/30)

**土壙70・71** (第159・182図、図版36)

84E中央南寄り、掘立柱建物10の南に位置する。土壙70は径約1mの円形で深さ32cm、土壙71は1辺1.3m弱の隅丸方形で深さ43cmを測る。切り合いから土壙70が土壙71より新しい。土壙71は形態、埋土共に後述する土壙72と類似しており、同様の機能を有していたと考えられる。

土壙71から近世と思われる陶磁器片が出土した。

(渡邊)



第182図 土壙70・71 (1/30)

土壙72 (第159・183図、図版37)

84E中央東寄りで、土壙70・71の北東に位置する。南北1.36m、東西1.26mの隅丸方形で、中に径90cm程度の桶を埋設したと思われる痕跡をとどめていた。桶内部の第1層は地山土がブロック状に多く混在する粗砂層である。

近世と思われる陶磁器細片のほか鉄釘や瓦が出土した。(渡邊)

土壙73 (第159・184図、図版37)

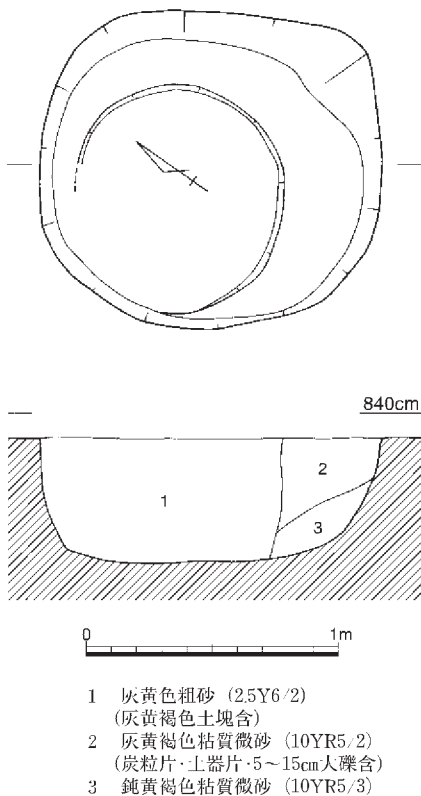
86Eに位置し、屋敷地の南東隅、溝23に切られる形で検出された土壙である。

平面形は方形で、土壙は二段に掘りこまれていた。土壙の底部中央付近では、やや浮いた状態で板状の割石が敷かれていた。規模は長軸で89cm、短軸は東端を欠くが残存長で75cm、深さ39cmを測る。図示できる遺物は無かったが、屋敷と同時期で近世のものと考えられる。(石田)

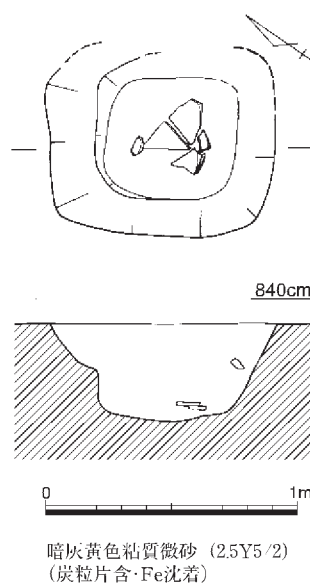
土壙74 (第159・185図、図版37)

84Eに位置し、屋敷地の南東隅、土壙73の北60cmで検出された土壙である。平面形は不整な円形で、断面は椀状を呈する。土壙の規模は長軸で1.03m、短軸で88cm、

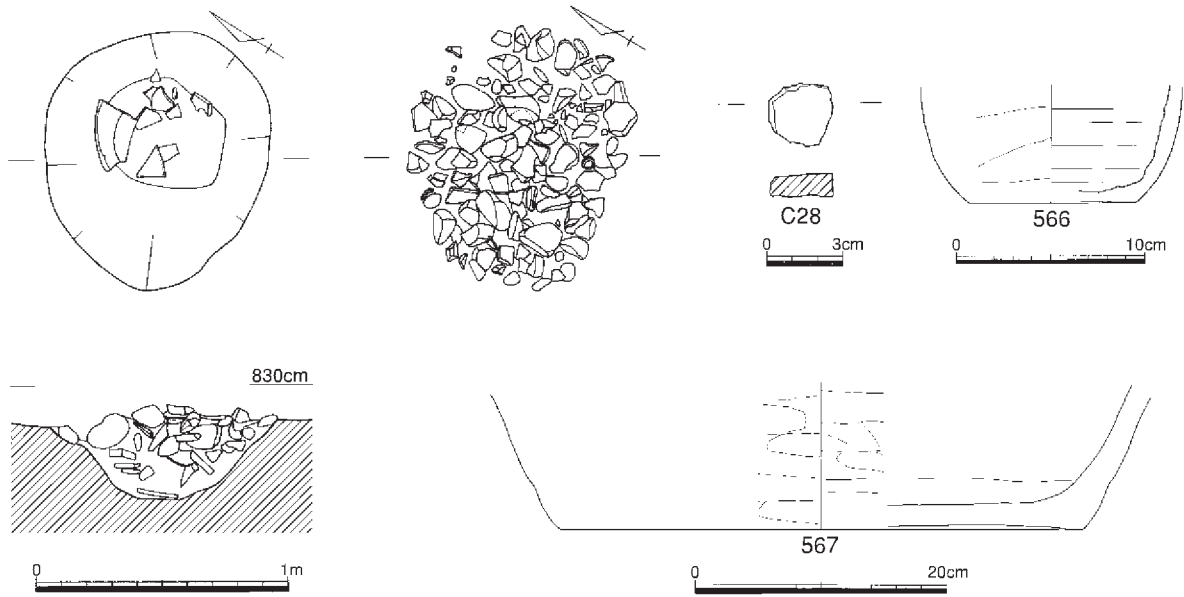
深さ32cmを測り、底面の海拔高は7.84mであった。土壙の上層部分は10~20cm大の礫で充填されており、意図的に埋められたものと考えられる。土壙の底部付近では備前焼の壺566と大甕567を検出したが、いずれも破片の状態であった。その他、円盤状土製品C28が伴って出土している。時期は、17~18世紀と考えられる。(石田)



第183図 土壙72 (1/30)



第184図 土壙73 (1/30)



第185図 土壌74 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4・1/6)

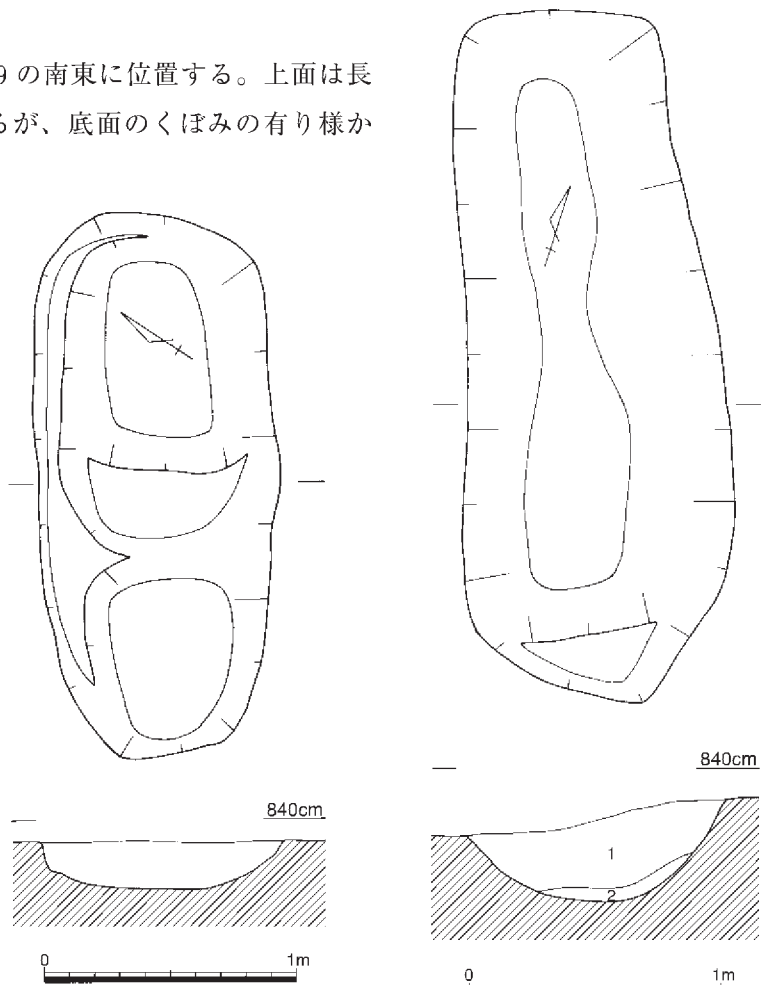
**土壌75 (第159・186図)**

84Gの北端中央で、掘立柱建物9の南東に位置する。上面は長2.18m、幅96cmの長楕円形を呈するが、底面のくぼみの有り様から、少なくとも2基の長方形土壌が重複していると思われる。なお、長軸方向が建物群にほぼ平行し、建物群に伴うものと考えられる。

近世と思われる備前焼片が出土している。(渡邊)

**土壌76 (第159・187図)**

84Eに位置し、屋敷地の南東部で溝23を切る形で検出された土壌である。平面形は不整な長方形で、断面は椀状を呈しており、南側に狭い平坦面がある。土壌の規模は長軸で2.70m、短軸で1.03m、深さ34cmを測る。溝23の埋没後に掘削された土壌と考えられ、屋敷地内では新しい遺構である。時期は近世と考えられる。(石田)

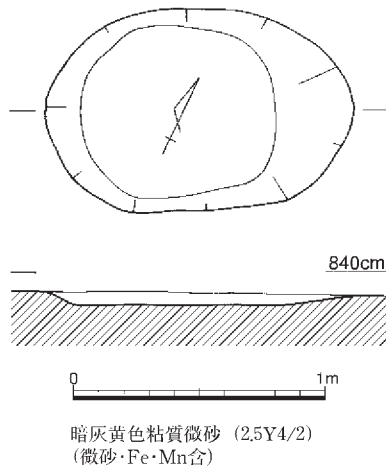


灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)  
(炭粒・土器片含)

第186図 土壌75 (1/30)

1 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)  
(微砂・Fe・Mn含)  
2 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)

第187図 土壌76 (1/30)



第188図 土壇77 (1/30)

土壇77 (第159・188図)

86 G北西角に位置する。東西1.22m、南北81cmの楕円形を呈し、深さ5 cmしか残存していない。側壁への立ち上がりはゆるやかで皿状を呈し、近接する溝と一連のたわみの可能性も考えられる。

出土遺物からは中世以降としか言えないが、検出状況や埋土から近世に降ると考えられる。(渡邊)

土壇78 (第160・189図)

90 Eで、井戸2の南東に位置する。検出面では南北2.03m、東西1.75mの不整形であるが、底面は1辺1.1~1.2mの隅丸方形を呈する。また土壇北半では、第3・4層下面に沿う形で礫が落ち込んでおり、埋土も第1~4層が白味があった砂で、第5層より下は灰色を基調として炭や焼土を含む粘性の強い土

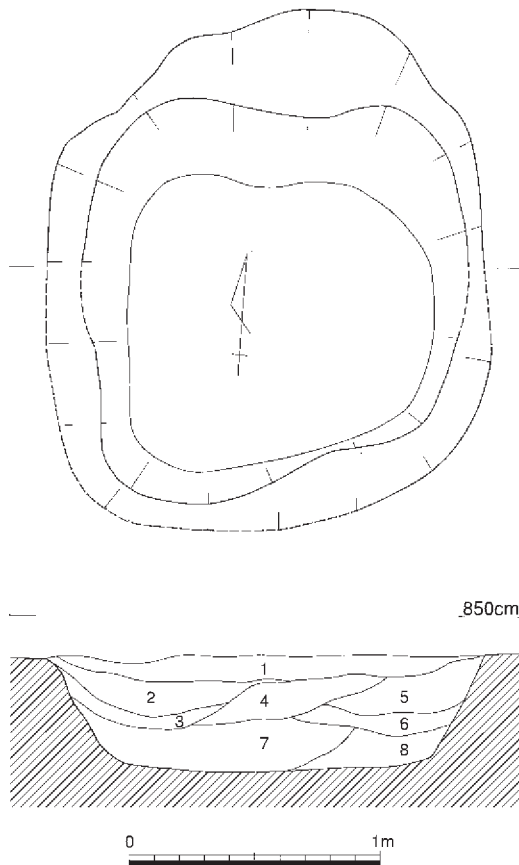
となり、差が大きく認められる。上面でみられる礫群内側は弧を描いており、おそらく土壇72のように桶状の容器を埋置していた可能性が考えられる。

近世と思われる土器細片がわずかだが出土している。(渡邊)

土壇79 (第160・190図、図版38・51)

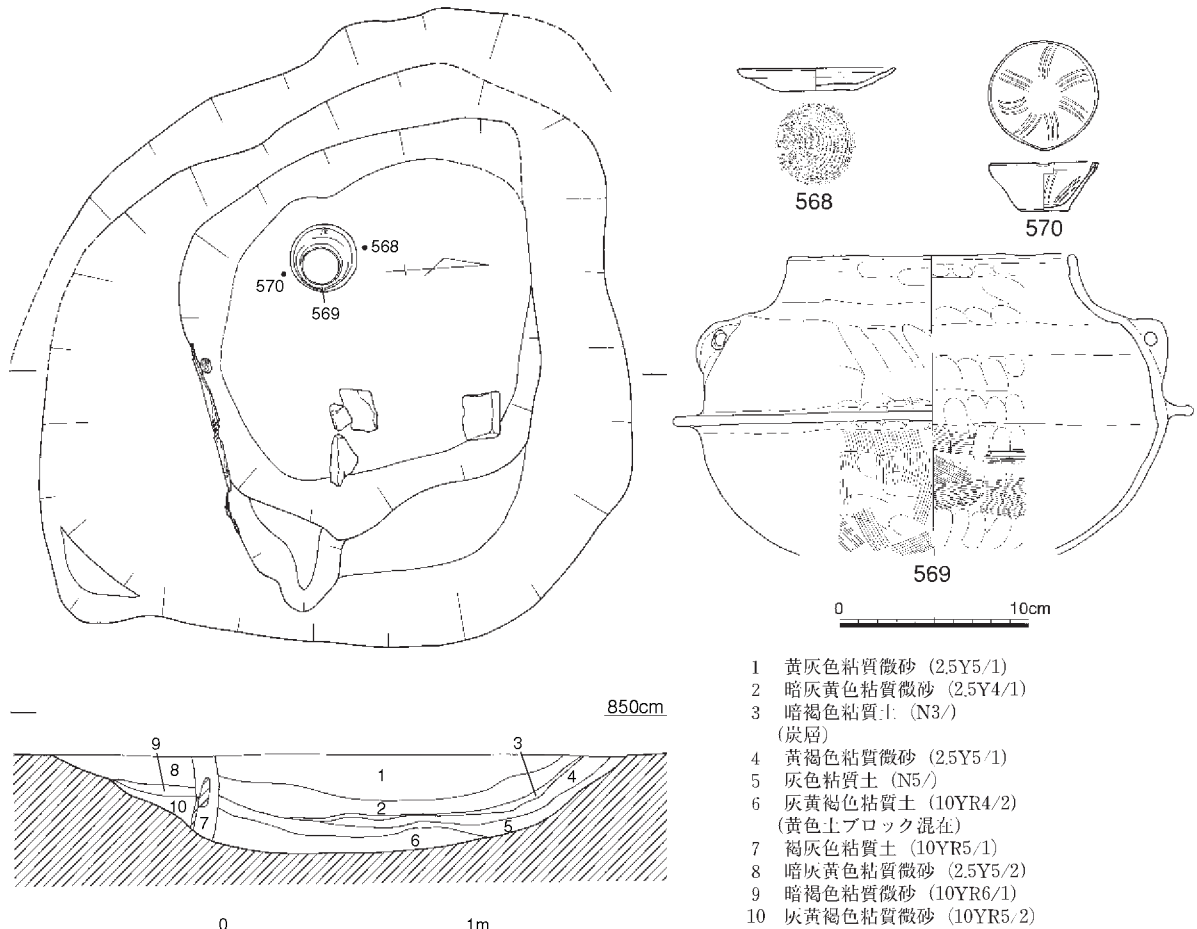
90 E北西で、掘立柱建物13の南に位置する。検出面では東西2.3m前後の不整形だが、底部が一辺1.3m前後の隅丸方形に一段下がり、この下段の南壁に沿って、板と、板を留める杭の一部が検出された。板の内外では堆積状況も異なり、また第3層の炭層より下位の第5・6層は粘土層、上位の第1・2層は微砂層と、大きく上下でも異なる。遺構の性格は不明である。

568~570は底より浮いた状態で出土した。第3層より上部に包含されることから、土壇の廃絶に伴って意図的に投棄されたと考えられる。挿鉢のミニチュア570は意識的に口縁端部を屈曲させ、スリメも放射状で粗く古い要素をとどめている。どこまで忠実に模倣しているか定かではないが、17世紀後半以前に位置付けられよう。(渡邊)



- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1 灰色粘質微砂 (5Y5/1)     | 6 鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3) |
| 2 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y5/2) | 7 灰黄色粘質土 (10YR4/2)  |
| 3 黄灰色粘質微砂 (2.5Y5/1)  | (焼土少含)              |
| 4 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2) | 鈍黄褐色粘質土塊混)          |
| 5 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)  | 8 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/1) |
| (焼土多含)               | (炭・焼土粒少含)           |

第189図 土壇78 (1/30)



第190図 土壌79 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 7 溝

溝23・24 (第159・191図、写真22、図版51)

82E東半～86E西端を中心に展開する掘立柱建物群を囲む溝で、屋敷地を区画する溝と考えられる。

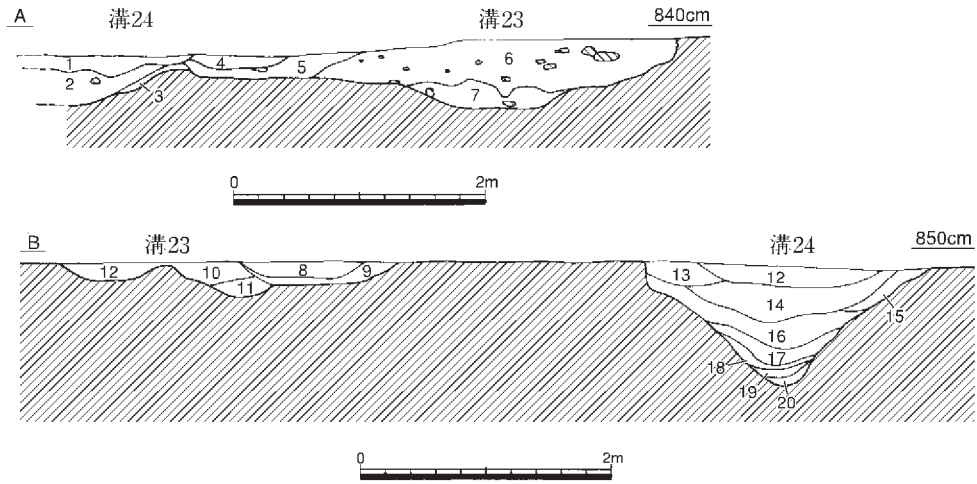
溝23は幅1m前後で、底面の海拔は8.0～8.1mを測る。比較的浅く、空堀であったと見られる。また、北東角および北辺東半2か所を溝底より30～50cm深く、長方形に掘りくぼめている。屋敷地内の日常生活に伴う作業用土壌の可能性が高いが、北東角の土壌状部分からは溝24と繋がる溝が設けられていることから、溜枘的な用途も想定される。

一方、溝24は幅2.3mをこえ、底面の海拔高は7.2～7.3mと深い。底にはグライ化した粘土が溜まっており、湛水していたと想定される。また断面はV字～逆台形を呈し、防御の目的も有していたと考えられる。溝23・24からは17世紀全般にわたる陶磁器が出土したが、溝23には16世紀末に遡る遺物も出土しており、溝24が一段階遅れて掘削された可能性も考えられる。

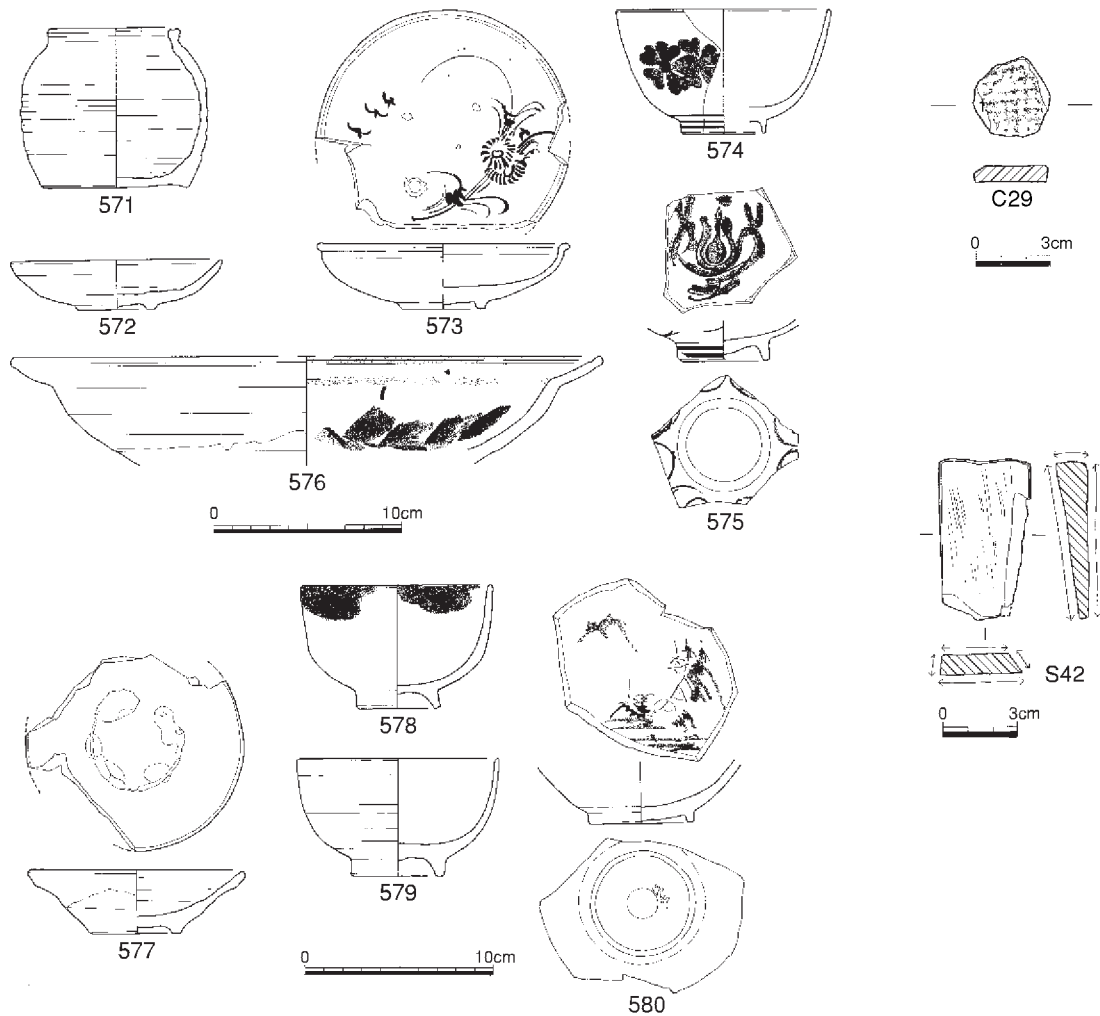
(渡邊)



写真22 溝23 (北西から)



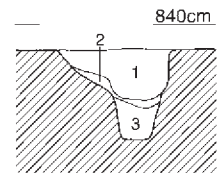
- |                                 |  |  |  |
|---------------------------------|--|--|--|
| 1 黄灰褐色砂質微砂 (2.5Y6/1)<br>(Mn沈着)  | 5 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)<br>(2~12cm大角礫含)                 | 8 灰黄色粘質微砂 (2.5Y6/2)<br>暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y5/2)<br>(明褐色砂質土塊多含) | 14 鈍黄褐色細砂~粗砂 (10YR5/3)<br>灰色粘質土 (5Y4/1)          |
| 2 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)<br>(Fe上部分沈着) | 6 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y5/2)<br>(下部Fe沈着・5~18cm大<br>角礫多・土器片含) | 10 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)<br>(黄褐色土粒含)                         | 15 鈍黄褐色細砂 (10YR6/4)<br>暗灰色シルト質粘土 (N3/)<br>(有機質多) |
| 3 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2)<br>(黄色細砂混入)  | 7 灰色粘質土 (5Y4/1)<br>(土器片・瓦片・10~30cm大<br>角礫含)          | 11 褐灰色粘質土 (10YR4/1)                                      | 17 暗灰色シルト質粘土 (N3/)<br>(有機質多)                     |
| 4 鈍黄褐色砂質土 (10YR7/2)<br>(Fe沈着)   |  | 12 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)                                     | 18 灰色粘土 (N5/)                                    |
|                                 |  | 13 褐灰色粘質土 (10YR4/1)                                      | 19 オリーブ灰色細砂 (5GY5/1)                             |
|                                 |  |  | 20 緑灰色シルト質粘土 (10GY6/1)                           |



第191図 溝23・24 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

溝25 (第159・192図)

82Eで、溝23と溝24の北西角に位置する。上部幅45cm、下部幅25cmで、断面U字を呈する。底面の海拔高は7.94mで、溝23よりは深い、北東角掘り込み部分よりは浅く、溝24より浅い。北端と南端で、底面のレベル差はなかった。両者を繋ぐ水路と考えられる。(渡邊)



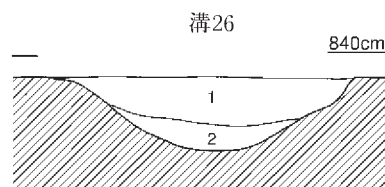
- 1 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) (Fe・Mn含)
- 2 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) (Fe・Mn少含)
- 3 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) (Fe少含)

第192図 溝25 (1/30)

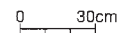
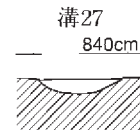
溝26～29 (第159・193図)

86E南西に位置する。溝23・24で囲まれた屋敷地の南側にあたり、区画溝の南辺が位置することを念頭に調査を行ったが、検出面に差がないにも関わらず、区画溝南辺は検出できなかった。溝26～29は、溝としているものの長さの短いものばかりで、堆積状況からも水が流れていたとは考えがたい。近世と思われる土器片や鉄滓が出土した。

溝24の北辺が用水路と重複することから、南辺も用水路内に重複する可能性は高い。一方、南側は集落域の本体が想定され、区画が途切れている可能性も考えられ、その場合はこれらの溝が繭状の溝として連なっていた可能性も浮上してくる。(渡邊)



- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)
- 2 灰黄褐色細砂 (10YR3/2)

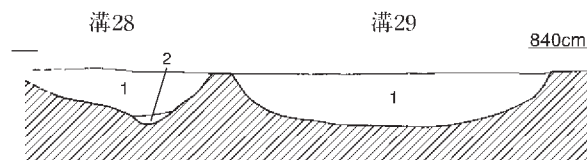


- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) (微砂・Fe・Mn含)

溝30 (第158・194図)

88Eで、掘立柱建物12の北に位置する。現代の用水路にはほぼ並行する。幅1.71m、深さ21cm、底面の海拔高は8.15mを測る。

近世と思われる陶磁器片が出土している。位置関係や、埋土の状況から屋敷地の区画溝との関連が想起されるが、これより南西部の調査は行っておらず、現状では判断できない。(渡邊)

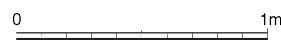
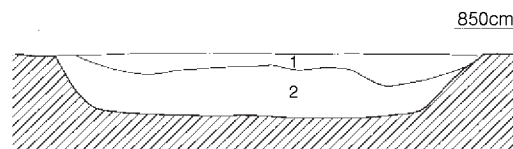


- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)
- 2 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)

第193図 溝26～29 (1/30)

溝31 (第160・195図)

88E東半から92E西半を中心として掘立柱建物13～17を囲む溝で、溝23同様に屋敷地の区画溝と考えられる。ただし、掘立柱建物13・17とは近すぎて、同時期に併存していたとは考えがたい。幅は40～50cmと細くほぼ一定である。検出面からの深さ13cm、底面の海拔高は8.25mである。近世と思われる土器細片が出土した。(渡邊)



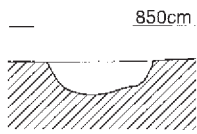
- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR6/3)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)

第194図 溝30 (1/30)



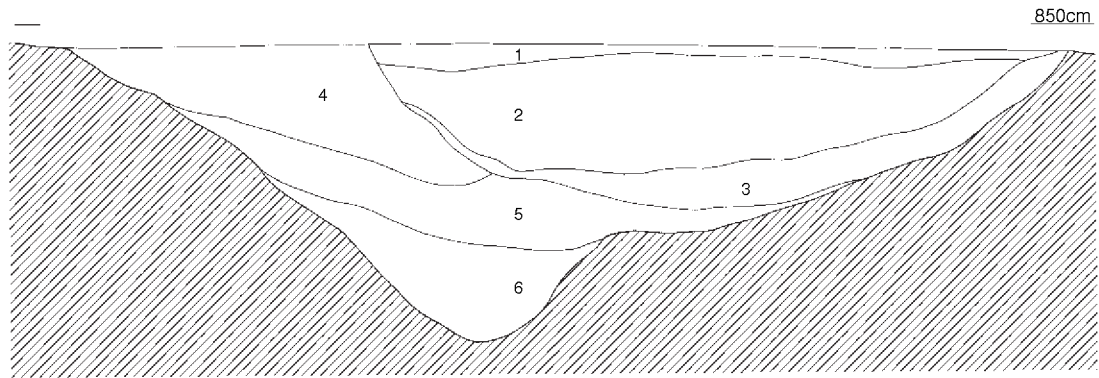
溝32 (第160・196図、図版38・51・52)

88Eで、溝31の西に位置する。これもやはり屋敷地を区画する溝のひとつと考えられる。幅3.5m、深さ1.15mを測るが、堆積状況から第1～3層と第4～6層の大きく2段階に分けられる。古段階では底面の海拔高7.2mと深く、断面はV字状を呈す。新段階は海拔7.8mと浅くなり、断面も緩やかになる。図示した土器は18世紀代に比定され、西側の屋敷地より新しい様相を示すが、古段階の溝は溝24と共通する要素が濃く、溝の開削が17世紀に遡る可能性は考えられよう。(渡邊)



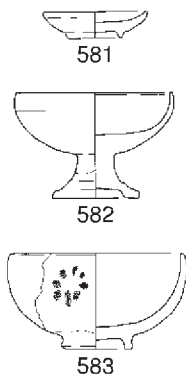
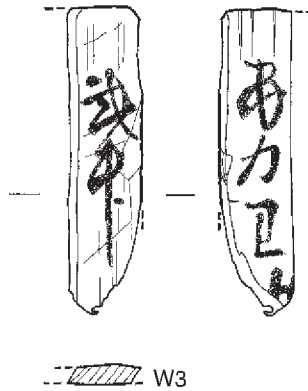
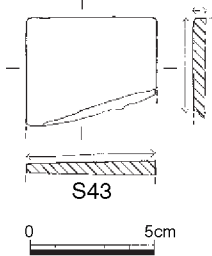
褐灰色粘土 (10YR4/1)

第195図 溝31 (1/30)

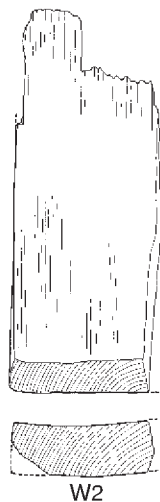


0 1m

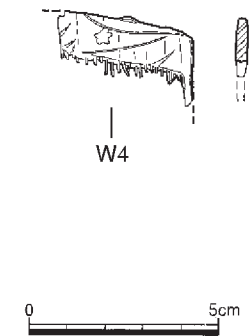
- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)  | 4 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)   |
| 2 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)   | (褐色微砂 (10YR4/4) 土塊含)  |
| (暗褐色微砂 (10YR3/3) 土塊含) | 5 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)   |
| 3 褐灰色強粘質微砂 (10YR5/1)  | (黄褐色微砂 (10YR5/6) 土塊含) |
|                       | 6 黄灰色強粘質微砂 (2.5Y4/1)  |



0 10cm



M30



W4



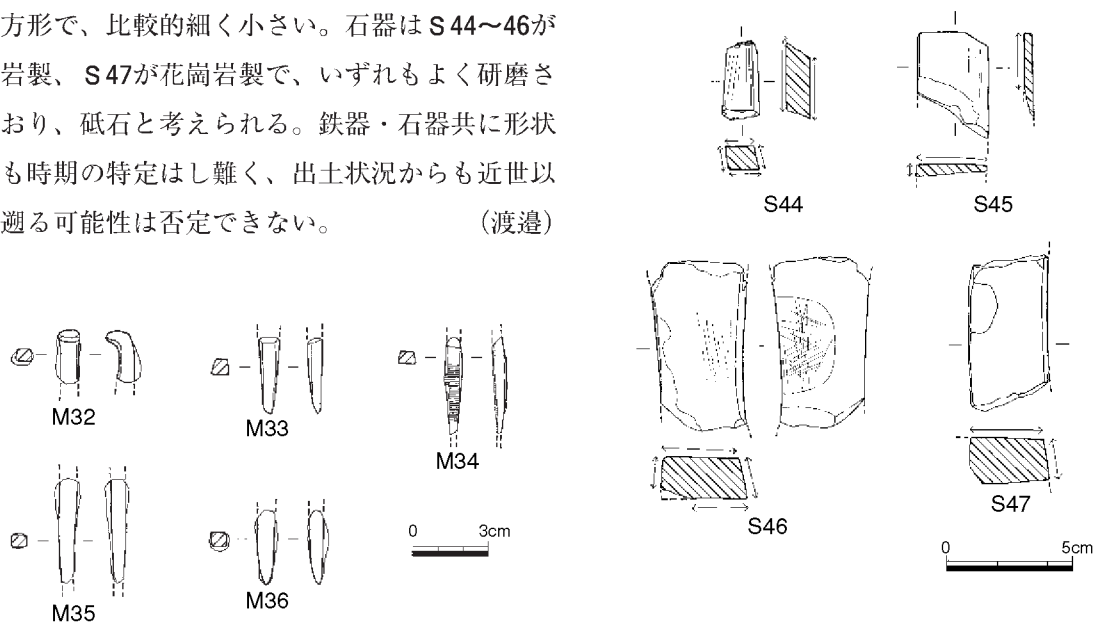
M31

第196図 溝32 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4・1/2)

8 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第197図、図版52・54)

柱穴は非常に多く検出されているが、時期を特定できたり、凶化し得るほどの遺物の出土は少ない。南溝手遺跡周辺全体が近世以降大幅に削平され、耕地化されたこともその要因としてあげられようが、墓や溝を除いて、遺物を伴う遺構自体が少なかったように思われる。実際、屋敷地内の掘立柱建物を構成する柱穴ですら近世の遺物は乏しく、あったとしても細片であった。逆に、埋土の質や状況から近世と判断されるにもかかわらず、瓦をはじめとして古代・中世の遺物が多く混入していた場合もある。このような状況から、掘立柱建物以外には近世の柱穴の抽出は行わなかった。

ここにあげた鉄器および石器はたわみもしくは耕作に伴う堆積層から出土したもので、**M33~35・S44~47**がおおよそ80ラインより西の旧1区から、**M32・36**が90ラインを中心とした東側の屋敷地周辺から出土した。鉄器はすべて釘と考えられる。断面は方形で、比較的細く小さい。石器は**S44~46**が流紋岩製、**S47**が花崗岩製で、いずれもよく研磨されており、砥石と考えられる。鉄器・石器共に形状からも時期の特定はし難く、出土状況からも近世以前に遡る可能性は否定できない。(渡邊)



第197図 柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/3)

## 第4章 窪木遺跡

### 第1節 遺跡の概要

総社市窪木は、南北が国道180号線付近から岡山県立大学を超えて砂川まで、東西は長良山から総社市立服部幼稚園辺りまでの、南北に長い一帯の地名（大字）である。今回報告する窪木遺跡は、そのやや南寄りの地域にあたり、北西に位置する県立大学地内および周辺に広がる窪木遺跡の微高地とは異なる場所に位置する。

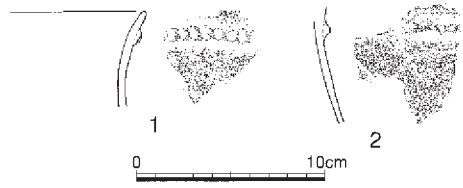
第1章でも触れているように、この一帯の窪木遺跡は大きく2か所の微高地からなる。西側の微高地は東西幅280m余りで、西は南溝手との字境付近にある下がり3・4を、東は130G・Iに位置する下がり1を境としている。この下がり1から西へ100mの範囲は、微高地の基盤が拳大の円礫を中心とした層からなり、その礫層からは縄文時代晩期の土器が出土している（第199図）。なお、この礫層を基盤とする微高地上では、弥生時代中期中葉を中心とする遺構・遺物を多く確認した。一方、東側の微高地は下がり7を西限とし、東側は調査区の東端まで東西170mの範囲を有する。この微高地では、弥生時代中期末から後期にかけての遺構・遺物を検出した。なお、微高地の東端および西端は、竪穴住居の存在等から比較的安定した場所だったと推察できる。しかしながら、その間に挟まれた場所は居住地として適さなかったようで、土器棺や土器溜まりなどを検出したにすぎない。

古墳時代になると、集落域は西側の微高地へと移っていくが、前半期の遺構・遺物は少なく、具体的な様相は分からない。しかし後半期になると、多くの竪穴住居あるいは掘立柱建物が建てられ、当時の一大集落としての様相を呈する。なお、この集落を取り囲むように掘削された溝の存在等から、東西幅150mの集落域であることが明らかとなった。



古代には、東側の微高地で掘立柱建物を確認した。ここでは8世紀に遡る建物が存在する一方、中心となる時期は9世紀である。同時期の土器溜まりと共に注目される資料である。

中世以降になると、それまで利用されなかった低位部にも遺構が確認できるようになるが、総じてその密度は低い。(松尾)



第199図 礫層出土遺物 (1/4)

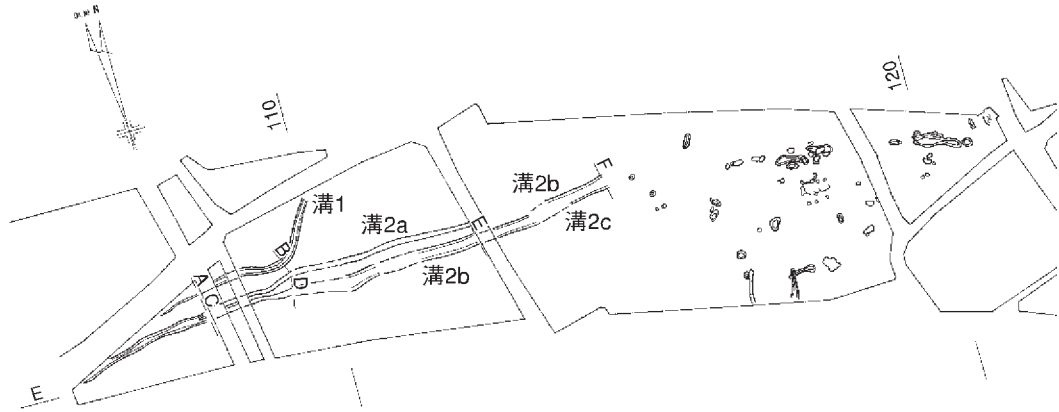


写真23 窪木遺跡遠景 (南西から)



第198図 遺構全体図 (1/2,000)

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物



### 1 概要

弥生時代の遺構の広がり、130～140ラインに走る旧河道を挟んで大きく東西の2つの微高地に分かれ展開する。西の微高地、120ライン付近からは中期中葉を中心とした土壙50基余りが検出された。特に、土壙の長さが2 mを越えるものや、4 m、中には8 m余りの長大なものも含まれ、その在り方が注目される。また、西からは東西方向に延びる溝数条が検出されている。

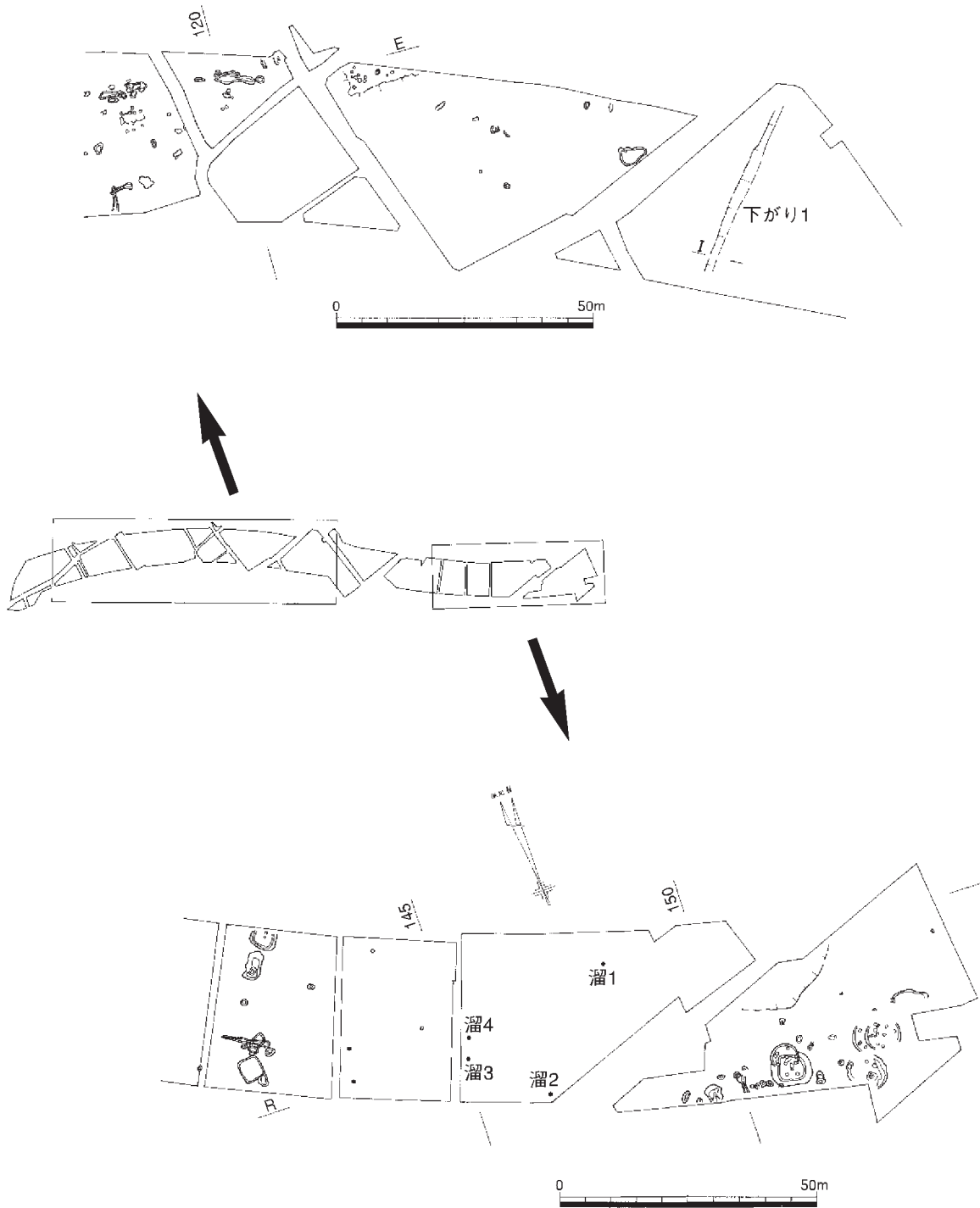
一方、東の微高地からは中期末から後期にかけての竪穴住居7軒を、その周囲からは土器棺6基を検出している。また、同時期の土壙30基余りや、土器溜まり4、窪地4か所なども検出され、特に、土器溜まりや窪地からは中期末の良好な資料が得られた。(江見)



写真24 土壙35調査風景 (東から)



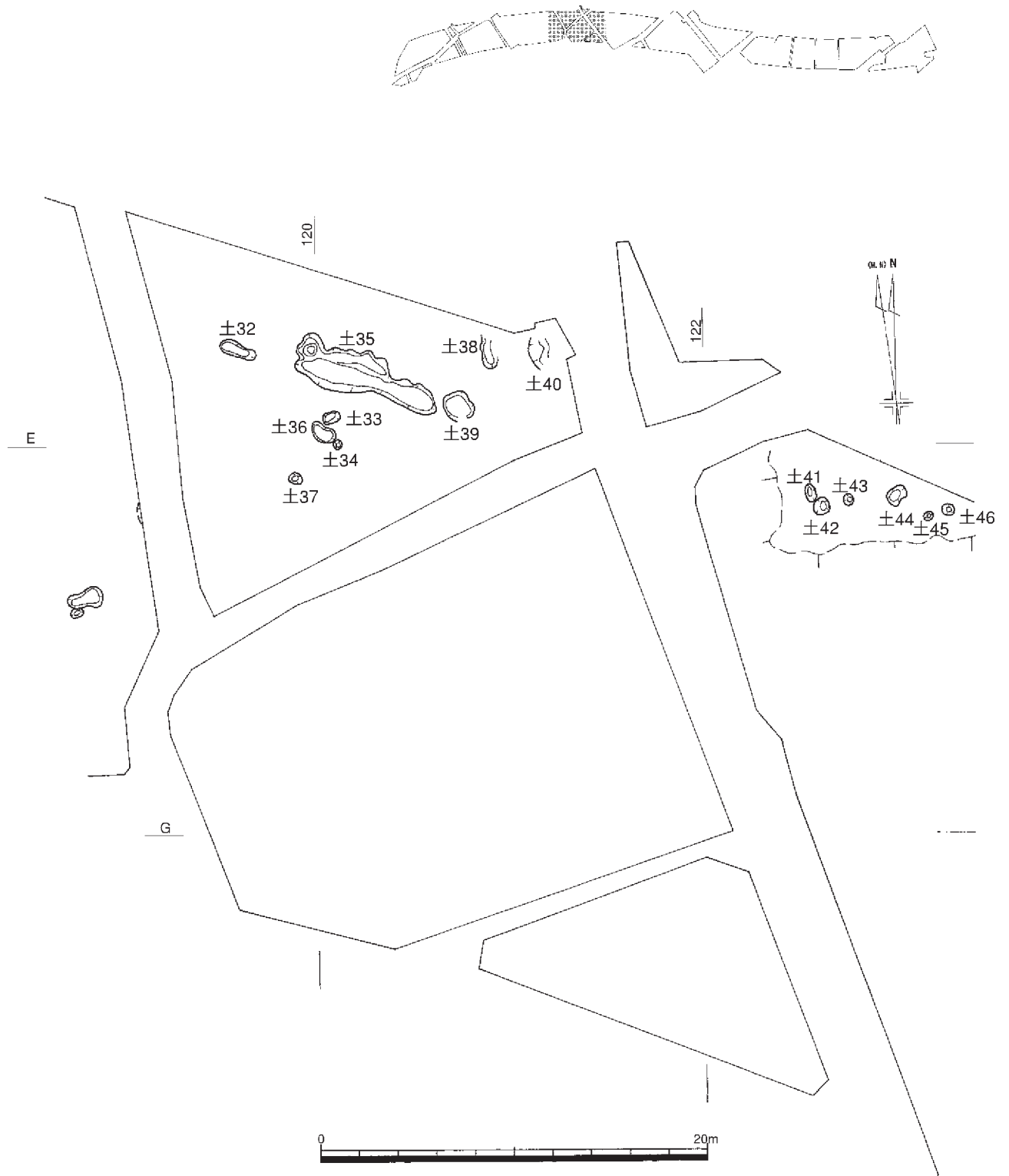
写真25 竪穴住居3調査風景 (西から)



第200図 弥生時代遺構全体図 (1/1,250)

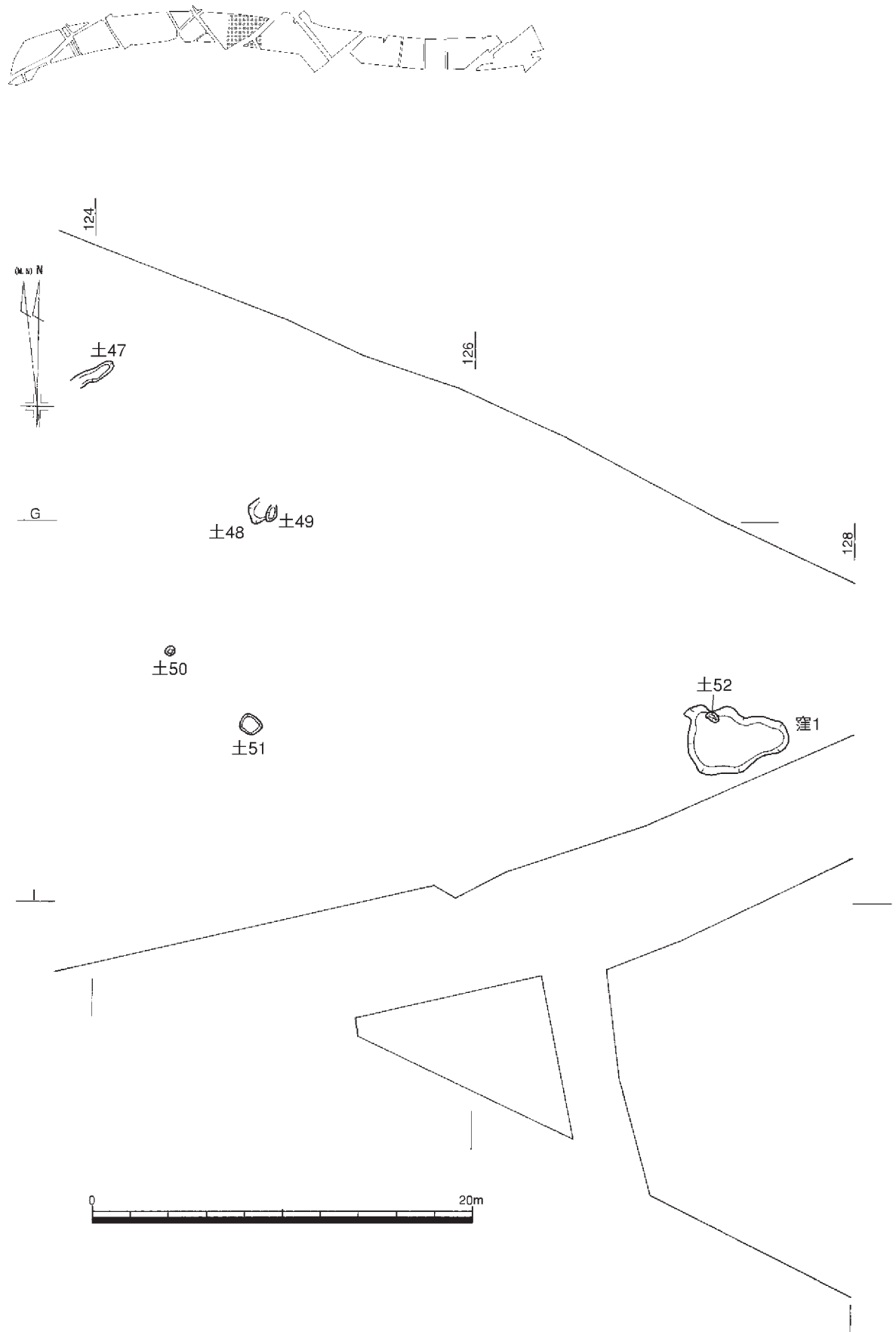


第201図 弥生時代主要遺構図① (1/300)

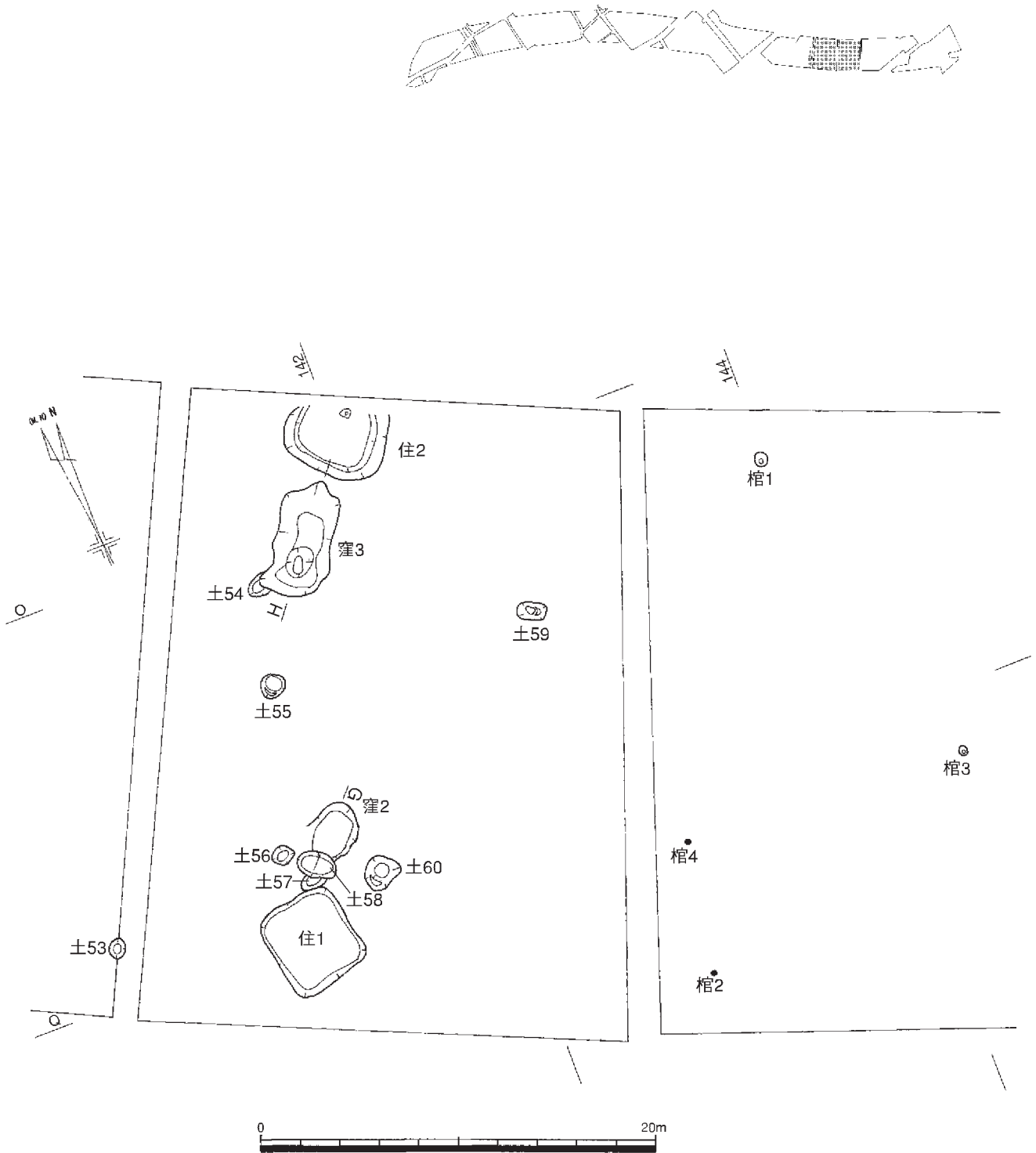


第202図 弥生時代主要遺構図② (1/300)

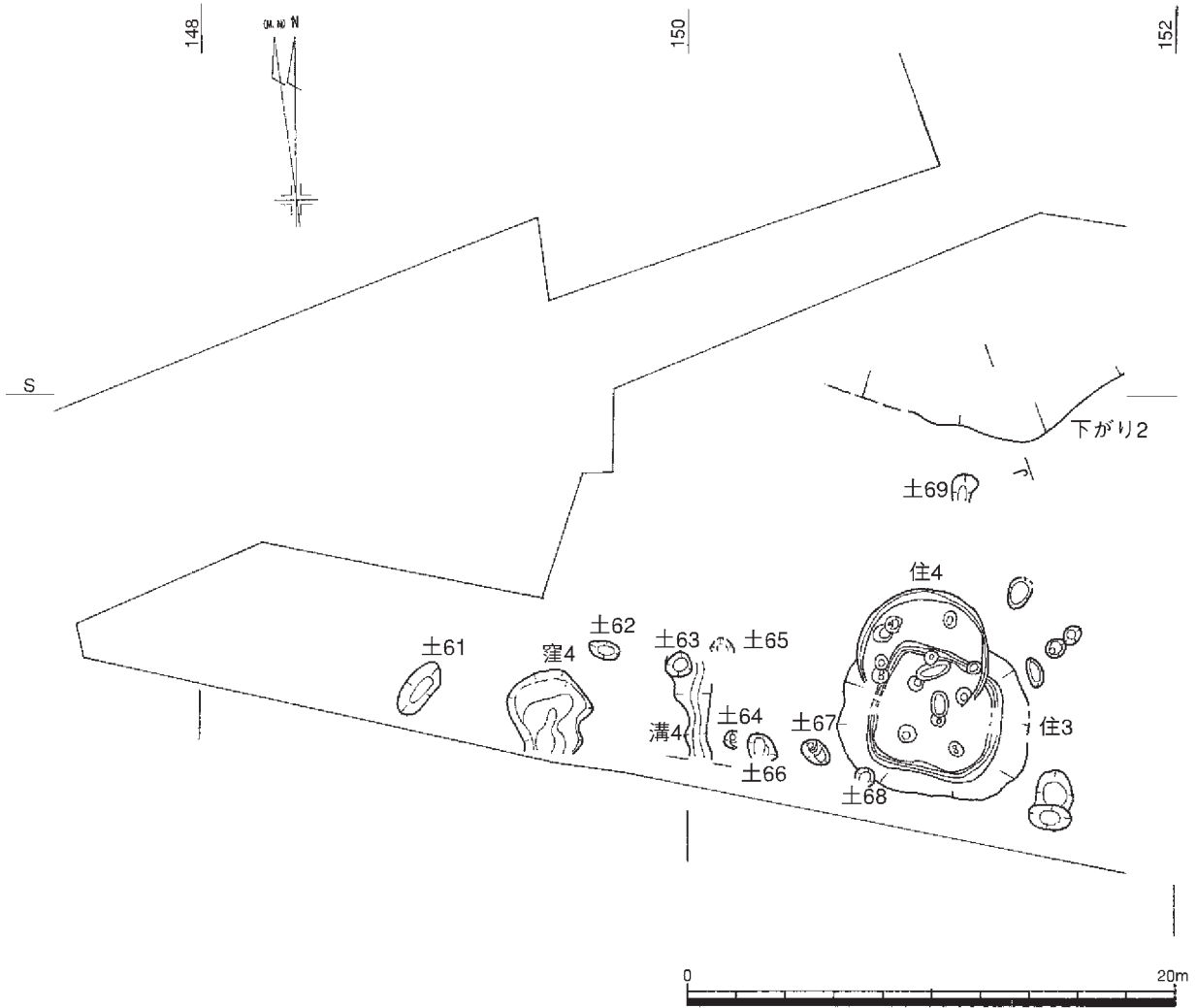
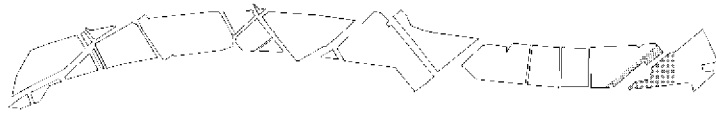




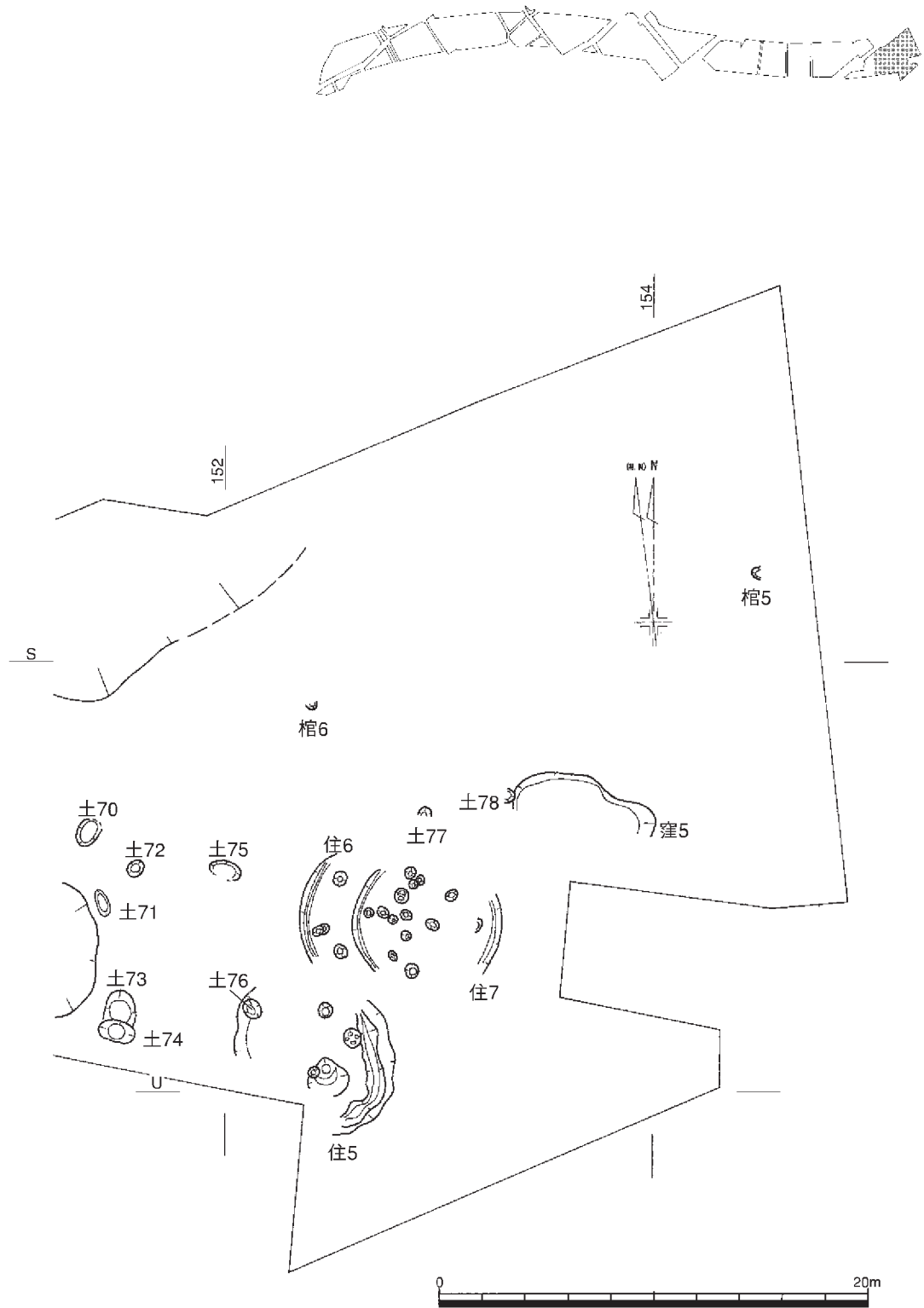
第203図 弥生時代主要遺構図③ (1/300)



第204図 弥生時代主要遺構図④ (1/300)

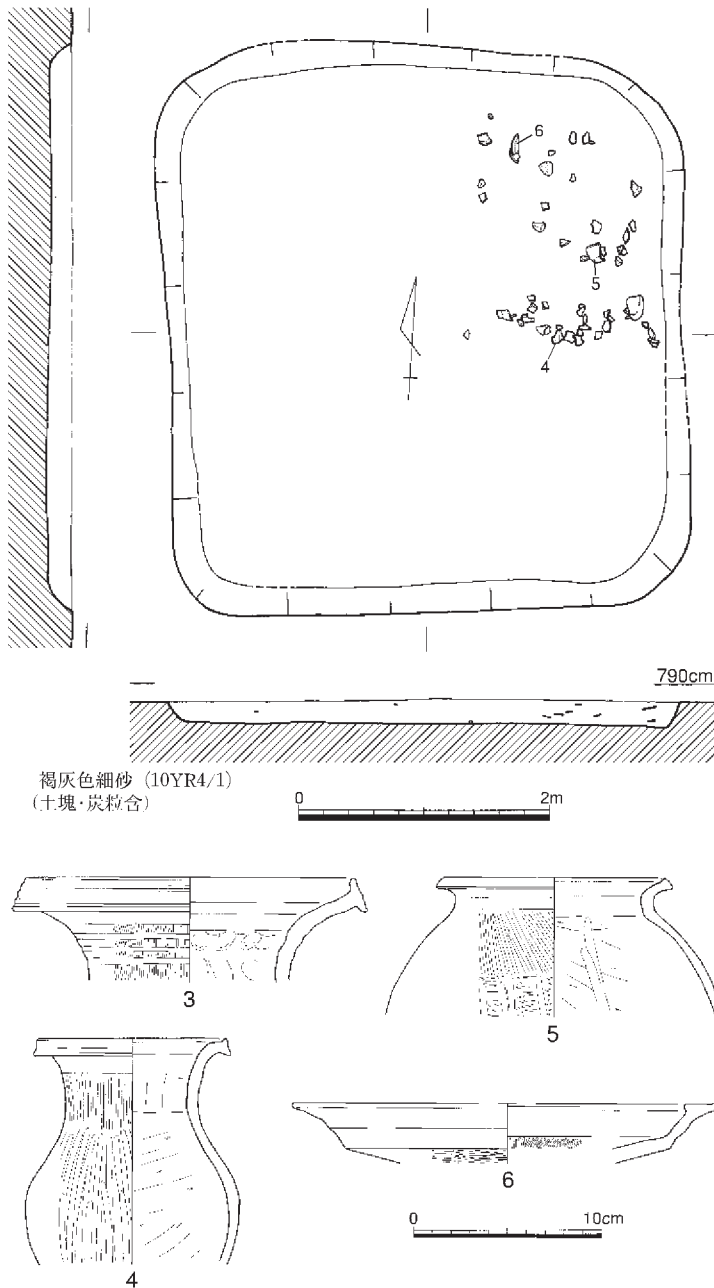


第205図 弥生時代主要遺構図⑤ (1/300)



第206図 弥生時代主要遺構図⑥ (1/300)

2 竪穴住居



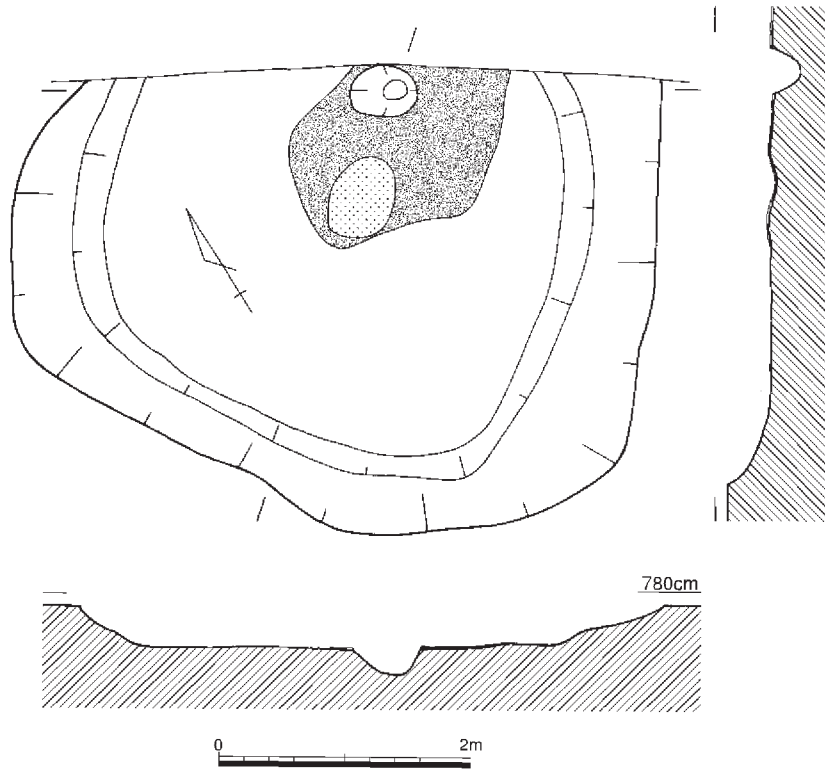
第207図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居1 (第204・207図、  
図版56)

140Qに位置する。検出面で  
方形の形状を確認した。埋土は  
炭化物を含むが、基盤層との区  
別は困難であった。住居の床面  
はほぼ平坦で、貼り床は確認で  
きなかった。柱穴も認められな  
い。床面は標高7.58m、検出面  
からの深さは最大20cmを測る。  
遺物は、土器と礫が平面全体の  
北東側1/4に集中する。床面か  
らやや浮いた状態のものが多い。  
土器はいずれも破片で、完  
形に近く復元できる土器はな  
い。鉄器M1は住居の北西部分  
から出土した。出土土器から、  
この住居は弥生後期中葉に埋没  
した可能性が高い。(氏平)

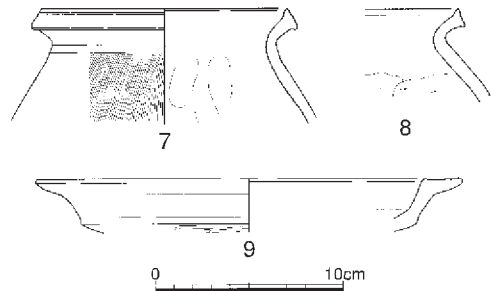
竪穴住居2 (第204・208図、  
図版56)

142Mに位置する。基盤層は砂層のため、壁面の崩落が激しい。検出面は7.7m、検出面からの深さ最大36cmを測る。床面には柱穴1個と被熱部分および炭化物の広がり存在する。貼り床は確認できなかった。柱穴は埋土に焼土塊と炭を含む。被熱部分は柱穴の南西に位置し、焼土除去後は長径65cm、深さ10cmの柱穴状である。柱穴と被熱部分周囲には厚さ3cmを測る炭化物の広がりがあるが、炭化物の分布は散漫である。出土遺物は土器で、それによると住居の時期は弥生時代後期前葉～中葉であろう。(氏平)

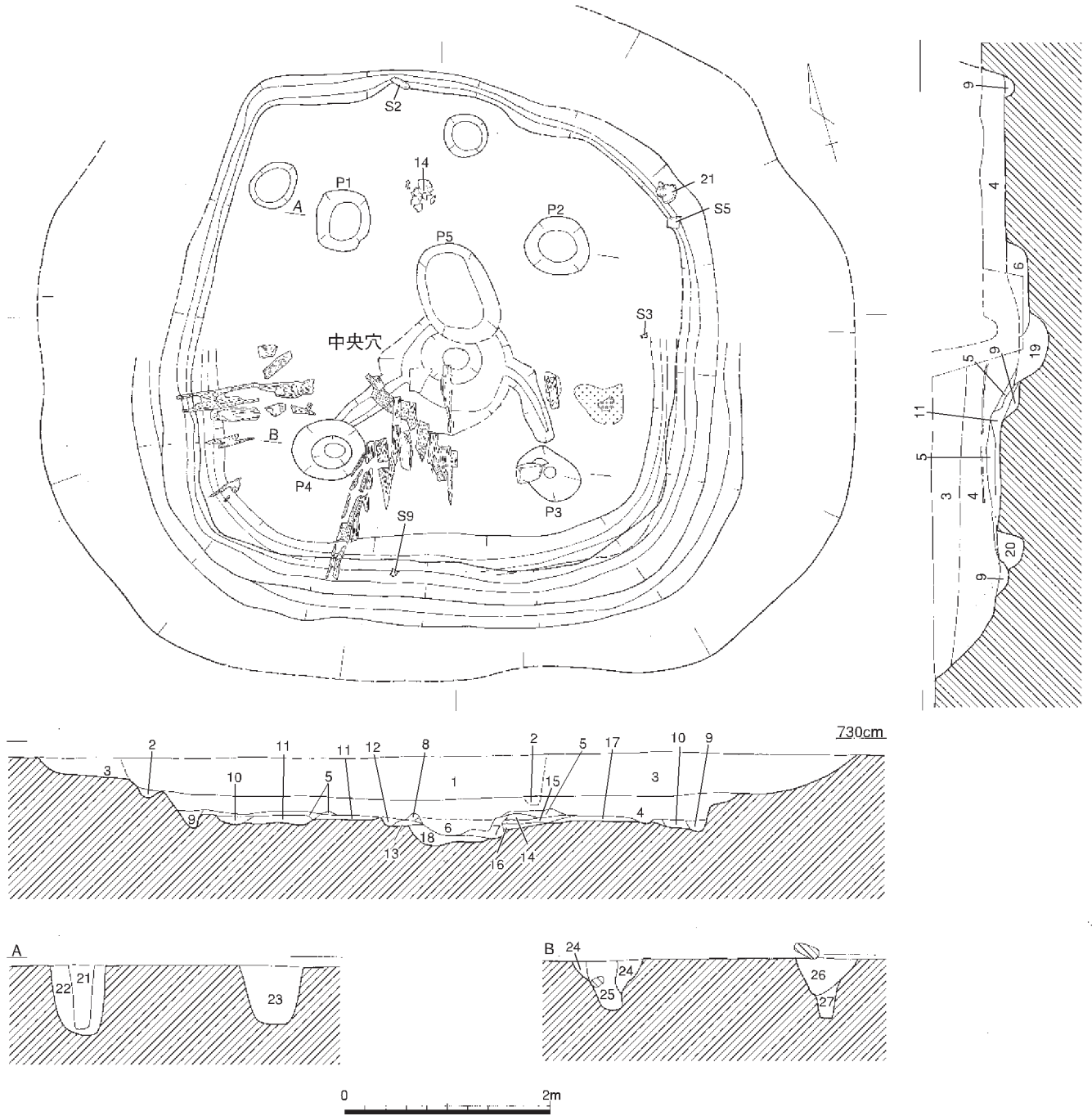


縦穴住居 3 (第205・209～211図、写真25、図版56・57・107・125・127～129)

150 S に位置する、隅丸方形の住居である。基盤層は砂層で、壁面の崩落が著しい。本来の規模は東西 5.85m、南北およそ 5.35m であろう。埋土 1・2 層は後述の縦穴住居 4 埋土で、5 層が炭化材層、8・11～17 層は貼り床で、6・7・18 層が中央穴埋土である。中央穴では最初 18 層が堆積し、12～16 層の床面を張り直し後に 6・7 層が入るように観察できた。10 層は最も古く内側の壁体溝埋土でこの時期の壁体溝は平面では住居の南側で検出できた。炭化材は多数の板状材とごく一部の蔓状に見える材があった。板状材は各材を単位ごとで区切ったところ幅は最大 35cm、長さ最大で約 1m を測る。材が重なる部分は少なく、木目は西側の材は東西方向、中央側は南北方向に並んでいる。床面には柱穴 4 個と中央穴、焼土面およびピットが存在する。柱穴は掘り方で径最大 70cm、深さ最大 67cm である。図示した中央穴は最初の掘り方で、P 3・4 から中央穴へ向かって下がる 2 条の溝を伴っている。焼土面は中央穴の上面西側 1 か所と中央穴の東側で 2 か所、図示していないが P 5 の北側に 1 か所存在した。中央穴から最も東側の焼土面が最も被熱が強く、範囲は 50×40cm、周囲は赤褐色で中央は橙色を呈する。床面付近では出土状況に示した特徴ある遺物が出土している。土器 14・21、石斧 S 2、砥石 S 3・S 5、石包丁 S 9 は最終住居床面上で検出した。14 は口縁～底部付近が 1/3 程度の残存で外面に刺突文、外面頸部付近まで煤の付着が見られる。21 は口縁～杯部が 1/2 欠損し、頸部にある穿孔が 2 つ残るが 3 つの可能性が高い。C 1 は住居北側埋土中の出土である。出土土器から、この住居は弥生時代中期後葉に埋没したと言えよう。(氏平)

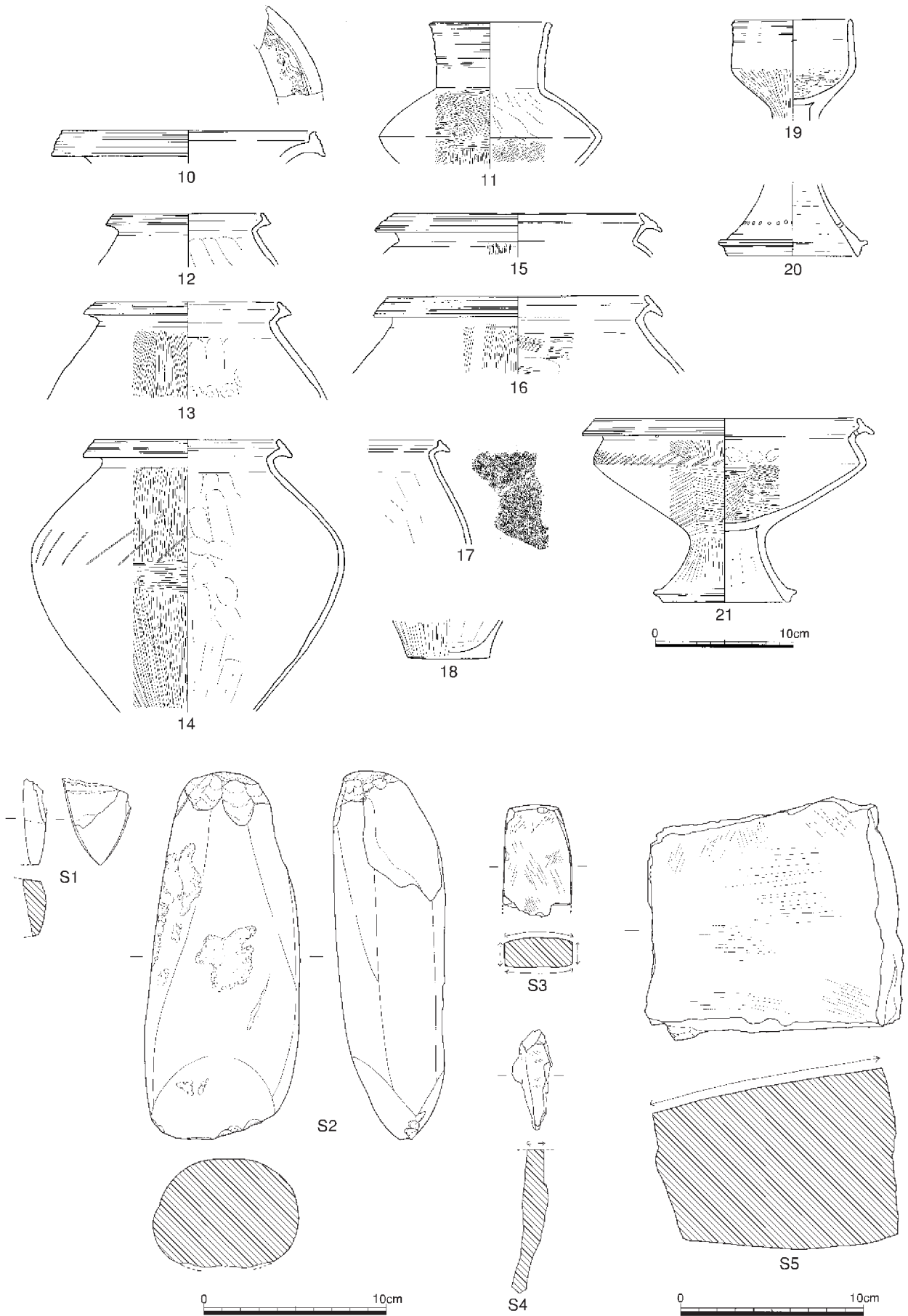


第208図 縦穴住居 2 (1/60)  
・出土遺物 (1/4)



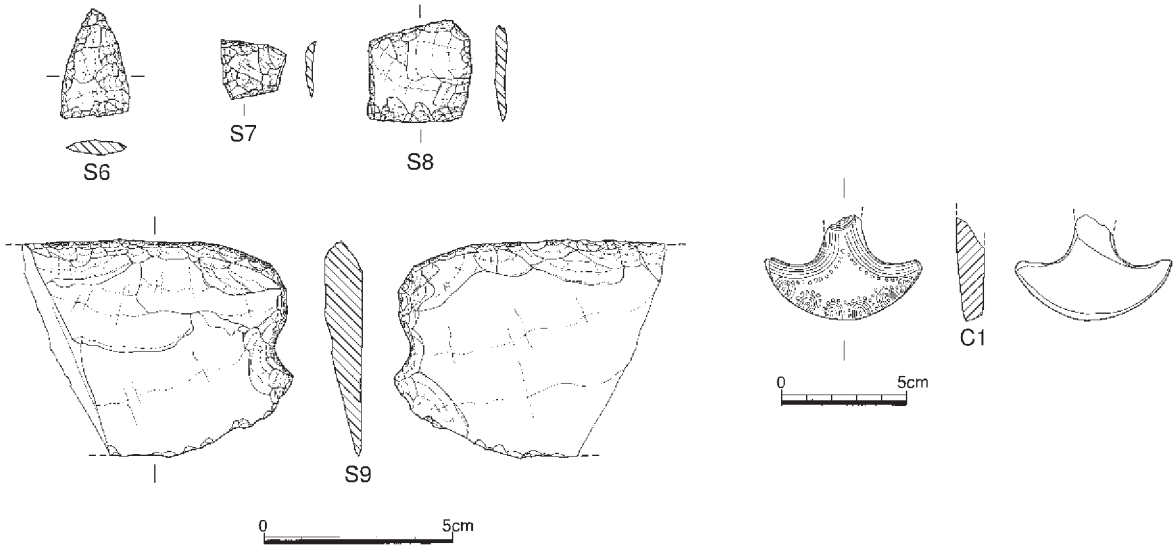
- |                                     |                                   |                                    |
|-------------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色砂質土 (10YR3/3)                  | 11 明黄褐色微~細砂 (10YR6/6)<br>(炭粒片含)   | 21 黒褐色粘質土 (10YR3/2)<br>(炭粒・土塊含)    |
| 2 暗褐色砂質土 (10YR3/4)                  | 12 灰黄褐色微砂 (10YR4/2)<br>(炭粒片含)     | 22 暗褐色粘質土 (10YR3/4)<br>(炭粒・土塊含)    |
| 3 灰黄褐色微砂 (10YR5/2)<br>(炭粒片・焼土片少量含)  | 13 鈍黄褐色微砂 (10YR5/3)               | 23 暗褐色粘質土 (10YR3/3)<br>(炭粒・土塊・焼土含) |
| 4 灰黄褐色微砂 (10YR5/2)<br>(炭粒片・焼土片少量含)  | 14 鈍黄橙色微~細砂 (10YR6/4)             | 24 灰黄褐色微砂 (10YR5/2)<br>(炭粒含)       |
| 5 褐灰色微砂 (10YR5/1)<br>(炭化材・炭粒片多含)    | 15 鈍黄橙色微~細砂 (10YR6/4)             | 25 鈍黄橙色微砂 (10YR6/3)<br>(炭粒含)       |
| 6 暗褐色砂質土 (10YR3/4)<br>(炭粒含)         | 16 鈍黄橙色微~細砂 (10YR6/4)             | 26 灰黄褐色微砂 (10YR5/2)<br>(炭粒片少量含)    |
| 7 鈍黄橙色微砂 (10YR6/3)                  | 17 鈍黄褐色微~細砂 (10YR6/4)             | 27 鈍黄橙色細砂 (10YR6/3)                |
| 8 褐灰色微砂 (10YR5/1)<br>(炭化材・炭粒片多含)    | 18 褐灰色細砂 (10YR5/1)<br>(炭粒片・焼土粒含)  |                                    |
| 9 暗褐色砂質土 (10YR3/4)                  | 19 鈍黄橙色細砂 (10YR6/4)<br>(炭粒片・焼土粒含) |                                    |
| 10 鈍黄橙色微~細砂 (10YR6/3)<br>(炭粒片・焼土粒含) | 20 明黄褐色細砂 (10YR6/6)<br>(炭片・焼土粒含)  |                                    |

第209図 竪穴住居 3 (1/60)

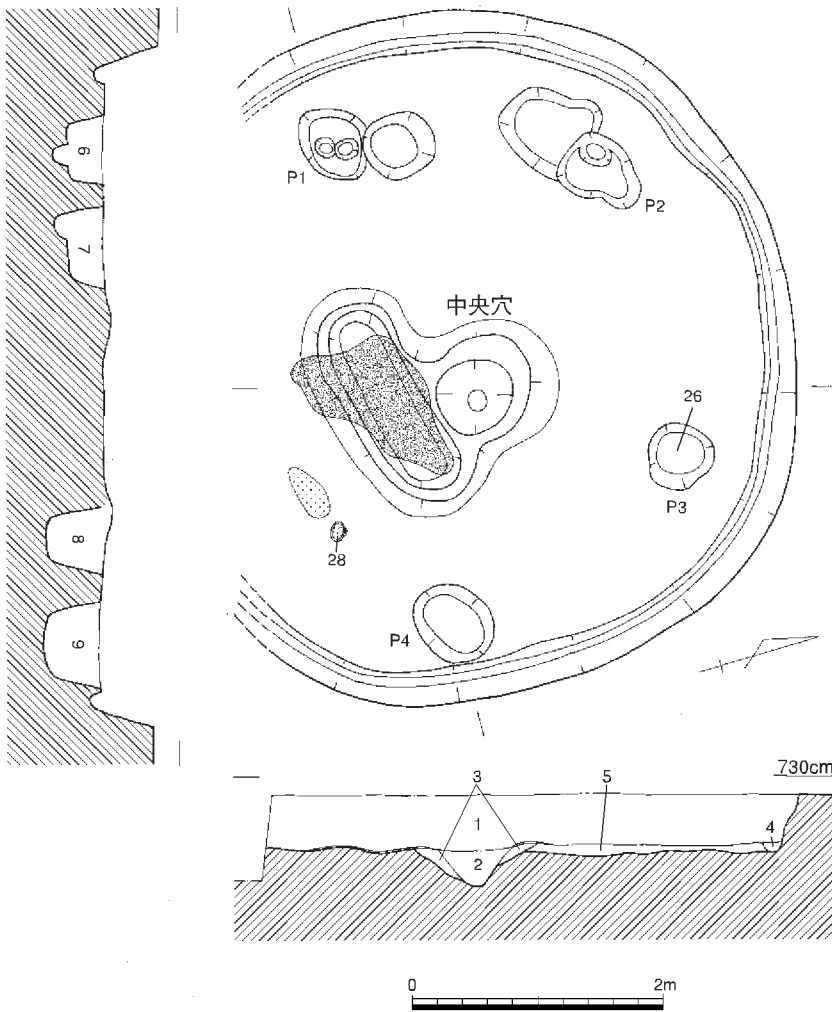


第210図 竪穴住居3出土遺物① (1/4・1/3)





第211図 竪穴住居3出土遺物② (1/2・1/3)



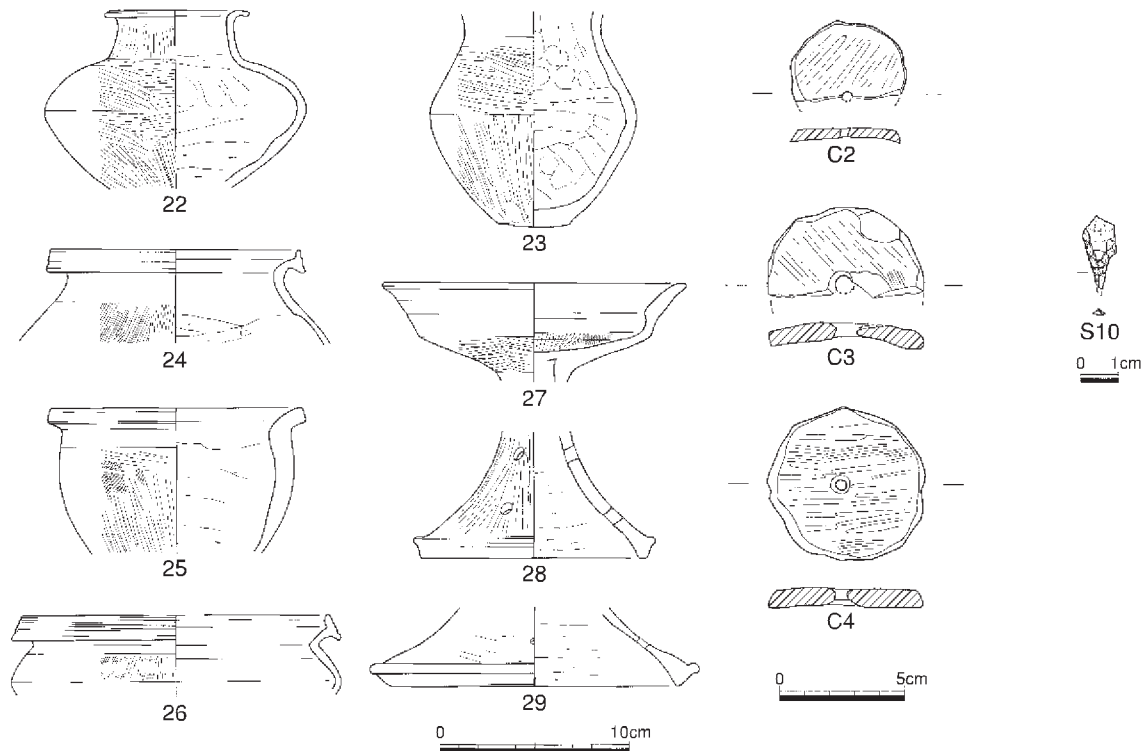
第212図 竪穴住居4 (1/60)

竪穴住居4 (第205・212・213図、図版58・59・125・129)

竪穴住居3の北から、これを切って検出された、平面円形を呈す住居で、周囲に壁体溝を巡らす。規模は径約5.5m、床面積約21㎡を残す。支柱は5本からなり、そのうち4個の柱穴を検出している。柱穴間距離は2.5～2.15mを測る。中央穴は掘り直しされており、最終的に径約55cm、

- 1 暗褐色砂質土 (10YR3/3)
- 2 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4)  
(炭粒・黄褐色土塊含)
- 3 鈍黄褐色砂質土 (10YR3/4)  
(炭粒・黄褐色土塊含)
- 4 暗褐色砂質土 (10YR3/4)
- 5 鈍黄褐色砂質土 (10YR5/4)
- 6 暗褐色砂質土 (10YR3/3)
- 7 鈍黄褐色砂質土 (7.5YR5/3)
- 8 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)  
(炭粒含)
- 9 暗褐色砂質土 (10YR3/4)

深さ約30cmを測る。中央穴の南からは1.6m×50cmの楕円形を呈す浅い窪地が造られていた。さらに南の床面には50×20cmの範囲に被熱面が検出されている。遺物は壺22・23・甕24・25・鉢26・高杯27～29、紡錘車C2～C4、石錐S10などが出土しており、後期前葉に埋没したものであろう。(江見)



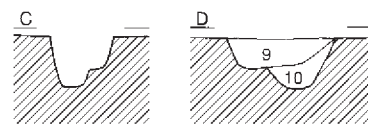
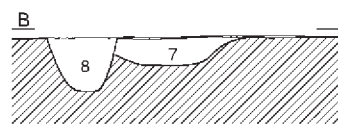
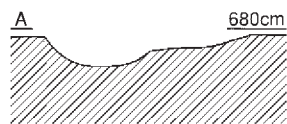
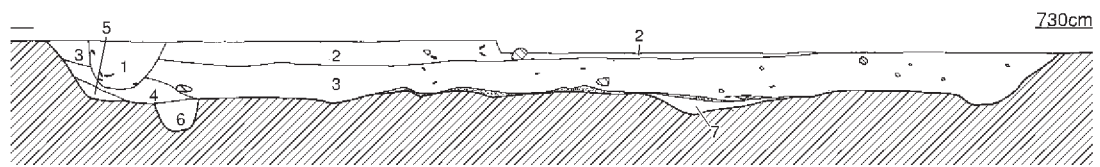
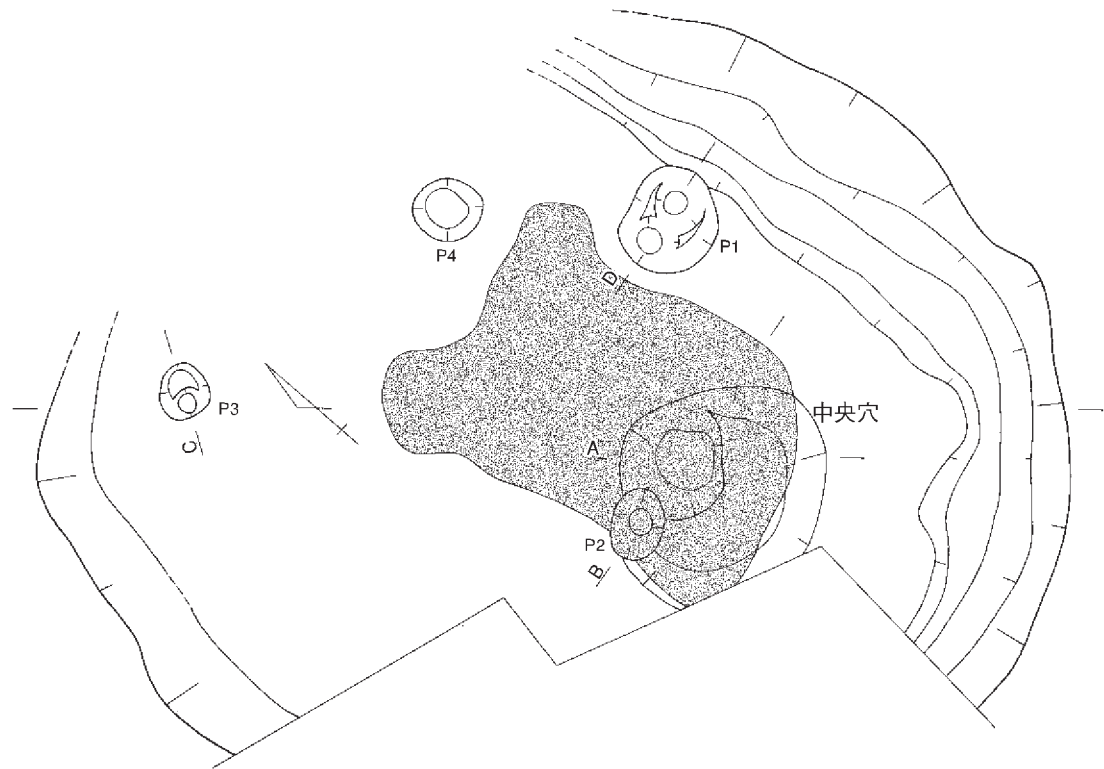
第213図 竪穴住居4出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

竪穴住居5 (第206・214・215図、写真26、図版56・59)

152S～Uに位置する、楕円形の住居である。基盤層は砂礫層である。埋土は1層が住居より新しい遺構、3層中に薄い炭層を含み6層はP3埋土である。明瞭な貼り床は確認できなかったが、炭化物層を検出した。炭化物層は細かい炭化物を多く含む黒褐色土層である。炭化物は中央穴より北側で集中する傾向があった。床面には柱穴4個と中央穴が存在する。P1～3の底面は標高6.3m、P4は他と比べて深さ12cmと浅い。床面の標高は6.72～6.8mを測る。遺物はいずれも埋土中だが30は1層中でこの住居に伴わない。古墳前期か。36の沈線と横方向の刺突文は一部のみ施文である。鉢37は未使用の製塩土器か。埋没時期は弥生時代後期中葉であろう。(氏平)

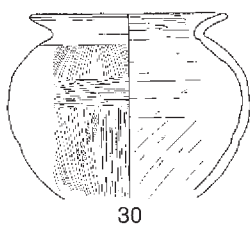


写真26 竪穴住居5調査風景 (南東から)



0 2m

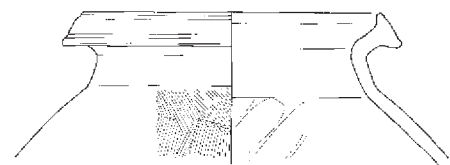
- |                                  |                                  |                                  |
|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 黑褐色砂質土 (10YR3/2)<br>(炭粒・焼土塊多含) | 4 暗褐色砂質土 (10YR3/3)               | 7 灰黄褐色粘質細砂 (10YR4/2)<br>(炭粒・土塊含) |
| 2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)              | 5 黑褐色砂質土 (10YR3/2)<br>(炭粒・焼土塊多含) | 8 黑褐色粘質細砂 (10YR3/2)              |
| 3 鈍黄褐色砂質土 (10YR4/3)<br>(炭粒含)     | 6 暗褐色砂質土 (10YR3/3)               | 9 黑褐色砂質土 (2.5Y3/2)               |
|                                  |                                  | 10 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)             |



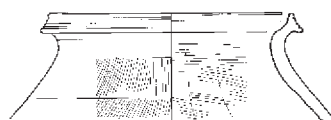
30



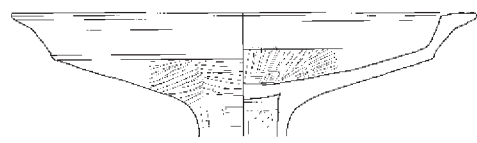
31



33



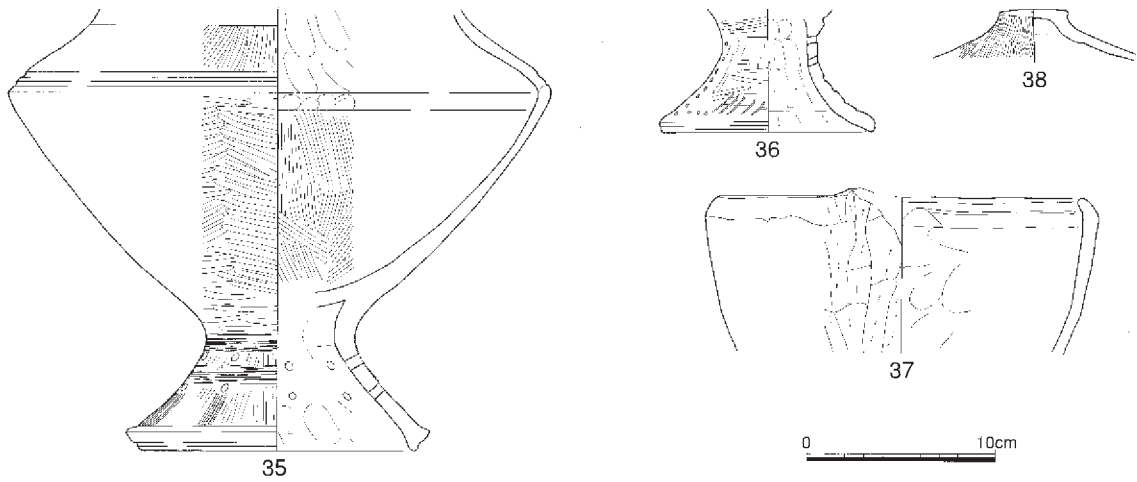
32



34

0 10cm

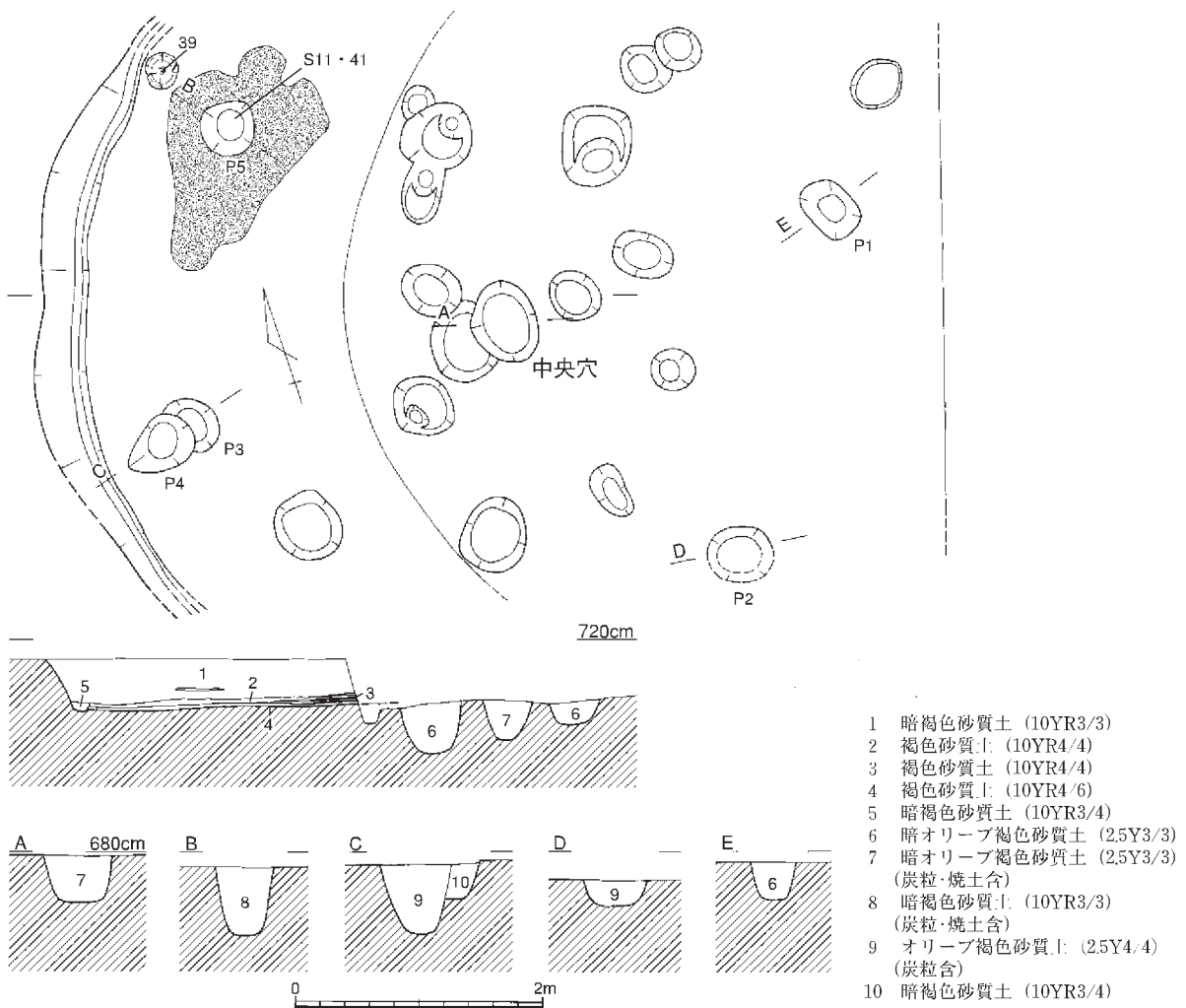
第214図 竪穴住居5 (1/60)・出土遺物① (1/4)



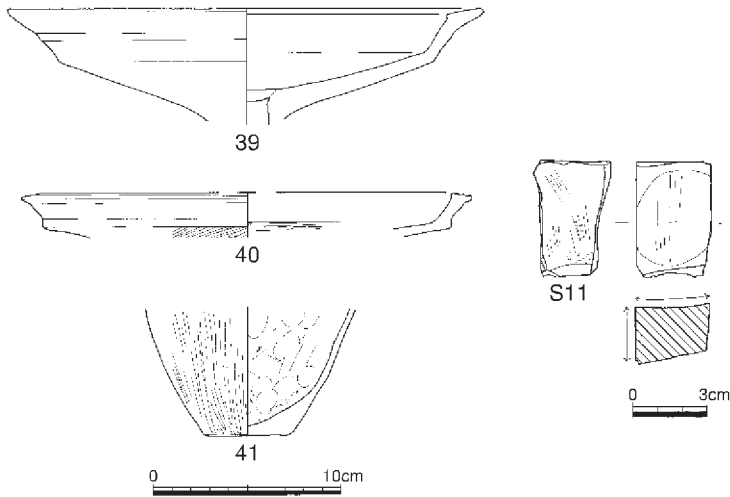
第215図 竪穴住居5出土遺物② (1/4)

竪穴住居6 (第206・216・217図、図版58・60・128)

152 Sの中央西寄りに位置し、住居の東一部を竪穴住居7に削平された住居で、平面円形を呈し周囲に壁体溝を巡らす。支柱は6本からなると推定され、そのうち4個の柱穴が検出されている。P1



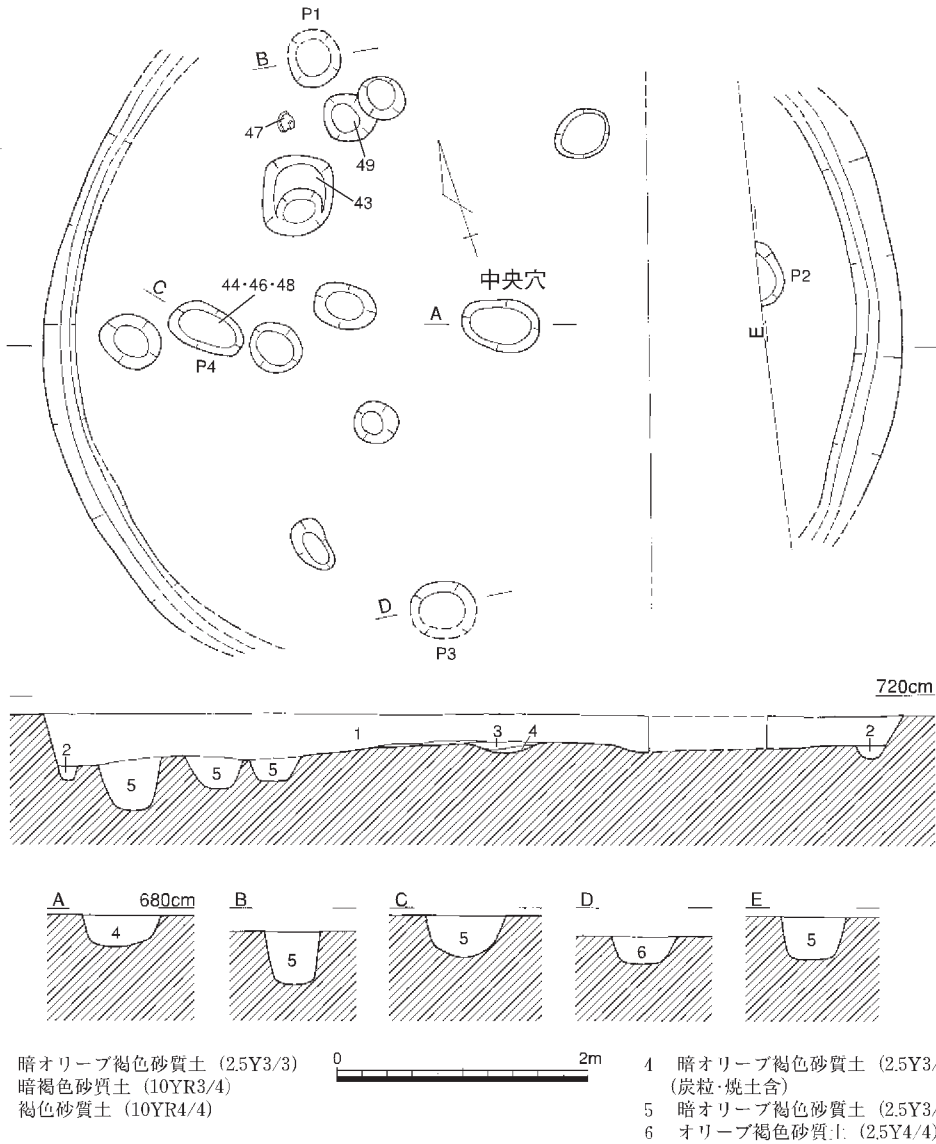
第216図 竪穴住居6 (1/60)



第217図 竪穴住居6 出土遺物 (1/4・1/3)

とP2、P4とP5の柱穴間距離はいずれも2.5mを測るとともに、P4とP5は壁体の内側約80cmに位置していることなどから、残る2柱穴はP1とP5間、P2とP3間に所在したと思われるもので、これから推定される径は7m余り、床面積は約38㎡を測る。

遺物は少なかったが、床面に密着して高杯39が、P5から甕41および砥石S11が、埋土から高杯40が出土しており、後期前葉に埋められた住居と思われる。(江見)

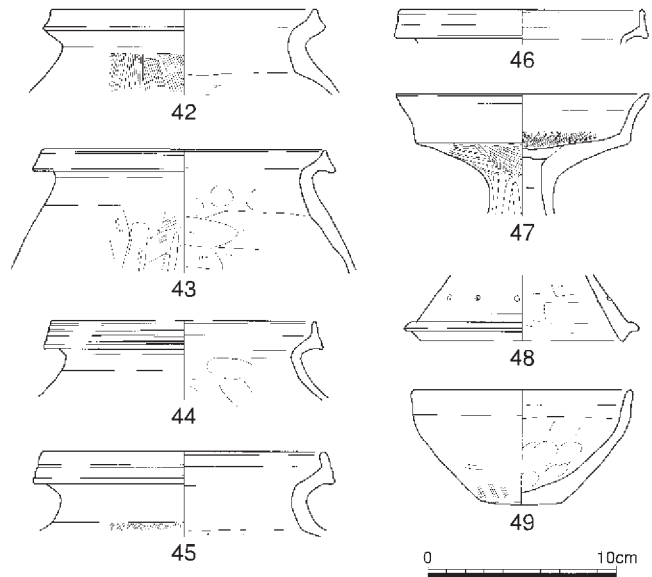


- |                        |   |    |                                    |
|------------------------|---|----|------------------------------------|
| 1 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3) | 0 | 2m | 4 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3)<br>(炭粒・焼土含) |
| 2 暗褐色砂質土 (10YR3/4)     |   |    | 5 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3)             |
| 3 褐色砂質土 (10YR4/4)      |   |    | 6 オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/4)              |

第218図 竪穴住居7 (1/60)

竪穴住居 7 (第206・218・219図、図版58・60)

竪穴住居 6 の東に位置し、これを切って検出された平面円形を呈す住居で、周囲に壁体溝を巡らす。主柱は 6 本からなるものと推定され、そのうち 4 個の柱穴が検出されている。残る柱穴は P 1 ~ P 4 の柱穴位置から、P 1 と P 2 間と、P 2 と P 3 間に所在したものと考えられる。規模は径約 6.9m、推定床面積約 32m<sup>2</sup>を測る。床面は後世の地盤沈下のためか、中央部は高く、周囲は 10cm 余り低く下がった状況を呈していた。中央穴は楕円形を呈し、63×40cm、深さ 25cm を測る。遺物は埋土から甕 42・45 が、床面から高杯 47 が、P 4 から甕 44・46・高杯 48 が、関連ピットから甕 43・鉢 49 などが出土しており、土器の特徴から後期前葉に埋没した住居と考えられる。(江見)



第219図 竪穴住居 7 出土遺物 (1/4)

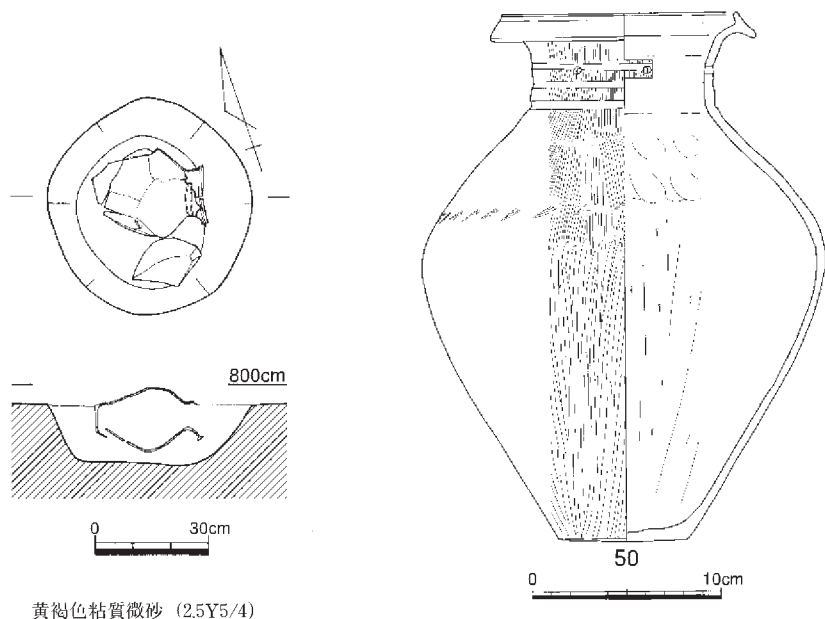
3 土器棺

土器棺 1 (第204・220図、図版61・107)

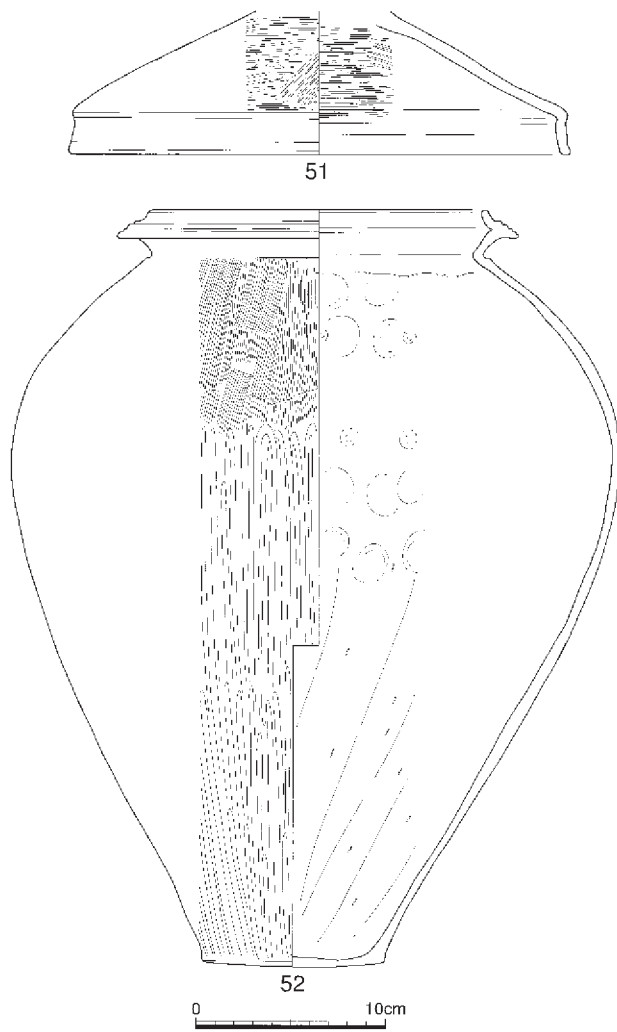
144O 北西に位置する。楕円形の掘り方内に、横倒しの壺 1 個体と磔 1 個を検出した。壺の口縁は東を向く。土壌埋土は基盤層と区別するのが困難であった。底面の標高は 7.79m で、検出面からの深さは 15cm を測る。壺 50 は口縁部を除き完形である。頸部穿孔は 2 つが残っているが、おそらく 4 つであろう。この遺構の埋没時期は弥生時代中期後葉である。(氏平)

土器棺 2 (第204・221図、図版61・107)

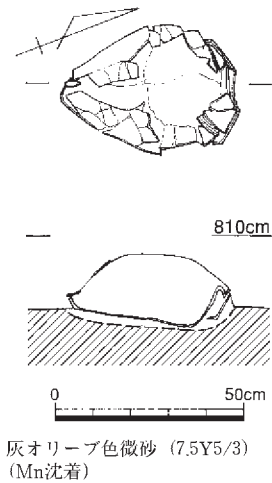
142Q 北西に位置する。横倒しの甕 1 個体と、その口縁部に並行して高杯杯部が甕口縁を蓋する状態で検出した。甕の口縁は北を向



第220図 土器棺 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)



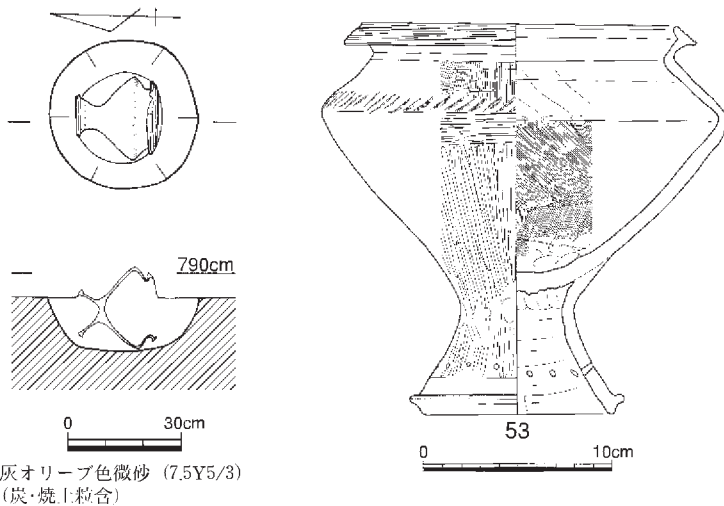
く。掘り方は確認できなかった。断面図で示した点線ラインの土器側は基盤層よりややしまりが強いが、掘り方とは認められない。土器の最も低いところの標高は7.86mである。内部を精査したが、遺体の痕跡などは検出できていない。51は杯部が2/3残る。52の胴部下部には外からの打ち欠き痕跡が残る。この遺構の埋没時期は土器より弥生時代中期後葉である。(氏平)



第221図 土器棺 2 (1/20)・出土遺物 (1/4)

土器棺 3 (第204・222図、図版61・107)

144Q北西に位置する。円形の掘り方と横倒しの台付き鉢1個体を検出した。鉢の口縁は南を向く。検出

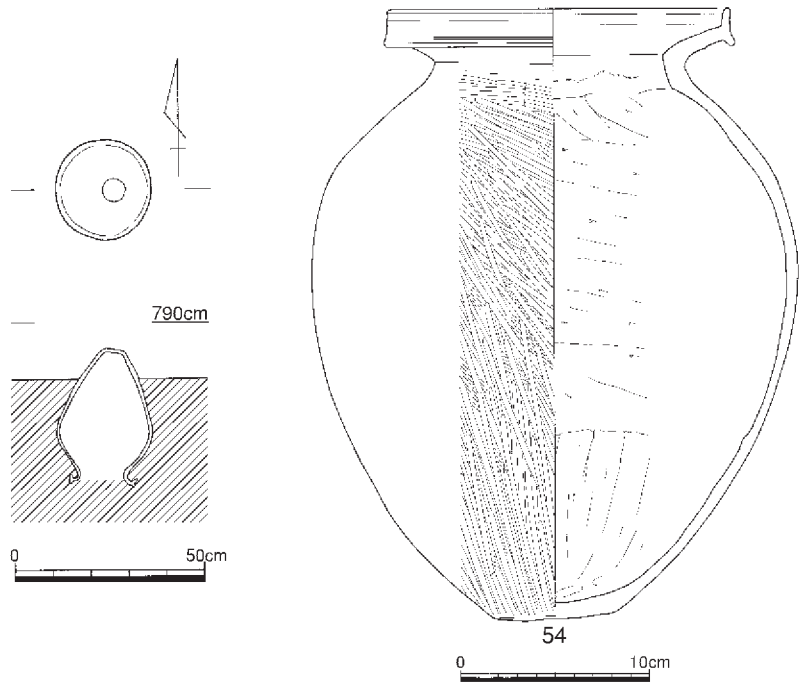


面での掘り方の直径は40cm、掘り方底面の標高は7.7mで深さは土器上面から22cmである。埋土は基盤層と区別が困難であったが、若干炭化物を含んでいる。53は口縁部を若干欠いているが、ほぼ完形品である。外面は縦のハケメ後ハラミガキ、鉢部内面は上半がヨコナデ、下半がハケメである。この遺構の埋没時期は弥生時代後期前葉である。(氏平)

第222図 土器棺 3 (1/20)・出土遺物 (1/4)

**土器棺 4** (第204・223  
図、図版62・107)

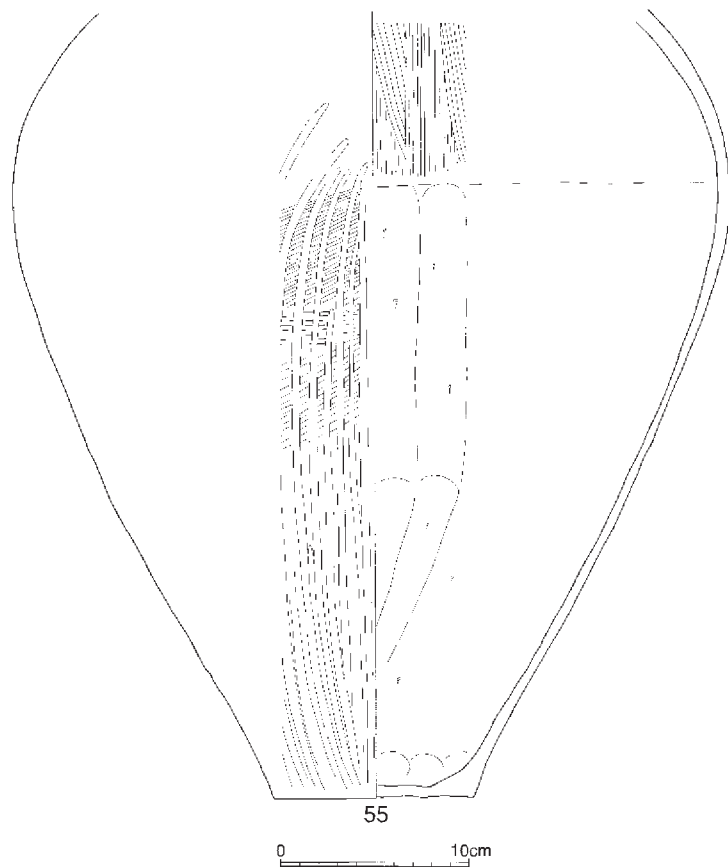
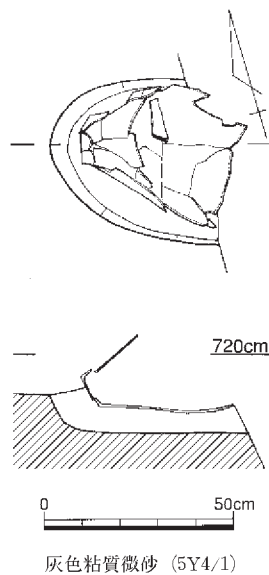
142Q北西に位置する。  
壺1個体を底部を上にした  
状態で検出した。掘り  
方は確認できなかった。  
54は口縁端部を欠くもの  
の、それ以外は全くの完  
形品である。外面に胴部  
下から底部へかけて煤が  
付着し、内面は底面を除  
いて胴部下から底部が黒  
色化している。出土土器  
から、この遺構の埋没時  
期は弥生時代後期後葉で  
ある。 (氏平)



第223図 土器棺 4 (1/20)・出土遺物 (1/4)

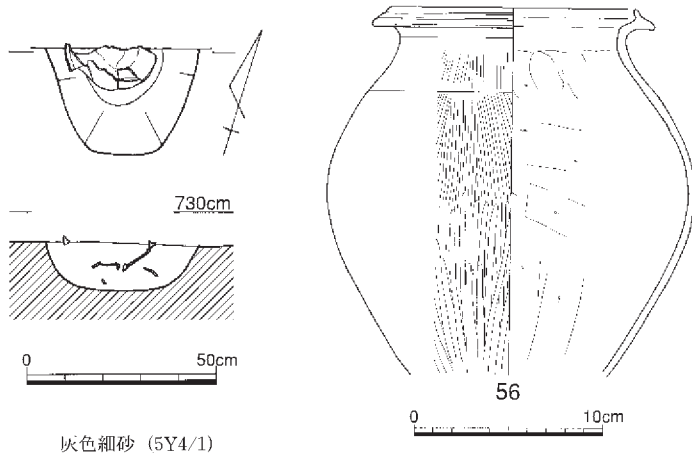
**土器棺 5** (第206・224図、図版62)

154Q南西に位置する。楕円形の掘り方内に、甕1個体が横倒しになっていた。底部が西を向く。土壌埋土は基盤層と区別するのが困難であった。掘り方底面の標高は6.99mである。55は内面の底面を除く底部が黒色化している。出土土器から、この遺構の埋没時期は弥生時代



第224図 土器棺 5 (1/20)・出土遺物 (1/4)





第225図 土器棺 6 (1/20)・出土遺物 (1/4)

中期後葉である。(氏平)

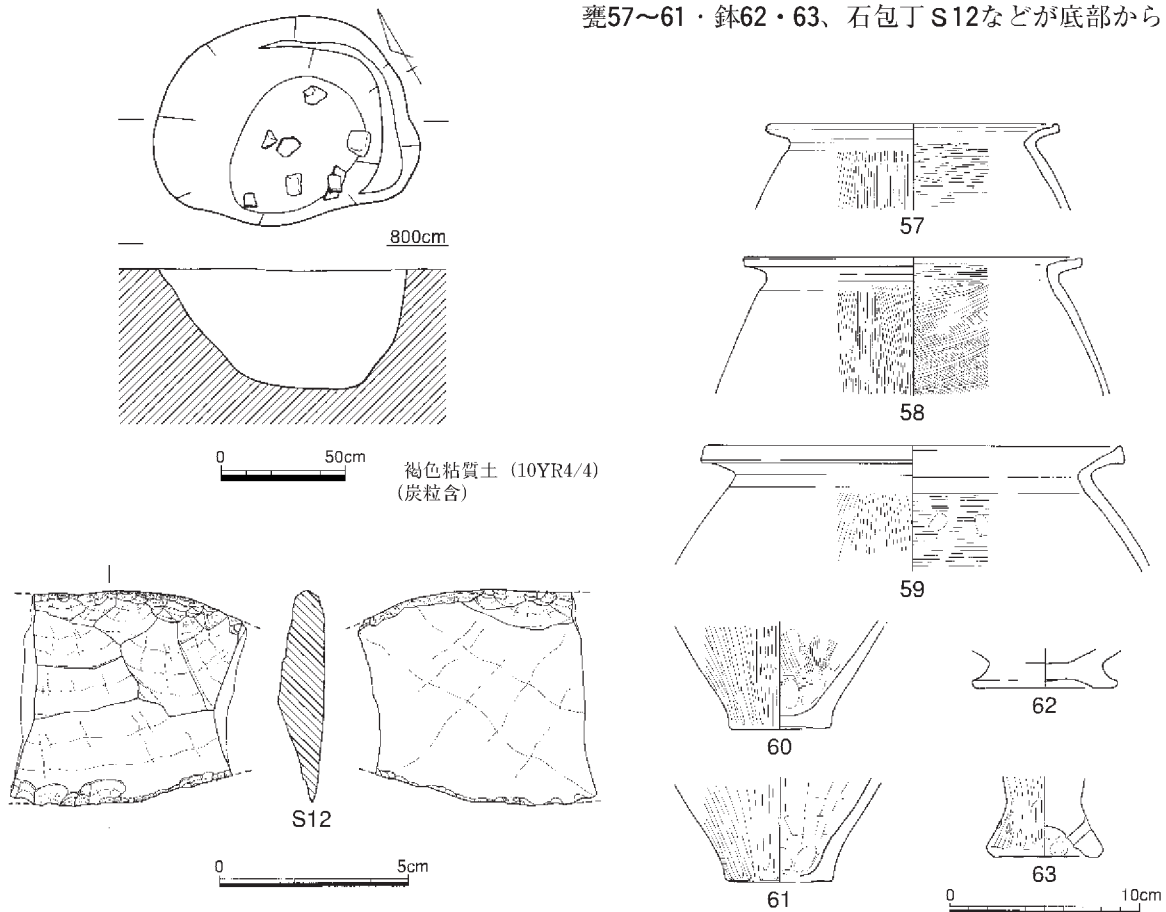
土器棺 6 (第206・225図)

152Sに位置する。楕円形の掘り方内に、甕1個体を横倒しの状態で検出した。口縁は西を向いている。蓋などの痕跡は見つからなかった。甕は口縁部から胴部が約1/3しか残っていない。56は色調が橙色で、全体に風化している。外面の胴部に煤がわずかに残る。出土土器は弥生中期後葉の時期を示す。(氏平)

4 土壙

土壙 1 (第201・226図、図版62・125)

114Cの南東から検出された平面不整円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は西側が斜めに立ち上がるのに対し、東は段をもち、やや急である。規模は1.07m×82cm、深さ約50cmを測る。埋土は炭粒を多く含む褐色粘質土で、これに混じって甕57~61・鉢62・63、石包丁S12などが底部から浮

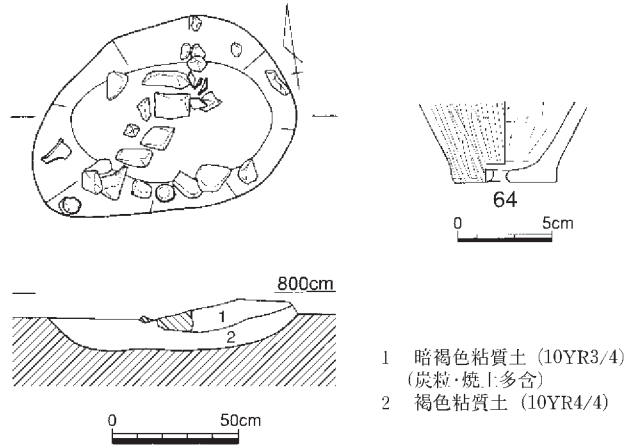


第226図 土壙 1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

いた状態で出土している。甕は内面にハケ調整痕が残るもので、中期前半に埋められた土壌であろう。(江見)

**土壌 2** (第201・227図、図版63)

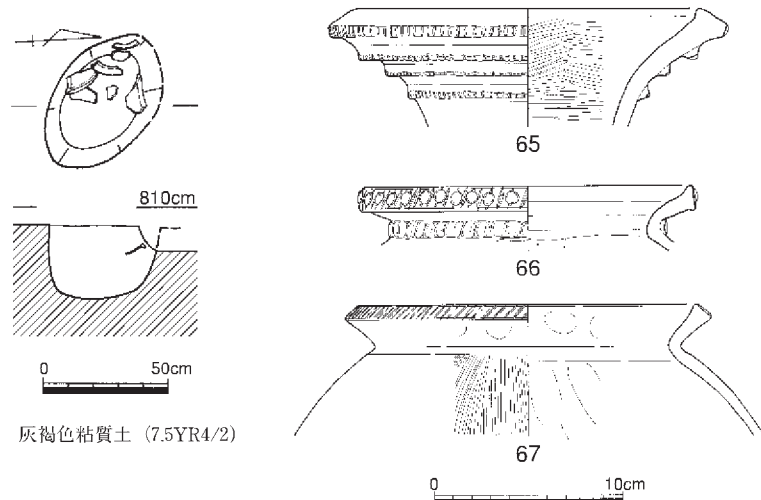
土壌 1 の北西 4 m から検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部はほぼ平坦で、壁は緩く斜めに立ち上がる。規模は 1.06 m × 76 cm、深さ 18 cm を測る。埋土は 2 層からなり、土壌内からは 20 cm 大の礫とともに数片の土器片が出土している。甕 64 は甑として利用されたもので、中期前半のものであろう。(江見)



第227図 土壌 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壌 3** (第201・228図、図版63)

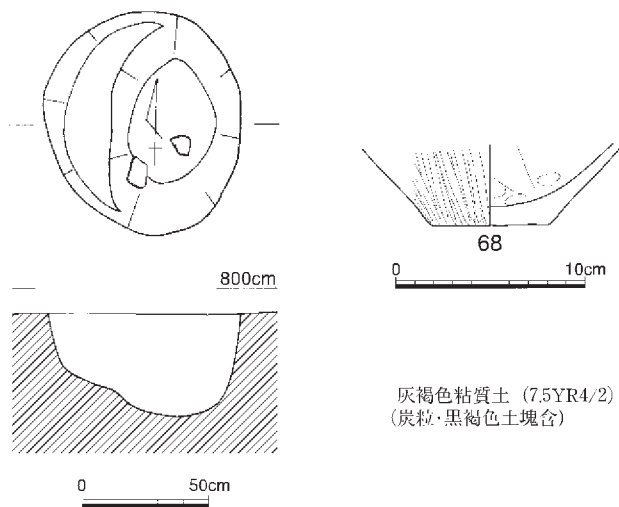
土壌 1 の南 3 m から検出された平面楕円形を呈す土壌で、底部はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。規模は 60 × 40 cm、深さ約 30 cm を測る。埋土は 1 層からなり、土壌西半部、底部からやや浮いた状態で壺 65・甕 66・67 が出土している。壺の突帯には刻みが巡らされ、甕の口縁端部には刻み日が施され、66 にはさらに円形浮文が巡るなど、当土壌は中期中葉に埋没したものと思われる。(江見)



第228図 土壌 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壌 4** (第201・229図、図版63)

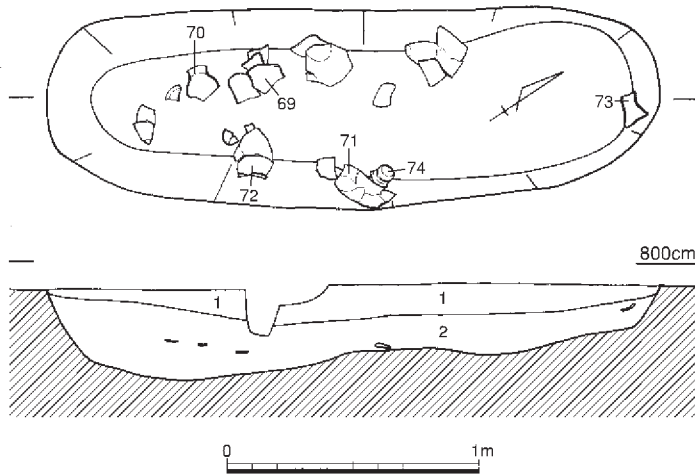
114 C に位置し、土壌 3 の東 2 m から検出された平面楕円形を呈す土壌で底部は段が付き、壁はやや急に立ち上がる。規模は 88 × 77 cm、深さ 40 cm を測る。埋土は炭粒混じりの黒褐色土塊を含む灰褐色粘質土で、これに混じって土壌の底部付近から土器片が出土している。甕 68 と思われるもので、中期前半に埋められた土壌であろう。(江見)



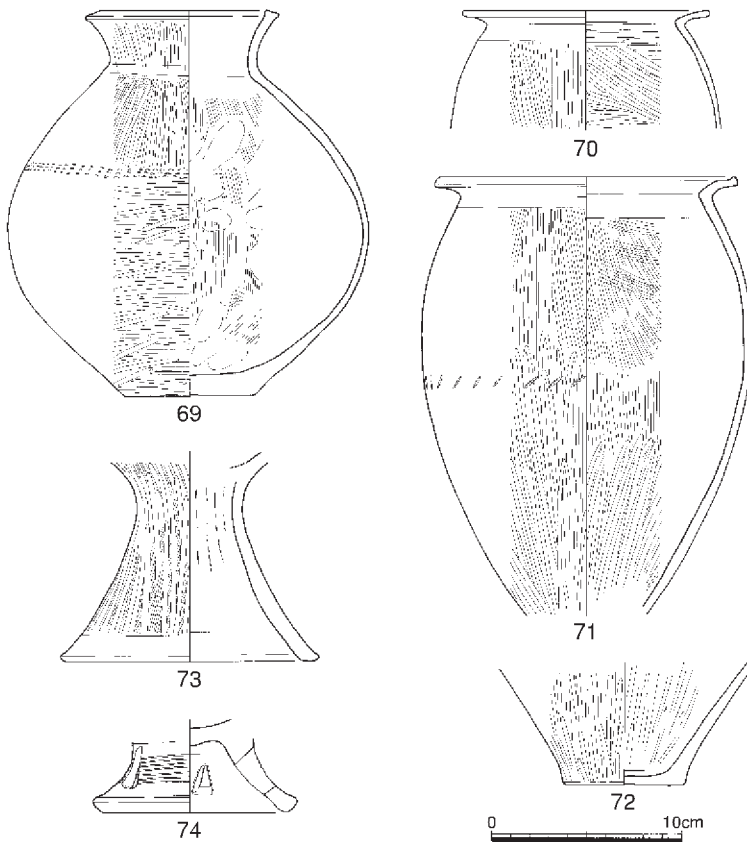
第229図 土壌 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌5 (第201・230図、図版107)

116Cの北西に位置し、土壌4の北方10mから検出された平面長楕円形を呈す土壌である。底部はやや凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。規模は2.45m×80cm、深さ約35cmを測る。埋土は2層からなり、遺物は主に下層上部から出土している。壺69・甕70~72・高杯73・台付き鉢74などで、69の肩



- 1 褐色粘質微砂 (10YR4/4)  
(炭粒少含)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)  
(炭粒多含・焼土少含)



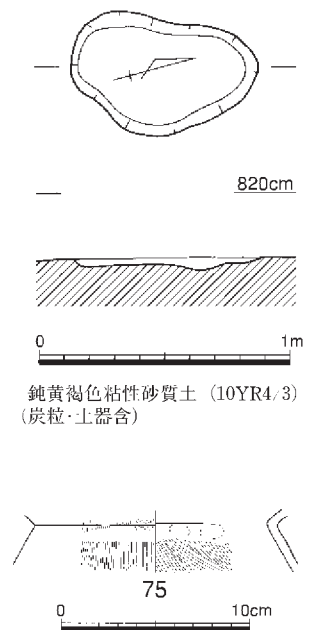
第230図 土壌5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

部には貝殻圧痕文が巡り、甕の内面には部分的にヘラミガキが認められる。74は脚裾部に沈線とともに、5か所に穿孔を施すなど、中期前半に埋没したものであろう。(江見)

土壌6 (第201・231図)

116Cのほぼ中央付近に位置する。平面形は不整楕円形で、底面は凹凸が著しい。ベースとなる黄褐色砂質土に比べると、幾分粘質が強い埋土には、炭・土器片が含まれていた。

出土する遺物は、数点の土器片のみであり、75の甕1点を図化している。周辺の土壌同様、弥生時代中期中葉。(松尾)

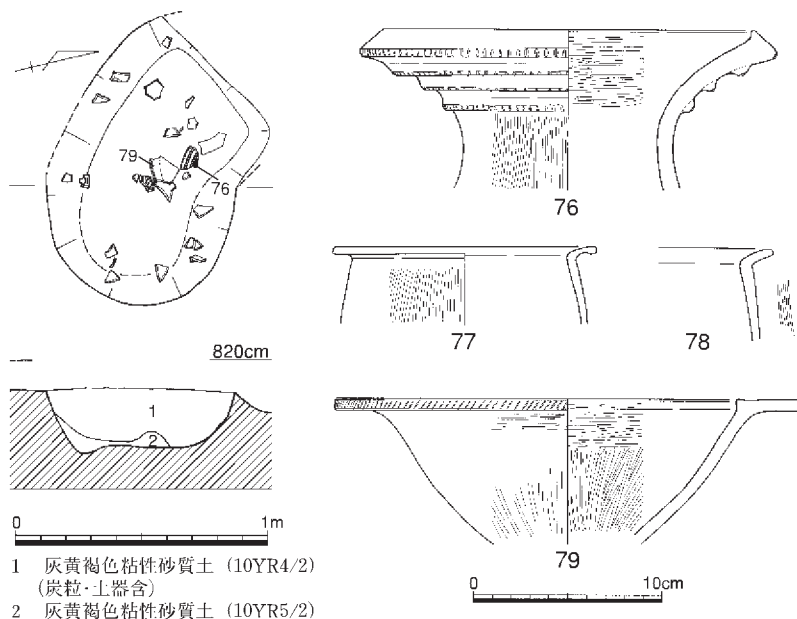


- 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒・土器含)

第231図 土壌6 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

**土壌7**（第201・232図、  
図版64）

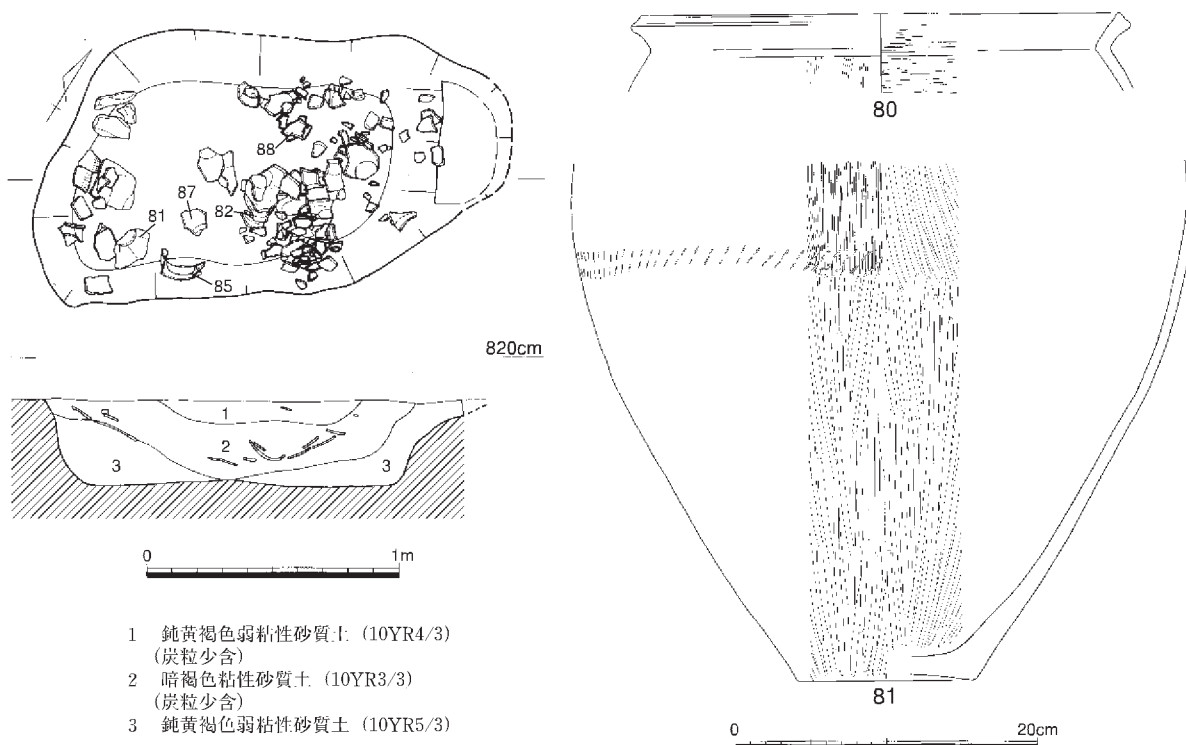
116Cの南西で検出した、平面形が不整円形の土壌である。北西端は近世の土壌に切られていた。断面形は比較的しっかりした逆台形である。埋土には土器の他、炭粒も含まれていた。出土遺物には、76～79の土器がある。これら土器の諸特徴から、弥生時代中期中葉と思われる。（松尾）



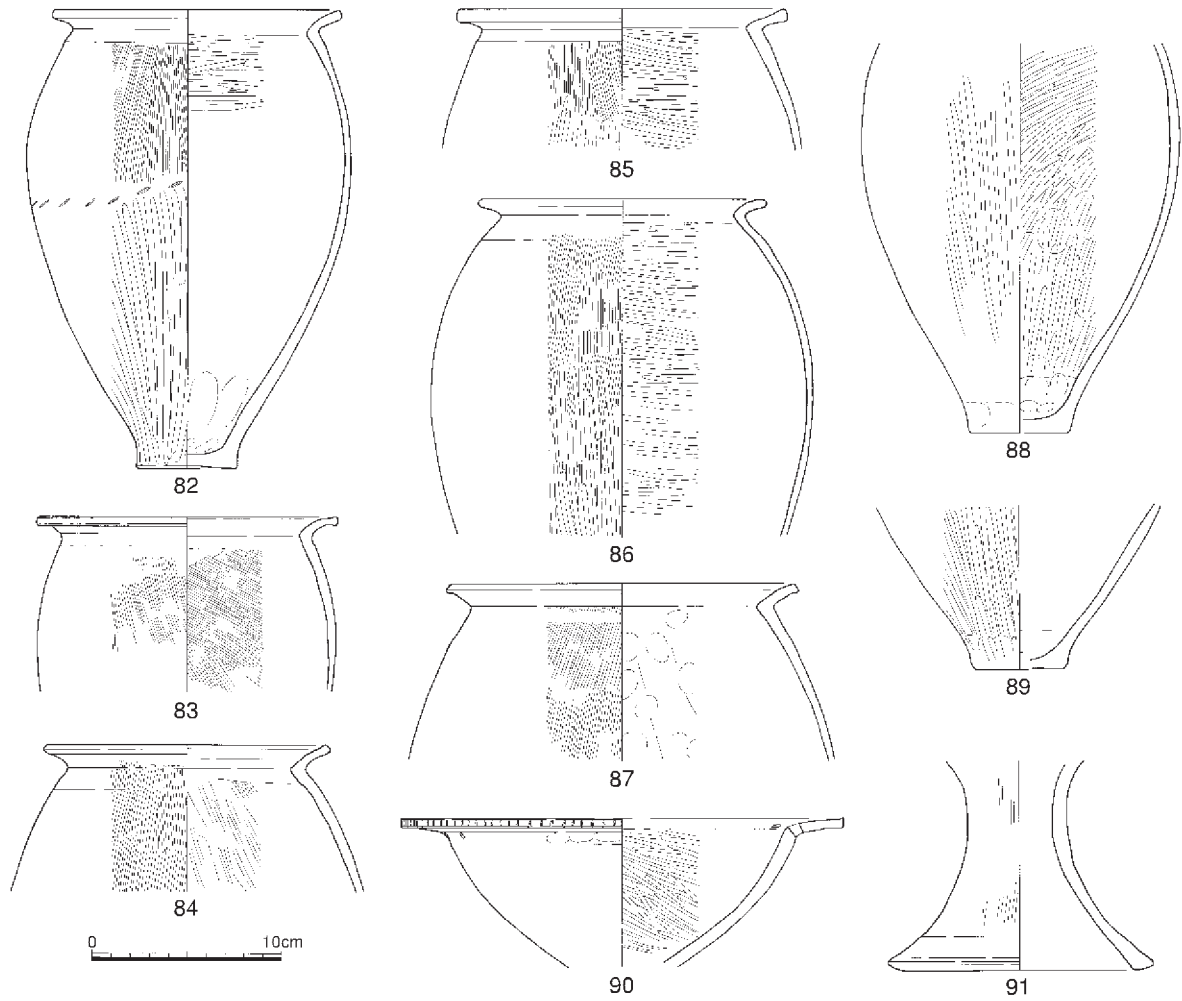
第232図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壌8**（第201・233・  
234図、図版64・108）

116Cの南西、土壌7の南側で検出している。北東端は後世の柱穴に切られていた。平面形は不整楕円形で、北東側に一段テラス状の段をもつ。出土遺物は、このテラス状になっている段よりもレベル的に低い位置で多く出土した。80～89などの甕が多くみられる一方、90・91などの高杯も含まれていた。出土する土器の諸特徴から、弥生時代中期中葉であろう。（松尾）



第233図 土壌8 (1/30)・出土遺物① (1/5)



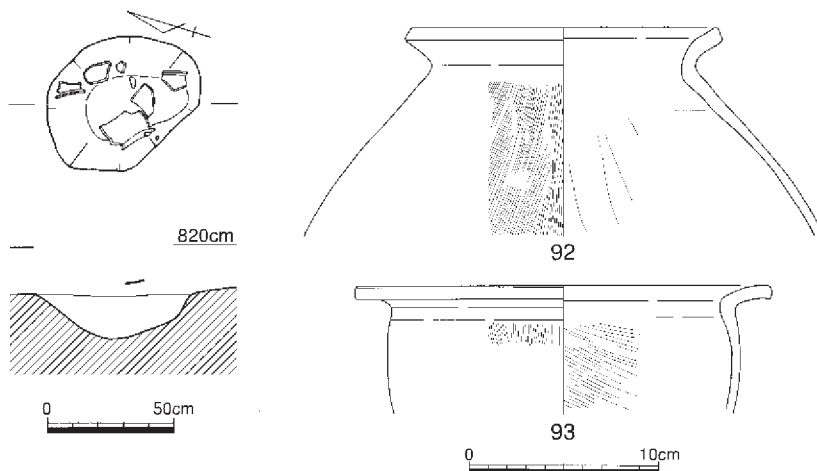
第234図 土壙8出土遺物② (1/4)

土壙9 (第201・235図、図版64)

116Eの北側やや中央に位置する。平面形は長軸60cm程の不整円形である。断面形は楕円形であり、

出土土器は、レベル的にやや高い位置より出土した。埋土は、ベースの土に比べると若干灰色がかり、粘質も少し強い。

図化でき得るものは、92・93の甕のみであった。周辺の状況および、出土した土器の形態や諸特徴から、弥生時代中期中葉であると思われる。(松尾)



灰黄色粘性砂質土 (10YR4/2)

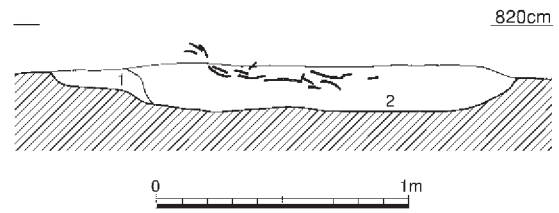
第235図 土壙9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙10 (第201・236～238図、写真27、図版  
65・108・127～129)

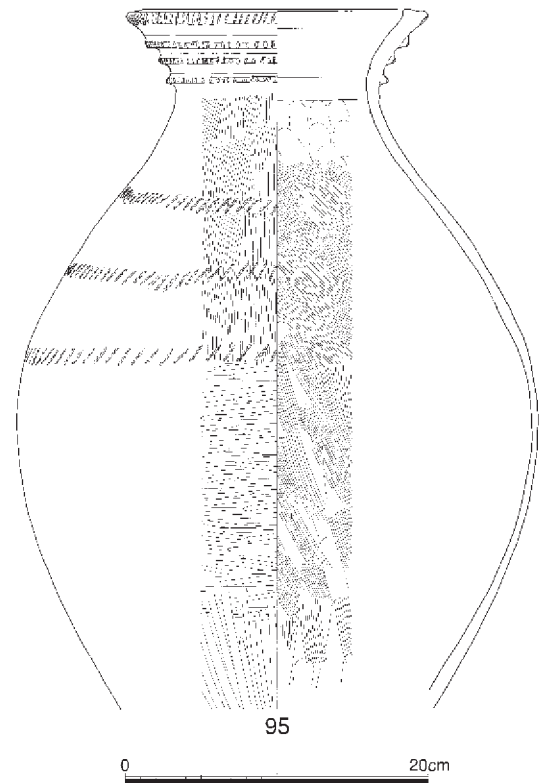
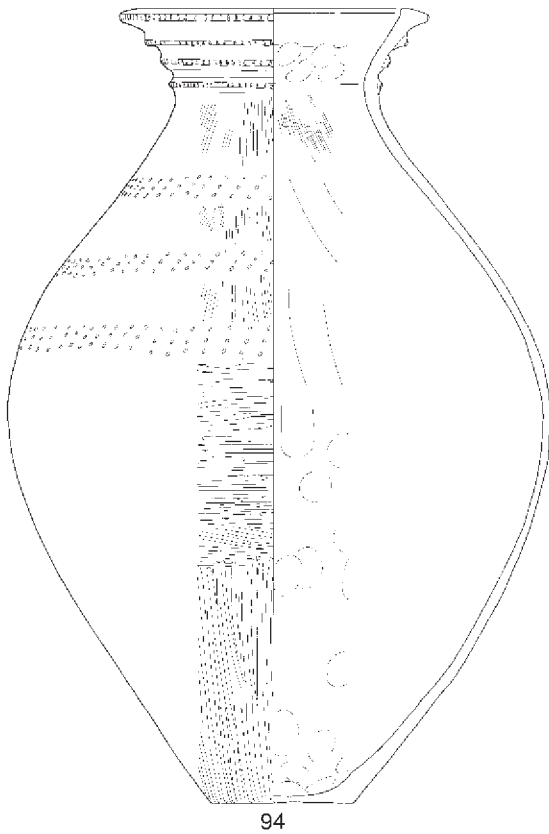
116Eの北側中央付近、土壙9の東側で検  
出した。平面形は不整楕円形で、最大幅約2  
mを測る。断面形は椀形で、底面にはやや凹  
凸がある。出土遺物は多く、土壙の北寄りに



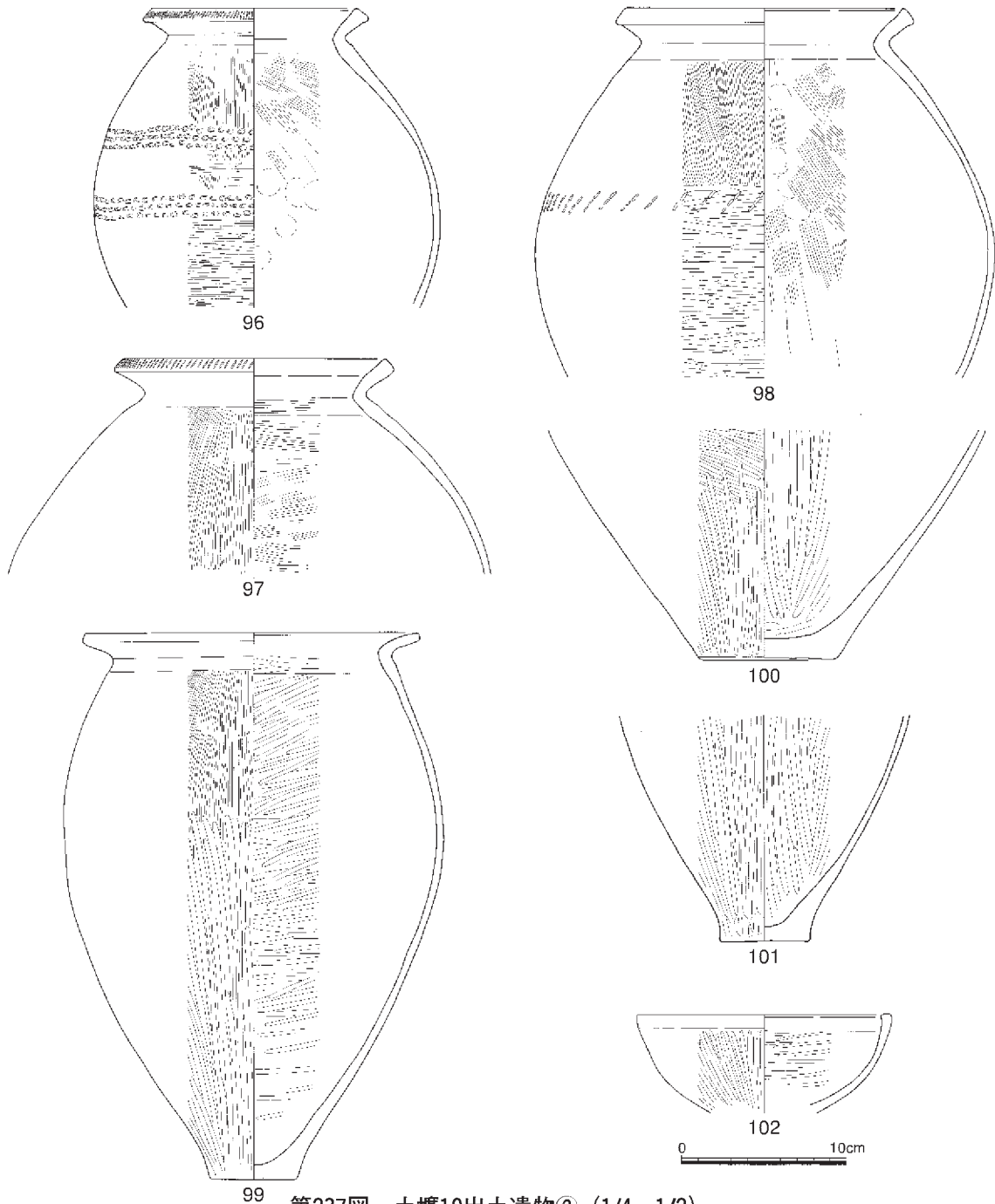
写真27 土壙10 調査風景 (南西から)



- 1 褐色砂質土 (10YR4/4)
- 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒少・土器含)



第236図 土壙10 (1/30)・出土遺物① (1/5)

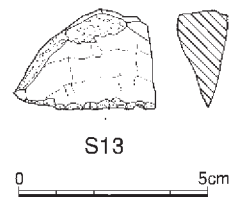


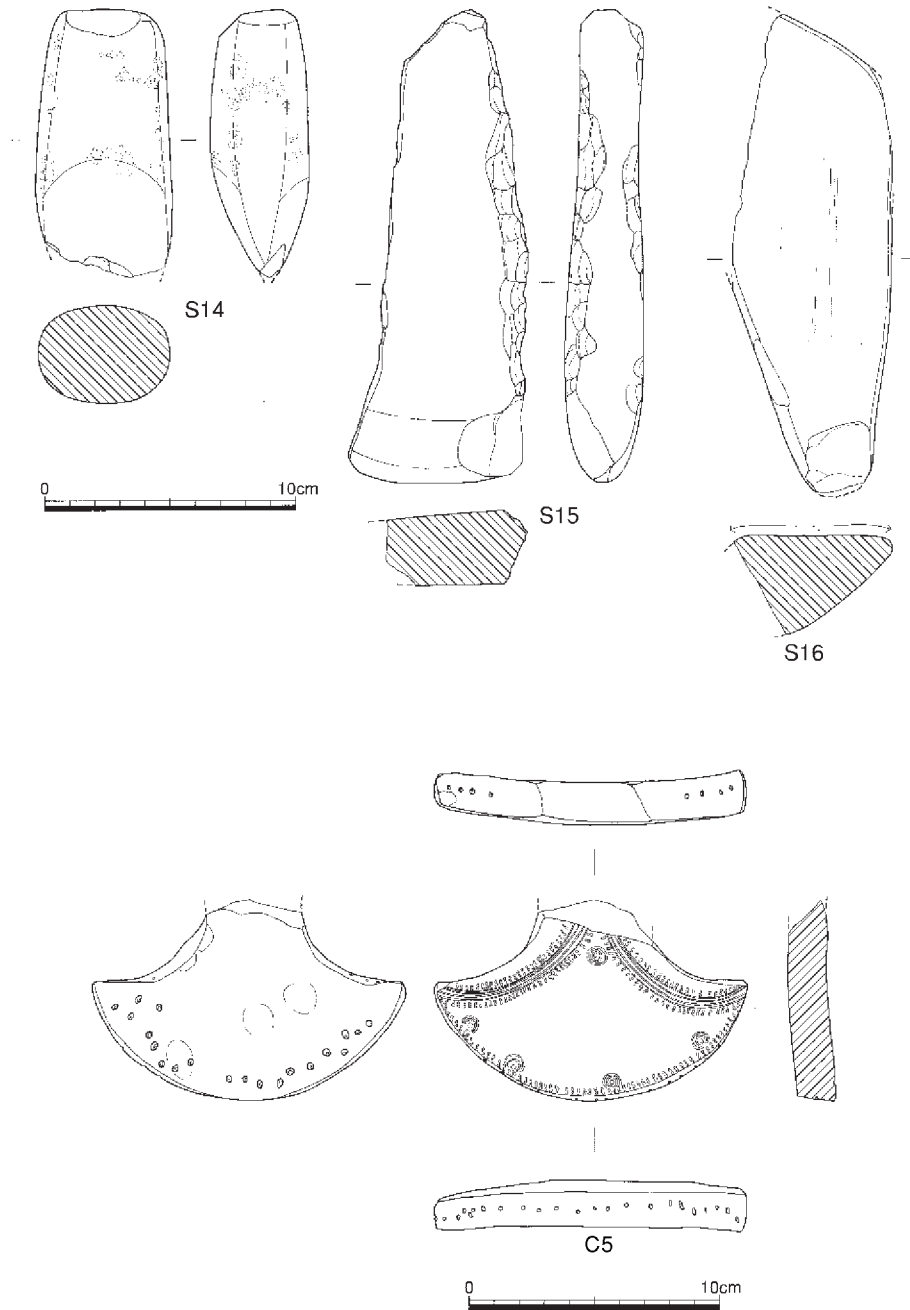
第237図 土壙10出土遺物② (1/4・1/2)

集中しており、底面より高い位置からの出土が目立つ。

94・95は卵形の体部をもつ壺で、口縁部に刻み目を有する貼付突帯を巡らし、体部上半に刺突文を施す。96～101は甕、102は椀形の高杯で口縁端部を水平にやや肥厚させている。S14は閃緑岩製の蛤刃石斧。C5は分銅形土製品で、下半部のみ出土。表面には刺突文と櫛描文が施文されており、裏面には小円孔がみられるが、これは端部に施されている小円孔には抜けていない。出土している土器の諸特徴から、弥生時代中期中葉であると思われる。

(松尾)





第238図 土壙10出土遺物③ (1/3)

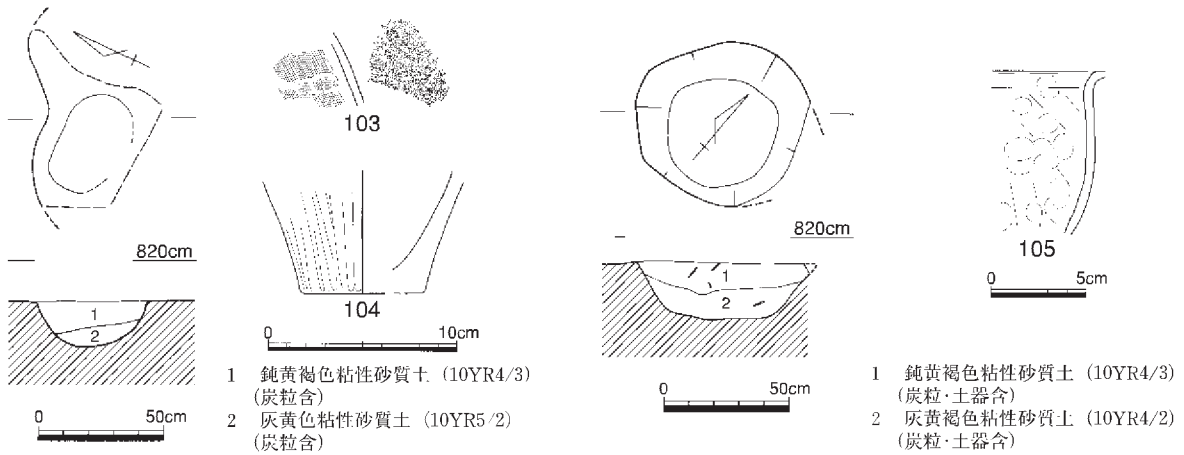
**土壙11** (第201・239図)

116 Cの南東で検出した土壙で、後述の土壙12と後世の遺構に切られていたため、全体の形や規模は不明である。断面形は碗形で、埋土は土器片を少量含んでいた。103・104などの土器や、周辺の状況および埋土などから、弥生時代中期中葉であると推察できる。(松尾)

**土壙12** (第201・240図、図版65)

116 Cの南東に位置し、先述の土壙11を切っていた。また、東側は後世の遺構により攪乱を受けていたが、平面形は直径約70cmの不整円形を呈していたと考えられる。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは24cmを測る。105など土器の細片が出土している。弥生時代中期中葉。(松尾)





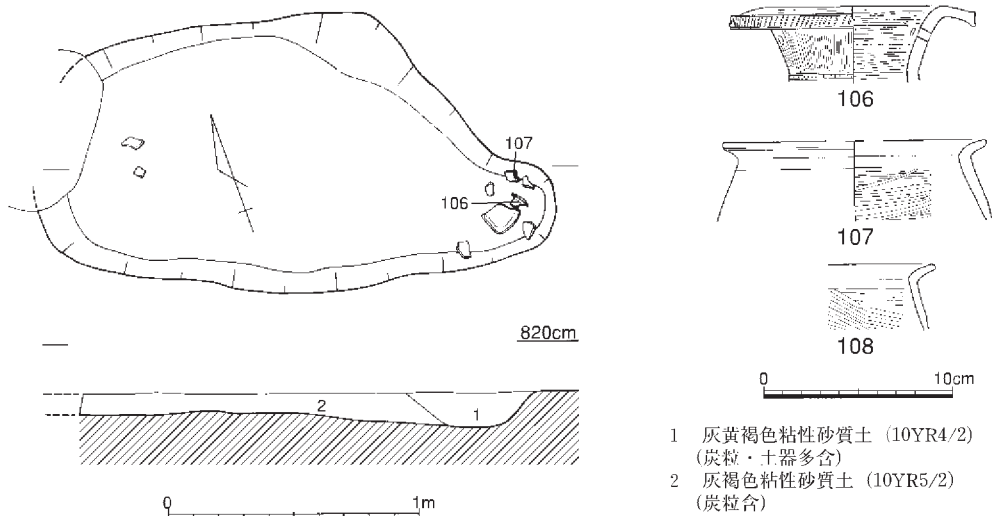
第239図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第240図 土壌12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌13 (第201・241図、図版65)

116 Cの東中央付近で検出した、平面形が不整楕円形の土壌である。北西端は後世の柱穴により攪乱を受けていた。底面はやや凹凸があり、遺物は東側に集中して出土している。

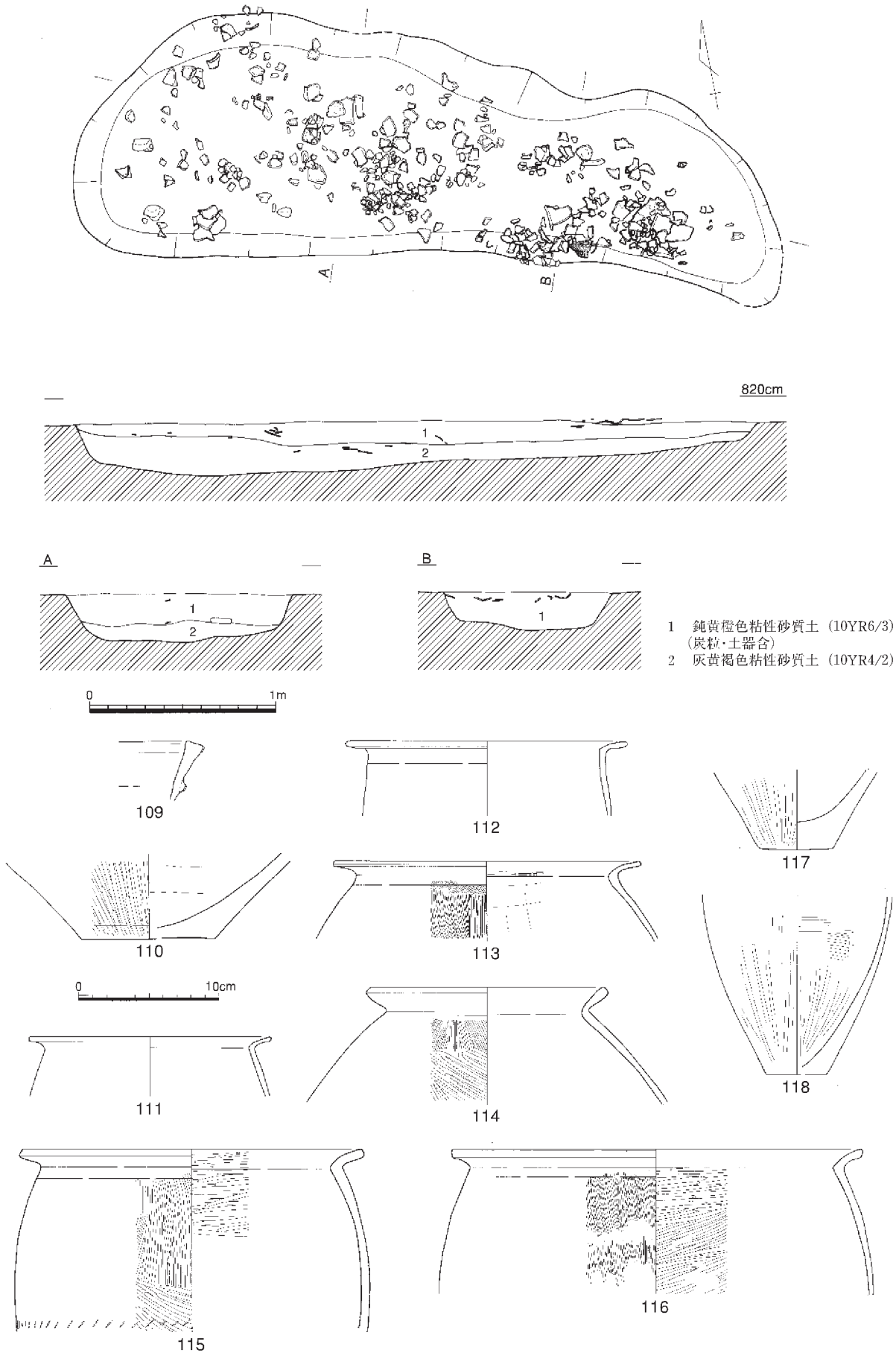
106の壺は口縁端部に刻み目を施し、口縁部には2個一対の円孔が、頸部にはヘラ描きの沈線が2条巡る。107・108は甕。土器の諸特徴から、弥生時代中期中葉であろう。(松尾)



第241図 土壌13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌14 (第201・242図、図版66)

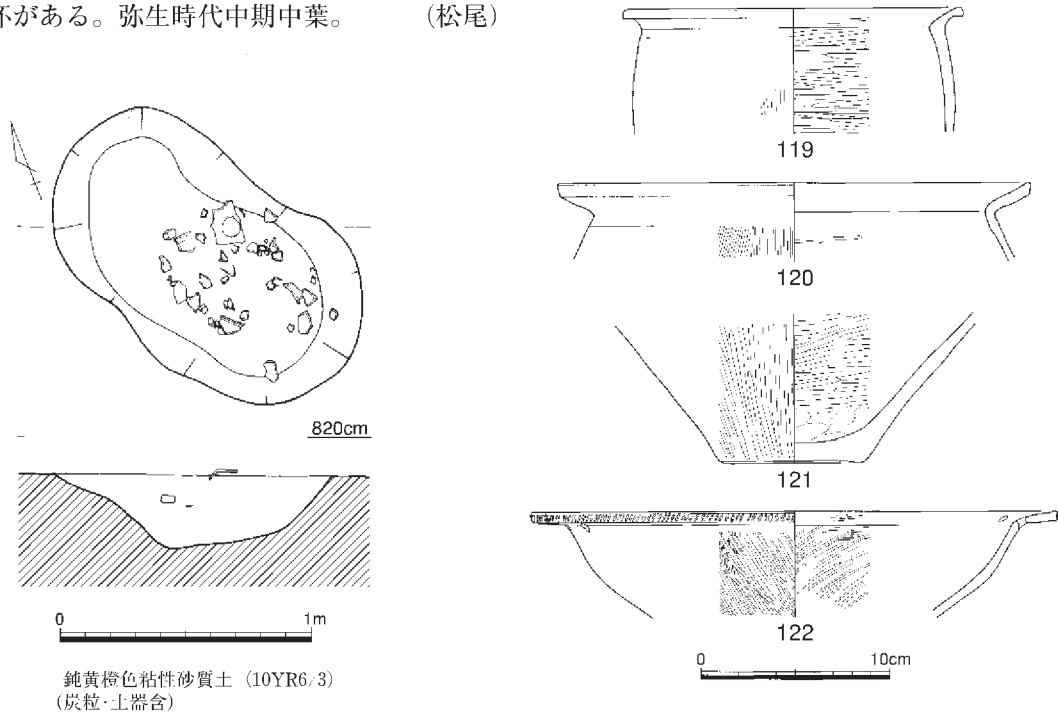
116 Cの東側中央で、土壌13の北側に位置する。後述する土壌15とつながる窪みにより、当初は同一の土壌であると認識していたが、断面観察などから単独の遺構として掲載することとした。平面形は長軸が3.8m、短軸が1.3mを測る、東西に細長い楕円形を呈する。断面形は逆台形で、底面はやや凹凸していた。出土遺物は109～118の土器のほかは、使用したとは考え難い自然石がある。土器は破片が多く、1個体に復元し得るものは皆無であった。器種組成についても、甕などの煮沸具が多く、壺・高杯などは少ない。弥生時代中期中葉である。(松尾)



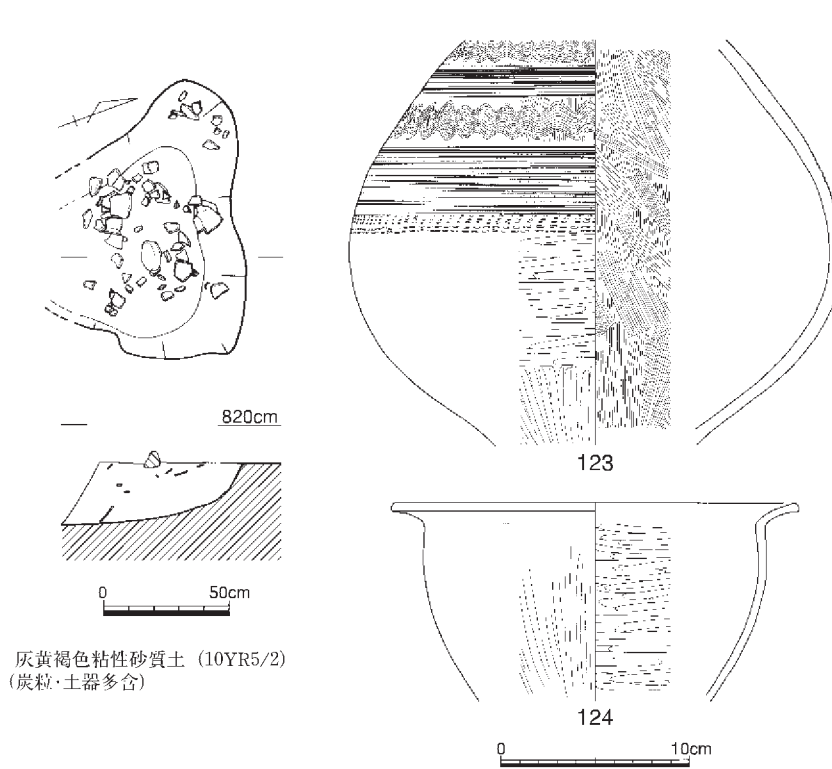
第242図 土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌15 (第201・243図、図版66)

118Cの西側中央で、土壌14の東側に位置する。平面形は長軸が約1.4m、短軸が80cmを測る、不整楕円形を呈する。断面形はややいびつな逆台形を呈し、遺物は土壌の中央よりやや南東方向の地点でまとまって出土している。土器は119~121の甕、122の高杯がある。弥生時代中期中葉。(松尾)



第243図 土壌15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第244図 土壌16 (1/30)・出土遺物 (1/4)

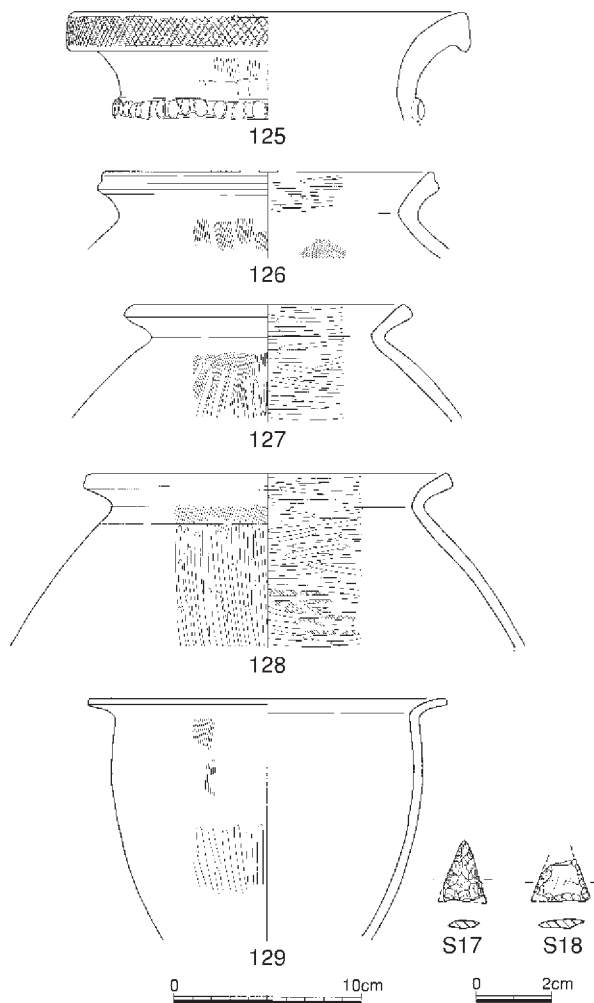
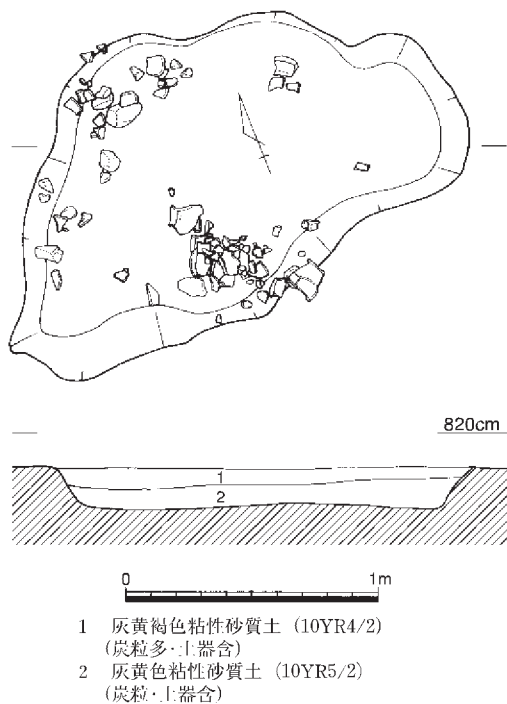
土壌16 (第201・244図、図版66)

118Cの南西で検出した。後述の土壌17・18とつながる窪みにより、当初同一の土壌として認識していたが、土層断面等の観察により、個別の遺構として掲載する。

平面形は不整形で、南側は後世の遺構により攪乱をうけていた。出土遺物は土器・河原石があり、土器は破片が多い。時期は、弥生時代中期中葉。(松尾)

土壌17 (第201・245図、図版66・125)

118Cの南西で検出した。土壌16・土壌18とつながる窪みのほぼ中央に位置する。平面形は不整形で、最大長1.8mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。遺物は125～129の土器や、S17・S18の石鏃がある。



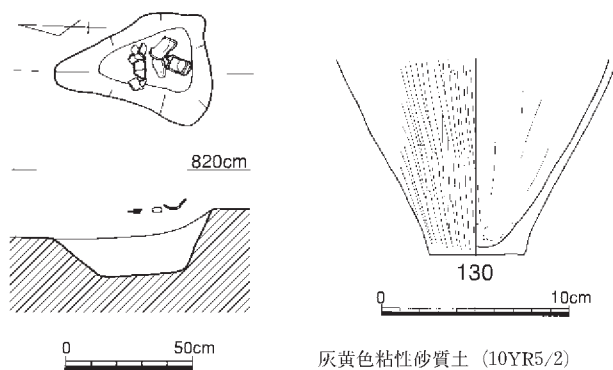
第245図 土壌17 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

る。125の壺は口縁端部にヘラによる格子文が施され、頸部には指頭圧痕を有する突帯が巡る。126～129の甕は口縁端部が肥厚し、面をもつものが見受けられる。また、126の口縁端部には1条の凹線文が巡る。弥生時代中期中葉でも中相であろうか。(松尾)

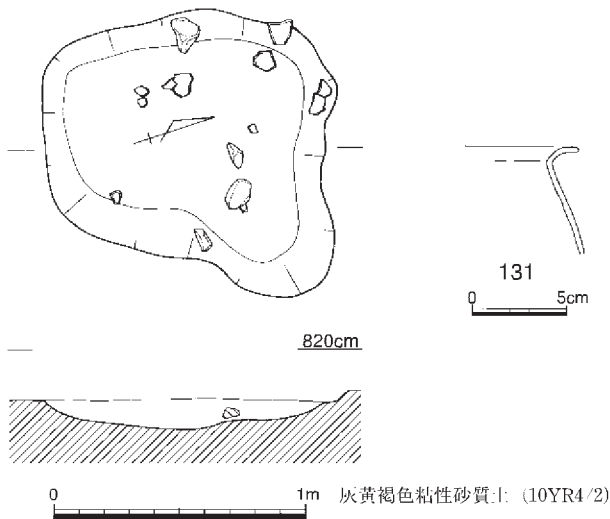
土壌18 (第201・246図、図版66)

118Cの南西に位置し、先述の土壌16・17と一連の土壌である。平面形は不整形で、最大長64cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面まで約16cmを測る。

遺物は130などの土器がほとんどで、完形に復元できるものは皆無であった。時期は、出土した土器の諸特徴や、周囲の状況から、弥生時代中期中葉であろう。(松尾)



第246図 土壌18 (1/30)・出土遺物 (1/4)

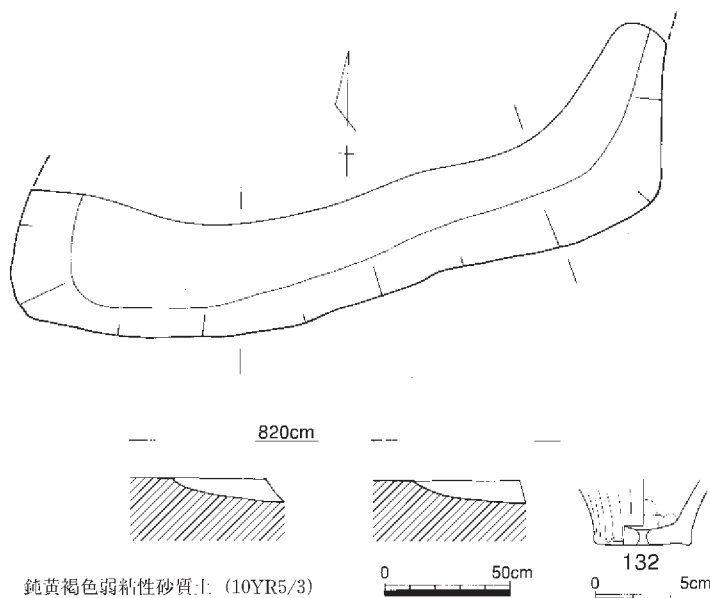


第247図 土壌19 (1/30)・出土遺物 (1/4)

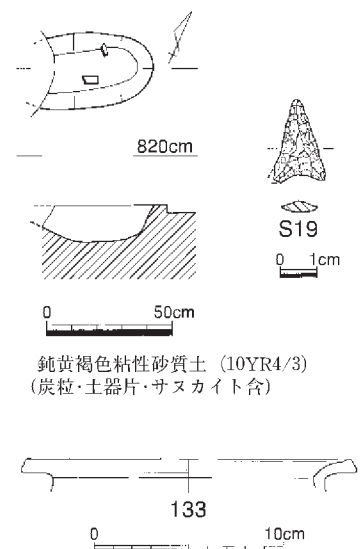
長い不整楕円形であると思われ、長軸は2.6mを測る。断面形は北側が不明であるが、浅い碗形を呈すると思われる。出土した132など土器の諸特徴から弥生時代中期中葉であろう。(松尾)

**土壌21** (第201・249図、図版125)

118Cの南西、土壌20の東に位置する。西側は後世の遺構により攪乱を受けてはいるが、平面形は短軸が30cmを測る楕円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは14cmを測る。出土遺物は、133などの土器やS19の石鏃がある。弥生時代中期中葉に比定できる。(松尾)



第248図 土壌20 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第249図 土壌21 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

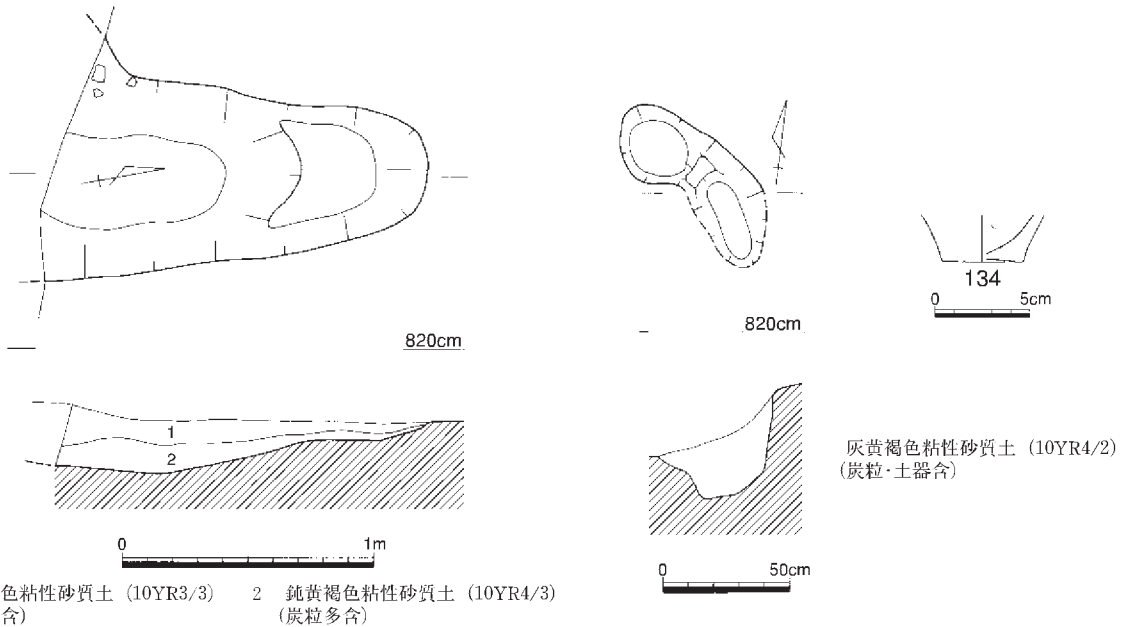
**土壌22** (第201・250図)

116Cの南東端で土壌20の南に位置する。南北に長い土壌の南側は、幅50cmのトレンチにより詳細が不明である。しかし、トレンチより南側では検出していないことから、南北の長さは最大でも2m

程であろう。遺物は土器の細片が少量出土しているのみ。弥生時代中期中葉であろう。(松尾)

**土壌23** (第201・251図)

116Cの南西端で土壌22を切って検出している。平面形はピーナッツ状の不整楕円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは38cmを測る。遺物は少なく、134の甕底部など破片が少し出土したのみ。土器の特徴および周囲の状況から、弥生時代中期中葉。(松尾)



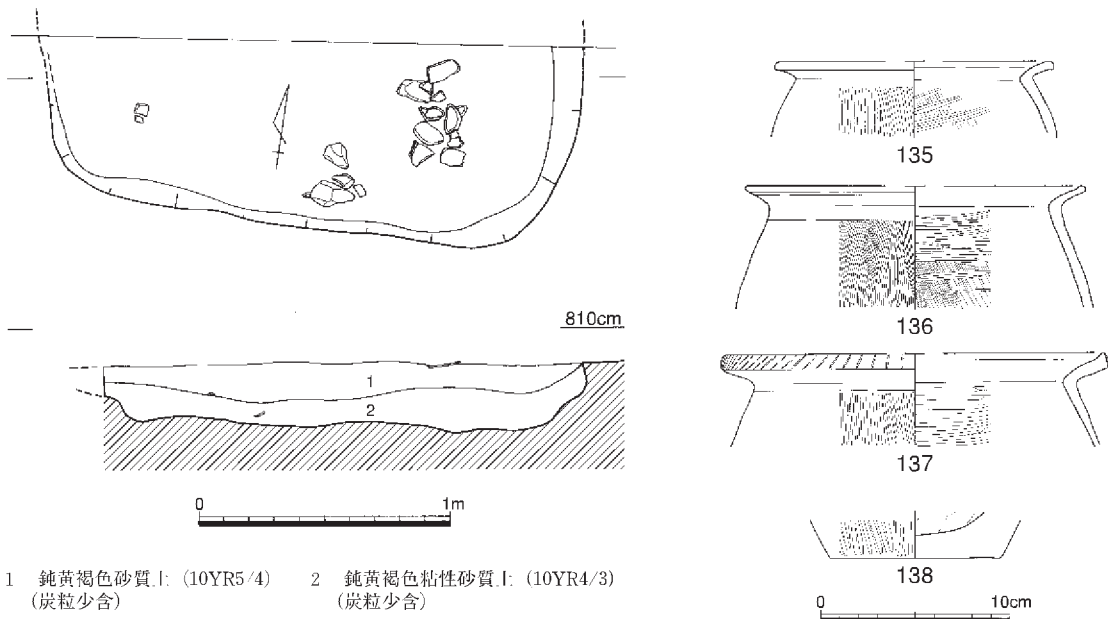
1 暗褐色粘性砂質土 (10YR3/3) 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3) (炭粒多含)

第250図 土壌22 (1/30)

第251図 土壌23 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壌24** (第201・252図、図版67)

118Cの南西で土壌21の南に位置する。北側は幅50cmのトレンチに切られ、詳細は不明であるが、このトレンチより北側では検出していない



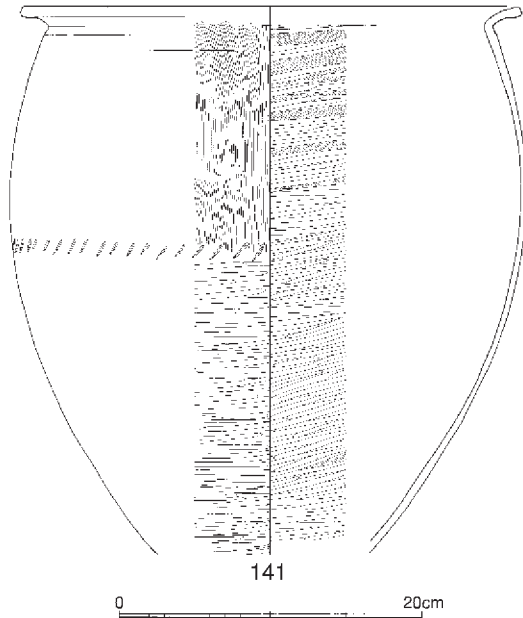
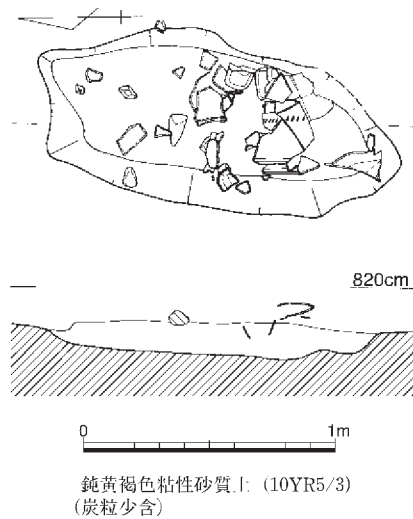
1 鈍黄褐色砂質土 (10YR5/4) 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3) (炭粒少含)

第252図 土壌24 (1/30)・出土遺物 (1/4)

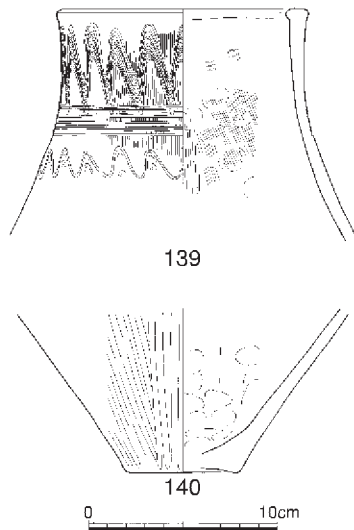
いため、北の端はトレンチ内で終わっていると思われる。断面形は底面に凹凸のある逆台形を呈する。出土している土器の内、137は口縁端部に刻み目を巡らす。弥生時代中期中葉。(松尾)

**土壌25** (第201・253図、図版67)

118Eの北西に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形。遺物のほとんどは検



第253図 土壌25 (1/30)・出土遺物 (1/5・1/4)



出面よりレベル的に高い位置で出土している。139の壺は口縁部がすぼまり、端部は内面に肥厚する。外面は櫛描きの直線文と波状文で加飾している。141の甕は胴部に刺突文を巡らし、外面下半と内面は丁寧にヘラミガキを行う。弥生時代中期前半であろう。(松尾)

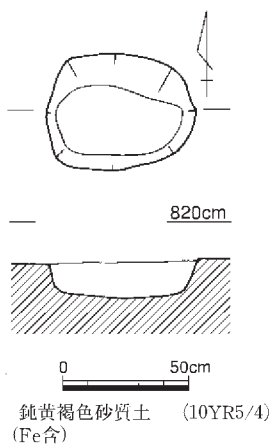
**土壌26** (第201・254図、図版68)

118Eの中央やや西よりに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸は59cmを測る。断面形は逆台形で、検出面より底面までの深さは14cmを測る。

遺物の出土はなく時期決定が難しいが、埋土の状況や周辺遺構の時期などを考慮して、弥生時代中期前半に比定しておく。(松尾)

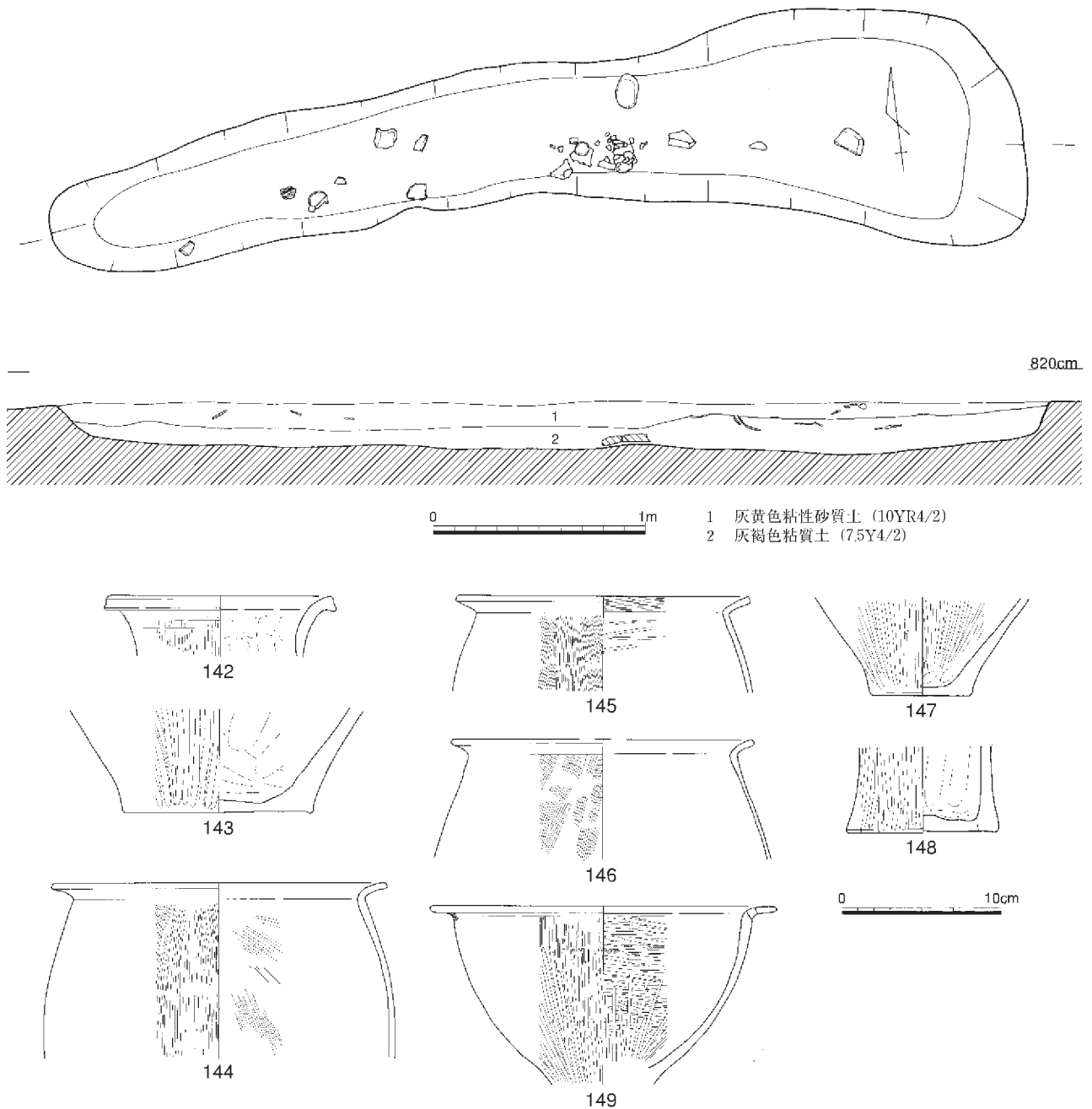
**土壌27** (第201・255図、図版68)

116Eの南東隅で、後述の土壌28を切っている。平面形は東西に長い長楕円形で、長軸は4.59m、短軸は1.08mを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は2層に分層できた。出土遺物は全体に散在しているが、中央付近に集中している箇所も見受けられた。



第254図 土壌26 (1/30)

遺物は142~149の土器の他、自然石が数点出土している。142は壺で、口



第255図 土壙27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

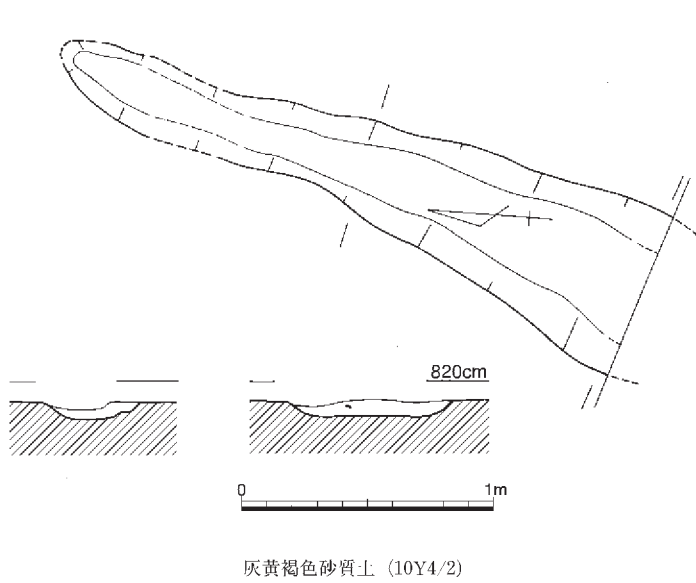
縁端部に凹線を一条巡らせている。143～147は甕、口縁端部は肥厚せず丸くおさめているものが多い。148はジョッキ形土器の底部。149は椀形の高杯。土器の諸特徴から弥生時代中期前半。(松尾)

土壙28 (第201・256図、図版68・131)

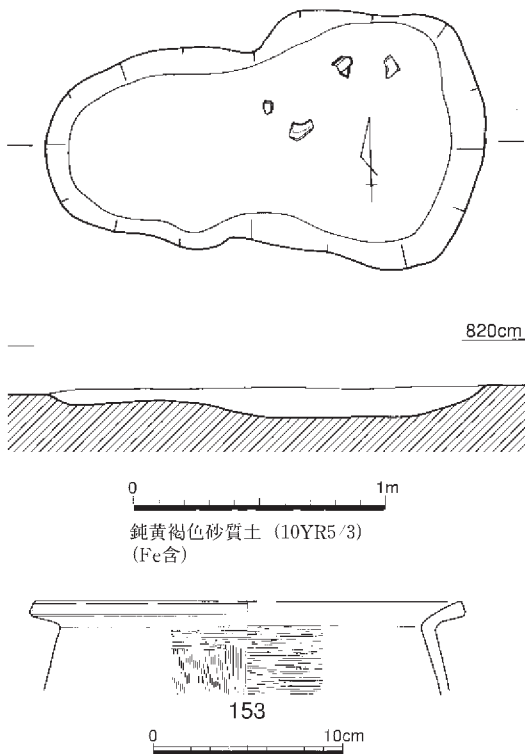
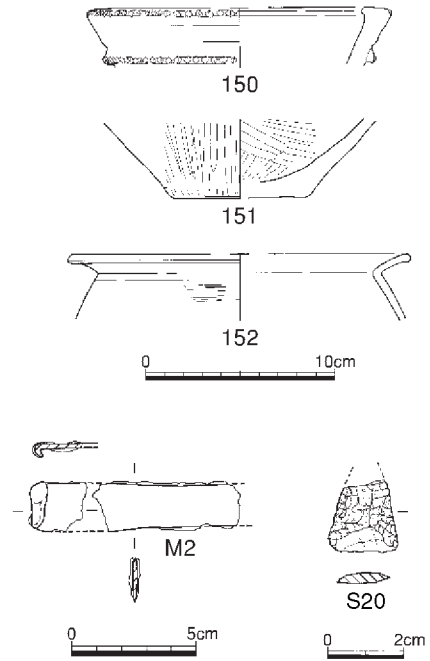
116 Eの南東隅で、先述の土壙27に切られており、南側は調査区外に延びる。平面形は南北に長い楕円形で、短軸は68cmを測る。断面形は浅い椀形を呈し、検出面から底面までの深さは7 cm程。

150の壺は口縁部に刻み目を施した貼付突帯が巡る。151は壺の底部で、内面は丁寧にヘラミガキを行う。152は口縁端部を丸くおさめている甕。土器以外には、S20の石鏃やM2の鉄製摘鎌がある。M2については他の遺物と共伴しない可能性が高い。土器の諸特徴から弥生時代中期中葉。(松尾)





第256図 土壇28 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)



第257図 土壇29 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壇29** (第201・257図)

118Eの北西で、土壇26の北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸は1.74mを測る。断面形は底面に凹凸がある浅い逆台形を呈する。出土遺物は少なく、その分布も北東に集中している。153の甕は口縁端部にやや面をもち、内面は丁寧にヘラミガキを行う。弥生時代中期中葉であろう。(松尾)

**土壇30** (第201・258図)

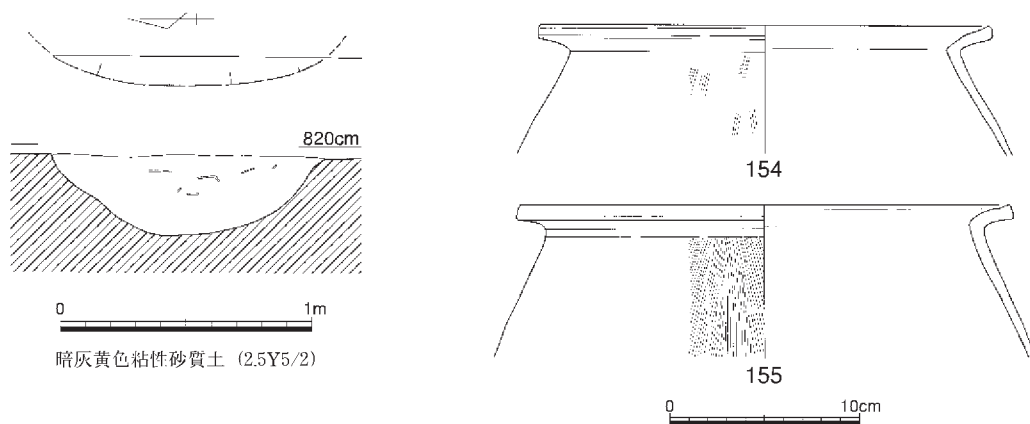
118Eの北側中央で、調査区の断面にかかっていた。このため、平面形についてはよく分からない。断面形は碗形を呈し、深さは32cmを測る。埋土中には比較的多くの土器と共に、炭が含まれていた。

154・155の甕は、口縁端部がやや肥厚し、面をもつ。内面は摩滅しており調整が不明瞭であるが、外面にはタテハケが観察できる。

土器の諸特徴や埋土の状態、また周辺遺構の状況などから、弥生時代中期中葉と思われる。(松尾)

**土壇31** (第201・259図、図版69)

116Eと118Eの境で、土壇27の東側より検出した。第259図の平面図にあるように、点線で囲まれた不整形の範囲(炭の分布範囲)の中に、6カ所炭が塊になって残っている部分があった。この中にはいくつかの重複があり、ある時期最低でも2回以上、この場所で作業を行っていたと思われる。

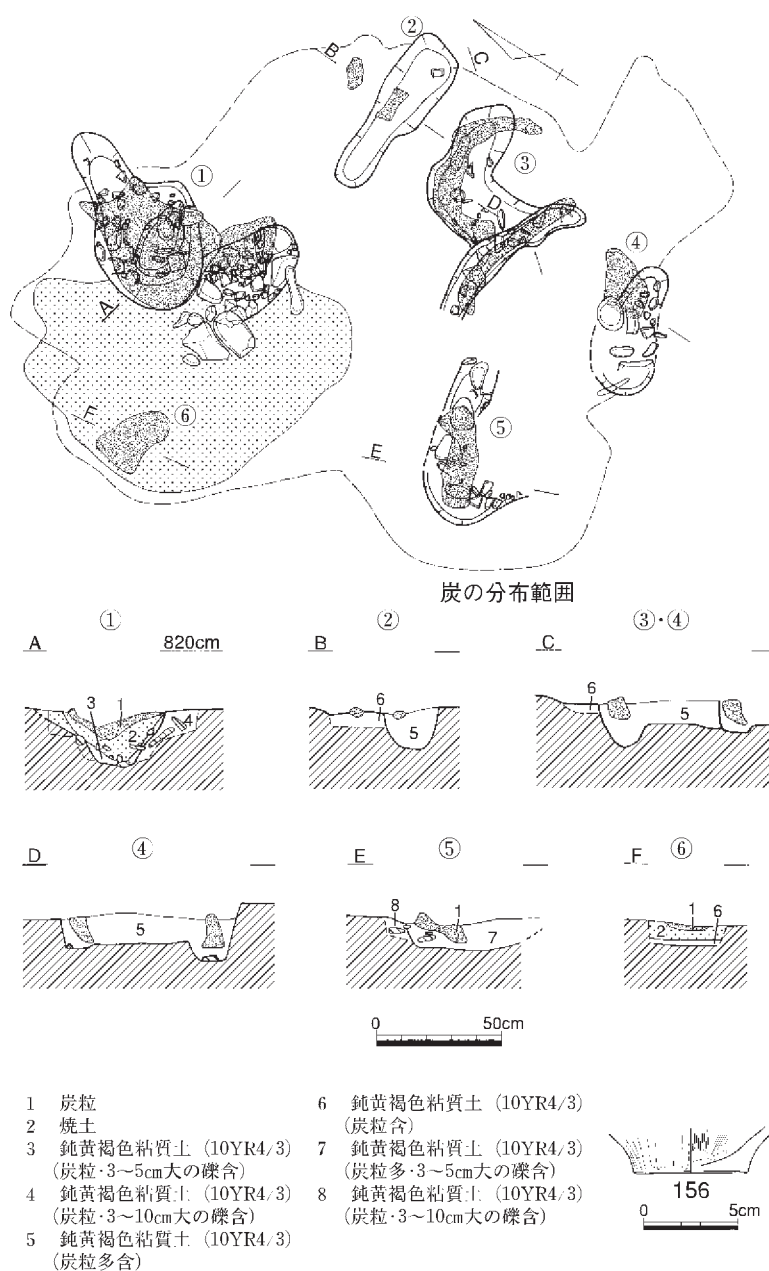


第258図 土壌30 (1/30)・出土遺物 (1/4)

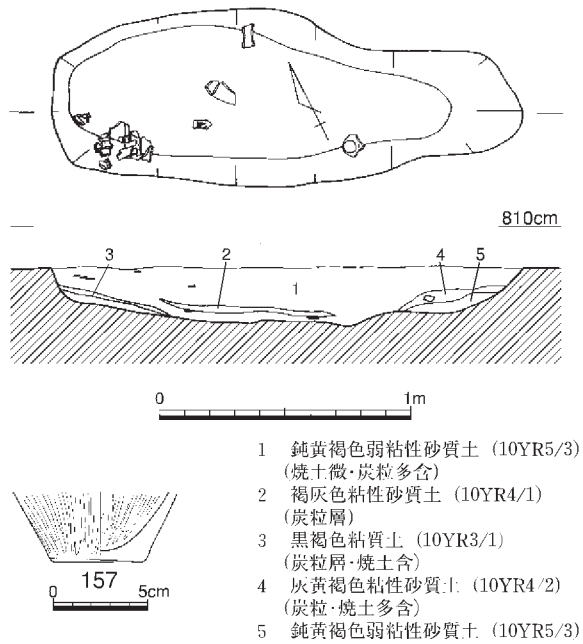
③・④・⑤などは、まず最初に、3cmほどの石を含む砂質のベース層を馬蹄形に掘り込み、そこへ木材を並べる。③・④は明らかに切り合っており、状況から④の方が新しい。一方①は、これらとは異なり、北側を突出させた楕円形に掘り込み、同じくその上に木材を並べている。なお、②・⑥は同じ機能を持つものであると考えられるが、形態がはっきりしない。

これらの施設が何を目的に、どのような作業を行っていたのか見当がつかないが、少なくとも火を用いた作業であったのは間違いない。なおベース層を掘り込み作られた土壌内の小石は、上部で火が焚かれていたにも関わらず被熱痕跡がなかった。炭化した木材の樹種はムクノキである。

時期は、出土土器156の時期と周辺の遺構の状況か



第259図 土壌31 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR5/3)  
(焼土微・炭粒多含)
- 2 褐灰色粘性砂質土 (10YR4/1)  
(炭粒層)
- 3 黒褐色粘質土 (10YR3/1)  
(炭粒層・焼土含)
- 4 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)  
(炭粒・焼土多含)
- 5 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR5/3)

第260図 土壌32 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ら弥生時代中期前半であると思われる。なお、炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、 $BP2,500 \pm 40 \sim 2,430 \pm 40$ の幅で結果が出ており、若干古い実年代を示す。(松尾)

**土壌32** (第202・260図、図版70)

118Cの南東で検出した。平面形は東西に長い不整楕円形を呈し、長軸は1.87mを測る。断面形は底面が凸凹した逆台形を呈する。埋土の中には、炭が層状をなしているのが見受けられた。出土遺物は157などの土器がある。弥生時代中期前半。(松尾)

**土壌33** (第202・261図、図版70)

120Cの南西端で検出した平面形が隅丸長方形の土壌である。東側は後世の遺構により攪乱を受けており長軸は推定80cm程度、短軸は52cmを測る。遺物の出土は少なく、小片が

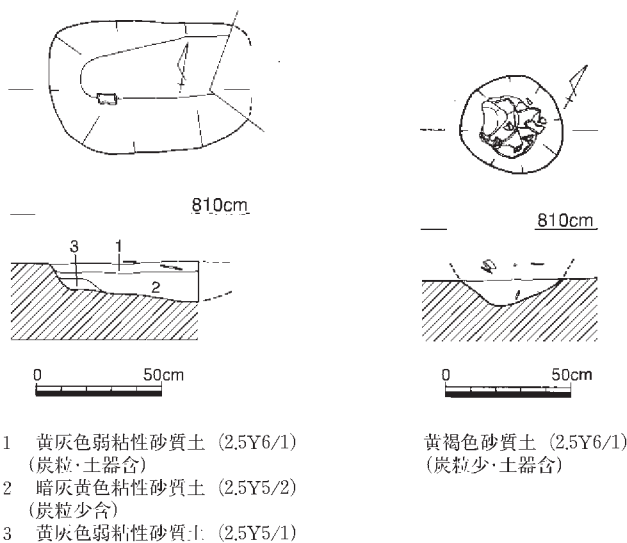
多い。埋土の状態や周辺の状況などから、弥生時代中期中葉であろうか。(松尾)

**土壌34** (第202・262図、図版70)

120Cの南西端に位置する。平面形が直径約40cmの円形で断面形は椀形を呈する。遺物である158の甕が、検出面より高いレベルで出土した。この甕は口縁端部を丸くおさめ、体部外面はタテハケを行い、その後下半部のみ縦方向のヘラミガキを施す。体部内面は下半部をヘラ状工具でナデ、上半部を斜め方向のヘラミガキ。土器の諸特徴から、弥生時代中期中葉。(松尾)

**土壌35** (第202・263・264図、写真24、図版71・128)

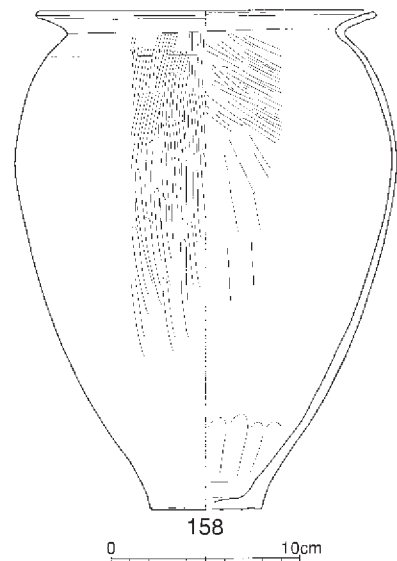
120Cの南西端で、土壌33・34・36の北に位置する。平面形は東西に長い不整長楕円形を呈し、長



- 1 黄灰色弱粘性砂質土 (2.5Y6/1)  
(炭粒・土器含)
- 2 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y5/2)  
(炭粒少含)
- 3 黄灰色弱粘性砂質土 (2.5Y5/1)

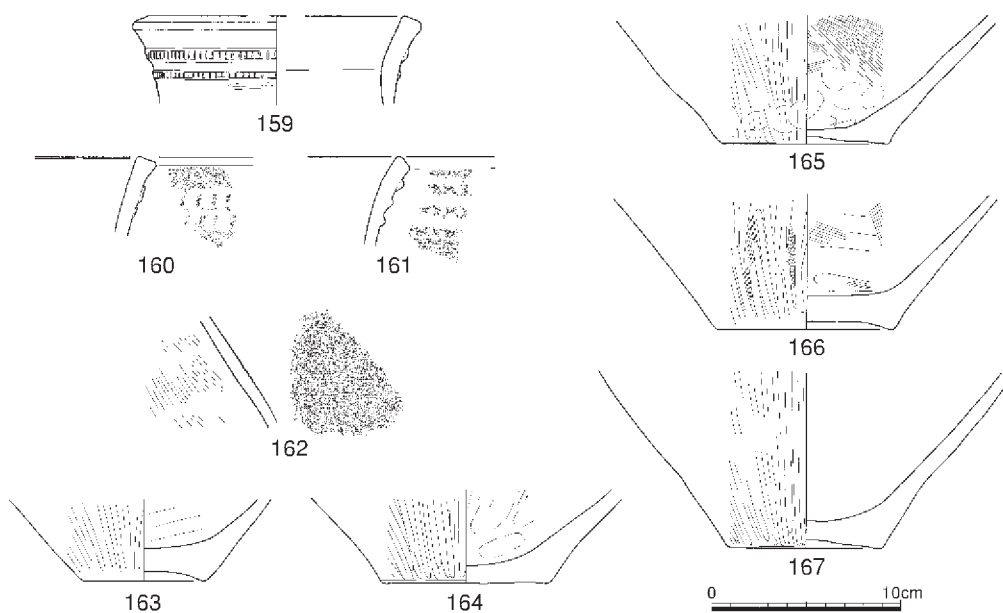
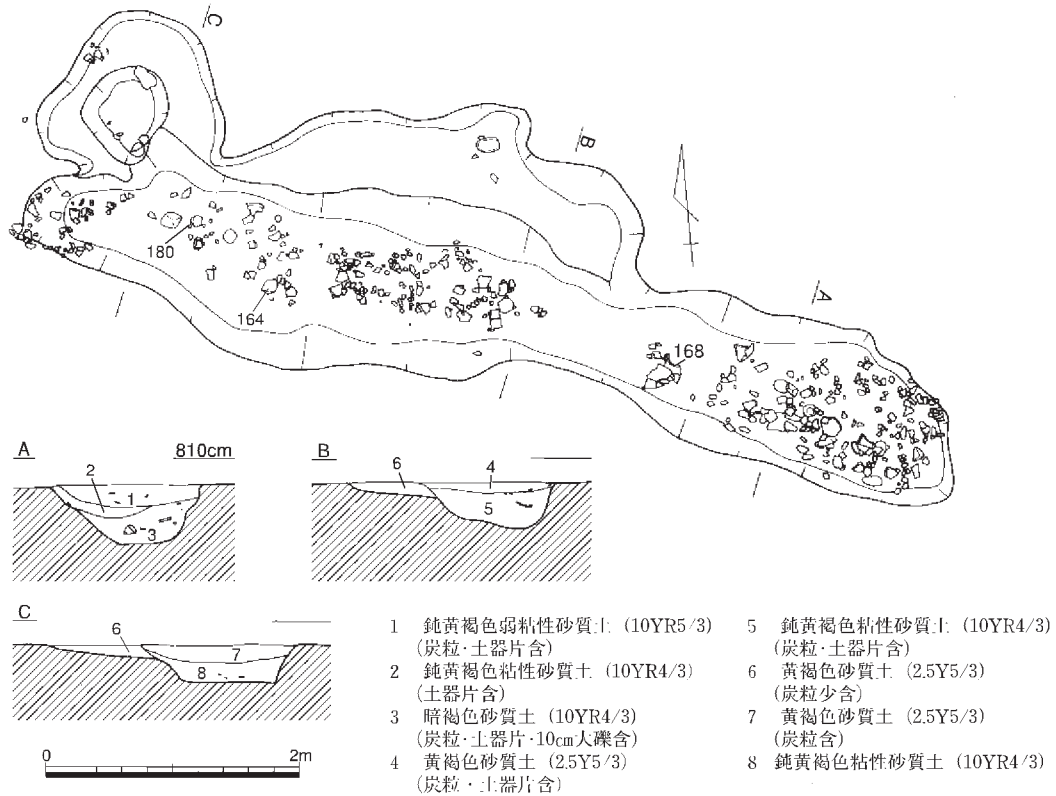
- 黄褐色砂質土 (2.5Y6/1)  
(炭粒少・土器含)

第261図 土壌33 (1/30)



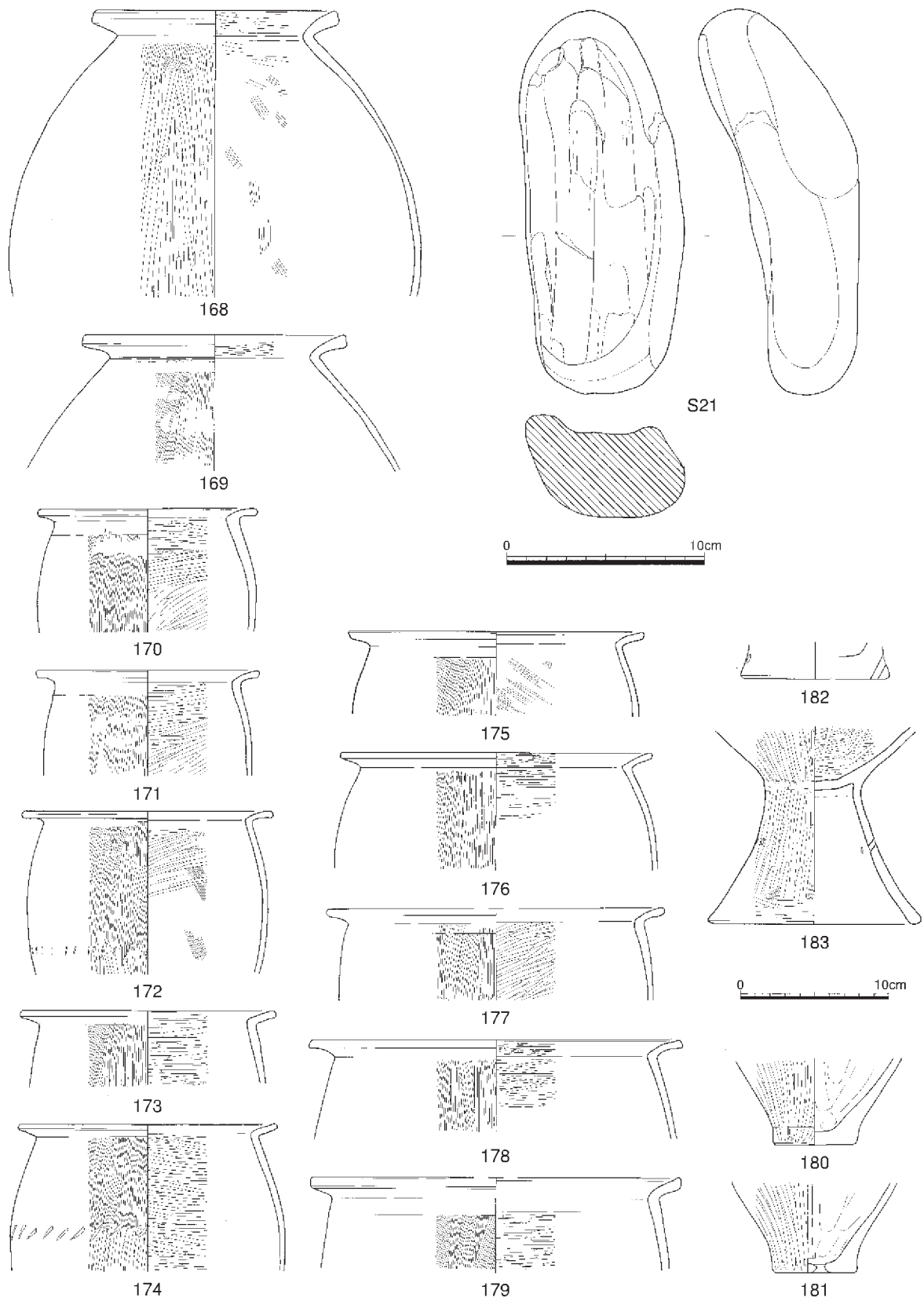
第262図 土壌34 (1/30)・出土遺物 (1/4)

軸は7.76m、短軸は最大1.4mを測る。断面を観察すると、2段に掘り込まれているのが明瞭に分かり、逆台形を呈する部分（1～5、7・8層）がこの土壙の本体であろう。それを傍証するかのように、一段深く掘り込まれている部分に、多くの遺物が廃棄されている。遺物のほとんどは破片であり、完形に復元し得るものは皆無であった。また、土器の他には自然石が多く目立つ。土器は159～167が壺で、口縁に刻み目突帯文を巡らすものが多い。168～181は甕。口縁端部が肥厚し面を有するものと、



第263図 土壙35 (1/60)・出土遺物① (1/4)

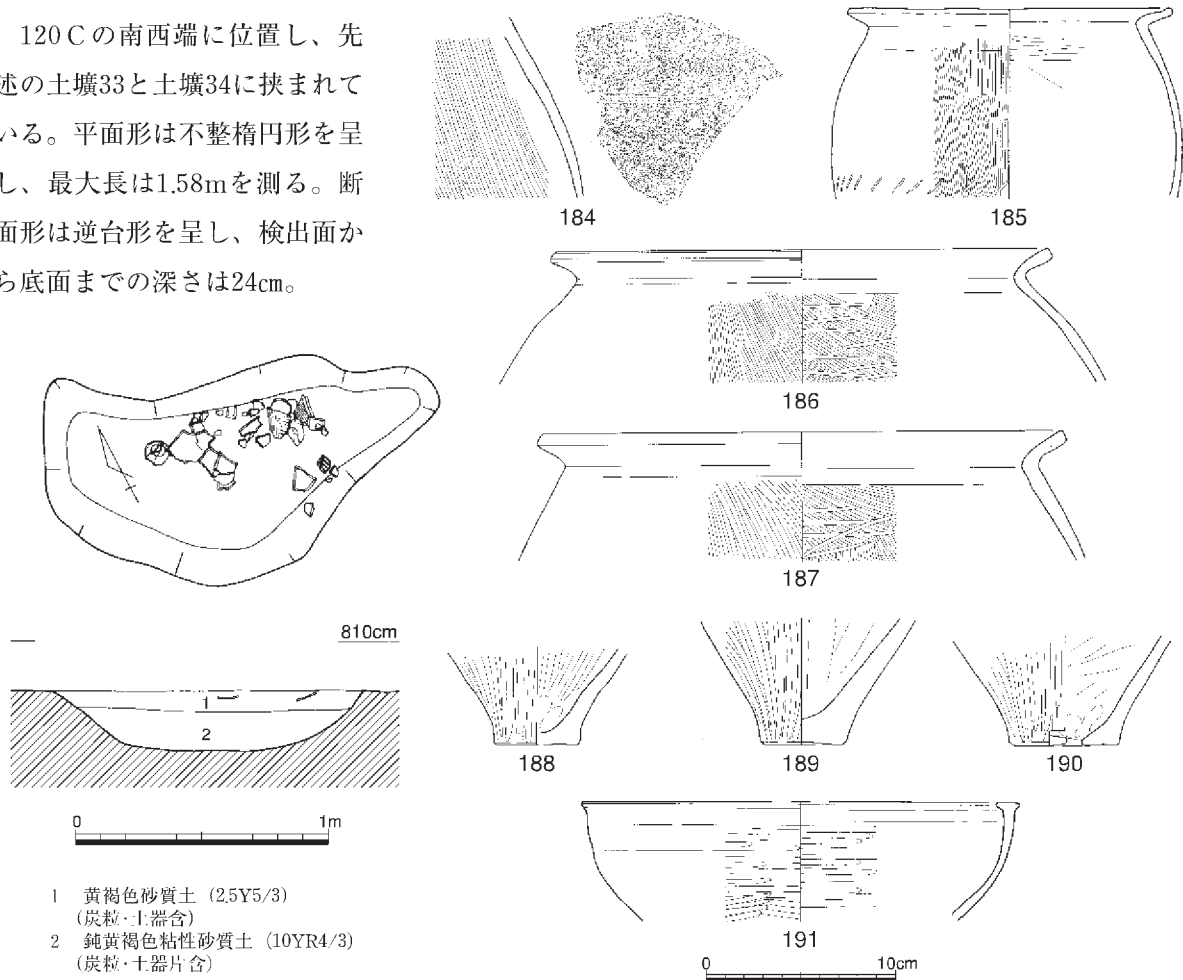
丸くおさめるものがある。182はジョッキ形土器の底部。183は台付鉢。S21は流紋岩製で、用途は不明だが中央がすり減り、窪んでいる。時期は弥生時代中期中葉。(松尾)



第264図 土壙35出土遺物② (1/4・1/3)

土壙36 (第202・265図、図版71)

120 Cの南西端に位置し、先述の土壙33と土壙34に挟まれている。平面形は不整楕円形を呈し、最大長は1.58mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは24cm。



第265図 土壙36 (1/30)・出土遺物 (1/4)

埋土中からは、比較的多くの土器片が出土している。184は壺で胴部には櫛描文が施される。185～190は甕、191は椀形の高杯で、口縁端部が水平に肥厚する。弥生時代中期中葉。(松尾)

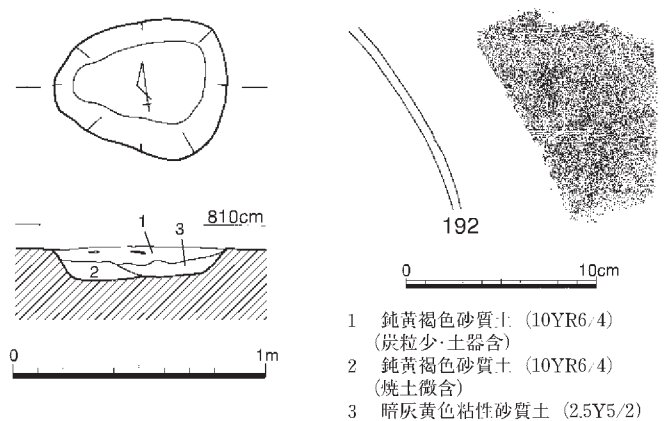
土壙37 (第202・266図)

118 Eの北東隅に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸は68cm、短軸は56cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは13cmを測る。

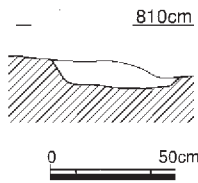
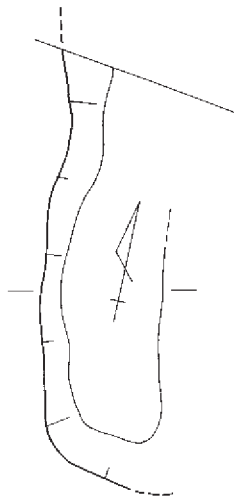
出土遺物は少なく、192の土器片など破片のみであった。192は壺の胴部で、櫛描の直線文が巡る。土壙の時期は、弥生時代中期前半。(松尾)

土壙38 (第202・267図)

120 Cの南半中央付近に位置する。東半分が後世の遺構により攪乱を受けてはいるが、平面形は不整長方形を呈し、長軸は1.68mを測る。断面形は逆



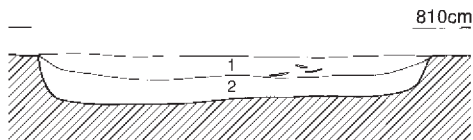
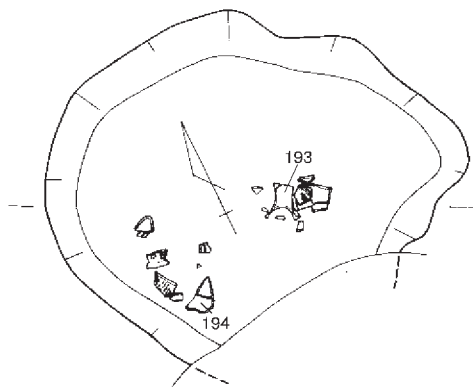
第266図 土壙37 (1/30)・出土遺物 (1/4)



褐灰色粘性砂質土 (10YR4/1)

第267図 土壌38 (1/30)

おさめるものと、肥厚した面をもつ口縁端部に、刻み目などを施すものがある。212・213は高杯。弥生時代中期前半。(松尾)



- 1 褐灰色粘性砂質土 (10YR4/1)  
(炭粒・焼土少含・土器含)
- 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒・焼土少含・土器含)

台形。出土遺物は無いが、埋土の状態と周囲の状況から、弥生時代中期前半と思われる。(松尾)

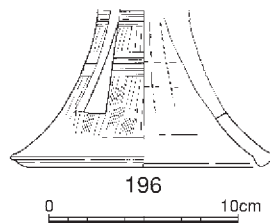
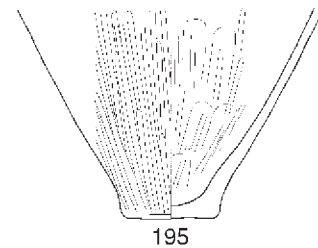
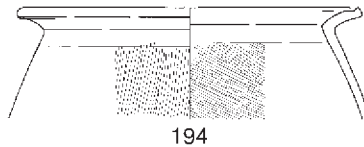
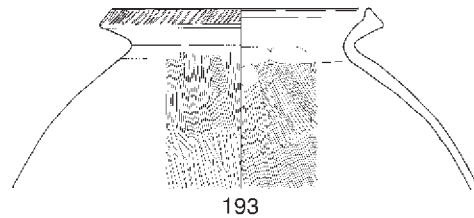
土壌39 (第202・268図、図版71)

120Cの南端中央付近で検出した。平面形は不整円形を呈し最大長は1.68m。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは20cmを測る。遺物には、193~196の土器がある。193~195は甕。193の肥厚して面をもつ口縁端部には刻み目が巡る。194の口縁端部は上方にややつまみ上げを行っている。196は高杯の脚部で、三角形の透かし孔が3方に配置され、櫛描直線文が巡る。弥生時代中期中葉。(松尾)

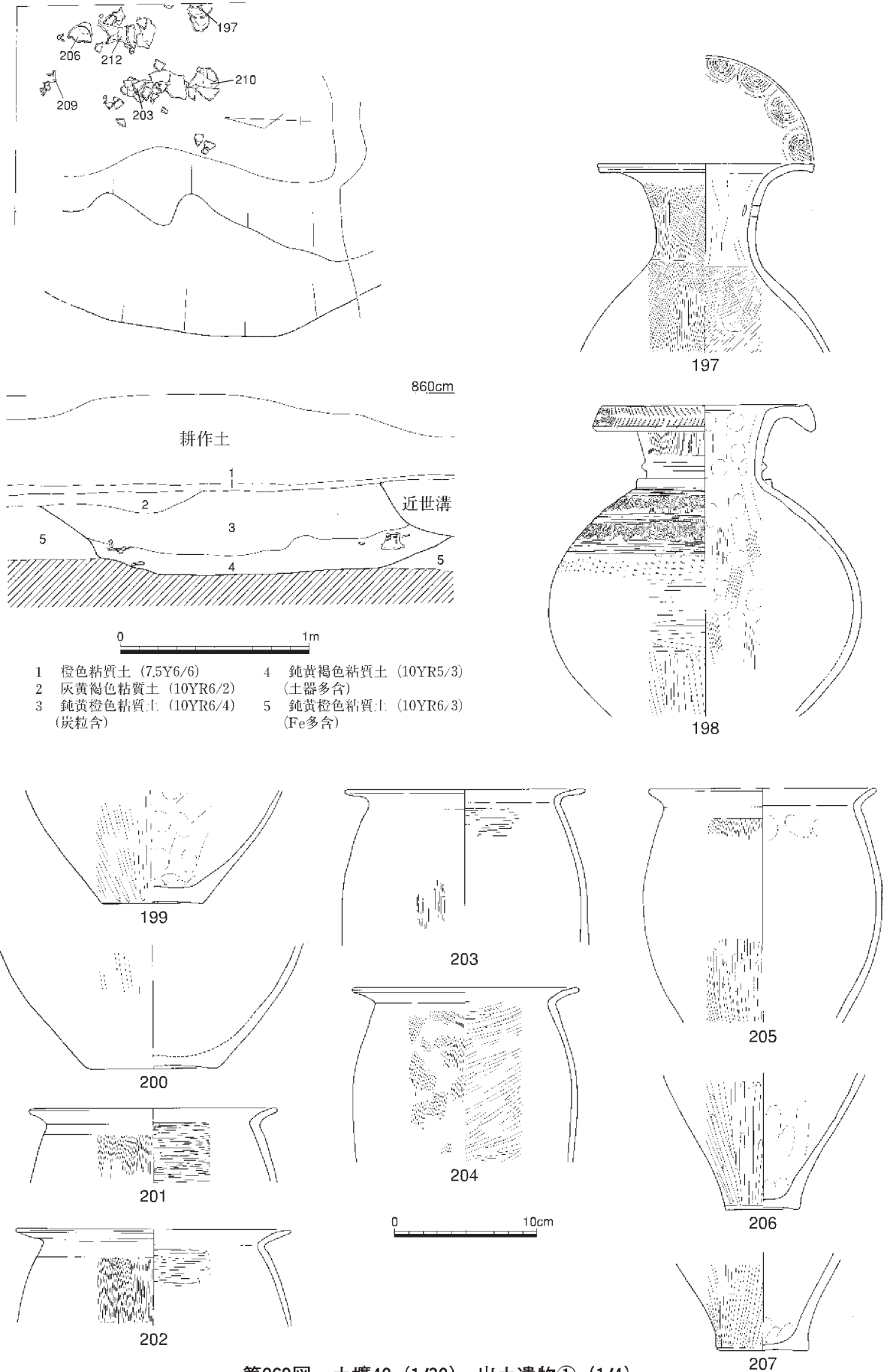
土壌40 (第202・269・270図、図版72・108)

120Cのやや中央、調査区の東端で検出した。北側と東側は調査区外へと延びており、南側については近世の溝により攪乱を受けている。このため、全体の形はよく分からないが、西側については2段に落ち込み、底面は平坦であった。調査区の北・東壁で断面を観察すると、その形は逆台形を呈している。埋土は2層に分層でき、出土土器のほとんどは底面の直上、あるいは下層である第4層より出土している。

遺物は土器のみであった。197~200は加飾した壺。201~211の甕には、口縁端部を丸く

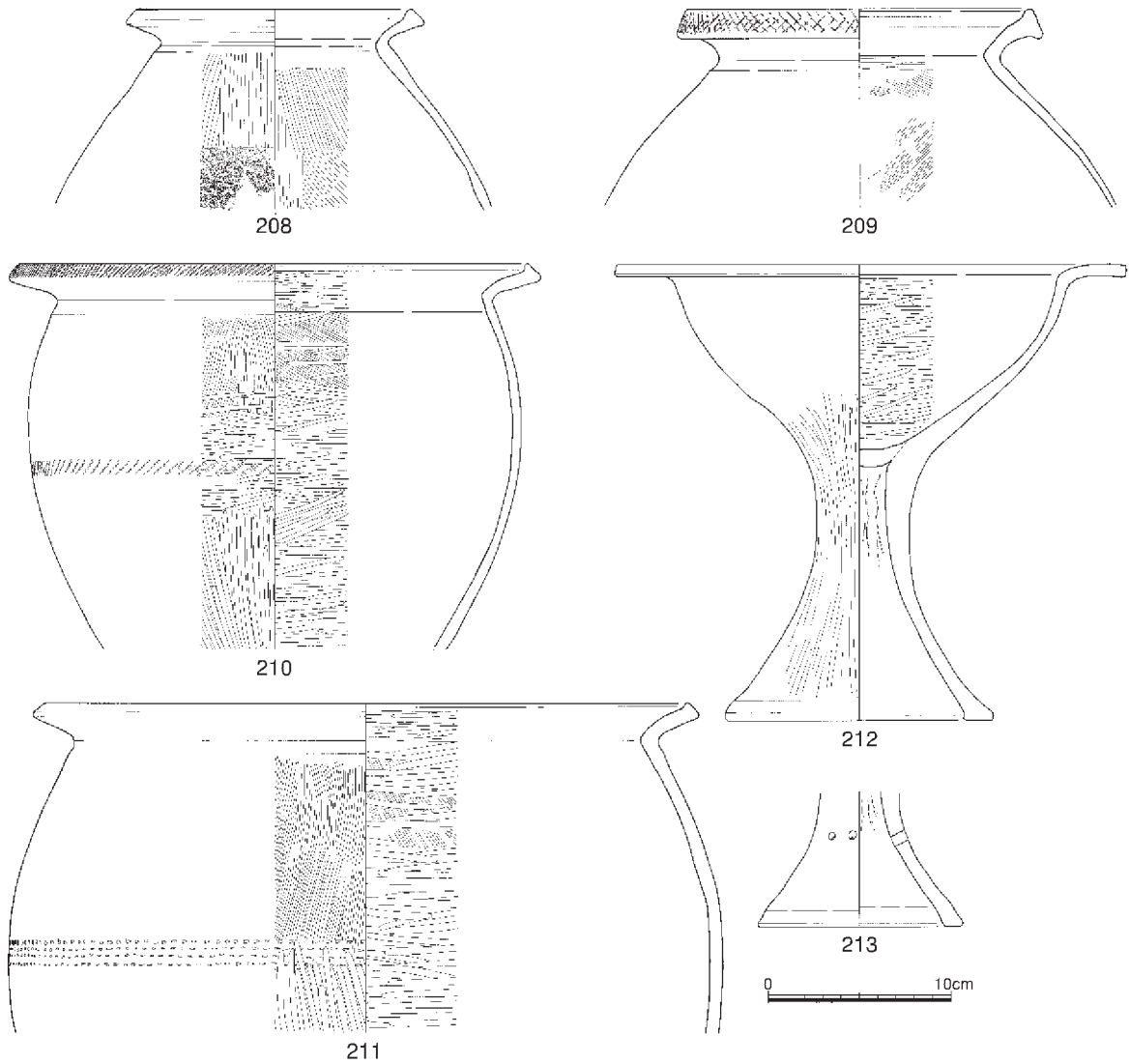


第268図 土壌39 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第269図 土壙40 (1/30)・出土遺物① (1/4)

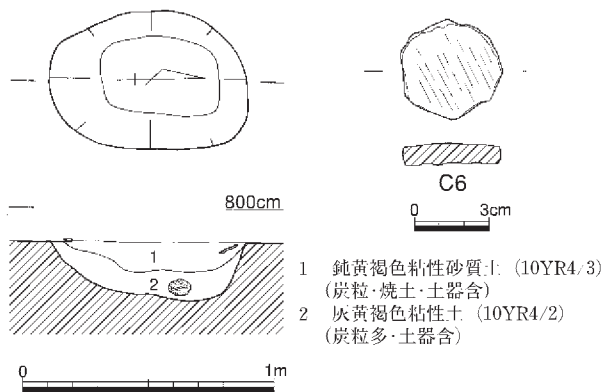




第270図 土壙40出土遺物② (1/4)

土壙41 (第202・271図)

122 Eの北西に位置する。後述の土壙42～46と同様、122 E北半に広がる弥生時代の包含層（黒褐色土）を掘り込んでいる。この包含層は東西幅約10m、南北幅約7mの範囲に広がり、それより外側は後世の洪水等により削りとられている様子であった。土壙41は平面形が楕円形を呈している。遺物はC6の紡錘車のみであるが、周囲の状況等から弥生時代中期前半に比定できよう。（松尾）

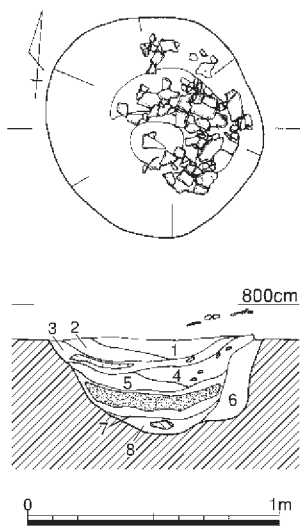


第271図 土壙41 (1/30)・出土遺物 (1/3)

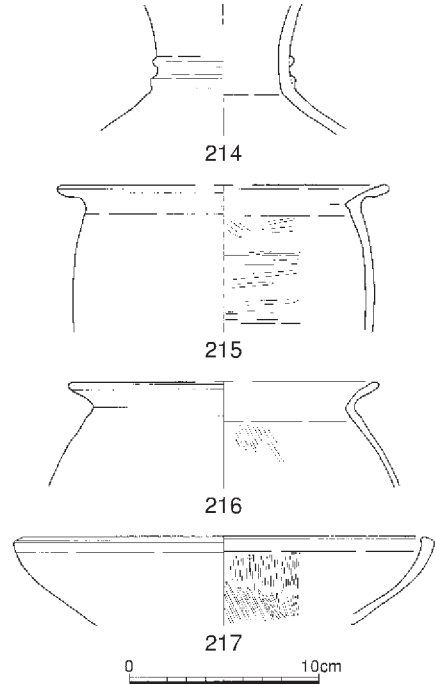
土壙42 (第202・272図、図版72・125)

122 Eの北西で、土壙41の南東に接して位置している。円形の土壙の中からは、炭と共に土器・石器が出土した。214は壺で、頸部

には2条の貼付突帯が巡る。215・216の甕は口縁端部を丸くおさめている。弥生時代中期前半。(松尾)



- 1 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒・焼土少含)
- 2 鈍黄褐色砂質土 (10YR5/3)
- 3 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR5/3)  
(炭粒・焼土多含)
- 4 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)  
(炭粒土塊含)
- 5 褐色弱粘性砂質土 (10YR4/4)  
(炭粒・焼土少含)
- 6 鈍黄褐色粘質土 (10YR5/4)
- 7 黒褐色粘性砂質土 (10YR3/2)  
(炭粒多含)
- 8 黒褐色粘性砂質土 (10YR3/2)  
(炭粒少含)



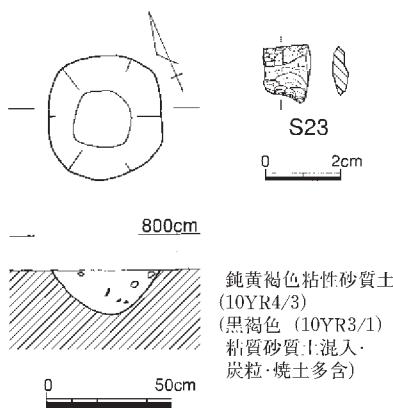
第272図 土壌42 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

土壌43 (第202・273図)

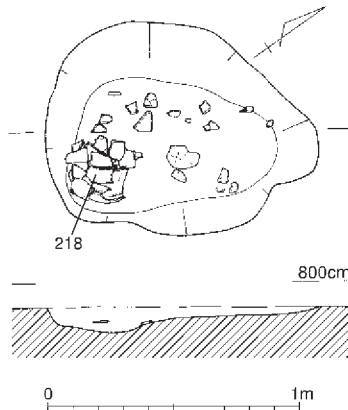
122Eの北西、土壌41・42の東に位置する。平面形は円形で、断面形は楕円形を呈し、埋土には炭粒および焼土が多く含まれていた。出土遺物は土器の破片と、S23のみ。詳細な時期は不明であるが、周囲の状況等から、弥生時代中期前半にはおさまるものと思われる。(松尾)

土壌44 (第202・274図、図版72)

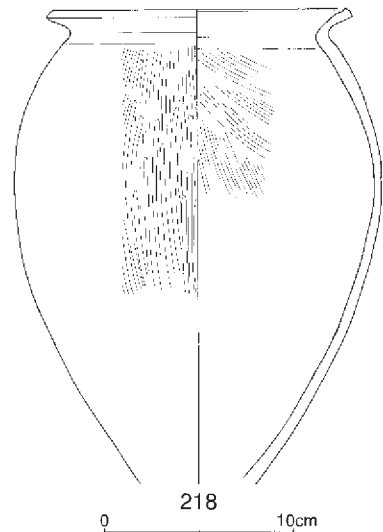
122Eの北部中央に位置する。平面形は長軸が1.08mを測る不整楕円形で、断面形は北東側が浅い逆台形を呈する。出土遺物は土器のみで、218の甕が土壌の南寄りにまとまって出土した以外は、小破片であった。詳細な時期は不明であるが、周囲の状況等から弥生時代中期前半であると思われる。(松尾)



- 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(黒褐色 (10YR3/1)  
粘質砂質土混入・  
炭粒・焼土多含)

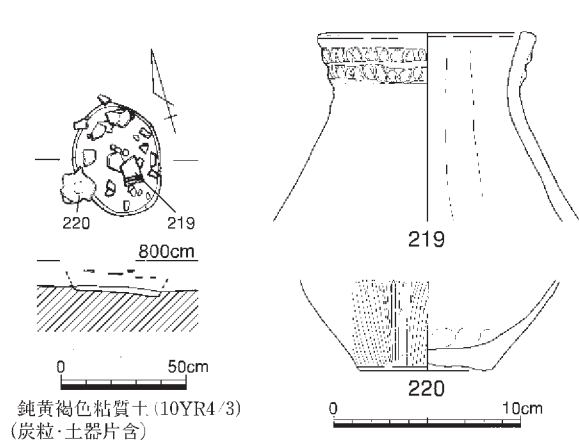


- 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2)  
(炭粒・土器片含)



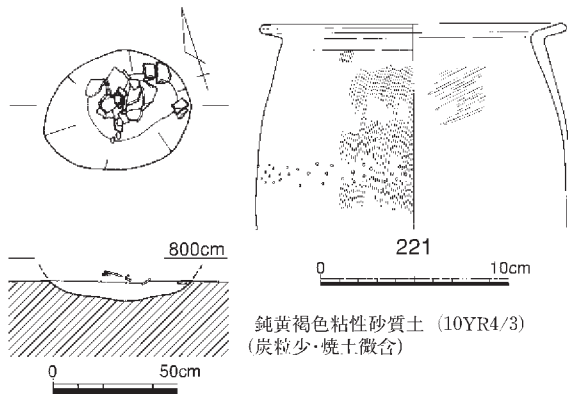
第273図 土壌43 (1/30)  
・出土遺物 (1/2)

第274図 土壌44 (1/30)・出土遺物 (1/4)



鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3)  
(炭粒・土器片含)

第275図 土壌45 (1/30)・出土遺物 (1/4)



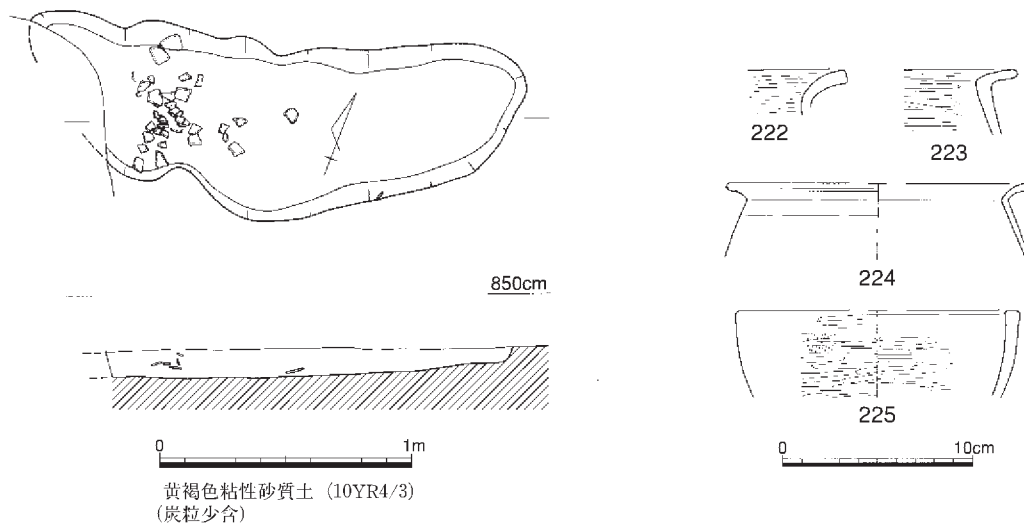
鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒少・焼土微含)

第276図 土壌46 (1/30)・出土遺物 (1/4)

の口縁内面には横方向のミガキが観察できる。土器の諸特徴から弥生時代中期前葉。 (松尾)

**土壌48** (第203・278図、図版74)

124 Cの南端に位置し、北部の一端を後世の遺構に、西側を後述の土壌49に切られている。平面形



黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒少含)

第277図 土壌47 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壌45** (第202・275図、図版73)

122 Eの北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸は44cm、短軸は35cmを測る。遺物は検出面よりもレベル的に高い位置で出土している。219・220は壺で、219は口縁部に指頭圧痕文突帯が2条巡る。

時期は219・220の土器の諸特徴と周辺の状況から、弥生時代中期前半であろう。(松尾)

**土壌46** (第202・276図、図版73)

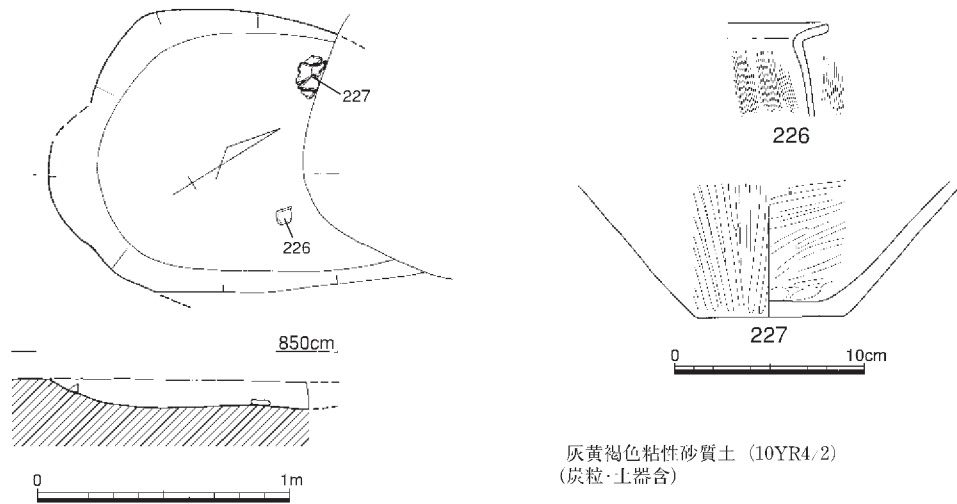
122 Eの北東に位置する平面形が楕円形の土壌である。長軸は60cm、短軸は47cmを測る。

断面形は逆台形を呈すると思われる。出土した遺物は221などの土器が主である。これらの土器は、検出面よりもレベル的に高い位置から出土している。221の甕は、口縁端部を丸くおさめ、胴部に刺突文を巡らす。弥生時代中期前半。 (松尾)

**土壌47** (第203・277図、図版73)

122 Cと124 Cの境中央に位置する。平面形は長楕円形を呈し、短軸は68cmを測る。

出土遺物は土壌の西半分から多く出土し、222~225などの土器がある。222・223

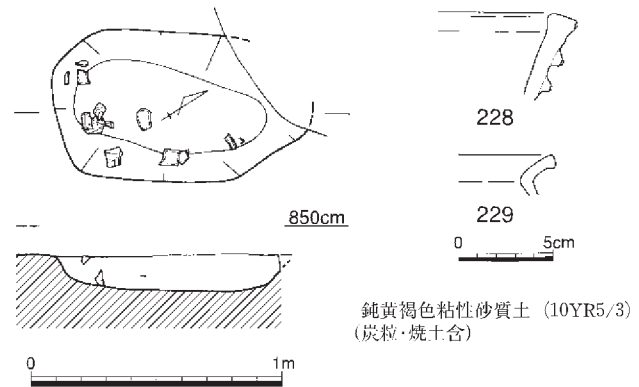


第278図 土壙48 (1/30)・出土遺物 (1/4)

は不整楕円形であると思われる。断面形も北側が不明であるが、緩やかに落ち込み、底面が比較的平坦な形状を呈している。226・227の土器が出土しており、弥生時代中期前半と思われる。(松尾)

**土壙49** (第203・279図、図版74)

124Cの南端で先述の土壙48を切っていた。北端は後世の遺構により攪乱を受けている。平面形は不整楕円形を呈し、およそ1.02m、短軸は58cmを測る。断面



第279図 土壙49 (1/30)・出土遺物 (1/4)

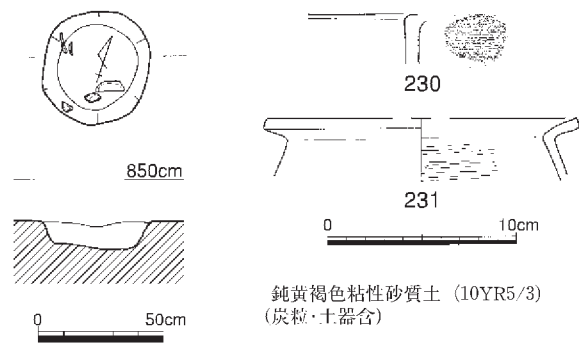
形は逆台形である。出土遺物は228・229などの土器が中心であり、破片が多い。228の口縁には刻み目を施した断面三角形の貼付突帯が巡る。土器の諸特徴から、弥生時代中期前半と思われる。(松尾)

**土壙50** (第203・280図、図版74)

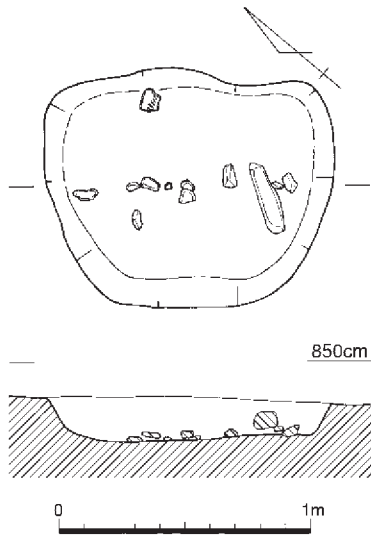
124Gの西側やや北よりに位置する。平面形は円形で、直径が約40cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からやや凹凸のある底面までの深さは10cm程度。出土遺物は少なく、230・231などの土器は破片が多い。230の甕は胴部上半に櫛描直線文が巡る。土器の諸特徴から、弥生時代中期前半と思われる。(松尾)

**土壙51** (第203・281図、図版75)

124Gの中央付近で検出した。平面形は不整方形を呈し、長軸は1.13m、短軸は95cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土の底面近くには、自然石が散在していた。出土遺物は232~234の土器があり、小破片が多い。232の無頸壺は口縁端部を肥厚させ



第280図 土壙50 (1/30)・出土遺物 (1/4)

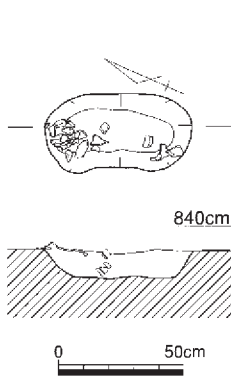


第281図 土壙51 (1/30)・出土遺物 (1/4)

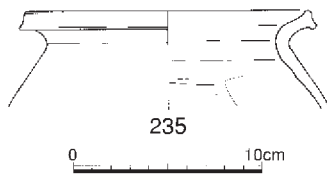
が多く、位置も土壙のやや北よりにまとまっている。土器の諸特徴から弥生時代後期中頃か。(松尾)

土壙53 (第204・283図)

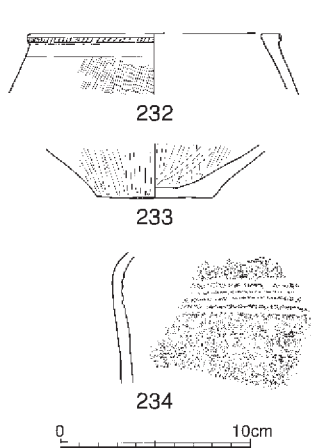
140O南端に位置する。楕円形の土壙で、検出面で最大径95cmを測る。断面形は椀形で、底面標高は7.59m、検出面からの深さは最大36cmを測る。埋土は基盤層より暗く炭化物を含む。遺物は土器



暗褐色粘質土 (10YR3/2)  
(2mm内外砂粒少含)



第282図 土壙52 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)



黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒・焼土含)

第283図 土壙53 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

た水平の面をもち、端部には刻み目を巡らす。234は前期の甕で、混入の可能性はある。弥生時代中期前半。(松尾)

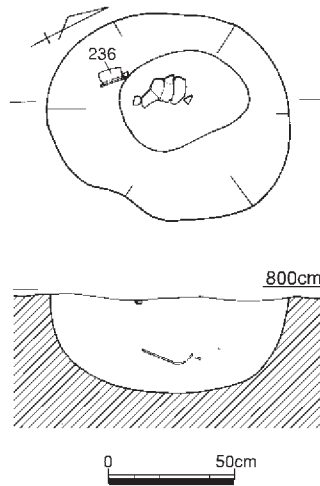
土壙52 (第203・282図、図版75)

126Gの中央やや東寄り、後述の窪地1の埋土を掘り込んでいた。平面形は楕円形を呈し、長軸59cm、短軸30cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは12cmであった。出土した遺物は235などの土器で、小破片

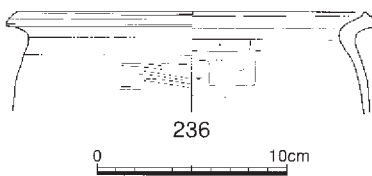
片で、検出面から深さ15~25cmまでに出土した。出土状況で図示したのがほぼ全ての土器である。出土遺物から、この土壙は弥生時代後期中葉に埋没したのであろう。(氏平)

土壙54 (第204・284図、図版76)

140Oに位置する楕円形の土壙で、窪地3に切られている。底面は検出が難しかったがほぼ水平である。底面の標高は7.58m、検出面からの深さは12cmを測る。遺物は土器で少量である。図示したのはいずれも橙色系の色調を呈する壺片で、237は口縁端面を斜



鈍黄褐色粘質細砂 (10YR4/3)  
(炭粒・土塊多含)

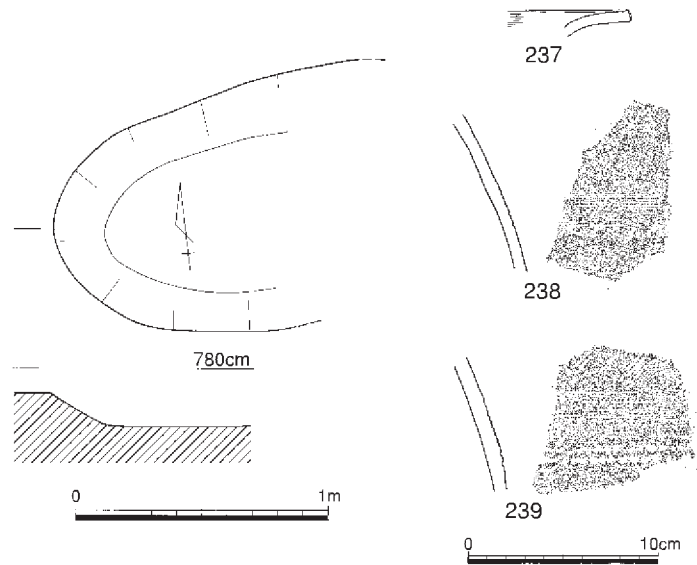


めの刻み目が巡る。出土土器は弥生中期前葉の時期を示す。(氏平)

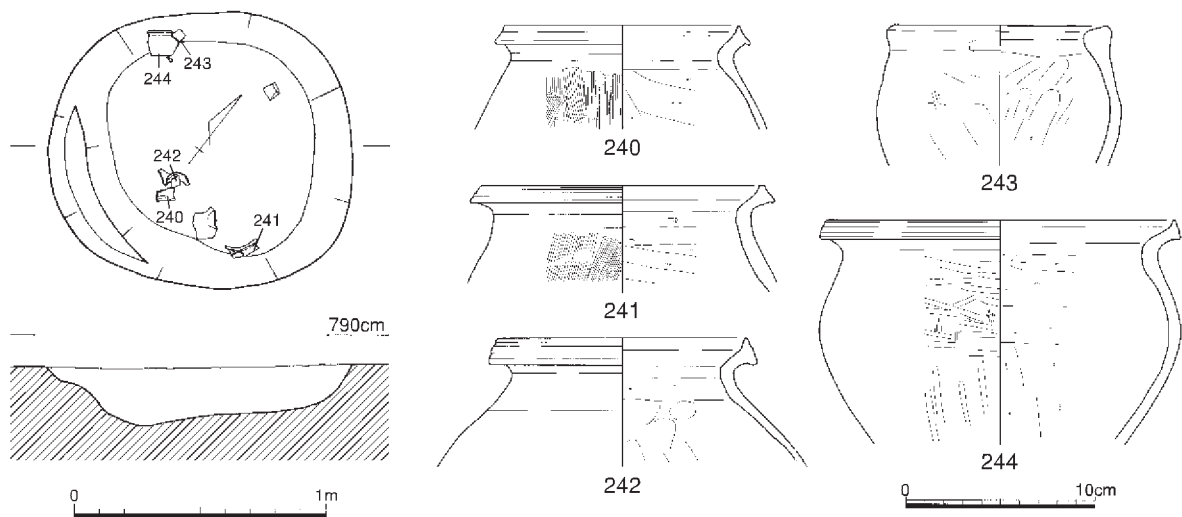
**土壙55** (第204・285図、図版76)

140 Oに位置する円形の土壙である。底面は南側が低い。底面の標高は7.53m、検出面からの深さは最大24cmを測る。埋土は炭・焼土粒を多く含んでいる。遺物は土器で、出土位置は主に5か所に分かれる。いずれも検出面付近に位置し、底面から浮いている。

これら土器は弥生後期中葉の時期を示し、土壙の埋没時期を表している。(氏平)



第284図 土壙54 (1/30)・出土遺物 (1/4)



暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y4/2)  
(炭・焼土粒多含・砂粒含)

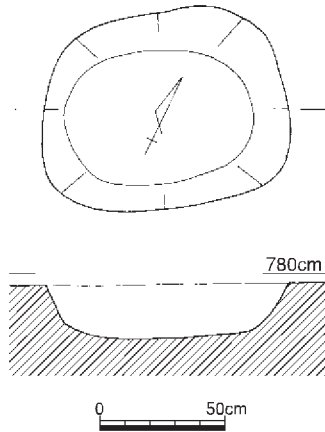
第285図 土壙55 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙56** (第204・286図)

140 Oに位置するやや方形気味の楕円形土壙である。底面の形状はほぼ水平である。底面の標高は7.55m、検出面からの深さは最大20cmを測る。埋土は地山に似るが炭・焼土粒を含んでいる。遺物は土器で、量は少ないが弥生時代中期後葉のものが多く、遺構もその時期に埋没したのであろう。(氏平)

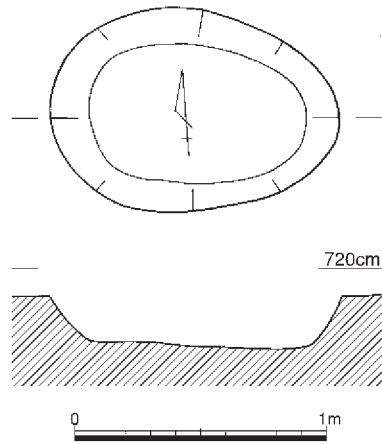
**土壙57** (第204・287図、図版76)

140 Oに位置する楕円形の土壙。埋土は竪穴住居1と土壙58に切られる。底面形状はほぼ水平である。底面標高は6.88m、検出面からの深さは最大22cmを測る。埋土は地山に似るようだ。遺物は土器で、中期～後期の破片が少量ある。埋没時期は竪穴住居1と土壙58以前ではあるが弥生時代後期か。(氏平)

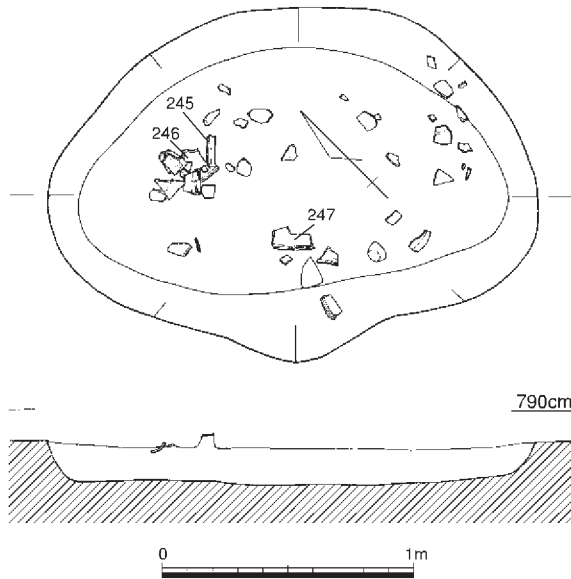


灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)  
(炭・焼土粒含)

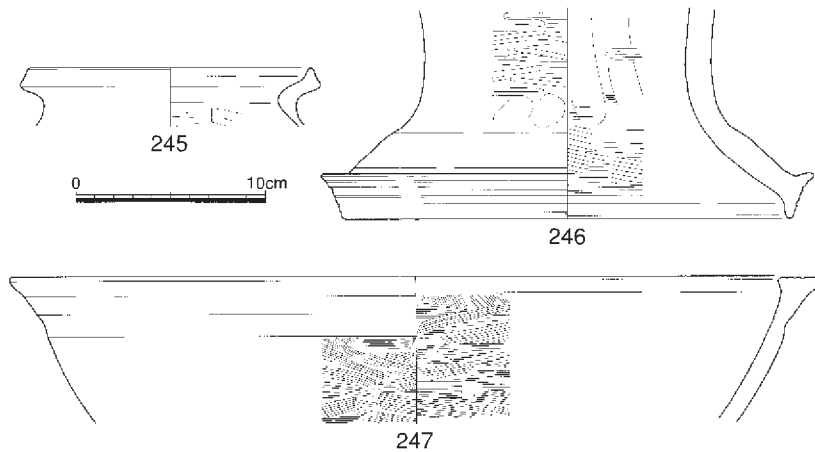
第286図 土壙56 (1/30)



第287図 土壙57 (1/30)



灰黄褐色細砂 (10YR5/2)  
(炭粒少含)



第288図 土壙58 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙58 (第204・288図、図版77)

140Oに位置する楕円形の土壙。土壙57を切る。底面形状はほぼ水平である。底面標高は7.6m、検出面からの深さは最大20cmを測る。埋土は地山に似るが、やや粘質で炭化物を含んでいる。遺物は土器で、いずれも破片である。出土位置は底面からかなり浮いた状態で、土壙検出面付近に集中していた。246・247は2片が接合した物である。遺構の埋没時期は、土器より弥生後期前葉～中葉であろう。(氏平)

土壙59 (第204・289図、写真28、図版77・109)

142O北西に位置する隅丸方形の土壙である。南北の壁面は垂直に落ちるが、東西はほぼ楕円で、東側に1つ段を持つ。底面標高は7.36m、検出面からの深さは最大40cm、土器上面から底面までは50cmを測る。埋土は土器と10～30cm大の円礫を含む。遺物は土器で、248が完形品で、251がほぼ完形、252が2/3、249、250が半分残っていた。

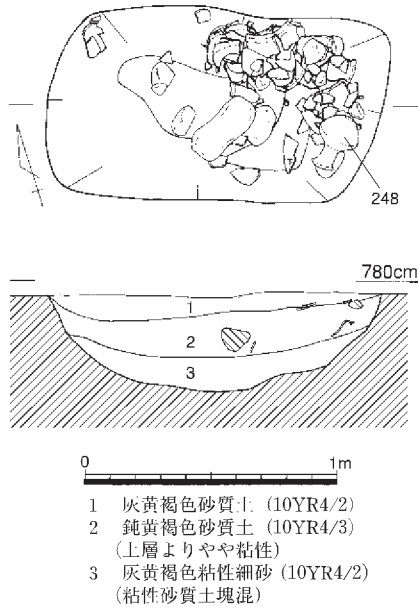
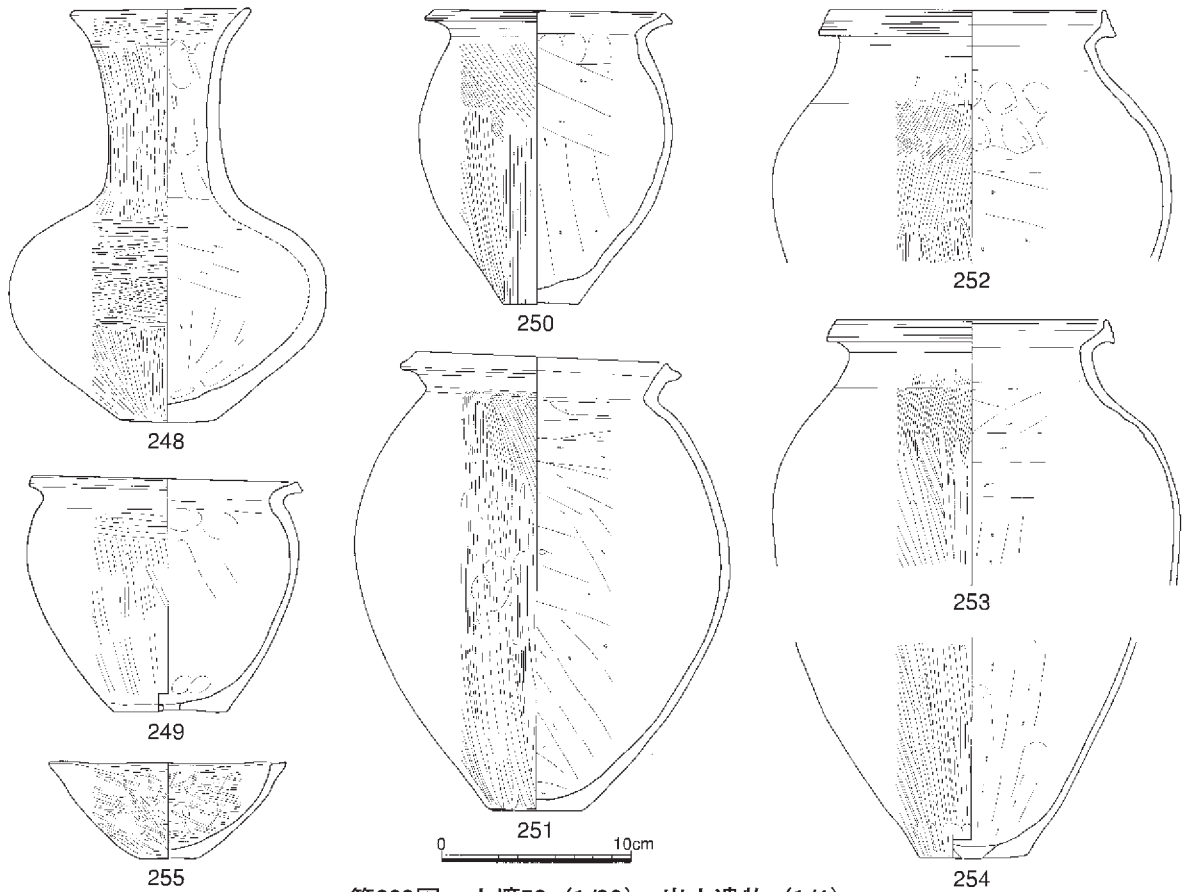


写真28 土壙59 調査風景 (西から)



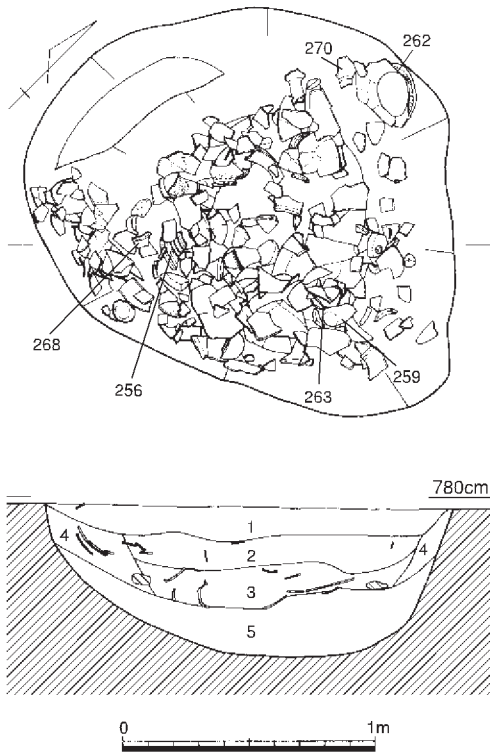
第289図 土壙59 (1/30)・出土遺物 (1/4)

248が最初に検出されたことから、最後に置かれた土器と想定できる。出土位置は第2層までにほとんどの土器が含まれ、平面では北東側に集中していた。遺構の埋没時期は弥生後期後葉であろう。(氏平)

土壙60 (第204・290・291図、図版77・78・109)

1400南東に位置する楕円形の土壙である。断面形は全体としてはほぼ腕形で、西側の検出面から

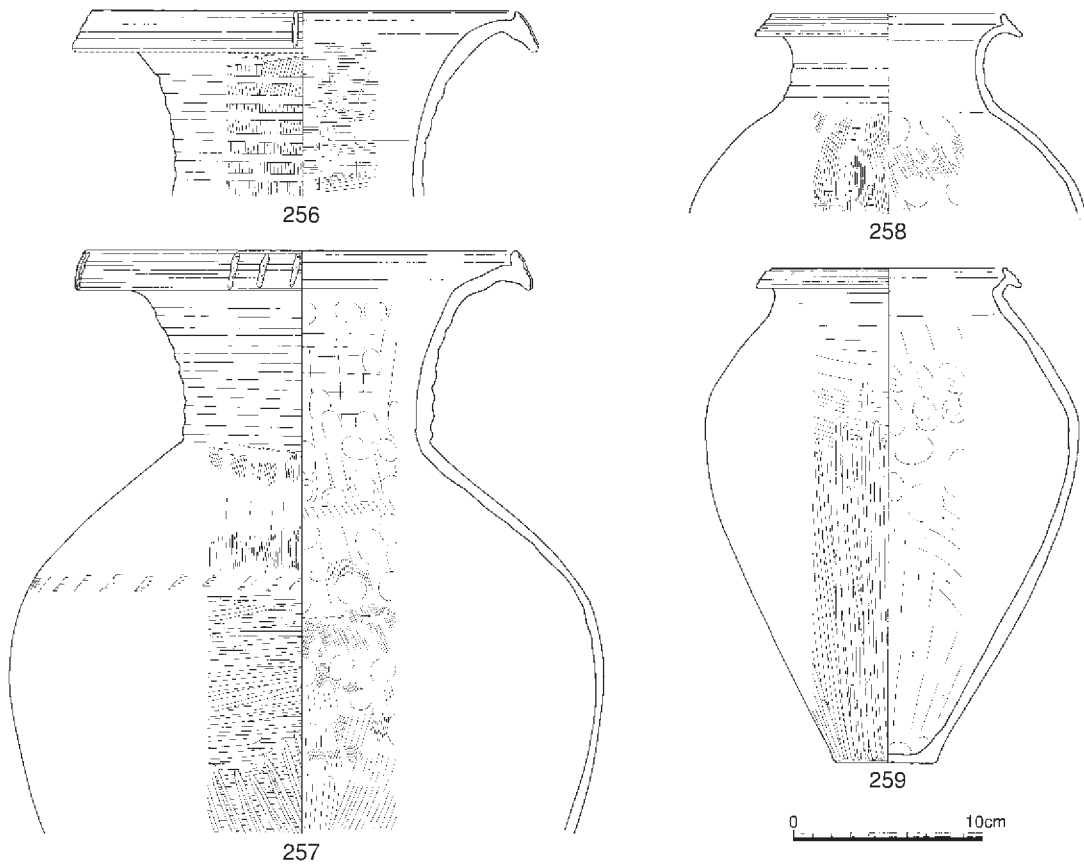




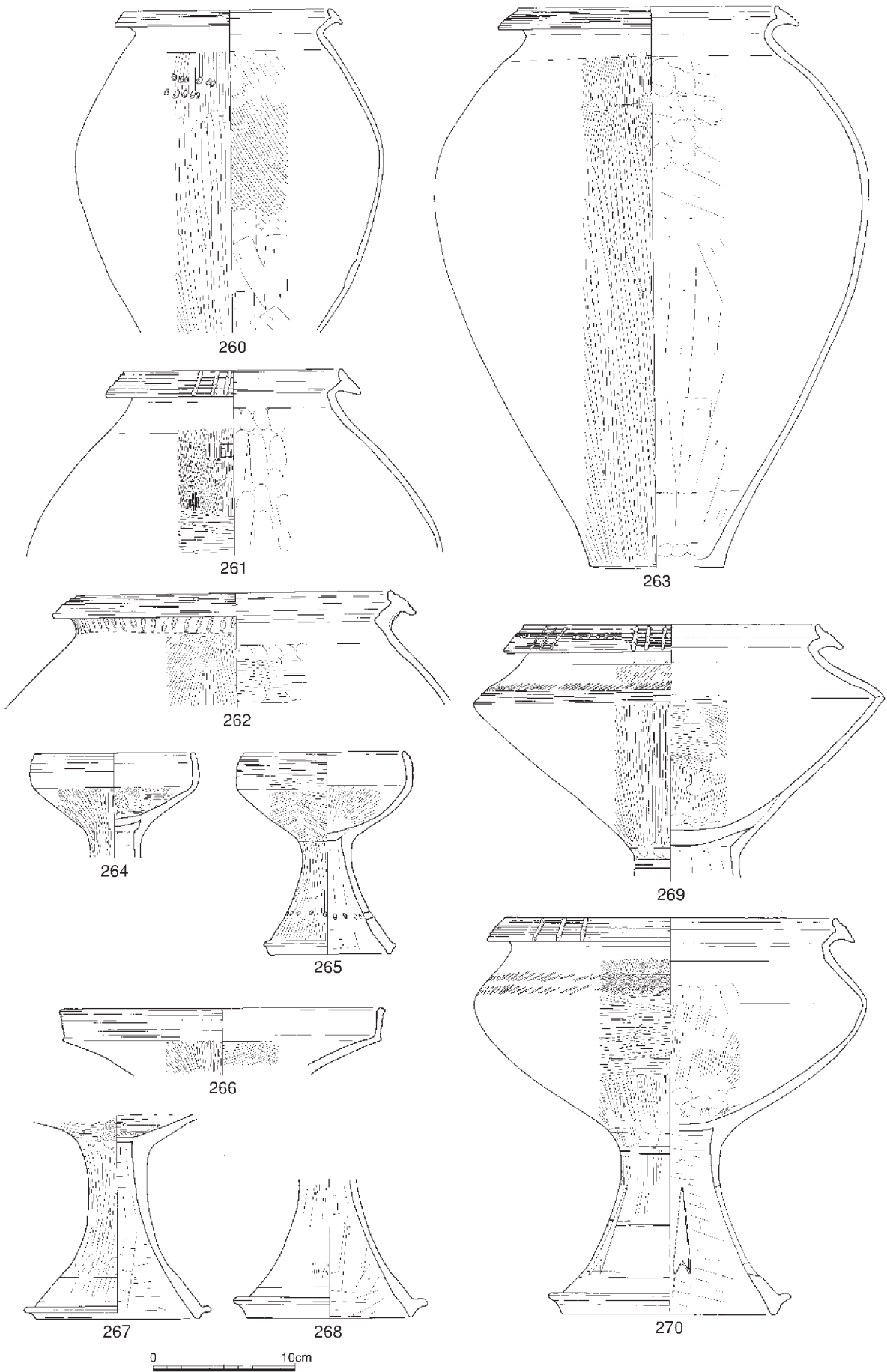
- |                                |                                  |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 褐灰色細砂 (10YR6/1)<br>(炭粒含)     | 3 褐灰色粘質細砂 (10YR4/1)<br>(炭粒・焼土多含) |
| 2 褐灰色細砂 (10YR5/1)<br>(炭粒・焼土多含) | 4 褐灰色細砂 (10YR6/1)<br>(炭粒・焼土多含)   |
|                                | 5 灰黄褐色細砂 (10YR4/2)<br>(炭粒・焼土含)   |

25cm下で段状に傾斜が緩くなる所がある。底面標高は7.16m、検出面からの深さは最大60cmを測る。埋土は、第1層が土壙が完全に埋まった後の堆積土で基盤層に似る。第4層も基盤層に似るが土器片を含む。第2・3層は土器片を多く含み炭・焼土も含んでいる。第5層は上の層に比べ炭・焼土・土器片が減少する。

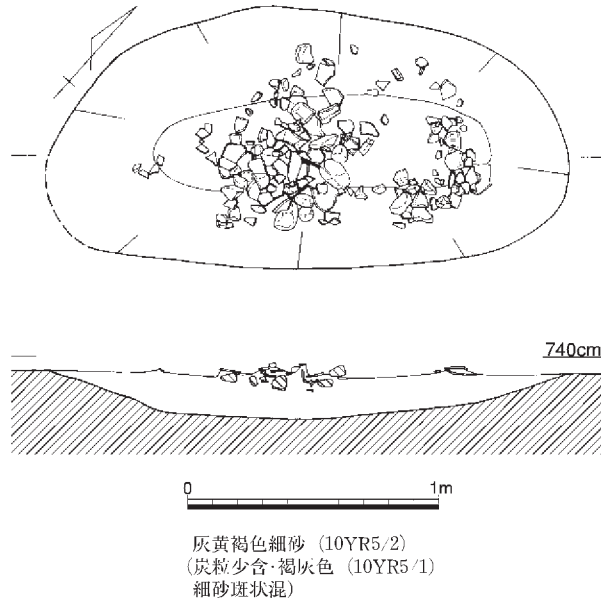
遺物は土器で、周辺から中央へ向かって窪んだ状態で出土した。各土器は密集しているが、土器間には空間が残っていて埋土が堆積していた。検出状況では個体の識別は難しかった。256・258・263・264・265・270は取り上げ時に60cm～1mの範囲内に位置した破片が接合している。265はほぼ完形品だが、それ以外は完形にはならない。260胴部上面の刺突文は上側4つ1単位で2か所、下は1単位で木製工具を用い押圧している。261は赤色顔料が口縁端面に残る。遺構の埋没時期は、土器の示す弥生中期後葉であろう。(氏平)



第290図 土壙60 (1/30)・出土遺物① (1/4)



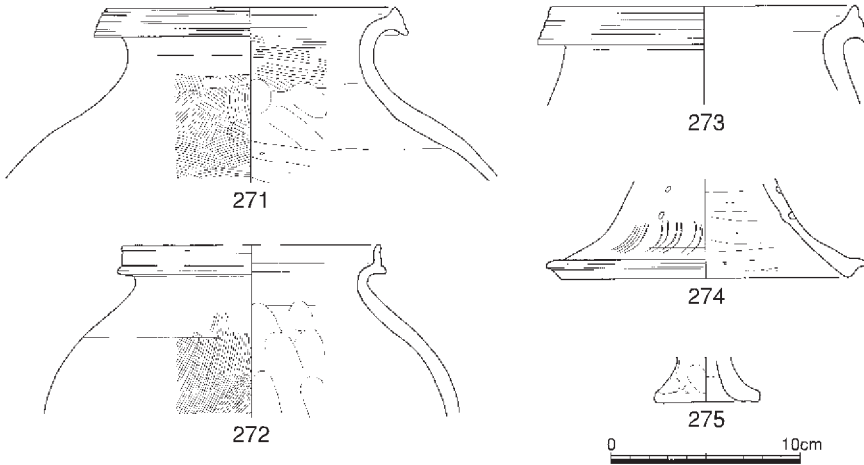
第291図 土壙60出土遺物② (1/4)



**土壌61** (第205・292図、図版78)

148 S 南側に位置する長楕円形の土壌。長径2.16m、短径1.05mを測る。断面形状は皿状である。底面標高は7.15m、遺物上面からの深さは最大22cmを測る。埋土は基盤層に似るが、炭化物を少量含んでいる。遺物は10cm程度の大きさの土器片と円・角礫が混在していた。出土位置は底面から浮いた状態で、標高7.26～7.35mに位置する。275は製塩土器で、内外面にナデを施し被熱は見られない。遺構の埋没時期は、土器より弥生後期後葉であろう。(氏平)

**土壌62** (第205・293図、図版79)

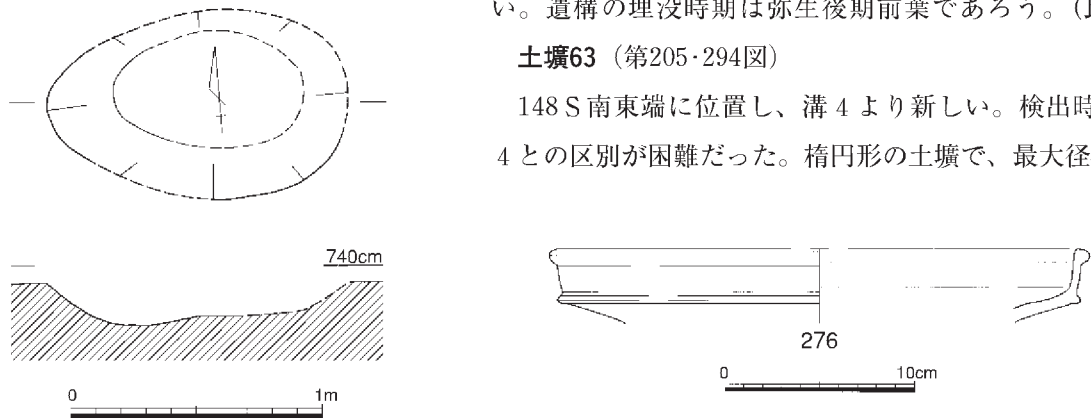


148 S 南側に位置する。暗渠及び側溝で削られて本来の形状がわかりにくい楕円形の土壌であろう。長径約1.2m、短径約75cmを測る。断面形状は皿状である。底面標高は7.17m、検出面からの深さは最大16cmを測る。埋土は基盤層に似る。遺物は土器片が少量存在する。276は磨滅しているが、口縁外面に凹線は見られない。遺構の埋没時期は弥生後期前葉であろう。(氏平)

第292図 土壌61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

する。276は磨滅しているが、口縁外面に凹線は見られない。遺構の埋没時期は弥生後期前葉であろう。(氏平)

**土壌63** (第205・294図)



148 S 南東端に位置し、溝4より新しい。検出時は溝4との区別が困難だった。楕円形の土壌で、最大径87cm

第293図 土壌62 (1/30)・出土遺物 (1/4)

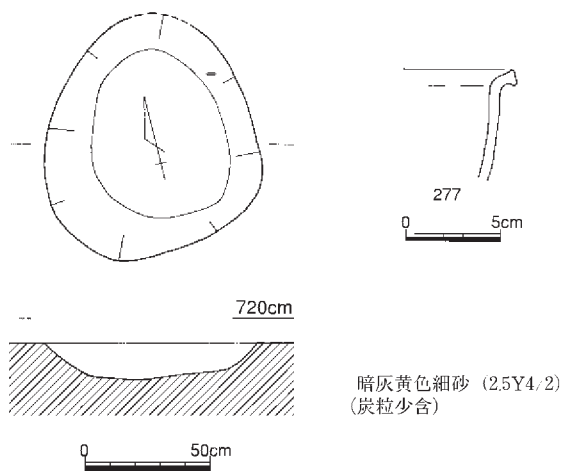
を測る。断面形状は皿状で底面標高は6.98m、検出面からの深さは最大12cmを測る。埋土は基盤層よりやや暗く炭化物を少量含む。遺物は土器片が少量存在する。277は磨滅激しく、外面頸部付近に煤がわずかに残る。遺構の埋没時期は弥生後期中葉であろう。(氏平)

**土壙64** (第205・295図)

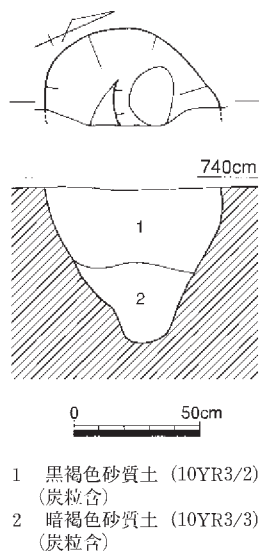
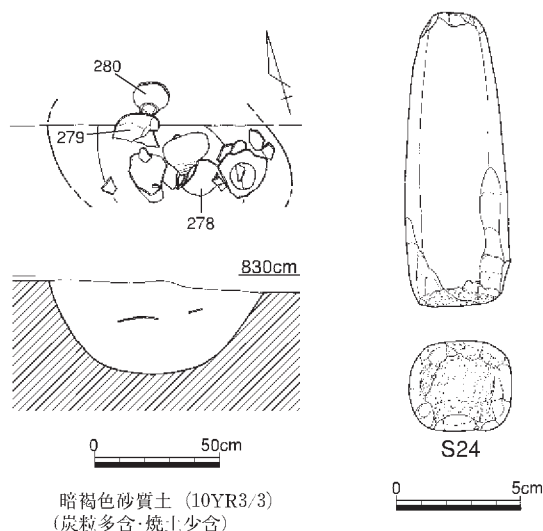
150S南西端に位置する。側溝が東側を切っている。楕円形の土壙で、最大径70cmを測る。断面は漏斗形で底面標高は6.74m、検出面からの深さは最大60cmを測る。埋土は基盤層よりやや暗く炭化物を含む。遺物は中期～後期の土器片が少量存在する。遺構の埋没時期は弥生時代後期であろうか。(氏平)

**土壙65** (第205・296図、図版79・110・127)

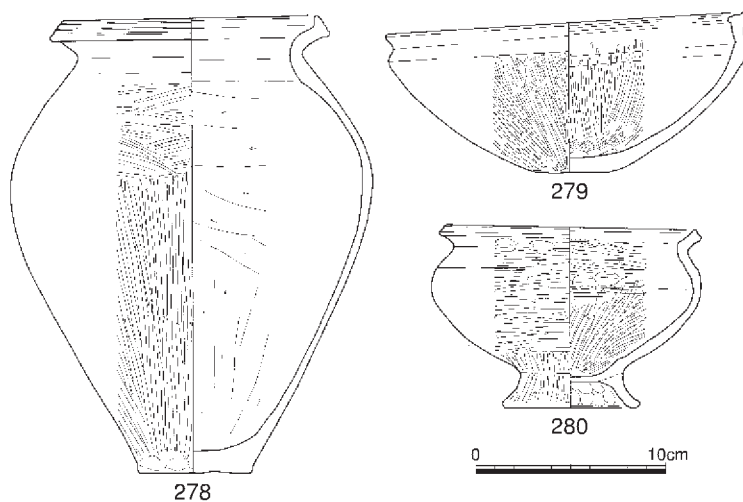
土壙64の北4mから検出された平面楕円形を呈す土壙で、底部はやや窪み、壁は緩く立ち上がる。残存する規模は長さ87cm、深さ37cmを測る。埋土は炭粒・焼土粒が混じる暗褐色砂質土であった。遺物は甕278・鉢279・台付鉢280、敲石S24など、いずれも完形あるいはそれに近く、それらが反転および横転した状態で出土している。後期前葉に埋められたものであろう。(江見)



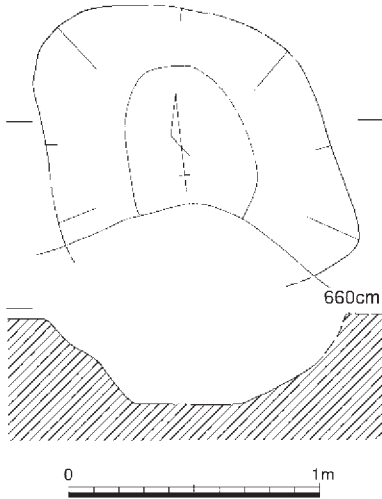
第294図 土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4)



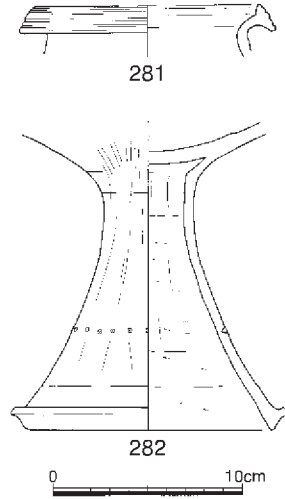
第295図 土壙64 (1/30)



第296図 土壙65 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)



第297図 土壇66 (1/30)・出土遺物 (1/4)



土壇66 (第205・297図)

150S南西端に位置する。南端は調査区境のため明瞭にできなかった。平面は隅丸方形の土壇で、最大長約1.2m、最大幅約1.1mを測る。断面は漏斗状で底面標高は6.22m、深さは30cm以上である。埋土は基盤層より褐色が強く炭化物を少量含む。遺物は土器片が存在する。281は口縁端面に凹線を4条施す。282は脚部が1/3残った破片で、磨滅が著しい。外面脚端上部には装飾

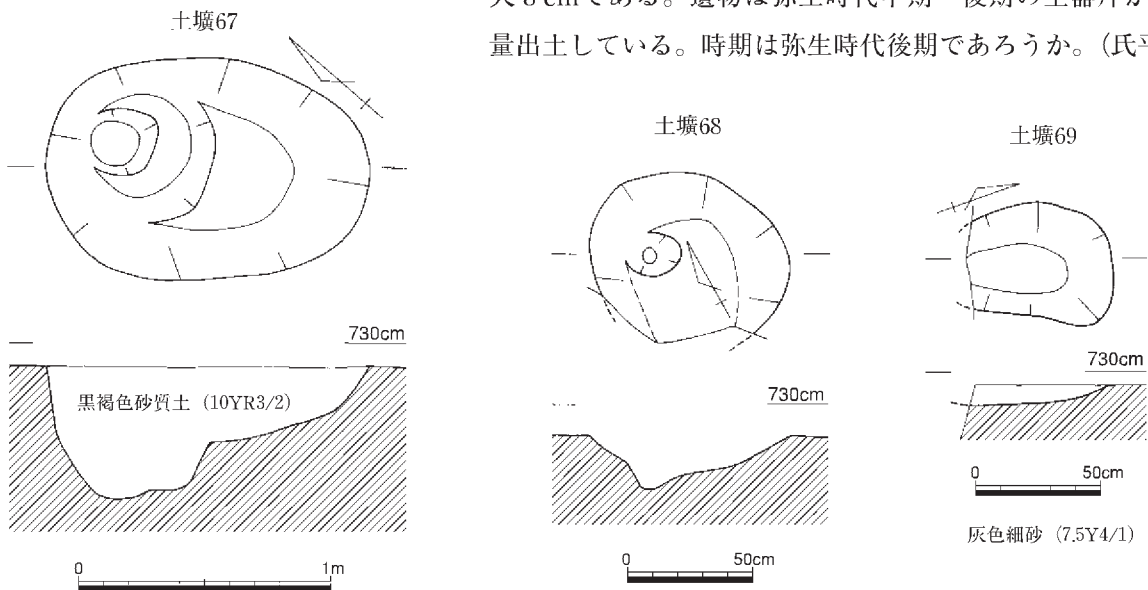
的なヨコナデを1条加える。遺物は弥生中期後葉を示し、遺構の埋没時期も同じであろう。(氏平)

土壇67～69 (第205・298図)

土壇67は150S南西側に位置する楕円形の土壇で、検出面で最大長1.28m、最大幅89cmを測る。断面は北側が1段下がる形で底面標高は6.68m、深さは最大52cmである。遺物は弥生時代中期後葉の高杯や後期中葉の壺・甕片を含んでいる。この遺構の時期は弥生時代後期中葉であろう。

土壇68は150S南側に位置する土壇で、竪穴住居3を切り、調査区南端に接する。調査区南壁の観察ではさらに南側へ広がり、検出面で最大長90cm以上になるだろう。断面は漏斗形で底面標高は6.96m、深さは最大22cmである。埋土は基盤層より若干暗く、炭化物を含む。遺物は弥生時代中期～後期の土器片が少量出土し、この遺構は弥生時代後期に属する可能性が高い。

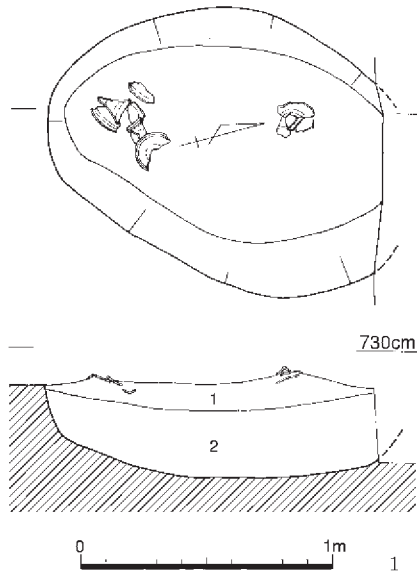
土壇69は150S北側に位置する土壇で、南側が側溝で切られる。検出面で最大長約65cm、最大幅46cmを測る。断面は皿形で底面標高は7.16m、深さは最大8cmである。遺物は弥生時代中期～後期の土器片が少量出土している。時期は弥生時代後期であろうか。(氏平)



第298図 土壇67～69 (1/30)

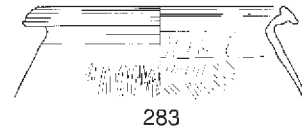
土壌70 (第206・299図、図版79)

150 Sの北東部から検出された平面不整楕円形を呈す土壌である。底部はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がる。規模は1.5×1.1m、深さ40cmを測る。埋土

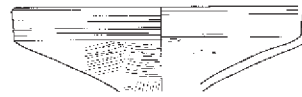


- 1 鈍黄褐色砂質土 (10YR4/3)  
(炭粒含)
- 2 暗褐色砂質土 (10YR3/4)

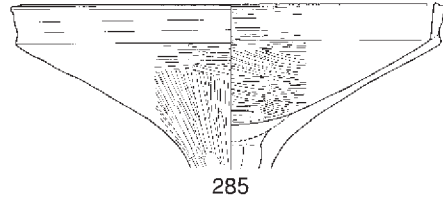
第299図 土壌70 (1/30)・出土遺物 (1/4)



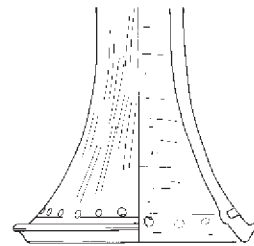
283



284



285



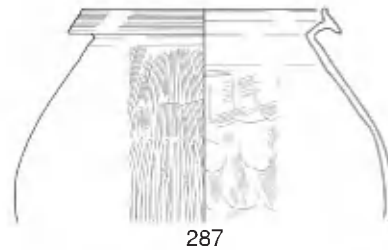
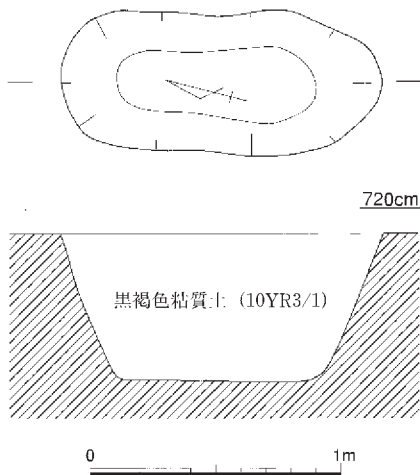
286

0 10cm

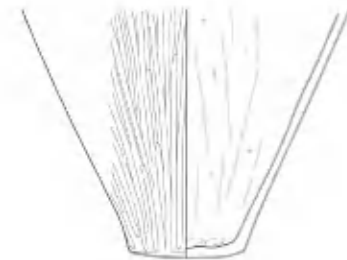
は2層からなり、遺物は土壌上部に流れ込むような状態で、甕283・高杯284~286が出土している。中期後葉に埋没したものであろう。(江見)

土壌71 (第206・300図)

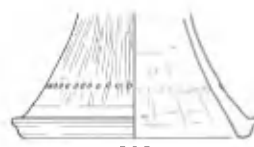
土壌70の南数mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部は平坦で壁は比較的急に立ち



287



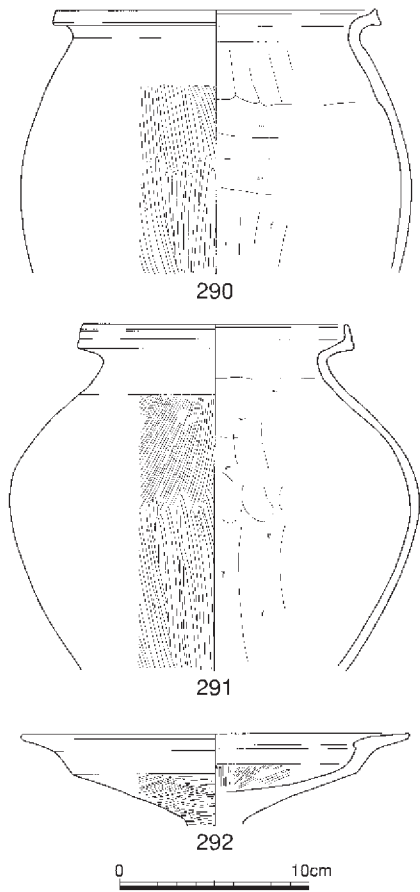
288



289

0 10cm

第300図 土壌71 (1/30)・出土遺物 (1/4)

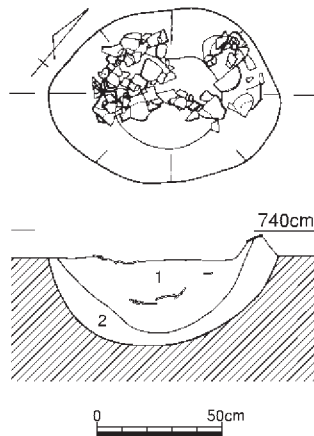


第301図 土壙72 (1/30)・出土遺物 (1/4)

上がる。規模は1.26m×55cm、深さ58cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、これに混じって甕287・288・高杯289などが出土している。土器の特徴から中期後葉に埋没した土壙であろう。(江見)

土壙72 (第206・301図、図版80)

土壙71の北東数mから検出された平面楕円形を呈す土壙である。底部は窪み、壁は緩く立ち上がる。規模は93×70cm、深さ34cmを測る。埋土は2層からなり、遺物は上層の黒褐色粘質土に混じって、甕290・291・高杯292などが土壙中央に落ち込むような状態で出土している。後期前葉に埋没した土壙であろう。(江見)

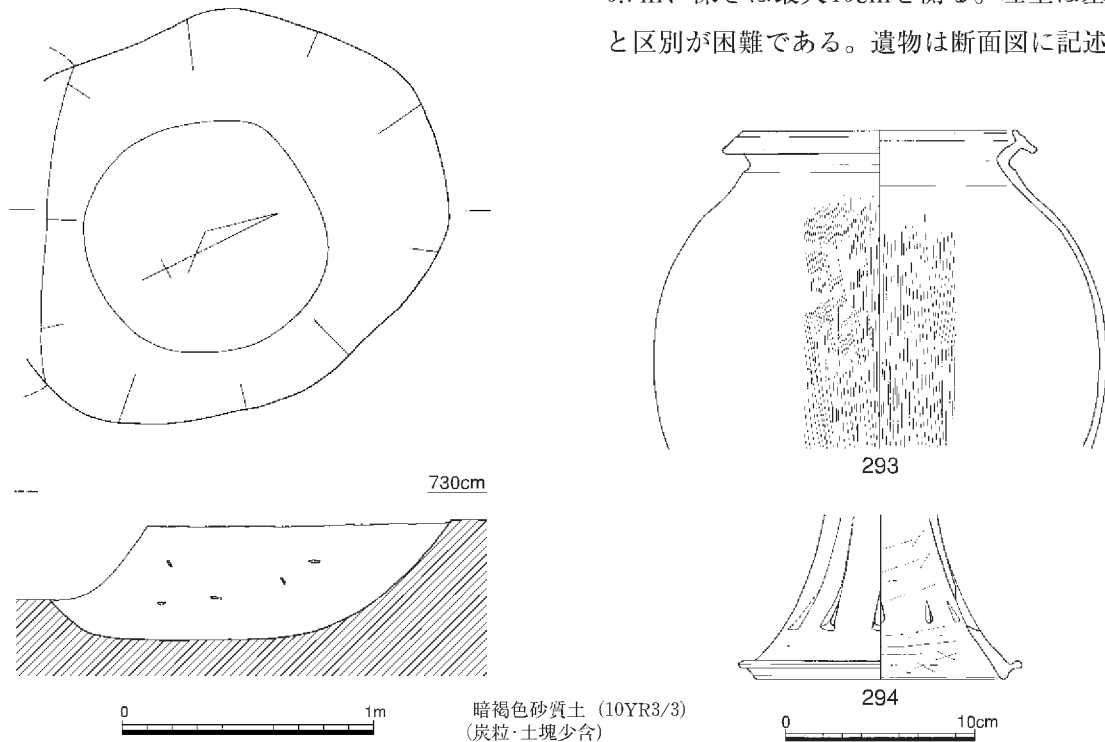


- 1 黒褐色粘質土 (10YR3/2) (炭粒多含)
- 2 鈍黄褐色砂質土 (10YR4/3)

土壙73 (第206・302図、図版80)

土壙73は150 S 南東側に位置し、土壙74に切られる。断面はU字形で底面標高は

6.7m、深さは最大46cmを測る。埋土は基盤層と区別が困難である。遺物は断面図に記述した



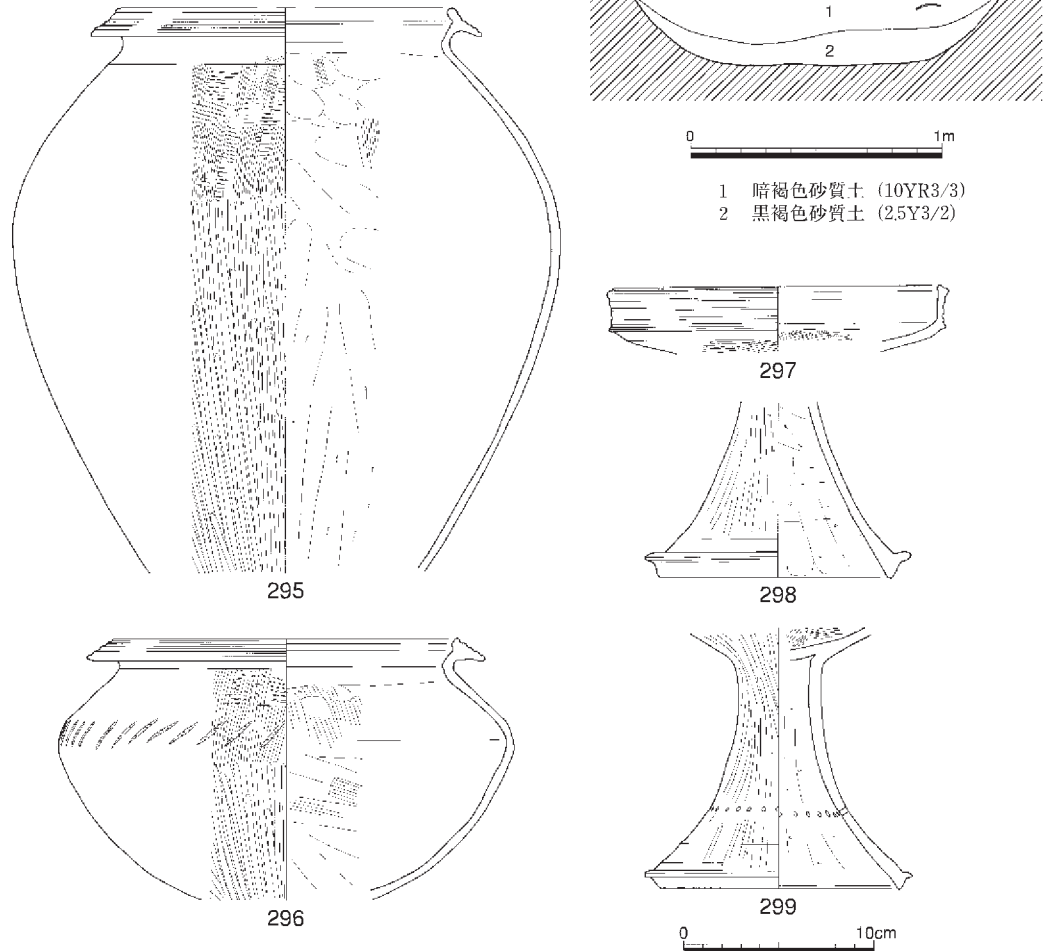
- 暗褐色砂質土 (10YR3/3) (炭粒・土塊少含)

第302図 土壙73 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ように、土器片が少量出土している。293は1/3ほど残り、内面胴部のハケメは強く施される。遺構の埋没時期は弥生時代中期後葉であろう。(氏平)

**土壙74** (第206・303図、図版81)

土壙74は150 S南東側に位置する楕円形の土壙で、土壙73を切る。断面はU字形で底面標高は6.89m、深さは最大30cmである。埋土は基盤層と区別が困難で、



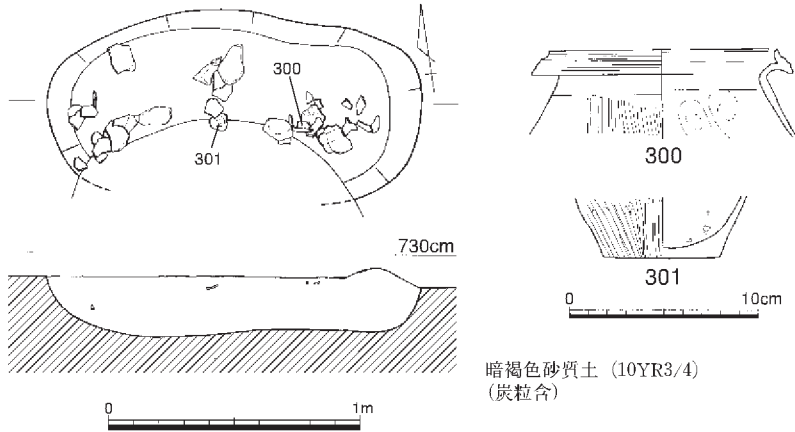
第303図 土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土層の2層はグライ化した部分である。遺物は土器で、295は風化している。296は口縁端面に凹線が4条強く施文される。297は小片で、口縁外面の凹線は深く施文している。299は脚部穿孔は1つ以外貫通、内面もきれいに撫でられる。遺構の埋没時期は出土土器より弥生時代中期後葉であろう。(氏平)

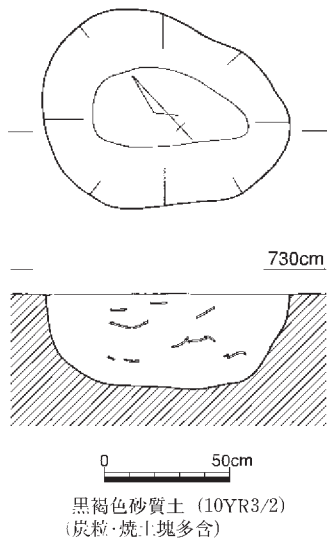
**土壙75** (第206・304図、図版81)

152 Sの東端中央寄りに位置し、土壙74の北方9mから検出された平面楕円形の土壙で、南部分は近世攪乱により削平を受けていた。底部はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がる。規模は1.48m×推定75cm、深さ24cmを測る。埋土は炭粒が混じる明褐色砂質土であった。遺物は土壙上層から投棄された状況を呈し出土している。なお、甕の胴部破片が多く、図示し得たのはわずかに300・301のみであった。

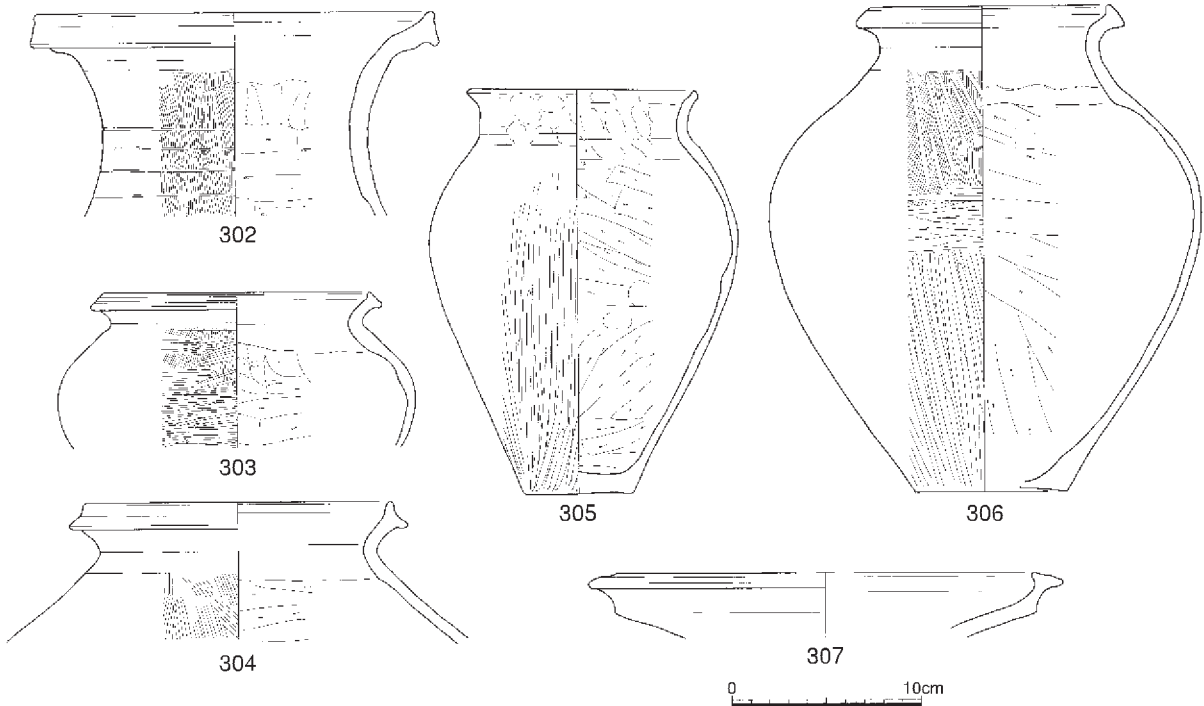




第304図 土壙75 (1/30)・出土遺物 (1/4)



黒褐色砂質土 (10YR3/2)  
(炭粒・焼土塊多含)



第305図 土壙76 (1/30)・出土遺物 (1/4)

後期前葉に埋没した土壙  
であろう。(江見)

土壙76(第206・305図、  
図版81・110)

152 S 南西端に位置  
する楕円形の土壙で、切り  
合い関係では竪穴住居 5  
より新しい。断面形はU  
字形で、底面標高は6.82  
m、検出面からの深さは  
最大38cmを測る。埋土は

基盤層より黒く炭化物を含む。302の外面頸部櫛描沈線はヘラミガ  
キに近い。304は調整・焼成が精良である。305の口縁端面はうねっ  
ていて不整である。胎土に1～2mmの砂粒が多い。出土遺物から、  
この土壙は弥生時代後期前～中葉に埋没したのであろう。この土壙  
については竪穴住居 5 の一部である可能性が調査時に指摘された  
が、土器形状からでも別々かどうかの判断は難しい。(氏平)

土壙77(第206・306図、図版82)

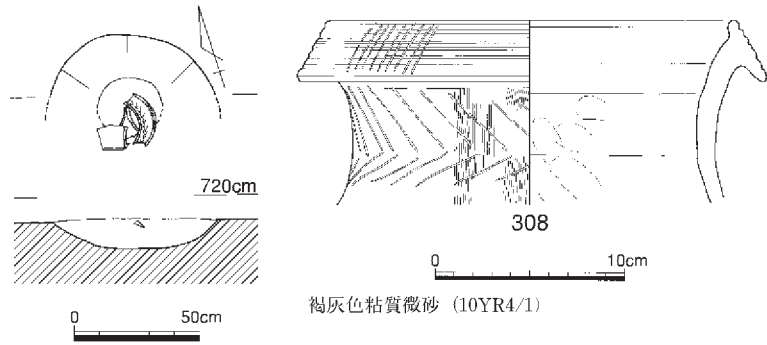
152 S 北側に位置する円形の土壙で、検出面の直径は65cm以上を  
測る。断面形はU字形で、底面標高は6.99m、検出面からの深さは  
最大12cmである。遺物は土器片で、口縁から頸部が2/3残の308が

出土した。時期は弥生中期後葉であろう。(氏平)

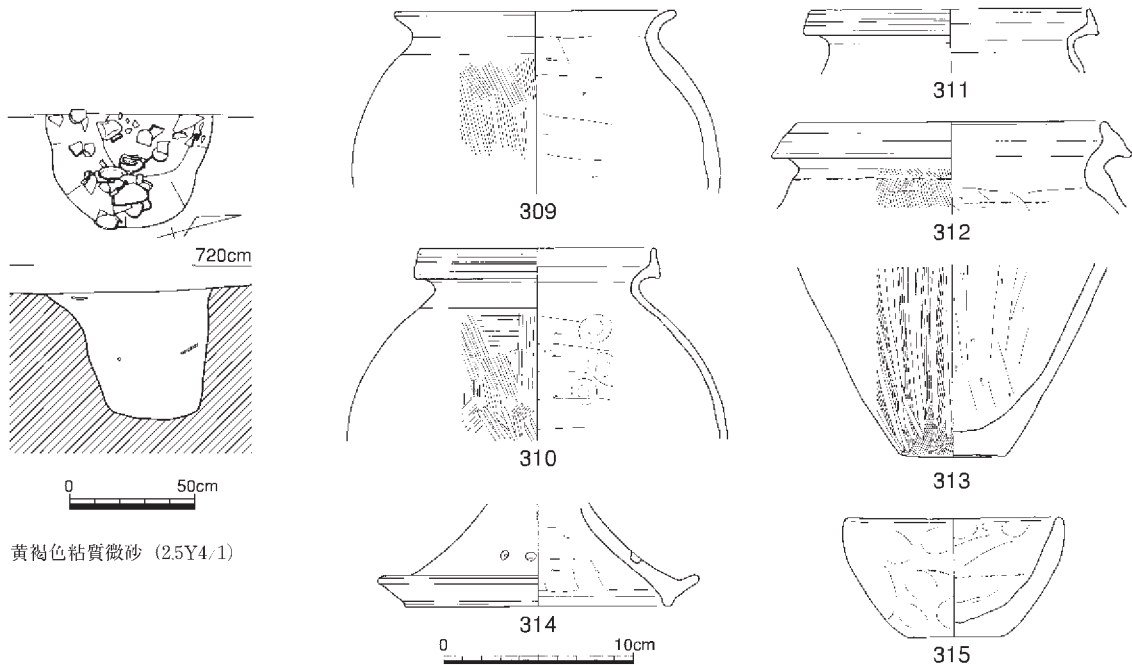
**土壌78** (第206・307図、図版82)

152S北東に位置する楕円形の土壌で、切り合い関係から窪地5より新しい。断面形は全体として逆台形で、底面標高は6.58m、検

出面からの深さは最大52cmを測る。埋土は基盤層より黒く炭化物を含む。遺物は土器片で、検出面から深さ30cmまでで折り重なるように出土した。この土壌の時期は弥生時代後期後葉であろう。(氏平)



第306図 土壌77 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第307図 土壌78 (1/30)・出土遺物 (1/4)

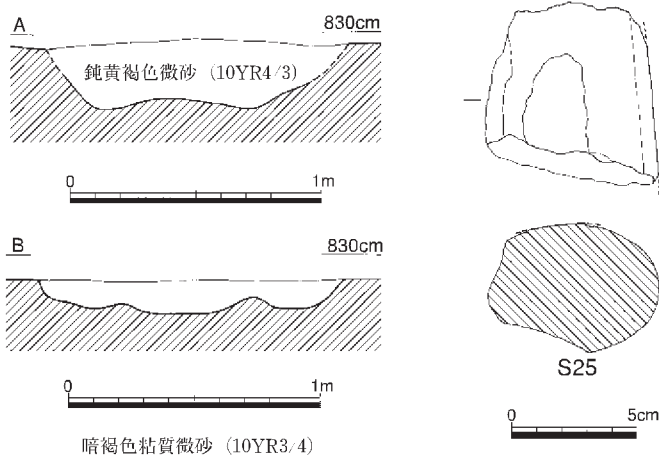
## 5 溝

**溝1** (第200・308図、図版127)

想定される微高地の北西部に位置する溝で、東西方向から北東方向へ向きをかえて延びていく30mを検出した。流走方向は溝底の標高から西から東に流れていたものと考えられる。溝の縁付近にはマンガンの凝縮が確認された。規模は幅約1.2m、深さ10~20cmを測る。底部は凹凸部分や、中央が高くなったりと定まっていたはなかった。埋土は微砂が堆積しており、溝の肩部から磨製石斧片 S25が出土している。他に遺物は皆無であるが、中期に埋没したものと思われる。(江見)

**溝2** (第200・309図)

溝1の南に位置するもので、東西方向に延びる70mを検出した。本来は別々の溝であるが、状況が

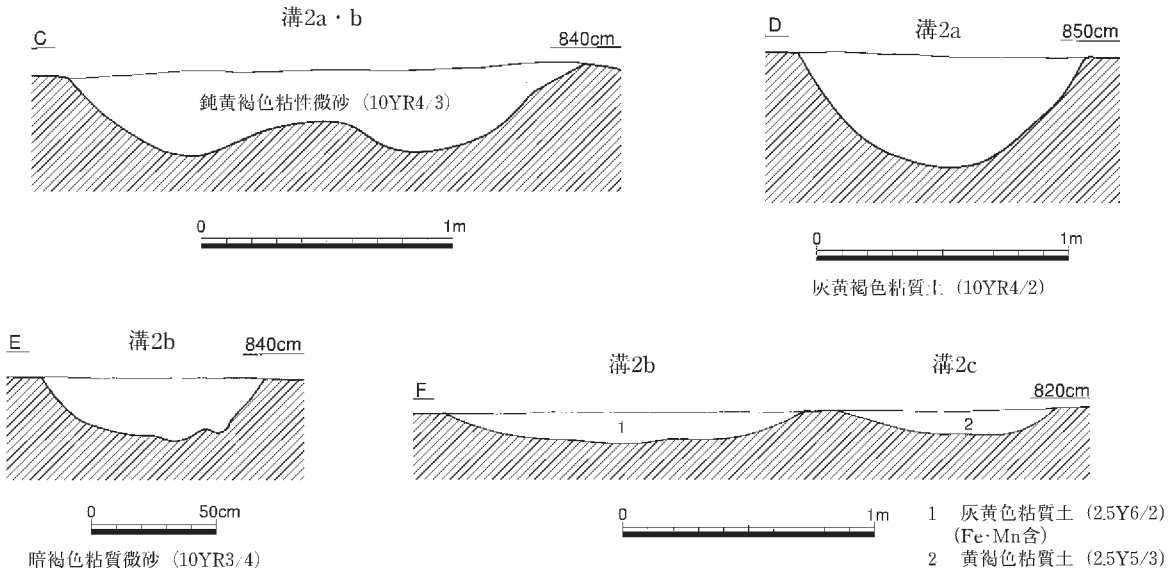


第308図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/3)

同様のため a・b・c として扱った。流走方向は溝底の標高から西から東へ流れていたものと考えられる。規模は 2 a の幅約 1 m、深さ約 45 cm、2 b の幅 90 cm～1.2 m、深さ 25 cm、2 c の幅約 90 cm、深さ約 10 cm を測る。

なお、溝の縁付近は、溝 1 と同様にマンガン粒の凝縮した面が認められた。

遺物は皆無であるが、溝 1 と同



第309図 溝2 a～c (1/30)

様の状況から、中期以降のものであろう。

(江見)

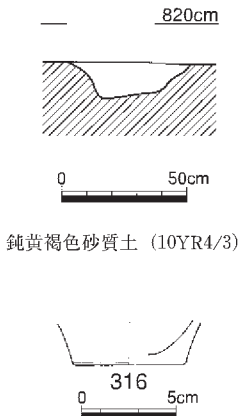
溝 3 (第201・310図)

116 E の中央やや西寄りで見出した、幅 50 cm ・深さ 15 cm の溝で、底面の深さからみると、南から北へ流れるようである。なお、南側については調査区外に延びているため、詳細は不明である。

遺物は少なく、わずかに 316 などの土器片が出土したにすぎない。周辺の遺構の時期や埋土の状態などから、弥生時代中期前半と思われる。(松尾)

溝 4 (第205・311図)

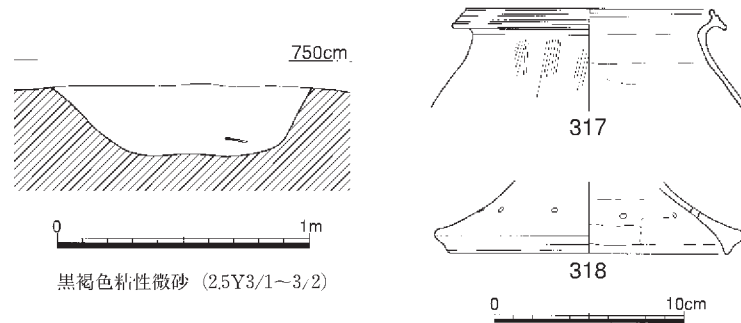
148～150 S にある溝で、北から南へ流れるようだ。平面では南側が溝状で見出したのに対し、北側は幅が広がりたわみに近い状態である。さらに北西端が土壇 63 により切られるため、その部分が不明瞭であった。断面形は逆台形で、底面の標高は 7.13～7.15 m を測る。検出面での幅は、64 cm～



第310図 溝3 (1/30)

・出土遺物 (1/4)

1.06m、深さは20cmであるが、調査区断面では30cm程残っている。埋土は基盤層に対し若干暗い色調である。遺物は土器が少量出土した。時期は318などから弥生時代後期前葉と思われる。(氏平)



第311図 溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 6 窪地

**窪地1** (第203・312・313図、写真29、図版83)

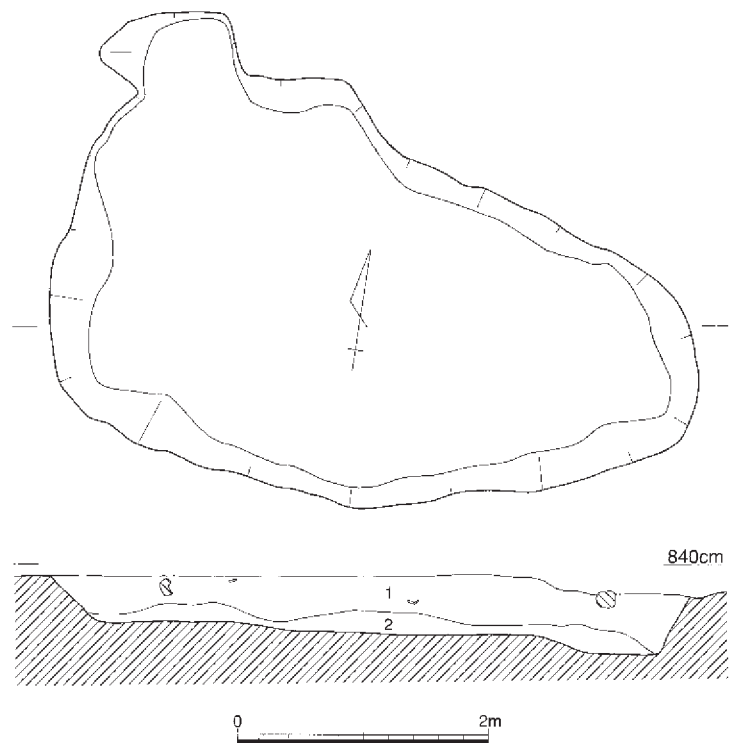
126Gの中央やや東寄りで検出した。平面形が不整形で、底面は凹凸が激しく、埋土中には炭粒が多く含まれていた。長軸約5m、短軸約3.5mを測る。ベースである礫層を掘り込んでおり、状況等から人為的な遺構ではないと判断した。風倒木痕などの可能性が考えられる。

この窪地からは多くの遺物が出土しており、その大半が整理箱3箱程度の土器片であった。

319~325は壺で、322は口縁部内面に貼付突帯で加飾を行っている。326~331は甕。332はジョッキ形の底部。弥生時代中期前半であろう。(松尾)

**窪地2** (第204・314図)

140O南東に位置する窪地で、土壌58に切られる。全体の形状は楕円形で、3×2.5mの範囲に広がる。埋土は周囲の地山に似る褐色細砂であろう。断面は皿状を呈する。底面は7.38mで、深さは検出面から最大34cmを

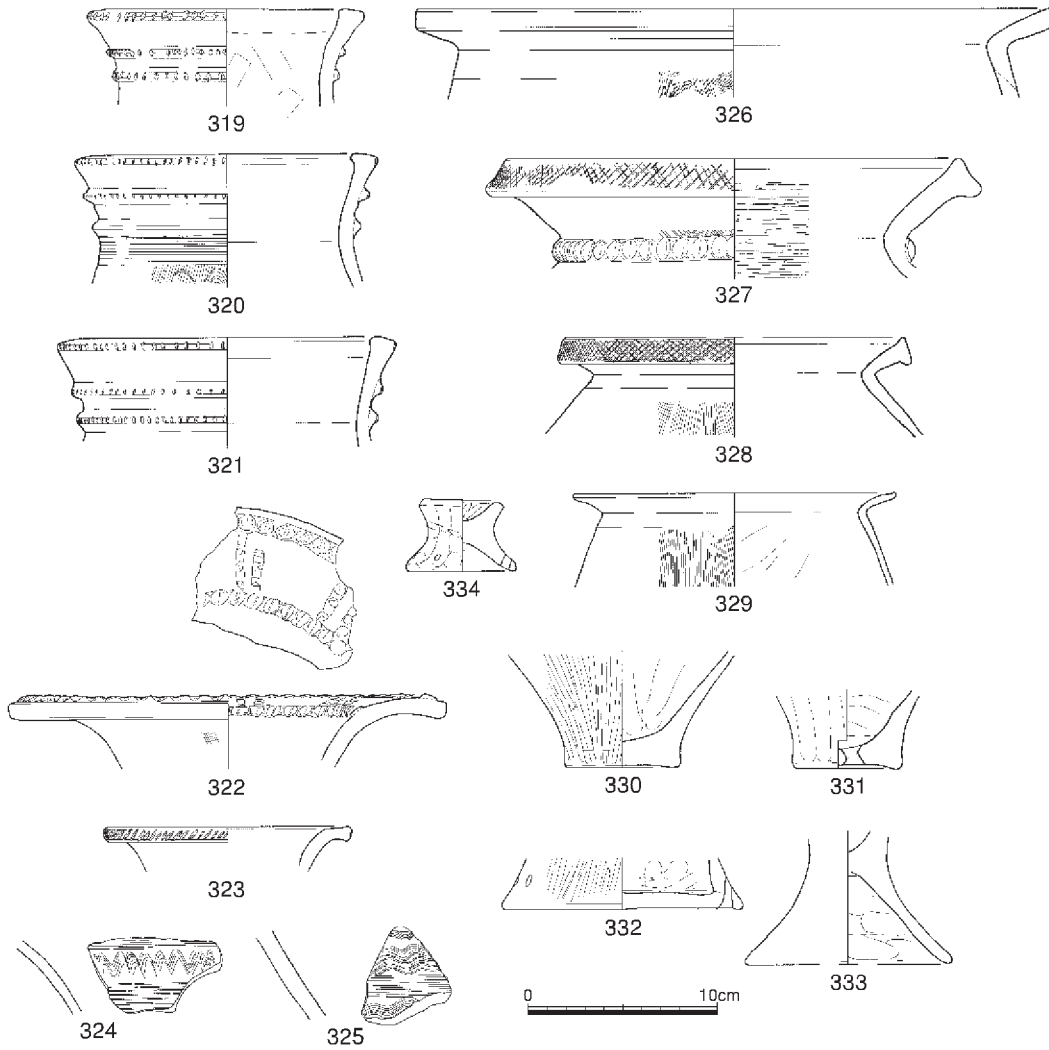


- 1 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) (褐色土塊少含・土器少含)      2 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3) (2~10cm礫多含)

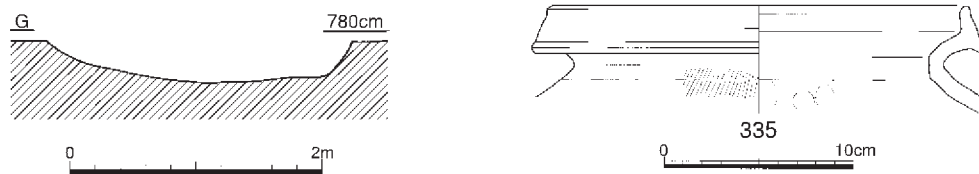
第312図 窪地1 (1/60)



写真29 窪地1 調査風景 (北から)



第313図 窪地1 出土遺物 (1/4)



第314図 窪地2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

測る。出土遺物は土器で、335は口縁部が1/4残存する。残りの土器は小片であり、この遺構は弥生後期後葉に埋没した可能性が高い。(氏平)

窪地3 (第204・315図)

140O~140Nに位置し、土壙54を切る。当調査区の調査最終段階で検出し、埋土は周囲の地山に似る褐色細砂と思われる。全体の形状は楕円形で、3×6mの範囲になる。底面は7.17~7.4mを示し、南西側が最も低い。深さは検出面から最大53cmを測る。出土遺物は土器で、336は全体的に磨滅している。337は口縁~底部が1/2残存する。この他に土器はあまり出土していない。この遺構は337の示す弥生後

期前葉に埋没した可能性が高い。(氏平)

窪地4 (第205・316・317図、写真30、図版78・83・110・125・126)

148S 東部に位置する。北から南へ、端から中央へ向かって皿状に土器が堆積していた。掘り方底面は標高7.00m、土器は北端の最高部が標高7.42m、南端の最低部で7.06mを示す。出土遺物は土器で、整理箱約4箱分に相当する。339内面肩部にはタール状の付着物がある。時期は土器より弥生時代中期後葉である。

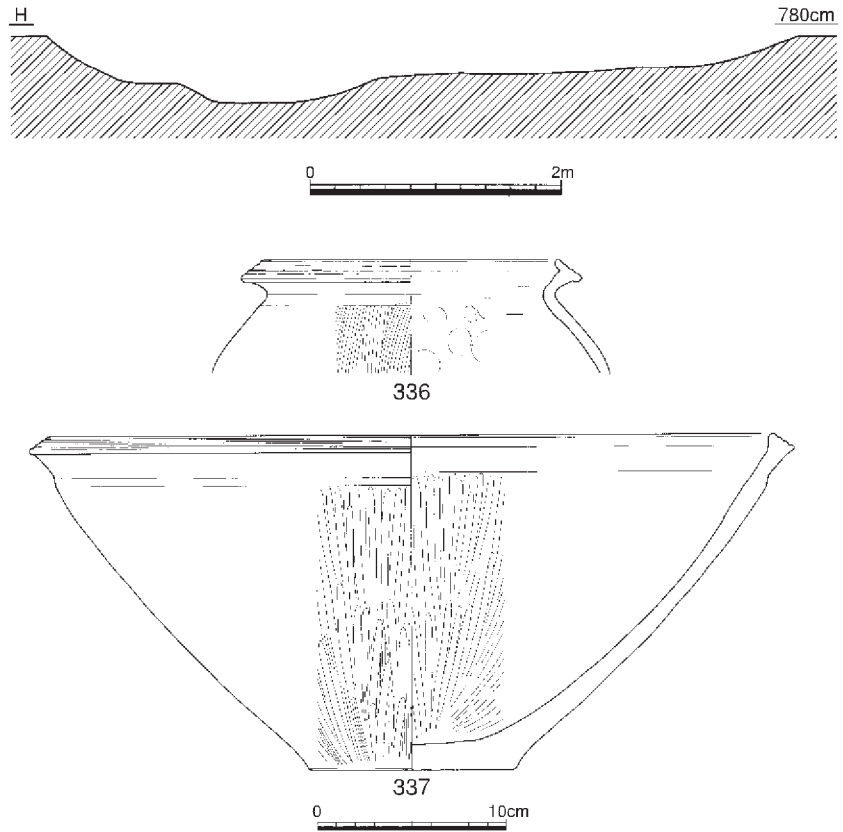
(氏平)

窪地5 (第206・318図、写真31、図版83・110)

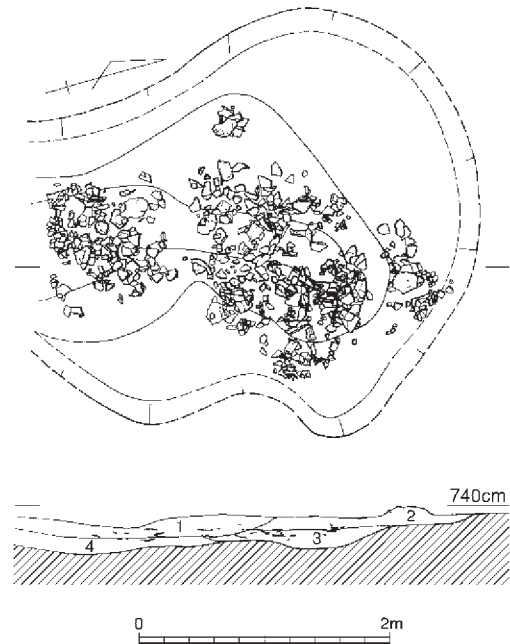
152S 北東に位置し、土壇78に切られる。埋土は基盤層に似るが炭化物を含む。全体の形状は楕円形で、東西5.5×南北2.4m以上の範囲に



写真30 窪地4 調査風景(北西から)

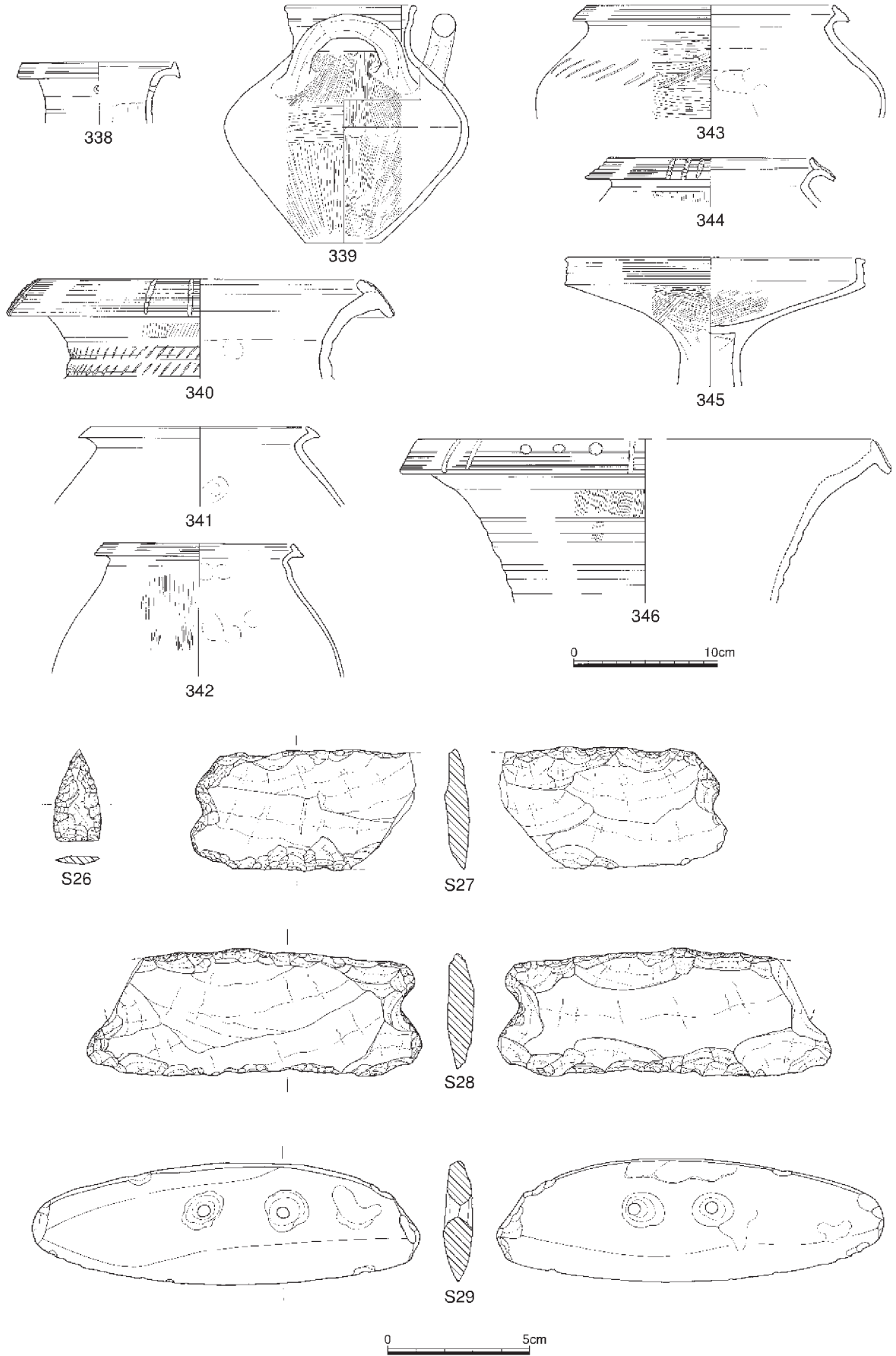


第315図 窪地3 (1/60)・出土遺物 (1/4)



- |                                   |                                 |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色粘質土～細砂 (10YR3/1)<br>(炭粒・焼土含) | 3 黒褐色砂質土 (10YR3/2)<br>(炭粒多含)    |
| 2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)               | 4 灰黄褐色細砂 (10YR5/2)<br>(炭粒・焼土少含) |

第316図 窪地4 (1/60)

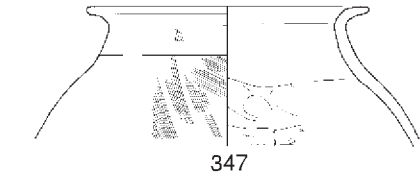
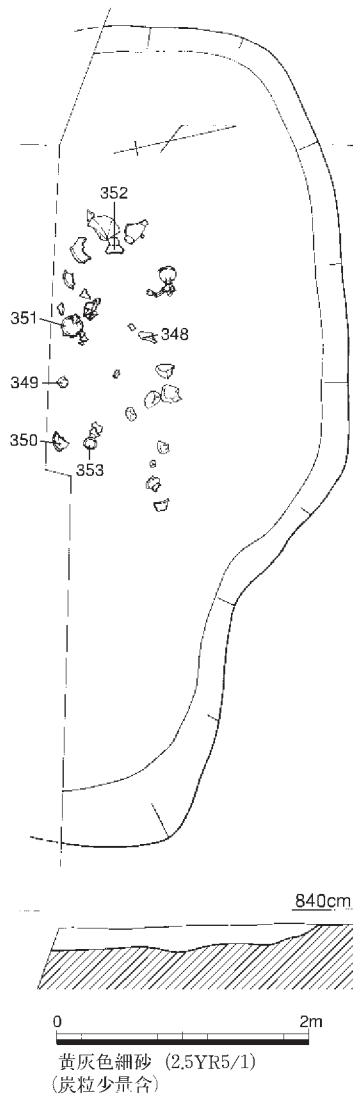


第317図 窪地4出土遺物 (1/4・1/2)

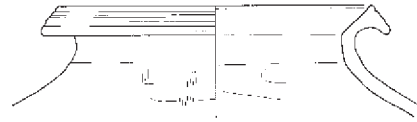
なる。底面は標高6.88～6.94mを示し、南側へ下がっている。深さは検出面から最大11cmを測る。出土遺物は土器で、土壙底面より浮いた状態、標高6.93m～7.09mの間にはほぼ平面で検出した。土器は349以外橙色の色調で、弥生時代後期前葉の特徴を示す。(氏平)



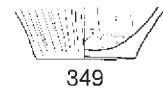
写真31 窪地5調査風景（南東から）



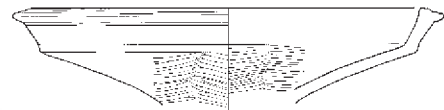
347



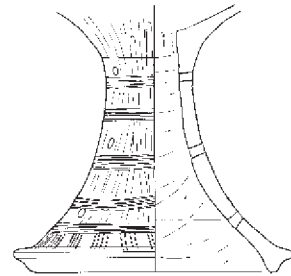
348



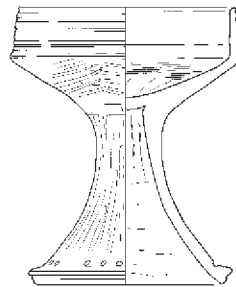
349



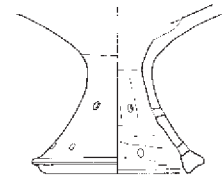
350



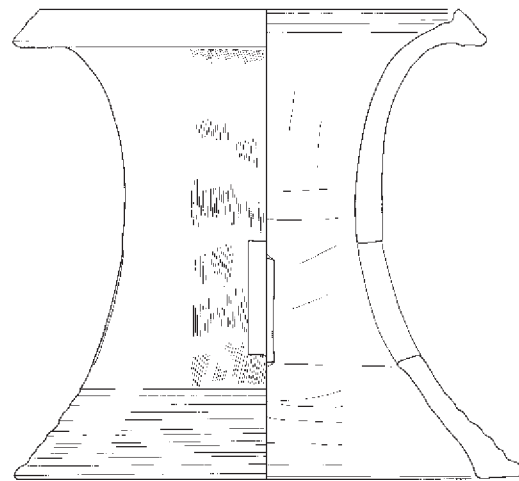
351



352



353



354

0 10cm

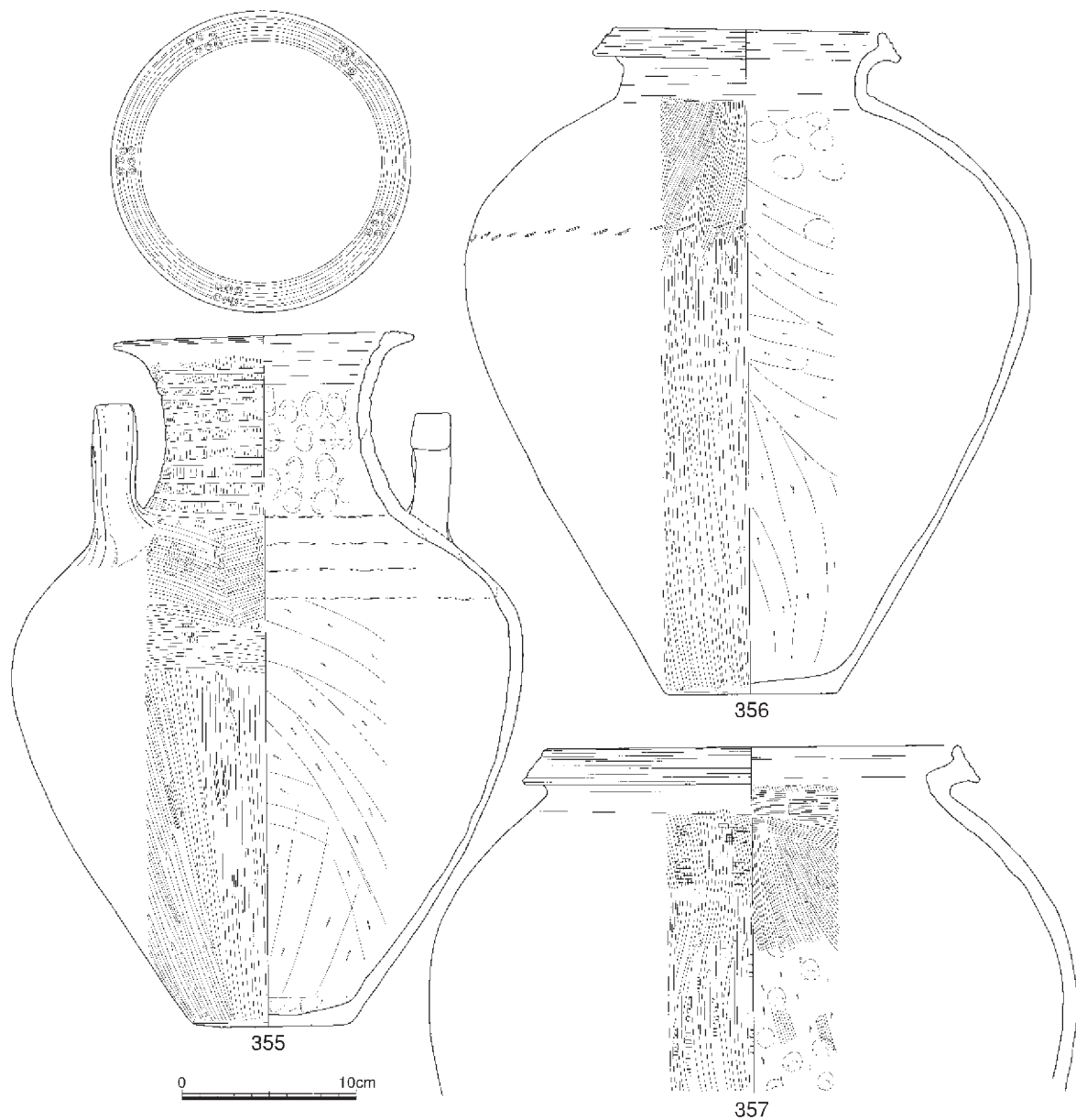
第318図 窪地5 (1/60)・出土遺物 (1/4)



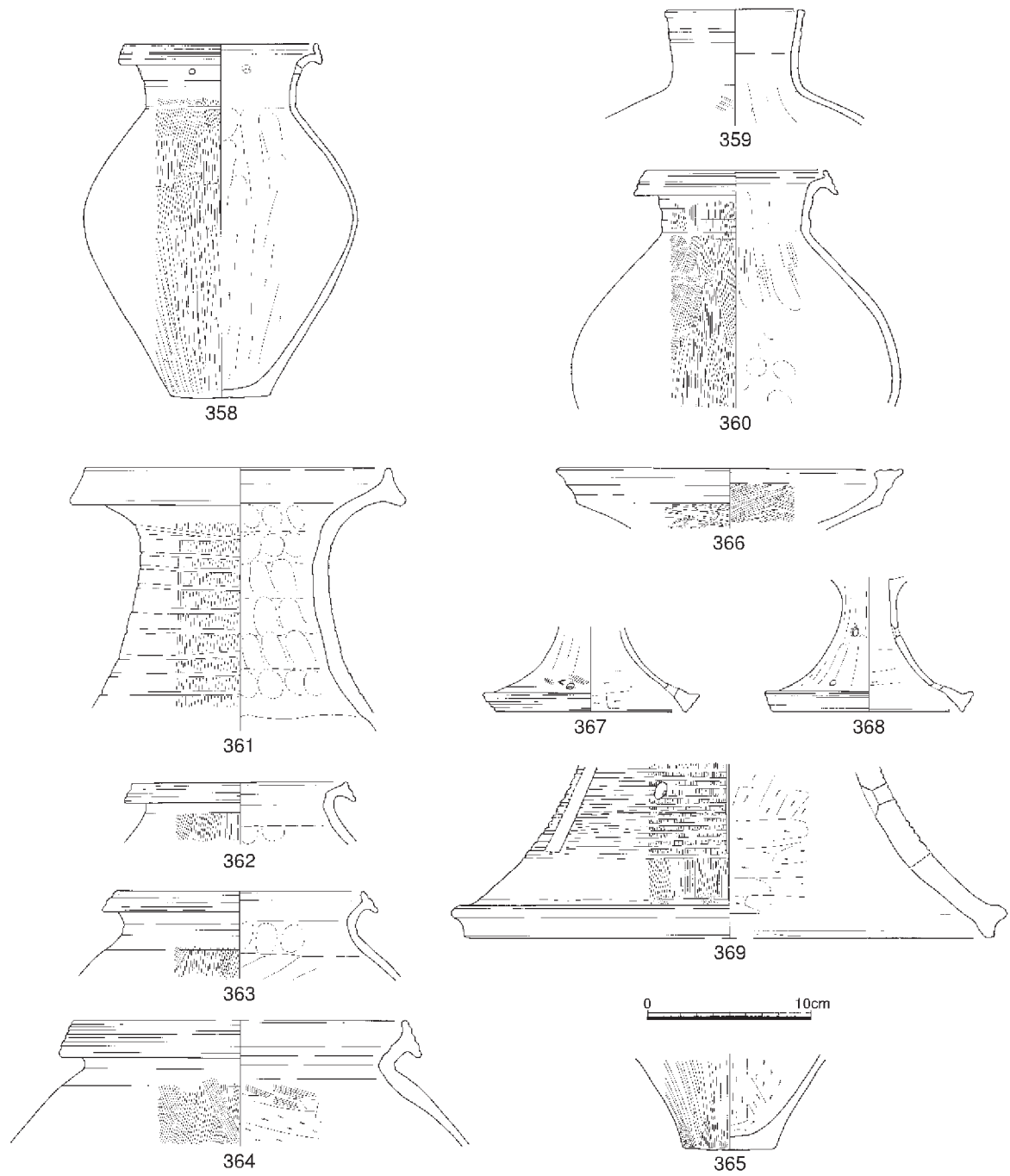
## 7 土器溜まり

土器溜まり1～4 (第200・319～322図、写真32・33、図版84・85・111～113)

ここに挙げるのは、旧窪木3区にあって掘り方がわからなかった土器集中部分である。土器溜まり1は355・356・357が隣り合った状態で検出した。標高は7.50～7.78mである。時期は弥生時代後期前葉である。土器溜まり2は358の下に359・360が重なって出土した。標高は7.54～7.74mで、時期は弥生時代中期後葉である。土器溜まり3は土器片と円礫が1.4×1mの範囲に集中して検出した。時期は弥生時代後期中葉か。土器溜まり4は1.2×1mの範囲に土器が密集して出土した。標高は7.7mで、時期は弥生時代中期後葉である。この他に土器溜まり2の東1.5mに中期後葉の土器溜まり、土器溜まり1と4の中間地点で後期前葉～中葉の土器溜まりを1か所ずつ検出している。(氏平)



第319図 土器溜まり1出土遺物 (1/4)



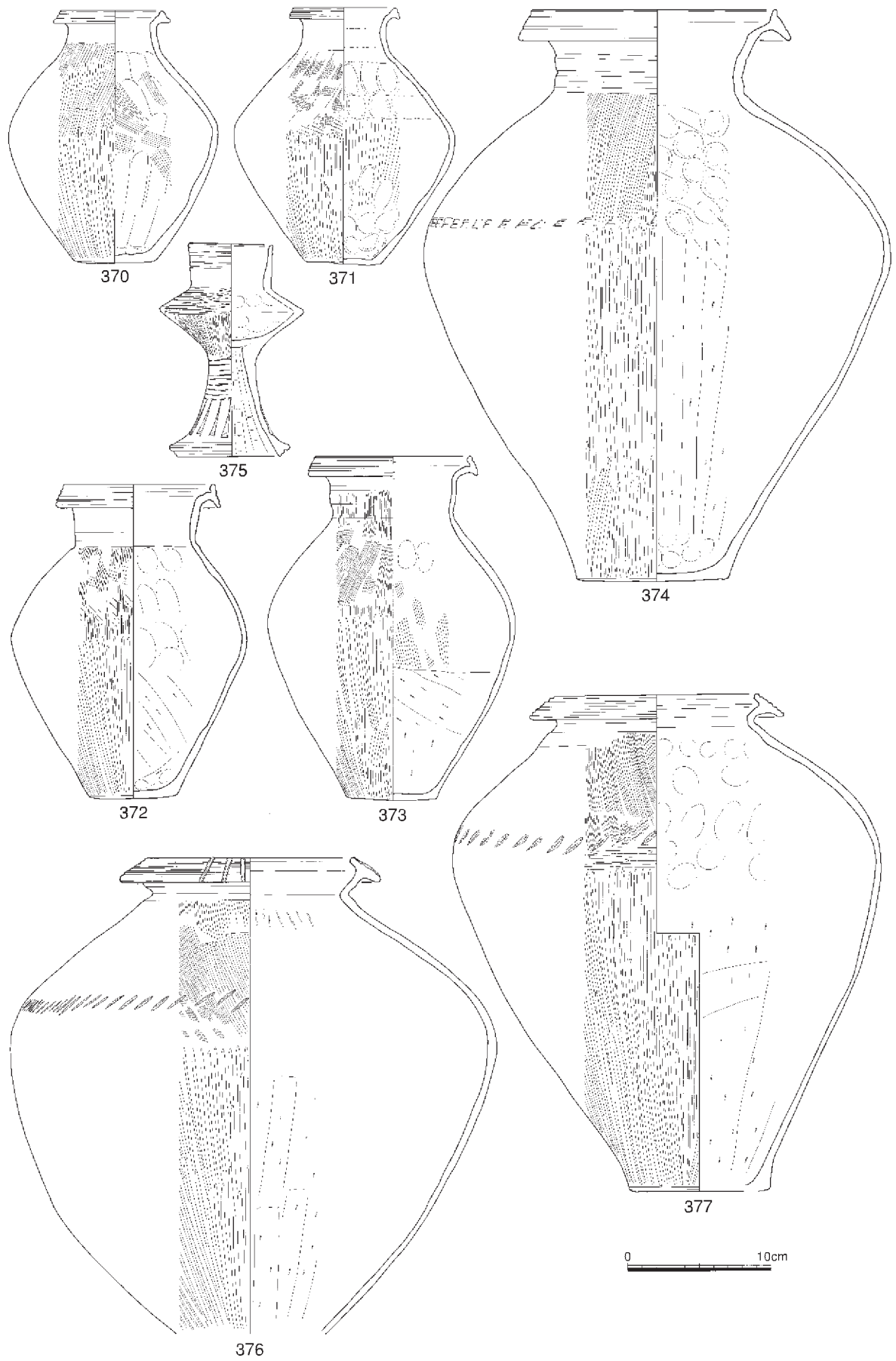
第320図 土器溜まり2・3出土遺物(1/4)



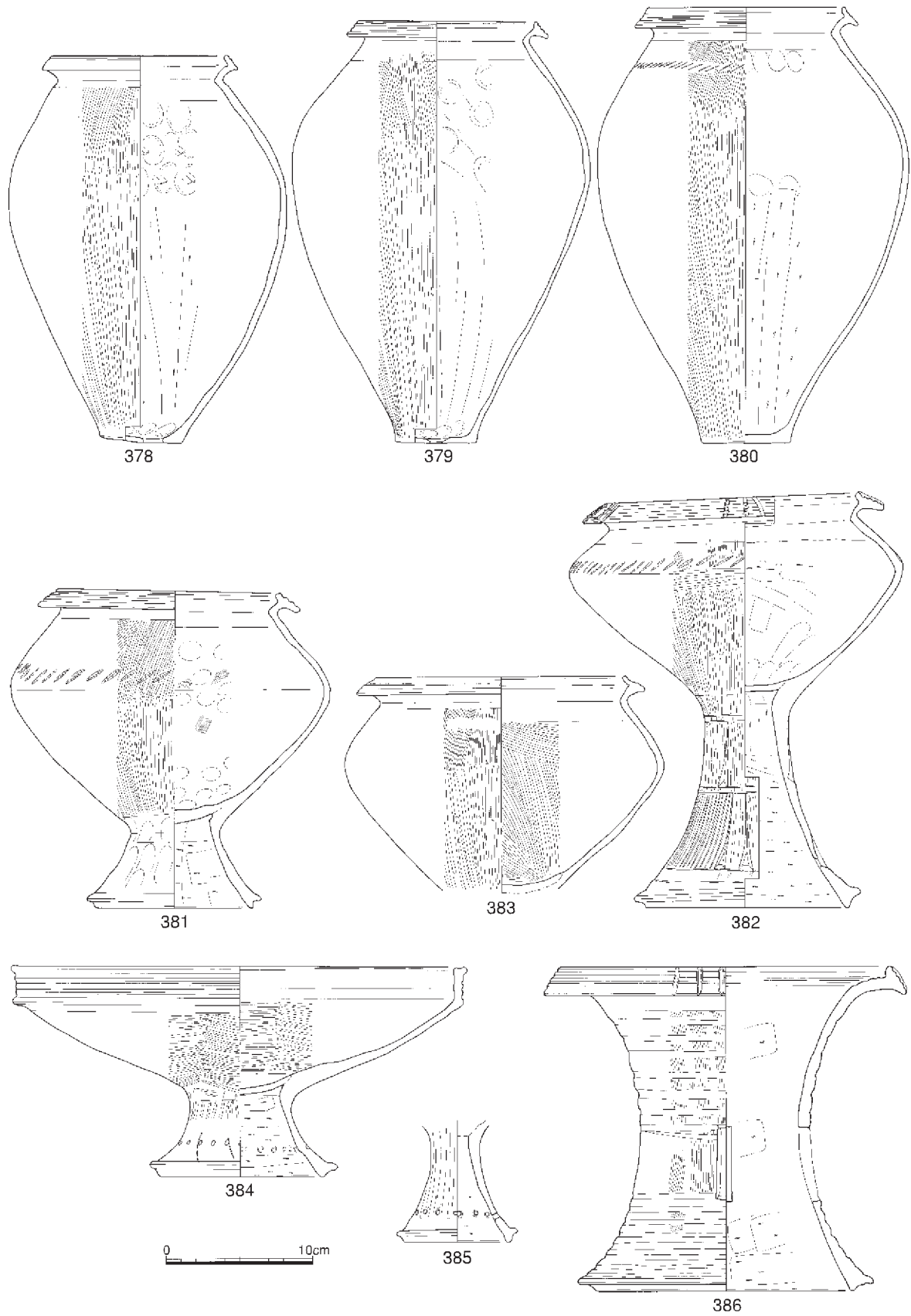
写真32 土器溜まり1 調査風景(北から)



写真33 土器溜まり4(北から)

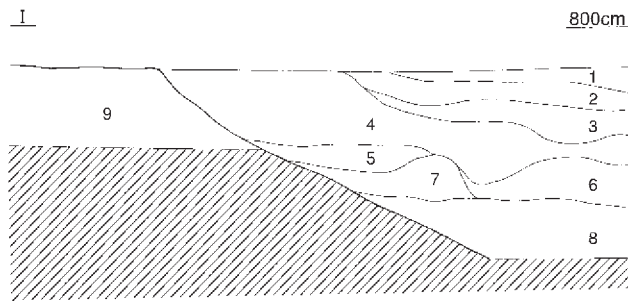


第321図 土器溜まり4出土遺物① (1/4)



第322図 土器溜まり4出土遺物② (1/4)

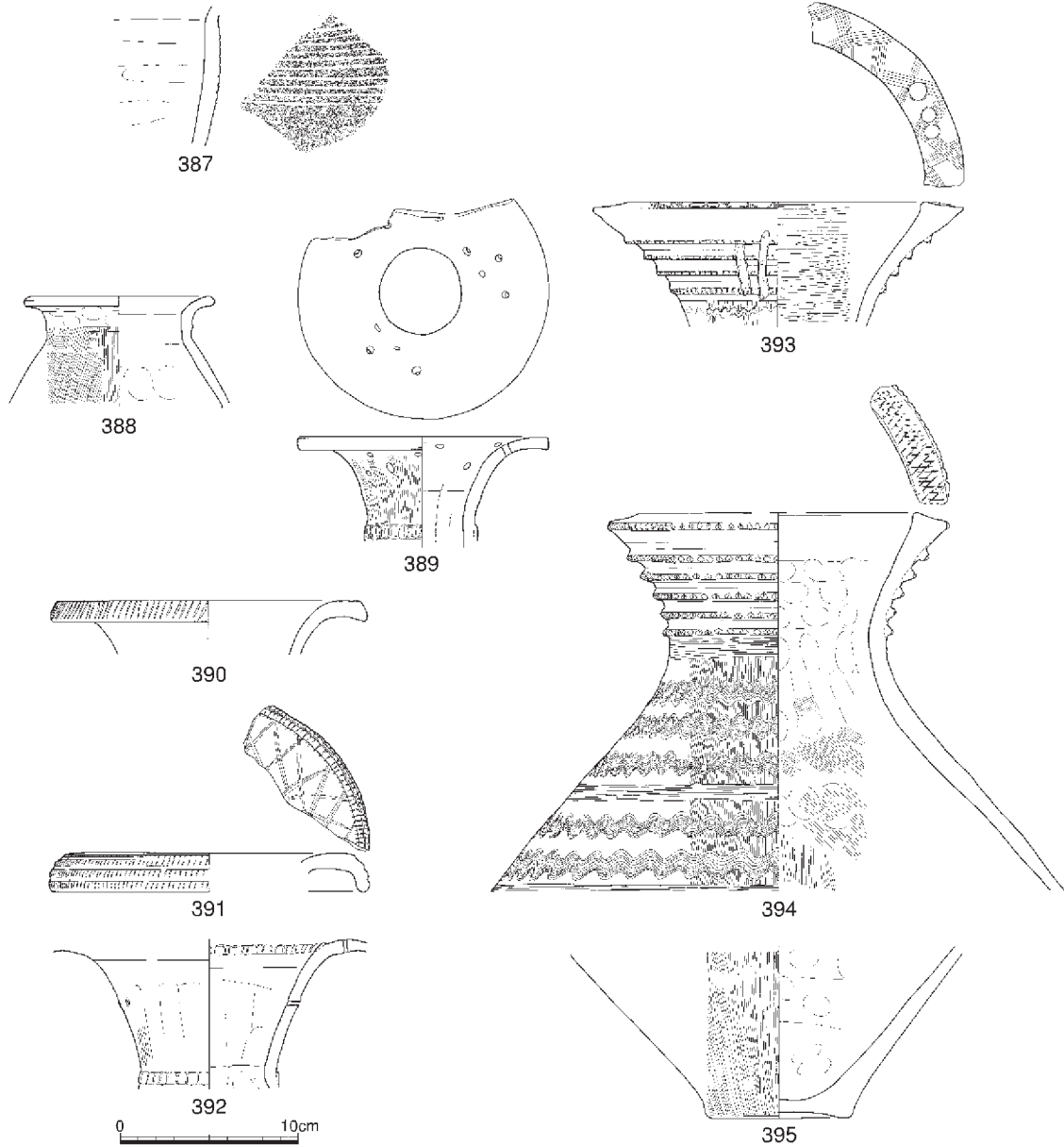
8 下がり



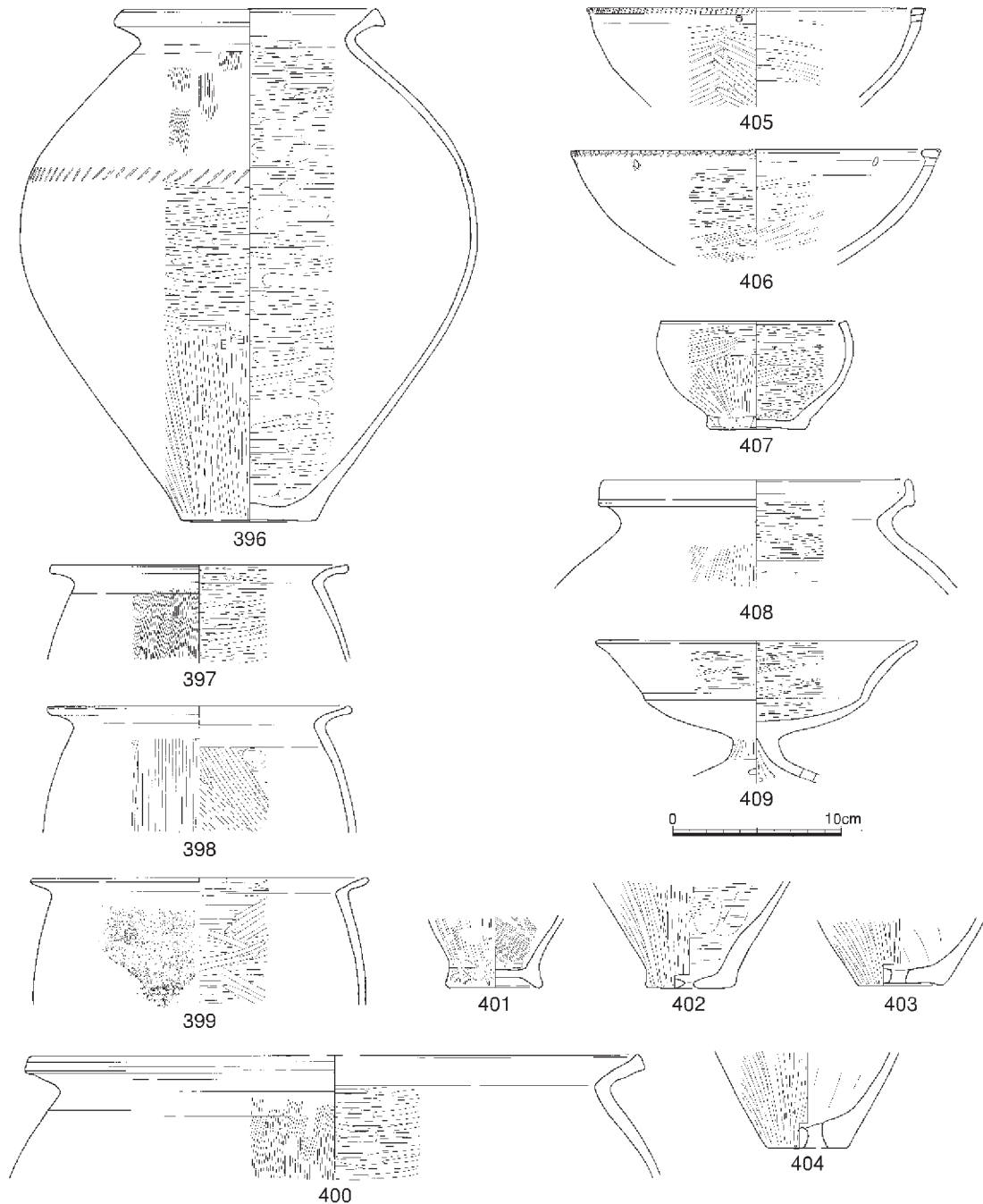
- |                     |                     |                     |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) | 4 暗灰黄色粘質土 (10YR5/2) | 7 黒褐色粘質土 (10YR3/2)  |
| 2 褐色粘質土 (7.5YR4/4)  | 5 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)  | (礫少含)               |
| (Fe含)               | 6 灰色粘質土 (5Y5/1)     | 8 鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3) |
| 3 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) |                     | (礫少含)               |
|                     |                     | 9 黒褐色砂礫 (10YR4/3)   |

下がり 1 (第200・323・324図)

128 I ~ 130 G にかけて検出した下がり  
で、北西から南東に向かって傾斜してい  
た。第1層が現代水田層、第2層が中世  
包含層、第3層以下が弥生時代包含層。  
なお、この下がりに対する東側の下がり  
は、138ライン付近で確認しており、弥生  
時代以来この間が低位部であったと思わ



第323図 下がり 1 (1/60)・出土遺物① (1/4)

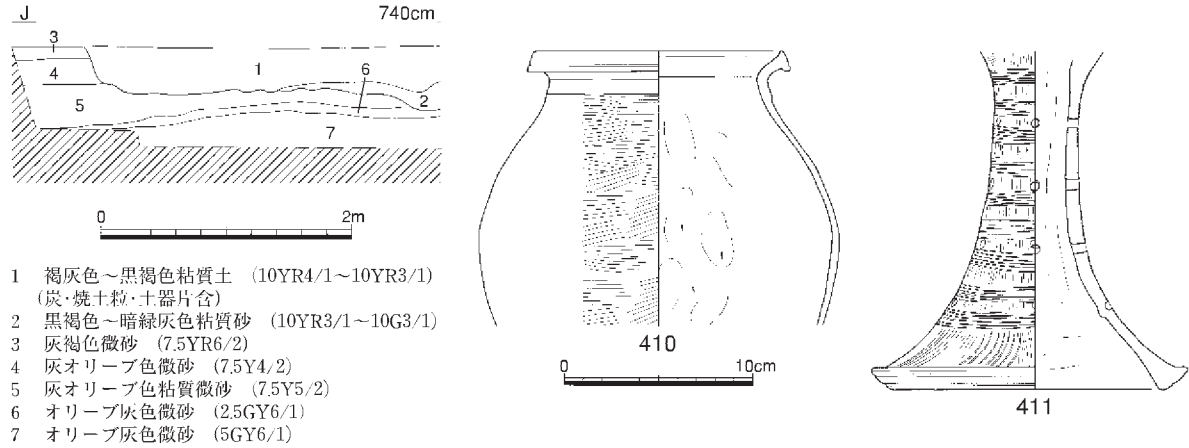


第324図 下がり1 出土遺物② (1/4)

れる。この下がりに伴う遺物は、その多くが斜面に貼りつく様に出土した。土器の年代観は、弥生時代前期から後期後半までと幅広く、近隣の微高地で営まれた集落の存続期間を示している。(松尾)

下がり2 (第205・325図)

150 SのSライン上に肩部が存在した下がりである。この部分では古代の下がりと弥生時代の下がりを検出しているが、古代の下がりは弥生時代の下がりを切ってより北側に位置している。断面図では弥生時代の部分を示している。1・2層が下がりの埋土で、残りは自然堆積層である。この断面図のすぐ北には古代の下がりが現れるので、弥生時代の下がりは3.5m分しか残っていない。出土土器は少ないが、410・411共によく磨滅している。時期は弥生時代後期前～中葉であろう。(氏平)

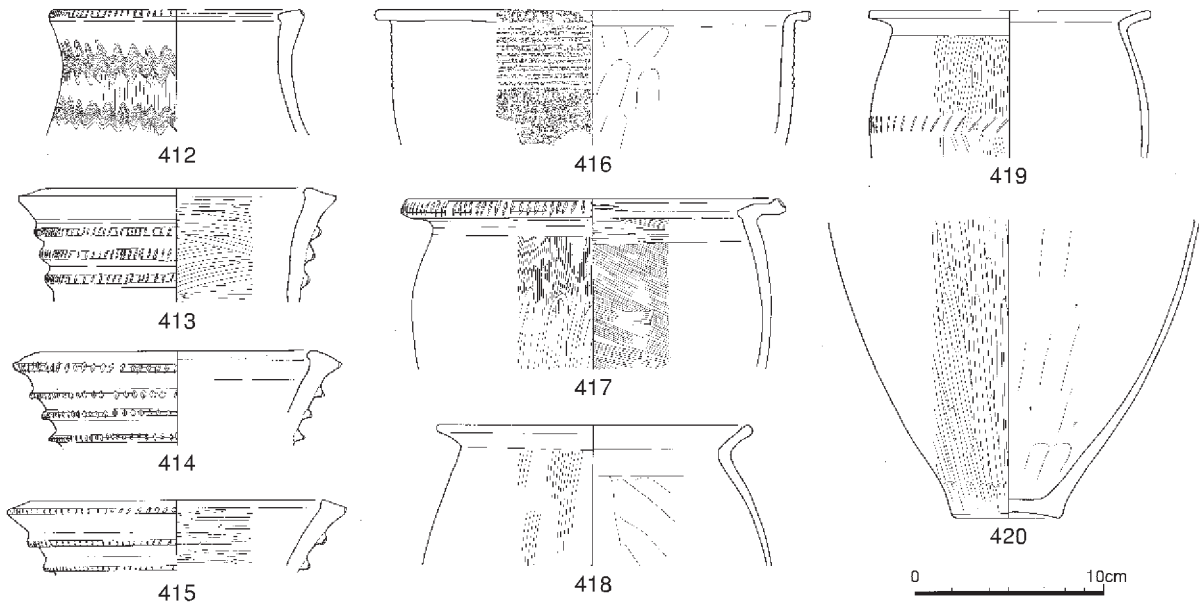


第325図 下がり2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

9 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第326～329図、図版113・125～127・129)

遺跡西端から前期に遡る甕416が出土したのをはじめ、主に中期の前葉から中葉にかけての遺物は遺跡西部から、中葉から後葉、後期にかけては東部から出土している。416は口縁端部に刻みが巡り、口縁部下に多条のヘラ描き沈線が施されている。中期前葉の壺412頸部には櫛描き波状文が施され、中葉の壺413～415頸部には貼り付け突帯が巡る。中期後葉の土器421～426にはいずれも凹線が巡る。後期前半の土器427～432のうち高杯427は内面放射状、外面蜘蛛の巣状のヘラミガキを巡らす。器台は円と四角の交互の透かし孔が穿たれている。

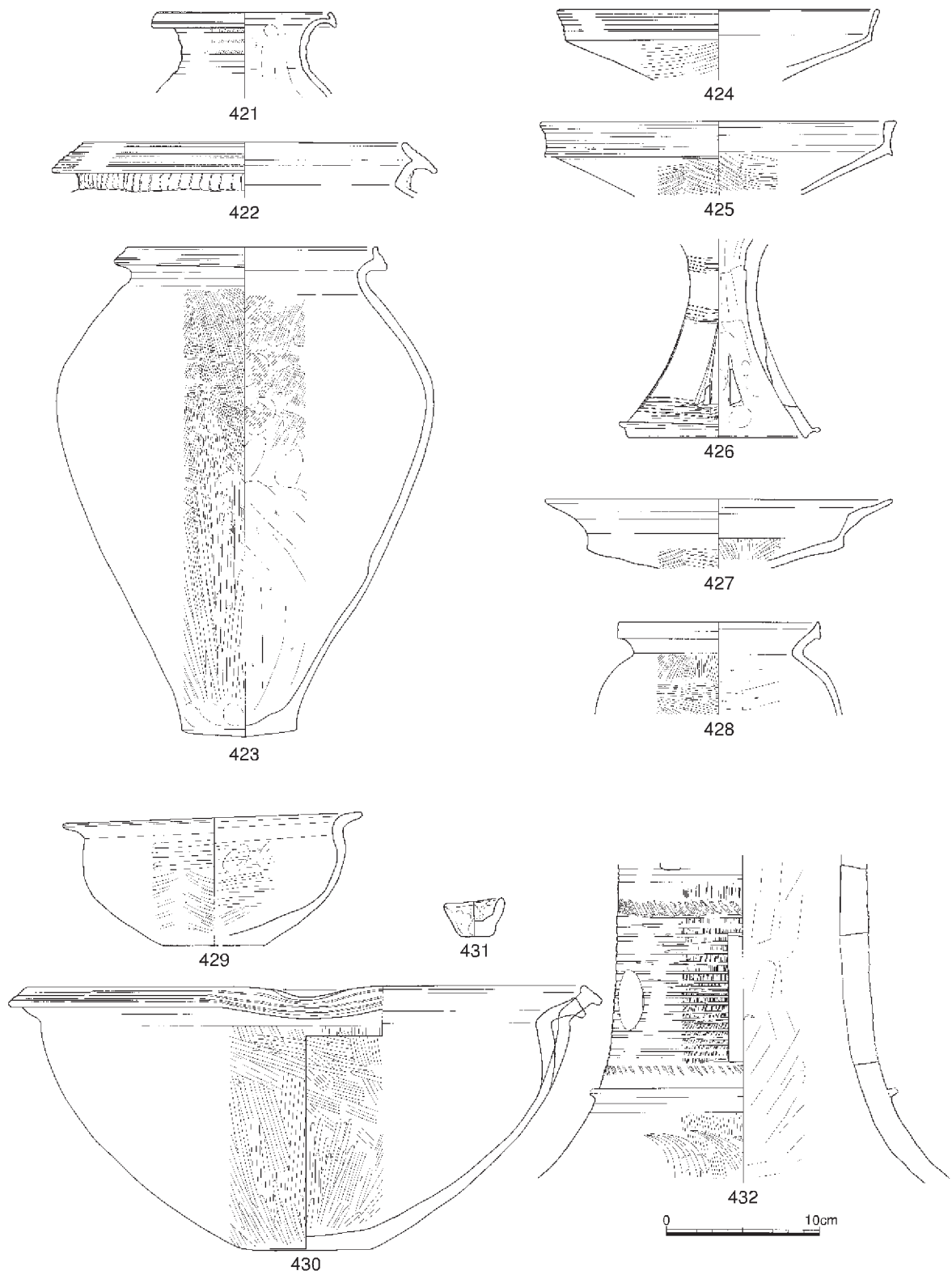
石器は石包丁 S30～S35・石鎌 S36～S58などサヌカイト製品が大半を占める中、柱状片刃石斧 S68や蛤刃石斧 S69～S71・石包丁 S72などの磨製品も出土している。S74は敲石と判断したもので、



第326図 柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4)

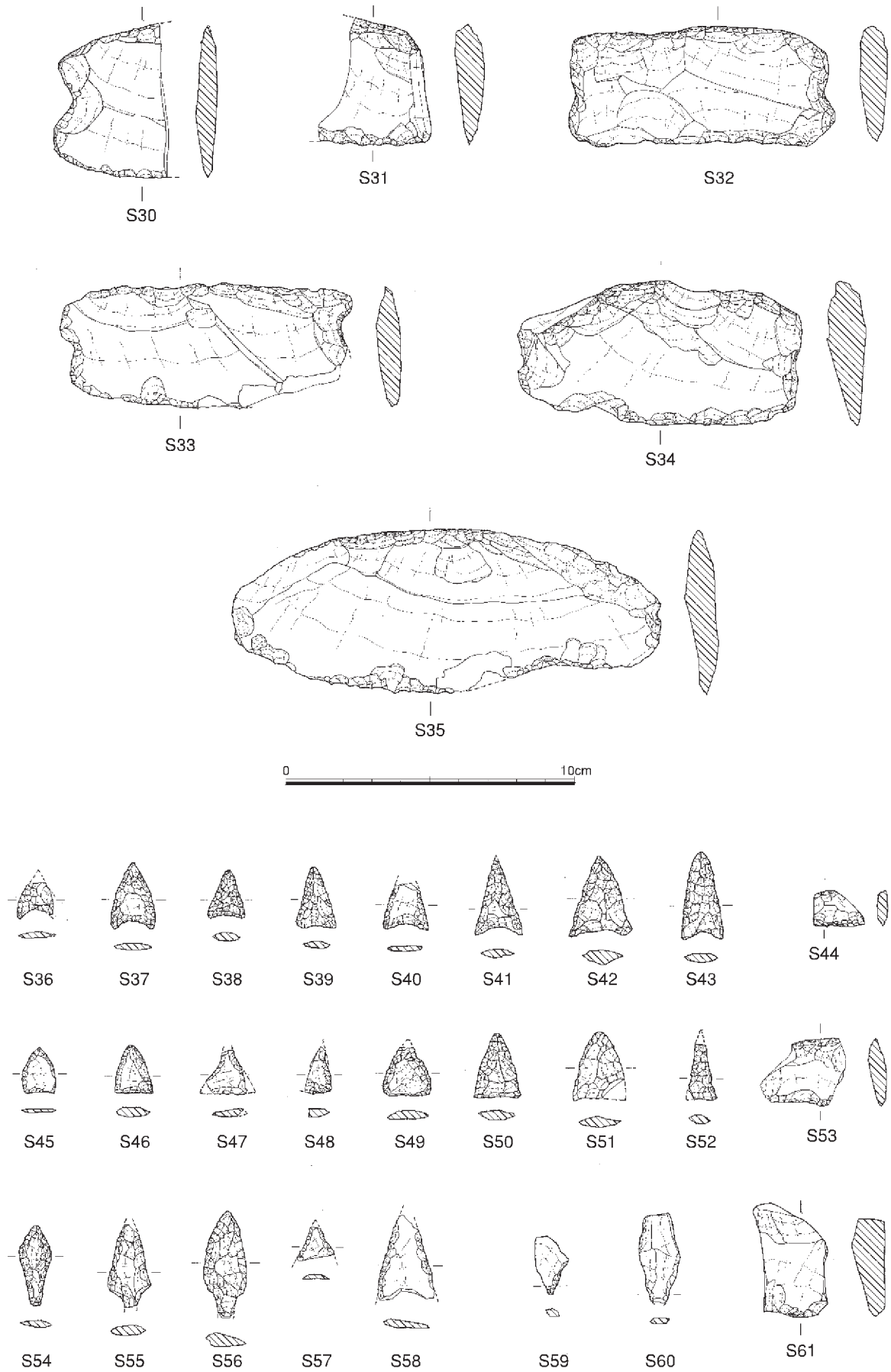
先端に使用痕が認められた。

また、分銅形土製品C7・紡錘車C8～C10などの土製品なども出土している。(江見)

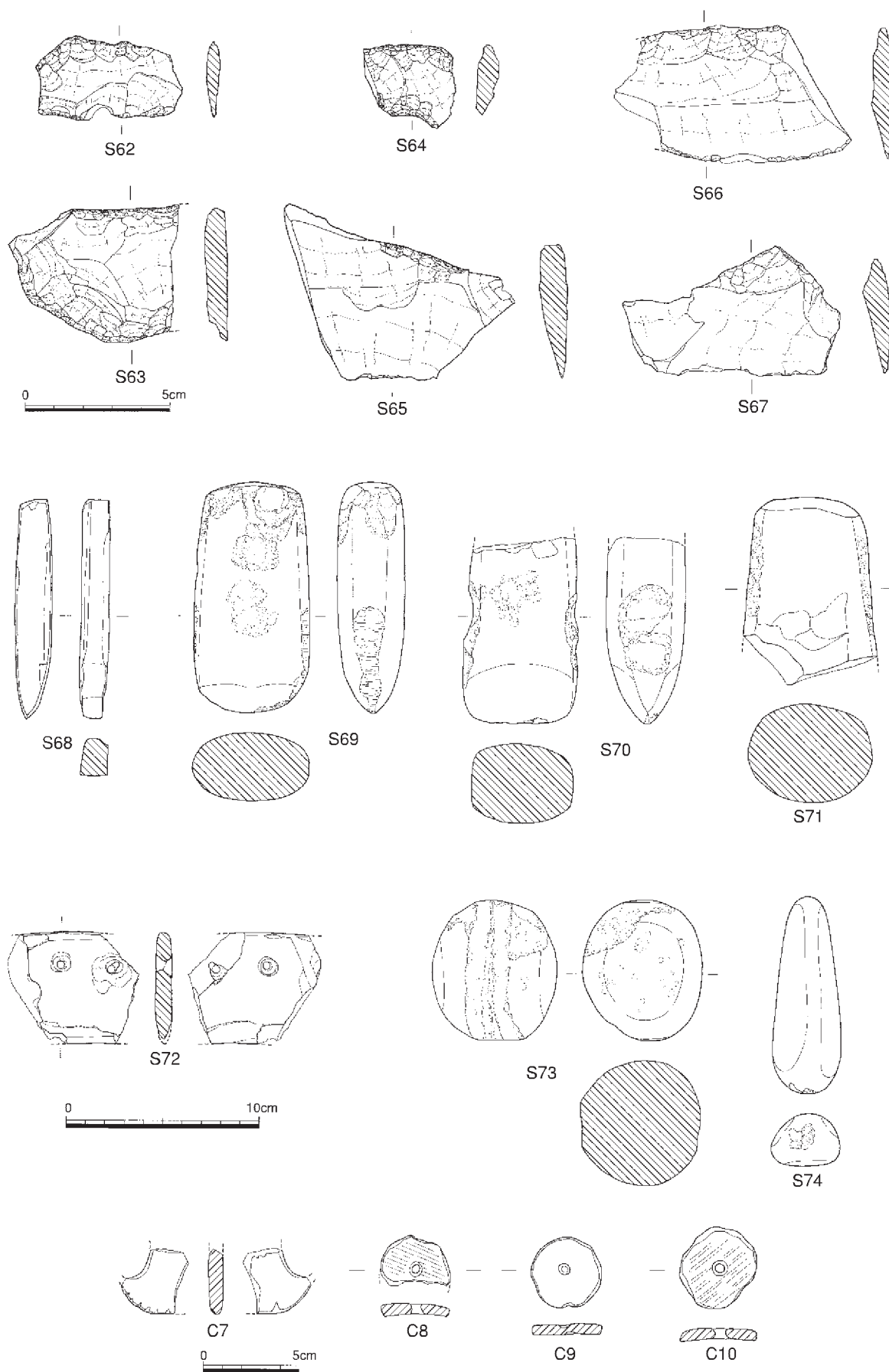


第327図 柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/4)





第328図 柱穴および遺構に伴わない遺物③ (1/2)



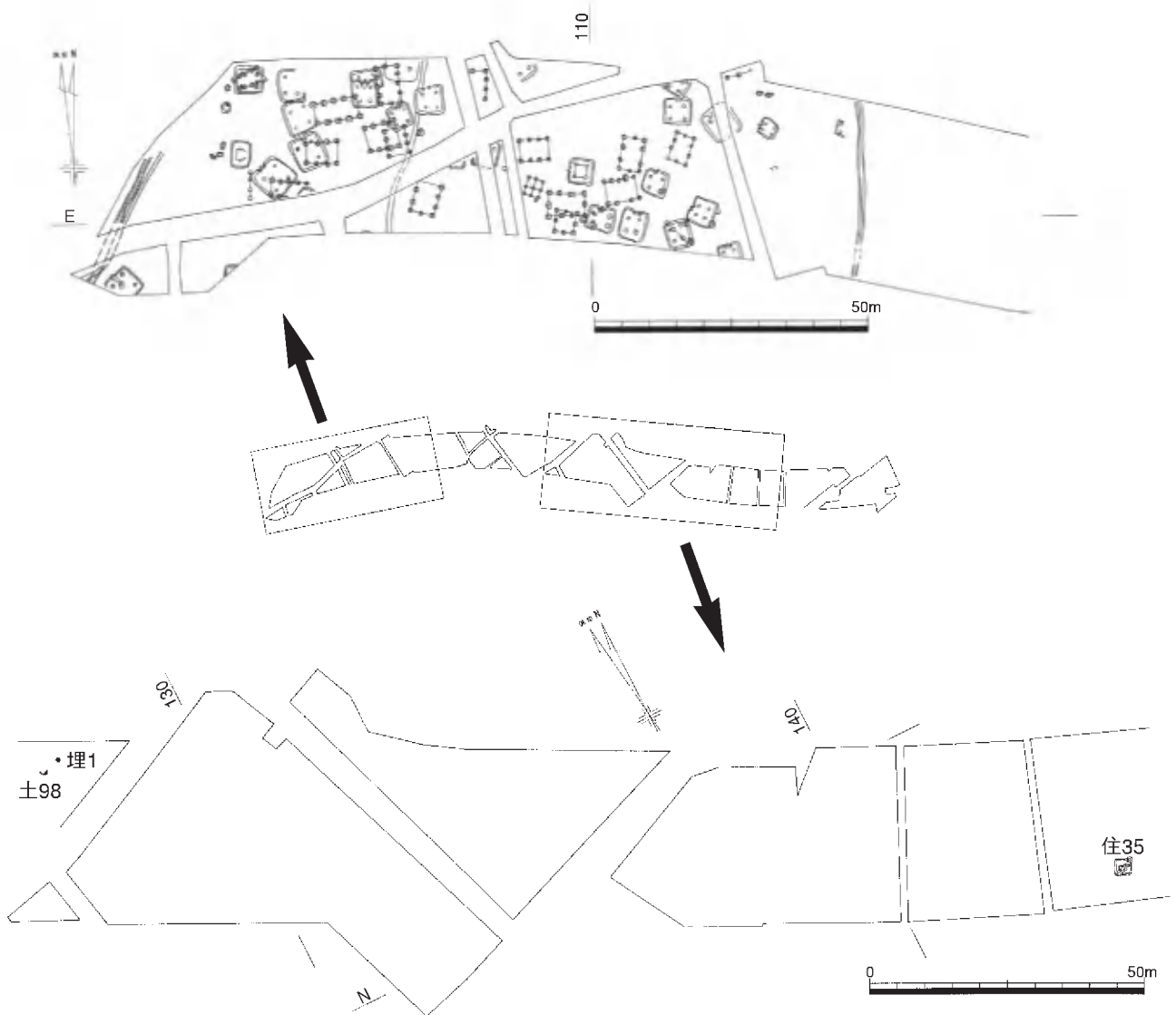
第329図 柱穴および遺構に伴わない遺物④ (1/2・1/3)

### 第3節 古墳時代の遺構・遺物

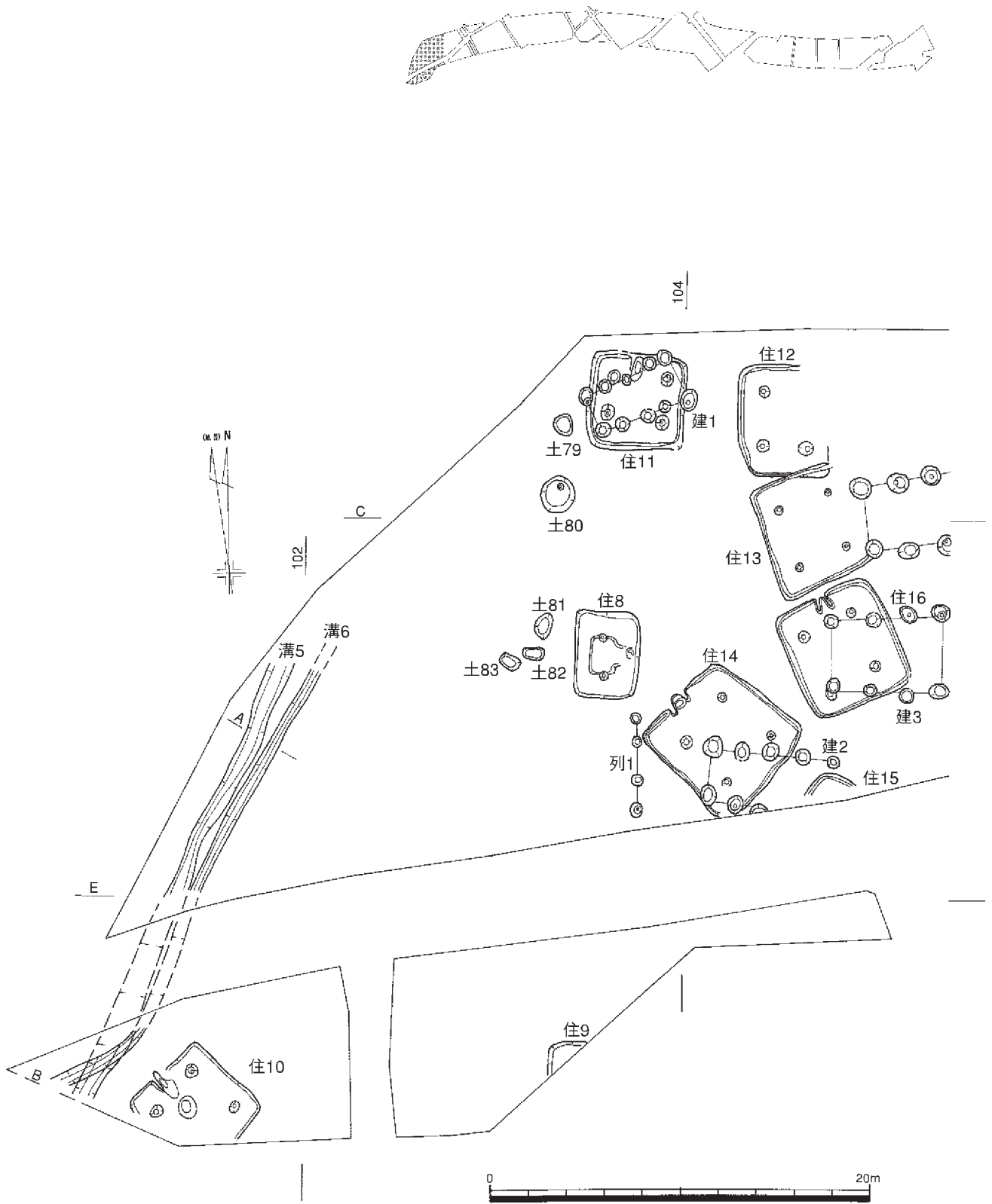
#### 1 概要

前半期の遺構・遺物は少なく、竪穴住居8および土塋80を確認したにすぎない。しかしながら、後半期になると遺構・遺物ともに飛躍的に増加する。特に溝6・溝8に囲まれた東西約150mの範囲には、竪穴住居28軒、掘立柱建物16棟などを確認し、遺物では多くの土器は言うにおよばず、鉄製又鋏(M8)・鉄製ヤス(M3・4)・鹿角製鉤状製品(B1)など、注目に値する特異な遺物が出土している。これらの遺物は、当時の習俗あるいは生業の一端を明らかにする上で重要であると思われる。

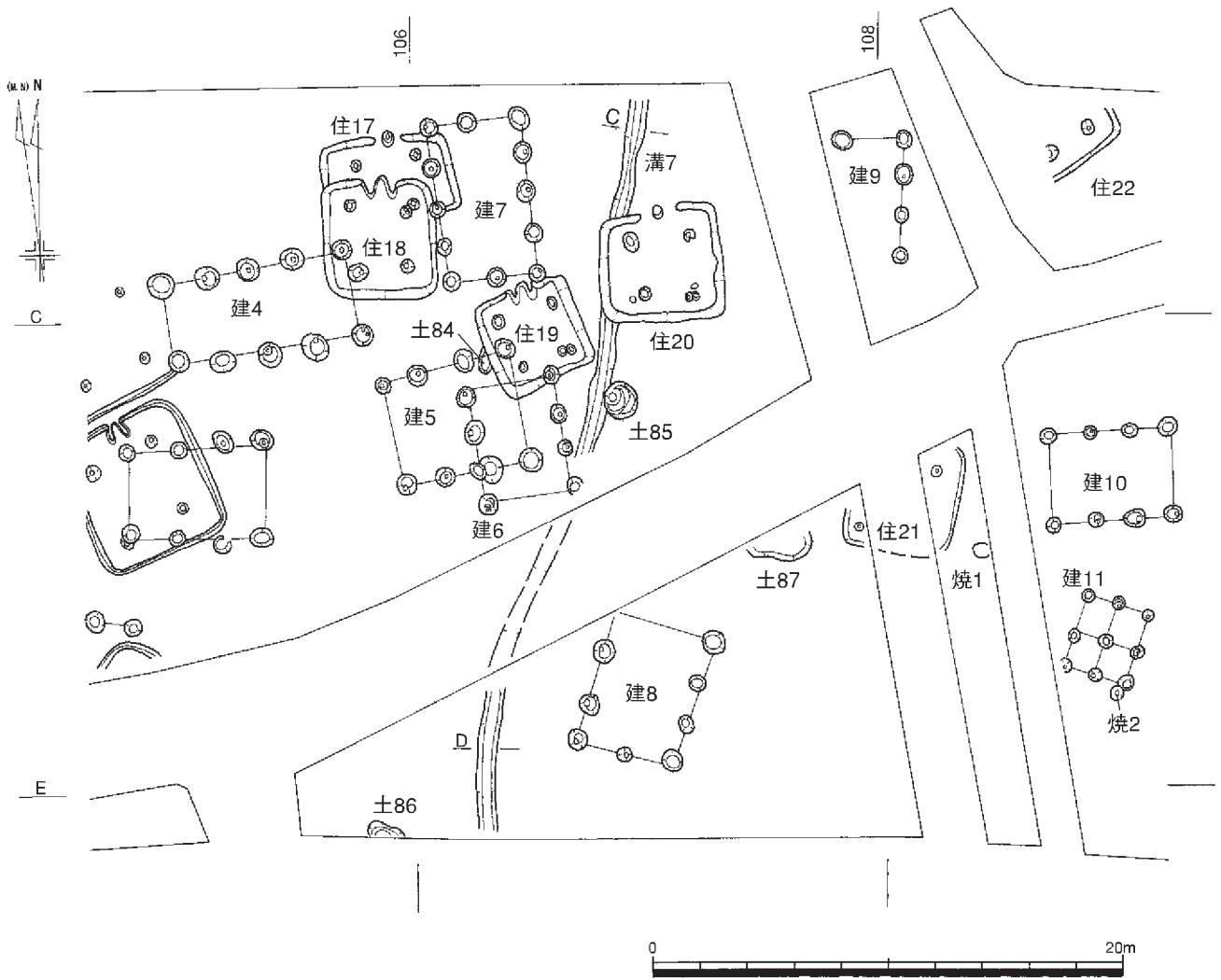
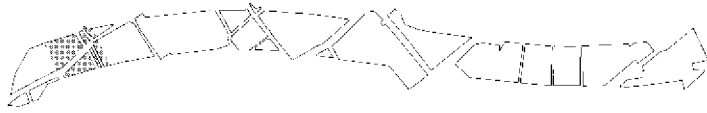
この集落域から東側については竪穴住居35、土塋98、埋置土器1の3遺構のみを検出しただけで、総じて遺構密度は低く、積極的に生活域として利用されたとは言い難い状況を呈している。(松尾)



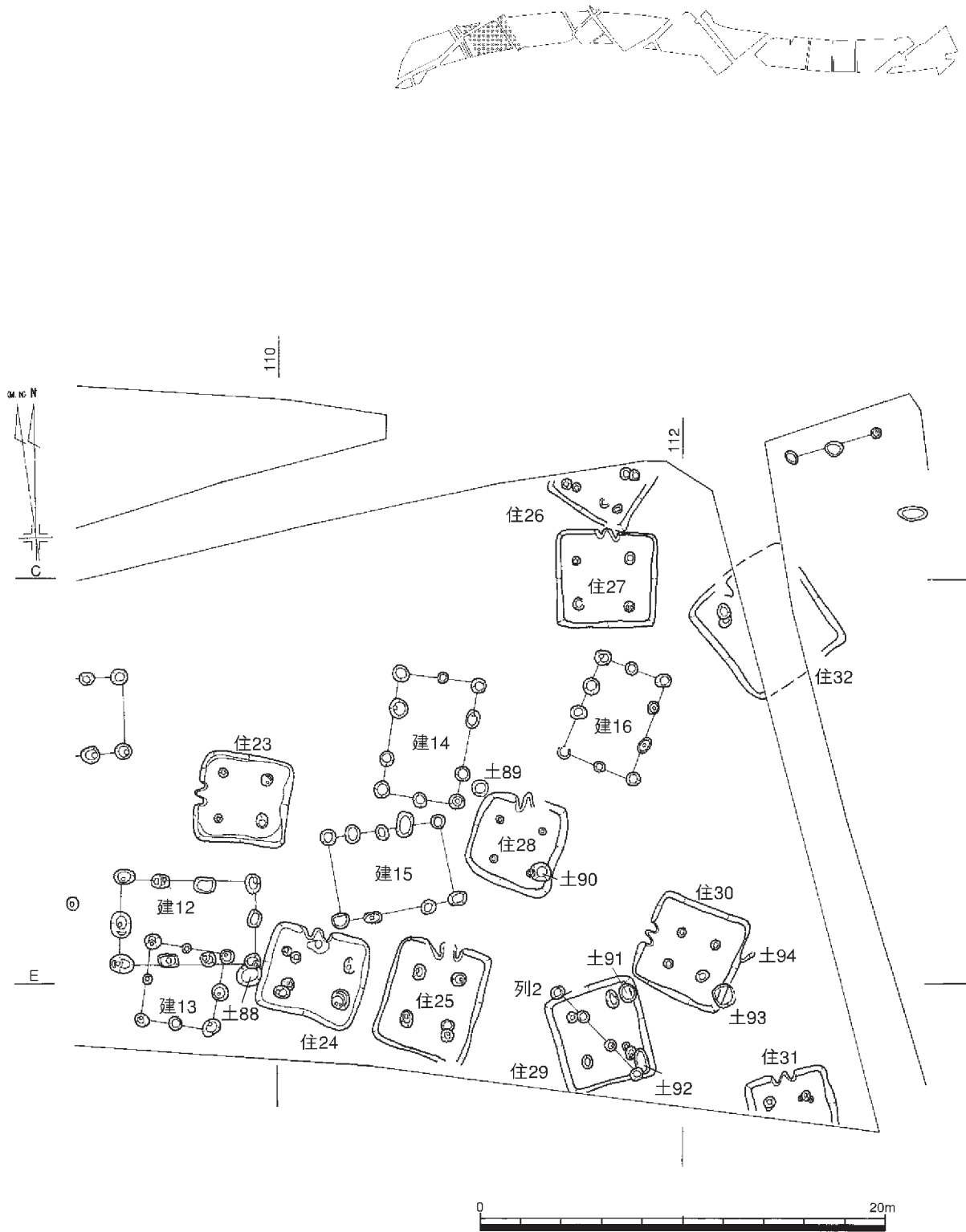
第330図 古墳時代遺構全体図 (1/1,250)



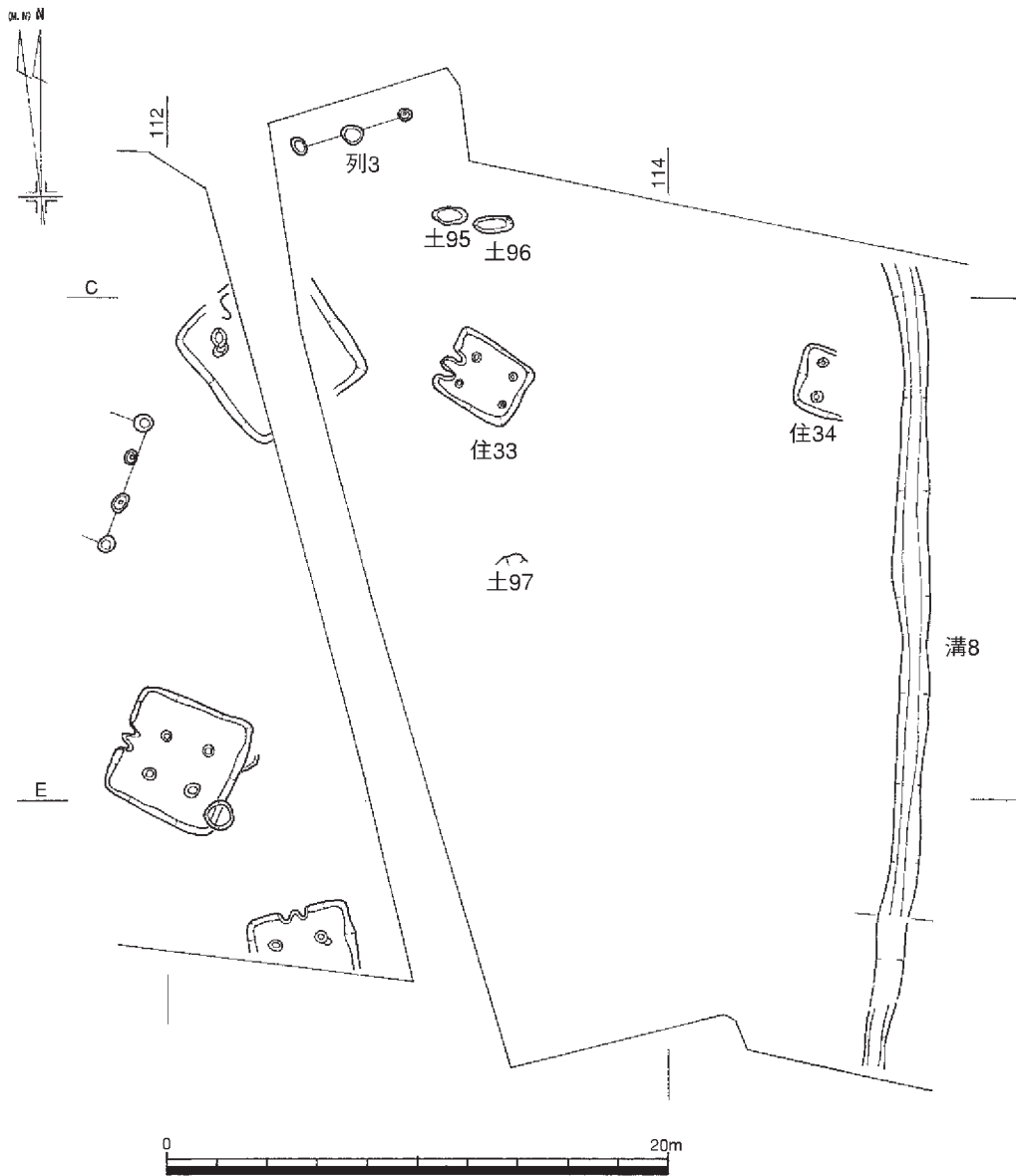
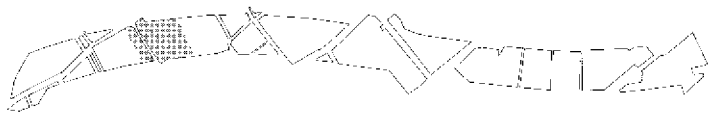
第331図 古墳時代主要遺構図① (1/300)



第332図 古墳時代主要遺構図② (1/300)



第333図 古墳時代主要遺構図③ (1/300)

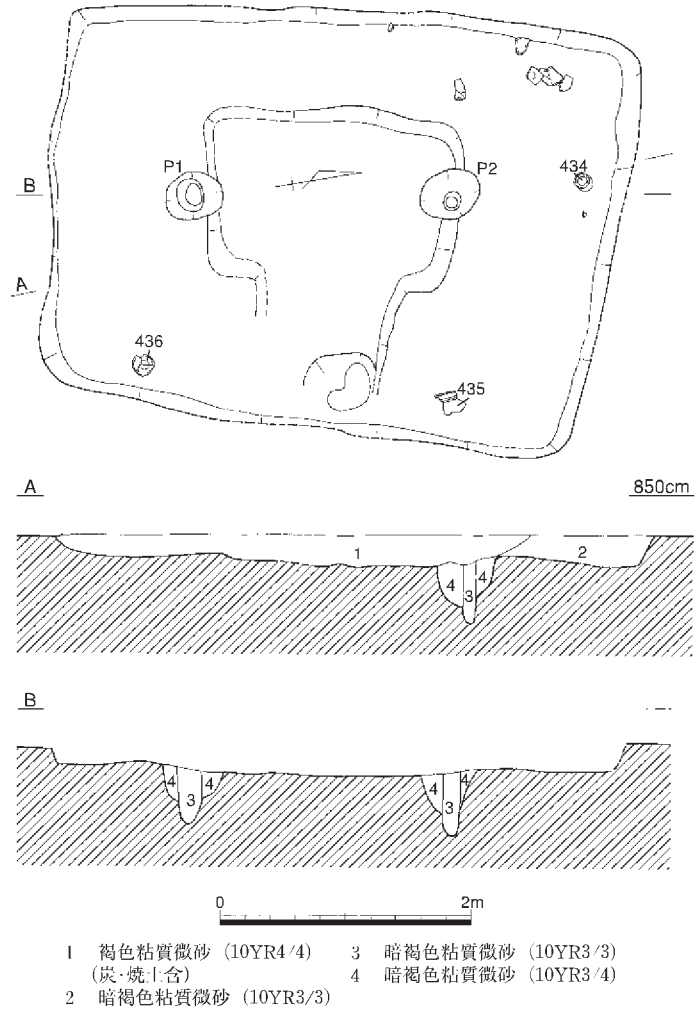


第334図 古墳時代主要遺構図④ (1/300)

## 2 竪穴住居

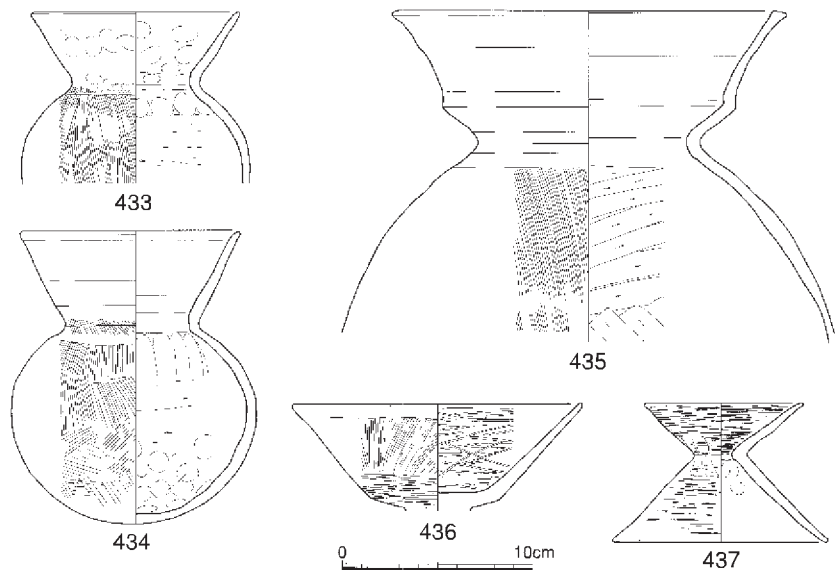
### 竪穴住居 8 (第331・335図、 図版86・114)

102Cの北東に位置する。埋土とベース層との見分けは非常に難しく、数本のトレンチをもって確認しながら調査を進めた。平面形は長方形を呈し、長軸4.5m、短軸3.33mを測る。主柱穴はP1とP2の2個で、どちらも直径約50cm、深さは40～50cmで、柱間距離は2.05mを測る。3方に高床部を伴うが、中央部の低い部分との高低差はわずか2～3cm程度であった。この高床部は東の一方が途切れており、その北寄りには深さ10cm程度の土壇が伴う。この土壇はトレンチにより分断され、詳細な形状は不明である。土器の形態から、古墳時代前期前半と思われる。(松尾)



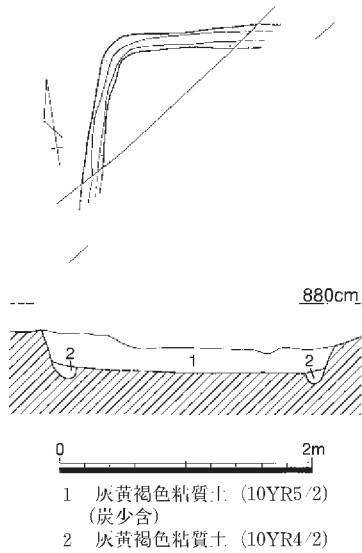
### 竪穴住居 9 (第331・336図)

102Eの中央やや東寄りで検出した。北西隅の一角を確認したのみで、その大部分は調査区外へと続いている。調査区の壁面で確認したところ、床面までの深さは20cm程度で、壁体溝が巡っていた。ただし、この様な検出状態のため全体像を推し量ることは困難である。遺物は全く出土しておらず、時期を



第335図 竪穴住居 8 (1/60)・出土遺物 (1/4)



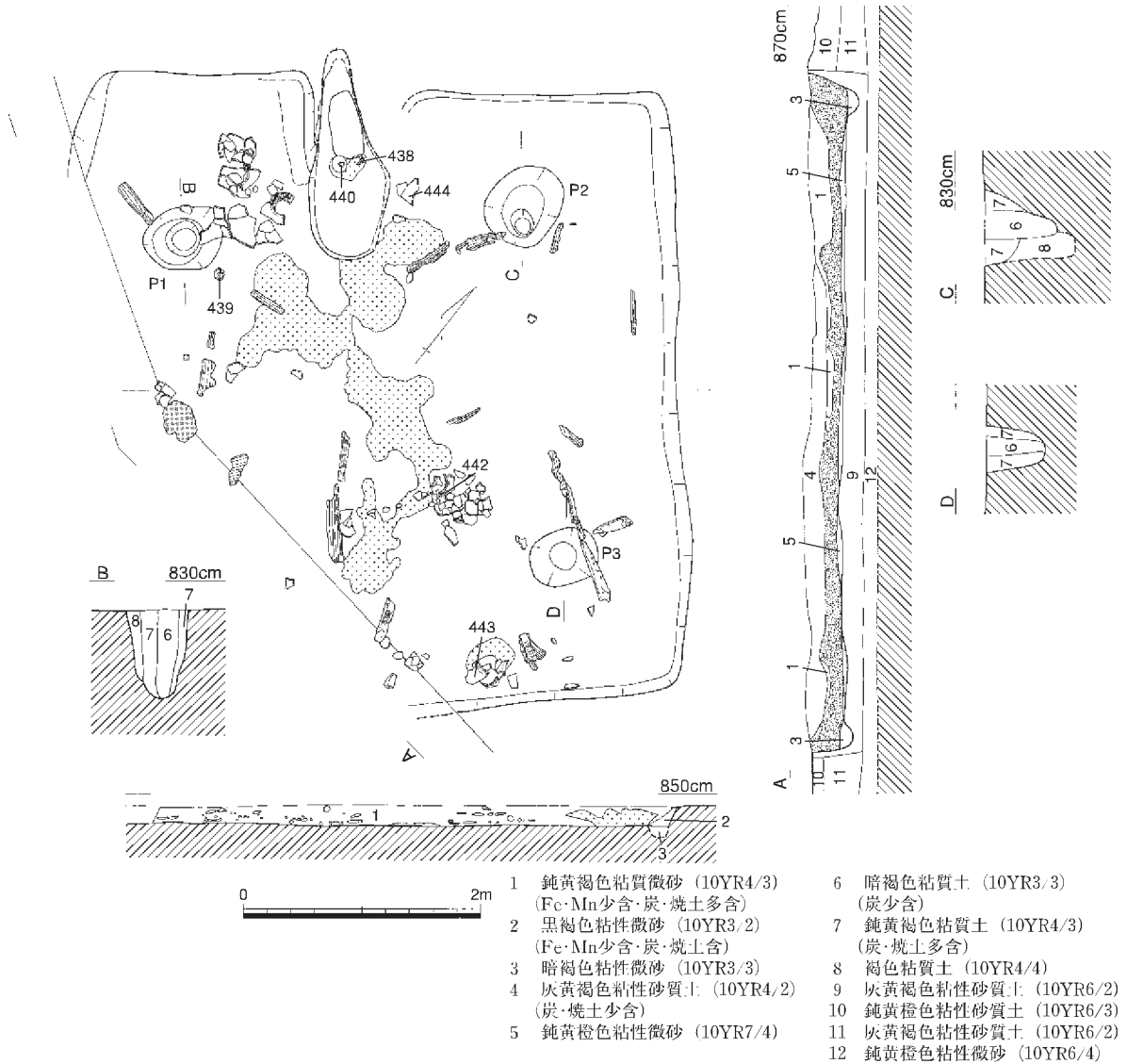


第336図 竪穴住居9 (1/60)

決めるのは難しいが、埋土の状態や周辺の状況等から、古墳時代後期であると推察される。(松尾)

竪穴住居10 (第331・337～339図、写真34、図版114)

100Eの中央やや東寄りで検出した、一辺約5mの方形住居である。検出面から床面までの深さは30cm程。主軸はN-40°-Wで、北辺中央にカマドをもつ。支柱穴は4個で、その内3個を確認した。床面にはおびただしい被熱面と炭化材(コナラ属、スダジイ)が残されており、焼失住居と考えられるが、一度の焼失をもってこのような赤変硬化した床面が形成されるのか疑問である。なお、土層断面の第9層は住居の埋土ではないと判断したが、炭・焼土を多く含んでいた。カマドは支柱である440の周辺と煙道側面の被熱痕跡が顕著であった。TK23・47型式併行期と思われる。(松尾)

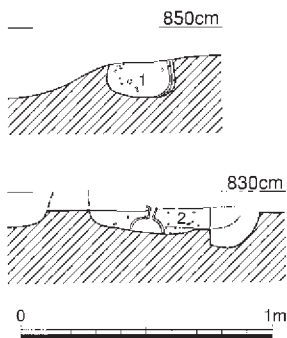
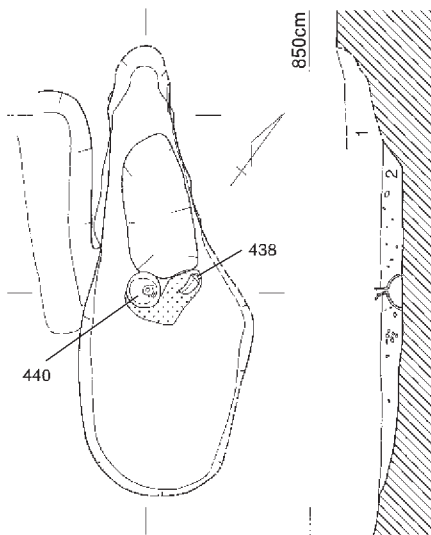
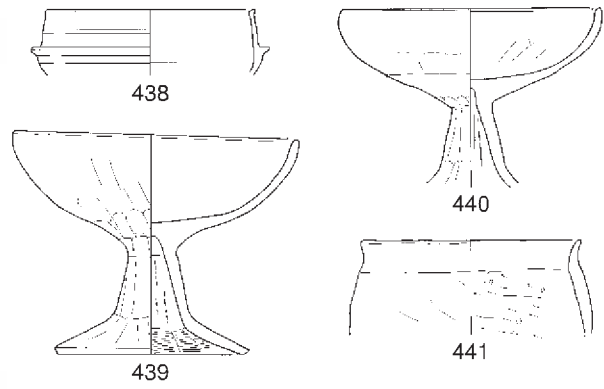


第337図 竪穴住居10 (1/60)

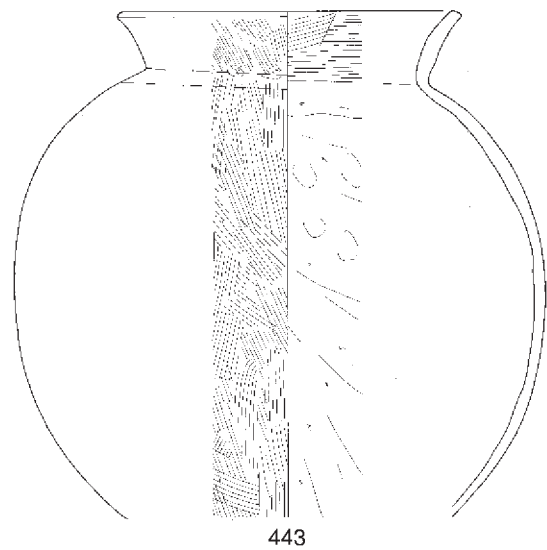
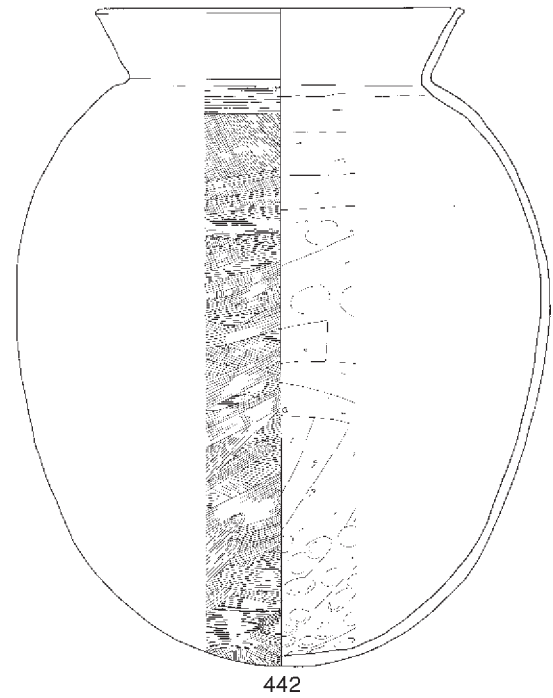
- |  |                                 |
|--|---------------------------------|
| 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)<br>(Fe・Mn少含・炭・焼土多含) | 6 暗褐色粘質土 (10YR3/3)<br>(炭少含)     |
| 2 黒褐色粘性微砂 (10YR3/2)<br>(Fe・Mn少含・炭・焼土含)   | 7 鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3)<br>(炭・焼土多含) |
| 3 暗褐色粘性微砂 (10YR3/3)                      | 8 褐色粘質土 (10YR4/4)               |
| 4 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)<br>(炭・焼土少含)        | 9 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR6/2)           |
| 5 鈍黄橙色粘性微砂 (10YR7/4)                     | 10 鈍黄橙色粘性砂質土 (10YR6/3)          |
|  | 11 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR6/2)          |
|  | 12 鈍黄橙色粘性微砂 (10YR6/4)           |



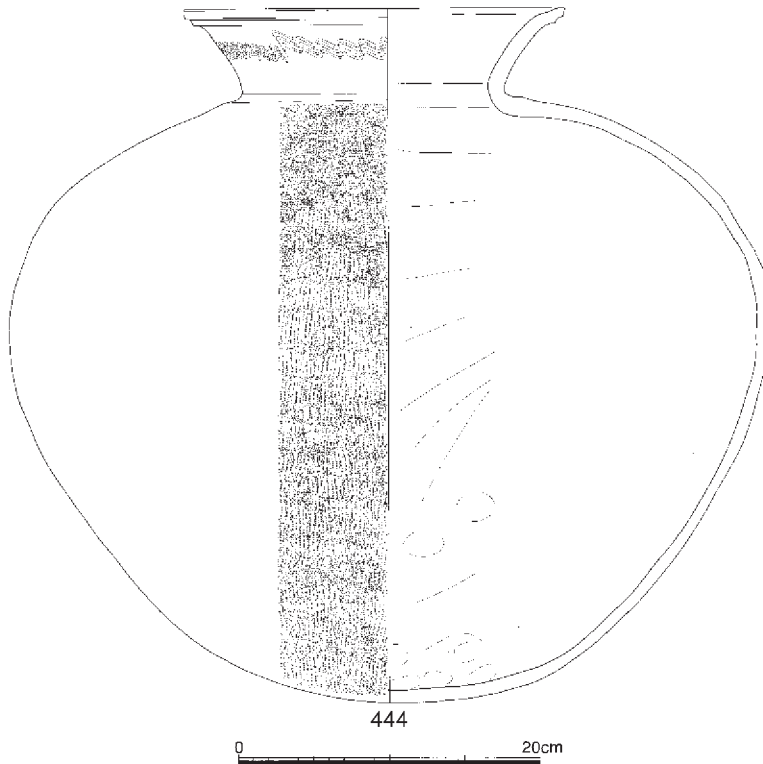
写真34 竪穴住居10（北東から）



- 1 灰黄褐色粘性微砂 (10YR4/2)  
(焼土粒含)
- 2 黒褐色粘性微砂 (10YR3/1)  
(黄褐色粗砂 (2.5Y5.6) 含・  
焼土塊・炭粒多含)



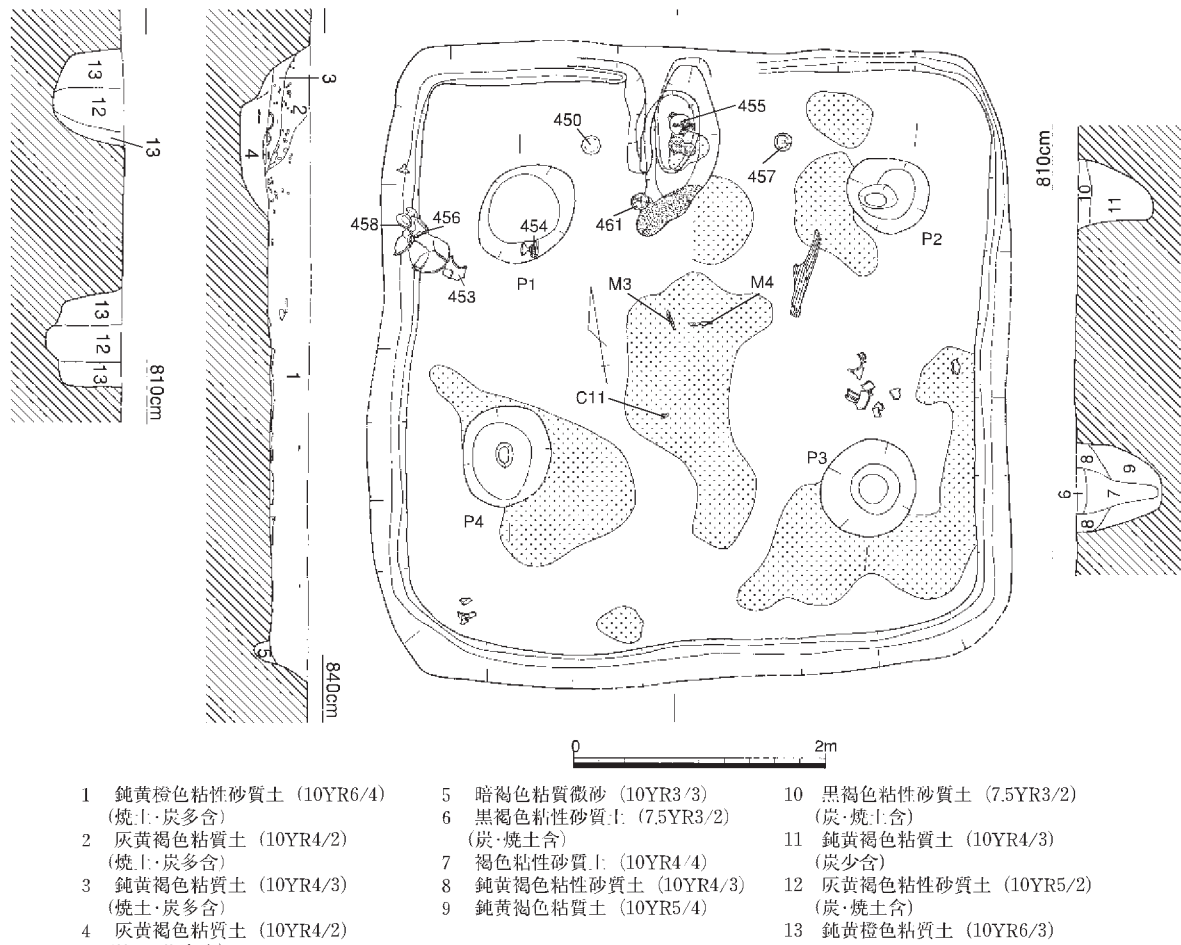
第338図 竪穴住居10カマド (1/30)・出土遺物① (1/4)



第339図 竪穴住居10出土遺物② (1/5)

竪穴住居11 (第331・340～342図、巻頭図版5、図版86・114・115・128～130)

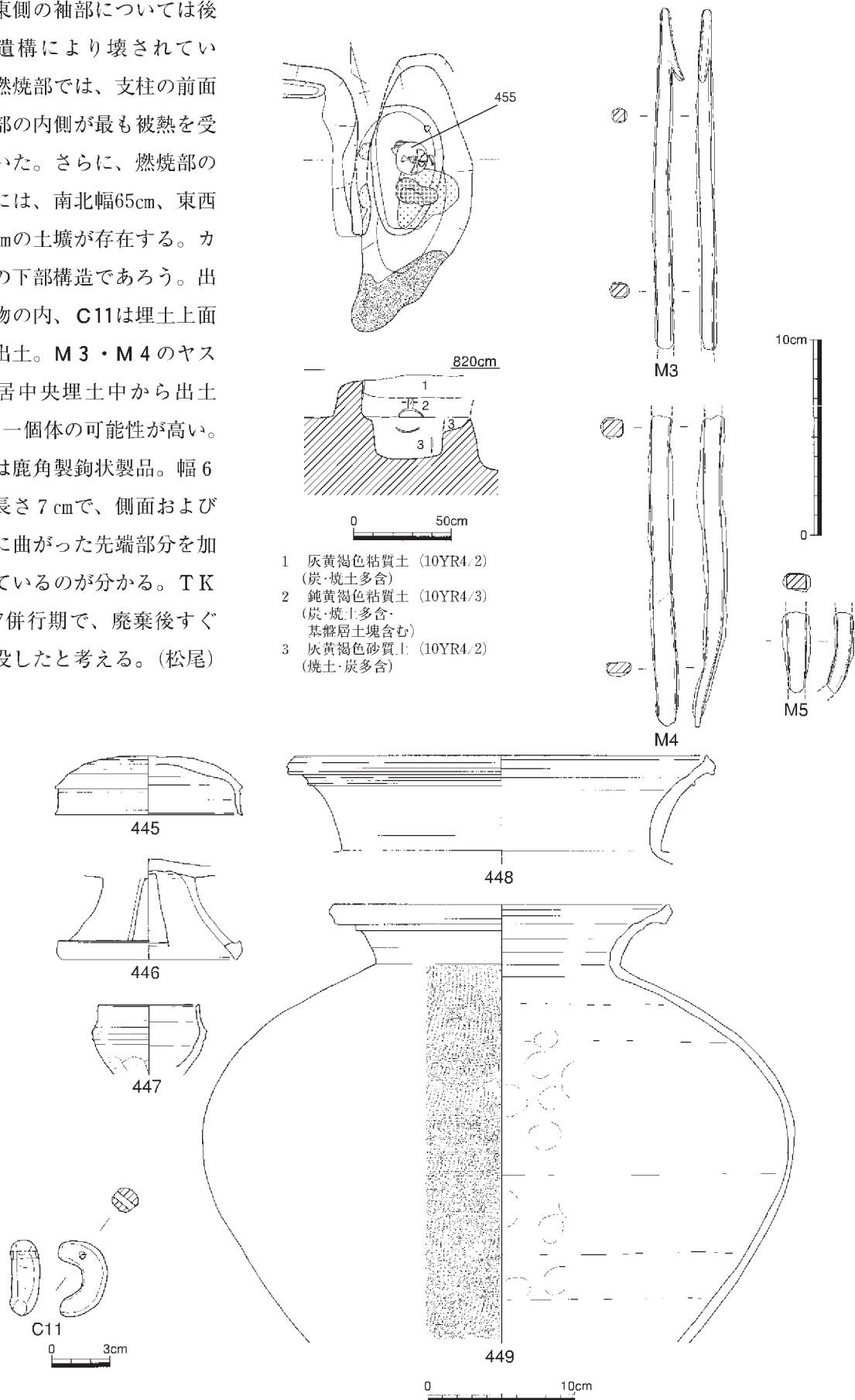
102Aの東端南寄りに位置する。一辺約5mの方形住居。主軸はほぼ南北で、北辺中央にカマドがつく。検出面から床面までの深さは約30cm。埋土中には炭や焼土が多く含まれていた。主柱穴は4個で、掘り方の直径は約60cm、深さは約70cmを測る。床面直上には炭層が見られ、床面は所々被熱を受けていた。焼失住居と思われる。北辺中央に付設されたカマドは、455の高杯を支柱として使用していた。



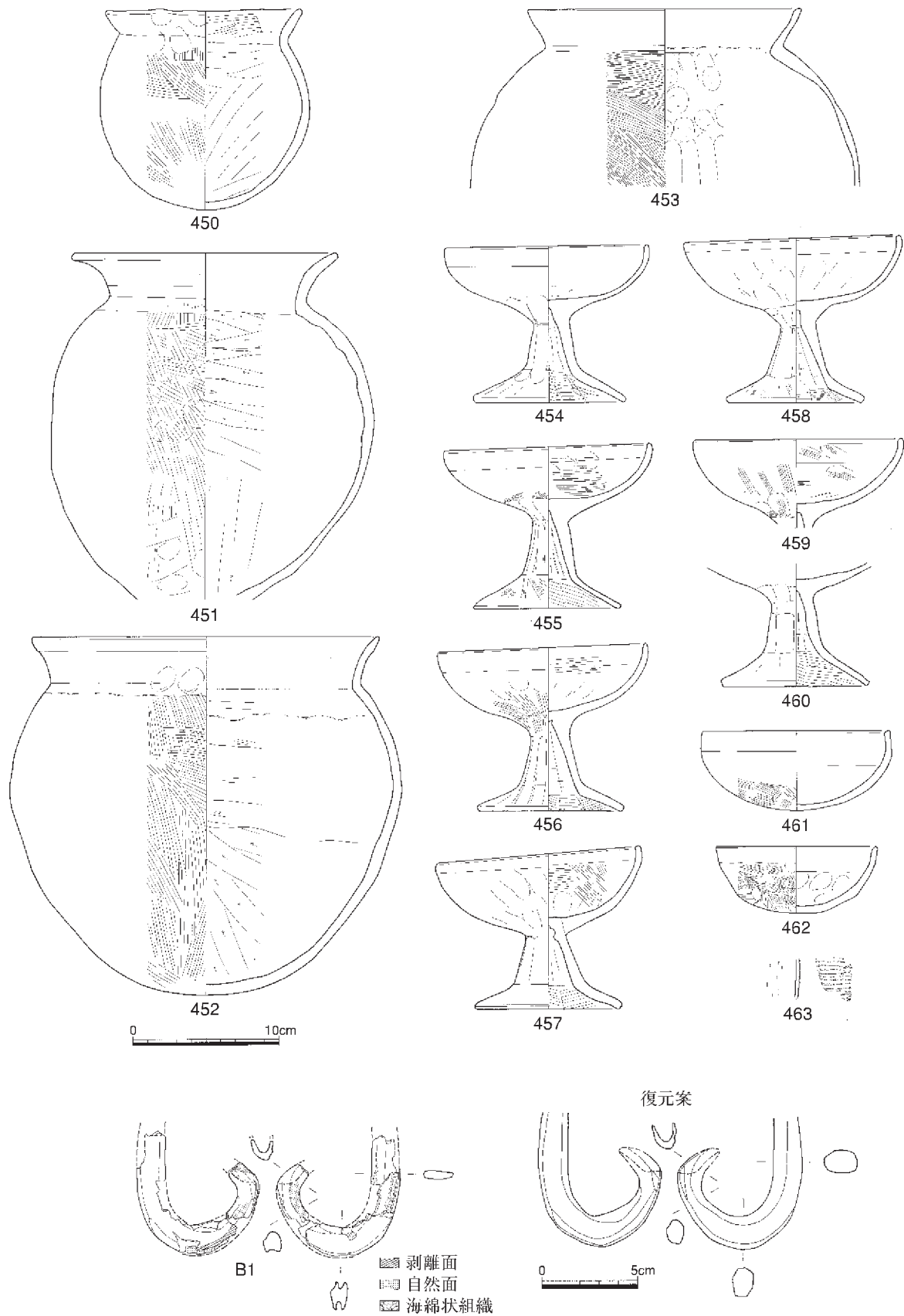
- |                                   |                                   |                                   |
|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 鈍黄橙色粘性砂質土 (10YR6/4)<br>(焼土・炭多含) | 5 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)               | 10 黒褐色粘性砂質土 (7.5YR3/2)<br>(炭・焼土含) |
| 2 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)<br>(焼土・炭多含)   | 6 黒褐色粘性砂質土: (7.5YR3/2)<br>(炭・焼土含) | 11 鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3)<br>(炭少含)     |
| 3 鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3)<br>(焼土・炭多含)   | 7 褐色粘性砂質土 (10YR4/4)               | 12 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR5/2)<br>(炭・焼土含) |
| 4 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)<br>(焼土・炭多含)   | 8 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)             | 13 鈍黄橙色粘質土 (10YR6/3)              |
|                                   | 9 鈍黄褐色粘質土 (10YR5/4)               |                                   |

第340図 竪穴住居11 (1/60)

なお東側の袖部については後世の遺構により壊されている。燃焼部では、支柱の前面と袖部の内側が最も被熱を受けていた。さらに、燃焼部の下部には、南北幅65cm、東西幅35cmの土壌が存在する。カマドの下部構造であろう。出土遺物の内、C11は埋土上面から出土。M3・M4のヤスは住居中央埋土中から出土し、同一個体の可能性が高い。B1は鹿角製鉤状製品。幅6cm、長さ7cmで、側面および鉤状に曲がった先端部分を加工しているのが分かる。TK23・47併行期で、廃棄後すぐに埋没したと考える。(松尾)



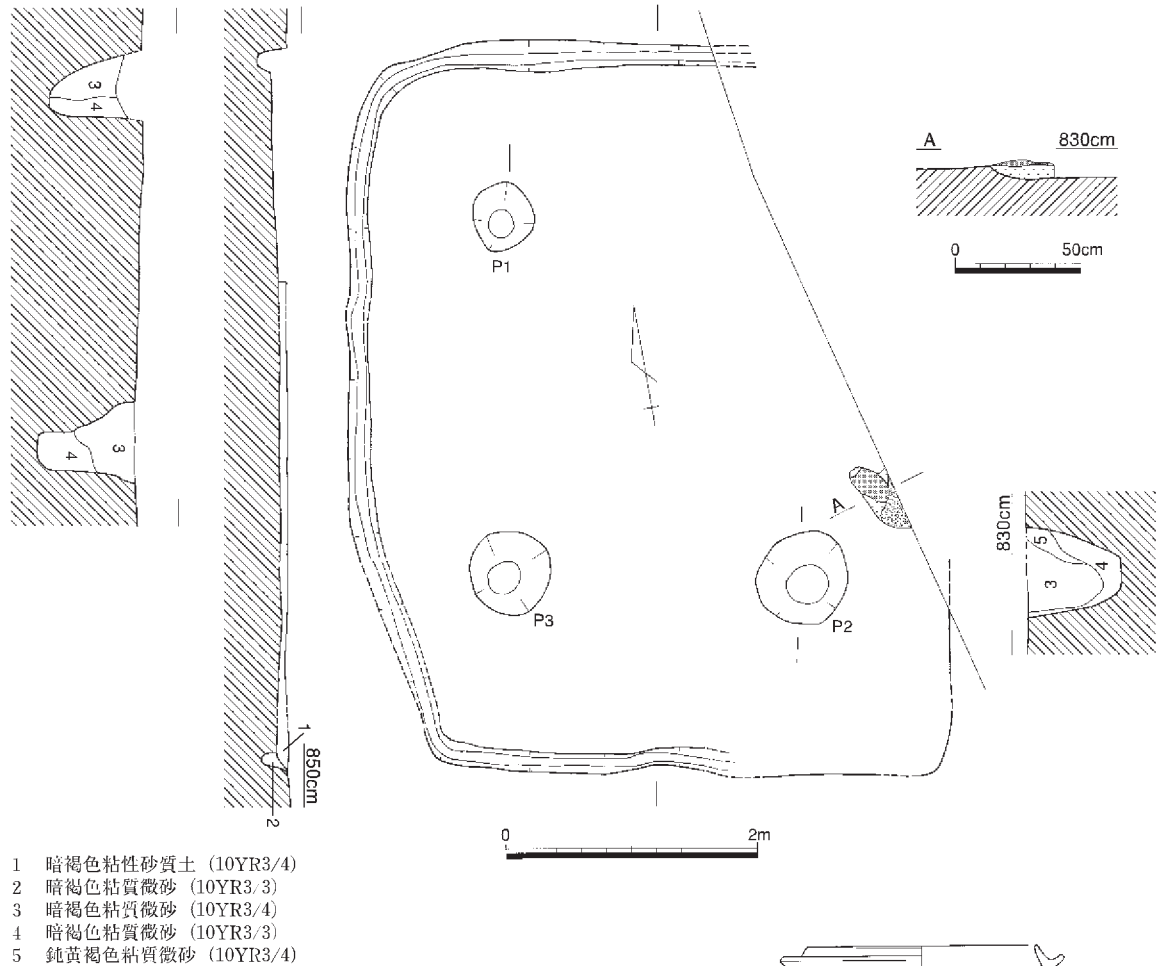
第341図 竪穴住居11カマド (1/30)・出土遺物① (1/3・1/4)



第342図 豎穴住居11 出土遺物② (1/4・1/3)

竪穴住居12 (第331・343図、図版87・115)

104Aの南西で、後述の竪穴住居13と南東端が重なっている。北東の一角を欠いているものの、長軸5.74m、短軸4.8mを測る長方形の住居である。支柱穴は4個であるが、その内の3個のみを確認した。検出面から床面までの深さはわずか10cm足らずである。周囲に壁体溝を巡らす。南東隅は竪穴住居13との切り合い関係から検出しきれなかった。カマドが無い代わりに、南東隅に被熱面を確認し

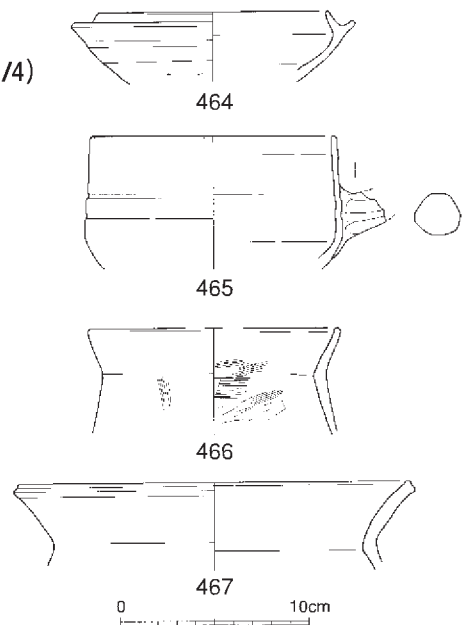


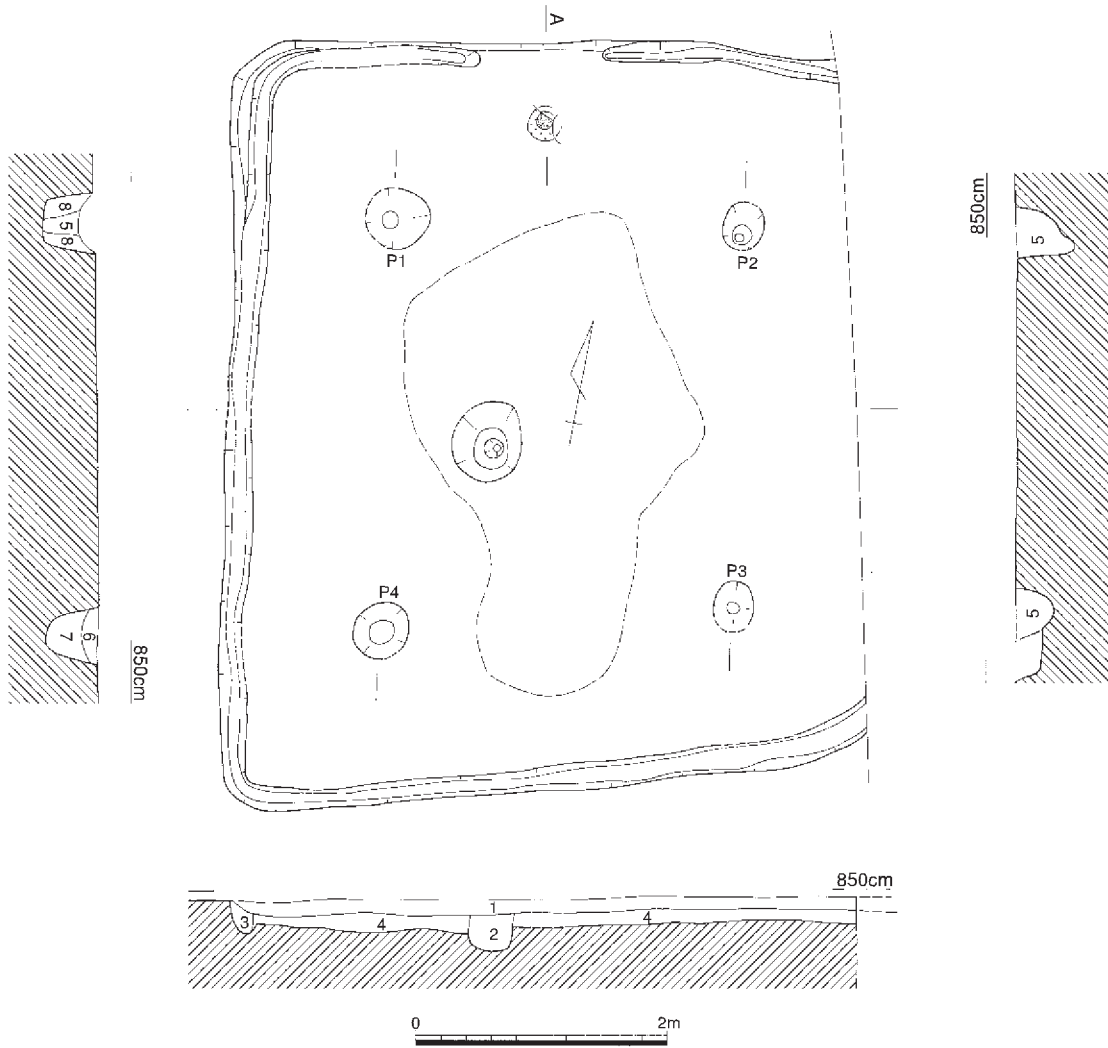
第343図 竪穴住居12 (1/60)・被熱面 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ている。出土遺物は464の須恵器杯身で口径12.1cm、465は把手付鉢。466・467は土師器の甕。TK209型式併行期であろう。(松尾)

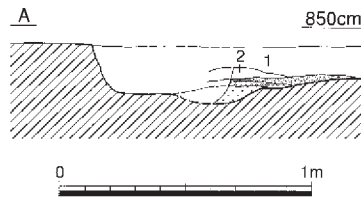
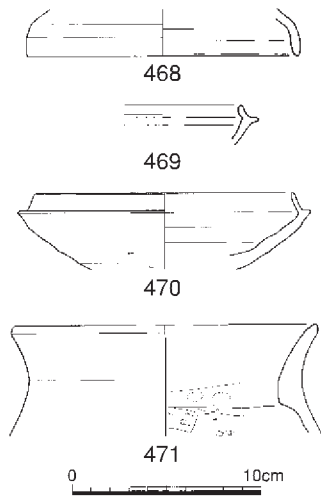
竪穴住居13 (第331・344図、図版87)

104AとCの境で検出した。平面形は東の一角を検出しきれないものの、長軸が5.9m、短軸は約5.4mを測るやや南北に長い方形を呈する。検出面から床面までの深さは10cm程であった。支柱穴は4個で、中央付近に土壇を1基確認している。なお、床面中央の点線は、堅くしまった範囲を示している。周囲には壁体溝を巡らす





- |  |                                     |                                   |
|--|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/4)<br>(Fe含・Mn少含)     | 3 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y4/2)<br>(Fe含・Mn少含) | 6 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)<br>(Fe・炭含)    |
| 2 暗オリーブ褐色粘性砂質土 (2.3Y3/5)<br>(Fe含・Mn少含) | 4 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y4/2)<br>(Fe含・Mn少含) | 7 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)<br>(Fe・Mn含) |
|  | 5 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)<br>(Fe・Mn含)   | 8 褐色粘性砂質土 (10YR4/4)<br>(Fe含)      |



- |   |
|---|
| 1 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/4)<br>(Fe含・Mn少含)            |
| 2 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/4)<br>(明赤褐色焼土塊 (5YR5/8) 多含) |

が、北辺の中央で途切れており、その前面には被熱面をもつことから、本来はカマドが存在したと思われる。

出土遺物は468～470の須恵器蓋および杯、471の土師器の甕がある。468は口径14.4cm、470は口径13.6cmを測る。TK43型式併行期。(松尾)

第344図 竪穴住居13 (1/60)  
・カマド (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

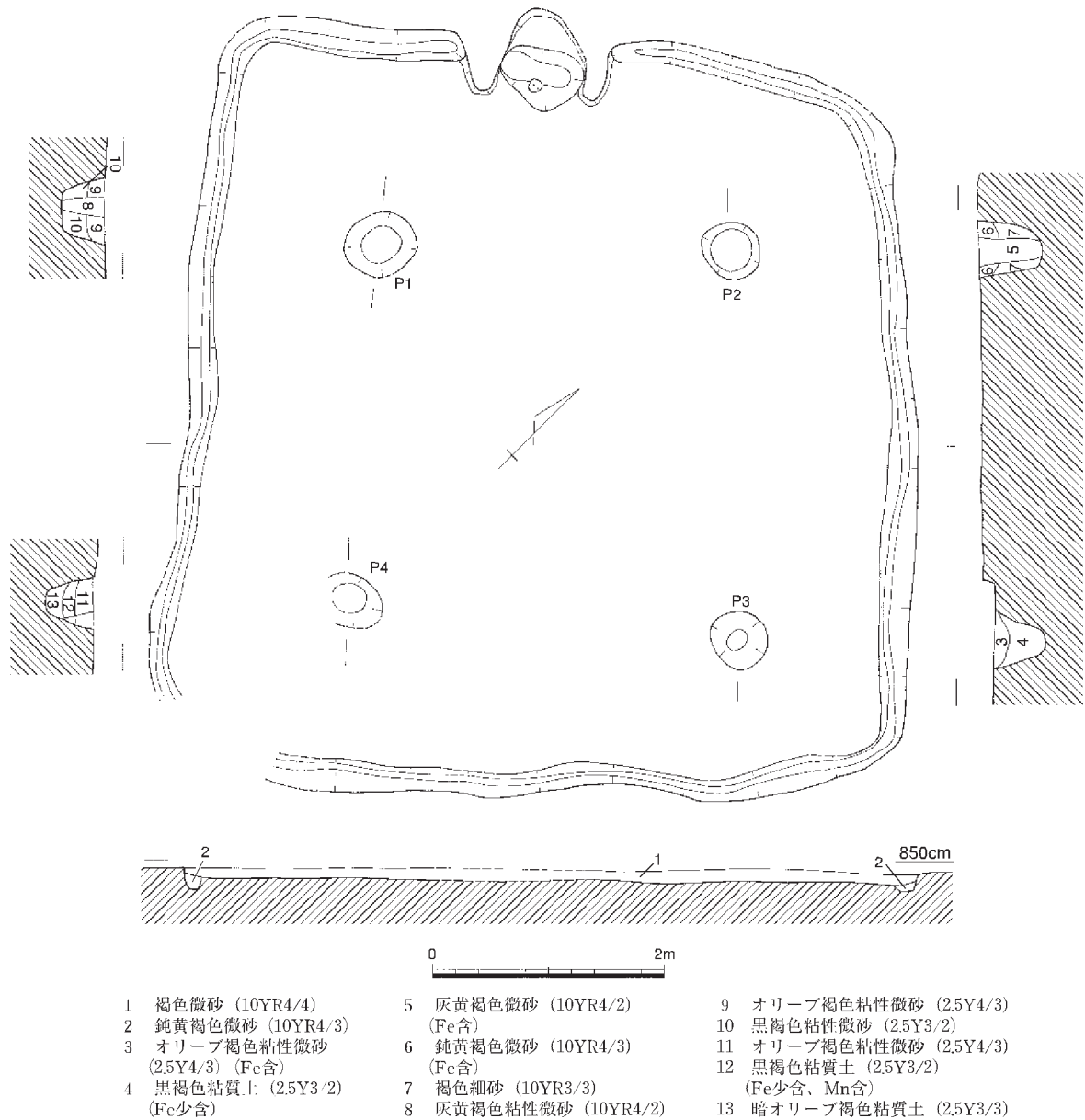
竪穴住居14 (第331・345・346図、写真35)

102Cから104Cにかけて検出した。平面形は長軸6.5m、短軸6.35mのやや南北に長い方形を呈する。床面積は37.5㎡で、

当集落内で最大の床面積をもつ。検出面から床面までの深さは10cm程である。主軸はN-45°-Wで、大きく西へ振っている。支柱穴は4個、周囲に壁体溝が巡り、北辺中央にカマドが付設している。カマドの燃焼部は、大部分が後世の柱穴により破壊されていたが、かろうじて被熱面のみは確認した。出土遺物は472・473の須恵器杯身で、口径は12.6cmと14.0cm。474は須恵器甕。TK43型式併行期。(松尾)

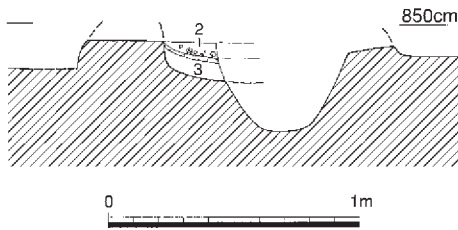
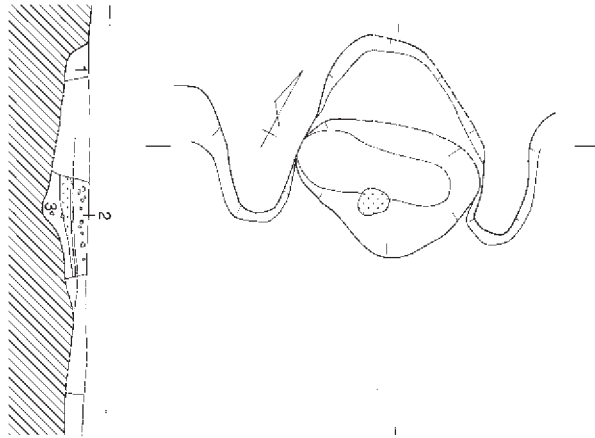


写真35 竪穴住居14調査風景 (西から)



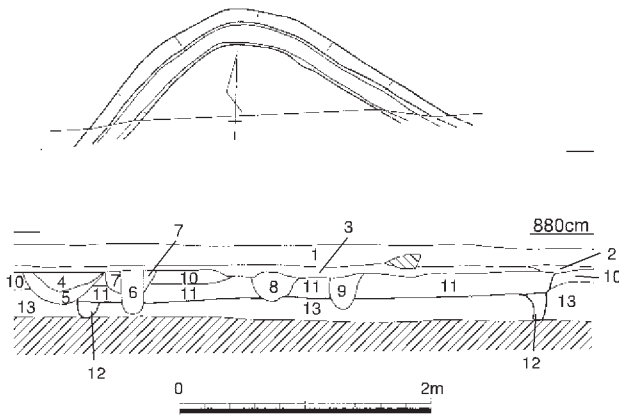
第345図 竪穴住居14 (1/60)





- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 1 黒褐色粘性細砂 (10YR3/1)<br>(焼土塊含)   | 3 褐色粘性細砂 (10YR4/4)<br>(被熱赤化 (2.5YR5/8)・<br>焼土・炭粒含) |
| 2 灰黄褐色粘性細砂 (10YR4/2)<br>(焼土粒多含) |  |

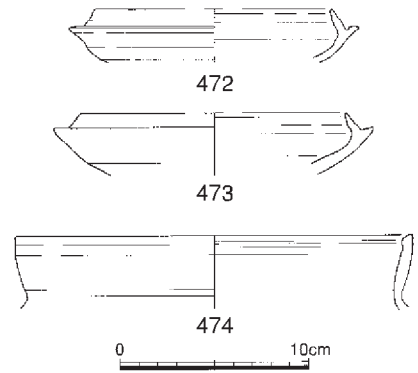
第346図 竪穴住居14カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)



- |   |   |
|---|---|
| 1 黒褐色粘質土 (10YR3/1)                            | 7 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)                                |
| 2 褐灰色微砂 (10YR4/1)<br>(砂粒少混)                   | 8 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)                                 |
| 3 灰黄褐色混暗褐色粘質微砂<br>(10YR4/2・10YR3/4)<br>(Fe多含) | 9 灰黄褐色混褐色粘質微砂<br>(10YR5/2・10YR4/4)<br>(Fe多含)        |
| 4 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)<br>(焼土塊多含)                | 10 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)                               |
| 5 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)<br>(炭粒・焼土少含)             | 11 灰黄褐色混褐色粘質微砂<br>(10YR4/2・7.5YR4/6)<br>(Fe多含・住居糞土) |
| 6 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)                          | 12 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)                                |
|   | 13 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)                               |

第347図 竪穴住居15 (1/60)

には478の甕がカマドに掛けられたそのままの状態で見残されている。燃焼部の中央および袖部の内面には被熱痕跡が顕著である。出土遺物は土器のみで、埋土中から出土した475の須恵器杯身以外は、土器の甕・高杯・鉢・甌である。TK208型式併行期か。(松尾)



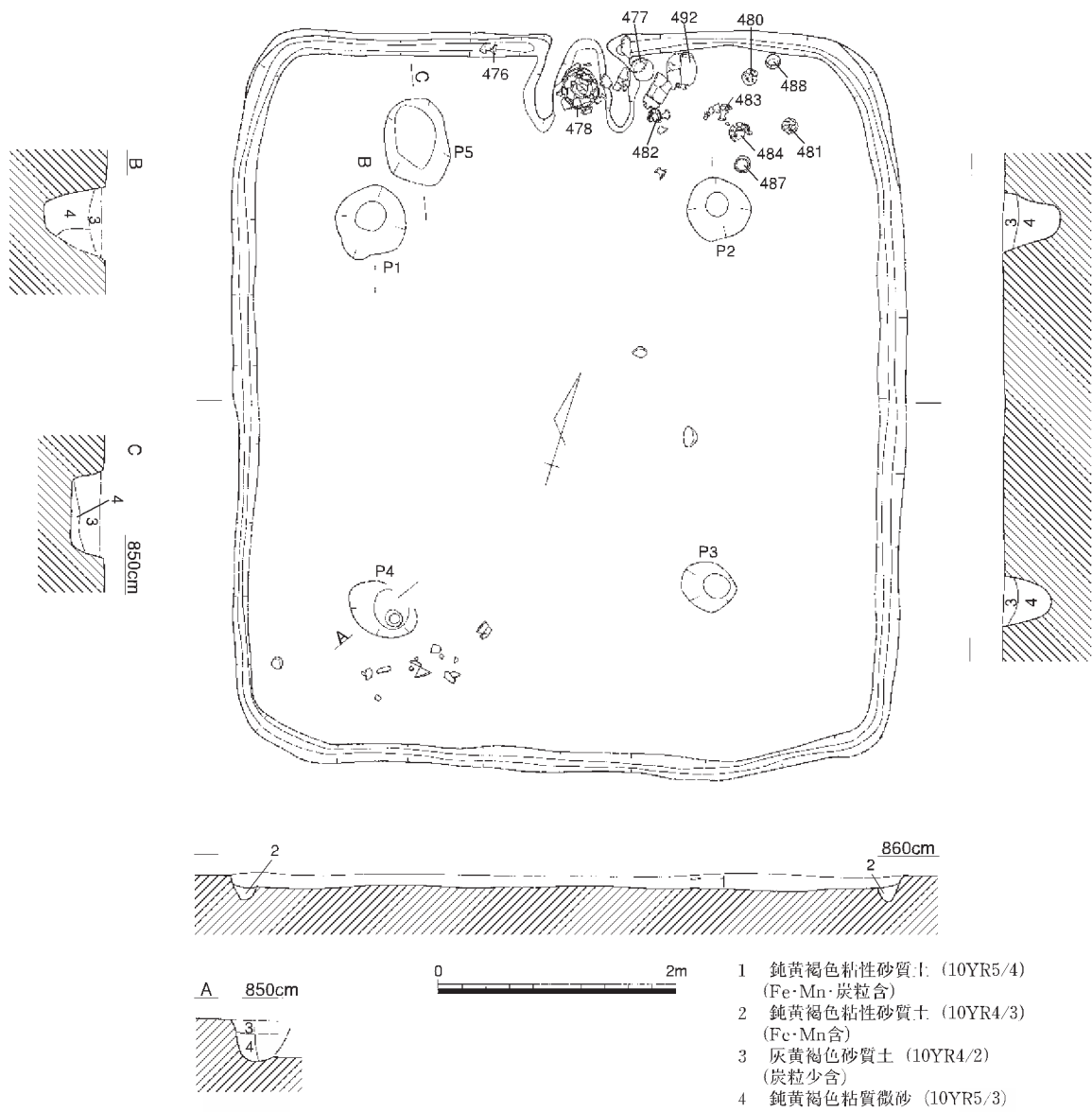
竪穴住居15 (第331・347図、図版88)

104Cの南に位置し、方形住居の北東一角を検出したにすぎない。調査区の南壁でその土層断面を観察すると、第11層および第12層が埋土であることが分かる。住居の周囲には幅30cm、深さ15cm程の壁体溝が巡っていた。

なお出土遺物が皆無であることから、その時期を決めるのは難しい。埋土および周囲の状況から、古墳時代後期と思われる。(松尾)

竪穴住居16 (第331・348～350図、写真36・37、図版88・89・115・116)

104Cのやや北西よりで、竪穴住居13の南に位置する。長軸6.17m、短軸5.68mを測る、やや南北に長い方形住居である。主軸はN-17°Wで、やや西へ振っている。支柱穴はP1～4の4個。検出面から床面までの深さは15cm程度で、周囲には幅約25cm、深さ約10cmの壁体溝が巡る。北辺中央にはカマドが取り付けられ、その周囲には多くの土師器が残されていた。カマドの燃焼部中央には支柱として使用された479の土師器高杯が杯部を下にして置かれ、その上



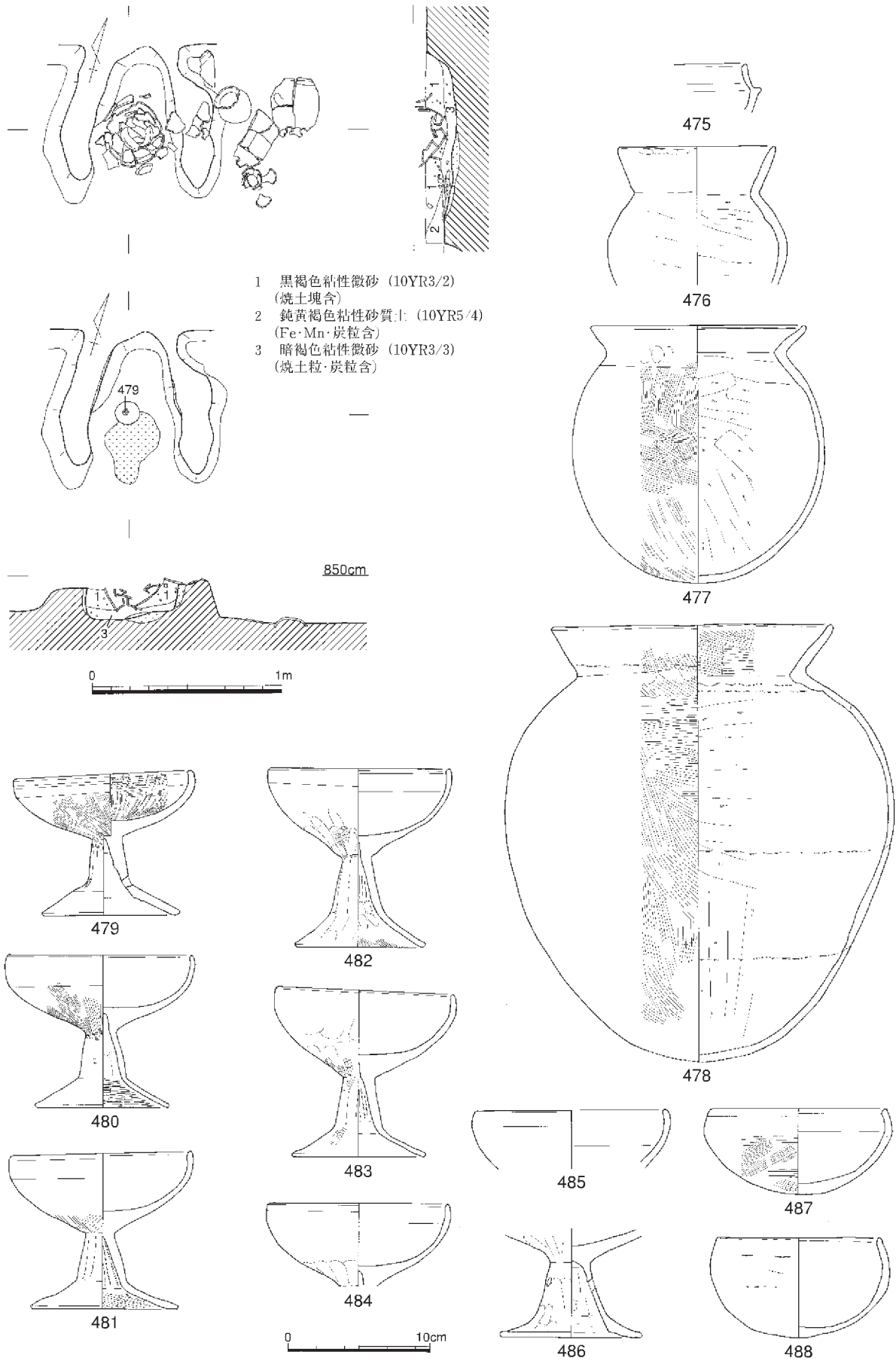
第348図 竪穴住居16 (1/60)



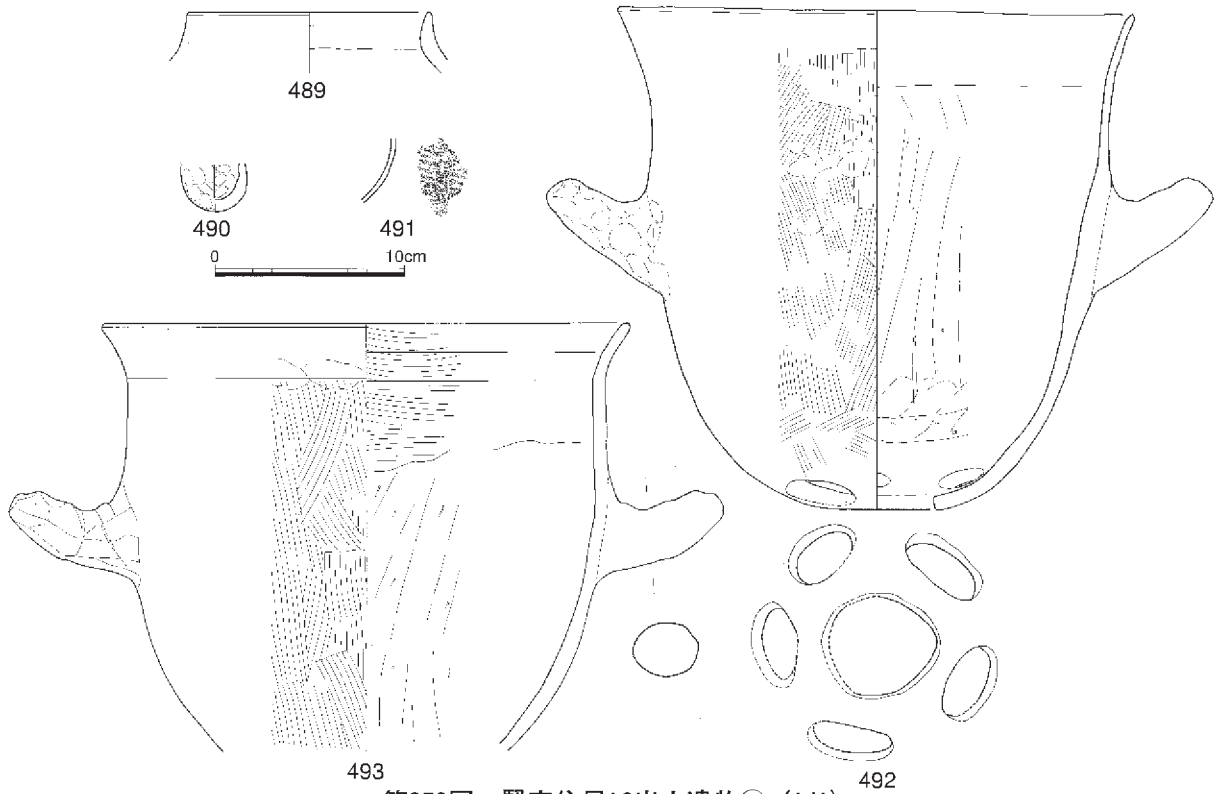
写真36 竪穴住居16調査風景 (南から)



写真37 竪穴住居16カマド周辺 (南東から)



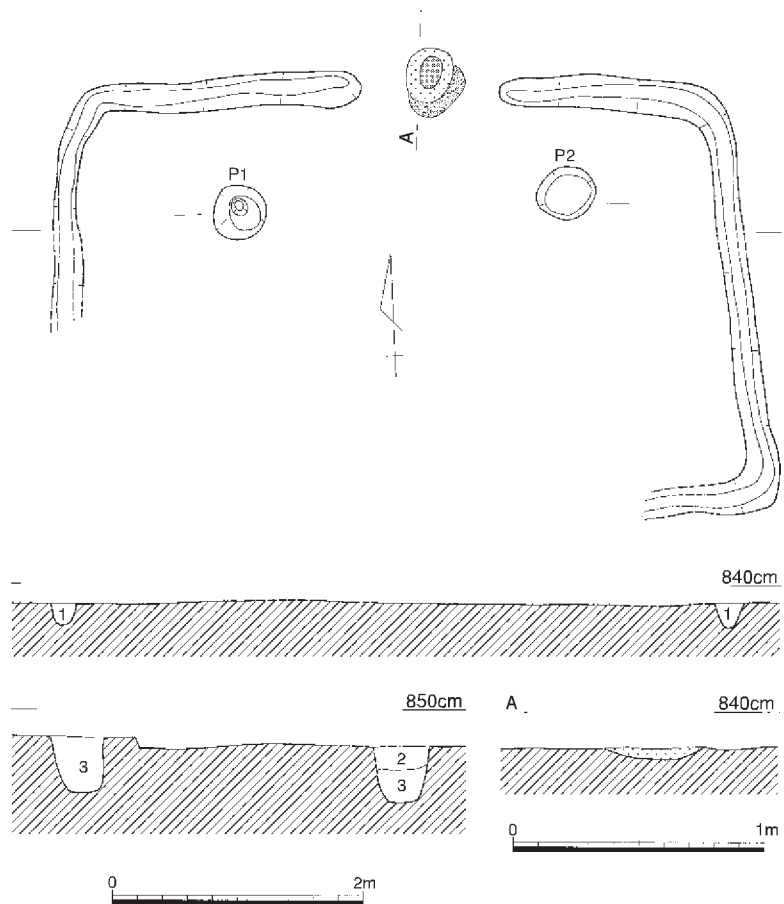
第349図 竪穴住居16カマド (1/30)・出土遺物① (1/4)



第350図 竪穴住居16出土遺物② (1/4)

竪穴住居17 (第332・351図、写真40、図版89・90)

104Aの南東角に位置し、竪穴住居18を重複して検出された平面長方形を呈す住居である。検出時点で既に上部の大半を削平を受けており、埋土は確認されず、わずかに壁体溝とカマドの被熱面、柱穴2個を検出するに留まった。規模は5.5m×推定3.6m、推定床面積18.6㎡を測る。柱穴間距離は東西約2.6mを測る。



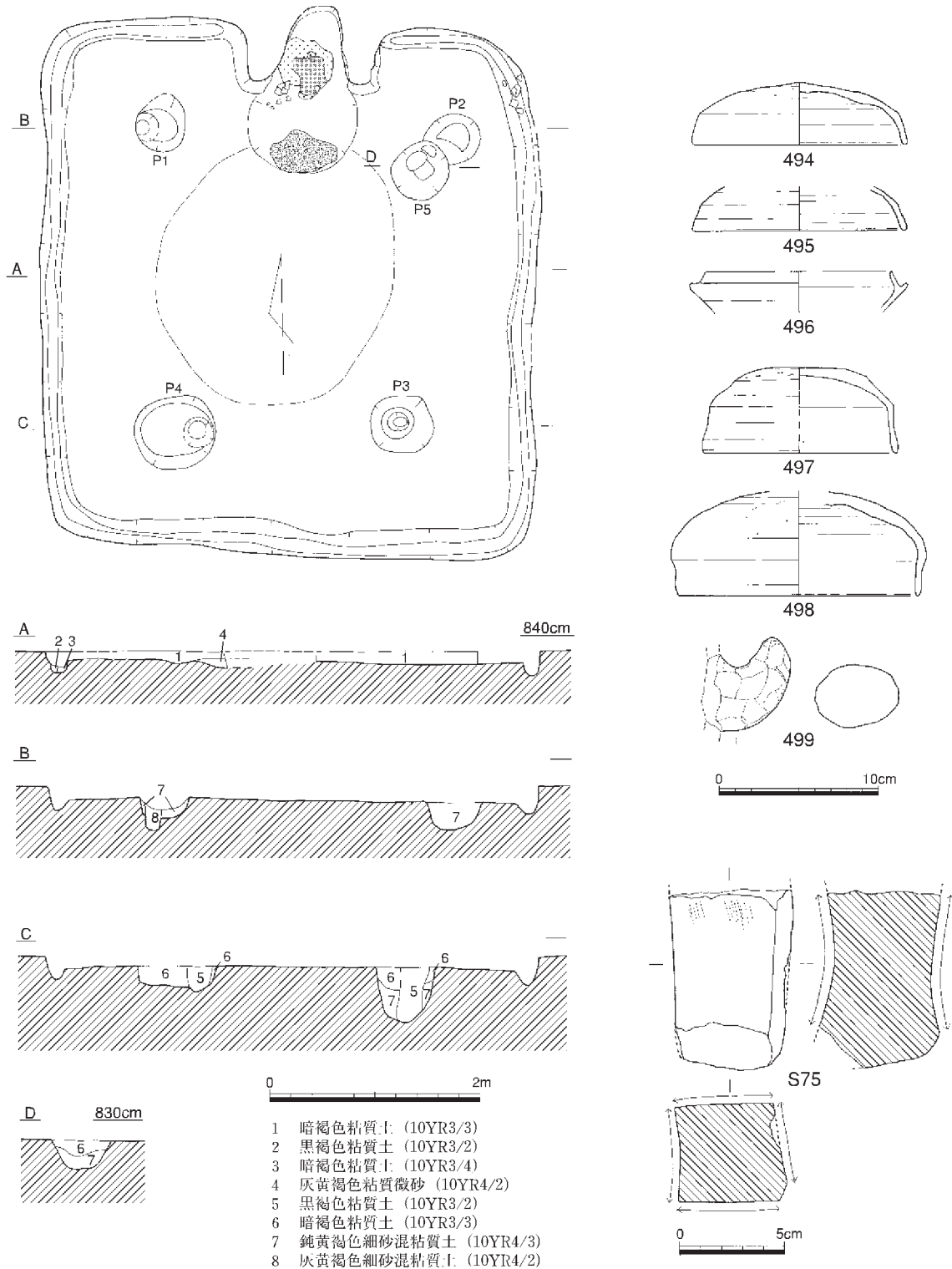
- 1 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR4/3)  
(黄灰色砂質土 (2.5Y6/1) 混)
- 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)
- 3 暗褐色粘性砂質土 (10YR3/3)

第351図 竪穴住居17 (1/60)・カマド (1/30)

カマドは北辺中央に設置されており、被熱面は北壁より若干突出していた。遺物は床面下から須恵器杯片が出土しており、後述する竪穴住居18より新しいTK217併行期のものと判断される。(江見)

竪穴住居18 (第332・352・353図、写真40、図版90・116・128)

104A南東角で、竪穴住居17の南に位置する。南北5.05m×東西4.7mの方形を呈する。主柱穴は4個である。床面中央破線内でよくしまった部分を確認できた。北辺中央にカマドを有し、カマドの主軸は竪穴住居の主軸よりやや東に傾



第352図 竪穴住居18 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

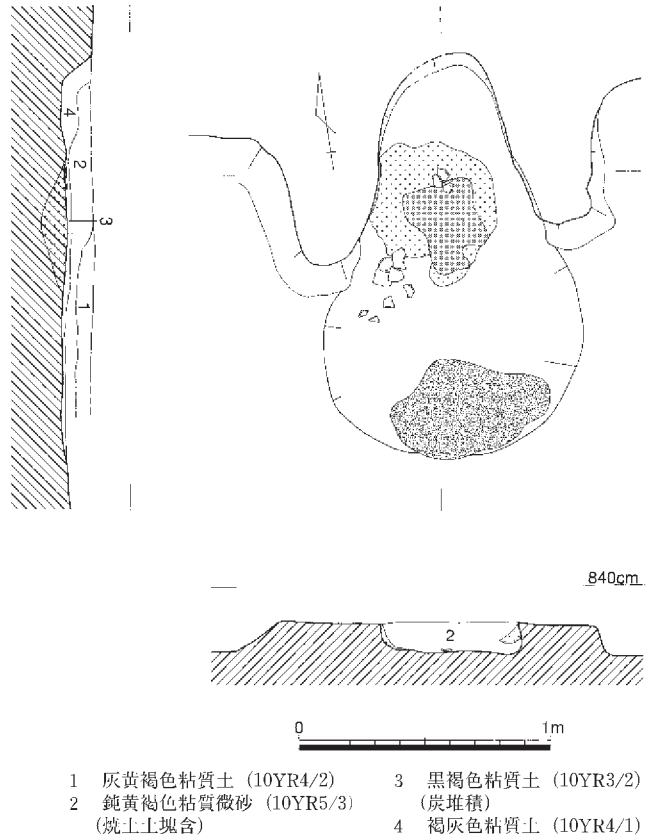
く。カマド内面はよく焼け、中から前面にかけて炭が堆積していた。

出土遺物のうち494～496、499は覆土から、497・498は壁体溝北東角から、S75は壁体溝南東角から出土した。カマド内から土師器甕細片が、覆土から鉄釘や鉄滓も出土している。須恵器497・498は口縁部に強いヨコナデを施した特殊な器形で、大形の蓋と考えられる。覆土からは沈線化した稜の残る杯蓋も出土しており、居住していた時期は遡る可能性があるが、TK209新段階には埋没していたと考えられる。（渡邊）

竪穴住居19（第332・354図、写真38・39・40、図版90・116）

106C北西角で、竪穴住居18の南東に位置する。南北4.22m×東西4.15mの方形を呈し、北辺中央にカマドを有する。5個の柱穴が確認さ

れているが、埋土から、P1・2・4・5の4個が支柱穴となる可能性が高いと考えている。床面中央破線範囲内がよくしまり、カマドの主軸が竪穴住居の主軸より東へ傾くなど、竪穴住居18と共通する要素が看取される。カマド内から前面にかけて炭が堆積し、炭層上下両面において被熱痕跡が観察された。壁体溝は床面からの深さ7～10cmで、底面は外側が一段低く、2段を成す。



第353図 竪穴住居18カマド (1/30)



写真38 竪穴住居19カマド (南東から)



写真39 竪穴住居19調査風景 (西から)

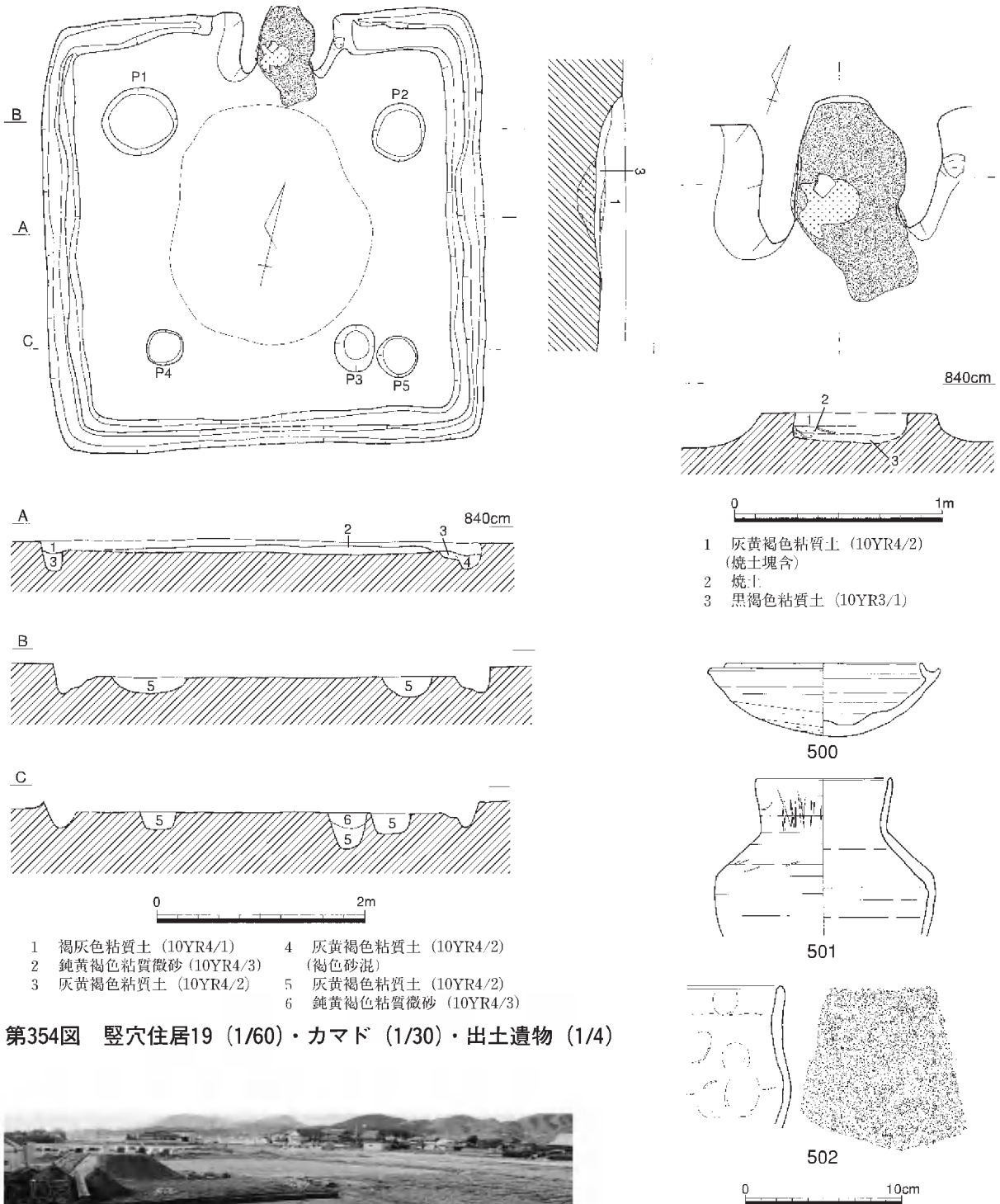
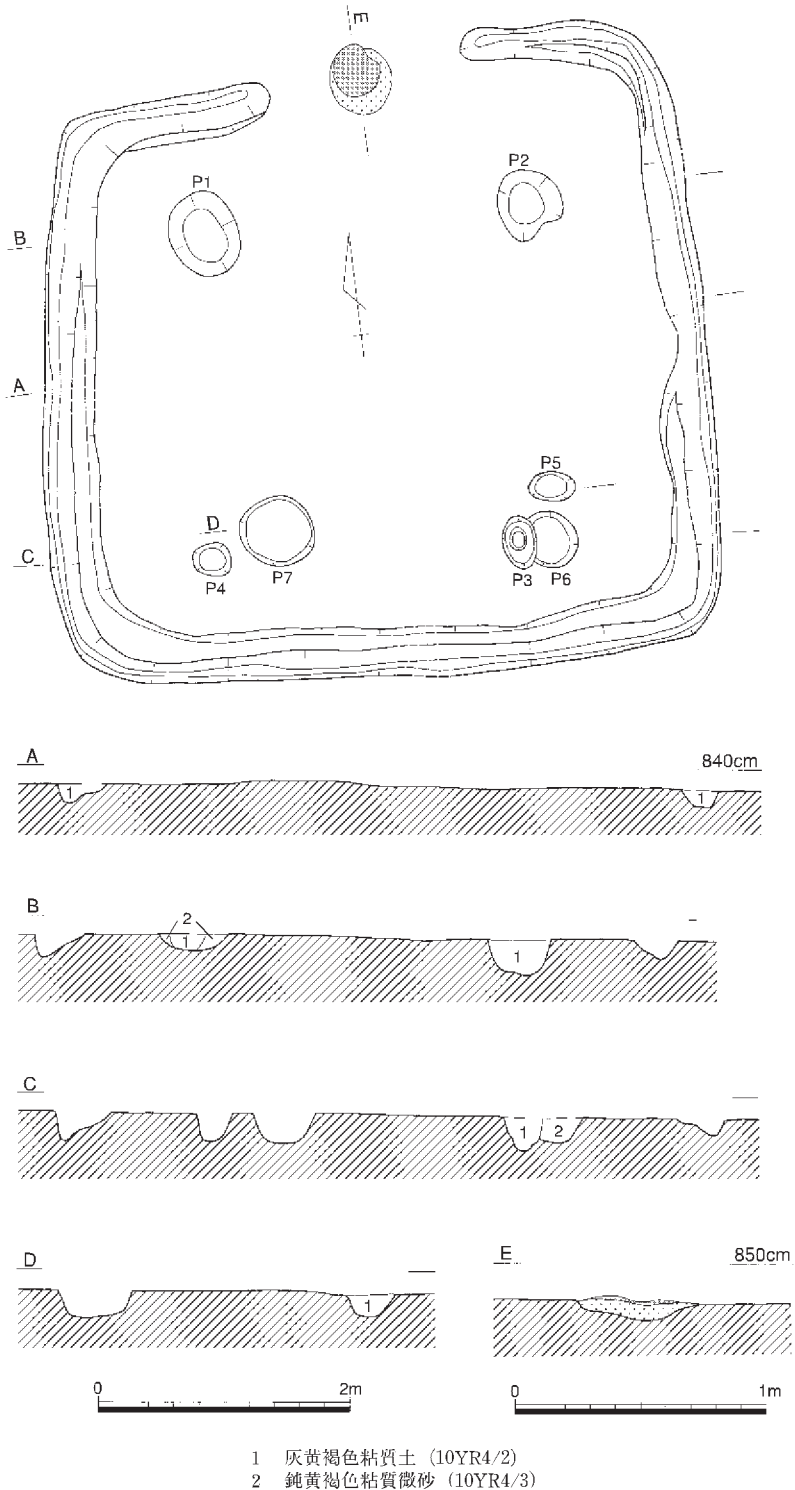


写真40 竪穴住居17~20周辺 (南東から)

出土遺物のうち、須恵器500・501はカマド東側からP 2 周辺で、製塩土器502はカマド内から出土した。カマド内からは鉄滓や獣骨も出土している。TK 209段階に比定され、竪穴住居18と同じ頃埋没したと考えられる。(渡邊)

竪穴住居20 (第332・355図、写真40)

106 A 南端中央で、竪穴住居19の東に位置する。南北5.23m×東西4.93mの方形を呈する。検出面は8.25mで、竪穴住居19の床面より10cm程度高く、床面は削平を受けていた。主柱穴は4個と思われるが、南東は3個、南西は2個と複数検出されている。P 3-4、P 6-7の対応関係を想定でき、柱の抜き替えが行われた可能性も考えられる。カマドは上部すべてが削平されているが、壁体溝北辺中央部が約1.5m途切れており、その間に径50cmの円形の被熱により赤変した部分が認められ、火床の痕跡ととらえられる。壁体溝は幅40cm前後と広く、外側が一段低くなる特徴を有する。時期の特定はできないが、カマド上面から須恵器甕片が出土している。切り合いからTK23段階の須恵器が出土した溝7よりは新しく、古墳時代後期と考えられる。(渡邊)

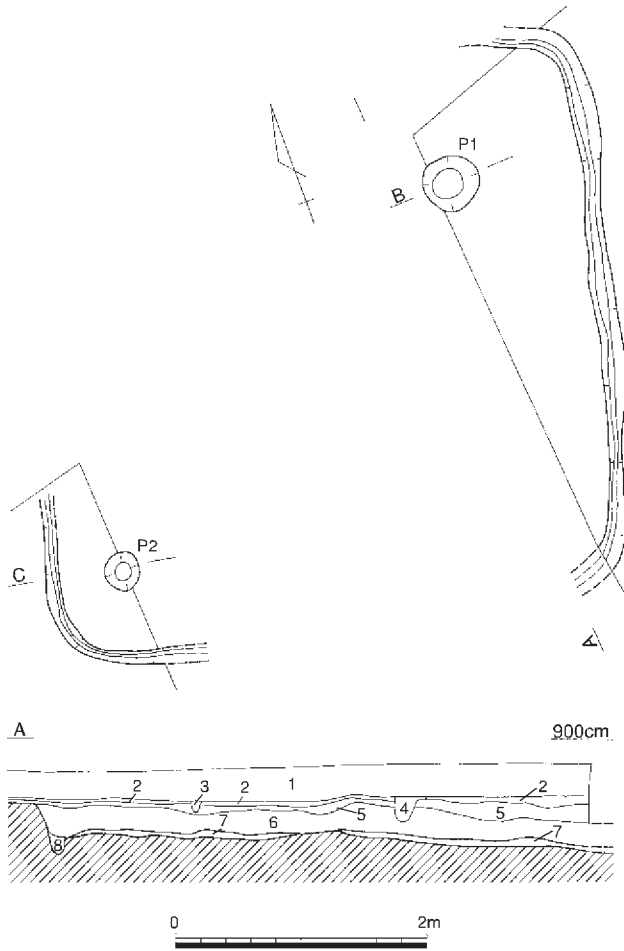


第355図 竪穴住居20 (1/60)・カマド (1/30)

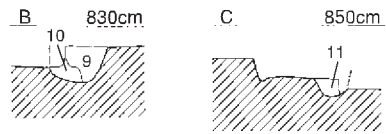
竪穴住居21 (第332・356図)

108Aの西端中央付近に位置し、住居の大半を農道および用水導入路によって調査できなかった。



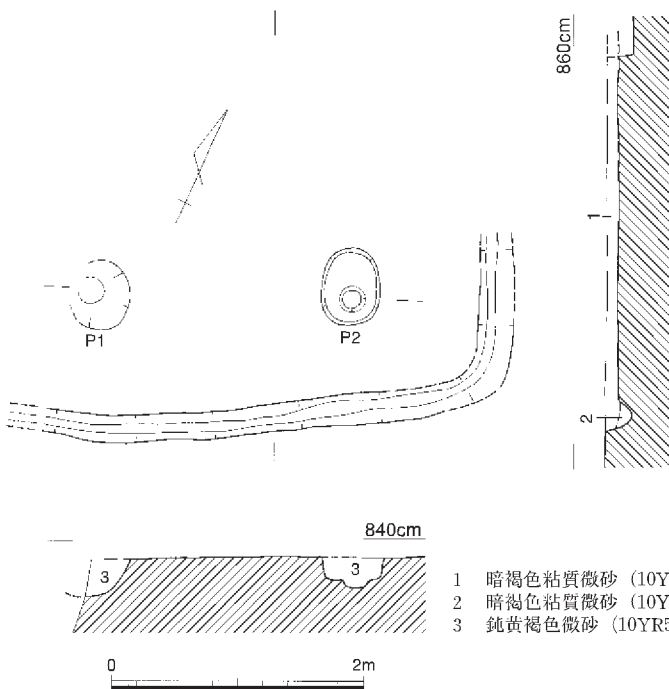


平面形態は方形を呈し、規模は推定約4.8×4.7m、床面積21㎡を測るものと思われる。柱穴は2個のみを検出し、P1は径約40cm、深さ約30cmを測るが、P2は小規模で位置関係からも住居の主柱穴とは考えにくい。遺物は少なく、土師器・須恵器の細片が出土するのみであった。後期に埋没したものであろう。(江見)



- 1 灰色粘質土微砂 (5Y4/1)
- 2 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) (Mn多含)
- 3 鈍黄褐色粘質土 (10YR4/3)
- 4 灰黄色弱粘性砂質土 (2.5Y6/2)
- 5 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/3)
- 6 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y4/1)
- 7 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y6/1) (浅黄色粘性砂質土 (2.5Y7/4) 混)
- 8 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)
- 9 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)
- 10 褐色弱粘性砂質土 (10YR4/4)
- 11 暗褐色粘性砂質土 (10YR3/4)

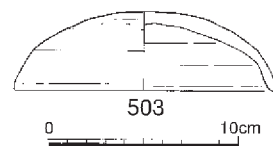
第356図 竪穴住居21 (1/60)



竪穴住居22 (第332・357図、図版91)

108Aの北西部に位置し、住居の西部を中世溝12に切られ、北部は調査区外に延びる住居で、平面方形を呈す。主柱穴は2個検出しており、柱穴の位置から推定すれば、規模は一辺4.5m、床面積18㎡余りを測るであろう。なお、柱穴はいずれも径

- 1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)
- 2 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)
- 3 鈍黄褐色微砂 (10YR5/3)



第357図 竪穴住居22 (1/60)・出土遺物 (1/4)

約50cm、深さ25~30cmと浅い。遺物は少なく、図示し得たのはわずかに須恵器蓋503のみで、TK 209 併行期に埋没したのか。(江見)

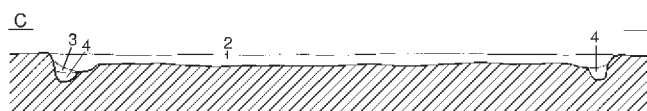
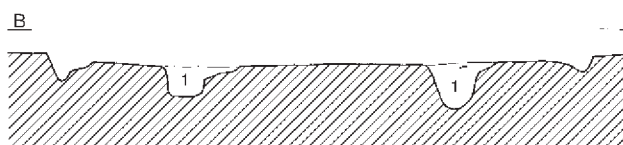
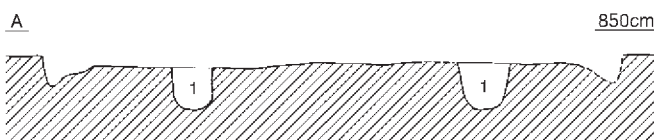
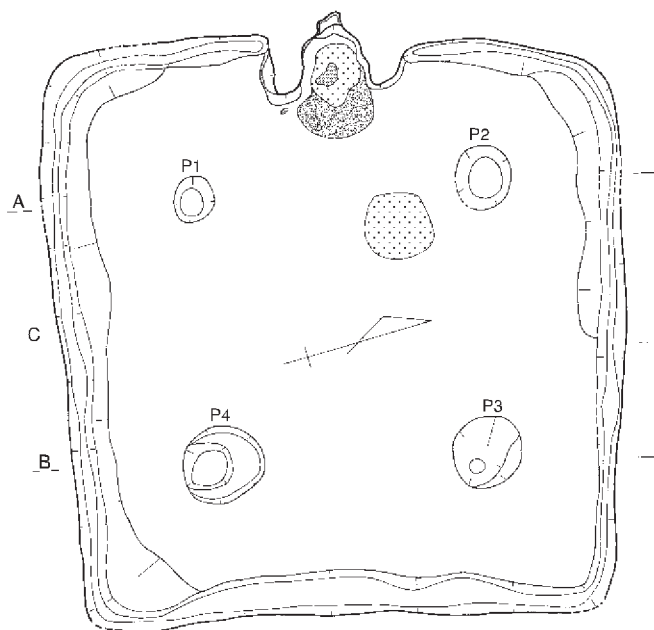
竪穴住居23 (第333・358図、図版91)

108C 東端で、掘立柱建物12の北に位置する。東西4.62m×南北4.46mの方形を呈する。支柱穴は4個で、西辺中央にカマドを有する。カマド底面はよく焼け、カマド内には炭・焼土が堆積していた。またP2南側にも炭・焼土が集中的に散布する範囲が認められた。壁体溝は幅広で、段を成すまでは行かないが、外側に向かって緩やかに傾斜している。

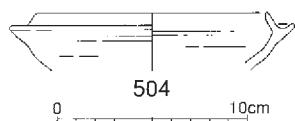
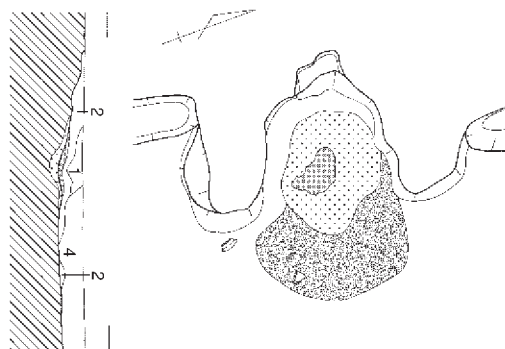
細片のため図示し得なかったが出土遺物は比較的多く、鉄滓も出土している。カマド前面から須恵器杯身504が、壁体溝東辺から高杯脚柱部片が出土している。TK 209段階に比定される。(渡邊)

竪穴住居24 (第333・359・360図、写真41、図版91・131)

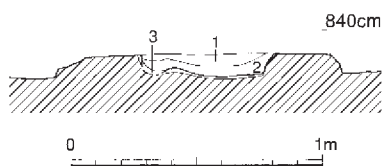
110C 南西角付近、竪穴住居23の南に位置する。東西5.04m×南北4.5mの方形で、北辺中央にカマドを有する。カマドの袖は短く、前面には浅い皿状のくぼみがあった。火床と思われる被熱面や袖との位置関係から、このくぼみはカマドの外にあると考えられる。



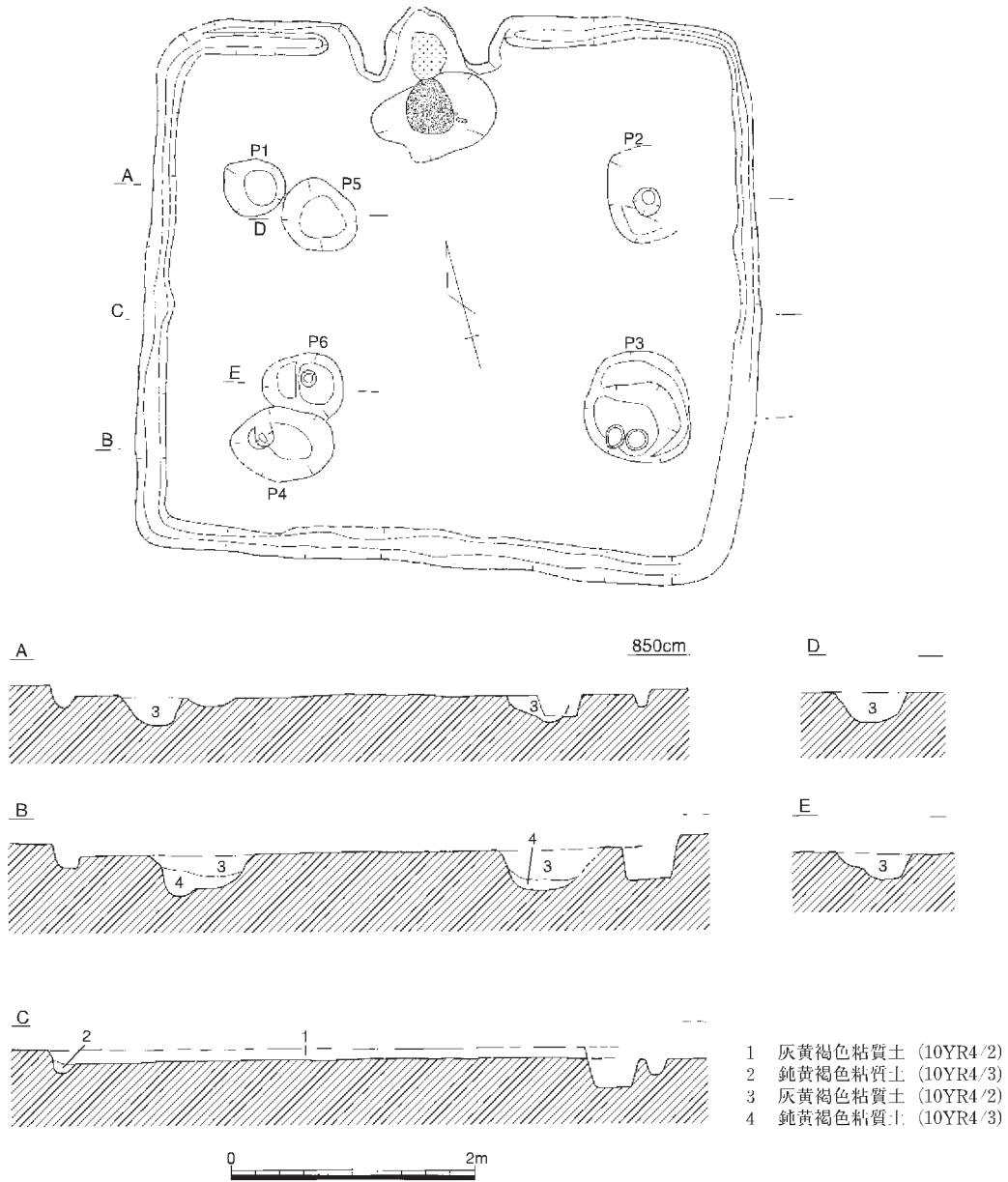
- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
- 3 褐色粘質土 (10YR4/4)
- 4 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)



- 1 赤褐色土 (5YR4/6) (焼土堆積)
- 2 黒褐色粘質土 (10YR2/2) (焼土塊混・炭・灰堆積層)
- 3 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR5/4)
- 4 暗褐色粘質土 (10YR3/3)



第358図 竪穴住居23 (1/60)・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)

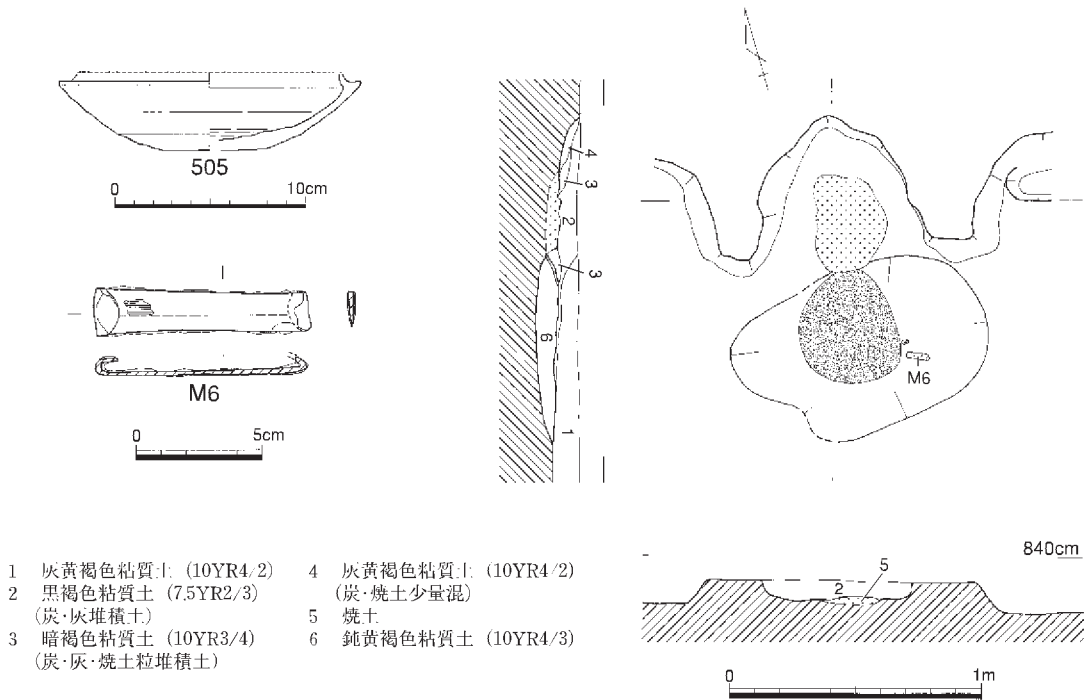


第359図 竪穴住居24 (1/60)



写真41 竪穴住居24調査風景 (西から)

しかし、くぼみ上面が被熱し、炭が堆積していることから、カマド使用時には埋まった状況と考えられ、除湿などのために事前に設けられた可能性を想定できる。鉄鎌M6はくぼみ上面で出土し、近くには鉄滓もあった。支柱穴は4個と思われるが、北半部では2個ずつあり、P3では柱痕が



第360図 竪穴住居24カマド (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

2か所確認されたことから、柱の抜き換えが行われた可能性も考えられる。

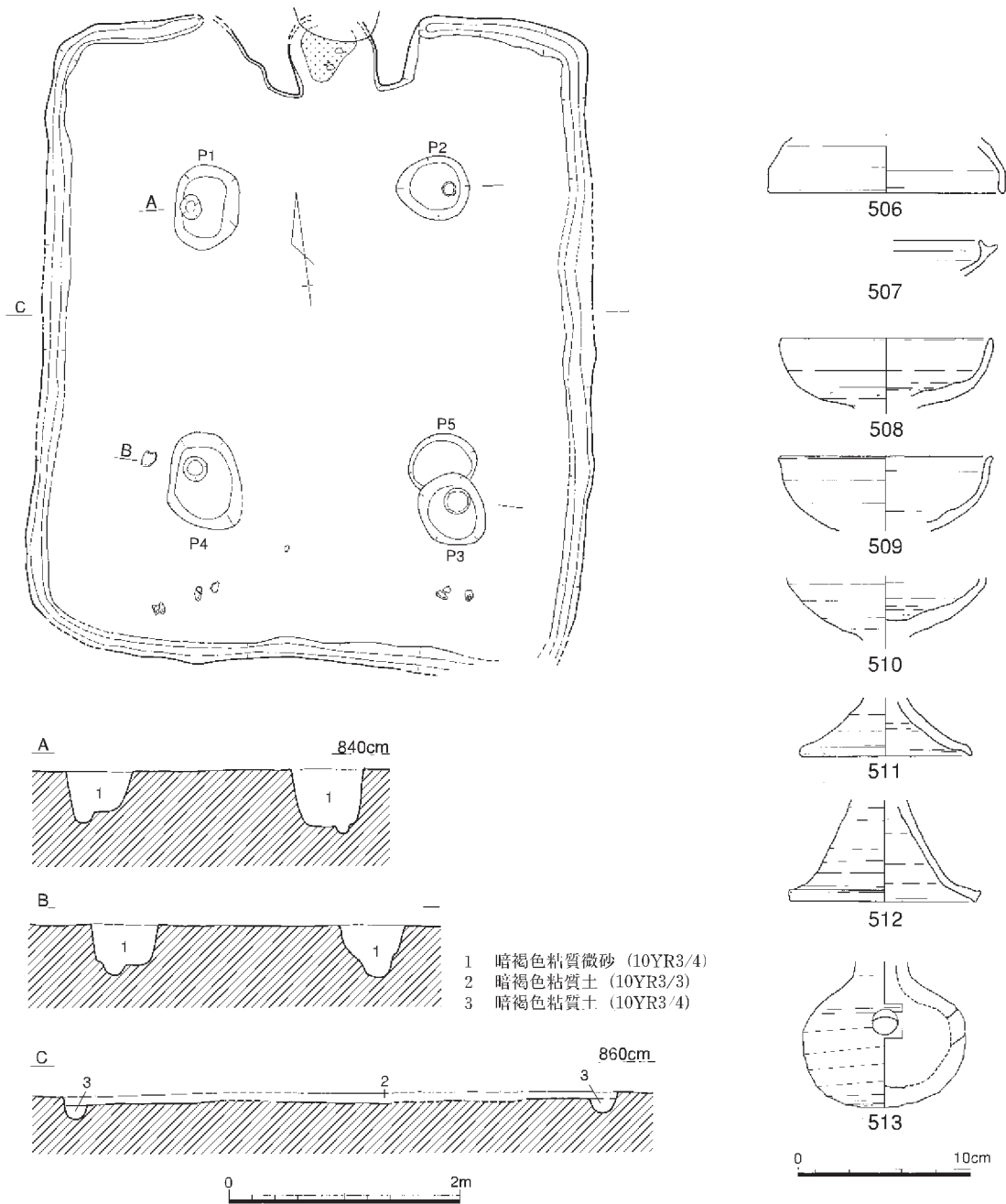
出土遺物は比較的多く、P3からは鉄滓も出土した。TK209段階に比定される。 (渡邊)

竪穴住居25 (第333・361・362図、写真42、図版92・117)

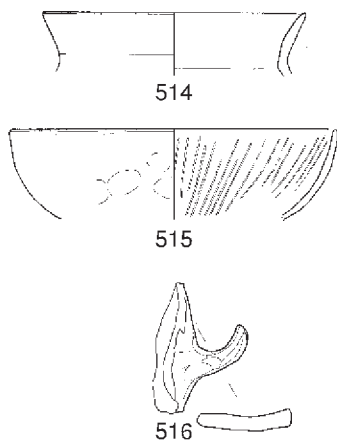
竪穴住居24の東から検出された平面長方形を呈し、北辺中央にカマドを持つ住居である。南北に長く、規模は5.65×4.8m、床面積25.4㎡を測る。床面の周囲には壁体溝が巡り、主柱は4本からなる。柱穴は径約60cm、深さ35～50cmを測り、いずれも柱痕跡が認められた。柱穴間距離は東西が2m前後、



写真42 竪穴住居25調査風景 (北から)



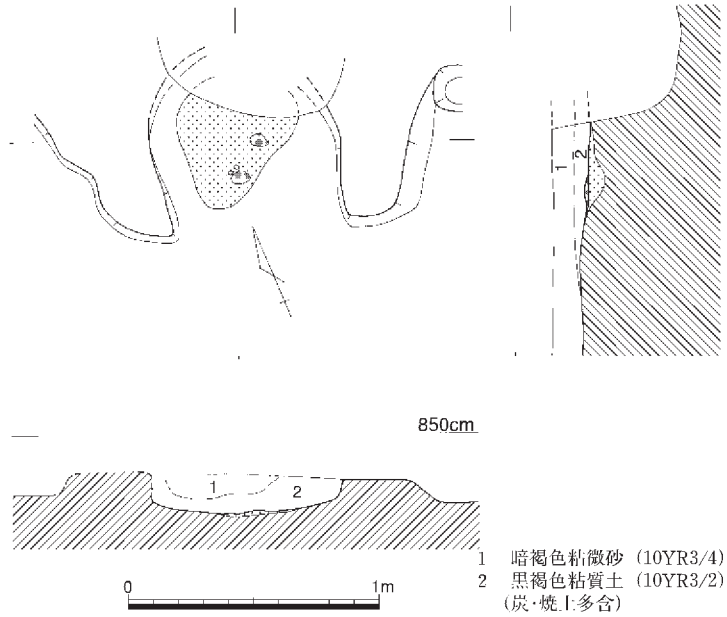
第361図 竪穴住居25 (1/60)・出土遺物 (1/4)



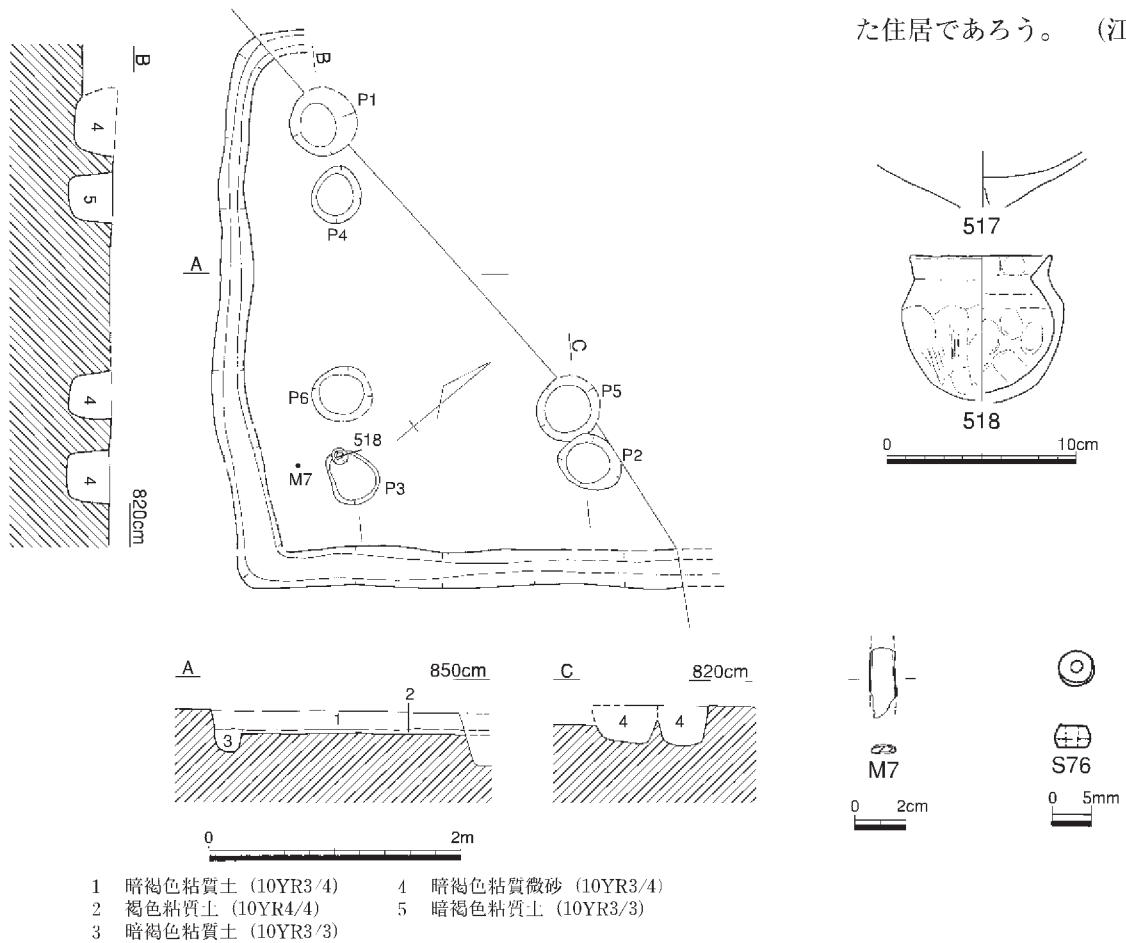
南北2.3m前後を測る。カマドは煙道部分を削平されていたが、内法70cm、高さ15cm余りを残す。径50cm余りを測る被熱面は、ほぼ北辺に接す位置に設置されていた。埋土中から須恵器蓋506・杯507・高杯508～512・甗513、土師器甕514・高杯？515・甗516などが出土している。高杯の口径は12cm余り、脚端部は内傾し、下方に拡張する511と、外傾し肥厚する512がある。515の内面には放射線状にヘラミガキがなされ、鉢になる可能性もある。以上、土器の特徴から当住居はTK217併行期には廃絶したものと考えられる。(江見)

竪穴住居26 (第333・363図、  
図版92・117・127・130)

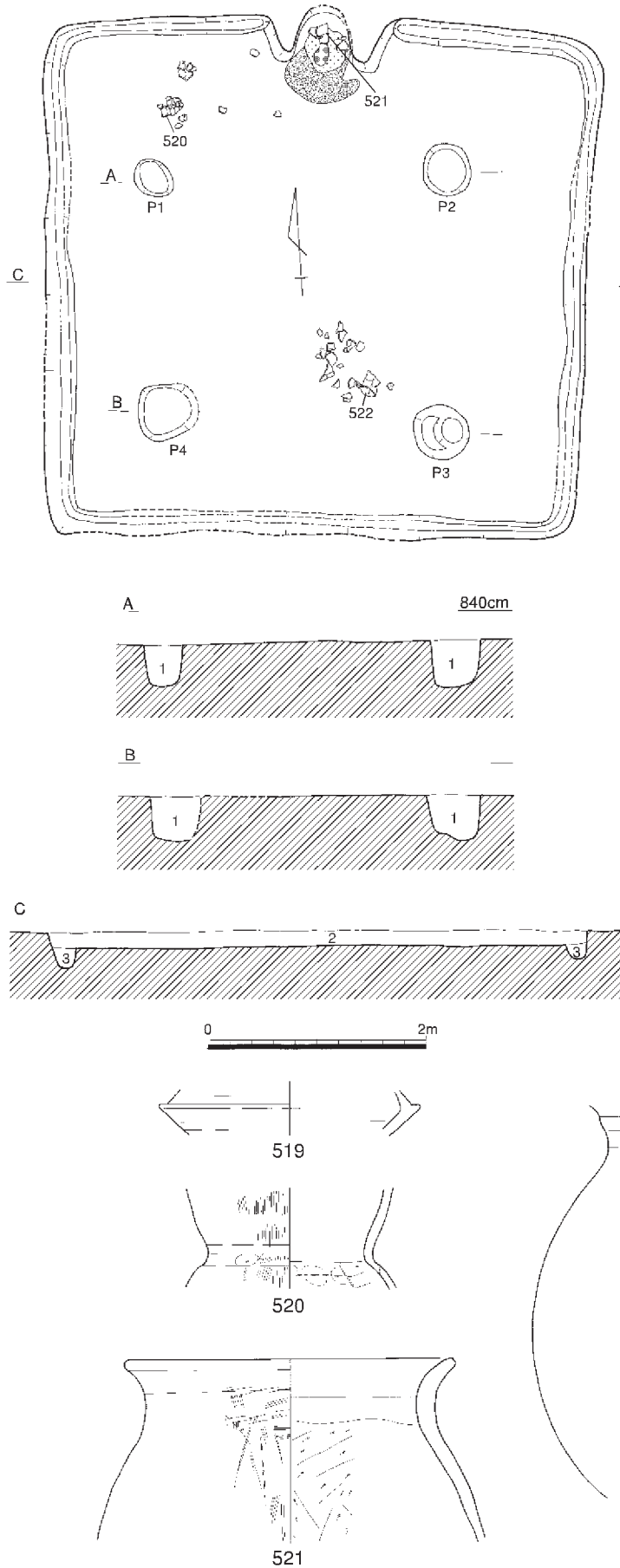
110Aの南東角に位置し、後述する竪穴住居27を一部切って検出された、平面長方形を呈すと思われる住居で、北西部は農道部分に延びている。柱穴の検出位置から推定4.4×4m、床面積16㎡余りの規模をもつものと思われる。床面の周囲には壁体溝が巡り、支柱は4本からなる。その内のP1～3がそれぞれあたり、いずれも径約50cm、深さ約40cm、柱穴間距離は2.8～2mを測る。遺物は少なく、床面から土師器の手捏鉢518が、埋土中から高杯517、不明鉄製品M7、滑石製白玉S76が出土した。なお、M7は薄く、上下に延びる。6世紀後半には廃絶した住居であろう。(江見)



第362図 竪穴住居25カマド (1/30)



第363図 竪穴住居26 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/1)



竪穴住居27 (第333・364・365図、  
図版92)

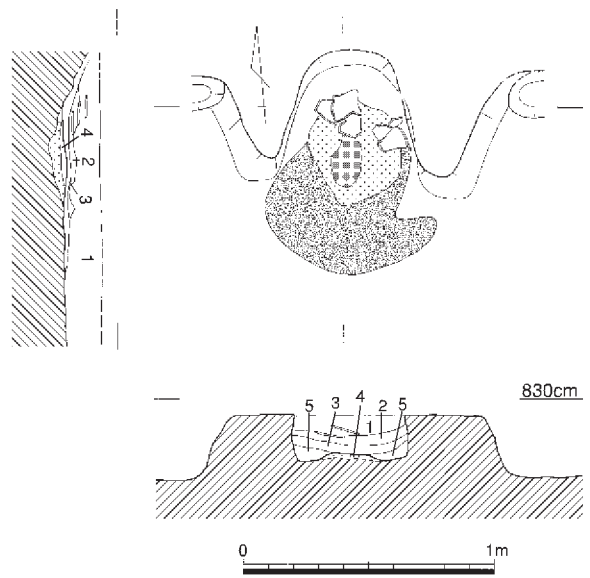
竪穴住居26の南に接して検出された平面方形を呈す住居で、北辺中央にカマドを持つ。また、南辺および東辺の一部は後世の柱穴によって削平を受けていた。規模は4.9×4.8m、床面積約22㎡を測る。主柱は4本からなり、壁から約1m余り内側に柱穴が配置されていた。柱穴は径50cm前後、深さ約50cmを測り、柱穴間の距離は南北が230cm前後、東西が270cm前後と東西方向がやや長い。カマドの内法は幅約50cm、高さ約20cmを残す。カマド内には焼土粒および炭粒が多く含まれ、それに混じって土師器甕521が出土している。一方、床面周辺には壁体溝が巡り、住居の北西部からは壺520が、南東部からは甕522が床面付近から、須恵器杯519が埋土中から出土している。TK43併行期に廃棄された住居か。(江見)

- 1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
- 3 暗褐色粘質土 (10YR3/3)

第364図 竪穴住居27 (1/60)・出土遺物 (1/4)

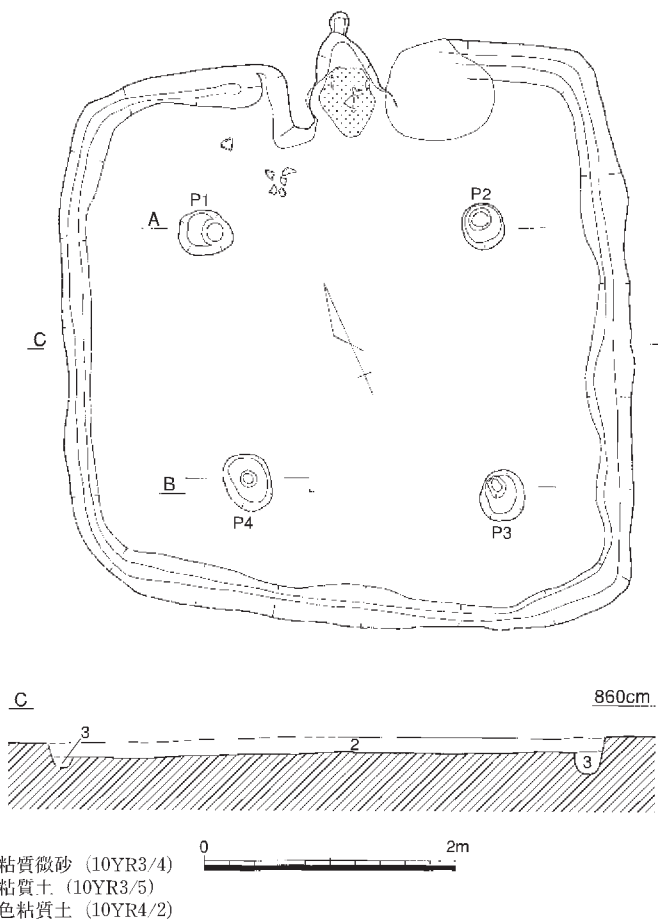
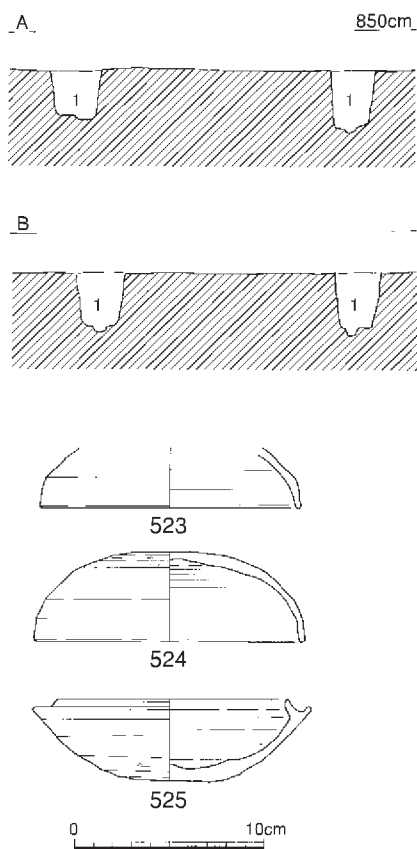
竪穴住居28(第333・366・367図、図版93・117)

竪穴住居27の南方14mから検出された、平面形態がやや歪な方形を呈す住居で北辺中央にカマドを持つ。なお、カマドの一部と南辺付近は柱穴などで削平を受けていた。規模は4.6×4.5m、床面積約18㎡を測る。主柱は4本からなり、壁から内側1.2m前後の位置に配置されていた。柱穴は径約40cm、深さ約40cmを測り、いずれも柱痕跡を残すものであった。また、各柱間の距離は2m前後であった。カマドは煙道部分をわずかに残す。カマド本体の内法は幅約50cm、高さ約15cmを残し、奥壁は住居の北壁ラインから突出した位置にあった。遺物は少なく床面に土器片が散在する状況であった。須恵器蓋523・524・杯525はいずれも埋土中から出土したもので住居はTK209併行期には廃絶したものであろう。(江見)



- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
- 2 褐色粘質土 (10YR4/6) (焼土多含)
- 3 黒褐色粘質土 (10YR3/2) (炭粒多含)
- 4 褐色土 (7.5YR4/4) (焼土)
- 5 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)

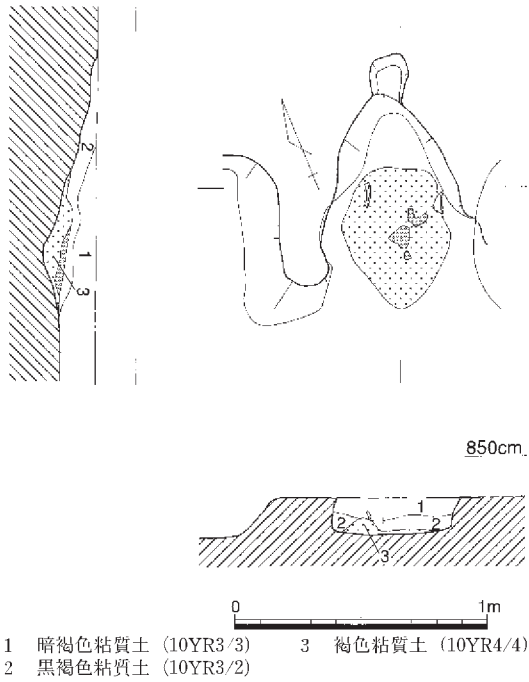
第365図 竪穴住居27カマド (1/30)



- 1 暗灰色粘質微砂 (10YR3/4)
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/5)
- 3 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)

第366図 竪穴住居28 (1/60)・出土遺物 (1/4)





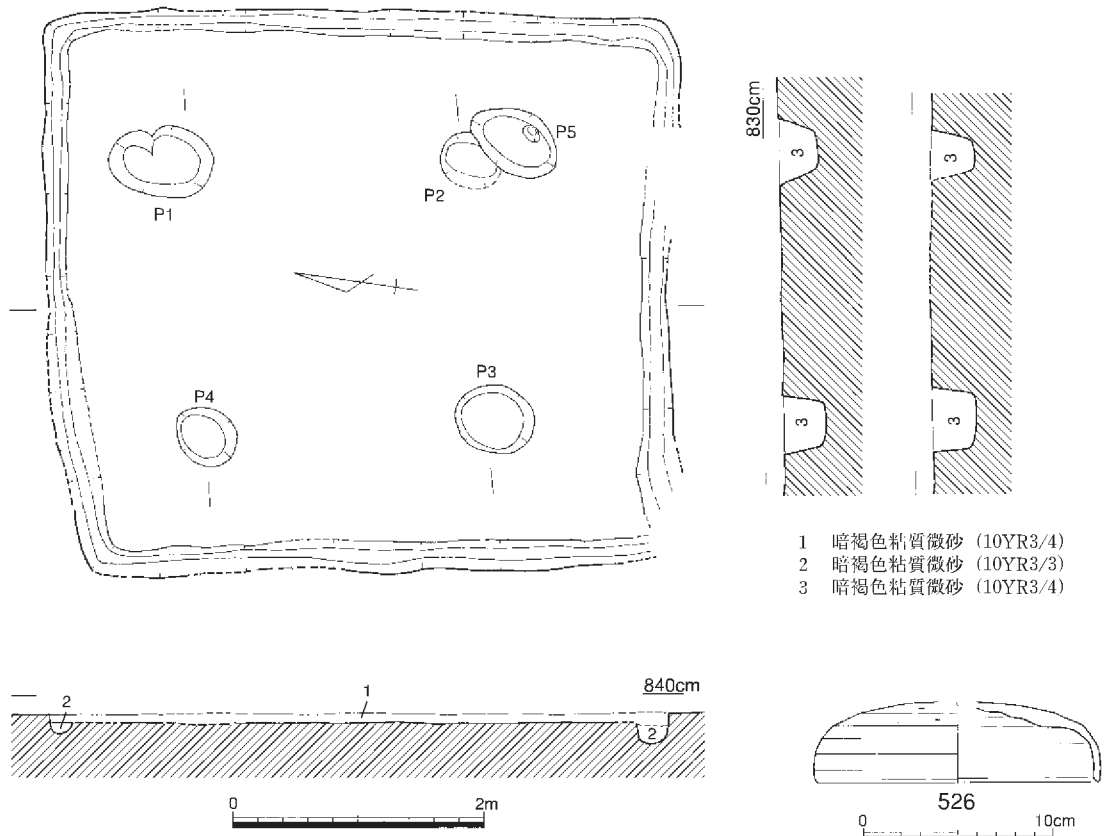
第367図 竪穴住居28カマド (1/30)

竪穴住居29 (第333・368図、図版93)

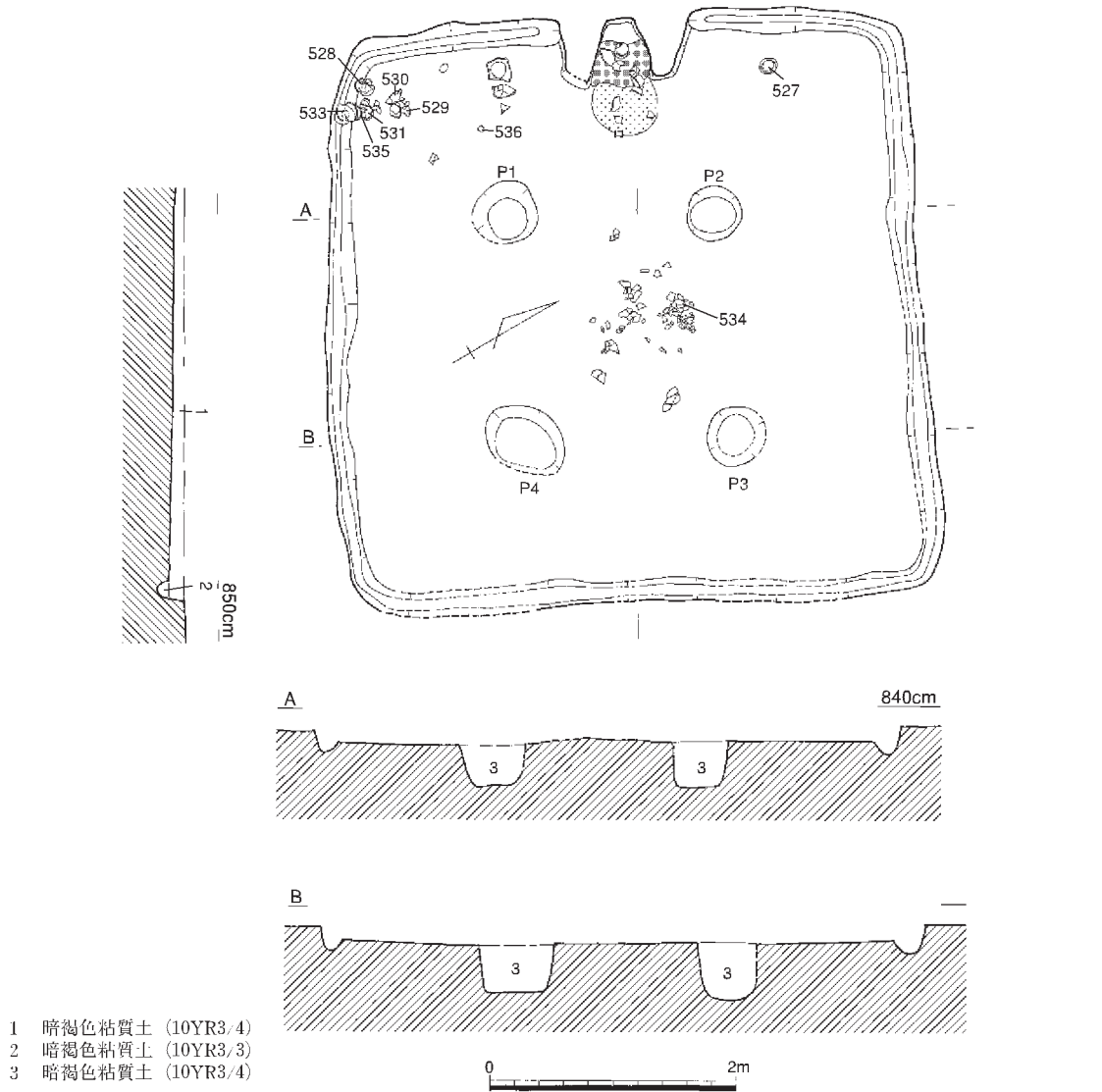
竪穴住居28の南10mから検出されたカマドを持たない住居である。いくつかの柱穴によって削平を受けていたが、これによってカマドが消滅したのではなく、元々設置されなかったものと判断している。平面方形を呈し、規模は4.9×4.45m、床面積21.6㎡を測る。支柱は4本からなり、壁から内側1.2~1.5mの位置に柱穴が配置されている。柱穴は径50cm前後、深さ約30cmを測り、柱穴間の距離は東西約2.2m、南北約2.4mと南北にやや長い。遺物は少なくわずかに須恵器蓋526を図示するに留まった。TK10併行期には廃絶した住居と思われる。(江見)

竪穴住居30 (第333・369・370図、図版93・94・117)

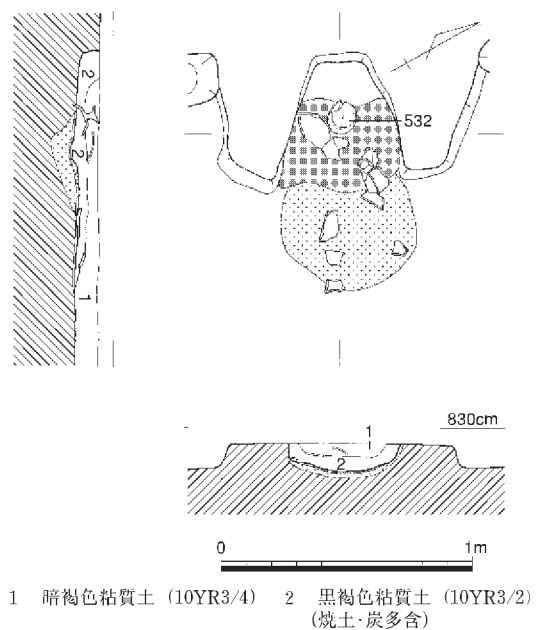
竪穴住居29の北東から検出された、平面方形の住居で、西辺中央にカマドを持つ。規模は4.8×4.75mのほぼ正方形を呈す。床面積は21.6㎡を測り、床面の周囲には壁体溝を巡らす。支柱は4本からなり、壁から内側1.5mの位置に柱穴が配置されて



第368図 竪穴住居29 (1/60)・出土遺物 (1/4)

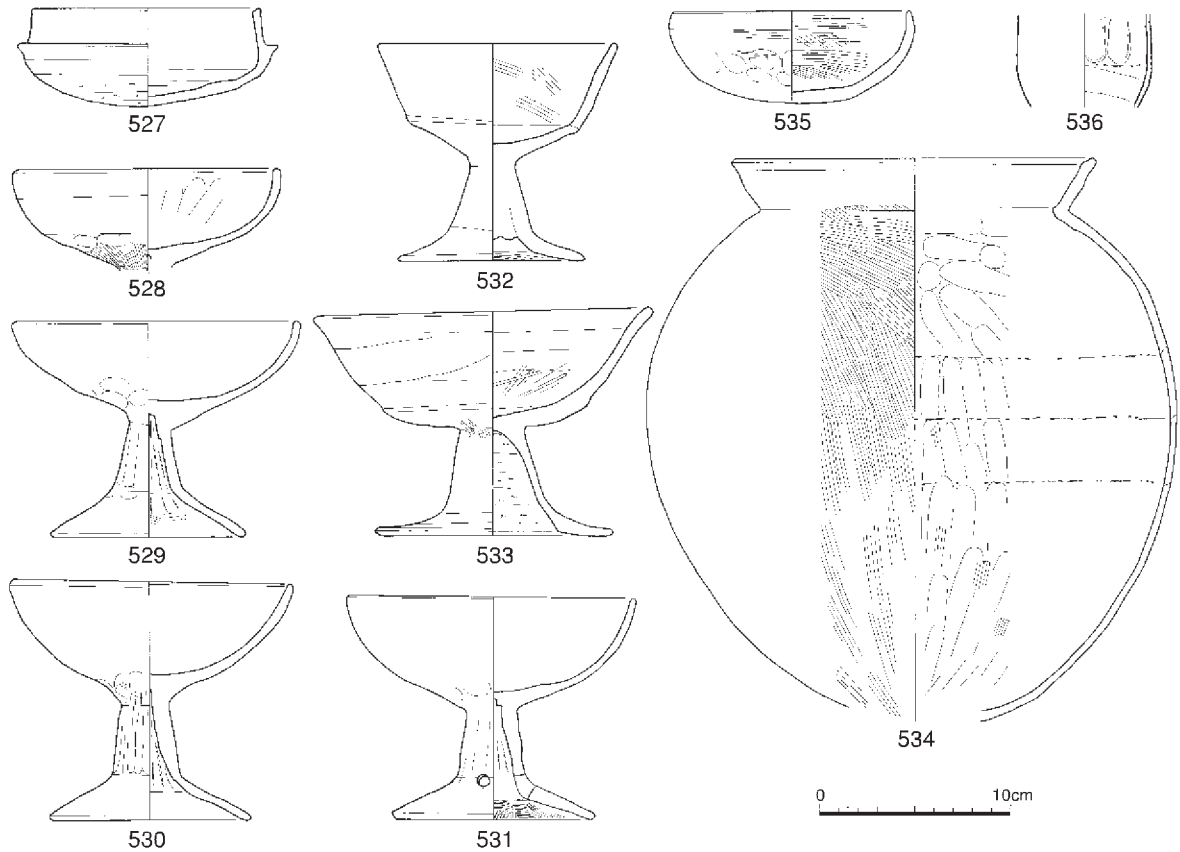


いる。柱穴は径50cm前後、深さ30~50cmを測り、柱穴間の距離は東西1.7m、南北1.8mといずれも短い。カマドは内法約45cm、高さ15cm余を残す。煙道へ続く奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部から前面にかけては広い範囲に被熱面が認められ、燃焼部中央からは支柱に利用した土師器高杯532が伏せた状態で検出された。一方、住居北西部からは折り重なるように高杯528~531・533と鉢535が、中央部からは飛散した状態で甕534が、北東部からは正位置で須恵器杯527が、他に製塩土器片536などが出土した。これらの土器はやや時期に開きがあるものの、当住居はTK23~TK47併行期には廃絶したものであろう。(江見)

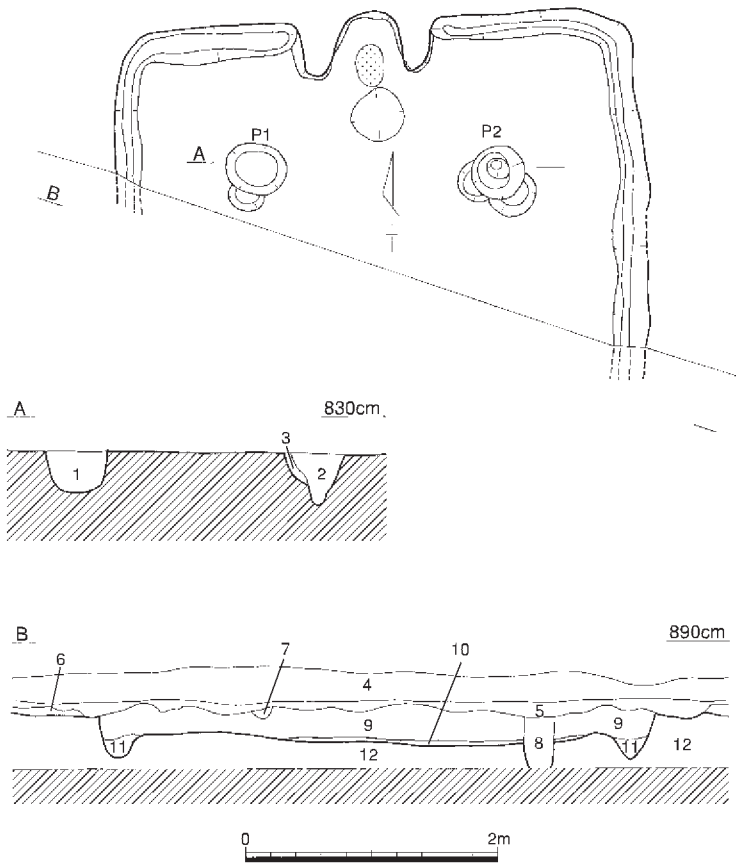


1 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 2 黒褐色粘質土 (10YR3/2) (焼土・炭多含)

第369図 竪穴住居30 (1/60)・カマド (1/30)



第370図 竪穴住居30出土遺物 (1/4)

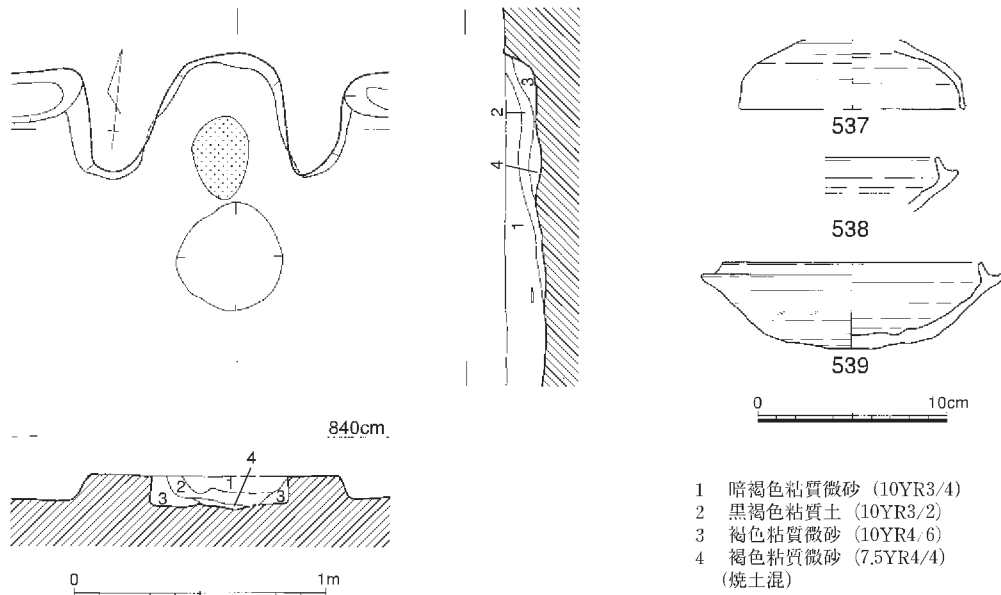


第371図 竪穴住居31 (1/60)

竪穴住居31 (第333・371・372  
図、図版94・117)

竪穴住居30の南西7mから検出された平面方形を呈す住居で、南半部は農道に延びている。北辺中央にカマドを持ち、床面の周囲には壁体溝が巡る。住居の規模は東西4.1mを測る。主柱穴は4個と想定され、その内北側の2個の柱穴を検出して

- 1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
- 3 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
- 4 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)
- 5 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(上部Fe沈着・下部Mn粒・褐色粘質土塊含)
- 6 暗オリーブ褐色粘質微砂 (2.5Y4/4)
- 7 鈍黄褐色微砂 (10YR5/3)
- 8 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)
- 9 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)
- 10 褐色粘質微砂 (10YR5/6)
- 11 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)
- 12 褐色粘質微砂 (7.5YR4/3)



第372図 竪穴住居31カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)

る。柱穴は径40～50cm、深さ約30cm、柱穴間の距離は1.9mを測る。カマドは内法幅約50cm、高さ約10cmを残し、奥壁は住居壁のラインより突出気味に配置している。遺物は埋土中より須恵器蓋537・杯538・539などが出土しており、住居はTK209の併行期には廃棄されたものであろう。(江見)

竪穴住居32 (第333・373～375図、写真43・44、巻頭図版5、図版94・117・118・127・130・131)

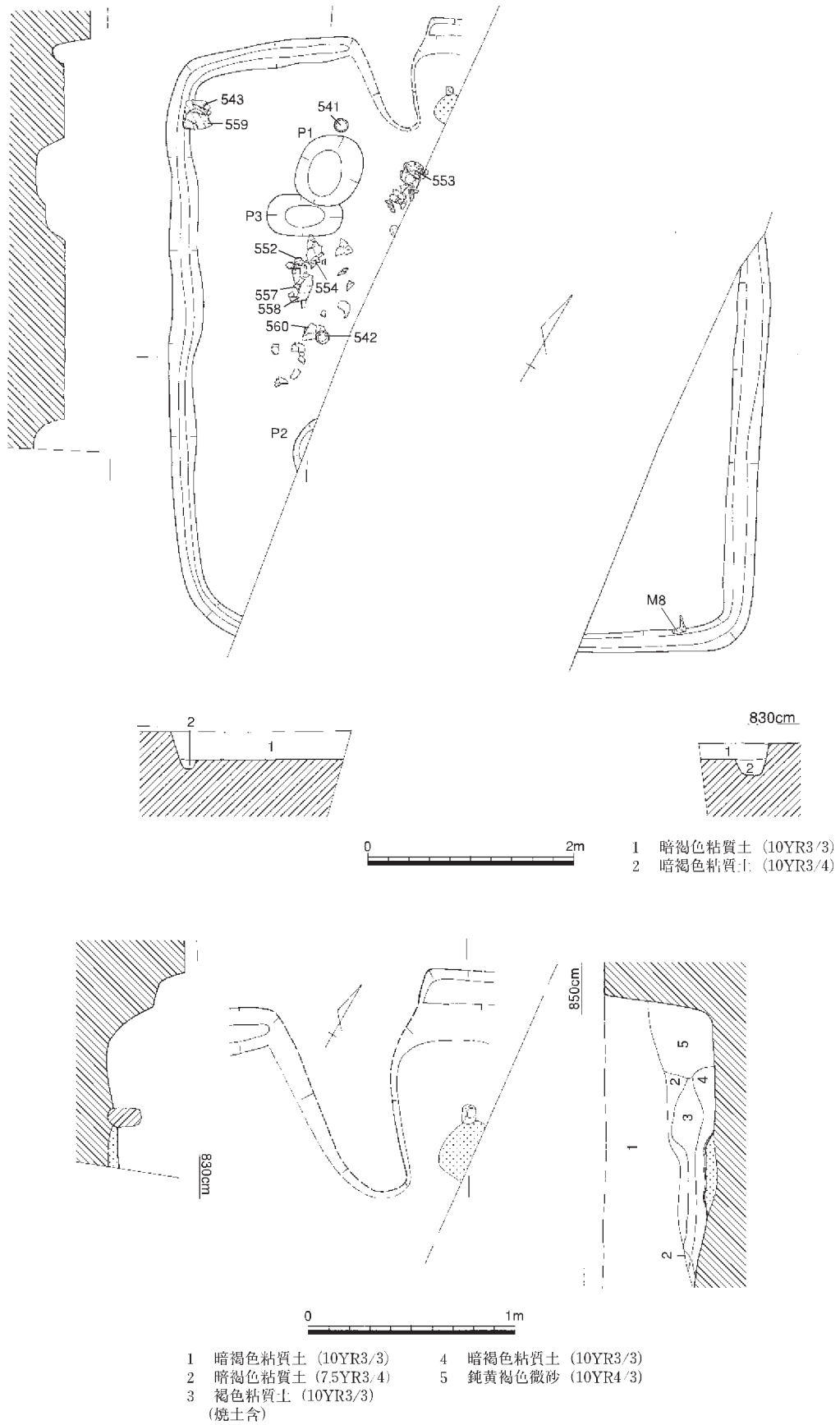
112Cの北西角に位置し、住居の中央部を農道下にあたる住居である。平面方形を呈し、北辺中央にカマドを持つ。規模は一辺約5.8m、推定床面積30㎡余りを測る比較的大形の住居である。主柱穴は4個からなると考えられ、その内西側の2個を辛うじて検出した。柱穴は径60cm余り、深さ約30cm、柱穴間の距離は2.2mを測る。カマドは基底部付近を検出するに留まったが、残る被熱面は径30cmに広がり、その北端から川原石を利用した支柱が立てられていた。住居の北西部からは須恵器蓋540・541・杯542をはじめ、土師器甕543～553・高杯554～557・甌558～560などの土器類が、南東床面からは鉄製又鋏M8が、埋土中から滑石製白玉S77などが出土している。土器の特徴から、当住居はMT15併行期には廃絶したものと考えられる。(江見)



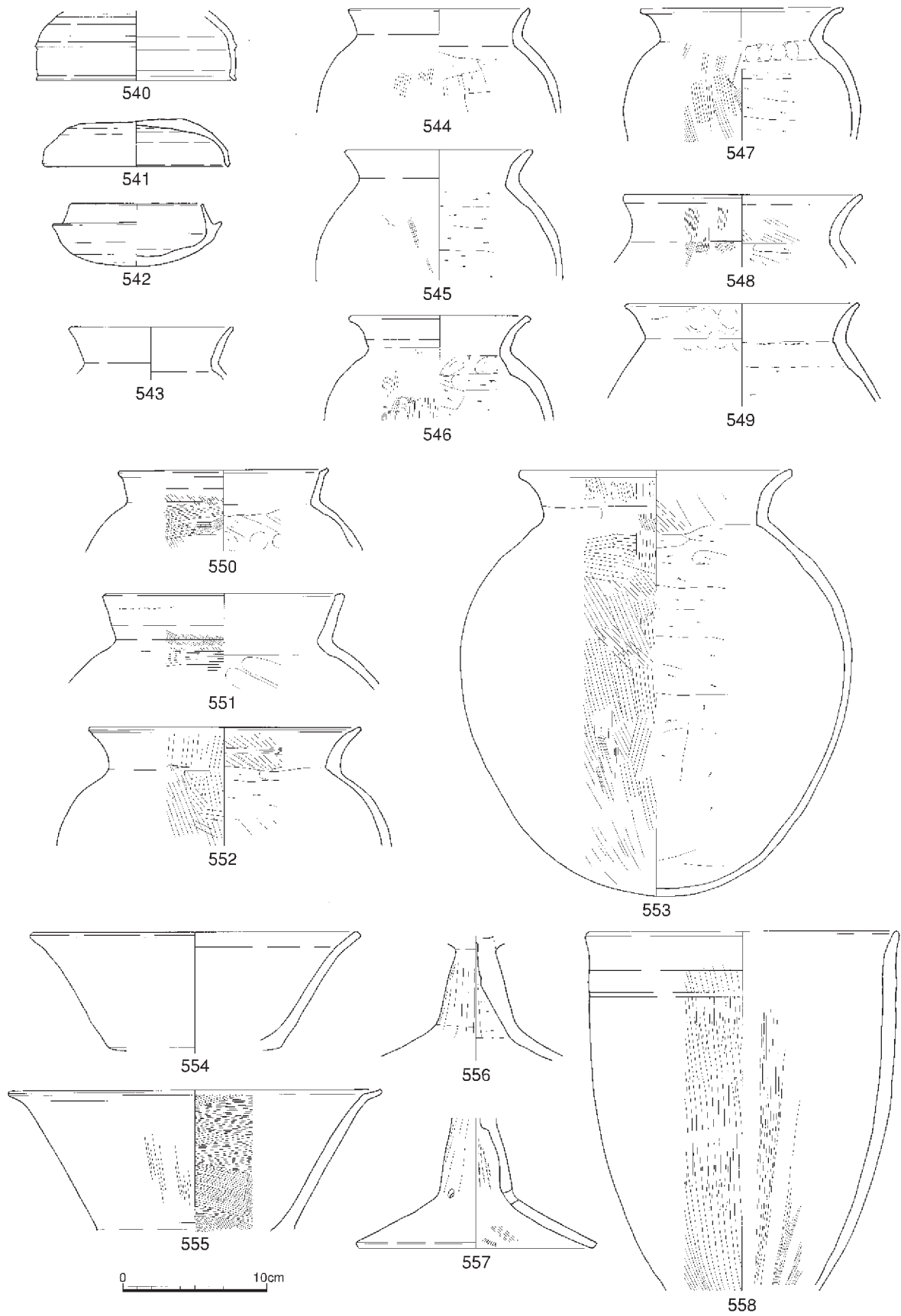
写真43 竪穴住居32調査風景 (北西から)



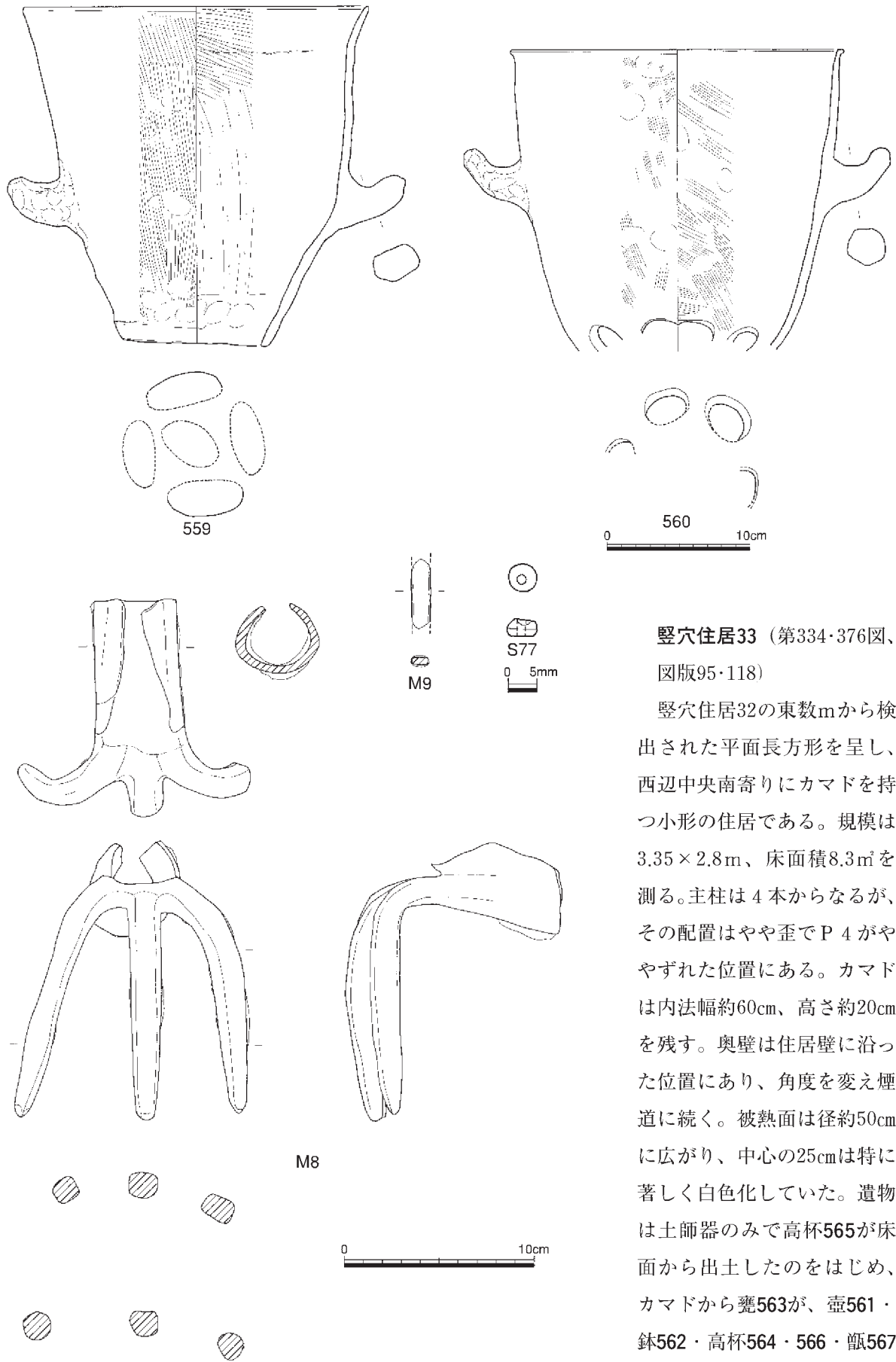
写真44 M8出土状況 (東から)



第373図 竪穴住居32 (1/60)・カマド (1/30)



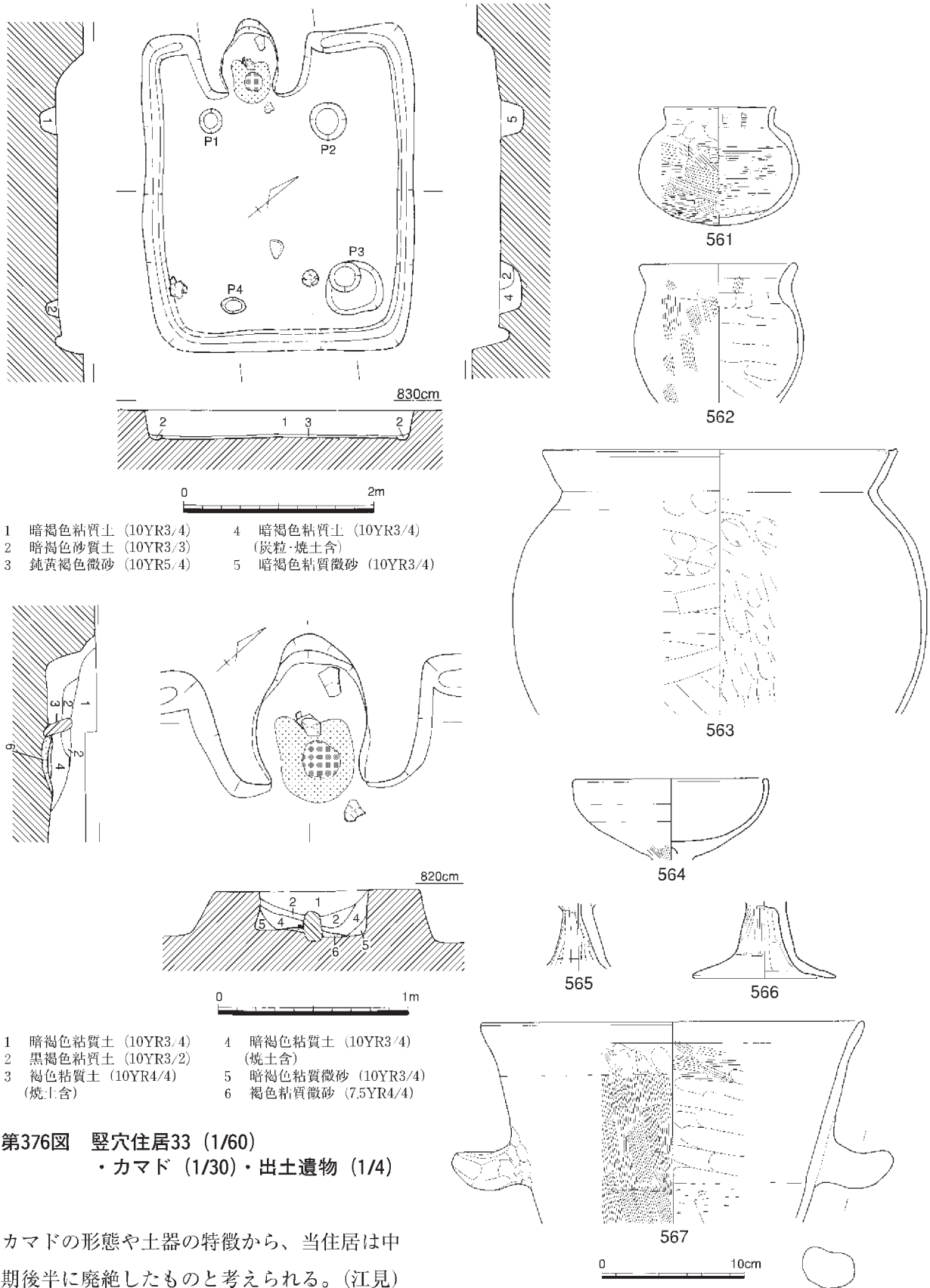
第374図 竪穴住居32出土遺物① (1/4)



竪穴住居33 (第334・376図、  
図版95・118)

竪穴住居32の東数mから検出された平面長方形を呈し、西辺中央南寄りにカマドを持つ小形の住居である。規模は3.35×2.8m、床面積8.3㎡を測る。主柱は4本からなるが、その配置はやや歪でP4がややずれた位置にある。カマドは内法幅約60cm、高さ約20cmを残す。奥壁は住居壁に沿った位置にあり、角度を変え煙道に続く。被熱面は径約50cmに広がり、中心の25cmは特に著しく白色化していた。遺物は土師器のみで高杯565が床面から出土したのをはじめ、カマドから甕563が、壺561・鉢562・高杯564・566・甑567は埋土からのものである。

第375図 竪穴住居32出土遺物② (1/4・1/3・1/1)



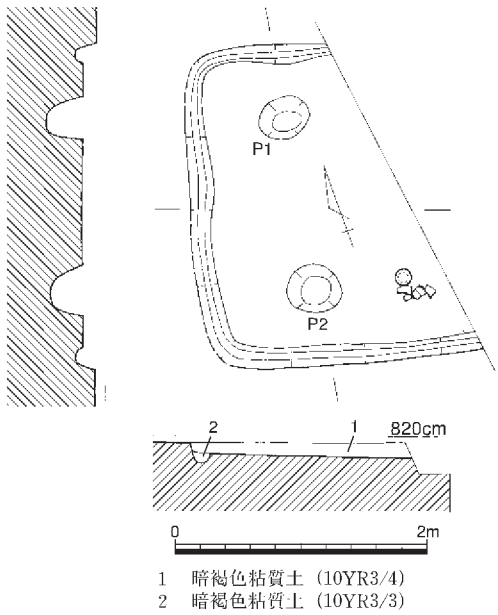
第376図 竪穴住居33 (1/60)  
 ・カマド (1/30) ・出土遺物 (1/4)

カマドの形態や土器の特徴から、当住居は中期後半に廃絶したものと考えられる。(江見)

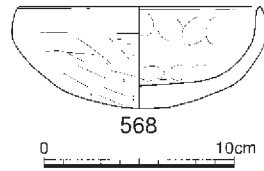
竪穴住居34 (第334・377図、図版96・118)

114Cの北西に位置し、竪穴住居33の東13mから検出された平面方形を呈す小形の住居である。東半部は中世斜面に削平を受けている。規模は一辺約2.5m、床面積6㎡余りと推定される。主柱は4





第377図 竪穴住居34 (1/60)  
・出土遺物 (1/4)



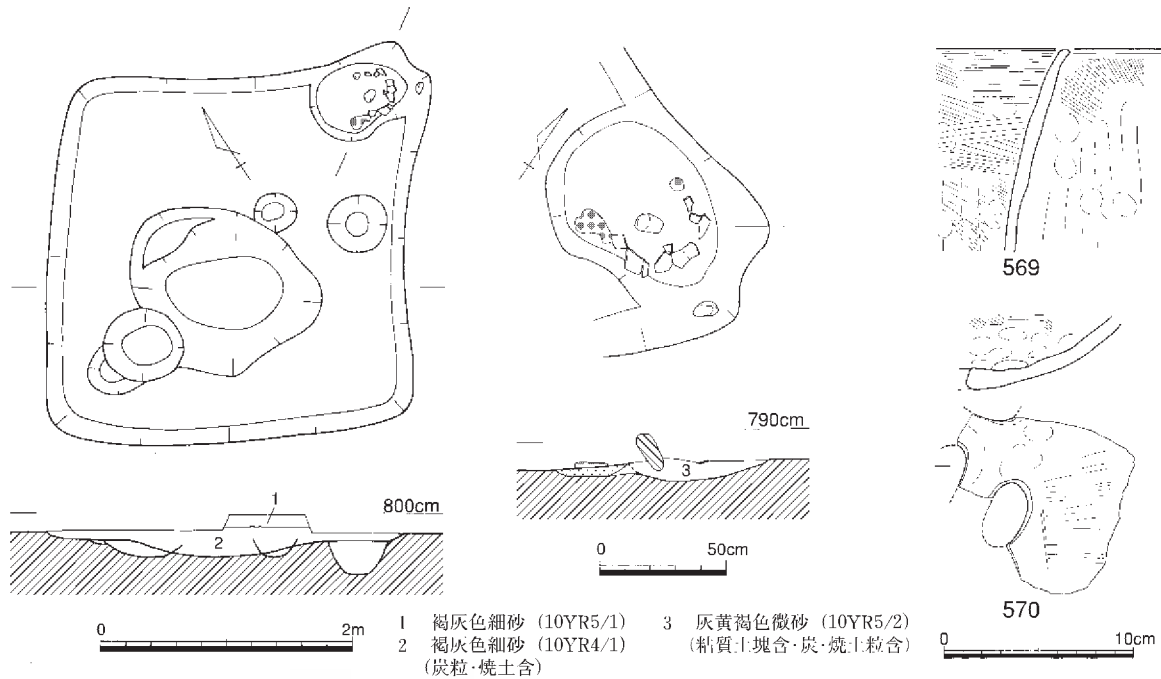
本からなり、西側の2個の柱穴を  
を検出した。径約40cm、深さ約  
30cm、柱穴間の距離は1.35mを  
測る。遺物は床面から鉢568と  
土師器片が出土するのみで、当

住居は中期に廃絶したものであろう。(江見)

竪穴住居35 (第330・378、写真45、図版96)

144Qに位置する竪穴住居である。周辺に同時期  
の遺構はなく、単独で検出した。住居の平面形は、  
歪な方形を呈する。検出時の規模は、2.9×2.82m、  
床面の海拔高7.79m、床面積6.9㎡を測る。また、主  
軸はN-37°-Eとなる。床面の施設としては、北東隅  
で検出したカマドがある。また、中央の浅い凹みと  
柱穴については、住居に伴うかは不明である。

カマドは、90×60cmの浅い窪みに川原石の支柱を



第378図 竪穴住居35 (1/60)・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)



写真45 竪穴住居35調査風景  
(南西から)

立てたもので、この窪みはカマドの下部構造と考えられ  
る。支柱の周囲には、土師器の甑片が見られた。

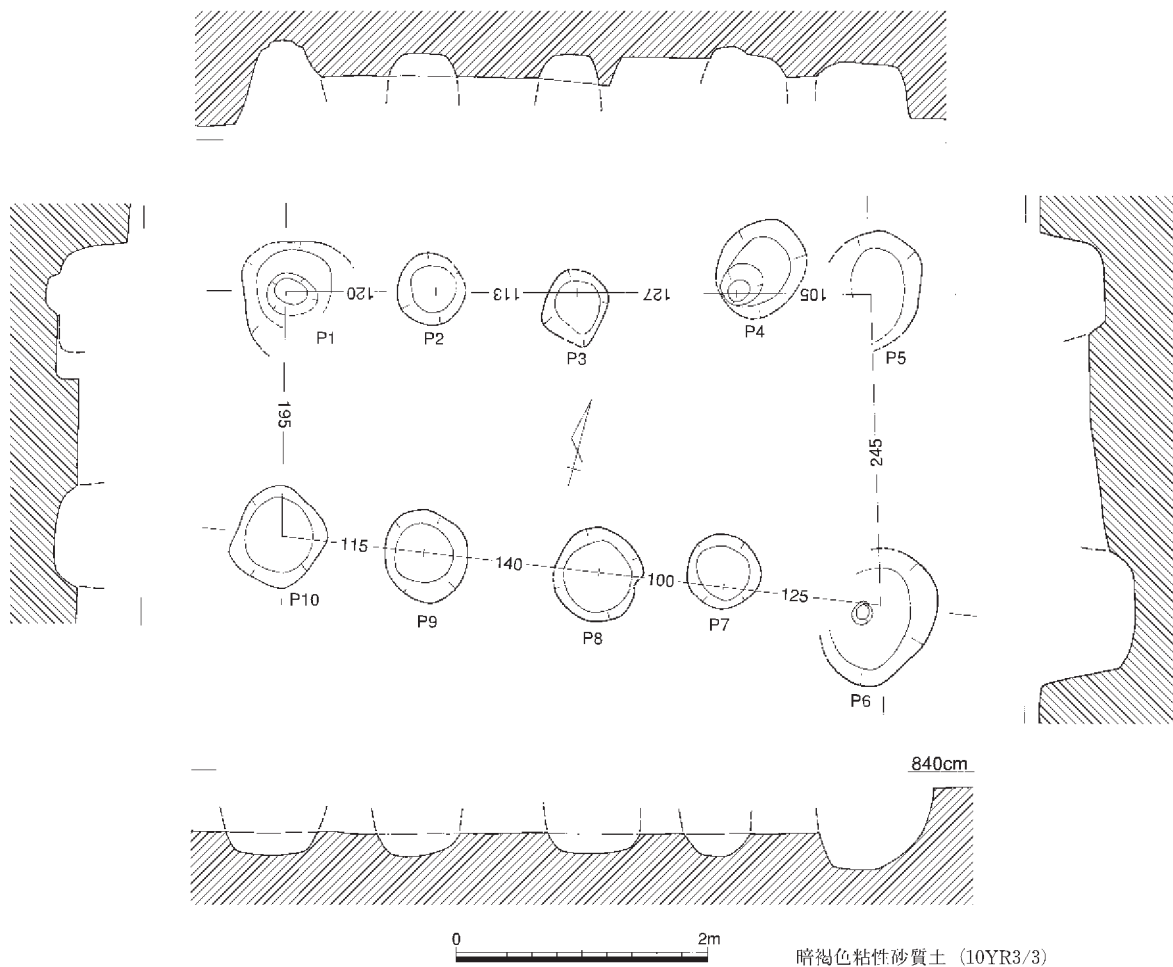
図示した遺物は、甑の口縁部569と底部570であり、本  
来は同一個体と考えられる。底部の穿孔の形状は、長楕  
円と推定される。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、古墳時代後  
期と考えられる。(高田)

### 3 掘立柱建物

#### 掘立柱建物1 (第331・379図、図版97)

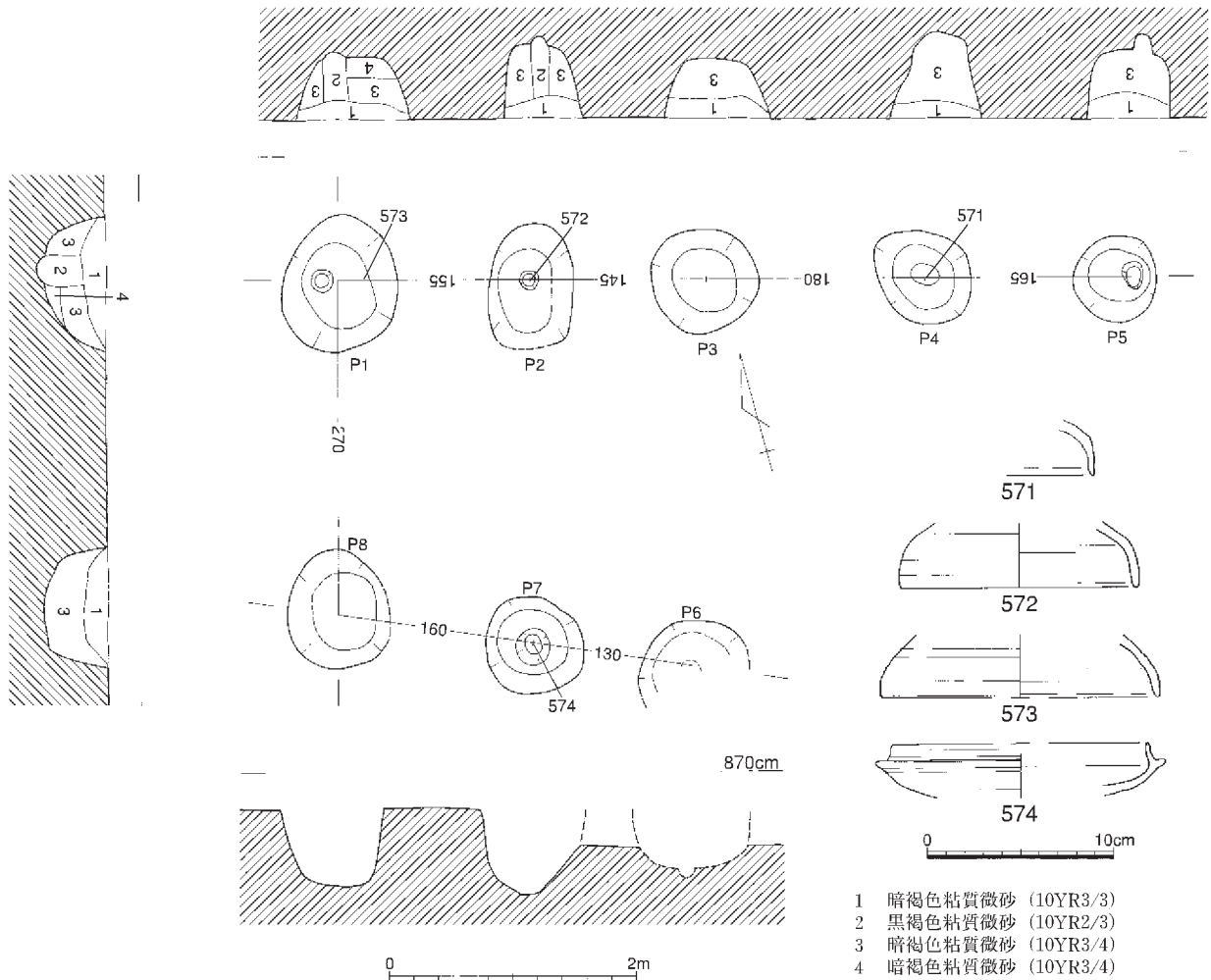
102A東で、竪穴住居11とほぼ重なる様に検出している。P1・5・6に関しては竪穴住居11よりも早い段階で確認し、当初から住居よりも新しい遺構であるとの認識があった。しかしながら、他の柱穴は住居の埋土と同色・同質であり検出は困難を極めた。結局、P2～4・P7～10は住居を掘り下げ終わった段階で、その底面のみを確認したにすぎない。4×1間の側柱建物で、その掘り方は約1mを測る。時期を判断するのは難しいが、竪穴住居11より新しいことは間違いない。(松尾)



第379図 掘立柱建物1 (1/60)

#### 掘立柱建物2 (第331・380図、図版97・98)

104Cの西で、竪穴住居14と重複して検出した。東と南は調査区の関係上確認できなかったが、4×1間の側柱建物である可能性が高い。主軸はN-70°-Wの東西棟。桁行の柱間距離は1.3m～1.65m、梁行は2.7mを測る。柱穴の掘り方は平面が80cm～1.2mの不整円形を呈し、深さは50～70cm、柱痕は15～20cm。出土遺物は571～574の須恵器杯がある。571はP4、572はP2、573はP1、574はP7からそれぞれ出土した。遺物の時期はTK43型式併行期で竪穴住居14と同時期であるが、検出状況からは住居の方が確実に古い。混入の可能性が高い。(松尾)



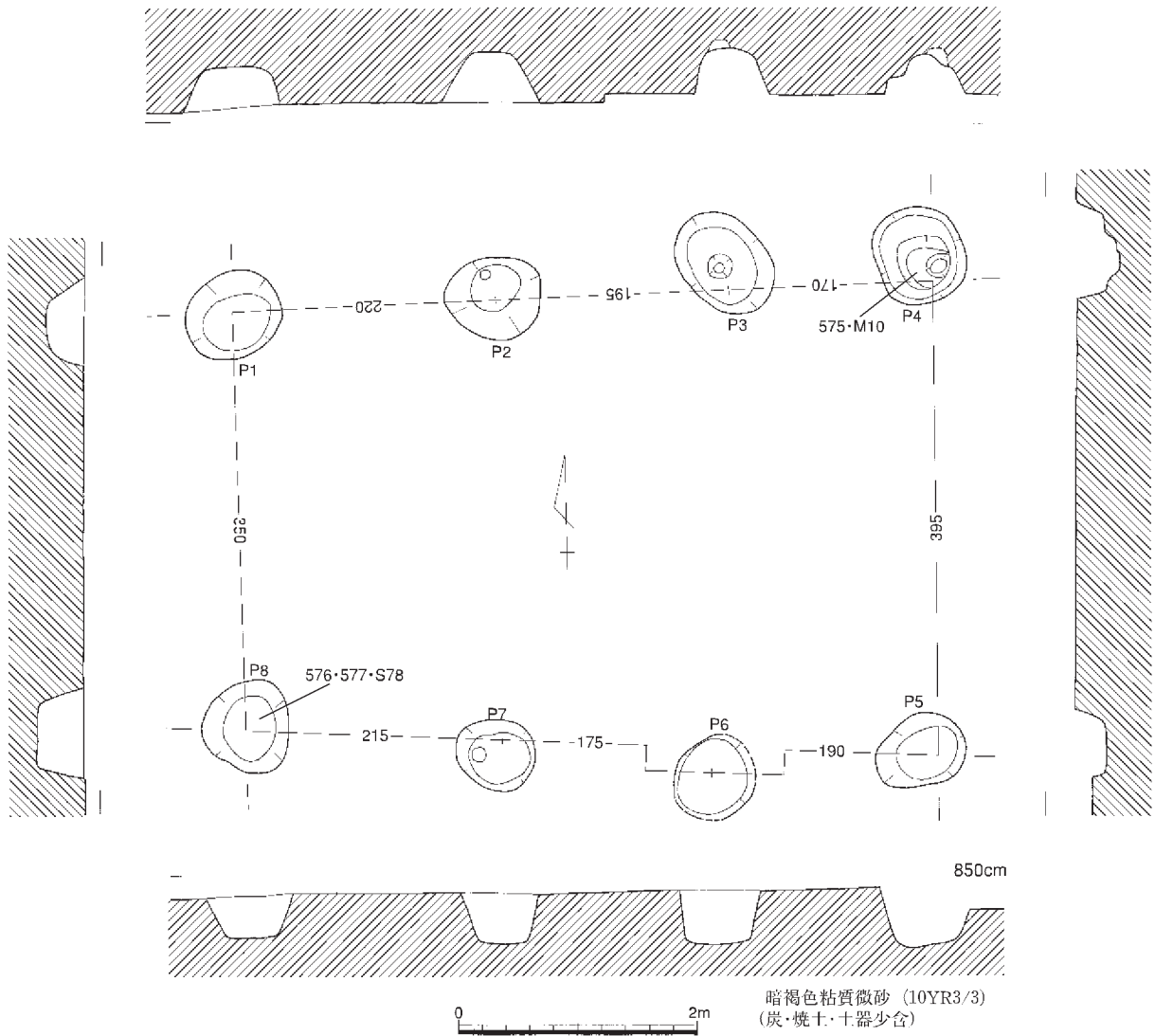
第380図 掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物3 (第331・381図、写真46、図版97・98・127・130)

104Cの中央やや東寄り、堅穴住居16と重複して検出した。3×1間の側柱建物で主軸がN-90°-Wの東西棟である。桁行の柱間距離は、1.7mから2.2m、梁行の柱間距離は、3.5mから3.95mで、東側が若干広がっている。柱穴の掘り方は、直径80cmから1mの不整円形を呈し、柱痕は直径15~20cm程度である。遺物は575の須恵器杯蓋、M10の鉄製石突がP4から出土。576の須恵器杯身、577の土師器椀、S78滑石製白玉はP8からの出土。575の須恵器杯蓋は口径12.4cm、576の須恵器杯身は口径12.2cmを測る。須恵器の器形および口径などから、TK209型式併行期であると思われる。検出状況から、堅穴住居16より新しい建物であることは間違いない。(松尾)



写真46 掘立柱建物3 (西から)



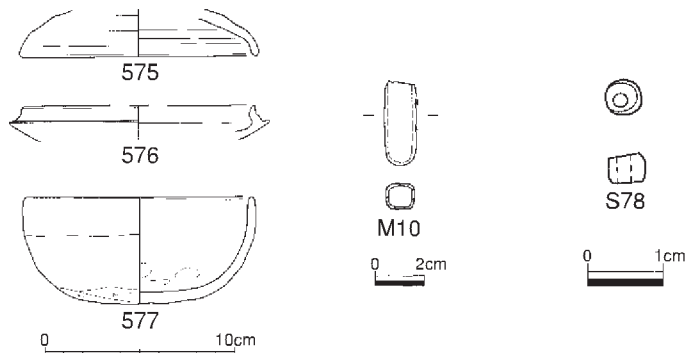
掘立柱建物 4 (第332・382

図)

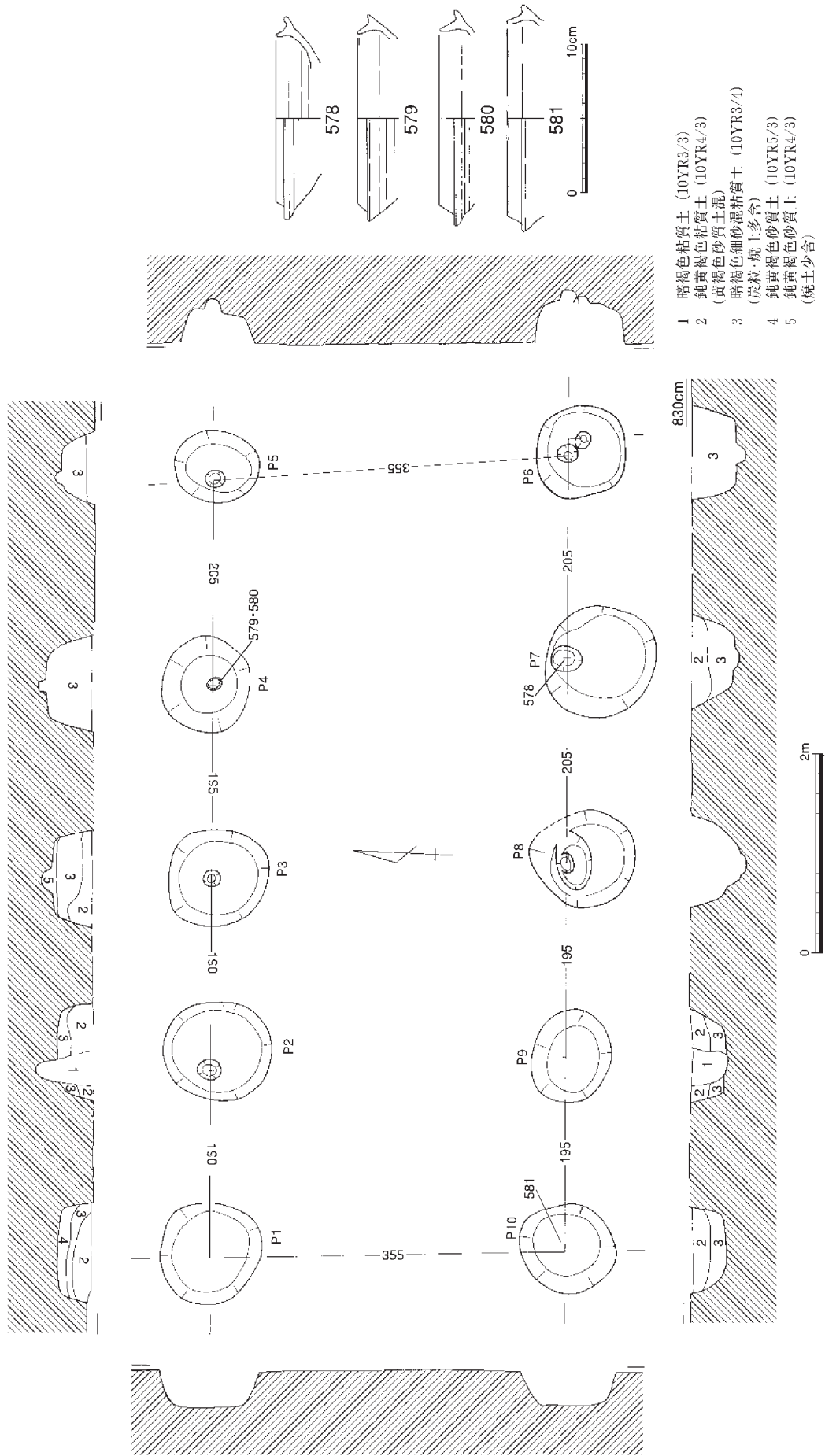
104 A 南端～104 C 北端で、掘立柱建物 3 の約 3.5m 北に位置する。東西 4 間×南北 1 間の東西棟で、桁行 8 m、梁行 3.55 m を測る。柱穴の規模は径 85 cm～1.1 m と大きい。深さは 35～40 cm で、底面の標高

は 7.8～7.9 m を測る。P 2～9 で径 20～30 cm の柱痕が確認された。埋土は大きく 2 層に分かれ、下層には炭・焼土が多く混入し、上層には地山に由来すると思われる黄色土粒が多く含まれていた。

出土遺物は多く、すべての柱穴から土師器・須恵器片が出土している。P 2 からは砥石や鉄滓、P 3～5 からは鉄滓、P 6 からは鉄器も出土した。須恵器杯身のうち 578 が P 7 から、579・580 が P 4 から、581 が P 10 から出土した。TK 209 段階に比定されるが、578 は新しい傾向が認められる。(渡邊)



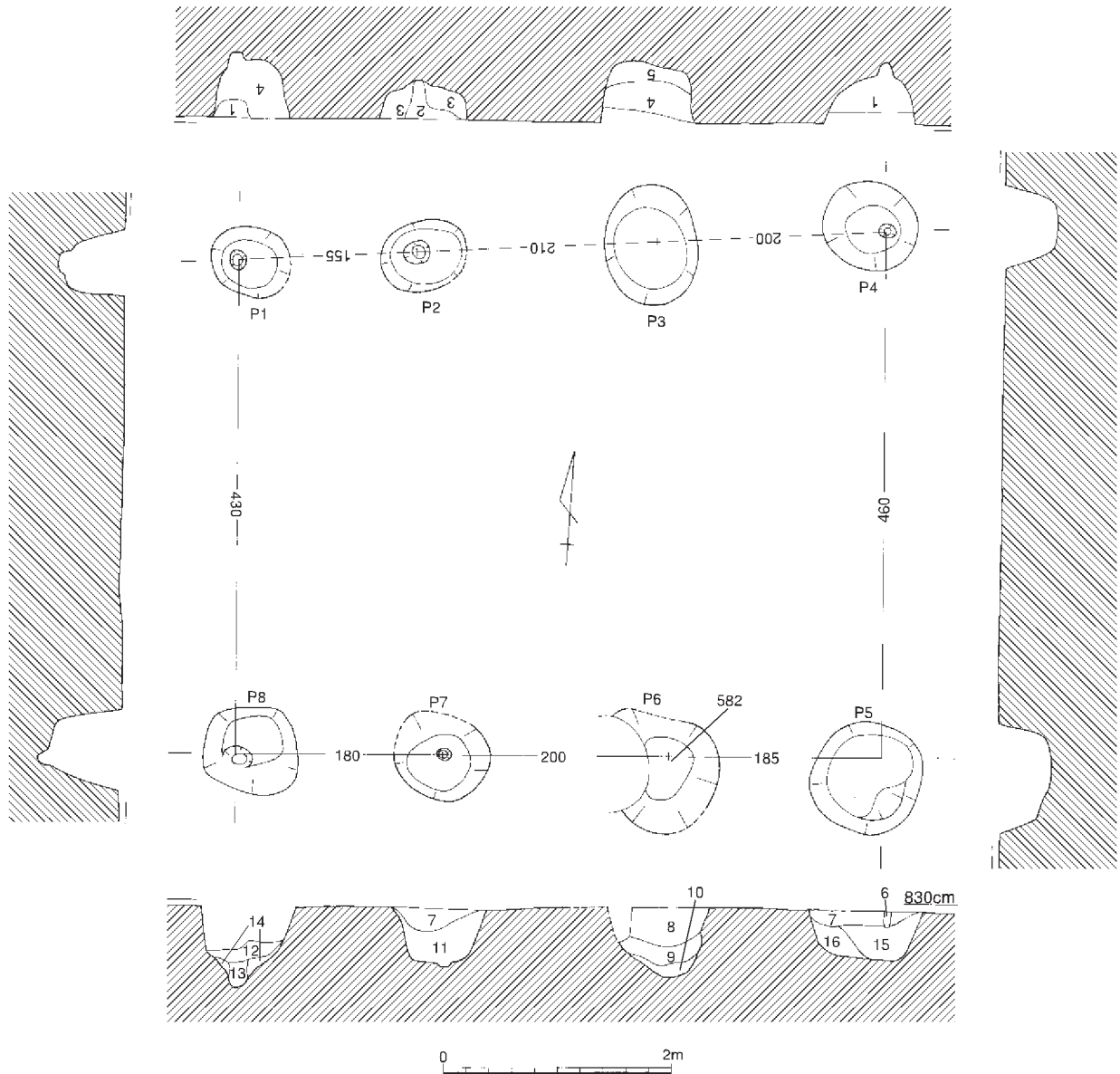
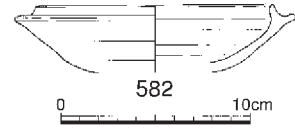
第381図 掘立柱建物 3 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/1)



第382図 掘立柱建物4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物5 (第332・383図)

106Cの北西に位置し、竪穴住居19を切り、掘立柱建物6に切られて検出された桁行3×梁行1間の東西棟建物で、棟はN-85°-Eを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径は60cm～1.1m、深さ35～60cmを測る。桁行の柱穴間距離は2.1～1.55mと比較的詰んでいるのに対し、梁行は4.6～4.3mと広く、床面積は25.4㎡を測る。なお、遺物はP6からTK209併行期を示す須恵器杯582が出土しており、建物はこの期以降に建てられたものと考えられる。(江見)

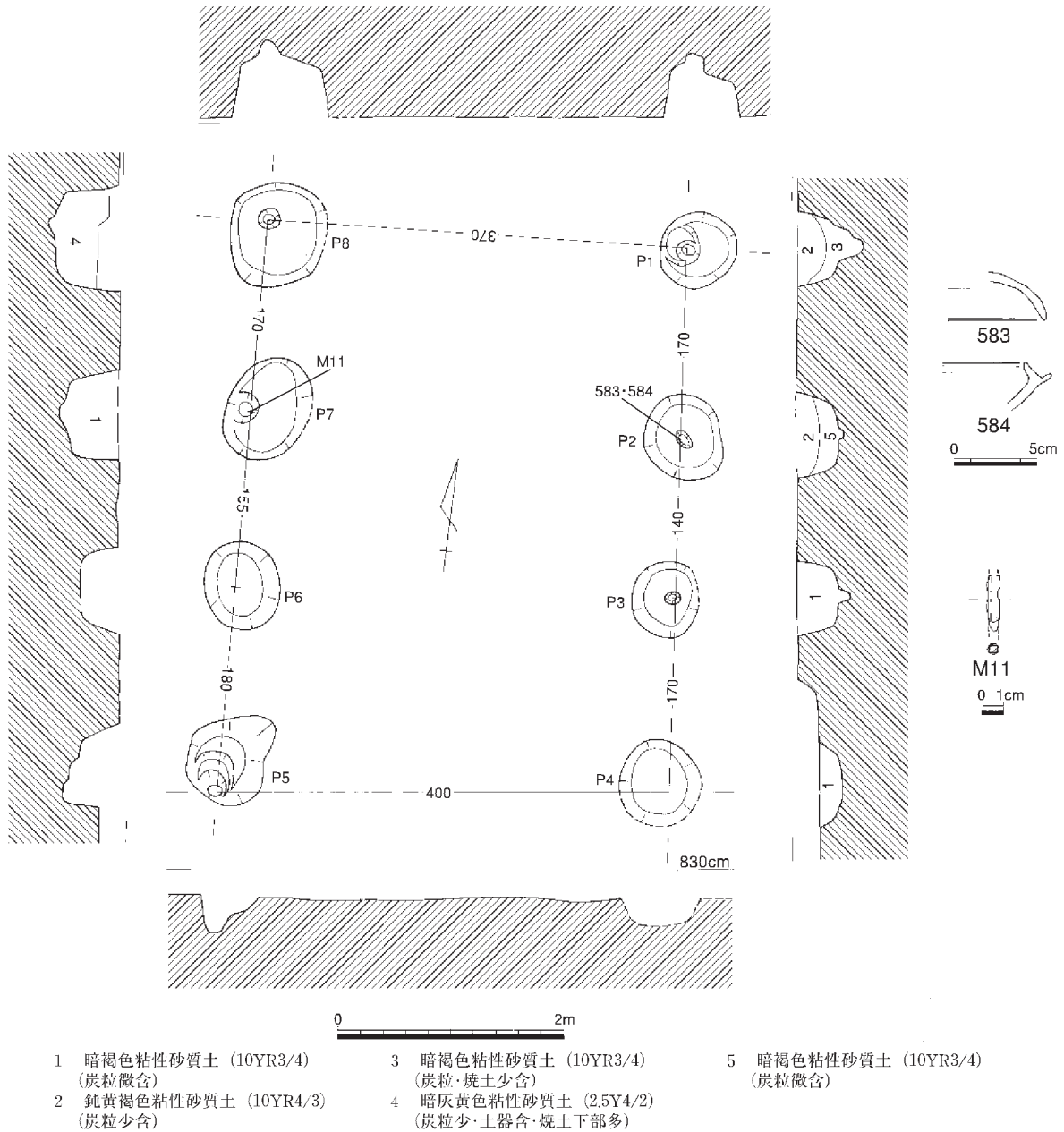


- |                                    |                                      |                                     |
|------------------------------------|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)<br>(炭粒少・焼土含) | 8 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)<br>(炭粒・焼土含)       | 12 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR4/3)             |
| 2 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)              | 9 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)<br>(焼土含)          | 13 オリーブ褐色弱粘性砂質土 (2.5Y4/3)<br>(炭粒微含) |
| 3 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)              | 10 鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR4/3)<br>(炭粒含)      | 14 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR5/3)<br>(焼土含)    |
| 4 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/3)               | 11 鈍黄褐色弱粘性砂質土 (10YR4/3)<br>(炭粒・焼土微含) | 15 オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/3)<br>(焼土土塊含)   |
| 5 黄褐色粘性微砂 (2.5Y5/3)                |                                      | 16 暗灰黄色 (2.5Y5/2)                   |
| 6 灰白色粘性砂質土 (10YR8/2)               |                                      |                                     |
| 7 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)                 |                                      |                                     |

第383図 掘立柱建物5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物6 (第332・384図、図版130)

掘立柱建物5・溝7を切って検出された桁行3×梁行1間の南北棟建物で、棟はN-4°-Wを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径1m～70cm、深さ40cm前後を測る。桁行の柱穴間距離は1.8～1.4m、梁行は4～3.7m、床面積は19.1㎡を測る。遺物はP2から須恵器蓋583・杯584、P7から棒状の不明鉄製品M11が出土している。須恵器はTK217併行期の遺物と思われ、当建物はこの時期以降に建てられたものと考えられる。(江見)

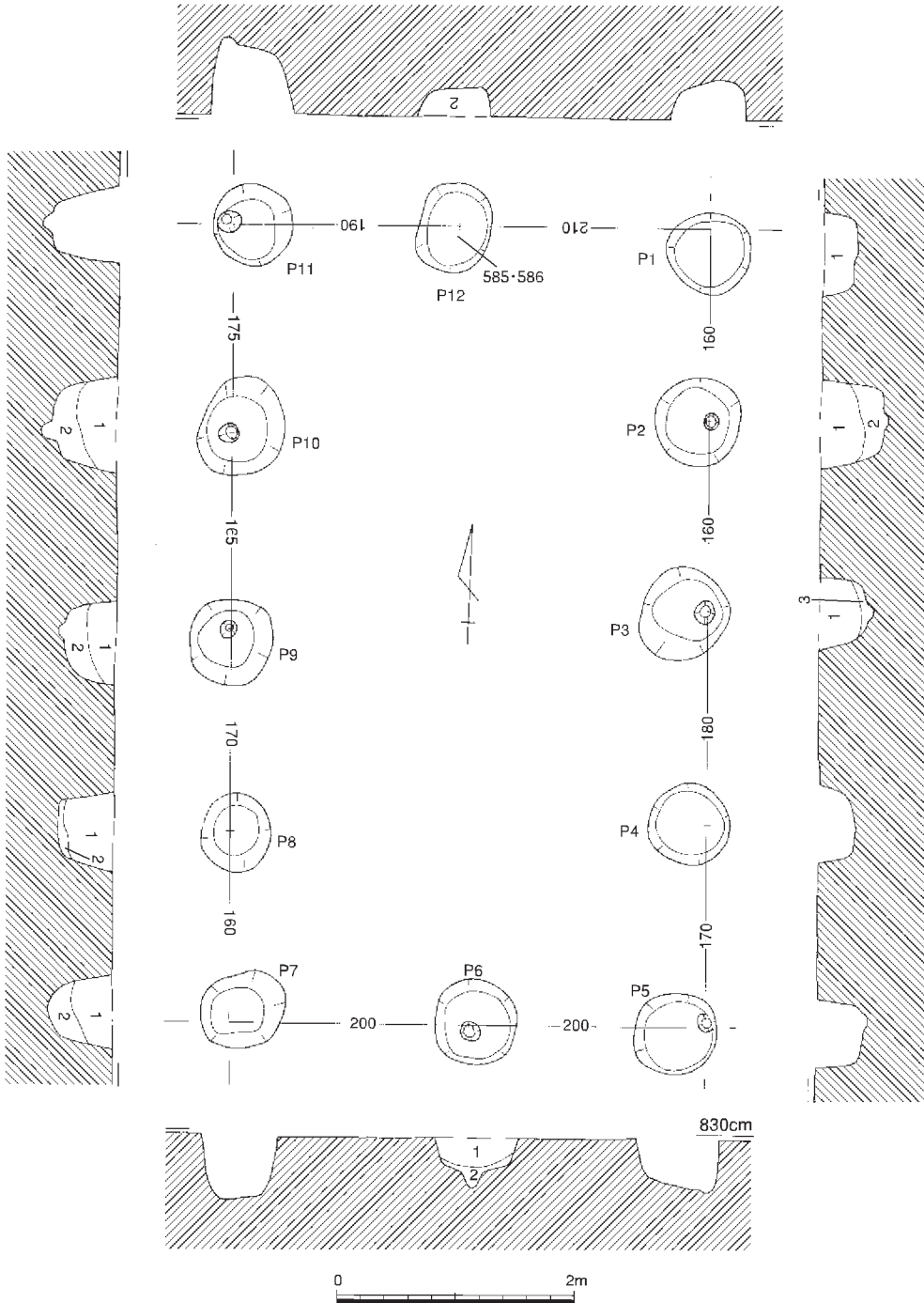
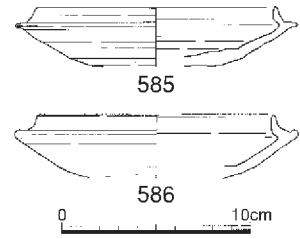


第384図 掘立柱建物6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

掘立柱建物7 (第332・385図)

106Cに位置し、竪穴住居17～19を切って検出された桁行4×梁行2間の南北棟建物で、棟はN-2°-Wを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径70cm前後、深さ50～20cmを測り、特に、梁行中央のそ

れはいずれも浅い。桁行の柱穴間距離は1.8~1.6m、梁行は2.1~2.2m、床面積は27㎡を測る。遺物はP12からTK209併行期と思われる須恵器杯585・586が出土しているが、TK217併行期に廃絶したと考えられる竪穴住居17を切っていることから、建物はこれより後に建てられたと理解している。(江見)



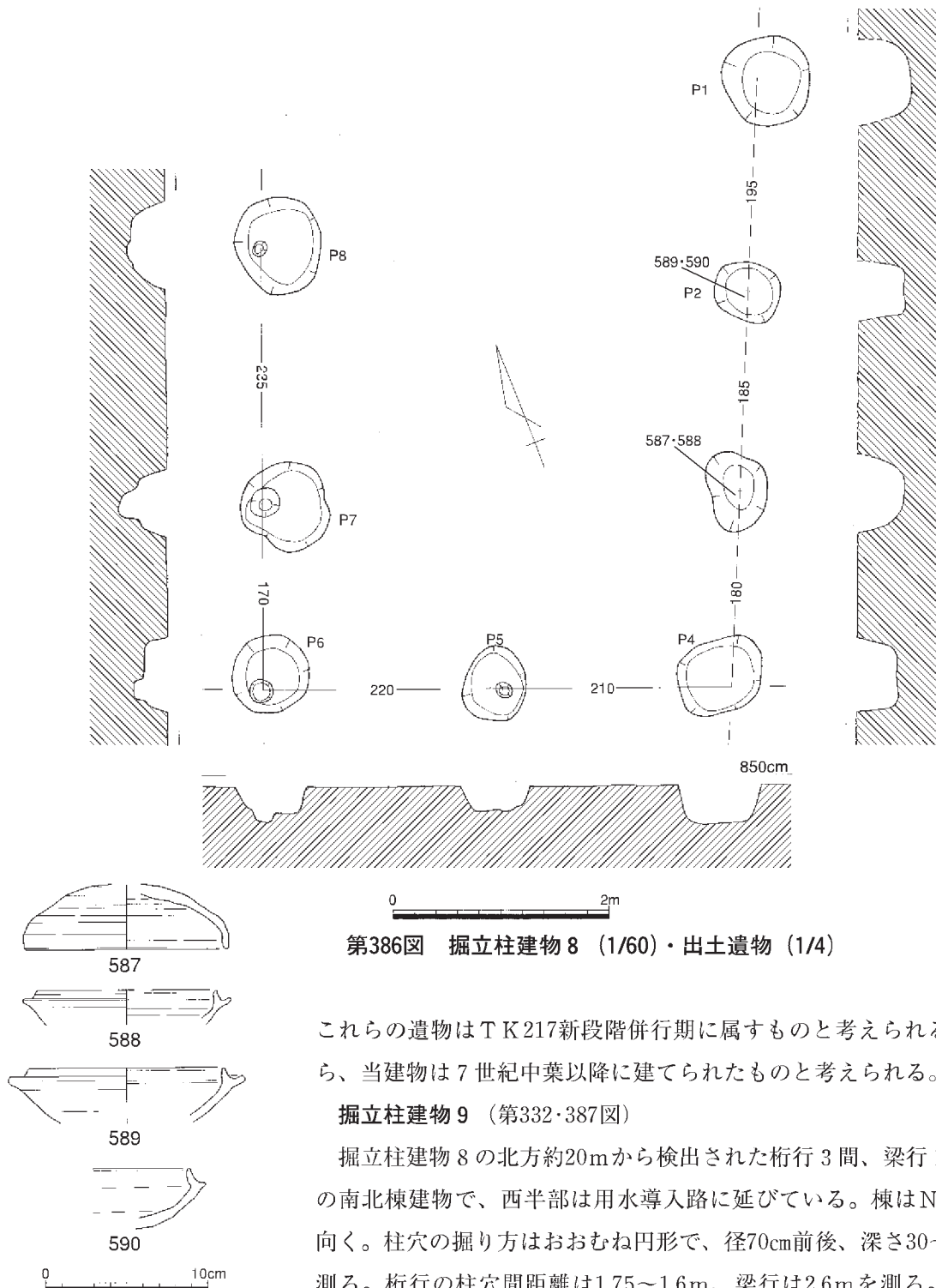
- 1 灰黄褐色粘性砂質土: (10YR4/2) (炭粒少含)
- 2 鈍黄褐色粘性砂質土: (10YR4/3) (黄褐色 (2.5Y5/1) 砂質土混)
- 3 鈍黄褐色粘性砂質土: (10YR4/3)

第385図 掘立柱建物7 (1/60)・出土遺物 (1/4)



**掘立柱建物 8 (第332・386図)**

106Cの南部中央から検出されたもので、建物の北西部分は農道に延びている。桁行3×梁行2間の南北棟建物で、棟はN-22°-Eを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径80cm前後、深さ40~20cmを測り、特に梁行中央のそれは浅かった。また、柱痕跡を残す柱穴から径15cm前後の柱材が使用されたと考えられる。桁行の柱穴間距離は2.35~1.7m、梁行は2.2~2.1mを測り、床面積は推定24㎡余りになるものと思われる。遺物はP2から須恵器杯589・590が、P3から587・588が出土しており、



第386図 掘立柱建物 8 (1/60)・出土遺物 (1/4)

これらの遺物はTK217新段階併行期に属するものと考えられることから、当建物は7世紀中葉以降に建てられたものと考えられる。(江見)

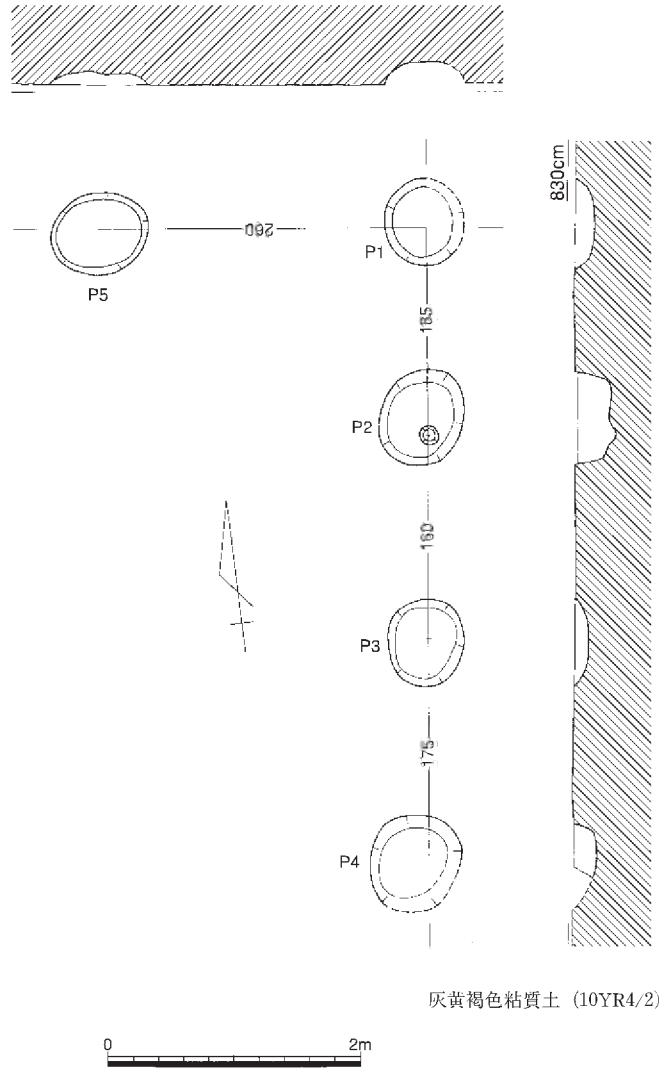
**掘立柱建物 9 (第332・387図)**

掘立柱建物 8 の北方約20mから検出された桁行3間、梁行1間以上の南北棟建物で、西半部は用水導入路に延びている。棟はN-7°-Eを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径70cm前後、深さ30~10cmを測る。桁行の柱穴間距離は1.75~1.6m、梁行は2.6mを測る。遺物は

いずれの柱穴からも土師器および須恵器細片が出土しており、P 2・3には鉄滓も混じていた。後期後半以降に建てられたものであろう。（江見）

**掘立柱建物10**（第332・388図、写真47、図版98・99）

108Cの中央西寄りに位置し、掘立柱建物9の南東15mから検出された桁行3×梁行1間の東西棟建物で、棟はN-86°-Wを向く。柱穴の掘り方は円形と方形気味のものが混じる。円形は径約50cm、方形は80×65cm前後、深さは40～20cmを測る。断面から明らかなように、建物廃棄後柱が抜き取られ、埋没したものである。また、柱痕跡から径20cm余りの柱材が使用されたものと考えられる。桁行の柱穴間距離は1.9～1.55m、梁行は3.8m、床面積19.7㎡を測る。遺物は柱穴から土師器細片・須恵器細片、鉄滓などが出土しているが、図示し得たのはP 6からの須恵器蓋591のみで年代決定は難しいが、当建物は7世紀後半以降に建てられたものとする。（江見）

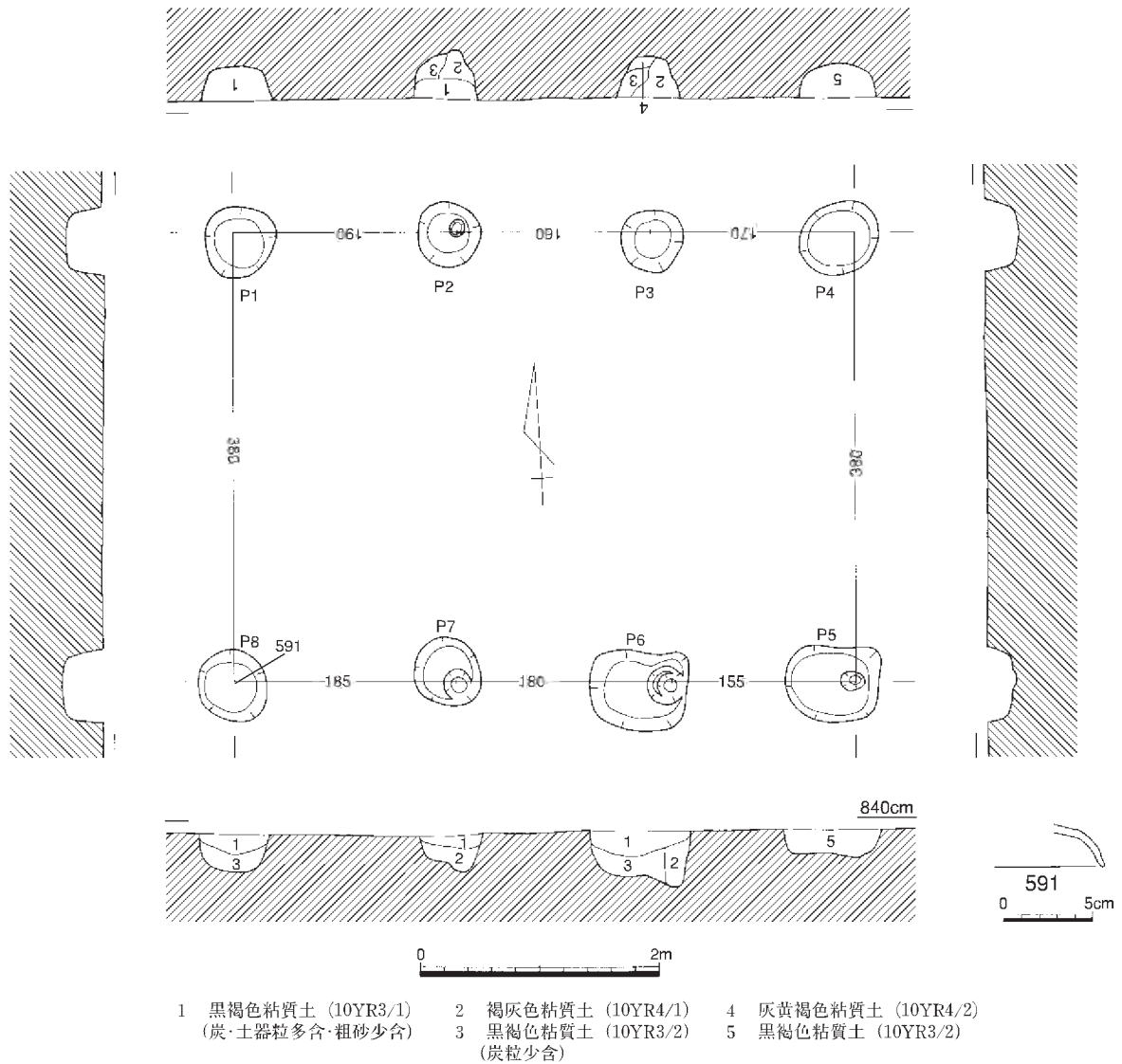


灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)

第387図 掘立柱建物9 (1/60)



写真47 掘立柱建物10周辺調査風景（北から）



第388図 掘立柱建物10 (1/60)・出土遺物 (1/4)



写真48 掘立柱建物11調査風景 (南東から)

掘立柱建物11 (第332・389図、  
写真48、図版99)

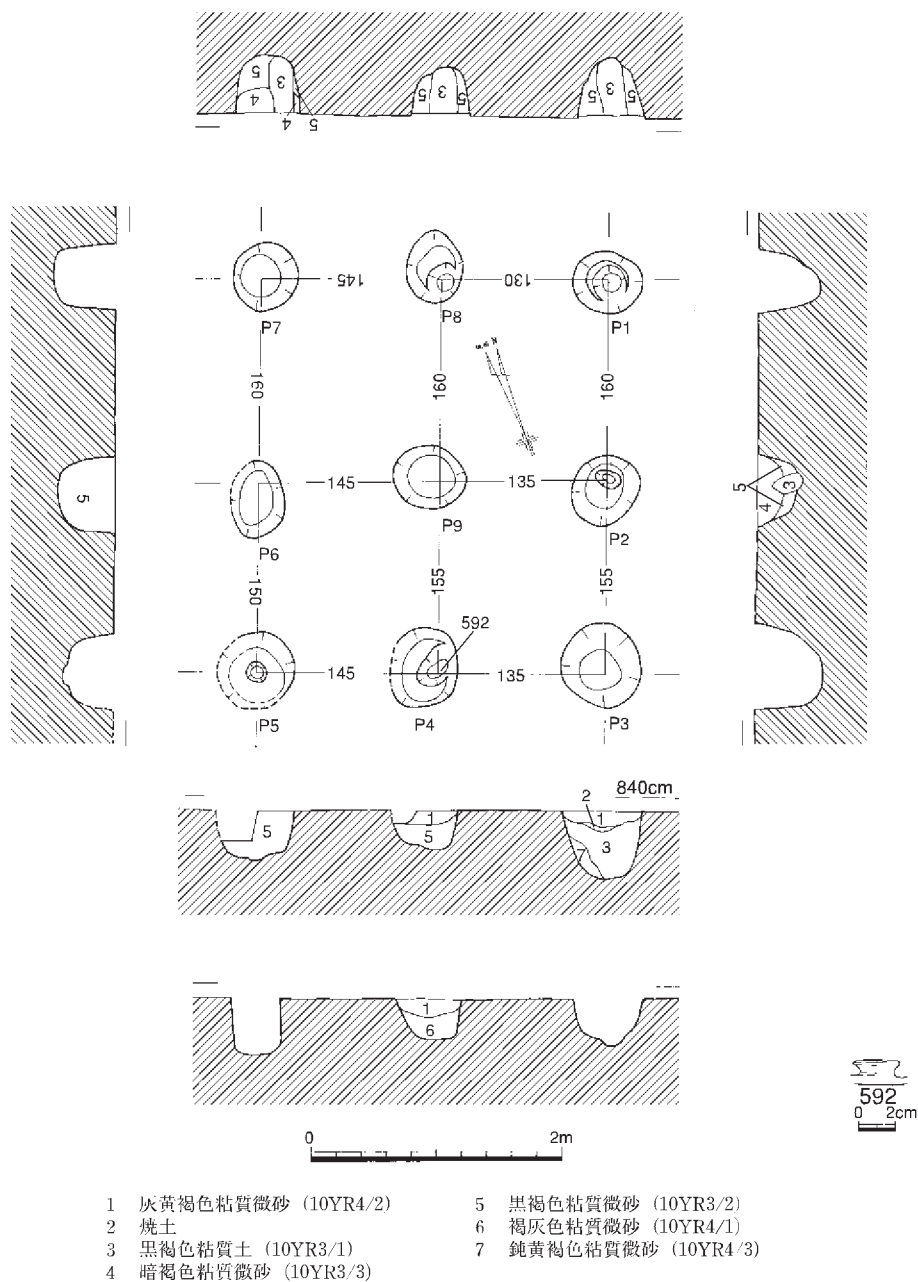
108Cから検出された桁行2×  
梁行2間の総柱建物で、棟はN-  
26°-Eを向く。柱穴の掘り方は円  
形で、径60cm前後、深さ55~30cm  
を測り、桁行・梁行いずれも中央  
の柱穴が小形で浅い傾向が見られ  
た。桁行の柱穴間距離は1.6~1.5  
m、梁行のそれは1.45~1.3m、床  
面積は8.7㎡を測る。遺物は少な  
く、わずかにP4から須恵器蓋  
592が出土するのみであった。つ

まみは小さく、上部は浅く窪み、有蓋高杯のつまみの可能性がある。今回調査で唯一の総柱建物で、建物は古墳時代後半以降に建てられたものと思われる。(江見)

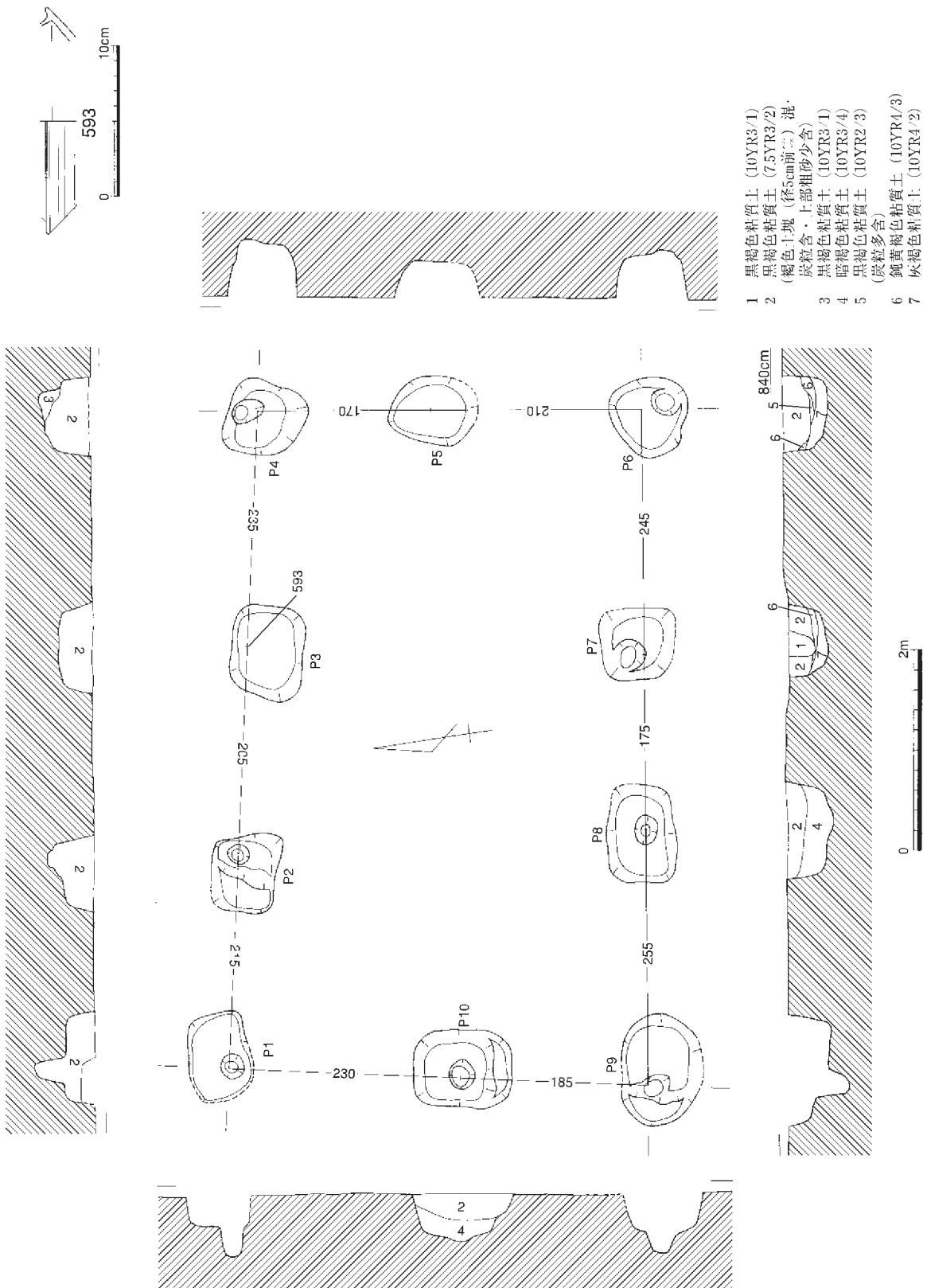
**掘立柱建物12** (第333・390図、図版99)

108C南東角で、掘立柱建物11の東に位置する。東西3間×南北2間の東西棟で、桁行6.75m、梁行4.15mを測る。柱穴は形も深さも不揃いであるが、P1・3・8・10は隅丸長方形、P2・7は隅丸方形に近い平面形を呈する。P3・5以外では柱痕も確認している。

すべての柱穴から須恵器・土師器が出土し、P2を除いては鉄滓も出土している。須恵器杯身593はP3から出土した。天井部にヘラケズリが施されない杯蓋も出土している。細片のため時期の特定はできないが、TK209段階に比定されよう。(渡邊)



第389図 掘立柱建物11 (1/60)・出土遺物 (1/4)

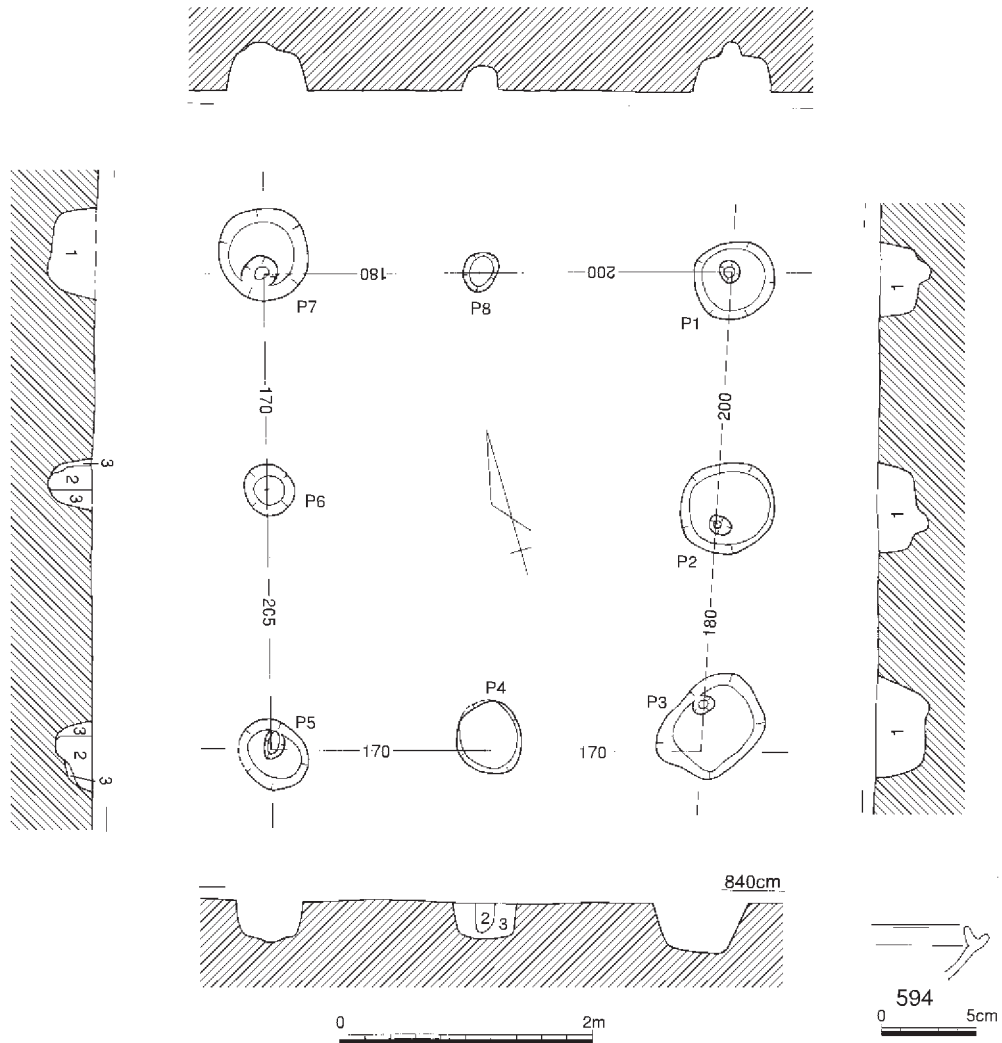


第390図 掘立柱建物12 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物13 (第333・391図、図版99)

108C南東角で、掘立柱建物12の南に位置する。2間×2間で、南北3.8m×東西3.7mのほぼ方形を呈する。柱穴は径30~75cmと差が大きい、柱痕は掘り方規模にかかわらず、径15~20cmである。

各柱穴から須恵器・土師器細片が出土し、P2~4からは鉄滓も出土した。P1から出土した須恵器杯身594は593より古い様相をとどめている。竪穴住居24の505と同じ頃であろうか。(渡邊)

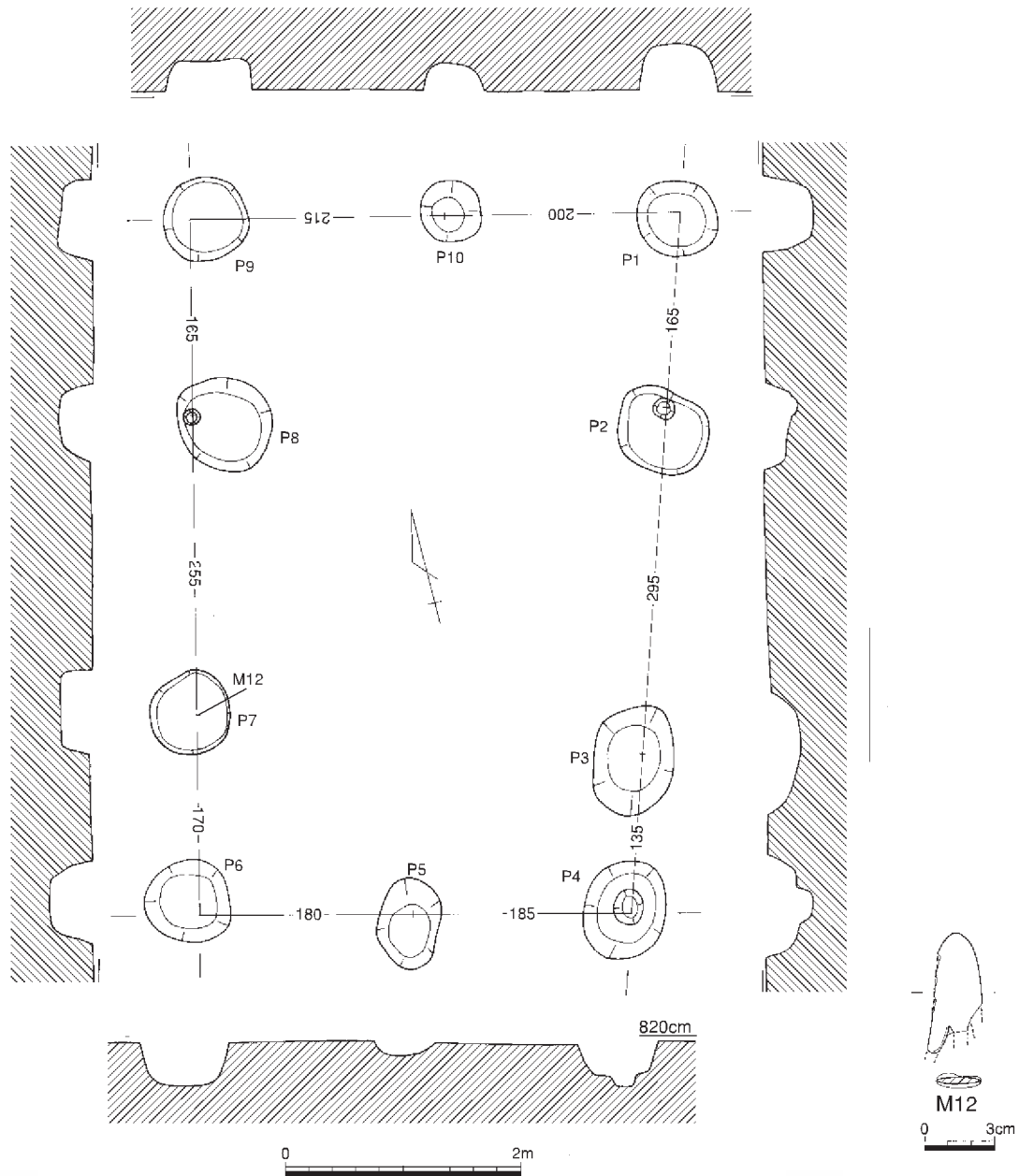


- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3)  | 2 黒褐色粘質土 (10YR3/2) |
| (褐色粘質土塊 (径3~5mm) 混) | 3 暗褐色粘質土 (10YR3/3) |
| 炭粒多含)               |                    |

第391図 掘立柱建物13 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物14 (第333・392図、写真49・50、図版100・130)

110Cの北西から検出された桁行3×梁行2間の南北棟建物で、棟はN-16°-Eを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で径70cm前後、深さ30cm余りを測るが、梁行中央のそれは小形で浅いものであった。桁行の柱穴間距離は2.95~1.35m、梁行のそれは2.15~1.8mを測り、南北の梁行距離の違いが大きいためから全体に歪んだ平面形を呈す。床面積は23.3㎡を測る。遺物はP7の鉄鏃M12をはじめ土師器・須恵器片、鉄滓などが出土しており、当建物は後期後半以降に建てられたものであろう。(江見)



第392図 掘立柱建物14 (1/60)・出土遺物 (1/3)



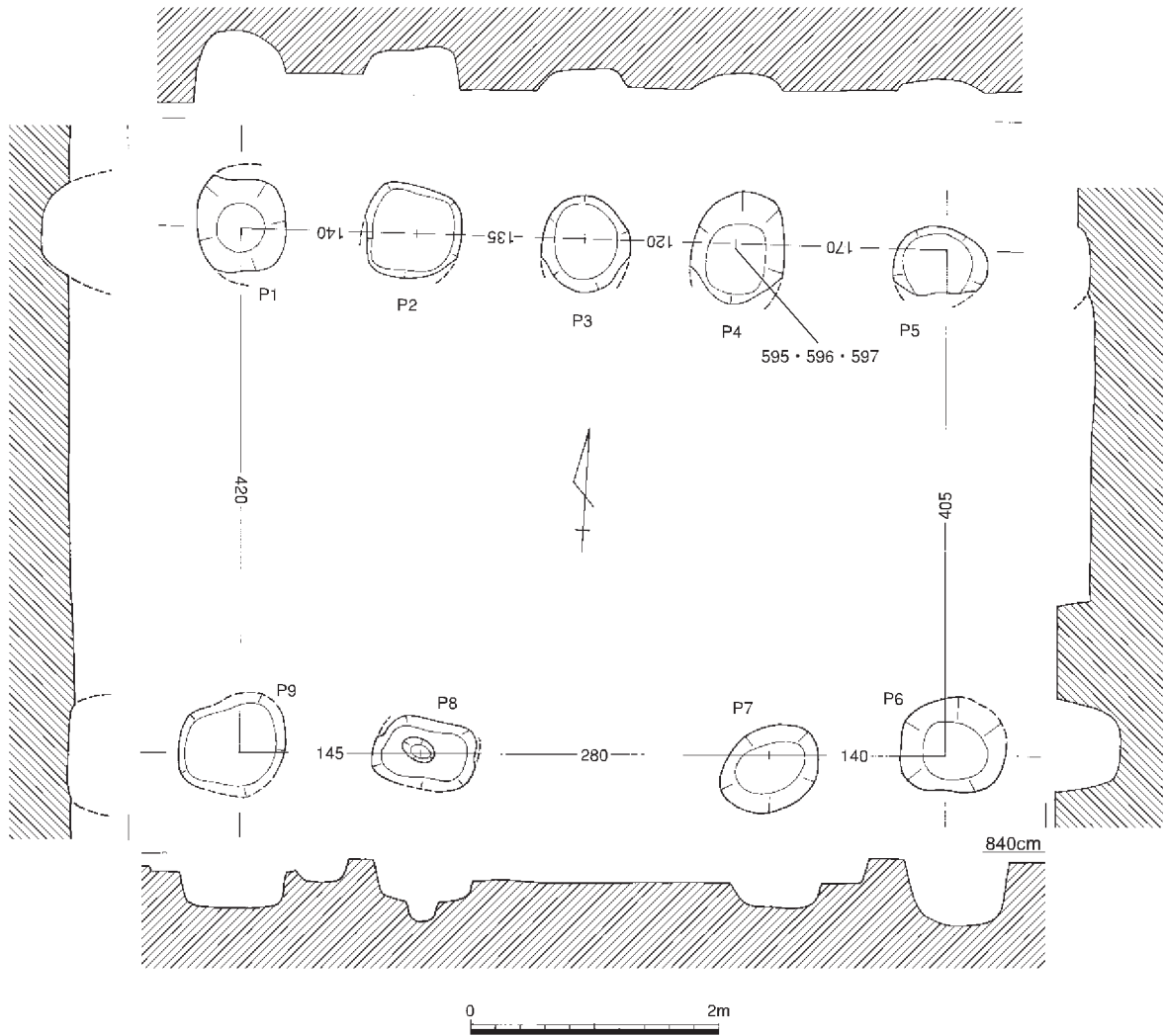
写真49 掘立柱建物14～16周辺調査風景  
(東から)



写真50 掘立柱建物14周辺調査風景  
(南西から)

**掘立柱建物15** (第333・393図、写真49、図版100)

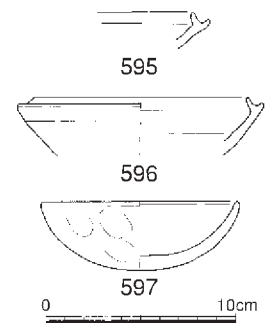
掘立柱建物14の南西から検出された桁行3×梁行1間の東西棟建物で、棟はN-87°-Eを向く。柱穴はおおむね円形を呈すが、方形気味のものもある。径は70cm前後、50～20cmを測る。桁行の柱穴間距離は2.8～1.2m、梁行のそれは4.2～4.05mを、床面積は23.5㎡を測る。遺物はP4から須恵器杯595・596・土師器鉢597が、他の柱穴からも土器細片、鉄滓など出土しており、当建物はこれら遺物の特徴から、TK217古段階併行期以降に建てられたものと考えられる。(江見)



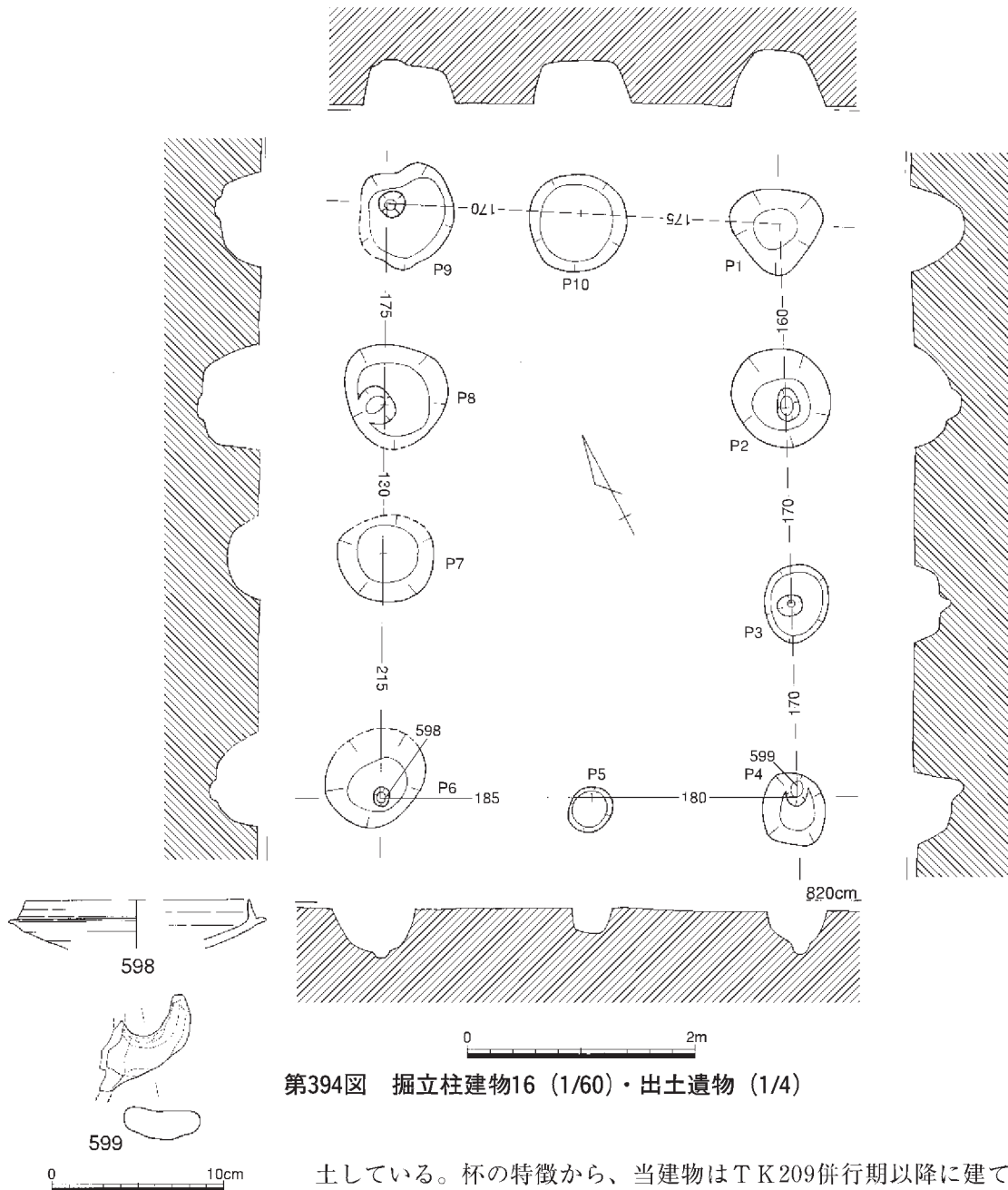
第393図 掘立柱建物15 (1/60)・出土遺物 (1/4)

**掘立柱建物16** (第333・394図、写真49、図版100)

掘立柱建物15の東8mから検出された桁行3×梁行2間の南北棟建物で、棟はN-27°-Eを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径80～60cm、深さ50～30cmを測るが、南側梁行中央の柱穴のみ径40cm、深さ20cmと小さく浅いものであった。桁行の柱穴間距離は2.15～1.3m、梁行のそれは1.85～1.7m、床面積は18.2㎡を測る。遺物はP4から須恵器杯598が、P6から甕599が、他の柱穴からも土器細片や鉄滓などが出







第394図 掘立柱建物16 (1/60)・出土遺物 (1/4)

土している。杯の特徴から、当建物はTK209併行期以降に建てられたものと考えられる。(江見)

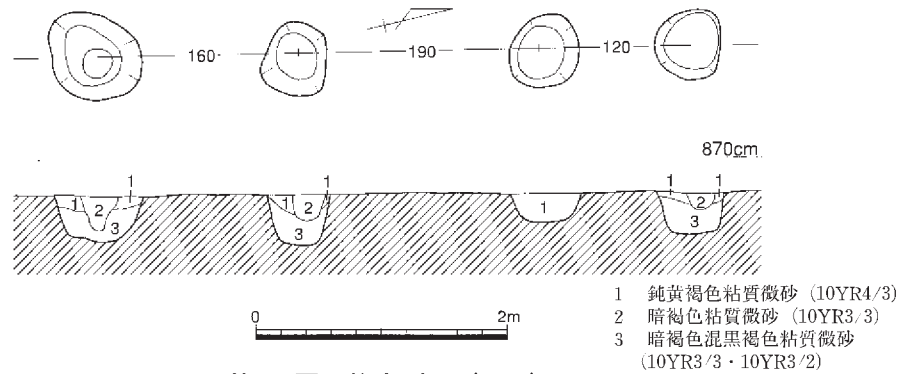
#### 4 柱穴列

##### 柱穴列1 (第331・395図)

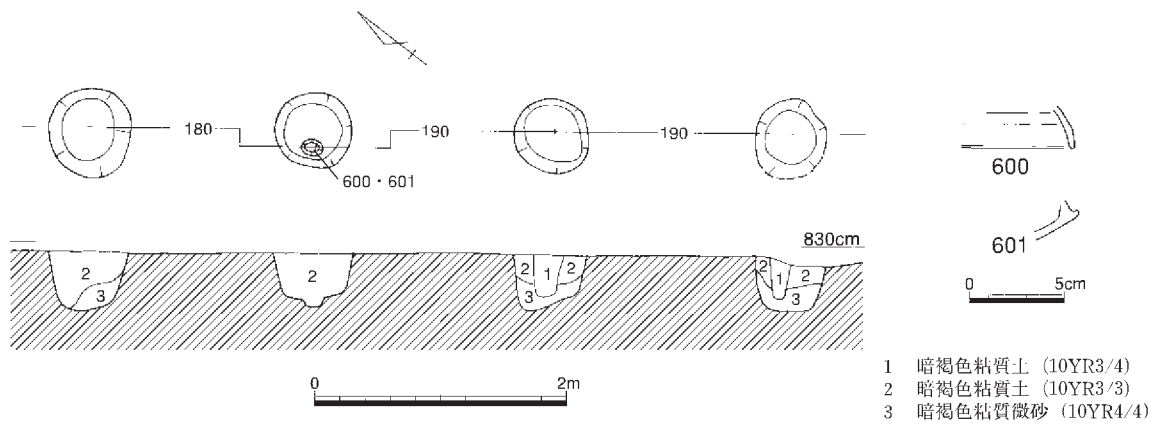
102Cの南東隅で検出した3間から成る柱穴列である。主軸はN-12°-Eで、やや東に傾く。柱穴の掘り方は円形で、直径60~80cm、検出面から底面までの深さは20~45cmを測る。柱間の距離は1.2mから1.9m。出土遺物はなく、確実な時期決定は難しいが、主軸が掘立柱建物2の南北軸とほぼ同じであることから、建物に伴うものと考えられる。(松尾)

##### 柱穴列2 (第333・396図)

110Eの南東に位置し、竪穴住居29を切って検出されたもので、主軸はN-38°-Wを向く。柱穴の掘り方は円形を呈し、径約60cm、深さ40~30cmを測る。柱穴間距離は1.9~1.8mを測る。遺物は須恵器



第395図 柱穴列1 (1/60)

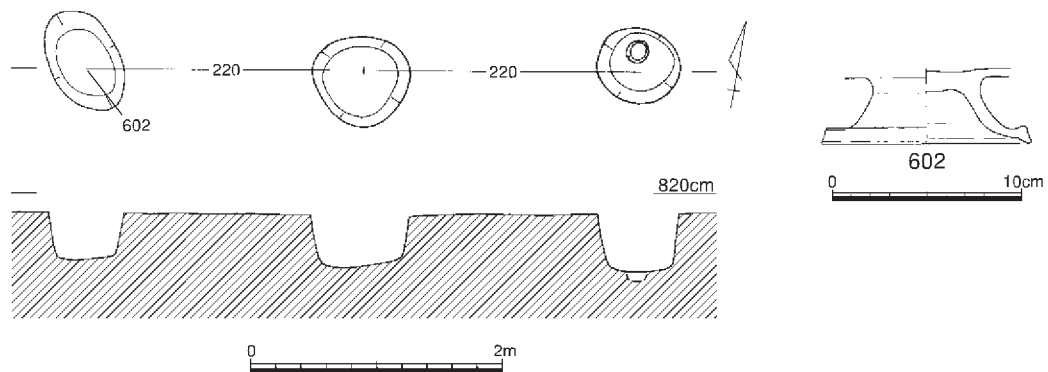


第396図 柱穴列2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

蓋600・杯601をはじめ鉄滓なども出土している。前述の建物群と様相は類似しているが、主軸方向は異にする。後期後半以降に掘り込まれたものであろう。(江見)

柱穴列3 (第334・397図)

112Aの中央南寄りから位置し、その内2間分が検出されたもので、掘立柱建物の一部である可能性もある。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径70cm前後、深さ約40cmを測る。柱穴間距離は2.2mでやや幅が広い。遺物は須恵器高杯602をはじめ土師器片、鉄滓などが出土している。TK217併行期以降に掘り込まれたものであろう。(江見)



第397図 柱穴列3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

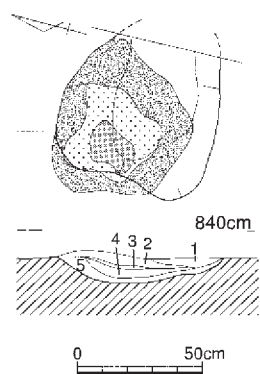
## 5 焼土面

### 焼土面 1 (第332・398図)

108Cの北西から検出された。径70cm余りの不整円形を呈す浅い窪みの北西部に、径20cmの範囲が異常に被熱し土塊化した焼土面を検出した。そして、被熱の影響は周囲に巡り、第4・5層を形成していた。上部構造は全く分からなかったが、埋土から土師器・須恵器片が出土している。(江見)

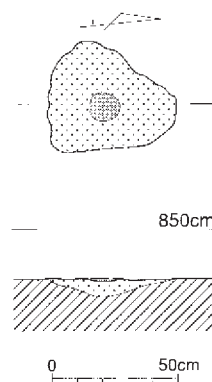
### 焼土面 2 (第332・399図)

108Cで、掘立柱建物11の南東に位置する。南北51cm×東西約40cmの範囲に被熱面が認められた。検出面の標高は8.1mである。出土遺物もなく時期も性格も不明であるが、焼土面1同様の遺構ととらえ、ここに含めた。カマドや炉の可能性も完全には否定できない。(渡邊)



- 1 鈍黄褐色粘性土微砂 (10YR4/3)  
(焼土少含)
- 2 暗褐色粘性砂質土 (10YR3/3)  
(炭粒含・焼土多含)
- 3 浅黄色弱粘性砂質土 (2.5Y7/4)  
(焼土土塊含)
- 4 明赤褐色弱粘性砂質土 (5YR5/6)  
(焼土多含)
- 5 褐色砂質土 (10YR4/4)  
(焼土少含)

第398図 焼土面 1 (1/30)



第399図 焼土面 2 (1/30)

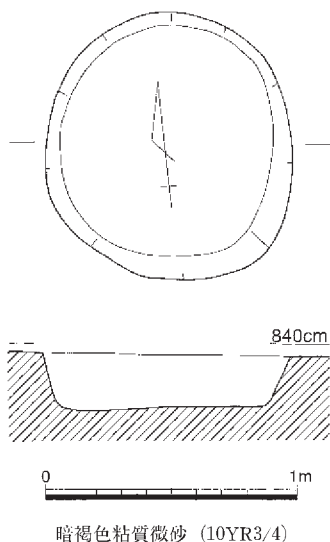
## 6 土壇

### 土壇79 (第331・400図)

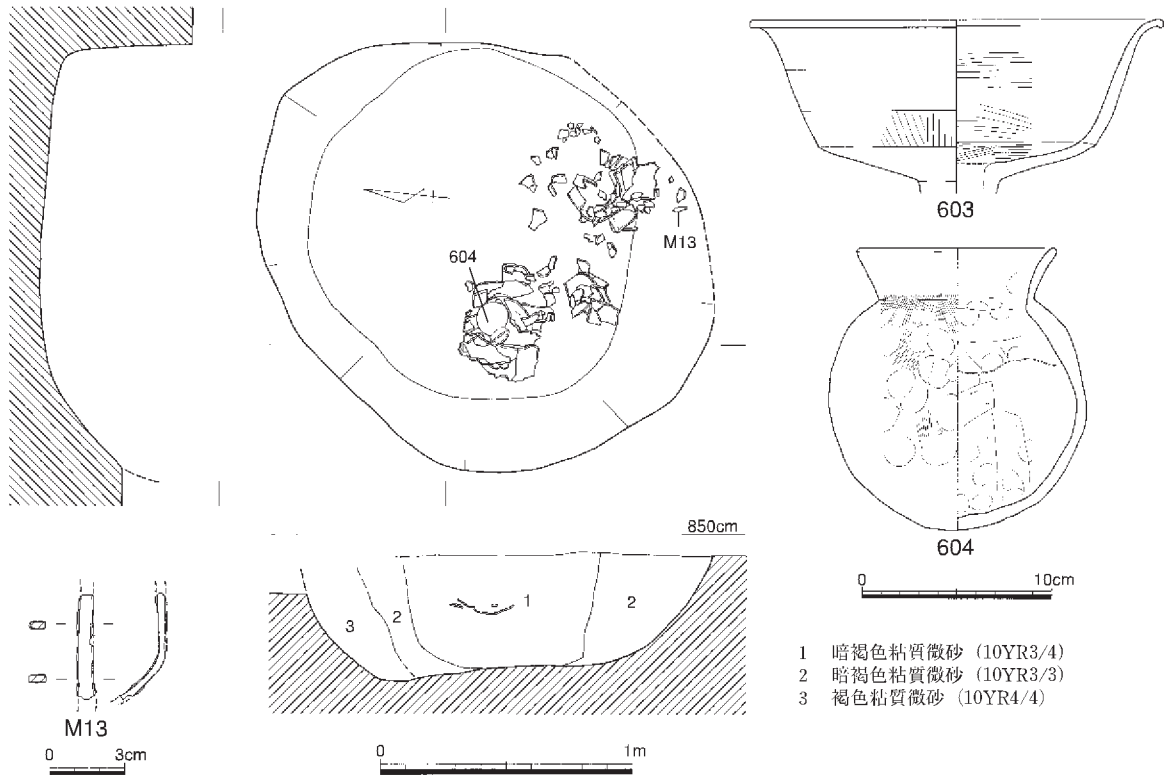
102Aの南東で、竪穴住居11および掘立柱建物1の西隣に位置する。平面形は円形で、長軸1.06m、短軸97cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは22cm。埋土は暗褐色粘質微砂で、ベースの土に比べると若干黒みを帯びた粘性の土であった。古墳時代後期と思われる。(松尾)

### 土壇80 (第331・401図、図版101・118・130)

102Aで検出した土壇である。平面形は不整円形を呈し、断面形は逆台形である。長軸が1.76m短軸は1.69mを測る。検出面から底面までの深さは44cm。遺物は土壇底面より上部から土師器高杯603、土師器壺604が出土している。また、土壇内から鉄鎌M13が出土した。土器はいずれも破片になった状態で出土しており、まとめて廃棄された物である可能性が高い。時期は土器等から古墳時代前期と思われる。(田中)



第400図 土壇79 (1/30)



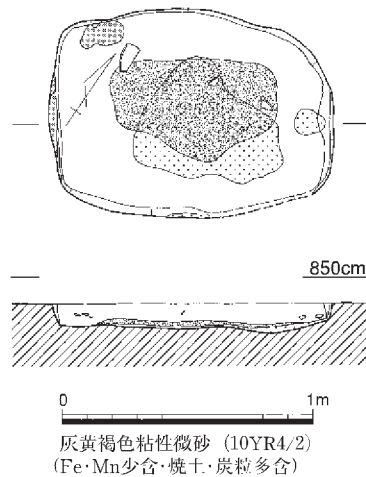
第401図 土壙80 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壙81 (第331・402図)

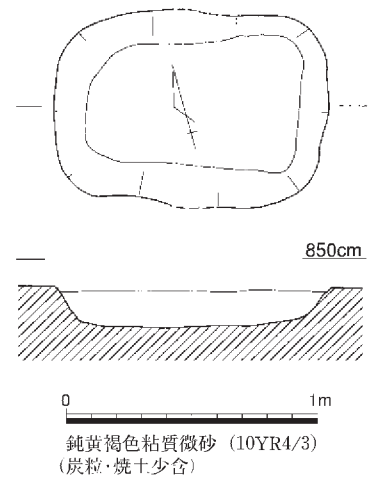
102Cの中央やや北寄りに位置する。南北に長い隅丸長方形で、長軸は1.13m、短軸は83cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは12cm。ほぼ直角に立ち上がる側面内側は被熱のため赤色あるいは赤白色に変色していた。埋土を掘り下げると、中央部分に炭が層をなして堆積している。その炭層を取り除き、底面まで検出すると被熱面が現れた。土壙の形態および炭層・被熱痕跡などから、窪木薬師遺跡等でみられる木炭焼成土壙と類似している。古墳時代後期。(松尾)

土壙82 (第331・403図)

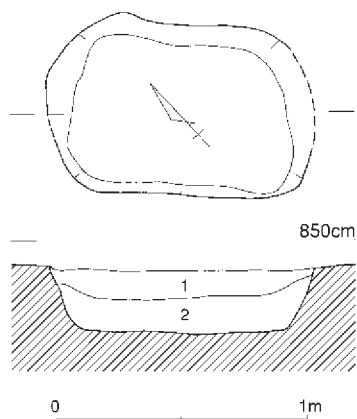
102Cの中央やや北寄り、先述の土壙81南西に位置する。東西に長い隅丸長方形を呈し、長軸は1.09m、短軸は77cmを測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土中に炭・焼土をわずかに含むものの、土壙81に比べるとその量は大変少なく、側面内側の被熱痕跡も無い。出土遺物は皆無であり、時期の決め手が欠くものの、古墳時代後期であろう。(松尾)



第402図 土壙81 (1/30)



第403図 土壙82 (1/30)



- 1 褐色粘質微砂 (10YR4/4)  
(炭粒・焼土塊多含)
- 2 暗褐色微砂 (10YR3/4)  
(炭粒・焼土塊少含)

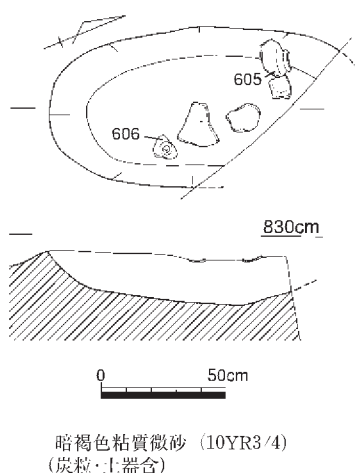
第404図 土壌83 (1/30)

**土壌83** (第331・404図)

102Cで検出した土壌である。平面形は不整長方形を呈しており、断面形は逆台形である。長軸が残存長で1.07m、短軸が67cmを測る。検出面から底面までの深さは25cmであり比較的浅い土壌である。遺構低面の標高は8.13mを測る。土壌内から遺物は出土しておらず、検出層位等から古墳時代後期である可能性が高い。(田中)

**土壌84** (第332・405図)

106Cの北西に位置し、土壌の一部を竪穴住居19に切られ検出された。平面楕円形を呈し、底部は平坦で、壁は緩く外方に立ち上がる。規模は1.2m×64cm、深さ17cmを測る。埋土は炭粒が混じる粘質微砂で、遺物は上層から土師器壺605・高杯606などが出土している。壺は大形で古い様相を残す



ものの、高杯脚部の円孔は見られないことからすれば、中期後半に埋没した土壌と判断される。(江見)

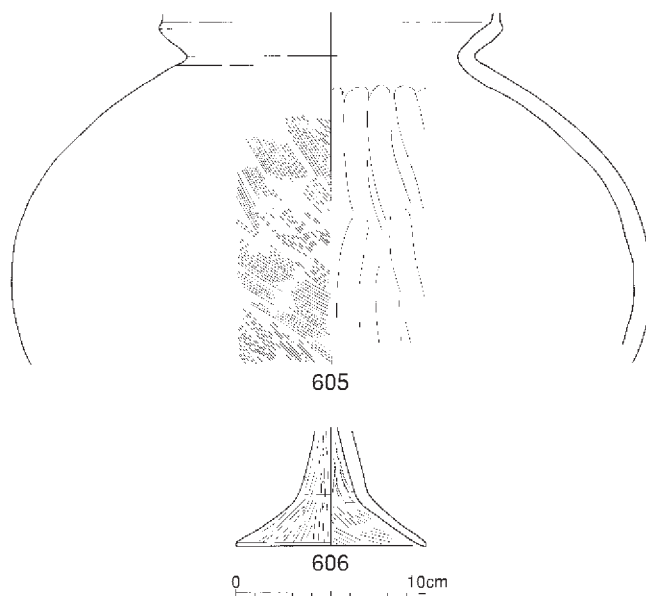
**土壌85** (第332・406図)

106C中央北寄り、竪穴住居19の南東に位置する。径約1.4mの円形を呈し、検出面からの深さ78cm、底面の標高7.6mを測る。埋土には炭・焼土が含まれ、第2～3層は焼土による堆積である。

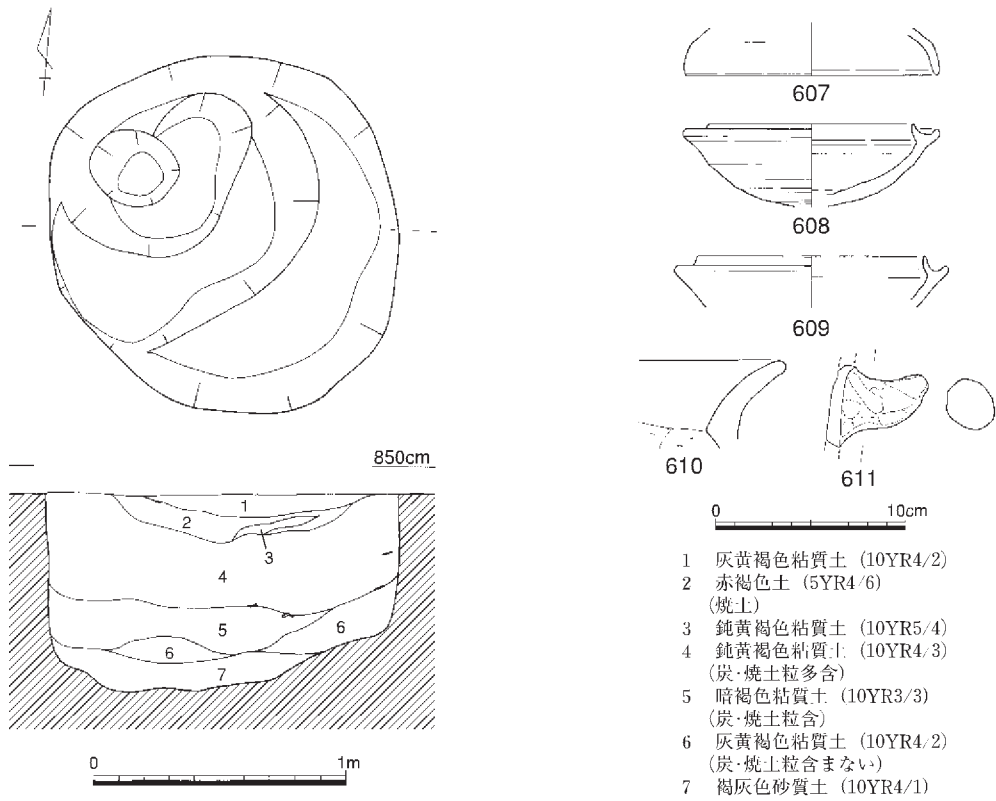
遺物には須恵器、土師器のほか鉄滓も出土している。須恵器杯蓋607は須恵器杯身608・609と比較して、一段階古く位置付けられるかもしれないが、TK217段階に埋没したと考えられる。(渡邊)

**土壌86** (第332・407図、図版130)

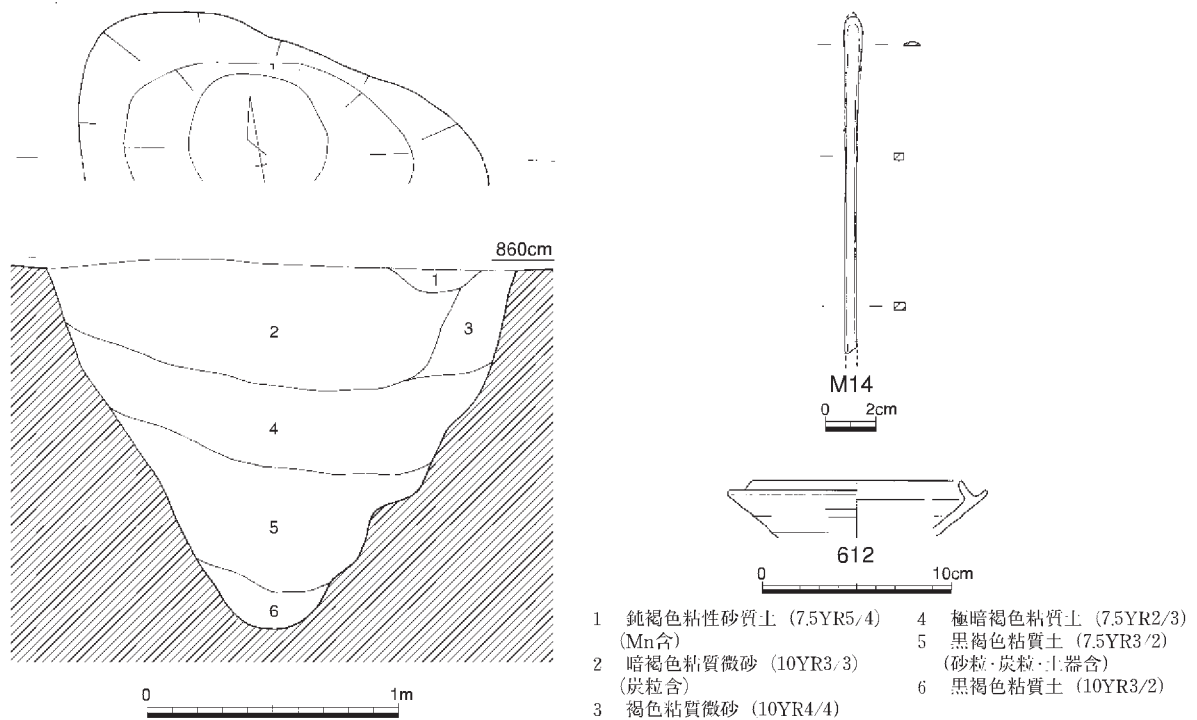
104Eの北東角に位置し、土壌南半部は用地外に延びる平面不整円形を呈す井戸状の土壌である。底部は狭く窪み、壁は斜めに立ち上がる。規模は径約1.6m、深さ1.45mを測る。埋土は6層からなり、いずれもしまりのない埋土であった。第2・5層には炭粒が混じり、第5層からは鉄鏃M14、須



第405図 土壌84 (1/30)・出土遺物 (1/4)

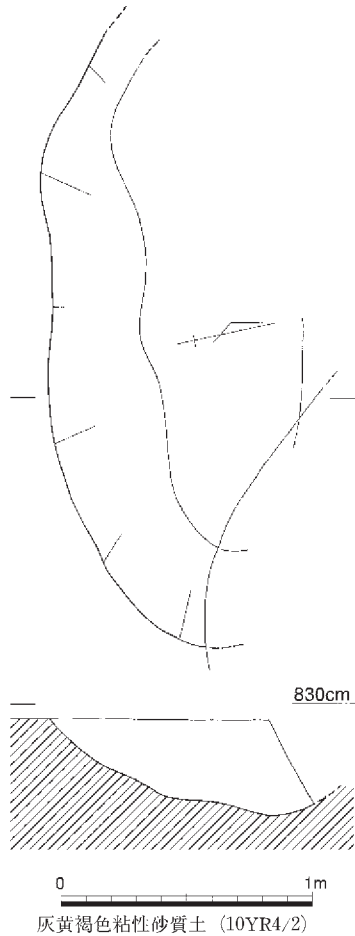


第406図 土壌85 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第407図 土壌86 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

恵器杯612の出土をはじめ、土師器片、鉄滓や焼土塊なども出土している。土器の特徴からTK217古段階併行期には廃棄された土壌であろう。(江見)



第408図 土壙87 (1/30)

**土壙87** (第332・408図)

106Cの東部中央付近に位置し、北部は農道へ延び、東部は中世の土壙102に切られ検出された平面不整形円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は緩く外方へ立ち上がる。埋土は灰黄色粘性砂質土でこれに混じって土師器細片が出土している。須恵器片を含まず、前期の可能性もある。(江見)

**土壙88** (第333・409図)

108C南東角で、掘立柱建物12の南東に位置し、同建物のP6に切られている。南北1.04m、東西1.32mの不整形で、検出面からの深さ32cm、底面の標高7.99mを測る。

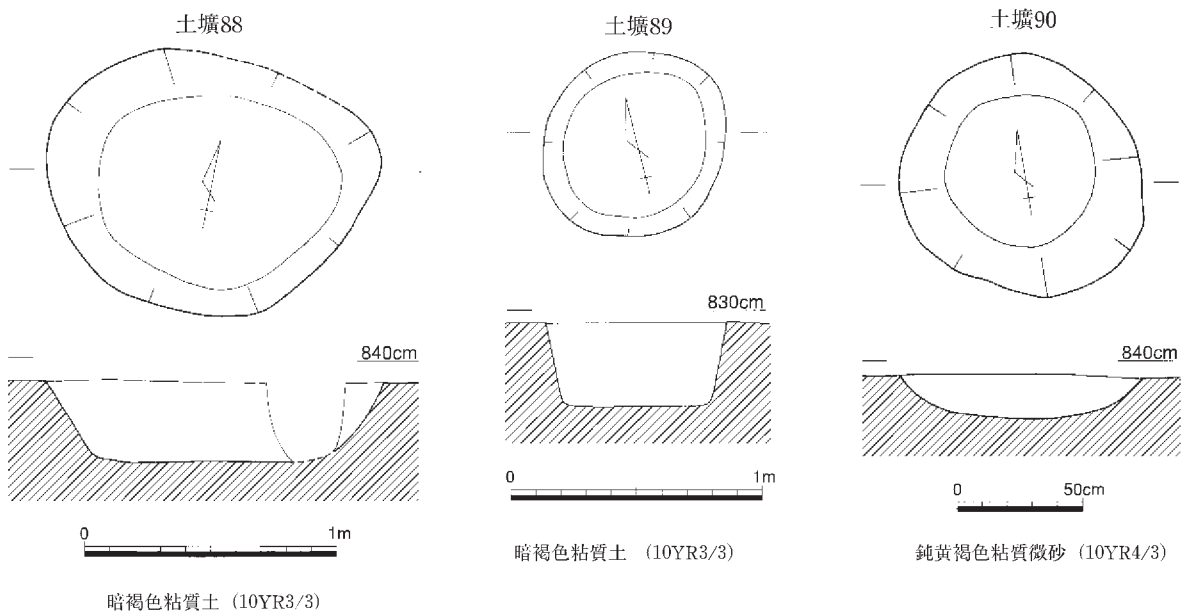
出土遺物は少なく、須恵器も出土していない。埋土より古墳時代後期と考えた。(渡邊)

**土壙89** (第333・409図)

竪穴住居28と掘立柱建物14に挟まれた位置から検出された平面円形を呈す土壙である。底部は平坦で、壁は急に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土で、これに混じってわずかながら土師器片・須恵器片、鉄滓などが出土している。後期後半に廃棄された土壙であろう。(江見)

**土壙90** (第333・409図)

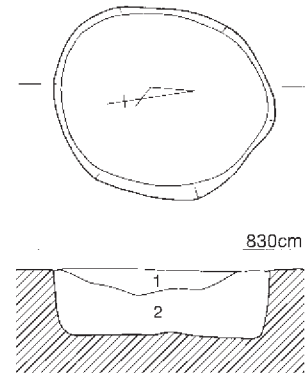
竪穴住居28の南東部を一部切って検出された平面円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は緩く外方へ立ち上がる。径約1m、深さ約20cmを測る。埋土は鈍黄褐色粘質微砂で、これに混じってわずかながら土師器細片が出土している。後期に廃棄された土壙であろう。(江見)



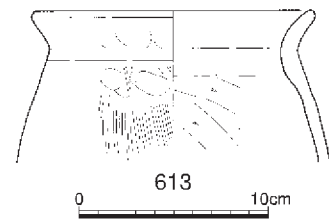
第409図 土壙88～90 (1/30)

**土壌91** (第333・410図)

竪穴住居29の北東角を一部切って検出された平面円形の土壌である。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は径80cm前後、深さ26cmを測る。埋土は2層からなり、これらに混じって土師器甕613をはじめ須恵器細片などが出土している。甕は肩の張りがなく、口縁端部を丸く収めるもので、後期後半に属するものと思われる。(江見)



- 1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)  
(炭粒・焼土多含)
- 2 灰褐色粘質微砂 (7.5YR4/2)



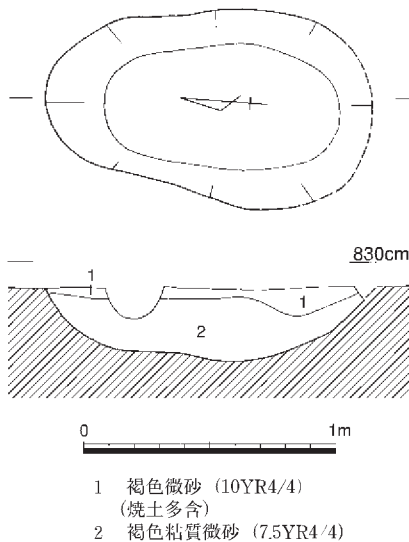
第410図 土壌91 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

**土壌92** (第333・411図)

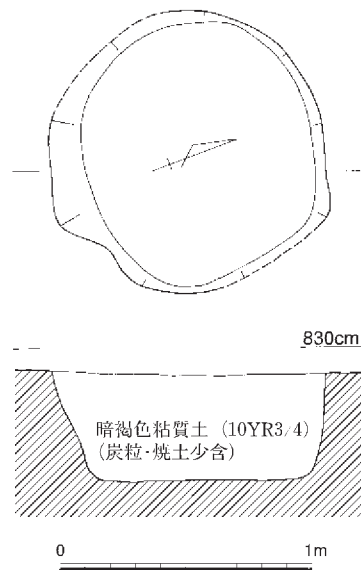
竪穴住居29の南東角を一部切って、また、柱穴列2に一部切られて検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部は凹凸があり、壁は緩く外方へ立ち上がる。規模は1.3m×79cm、深さ約30cmを測る。埋土は2層からなり、これに混じって土師器甕細片が出土している。(江見)

**土壌93** (第333・412図)

竪穴住居30の南東部を一部切って検出された平面不整円形を呈す土壌である。底部は平坦で、壁は急に立ち上がる。規模は径約1.1m、深さ約40cmを測る。埋土には炭粒・焼土粒が含まれ、これに混じって土師器細片・須恵器細片が出土している。(江見)



第411図 土壌92 (1/30)

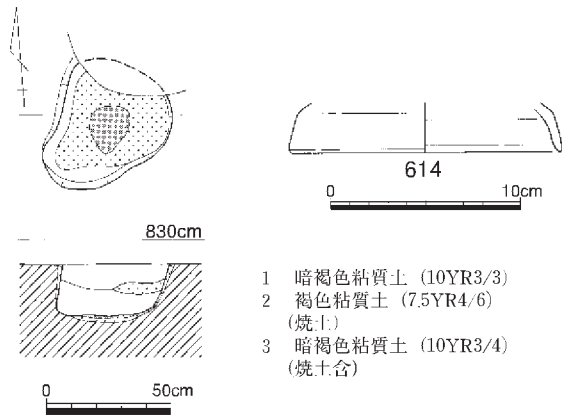


第412図 土壌93 (1/30)

**土壌94** (第333・413図)

土壌の北部を竪穴住居30および中世柱穴に削平を受け検出された、平面不整円形を呈す窯状の土壌である。規模は56×40cm、深さ20cmを測る。底部は平坦で、中央部に径約20cmの範囲に高く熱を受けた面が広がり、ほぼ垂直に立ち上がる壁にも厚さ約1cmの焼土壁が巡っていた。土壌北部に煙道部分が存在したかは不明であるが、底部の被熱の広がり状況から見れば、その可能性は低いものと思われる。





第413図 土壌94 (1/30)・出土遺物 (1/4)

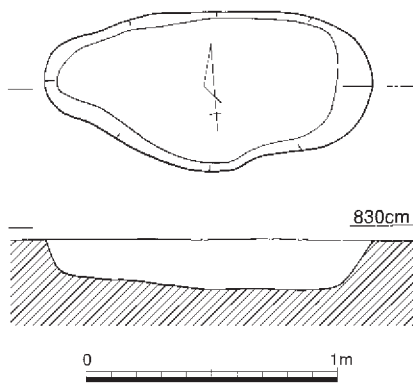
土壌上部にまでドーム状に壁が持ち上がり、中央部分が開いていたのではないかと推定している。遺物は須恵器蓋614が出土しており、後期後半に埋没したものと考えられる。(江見)

土壌95 (第334・414図)

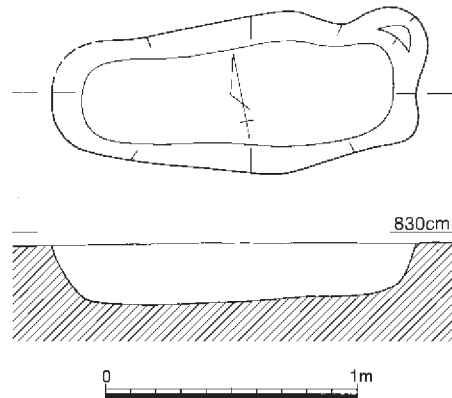
112Aの南東から検出された平面不整楕円形を呈す土壌である。底部はほぼ平坦で、壁は斜め外方に立ち上がる。規模は1.3m×63cm、深さ20cmを測る。遺物はわずかながら土師器細片が出土している。(江見)

土壌96 (第334・415図)

土壌95の東から検出された平面不整楕円形の土壌である。底部は平坦で、壁は斜め外方に立ち上がる。規模は1.45m×64cm、深さ24cmを測る。埋土に炭粒・焼土粒を含み、これに混じって土師器細片および須恵器細片が出土している。後期後半に廃棄された土壌であろう。(江見)



第414図 土壌95 (1/30)



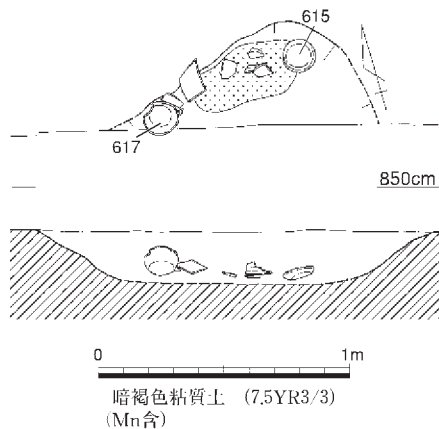
第415図 土壌96 (1/30)

土壌97 (第334・416・417図、図版118・130)

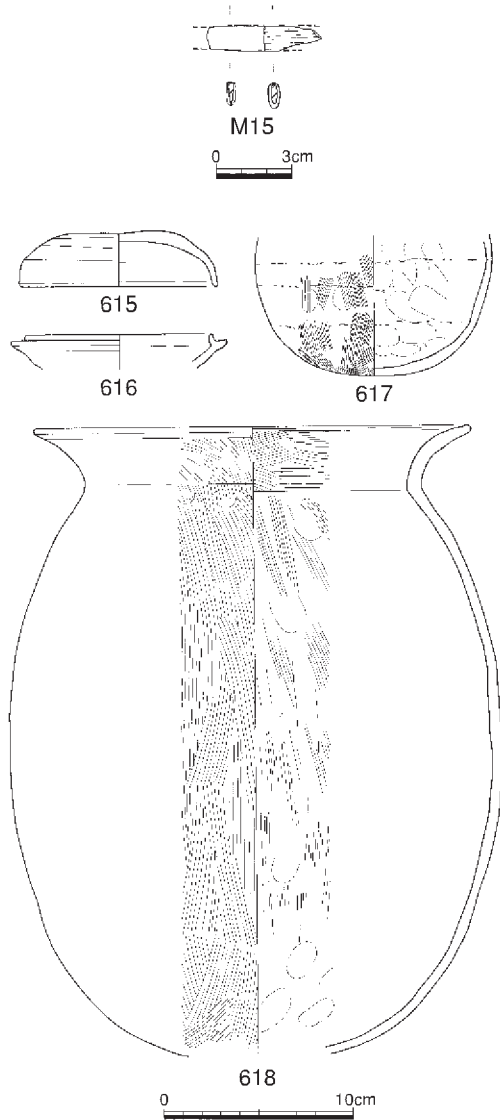
112Cの南西から検出された、平面不整円形を呈すと思われる浅い土壌である。推定径1.4m、深さ20cmを測る。底部はほぼ平坦で壁は緩く斜め外方に立ち上がる。土壌の北部には焼土粒および炭粒の広がりが認められ、その上部から完形品を含む遺物が土壌の北辺に沿うように出土している。須恵器蓋615・杯616・甕617・618、刀子M15などで、土器の特徴からTK217新段階併行期に埋没した土壌と考えられる。(江見)

土壌98 (第330・418図)

126Gの北東から検出した土壌である。平面形は約半

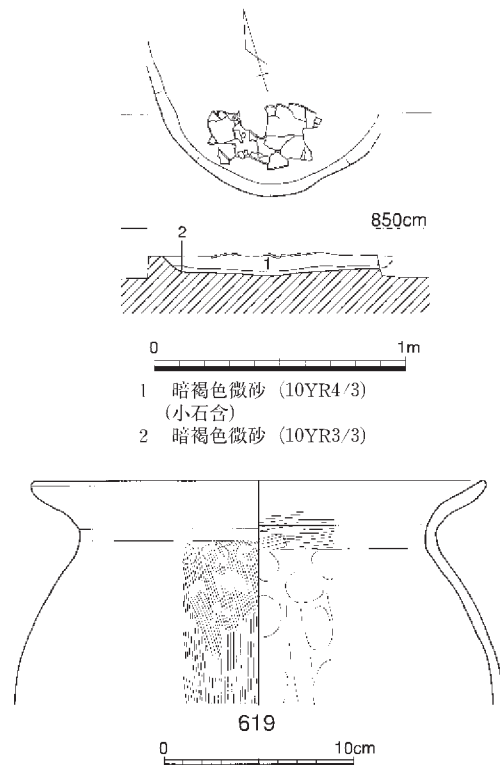


第416図 土壌97 (1/30)



第417図 土壌97出土遺物 (1/3・1/4)

分が残存しており、円形と思われる。断面形は逆台形である。検出面から底面までの深さは8cmを測り、比較的浅い土壌である。遺構底面の標高は8.32mを測る。遺物は土師器甕619が破片の状態出土した。底部が欠損し、約1/3が残存している。口径が残存で23.7cm、器高は残存で11.9cmである。遺構の時期は出土土器等から、古墳時代後期と考えられる。(田中)



第418図 土壌98 (1/30)・出土遺物 (1/4)

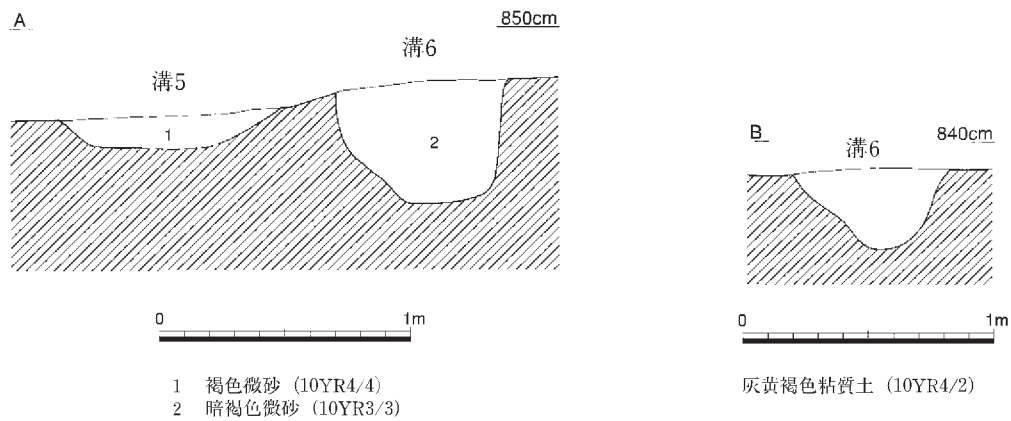
## 7 溝

### 溝5 (第331・419図)

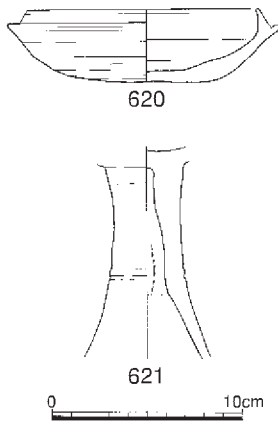
100C～Eにかけて検出した溝で、南西から北東へ向かって流れていると思われるが、北東の隅に関しては埋土が分かりづらく、ここより北に関しては確認しきれていない。幅は88cm、深さは13cm程で、後述の溝6に比べるとその底面のレベルは高く、浅い溝である。この溝の西側は低位部となることから、微高地に沿う形で掘削されていることが分かる。調査区の南西端での切り合い関係から、溝6よりも新しい。出土遺物は無いが、検出状況から7世紀以降に掘削された溝と考える。(松尾)

### 溝6 (第331・419図外、図版118)

100C～Eにかけて検出した溝で、先述の溝5と北東部分では併走するが、南西部ではやや西に振る。底面のレベルから、南西から北東へ向かって流れる溝であることが分かる。幅は60～70cm、深さ

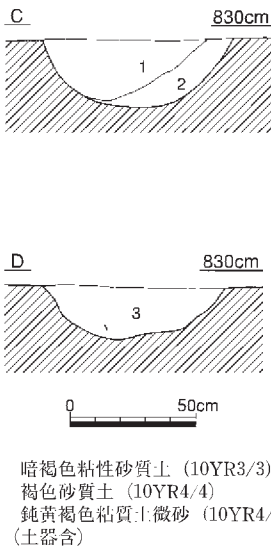


第419図 溝5・6 (1/30)・溝6出土遺物 (1/4)



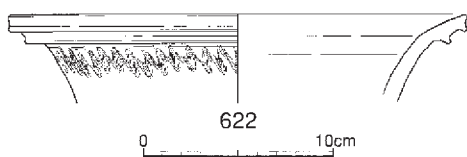
は33～48cmと、北東方向へいくほど深くしっかりした堀り方をもつ。なお北東部分ではその埋土が分かりづらくなり、確認しきれなかったが、微高地をとりまく様に掘削されていることは、溝5と同じである。遺物は620・621の須恵器が埋土上層より出土している。620の杯身は口径が12.2cm、器高が3.9cmを測る。621は脚部の中程に沈線が2条巡る長脚の高杯で透かしがない。溝の時期はTK209～217古段階併行期を下限として機能したと考えられる。(松尾)

溝7 (第332・420図)



106A～E中央に位置する南北方向に延びる溝で、竪穴住居20や掘立柱建物6などに切られ検出された。溝底部は丸く窪み壁は斜め外方に立ち上がる。幅約80cm、深さ約25cm、長さ30数mを検出した。溝の埋土は3層の砂質土が堆積していたが、溝肩部の検出時は判然とせず、微細な土質の相違と、わずかながら混入する遺物の出土によって調査を進めたものである。遺物はTK47併行期と思われる須恵器甕622の他は土師器細片がわずかながら出土するのみであった。なお、当溝は想定される当古墳時代集落の中央部を流走しており、開削は中期前半に遡る可能性が高いとともに、後半には埋没したものと考えている。(江見)

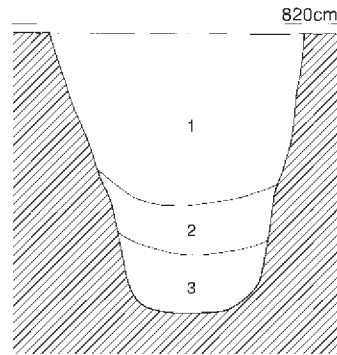
溝8 (第334・421図、図版101)



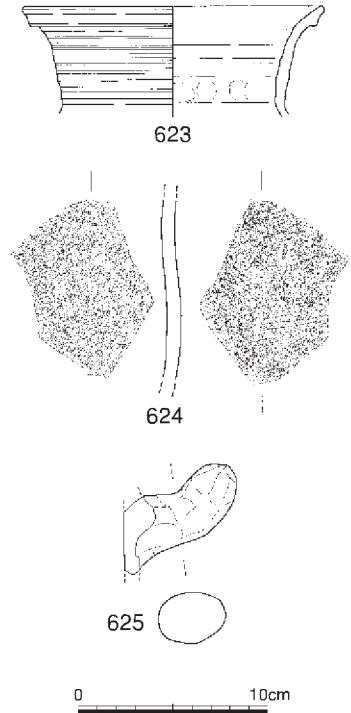
第420図 溝7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

114A～E中央に位置する南北方向に延びる溝で、北端付近でわずかに北西方向へ傾き気味に検出された。この溝より東は地形が下がり、また、当時期の遺構は全く検出されなかったことから集落の東を限る溝と判断される。溝は幅約1m、深さ1.1mを測る。底部は

平坦で、壁は垂直に近く急に立ち上がっている。埋土は3層からなるが、いずれも粘質土で埋め戻された状況は想像されたが、水が流れたような砂層の堆積は全く確認できなかった。遺物は少なく須恵器甕623・624・土師器甕625が出土している。土器はTK23併行期のものと考えられ、溝7と同様に開削時期は中期と思われるが、埋没時期については検討を要す。(江見)



- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/4)
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/4)  
(褐色土塊含)
- 3 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)  
(褐色土塊含)



## 8 埋置土器

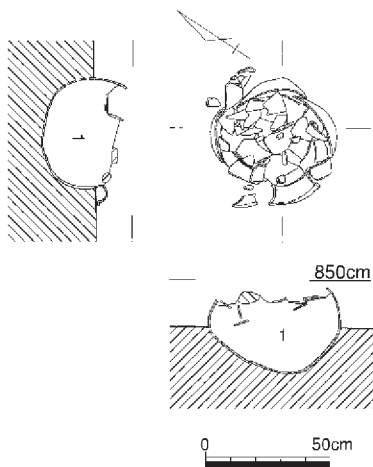
埋置土器 1 (第330・422図、  
図版102・118)

126 G から検出した埋置土器

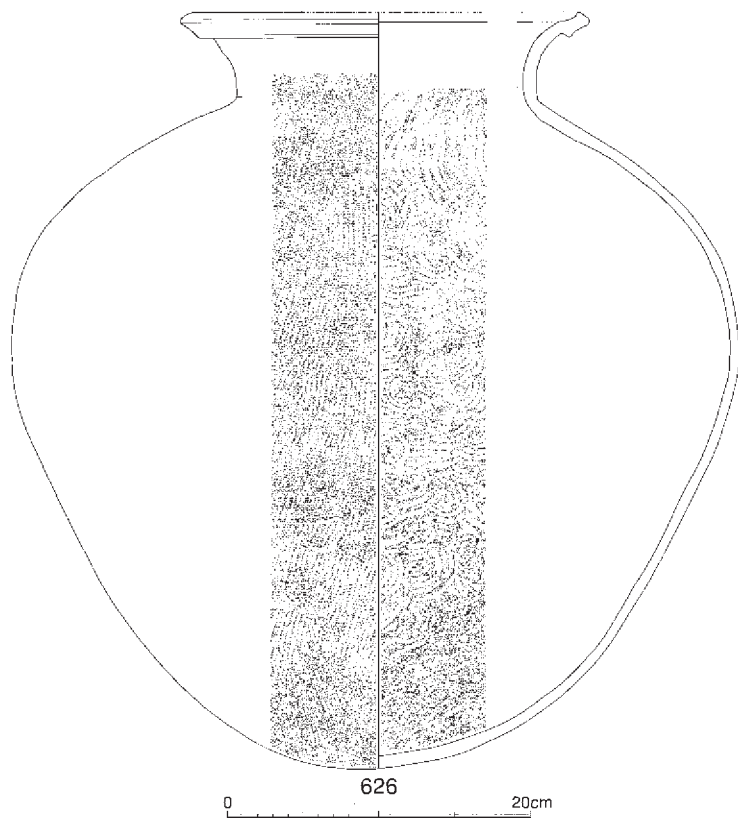
である。須恵器甕で、検出時は口縁部から胴部上半部が破片の状態出土した。復元した結果、ほぼ完形であった。口径が25.5cm、器高は50cmである。検出時は土器棺と推定したが、土器内からは土器および人骨は確認できなかった。

周辺から同様の埋置土器は、確認されず、単独で埋置されたものである可能性が高い。時期は古墳時代後期と考えられる。(田中)

第421図 溝 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(2~7cm小石等含)

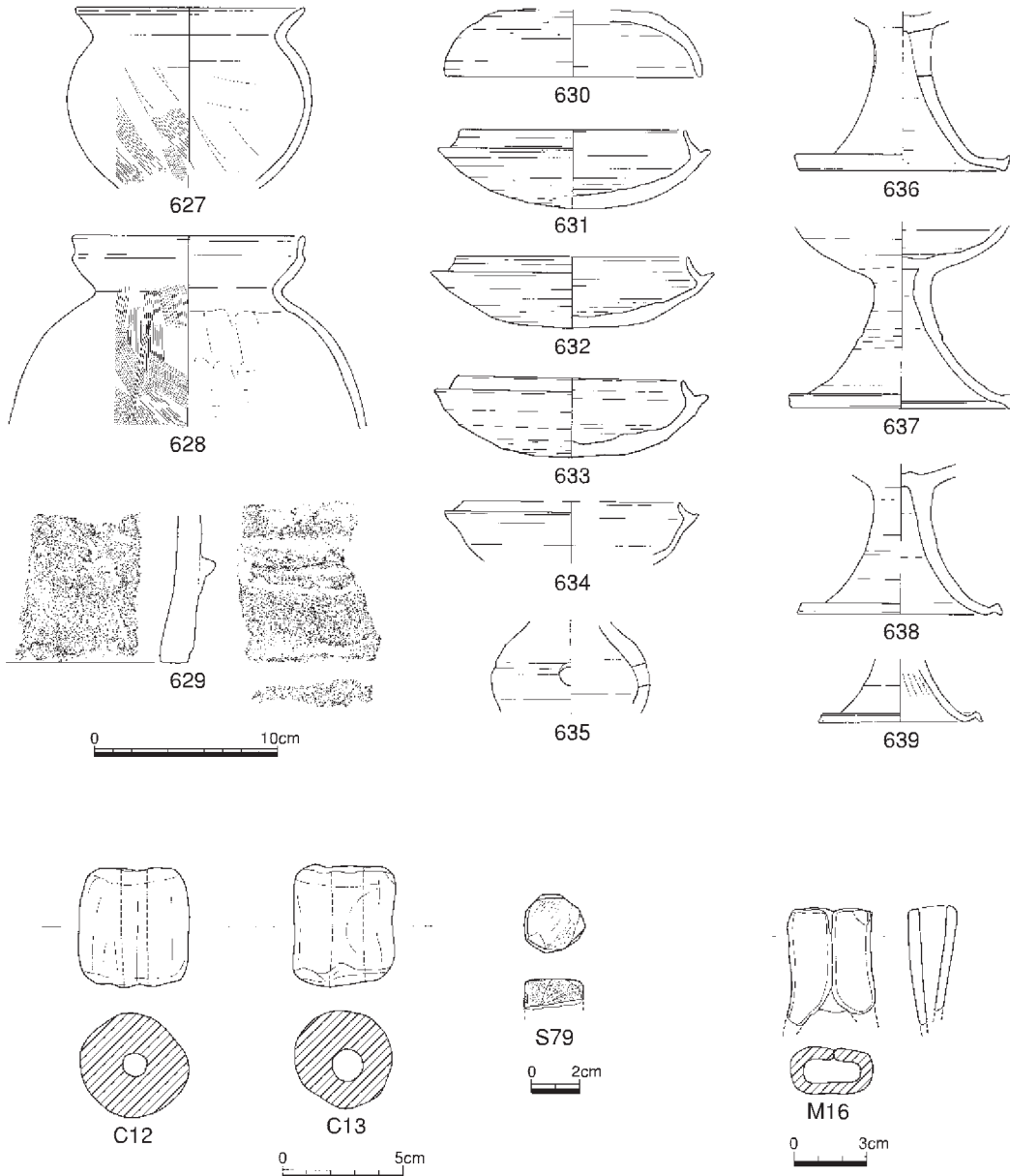


第422図 埋置土器 1 (1/30)・出土遺物 (1/5)

9 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第423図、図版118・127・129・130)

古墳時代の遺物は、後半期の集落が存在する場所から集中的に出土しており、他の地区からの出土は極端に少ない。また628の土師器甕の様に、前半期に遡るものはすべての調査区において希薄である。

629は形象埴輪の基部に相当する部分であると思われる。今回報告する全調査区内において、埴輪の出土はこの1点のみである。古墳時代後半期の集落が展開する104Aの包含層より出土している。630～634は須恵器の杯。TK43～TK217古段階併行期まで、集落が最も盛んであった時期の土器であると思われる。635は須恵器の甃で、TK209型式併行期か。636～639は須恵器の高杯。脚部に透かしがなくなり、数条の沈線を巡らすものがある。遺構に伴わない包含層からの出土では、この様な高杯の出土が多い。TK217型式併行期のものと考えられ、当集落の下限を示すものと思われる。土器以外にはC12・13の土錘、S79の滑石製石製品、M16の袋状鉄斧などがある。 (松尾)



第423図 柱穴および遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

## 第4節 古代の遺構・遺物

### 1 概要

古代の遺構は、掘立柱建物4棟、土壇3基、溝3条、埋置土器1基、土器溜まり2基、下がり1か所を掲載する。これらは、西側の微高地端に位置する下がりを除き、東側の微高地上に位置しており、遺構の配置から関連性の窺えるものがある。まず、掘立柱建物は、異なる規模であるものの、棟方向をほぼ揃えている。重複する建物があり、必ずしも同時存在ではないが、近接した時期と考えられる。また、建物内の位置で検出した埋置土器がある。さらに溝の中には平流するものがある。

時期は、遺構間の切り合い関係と出土遺物から、土器溜まりと溝が9世紀前半代、溝よりも新しい掘立柱建物が、埋置土器の年代観から10世紀後半代と考えられる。(高田)

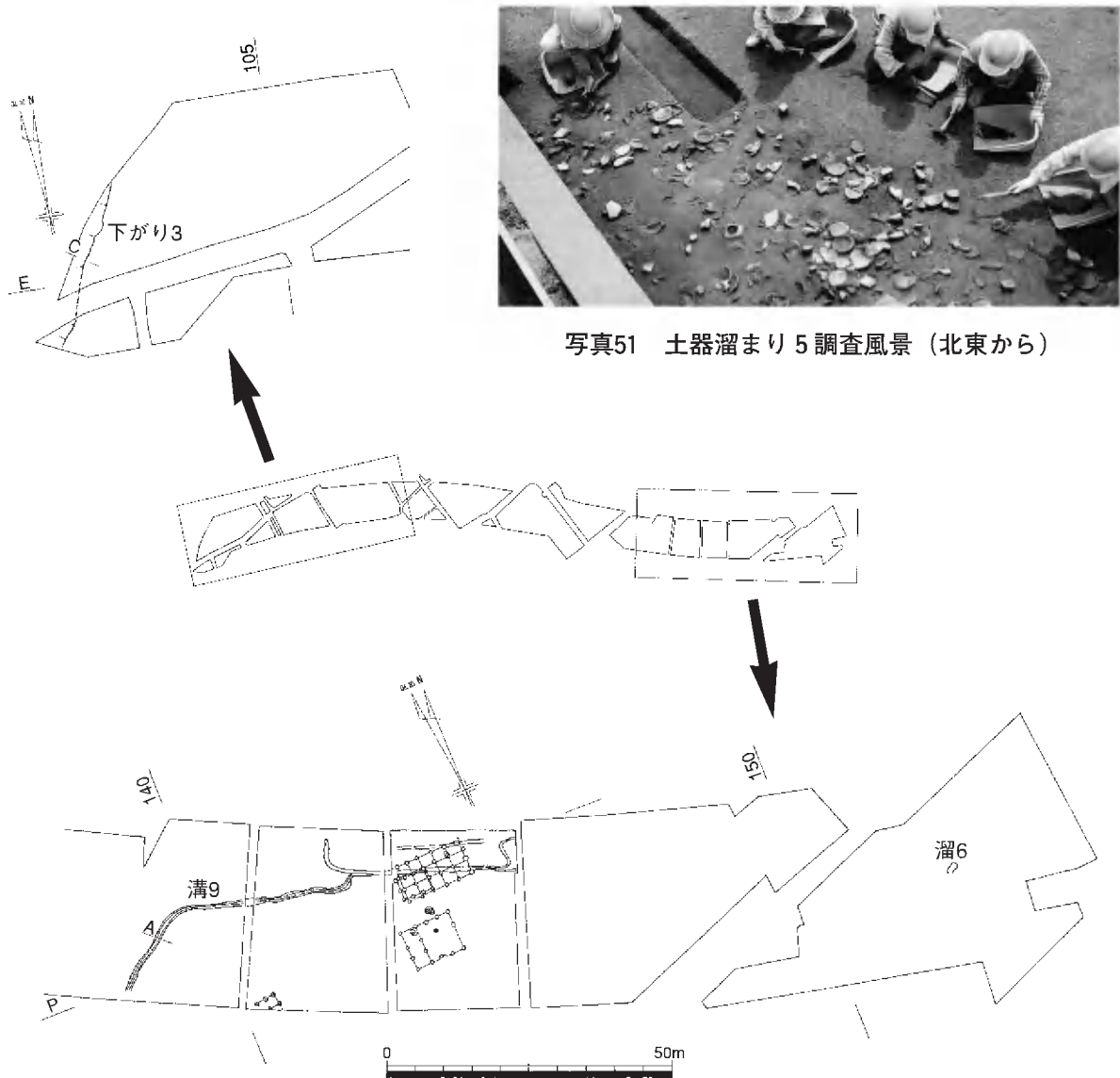
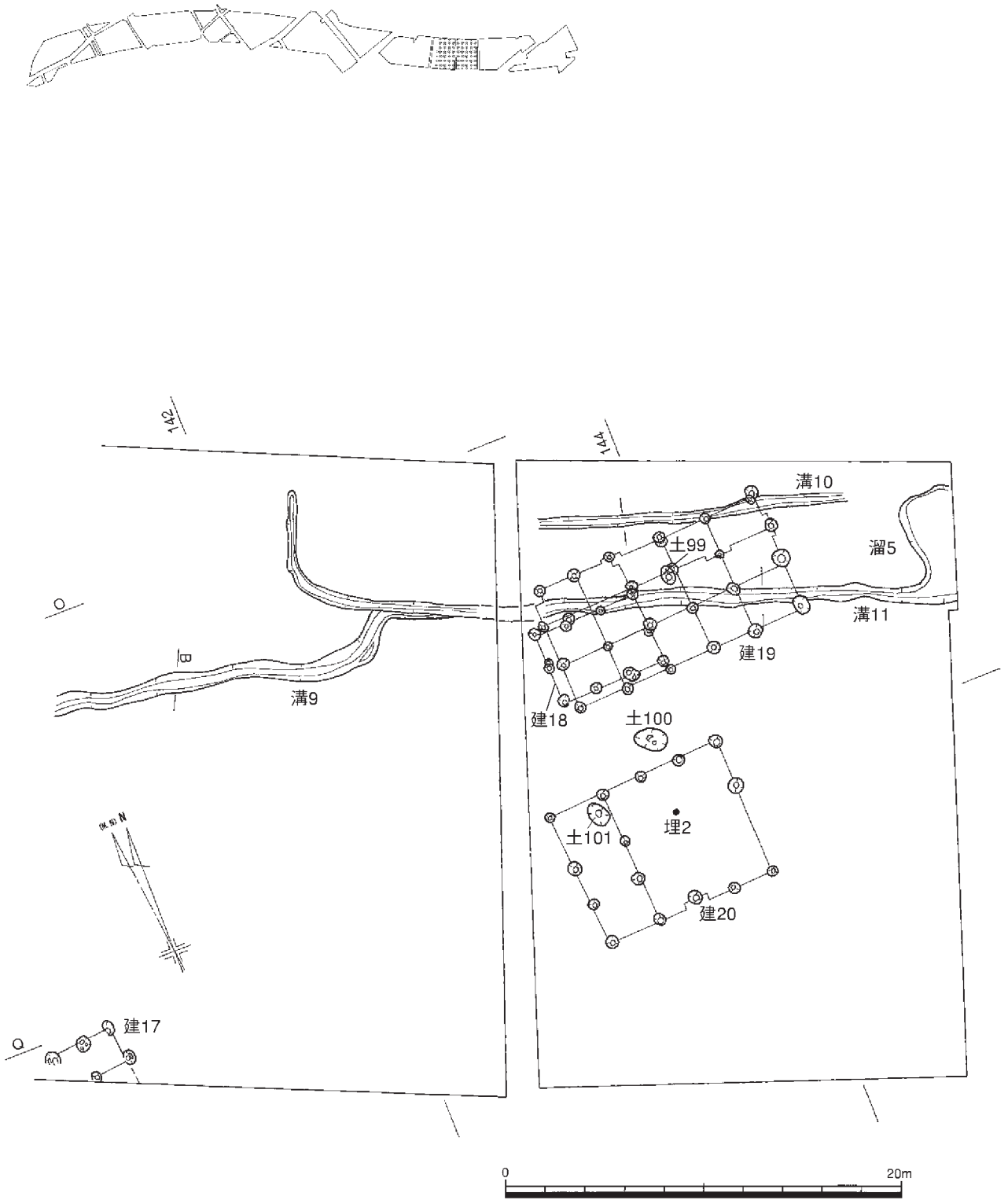


写真51 土器溜まり5調査風景（北東から）

第424図 古代遺構全体図 (1/1,250)



第425図 古代主要遺構図 (1/300)

## 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物17 (第425・426図、図版102)

140Qに位置し、2×1間以上と推定される掘立柱建物で、大半が調査区外と考えられる。柱間距離は、桁行が1.4~1.8m、梁行が1.8mを測る。棟方向はN-85°-Eである。柱穴掘り方は、一辺50~70cm前後の方形ないしは隅丸方形を呈する。底面の海拔高は、P4が7.34mと最深で、P5が7.57mと最も浅い。また、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。

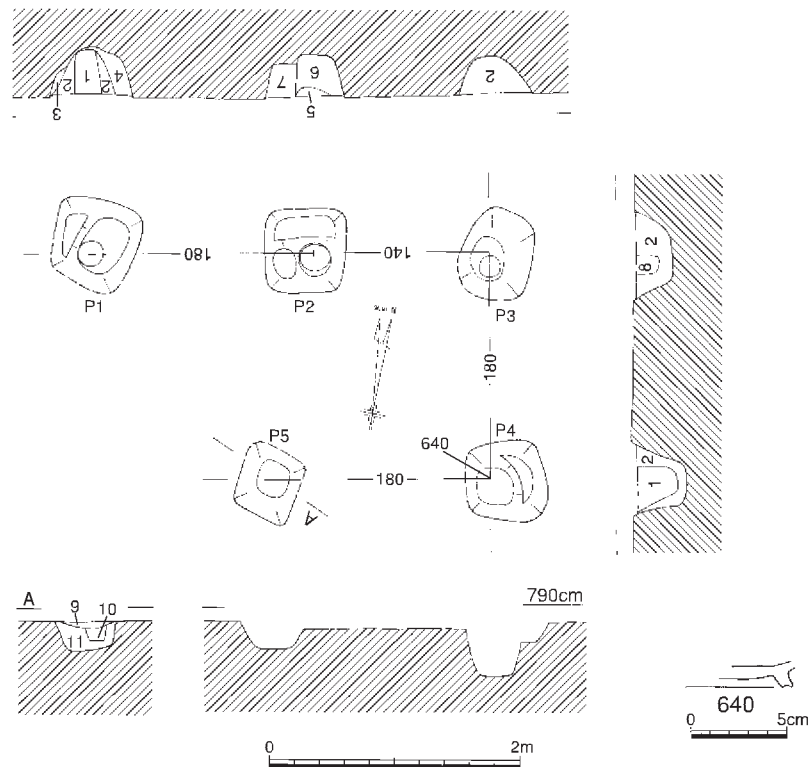
図示した出土遺物は、須恵器杯の高台片640である。建物の時期は、古代と考えられる。(高田)



写真52 掘立柱建物18・19周辺 (北から)

### 掘立柱建物18 (第425・427図、写真52)

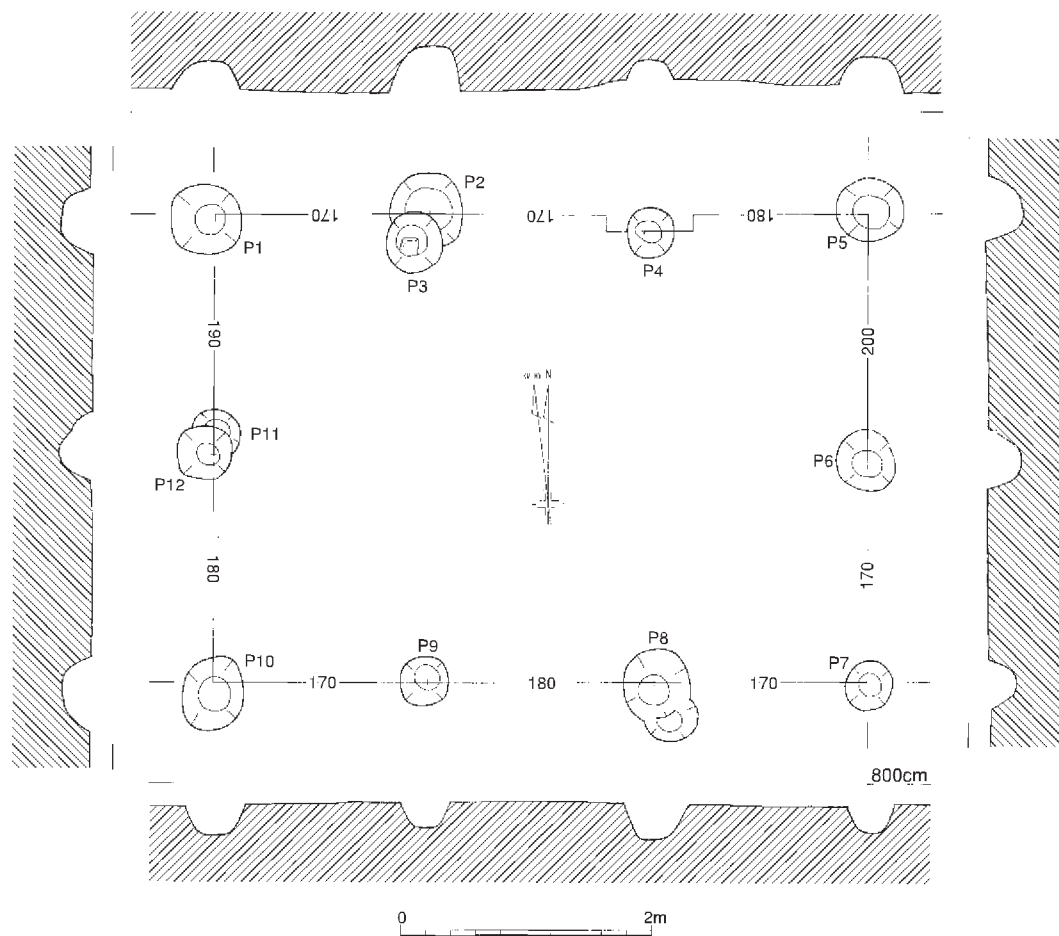
142Oに位置する、3×2間の東西棟の掘立柱建物である。棟方向を揃える掘立柱建物19とはほぼ重複し、本建物のP5・6が建物19の柱穴に切られる。建物の規模は、桁行全長5.2mで、柱間距離が1.7~1.8m、梁行全長3.7mで、柱間距離が1.7~2mを測る。棟方向はN-83°-Wで、建坪は19.2



- |                               |                      |                       |
|-------------------------------|----------------------|-----------------------|
| 1 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)           | 4 灰黄褐色微砂 (10YR4/2)   | 8 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)  |
| 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)<br>(Mn含) | 5 灰黄褐色微砂 (10YR6/2)   | 9 灰黄褐色微砂 (10YR6/2)    |
| 3 黄灰色細砂 (2.5YR4/1)            | 6 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y5/2) | 10 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2) |
|                               | 7 黒褐色粘質微砂 (2.5Y3/2)  | 11 灰黄褐色微砂 (10YR5/2)   |

第426図 掘立柱建物17 (1/60)・出土遺物 (1/4)





第427図 掘立柱建物18 (1/60)

㎡である。柱穴掘り方は円形を呈し、規模は、40～60cmを測る。

建物の時期は、検出状況から古代と考えられる。 (高田)

**掘立柱建物19** (第425・428図、写真52)

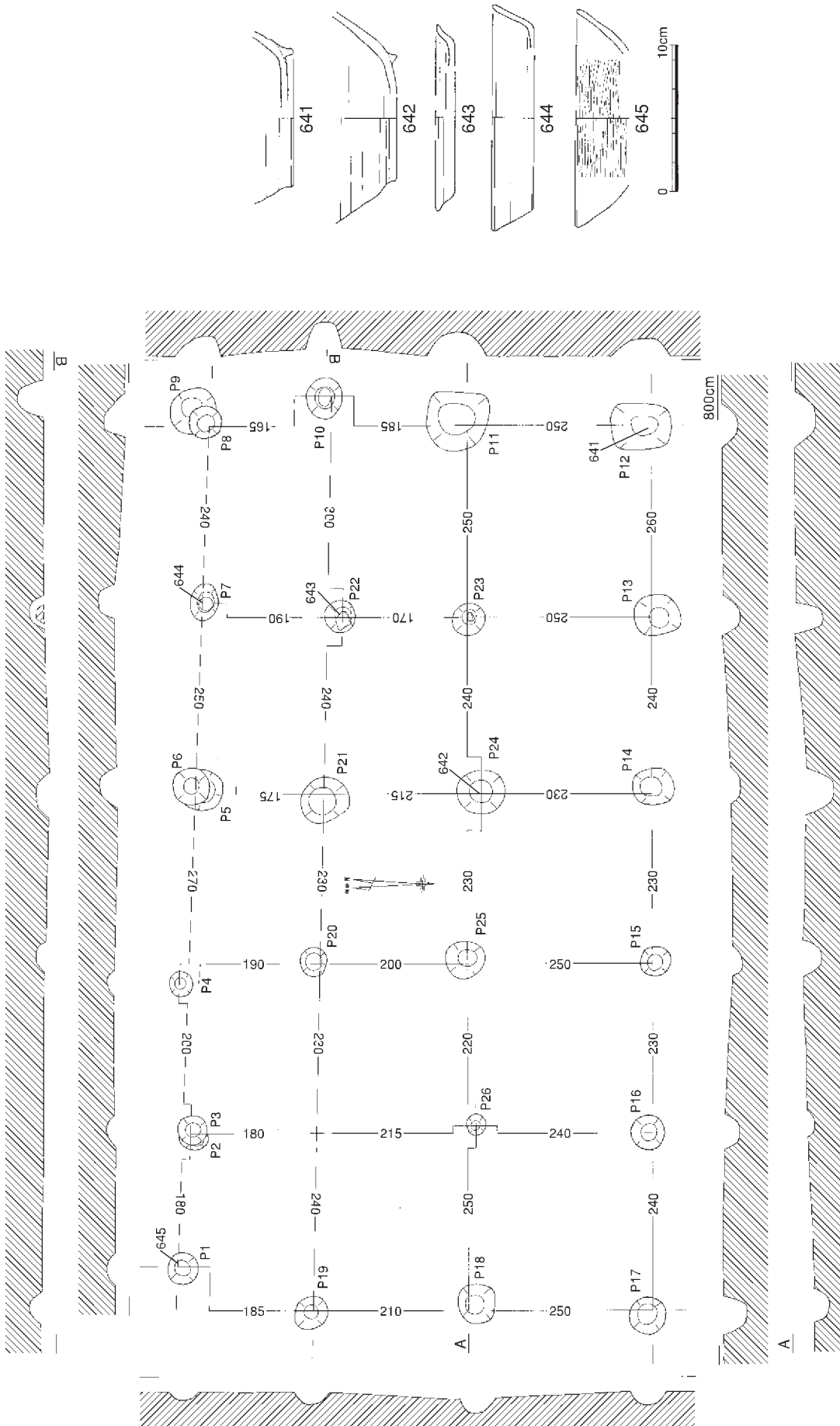
142～144Oに位置する大型の掘立柱建物である。掘立柱建物18とほぼ重複し、溝10・11を切る。建物の規模は5×3間の総柱で、桁行全長12m、柱間距離は1.8～3m、梁行全長6.45mで、柱間距離は1.65～2.5mを測り、北側から順に梁間が延びている。棟方向はN-85°-Wで、建坪は75㎡である。柱穴の掘り方は円形を呈し、規模は全体で15～80cmとばらつくが、20～30cm前後のものが多い。なお、北側列の柱穴は総じて規模が小さく、P10・19～22の列との柱も短いことから廂の可能性もある。

建物の時期は、出土遺物と検出状況から平安時代と考えられる。 (高田)

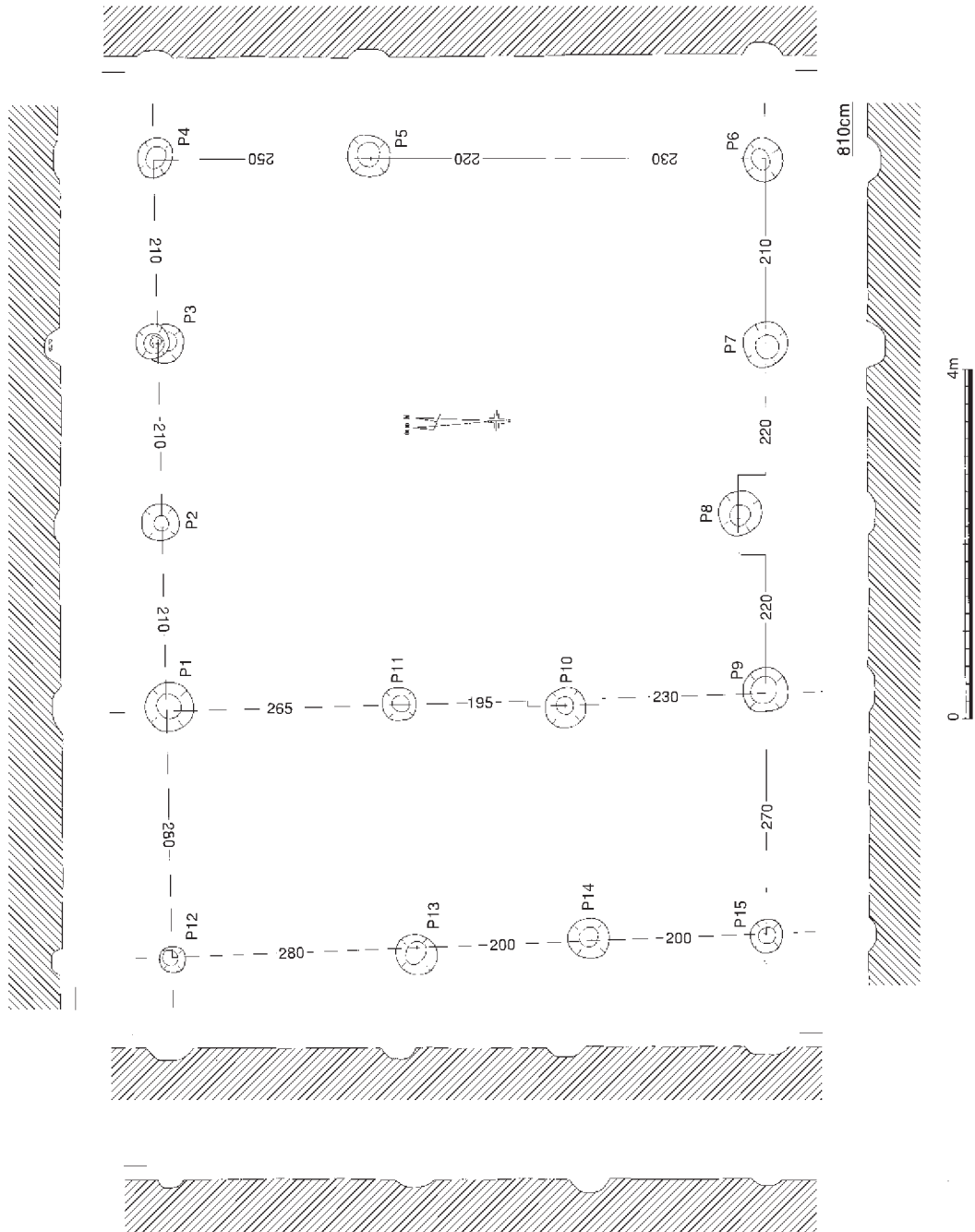
**掘立柱建物20** (第425・429図)

142O～Qに位置し、3×3間の身舎の西側に廂を持つ掘立柱建物である。北側の掘立柱建物18・19と棟方向を揃え、4m離れる。建物の規模は、桁行全長9.1m、柱間距離は2～2.8m、梁行全長7mで、柱間距離は1.9～2.8mを測り、棟方向はN-86°-Wで、建坪は62.1㎡である。柱穴の掘り方は円形を呈し、規模は径30～55cmを測る。後述する埋置土器2は、本建物の身舎中央付近に位置することからその性格が地鎮具であれば、本建物に伴う可能性がある。

建物の時期は、検出状況から古代と考えられ、埋置土器2と関連すれば、10世紀後半代か。(高田)



第428図 掘立柱建物19 (1/80)・出土遺物 (1/4)



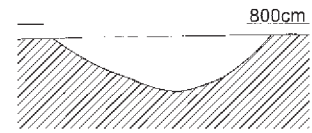
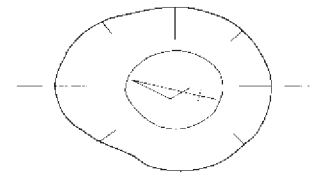
第429図 掘立柱建物20 (1/80)

### 3 土壌

#### 土壌99 (第425・430図)

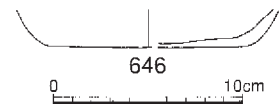
144Oに位置する土壌で、掘立柱建物19のP21を切る。検出時の平面形は、長径86cm、短径65cmの楕円形を呈し、深さ22cm、底面海拔高7.73mを測る。

図示した遺物は、土師器杯の底部である。土壌の時期は、出土遺物と検出状況から古代と考えられる。(高田)



0 50cm

暗灰黄色微砂 (2.5Y4/2)  
(炭・焼土粒多含)



第430図 土壌99 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

#### 土壌100 (第425・431図)

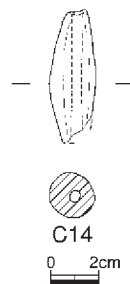
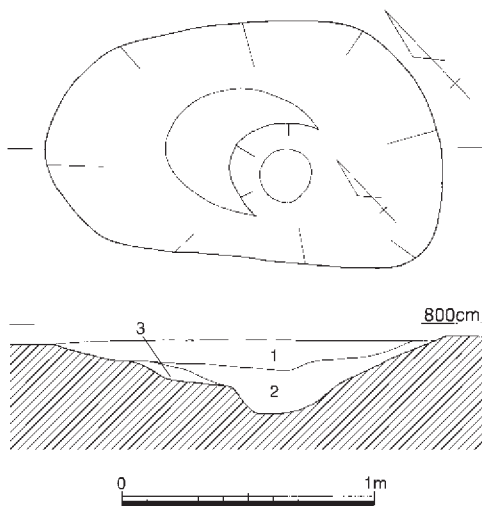
142Oにあって掘立柱建物18・19と20の間に位置する土壌である。検出時の平面形は、長径1.57m、短径93cmの楕円形を呈し、深さ29cm、底面海拔高7.64mを測る。底は緩やかな傾斜を持ちながら二段に落ち込む。図示した遺物は、棒状単孔の土錘C14である。

土壌の時期は、検出状況から古代と考えられる。(高田)

#### 土壌101 (第425・432図)

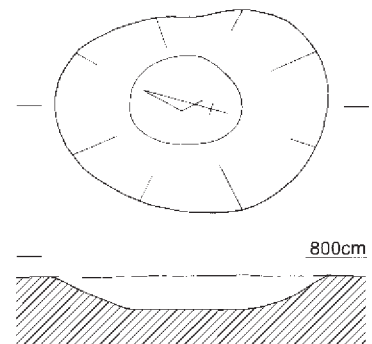
142Oに位置し、掘立柱建物20と重複する土壌である。検出時の平面形は、長径1.09m、短径77cmの楕円形を呈し、深さ13cm、底面海拔高7.8mを測る。底は平坦で、断面形は皿状を呈す。

土壌の時期は、出土遺物から古代と考えられる。(高田)



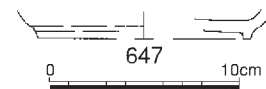
- 1 灰黄褐色微砂 (10YR5/2)  
(炭・焼土粒含)
- 2 暗灰黄色微砂 (2.5Y4/2)  
(炭・焼土粒含)
- 3 暗灰黄色微砂 (2.5Y4/2)  
(炭・焼土粒含)

第431図 土壌100 (1/30)・出土遺物 (1/3)



0 1m

灰黄褐色微砂 (10YR5/2)  
(炭・焼土粒含)

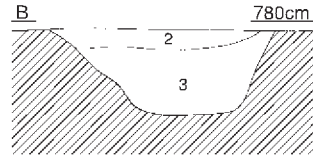
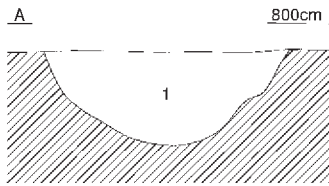


第432図 土壌101 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

### 4 溝

#### 溝9 (第424・425・433図、図版102)

138~142Oを大きく東西に流走する溝である。142Oで、溝11から屈曲しながら分岐し、138Oで南



0 50cm

- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(Mn多含・土塊少含)
- 2 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1)  
(灰黄色 (2.5Y6/2) 土塊含)
- 3 褐灰色粘質微砂 (10YR5/1)

第433図 溝9 (1/30)

西側の調査区外に延びていく。この南西端は、西に向かって傾斜する微高地斜面であり、復元される当時の地形からすると水流は西向きと考えられる。

遺物の出土は少なく、特に1380ではほとんど見られない。溝の時期は、検出状況から古代と考えられる。(高田)

溝10 (第425・434図)

142～1440に位置する東西溝で、溝11から北側へ3.5m離れて並流する。東西両端は浅くなって途切れ、溝の一部が掘立柱建物19の柱穴に切られる。溝の規模は、検出時の上幅40cm、深さ8cm前後を測る。断面形は浅い碗形を呈する。埋土は微砂で、溝11に類似する。

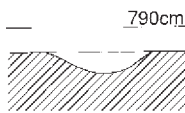
溝の時期は、検出状況から古代と考えたい。(高田)

溝11 (第425・435図)

142～1440に位置する東西溝で、その東端は土器溜まり1に接続し、西端は北側に屈曲して途切れる。溝は、掘立柱建物19のいくつかの柱穴と切り合い関係にあり、いずれも溝が切られている。

溝の規模は、検出時の上幅が1m前後、深さ20cm前後を測り、断面形は逆台形を呈する。

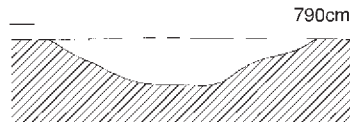
溝の時期は、検出状況から古代と考えられる。(高田)



0 50cm

鈍黄褐色微砂 (10YR5/3)  
(褐灰色 (10YR5/1)  
粘質微砂土塊含)

第434図 溝10 (1/30)



0 1m

暗灰黄色微砂 (2.5Y5/2)  
(黄灰色 (2.5Y4/2) 粘質微砂  
土塊極多含・炭・焼土粒含)

第435図 溝11 (1/30)

5 埋置土器

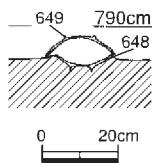
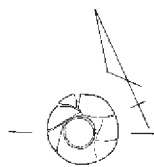
埋置土器2 (第425・436図、図版103・119)

1420にあり、前述の掘立柱建物20の身舎と重なる位置で出土した2個体の土器である。検出当初は、

碗649のみが伏せられたものと認識していたが、その下から口を合わせるように配置された648が出土し、意識的に2個体を埋置したものと判断した。なお、掘り方や内容物は確認できなかった。

土器はいずれも内黒焼成の黒色土器で、648が口径14.4cm、器高5cmを測り、649が口径17.3cm、器高5.9cmを測る。これらは法量分化した二種を意図的に組み合わせた地鎮具と考えたい。

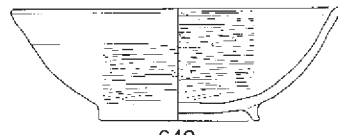
土器の時期は、10世紀後半か。(高田)



黒褐色粘質微砂 (2.5Y3/2)



648



649

0 10cm

第436図 埋置土器2 (1/20)・出土遺物 (1/4)

## 6 土器溜まり

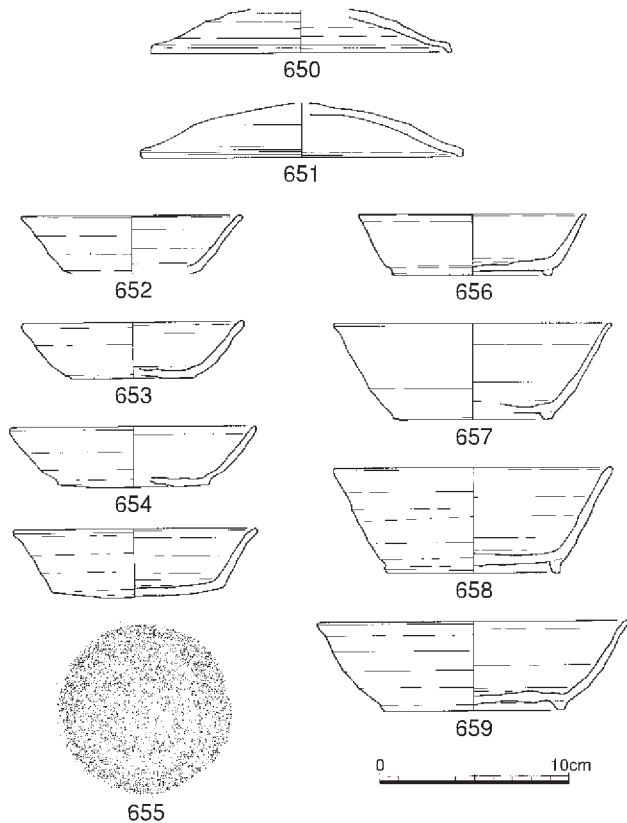
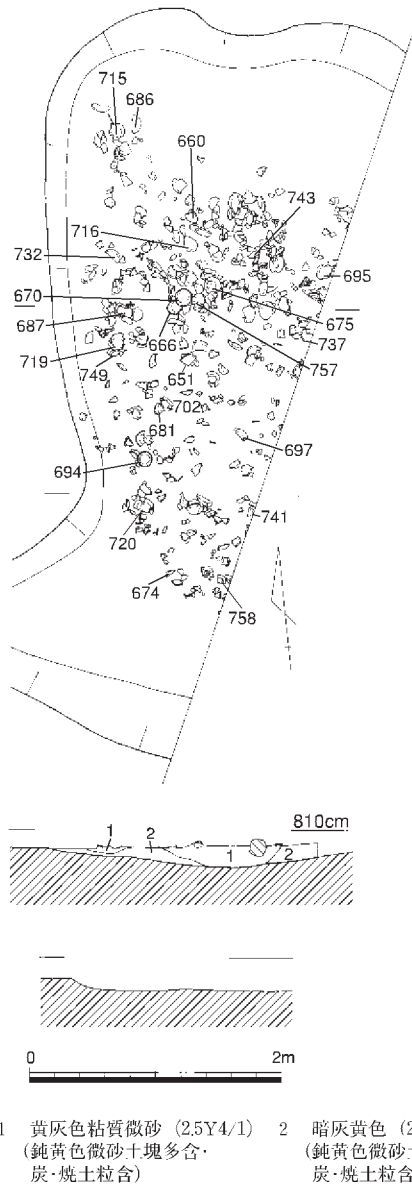
### 土器溜まり5 (第425・437~440図、写真51、図版103)

144Oで検出した土器溜まりである。旧調査区の北東端において、現代耕作土直下の標高8m前後の4×2mの範囲に重なり合うような土器の集中を検出した。その後の精査で、土器集中部を中心に南北6m、東西2.5m以上の浅い窪みを確認した。土器溜まりの東側は現代水路下となり、さらにその東は後世の河道で削られたものと考えられる。なお、この窪みの南西端から溝11が延びており、先述の掘立柱建物18・19に切られている。

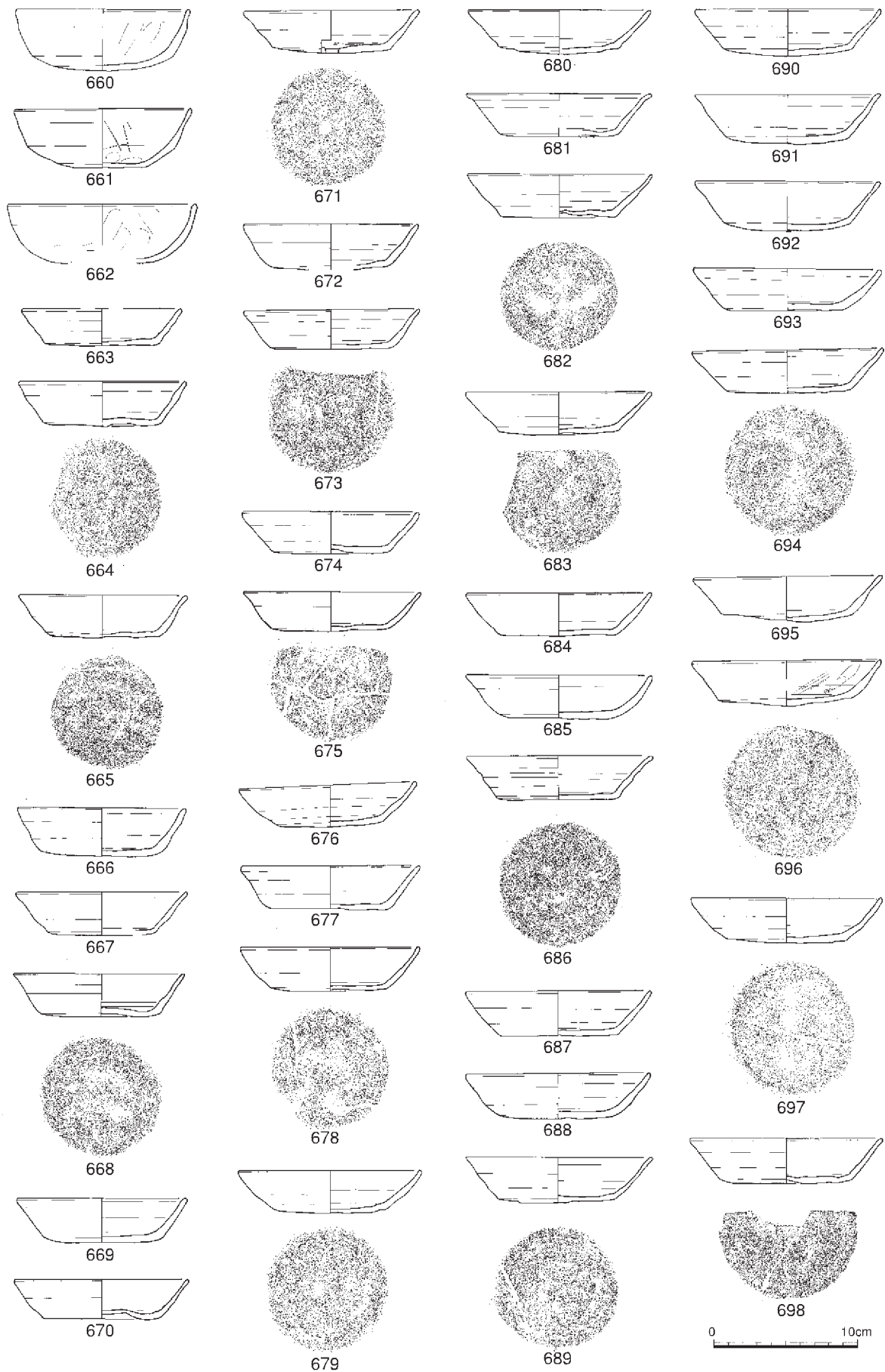
土器は、窪みの底面から若干浮いた状態にあり、基盤土塊や円礫、炭・焼土とともに出土している。須恵器蓋650・651、同杯652~659、土師器杯660~720、同椀721~729、同皿731~750、同盤751、同甕752・753、黒色土器椀754~759、同皿760~764、平瓦730、土錘C15・16である。無高台の須恵器

杯、土師器杯・皿の多くについては、底部押圧技法が確認され、土師器の多くに丹塗りが施される。また、671の底部には焼成前穿孔が施される。なお、土器溜まり上部で第444図の風字硯C17、周辺において第443図の緑釉陶器780~782が出土している。これら大量の土器は、大半が供膳具であり、9世紀前半頃の饗宴に用いられたと考えられる。

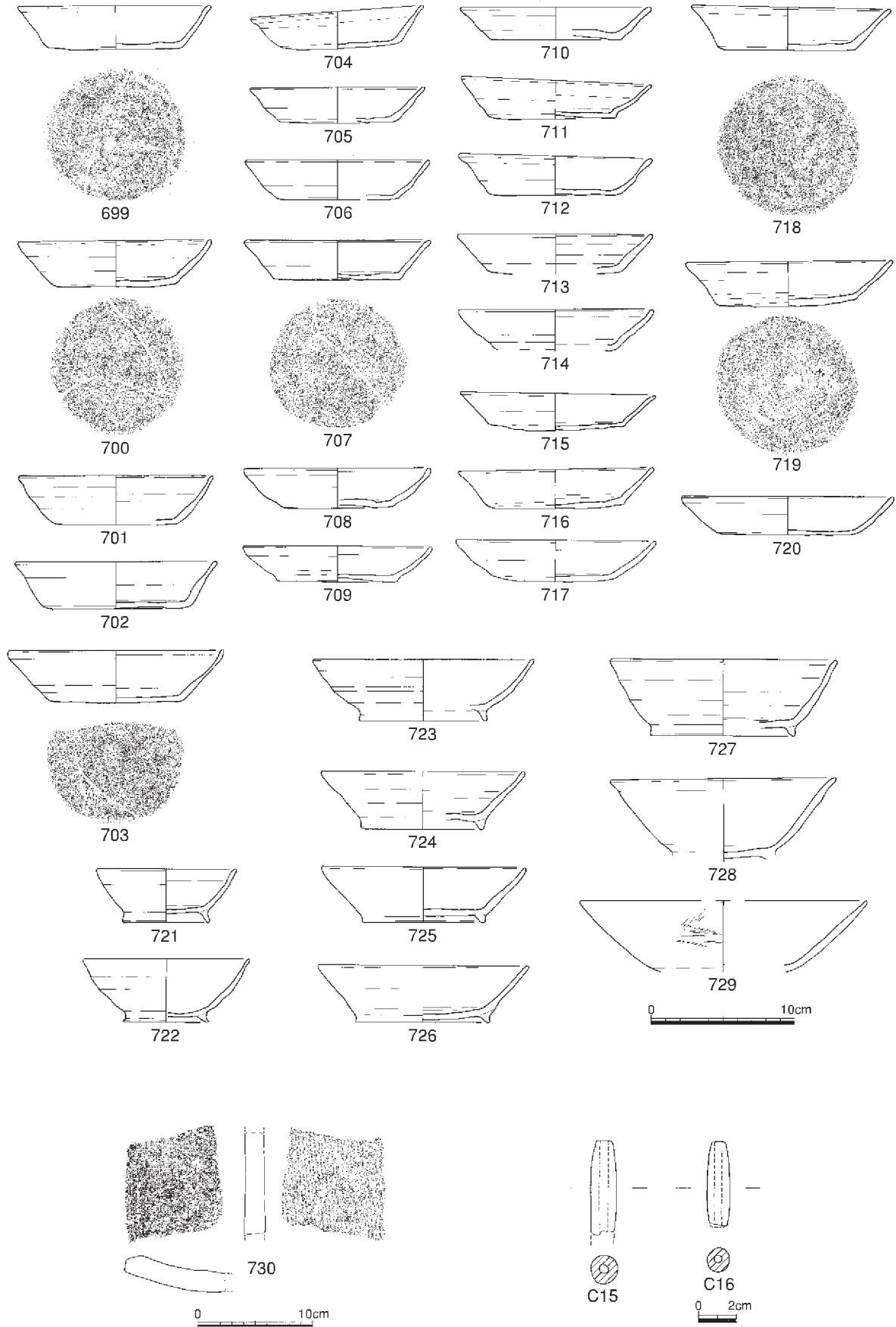
(高田)



第437図 土器溜まり5 (1/60)・出土遺物① (1/4)

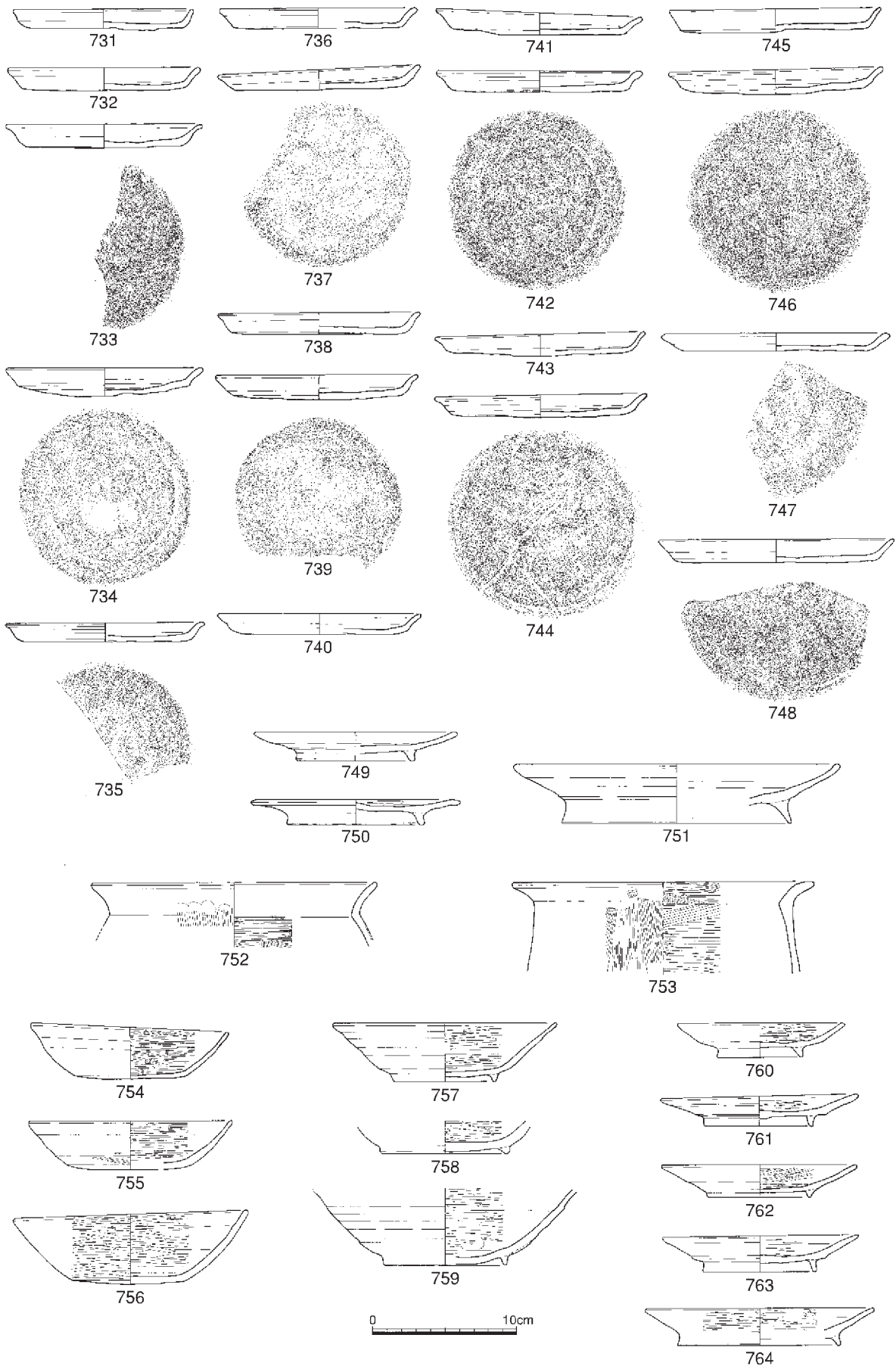


第438図 土器溜まり5出土遺物② (1/4)



第439図 土器溜まり5出土遺物③ (1/4・1/5・1/3)



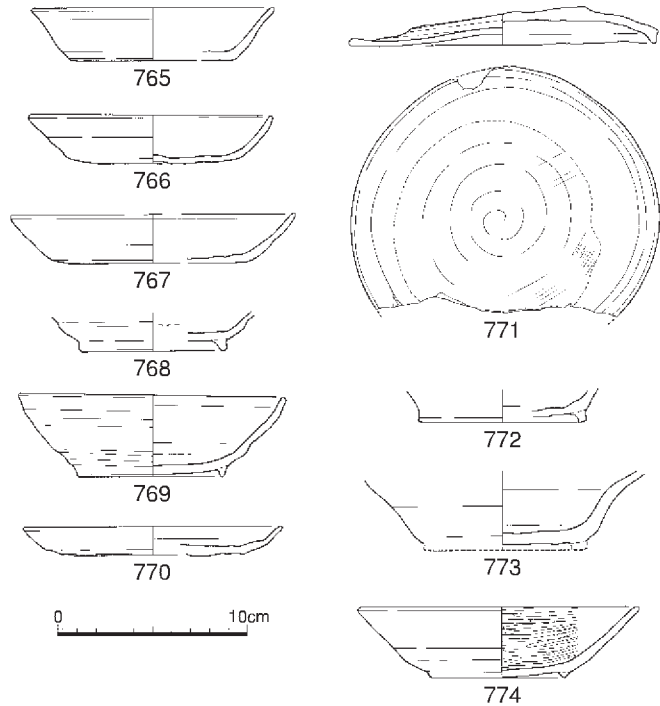
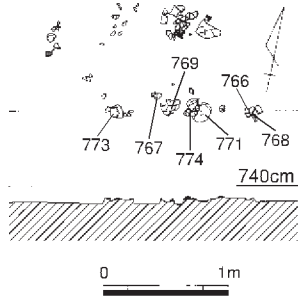


第440図 土器溜まり5出土遺物④ (1/4)

土器溜まり6 (第424・441図、図版121)

152Qに位置する土器溜まりで、図示したものを中心に古代の土器が出土している。142～144Oの掘立柱建物群や溝、土器溜まり等からは東へ約80m離れる。検出面の標高は7.3mを測り、掘立柱建物群の検出高よりも60～70cm低いものである。

掲載した土器は、土師器杯765～767、同椀768・769、同皿770、須恵器杯蓋771、同杯772・773、黒色土器椀774である。771はつまみを付けない蓋で、内面を転用硯として使用している。また、774は内黒焼成の椀である。遺物の時期は、9世紀前～中頃と考えられる。(高田)

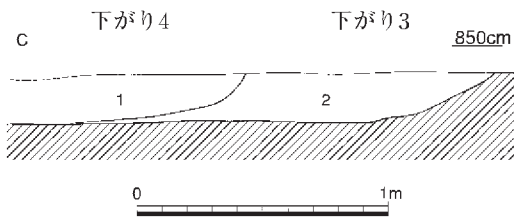


第441図 土器溜まり6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

7 下がり

下がり3 (第424・442図、写真53)

窪木遺跡の西端から検出された。断面から明らかなように現状では微高地部分と約20cmの段差があり、これより西はほぼ平坦な面が続く。微高地上からの古代遺物はほとんど認められず、古代遺物堆積層の第2層からもわずかであったが土師器・須恵器片などが出土しており、南溝手遺跡に続く当低位部は古代以降には耕地化したものと思われる。(江見)



- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)

第442図 下がり3・4 (1/30)

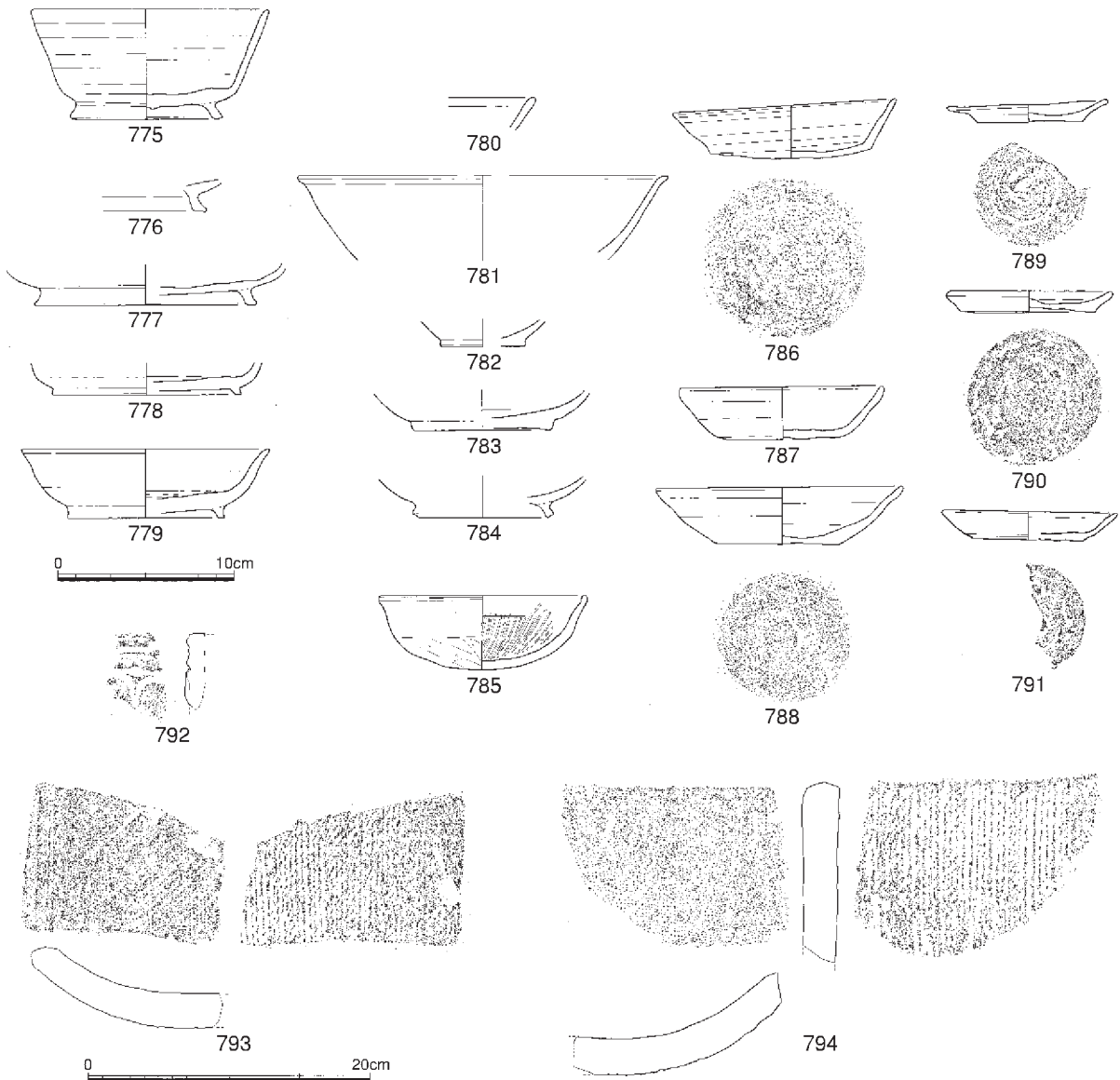


写真53 下がり3・4 (南から)

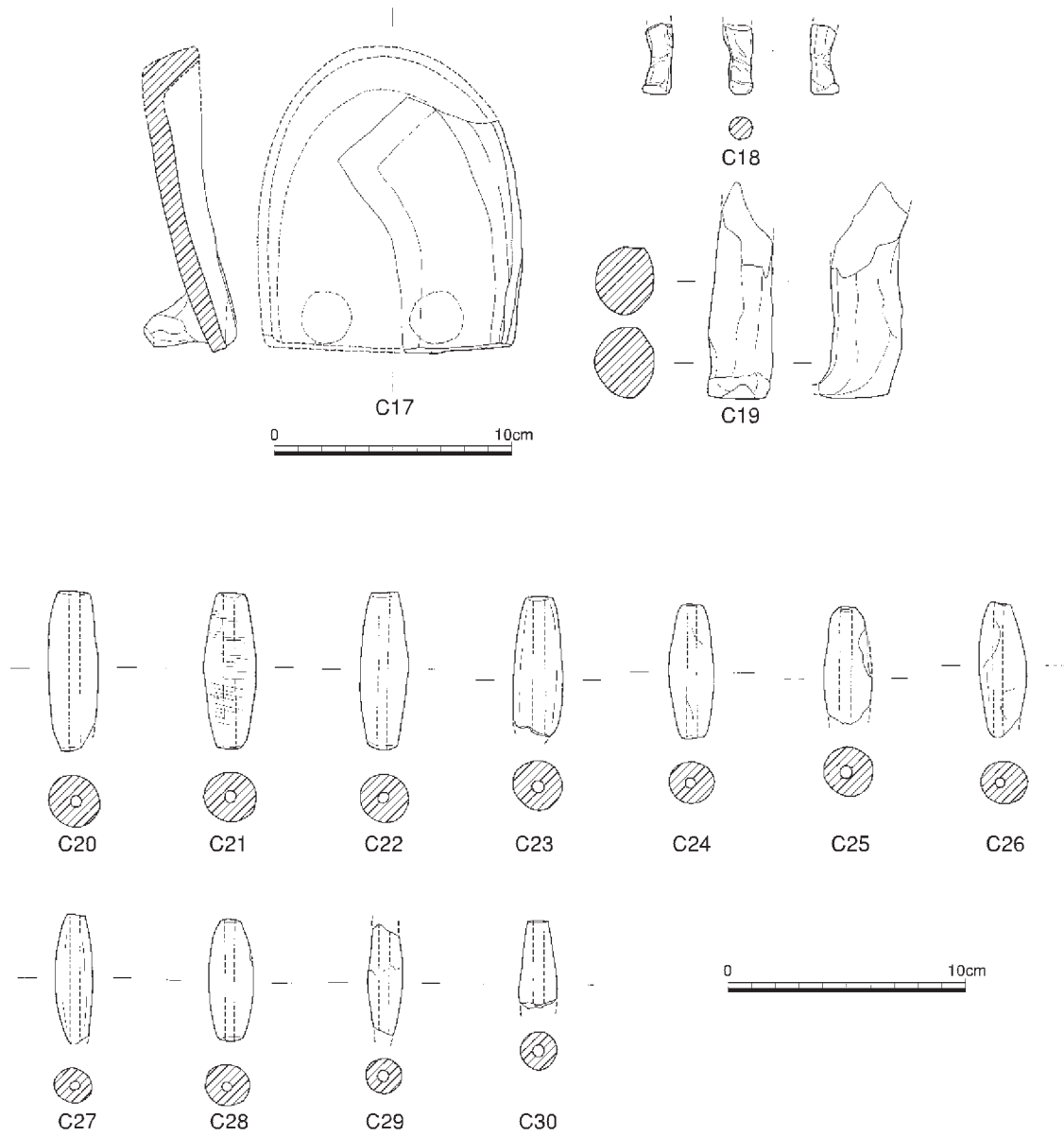
8 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第443・444図、図版121・122・129)

ここに掲載する遺物は、建物としてまとまらない柱穴や、包含層から出土したものである。

775~779は須恵器の杯である。いずれも高台を持ち、779の底部はヘラ切りする。777が東側の微高地から出土したほかは、西側の微高地出土である。780~783は緑釉陶器、784は灰釉陶器の高台である。いずれも東側の微高地出土で、特に780~782は土器溜まり5の上部および周辺からの出土である。785~788は土師器の杯である。785は内面に放射状暗文を施し、外面下半をヘラケズリする。西側の微高地出土である。786と787は底部押圧である。786は東側微高地の柱穴から出土している。788は底部ヘラ切り。789~791は土師器の小皿である。いずれも底部ヘラ切りで西側微高地上の柱穴出土である。792は軒丸瓦の瓦当片である。素弁蓮華文と考えられ、西側微高地から出土している。793・794は平瓦で、794は東側微高地の柱穴出土。C17は風字硯で土器溜まり5の上部からの出土である。C18は硯の脚。C19は陶馬の脚である。C20~C30は、いずれも東側の微高地および微高地斜面から出土した棒状単孔土錘である。 (高田)

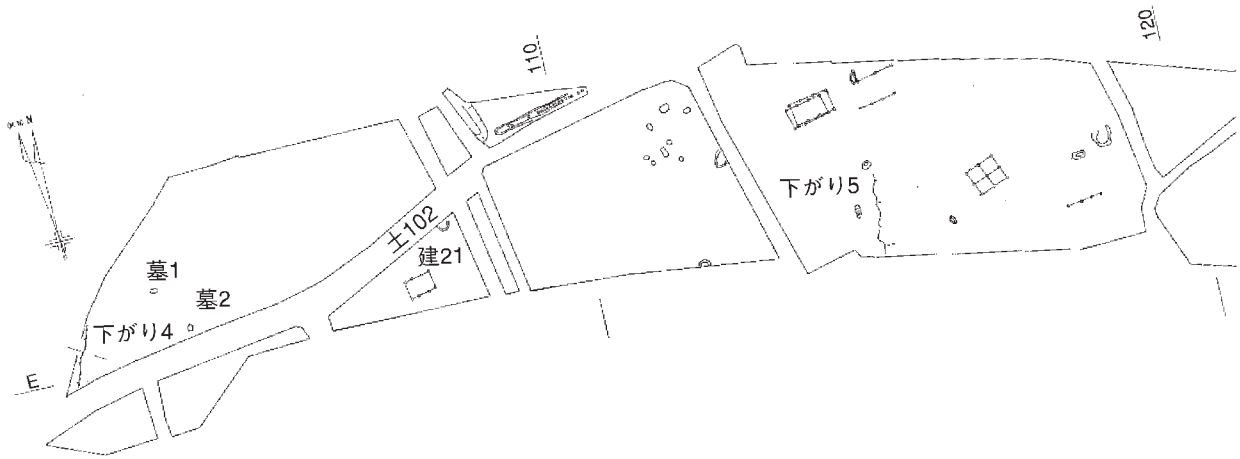


第443図 柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4・1/5)



第444図 柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/3)

## 第5節 中世の遺構・遺物



### 1 概要

中世以前における微高地あるいは低位部など旧地形の名残として、下がり1・4・5・6などが見られるものの、すべての調査区において大きな地形の変化はなく、散在的に遺構および遺物を確認している。ただし、調査区の南北ラインである140から150辺りについては、近世以降の洪水等による南北方向の河道により、遺構面が著しく削平されているため、当時の景観を復元するのは難しい。

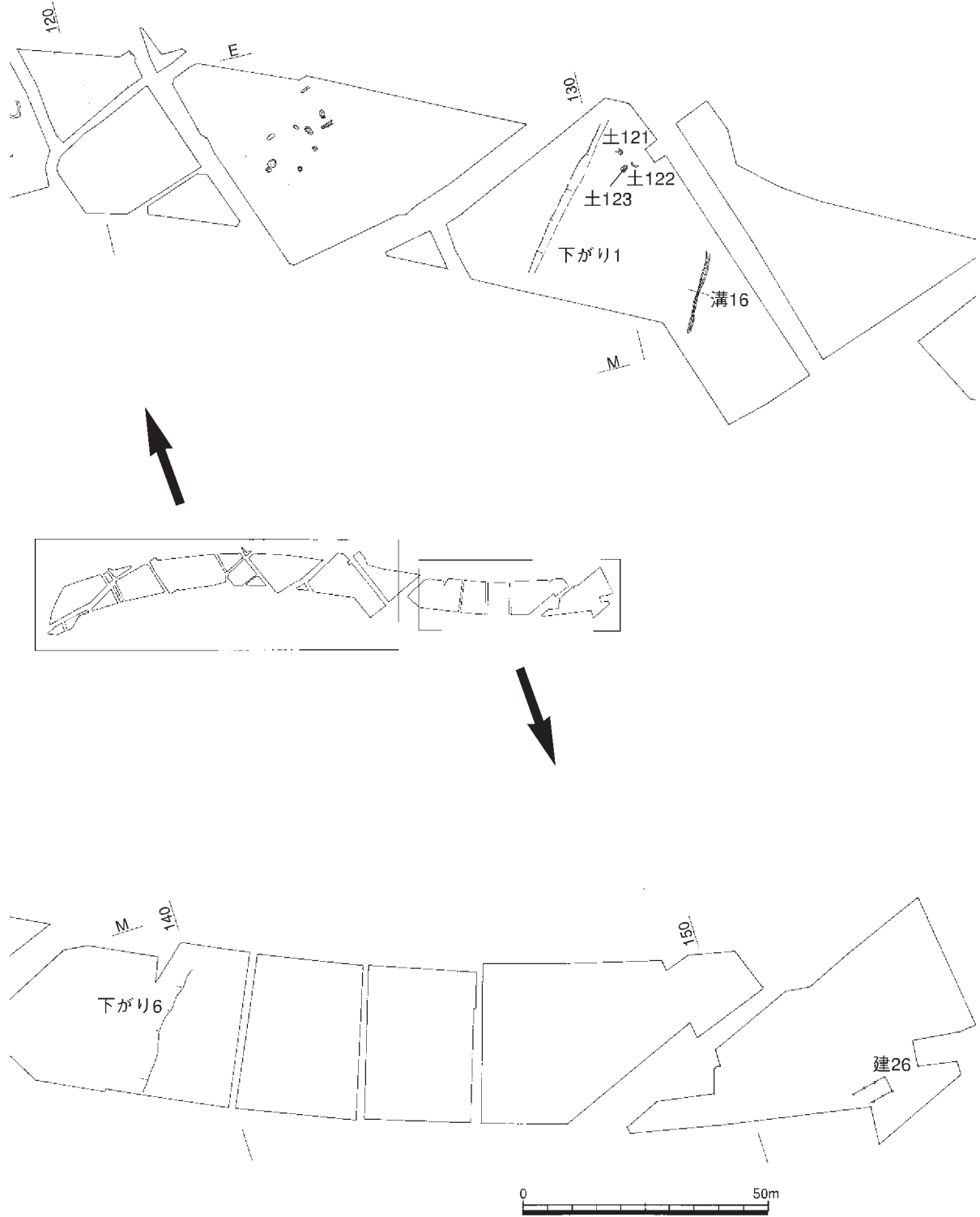
遺構としては、掘立柱建物・柱穴列・土壇墓・土壇・溝・窪地・下がりを確認した。出土する遺物



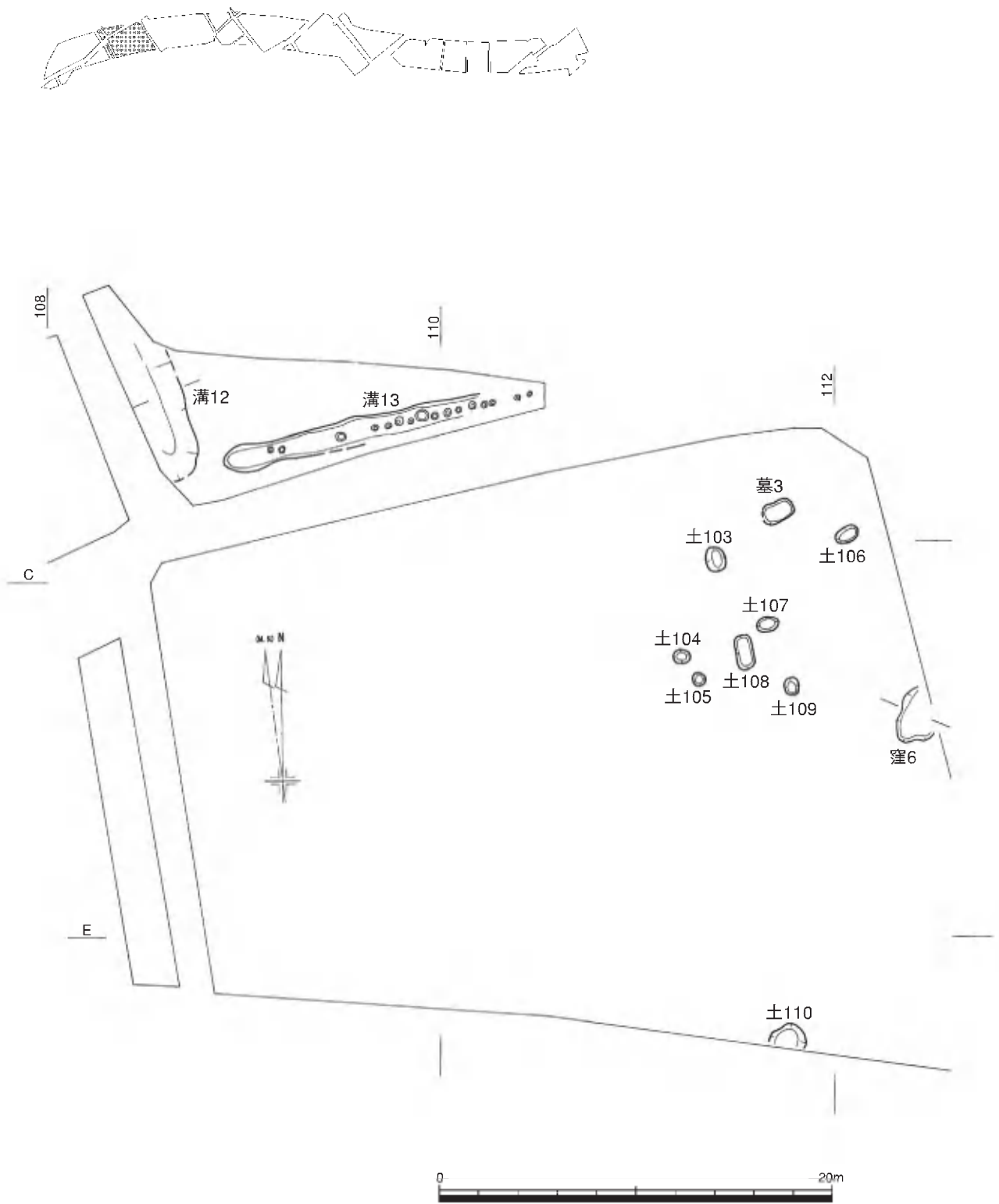
写真54 溝12・13調査風景（西から）

等から、調査区の西端から124 E・G辺りまでは14世紀代の遺構が多く、下がり1の東側低位部でのみ、13世紀初頭頃まで遡る土壇を数基確認している。

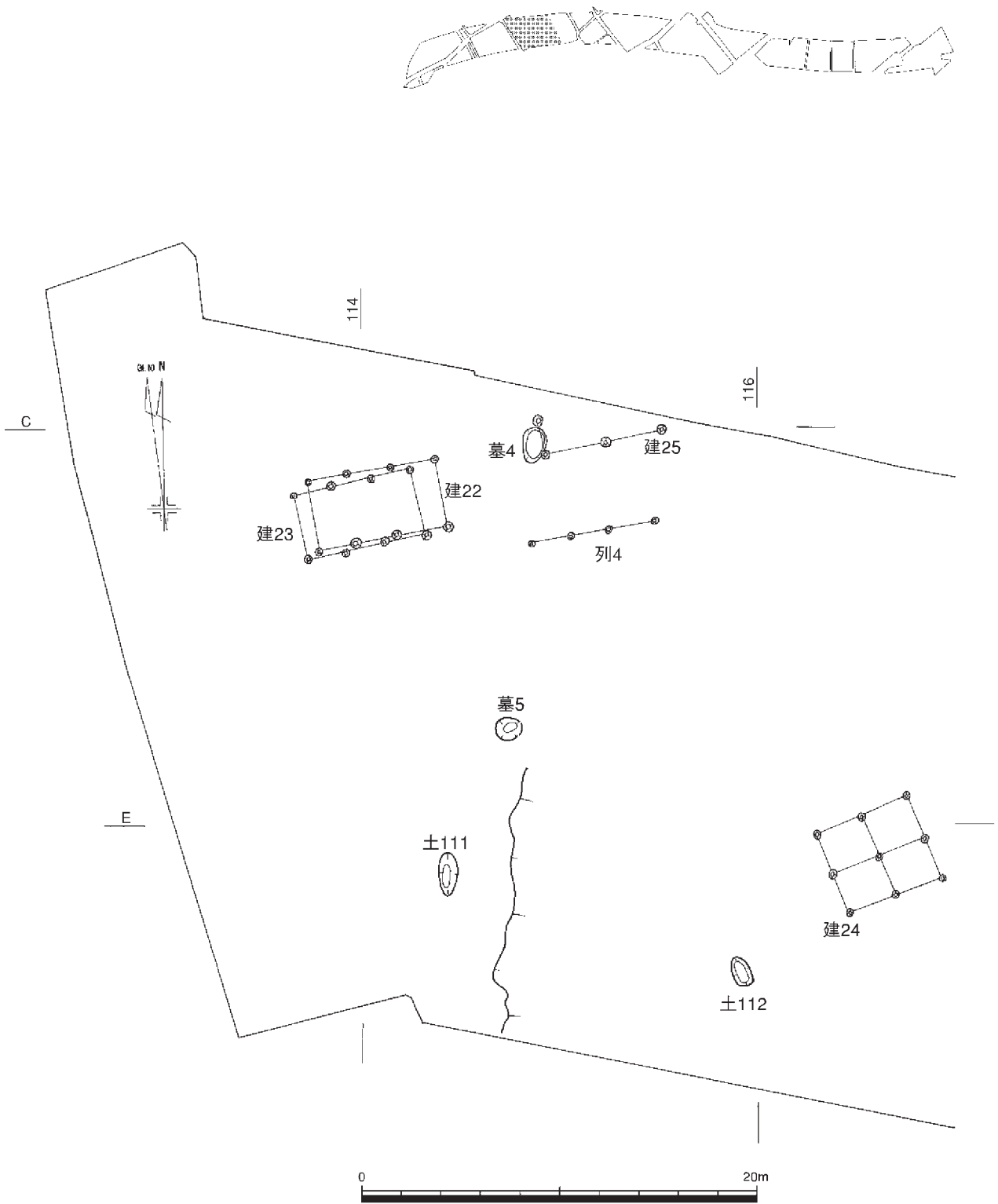
15世紀以降になると、周囲一帯が農地として利用されるようになるためか、際だった遺構・遺物は少なくなる様である。しかしながら、108・110 Aで確認した溝12・13からは、15世紀後半から16世紀にかけての遺物が多く出土し、特に溝12の埋土中には獣骨が多量に含まれていた。これらの溝を南西端とする屋敷地の存在を想定することができる。（松尾）



第445図 中世遺構全体図 (1/1,250)

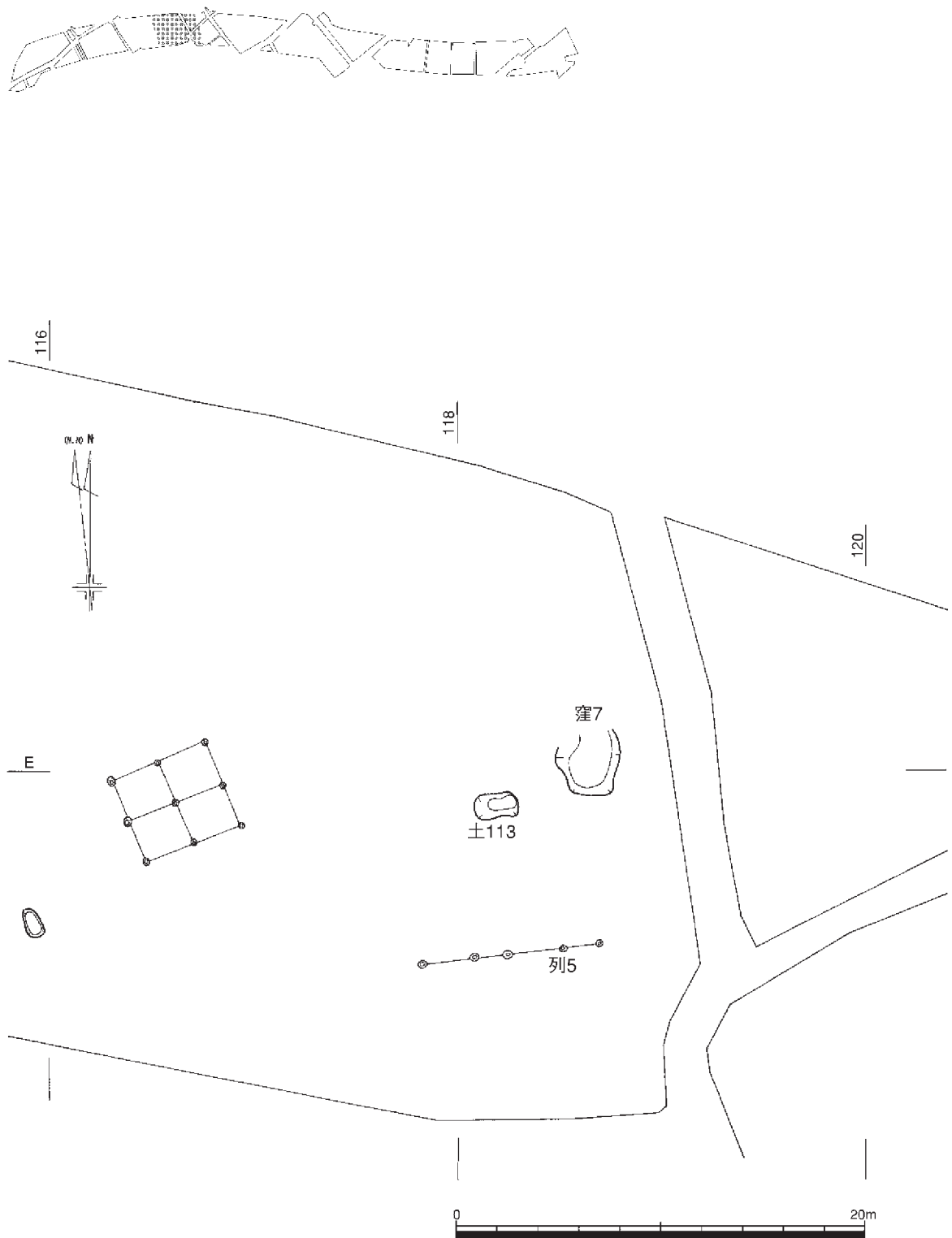


第446図 中世主要遺構図① (1/300)

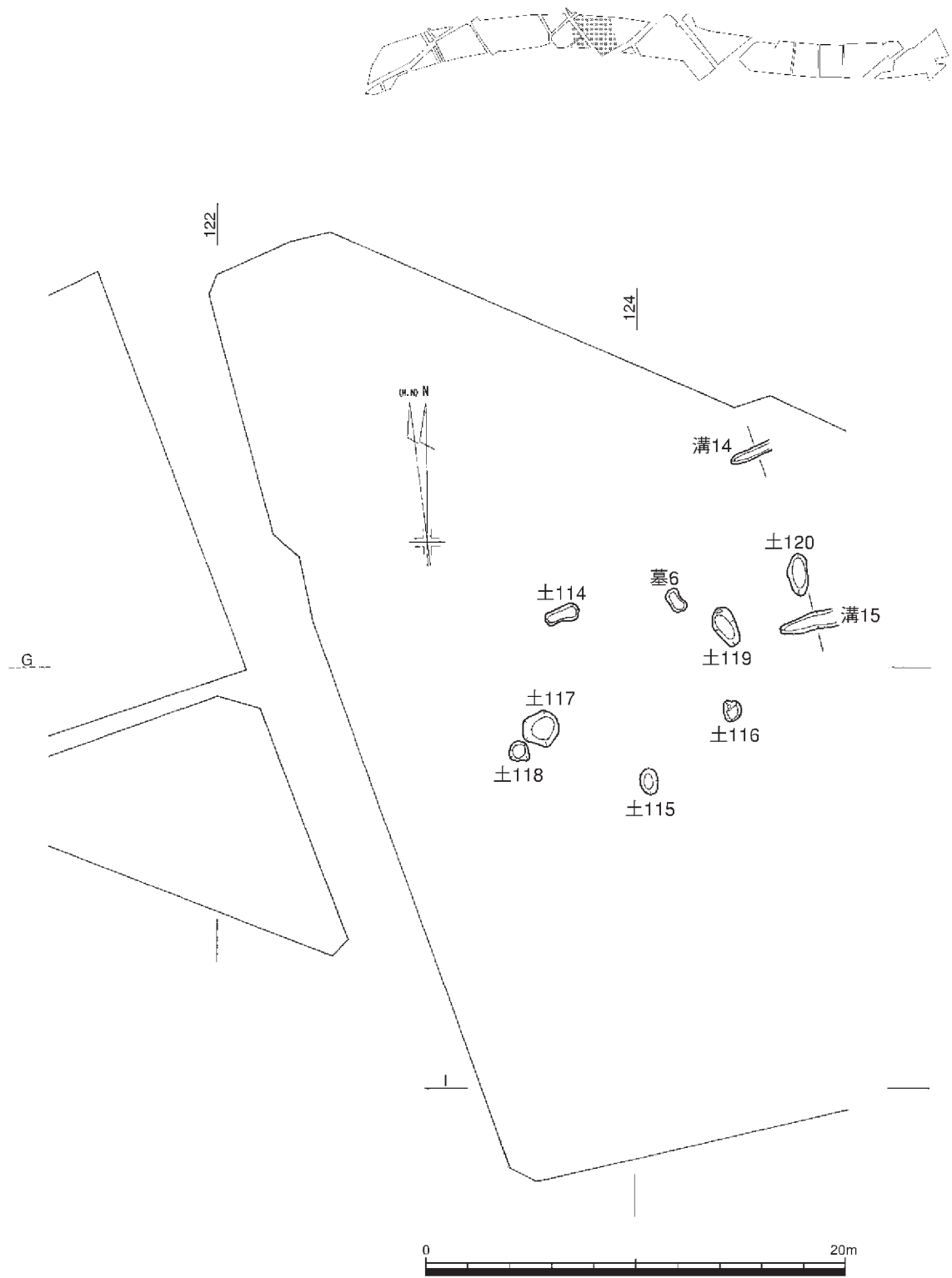


第447図 中世主要遺構図② (1/300)





第448図 中世主要遺構図③ (1/300)

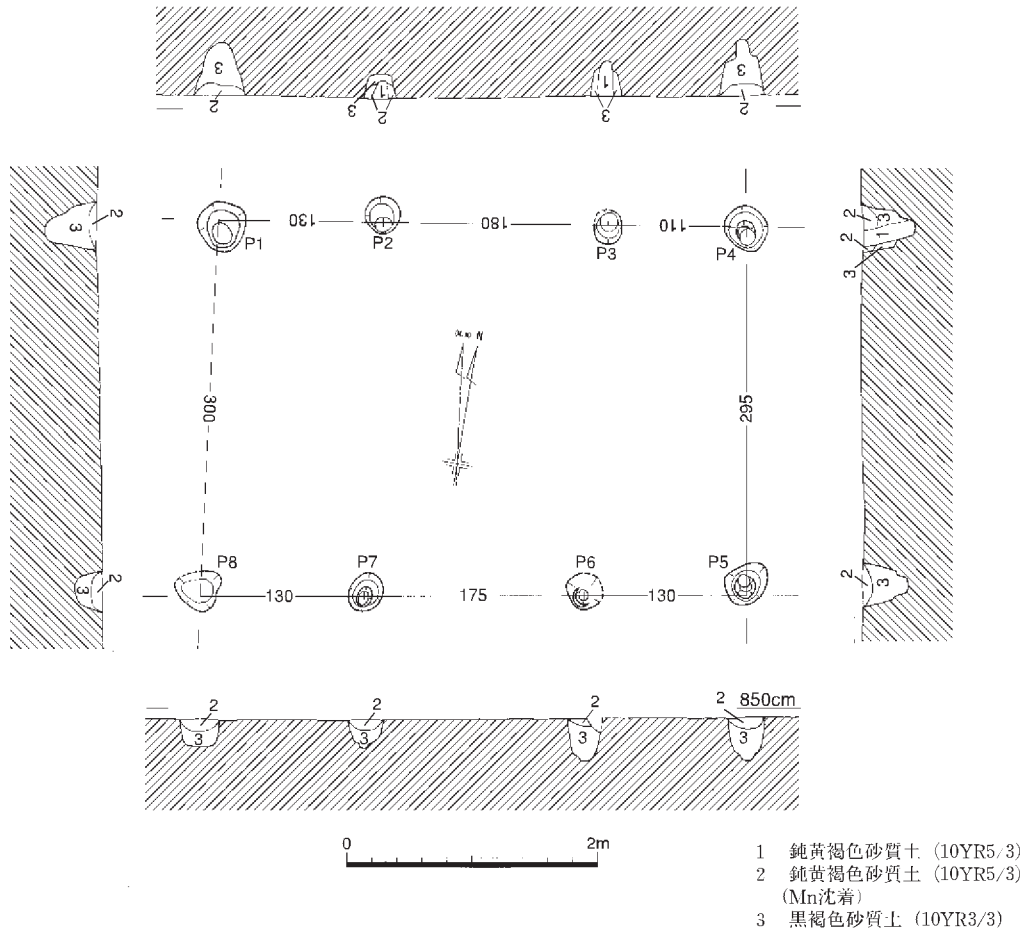


第449図 中世主要遺構図④ (1/300)

## 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物21 (第445・450図、図版104)

106Cの南部中央から検出された桁行3×梁行1間の東西棟建物で、棟はN-88°-Eを向く。柱穴の掘り方はおおむね円形で、径40cm前後、深さ30~20cmを測り、柱痕跡から径10cm前後の柱材が使用されたものと考えられる。柱穴間の距離は桁行1.8~1.1m、梁行約3m、床面積12.7㎡を測る。遺物は土師器・須恵器・黒色土器片が出土しており、建物は中世前半に建てられたものと考えられる。(江見)



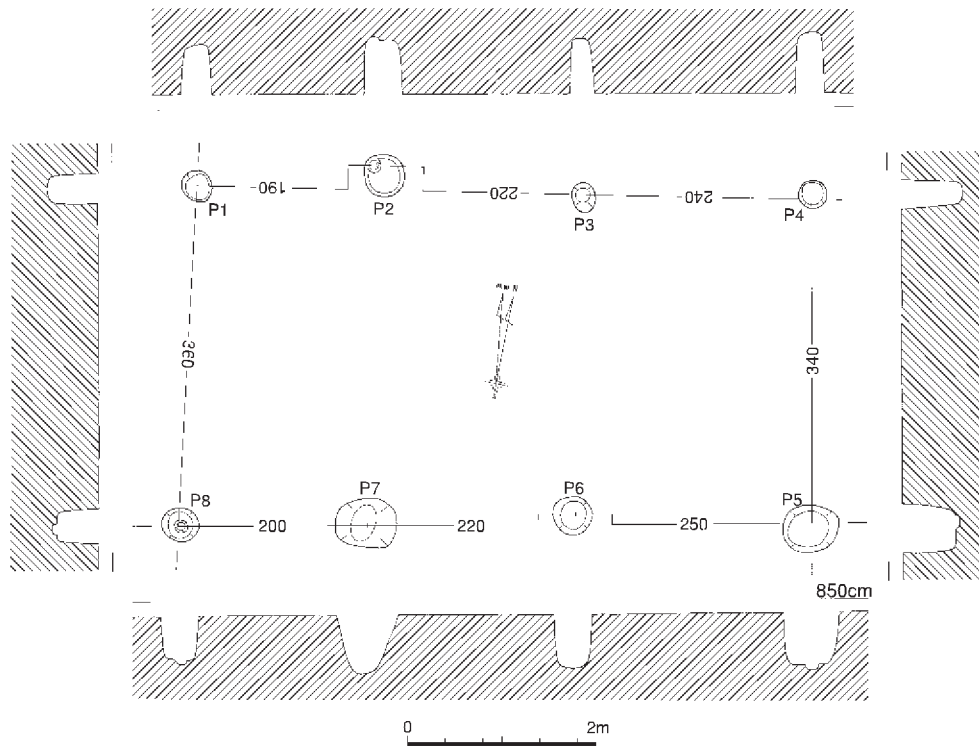
第450図 掘立柱建物21 (1/60)

### 掘立柱建物22 (第447・451図、図版104)

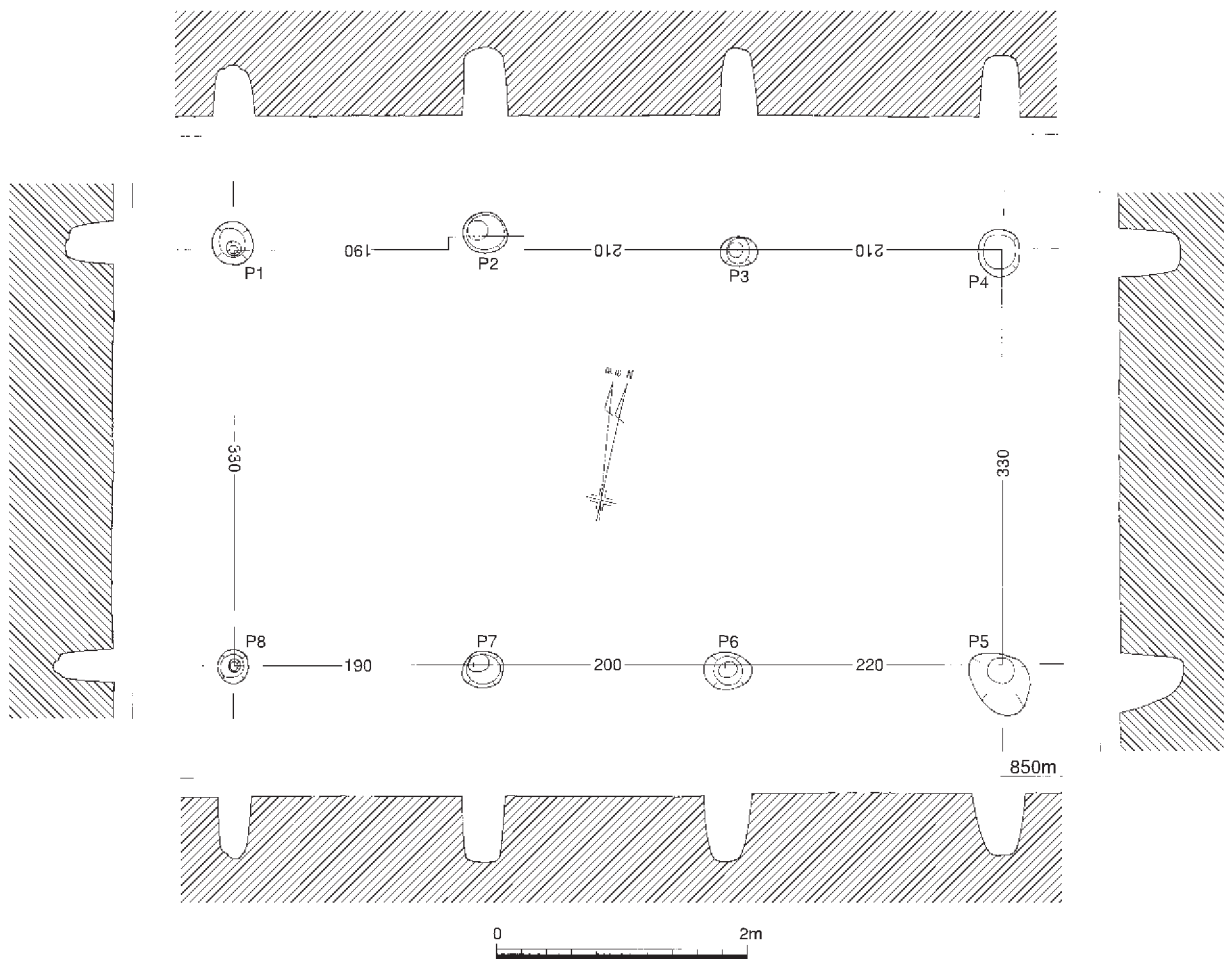
112~114Cに位置し、後述する掘立柱建物23と重複関係にある東西棟建物で、桁行3×梁行1間、棟はN-86°-Eを向く。掘り方はおおむね円形で、径50~25cm、深さ45~30cmと径に比して深い。柱穴間の距離は桁行2.5~1.9m、梁行3.5m前後、床面積23.3㎡を測る。遺物は土師器細片および鉄滓片が出土しており、建物は中世に建てられたものと思われる。(江見)

### 掘立柱建物23 (第447・452図、図版104)

掘立柱建物22と重複して検出された規模・棟方向ともにはほぼ同様の東西棟建物であるが、棟方向がやや南に振り、床面積も20.2㎡とわずかに狭かったが、梁行が東西同じ3.3mで、より整然と矩形を呈す。遺物は土師器・須恵器片を含み、建物は中世の範疇のものと考えられる。(江見)



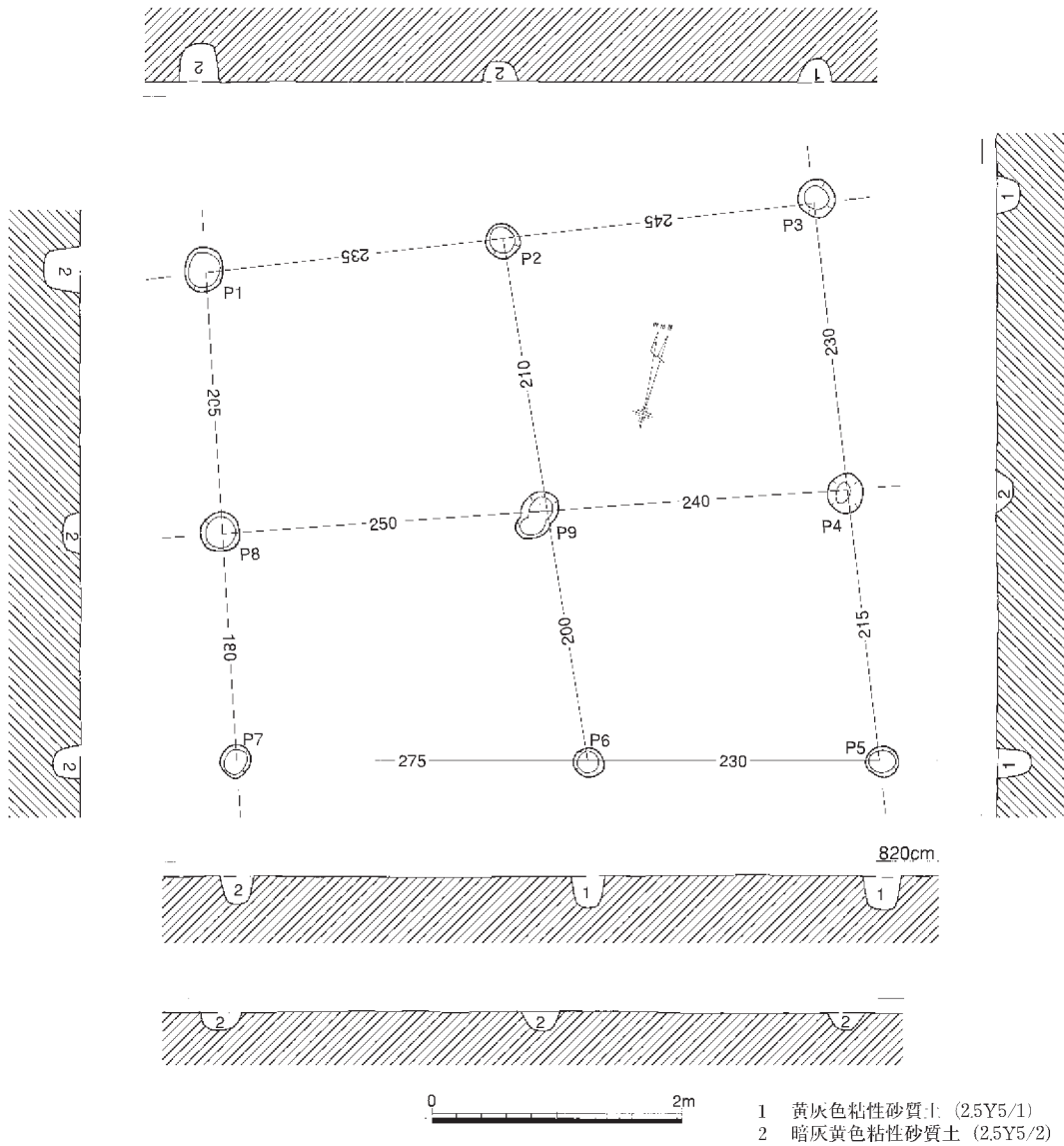
第451図 掘立柱建物22 (1/80)



第452図 掘立柱建物23 (1/60)

掘立柱建物24 (第447・453図、図版104)

116C・Eにかけて検出した2×2間の建物である。柱間距離は桁行が2.3m～2.75m、梁行が1.8m～2.3mを測り、全体的に東側の柱間が広がっている。柱穴の掘り方は、20～30cm程の円形を呈し、検出面から底面までの深さは15～30cmを測る。埋土は黄灰色から暗灰黄色の砂質土でベース層とは明瞭な違いがあった。遺物はなく時期の確定は難しいが中世と思われる。(松尾)



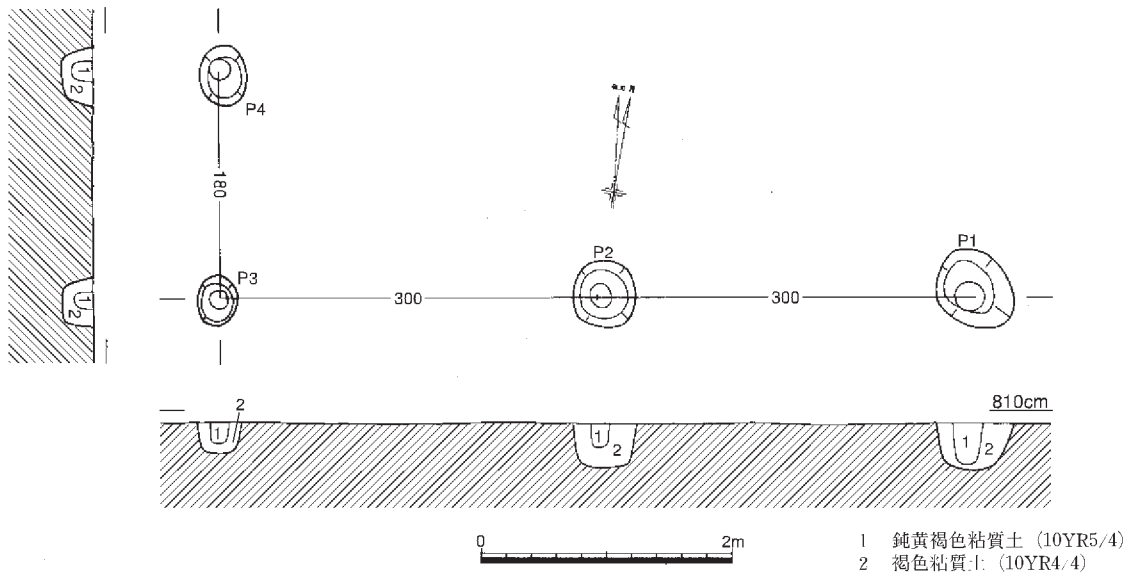
第453図 掘立柱建物24 (1/60)

掘立柱建物25 (第447・454図)

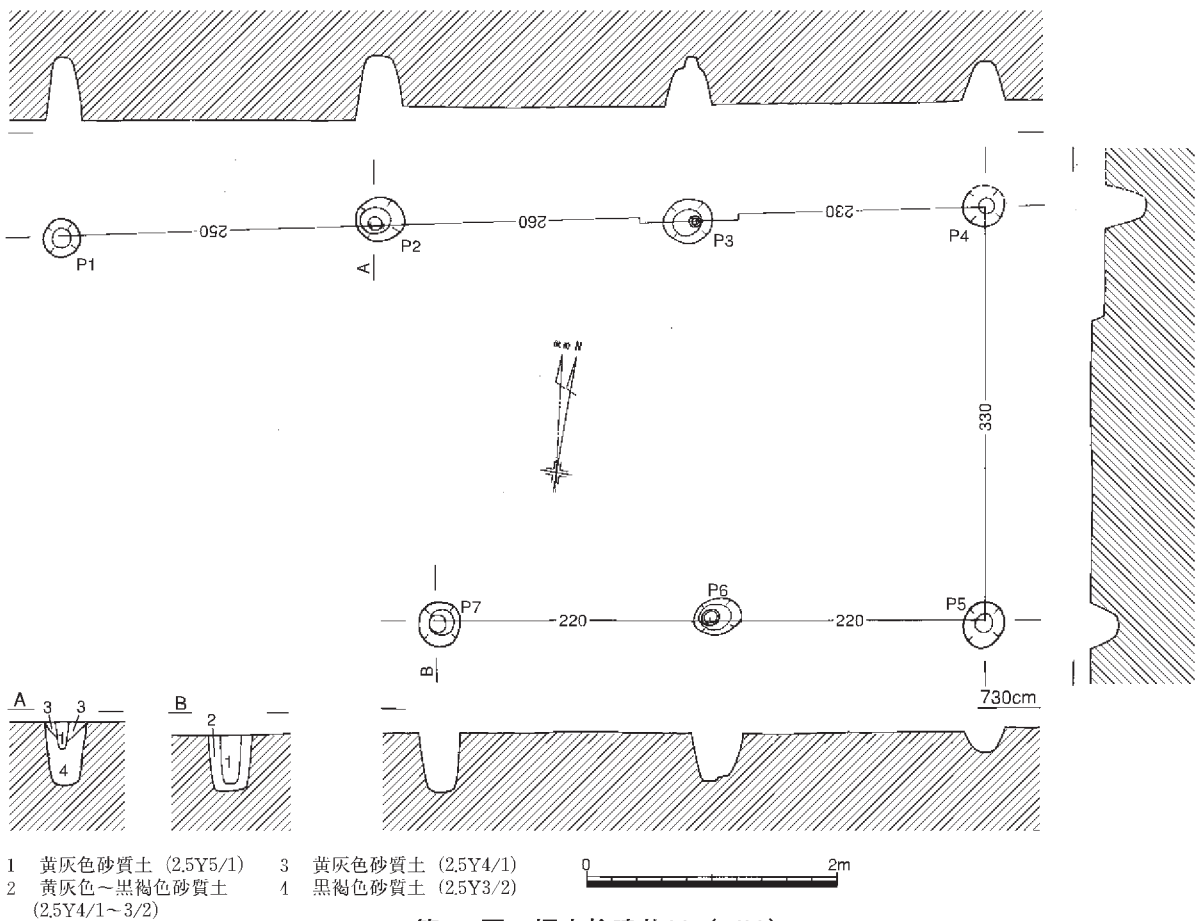
掘立柱建物23の東数mから検出された桁行2間以上、梁行1間以上の規模を持つと思われる建物で、北東部は用地外に延びる。また、後述する土壇墓4の一部を切って検出された。柱穴にはいずれも柱痕跡が認められ、建物は遺構の切り合い関係から中世後半に建てられたものであろう。(江見)

掘立柱建物26 (第445・455図)

152Sの窪木遺跡東端に位置する東西棟の掘立柱建物である。規模は、桁行3間以上、梁行は1間



第454図 掘立柱建物25 (1/60)



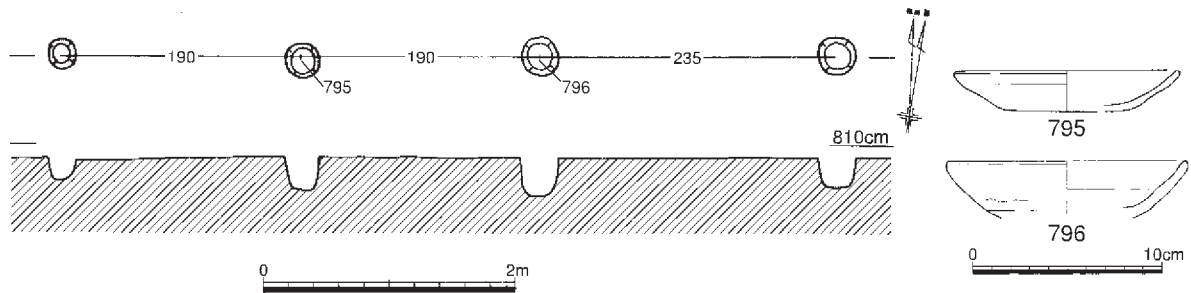
第455図 掘立柱建物26 (1/60)

と考えられ、桁行の柱間2.2～2.6m、梁行3.3mを測る。棟方向はN-87°-Eである。柱穴の掘り方は、すべて円形を呈し、径30～40cmを測る。深さは50～20cmで東側に向かって浅くなる。P 2・3・6・7で柱痕跡を確認している。時期は、早島土器片の出土等から中世と考えられる。 (高田)

### 3 柱穴列

#### 柱穴列 4 (第447・456図)

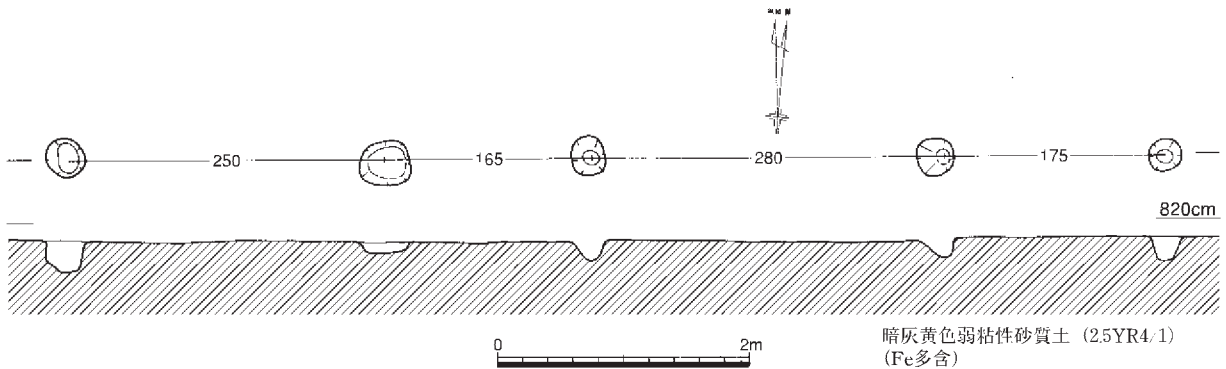
掘立柱建物22の東から検出されたもので柱穴4個3間分を検出した。他に柱穴が検出されなかったから柱穴列と扱ったが、掘立柱建物22と方向が一致しており、出土遺物の土師器皿795・796などの特徴から、これら周辺の遺構は15世紀後半以降のものではないかと考える。(江見)



第456図 柱穴列 4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

#### 柱穴列 5 (第448・457図)

118Eの西端で検出した東西に長い柱穴列である。主軸はN-89°-W。柱間距離は1.65mから2.8mを測る。柱穴の掘り方は20~40cmの円形を呈し、検出面から底面までの深さは10~25cmであった。遺物は無く時期の決め手を欠くが、埋土および周囲の状況から中世と思われる。(松尾)



第457図 柱穴列5 (1/60)

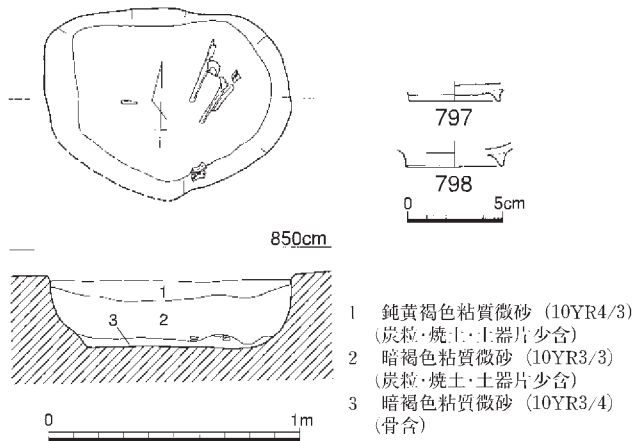
### 4 土壙墓

#### 土壙墓 1 (第445・458図)

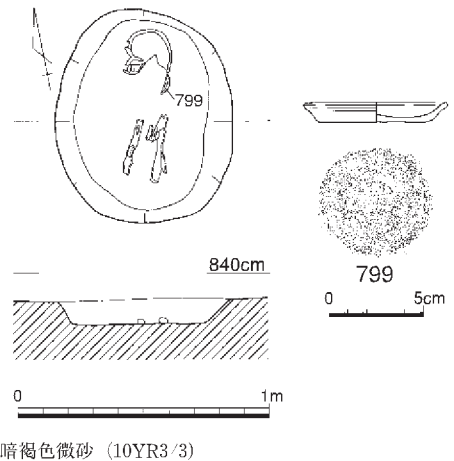
102Cから検出された。平面形は不整長方形であり、掘り方上面の長さは98cm、幅は75cmである。底面の長さは77cm、幅は62cm。深さは26cm、主軸は磁北から89°東に振る。遺物は土師器椀797、土師器椀798が出土した。土器の特徴から遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。(田中)

#### 土壙墓 2 (第445・459図、図版122)

102Cから検出された。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さは85cm、幅は71cm。底面の長



第458図 土壙墓1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第459図 土壙墓2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

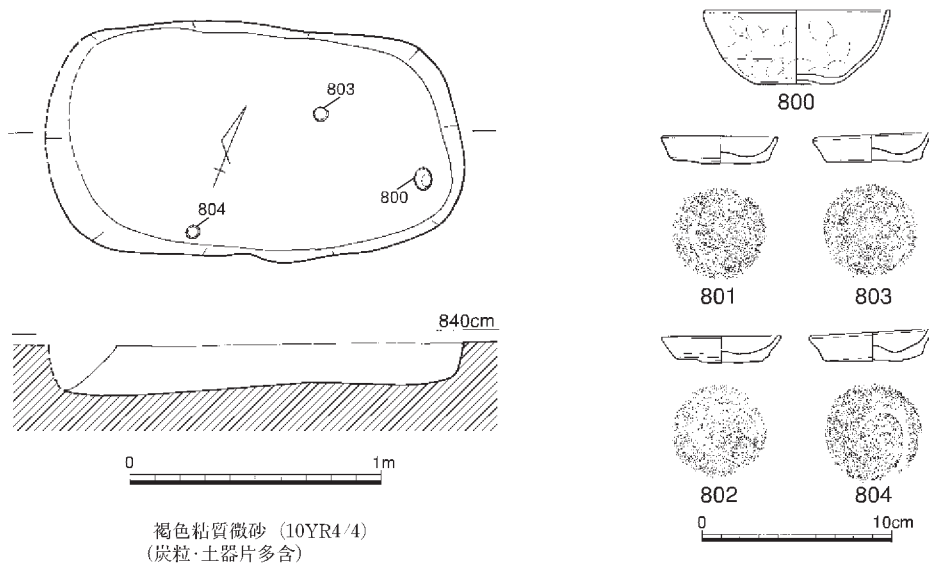
さは75cm、幅は53cm。深さは10cm、主軸は磁北から14°東に振る。土壙内からは頭蓋骨等が出土した。遺物は土師器皿799が出土している。遺物等から遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。(田中)

**土壙墓3** (第446・460図、図版122)

110Aの南東角から検出された。平面隅丸長方形を呈し、規模は1.64m×94cm深さ17cmを測る。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。壙内には炭粒が多く含まれる褐色粘質土が堆積していたが、人骨は確認していない。しかしながら、壙内底部付近からは完形の遺物が散在する状態で出土しており、副葬されたものと理解している。土器の特徴から14世紀中葉に葬られたものであろう。(江見)

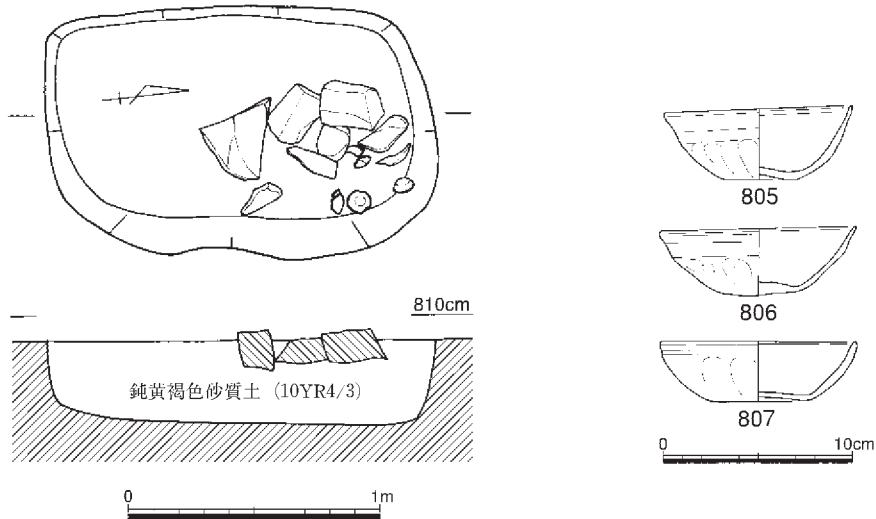
**土壙墓4** (第447・461図、図版105・123)

114C、掘立柱建物25に一部切られ検出された。平面隅丸長方形を呈し、主軸を南北方向に向ける。規模は1.54m×97cm、深さ33cmを測る。壙内上部には角礫が並び、北東部から土師器碗805~807が出土している。土壙墓3と同様、人骨の出土は見なかったが、遺物を副葬したものと判断している。土器の特徴から、14世紀中葉に葬られたものと考えられる。(江見)

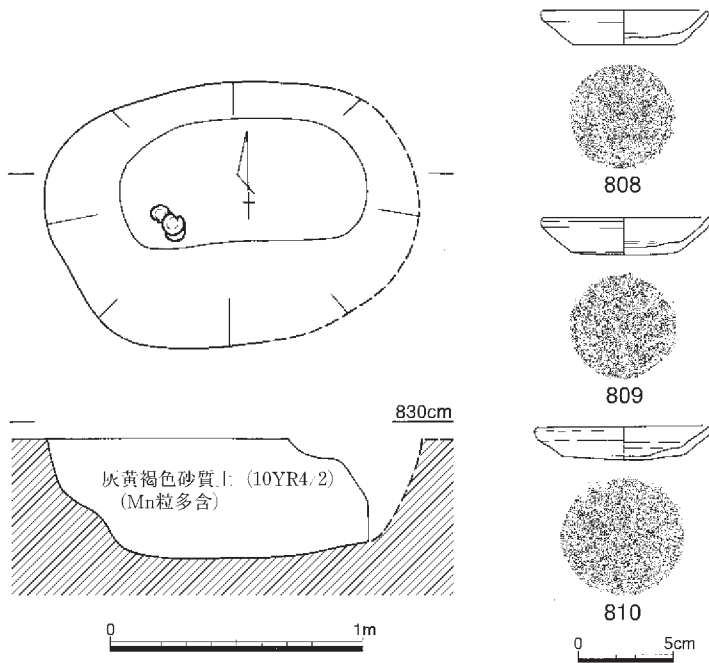


第460図 土壙墓3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

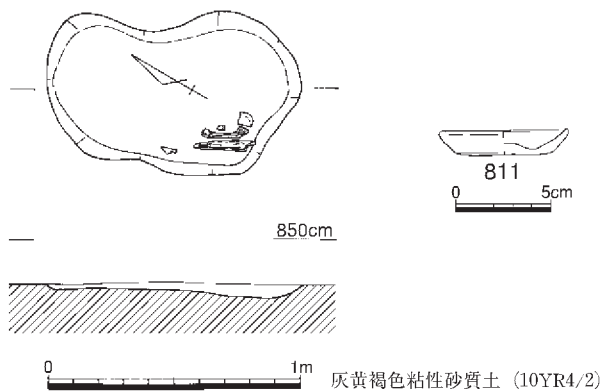




第461図 土墳墓4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第462図 土墳墓5 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第463図 土墳墓6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土墳墓5** (第447・462図、図版123)

土墳墓4の南14mに位置し、墓壙の北部を近世土壌に一部削平を受けて検出された。平面楕円形を呈し、主軸を東西に向ける。規模は1.5×1.05m、深さ約50cmを測る。壙内には砂質土の堆積が見られるのみで人骨の確認には至らなかった。しかしながら、南西角の底部付近からは重ね置かれたと思われる土師器皿3枚808～810が出土しており、上記と同様に墓と判断したものである。皿の底部はいずれも糸切りされており、中世後半に葬られたものであろう。(江見)

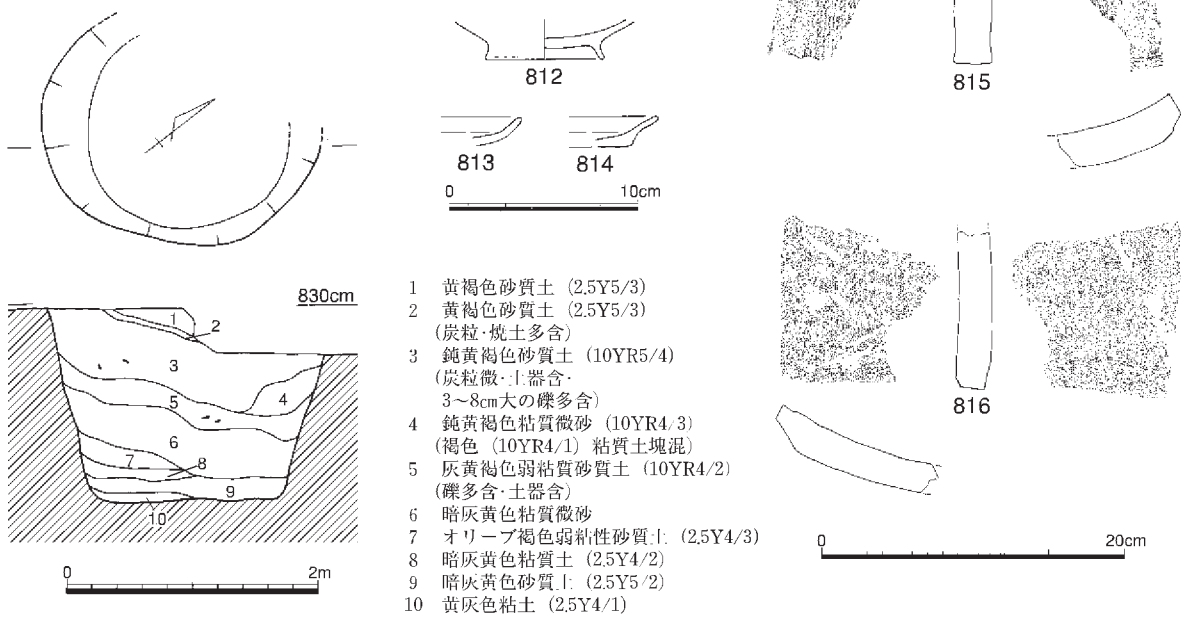
**土墳墓6** (第449・463図)

124Eの南西に位置する。平面形は、長軸1.01m、短軸63cmを測る不整形で、主軸はN-25°-W。検出面から底面までの深さは5cm程度。南西隅に人骨の一部を確認した。また、副葬品と考えられる811の土師器皿が出土している。811の土師器皿のみの出土であるため、詳細な時期決定は難しい。14世紀後半であろうか。(松尾)

## 5 土壙

### 土壙102 (第445・464図、図版123)

106Cの北東に位置し土壙の北部は農道へ延びる、平面円形を呈す土壙である。底部は平坦で壁は比較的急に立ち上がる。規模は径約2m、深さ約1.5mを測る。埋土は10層からなり、いずれも硬く締まった層で、これに混じって土師器椀812・小皿813・814、平瓦815・816などが出土している。瓦は古代に属すが、土器から13世紀に廃棄された土壙であろう。(江見)



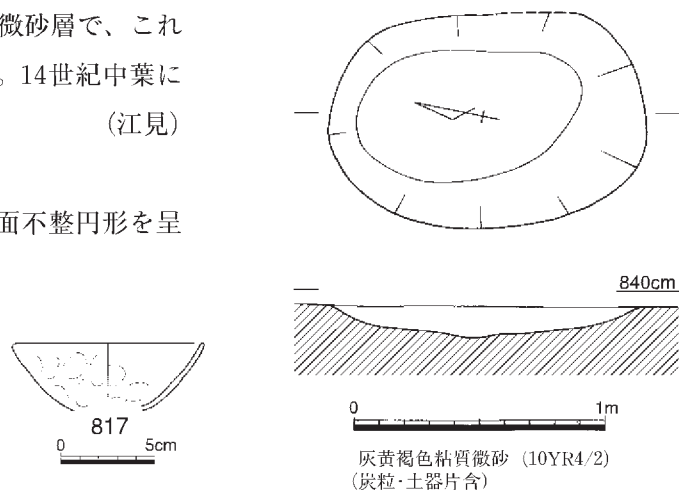
第464図 土壙102 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/5)

### 土壙103 (第446・465図)

110Cの北東に位置し、土壙墓3の西数mから検出された平面楕円形を呈す浅い土壙である。底部は窪み、壁は緩く外方へ傾斜する。規模は1.25m×85cm、深さ12cmを測る。埋土は炭粒を含む粘質微砂層で、これに混じって土師器椀817が出土している。14世紀中葉には廃棄された土壙と思われる。(江見)

### 土壙104 (第446・466図)

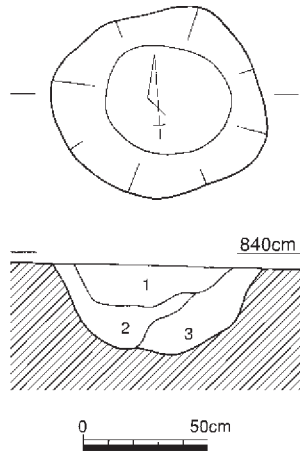
土壙103の南西5mから検出された平面不整円形を呈す土壙である。底部はやや凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。規模は84×74cm、深さ35cmを測る。埋土は3層からなる。土師器・鉄滓などが出土しており、時期は中世の範疇と判断される。(江見)



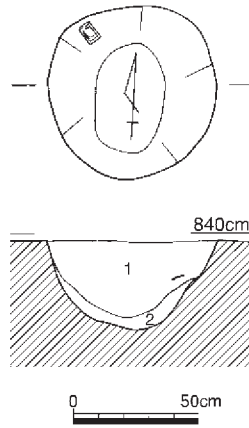
第465図 土壙103 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌105 (第446・467図、図版128)

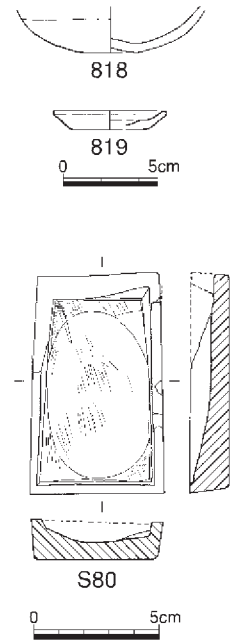
土壌104の南から検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部は窪み、壁は垂直気味に立ち上がる。規模は径約70cm、深さ約70cmを測る。埋土は2層からなり、北東からは壁に密着して台形硯S80が出土しており、また、上層からは破片ながら土師器碗818・小皿819なども出土した。硯は一部を欠損しているが良く使い込まれたら



- 1 オリーブ褐色粘質微砂 (2.5Y4/4)
- 2 褐色粘質微砂 (10YR4/4)
- 3 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)



- 1 黒褐色粘質微砂 (10YR2/2)  
(炭粒・焼土多含)
- 2 褐色粘質土 (10YR4/4)



第446図 土壌104 (1/30)

第467図 土壌105 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

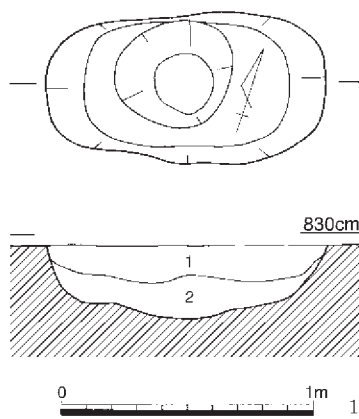
しく、陸中央がかなり凹んでいる。土器の特徴から14世紀中葉には廃棄されたものであろう。(江見)

土壌106 (第446・468図)

112Aの南西角に位置し、土壌墓3の南東3mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部中央は窪み、壁は斜めに立ち上がる。規模は1.11m×60cm、深さ約30cmを測る。埋土は2層からなり、遺物は土師器碗820、鉄滓などが出土しており、中世に廃棄された土壌であろう。(江見)

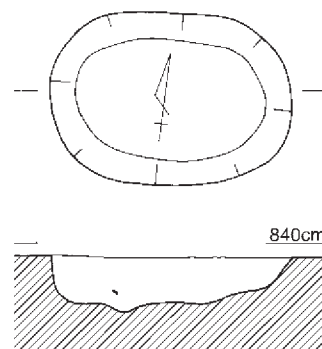
土壌107 (第446・469図)

土壌106の南西6mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。底部は凹凸があり、壁は斜めに



- 1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/4)

第446図 土壌106 (1/30)・出土遺物 (1/4)



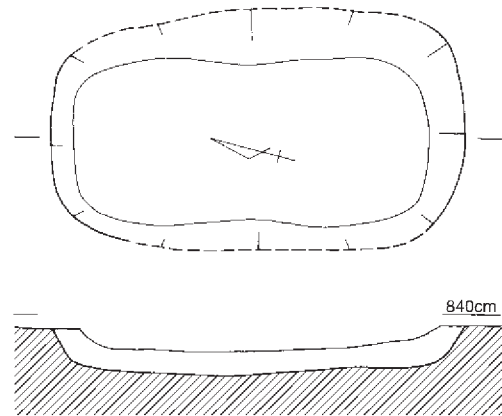
- 1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)
- 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
(炭粒少含)

第469図 土壌107 (1/30)・出土遺物 (1/4)

立ち上がる。規模は96×68cm、深さ22cmを測る。埋土にはわずかに炭粒を含み、これに混じって土師器椀821をはじめ、須恵器片などが出土している。14世紀代に廃棄された土壙であろう。(江見)

**土壙108** (第446・470図)

土壙107の南西から検出された平面隅丸長方形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。規模は1.64m×94cm、深さ18cmを測る。埋土は1層で、遺物は土師器・須恵器片、鉄滓などが出土しており、遺物の年代観は中世を示す。(江見)

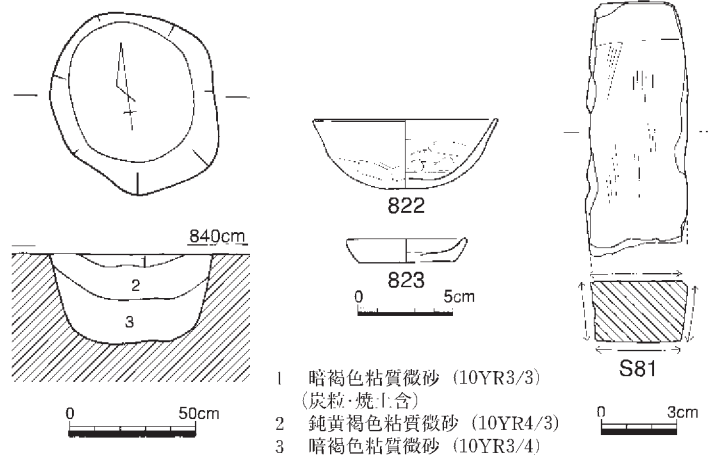


0 1m  
 灰色砂質土 (5Y5/1)  
 (灰黄色粘質土塊 (2.5Y6/2) 混)

第470図 土壙108 (1/30)

**土壙109** (第446・471図、図版128)

土壙108の南東数mから検出された平面楕円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。規模は72×65cm、深さ36cmを測る。埋土は3層からなる。遺物は土師器椀822・小皿823、砥石 S81、焼土塊などが出土している。砥石は4面に磨いだ痕跡が認められた。土器の特徴から、当土壙は14世紀前半に埋め戻されたものと考えられる。(江見)



1 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)  
 (炭粒・焼土含)  
 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)  
 3 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)

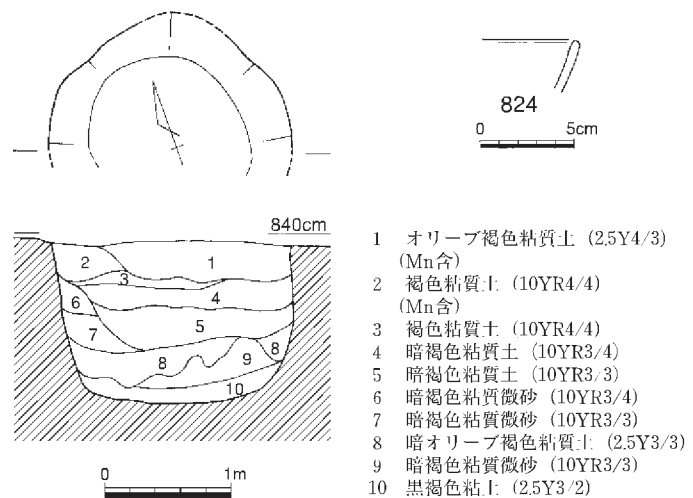
第471図 土壙109 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

**土壙110** (第446・472図)

110 E の北東に位置し、土壙南半は農道に延びる。平面円形を呈す。底部は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。規模は径約1.9m、深さ約1.3mを測る。埋土は10層からなり、いずれも締まっていた。遺物はわずかながら土師器・須恵器・備前焼片などとともに青磁碗片824が出土している。中世に廃棄された土壙であろう。(江見)

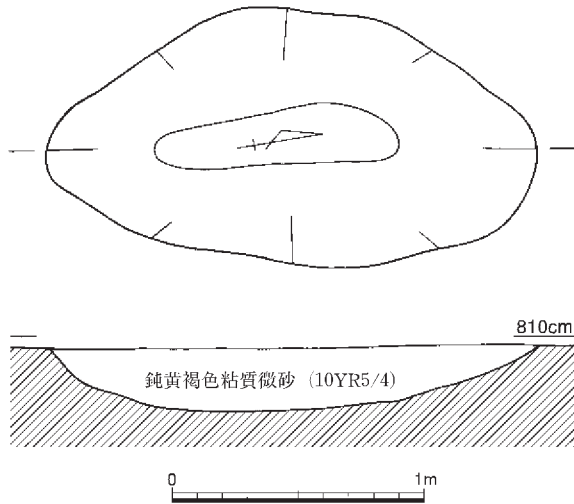
**土壙111** (第447・473図)

114 E の北西部から検出された平面不整楕円形を呈す土壙である。底部はほぼ平坦で、壁は緩く



1 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3)  
 (Mn含)  
 2 褐色粘質土 (10YR4/4)  
 (Mn含)  
 3 褐色粘質土 (10YR4/4)  
 4 暗褐色粘質土 (10YR3/4)  
 5 暗褐色粘質土 (10YR3/3)  
 6 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4)  
 7 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)  
 8 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3)  
 9 暗褐色粘質微砂 (10YR3/3)  
 10 黒褐色粘土 (2.5Y3/2)

第472図 土壙110 (1/60)・出土遺物 (1/4)

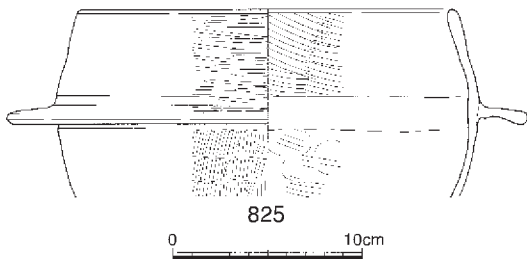
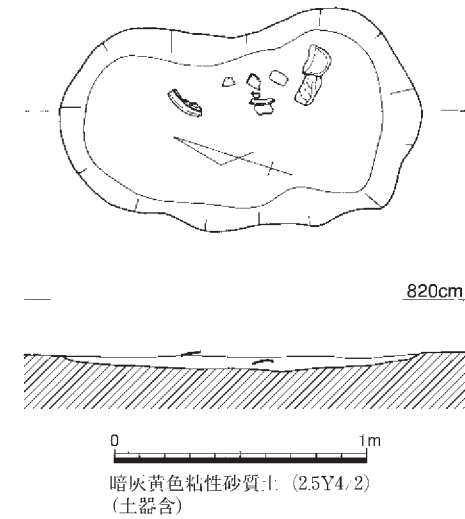


第473図 土壙111 (1/30)

118 Eの北西に位置する。平面形が隅丸長方形を呈し、長軸は 2.12m、短軸は 1.18mを測る。断面形は楕形で、検出面から底面までの深さは29cmを測る。遺物はM17・M18などの鉄製品の外、小破片ではあるが土器が数点出土している。14世紀代であろう。(松尾)

土壙114 (第449・476図)

122 Eの南西隅に位置する。平面形が隅丸長方形を呈し、長軸は 1.73m、短軸は



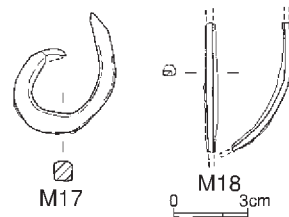
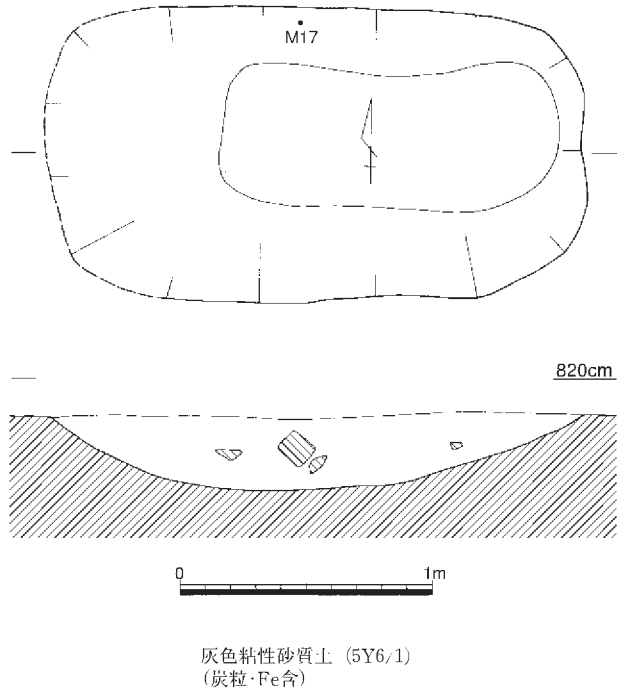
第474図 土壙112 (1/30)・出土遺物 (1/4)

立ち上がる。規模は1.95×1.01m、深さ25cmを測る。埋土は鈍い黄褐色粘質微砂であった。遺物はわずかに中世と思われる土師器細片が出土するのみであった。(江見)

土壙112 (第447・474図)

114 Eの東端で検出した。平面形が不整楕円形を呈し、長軸は 1.43m、短軸は83cmを測る。遺物は土壙の西側でまとまって出土している。825は瓦質土器の羽釜。外面上半はヨコヘラミガキ、外面下半および内面はハケ。外面には煤が多く付着している。15世紀代であろう。(松尾)

土壙113 (第448・475図、図版130)



第475図 土壙113 (1/30)・出土遺物 (1/3)

70cmを測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは12cmを測る。出土遺物は少なく、826の土師器碗および827の土師器皿どちらも破片である。土器の諸特徴から、14世紀後半頃の土壌であると思われる。(松尾)

**土壌115** (第449・477図、図版130)

124 Gの北西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸は1.08m、短軸は86cmを測る。断面形は碗形を呈し、検出面から底面までの深さは18cm。埋土は2層に分層することができ、第1層の方が粗い砂を含んでいた。出土遺物は少なく、M19鉄釘の他は、土師器など土器の小破片のみである。14世紀代であろう。(松尾)

**土壌116** (第449・478図)

124 Gの北西に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸は92cm、短軸は88cmを測る。断面形は、北端のみが一段深くなる、逆台形を呈する。また、土壌の西端では、埋土中に焼土塊を確認している。出土遺物は828の土師器など、土器の小破片が多い。14世期中頃であろう。(松尾)

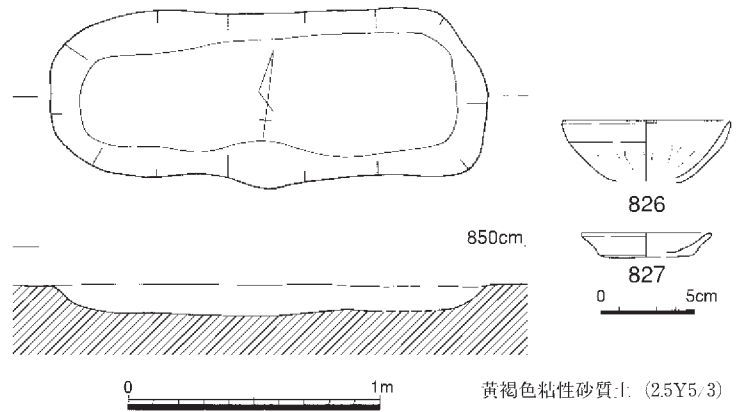
**土壌117** (第449・479図)

122 Gの北東に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸は1.8m、短軸は1.52mを測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは24cm。土壌の西側、底面付近には15cm位の自然石が投げ込まれていた。

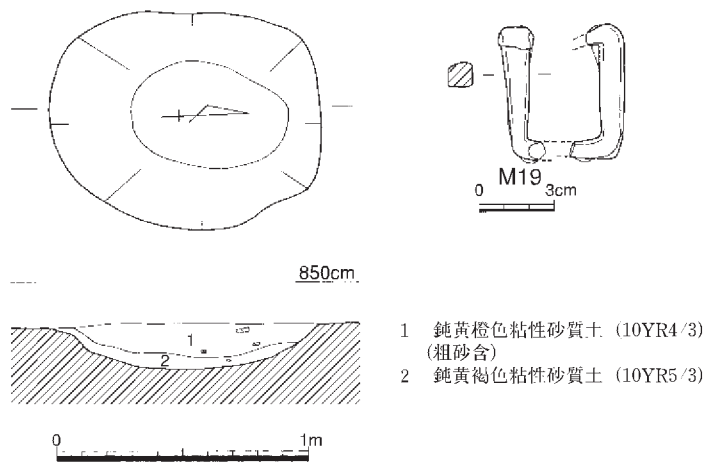
出土遺物は829など土師器の小破片がほとんどであった。土器の諸特徴から14世紀中頃と思われる。(松尾)

**土壌118** (第449・480図)

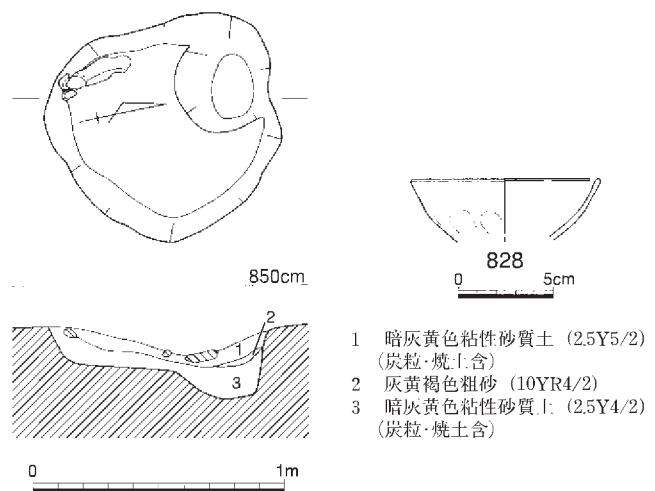
122 Gの北東で、土壌117南西に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸・短



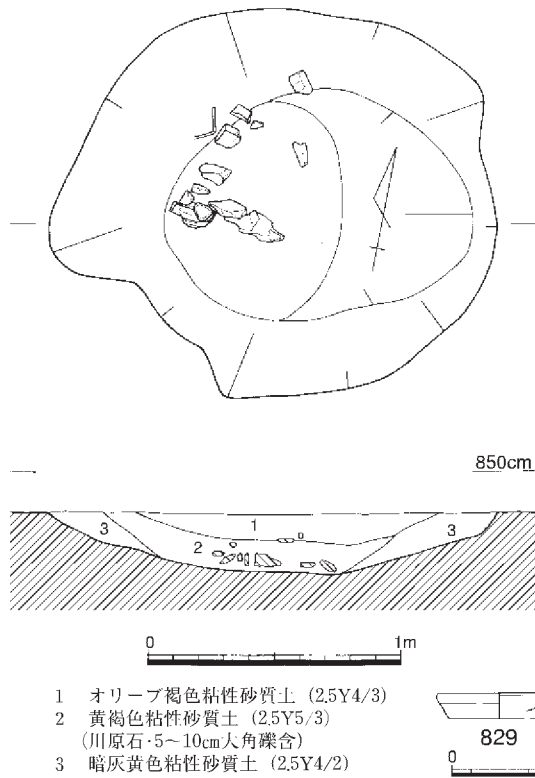
第476図 土壌114 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第477図 土壌115 (1/30)・出土遺物 (1/3)



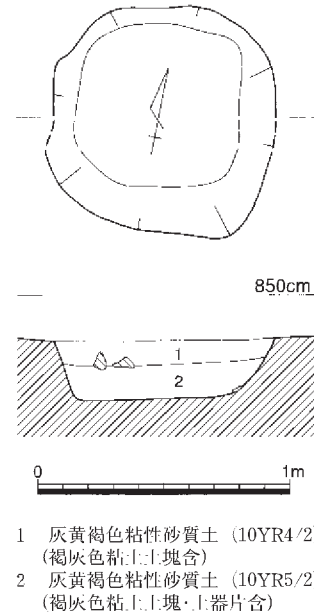
第478図 土壌116 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 オリーブ褐色粘性砂質土 (2.5Y4/3)
- 2 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/3)  
(川原石・5~10cm大角礫含)
- 3 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y4/2)

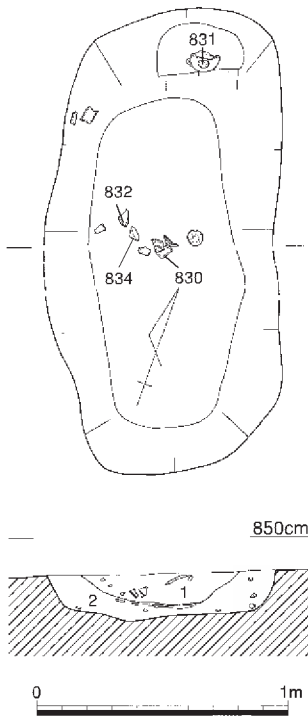
第479図 土壌117 (1/30)・出土遺物 (1/4)

軸共に約88cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは23cm。出土遺物は少なく土器の小破片のみであった。14世紀代であろう。(松尾)



- 1 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)  
(褐灰色粘土塊含)
- 2 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR5/2)  
(褐灰色粘土塊・土器片含)

第480図 土壌118 (1/30)



- 1 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y5/3)  
(炭粒・焼土含)
- 2 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y4/2)  
(炭粒・焼土含)

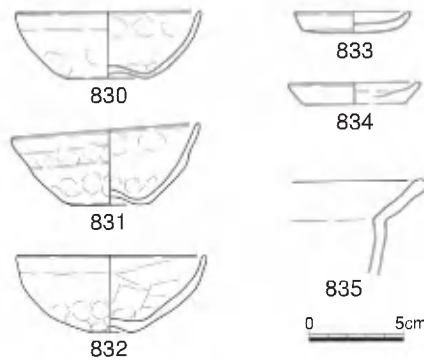
第481図 土壌119 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌119 (第449・481図、図版123)

124 E 南西で、土壌116の北側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は1.82m、短軸は91cmを測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは18cm。埋土中には焼土や炭粒、830・832~835などの土器を多く含む。また831の土師器は、土壌の北西端でテラス状になっている部分から出土した。土器の諸特徴から14世紀後半と思われる。(松尾)

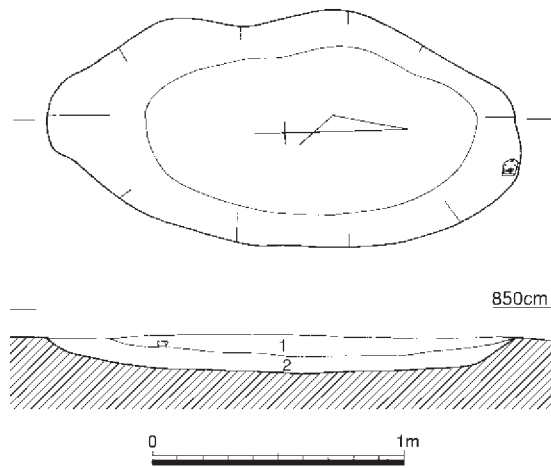
土壌120 (第449・482図)

124 E の南で溝15の北側に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸は1.85m、短軸は94cmを測る。断面形は浅い碗形で、検出面から底面までの深さは15cm。出土した土器の破片から14世紀代。(松尾)



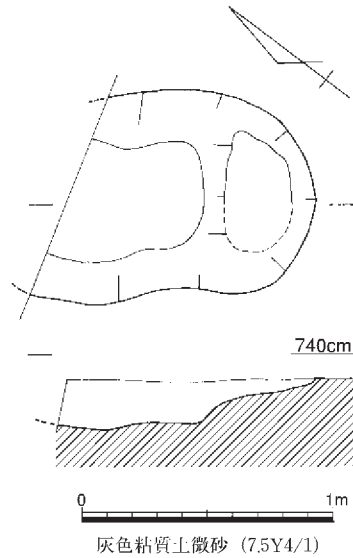
土壌121 (第445・483図)

130 G の南西に位置する。北西の一端はトレン



- 1 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR4/2)  
(炭粒・土器含)
- 2 黒褐色粘性砂質土 (10YR3/2)  
(炭粒・土器含)

第482図 土壌120 (1/30)



第483図 土壌121 (1/30)

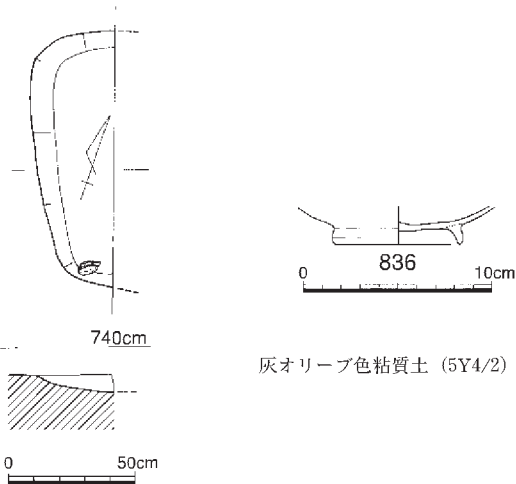
チにかかっているため、詳細は不明である。平面形は楕円形を呈すると思われ、短軸は82cmを測る。断面形は南西端に一段テラスを有し、底面まではなだらかに傾斜している。出土している土器の小片から13世紀代か。(松尾)

**土壌122** (第445・484図)

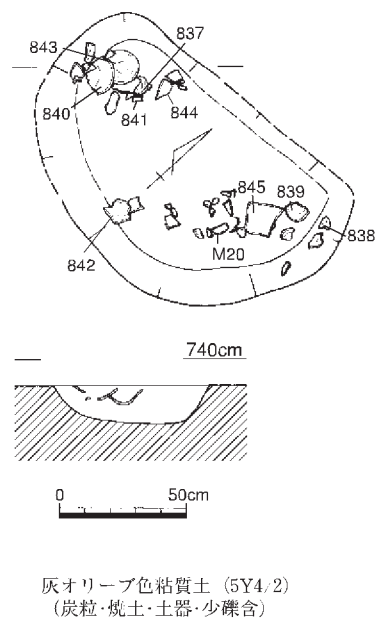
130 I の北西で、土壌123の東側に位置する。東半分については調査区外のため詳細は不明である。長軸は1.01mを測る。断面形は、検出面から底面までなだらかに傾斜し、その深さは7cm程度であった。836など土器の破片が少し出土している。13世紀前半と思われる。(松尾)

**土壌123** (第445・485・486図、図版105・123・124)

130 I の北西で、先述の土壌122西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、土壌の中央付近を通る側溝により分断されているものの、長軸は1.32m、短軸は84cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは15cm程度であった。



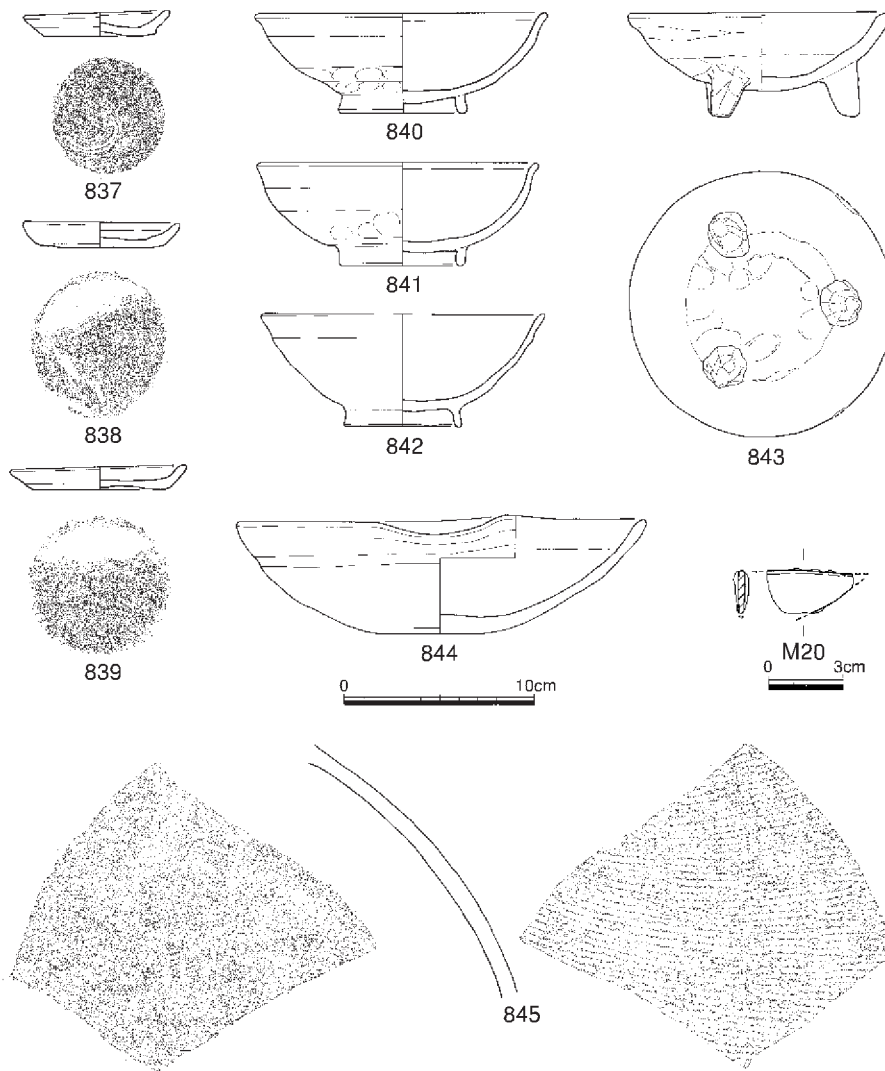
第484図 土壌122 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第485図 土壌123 (1/30)



出土遺物は、底面よりもやや高い位置から出土しているものが多い。843の土師器には三足がつき、844の鉢は片口であった。土器の他にはM20の刀子が出土している。13世紀初頭であろう。（松尾）

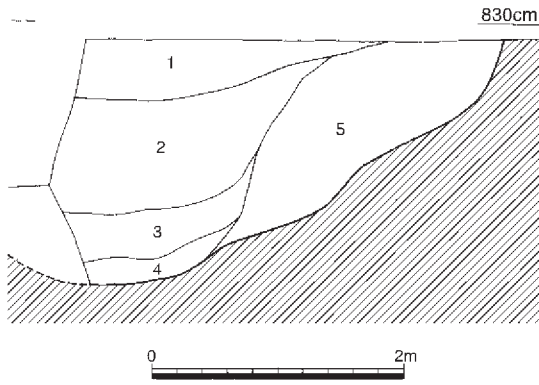


第486図 土壌123出土遺物 (1/4・1/3)

## 6 溝

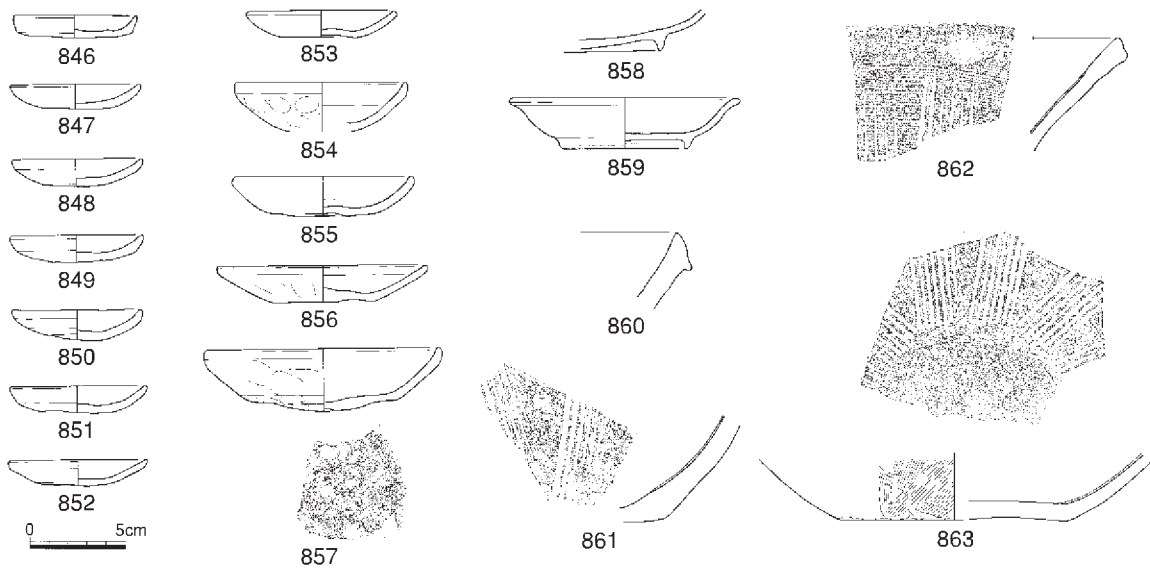
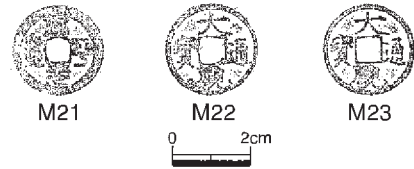
溝12 (第446・487図、写真54、図版105・106・124・130～132、表27)

108Aの南西部から検出された溝で、西側の肩部は農道に、北は用地外に延びている。推定幅約4m、深さ約1mを測り、主軸はN-27°-Wを向く。後述する溝13の主軸とは約120°の鈍角を示すが、屋敷地の南西角の部分にあたと推定している。溝の断面、底は丸く、壁は斜めに立ち上がっているが、第1～4層が掘り直された後に堆積したものと理解される。遺物はいずれの層からも出土しているが、特に第2層からは夥しい粘土化した獣骨が出土しており、残りの良い資料からは馬・牛に混じって人骨までもが確認された。溝からは他に、土師器小皿851～855・皿856・857、白磁皿858・859、備前焼播鉢860・861、亀山焼播鉢862・863、治平元寶M21・大観通寶M22・M23、刀子M24・釘M25～M29



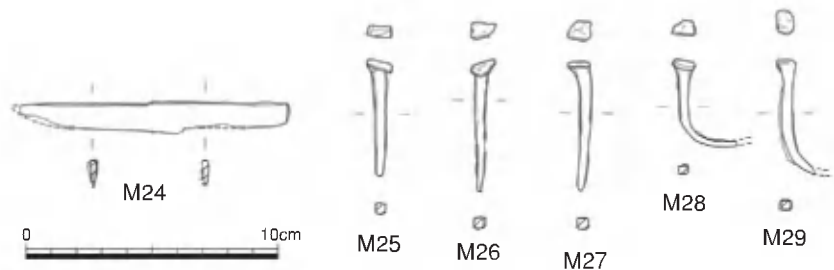
- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3) | 3 暗褐色粘質土 (10YR3/3)  |
| 2 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2) | (5~10cm大の円礫多含)      |
| (獣骨・炭粒多含)            | 4 暗緑灰色粘土 (5G4/1)    |
|                      | 5 暗褐色粘質微砂 (10YR3/4) |

などが出土している。これら遺物の年代観は15世紀後半～16世紀を示す。なお、溝は用地外へ15mばかり、計約20mで東西に延びる低位部に達するようである。(江見)



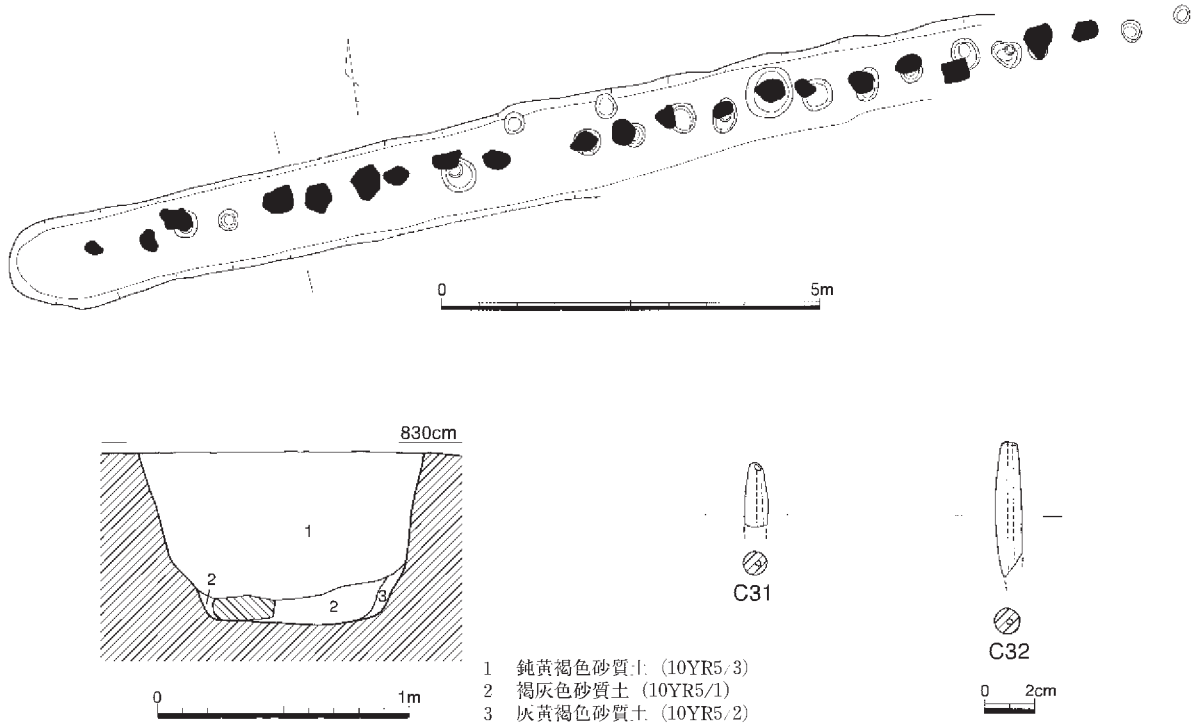
溝13 (第446・488図、写真54、図版105・106・129)

溝12の東から検出された土塀と理解されるものである。当初、礎盤石を配した径40cm前後の柱穴をいくつか検出、その後調査区を掘り下げたところ、



第487図 溝12 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4・1/3)

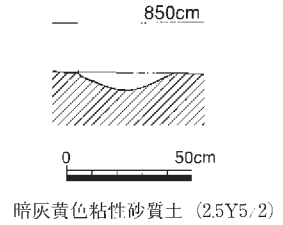
それらを囲む溝が現れた。溝は幅1.2m、深さ約70cm。底部は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は3層からなり礎盤石と柱の関係は不明瞭であったが、石の並びからも柱が立てられ、地上には土壁が張り付けられた塀が続いたと想像される。溝は主軸をN-85°-Eを向き東西方向に約16m検出されており、更に東の用地外へ約40m、計60mは延びるようである。一方、溝12とは1.5m余りの空間があり出入り口と理解している。遺物は土器細片及び土錘C31・C32が出土するに留まった。(江見)



第488図 溝13 (1/100・1/30)・出土遺物 (1/3)

溝14 (第449・489図)

124Eの中央やや西寄りで検出した。東西に流れる溝であるが、東側については側溝に切れ詳細は不明。断面形は浅い碗形を呈し、幅は39cm、検出面から底面までの深さは7cmを測る。出土遺物はなく、時期を確定するのは難しい。埋土の状況等から中世と思われる。(松尾)



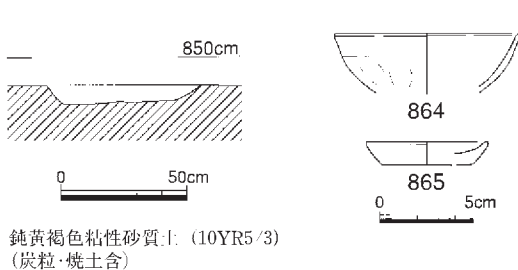
第489図 溝14 (1/30)

溝15 (第449・490図)

124Eの南端中央付近で検出した。溝14と同様の理由により、東側については明らかでない。東西に流れる溝で、断面形は逆台形を呈し、幅は60cm、深さは8cmを測る。864・865の土師器から、14世紀中頃の溝と思われる。(松尾)

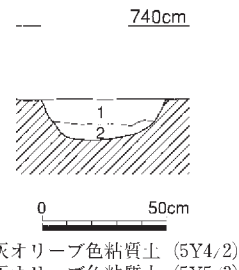
溝16 (第445・491図、図版106)

130Kの南端で検出した。北東端から先は調査区外へと延びている。底面のレベルから、南西から北東方向へ流れるものと推察される。出土遺物はなく詳細な時期は不明。中世であろう。(松尾)



鈍黄褐色粘性砂質土 (10YR5/3)  
(炭粒・焼土含)

第490図 溝15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰オリーブ色粘質土 (5Y4/2)  
2 灰オリーブ色粘質土 (5Y5/3)

第491図 溝16 (1/30)

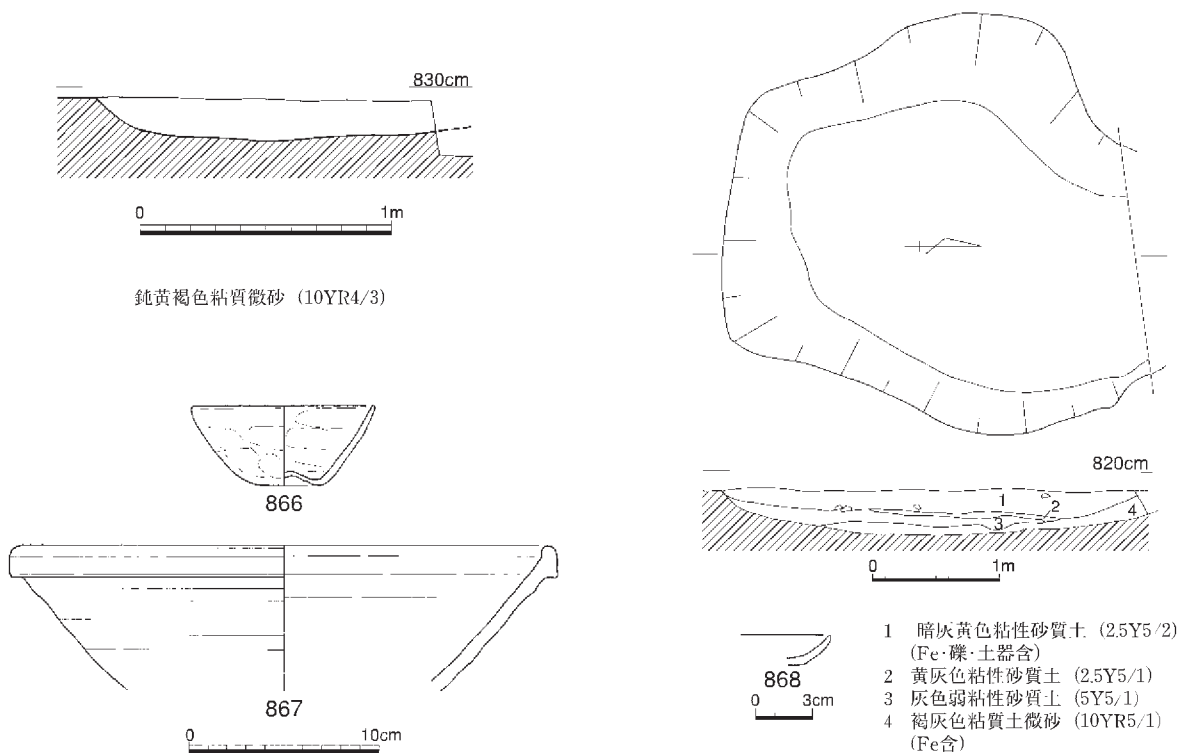
## 7 窪地

### 窪地 6 (第446・492図、図版124)

112Cの西部中央から検出された。推定長3×2.5m、深さ約20cmを測る窪地である。窪地内には鈍い黄褐色粘質微砂が堆積していた。遺物はわずかであったが土師器碗866・東播系こね鉢867、鉄滓などが出土しており、14世紀中葉には埋まったものと考えられる。(江見)

### 窪地 7 (第448・493図)

118C～Eの西寄りで、土壙113の北東に位置する。北端については側溝で切られ、詳細は不明。平面形は不整形で、幅は3mを測る。断面形は傾斜の緩やかな逆台形を呈する。遺物は868の土師器の他、木片や獣骨などが出土した。14世紀代であると思われる。(松尾)

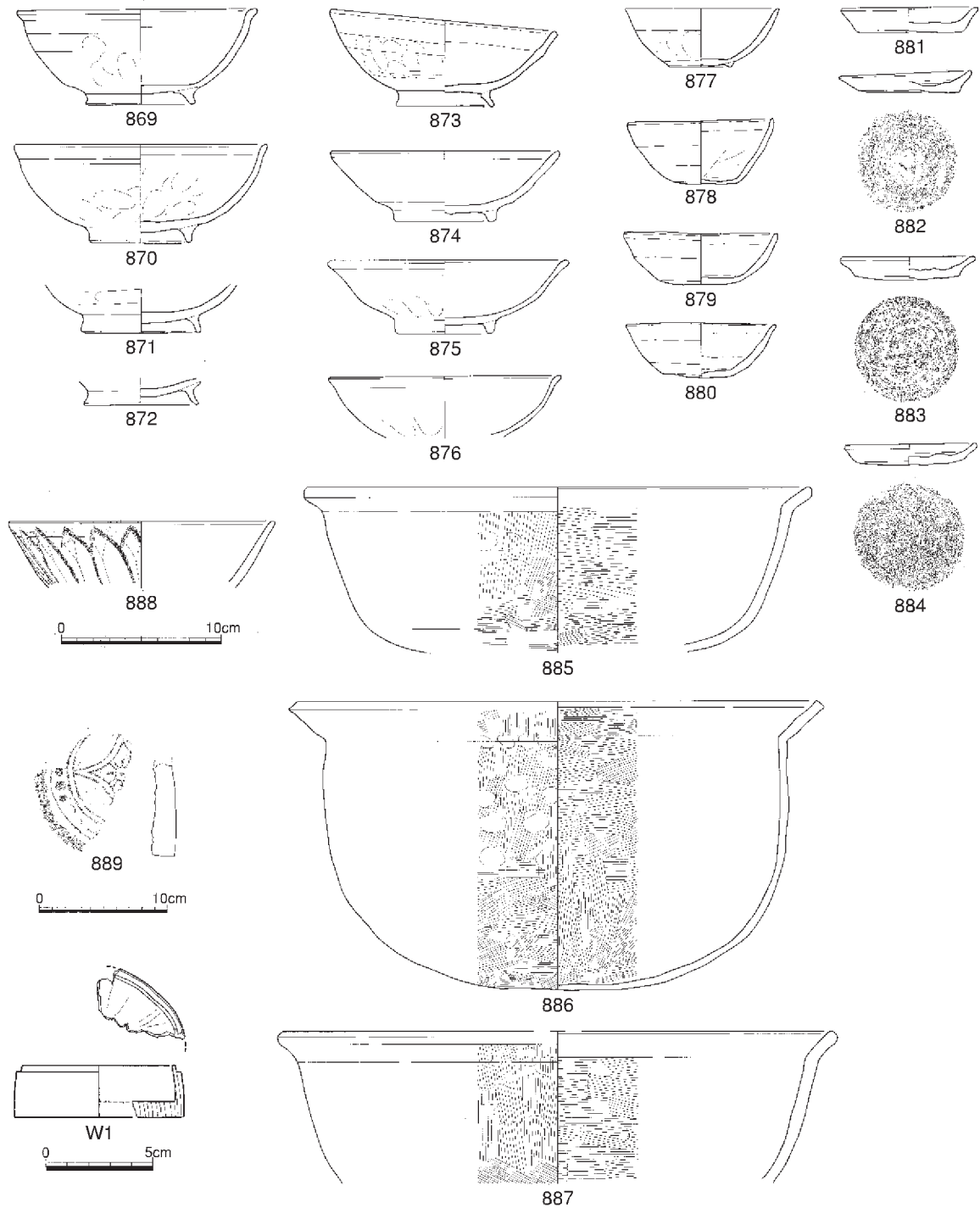


第492図 窪地 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第493図 窪地 7 (1/60)・出土遺物 (1/4)

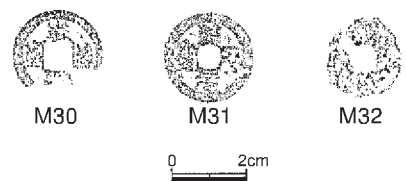
## 8 柱穴および遺構に伴わない遺物 (第494・495図、図版124・129・130・131)

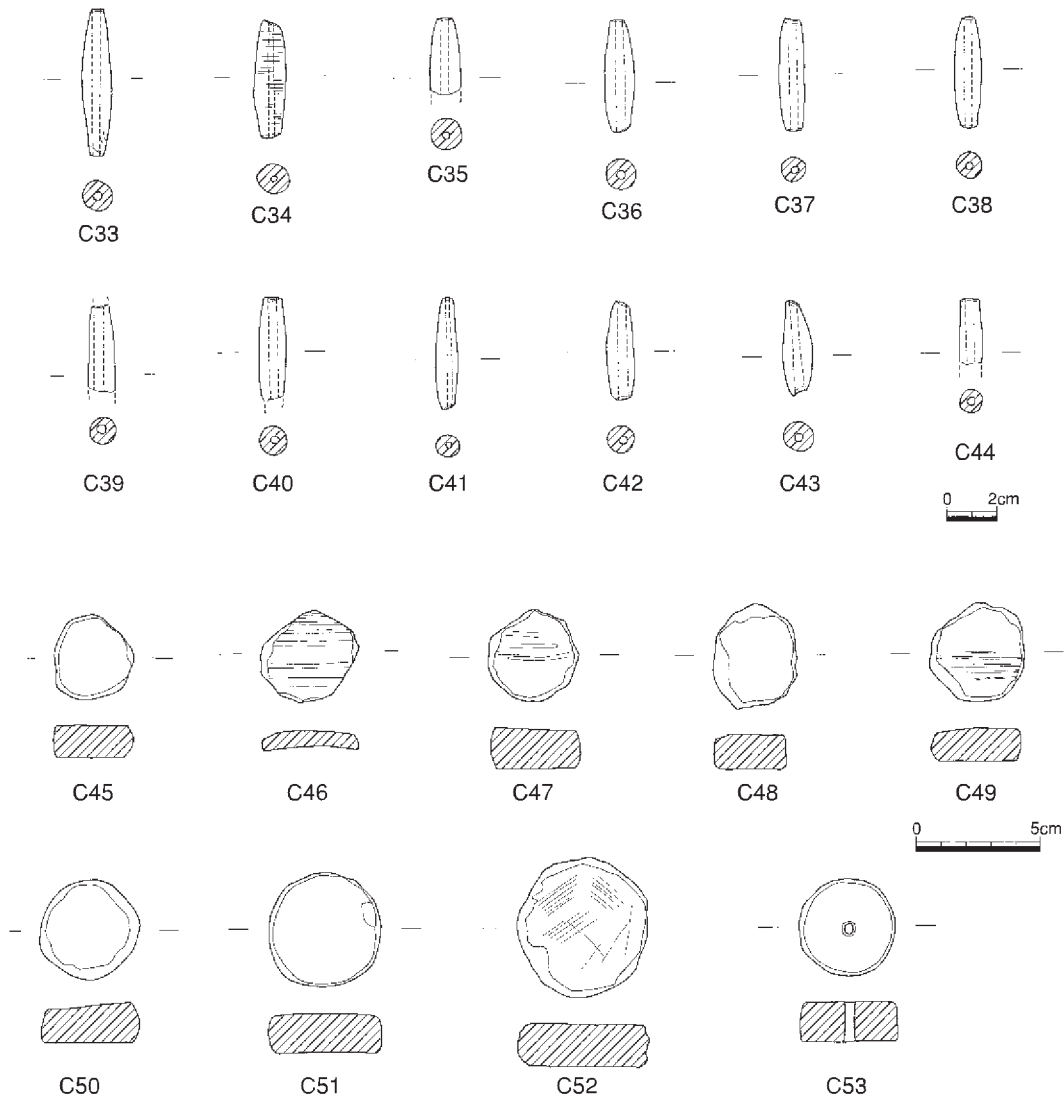
中世の遺物は全調査区から出土しているが、特に下がり1付近で出土した遺物が量・質共に良好であった。869～887までの土師器は、碗・皿・鍋があり、13世紀から14世紀にかけてのものである。888は龍泉窯系の青磁碗で、外面には蓮弁文が巡る。13世紀前半に比定できよう。889は116・118Eの包含層中よりの出土。内区には七宝文を配置し、その外側には2条の圏線と珠文および1条の圏線が巡り、外周には平縁を付ける。瓦当裏面はナデ調整を行っている。色調は暗灰色を呈し焼成は硬質である。この様な七宝文軒丸瓦の出土は県内でも数える程しかなく、倉敷市浅原寺跡・吉備中央町吉川八幡宮・総社市新山廃寺の3例を数える。これら3例のなかで最も類似しているのが、総社市新山廃寺



第494図 柱穴および遺構に伴わない遺物① (1/4・1/5・1/3・1/2)

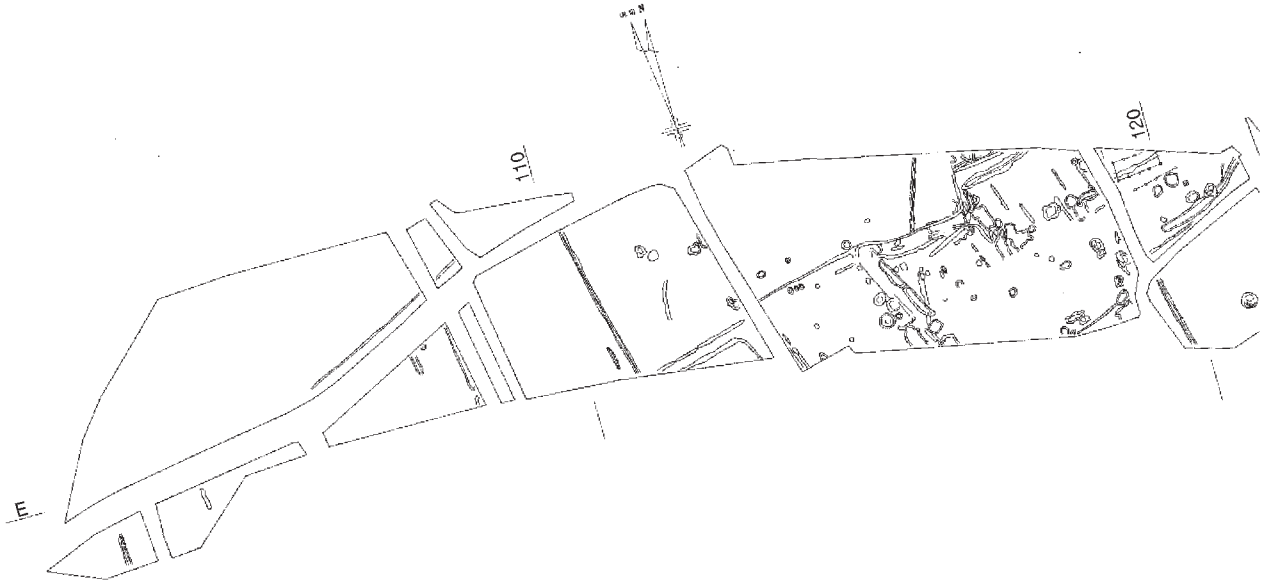
の大門跡付近より出土したとされている軒丸瓦である。実見はしていないが、同範である可能性は高い。平安末から鎌倉時代初頭の意匠である。その他、W1の合子は下がり1より出土しており、樹種はガマズミ属。M30~32の銅銭はM30が皇宋通寶、M31が治平元寶である。(松尾)





第495図 柱穴および遺構に伴わない遺物② (1/3)

## 第6節 近世の遺構・遺物

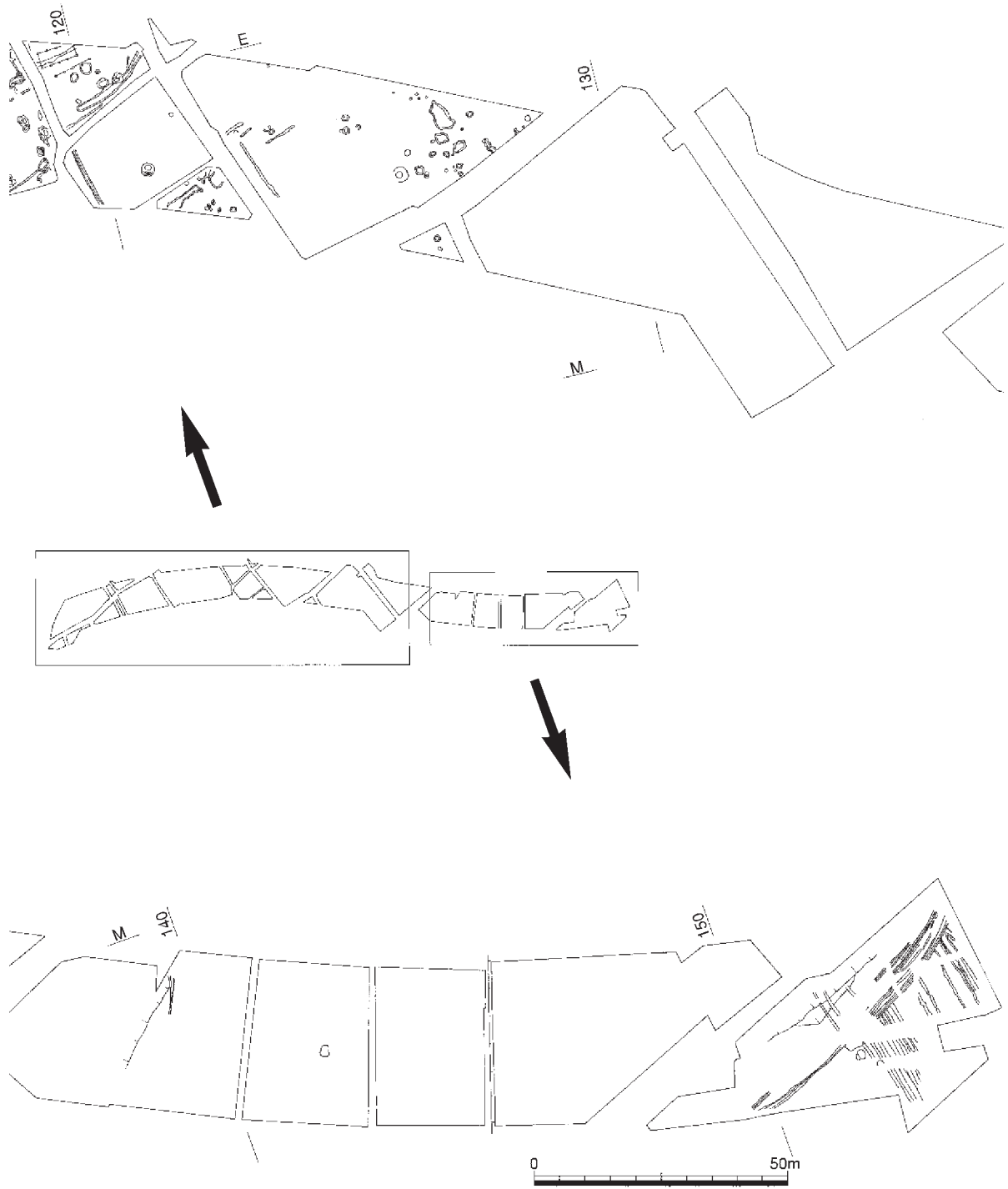


### 1 概要

近世の遺構はその大半が近世後半以降のもので判断されたもので、個々の説明は省き遺構の状況と、一部の遺物の説明で当項を終えたい。

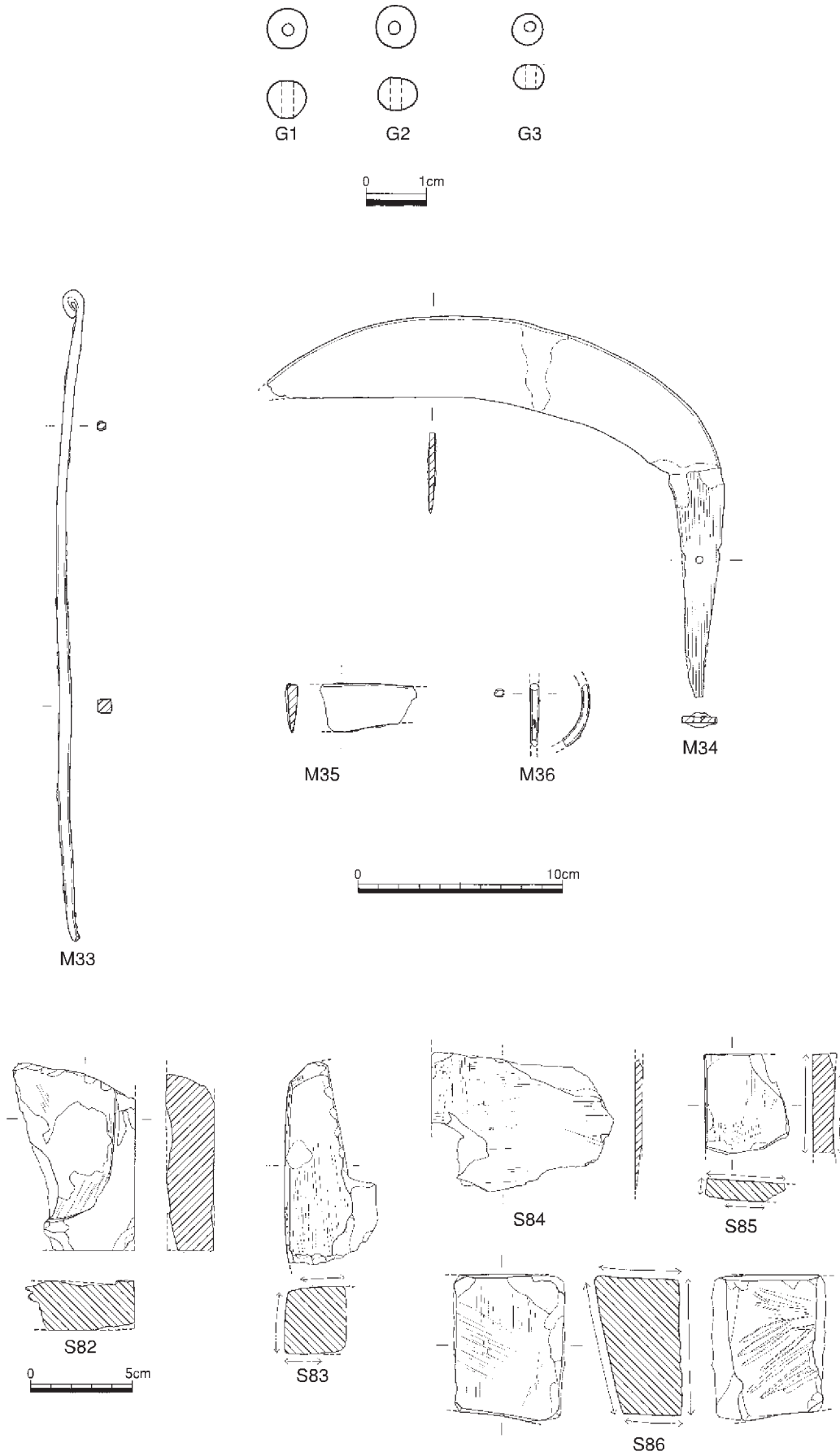
遺構は主に遺跡の西端から130付近まで、そして東端付近の2か所から検出された。東端付近からは水田あるいは畑地に関わると思われる東西方向の小規模な溝が幾筋も掘り返された状況がみられた。なお、遺構の確認がなされなかった140～150付近は水田として利用されていたと理解している。

一方、西端付近にも東端と同様と思われる南北溝がいくつか検出されているが、用地内を斜めに走る農道から北側においては水田として利用されたものと考えられる。しかしながら110～130付近に至ると東西あるいは南北方向の、居住地を区画すると思われる溝がいくつか現れる。なお、刀子M35・釘M36などはこれからの出土遺物である。さらに、120付近からは屋敷地のみならず、ある時期は墓地と利用されたのか、同時期に存在したのかは不明であるが、掘立柱建物及び柵列などが検出されるとともに、周囲からは10基余りの墓と思われる土壇も検出され、さらに、土壇および周辺からは数珠と思われるガラス玉G1～G3が出土している。他にこの一帯からは火箸M33・鎌M34の鉄製品や、赤間石（輝緑凝灰岩）製の硯S82・砥石S83～S86などが出土している。（江見）



第496図 近世遺構全体図 (1/1,250)





第497図 近世出土遺物 (1/1・1/3)

## 第5章 総括

### 第1節 南溝手遺跡の調査成果

今回調査した南溝手遺跡は、二つの微高地とその間を埋める河道および低位部にあたり、微高地上からは弥生時代中期～近世に至る遺構が検出され、河道部分からは古墳時代～古代を中心とした豊富な遺物が出土した。今一度特筆されるものを振り返り、総括としたい。

弥生時代の主な遺構は中期の袋状土壙3基の検出から始まり、後期の竪穴住居2軒・土壙40基余りの検出へと続いた。特に、竪穴住居1は竪穴の周囲に段（柵）が巡る特異な形状を示すものであった。検出面から深さ約80cmを残し、柵の周囲に巡らされる周堤帯を想定すれば、当時の入り口から床面までの深さは1mを越えるものと想像される。これに類似する県下での検出例は百間川兼基遺跡竪穴住居4<sup>1)</sup>がある。中期の住居で平面隅丸方形を呈し規模は一辺約5.5m、遺構検出面から床面まで約50cmを測り、竪穴の周囲には幅50cm前後の平坦面（段）が巡る。周囲からも同時期の住居が数軒検出されているが、それらはいずれも検出面から床面までの深さは浅く、竪穴住居4の在り方が異常なようである。一方、当遺跡からの同時期住居の検出は見られなかったが、隣の窪木遺跡の例から見ればやはり異常に深く、出入りに危険を伴うと想像されるものの、柵を持つ住居は何らかの理由で床面を深く掘り込む必要があったものと理解せざるを得ない。いずれにせよ竪穴住居を考える上で貴重な検出例となった。

古墳時代になると東西に走る前期に埋没していく河道と、微高地および低位部からは中期から後期の竪穴住居5軒などが検出された。微高地上からは前期の遺構は全く検出されなかったものの、中期になると低位部にまで竪穴住居が建てられるとともに、狭い調査範囲にもかかわらず、後期には4軒の住居が検出されるなど、集落の広がりが明らかとなった。なお、竪穴住居6からは臼玉がまとまって出土しており、また、竪穴住居7で出土した土師器、特に甗は他の土器と比べ古色を帯びているようで、後述された窪木遺跡同時期の住居群との状況とも考えあわせれば、興味ある資料となろう。

古代の主な遺構としては河道2が挙げられる。幅約7m、深さ約1mを測る河道からは7～9世紀代の遺物が出土しており、特に最下層から出土した陶馬は7世紀後半～8世紀初頭の年代観をもつものであった。疫病封じ<sup>2)</sup>、あるいは雨乞いなどの祭祀に使用されたとする陶馬の出土は、律令体制形成期に都で新たに始まった祭祀を、この付近でいち早く行ったことを示している。また、下層から出土した平城京式瓦や備中式瓦にさほどの摩滅は認められないことから、同様の瓦が葺かれていた当河道の下流約200mに所在する栢寺廃寺<sup>3)</sup>からの、洪水などによる流入とは考えにくい。さらには、墨書土器・丹塗りの土師器・黒色土器の出土などからすれば、この付近に栢寺を氏寺とする古代加夜氏に関連する何らかの遺構の存在を想定するには十分な資料と思われる。残念ながら、今調査では微高地上からの当該期遺構の確認には至らず、わずかに中世土壙墓の棺台に利用された瓦数片が出土しただけであった。しかしながら、後述する「備中国賀陽郡服部郷図」検討での里名「古郡里」から、以前からこの一帯は賀夜郡衙の比定地にも挙げられている地域でもあり、未だその実態は明らかでは



第498図 古代三郡位置関係推定図

ないものの、加夜氏本貫の一角に迫ってきている事だけは確かなようである。

ちなみに当河道は東へ向き、長良山に当たり南下して前川に合流する。一方、南西方向に下り栢寺廃寺の西側を通過して国府川へ合流し、さらに前川に合流する。ここから前川を下り東進、南下すること10km余りで当時の津、現在の岡山市川入付近に達したと思われる。

中世に至ると掘立柱建物4棟をはじめ、墓、素掘溝などが検出された。この一帯は後節で検討を加える「賀陽郡服部郷図」が残されている一部になるが、建物・溝などの方向は古い条里とされる総社条里とほぼ同様の方向を向いている。なお、近世の掘立柱建物群はどちらかという新しいとされる北東条里に近い方向を示しており、今後とも広範な角度からの検討が必要となろう。(江見)

註

- (1) 「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』208 岡山県教育委員会 2007
- (2) 水野正好「馬・馬・馬—その語りの考古学」『文化財学報』第二集 奈良大学文学部文化財学科 1983
- (3) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会 1979

## 第2節 窪木遺跡の調査成果

今回調査した窪木遺跡は、130～140ラインまでの低位部を境とした、二つの微高地から成る。東および西の微高地上では一部重複しながら、または微妙に時期をずらしながら弥生時代中期から近世までの遺構・遺物を確認している。ここでは時代ごとに特筆すべき調査成果を列記し、総括としたい。

まず、弥生時代中期中葉を主体とする土壙を52基、西の微高地上で検出した。その中には長軸2mから8m程にもなる土壙が数基含まれ、これらは近隣の遺跡で検出されるいわゆる舟形土壙<sup>(1)</sup>と称されるものである。舟形土壙はその形状から呼称されている名称であり、墓の可能性もある例も存在するものの、その機能や用途とは全く関係がなく、今回検出した土壙の性格は、破損した土器などの不要物を投げ込んだ廃棄土壙の一種と思われる。他の土壙と共に、周辺遺跡ではさほど検出されていない当該期の土器が多く出土している点においても注目される。

弥生時代中期末から後期にかけては、その中心が東の微高地へと移動している。ここでは竪穴住居7軒、土器棺6基、土壙16基、土器溜まり4か所、窪地4か所を確認した。竪穴住居が立地する居住

域と、土器棺あるいは土器溜まりが分布する非居住域の区別が明瞭であり、興味深い。

古墳時代になると、その中心は再び西の微高地へと移動する。竪穴住居8と土壙80のみが前期に属する遺構であり、この時期の具体的な様相は明らかでない。中・後期になると遺構・遺物の数は徐々に増加し、周囲を取り囲む溝の存在から東西幅約150mの集落域を想定できる。この集落内からは竪穴住居26軒、掘立柱建物16棟等を確認し、その住居形態が7世紀を境に竪穴住居から掘立柱建物へと変化していることが判明した。なお、集落の変遷については第3節において詳述している。土器以外の特筆すべき遺物としては、竪穴住居11（TK23・47併行期）より出土したM3・4の鉄製ヤス、B1の鹿角製鉤状製品、竪穴住居32（MT15併行期）から出土した鉄製又鋏M8がある。どれも集落内出土遺物としては大変珍しいが、特にM8の又鋏は県内初の出土であり、全国的にも5例しか確認していない<sup>(2)</sup>。ソケット状の基部に、折り曲げて形成した3本の爪がつく。基部は爪部分との間を一部切り離して鍛造し、合わせ目が閉じないように円形に丸めて形成している。このように、当集落内では比較的古い住居から珍しい鉄製品が出土するにも関わらず、今回の調査区では、鉄生産および鉄器製作に関わるような遺構の存在、および鉄滓の出土が希薄であった。このような傾向は、6世紀後半から7世紀という当集落が最も隆盛を極めていた時期にも当てはまり、焼土面1・2や土壙81、低位部に位置する南溝手遺跡の土壙45・46など、鉄に関連しそうな遺構は数えるほどしかない。今回の調査では集落の北端部分しか明らかになっておらず、今後調査事例が増えるに従い鍛冶関連遺構が集中的に見つかる場所があるかもしれないが、今のところその様な状況を推測するのは難しく、小規模な鉄器生産（村方鍛冶<sup>(3)</sup>）の可能性を指摘するに留めておきたい。

古代の遺構は、東の微高地上で確認した。奈良時代の遺構は、掘立柱建物17のみの単発的な検出となっている。9世紀になると、掘立柱建物19・20など、比較的大型の掘立柱建物が確認できる。これらの建物と有機的な関係があると思われる土器溜まり5は、その出土する土器数の多さから、特に注目される遺構である。

中世に入ると、前段階までは低位部であった部分にも掘立柱建物が建つようになるが、全体的に遺構・遺物の密度は低い。調査区の西端から124ラインまでは14世紀代の遺構が多く、下がり1の東側低位部でのみ13世紀初頭まで遡る土壙を確認した。続く15世紀後半から16世紀にかけては、108・110Aで屋敷地の南西を画する溝12・13を検出しており、特に多くの獣骨が出土した溝12は注目される。

近世の遺構・遺物は、その大半が後半期以降に属する。大部分が水田として利用されているが、110～130付近では居住域を区画する溝あるいは掘立柱建物・柵列が検出され、その付近では10基余りの墓を確認した。（松尾）

#### 註

(1) 「高松田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 岡山県教育委員会 1997

「高松田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』162 岡山県教育委員会 2002

(2) 鉄製又鋏の出土例としては、紫金山古墳（大阪府茨木市 4世紀中頃）、池の内第2号古墳（広島県広島市 5世紀中葉）、出作遺跡（愛媛県松前町 5世紀後半）、西堂四反田1号墳（福岡県前原市 古墳時代中期）、六野原6号地下式横穴墓（宮崎県国富町 5世紀後半）がある。

(3) 古瀬清秀「鉄器の生産」『古墳時代の研究』第5巻 雄山閣 1991

花田勝広「吉備政権と鍛冶工房－古墳時代を中心に－」『考古学研究』第43巻1号 考古学研究会 1996

### 第3節 古墳時代後半期の集落について

#### 1 はじめに

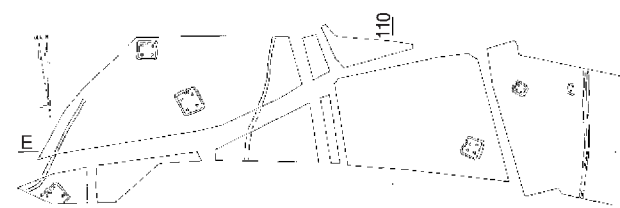
窪木遺跡の西端から東へ約150mの範囲において、竪穴住居26軒・掘立柱建物16棟を確認した。これらの遺構は、周囲を巡るように掘削された溝（溝6・溝8）を越えて展開することはなく、一定の期間まとまりある集団が日常生活を営んだ場所であると思われる。ここでは、発掘調査により知り得た情報を手がかりにして、主に集落の変遷をみていきたい。

#### 2 竪穴住居の変遷と特徴

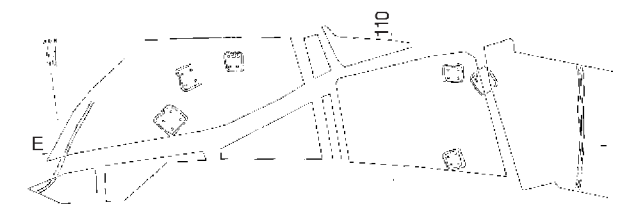
26軒ある竪穴住居の内、およそ、その時期を確認できた21軒について変遷を図示している（第499図）。Ⅰ期はT K 208からT K 47併行期、Ⅱ期はM T 15からT K 43併行期、Ⅲ期はT K 209からT K 217古段階併行期を示す。Ⅰ期からⅢ期それぞれの時間幅は50年以上にもなるので、厳密にはこれらすべての竪穴住居が同時併存していた訳ではないが、以下に概観してみたい。

Ⅰ期は竪穴住居10・11・16・30・33・34の6軒がある。竪穴住居16がT K 208併行期と思われる住居であり、この集落内では最も古い。溝7を挟んで西の3軒（10・11・16）と東の3軒（30・33・34）にグループ分けができそうである。この時期における竪穴住居の特徴は、①床面の標高が比較的低い。

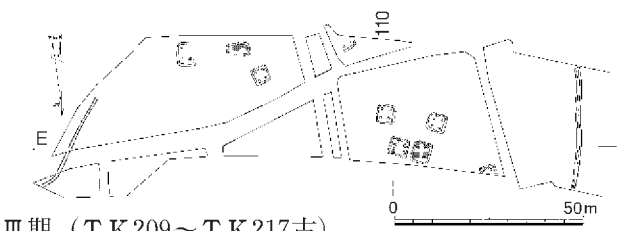
②住居を放棄する際に、カマドの支柱をそのままにしている場合が多い。すなわち支柱の発見率が高く、高杯を使用するもの（10・11・16・30）と自然石を使用するもの（33）とが混在している。③西のグループはすべて支柱に高杯を使用していた。④東のグループと西のグループとでは床面積が異なる。すなわち東のグループが20㎡以下である反面、西のグループは20㎡以上、中には30㎡を超えるものが存在する。



Ⅰ期（T K 208～T K 47）



Ⅱ期（～T K 43）



Ⅲ期（T K 209～T K 217古）

第499図 竪穴住居変遷図（1/2,000）

Ⅲ期は竪穴住居13・14・18・27・29・32の6軒がある。前時期の踏襲であるかのように同じく、中央の空間を挟んで西の3軒（13・14・18）と東の3軒（27・29・32）に分かれる。この時期の特徴は、①床面の標高がⅠ期に比べて高い。②住居を放棄する際にカマドの支柱を持ち去っているためか、竪穴住居32以外は支柱を確認できない。なお、竪穴住居32はこの時期の中で最も古いM T 15併行期の住居である。

Ⅲ期は竪穴住居の数が最も多く、12・17・19・22～25・28・31の9軒を数えるが、Ⅰ・Ⅱ期とは異なりその分布に規則性はない。なお、竪穴住居17・25の2棟のみTK217古段階併行期である。この時期の特徴は、①床面積が20㎡以下の住居が多いこと。②カマド内に支柱が残されている住居は皆無であること。③燃焼部の中央に残存する被熱痕跡が、壁体溝の延長線上に位置することである。

以上述べてきたⅠ期からⅢ期までの竪穴住居の分布および構造上の特徴については、時期ごとに幾つかの変化が看取できる。以下に列記しておきたい。

- 1 Ⅱ期までの竪穴住居の数に比べてⅢ期になるとその数は増加する。しかしその分布に規則性はなく、かつ床面積は縮小する傾向にある。
- 2 床面の標高が新しくなるにつれ高くなる。
- 3 古い段階にはカマドの燃焼部中央に支柱としての高杯、あるいは自然石を残したまま住居を放棄する傾向があるが、新しくなるにつれてそれらを抜き取るようになる。
- 4 カマドの燃焼部は時期が下るにつれ壁側へと移動している。すなわち古いものは袖部が長く、新しくなるほど短くなる傾向がある。

これらの事象は窪木遺跡のみの特徴的な出来事ではなく、岡山県南部地域における古墳時代後半期の竪穴住居に共通してみられる事象をいくつか含んでいると思われる。

### 3 掘立柱建物の変遷と特徴

掘立柱建物は16棟を確認している。竪穴住居とは異なり、その床面は地中に痕跡を残さず、柱穴より出土する土器の小片でさえも重複する竪穴住居からの混入と考えられるものがあるため、厳密に時期を決定することは困難である。こうした状況の中でも、発掘調査時に共通してみられた事象、あるいはその後の検討から推察されるいくつかの事柄がある。以下に記しておきたい。

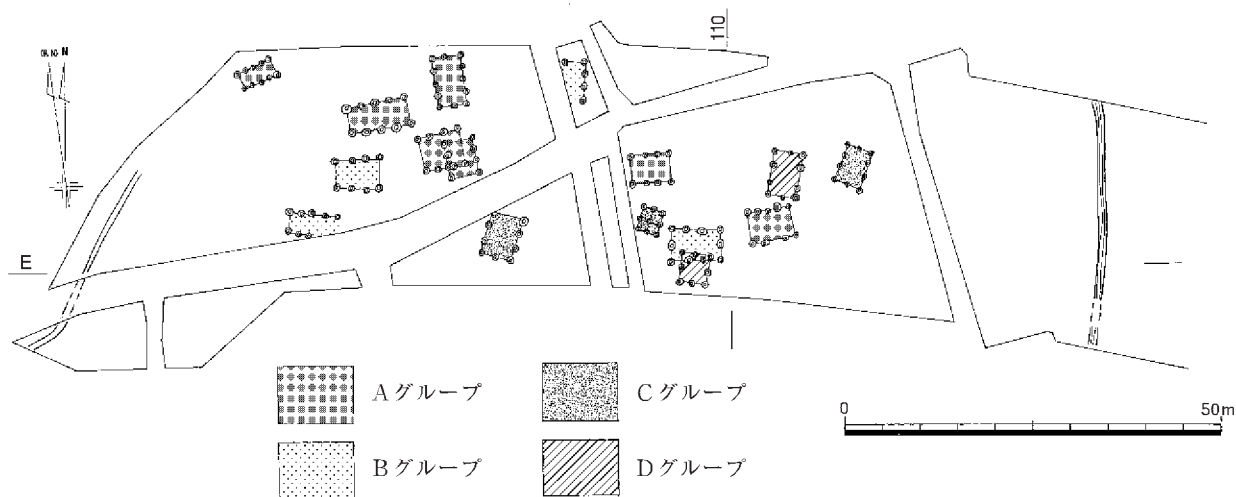
掘立柱建物の規模は、桁行の柱間×梁行の柱間で記述すると、2×2が2棟（内1棟は総柱建物）、3×1が4棟、3×2が4棟、4×1が4棟、4×2が1棟ある。この内、梁行が1間の建物は8棟を数え、その柱間距離は3.5m～4.6mを測る。この様な4m前後の柱間というのは若干広すぎる事と、「梁間1間の場合でも後世の削平を受けて本来は妻柱付きの平屋建物の例が多かったと思われる。」<sup>(1)</sup>という指摘等から、当初は真ん中にもう1本掘り方の浅い柱が存在した可能性を指摘できる。

柱の掘り方は不整形を呈するものが多く、古代の建物でよく見られるような規格性のある方形の掘り方とは若干異なる。しかし、柱自体の太さが直径15～20cmであるにも関わらず、その掘り方の直径は1m前後と大きい。この大きな掘り方が、建物自体の上屋構造と関連するのか、または他の要因に帰するのかは検討を要す。

次に、掘立柱建物の時期についてであるが、それを類推するいくつかの根拠を示し、その後に掘立柱建物の変遷について述べたい。

第一に「竪穴住居と重複して検出した掘立柱建物は住居よりも必ず新しい」と言える。竪穴住居と重複している掘立柱建物は、掘立柱建物1（竪穴住居11と重複）、掘立柱建物2（竪穴住居14と重複）、掘立柱建物3（竪穴住居16と重複）、掘立柱建物4（竪穴住居13・18と重複）、掘立柱建物5・6（竪穴住居19と重複）、掘立柱建物7（竪穴住居17と重複）の7棟が該当する。

第二に棟方向でグループ分けをおこなう（第500図）。Aグループは棟方向がN-80°～88°-EあるいはN-2°～4°-W、BグループはN-70°～90°-WあるいはN-7°-E、CグループはN-22°～27°-E、Dグル



第500図 掘立柱建物変遷図 (1/1,000)

ープはN-16°~18°-Eであり、4つのグループに分けることが可能である。最後に各グループ内の掘立柱建物と、時期の決まっている竪穴住居との重複関係等により各グループの時期を決めていくと、AグループはTK217古段階より新しい一群、BグループはTK209より新しい一群、C・Dグループは決め手に欠けるがAとBを繋ぐ時期の一群と考え、その変遷はB→(C・D)→Aとなる。このような掘立柱建物の変遷と前述した竪穴住居との関係は、Ⅲ期の中でも新しい竪穴住居17・25がBグループと時間的に重なってくる以外は、総じて掘立柱建物のほうが新しく、短期間のうちに頻繁に建て替えが行われていたと考えられる。

#### 4 おわりに

やや煩雑ではあるが、古墳時代後半期の集落を構成する竪穴住居および掘立柱建物について、その時間的な変遷を中心に述べてきた。その結果7世紀を境にして、集落内の建造物が竪穴住居から掘立柱建物へと変化していることが分かった。この掘立柱建物は床面積が20㎡前後、最大でも28㎡程であり、これはⅢ期に属する竪穴住居の床面積とほぼ同じである。これらの事から、多くの掘立柱建物は倉庫として機能していたというよりも、竪穴住居に代わり日常生活の場として利用されていたと考えるのが妥当である。

集落内の景観が掘立柱建物へと変化する7世紀は、近隣に白鳳寺院である栢寺廃寺が建立され、北の山麓に位置する古代山城鬼ノ城が築城されるというまさしく激動の時代と言える。一集落内の景観変化以上に、目まぐるしく変化する周囲の状況を窪木遺跡で生活する人々も目の当たりにしていたはずである。

(松尾)

#### 註

(1) 宮本長二郎「第5章 弥生・古墳時代の掘立柱建物」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996  
 ※遺構の年代観については、事実報告と若干の齟齬があるが、本節の文責は筆者の負うところである。

## 第4節 古代の瓦について

### 1 はじめに

今回のバイパス建設に伴う発掘調査では古代の瓦が多く出土している。この瓦群については刊行済みの報告書<sup>(1)</sup>において、栢寺廃寺<sup>(2)</sup>（以後は栢寺と記す）ないしはその壇越である加夜氏との関係が指摘されている。今回報告した南溝手遺跡においても同様に多くの瓦が出土した。そこで、これらの瓦を集計・分析しその結果を明らかにすることで、当地域における意義付けを行いたい。



第501図 遺跡周辺図 (1/5,000)

### 2 出土範囲 (第501図)

南溝手遺跡では、古代の瓦を多く出土する範囲が限定している。それは具体的にグリッド割の南北84ラインより西側の範囲であり、おおむね古代の遺構を確認している場所と同じである。この84ラインより東側では、古代の瓦が近世井戸の裏込めとして、あるいは中世墓の棺台として利用されたりと、本来の時期・役割とは異なる使用法をされているものが目立つ。また包含層からの出土も、84ラインより東側では明らかに新しい時期の瓦が多くなり、古代まで遡り得るものは少なくなる。

### 3 集計方法

古代の瓦を集計するにあたって、まず84ラインまでの範囲で抽出（遺構・包含層出土すべて）を行い、軒瓦はすべて実測し本書への掲載を行った。それ以外の瓦については、丸瓦・平瓦に大別し、丸瓦は行基式（半円筒の一方がすばまるもの）と玉縁式（葺き重ねるための段があるもの）に分類、平瓦は桶巻作りと一枚作りに分類している。その後、丸瓦・平瓦共に凸面調整をもとに細分類を行い、重量による比率を出した。なお、丸瓦は行基式か玉縁式か判断できないものは不明とし、丸瓦・平瓦共に分類できない破片は未分類として、それぞれ重量と比率を記している。



表5 南溝手遺跡出土古代瓦集計表

【丸瓦】	行基/玉縁	凸面	凹面	総重量(kg)	比率(%)	掲載番号
行基		縄タタキ(タテ)のちナデ	布	1.1	4.4	422
		ナデ	布	1	4	424・438
		ナデ	布・竹状模骨	0.5	2	421
玉縁		ナデ	布	0.7	2.8	
不明		ナデ	布	9.4	37.6	425
		正格子タタキのちナデ	布	3.1	12.4	423
未分類				9.2	36.8	
【平瓦】	一枚/桶	凸面	凹面	総重量(kg)	比率(%)	掲載番号
一枚		正格子タタキ(大)	布	0.8	0.7	446
		縄(タテ)タタキ	布	24	20.2	439・442
		縄(ナナメ)タタキ	布	10.6	8.9	426・440・441
		ナデ	布	26.5	22.3	
桶		斜格子タタキ	布	2	1.7	445
		正格子タタキのちナデ	布	6.2	5.2	444
		ナデ	布	22.5	19	443
未分類				26	22	

#### 4 出土傾向 (表5)

**丸瓦** 行基式と玉縁式に大別したところ、前者が10.4%、後者は2.8%であった。全体を伺い知るものが少ないので、どちらにも分類できないもの(50%)が多数を占める。凸面調整に視点を移してみると、行基式と玉縁式共に丁寧なナデ調整を行っているものが多い反面、行基式のみ縄タタキが観察できる。422にはその縄タタキが顕著に残っているが、この縄タタキは一枚作りの平瓦凸面に残された縄タタキ(426・439~442)とは異なり、縄目一本一本の幅が狭い。また、423に残されている正格子タタキは、417・418の軒平瓦あるいは444の平瓦凸面に残された正格子タタキと類似している。

その他特記すべきものとしては421がある。凸面は丁寧にナデているため、その前段階におけるタタキ調整等は観察できない。ここで注目すべきは、その凹面に残されたスタレ状の内型圧痕である(図版46)。通称「竹状模骨瓦」<sup>(3)</sup>と呼称されるものに類似しているが、残念なことに通常この種の瓦に残されるべき綴じ紐の痕跡が見あたらない。また、同種の丸瓦が他に出土していないことから、今回は資料提示のみに留めておく。

**平瓦** 一枚作りと粘土板桶巻作りに大別したところ、前者が52.1%、後者は25.9%であった。桶巻作りの内、凸面に正格子タタキを有する444は、前述のごとくヘラ描きの重弧文軒平瓦(417・418)のタタキと同一原体である可能性が高く、その胎土は白色である。この色調の胎土は432~434などの軒丸瓦とも一致する。一方、一枚作りの内、凸面に縄タタキを有するものが29.1%と多くを占める。この種の瓦は栢寺においてもかなりの割合を占めるようで、8世紀中葉以降の改築・修復に伴い使用されたと考えられている。

#### 5 軒瓦について

ここまでは、出土した丸瓦および平瓦の重量比率を示し、整理する過程において気づいたことを若干記した。次に軒丸瓦および軒平瓦について述べる。

軒丸瓦432~434は複弁八葉蓮華文で、栢寺第四類に属す。いわゆる備中式の範疇にはいる瓦で、胎土は白色、焼成は軟質。414・435~437は栢寺第五類、平城宮6225系で明瞭な範傷が観察できる。軒平瓦416~420はヘラ描きの重弧文で、二重弧文と三重弧文の二種がある。なお、栢寺第一・二類

と似てはいるが、今回出土したものには顎部あるいは顎面の斜格子タタキが見られない。374・415は均整唐草文の一部である。どちらも小片のため栢寺と対比することが難しい。なお、中世の棺台として利用されている均整唐草文の471(図版48)は、右側の約1/3程しか残っていないが、第2単位の第3支葉先端がこぶ状にふくらみをもつ点、あるいは外区右脇の2本の界線間に範傷があることから、備中国分寺・備中国分尼寺・笠岡市関戸廃寺例と同範である。なお、今までのところ栢寺ではこの型式の瓦は確認されていない。

## 6 おわりに

丸瓦・平瓦については特に凸面のタタキ調整を基に分類し、重量による比率を提示した。現在のところ、本来比較すべき栢寺における丸瓦・平瓦の実態がよく分からないので、この点については今後の課題となる。一方、軒瓦の多くが栢寺出土の諸型式と一致していることは、これらの瓦群が栢寺由来とする傍証になるだろう。

このような栢寺を中心とする古瓦の分布は、北溝手遺跡における河道2、南溝手遺跡における84ラインより西側の包含層中および河道2などを含む、栢寺を中心とする半径約300mの範囲内、あるいは栢寺の近隣を流れる河道から出土していることが分かる。(第501図) この2つの河道(北溝手遺跡の河道2と南溝手遺跡の河道2)は高梁川本流から分岐して東流し、今なお残る前川へと合流、その後足守川へと注ぐ古河川の支流である。反対に海側からの利便性を考えると、吉備の穴海と称される内海より内陸部へと入る際の格好の進入路となり得る。栢寺はこの様な一見河道に挟まれた不安定な場所に創建されたようにみえるものの、河川交通を考えるとその要衝に位置していると言えよう。また、この河道に挟まれた複数の微高地上には、窪木遺跡における5世紀後半から7世紀にかけての集落遺跡や、金井戸遺跡および北溝手遺跡における奈良時代から平安時代にかけての遺構群などが存在する。これらの遺跡から垣間見える、栢寺建立以前からその後につづく一連の事象は、この地を勢力基盤として活躍していた加夜(賀陽)氏の動向と重なる部分が多い。(松尾)

## 註

(1) 「総社遺跡 金井戸遺跡 北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会 2007

(2) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会 1979

葛原克人「栢寺廃寺」『総社市史 考古資料編』総社市 1987

なお、本文中の軒瓦分類は葛原 1987に準じる。

(3) 花谷浩「丸瓦作りの一工夫」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版 1995

亀田修一「韓半島から日本への瓦の伝播—竹状模骨瓦について—」『悠山姜仁求教授停年記念東北亞古文化論叢』韓國精神文化研究院 清溪史學會 2002

栢寺廃寺出土瓦を実見したところ、数点ではあるが凹面にスタレ状の圧痕をもつ丸瓦破片を見つけている。しかしながら小破片のため綴じ紐の痕跡は確認できなかった。胎土等から栢寺軒丸瓦第二類と組み合わせ可能性が高い。資料実見に際しては、総社市教育委員会村上幸雄・谷山雅彦の両氏にお世話になった。記して感謝の意を表します。

## 第5節 古代の土器について

### 1 はじめに

今回の発掘調査により、古代の土器を考える上で良好な資料が見つかっている。そこで、今回窪木遺跡・南溝手遺跡から出土した土器、および国道180号バイパス関連発掘調査で出土した土器を中心に考察する<sup>(1)</sup>。出土量の多い土師器の無高台の杯と皿を中心に検討し、土師器杯については高台のつかないものを杯A類、高台を有するものを杯B類、底部と体部の境に明瞭な段を有するものを杯C類とする。土師器皿も同様に高台のつかないものを皿A類、高台を有するものを皿B類とする<sup>(2)</sup>。

### 2 窪木遺跡出土の古代の土器

窪木遺跡土器溜まり5出土土器（第437～440図）の約8割を土師器が占めており、土師器碗・杯・皿・甕・盤がある。須恵器では杯・蓋が出土しており、蓋は完形ではないものの、つまみを持たない器形とみられる。黒色土器は高台付碗・無高台の碗・皿が出土している。

杯A類は口径11～15.4cm、器高2.3～4.4cmと幅がある。調整は口縁部にナデ、底部周縁をヘラ切りした後に中央部を指で押圧するもの（664・665など、「底部押圧技法」と呼ばれる<sup>(3)</sup>）が大半を占め、他に底部外面を指オサエ・ナデで調整するもの（676・679など）がある。色調は橙色系のものを中心とし、丹塗りの施された土器も出土している。胎土は精緻もしくは細砂を含むものが多い。

皿A類は口径13.2～16.2cm、器高1.2～2cm、口縁部にナデ、底部外面は指オサエ・ナデで調整するもの（731・739など）、底部周縁をヘラ切りした後に中央部を指で押圧するもの（734・735など）に分けられる。丹塗りの施された土器も出土しており、色調は橙色系が大半を占め、胎土は精緻もしくは細砂を含むものがある。

窪木遺跡土器溜まり6（第441図）からは須恵器蓋・高台付杯、土師器皿A類・杯A・B類、黒色土器碗が出土している。須恵器蓋は転用碗として使用されたものと思われ、つまみのない蓋である。土師器杯A類は口径12.6～15cm、器高2.6～2.8cm、口縁部ナデ、底部ヘラ切り、もしくはヘラ切り後にナデで調整している。皿A類は1点のみで、口径13.6cm、器高1.5cm、口縁部ナデ、底部ヘラ切り後にナデで調整している。杯・皿とも色調は橙色系、胎土は細砂を含むものが多い。

### 3 周辺遺跡出土土器との比較（第502・503図）

金井戸遺跡、北溝手遺跡、津寺遺跡等、窪木遺跡・南溝手遺跡周辺に位置する遺跡から出土した土器の口径と器高で比較した分布図が第502図である<sup>(4)</sup>。杯A類は口径14cm以上の大型、口径11.5～14cmの中型、口径11.5cm以下の小型に大別した。また、皿A類も口径15cm以上の大型、口径13～15cmの中型、口径13cm以下の小型に大別した。これらの杯・皿の構成より以下の4群に分類が可能である。

I群は杯の口径11.4～16.0cm、器高2.5～4.4cm、皿は口径13.2～17.8cm、器高1.2～2.4cmの一群で、大型の杯と中型の杯、大型の皿と中型の皿が出土する一群である。窪木遺跡土器溜まり5・6をはじめ、北溝手遺跡溝1、津寺遺跡野田上調査区6区土器溜まり、川入・中撫川遺跡法万寺区井戸6、吉野口遺跡P189が当てはまる。杯・皿とも調整は、口縁部にナデを施し、底部周縁をヘラ切りした後

に中央部をナデ・押圧するものが大半を占め、丹塗りの施された杯・皿も多い。色調は橙色系もしくは橙褐色系を中心とする。胎土は精緻なものが多く、微砂や細砂を含むものもある。

Ⅱ群は、杯の口径11.6～14.3cm、器高2.5～3.7cm、皿の口径13.1～14.6cm、器高1.2～2.1cm、中型の杯、中型の皿を中心に出土する一群である。大型の杯も出土しているが、Ⅰ群ほど大きな杯は出土しない。川入・中撫川遺跡大道西B区土器溜まり、中撫川遺跡たわみ4が当てはまる。杯・皿とも調整は、口縁部にナデ、底部周縁をヘラ切りした後に中央部をナデ・押圧するものが大半を占め、丹塗りの施されたものもある。色調は橙色系、胎土は微砂もしくは細砂を含む。

Ⅲ群は、杯の口径10.2～14.2cm、器高2.0～3.5cm、皿の口径11.8～14.5cm、器高1.1～1.9cm、小型の杯と中型の杯、小型の皿と中型の皿が出土する一群である。金井戸遺跡土壇9・溝1、北溝手遺跡土器溜まり2、南溝手遺跡（県報告書100）溝64、津寺遺跡丸田調査区土壇36・高田調査区土壇4が当てはまる。杯・皿とも調整は、口縁部にナデ、底部周縁をヘラ切りした後に中央部をナデ・押圧するものが大半を占め、丹塗りの施されたものもある。色調は橙色系を中心とし、胎土は細砂を含む。

Ⅳ群は、口径9.8～11.4cm、器高2.4～3cm、小型の杯A類と杯C類が出土する一群である。皿は出土しない。窪木遺跡（県報告書124）土壇195・196、津寺遺跡丸田調査区土壇37が当てはまる。調整は口縁部ナデ、底部はヘラ切りした後にナデ、押圧を施すが、押圧が不明瞭でナデのみのものもある。色調は橙色系、胎土は細砂を含むものがある。

次に器種構成とその時期について検討する<sup>(5)</sup>。

Ⅰ群には須恵器蓋・杯・高台付杯・椀、土師器蓋・杯A・B類・皿A・B類・椀、黒色土器の高台付皿・杯・椀が出土している。須恵器蓋はつまみを持たない蓋である。窪木遺跡土器溜まり5周辺より9世紀前半の緑釉陶器が出土したことと考え合わせ、9世紀前半にあたると思われる。

Ⅱ群には須恵器蓋・杯・椀、土師器杯A・B類・皿A・B類・椀、黒色土器高台付皿・椀がある。須恵器蓋はつまみを持たない蓋である。また、中撫川遺跡たわみ4から9世紀前半にかけての緑釉陶器が出土している。川入・中撫川遺跡大道西B区土器溜まり出土の緑釉陶器は9世紀中葉の時期に収まると考える。以上のことから、Ⅱ群は9世紀前葉から中葉にかけての時期に当てはまるであろう。

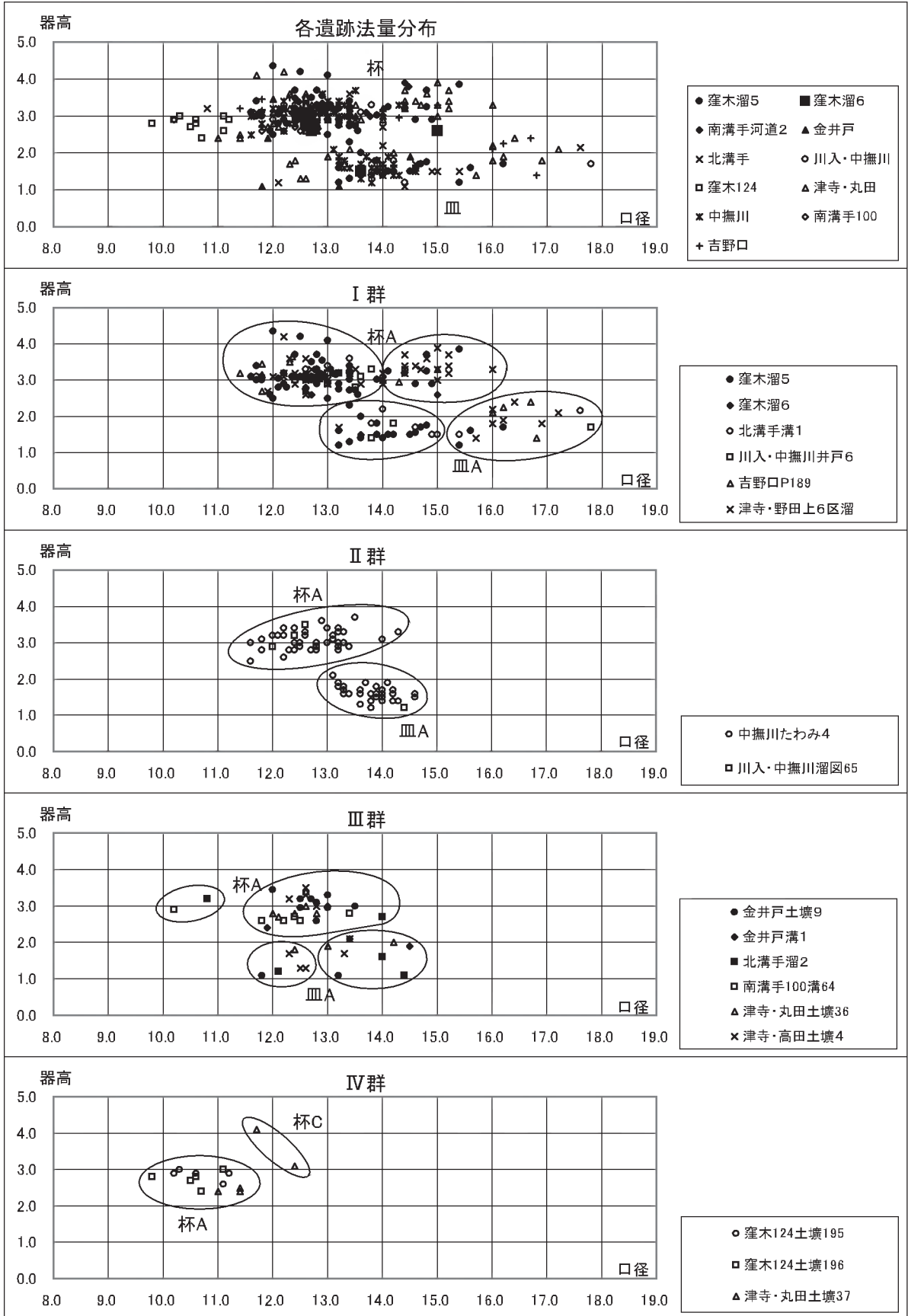
Ⅲ群には須恵器蓋・皿、土師器蓋・皿A類・杯A・B類・椀、黒色土器高台付皿・椀がある。北溝手遺跡土器溜まり2より、9世紀中葉から後葉にかけての緑釉陶器と9世紀後半の灰釉陶器が出土している。黒色土器の高台が長くなる椀など、新しい様相が見られることも考え合わせると、Ⅲ群は9世紀後葉から10世紀前葉の時期幅をもつ一群と思われる。

Ⅳ群には須恵器杯・椀、土師器杯A・B・C類・椀、黒色土器椀がある。土師器皿A類がなくなり、杯C類が出現する。資料が少なく、明確な時期は特定できないが、10世紀中葉から後葉と推察する。

#### 4 おわりに

以上、窪木遺跡周辺の9～10世紀の土師器杯・皿について概観した。Ⅰ群からⅣ群へという法量の変化から時期的変遷を追うことができ、杯・皿とも小型化することを確認した。さらに第502図より、各時期とも、大小2種類の杯・皿を使用していたと思われ、大型の土器から小型の土器への変化は単一の流れではないと考えられる。

なお、南溝手遺跡河道2（第103図）からも古代の土器が出土しているが、長期にわたって埋没したものと考えられるため今回の対象とはしなかった。最下層・下層からは8世紀の土器が、上層から



第502図 杯・皿法量分布図

	土師器					
	皿	杯A類	杯B類	椀	黒色土器	須恵器
I 群	1	6	8	10	12	16
	2	7	9	11	13	17
	3				14	18
	4				15	19
	5					20
II 群	25	28	30	32	33	34
	26	29	31			35
	27					36
						37
						38
III 群	40	44	46	48	49	52
	41	45	47		50	53
	42				51	54
	43					55
						56
IV 群		杯C類				
		57	60	62	63	65
		58	61		64	66
		59				67
						68

1・3・6・8・12・13・18：津寺遺跡野山上調査区6区土器溜まり

2・4・5・7・9～11・14～17・19・21～24：窪木遺跡土器溜まり5

20：窪木遺跡土器溜まり6

25～39：中撫川遺跡土器溜まり4

40・42・45・47：金井戸遺跡土壙9

41・43・44・46・49・50・52・55：北溝手遺跡土器溜まり2

48・54：津寺遺跡高田調査区土壙4

51・53：津寺遺跡丸田調査区土壙36

56：金井戸遺跡溝1

57・63：窪木遺跡（県報告書124）土壙195

58～62・64～68：津寺遺跡丸田調査区土壙37

第503図 土師器杯・皿分類図 (1/10)

は本稿のⅠ～Ⅲ群に当てはまる土器が出土しており、下限は10世紀前葉と思われる。

国道180号バイパスに関連して発掘調査を行った4遺跡のうち、窪木遺跡、南溝手遺跡では8世紀～9世紀を中心として、北溝手遺跡、金井戸遺跡では9世紀前半から10世紀前半と前述の2遺跡よりはやや遅れて古代の遺構が出現する。これは、東に位置する窪木遺跡・南溝手遺跡では早くから安定した微高地が形成されたことと、河道の氾濫等の影響により、北溝手遺跡、金井戸遺跡の位置する微高地形成の遅れが一因であると思われる。また、100点以上の土器が出土した窪木遺跡土器溜まり5は、須恵器杯、蓋、土器器碗・杯・皿、黒色土器碗・皿と多様ながら、供膳具に偏った出土状況を呈する。これは周囲にある一定の身分を有する人々が存在していたことを想像させるものであり、窪木遺跡と栢寺廃寺および官衙との関係を考える上でも重要な資料となるであろう。(畑地)

#### 註

- (1) 検討の対象とした遺跡は、今回報告する窪木遺跡・南溝手遺跡に加え、国道180号バイパス関連の発掘調査で既に報告を行っている金井戸遺跡・北溝手遺跡、および川入・中撫川遺跡、窪木遺跡(県報告書124)、津寺遺跡、中撫川遺跡、南溝手遺跡(県報告書100)、吉野口遺跡である。文献については図引用・参考文献参照。
- (2) 器種の分類・名称は先行研究を参考に設定した。  
平井泰男「古代の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会 1998  
武田恭彰「林崎遺跡出土の古代の土器について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 総社市教育委員会 1999
- (3) 武田恭彰「古代土器生産についての一考察」『古代吉備』第11集 1989
- (4) 第502図の法量については各報告書の出土土器観察表に基づいている。また、観察表のないものについては実測図より計測した。
- (5) 実年代については良好な出土資料が少なく、変動する可能性がある。今後の資料の増加に期待したい。

#### 図引用・参考文献

- 『吉野口遺跡－岡山市立鯉山小学校給食棟建築事業に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会 1997  
『川入・中撫川遺跡－吉備中枢区における港湾遺跡の発掘調査報告－』岡山市教育委員会 2006  
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1994  
「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995  
「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997  
「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会 1998  
「新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 岡山県教育委員会 2004  
「総社遺跡 金井戸遺跡 北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 国土交通省岡山国道事務所・岡山県教育委員会 2007

## 第6節 「備中国賀陽郡服部郷図」からみえてきたこと

### 1 はじめに

一般国道180号総社・一宮バイパスの予定地内は中世国衙領といわれている「備中国賀陽郡服部郷図」（以下、「服部郷図」と呼ぶ。）の範囲の一部を横断することとなり、発掘調査当初からその存在には注意を払いつつ実施してきた。しかしながら、生活と直結する農道や用水などの調査は実施が不可能で、十分な策が講じられないままに今調査を終えることとなった。

「服部郷図」についてはこれまでに幾人もの研究者によって現地比定され、また、300丁余りの方格に記載された田畠に対し、さまざまな検討が加えられてきた<sup>(1)</sup>。

そのような中で、近年岡山大学の新納泉・久野修義・今津勝紀氏は『「備中国賀陽郡服部郷図」の再検討』を著した<sup>(2)</sup>。デジタル技術を駆使し、「服部郷図」と詳細な地図情報との検討から、「服部郷図」の地域は西の総社側条里と、北東の足守方面まで広がる条里との、二つの条里体系が交錯する位置にあり……「服部郷図」は、北東の新しい条里を基準にして、その枠組みの中に（古い）総社側条里を組み込んでいくという形で作成されたもの」と考えられた。また、条丁に画された記載内容と現状の地図との整合性を図るためには、東に1区画あるいは2区画ずらさないと合わない箇所をいくつも発見されるとともに、これらの検討を加えた結果、「服部郷図」の西を限る南北線を御所遺跡<sup>(3)</sup>の「方形居館」を取り込んだ、さらに西側1区画に求めた。このほか著書では単なる現地比定に留まらず、当然のことながら、これまでの研究史から作成年代、面積記載の方法などの詳述の他、それにも増して、詳細な写真提供と条丁に対応させた記載一覧が掲載されており、これによって、ようやくにして遺跡との対応関係を具体的に追求することが可能となったこと、そのことが大きく評価されよう。以下、とりあえずこの成果に準じて、検討を加えてみたい。

### 2 条丁内の記載内訳

バイパスは「服部郷図」全体から見れば南西部を斜めに横断する位置にあり、第504図はその地形図に新納氏の示した総社条里を基軸とした方格を入れたものである。また、予定道路は表6のトーンのかかっている条丁にあたり、Naで表した各坪には田畠内訳を記載した<sup>(4)</sup>。たとえば382は田が2段20代、畠が8段15代、合計1丁35代のように作成した。一方、第504図には小さくて判りづらいが、その予定路線および成果を入れている。383には金井戸遺跡<sup>(5)</sup>の建物群が見える。392は南溝手遺跡の旧河道付近で、予定路線は393・237と南東に方向を変えながら窪木遺跡を縦断し、215の県大入り口の交差点までが今回の調査範囲であった。また、ドットで示した部分は旧河道を表している。なお、各条丁をさらに20分割し、便宜的に畠のみにトーンをかけた。ただし、一坪の合計が1丁を越える場合は田畠の比率を量り、その中に収めた。里境については方格の下から2列目までが宮妹と忌理、左端から6列目までが古郡里、その東が神前里となる。

今一度調査範囲に目をやれば、383は金井戸遺跡の調査地点で、南西に国府川の低位部が一部かかり、その東側には微高地が現れ、古代から中世にかけての建物群が検出された所である。図では三条二丁にあたり、田は1丁半を占めるが、畠はわずか15代であった。一方、大部分が国府川の河道にあ



表6 「服部郷図」記載の田畠内容一覧

No.	382	383	384	385	386	387	249	248	247	246	245	244
合計	1.0.35	1.0.40	1.3.30	1	0.4.25	1.1.25?	1.0.12.5	1.1.30	1.0.40	1.1.30?	1?	0.9.30
川	0.2.20	1.0.25	9	0.1.40	0.4.25	0.6.15	0.4.12.5	0.8	0.9	0.7	0.6	0.5.30
畠	0.8.15	0.0.15	0.4.30	0.9.10		0.4.45	0.6	0.3.3	0.1.40	0.4.35	0.3.30	0.4
No.	388	389	390	391	392	393	243	242	241	240	239	238
合計	0.7.40	1	1.4.5	(0.7.30)?	0.4.20	0.4	1.0.25	1	1	1	1	0.4.40
川			0.7.05	0.7.30		0.4	0.2.25					0.8
畠	0.7.40	1	0.7		0.1.20		0.8	1	1	1	0.2	0.1.25
No.	394	395	396	397	398	399	237	236	235	234	233	232
合計	0.1.20	1	1.0.40	1.0.30	0.8.15	0.7	1.0.10	1	1	1	8	
田			0.5		0.0.10						(0.5.20)?	
畠	0.1.20	1	0.5.40	1.0.30	0.8.5	0.7	1.0.10	1	1	1	0.2.30	
No.	400	401	402	403	404	405	231	230	229	228	227	226
合計		0.8.45	1.4.20	0.9	1	1.0.25?	1	1	0.7.20	1.0.30?	0.7.10	
田		0.2.30	0.5						0.2.30	0.8	0.7.10	
畠		0.6.15	0.9.20	0.9	1	0.9.45	1	1	0.4.40	0.2.40		
No.	406	407	408	409	410	411	225	224	223	222	221	220
合計		0.7.15	1	1?	1?	1	1?	1	1?	0.9	(0.6.0.5)	
川	0.0.35	0.0.45					1	(0.8.35)?	0.2.30	0.0.45		
畠		0.6.20	1	0.9.40	0.9	1		0.1.15	1	0.8.5		
No.	412	413	414	415	416	417	219	218	217	216	215	214
合計		0.6.45	1	1?	1	0.2		1?	1	1	0.9.40	1
川		0.0.20					0.4	0.1.45		0.0.30	0.4.15	0.2
畠		0.6.25	1	1.0.25	1	0.2?	0.1.17.5	0.3.20	0.2.10+	(0.9.20)?	0.5.25	0.8



第504図 バイパス周辺畠占地部分図

たる382（三条一丁）は8段余りが畠地となっており、これが東に1区画ずれたほうが地形図と整合するように思われる。このことは隣の北溝手遺跡<sup>(6)</sup>が所在する390の四条三丁においても、調査区から南へ延びる微高地（現集落部分）と、西側の389・395（四条二丁・五条二丁）2丁に広がる畠地の下は現状では国府川が流れており、これらにおいても1区画東にずれた方が図と整合する。さらにまた、調査区からははずれるが北側の385（三条四丁）においても東へ1区画ずれた方が、現在の深町の南北に延びる微高地と一致するようである。しかしながら、南溝手遺跡の西端にあたる392（四条五丁）では畠地4段余りの記載だけで残りがどうなっているかは分からないが、東の393（四条六丁）にお

いても田4段との記載があり、いずれも地形図とほぼ整合した状況を示していた。

一方、これより南東に所在する窪木遺跡の微高地との関係を見ると、229・228（一条四丁・一条三丁）には現状でも明瞭に微高地の下がりが見られるところで、田畠の多少の出入りはあるもののほぼ地形に沿った状況を示しているように思われた。また、調査区から北東に延びる一帯では、畠地と水田の記載内容と地形図との関係が想像以上に整合性のある状況を展開していることが判明した。ただし、神前里北西の242・243（三条五丁・三条六丁）付近は地形図から見れば水田記載が望ましいところではあるが、大半が南東から展開する畠地が延びているように記載されており、理解に苦しむ。

以上のことは「服部郷図」全体から見ても、北東部分の区画においては地形と記載内容が比較的整合性をもっているのに対し、南西部は記載内容と区画のずれが多く認められること、これは既に新納氏らの指摘によって明らかになっていることではあるが、改めて検証し得るとともに、バイパス周辺は総社側条里と北東側条里の接点であったことも併せて理解された。それでは「服部郷図」は二つの条里からのみ作成されたのか、次に、地形図からの検討を加えてみたい。

### 3 地形図から見る「服部郷図」比定地一帯の状況

第505図は「服部郷図」比定地一帯の地形図である。1/2,500の都市計画図を貼り合わせ1/20,000に縮小したため若干の歪みはでているが、北東側条里に合わせて平面直角座標から約28°振って作成した。南西部分には現国道180号が東西方向に走っており、その北側には旧国道180号が長良山の南裾部をわずかながら削平し走っている。この旧道が北東側条里に対し、約7°余りの偏りをもって形成される総社側条里と呼ばれる方格の東西ラインである。地図にはもう一つ、長良山から南東の前川の蛇行する付近にかけて、総社側条里より東西軸がさらに南東に振れる方格が見える。これは近年の圃場



第505図 「服部郷図」周辺地形図 (1/20,000)

整備によって改変されたもので、古代あるいは中世にまで遡る区画とは到底考えられないものであるが、図版133に示す航空写真からも明らかなように、長良山の南部分は何とか北東側条里にのせることは出来ても南西部は旧前川の氾濫源の状況が見られるだけで、写真を見る限り、このあたりまで条里が施工されたとは考えにくく、さらに、これと同様の状況は国道180号の北側にまでおよんでいることが判る。今一度第505図に戻ると、北西に見える丘陵の東端、西山の頂部には延喜式内社である古郡神社が所在している。その麓には古代、妹尾兼康が引いたとされる十二箇郷用水<sup>(7)</sup>の一部である階田用水が東流しており、これを「服部郷図」では大溝と呼んでいる。階田用水沿いの一帯はこれまで高速自動車道や県立大学の建設に伴う発掘調査<sup>(8)</sup>が実施され、弥生時代に遡る水田や、古墳時代～中世の水田、中世畠地などが検出されている。しかしながら地形図からも明らかなように、古墳時代以降には後背湿地化が始まり、この人工の用水路である大溝が開削されることによって再度「服部郷図」に描かれたような豊かな景観が展開されたのである。この湿地化の原因としては西山裾部に形成された自然堤防が挙げられる。高梁川から山裾を東流する旧河道の一つ、国府川は西山の麓で南東に方向を変え前川と合流する。また、その東にも同様の方向を示しながら鹿村川<sup>(9)</sup>が南流し、深町の集落がのる自然堤防を形成する。この自然堤防が北東部の湿地化を早めたのである。「服部郷図」に見られる条里施工時期は判然としないが、北東部においては大溝開削が耕地化に拍車をかけたことは容易に想像される。

一方、国府川および鹿村川によって形成された自然堤防はいくつにも分かれ、複雑な地形を示しており、国府川以西に明瞭に残された総社側条里は旧国道180号および県立大学南端の東西道路にわずかにその面影を残すのみで、仮にこの一帯に条里線を引くとしても非常に難しい作業となろう。もとより、国府川と鹿村川から形成された自然堤防上には条里は一部を除いてほとんど施工されなかったのではないだろうか。弥生時代以来、これら微高地を利用してきた人びとがいたことは前章の概要からも明らかであり、また、白鳳期創建とされる栢寺廢寺<sup>(10)</sup>の寺域はほぼ南北方向を示しているが、この一帯の微高地の向きがその方向を示す、というよりそういう場所を選地し建立した、と考えたほうが自然であろう。古代栢寺の寺域とは全く違う方向で、方格を施工することの出来ないほどに乱れた地形を見せる一帯を、中世「服部郷図」に取り込まざるを得なかったことのほうに、疑問が残る。

#### 4 「服部郷図」の現地比定

改めて「服部郷図」図版133を見ると、全体に整然と条里線が引かれ、北側には東西方向から南東方向へと流路を変える大溝（階田用水）が、その下方には北東から南西に延びる長良山が描かれている。南側には北西部から南東に向かう前川が、一度途切れながらもやや北東に向きを変え東流し、鉤形に屈曲を見せながらさらに東流する。航空写真と比べても極めて正確に地形を表現しており、どこから俯瞰すればこのように描けるのか、郷図作成に携わった人達の技術の高さに圧倒される。また、北側の大溝周辺の条丁には溝十あるいは溝廿などと大溝がかかったであろう記載がなされ、溝の記載から大溝の現地比定がほぼ正確に抽出し得、「服部郷図」北側ラインは無理なく航空写真上に引くことが出来るとともに、北西端の八妹里一条一丁を求めると現在の岡山自動車道にかかる所となった。

次に八妹里一条一丁の西端を起点として西端ラインを求めることとなるが、先述のとおり大半が自然堤防に遮られ、線引きに躊躇せざるを得ない状況である。そこで「服部郷図」の南西部分、前川の状況をよく見てみると、確かに一部は前川であるが、前川本流は郷図に図示された西端の升目下から

4つ目あたりで南西に屈曲していかねばならないがその部分は描かれず、さも前川が北西に延びるように描かれている。しかしながら長良山裾を東西に走る条里線から追えば、升目4～5つ目に描かれている川は既に国府川の一部に入っていることが理解できる。また、升目5～7に描かれている淡い線は、国府川に向かって下がる微高地の変換点が描かれていることが現地踏査で判明した。なお、国道180号付近の国府川は、古くは数十m東を南流する現用水部分の流れしており、このことから「服部郷図」南西端部に描かれた川は国府川の一部であることが判った。すなわち「服部郷図」に表現された西端ラインは国府川を跨いだ位置に引かれているのである。これからすれば、このあたりの西端は近年総社市教育委員会が実施している中世の御所遺跡調査で明らかにされた居館を囲む東端のラインが「服部郷図」の西端ラインにつながるものと思われる。そしてこの西端ラインをさらに南進すると上林に所在する、現在は石鳥居と小さな社からなる諏訪宮に突き当たった。地元では「お諏訪様」と呼ばれ現在も細々と護られている<sup>(11)</sup>が、18世紀に記された石井了軒の『備中集成志』<sup>(12)</sup>によれば「…大己貴尊ノ神社惣社宮成。弁林村諏訪明神ト奉申八田部村ノ東ニ在。…林ハ則二神之義、諏訪明神白井有。」とある。八田部村、現在の総社市街地から東にある諏訪明神は現在でこそわずかな境内の神社ではあるが、白井をも含めた一帯が江戸後期の境内とすればその隆盛が中世まで遡るかは判らないものの、上社・下社からなる諏訪様は開拓の神として祀られている神社が多いとされること、振り返って反対に西端ラインを北に望めば新山（経山）がひときわ高くそびえていることなど、偶然にしてはあまりに「郷図施工」の概念と一致しているようで、今後のさらなる検証が求められる。

なお、諏訪様周辺は鷲が森<sup>(13)</sup>とも呼ばれ、「板倉川」で源氏に敗れ、討死した妹尾兼康の首がさらされた所とされており、併せて興味深い。

東端のラインについては現地地形図と郷図との齟齬はほとんどなく、航空写真上に記入することが出来た。しかしながら南端のラインは、現状の地形図・航空写真のいずれを見ても引くことは不可能であった。「服部郷図」南西端を総社側条里から南方向に計算し、矩形に東に向かってラインを引けば、図には描かれていない西谷の丘陵にあたる。一方、南東端を北東条里から計算し、同じく矩形に西に向かってラインを引けば、同様にわずかではあるが丘陵にあたる。

大溝・長良山・前川と航空写真と比べても遜色のない「服部郷図」が、①何故南端のライン上に小丘陵を描かなかったのか。②鹿村川によって形成された微高地部分9丁に記載がないのは何故なのか。想像を逞しくすれば、①については現地に施工することは土木技術上極めて困難であった一帯で、強引に図面上にのみそれを記したのであり、②の部分についてはこの一帯から栢寺付近も①と同様の理由で、現実に一部の幹線道路を除いて図面に表現されるような条丁の方形区画を組むことは不可能な地域であった。しかしながら、なによりもこの郷図の意味するところは、まず、国衙領である「服部郷」の範囲を示すことであり、次に、その条丁ごとの整備された台帳を元に、税の徴収を図ることである。このことからすれば、鹿村川自然堤防上に展開された、服部郷図とは全く方向の違う田畠を強引に条丁に組み入れた結果、台帳記載に区画のずれが生じたのであろう。

新納氏らが示した現地比定は、台帳を前提とした結果、特に、東西方向のずれが著しく現れたことが服部郷の西を限るラインを国府川を越え、さらに西に設定したことにより、現状の地形図・航空写真の理解をも歪めたものにしてしまったような気がしてならない。なお、北西部の9丁に記載がないのは氾濫源や主要な宅地などの結果からではなく、極めて巧妙に作成された国衙領「服部郷図」の、南西に展開される矛盾した台帳の修正を図るために、作為的に欠落させたものと理解している。

## 5 「服部郷図」からみえてきたこと

南溝手・窪木遺跡の一带は古墳時代中期以来、大きく発展することが前章で明らかになってきた。中でも、窪木遺跡古墳時代集落から検出された7世紀全般の年代観をもつ掘立柱建物群の、その特異な形態をもつ類例は県下では今のところ知られていない。そして、つづく南溝手遺跡の古代河道からは7世紀末から8世紀初頭の年代観をもつ陶馬や栢寺廃寺と同様の瓦が出土したことは、今回の調査地点が加夜（賀夜）氏本貫の一端を明らかにした可能性を強く匂わせ、さらに中世「賀陽郡服部郷図」に示されたこの一带が「古郡里」と呼ばれたことは、郡（評）衙が営まれた地域であったからこそ、後の国衙領「服部郷」に引き継がれていったのではないかと理解している。

また、「服部郷図」には「古郡里」の南の里を「宮妖」と記載している。大字典によると「妖」は「セウセウト」とも読むとあり、「宮妖」は「ミヤセ」と読める。一方、風土記逸文に「備中の國の風土記の如くは、賀夜の郡。伊勢御神の社の東に河あり。宮瀬川と名づく。河の西は、吉備建日子命の宮なりき。此の三世の王の宮を造りし故に、仍りて宮瀬と名づく。」とある。現在、総社市福井にある神明神社が伊勢御神の社に比定されており、そこから東に宮瀬川があるとしている。神明神社から東に流れる川は国府川・鹿村川の二川が所在するが、「服部郷図」の里名に従えば国府川が宮瀬川と呼ばれていた可能性は極めて高いと考える。 (江見)

### 註

- (1) 永山卯三郎『岡山県農地史』1952  
高重進「第二節 平野部「遺制郷」における中世村落の実態」『古代・中世の耕地と集落』大明堂 1975  
中山薫「第三章 第二節 国衙領・荘園とその変遷 1 服部郷」『総社市史』通史編 1998  
前田徹「備中国賀夜郡服部郷の開発」『地方史研究二八一号』地方史研究会 1999
- (2) 新納泉・久野修義・今津勝紀『「備中国賀陽郡服部郷図」の再検討』2007
- (3) 「国府川改修工事に伴う発掘調査(1)」『総社市埋蔵文化財年報』15 総社市教育委員会 2006
- (4) 註2 文献の記載資料に準じ作成した。なお、Noは同文献の番号に対応する。
- (5) 「金井戸遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会 2007
- (6) 「北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会 2007
- (7) 藤井駿・加原耕作『備中漕井十二箇郷用水史』漕井十二箇郷組合 1976
- (8) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995をはじめ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107・120・121・124・162などがある。
- (9) 鹿村川については地元土木委員である秋山健次さんから御教示いただいた。氏からは発掘調査時においても何かと御尽力いただいた。記して感謝の意を表します。
- (10) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会 1979
- (11) 「お諏訪様」については氏子の芝崎進氏から御教示いただいた。記して感謝の意を表します。
- (12) 『備中集成志』吉備文化研究会 1943
- (13) 脱稿後、加原耕作氏からは鷺が森は岡山市板倉付近に所在するとの教示をはじめ、種々御指摘いただいた。記して感謝の意を表します。
- (14) 「風土記」『日本古典文学大系』2 岩波書店 1958

浅学と紙面の都合で十分に意を伝えられないままの結果となってしまった。拙い文章ではあるが、中世絵図と発掘調査との関連から検討開始が出来たのは、ひとえに新納泉氏が著した『「備中国賀陽郡服部郷図」の再検討』を見ることが出来たからであり、末筆ながら御礼申し上げます。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

南溝手遺跡  
窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査2  
(第1分冊)

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省岡山国道事務所  
岡山市富町2-19-12

岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 富士印刷株式会社  
岡山市桑野516-3

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

南溝手遺跡  
窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査2  
(第1分冊)

平成20年3月19日 印刷  
平成20年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県文化財保護協会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 富士印刷株式会社  
岡山市桑野516-3

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査  
2

(第2分冊)

2008

国土交通省岡山国道事務所  
岡山県教育委員会



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査  
2

(第2分冊)

2008

岡山県文化財保護協会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査  
2

(第2分冊)

2008

国土交通省岡山国道事務所  
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

# 南溝手遺跡 窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮  
バイパス建設に伴う発掘調査  
2

(第2分冊)

2008

岡山県文化財保護協会



## 第2分冊目次

遺構一覧表・遺物一覧表・窪木遺跡溝12出土哺乳類綱骨鑑定表・掲載遺構新旧名称対照表

写真図版

報告書抄録

### 遺構一覧表

表7	南溝手遺跡竪穴住居一覧	348	表17	窪木遺跡竪穴住居一覧	364
表8	南溝手遺跡掘立柱建物一覧	348	表18	窪木遺跡掘立柱建物一覧	364
表9	南溝手遺跡柱穴列一覧	348	表19	窪木遺跡柱穴列一覧	366
表10	南溝手遺跡土壙墓一覧	349	表20	窪木遺跡土壙墓一覧	366
表11	南溝手遺跡土壙一覧	350	表21	窪木遺跡土壙一覧	366
表12	南溝手遺跡溝一覧	351	表22	窪木遺跡溝一覧	368

### 遺物一覧表

表13	南溝手遺跡土器観察表	352	表23	窪木遺跡土器観察表	369
表14	南溝手遺跡石製品一覧	362	表24	窪木遺跡石製品一覧	384
表15	南溝手遺跡土製品一覧	362	表25	窪木遺跡土製品一覧	385
表16	南溝手遺跡金属器一覧	363	表26	窪木遺跡金属器一覧	386
表27	窪木遺跡溝12出土哺乳類綱骨鑑定表	387			
表28	掲載遺構新旧名称対照表	389			

### 写真図版

#### (南溝手遺跡)

図版1	1	南溝手遺跡上空より南東方向を望む(西上空から)
	2	南溝手遺跡遠景(東上空から)
図版2	1	竪穴住居1(南西から)
	2	竪穴住居1中央穴(東から)
	3	竪穴住居1(北から)
図版3	1	76・78E土壙群(西から)
	2	76・78E土壙群(東から)
	3	土壙1(北から)
図版4	1	土壙2(南から)

	2	土壙3(南から)
	3	土壙4・6・7(南から)
図版5	1	土壙4(南西から)
	2	土壙5(東から)
	3	土壙6(南から)
図版6	1	土壙8(南から)
	2	土壙9(南から)
	3	88E遺構検出状況(北東から)
図版7	1	土壙10(南西から)
	2	土壙11(南から)

	3	土壙12 (南東から)		2	井戸 1 (西から)
図版 8	1	土壙13 (南から)		3	土壙墓 1 (南から)
	2	土壙14 (南から)	図版25	1	土壙墓 2 (南から)
	3	土壙15 (南から)		2	土壙墓 3 (南から)
図版 9	1	土壙16 (南から)		3	土壙墓 4 (西から)
	2	土壙17 (西から)	図版26	1	土壙墓 5 (西から)
	3	土壙18 (東から)		2	土壙墓 6 (西から)
図版10	1	土壙22 (南東から)		3	土壙墓 7 (南東から)
	2	土壙23 (南から)	図版27	1	土壙墓 8 (南から)
	3	土壙24 (南から)		2	土壙墓 9 (南から)
図版11	1	土壙25 (西から)		3	土壙墓10 (南から)
	2	土壙26 (南から)	図版28	1	土壙墓13・14 (南から)
	3	土壙28 (南東から)		2	土壙墓13・14 (南から)
図版12	1	土壙30 (南東から)		3	土器棺 1 (北東から)
	2	土壙31 (南から)	図版29	1	土壙48 (南から)
	3	土壙32 (東から)		2	土壙49 (南から)
図版13	1	土壙33 (北西から)		3	土壙50 (南から)
	2	土壙35 (南から)	図版30	1	土壙51 (東から)
	3	土壙37 (南から)		2	土壙52 (東から)
図版14	1	土壙38 (西から)		3	土壙54 (西から)
	2	土壙39 (南から)	図版31	1	土壙55 (西から)
	3	土壙40 (南から)		2	土壙56 (南から)
図版15	1	土壙41 (南から)		3	土壙57 (西から)
	2	土壙42 (南西から)	図版32	1	土壙58 (南から)
	3	土壙43 (西から)		2	土壙62 (南から)
図版16	1	竪穴住居 3 (東から)		3	土壙63 (北西から)
	2	竪穴住居 4 (南西から)	図版33	1	溝18・19 (北西から)
	3	竪穴住居 5 (南から)		2	溝20 (北から)
図版17	1	竪穴住居 6 (東から)		3	素掘溝群 (東から)
	2	竪穴住居 6 カマド (南西から)	図版34	1	82・84 E G 近世建物群全景 (北西から)
	3	竪穴住居 7 (北から)		2	掘立柱建物10・11 (北東から)
図版18	1	土壙45 (南から)		3	掘立柱建物12 (西から)
	2	土壙46 (西から)	図版35	1	掘立柱建物12・溝32周辺 (北西から)
	3	溝 2 (西から)		2	掘立柱建物13 (南から)
図版19	1	溝 2 断面 (西から)		3	井戸 2 (南から)
	2	溝 2 断面 (南から)	図版36	1	土器棺 2 (南東から)
	3	土器溜まり 2 (西から)		2	土壙65 (西から)
図版20	1	土器溜まり 2 (南東から)		3	土壙70・71 (南から)
	2	土器溜まり 4 (西から)	図版37	1	土壙72 (北西から)
	3	土器溜まり 4 (北から)		2	土壙73 (東から)
図版21	1	河道 1 (北東から)		3	土壙74 (東から)
	2	河道 1 (東から)	図版38	1	土壙79 (南から)
	3	河道 2 (南東から)		2	溝32新段階 (北から)
図版22	1	河道 2 (北西から)		3	溝32古段階 (北から)
	2	河道 2 (南東から)	図版39	土器 (弥生土器)	
	3	河道 2 (北から)	図版40	土器 (弥生土器)	
図版23	1	河道 2 (北西から)	図版41	土器 (土師器・須恵器)	
	2	河道 2 瓦出土状況 (南から)	図版42	土器 (土師器)	
	3	河道 2 陶馬出土状況 (西から)	図版43	土器 (土師器)	
図版24	1	掘立柱建物 4 (東から)	図版44	土器 (土師器)	

- 図版45 土器（土師器・須恵器・黒色土器・瓦）  
 図版46 土器（土師器・須恵器・瓦）  
 図版47 土器（土師器・瓦）  
 図版48 土器（土師器・瓦）  
 図版49 土器（土師器・亀山焼・瓦質土器）  
 図版50 土器（土師器・亀山焼）・磁器（青磁）  
 図版51 土器（土師器・瓦質土器）・陶磁器  
 図版52 1 石製品  
 2 木製品  
 図版53 土製品  
 図版54 金属製品

**(窪木遺跡)**

- 図版55 1 窪木遺跡東端より北西方向を望む（東上空から）  
 2 窪木遺跡遠景（西上空から）  
 図版56 1 竪穴住居1（東から）  
 2 竪穴住居2（東から）  
 3 竪穴住居3・5（東から）  
 図版57 1 竪穴住居3（北東から）  
 2 竪穴住居3（北東から）  
 3 竪穴住居3断面（東から）  
 図版58 1 竪穴住居4・6・7周辺（東から）  
 2 竪穴住居4（北から）  
 図版59 1 竪穴住居4中央穴（南東から）  
 2 竪穴住居5（北から）  
 3 竪穴住居5（南東から）  
 図版60 1 竪穴住居6・7（西から）  
 2 竪穴住居6 P5（東から）  
 3 対策委員会 H17.11.18  
 図版61 1 土器棺1（南から）  
 2 土器棺2（東から）  
 3 土器棺3（南西から）  
 図版62 1 土器棺4（南から）  
 2 土器棺5（西から）  
 3 土壇1（南西から）  
 図版63 1 土壇2（南から）  
 2 土壇3（南東から）  
 3 土壇4（南から）  
 図版64 1 土壇7（西から）  
 2 土壇8（南から）  
 3 土壇9（南から）  
 図版65 1 土壇10（東から）  
 2 土壇12（南から）  
 3 土壇13（南から）  
 図版66 1 土壇14～18（東から）  
 2 土壇14・15（南から）  
 3 土壇16～18（北から）  
 図版67 1 土壇19（北東から）  
 2 土壇24（南から）  
 3 土壇25（東から）  
 図版68 1 土壇26（南から）  
 2 土壇27（北から）  
 3 土壇28（西から）  
 図版69 1 土壇31（北東から）  
 2 土壇31④（西から）  
 3 土壇31①（北から）  
 図版70 1 土壇32（西から）  
 2 土壇33（北から）  
 3 土壇34（南から）  
 図版71 1 土壇35（西から）  
 2 土壇36（南から）  
 3 土壇39（北から）  
 図版72 1 土壇40（東から）  
 2 土壇42（南から）  
 3 土壇44（東から）  
 図版73 1 土壇45（南から）  
 2 土壇46（南から）  
 3 土壇47（北から）  
 図版74 1 土壇48（南から）  
 2 土壇49（北西から）  
 3 土壇50（北から）  
 図版75 1 土壇51（北東から）  
 2 土壇52（東から）  
 3 土壇53（西から）  
 図版76 1 土壇54（東から）  
 2 土壇55（西から）  
 3 土壇57（北から）  
 図版77 1 土壇58（北から）  
 2 土壇59（南から）  
 3 土壇60（北東から）  
 図版78 1 土壇60完掘状況（西から）  
 2 土壇61・窪地4周辺（北西から）  
 3 土壇61（北西から）  
 図版79 1 土壇62（北から）  
 2 土壇65（北から）  
 3 土壇70（東から）  
 図版80 1 土壇72（南東から）  
 2 土壇72（南から）  
 3 土壇73（南から）  
 図版81 1 土壇74（北から）  
 2 土壇75（南から）  
 3 土壇76（北から）  
 図版82 1 土壇77（北から）  
 2 土壇78（北西から）  
 3 土壇78（西から）  
 図版83 1 窪地1（南東から）  
 2 窪地4（北西から）

- 3 窪地5 (北から)
- 図版84 1 土器溜まり1 (北から)  
2 土器溜まり1 (北から)  
3 土器溜まり1 (西から)
- 図版85 1 土器溜まり2 (南東から)  
2 土器溜まり3 (西から)  
3 土器溜まり4 (北から)
- 図版86 1 竪穴住居8 (東から)  
2 竪穴住居11 (南から)  
3 竪穴住居11 (南から)
- 図版87 1 竪穴住居12 (南から)  
2 竪穴住居13 (西から)  
3 竪穴住居13 (北から)
- 図版88 1 竪穴住居15 (北から)  
2 竪穴住居16 (南から)  
3 竪穴住居16 (南東から)
- 図版89 1 竪穴住居16カマド出土土器 (西から)  
2 竪穴住居16カマド (南から)  
3 106C竪穴住居17周辺 (西から)
- 図版90 1 竪穴住居17 (南から)  
2 竪穴住居18 (南から)  
3 竪穴住居19 (南から)
- 図版91 1 竪穴住居22 (南から)  
2 竪穴住居23 (東から)  
3 竪穴住居24 (西から)
- 図版92 1 竪穴住居25 (北から)  
2 竪穴住居26 (南西から)  
3 竪穴住居27 (南から)
- 図版93 1 竪穴住居28 (南から)  
2 竪穴住居29 (北から)  
3 竪穴住居30 (東から)
- 図版94 1 竪穴住居30カマド (南東から)  
2 竪穴住居31 (北から)  
3 竪穴住居32 (北西から)
- 図版95 1 竪穴住居33 (南東から)  
2 竪穴住居33 (南東から)  
3 竪穴住居33カマド (南東から)
- 図版96 1 竪穴住居34 (西から)  
2 竪穴住居35 (南から)  
3 竪穴住居35カマド (南から)
- 図版97 1 掘立柱建物1 (北から)  
2 掘立柱建物2・3 (西から)  
3 掘立柱建物2 (北から)
- 図版98 1 掘立柱建物2 (西から)  
2 掘立柱建物3 (西から)  
3 140C掘立柱建物10周辺 (北から)
- 図版99 1 掘立柱建物10 (南から)  
2 掘立柱建物11 (南東から)  
3 掘立柱建物12・13 (北から)
- 図版100 1 掘立柱建物14 (西から)  
2 掘立柱建物15 (北から)  
3 掘立柱建物16 (西から)
- 図版101 1 土壇80 (西から)  
2 溝8 (南から)  
3 溝8断面 (南から)
- 図版102 1 埋置土器1 (北西から)  
2 掘立柱建物17 (北から)  
3 溝9およびその周辺 (南東から)
- 図版103 1 埋置土器2 (649) (南から)  
2 埋置土器2 (648) (南から)  
3 土器溜まり5 (西から)
- 図版104 1 掘立柱建物21 (東から)  
2 掘立柱建物22・23 (南から)  
3 掘立柱建物24 (南から)
- 図版105 1 土壇墓4 (西から)  
2 土壇123およびその周辺 (北東から)  
3 溝12・13 (西から)
- 図版106 1 溝12断面 (南から)  
2 溝13断面 (西から)  
3 溝16 (北西から)
- 図版107 土器 (弥生土器)
- 図版108 土器 (弥生土器)
- 図版109 土器 (弥生土器)
- 図版110 土器 (弥生土器)
- 図版111 土器 (弥生土器)
- 図版112 土器 (弥生土器)
- 図版113 土器 (弥生土器)
- 図版114 土器 (土師器・須恵器)
- 図版115 土器 (土師器・須恵器)
- 図版116 土器 (土師器・須恵器)
- 図版117 土器 (土師器・須恵器)
- 図版118 土器 (土師器・須恵器・埴輪)
- 図版119 土器 (土師器)
- 図版120 土器 (土師器)
- 図版121 土器 (土師器・須恵器・黒色土器)
- 図版122 土器 (土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦)
- 図版123 土器 (土師器・瓦)
- 図版124 土器 (土師器・瓦質土器・瓦)
- 図版125 石製品
- 図版126 石製品
- 図版127 石製品
- 図版128 1 石製品  
2 骨製品
- 図版129 土製品
- 図版130 1 土製品  
2 金属製品
- 図版131 金属製品
- 図版132 溝12出土動物遺存体
- 図版133 1 備中国賀陽郡服部郷図 (岡山県立図書館蔵)  
2 「服部郷図」周辺航空写真



## 遺構一覽表凡例

- ・(数値)は、残存最大値を表す。
- ・空欄と記入漏れを区別するために、備考以外の項目については-を記入した。

### 竪穴住居

- ・床面積は、壁体溝の下場(外側)で囲まれた床面積を示した。
- ・標高は、床面中央付近の海拔高を示した。
- ・支柱のB/Aは、住居本来の柱の数をA、その内で確認された本数をBとして表した。

### 掘立柱建物

- ・桁行と梁行は、両端の柱穴での直線距離を測り、その最大値～最小値を示した。ただし、柱痕のある場合は、その中点を結んだ距離とした。柱間距離もこれに準ずる。
- ・面積は、建坪の面積で示した。

### 土壌

- ・断面形は、壁の立ち上がり形態と床面形態の組み合わせをもとに記号で示す。  
立ち上がり形態 I：壁が上方に向かって狭くなる傾向のあるもの(袋状)  
II：垂直に近いもの(筒状)  
III：上方に向かって広くなる傾向のもの(逆台形)
- 床面 a：平坦なもの                                b：比較的中央がくぼむもの  
c：比較的中央が高くなるもの                d：明確な溝が巡るもの  
e：凹凸の著しいもの    とする。
- ・床面標高は、最深部の海拔高で示した。

## 遺物観察表凡例

- ・(数値)は、残存最大値を表す。
- ・土器の口径の(数値)は、その残存率が1/6以下であることを示す。
- ・色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を使用した。

表7 南溝手遺跡竪穴住居一覽

遺構名	地区	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主軸	床面積 (㎡)	標高 (cm)	柱穴	柱間距離 (cm)	中央穴			方形上壁	
					N-°-E・W					形状	長×短	深さ	長×短	深さ
竪穴住居 1	90E	不整形	640	620	N-10°-W	15.5	720	4	267~230	隅丸方形	67×67	52	-	-
竪穴住居 2	90E	方形	-	-	-	-	783	?	-	-	-	-	-	-
竪穴住居 3	86E	隅丸方形?	-	-	-	-	836	1/4?	-	-	-	-	-	-
竪穴住居 4	88E	隅丸方形	-	-	N-55°-W	-	827	2/4	207	-	-	-	-	-
竪穴住居 5	88E	不整形	500	400	N-50°-E	20.0	832	?	-	-	-	-	-	-
竪穴住居 6	88E	方形?	-	-	N-17°-W	-	822	2/4?	214	-	-	-	-	-
竪穴住居 7	96E	不整形	(450)	350	N-30°-W	-	770	?	-	-	-	-	-	-

表8 南溝手遺跡掘立柱建物一覽

遺構名	地区	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	時代	備考
			桁	梁				N-°-E・W		
掘立柱建物 1	94~6C	1×1	388~375	260~245	388	260	9.6	N-18°-W	中世	
掘立柱建物 2	94~6C	2×1	265~255	360~350	540	360	28.4	N-75°-E	中世	南面庇
掘立柱建物 3	96C~E	3×1	245~221	330~312	711	330	22.7	N-75°-E	中世	
掘立柱建物 4	98C~E	3×2	293~246	192~166	792	367	28.1	N-16°-W	中世	
掘立柱建物 5	82~4C~G	(2×1)	(246~140)	(419)	-	(419)	-	N-55°-E	近世	
掘立柱建物 6	82E	2×2	259~203	180~130	462	310	14.3	N-50°-E	近世	
掘立柱建物 7	84E	2×1	204~186	320	390	320	12.5	N-30°-W	近世	
掘立柱建物 8	84E	4×3	270~150	246~157	720	610	43.9	N-36°-W	近世	
掘立柱建物 9	84E~G	3×2	329~160	280~250	500	530	26.4	N-33°-W	近世	
掘立柱建物 10	84E	4×1	242~159	580~569	836	580	47.4	N-32°-W	近世	
掘立柱建物 11	82~4E	3×1	237~190	381~380	651	381	25.0	N-60°-E	近世	
掘立柱建物 12	88E	3×1	224~192	230~216	612	230	13.5	N-80°-E	近世	
掘立柱建物 13	90E	2×2	220~206	312~127	432	312	13.4	N-71°-E	近世	
掘立柱建物 14	90~2E	(4×2)	232~192	305~302	823	305	25.2	N-75°-E	近世	
掘立柱建物 15	90~2E	4×3	331~144	190~139	725	504	36.3	N-19°-W	近世	
掘立柱建物 16	90E	-	306~206	220~206	-	-	-	N-69°-E	近世	
掘立柱建物 17	88~90E	4×1	250~204	401~388	888	401	35.4	N-73°-E	近世	

表9 南溝手遺跡柱穴列一覽

遺構名	地区	規模	全長 (cm)	柱間距離 (cm)	方向	掘り方	時代	備考
					N-°-E・W			
柱穴列 1	82E	3間	573	192~189	N-54°-E	円形	近世	
柱穴列 2	84E	4間	1,399	400~305	N-36°-W	円形	近世	
柱穴列 3	84E	5間	918	215~170	N-37°-W	円形	近世	

焼土面	壁体溝	高床部	カマド		時代	備考
			有無	位置		
有	有	-			弥生後期	住居周囲に柵状の段巡る。鉄製品出土。床面中央から小魚・モグラ・カエルの骨片出土。
-	有	-	-	-	弥生後期	
-	有	-	-	-	古墳後期	
有	有	無	無?	-	古墳後期	
無	有	無	無	-	古墳後期	
有	有	-	有	北辺中央	古墳後期	滑石製白玉24個出土
有	無	-	-	-	古墳後期	

表10 南溝手遺跡土墳墓一覧

遺構名	地区	平面形	掘り方上面 (cm)		掘り方底面 (cm)		深さ (cm)	主軸 N-°-E・W	時代	備考
			長さ	幅	長さ	幅				
土墳墓1	88E	長楕円形	256	71	233	41	12	N-70°-E	中世	棺台に平瓦再利用
土墳墓2	90E	長方形	158	68	150	62	12	N-64°-E	中世	土製脚出土
土墳墓3	88E	不整楕円形	61	48	52	35	18	N-88°-W	中世	
土墳墓4	90E	不整楕円形	125	92	109	76	5	N-9°-E	中世	
土墳墓5	90E	長方形	162	68	157	65	10	N-7°-W	中世	
土墳墓6	90E	隅丸長方形	136	78	124	47	18	N-25°-W	中世	棺台に軒平瓦再利用
土墳墓7	88E	長楕円形	272	73	226	51	45	N-12°-W	中世	
土墳墓8	90E	不整長方形	168	-	119	62	32	N-69°-E	中世	
土墳墓9	92E	楕円+長方形	(161)	(62)	(149)	(59)	19	N-71°-E	中世	
土墳墓10	92E	長方形	185	68	135	(50)	21	N-76°-E	中世	
土墳墓11	92C	楕円形	106	71	78	47	15	N-23°-W	中世	
土墳墓12	94C	楕円形	93	62	78	40	10	N-12°-W	中世	
土墳墓13	94E	隅丸方形	130	108	113	93	20	N-27°-W	中世	右側に短刀副葬
土墳墓14	94E	長方形	120	65	109	45	15	N-25°-W	中世	

表11-1 南溝手遺跡土壌一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時代	備考
				長軸	短軸	深さ			
土壌1	76E	円形	Ⅱ a	119	118	45	751	弥生中期	袋状土壌
土壌2	76E	円形	Ⅱ a	118	111	42	776	弥生中期	袋状土壌
土壌3	76E	円形	Ⅲ a	105	91	20	786	弥生後期	
土壌4	76E	隅丸方形	Ⅲ a	173	137	30	790	弥生中期	
土壌5	78E	隅丸方形	Ⅲ b	142	112	9	797	弥生中期	
土壌6	76F	不整長方形?	Ⅲ a	-	(80)	18	803	弥生	
土壌7	78E	不整楕円形	Ⅲ a	113	(60)	13	806	弥生	
土壌8	78E	不整円形	Ⅲ b	81	79	33	772	弥生中期	
土壌9	78F	円形	Ⅰ a	126	126	41	764	弥生中期	袋状土壌
土壌10	88E	楕円形	Ⅲ a	96	56	21	790	弥生後期	
土壌11	88E	円形	Ⅲ b	60	60	8	768	弥生後期	
土壌12	86F	隅丸方形	Ⅲ b	102	97	28	795	弥生後期	
土壌13	88E	楕円形	Ⅲ a	84	60	9	806	弥生後期	鉄製鋤先出土
土壌14	88E	隅丸長方形	Ⅱ a	105	30	13	801	弥生後期	
土壌15	86E	円形	Ⅱ a	69	68	47	768	弥生後期	
土壌16	86E	楕円形	Ⅲ a	163	97	27	804	弥生後期	
土壌17	88E	不整円形	Ⅲ b	100	96	61	748	弥生後期	
土壌18	88E	不整楕円形	Ⅲ b	111	79	53	755	弥生後期	
土壌19	88E	不整方形	Ⅱ a	95	80	40	769	弥生後期	
土壌20	88E	円形	Ⅲ b	92	87	26	764	弥生後期	
土壌21	88E	不整円形	Ⅱ a	74	72	47	757	弥生後期	
土壌22	88E	円形	Ⅲ a	88	70	40	748	弥生後期	
土壌23	88E	楕円形	Ⅲ a	94	67	20	771	弥生後期	
土壌24	90E	不整楕円形	Ⅱ a	(90)	77	40	746	弥生後期	
土壌25	88E	円形	Ⅲ a	92	89	40	749	弥生後期	
土壌26	88F	不整円形	Ⅱ a	79	77	42	748	弥生後期	
土壌27	90E	不整楕円形	Ⅲ b	114	80	20	768	弥生後期	
土壌28	90E	不整楕円形	Ⅲ a	97	65	45	757	弥生後期	
土壌29	90F	不整円形	Ⅲ a	77	73	23	777	弥生後期	
土壌30	88E	不整円形	Ⅲ a	95	87	20	773	弥生後期	
土壌31	88E	不整楕円形	Ⅲ b	168	135	63	744	弥生後期	
土壌32	90F	円形	Ⅲ a	86	81	38	752	弥生後期	
土壌33	90E	不整円形	Ⅲ a	64	54	26	765	弥生後期	
土壌34	90E	円形	Ⅲ a	113	110	44	747	弥生後期	
土壌35	88E	楕円形	Ⅲ a	(120)	85	28	761	弥生後期	
土壌36	90E	楕円形	Ⅲ a	87	71	40	748	弥生後期	鉄製鋤出土
土壌37	90E	不整楕円形	Ⅲ a	(133)	89	28	766	弥生後期	
土壌38	92E	不整円形	Ⅲ a	133	119	30	758	弥生後期	
土壌39	90E	不整円形	Ⅲ b	129	122	17	773	弥生後期	
土壌40	90E	楕円形	Ⅲ a	(113)	(86)	32	759	弥生後期	
土壌41	90E	楕円形	Ⅲ a	(123)	103	52	740	弥生後期	施出土
土壌42	92E	楕円形	Ⅲ a	165	90	29	760	弥生後期	
土壌43	90F	不整楕円形	Ⅲ a	105	76	50	739	弥生後期	
土壌44	90E	円形	Ⅲ a	94	91	50	739	弥生後期	
土壌45	100C	不整方形	Ⅱ a	94	82	15	790	古墳後期	焼成土壌
土壌46	100C	長方形	Ⅲ a	89	56	6	790	古墳後期	焼成土壌
土壌47	80I	円形?	Ⅲ a	(288)	-	72	722	中世	
土壌48	90E	不整長楕円形	Ⅱ a	260	87	44	791	中世	2個の土壌からなる
土壌49	92F	円形	Ⅱ a	59	58	36	796	中世	
土壌50	90C	楕円形	Ⅲ a	132	87	31	805	中世	
土壌51	90E	楕円形	Ⅲ a	126	65	34	801	中世	
土壌52	92F	楕円形	Ⅲ b	(323)	140	32	769	中世	2個の土壌からなる
土壌53	92E	楕円形	Ⅲ a	140	72	8	825	中世	
土壌54	90E	楕円形	Ⅲ a	113	82	10	823	中世	
土壌55	92E	不整隅丸方形	Ⅲ a	194	-	26	806	中世	
土壌56	90E	楕円形	Ⅲ a	158	98	78	755	中世	
土壌57	90C	方形	Ⅲ a	275	250	28	810	中世	
土壌58	90E	長方形	Ⅲ a	400	260	35	800	中世	
土壌59	94C	不整楕円形	Ⅲ a	240	150	30	787	中世	
土壌60	96E	楕円形	Ⅲ a	(98)	72	22	817	中世	

表11-2 南溝手遺跡土壌一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時代	備考
				長軸	短軸	深さ			
土壌61	94C	長方形	Ⅲ a	132	98	45	770	中世	
土壌62	100C	円形	Ⅲ a	220	207	69	733	古代~中世	
土壌63	102A	楕円形	Ⅲ a	275	153	52	742	中世	
土壌64	82G	円形	Ⅲ b	69	65	22	798	近世	
土壌65	84E	不整形円形	Ⅲ c	96	73	43	787	近世	
土壌66	84E	楕円形	Ⅲ b	85	67	20	810	近世	
土壌67	84E	楕円形	Ⅲ b	87	71	23	807	近世	
土壌68	84E	円形	Ⅲ b	71	(66)	14	816	近世	
土壌69	84E	不整形円形	Ⅲ a	82	80	34	795	近世	
土壌70	84F	円形	Ⅲ a	112	(85)	32	798	近世	
土壌71	84E	楕円形	Ⅱ + Ⅲ a	(126)	123	43	786	近世	
土壌72	84E	隅丸方形	Ⅱ a	136	126	50	790	近世	
土壌73	86F	方形	Ⅲ a	89	(75)	39	791	近世	
土壌74	84E	不整形円形	Ⅲ b	103	88	32	784	近世	
土壌75	84G	長楕円形	Ⅲ a	218	96	19	812	近世	
土壌76	84F	不整形長方形	Ⅲ b	270	103	34	787	近世	
土壌77	86G	楕円形	Ⅲ a	122	81	5	826	近世	
土壌78	90E	不整形長方形	Ⅲ a	(203)	(175)	47	788	近世	
土壌79	90E	不整形	Ⅲ a	232	225	39	795	近世	

表12 南溝手遺跡溝一覽

遺構名	地区	断面形	幅 (cm)	深さ (cm)	方向	時代	備考
溝1	90E	Ⅲ a	48	9	北西~南東	古墳	
溝2	96C~100A	Ⅲ b	103	51~56	南西~北東	古墳	
溝3	82C	Ⅲ b	31	8	東西	古代	
溝4	82C	Ⅲ a	64	10	東西	古代	
溝5	82F	Ⅲ a	180	35	南北	古代	
溝6	82G	Ⅲ c	164	64	南北	古代	
溝7	82G	-	-	-	南北	古代	
溝8	74~76F	Ⅲ a	72	6	北北西~南南東	中世	
溝9	74~76E	Ⅲ b	(85)	12	北北西~南南東	中世	
溝10	76E	Ⅲ e	67	6	北北西~南南東	中世	
溝11	76E	Ⅲ b	(125)	13	北北西~南南東	中世	
溝12	78E	Ⅲ a	45	6	北北西~南南東	中世	
溝13	76E	Ⅲ a	75	7	北北西~北東	中世	弧を描く
溝14	76~78F	Ⅲ b	66	12	北北西~南南東	中世	
溝15	76E	Ⅲ a	23	6	東西	中世	
溝16	76E	Ⅲ b	25	6	東西	中世	
溝17	76E	Ⅲ b	28	7	南北	中世	
溝18	76~78G	Ⅲ a	132~232	13	西~東	中世	弧を描く
溝19	78G	Ⅲ a	33	4	西~東	中世	
溝20	78~80C	Ⅲ a	50~70	9	北東~南西	中世	
溝21	94C~E	Ⅲ a	62	10	北北東~南南東	中世	
溝22	94~96E	Ⅲ b	58	16	南西~北東	中世	
溝23	82~86C~G	Ⅲ c	170~(390)	30~55	-	近世	屋敷を囲む内側の溝
溝24	82~86C~G	Ⅲ b	232	96	-	近世	屋敷を囲む外側の溝
溝25	82F	Ⅲ a	45	36	南東~北東	近世	
溝26	86E	Ⅲ b	122	30	南東~北東	近世	
溝27	86E	Ⅲ b	34	6	南東~北東	近世	
溝28	86F	Ⅲ b	(59)	21	北東~南西	近世	
溝29	86E	Ⅲ a	127	21	北東~南西	近世	
溝30	88E	Ⅲ a	171	21	東西	近世	
溝31	88F~92F	Ⅲ a	43	13	-	近世	屋敷を囲む溝
溝32	88E	Ⅲ b	275	65	北東~南西	近世	新 荷札・掘出し
	88E	Ⅲ b	(350)	115		近世	旧

表13-1 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
1			壺	19.7		(10.7)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
2			甕	(12.8)		(4.6)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外: スス附着	
3	微高地下がり	弥生土器	甕	(15.7)		(3.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
4			高杯		10.1	(4.3)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外: 沈線1条・穿孔4か所	
5			製塩土器鉢		7.9	(4.3)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
6			台付直口壺	6.8		(8.5)	橙色 (7.5YR7/6)	外: スス附着	
7			台付直口壺		10.2	(13.9)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外: 穿孔4か所・一部黒斑	
8			甕	11.2	5.3	12.4	浅黄橙色 (10YR8/3)	外: スス附着	
9			甕	11.6		(11.8)	明赤褐色 (5YR5/6)	外: スス附着	
10			甕	13.5		(10.7)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
11			高杯	19.9		(7.7)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
12	竪穴住居1	弥生土器	高杯		11.1	(6.9)	鈍黄橙 (10YR7/4)	外: 穿孔4個	
13			高杯?		7.3	(8.2)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
14			高杯		11.1	5.7	橙色 (7.5YR7/6)	外: 穿孔 (タテに2個3封?)	
15			鉢	13.0		(5.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	内: 一部ヘラミガキ	
16			鉢	(37.6)		(9.0)	鈍褐色 (7.5YR6/3)	内: ヘラケズリ 内外面スス附着	
17			鉢		2.7	(4.0)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
18			手捏ね鉢	5.3	2.5	5.0	灰白色 (10YR8/2)		
19			手捏ね鉢	6.3	2.7	7.0	灰白色 (10YR8/2)		
20			長頸壺	16.1		(6.7)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	内: 部分的にヘラケズリ痕	
21			甕	(16.0)		(2.1)	橙色 (5YR7/8)		
22	竪穴住居2	弥生土器	甕	(18.2)		(3.0)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
23			高杯	(24.2)		(2.3)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
24			鉢	11.2	4.2	5.9	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
25			壺	13.9		(1.4)	明赤褐色 (5YR5/6)	外: 棒状浮文 (残存2個)	
26	土壇1	弥生土器	甕	(21.0)		(1.3)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
27			鉢	(11.7)		(3.0)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
28			高杯		(9.6)	(1.9)	鈍赤褐色 (5YR5/4)	外: 穿孔1個残	
29			細頸壺	7.2		(6.0)	橙色 (7.5YR7/6)	外: 凹線5条 口縁上面に凹線1条	
30	土壇2	弥生土器	壺	(19.7)		(2.1)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外: 棒状浮文 (表面に刻み) 3個残	
31			壺		(12.8)	(5.7)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
32			甕	(16.7)		(5.0)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
33	土壇4	弥生土器	甕	(11.8)		(3.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	外: わずかにスス附着	
34	土壇5	弥生土器	高杯		(9.8)	(2.2)	灰白色 (2.5Y8/2)	外: 竹管文が巡る	
35	土壇8	弥生土器	高杯			(3.3)	鈍黄橙色 (10YR6/3)	外: 凹線4条	
36			壺	11.2		(1.6)	橙色 (5YR6/6)	外: 貼り付け凸帯	
37			壺	18.2		(3.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外: 棒状浮文2個残	
38	土壇9	弥生土器	甕?		7.4	(5.0)	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外: 底面に黒斑	
39			甕?		5.9	(2.8)	橙色 (5YR6/6)		
40			高杯			(1.8)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
41	土壇10	弥生土器	鉢	10.0	4.7	4.9	浅黄橙色 (10YR8/4)		
42			甕	13.5	6.8	27.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外: タタキ目痕跡	
43	土壇11	弥生土器	甕	11.2		(13.3)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
44			高杯		11.4	(9.8)	鈍橙色 (7.5YR7/3)	外: 穿孔 (タテに2個3封)	
45			鉢	12.8	5.2	11.4	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
46	土壇13	弥生土器	高杯	(19.3)		(3.8)	鈍褐色 (7.5YR6/3)	二次焼成による黒色変化	
47			高杯			(2.8)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外: 穿孔1個残	
48	土壇14	弥生土器	高杯	(18.6)		(3.3)	浅黄橙色 (10YR8/4)		
49	土壇15	弥生土器	甕	(14.1)		(3.3)	橙色 (5YR7/6)	外: スス附着	
50			高杯		(10.8)	(2.1)	鈍橙色 (7.5YR7/6)		
51			鉢	(17.4)		(5.7)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
52	土壇16	弥生土器	甕		5.7	(4.1)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
53			高杯	21.7		(3.6)	橙色 (5YR6/6)		
54			高杯	(15.5)		(1.6)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
55			甕	10.1		(9.6)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
56	土壇17	弥生土器	甕	13.2	4.7	17.9	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外: スス附着	
57			高杯		10.6	(2.1)	橙色 (2.5YR6/6)		
58			鉢	25.0		(12.6)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
59	土壇18	弥生土器	甕	14.0		(12.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
60			甕		5.8	(3.7)	褐色 (10YR4/1)	外: 底部穿孔・被熱により黒色変化	

表13-2 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
61	土壙21	弥生土器	甕	10.8		(3.7)	灰白色 (10YR8/2)		
62			甕			(6.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
63			甕	13.0		(6.8)	灰白色 (10YR8/2)		
64			甕	(12.4)		(4.3)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
65	土壙22	弥生土器	甕	11.8	5.6	15.7	浅黄橙色 (10YR8/3)		
66			甕	9.2		(8.1)	灰色 (5Y6/1)		
67			甕	14.4		(14.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：タタキ目痕跡	
68			高杯	(19.7)		(2.9)	鈍黄褐色 (10YR5/3)		
69	土壙23	弥生土器	高杯	19.8		(5.0)	橙色 (5YR7/6)	外：五角形くもの巢状ヘラミガキ	
70	土壙25	弥生土器	甕	13.2		(4.0)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
71			甕		5.5	(5.5)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
72			高杯		9.9	(4.8)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：タテ2段に穿孔	
73	土壙26	弥生土器	甕	11.2		(7.0)	灰褐色 (7.5YR5/2)		
74			甕		(7.0)	(3.4)	鈍橙色 (7.5YR7/3)		
75			高杯		12.2	(5.8)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：穿孔4個	
76			高杯		12.9	(5.0)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
77	土壙27	弥生土器	甕	(14.9)		(6.5)	灰白色 (10YR8/2)		
78			甕	17.4		(5.2)	鈍橙色 (5YR7/4)		
79			鉢			(9.0)	灰白色 (10YR8/2)		
80	土壙28	弥生土器	甕	14.8		(3.7)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
81			甕	13.6		(3.6)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
82			甕	16.8		(4.8)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
83	土壙29	弥生土器	甕			(2.2)	黒褐色 (7.5YR3/6)		
84	土壙30	弥生土器	甕	12.0	5.1	15.7	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：タタキ目痕跡・全体にスス付着	
85			甕	14.5	4.8	21.3	鈍褐色 (7.5YR6/3)	外：タタキ目痕跡・スス付着	
86			甕	(16.2)		(4.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
87			高杯		11.8	(3.0)	鈍橙色 (5YR7/4)	外：穿孔1個残	
88			高杯		10.2	(8.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	外：穿孔タテに2個3対	
89	土壙31	弥生土器	甕	13.8		(5.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
90			甕	13.8		(13.5)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：被熱による表面赤色変化・スス付着	
91			甕	(21.0)		(2.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
92			甕			(1.2)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
93			甕			(3.0)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
94			甕		4.9	(5.1)	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：被熱による黒色変化	
95			鉢	12.3		5.8	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
96			高杯	(18.5)		(3.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
97			高杯		12.1	(3.3)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：穿孔1残	
98			土壙32	弥生土器	甕	9.3		(14.3)	橙色 (5YR6/6)
99	甕	10.3			4.1	15.3	鈍黄橙色 (10YR6/4)	外：スス付着・被加熱により赤色化	
100	甕	15.0			5.5	24.6	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
101	土壙33	弥生土器	甕	20.1		(24.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：タタキ目痕跡 内外面スス付着	
102			器台	14.6		(4.6)	橙色 (5YR7/6)		
103	土壙34	弥生土器	壺	17.0		(3.2)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
104			甕	13.0		(2.5)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
105			甕		(5.9)	(3.2)	黄灰色 (2.5Y4/1)		
106			高杯	17.6		(6.9)	鈍橙色 (5YR7/4)	外：くもの巢状ヘラミガキ (六角形?)	
107			鉢	12.3		(4.1)	褐灰色 (7.5YR4/1)		
108	土壙35	弥生土器	壺?	12.2		(15.8)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：タタキ目痕跡	
109			甕	11.4	4.0	18.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：タタキ目痕跡	
110			甕	14.5	4.9	25.2	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：タタキ目痕跡	
111			甕	12.3		(19.4)	鈍橙色 (5YR7/4)	外：二次焼成による黒色変化	
112	土壙36	弥生土器	甕	(23.5)		(2.6)	橙色 (5YR6/6)		
113			甕	11.1		(5.4)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
114			高杯		10.8	(7.6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外：穿孔タテに2個で3対?	
115			鉢	9.3		(3.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
116			裂塩土器鉢		5.2	(3.2)	鈍黄褐色 (10YR5/3)		
117	土壙37	弥生土器	甕	(15.0)		(4.1)	橙色 (7.5YR7/6)	外：スス付着	
118			高杯	(27.3)		(7.0)	浅黄橙色 (10YR8/4)		
119			鉢	(8.2)	(5.0)	(4.9)	鈍黄褐色 (10YR6/3)		
120	土壙38	弥生土器	壺	18.3		(26.6)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：沈線 (螺旋)	

表13-3 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
121	土壙38	弥生土器	長頸壺	(20.9)		(19.7)	灰白色 (10YR8/2)	外：沈線28条 (1条ずつ完結)	
122			壺	(12.0)		(4.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
123			甕	(13.0)		(3.5)	鈍黄橙色 (10YR6/4)		
124			甕	12.4		(2.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
125			甕	12.2		(5.9)	橙色 (5YR7/6)		
126			手捏ね鉢	3.8	1.7	2.5	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
127	土壙39	弥生土器	甕	(13.1)		(12.1)	橙色 (5YR6/6)		
128			甕		9.8	(4.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
129			高杯	22.4		(2.3)	鈍褐色 (7.5YR6/3)		
130	土壙40	弥生土器	壺	22.9		(2.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
131			甕	(12.4)		(3.5)	灰黄褐色 (10YR5/2)		
132			高杯	(19.6)		(4.5)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)		
133			高杯		10.0	(4.0)	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外：穿孔1個残	
134	土壙41	弥生土器	甕	20.0		(6.5)	橙色 (5YR7/6)		
135	土壙42	弥生土器	壺	22.3		(3.8)	鈍橙色 (5YR6/4)		
136			壺	23.7		(6.7)	橙色 (7.5YR7/6)		
137			甕		5.7	(17.5)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：スス付着 内：スス付着 (内周を描く)	
138			鉢	23.8		(9.0)	橙色 (2.5YR6/6)		
139			甕	22.0		(19.7)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
140	土壙43	弥生土器	甕		7.2	(3.7)	灰黄褐色 (10YR5/2)		
141	土壙44	弥生土器	壺?			(2.7)	鈍橙色 (7.5YR7/3)		
142			壺		9.4	(12.0)	灰白色 (10YR8/2)		
143			甕	15.2		(4.4)	灰黄褐色 (10YR6/2)		
144			甕	16.0		(3.9)	灰白色 (2.5Y7/1)		
145			製塩土器?		8.0	(2.6)	鈍橙色 (5YR7/3)		
146			岸地1	弥生土器	壺	15.0		(3.8)	鈍黄褐色 (10YR6/4)
147	壺	15.2				(6.3)	橙色 (5YR6/6)		
148	壺	21.7				(6.4)	橙色 (2.5YR6/6)		
149	甕	(16.8)				(3.5)	橙色 (5YR6/6)		
150	甕	(15.2)				(2.0)	明黄褐色 (10YR7/6)		
151	甕	(15.0)				(3.2)	橙色 (7.5YR7/6)		
152	甕	15.2				(4.0)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
153	甕	(14.0)				(3.3)	明赤褐色 (5YR5/6)		
154	甕	15.6				(3.3)	橙色 (7.5YR6/6)		
155	甕	(14.8)				(4.8)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
156	甕	15.6				(4.2)	橙色 (7.5YR6/6)		
157	甕	(23.2)				(6.1)	鈍黄褐色 (10YR5/3)		
158	高杯	(15.2)				(4.3)	橙色 (5YR6/6)		
159	鉢	17.6				(5.6)	明赤褐色 (5YR5/6)		
160	村穴および遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	9.7		(6.1)	橙色 (7.5YR6/4)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	II1区出土
161			壺		9.8	(6.5)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		76E出土
162			甕			(19.0)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：沈線3条 内外面スス付着	76E出土
163			甕	26.8		(16.0)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：刻目文がめぐる・沈線4条・スス付着	76E出土
164			甕	30.4		(8.4)	明褐色 (7.5YR5/6)		76E出土
165			壺	(11.6)		(12.2)	鈍褐色 (7.5YR5/4)	外：刻目目・9本からなる櫛描文	76E出土
166			壺			(8.9)	灰褐色 (7.5YR5/2)	外：櫛描沈線・波状文・櫛描文 (斜め方向)	76E出土
167			甕	15.0		(12.9)	鈍黄褐色 (10YR7/2)	外：スス付着	76E出土
168			甕	15.2		(5.0)	鈍黄褐色 (10YR5/3)		76E出土
169			壺	(17.8)		(3.2)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		78G出土
170			壺	12.2		(5.6)	鈍黄褐色 (10YR7/3)		76F出土
171			壺	22.5		(10.8)	浅黄褐色 (10YR8/3)	外：3本1組の棒状浮文4か所	旧1区出土
172			壺	(9.1)		(5.9)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：円形浮文・櫛描沈線・鋸歯文?	76E出土
173			甕	22.6		(3.7)	鈍黄褐色 (10YR6/4)	外：貼り付け突帯 押圧痕文	76F出土
174			甕	22.4		(7.1)	明黄褐色 (10YR7/6)	外：貼付突帯 刻目目	78G出土
175			高杯	21.2		(7.1)	灰黄色 (2.5Y6/2)		76E出土
176			高杯			(14.5)	鈍褐色 (7.5YR5/4)		76E出土
177			高杯		(12.4)	(5.5)	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外：穿孔 (全周に12個か?)	76E出土
178	壺?	(8.4)		(2.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：穿孔2個残	76E出土		
179	壺	24.5		(8.6)	橙色 (5YR6/6)	外：竹管文・鋸歯文 頸部沈線5条残	旧1区出土		
180	壺	20.5		(10.1)	橙色 (5YR6/6)		II1区出土		



表13-4 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
181	柱穴および遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	(14.9)		(7.7)	黄灰色 (2.5Y5/1)		旧1区出土
182			甕	9.5		(5.8)	橙色 (5YR6/6)		旧1区出土
183			甕	15.5		(4.3)	橙色 (5YR6/6)		78G出土
184			甕	15.0		(6.4)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		78E出土
185			甕	14.4		(4.3)	鈍黄橙色 (10YR6/4)		76E出土
186			甕	(19.0)		(3.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		78G出土
187			甕	15.1		(4.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		76E出土
188			甕	17.0		(9.3)	橙色 (7.5YR7/6)		旧1区出土
189			甕	(15.6)		(3.8)	橙色 (7.5YR7/6)		78G出土
190			甕	14.2		(4.3)	鈍橙色 (7.5YR7/3)		80G出土
191			甕	15.3	3.6	18.8	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：タタキ目後ハケメ 底部穿孔	旧1区出土
192			甕	10.8		(10.8)	鈍黄棕色 (10YR7/2)	外：タタキ目	80G出土
193			高杯	17.5		(2.7)	褐色 (7.5YR6/6)		76E出土
194			高杯	(22.0)		(4.0)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		旧1区出土
195			高杯	16.6		(2.8)	赤褐色 (10R6/8)		76E出土
196			高杯		14.0	(14.0)	橙色 (7.5YR7/6)		76E出土
197			高杯		14.6	(9.1)	鈍褐色 (7.5YR5/4)		旧1区出土
198			高杯		15.0	(9.1)	鈍黄褐色 (10YR5/4)	外：上穿孔5・下穿孔6・その間櫛描沈線	76E出土
199			鉢	6.8		(4.1)	橙色 (7.5YR6/6)		旧1区出土
200			鉢	17.6		(7.3)	褐色 (5YR6/8)	外：スス付着	76E出土
201			鉢	(24.5)		(9.4)	褐色 (5YR7/6)		76E出土
202			器台	17.6		(12.7)	灰白色 (10YR8/2)	外：穿孔トド2個4か所	76E出土
203			器台		19.0	(6.7)	褐色 (5YR6/6)	外：スカシ孔2残 (全形で7~8か所?)	76E出土
204	竪穴住居5	須恵器	蓋	14.5		4.8	灰白色 (N7/0)		
205			蓋	15.0		(4.9)	灰白色 (10Y6/1)		
206			杯	12.1		4.9	灰白色 (2.5Y7/1)		
207			杯	13.7		5.3	灰色 (N5/0)		
208	竪穴住居6	須恵器	蓋	11.0		4.8	灰色 (N6/0)		
209			蓋	12.7		4.4	灰色 (N6/0)		
210			蓋	13.4		4.4	灰色 (N5/0)		
211			蓋	13.0		4.6	灰色 (N6/0・N7/0)		
212			蓋	13.8		5.2	灰色 (N6/0)		
213			短頸壺	7.7	5.4	7.2	灰色 (N5/0)	外：重ね焼きの痕跡	
214			甕	14.1		21.1	鈍黄橙色 (10YR7/2)	二次焼成による黒色変化 (スス付着)	
215			甕	16.5		(15.2)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
216	甕	14.8	6.6	26.0	鈍黄褐色 (10YR7/2)	二次焼成による黒色変化 (スス付着)			
217	高杯	14.4	9.8	11.3	灰黄褐色 (10YR6/2)				
218	製塩土器鉢	13.9		(8.4)	鈍黄褐色 (10YR5/3)	外：タタキ痕跡 内：板状工具ナデ			
219	手捏ね鉢	4.4		3.1	鈍橙色 (7.5YR7/4)				
220	竪穴住居7	須恵器	高杯			(4.2)	灰色 (N6/0)	外：7本からなる波状文 内：自然釉	
221			高杯		10.8	(4.6)	灰色 (N4/0)	外：自然釉付着・透し窓3個?	
222		土師器	甕	16.3		(14.0)	鈍黄褐色 (10YR6/4)		
223			甕	15.6		26.3	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
224			甕	16.2		27.1	鈍褐色 (5YR6/4)	外：スス付着	
225			高杯	14.4		(5.7)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
226			高杯	13.5	9.9	(13.5)	鈍褐色 (7.5YR5/4)	外：穿孔1残	
227			鉢	12.2		5.6	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
228			鉢	12.2		5.2	褐色 (7.5YR7/6)		
229			瓶	22.5		24.1	褐色 (5YR6/6)		
230	土壘46	須恵器	高杯		11.5	(10.2)	黄灰色 (2.5Y6/1)		
231	土器溜まり1	土師器	小型丸底壺	12.8		10.8	褐色 (5YR6/8)		
232			小型丸底壺	8.5		10.3	黄褐色 (7.5YR)		
233			小型丸底壺	9.2		11.5	褐色 (10YR6/8)		
234			甕	17.6		(7.3)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
235			高杯	18.6	14.1	11.5	褐色 (7.5YR7/6)		
236			高杯	23.3		(5.5)	鈍黄褐色 (10YR5/3)		
237			高杯	(27.0)		(5.4)	鈍黄褐色 (10YR6/4)		
238			高杯		12.3	(7.1)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
239			高杯		11.8	(8.4)	鈍黄褐色 (10YR7/4)		
240			高杯		12.1	(8.8)	鈍黄褐色 (10YR7/3)		

表13-5 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
241			高杯		12.0	(9.0)	橙色 (5YR7/6)		
242	土器溜まり1	土師器	高杯		14.1	(7.3)	橙色 (5YR6/6)	外: スス付着	
243			鉢	8.2		10.1	浅黄橙色 (10YR8/3)		
244			壺	24.1		(23.2)	橙色 (7.5YR7/6)		
245			壺	21.0		(7.6)	橙色 (5YR6/6)		
246			壺	12.0		(6.6)	赤褐色 (5YR4/6)		
247			甕	14.2		(9.3)	橙色 (7.5YR7/6)		
248			甕	11.1		(17.1)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
249			甕	(11.4)		18.7	橙色 (5YR7/6)		
250			甕	14.0		19.5	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
251			壺	10.8		(11.8)	橙色 (7.5YR6/6)		
252			小型丸底壺	7.7		10.2	明黄褐色 (10YR7/6)		
253			小型丸底壺	7.5		10.0	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
254			小型丸底壺	9.0		10.5	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外: スス付着	
255			小型丸底壺	9.6		(10.6)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
256			高杯	14.6		(4.8)	明黄褐色 (10YR7/6)		
257			高杯	16.3		(10.7)	鈍黄橙色 (5YR6/4)		
258			高杯	16.3		(6.6)	鈍橙色 (5YR6/4)		
259			高杯	17.5	11.6	13.6	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
260			高杯	17.5		(8.4)	橙色 (5YR6/6)		
261			高杯	17.4		(7.9)	鈍橙色 (7.5YR7/3)		
262			高杯	16.4	10.7	13.8	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
263	土器溜まり2	土師器	高杯	16.8		(13.7)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
264			高杯	16.4		(5.7)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
265			高杯	17.1	12.9	12.2	鈍黄橙色 (10YR6/4)		
266			高杯	18.8		(6.5)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
267			高杯	19.9		5.6	橙色 (7.5YR7/6)		
268			高杯	21.4		(5.3)	橙色 (5YR6/6)		
269			高杯	22.1		(6.5)	橙色 (5YR6/6)		
270			高杯	16.3		(6.1)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
271			高杯	24.4	15.4	16.8	橙色 (7.5YR7/6)		
272			鉢	9.4		9.2	灰黄色 (2.5Y7/2)		
273			鉢	9.0		10.0	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
274			鉢	10.3		(7.0)	橙色 (2.5YR7/6)		
275			台付鉢	14.4	8.0	6.3	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
276			高杯		11.2	(6.5)	橙色 (10YR6/8)		
277			高杯		10.9	(8.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
278			高杯		12.5	(7.6)	橙色 (7.5YR7/6)		
279			高杯		12.4	(6.3)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
280			高杯		13.7	(9.7)	橙色 (2.5YR6/8)		
281			高杯		14.0	(9.3)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
282			甗	24.3		(11.3)	灰白色 (10YR8/2)		
283			甗	24.3		(20.8)	橙色 (2.5YR6/8)		
284			小型丸底壺	10.4		8.0	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
285			小型丸底壺	7.9		11.5	橙色 (5YR6/6)	外: うちかき痕	
286			小型丸底壺			(5.3)	橙色 (5YR6/6)		
287			甕	12.2		(6.3)	鈍橙色 (5YR7/4)		
288			甕	(12.9)		(4.9)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
289			甕	16.0		(4.5)	橙色 (5YR6/6)		
290	土器溜まり3	土師器	高杯	16.9		(5.2)	橙色 (5YR6/6)		
291			高杯	19.3		(10.0)	橙色 (5YR6/6)		
292			高杯	18.1	13.9	12.5	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
293			高杯	(18.2)	(11.1)	(13.5)	灰白色 (10YR8/2)		
294			高杯		12.7	(7.5)	橙色 (7.5YR6/6)		
295			高杯		13.9	(7.6)	橙色 (5YR7/6)		
296			鉢	11.6		6.3	橙色 (7.5YR7/6)		
297			壺	17.8		(10.7)	橙色 (5YR6/6)		
298	土器溜まり4	土師器	壺	15.4		(16.5)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
299			壺	10.5		15.2	灰白色 (10YR8/2)		
300			壺	10.9		(14.0)	橙色 (5YR6/6)	外: スス付着	

表13-6 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
301	土器溜まり4	土師器	壺	11.6		17.2	橙色 (7.5YR7/6)		
302			壺	12.3		(12.3)	橙色 (7.5YR6/6)		
303			小型丸底壺			(9.8)	橙色 (7.5YR6/6)		
304			小型丸底壺	7.7		8.8	鈍黄橙色 (10YR6/4)		
305			小型丸底壺	8.9		10.0	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
306			小型丸底壺	10.3		(11.9)	鈍橙色 (2.5YR6/4)		
307			甕	14.5		(12.1)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
308			甕	12.8		(6.7)	灰白色 (10YR8/2)	外：スス附着	
309			甕	13.9		18.4	鈍黄橙色 (10YR7/4)	外：数か所の穿孔痕	
310			甕	11.5		(7.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：スス附着	
311			甕	12.3		15.3	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：スス附着	
312			甕	12.9		(13.0)	橙色 (7.5YR6/6)		
313			甕	12.4		17.7	鈍黄色 (2.5YR6/3)		
314			甕	13.6		23.1	橙色 (5YR6/6)		
315			鉢	8.6		7.2	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
316			鉢	7.5		8.2	灰黄色 (2.5Y7/2)	外：スス附着	
317			甕	13.8		(5.3)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
318			甕	13.5		(7.3)	橙色 (5YR6/6)		
319			甕	15.0		24.2	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：スス附着	
320			甕	16.0		24.0	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
321			甕	16.3		(14.3)	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
322			壺	12.4		20.3	灰黄色 (2.5Y6/2)		
323			甕	14.1		24.4	鈍黄橙色 (10YR6/4)	外：スス附着	
324			甕	13.7		(15.9)	鈍褐色 (7.5YR5/4)	外：ヘラ記号？内外面スス附着	
325			壺	15.2		25.0	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
326			甕	13.4		18.8	浅黄色 (2.5Y7/4)		
327			甕	13.6		(16.2)	明赤褐色 (5YR5/6)		
328			甕	15.6		(5.3)	橙色 (5YR6/6)	外：スス附着	
329			甕	18.4		(6.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
330			甕	13.7		(20.0)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：スス附着	
331			手握ね鉢	2.3		2.5	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
332			手握ね鉢	6.0		(4.2)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
333	高杯	15.3		(5.5)	鈍黄橙色 (10YR7/2)				
334	高杯	17.6		(5.4)	鈍橙色 (7.5YR7/3)				
335	高杯	18.0	12.0	12.9	鈍橙色 (7.5YR7/4)				
336	高杯	18.8		(12.0)	鈍黄橙色 (10YR7/4)				
337	高杯	19.8	13.1	13.0	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
338	高杯	20.7		(7.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)				
339	高杯	23.6		14.8	橙色 (5YR6/6)				
340	高杯	18.4		(6.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)				
341	高杯		10.2	(8.4)	橙色 (7.5YR6/6)				
342	高杯		12.2	(7.0)	鈍黄橙色 (10YR7/3)				
343	河道1	土師器	壺	20.9		(9.1)	橙色 (5YR6/6)		
344			甕	14.0		(6.2)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
345			甕	(13.1)		(2.9)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：櫛描沈線6~7条	
346			甕	12.8		(6.9)	鈍黄橙色 (10YR6/4)	外：櫛描沈線9~10条 刺突2か所	
347			甕	15.0		(5.0)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：櫛描沈線9条	
348			甕		4.7	(9.1)	鈍黄橙色 (10YR7/4)	外：底部穿孔	
349			甕		4.4	(4.6)	鈍赤褐色 (2.5YR5/4)	外：タタキ	
350			高杯	10.9	13.6	8.5	褐色 (5YR6/6)	外：穿孔4か所	
351			高杯		13.6	(6.2)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：穿孔4個	
352			高杯		15.6	(5.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：穿孔4か所？	
353			高杯			(7.5)	橙色 (5YR6/6)		
354			鉢	12.9		(7.2)	橙色 (7.5YR6/6)		
355			鉢	15.3		(8.4)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
356			鉢	31.0		(14.1)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
357	柱穴および遺槽に伴わない遺物	土師器	甕	13.6		18.1	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：櫛描沈線7条 スス附着	旧1区出土
358			高杯	17.9	11.7	12.8	橙色 (5YR6/6)		旧1区出土
359			鉢	14.5		7.2	鈍橙色 (5YR6/4)		旧1区出土
360			手握ね鉢	2.9		2.8	鈍黄橙色 (10YR7/3)		80G出土

表13-7 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
361	柱穴および遺 溝に伴わない 遺物	土師器	手摺ね鉢	3.8		2.8	黒色 (10YR2/1)		90E出土
362			手摺ね鉢	3.1		3.3	鈍黄褐色 (10YR7.2)		80G出土
363		須恵器	長頸壺		4.6	(14.4)	灰白色 (N7/0)	外：部分的に自然釉	98E出土
364			短頸壺	9.1		(14.1)	灰色 (N6.0)		80E出土
365			蓋	13.4		(5.2)	灰色 (5Y5/1)		78G出土
366			蓋	14.4		(3.6)	灰色 (N5.0)		76E出土
367			蓋	16.5		(3.1)	灰白色 (N7/0)		旧1区出土
368			杯	12.8	7.5	4.1	褐灰色 (5YR6/1)	内：受部から底体部全体に自然釉	80G出土
369			杯	14.8		4.1	褐灰色 (10YR5/1)		78G出土
370			高杯		8.7	(7.7)	青灰色 (5PB5/1)	外：スカシ孔3か所	78G出土
371			甕	19.0		(7.9)	灰白色 (N8/0)		76E出土
372	須恵器	蓋	14.8		(2.1)	浅黄褐色 (10YR8.3)			
373		黒色土器	碗	15.2	8.4	4.6	褐色 (5YR7/6)		
374	溝6	瓦	軒平瓦	長 (5.7)	幅 (8.5)	厚 (3.2)	灰白 (N7/1)	凸：ナデ 凹：布目・桶巻作り 唐草文	
375			平瓦	長 (9.6)	幅 (8.0)	厚 (2.1)	黄灰 (2.5Y6.1)	凸：ナデ 凹：布目・桶巻作り	
376			平瓦	長 (11.2)	幅 (12.6)	厚 (3.5)	灰白 (2.5Y7/1)	凸：ナデ? 凹：布目・桶巻作り	
377	溝7	須恵器	杯		8.8	(1.3)	褐灰色 (10YR6/1)		
378	溝2	土師器	杯	12.0		3.1	褐色 (7.5YR7/6)		
379			杯	12.8	8.9	2.8	鈍褐色 (7.5YR7/3)	外：底部ヘラ切り 底部外面に黒書あり	
380			杯	12.7	9.7	2.9	鈍褐色 (7.5YR7.4)	外：底部ヘラ切り 内：スス付着	
381			杯	12.9	9.0	3.4	鈍褐色 (7.5YR7.3)	外：底部指オサエ	
382			杯	12.4	8.9	3.2	浅黄褐色 (10YR8.3)	外：底部押圧痕	
383			杯	12.6	9.4	3.1	鈍褐色 (7.5YR6.4)	外：底部押圧痕	
384			杯	14.4	9.6	3.9	明赤褐色 (2.5YR5/8)	外：底部指押圧痕あり 内外面丹塗り	
385			杯	12.4	9.0	3.5	鈍黄褐色 (10YR6.4)	外：底部指押圧痕あり 内外面丹塗り	
386			黒色土器	皿	13.6	7.6	2.3	鈍褐色 (7.5YR6.4)	
387		碗		14.2	7.4	4.7	鈍黄褐色 (10YR7.4)		
388		碗		15.8	7.2	5.4	褐色 (5YR6/6)		
389	土師器	杯	17.0	9.6	5.8	褐色 (5YR6/6)			
390		杯		6.8	(2.1)	鈍黄褐色 (10YR7.3)	内：暗文		
391		杯	13.7	11.1	2.8	鈍褐色 (5YR6/3)	内外面丹塗り		
392		杯	15.1	13.3	3.1	明赤褐色 (2.5YR5/6)	内外面丹塗り		
393		杯	15.8	12.7	3.4	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内：丹塗り		
394		皿	16.0	13.2	1.6	褐色 (2.5YR6/6)	内外面丹塗り		
395		蓋	14.4		2.9	黄灰色 (2.5Y5/1)	外：斜目?		
396		杯	13.1	10.2	3.4	暗灰色 (N3/0)			
397		杯	12.2	7.8	4.3	黄灰色 (2.5Y6/1)	外：底部ヘラ切り		
398		杯	13.8	8.9	4.3	灰白色 (2.5Y7/1)			
399		須恵器	杯	12.1	9.0	4.2	灰白色 (N7/0)		
400	杯		(13.8)	9.8	4.7	灰白色 (N7/0)	外：底部ヘラ切り		
401	杯		14.0	10.0	4.4	灰色 (N6.0)			
402	杯		15.4	10.1	7.3	灰白色 (N7/0)	外：底部ヘラ切り		
403	杯		15.8	11.6	4.0	灰白色 (2.5Y7/1)			
404	蓋				(2.2)	灰白色 (2.5Y7/1)			
405	高杯		9.8	6.5	7.2	灰色 (N5.0)			
406	土師器		甕	14.9		12.5	鈍褐色 (7.5YR6.4)	外：底部穿孔	
407			甕	15.6		(12.9)	鈍褐色 (5YR7/4)	外：スス付着	
408		甕	(29.6)		(27.9)	褐色 (5YR6/6)	外：スス付着		
409		甕	(33.8)		(24.0)	赤褐色 (5YR4/6)	外：スス付着		
410		甕	32.4		(23.6)	褐色 (5YR6/6)	外：スス付着		
411	須恵器	甕	18.7		(9.2)	灰色 (N5.0)			
412		甕	20.4		(20.5)	灰白色 (N7/0)			
413	瓦質土器	甕	(31.8)	(18.2)	29.6	灰色 (N4.0)			
414	瓦	軒丸瓦		径16.3	厚6.2	灰色 (N6.0)	側面：ヘラケズリ 凹：ナデ 平城宮式		
415		軒平瓦	長 (10.4)	幅 (8.1)	厚 (4.4)	灰 (N4/0)	凸：ナデ? 凹：ナデ 唐草文		
416		軒平瓦	長 (27.8)	幅 (20.5)	厚3.6	灰 (5Y6/1)	凸：格子タタキのちナデ 凹：布目 重弧文		
417		軒平瓦	長 (12.2)	幅 (12.9)	厚 (2.8)	灰白 (2.5Y8.2)	凸：格子タタキのちナデ 凹：桶巻作り 重弧文		
418		軒平瓦	長 (11.2)	幅 (6.1)	厚 (2.7)	灰白 (2.5Y8.1)	凸：タタキのちナデ 凹：桶巻作り 重弧文		
419		軒平瓦	長 (5.6)	幅 (5.7)	厚 (2.1)	灰白 (2.5Y8.1)	凹：布目 重弧文		
420		軒平瓦	長 (5.0)	幅 (4.1)	厚 (2.5)	灰白 (2.5Y8.2)	凸：ナデ 凹：布目 重弧文		

表13-8 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
421	河道	瓦	丸瓦	長 (14.1)	幅 (10.7)	厚 (1.5)	灰黄 (2.5Y7/2)	凸: ナデ・ケズリ 凹: 布目・竹状模骨?	
422			丸瓦	長 (21.7)	幅13.7	厚1.7	灰白 (10YR8/2)	凸: 縄タタキのちナデ 凹: 布目	
423			丸瓦	長 (15.3)	幅 (13.4)	厚2.4	灰白 (5Y7/1)	凸: 格子タタキのちナデ 凹: 布目	
424			丸瓦	長43.3	幅 (19.9)	厚 (3.3)	灰 (N7/0)	凸: ナデ 凹: 布目	
425			丸瓦	長 (32.9)	幅 (21.6)	厚3.6	灰白 (N7/0)	凸: 格子タタキのちナデ 凹: 布目	
426			平瓦	長34.0	幅 (15.1)	厚2.5	灰白 (N7/0)	凸: 縄目タタキ 凹: 一枚作り・布目	
427	須臾器	杯		9.9	(1.2)	灰白色 (N7/0)	外: 底部ヘラ切り		
428		杯		(10.5)	(2.9)	灰色 (N6/0)			
429		短頸壺	(8.9)		(12.5)	灰色 (N6/0)			
430	土師器	杯	(14.0)	(11.6)	2.7	鈍黄褐色 (10YR6/3)			
431		皿	14.1	(12.4)	1.5	橙色 (7.5YR7/6)	外: 底部指オサエ		
432	柱穴および遺構に伴わない遺物	瓦	軒丸瓦		径 (16.0)		灰白色 (2.5Y8/1)	凹: ナデ 備中式	80G出土
433			軒丸瓦	長 (7.90)	径 (14.4)		灰白色 (10YR8/1)	凹: 布目 凸: ナデ 備中式	78G出土
434			軒丸瓦	長 (5.30)	径 (14.8)		灰白 (N7.5/0)	凸・凹: ナデ 備中式	80G出土
435			軒丸瓦	長 (10.5)	径 (16.0)	厚 (5.2)	灰白 (N8/0)	凸: ナデ 凹: 布目 平城宮式	80G出土
436			軒丸瓦	長 (6.0)		厚 (4.9)	灰白 (10YR8/1)		平城宮式 80G出土
437			軒丸瓦	長 (5.6)		厚 (2.9)	灰白 (5Y7/1)	凸: ケズリ 平城宮式	II1区出土
438			丸瓦	長 (15.2)	幅 (7.8)	厚 (2.0)	黄灰 (2.5Y4/1)	凸: ナデ 凹: 布目	86E出土
439			平瓦	長 (10.2)	幅 (6.3)	厚2.5	褐灰 (10YR4/1)	凸: 縄タタキ 凹: 一枚作り・布目	86E出土
440			平瓦	長 (14.4)	幅 (9.6)	厚 (1.3)	灰白 (N7/0)	凸: 縄タタキ 凹: 一枚作り・布目・ナデ	82E出土
441			平瓦	長 (7.7)	幅 (9.4)	厚2.4	灰白 (10YR8/1)	凸: 縄タタキ 凹: 一枚作り・布目・ケズリ	90E出土
442			平瓦	長 (17.1)	幅 (11.5)	厚2.3	灰白 (5Y8/1)	凸: 縄目タタキ 凹: 一枚作り・布目	90E出土
443			平瓦	長 (19.9)	幅 (16.9)	厚3.5	黄灰 (2.5Y5/1)	凸: 調整不明瞭 凹: 桶巻作り・布目	80G出土
444			平瓦	長 (25.8)	幅 (16.2)	厚2.9	灰白 (2.5Y7/1)	凸: 格子タタキ後ナデ 凹: 桶巻作り・布目	II1区出土
445			平瓦	長 (7.5)	幅 (10.3)	厚2.2	灰 (N6/0)	凸: 格子タタキ 凹: 桶巻作り・布目	102A出土
446	平瓦		幅 (8.5)	厚1.7	灰 (N6/0)	凸: 格子タタキ 凹: 一枚作り・布目	II1区出土		
447	掘立柱建物 2	土師器	小皿	8.5	6.0	1.5	灰白色 (10YR8/2)	外: 底部ヘラ切り	
448	掘立柱建物 3	土師器	小皿	7.5	5.9	1.1	灰白色 (10YR8/2)	外: 底部ヘラ切り?	80G出土
449	井戸 1	土師器	小皿	7.7	6.1	1.3	鈍黄褐色 (10YR6/3)	外: 底部ヘラ切り	80G出土
450			杯	12.1	6.8	3.8	鈍黄褐色 (10YR7/4)	外: 底部ヘラ切り	80G出土
451			杯	13.1	7.3	3.5	浅黄褐色 (10YR8/3)	外: 底部ヘラ切り	78G出土
452			椀	12.5	5.6	4.7	灰白色 (10YR8/2)		II1区出土
453			椀	12.6	5.8	4.6	浅黄褐色 (10YR8/3)	外: 底部ヘラ切り後未調整	
454			椀	12.6	6.0	4.8	浅黄褐色 (10YR8/3)		
455			椀	12.8	6.1	4.3	浅黄褐色 (10YR8/3)	外: 底部ヘラ切り後未調整	
456			椀			5.5	(3.4)	灰白色 (10YR8/2)	
457	青瓦	椀		5.0	(1.8)	灰色 (5Y6/1)	釉: 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 土製品転用?		
458	土壙 1	瓦	平瓦	長 (28.0)	幅 (12.8)	厚 (3.3)	灰白色 (2.5Y7/1)	凸: ナデ 凹: 桶巻作り・布目	
459	平瓦		長 (14.0)	幅 (16.0)	厚 (2.5)	灰色 (N4/1)	凸: 縄タタキ 凹: 一枚作り・布目		
460	土壙 2	土師器	椀		6.2	(1.4)	灰白色 (10YR8/2)		
461			鍋			(3.5)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
462	土壙 4	土師器	小皿	6.1	5.2	1.5	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外: 底部ヘラ切り?	
463			小皿	6.4	5.6	1.5	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外: 底部ヘラ切り?	
464			小皿	6.2	4.9	1.3	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外: 底部ヘラ切り?	
465			椀	9.3	4.0	3.8	浅黄褐色 (10YR8/3)	外: 押圧痕	
466	土壙 5	土師器	小皿	(7.2)		1.2	灰白色 (10YR8/2)	外: 底部ヘラ切り?	
467			椀	10.2		(3.0)	灰白色 (10YR8/2)		
468			椀		4.8	(1.3)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)		
469			椀		4.8	(1.3)	灰白色 (10YR8/2)		
470	土壙 6	土師器	鍋	(28.4)		(4.7)	灰黄褐色 (10YR6/2)	外: スス付着	
471	土壙 7	瓦	軒平瓦	長 (11.1)	幅 (11.6)	厚 (5.3)	灰白 (2.5Y7/1)	凸: 縄目タタキ 凹: 布目のちナデ 平城宮式	
472			小皿	8.0	6.3	1.2	灰白色 (2.5Y8/2)	外: 底部ヘラ切り	
473	土壙 7	土師器	椀	13.0	5.1	5.3	鈍黄褐色 (10YR7/2)	器形歪 高台部が中心にない	
474			椀	13.9	5.5	5.2	灰白色 (10YR8/2)		
475	土壙 10	土師器	小皿	(8.6)		(1.8)	鈍褐色 (5YR6/4)	外: 押圧痕	
476			小皿	(9.2)	(6.2)	2.5	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外: 押圧痕	
477			小皿	8.6	5.6	2.2	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外: 押圧痕	
478			椀		(4.9)	(1.2)	浅黄褐色 (10YR8/3)		
479			椀		(4.8)	(0.9)	灰白色 (10YR8/1)		
480	土壙 13	土師器	小皿	7.0	5.8	1.2	灰白色 (7.5YR8/2)	外: 底部ヘラ切り	

表13-9 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考		
				口径	底径	器高					
481	土墳墓13	土師器	小皿	6.9	5.5	1.7	灰白色 (7.5YR8/2)	外：底部ヘラ切り			
482			椀	11.8	5.7	3.8	灰白色 (7.5YR8/2)				
483	土墳墓14	土師器	小皿	7.0	5.3	1.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り			
484			小皿	7.5	4.9	1.4	鈍橙色 (7.5YR7/3)	外：底部ヘラ切り			
485			小皿	7.5	5.0	2.2	浅黄橙色 (7.5YR8/4)				
486			椀		6.0	(1.0)	灰白色 (10YR8/2)				
487	土器棺1	亀山焼	大甕	55.0	37.5	65.3	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	外：格子目タタキ・ハケメ 内：ハケメ ナデ			
488	土壇47	土師器	椀		6.8	(1.2)	灰白色 (10YR8/2)				
489	土壇48	土師器	椀		(6.0)	(1.8)	灰白色 (10YR8/2)				
490	土壇49	亀山焼	大甕	46.5		(21.2)	暗灰色 (N3/0)	外：格子目タタキ			
491	土壇51	土師器	小皿			(1.0)	灰白色 (10YR8/2)				
492			椀		(6.3)	(1.5)	灰白色 (10YR8/2)				
493	土壇52	土師器	小皿	7.4	4.9	1.3	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：底部ヘラ切り			
494			小皿	8.2	(6.0)	1.4	灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り？			
495			椀		6.0	(1.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)				
496			椀		5.9	(1.5)	灰白色 (10YR8/1)				
497	土壇56	土師器	椀		5.3	(1.2)	灰白色 (10YR8/1)				
498	土壇57	土師器	椀	(14.0)		(2.9)	灰白色 (10YR8/2)				
499	土壇58	土師器	小皿	5.9	3.8	1.0	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
500			椀	10.7	3.8	3.0	灰白色 (10YR8/2)	内外面の口縁部にスス付着			
501			椀	10.8	4.2	3.5	浅黄橙色 (10YR8/3)	全体に被熱している			
502			椀	10.3	4.3	3.4	灰白色 (10YR8/2)				
503			鍋	30.0		(13.2)	灰白色 (10YR8/2)	外：全体にスス付着			
504			鍋	31.7		(12.3)	浅黄色 (2.5Y7/3)	外：全体にスス付着			
505		東播系	こね鉢	(21.7)		(3.8)	灰白色 (2.5Y7/1)	外：重ね焼き痕			
506	土壇59	土師器	椀	(13.4)		(2.8)	灰白色 (2.5Y8/2)				
507			椀		(3.6)	(0.9)	灰白色 (10YR8/2)				
508	土壇60	土師器	小皿	7.4	5.7	1.6	鈍橙色 (7.5YR7/3)	外：底部ヘラ切り			
509			小皿	7.1	4.8	1.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り			
510			小皿	7.8	5.6	1.1	鈍黄橙色 (10YR7/4)	外：底部ヘラ切り			
511	土壇61	土師器	小皿	6.5		1.7	鈍黄橙色 (10YR7/3)				
512			椀	9.3		3.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)				
513			椀	9.3		3.7	浅黄橙色 (7.5YR8/3)				
514		東播系	こね鉢			(3.0)	灰色 (N6/0)	外：重ね焼きの痕跡			
515	土壇62	白磁	皿	10.4	(3.4)	(3.1)	灰白色 (7.5Y8/1)	釉：灰白色 (7.5Y7/1)			
516			椀		6.0		灰白色 (2.5Y7/1)	釉：灰黄色 (2.5Y6/2)			
517		土師器	杯	12.1	6.8	3.6	浅黄橙色 (10YR8/4)	外：底部ヘラ切り			
518			杯	12.5	6.2	4.2	浅黄橙色 (10YR8/4)	外：底部板目痕			
519			杯	13.5	6.5	3.8	浅黄橙色 (10YR8/4)	外：底部ヘラ切り			
520			椀	14.0	6.3	4.6	浅黄橙色 (10YR8/3)				
521			小皿	7.9	6.2	1.3	橙色 (7.5YR7/6)	外：底部ヘラ切り			
522			小皿	8.8	6.0	1.5	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り			
523			土壇63	土師器	小皿	6.8	5.1	1.4	灰白色 (7.5YR8/1)	外：底部ヘラ切り	
524					小皿	6.9	5.3	1.5	灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り	
525	小皿	7.0			5.4	1.2	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	外：底部ヘラ切り			
526	小皿	7.2			5.0	1.2	灰白色 (10YR8/1)	外：底部ヘラ切り			
527	小皿	7.0			5.0	1.7	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り			
528	小皿	7.3			5.4	1.9	浅黄橙色 (10YR8/4)	外：底部ヘラ切り			
529	小皿	7.3			5.9	1.4	橙色 (5YR7/8)	外：底部ヘラ切り			
530	小皿	7.4			5.6	1.6	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	外：底部ヘラ切り			
531	小皿	7.6			6.7	1.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り			
532	小皿	7.8			5.9	1.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り			
533	杯	12.1			6.5	3.8	浅黄橙色 (10YR8/4)	外：底部ヘラ切り			
534	杯	12.9			7.5	4.0	灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り			
535	杯	13.0			7.5	3.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り			
536	椀	12.3			5.8	4.7	鈍黄橙色 (10YR7/3)				
537	椀	12.5	5.6	3.9	鈍黄橙色 (10YR7/3)						
538	椀	12.5	6.2	4.5	灰白色 (10YR8/2)						
539	椀	12.9	6.2	4.1	灰白色 (10YR8/2)						
540	椀	13.1	6.3	5.0	浅黄橙色 (10YR8/3)						

表13-10 南溝手遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
541	土壙63	土師器	椀	13.2	6.6	4.6	浅黄橙色 (10YR8/3)		
542			椀	13.7	5.9	4.9	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
543			椀	13.8	6.8	4.4	灰白色 (10YR8/2)		
544		須恵質土器	甕			(7.6)	灰色 (N6/0)	外：格子口タタキ 内：同心円当て具痕	
545	溝9	土師器	椀		5.7	(1.3)	灰白色 (10YR8/2)	外・内：摩滅のため調整不明瞭	
546	溝13	土師器	椀	(13.1)	(6.6)		灰白色 (10YR8/2)		
547	溝14	土師器	小皿	(6.6)		(1.0)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
548		白磁	碗				灰白色 (5Y7/1)		
549	溝18	土師器	小皿	7.1	4.4	1.6	鈍黄橙色 (10YR7/4)	外：底部ヘラ切り	
550			椀		5.6	(4.0)	灰黄色 (2.5Y7/2)		
551	溝22	土師器	椀	12.1	5.1	4.2	灰白色 (10YR8/2)		
552	住穴および遺構に伴わない遺物	土師器	椀	13.5	5.6	4.5	鈍黄橙色 (10YR7/4)	外：スス付着	98A
553			小皿	7.6	5.0	1.2	鈍黄橙色 (10YR6/3)	外：底部イト切り	II区出土
554			小皿	8.3	4.4	1.3	黄褐色 (7.5YR7/8)	外：底部ヘラ切り	II区出土
555			小皿	7.7	5.0	1.2	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り	76G
556		備前焼	播鉢	(28.6)		(5.0)	鈍褐色 (7.5YR5/3)	外：自然釉	II区出土
557		亀山焼	播鉢			(4.5)	灰白色 (10YR8/2)	内：オロシ目5本	II区出土
558			播鉢			(6.5)	浅黄褐色 (10YR8/3)	内：オロシ目4本	76E
559			播鉢	(30.3)		(7.5)	黄灰色 (2.5Y6/1)	内：オロシ目4本	76E
560		白磁	碗			(4.5)	灰白色 (5Y8/1)	釉：灰白色 (5Y7/1)	II区出土
561			碗		5.7	(2.2)	灰白色 (5Y8/1)	釉：灰白色 (7.5Y7/1)	II区出土
562	碗			5.6	(2.0)	灰白色 (5Y8/1)	釉：明オリブ灰色 (5GY7/1)	II区出土	
563	青磁	碗	14.0	4.0	6.4	灰白色 (7.5Y7/1)	外：削り出し逆弁・釉剥	84C	
564	柱穴列2	土師器	小皿	6.2	5.6	1.0	鈍黄橙色 (10YR6/3)	内：スス付着	
565	土器棺2	亀山焼	大甕	50.1	38.6	66.1	黄灰色 (2.5Y4/1)	外：線刻 格子目タタキ・ハケメ 内：ハケメ	
566	土壙74	備前焼	壺		8.8	(6.4)	鈍橙色 (7.5YR5/3)		
567			大甕		41.2	(11.5)	暗赤灰色 (7.5R3/1)		
568	土壙79	土師器	小皿	8.2	4.0	1.2	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外底部イト切り	
569	土壙79	瓦質土器	羽釜	14.9		(15.8)	灰色 (N5/0)	外：罫下はスス・炭化物が付着	
570		ミニチュア	播鉢	5.5	2.6	2.6	鈍橙色 (5YR6/4)	片口? 内：6オロシ目3本	
571	溝23	陶磁器	壺	6.8	7.9	8.5	灰白色 (10YR7/1)	内外：ヨコナデ	丹波焼?
572			皿	11.1	4.2	2.7	灰白色 (N7/0)	内外：施釉・露胎	肥前1580-1610
573			青絵皿	13.2	4.4	3.5	灰白色 (5GY8/1)	外：釉剥ぎ 内：砂目積みの痕 (3点)	肥前1630-1640
574			染付碗	(11.2)	(4.3)	6.7	灰白色 (N8/0)	内外：施釉	右田1660-1670
575			染付碗		4.4	(2.2)	灰白 (5Y7/1)	内外：施釉 染付	シヨウ湖窯系1590-1610
576			大皿	(31.4)		(5.7)	明褐色 (7.5YR7/2)	内：鉄釉・銅緑釉	肥前17C~18C
577	溝24	陶磁器	碗	11.3	4.0	3.4	鈍赤褐色 (2.5YR5/4)	内：施釉・砂目・重ね焼き痕	肥前1600-1630
578			碗	10.0	3.9	6.6	灰白色 (2.5Y8/1)	釉：淡黄 (2.5Y8/3)	肥前17C後半
579			碗	10.6	4.3	6.3	鈍黄橙色 (10YR7/2)	釉：灰黄 (2.5Y7/2) 内：放れ砂付着	肥前17C
580			碗		5.0	(3.3)	灰白 (2.5Y8/1)	外：底裏に銘 染付は呉須 暗緑灰色	肥前1660-1690
581	溝32	白磁	小皿	5.5	2.7	1.4	白色	外：施釉・放れ砂付着	肥前18C
582		陶磁器	高杯	8.2	4.5	5.6	鈍赤褐色 (5YR5/3)	内外：鉄釉 見込み自然釉付着	肥前17C後半
583			碗	9.0	3.7	5.1	灰白色 (2.5Y8/1)	内外：施釉・文様 (2個で一対か?)	瀬戸美濃18C?

表14 南溝手遺跡石製品一覧

掲載 番号	遺構名	器種	石材	法量 (mm)			重量 (g)	時代	備考 (出土地区)		
				長さ	幅 (径)	厚さ (孔径)					
S1	竪穴住居 1	打製石包丁	玄武岩	71.0	49.0	12.0	66.8	弥生			
S2		砥石	石英斑岩	241.0	140.0	59.0	2880.0				
S3	柱穴および遺構 に伴わない遺物	石鏃	サヌカイト	18.5	12.0	2.5	0.5	弥生	82G出土		
S4		石鏃	サヌカイト	18.5	13.0	4.5	0.9		90E出土		
S5		石鏃	サヌカイト	24.0	13.5	3.2	1.2		旧7区出土		
S6		石鏃	サヌカイト	28.2	18.0	4.0	1.6		旧11区出土		
S7		石鏃	サヌカイト	24.5	20.0	3.7	1.9		旧1区出土		
S8		石鏃	サヌカイト	29.5	23.5	4.3	2.2		旧3区出土		
S9		打製石包丁	サヌカイト	49.0	57.0	7.5	25.3		88E出土		
S10		打製石包丁	サヌカイト	34.0	50.0	7.8	11.5		旧4区出土		
S11		打製石包丁	サヌカイト	35.0	42.0	9.0	13.2		76G出土		
S12		打製石包丁	サヌカイト	39.5	22.5	8.5	7.1		76E出土		
S13		打製石包丁	サヌカイト	39.0	33.0	11.0	11.5		76F出土		
S14		U.F.	サヌカイト	78.0	68.0	17.0	56.2		88E出土		
S15		竪穴住居 5	砥石	流紋岩	119.0	82.0	31.5		521.1	古墳	
S16		竪穴住居 6	白玉	滑石	3.0	6.5	2.0		0.1	古墳	まとめて出土
S17	白玉		滑石	3.0	6.0	2.0	0.2				
S18	白玉		滑石	3.0	6.0	2.0	0.2				
S19	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S20	白玉		滑石	2.5	6.5	2.0	0.1				
S21	白玉		滑石	2.0	6.0	2.0	0.1				
S22	白玉		滑石	2.5	6.5	2.0	0.2				
S23	白玉		滑石	3.5	6.0	2.0	0.2				
S24	白玉		滑石	3.0	6.0	2.0	0.2				
S25	白玉		滑石	3.5	6.5	2.0	0.2				
S26	白玉		滑石	2.4	6.0	2.0	0.1				
S27	白玉		滑石	3.0	6.0	2.0	0.2				
S28	白玉		滑石	1.6	5.6	2.5	0.1				
S29	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S30	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S31	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S32	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S33	白玉		滑石	3.6	6.0	1.8	0.2				
S34	白玉		滑石	4.0	6.0	2.3	0.2				
S35	白玉		滑石	4.7	6.0	2.0	0.2				
S36	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S37	白玉		滑石	4.0	6.0	2.0	0.2				
S38	白玉		滑石	2.5	6.0	2.0	0.1				
S39	白玉		滑石	2.0	6.0	2.0	0.1				
S40	柱穴および遺構 に伴わない遺物		石製模造品?	滑石	37.2	6.0	4.5	1.9	古墳?		旧1区出土
S41	温石?		滑石	81.5	45.0	17.0	97.9	中世	旧1区出土		
S42	溝23		砥石	流紋岩	64.0	36.5	13.5	33.6	近世		
S43	溝32		加工石	粘板岩	43.0	52.5	5.7	22.4	近世		
S44	柱穴および遺構 に伴わない遺物		砥石?	流紋岩	31.0	15.0	9.5	8.1	近世?		旧1区出土
S45		砥石	流紋岩	42.5	28.0	5.0	7.4	近世?	旧1区出土		
S46		砥石	流紋岩	67.0	38.0	20.0	54.4	近世?	旧11区出土		
S47		砥石?	花崗岩	61.0	32.0	22.0	65.1	近世?	旧1区出土		

表15-1 南溝手遺跡土製品一覧

掲載 番号	遺構名	器種	法量 (mm)				重量 (g)	色調	胎土	時代	備考 (出土地区)
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C1	柱穴および遺構 に伴わない遺物	鏡形土製品	50.0	-	17.0	-	20.3	明黄褐色 (10YR6/6)	細砂・粗砂	古墳	旧1区出土
C2	溝 6	土錘	(38.0)	15.0	15.0	6.0	8.0	褐灰色 (10YR4/1)	細砂・粗砂	古代	
C3		埴	(91.0)	119.0	67.0	-	781.6	鈍橙色 (7.5YR7/4)	細砂・粗砂・礫		
C4	河道 2	陶馬	236.0	47.0	53.0	-	553.0	暗灰色 (N3/)	細砂・粗砂	古代	
C5	柱穴および遺構 に伴わない遺物	円面硯	-	121.0	(29.0)	-	26.5	灰色 (N6/)	細砂	古代	旧9区出土
C6	埴	(151.0)	119.0	68.0	-	1859.5	鈍黄棕色 (10YR7/2)	細砂・粗砂・礫	80G出土		
C7	土壙墓 2	脚	(35.0)	11.0	12.0	-	4.0	浅黄棕色 (7.5YR8/4)	細砂	中世	



表15-2 南溝手遺跡土製品一覧

掲載 番号	遺構名	器種	法量 (mm)				重量 (g)	色調	胎土	時代	備考 (出土地区)
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C8	土塋墓10	土製円板	49.0	31.0	11.0	-	18.4	暗赤色 (10R3/4)	細砂・粗砂	中世	
C9	土塋58	土鉢	(34.5)	14.0	12.0	4.0	6.5	灰白色 (5Y8/1)	細砂・粗砂	中世	
C10	溝14	輪羽口	(50.5)	(36.0)	(52.0)	(30.0)	24.4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂・粗砂・礫	中世	
C11	柱穴および遺構に伴わない遺物	土鉢	27.2	9.0	8.5	2.8	2.0	橙色 (5YR6/6)	細砂	中世	旧9区出土
C12		土鉢	33.0	11.0	9.0	2.0	4.2	鈍褐色 (7.5YR6/4)	細砂		旧9区出土
C13		土鉢	(37.0)	14.0	14.0	3.0	5.2	橙色 (2.5YR6/6)	細砂		旧1区出土
C14		土鉢	(39.0)	10.0	11.0	4.0	3.6	鈍黄褐色 (10YR7/2)	細砂		旧1区出土
C15		土鉢	(40.0)	10.0	10.0	3.2	0.1	灰白色 (10YR8/2)	細砂		旧1区出土
C16		土鉢	52.0	11.5	12.0	3.0	7.9	明赤褐色 (2.5YR5/6)	細砂		旧9区出土
C17		土鉢	58.0	16.5	17.5	5.0	16.1	明褐色 (7.5YR5/6)	細砂		96F出土
C18		土鉢	60.0	18.0	16.5	5.2	17.6	灰白色 (10YR8/2)	細砂		旧1区出土
C19		土製円板	19.5	10.5	3.5	-	2.3	灰白色 (10Y7/1)	精良		82G出土
C20		土製円板	29.0	28.0	10.0	-	10.5	明青灰色 (5B7/1)	細砂		88F出土
C21		土製円板	31.0	27.0	13.0	-	10.8	暗赤褐色 (5YR3/4)	細砂		旧1区出土
C22		土製円板	29.0	31.0	9.0	-	10.1	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂		旧1区出土
C23		土製円板	36.0	33.0	11.0	-	18.5	灰褐色 (7.5YR5/2)	細砂・粗砂		旧1区出土
C24		土製円板	43.0	42.0	10.0	-	25.4	褐灰色 (10YR6/1)	細砂・粗砂		旧9区出土
C25		土製円板	55.0	44.0	13.0	-	37.4	灰色 (7.5Y6/1)	細砂・粗砂		旧1区出土
C26	輪羽口	(65.0)	(55.0)	(55.0)	(27.0)	69.2	灰白色 (10YR8/2)	細砂・粗砂・礫	78G出土		
C27	掘立柱建物9	土製円板	27.0	22.0	8.0	-	5.8	鈍褐色 (7.5YR7/4)	細砂・粗砂	近世	
C28	土塋74	土製円板	25.0	24.0	9.0	-	7.9	灰色 (N5)	細砂・粗砂	近世	
C29	溝23	土製円板	31.0	29.0	7.0	-	9.0	オリーブ黒 (10YR3/1)	細砂	近世	

表16 南溝手遺跡金属器一覧

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法量 (mm)			重量 (g)	時代	備考 (出土地区)
				長さ	幅	厚さ (孔径)			
M1	竪穴住居1	鉢	鉄	(83.9)	12.8	4.3	10.6	弥生	
M2		刀子	鉄	(66.6)	14.2	2.0	8.9		
M3		刀子	鉄	(39.0)	10.2	2.3	2.5		
M4		鏃	鉄	(38.8)	14.3	2.3	3.7		
M5		鏃	鉄	(29.3)	13.4	4.0	4.8		
M6		鏃?	鉄	(25.2)	7.4	4.2	1.6		
M7		鏃?	鉄	(37.6)	6.8	3.0	2.2		
M8		不明鉄製品	鉄	(33.1)	8.3	2.2	2.0		
M9	土塋13	鋤先	鉄	31.9	87.5	2.2	52.9	弥生	
M10	土塋36	鏃	鉄	(32.0)	13.5	2.8	3.5	弥生	
M11	土塋41	鉢	鉄	(36.9)	11.9	4.0	3.2	弥生	
M12	竪穴住居3	刀子?	鉄	(25.4)	13.9	2.0	2.1	古墳	
M13	土器溜まり2	摘鎌	鉄	79.9	23.8	2.0	19.5	古墳	
M14		刀子?	鉄	(45.6)	13.2	2.1	4.8		
M15	土塋墓8	不明鉄製品	鉄	(17.7)	9.7	4.5	1.1	中世	
M16	土塋墓14	短刀	鉄	(265.0)	25.4	5.6	67.6	中世	
M17	土塋58	釘	鉄	(32.1)	4.2	4.2	1.0	中世	
M18		釘	鉄	(32.8)	5.0	4.2	1.1		
M19		釘	鉄	(22.3)	5.2	5.0	1.3		
M20	溝14	釘	鉄	(33.6)	4.7	4.0	1.2	中世	
M21		釘	鉄	(25.7)	5.2	4.8	1.0		
M22	溝22	刀子	鉄	(53.6)	(15.5)	2.0	7.7	中世	
M23	柱穴および遺構に伴わない遺物	銭貨 (祥符通宝)	銅	-	24.4	0.8	1.6	中世?	76G出土 初鋳1008
M24		銭貨 (熙寧元宝)	銅	-	24.9	1.1	2.5		90E出土 初鋳1068
M25		銭貨 (元祐通宝)	銅	-	24.2	1.1	5.3		旧1区出土 初鋳1086
M26		銭貨 (元祐通宝)	銅	-	23.3	1.2	2.3		旧1区出土 初鋳1086
M27		銭貨 (永樂通宝)	銅	-	24.3	1.1	1.6		旧1区出土 初鋳1403
M28	土器箱2	銭貨 (寛永通宝)	銅	-	24.8	1.5	2.7	近世	古寛永
M29		銭貨 (寛永通宝)	銅	-	23.8	1.0	3.0		古寛永
M30	溝32	銭貨 (紹聖元宝)	銅	-	22.5	0.7	1.3	近世	初鋳1096
M31		銭貨 (寛永通宝)	銅	-	25.7	1.5	3.3		新寛永
M32	柱穴および遺構に伴わない遺物	釘	鉄	21.8	7.5	5.0	3.8	近世?	90F出土
M33		釘	鉄	30.0	8.5	6.1	3.0		78G出土
M34		釘	鉄	38.1	6.9	5.0	2.6		80G出土
M35		釘	鉄	41.9	7.1	5.2	5.3		80G出土
M36		釘	鉄	38.1	6.9	5.7	2.6		90E出土

表17 窪木遺跡竪穴住居一覽

遺構名	地区	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	軸	床面積 (㎡)	標高 (cm)	柱穴	柱間距離 (cm)	中央穴			方形上壁	
					N-°-E-W					形状	長×短	深さ	長×短	深さ
竪穴住居1	140Q	隅丸方形	453	405	N-5°-W	15.2	758	-	-	-	-	-	-	-
竪穴住居2	142M	不整方形	515	-	N-55°-E	-	738	-	-	楕円形	55×40	22	-	-
竪穴住居3	150S	隅丸方形	(510)	506	N-20°-E	21.3	658	4	220~207	円形	100×85	56	-	-
竪穴住居4	150S	円形	545	-	N-15°-W	(21.2)	675	4/5	250~215	円形	60×51	28	-	-
竪穴住居5	152S	楕円形	810	-	-	-	682	2/5	-	-	-	-	-	-
竪穴住居6	152S	円形	-	-	-	-	673	4/6	250	楕円形	65×55	37	-	-
竪穴住居7	152S	円形	685	-	-	-	645	4/6	300~230	楕円形	63×40	25	-	-
竪穴住居8	102C	長方形	450	(333)	N-16°-E	13.3	794	2	205	-	-	-	-	-
竪穴住居9	102E	方形?	-	-	-	-	826	-	-	-	-	-	-	-
竪穴住居10	100E	方形	(520)	515	N-40°-W	-	824	3/4	285~278	-	-	-	-	-
竪穴住居11	102A	方形	503	500	N-10°-E	22.0	797	4	294~197	-	-	-	-	-
竪穴住居12	104A	長方形	574	(480)	N-10°-E	(25.7)	831	3/4	280~240	-	-	-	-	-
竪穴住居13	104C	方形	590	(540)	N-10°-W	(30.0)	832	4	325~278	円形	63×55	40	-	-
竪穴住居14	104C	方形	650	635	N-45°-W	37.5	832	4	337~304	-	-	-	-	-
竪穴住居15	104C	方形	-	-	-	-	829	-	-	-	-	-	-	-
竪穴住居16	104C	方形	617	568	N-17°-W	32.5	833	4	340~270	-	-	-	-	-
竪穴住居17	104A	長方形	550	(360)	N-89°-W	(18.6)	825	2/4	262	-	-	-	-	-
竪穴住居18	104A	方形	505	470	N-1°-E	22.0	813	4	300~190	-	-	-	-	-
竪穴住居19	106C	方形	422	415	N-15°-W	16.4	814	4	250~185	-	-	-	-	-
竪穴住居20	106A	方形	523	493	N-2°-E	23.9	825	4	255~217	-	-	-	-	-
竪穴住居21	108C	方形	(485)	(475)	N-15°-E	(21.1)	826	1/4	-	-	-	-	-	-
竪穴住居22	108A	方形	-	-	-	-	825	2/4	205	-	-	-	-	-
竪穴住居23	108C	方形	462	446	N-75°-W	19.1	825	4	232~210	-	-	-	-	-
竪穴住居24	110C	方形	504	450	N-20°-E	20.9	820	4	315~200	-	-	-	-	-
竪穴住居25	110E	長方形	565	480	N-10°-E	25.4	825	4	270~223	-	-	-	-	-
竪穴住居26	110A	長方形	-	-	-	-	810	3/4	280~200	-	-	-	-	-
竪穴住居27	110A	方形	490	(480)	N-5°-E	21.9	812	4	270~215	-	-	-	-	-
竪穴住居28	110C	方形	460	450	N-20°-E	17.8	823	4	210~195	-	-	-	-	-
竪穴住居29	110E	方形	(480)	445	N-8°-W	20.8	818	4	245~205	-	-	-	-	-
竪穴住居30	110C	方形	480	473	N-65°-W	21.6	813	4	180~165	-	-	-	-	-
竪穴住居31	112E	方形	410	-	N-2°-E	-	815	2/4	190	-	-	-	-	-
竪穴住居32	112C	方形	575	-	N-30°-W	-	798	1/4	-	-	-	-	-	-
竪穴住居33	112C	長方形	335	280	N-50°-W	8.3	794	4	195~120	-	-	-	-	-
竪穴住居34	114C	方形	255	-	N-13°-E	-	805	2/4	135	-	-	-	-	-
竪穴住居35	144Q	方形	290	282	N-37°-E	6.9	779	?	-	-	-	-	-	-

表18-1 窪木遺跡掘立柱建物一覽

遺構名	地区	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	時代	備考
			桁	梁				N-°-E-W		
掘立柱建物1	102A	4×1	140~105	245~195	480	245	10.4	N-80°-E	古墳後期	
掘立柱建物2	104C	(4×1)	(165~130)	(270)	-	(270)	-	N-70°-W	古墳後期	
掘立柱建物3	104C	3×1	220~170	395~350	585	395	21.8	N-90°-W	古墳後期	石突き・滑石製白玉出土
掘立柱建物4	104A~C	4×1	205~190	355	800	355	28.3	N-88°-E	古墳後期	
掘立柱建物5	104~6C	3×1	210~155	460~430	565	460	25.4	N-85°-E	古墳後期	
掘立柱建物6	106C	3×1	180~140	400~370	505	400	19.1	N-4°-W	古墳後期	不明鉄製品出土
掘立柱建物7	106C	4×2	180~160	210~190	670	400	27.0	N-2°-W	古墳後期	
掘立柱建物8	106C	(3×2)	(235~170)	(220~210)	-	(430)	-	N-22°-E	古墳後期	
掘立柱建物9	106~8A	-	(175~160)	(260)	-	-	-	N-7°-E	古墳後期	
掘立柱建物10	108C	3×1	190~155	380	520	380	19.7	N-86°-W	古墳後期	
掘立柱建物11	108C	2×2	160~150	145~130	315	280	8.7	N-26°-E	古墳後期	
掘立柱建物12	108C	3×2	255~175	230~170	675	415	26.7	N-80°-W	古墳後期	
掘立柱建物13	108C~E	2×2	205~170	200~170	380	370	13.5	N-18°-E	古墳後期	

焼土面	壁体溝	高床部	カマド		時代	備考
			有無	位置		
無	無	無	無	-	弥生後期	不明鉄製品出土
有	無	-	-	-	弥生後期	
無	右	無	無	-	弥生中期	焼失住居 柱状片刃石斧・太型蛤刃石斧・石包丁・石鏃・分銅形土製品など出土
有	有	-	-	-	弥生後期	紡錘車・石鏃出土
-	有	-	-	-	弥生後期	
-	右	-	-	-	弥生後期	礫石出土
-	有	-	-	-	弥生後期	
無	無	有	無	-	古墳前期	
-	有	-	-	-	古墳後期	
有	無	-	有	北辺中央	古墳後期	焼失住居
右	右	無	有	北辺中央	古墳後期	須恵器把手付? 椀・鈎状角製品・鉄製ヤス・土製勾玉出土
有	有	-	-	-	古墳後期	須恵器把手付鉢出土
-	有	-	有	北辺中央	古墳後期	
無	右	無	有	北辺中央	古墳後期	
-	有	-	-	-	古墳後期	
無	有	無	有	北辺中央	古墳後期	
-	右	-	有	北辺中央	古墳後期	
無	有	無	有	北辺中央	古墳後期	
無	有	無	有	北辺中央	古墳後期	
無	有	無	有	北辺中央	古墳後期	
-	有	-	-	-	古墳後期	
-	有	-	-	-	古墳後期	
右	右	無	有	西辺中央	古墳後期	
無	有	無	有	北辺中央	古墳後期	摘録出土
無	右	無	有	北辺中央	古墳後期	
-	右	-	-	-	古墳後期	滑石製白玉1個・不明鉄製品1出土
無	有	無	有	北辺中央	古墳後期	
無	右	無	有	北辺中央	古墳後期	
無	有	無	無	-	古墳後期	
無	有	無	有	西辺中央	古墳後期	
-	右	-	有	北辺中央	古墳後期	
-	有	-	有	北辺中央	古墳後期	鉄製又鏃・不明鉄製品1出土
無	有	無	有	西辺中央	古墳後期	
-	右	-	-	-	古墳後期	
無	無	無	有	北辺角	古墳後期	北辺角にカマドをもつ小規模住居

表18-2 窪木遺跡掘立柱建物一覧

遺構名	地区	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (㎡)	棟方向 N°-E°-W	時代	備考
			桁	梁						
掘立柱建物14	110C	3×2	295~135	215~180	595	415	23.3	N-16°-E	古墳後期	鉄鏃出土
掘立柱建物15	110C	3×1	280~120	420~405	565	420	23.5	N-87°-E	古墳後期	
掘立柱建物16	110C	3×2	215~130	185~170	520	365	18.2	N-27°-E	古墳後期	
掘立柱建物17	140Q	(2×1)	(180~140)	(180)	-	(180)	-	N-85°-E	古代	
掘立柱建物18	142O	3×2	180~170	200~170	520	370	19.2	N-83°-W	古代	
掘立柱建物19	142~144O	5×3	300~180	250~165	1200	645	75.0	N-85°-W	古代	
掘立柱建物20	142O~Q	3×3	280~200	280~190	910	700	62.1	N-86°-W	古代	
掘立柱建物21	106C	3×1	180~110	300~295	435	300	12.7	N-88°-E	中世	
掘立柱建物22	112~114C	3×1	250~190	360~340	670	360	23.3	N-86°-E	中世	
掘立柱建物23	112~114C	3×1	220~190	330	610	330	20.2	N-84°-E	中世	
掘立柱建物24	116C~F	2×2	275~230	230~180	505	445	21.8	N-77°-E	中世	
掘立柱建物25	114C	-	(300)	(180)	-	-	-	N-88°-E	中世	
掘立柱建物26	152S	(3×1)	(260~220)	(330)	-	(330)	-	N-87°-E	中世	

表19 窪木遺跡柱穴一覧

遺構名	地区	規模	全長 (cm)	柱間距離 (cm)	方向	掘り方	時代	備考
					N-°-E・W			
柱穴列 1	102C	3 間	470	190~120	N-12°-E	円形	古墳後期	
柱穴列 2	110E	3 間	560	190~180	N-38°-W	円形	古墳後期	
柱穴列 3	112A	2 間	440	220	N-80°-E	円形	古墳後期	
柱穴列 4	114C	3 間	615	235~190	N-88°-E	円形	中世	
柱穴列 5	118E	4 間	870	280~165	N-89°-W	円形	中世	

表20 窪木遺跡土墳墓一覧

遺構名	地区	平面形	掘り方上面 (cm)		掘り方下面 (cm)		深さ (cm)	主軸 N-°-E・W	時代	備考
			長さ	幅	長さ	幅				
土墳墓 1	102C	不整長方形	98	75	77	62	26	N-89°-E	中世	
土墳墓 2	102C	楕円形	85	71	75	53	10	N-14°-E	中世	
土墳墓 3	110A	隅丸長方形	165	94	148	84	17	N-65°-E	中世	
土墳墓 4	114C	隅丸長方形	154	97	140	80	33	N-8°-E	中世	
土墳墓 5	114C	楕円形	(150)	105	98	48	48	N-87°-E	中世	
土墳墓 6	124E	不整楕円形	101	63	94	44	5	N-25°-W	中世	

表21-1 窪木遺跡土墳墓一覧

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時代	備考
				長軸	短軸	深さ			
土墳 1	114C	不整円形	Ⅲ a	107	82	48	742	弥生中期	石包丁出土
土墳 2	114C	楕円形	Ⅲ a	106	76	18	777	弥生中期	
土墳 3	114C	楕円形	Ⅱ a	60	40	29	774	弥生中期	
土墳 4	114C	楕円形	Ⅱ b	88	77	40	749	弥生中期	
土墳 5	116C	長楕円形	Ⅲ e	245	80	36	753	弥生中期	
土墳 6	116C	不整楕円形	Ⅲ b	74	48	5	789	弥生中期	
土墳 7	116C	不整楕円形?	Ⅲ a	-	75	25	783	弥生中期	
土墳 8	116C	不整楕円形	Ⅲ a	(193)	105	34	770	弥生中期	
土墳 9	116E	不整円形	Ⅲ b	60	53	17	783	弥生中期	
土墳10	116E	不整楕円形	Ⅲ c	214	156	19	786	弥生中期	石斧・分銅形土製品出土
土墳11	116C	不整方形?	Ⅲ b?	-	-	18	786	弥生中期	
土墳12	116C	不整円形	Ⅲ a	(71)	66	23	787	弥生中期	
土墳13	116C	不整楕円形	Ⅲ a	134	65	8	790	弥生中期	
土墳14	116C	長楕円形	Ⅲ a	382	130	27	779	弥生中期	
土墳15	118C	不整楕円形	Ⅲ a	138	80	29	776	弥生中期	
土墳16	118C	不整三角形?	Ⅲ b?	111	-	25	780	弥生中期	
土墳17	118C	不整形	Ⅲ a	180	120	20	790	弥生中期	石鏃出土
土墳18	118C	不整形	Ⅲ a	64	44	16	778	弥生中期	
土墳19	118C	不整方形	Ⅲ b	110	108	12	788	弥生中期	
土墳20	118C	不整楕円形?	Ⅲ b?	(260)	-	9	795	弥生中期	
土墳21	118C	楕円形	Ⅲ a	-	30	14	786	弥生中期	石鏃出土
土墳22	116C	不整楕円形?	Ⅲ b?	-	-	20	770	弥生中期?	
土墳23	116C	不整楕円形	Ⅲ a	(78)	30	40	754	弥生中期	
土墳24	118C	方形?	Ⅲ c	(215) ?	-	27	768	弥生中期	
土墳25	118E	不整楕円形	Ⅲ a	141	70	15	791	弥生中期	
土墳26	118E	楕円形	Ⅲ a	59	46	14	790	弥生中期?	
土墳27	116E	長楕円形	Ⅲ a	459	108	25	780	弥生中期	
土墳28	116E	長楕円形?	Ⅲ a	-	68	7	806	弥生中期	摘鎌?石鏃出土
土墳29	118E	不整楕円形	Ⅲ a	174	95	12	790	弥生中期	
土墳30	118C	楕円形?	Ⅲ b	-	-	32	784	弥生中期	

表21-2 窪木遺跡土壌一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時代	備考
				長軸	短軸	深さ			
土壌31	118E	-	-	-	-	-	-	弥生中期?	C14 Bp2450
土壌32	118C	不整楕円形	Ⅲ e	187	71	22	771	弥生中期	
土壌33	120C	隅丸長方形	Ⅲ a	(80)	52	16	775	弥生中期?	
土壌34	120C	円形	Ⅲ b	40	39	10	779	弥生中期	
土壌35	120C	不整長楕円形	Ⅲ a	776	140	47	742	弥生中期	
土壌36	120C	不整楕円形	Ⅲ a	158	80	24	766	弥生中期	
土壌37	118E	不整楕円形	Ⅲ a	68	56	13	788	弥生中期	
土壌38	120C	不整長方形?	Ⅲ a?	(168)	-	11	785	弥生中期?	
土壌39	120C	不整円形	Ⅲ a	168	-	20	780	弥生中期	
土壌40	120C	円形?	Ⅲ a?	-	-	45	763	弥生中期	
土壌41	122E	楕円形	Ⅲ b	78	55	23	764	弥生中期?	紡錘車出土
土壌42	122E	円形	Ⅲ b	87	86	38	748	弥生中期	石鏃出土
土壌43	122E	円形	Ⅲ b	49	45	18	768	弥生中期?	
土壌44	122E	不整楕円形	Ⅲ b	108	84	10	780	弥生中期	
土壌45	122E	楕円形	Ⅲ a	44	35	2	786	弥生中期	
土壌46	122E	楕円形	Ⅲ b	60	47	7	783	弥生中期	
土壌47	124E	不整長楕円形	Ⅲ a	-	68	11	818	弥生中期	
土壌48	124E	不整楕円形?	Ⅲ a?	-	-	11	828	弥生中期	
土壌49	124E	不整楕円形	Ⅲ a	(102)	58	14	825	弥生中期	
土壌50	124G	円形	Ⅲ a	45	42	10	822	弥生中期	
土壌51	124G	不整方形	Ⅲ a	113	95	18	818	弥生前期?	前期甕混入
土壌52	126G	楕円形	Ⅲ a	59	30	12	819	弥生後期	
土壌53	140O	不整円形	Ⅲ b	97	82	36	759	弥生後期	
土壌54	140O	楕円形	Ⅲ a	-	96	12	758	弥生中期	
土壌55	140O	円形	Ⅲ a	120	109	24	753	弥生後期	
土壌56	140O	隅丸方形	Ⅲ a	98	78	20	755	弥生後期	
土壌57	140O	楕円形	Ⅲ a	115	81	22	688	弥生後期?	
土壌58	140O	不整楕円形	Ⅲ a	195	141	20	760	弥生後期	
土壌59	142O	長方形	Ⅲ b	133	77	40	736	弥生後期	
土壌60	140O	楕円形	Ⅲ b	168	153	60	716	弥生中期	
土壌61	148S	長楕円形	Ⅲ a	(216)	105	16	715	弥生後期	
土壌62	148S	楕円形	Ⅲ c	(119)	(76)	16	716	弥生中期	
土壌63	148S	楕円形	Ⅲ a	(98)	87	14	698	弥生後期	
土壌64	150S	楕円形	Ⅲ b	69	-	61	674	弥生中期	
土壌65	150S	楕円形	Ⅲ b	87	-	37	790	弥生後期	
土壌66	150S	隅丸方形	Ⅲ a	(120)	110	34	622	弥生中期	
土壌67	150S	楕円形	Ⅲ b	128	89	52	668	弥生後期?	
土壌68	150S	不整円形	Ⅲ b	78	-	22	696	弥生後期?	
土壌69	150S	不整楕円形	Ⅲ a	(65)	46	8	716	弥生後期	
土壌70	150S	不整楕円形	Ⅲ a	150	110	40	679	弥生中期	
土壌71	150S	楕円形	Ⅲ a	126	55	58	662	弥生中期	
土壌72	150S	楕円形	Ⅲ b	93	70	34	694	弥生後期	
土壌73	150S	不整円形	Ⅲ a	-	159	45	670	弥生中期	
土壌74	150S	不整楕円形	Ⅲ a	155	(113)	30	690	弥生中期	
土壌75	152S	楕円形	Ⅲ a	148	(75)	24	697	弥生中期	
土壌76	152S	楕円形	Ⅲ a	96	80	38	682	弥生後期	
土壌77	152S	円形?	Ⅲ a	-	-	12	699	弥生後期	
土壌78	152S	楕円形	Ⅱ + Ⅲ a	-	67	52	658	弥生後期	
土壌79	102A	円形	Ⅲ a	106	97	22	814	古墳後期	
土壌80	102A	不整円形	Ⅲ a	176	169	44	798	古墳前期	鉄鏃?出土
土壌81	102C	隅丸長方形	Ⅱ a	113	83	12	828	古墳後期	焼成土壌
土壌82	102C	隅丸長方形	Ⅲ a	109	77	14	823	古墳後期?	焼成土壌?
土壌83	102C	不整長方形	Ⅲ a	(107)	67	25	813	古墳後期	
土壌84	106C	楕円形	Ⅲ a	(120)	64	17	804	古墳前期	
土壌85	106C	円形	Ⅱ e	142	138	78	760	古墳後期	
土壌86	104E	不整円形?	Ⅲ b	158	-	145	711	古墳後期	鉄鏃出土
土壌87	106C	不整楕円形?	?	-	-	38	785	古墳前期?	
土壌88	108C	不整円形	Ⅲ a	132	104	32	799	古墳後期	
土壌89	110C	円形	Ⅲ a	72	70	24	792	古墳後期	
土壌90	110C	円形	Ⅲ a	97	96	17	817	古墳後期	

表21-3 窪木遺跡土壌一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時代	備考
				長軸	短軸	深さ			
土壌91	110E	円形	Ⅱ a	86	76	26	796	古墳後期	
土壌92	110E	楕円形	Ⅲ b	(130)	79	29	790	古墳後期	
土壌93	112E	不整円形	Ⅱ a	112	109	41	777	古墳後期	
土壌94	112C	不整円形	Ⅱ a	(56)	40	20	800	古墳後期	カマド状
土壌95	112A	不整楕円形	Ⅲ a	130	63	20	805	古墳後期?	
土壌96	112A	不整楕円形	Ⅲ a	145	64	24	801	古墳後期	
土壌97	112C	不整円形?	(Ⅲ a)	(108)	-	(20)	(812)	古墳後期	刀子出土
土壌98	126G	円形?	Ⅲ a	-	-	8	832	古墳後期	
土壌99	144O	楕円形	Ⅲ b	86	65	22	773	古代	
土壌100	142O	楕円形	Ⅲ b	157	93	29	764	古代	土鍾出土
土壌101	142O	楕円形	Ⅲ a	109	77	13	780	古代	
土壌102	106C	円形	Ⅲ a	(200)	-	155	672	中世	
土壌103	110C	楕円形	Ⅲ b	125	85	12	821	中世	
土壌104	110C	不整円形	Ⅲ b	84	74	35	799	中世	
土壌105	110C	楕円形	Ⅲ b	69	67	34	802	中世	
土壌106	112A	楕円形	Ⅲ b	111	60	29	796	中世	
土壌107	112C	楕円形	Ⅲ e	96	68	22	812	中世	
土壌108	112C	隅丸長方形	Ⅲ a	164	(94)	18	815	中世	
土壌109	112C	楕円形	Ⅲ a	72	65	36	801	中世	
土壌110	110E	円形?	Ⅱ a	193	-	128	707	中世	
土壌111	114E	不整楕円形	Ⅲ a	195	101	25	780	中世	
土壌112	114E	不整楕円形	Ⅲ b	143	83	6	792	中世	
土壌113	118E	隅丸長方形	Ⅲ a	(212)	118	29	775	中世	
土壌114	122E	隅丸長方形	Ⅲ a	173	70	12	823	中世	
土壌115	124G	楕円形	Ⅲ b	108	86	18	815	中世	
土壌116	124G	不整楕円形	Ⅲ a	92	88	20	805	中世	
土壌117	122G	不整楕円形	Ⅲ a	180	152	24	810	中世	
土壌118	122G	隅丸長方形	Ⅲ a	89	(88)	23	808	中世	
土壌119	124E	隅丸長方形	Ⅲ a	182	91	18	817	中世	
土壌120	124F	不整楕円形	Ⅲ a	185	94	15	824	中世	
土壌121	130G	楕円形	Ⅲ c	-	82	20	710	中世	
土壌122	130I	隅丸長方形?	Ⅲ a?	101	-	7	722	中世	
土壌123	130I	不整楕円形	Ⅲ a	132	(84)	15	714	中世	

表22 窪木遺跡溝一覽

遺構名	地区	断面形	幅 (cm)	深さ (cm)	方向	時代	備考
溝 1	106~108C	Ⅲ c・c	121	20~10	東西~北東	弥生	
溝 2 a	106~112C	Ⅲ b	115	45	東西	弥生中期?	
溝 2 b	106~112C	Ⅲ e	88	25	東西	弥生後期	
溝 2 c	106~112C	Ⅲ a	87	10	東西	弥生	
溝 3	116E	Ⅲ a	50	15	南北	弥生中期?	
溝 4	150S	Ⅲ a	106	20	南北	弥生	
溝 5	100C~E	Ⅲ a	88	13	北東~南西	古墳	遺跡の西端を巡る
溝 6	100C~E	Ⅲ a	70~60	48~33	北東~南西	古墳後期	
溝 7	106A~E	Ⅲ b	75	26	南北	古墳後期	集落の中央を貫通する
溝 8	114A~E	Ⅲ a	102	112	南北	古墳後期	集落の東端を巡る
溝 9	138~142O	Ⅲ b	98	37	東西~南西	古代	
溝10	142~144O	Ⅲ b	40	8	北北西~東南東	古代	
溝11	142~144O	Ⅲ a	107	19	北北西~東南東	古代	土器溜まり5に続く
溝12	108A	Ⅲ b?	-	98	北北西~南南東	中世	屋敷地の西を区画する堀状
溝13	108~110A	Ⅲ a	114	70	西南西~東北東	中世	屋敷地の南を区画する土堀
溝14	124E	Ⅲ b	39	7	東西	中世	
溝15	124F	Ⅲ a	60	8	東西	中世	
溝16	130K	Ⅲ a	50	16	北東~南西	中世	

表23-1 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
1	磔層	縄文土器	深鉢				黒褐色 (10YR3/2)	外：突帯に刻み目	
2			深鉢				鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：突帯に刻み目	
3	堅穴住居1	弥生土器	長頸壺	17.4		(5.7)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
4			壺	10.0		(12.0)	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
5			甗	11.7		(7.5)	鈍褐色 (7.5YR7/4)	外：タタキ後ヘラミガキ	
6			高杯	(23.0)		(3.2)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	内：ヨコナデ・放射状ヘラミガキ	
7	堅穴住居2	弥生土器	甗	13.2		(6.2)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
8			甗			(5.0)	橙色 (5YR7/6)		
9			高杯	(22.6)		(2.8)	褐色 (5YR6/8)		
10	堅穴住居3	弥生土器	壺	(18.1)		(2.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	内：波状文	
11			直口壺	8.2		(10.4)	鈍褐色 (7.5YR7/4)	外：螺旋状沈線の後門縁に仕上げ	
12			甗	10.8		(3.9)	灰白色 (10YR8/2)		
13			甗	(13.0)		(7.1)	鈍褐色 (7.5YR7/3)		
14			甗	13.2		(19.9)	灰黄褐色 (10YR6/2)		
15			甗	(18.0)		(3.2)	灰白色 (10YR8/2)		
16			甗	18.8		(5.7)	灰白色 (10YR8/2)		
17			甗				鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：タタキ目のちハケメ	
18			甗or壺		6.0	(2.9)	鈍褐色 (10YR7/2)		
19			高杯	8.3		(7.4)	鈍黄褐色 (10YR7/2)		
20			高杯		9.4	(5.3)	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
21	台付鉢	19.3	9.1	13.4	鈍黄褐色 (10YR7/2)	外：穿孔2個			
22	堅穴住居4	弥生土器	壺	6.7		(9.5)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
23			壺		3.8	(11.4)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
24			甗	(12.5)		(5.0)	褐色 (5YR6/6)		
25			甗	13.2		(7.7)	褐色 (5YR6/6)		
26			鉢	(16.0)		(4.2)	灰白色 (10YR8/2)		
27			高杯	16.0		(5.3)	褐色 (2.5YR6/6)	外：くもの巣状ヘラミガキ 内：放射状ヘラミガキ	
28			高杯		11.8	(6.7)	褐色 (5YR6/6)	外：穿孔2段3方向	
29	高杯		15.0	(4.2)	褐色 (5YR6/6)	外：穿孔1個残			
30	堅穴住居5	弥生土器	甗	10.4		(9.8)	浅黄褐色 (7.5YR8/6)		
31			甗	11.8		(10.4)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
32			甗	12.8		(5.8)	鈍褐色 (7.5YR6/3)		
33			甗	15.6		(8.0)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
34			高杯	24.4		(6.6)	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：くもの巣状ヘラミガキ	
35			台付鉢		14.3	(23.4)	褐色 (5YR6/8)	外：穿孔9個2巡り	
36			台付鉢		11.1	(6.8)	明赤褐色 (5YR5/8)	外：5方向に穿孔5~8個・計33か所	
37			鉢	(18.9)		(8.3)	浅黄色 (2.5Y7/3)		
38			蓋			(2.8)	灰黄褐色 (10YR5/2)		
39	堅穴住居6	弥生土器	高杯	25.3		(6.2)	赤色 (10R5/8)		
40			高杯	(22.2)		(2.4)	褐色 (5YR7/8)		
41	堅穴住居7	弥生土器	甗		4.6	(6.8)	浅黄褐色 (10YR8/3)		
42			甗	14.2		(4.6)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
43			甗	(14.9)		(6.7)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
44			甗	(14.0)		(4.2)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
45			甗	15.0		(4.5)	褐色 (5YR6/6)		
46			甗	12.8		(1.9)	褐色 (5YR6/6)		
47			高杯	13.4		(6.5)	褐色 (5YR6/6)		
48			高杯		(10.6)	(3.5)	灰黄褐色 (10YR5/2)	外：刺突(貫通していない) 3個残存	
49	鉢	11.5	4.2	6.1	鈍黄褐色 (10YR7/4)				
50	土器棺1	弥生土器	壺	12.3	6.8	28.0	鈍黄褐色 (10YR7/2)	外：穿孔2個1対 ハケ前にタタキ口痕跡	
51	土器棺2	弥生土器	高杯	26.0		(7.6)	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
52			甗	17.5	9.6	40.0	灰白色 (10YR8/2)		
53	土器棺3	弥生土器	台付き鉢	16.5	9.8	20.6	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外：穿孔17か所	
54	土器棺4	弥生土器	壺	17.9	6.2	32.4	浅黄褐色 (10YR8/3)	内外面ともに煤付着	
55	土器棺5	弥生土器	甗		10.6	(42.0)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)		
56	土器棺6	弥生土器	甗	13.0		(19.5)	褐色 (5YR6/6)		
57	土壇1	弥生土器	甗	(15.0)		(4.5)	灰黄褐色 (10YR4/2)		
58			甗	(17.6)		(7.3)	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
59			甗	22.0		(6.6)	褐色 (7.5YR6/8)		
60			甗		5.0	(5.7)	鈍褐色 (7.5YR5/2)		

表23-2 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
61			甕		(5.6)	5.5	鈍褐色 (7.5YR5.4)		
62	土壇1	弥生土器	鉢			7.3	(2.1)	鈍赤褐色 (5YR5/4)	
63			鉢			5.4	4.2	鈍褐色 (7.5YR5.3)	外：穿孔2個1対
64	土壇2	弥生土器	甕			5.3	6.7	鈍褐色 (5YR6/4)	外：底部穿孔
65			壺	18.2			6.2	鈍褐色 (7.5YR5.4)	
66	土壇3	弥生土器	甕	(17.3)			(3.4)	鈍褐色 (7.5YR6.4)	外：円形浮文
67			甕	18.0			(7.0)	橙色 (5YR6.8)	
68	土壇4	弥生土器	甕			6.3	(4.3)	灰黄褐色 (10YR6.2)	
69			壺	8.8	6.9	20.4		褐色 (5YR6/6)	外：貝殻片痕文
70			甕	13.2			6.3	橙色 (7.5YR7/6)	
71			甕	15.7			(23.0)	鈍褐色 (7.5YR6.4)	
72	土壇5	弥生土器	甕			6.2	6.5	鈍赤褐色 (5YR5/4)	
73			高杯			13.2	11.0	橙色 (7.5YR7/6)	
74			台付き鉢?			9.6	4.9	鈍黄褐色 (10YR7.3)	外：三角形の透かし孔5個
75	土壇6	弥生土器	甕				(3.3)	明赤褐色 (5YR5/6)	
76			壺	19.5				鈍褐色 (7.5YR6.4)	
77	土壇7	弥生土器	甕	13.9				鈍褐色 (7.5YR6.4)	
78			甕					灰褐色 (7.5YR4.2)	
79			高杯	24.4				鈍赤褐色 (5YR5/4)	
80			甕	(31.6)			5.2	鈍赤褐色 (5YR5/4)	
81			甕			11.7	(34.5)	明赤褐色 (5YR5/6)	外：スス附着
82			甕	15.1	5.2	24.3		橙色 (5YR6.6)	
83			甕	(15.6)			(9.3)	鈍黄褐色 (10YR7.2)	
84			甕	14.7			7.8	鈍褐色 (7.5YR6.3)	外：スス附着
85	土壇8	弥生土器	甕	(17.0)			(7.5)	橙色 (5YR7.6)	
86			甕	14.8			17.9	明赤褐色 (5YR5/6)	
87			甕	(18.0)			(9.3)	鈍黄褐色 (10YR6.3)	
88			甕			5.2	20.6	赤色 (10YR5.6)	外：スス附着
89			甕			4.6	8.7	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外：スス附着
90			高杯	(23.4)			7.9	橙色 (7.5YR6/6)	外：穿孔2個1対
91			高杯			(12.2)	(11.1)	鈍黄褐色 (10YR5.3)	
92	土壇9	弥生土器	甕	16.0				明赤褐色 (5YR5/6)	
93			甕	21.8				鈍赤褐色 (5YR5/4)	
94			壺	17.0	9.4	52.4		明赤褐色 (5YR5/6)	
95			壺	17.1				鈍黄褐色 (10YR6/4)	
96			甕	12.3				浅黄褐色 (10YR8.3)	
97			甕	15.9				橙色 (5YR6.6)	
98	土壇10	弥生土器	甕	16.7				鈍黄褐色 (10YR7.2)	
99			甕	20.2	5.2	33.1		明赤褐色 (2.5YR5/6)	
100			甕			8.0		鈍褐色 (7.5YR7.4)	
101			甕			5.3		鈍黄褐色 (10YR6.3)	
102			高杯	15.3				鈍褐色 (7.5YR6.4)	
103	土壇11	弥生土器	壺				(4.0)	黒褐色 (10YR3/1)	
104			甕			(6.0)	(6.4)	橙色 (5YR6.6)	
105	土壇12	弥生土器	甕				8.7	褐灰色 (10YR6/1)	
106			壺	9.2			(4.0)	鈍褐色 (7.5YR5.3)	外：穿孔2個1対
107	土壇13	弥生土器	甕	(13.8)			(4.2)	橙色 (5YR6/8)	
108			甕				(3.5)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	
109			壺				(4.3)	鈍褐色 (7.5YR7/4)	
110			壺			9.4	6.0	明赤褐色 (2.5YR5/6)	
111			甕	17.1			4.3	橙色 (5YR6.6)	
112			甕	19.7			5.1	鈍褐色 (7.5YR5/3)	
113	土壇14	弥生土器	甕	(21.6)			(5.7)	橙色 (5YR6.6)	
114			甕	16.5			(8.3)	橙色 (5YR6.6)	
115			甕	24.0			(13.0)	鈍赤褐色 (5YR5/4)	
116			甕	(28.8)			(10.3)	鈍褐色 (7.5YR6.4)	
117			甕			5.2	(5.7)	橙色 (5YR6.6)	
118			甕			4.2	(12.7)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	
119	土壇15	弥生土器	甕	(17.4)			(6.6)	鈍褐色 (7.5YR7.4)	
120			甕	(24.6)			(4.2)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	



表23-3 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
121	土塋15	弥生土器	甕		7.2	(7.9)	鈍橙色 (7.5YR6.4)		
122			高杯	(27.6)		(5.6)	鈍黄褐色 (10YR7.3)	外：穿孔2組1対	
123	土塋16	弥生土器	壺			(21.3)	明赤褐色 (5YR5/6)	外：波状文7・13条、櫛描沈線15・28条	
124			鉢	21.0		(10.5)	鈍褐色 (7.5YR5/4)		
125	土塋17	弥生土器	壺		20.7		明赤褐色 (5YR5/6)		
126			甕	(17.4)		4.6	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
127			甕	14.4		(6.2)	橙色 (5YR6.8)		
128			甕	28.9		9.3	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
129			甕	29.0		12.9	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
130	土塋18	弥生土器	甕		5.0	10.5	鈍褐色 (7.5YR5/3)	外：スス付着	
131	土塋19	弥生土器	甕			(5.4)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)		
132	土塋20	弥生土器	甕		(4.8)	(3.5)	鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：底部穿孔	
133	土塋21	弥生土器	甕	(17.0)		(1.7)	鈍褐色 (7.5YR5/4)		
134	土塋23	弥生土器	甕		(4.2)	(2.5)	橙色 (5YR6.8)		
135	土塋24	弥生土器	甕	(14.4)			明赤褐色 (5YR5/8)		
136			甕	(18.0)			鈍橙色 (7.5YR7.4)		
137			甕	(20.0)			鈍褐色 (7.5YR7/4)		
138			壺		9.0		鈍赤褐色 (5YR5/4)		
139	土塋25	弥生土器	壺	(12.8)			明赤褐色 (2.5YR5/6)	外：波状文・櫛描沈線8条?	
140			甕		(5.6)		黄灰色 (2.5YR4.1)		
141			甕	(32.6)			橙色 (5YR6.6)		
142	土塋27	弥生土器	壺	(13.8)			明赤褐色 (5YR5/6)		
143			甕		11.7		鈍赤褐色 (5YR5/4)		
144			甕	20.8			橙色 (5YR6.6)		
145			甕	18.1			橙色 (5YR6.6)		
146			甕	18.6			鈍褐色 (7.5YR6/4)		
147			甕		6.2		鈍褐色 (7.5YR6/4)		
148			ジョッキ形土器		9.2		明赤褐色 (5YR5/4)		
149		高杯	21.5			鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：穿孔2個1対		
150	土塋28	弥生土器	壺	(16.1)			鈍褐色 (7.5YR6.4)		
151			壺		(6.8)		鈍赤褐色 (5YR5/4)		
152			甕	(17.7)			橙色 (5YR6/6)		
153	土塋29	弥生土器	甕	(22.4)			橙色 (5YR6.6)		
154	土塋30	弥生土器	甕	23.6			橙色 (7.5YR6/6)		
155			甕	25.9			橙色 (5YR6.6)		
156	土塋31	弥生土器	壺		6.1		橙色 (7.5YR6/6)		
157	土塋32	弥生土器	甕		4.8	(3.7)	橙色 (2.5YR6/6)		
158	土塋34	弥生土器	甕	17.7	6.0	26.4	明赤褐色 (5YR5/6)		
159	土塋35	弥生土器	壺	(13.6)			明赤褐色 (2.5YR5/6)		
160			壺				灰白色 (10YR8/2)		
161			壺				橙色 (7.5YR6/6)		
162			壺				鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：波状文・沈線5条	
163			壺		6.5		橙色 (7.5YR7/6)		
164			壺		8.8		明赤褐色 (5YR5/6)		
165			壺		8.6		橙色 (5YR6.6)		
166			壺		9.4		鈍赤褐色 (5YR5/4)		
167			壺		8.0		橙色 (5YR6.6)		
168			甕	16.0			橙色 (5YR6.6)		
169			甕	(17.2)			橙色 (5YR6.6)		
170			甕	(14.4)			鈍褐色 (7.5YR6.4)		
171			甕	(14.7)			鈍褐色 (7.5YR6.3)		
172			甕	16.5			鈍褐色 (7.5YR6/4)		
173			壺	17.0			橙色 (5YR6.6)		
174			甕	17.2			橙色 (5YR6.6)		
175			甕	19.8			橙色 (2.5YR6/8)		
176			甕	20.8			橙色 (5YR6.8)		
177			甕	(22.6)			鈍褐色 (7.5YR5/4)		
178			甕	24.8			橙色 (5YR6.8)		
179	甕	(24.6)			鈍褐色 (7.5YR6.4)				
180		甕		5.2		鈍赤褐色 (5YR5/4)			

表23-4 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
181	土壙35	弥生土器	甕		5.5		鈍赤褐色 (2.5YR5/4)	外：底部穿孔	
182			鉢 (ジョッキ形)		9.4		鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：穿孔2個1対	
183			台付鉢		13.1			灰黄褐色 (10YR6/2)	外：穿孔2個1対
184	土壙36	弥生土器	壺			(9.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：櫛沈残4条・波状文8条・刺突2段	
185			甕	16.9		10.1	橙色 (2.5YR6/6)		
186			甕	26.0		(7.0)	橙色 (2.5YR6/6)		
187			甕	27.4		(6.8)	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
188			甕		(4.5)	5.2	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
189			甕		4.2	(6.6)	明赤褐色 (5YR5/6)		
190			甕		5.8	(5.8)	鈍黄橙色 (10YR6/3)	外：底部穿孔	
191		高杯	23.0		6.2	橙色 (7.5YR6/6)			
192	土壙37	弥生土器	壺			7.9	橙色 (5YR6/6)	外：櫛描沈線9条?・波状文・刺突	
193	土壙39	弥生土器	甕	13.5		9.6	赤褐色 (5YR4/6)		
194			甕	17.8		5.9	明赤褐色 (2.5YR5/6)		
195			甕		4.7	11.1	鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：スス付着	
196			高杯		12.4	8.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：スカシ孔3か所	
197	土壙40	弥生土器	壺	15.2		(13.3)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：穿孔2個1対	
198			壺	14.4		22.0	灰白色 (10YR8/2)		
199			壺		7.0	(8.0)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
200			壺		9.4	(8.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
201			甕	(17.0)		(5.2)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
202			甕	19.3		6.8	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
203			甕	(17.0)		(11.0)	浅黄橙色 (5YR8/3)		
204			甕	15.4		(12.3)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
205			甕	(15.6)		(16.5)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：スス付着	
206			甕		5.2	(9.5)	浅黄橙色 (10YR8/4)		
207			甕		6.3	(6.9)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
208			甕	(15.0)		(11.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
209			甕	(18.6)		(10.8)	鈍橙色 (2.5YR6/4)		
210	甕	27.8		(21.1)	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
211	甕	35.2		(18.0)	灰黄褐色 (10YR5/2)				
212		高杯	27.8	14.4	15.0	橙色 (5YR6/8)			
213		高杯		11.0	(7.4)	橙色 (2.5YR6/6)	外：穿孔2個残		
214	土壙42	弥生土器	壺			(6.6)	赤色 (10R5/8)		
215			甕	(17.0)		(7.8)	鈍橙色 (5YR6/4)		
216			甕	(16.0)		(5.5)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
217			高杯	(22.0)		(4.7)	橙色 (2.5YR6/8)		
218	土壙44	弥生土器	甕	15.5		(25.1)	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
219	土壙45	弥生土器	壺	(11.6)		10.1	橙色 (5YR6/6)		
220			壺		7.0	(4.8)	橙色 (5YR6/6)		
221	土壙46	弥生土器	甕	(16.0)		11.0	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
222	土壙47	弥生土器	甕			2.4	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
223			甕			3.5	鈍橙色 (7.5YR5/4)		
224			甕	15.8		4.0	鈍橙色 (5YR6/4)		
225			鉢	(14.8)		4.6	橙色 (5YR6/6)		
226	土壙48	弥生土器	甕			(5.0)	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
227			壺		8.7	(7.2)	橙色 (5YR6/6)		
228	土壙49	弥生土器	壺			(4.2)	橙色 (2.5YR6/6)		
229			甕			(2.2)	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
230	土壙50	弥生土器	甕			(2.6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外：櫛描文	
231			甕	(16.4)		(3.3)	橙色 (5YR6/6)		
232		無頸壺	(11.4)		(3.4)	橙色 (5YR6/6)	外：刻み目		
233	土壙51	弥生土器	壺		(6.1)	(2.9)	橙色 (5YR6/6)		
234			甕			(6.9)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：ヘラ描文	
235	土壙52	弥生土器	甕	(14.8)		(5.2)	鈍黄橙色 (10YR6/4)		
236	土壙53	弥生土器	甕	19.6		5.3	浅黄橙色 (7.5YR8/6)		
237	土壙54	弥生土器	壺				鈍橙色 (7.5YR7/3)	外：刻み目・ヨコナデ 内：ハケ状工具によるナデ	
238			壺				鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：波状文・櫛描沈線12条?・列点文	
239			壺				橙色 (7.5YR6/8)	外：波状文・櫛描沈線13条?・刺突文	
240	土壙55	弥生土器	甕	12.4		(5.5)	橙色 (7.5YR7/6)		

表23-5 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
241	土壙55	弥生土器	甕	15.0		(5.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
242			甕	13.1		(6.8)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
243			鉢	11.3		(7.4)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：口縁部丹塗り	
244			鉢	18.4		(11.8)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
245	土壙58	弥生土器	甕	15.0		(3.2)	灰黄褐色 (10YR5/2)		
246			器台	23.7		(11.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
247			鉢	42.8		(7.7)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
248	土壙59	弥生土器	細首壺	9.3	5.0	21.9	明赤褐色 (5YR5/6)		
249			甕	13.8	5.9	12.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部穿孔	
250			甕	13.0	4.0	15.6	鈍橙色 (5YR7/4)	外：全体にスス附着	
251			甕	13.2	(5.1)	24.0	橙色 (7.5YR7/6)	外：スス附着	
252			甕	14.5		(13.4)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
253			甕	14.4		14.0	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
254			甕		5.5	11.7	鈍黄橙色 (10YR6/3)	外：底部穿孔	
255			鉢	12.4	3.1	5.1	橙色 (2.5YR6/6)		
256			土壙60	弥生土器	長頸壺	22.5		(9.8)	鈍橙色 (7.5YR7/4)
257	長頸壺	22.6				(30.9)	鈍橙色 (5YR6/4)		
258	壺	12.4				(10.7)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：タタキ後ハケ	
259	甕	(12.3)			5.4	26.3	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：タタキ目痕	
260	甕	14.4				(22.8)	鈍褐色 (7.5YR6/3)		
261	甕	15.3				13.0	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：タタキ目痕 外面赤色顔料残	
262	甕	22.2				(8.0)	鈍橙色 (7.5YR7/3)		
263	甕	18.2			9.4	39.6	灰白色 (2.5Y8/2)		
264	高杯	11.1				(7.4)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：スス附着	
265	高杯	11.3			8.5	14.3	浅黄橙色 (10YR8/3)		
266	高杯	22.4				(4.7)	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
267	高杯				(11.3)	(14.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
268	高杯		11.4	(9.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)				
269	台付き鉢	(20.8)		17.5	鈍褐色 (7.5YR7/4)				
270	台付き鉢	23.2	15.1	28.0	灰白色 (10YR8/2)	外：矢羽根形のスカシ孔全周に5個？			
271	土壙61	弥生土器	壺	15.2		(9.3)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
272			甕	(13.5)		(9.1)	橙色 (5YR6/6)		
273			甕	16.1		(5.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
274			高杯		15.2	(5.3)	橙色 (5YR6/6)	外：孔2個残	
275			製塩土器鉢		5.5	(2.4)	褐灰色 (10YR4/1)		
276	土壙62	弥生土器	高杯	(27.5)		(3.9)	灰白色 (10YR8/2)		
277	土壙63	弥生土器	鉢			5.9	鈍褐色 (5YR6/3)	外：スス附着	
278	土壙65	弥生土器	甕	13.4	5.8	24.2	橙色 (5YR6/8)		
279			鉢	19.2	4.3	8.0	鈍褐色 (5YR6/4)		
280			台付鉢	13.3	6.9	9.6	橙色 (5YR6/6)	外：スス附着	
281	土壙66	弥生土器	甕	(11.9)		(2.8)	灰黄褐色 (10YR6/2)		
282			高杯		12.8	(16.3)	灰白色 (2.5Y8/2)		
283	土壙70	弥生土器	甕	(13.0)		(4.9)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
284			高杯	(15.4)		(4.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
285			高杯	21.9		(8.7)	鈍褐色 (7.5YR7/4)		
286			高杯		11.2	(12.4)	鈍褐色 (7.5YR7/4)	外：穿孔全周に21個	
287	土壙71	弥生土器	甕	12.8		(11.2)	褐灰色 (7.5YR4/1)		
288			甕		6.1	(13.1)	鈍褐色 (7.5YR7/3)		
289			高杯		11.8	(6.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)		
290	土壙72	弥生土器	甕	16.7		(14.0)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
291			甕	14.0		(18.3)	橙色 (5YR6/6)		
292	高杯	20.4		(4.8)	鈍褐色 (7.5YR6/4)				
293	土壙73	弥生土器	甕	(14.3)		(16.8)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
294			高杯		(13.0)	(8.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：スカシ孔推定12か所	
295	土壙74	弥生土器	甕	(17.0)		(29.9)	灰白色 (10YR8/2)	外：タタキ後ハケメ	
296			台付鉢？	18.0		(13.8)	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：タタキ後ハケメ 内面全体にスス附着	
297			高杯	17.2		(3.5)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
298			高杯		12.2	(9.3)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
299			高杯		12.6	(13.8)	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：穿孔28個	
300	土壙75	弥生土器	甕	(12.2)		(4.4)	灰褐色 (7.5YR6/2)		

表23-6 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
301	土壇75	弥生土器	甕		6.2	3.2	鈍橙色 (7.5YR7.4)		
302			長頸壺	20.8		(10.8)	鈍橙色 (7.5YR6.4)		
303			甕	14.0		(8.2)	橙色 (5YR6/6)		
304	土壇76	弥生土器	甕	16.0		(7.5)	鈍橙色 (5YR6/4)		
305			甕	11.8	5.8	21.5	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	外：スス付着	
306			甕	12.4	8.1	25.7	橙色 (5YR6/6)		
307			高杯	(22.0)		(3.4)	橙色 (5YR7/6)		
308	土壇77	弥生土器	壺	21.5		(9.7)	橙色 (5YR7/6)	外：綾杉文	
309			甕	14.8		(9.6)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
310			甕	(12.4)		(10.2)	鈍橙色 (7.5YR7.4)		
311			甕	(14.7)		(3.9)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)		
312	土壇78	弥生土器	甕	16.3		(4.9)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
313			甕		5.5	(10.2)	鈍黄橙色 (10YR7.3)	外：スス付着	
314			高杯		14.0	(5.4)	鈍黄橙色 (10YR7.3)	外：穿孔2個残	
315			鉢	(11.1)	(5.0)	6.3	浅黄橙色 (10YR8/4)		
316	溝3	弥生土器	甕		(6.0)	(2.2)	灰黄褐色 (10YR4.2)		
317	溝4	弥生土器	甕	13.0		(5.4)	灰白色 (10YR8/2)		
318			高杯		14.6	(3.9)	橙色 (5YR6/6)	外・内：穿孔全周に10個?	
319			壺	(12.4)		(5.2)	鈍褐色 (7.5YR5.3)		
320			壺	13.3		(7.1)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外：櫛描沈線12条	
321			壺	15.4		(5.9)	鈍橙色 (7.5YR6.4)		
322			壺	(21.0)		(3.9)	鈍黄橙色 (10YR7.4)		
323			壺	12.8		(2.4)	鈍黄橙色 (10YR6.4)		
324			壺				橙色 (7.5YR6/6)	外：沈線・波状文5~6条	
325			壺				鈍赤褐色 (5YR5/3)		
326	窪地1	弥生土器	甕	33.8		(4.7)	鈍黄橙色 (10YR7.2)		
327			甕	(24.0)		(6.3)	橙色 (5YR6/6)		
328			甕	(18.0)		(5.3)	鈍黄橙色 (10YR7.2)		
329			甕	17.0		(5.0)	灰黄褐色 (10YR5/2)		
330			甕		6.0	(6.4)	橙色 (2.5YR6/8)		
331			甕		5.4	(4.2)	橙色 (2.5YR6/6)	外：底部穿孔	
332			ジョッキ型		12.5	(2.8)	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：穿孔2個1対?	
333			高杯?		(10.6)	(7.1)	橙色 (7.5YR6/6)		
334			蓋?	5.7		3.8	鈍橙色 (7.5YR7.4)	外：穿孔2個1対?	
335	窪地2	弥生土器	甕	(21.8)		(5.7)	橙色 (5YR6/8)		
336	窪地3	弥生土器	甕	(15.6)		(6.0)	灰白色 (10YR8/2)		
337			鉢	38.2	10.6	17.6	橙色 (5YR6/8)		
338			壺	10.5		(4.3)	灰白色 (10YR8/2)	外：穿孔1個残	
339			把手付壺	8.8	5.2	16.6	灰黄褐色 (10YR6.2)		
340			壺	(22.4)		(6.9)	灰黄褐色 (10YR5.2)		
341			甕	14.8		(5.5)	灰白色 (7.5YR8.2)		
342	窪地4	弥生土器	甕	(13.0)		(9.2)	鈍橙色 (5YR7/4)		
343			甕	17.2		(7.9)	灰白色 (2.5YR8/2)		
344			甕	(14.1)		(3.0)	鈍橙色 (7.5YR7.4)		
345			高杯	(19.7)		(9.0)	灰白色 (10YR8/2)		
346			器台?	(31.7)		(11.4)	灰白色 (10YR8/2)	外：円形浮文3個残・棒状浮文3本残	
347			壺	14.4		(7.4)	鈍橙色 (7.5YR7.4)	外：スス付着	
348			甕	16.4		(6.0)	鈍橙色 (7.5YR7.4)		
349			甕		5.2	(2.8)	灰黄褐色 (10YR4.2)		
350	窪地5	弥生土器	高杯	20.6		(5.1)	鈍橙色 (7.5YR7.4)		
351			高杯		12.7	(14.1)	橙色 (5YR6/6)	外：穿孔3段3方向・櫛描沈線4条単位	
352			高杯	11.5	9.9	14.7	橙色 (5YR6/8)	外：貫通しない孔残3×1.2×1	
353			高杯?		7.5	(9.0)	橙色 (5YR6/6)		
354			器台	(22.1)	26.8	25.0	橙色 (5YR7/6)	外：スカン孔4か所	
355			長頸壺	14.2	9.2	40.2	橙色 (5YR6/6)	外：1対の把手	
356	土器溜まり1	弥生土器	壺	15.5	(10.0)	38.4	橙色 (5YR7.6)		
357			甕	24.3		(20.0)	鈍黄橙色 (10YR7.2)		
358			壺	11.8	6.0	21.7	鈍橙色 (7.5YR7.4)	外：穿孔2個残	
359	土器溜まり2	弥生土器	直口壺	8.0		(7.1)	鈍黄褐色 (10YR7.3)		
360			壺	11.0		(14.5)	灰黄褐色 (10YR6.2)		

表23-7 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
361	土器溜まり3	弥生土器	長頸壺	18.5		16.2	鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：頸部沈線螺旋状	
362			甕	13.0		(3.9)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
363			甕	15.0		(5.4)	鈍褐色 (7.5YR5/4)		
364			甕	20.2		(7.7)	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
365			甕		5.6	(5.9)	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
366			高杯	20.8		(3.8)	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
367			高杯		(11.6)	(5.3)	橙色 (5YR6/8)	外：穿孔2個残	
368			高杯		(11.6)	(8.3)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
369			器台		(31.5)	(10.5)	鈍褐色 (7.5YR7/4)	外：スカシ孔2個残・穿孔1個残	
370	土器溜まり4	弥生土器	壺	7.0	5.6	17.7	灰白色 (10YR8/2)		
371			壺	7.1	5.4	18.0	浅黄色 (2.5Y7/3)		
372			壺	(10.3)	6.2	22.0	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
373			壺	(10.8)	6.4	24.1	灰黄色 (2.5Y7/2)		
374			壺	17.0	10.4	40.1	浅黄色 (2.5Y7/3)		
375			台付直口壺	5.8	7.1	15.0	鈍褐色 (7.5YR7/4)	外：三角形スカシ孔15個	
376			甕	(14.4)		(33.3)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
377			甕	14.0	(9.8)	35.0	灰黄色 (2.5Y7/2)		
378			甕	11.8	5.7	26.7	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：底部穿孔	
379			甕	12.2	5.6	29.1	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部穿孔	
380			甕	13.5	(6.2)	30.0	灰黄色 (2.5Y7/2)		
381			台付鉢	15.1	10.4	21.9	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
382			台付鉢	17.0	14.7	28.8	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：三角形スカシ孔5個・2個1対4か所	
383			台付鉢	17.1		(14.9)	鈍黄橙色 (10YR7/2)		
384			高杯	31.2	11.3	14.4	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：穿孔25個・線刻? (2本残存)	
385			高杯		7.2	(8.4)	灰白色 (10YR8/2)	外：穿孔15個 (1つは貫通してない)	
386	器台	(22.7)	(17.6)	22.3	鈍褐色 (7.5YR7/3)	外：スカシ孔4か所			
387	下がり1	弥生土器	甕				鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：沈線10条	
388			壺	(10.0)			鈍赤褐色 (5YR5/4)		
389			壺	13.9			褐色 (2.5YR6/8)	外：穿孔11個残	
390			壺	(17.0)			鈍褐色 (7.5YR6/3)		
391			壺	16.3			鈍褐色 (7.5YR5/3)		
392			壺				鈍褐色 (7.5YR5/3)		
393			壺	16.5			橙色 (5YR6/6)		
394			壺	(15.4)			鈍黄橙色 (10YR6/3)		
395			壺		7.6		鈍黄橙色 (10YR6/3)		
396			甕	15.0	8.0	30.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
397			甕	17.5			鈍褐色 (7.5YR6/3)		
398			甕	(18.0)			鈍黄橙色 (10YR6/3)		
399			甕	(20.0)			鈍褐色 (7.5YR6/4)		
400			甕	(36.0)			鈍褐色 (7.5YR6/3)		
401			甕		(5.3)		鈍褐色 (7.5YR5/3)		
402			甕		5.0		鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：底部穿孔	
403			甕		5.0		鈍褐色 (7.5YR5/4)	外：底部穿孔	
404			甕		4.8		明赤褐色 (5YR5/6)	外：底部穿孔	
405			高杯	(20.0)			浅黄橙色 (10YR8/4)		
406			高杯	(21.4)			褐色 (7.5YR5/3)	外：穿孔2個1対	
407	鉢	11.0	5.7	6.4	鈍褐色 (7.5YR6/4)				
408	甕	18.0			灰白色 (7.5YR8/2)				
409	高杯	18.8			褐色 (5YR6/8)	外：透かし孔4個			
410	下がり2	弥生土器	甕	13.2		(14.6)	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：スス付着	
411			高杯		14.5	(18.4)	褐色 (5YR6/6)	外：6条櫛揃沈線・4段4方向穿孔	
412	柱穴および遺槽に伴わない遺物	弥生土器	壺	(13.0)			褐色 (5YR6/6)		
413			壺	(14.2)			褐色 (7.5YR6/6)		
414			壺	(14.3)			鈍褐色 (7.5YR5/3)		
415			壺	15.4			鈍褐色 (7.5YR6/4)		
416			甕	(22.9)			灰褐色 (7.5YR4/2)	外：刻み目・沈線9条	
417			甕	19.4			鈍黄橙色 (10YR7/3)		
418			甕	16.3			鈍褐色 (7.5YR5/3)		
419			甕	(14.8)		7.8	褐色 (5YR6/6)		
420			甕		5.5	15.8	鈍赤褐色 (5YR5/4)		

表23-8 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
421	柱穴および遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	(11.2)			暗灰色 (N3/)		
422			甕	(20.8)			灰白色 (2.5Y8/2)		
423			甕	16.1	7.5	32.1	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
424			高杯	(20.6)			灰白色 (2.5Y8/2)		
425			高杯	23.0			浅黄橙色 (7.5YR8/3)		
426			高杯		11.4		灰白色 (10YR8/2)	外：スカシ孔5か所	
427			高杯	22.8			浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
428			甕	13.0			橙色 (5YR6/6)		
429			鉢	19.6	6.6	8.3	橙色 (7.5YR7/6)		
430			鉢	36.4	8.4	17.2	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
431			手捏ね鉢	3.6	2.1	2.4	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
432			器台				鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：線刻	
433			竪穴住居 8	土師器	壺	(10.7)		(9.1)	鈍黄橙色 (10YR7/3)
434	壺	11.5				15.5	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：スス付着	
435	甕	20.8				(17.0)	鈍黄橙色 (10YR7/4)	内外面にスス付着	
436	高杯	15.2				(5.7)	橙色 (5YR6/6)		
437	器台	8.3			11.2	7.4	橙色 (5YR7/6)		
438	竪穴住居10	須恵器	杯	11.0			灰色 (N5/)		
439		土師器	高杯	15.0	9.8	11.6	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
440			高杯	13.5			鈍黄橙色 (10YR7/3)		
441			甕	11.6			浅黄橙色 (10YR8/3)		
442			甕	19.1		34.9	浅黄橙色 (10YR8/3)		
443		甕	17.4			鈍橙色 (7.5YR7/4)	二次焼成を受けている		
444		須恵器	甕	25.0		46.2	灰色 (N5/)		
445		竪穴住居11	須恵器	蓋	12.7		4.0	灰色 (N5/)	
446	高杯				11.8	(6.9)	灰色 (N4/)	外：スカシ孔4個	
447	把手付? 碗			6.8		(4.9)	灰色 (5Y6/1)		
448	甕			28.0		(7.4)	灰 (N6/)		
449	甕			22.8		(30.0)	灰 (N6/)	内：無文当て具痕?	
450	土師器		甕	13.2		13.6	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
451			甕	(17.7)		(23.7)	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
452			甕	23.8		24.5	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：スス付着	
453			甕	18.8		(12.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
454			高杯	13.8	10.1	10.8	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
455		高杯	14.0	9.9	11.3	橙色 (5YR7/6)			
456		高杯	14.1	9.7	11.5	明赤褐色 (2.5YR5/8)			
457		高杯	13.8	9.9	11.1	明赤褐色 (2.5YR5/6)			
458		高杯	14.5	9.0	11.5	明赤褐色 (2.5YR5/8)			
459	高杯	14.0		(6.1)	明赤褐色 (2.5YR5/6)				
460	高杯		9.8	(8.5)	橙色 (5YR6/6)				
461	鉢	12.6		5.5	橙色 (5YR7/6)				
462	鉢	10.9		4.6	鈍黄橙色 (10YR7/3)				
463	製塩土器鉢				浅黄色 (2.5Y7/3)				
464	竪穴住居12	須恵器	杯	12.1		(3.7)	灰色 (7.5Y6/1)		
465		把手付鉢	12.9		(7.0)	灰色 (N6/)	外：沈線2条		
466		土師器	甕	(13.1)		(5.6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)		
467			甕	20.5		(4.7)	鈍橙色 (7.5YR7/3)		
468	竪穴住居13	須恵器	甕	14.4		(2.5)	灰白色 (N7/)		
469		杯				灰白色 (10YR7/1)			
470		杯	13.6		(4.0)	灰白色 (10YR8/1)			
471	土師器	甕	(16.0)		(5.8)	鈍黄橙色 (10YR6/4)			
472	竪穴住居14	須恵器	杯	(12.6)		(2.8)	褐灰色 (5YR5/1)		
473		杯	(14.0)		(3.3)	褐灰色 (5YR5/1)			
474		甕	(20.9)		(3.8)	褐灰色 (5YR5/1)			
475	竪穴住居16	須恵器	杯				灰色 (N6/)		
476		土師器	壺	10.7		(9.7)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
477			甕	15.0		18.1	灰白色 (7.5YR8/2)		
478			甕	19.5		30.8	鈍橙色 (7.5YR7/3)		
479			高杯	12.4	9.1	10.0	鈍橙色 (5YR6/4)	外：穿孔3か所	
480	高杯	12.9	8.4	10.8	橙色 (5YR6/6)				

表23-9 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
481	竪穴住居16	土師器	高杯	12.7	10.2	10.9	橙色 (7.5YR7/6)		
482			高杯	12.6	8.9	12.6	灰白色 (10YR8/2)		
483			高杯	12.4	9.1	11.7	橙色 (7.5YR7/6)		
484			高杯	12.5		(5.9)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)		
485			高杯	13.2		(4.1)	鈍橙色 (7.5YR7 4)		
486			高杯	9.7		(7.7)	赤褐色 (5YR4/6)	外：穿孔3か所 (位置が均一でない)	
487			鉢	12.3		6.0	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		
488			鉢	11.3		7.1	浅黄橙色 (10YR8/4)		
489			鉢	12.7		(3.2)	鈍褐色 (7.5YR5/3)		
490			手捏ね鉢			(2.5)	鈍橙色 (7.5YR6 4)		
491			製塩土器鉢				黒色 (10YR2/1)	外：タタキ目 内：ハラケズリ?	
492			甌	27.1		26.7	浅黄橙色 (10YR8/3)		
493			甌	27.9		(22.6)	鈍橙色 (7.5YR6 4)		
494			竪穴住居18	須志器	蓋	(13.4)		4.0	灰白色 (5Y7 1)
495	蓋	(13.2)				(2.8)	灰色 (N5 /)		
496	杯	(11.7)				(2.6)	灰色 (N5.5 /)		
497	蓋	(11.2)			8.0	5.4	暗灰色 (N3 /)	外：自然釉	
498	蓋	15.2				(6.6)	灰色 (N6 /)	外：自然釉付着	
499	土師器	甌						灰白色 (10YR8/2)	
500	竪穴住居19	須志器	杯	12.6		4.7	灰白色 (7.5Y7/1)		
501			壺	8.6		(10.2)	灰色 (5Y6/1)	外：線刻	
502	土師器	製塩土器鉢				橙色 (5YR6 6)			
503	竪穴住居22	須志器	蓋	13.7		4.2	灰白色 (2.5Y7/1)		
504	竪穴住居23	須志器	杯	(12.4)		3.1	明褐色 (5YR7/1)		
505	竪穴住居24	須志器	杯	(16.0)		4.0	褐色 (5YR6/1)		
506	竪穴住居25	須志器	蓋	13.6		(3.2)	灰白色 (2.5Y7/1)		
507			杯				灰色 (7.5Y6/1)	外：自然釉付着	
508			高杯	12.2		(4.0)	灰色 (N6 /)		
509			高杯	(12.2)		(4.3)	灰白色 (N7 /)		
510			高杯			(3.7)	灰色 (N6 /)		
511			高杯		8.8	(3.4)	灰色 (N6 /)		
512			高杯		10.8	(5.8)	灰白色 (7.5YR8/1)		
513			甌			(8.6)	灰色 (N6 /)		
514			甌	13.9		(3.2)	鈍橙色 (5YR6/4)		
515			土師器	高杯	(17.1)		(4.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	内：放射状のヘラミガキ
516	甌					橙色 (7.5YR7/6)			
517	竪穴住居26	土師器	高杯			(3.0)	鈍橙色 (7.5YR7 4)		
518			手捏鉢	7.4		(7.8)	鈍橙色 (7.5YR7 4)		
519	竪穴住居27	須志器	杯			(2.8)	灰色 (N5 /)		
520			壺			(6.0)	鈍褐色 (7.5YR6 3)		
521		土師器	甌	19.7		(11.2)	灰白色 (10YR8/2)		
522			甌			(24.8)	鈍黄橙色 (10YR7 2)		
523	竪穴住居28	須志器	蓋	(13.7)		(3.2)	灰色 (N6 /)		
524			蓋	(14.0)		4.8	灰白色 (N7 /)		
525			杯	12.2		4.3	灰色 (N7 /)		
526	竪穴住居29	須志器	蓋	14.8		(4.3)	灰白色 (2.5Y7/1)		
527	竪穴住居30	土師器	杯	12.0		5.2	灰色 (N4 /)		
528			高杯	13.6		(5.4)	灰色 (N6 /)		
529			高杯	14.8	9.8	11.5	浅黄橙色 (10YR8/3)		
530			高杯	14.6	10.2	12.8	鈍橙色 (7.5YR7 4)		
531			高杯	15.0	10.2	11.9	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外：穿孔3か所	
532			高杯	12.6	9.6	11.5	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
533			高杯	17.3	12.1	11.8	灰白色 (10YR8/2)		
534			甌	18.9		(30.1)	鈍黄橙色 (10YR7/2)	外：スス付着	
535			鉢	12.5		4.9	鈍黄橙色 (10YR7/4)		
536			製塩土器鉢			(4.9)	鈍褐色 (7.5YR5 3)		
537	竪穴住居31	須志器	蓋	11.8		(3.7)	青灰色 (5B6/1)		
538			杯				青灰色 (5B6/1)		
539			杯	13.6		4.6	褐色 (10YR4/1)		
540	竪穴住居32	須志器	蓋	13.6		(4.8)	灰色 (N6 /)		

表23-10 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考	
				口径	底径	器高				
541	竪穴住居32	須恵器	蓋	(12.6)		3.3	灰白 (N7.)			
542			杯		9.2		4.3	灰 (N5/)		
543		土師器	甕		11.2		(3.7)	鈍赤褐色 (5YR4/4)		
544			甕		(12.2)		(7.2)	鈍橙色 (5YR6/4)		
545			甕		12.7		(9.1)	鈍褐色 (7.5YR5 4)		
546			甕		(12.0)		(7.3)	橙色 (7.5YR6/6)		
547			甕		14.0		(9.2)	橙色 (5YR6/6)		
548			甕		16.4		(5.0)	鈍橙色 (7.5YR6 4)		
549			甕		15.8		(6.8)	橙色 (7.5YR6/6)		
550			甕		(14.4)		(5.6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)		
551			甕		(16.2)		(6.2)	橙色 (5YR6 8)		
552			甕		18.7		(8.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
553			甕		18.6		29.5	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
554			高杯		(22.4)		(8.2)	鈍橙色 (5YR6/4)		
555			高杯		25.7		(9.7)	橙色 (5YR6/6)		
556			高杯				(8.6)	浅黄橙色 (10YR8 3)		
557			高杯			(16.2)	(9.0)	明赤褐色 (2.5Y5/6)	外：穿孔3か所	
558			甗		(21.2)		(24.9)	鈍黄橙色 (10YR6 4)		
559			甗		24.1	9.9	23.8	鈍橙色 (7.5YR7 4)		
560			甗		(23.2)		(21.1)	明赤褐色 (2.5YR5/6)		
561	竪穴住居33	土師器	壺	7.8		8.3	鈍橙色 (7.5YR6.4)			
562			甕		10.5		(9.7)	鈍橙 (7.5YR6/4)		
563			甕		24.8		(18.5)	橙色 (5YR6/6)		
564			高杯		13.6		(5.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)		
565			高杯				(4.6)	鈍橙色 (7.5YR7 3)		
566			高杯			10.0	(5.4)	橙色 (7.5YR7/6)		
567			甗		26.6		(14.1)	鈍橙色 (7.5YR6.4)		
568	竪穴住居34	土師器	鉢	12.6		5.4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)			
569	竪穴住居35	土師器	甗				灰黄褐色 (10YR6/2)			
570			甗				鈍黄橙色 (10YR6.3)			
571	掘立柱建物 2	須恵器	蓋				灰色 (N5.)			
572			蓋		(12.6)		(3.5)	灰色 (N6.)		
573			蓋		(14.8)		(3.4)	灰白色 (10Y7 1)		
574			杯		(13.7)		(2.8)	灰色 (10Y5/1)		
575	掘立柱建物 3	須恵器	蓋	(12.4)		(2.5)	灰色 (N5/)			
576			杯	(12.2)		(1.8)	灰色 (N4.)			
577		土師器	碗	(11.9)		5.7	浅黄橙色 (7.5YR8/4)			
578	掘立柱建物 4	須恵器	杯	11.2		(3.0)	灰色 (N6.)			
579			杯	11.5		(2.7)	灰色 (N6.)			
580			杯	11.8		(2.3)	灰色 (N5.)			
581			杯	(13.0)		(2.5)	灰色 (N5.)			
582	掘立柱建物 5	須恵器	杯	(12.4)		(3.6)	灰白色 (2.5Y6/1)			
583	掘立柱建物 6	須恵器	蓋			(2.8)	褐灰色 (5YR6/1)			
584			杯			(3.0)	明褐灰色 (5YR7/1)			
585	掘立柱建物 7	須恵器	杯	(12.6)		(3.1)	灰色 (N5.)			
586			杯	(12.4)		(3.3)	灰白色 (2.5Y7/1)			
587	掘立柱建物 8	須恵器	蓋	(12.3)		(4.0)	灰色 (N7.)			
588			杯	(11.0)		(2.1)	灰色 (N6.)			
589			杯	(12.2)		3.4	褐灰色 (5YR6/1)			
590			杯			(4.4)	褐灰色 (10YR6/1)			
591	掘立柱建物10	須恵器	蓋			2.4	灰色 (N6.)			
592	掘立柱建物11	須恵器	蓋			1.4	灰色 (N6.)			
593	掘立柱建物12	須恵器	杯			(2.3)	灰色 (N6.)			
594	掘立柱建物13	須恵器	杯			2.6	褐灰色 (7.5YR5 1)			
595	掘立柱建物15	須恵器	杯			(1.6)	灰白色 (2.5Y8/1)			
596			杯	11.2		(3.1)	灰白色 (N7/)	外：自然釉		
597			土師器	鉢	10.4		3.6	橙色 (5YR6/6)		
598	掘立柱建物16	須恵器	杯	(13.0)		(2.8)	灰色 (N4.)			
599			土師器	甗				鈍橙色 (7.5YR6 4)		
600	柱穴列 2	須恵器	蓋				灰色 (N4.)			



表23-11 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
601	柱穴列 2	須恵器	杯				灰色 (N5/)		
602	柱穴列 3	須恵器	高杯		11.0	(4.0)	灰色 (N6/)		
603	土壙80	土師器	高杯	21.6		(9.2)	褐色 (5YR6/6)		
604			甕	10.2		14.9	浅黄褐色 (10YR8/3)		
605	土壙84	土師器	壺			(18.5)	褐色 (5YR6/8)		
606			高杯		10.0		(6.2)	褐色 (5YR6/6)	
607	土壙85	須恵器	蓋	13.2		2.5	灰色 (10YR5/1)		
608			杯	10.7		(4.4)	灰色 (10YR6/1)		
609		杯	(11.9)		2.7	灰白色 (2.5Y8/1)			
610		土師器	甕			4.7	褐色 (10YR7/3)		
611			瓶				鈍黄褐色 (10YR6/3)		
612	土壙86	須恵器	杯	11.0		(3.0)	灰色 (N5/)		
613	土壙91	土師器	甕	14.6		(8.0)	鈍赤褐色 (2.5YR5/4)		
614	土壙94	須恵器	蓋	14.2		(2.6)	灰色 (N6/)		
615	土壙97	須恵器	蓋	10.3		2.9	灰色 (N4/)		
616			杯	9.7		1.8	灰白色 (10Y7/1)		
617		土師器	甕			7.4	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
618			甕	22.9		(33.1)	褐色 (7.5YR6/6)		
619	土壙98	土師器	甕	(23.7)		(11.9)	褐色 (5YR6/6)		
620	溝 6	須恵器	杯	12.2		3.9	褐灰色 (5YR6/1)		
621			高杯			(11.2)	灰色 (N5/)		
622	溝 7	須恵器	甕	(23.9)		4.7	灰色 (N6/)	外：波状文	
623	溝 8	須恵器	甕	(15.6)		(5.7)	灰白色 (N7/)	外：カキ目	
624			甕			(9.5)	灰色 (N4/)	外：タタキ目 内：無文当て具痕?	
625		土師器	瓶				褐色 (5YR6/6)		
626	埋置土器 1	須恵器	甕	25.5		50.0	灰色 (N5/)		
627	柱穴および遺構に伴わない遺物	土師器	甕	(12.6)			褐色 (7.5YR7/6)		
628			甕	12.5			浅黄褐色 (10YR8/3)		
629		埴輪	形象埴輪				褐色 (7.5YR6/6)	基部破片	
630		須恵器	蓋	13.9			灰色 (N6/)		
631			杯	(12.2)		4.3	灰色 (N5/)		
632			杯	(12.6)		3.9	褐灰色 (5YR5/1)		
633			杯	12.4		4.3	灰白色 (5Y7/1)		
634			杯	(12.0)			灰色 (N4/)		
635			壺				灰色 (N6/)		
636			高杯		11.2		灰色 (N6/)	外：スカシ孔2か所	
637	高杯			11.9		灰色 (N6/)	外：沈線2条		
638	高杯		11.2		灰色 (N5/)				
639	高杯		8.9		灰褐色 (5YR6/2)				
640	掘立柱建物17	須恵器	杯			(1.3)	灰色 (N6/)		
641	掘立柱建物19	須恵器	腕		(8.8)	(2.8)	灰色 (N5/)		
642			腕		(8.6)	(4.2)	浅黄褐色 (10YR8/3)		
643		土師器	皿	(12.1)	(10.1)	1.3	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
644	黒色土器	腕	杯	(14.6)	(12.3)	2.9	鈍褐色 (7.5YR6/4)	丹塗り	
645			腕	(14.6)		(3.4)	鈍黄褐色 (10YR7/4)		
646	土壙99	土師器	杯		10.6	(2.0)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)		
647	土壙101	須恵器	杯		(11.2)	(1.5)	褐灰色 (7.5YR6/1)		
648	埋置土器 2	黒色土器	腕	14.4	7.3	5.0	褐色 (5YR6/6)		
649			腕	17.3	8.2	5.9	褐色 (5YR6/6)		
650	土器溜まり 5	須恵器	蓋	15.8		(2.3)	灰色 (N6/)		
651			蓋	(17.0)		(2.9)	灰白色 (N7/)		
652			杯	11.5	7.3	(4.0)	灰白色 (5Y7/1)		
653			杯	11.7	6.6	3.0	灰白色 (N7/)	外：底部ヘラ切り	
654			杯	(12.8)	(8.0)	3.2	灰白色 (2.5Y7/1)	外：底部ヘラ切り 重ね焼き痕跡	
655			杯	12.8	9.2	3.7	灰白色 (N8/・N7/)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
656			杯	(11.8)	(8.2)	3.2	灰色 (N4/)		
657			杯	14.6	8.4	5.1	灰色 (N5/)	外：自然釉付着	
658			杯	14.6	8.8	5.6	灰白色 (N7/)		
659			杯	16.3	9.0	4.8	灰色 (N6/)		
660	土師器	杯	12.0		4.4	鈍褐色 (7.5YR6/4)			

表23-12 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
661	土器溜まり5	土脚器	杯	12.5	6.3	4.2	橙色 (7.5YR6/6)		
662			杯	13.0		(4.1)	鈍赤褐色 (5YR5/4)		
663			杯	(11.0)	8.1	2.6	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
664			杯	11.6	7.2	3.1	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
665			杯	11.7	7.7	3.0	鈍褐色 (7.5YR5/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
666			杯	11.7	8.6	3.4	灰白色 (2.5Y8/2)	外：底部ヘラ切り	
667			杯	(11.8)	(7.6)	3.0	赭色 (5YR6/6)		
668			杯	11.8	8.4	3.0	赭色 (5YR6/6・5YR6/8)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
669			杯	11.8	8.3	3.1	鈍黄褐色 (10YR6/3)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内：丹塗り	
670			杯	12.1	8.3	2.8	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
671			杯	12.1	8.3	3.1	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：焼成前に穿孔	
672			杯	(12.2)	(8.4)	(3.2)	鈍黄褐色 (10YR6/4)	内外面丹塗り	
673			杯	(6.2)	4.3	3.7	鈍橙色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り痕	
674			杯	(12.2)	(8.2)	2.9	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
675			杯	12.3	4.3	2.8	鈍褐色 (10YR7/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
676			杯	12.4	7.6	3.1	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り	
677			杯	12.5	8.2	3.1	鈍黄褐色 (10YR7/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
678			杯	12.4	4.2	3.1	褐色 (5YR6/6)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
679			杯	(12.6)	8.4	3.0	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
680			杯	12.6	8.5	3.2	鈍黄褐色 (10YR6/3)		
681			杯	12.7	8.3	3.0	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：丹塗り?	
682			杯	12.7	8.1	3.1	明褐色 (7.5YR7/2)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
683			杯	(12.8)	(8.4)	3.0	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
684			杯	(12.8)	(8.0)	3.1	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
685			杯	12.8	7.4	3.1	褐色 (7.5YR6/6)	内外面丹塗り	
686			杯	12.9	8.4	3.1	鈍黄褐色 (10YR7/2)	内外面丹塗り	
687			杯	12.9	8.2	3.2	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
688			杯	12.9	8.4	3.2	褐色 (5YR6/6)		
689			杯	(12.8)	8.2	3.3	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外：丹塗り残る	
690			杯	(12.8)	(9.0)	3.3	鈍黄褐色 (10YR6/3)		
691			杯	12.9	8.7	3.6	灰白色 (2.5Y8/1)		
692			杯	(12.7)	(8.8)	3.5	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
693			杯	13.0	8.5	3.1	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内：丹塗り	
694			杯	13.1	8.8	3.3	鈍黄褐色 (10YR6/4)		
695			杯	13.1	9.2	3.2	鈍褐色 (7.5YR6/4)	底部ヘラ切り押圧痕	
696			杯	13.2	9.7	3.2	鈍褐色 (7.5YR5/4)		
697			杯	13.2	8.4	3.2	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り	
698			杯	(13.4)	(9.4)	3.2	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
699			杯	13.4	9.4	3.0	鈍褐色 (7.5YR6/3)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
700			杯	13.4	8.6	3.3	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り痕	
701			杯	(13.4)	(8.6)	3.4	鈍褐色 (7.5YR7/4)	内外面丹塗り	
702			杯	14.1	10.4	3.3	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：一部丹塗り?	
703			杯	(14.8)	(9.4)	3.7	鈍黄褐色 (10YR6/4)		
704			杯	12.0	8.6	2.6	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
705			杯	(12.0)	(8.0)	2.5	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
706			杯	(12.6)	(8.6)	2.8	鈍黄褐色 (10YR6/4)		
707			杯	(12.8)	(9.0)	2.9	鈍黄褐色 (10YR6/4)	内外面丹塗り痕	
708			杯	12.8	7.6	3.7	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
709	杯	(13.0)	(6.4)	2.5	褐色 (7.5YR6/6)				
710	杯	13.4	9.2	2.3	鈍褐色 (7.5YR7/4)				
711	杯	13.2	9.0	2.8	褐色 (2.5YR6/6)	内外面丹塗り?			
712	杯	13.4	9.3	2.7	鈍黄褐色 (10YR6/3)	内外面丹塗り			
713	杯	15.4	9.6	3.9	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り			
714	杯	13.2	(8.0)	(2.9)	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り?			
715	杯	13.6	9.5	2.6	鈍褐色 (7.5YR6/3)				
716	杯	13.5	9.5	2.7	鈍褐色 (7.5YR6/3)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内：丹塗り			
717	杯	14.9	8.6	2.9	鈍褐色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り?			
718	杯	13.9	9.7	3.0	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕			
719	杯	14.4	9.6	3.2	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外：丹塗り残			
720	杯	(14.8)	(10.0)	3.3	鈍黄褐色 (10YR5/3)	外：丹塗り残			

表23-13 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考	
				口径	底径	器高				
721	土器溜まり5	十師器	碗	9.7	5.9	3.8	鈍橙色 (5YR7/4)			
722			碗	(11.4)	(5.9)	4.4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)			
723			杯	(15.2)	(8.8)	4.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
724			杯	14.1	8.3	4.1	橙色 (7.5YR6/6)			
725			杯	(14.0)	(8.4)	3.9	明赤褐色 (2.5YR5/8)			
726			杯	14.6	9.2	5.1	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
727			杯	15.8	10.0	5.4	浅黄橙色 (10YR8/3)	内外面丹塗り		
728			杯	(15.6)		(5.7)	灰白色 (10YR8/2)			
729			杯	(20.0)		(5.0)	浅黄褐色 (10YR8/3)			
730		瓦	平瓦	長 (8.5)	幅 (8.9)	厚1.8	橙色 (2.5YR7/6)	凸：縄タタキ 凹：布目		
731		土器溜まり5	十師器	皿	13.2	10.8	1.2	鈍黄橙色 (10YR7/3)	内外面丹塗り	
732				皿	(13.2)	(11.3)	1.6	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
733				皿	15.6	10.6	1.6	鈍橙色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り	
734				皿	13.6	12.0	2.0	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
735				皿	(13.4)	(12.2)	1.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
736				皿	13.6	11.8	1.4	鈍黄褐色 (10YR6/3)	外：丹塗り	
737				皿	14.0	10.8	1.4	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
738				皿	13.9	12.2	1.5	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
739				皿	13.9	11.7	1.8	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
740				皿	(14.0)	12.2	1.4	鈍黄褐色 (10YR7/3)		
741				皿	14.2	12.1	1.5	鈍褐色 (7.5YR5/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
742				皿	14.1	12.2	1.5	鈍黄褐色 (10YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
743				皿	14.5	13.3	1.5	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
744				皿	14.6	13.2	1.6	鈍橙色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り	
745				皿	14.7	13.1	1.7	黄灰色 (2.5Y6/1)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
746				皿	14.8	13.4	1.8	鈍褐色 (7.5YR6/4)	外：底部ヘラ切り押圧痕 内外面丹塗り	
747				皿	(15.4)	(12.6)	1.2	鈍黄褐色 (10YR6/3)	外：底部ヘラ切り押圧痕	
748				皿	(16.2)	(11.7)	1.7	鈍褐色 (7.5YR6/4)	内外面丹塗り	
749				皿	(13.6)	(8.0)	2.0	鈍褐色 (7.5YR6/4)		
750	皿			13.8	9.0	2.0	鈍褐色 (7.5YR6/4)			
751	蓋?	22.6	16.0	4.2	鈍褐色 (7.5YR7/4)					
752	甕	(19.8)		(4.5)	灰黄褐色 (10YR6/2)					
753	甕	20.9		(6.3)	鈍黄褐色 (10YR7/3)					
754	黒色十器 (内黒)	碗	13.6	7.7	3.6	浅黄褐色 (7.5YR8/4)				
755		碗	(14.1)	(8.8)	3.4	鈍黄褐色 (10YR7/4)				
756		碗	16.3	8.0	4.9	浅黄色 (2.5Y7/3)				
757		碗	(15.4)	(7.0)	4.1	鈍褐色 (7.5YR6/4)				
758		碗		8.8	(2.3)	灰白色 (10YR8/2)				
759		碗		8.4	(5.3)	鈍黄褐色 (10YR6/3)				
760		皿	11.6	5.8	2.4	褐色 (7.5YR7/6)				
761		皿	13.6	7.5	2.1	鈍黄褐色 (10YR7/3)	外：丹塗り痕			
762		皿	13.5	7.2	2.3	鈍褐色 (7.5YR6/4)				
763		皿	13.6	(7.8)	2.6	鈍黄褐色 (10YR7/3)				
764		皿	15.6	11.2	2.6	鈍黄褐色 (10YR7/4)				
765	土器溜まり6	十師器	杯	12.6	8.8	2.8	鈍褐色 (7.5YR7/4)			
766			杯	12.7	9.1	2.6	鈍黄褐色 (10YR6/4)	外：底部ヘラ切り後未調整		
767			杯	(15.0)	8.8	2.6	褐色 (7.5YR7/6)			
768			碗		(7.4)	(2.0)	浅黄褐色 (10YR8/3)			
769			碗	13.9	7.7	4.3	鈍褐色 (7.5YR6/4)			
770			皿	13.6	6.0	1.5	浅黄褐色 (7.5YR8/3)			
771		須恵器	蓋	16.0		2.0	灰色 (N6/)	転用硯		
772			杯		8.5	(1.7)	明褐色 (7.5YR7/1)			
773		杯			(3.8)	灰白色 (10YR8/2)				
774		黒色土器	碗	14.7	7.0	3.8	鈍褐色 (7.5YR6/4)			
775	社穴および遺 槽に伴わない 遺物	須恵器	杯	13.6	8.0	6.3	灰白色 (2.5Y7/1)			
776			杯				灰白色 (N7/)			
777			杯		(12.4)		灰色 (N6/)			
778			杯		(10.6)		灰色 (N5/)			
779			杯	14.0	9.0	3.9	明褐色 (5YR7/1)	外：底部ヘラ切り		
780	緑釉陶器	碗				灰白色 (2.5Y8/2)	外：施釉? 内：施釉	京都・洛北、9C前半		

表23-14 窪木遺跡土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考
				口径	底径	器高			
781	柱穴および遺 構に伴わない 遺物	緑釉陶器	碗	(21.0)			灰白色 (2.5Y8/1)	内・外：施釉	京都・洛北、9C前半
782			碗		4.8		灰白色 (2.5Y8/2)	外：露胎・底部イト切り未調整 内：施釉・ナデ	京都・洛北、9C前半
783			碗		7.8		灰色 (N6)	外・内：施釉 外：底部三又トチン痕1つ	京都・9C中頃
784		灰釉陶器	碗		7.2		灰白 (7.5Y7/1)	外：施釉・露胎 内：施釉・重ね焼き痕 黒笹90号併行	東海・猿投、9C後半
785			杯	11.7		4.2	橙色 (2.5YR6/6)	内：暗文	
786		土師器	杯	12.7	9.2	3.0	橙色 (7.5YR6/6)		
787			杯	11.5	6.0	3.0	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
788			杯	14.1	7.2	3.3	橙色 (5YR6/6)		
789			小皿	9.1	6.0	1.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
790			小皿	9.2	7.6	1.2	橙色 (5YR6/6)		
791			小皿	9.8	6.4	1.6	灰白色 (10YR8/2)		
792			瓦	軒丸瓦	長 (5.0)		厚 (1.5)	灰白色 (10YR8/2)	複弁八葉蓮華文
793		平瓦		長 (12.8)	幅 (15.6)	厚 (2.5)	凸：鈍黄橙色 (10YR7/2)	凸：縄タタキ 凹：布目	
794		平瓦		長 (12.8)	幅 (15.0)	厚 (2.6)	凸：褐灰色 (10YR6/1)	凸：縄タタキ 凹：布目	
795	柱穴列4	土師器	皿	(11.6)		(2.2)	鈍橙色 (7.5YR7/4)		
796			皿	(12.5)		(3.0)	鈍橙色 (7.5YR6/4)		
797	土塚墓1	土師器	碗		4.8	(1.0)	灰白色 (2.5Y8/2)		
798			碗		4.8	(1.2)	灰白色 (2.5Y8/2)		
799	土塚墓2	土師器	小皿	7.6	5.4	1.1	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：底部ヘラ切り	
800			碗	(9.7)	3.5	3.9	灰白色 (10YR8/2)		
801	土塚墓3	土師器	小皿	6.0	5.2	1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り	
802			小皿	6.1	4.9	1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り	
803			小皿	(6.0)	5.0	1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り	
804			小皿	5.8	5.2	1.5	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：底部ヘラ切り	
805	土塚墓4	土師器	碗	10.0	3.8	3.8	浅黄橙色 (10YR8/4)		
806			碗	10.3	3.2	3.5	浅黄橙色 (10YR8/3)		
807			碗	10.4	5.2	3.2	浅黄橙色 (10YR8/3)		
808	土塚墓5	土師器	小皿	8.7	5.6	1.8	鈍橙色 (5YR7/4)	外：底部イト切り	
809			小皿	8.8	5.6	2.0	橙色 (5YR7/6)	外：底部イト切り	
810			小皿	9.2	6.3	1.8	橙色 (5YR7/6)	外：底部イト切り	
811	土塚墓6	土師器	小皿	6.8	5.3	1.3	鈍黄橙色 (10YR6/3)		
812	土塚102	土師器	碗		6.1	(2.1)	灰黄褐色 (10YR6/2)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	
813			小皿	9.0		(1.5)	鈍橙色 (7.5YR5/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	
814			小皿	9.8	7.2	1.6	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	
815		瓦	平瓦	長 (12.8)	幅 (8.8)	厚 (2.6)	灰黄褐色 (10YR6/2)	凸：縄目タタキ 凹：ナデ	
816			平瓦	長 (10.8)	幅 (9.9)	厚 (2.4)	灰色 (N6)	凸：ケズリ 凹：布目のちナデ	
817			土塚103	土師器	碗	(10.0)		(3.6)	灰白色 (10YR8/1)
818	土塚105	土師器	碗		2.7	2.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)		
819			小皿	5.9	4.0	1.0	鈍黄橙色 (10YR6/3)	外：ヨコナデ・ヘラ切り？ 内：ヨコナデ	
820	土塚106	土師器	碗			4.2	灰白色 (10YR8/2)	外・内：ヨコナデ	
821	土塚107	土師器	碗	9.2		2.6	灰黄色 (2.5YR7/2)		
822	土塚109	土師器	碗	9.7	2.8	3.6	黄灰色 (2.5YR5/1)		
823			小皿	6.2	5.0	1.2	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：ヨコナデ・ヘラ切り？ 内：ヨコナデ	
824	土塚110	青磁	碗			(2.4)	灰白色 (N8/)	外・内：ヨコナデ・全体施釉	
825	土塚112	瓦質土器	羽釜	19.6			暗灰色 (N3/)	外：ヨコ方向のヘラミガキ	
826	土塚114	土師器	碗	9.0		(3.1)	灰白色 (10YR8/2)	外・内：ヨコナデ・ナデ	
827			小皿	6.8	5.0	1.3	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外・内：ヨコナデ	
828	土塚116	土師器	碗	10.0		(5.3)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外・内：ヨコナデ・ナデ	
829	土塚117	土師器	小皿	6.4	5.1	1.4	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：ヨコナデ・ヘラ切り 内：ヨコナデ	
830	土塚119	土師器	碗	(9.6)	(4.0)	3.5	浅黄橙色 (10YR8/3)	外：押圧痕	
831			碗	9.8	3.5	3.9	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	外：押圧痕	
832			碗	9.8	2.1	4.1	鈍黄橙色 (10YR7/3)	外：押圧痕	
833			小皿	6.0	5.0	1.1	橙色 (5YR6/6)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・指ナデ	
834			小皿	6.9	5.4	1.1	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	
835			鍋			5.2	灰黄褐色 (10YR5/2)	外：ヨコナデ・指ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
836	土塚122	土師器	碗		(6.9)	(2.0)	灰白色 (10YR8/2)	外・内：ナデ	
837	土塚123	土師器	甕	7.7	6.1	1.3	灰白色 (10YR8/2)	外：ヨコナデ・イト切り 内：ヨコナデ	
838			小皿	8.2	6.9	1.4	灰白色 (10YR8/2)	外：ナデ・ヘラ切り 内：ナデ	
839			小皿	9.2	7.0	1.2	灰白色 (10YR8/2)	外：ヘラオコシ 内：ヨコナデ	
840			碗	15.2	6.4	5.3	灰白色 (10YR8/1)	外：押圧痕	

表23-15 窪木遺跡土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴その他	備考	
				口径	底径	器高				
841	土塙123	土師器	碗	14.5	6.2	5.5	灰白色 (10YR8/1)	外：押圧痕		
842			碗	(14.6)	(6.0)	6.0	灰白色 (10YR8/2)	外：押圧痕		
843			三足碗	13.9		5.6	灰白色 (2.5Y8/1)	外：脚3個・指オサエ・ナデ		
844			片口鉢	22.0	8.5	5.8	灰白色 (2.5Y8/1)	外：ヘラ切り 内：ナデ		
845		須臾器	甕				灰白色 (N8/)	外：平行タタキ・自然釉付着 内：ナデ		
846	溝12	土師器	小皿	6.4	6.0	1.2	橙色 (5YR6/6)	外・内：ヨコナデ・ナデ		
847			小皿	6.8	3.5	1.3	橙色 (5YR6/6)	外・内：ヨコナデ・ナデ		
848			小皿	6.9	3.4	1.4	橙色 (5YR6/8)	外：ヨコナデ・指ナデ 内：ヨコナデ・ナデ		
849			小皿	6.9		1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ		
850			小皿	6.7		1.6	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ		
851			小皿	7.0		1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ		
852			小皿	7.2	3.8	1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：ヨコナデ・指ナデ 内：ヨコナデ・ナデ		
853			小皿	7.6	3.8	1.4	鈍橙色 (7.5YR6/4)	外：ヨコナデ・指オサエ・ナデ 内：ヨコナデ		
854			小皿	9.0		(2.6)	鈍褐色 (7.5YR6/3)	外：ヨコナデ・指ナデ 内：ヨコナデ		
855			小皿	9.4	5.6	2.1	橙色 (2.5YR6/6)	外：ヨコナデ・指ナデ 内：ヨコナデ・ナデ		
856			皿	11.0	5.3	1.9	鈍黄橙色 (10YR6/3)	外：ヨコナデ・指ナデ 内：ヨコナデ・ナデ		
857			皿	12.3	7.2	3.3	鈍黄褐色 (10YR5/3)	外：指オサエ後ナデ 内：指オサエ		
858			白磁	皿			2.1	灰白色 (N8/)	外：施釉・露胎 内：施釉	
859				皿	11.9	6.5	2.7	灰白色 (7.5Y8/1)	外：施釉・露胎 内：施釉	
860	備前焼	播鉢			(3.4)	赤灰色 (2.5YR4/1)	外・内：ヨコナデ			
861		播鉢			5.7	灰赤色 (2.5YR5/2)	外：ナデ 内：オロシ目6本			
862	亀山焼	播鉢			6.0	浅黄橙色 (10YR8/3)	内：オロシ目6本			
863		播鉢		12.0	(3.6)	灰白色 (2.5Y8/1)	内：オロシ目7本			
864	溝15	土師器	碗	9.8		(3.1)	鈍橙色 (7.5YR7/3)	外・内：ヨコナデ・ナデ		
865			小皿	6.3	4.9	1.2	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：ヨコナデ・ヘラ切り？ 内：ヨコナデ		
866	窪地6	土師器	碗	9.6	2.9	4.2	浅黄橙色 (10YR8/3)	外・内：指オサエ・ナデ		
867			東播系 こね鉢	27.7		7.7	鈍橙色 (7.5YR7/4)	外・内：ヨコナデ		
868	窪地7	土師器	皿			1.6	灰白色 (10YR8/2)			
869	柱穴および遺槽に伴わない遺物	土師器	碗	(15.0)	6.8	4.9	浅黄橙色 (7.5YR8/3)			
870			碗	15.7	6.0	6.1	灰白色 (7.5YR8/2)			
871			碗		7.0		灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り		
872			碗		(7.2)		灰白色 (10YR8/2)			
873			碗	14.0	5.8	5.3	浅黄橙色 (10YR8/3)			
874			碗	14.2	6.0	4.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)			
875			碗	14.6	5.9	4.6	灰白色 (10YR8/1)			
876			碗	14.1			灰白色 (10YR8/1)			
877			碗	9.6	3.9	3.7	浅黄橙色 (10YR8/3)	内側スス付着		
878			碗	9.0	3.8	4.0	鈍黄橙色 (10YR7/2)			
879			碗	9.4	5.2	3.2	灰白色 (10YR8/1)			
880			碗	9.3	4.1	3.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)	口部スス付着		
881			小皿	8.4	6.3	1.5	灰白色 (10YR8/1)			
882			小皿	8.1	6.3	1.2	灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り		
883	小皿	8.2	6.5	1.5	灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り				
884	小皿	8.2	6.8	1.3	灰白色 (10YR8/2)	外：底部ヘラ切り				
885	鍋	31.4			鈍黄褐色 (10YR5/3)					
886	鍋	32.6		18.0	鈍赤褐色 (5YR5/4)	外：スス付着 内：底部スス付着				
887	鍋	(34.4)			鈍橙色 (7.5YR7/4)	外：全体的にスス付着				
888	青磁	碗	16.5		(3.9)	灰色 (N6/)	外：蓮弁ケズリ出し 内：施釉			
889	瓦	軒丸瓦			厚 (1.9)	凸：暗灰色 (N3/)	七宝文 裏面：ナデ			

表24-1 窪木遺跡石製品一覧

掲載 番号	遺構名	器種	石材	法量 (mm)			重量 (g)	時代	備考 (出土地区)
				長さ	幅 (径)	厚さ (孔径)			
S1	竪穴住居 3	磨製石斧	泥質片岩	47.0	12.5	37.0	23.0	弥生	
S2		太型蛤刃石斧	安山岩	201.0	85.0	61.0	1512.4		
S3		砥石	流紋岩	61.5	38.0	18.8	65.0		
S4		加工石	安山岩	79.0	22.0	85.0	62.6		
S5		砥石	流紋岩 (微粒)	133.0	143.0	101.0	3250.0		
S6		石鏃	サスカイト	28.5	18.0	4.0	2.1		
S7		楔	サスカイト	17.5	16.0	3.4	1.0		
S8		楔	サスカイト	27.5	27.0	3.8	3.4		
S9		打製石包丁	サスカイト	71.5	57.5	12.0	51.5		
S10	竪穴住居 4	石鏃	サスカイト	19.5	9.0	3.0	0.4	弥生	
S11	竪穴住居 6	砥石	泥岩 成羽層群	47.5	30.0	32.0	72.1	弥生	
S12	土壌 1	打製石包丁	サスカイト	62.0	57.0	11.0	53.4	弥生	
S13	土壌 10	U.F.	サスカイト	37.5	26.5	14.0	13.2	弥生	
S14		蛤刃石斧	閃緑岩 (細粒)	107.0	55.0	40.0	362.2		
S15		石斧?	砂質片岩	189.0	73.0	32.0	545.6		
S16		砥石?	安山岩 (岩脈)	192.0	64.0	40.0	560.8		
S17	土壌 17	石鏃	サスカイト	16.0	11.5	2.3	0.3	弥生	
S18		石鏃	サスカイト	11.0	14.5	3.0	0.5		
S19	土壌 21	石鏃	サスカイト	22.0	14.0	3.0	0.7	弥生	
S20	土壌 28	石鏃	サスカイト	19.5	18.0	2.7	1.0	弥生	
S21	土壌 35	砥石?	流紋岩	193.5	84.0	82.0	1203.8	弥生	
S22	土壌 42	石鏃	サスカイト	18.0	13.0	3.0	0.6	弥生	
S23	土壌 43	楔	サスカイト	13.0	16.0	4.4	1.1	弥生	
S24	土壌 65	砥石?	砂岩 成羽層群	118.0	42.0	36.0	276.0	弥生	
S25	溝 1	磨製石斧		73.0	70.0	52.0	338.6	弥生	
S26	窪地 4	石鏃	サスカイト	32.0	17.0	3.5	1.8	弥生	
S27		打製石包丁	サスカイト	79.0	43.0	9.5	41.1		
S28		打製石包丁	サスカイト	117.5	44.5	10.5	72.4		
S29		磨製石包丁	流紋岩	136.0	43.0	10.0	78.4		
S30	柱穴および遺構 に伴わない遺物	打製石包丁	サスカイト	39.5	53.5	7.5	17.7	弥生	150S出土
S31		打製石包丁	サスカイト	39.5	44.0	10.0	18.1		120E出土
S32		打製石包丁	サスカイト	92.0	41.5	11.0	56.1		旧1区出土
S33		打製石包丁	サスカイト	101.0	44.0	9.0	43.7		144O出土
S34		打製石包丁	サスカイト	98.5	50.0	15.0	85.4		150S出土
S35		打製石包丁	サスカイト	149.0	57.5	14.0	110.8		130I出土
S36		石鏃	サスカイト	12.5	12.5	2.5	0.4		120E出土
S37		石鏃	サスカイト	23.5	15.0	3.0	0.8		旧1区出土
S38		石鏃	サスカイト	17.0	12.5	3.2	0.6		120E出土
S39		石鏃	サスカイト	21.5	14.0	3.3	0.7		122E出土
S40		石鏃	サスカイト	16.5	15.5	2.0	0.6		122E出土
S41		石鏃	サスカイト	26.0	16.5	3.3	1.0		150S出土
S42		石鏃	サスカイト	28.0	22.0	5.3	2.2		旧4区出土
S43		石鏃	サスカイト	31.0	14.5	3.3	1.4		144O出土
S44		石鏃	サスカイト	16.0	11.5	1.5	0.3		142O出土
S45		石鏃	サスカイト	17.0	13.2	3.5	0.9		114C出土
S46		石鏃	サスカイト	15.5	13.5	3.0	0.7		116E出土
S47		石鏃	サスカイト	16.5	9.5	3.2	0.5		122E出土
S48		石鏃	サスカイト	17.0	17.0	3.0	1.0		110C出土
S49		石鏃	サスカイト	22.5	16.0	4.0	1.3		旧5区出土
S50		石鏃	サスカイト	24.0	17.5	4.0	1.4		144O出土
S51		石鏃	サスカイト	19.5	9.5	3.3	0.6		116E出土
S52		石鏃	サスカイト	28.5	11.0	2.8	0.8		124G出土
S53		石鏃	サスカイト	29.0	15.5	4.0	1.6		146Q出土
S54		石鏃	サスカイト	37.0	15.0	5.0	2.4		146Q出土
S55		石鏃	サスカイト	12.0	12.5	2.0	0.3		130I出土
S56		石鏃	サスカイト	29.5	2.0	3.0	1.8		146Q出土
S57		石鏃	サスカイト	20.5	11.5	2.8	0.8		124G出土
S58		石鏃?	サスカイト	31.5	14.0	3.5	1.9		146Q出土
S59		楔?	サスカイト	17.5	13.5	4.3	1.3		122E出土
S60		楔?	サスカイト	29.5	24.0	5.8	43.8		122G出土
S61		楔?	サスカイト	40.0	25.5	12.0	15.2		130I出土
S62		スクレイパー?	サスカイト	50.0	29.0	4.5	8.6		118C出土

表24-2 窪木遺跡石製品一覧

掲載 番号	遺構名	器種	石材	法量 (mm)			重量 (g)	時代	備考 (出土地区)		
				長さ	幅 (径)	厚さ (孔径)					
S63	柱穴および遺構 に伴わない遺物	スクレイパー	サスカイト	58.0	47.0	7.5	26.9	弥生	旧1区出土		
S64		R.F.	サスカイト	31.5	29.0	8.0	7.7		116E出土		
S65		U.F.	サスカイト	79.0	60.0	10.0	45.4		116E出土		
S66		U.F.	サスカイト	80.5	47.5	7.0	32.1		120E出土		
S67		U.F.	サスカイト	74.0	44.5	9.0	24.6		150S出土		
S68		柱状片刃石斧	粘板岩	75.5	10.0	12.7	19.1		旧14区出土		
S69		蛤刃石斧	安山岩	119.0	61.0	35.0	440.2		旧3区出土		
S70		蛤刃石斧	安山岩	96.5	60.0	41.0	400.4		旧12区出土		
S71		蛤刃石斧	安山岩	97.0	70.0	51.0	594.8		旧11区出土		
S72		磨裂石包丁	泥質千枚岩	69.0	58.5	8.5	53.2		118E出土		
S73		石錘	閃緑岩 (粗粒)	73.0	65.0	62.5	42.2		118E出土		
S74		礫石	流紋岩	102.0	36.0	27.0	132.8		旧14区出土		
S75		竪穴住居18	砥石	流紋岩	84.0	58.5	57.0		399.7	古墳	
S76		竪穴住居26	白玉	滑石	-	4.8	1.8		0.1	古墳	
S77	竪穴住居32	白玉	滑石	-	5.0	1.5	0.1	古墳			
S78	掘立柱建物 3	白玉	滑石	-	4.7	2.0	0.1	古墳			
S79	柱穴および遺構 に伴わない遺物	石製模造品?	滑石	12.5	24.5	-	12.2	古墳			
S80	土壇105	六角硯	泥岩	88.0	54.0	16.0	98.3	中世			
S81	土壇109	砥石	流紋岩	102.0	41.0	32.5	126.8	中世			
S82	柱穴および遺構 に伴わない遺物	硯 (赤間石)	輝緑凝灰岩	92.0	60.5	24.0	182.3	近世	116C出土		
S83		砥石		100.0	46.5	35.0	223.6		110C出土		
S84		砥石?	粘板岩	89.5	68.5	3.5	30.1		旧13区出土		
S85		砥石	粘板岩	49.0	41.5	11.0	25.0		旧14区出土		
S86		砥石		73.0	55.5	45.0	248.9		106A出土		

表25-1 窪木遺跡土製品一覧

掲載 番号	遺構名	器種	法量 (mm)				重量 (g)	色調	胎土	時代	備考 (出土地区)
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C1	竪穴住居 3	分銅形土製品	(42.0)	63.0	10.5		21.6	鈍橙 (7.5YR7/3)	細砂・粗砂	弥生	
C2	竪穴住居 4	紡錘車	(30.4)	45.0	4.5	4.0	9.4	橙 (5YR6/6)	細砂	弥生	
C3		紡錘車	(35.0)	62.0	7.0	8.0	20.2	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂・粗砂		
C4		紡錘車	61.0	62.0	7.5	7.0	35.9	黒 (7.5YR2/1)	細砂・粗砂		
C5		紡錘車	(807.2)	124.8	17.5	-	169.4	鈍黄橙 (10YR7/3)	細砂・粗砂		
C6	土壇41	紡錘車	41.0	41.0	8.0	-	17.5	黄灰 (2.5Y6 1)	細砂・粗砂・礫	弥生	
C7	柱穴および遺構 に伴わない 遺物	分銅形土製品	(34.0)	30.0	7.5	-	8.9	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂	弥生	旧3区
C8		紡錘車	(25.0)	36.0	6.5	5.0	6.5	黒褐 (5YR3/1)	細砂・粗砂		旧4区
C9		紡錘車	36.5	36.5	6.0	5.5	9.4	鈍橙 (7.5YR7/4)	細砂・粗砂		旧1区
C10		紡錘車	43.0	40.0	5.5	6.5	11.6	鈍赤褐 (5YR4/3)	細砂		旧3区
C11	竪穴住居11	勾玉	39.5	13.0	14.0	4.2	11.5	橙 (5 YR6/6)	細砂・粗砂	古墳	
C12	柱穴および遺構 に伴わない 遺物	土錘	49.0	45.5	43.2	10.6	108.0	鈍橙 (7.5YR7/4)	細砂	古墳	
C13		土錘	51.0	42.0	14.0	14.0	101.8	鈍橙 (7.5YR7/4)	細砂		
C14	土壇100	土錘	(55.0)	19.5	19.0	5.0	17.2	灰黄褐 (10YR6/2)	細砂・粗砂	古代	
C15	土器割まり 5	土錘	(39.5)	14.0	15.0	5.0	11.6	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	古代	
C16		土錘	(44.5)	12.0	14.0	4.0	8.4	橙 (2.5YR6/6)	細砂		
C17	柱穴および遺構 に伴わない 遺物	風字硯	(107.5)	(7.8)	9.0	-	193.6	灰色 (N6 )	細砂・粗砂	古代	旧4区出土
C18		硯 (脚)	29.5	12.0	11.0	-	7.0	鈍褐 (7.5YR5/4)	細砂		旧16区出土
C19		陶馬脚	(90.5)	16.5	30.0	-	72.0	青灰色 (5B5/1)	細砂・粗砂		藩13に混入
C20		土錘	67.2	22.0	22.0	5.0	34.0	鈍黄橙 (10YR7/3)	細砂・粗砂		旧4区出土
C21		土錘	65.2	22.0	21.0	4.5	29.9	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂・粗砂		1420出土
C22		土錘	66.0	20.5	20.5	4.5	27.1	黒 (10YR2/1)	細砂		1420出土
C23		土錘	(59.0)	21.0	21.0	5.5	25.0	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂		1420出土
C24		土錘	51.5	19.0	17.5	4.5	18.2	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂		旧6区出土
C25		土錘	(49.0)	20.8	20.8	5.0	20.0	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂		1440出土
C26		土錘	51.0	20.0	18.0	4.0	18.9	黒 (7.5YR2 1)	細砂・粗砂		旧6区出土
C27		土錘	55.0	16.3	15.5	4.0	12.7	鈍褐 (7.5YR5/4)	細砂・粗砂		旧6区出土
C28		土錘	51.0	19.0	17.8	4.2	15.2	黒褐 (7.5YR3/1)	細砂		旧6区出土
C29		土錘	(46.3)	15.2	15.5	4.5	8.8	灰白 (10YR8/2)	細砂・粗砂		旧6区出土
C30		土錘	(36.5)	16.5	16.8	5.0	8.5	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂		1440出土

表25-2 窪木遺跡土製品一覧

掲載番号	遺構名	器種	法量 (mm)				重量 (g)	色調	胎土	時代	備考 (出土地区)
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C31	溝13	土鍾	(21.0)	9.5	9.0	1.7	2.2	鈍黄橙 (10YR7/3)	細砂	中世	
C32		土鍾	(55.0)	10.5	10.5	2.5	5.9	鈍橙 (7.5YR6/4)	細砂		
C33	柱穴および遺構に伴わない遺物	土鍾	59.0	12.0	12.0	3.5	7.7	黄灰 (2.5Y4/1)	細砂	中世	142O出土
C34		土鍾	47.0	13.0	12.0	2.0	7.5	明赤褐 (2.5YR5/6)	細砂		旧16区出土
C35		土鍾	(30.2)	12.9	13.0	3.0	5.2	橙 (5YR6/6)	細砂		142O出土
C36		土鍾	44.8	12.5	12.5	3.2	6.2	鈍橙 (7.5YR7/3)	細砂		旧6区出土
C37		土鍾	45.5	10.2	10.0	3.5	4.6	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂		旧4区出土
C38		土鍾	45.0	10.5	10.5	3.0	4.9	鈍橙 (7.5YR7/3)	細砂		144O出土
C39		土鍾	(35.0)	10.8	10.8	4.0	3.9	鈍黄橙 (10YR6/3)	細砂		142O出土
C40		土鍾	(42.0)	11.0	12.0	3.5	5.4	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂		旧6区出土
C41		土鍾	45.0	9.5	8.5	2.5	3.5	鈍橙 (2.5YR6/4)	細砂		旧12区出土
C42		土鍾	39.8	11.0	11.0	3.2	4.8	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂・粗砂		144O出土
C43		土鍾	37.8	12.2	11.7	3.0	5.6	鈍黄橙 (10YR7/2)	細砂・粗砂		旧4区出土
C44		土鍾	(26.0)	9.2	9.2	3.5	2.3	鈍黄橙 (10YR7/3)	細砂		旧4区出土
C45		土製円板	34.5	32.0	13.0	-	17.1	灰 (5Y6/1)	細砂		旧14区出土
C46		土製円板	37.0	39.0	6.5	-	14.1	鈍赤褐 (2.5YR5/3)	細砂		旧12区出土
C47		土製円板	37.0	36.0	17.0	-	26.6	暗灰 (N3/)	細砂		118E出土
C48		土製円板	41.0	33.0	14.0	-	22.3	暗灰 (N3/)	細砂		旧13区出土
C49		土製円板	40.0	38.0	13.5	-	25.6	黄灰 (2.5Y4/1)	細砂・粗砂		120F出土
C50	土製円板	40.5	40.5	16.0	-	26.9	黄灰 (2.5Y6/1)	細砂	旧14区出土		
C51	土製円板	46.0	45.0	16.0	-	39.3	灰 (N4/)	細砂	旧13区出土		
C52	土製円板	57.0	53.5	17.5	-	61.1	暗灰 (N3/)	細砂・粗砂・礫	114F出土		
C53	鈎鈔平?	40.0	39.0	16.0	4.5	29.6	灰白 (2.5Y7/1)	細砂	旧14区出土		

表26 窪木遺跡金属器一覧

掲載番号	遺構名	器種	材質	法量 (mm)			重量 (g)	時代	備考 (出土地区)
				長さ	幅	厚さ (孔径)			
M1	竪穴住居1	不明	鉄	37.0	8.0	1.8	2.1	弥生	
M2	土壘28	摘鎌?	鉄	(82.9)	20.3	7.3	13.8	弥生	
M3	竪穴住居11	ヤス	鉄	(175.0)	8.0	7.0	32.0	古墳	
M4		ヤス?	鉄	(161.0)	12.0	8.5	51.3		
M5		ヤス?	鉄	(41.5)	11.0	7.5	11.3		
M6	竪穴住居24	摘鎌	鉄	85.0	19.0	2.0	8.0	古墳	
M7	竪穴住居26	不明鉄製品	鉄	27.0	10.5	2.8	1.6	古墳	
M8	竪穴住居32	又鋸	鉄	148.0	124.0	14.5	367.9	古墳	
M9		不明鉄製品	鉄	36.5	10.0	6.0	4.5		
M10	掘立柱建物3	石突?	鉄	34.0	13.0	2.0	6.6	古墳	
M11	掘立柱建物6	不明鉄製品	鉄	25.5	4.0	4.0	1.4	古墳	
M12	掘立柱建物14	鋸	鉄	43.0	20.0	2.2	7.5	古墳	
M13	土壘80	鋸?	鉄	(42.0)	7.5	3.2	2.3	古墳	
M14	土壘86	鋸	鉄	(136.6)	7.2	3.0	5.7	古墳	
M15	土壘97	刀子	鉄	(46.0)	10.2	5.0	3.4	古墳	
M16	柱穴および遺構に伴わない遺物	鉄斧	鉄	48.2	35.0	5.0	51.4	古墳	
M17	土壘113	牛具?	鉄	48.3	8.7	8.3	11.9	中世	
M18		釘	鉄	52.2	5.5	5.7	3.6		
M19		釘	鉄	54.3	9.8	10.2	13.6		
M20	土壘123	刀子	鉄	34.8	18.5	8.2	5.6	中世	
M21	溝12	銭貨 (治平元寶)	銅	24.0	24.0	1.2	2.3	中世	初鑄1064
M22		銭貨 (大観通寶)	銅	24.2	24.2	1.2	2.4		初鑄1107
M23		銭貨 (大観通寶)	銅	24.0	24.0	1.2	3.1		初鑄1107
M24		刀子	鉄	108.0	13.0	2.8	8.6		
M25		釘	鉄	46.5	4.5	4.5	2.5		
M26		釘	鉄	52.0	4.5	4.2	3.0		
M27		釘	鉄	52.0	5.5	4.5	2.7		
M28		釘	鉄	35.0	5.0	4.5	2.5		
M29	釘	鉄	46.0	5.0	4.5	3.1			
M30	柱穴および遺構に伴わない遺物	銭貨 (皇宋通寶)	銅	24.0	24.0	1.8	1.4	中世	110E出土 初鑄1039
M31		銭貨 (治平元寶)	銅	24.0	24.0	1.2	2.7		旧16区出土 初鑄1064
M32		銭貨	銅	22.0	21.0	1.8	1.7		112A出土 銭名不明
M33	柱穴および遺構に伴わない遺物	火管	鉄	318.5	6.4	6.5	34.6	近世	116E出土
M34		鎌	鉄	225.0	40.0	4.2	92.2		114E出土
M35		刀子	鉄	46.7	23.6	7.2	15.0		122G出土
M36		釘	鉄	32.2	4.1	5.5	1.0		122G出土



表27-1 窪木遺跡溝12出土哺乳類網骨鑑定表

番号	小分類	部位	LR	部分	成長	破損	色調	風化	重量	計測値	備考
1	ヒト	前頭骨	R	眼高上部(破片)	-	-	褐灰色	-	4.22		火葬場又は墓?
2	ヒト	上腕骨	L	近位端+骨幹部	p:f	-	褐灰色	-	22.95		火葬場又は墓?
3	ヒト	大腿骨	L	近位端+骨幹部	p:f	-	褐灰色	-	41.39		火葬場又は墓?
4	ヒト	頭蓋骨	LR?	骨幹部(破片)	-	-	乳白色	-	26.6		
5	ヒト	脊椎	M	骨幹部(破片)	-	-	白灰色	-	22.48		
6	ヒト	寛骨恥骨?	L	-	-	-	褐灰色	-	4.54		
7	ヒト	四肢骨	LR?	骨幹部(破片)	-	-	褐灰色	-	115.6		一部部位不明を含む
8	ウシ	中足骨	?	近位端+骨幹部	-	偽切創	灰褐色	-	69.25		
9	ウシ	橈骨	L	近位端+骨幹部	p:f	cm (D1aタイプ骨幹部前位)	灰褐色	-	150.72		
10	ウシ	肩甲骨	L	dir+遠位端	d:f	-	灰褐色	-	71.99		
11	ウシ	脛骨	L	-	-	cm (D1aタイプ)	灰褐色	-	136.75		
12	ウシ	橈骨	R	prox+骨幹部	p:f	偽切創	灰褐色	-	176.03		
13	ウシ	橈骨	R	近位端+骨幹部	p:f	偽切創	灰褐色	-	130.05		
14	ウシ	脛骨	L	骨幹部	-	偽切創	灰褐色	-	144.18		
15	ウシ	脛骨	L	-	-	cm (D1aタイプ)	灰褐色	-	125.9		
16	ウシ	中手骨	L	-	-	cm (D1aタイプ? 骨幹左外側部)	灰褐色	-	124.39		
17	ウシ	中手骨	L	完形	d,p:f	偽切創	灰褐色	-	122.79		
18	ウシ	橈骨	L	近位端+骨幹部	p:f	偽切創(近位部)	灰褐色	-	117.59		
19	ウシ	橈骨	L	近位端+骨幹部	p:f	偽切創(骨幹部)	灰褐色	-	130.84		
20	ウシ	橈骨	R	近位部+骨幹部	p:f	偽切創	灰褐色	-	164.10		
21	ウシ	橈骨	L	近位端+骨幹部	p:f	偽切創(骨幹部)	灰褐色	-	107.85		
22	ウシ	中手骨	L	近位端+骨幹部	-	偽切創	灰褐色	-	54.98		
23	ウシ	中足骨	L	完形(一部欠損)	-	偽切創	灰褐色	-	155.82		
24	ウシ	中足骨	R	近位端+骨幹部	p:f	偽切創	灰褐色	-	76.09		
25	ウシ	中足骨	R	近位端+骨幹部	p:f	偽切創	灰褐色	-	128.19		
26	ウシ	中手骨	R	-	p:f	-	灰褐色	-	114.87		
27	ウシ	中手骨	R	-	-	cm (D1aタイプ骨幹部、 C1aタイプ?骨幹部)	灰褐色	-	104.95		
28	ウシ	中手骨	R	骨幹部	-	偽切創(骨幹部)	灰褐色	-	152.44		
29	ウシ	脛骨	R	-	-	cm (D1aタイプ骨幹部、 D3aタイプ骨幹部)	灰褐色	-	223.22		
30	ウシ	中手骨	R	完形 (遠位端一部欠損)	d,p:f	偽切創	灰褐色	-	106.45		
31	ウシ	距骨	L	完形	f	-	灰褐色	-	42.47		
32	ウシ	踵骨	L	遠位端+骨幹部	f	切創なし?	灰褐色	-	21.03		
33	ウシ	脛骨	L	遠位端+骨幹部	d:f	偽切創	灰褐色	-	22.15		
34	ウシ	尺骨	R	骨幹部+関節部	f	切創なし?	灰褐色	-	14.95		
35	ウシ	下顎骨	L	結合部	-	-	褐灰色	-	6.31		
36	ウシ	下顎臼歯	-	-	-	-	灰褐色	-	50.83		未分類、若齢も 含まれる
37	ウシ	下顎切歯	-	-	-	-	灰褐色	-	2.03		
38	ウシ	上顎臼歯	LR?	-	-	-	褐灰色	-	47.09		LR未分類
39	ウシ	下顎臼歯	R	歯冠部	-	-	褐灰色	-	15.31		
40	ウシ	下顎第3後臼歯	L	完形	-	-	褐灰色	-	12.13	1.29,35, Ba11,80	
41	ウシ	中手骨or中節骨	LR?	遠位端	-	-	灰褐色	-	22.01		
42	ウシ?	肩甲骨	L	-	-	-	褐灰色	-	16.21		
43	ウマ	中足骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	cm (D1aタイプ近位部)	灰褐色	-	109.44		
44	ウマ	上腕骨	L	d+dir	d:f	-	灰褐色	-	26.85		

表27-2 窪木遺跡溝12出土哺乳類綱骨鑑定表

番号	小分類	部位	LR	部分	成長	破損	色調	風化	重量	計測値	備考
45	ウマ	中節骨	LR?	d:dir.p:破片1点、 完形1点	f	-	褐灰色	-	4.09 7.46		
46	ウマ	下顎臼歯	R	歯冠部、小窩連結	-	-	褐灰色	-	8.72		
47	ウマ	中手骨	LR?	d+dir	d:f	-	褐灰色	-	12.03		
48	ウマ	上顎臼歯	-	-	-	-	褐灰色	-	38.78		
49	ウマ	桃骨	L	遠位端+dir	d:f	-	褐灰色	-	14.16		
50	ウマ	切歯(上下顎?)	-	歯冠部	-	-	白灰色	-	14.46		成獣
51	ウマ	下顎臼歯	-	-	-	-	褐灰色	-	72.88		
52	ウシ又はウマ	脛骨	L	-	-	-	灰褐色	-	62.4		
53	ウシ又はウマ	下顎臼歯	LR?	骨幹部	-	-	褐灰色	-	6.12		
54	ウシ又はウマ	脊椎	M	椎体	f	-	褐灰色	-	19.46 /22.82 /26.93 /22.53		
55	ウシ又はウマ	臼歯(上下顎?)	LR?	歯冠部(破片)	-	-	褐灰色	-	5.53		
56	目不明 (中〜大型)	部位不明	LR?	骨幹部	?	-	褐灰色	-	15.42		
57	ヒト	頭蓋骨	M	後頭骨 内後頭隆起	成齢〜 老齢	-	白	-	9.14		左側横溝溝がみられる
58	ヒト	頭蓋骨	?	不明 (骨幹部破片)	成齢〜 老齢	-	白	-	14.94		成長度 ・結合ライン閉塞?
59	ヒト	頭蓋骨	?	-	成齢〜 老齢	-	白	-	8.61		成長度 ・結合ライン閉塞? 1300度程度の高温で 被熱、自然剥付着
60	目不明	頭蓋骨	?	骨幹部	-	-	白	-	8.17		
61	目不明 (小〜 中型哺乳類)	不明	?	骨幹部	-	-	白	-	1.66		
62	目不明 (小〜 中型哺乳類)	不明	?	骨幹部	-	SP	normal	-	0.37		

表28-1 掲載遺構新旧名称对照表

南溝手遺跡

窪木遺跡

遺構名	旧地区名	旧遺構名	遺構名	旧地区名	旧遺構名	遺構名	旧地区名	旧遺構名	遺構名	旧地区名	旧遺構名
竪穴住居 1	5区	No50	土塋11	4区	No54	土塋66・67	3区	No17・18	竪穴住居 1	5区	No2
竪穴住居 2	5区	No63	土塋12	4区	No32	土塋68・69	3区	No15・16	竪穴住居 2	5区	No18
竪穴住居 3	4区	No19	土塋13	4区	No33	土塋70・71	3区	No22・23	竪穴住居 3	1S区	No5
竪穴住居 4	4区	No23	土塋14	4区	No34	土塋72	3区	No24	竪穴住居 4	1区	No10
竪穴住居 5	4区	No29	土塋15	4区	No36	土塋73	3区	No21	竪穴住居 5	1S区	No6
竪穴住居 6	4区	No27	土塋16	4区	No22	土塋74	3区	No25	竪穴住居 6	1区	No11-a
竪穴住居 7	6区	No23	土塋17	4区	No45	土塋75	3区	No37	竪穴住居 7	1区	No11-b
掘立柱建物 1	6N区	No3	土塋18	4区	No43	土塋76	3区	No29	竪穴住居 8	18E区	No12
掘立柱建物 2	6S区	No12	土塋19	4区	No41	土塋77	3区	No1	竪穴住居 9	19㉔区	No7 ㉔
掘立柱建物 3	6S区	No11	土塋20	4区	No47	土塋78	5区	No7	竪穴住居10	19(3)区	No2
掘立柱建物 4	7・8区	No4	土塋21	4区	No44	土塋79	5区	No2	竪穴住居11	18E区	No10
掘立柱建物 5	3区	No10	土塋22	4区	No53	溝 1	4区	No38	竪穴住居12	18F区	No6
掘立柱建物 6	3区	No43	土塋23	4区	No59	溝 2	7・8区	No6 北	竪穴住居13	18E区	No1
掘立柱建物 7	3区	No14	土塋24	4区	No60	溝 3	2区	No5	竪穴住居14	18E区	No7
掘立柱建物 8	3区	No27	土塋25	4区	No46	溝 4	2区	No6	竪穴住居15	18E区	No5
掘立柱建物 9	3区	No42	土塋26	4区	No48	溝 5	3区	No53	竪穴住居16	18F区	No8
掘立柱建物10	3区	No57	土塋27	5区	No52	溝 6・7	9区	No3・5	竪穴住居17	17区	No28
掘立柱建物11	3区	No56	土塋28	4区	No55	溝 8	1B区	No35	竪穴住居18	17区	No16
掘立柱建物12	4区	No17	土塋29	5区	No48	溝 9	1B区	No19・20	竪穴住居19	17区	No19
掘立柱建物13	5区	No14	土塋30	4区	No51	溝10	1B区	No35a	竪穴住居20	17区	No22
掘立柱建物14	5区	No37	土塋31	4区	No42	溝11	1B区	No36	竪穴住居21	17区	No27
掘立柱建物15	5区	No36	土塋32	4区	No56	溝12	1B区	No27	竪穴住居22	16SE・N区	No46
掘立柱建物16	5区	No38	土塋33	4区	No58	溝13	1B区	No24	竪穴住居23	16SW区	No5
掘立柱建物17	4区	No11	土塋34	5区	No53	溝14	1B区	No4	竪穴住居24	16SW区	No7
柱穴列 1	3区	No11	土塋35	4区	No49	溝15	1B区	No22	竪穴住居25	16SE・N区	No25
柱穴列 2	3区	No28	土塋36	5区	No58	溝16	1B区	No23	竪穴住居26	16SE・N区	No35
柱穴列 3	3区	No19	土塋37	5区	No62	溝17	1A区	No8	竪穴住居27	16SE・N区	No34
井戸 1	7・8区	No27	土塋38	5区	No59	溝18	1A区	No5	竪穴住居28	16SF・N区	No20
井戸 2	5区	No6	土塋39	5区	No65	溝19	1A区	No6	竪穴住居29	16SE・N区	No24
土塋墓 1	4区	No30	土塋40	5区	No56	溝20	2区	No1	竪穴住居30	16SE・N区	No23
土塋墓 2	4区	No39	土塋41	5区	No57	溝21	6区	No16	竪穴住居31	16SE・N区	No22
土塋墓 3	4区	No31	土塋42	5区	No60	溝22	6S区	No13	竪穴住居32	16SE・N区	No33
土塋墓 4	5区	No8	土塋43	5区	No64	溝23	3区	No7	竪穴住居33	15区	No3
土塋墓 5	5区	No10	土塋44	5区	No61	溝24	3区	No8	竪穴住居34	15区	No5
土塋墓 6	5区	No9	土塋45	7・8区	No17	溝25	3区	No34	竪穴住居35	4区	No7
土塋墓 7	4区	No26	土塋46	7・8区	No18	溝26	3区	No3	掘立柱建物 1	18E区	No13
土塋墓 8	5区	No12	土塋47	9区	No4	溝27	3区	No2	掘立柱建物 2	18E区	No3
土塋墓 9	5区	No25	土塋48	5区	No13	溝28	3区	No4	掘立柱建物 3	18E区	No9
土塋墓10	5区	No33	土塋49	5区	No43	溝29	3区	No5	掘立柱建物 4	17区	No11
土塋墓11	6N区	No1	土塋50	5区	No15	溝30	4区	No3	掘立柱建物 5	17区	No14
土塋墓12	6N区	No2	土塋51	5区	No16	溝31	4区	No28	掘立柱建物 6	17区	No21
土塋墓13	6S区	No5	土塋52	5区	No49	溝32	4区	No4	掘立柱建物 7	17区	No17
土塋墓14	6S区	No4	土塋53	5区	No31		4区	No4	掘立柱建物 8	17区	No24
土器棺 1	7・8区	No5	土塋54	5区	No17	索掘溝群 1・2	7・8区	No8・9・11・13	掘立柱建物 9	17区	No23
土器棺 2	3区	No10-p2	土塋55	5区	No27	窪地 1	1B区	No57	掘立柱建物10	16SW区	No1
土塋 1	1B区	No51	土塋56	5区	No11	窪地 2	2区	No7	掘立柱建物11	16SW区	No2
土塋 2	1B区	No43	土塋57	5区	No19	土器溜まり 1	1B区	No39	掘立柱建物12	16SW区	No3
土塋 3	1B区	No50	土塋58	5区	No20	土器溜まり 2	1B区	No49	掘立柱建物13	16SW区	No4
土塋 4	1B区	No25	土塋59	6S区	No10	土器溜まり 3	1A区	No9	掘立柱建物14	16SF・N区	No40
土塋 5	1B区	No42	土塋60	6S区	No18	土器溜まり 4	1C区	No59	掘立柱建物15	16SE・N区	No44
土塋 6	1B区	No26	土塋61	6S区	No7	河道 1	1~3区	1AT1	掘立柱建物16	16SE・N区	No43
土塋 7	1B区	No32	土塋62	7・8区	No16	河道 2	1・2区	No60, No4・9	掘立柱建物17	5区	No7
土塋 8	1B区	No47	土塋63	7・8区	No26				掘立柱建物18	4区	No11
土塋 9	1B区	No46	土塋64	3区	No9				掘立柱建物19	4区	No13
土塋10	4区	No35	土塋65	3区	No35				掘立柱建物20	4区	No12

表28-2 掲載遺構新旧名称対照表

## 窪木遺跡

遺構名	旧地区名	旧遺構名	遺構名	旧地区名	旧遺構名	遺構名	旧地区名	旧遺構名	遺構名	旧地区名	旧遺構名
掘立柱建物21	17区	No6	土壇33	13A区	No25	土壇88	16SW区	No8	溝16	9・10区	No7 ㉔
掘立柱建物22	15区	No10	土壇34	13A区	No15	土壇89	16SE・N区	Pit108	埋置土器 1	11区	No10
掘立柱建物23	15区	No9	土壇35	13A区	No27	土壇90	16SE・N区	No13	埋置土器 2	4区	No9
掘立柱建物24	14N区	No36	土壇36	13A区	No23	土壇91	16SE・N区	No29	窪地 1	11区	No9
掘立柱建物25	15区	No59	土壇37	13A区	No2	土壇92	16SE・N区	No30	窪地 2	5区	No14
掘立柱建物26	1S区	No4	土壇38	13A区	No14	土壇93	16SE・N区	No31	窪地 3	5区	No16
柱穴列 1	18E区	No4	土壇39	13A区	No11	土壇94	16SE・N区	No28	窪地 4	1S区	No13
柱穴列 2	16SE・N区	No26	土壇40	13A区	No21	土壇95	15区	No1	窪地 5	1N区	No10
柱穴列 3	15区	No12	土壇41	12N区	No7	土壇96	15区	No2	窪地 6	16SE区	No36
柱穴列 4	15区	No62	土壇42	12N区	No11	土壇97	15区	No4	窪地 7	14S区	No20
柱穴列 5	14S区	No12	土壇43	12N区	No9	土壇98	11区	No7	土器溜まり 1	3区	No2
土壇墓 1	18W区	No4	土壇44	12N区	No4	土壇99	4区	No4	土器溜まり 2	3区	No3
土壇墓 2	18W区	No11	土壇45	12N区	No1	土壇100	4区	No2	土器溜まり 3	3区	No7
土壇墓 3	16SE・N区	No2	土壇46	12N区	No3	土壇101	4区	No3	土器溜まり 4	3区	No8
土壇墓 4	15区	No58	土壇47	12S区	No22	土壇102	17区	No9	土器溜まり 5	4区	No1
土壇墓 5	15区	No29	土壇48	12S区	No42	土壇103	16SE・N区	No1	土器溜まり 6	1N区	No12
土壇墓 6	12S区	No20	土壇49	12S区	No31	土壇104	16SE・N区	No5	下がり 1	9・10区	No7
土器棺 1	4区	Pit82	土壇50	12S区	No33	土壇105	16SE・N区	No4	下がり 2	1N区	T1
土器棺 2	4区	No6	土壇51	12S区	No24	土壇106	16SE・N区	No32	下がり 3	18区	No2
土器棺 3	4区	Pit103	土壇52	11区	No4	土壇107	16SE・N区	No3			
土器棺 4	4区	No15	土壇53	6区	No3	土壇108	16SE・N区	No7			
土器棺 5	1N区	No8	土壇54	5区	No17	土壇109	16SE・N区	No6			
土器棺 6	1N区	No15	土壇55	5区	No4	土壇110	16SE・N区	No27			
土壇 1	15区	No65	土壇56	5区	No6	土壇111	15区	No36			
土壇 2	15区	No66	土壇57	5区	No15	土壇112	14S区	No44			
土壇 3	15区	No56	土壇58	5区	No5	土壇113	14S区	No15			
土壇 4	15区	No64	土壇59	5区	No9	土壇114	12S区	No4			
土壇 5	15区	No67	土壇60	5区	No12	土壇115	12S区	No17			
土壇 6	14N区	No53	土壇61	1S区	No14	土壇116	12S区	No35			
土壇 7	14N区	No18	土壇62	1S区	No18	土壇117	12S区	No19			
土壇 8	14N区	No39	土壇63	1S区	No19	土壇118	12S区	No14			
土壇 9	14S区	No31	土壇64	1S区	No15	土壇119	12S区	No26			
土壇10	14S区	No21	土壇65	1区	No8	土壇120	12S区	No32			
土壇11	14N区	No37	土壇66	1S区	No20 (1)	土壇121	9・10区	No3			
土壇12	14N区	No31	土壇67	1S区	No8	土壇122	9・10区	No5			
土壇13	14N区	No44	土壇68	1S区	No7	土壇123	9・10区	No4			
土壇14	14N区	No40-a	土壇69	1NW区	No13	焼上面 1	17区	No31			
土壇15	14N区	No40-b	土壇70	1区	No12	焼上面 2	16SW区	No6			
土壇16	14N区	No41-a	土壇71	1区	Pit103	溝 1	17区	No32			
土壇17	14N区	No41-b	土壇72	1区	No9	溝 2	16SE・N区	No38			
土壇18	14N区	No41-c	土壇73	1S区	No12	溝 2	15SW区	No10-b			
土壇19	14N区	No51	土壇74	1S区	No10	溝 2	15区	No6 ㉔			
土壇20	14N区	No42	土壇75	1区	No13	溝 3	14S区	No33 ㉔			
土壇21	14N区	No50	土壇76	1S区	No9	溝 4	1S区	No16			
土壇22	14N区	No56	土壇77	1NW区	No14	溝 5	18W区	No8			
土壇23	14N区	No57	土壇78	1NE区	No9	溝 6	18W区	No9			
土壇24	14S区	No59	土壇79	18E区	No2	溝 7	17区	No25 ㉔			
土壇25	14S区	No1	土壇80	18E区	No11	溝 8	15区	No38			
土壇26	14S区	No32	土壇81	18W区	No7	溝 9	6区	No2 ㉔			
土壇27	14S区	No28	土壇82	18W区	No5	溝10	4区	No14 ㉔			
土壇28	14S区	No55	土壇83	18W区	No6	溝11	4区	No10 ㉔			
土壇29	14S区	No52	土壇84	17区	No30	溝12	16SE・N区	No41(堀)			
土壇30	14S区	No56	土壇85	17区	No12	溝13	16SE・N区	No45			
土壇31	14S区	No40	土壇86	17区	No7	溝14	12S区	No23			
土壇32	13A区	No24	土壇87	17区	No26	溝15	12S区	No21			



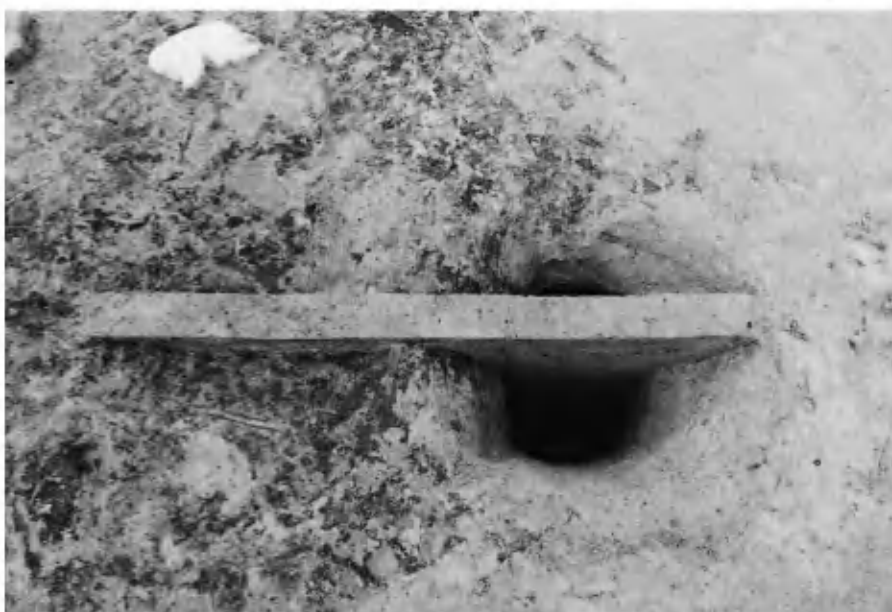
1 南溝手遺跡上空より南東方向を望む（西上空から）



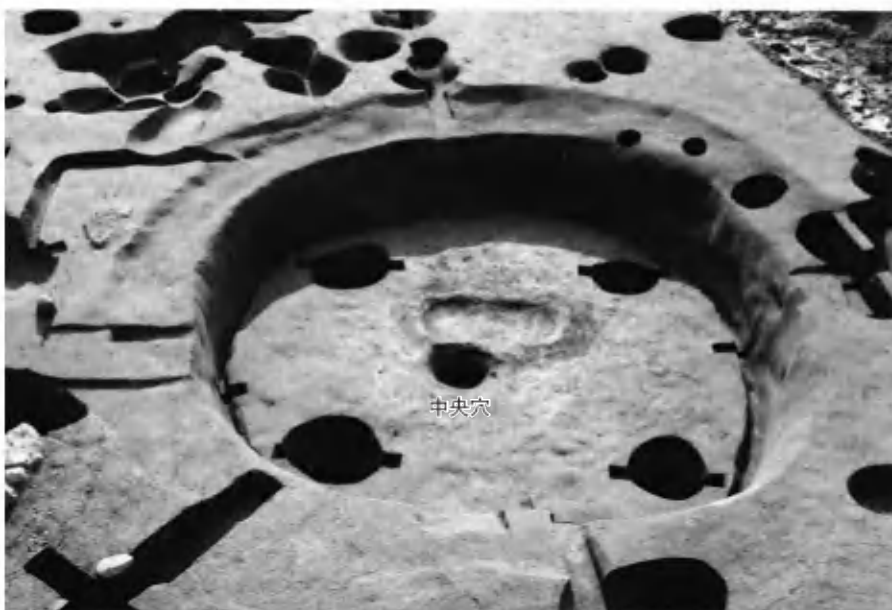
2 南溝手遺跡遠景（東上空から）



1 竪穴住居1  
(南西から)



2 竪穴住居1 中央穴  
(東から)



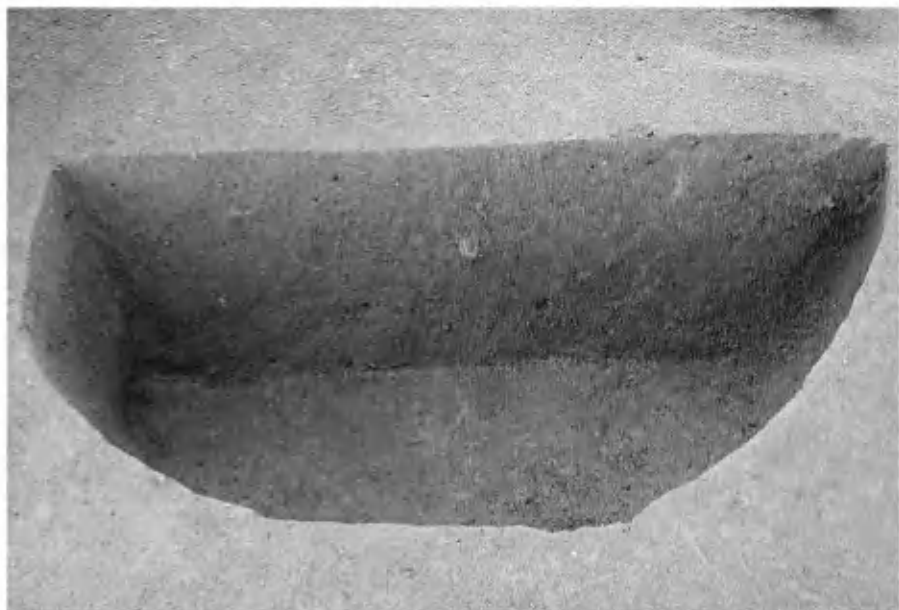
3 竪穴住居1  
(北から)



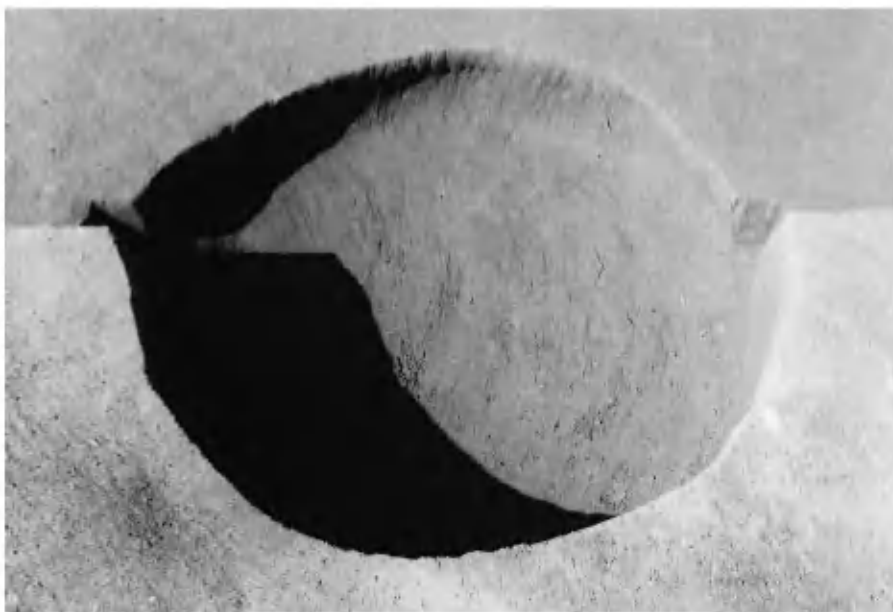
1 76・78E 土壌群  
(西から)



2 76・78E 土壌群  
(東から)



3 土壌1 (北から)



1 土壌2 (南から)

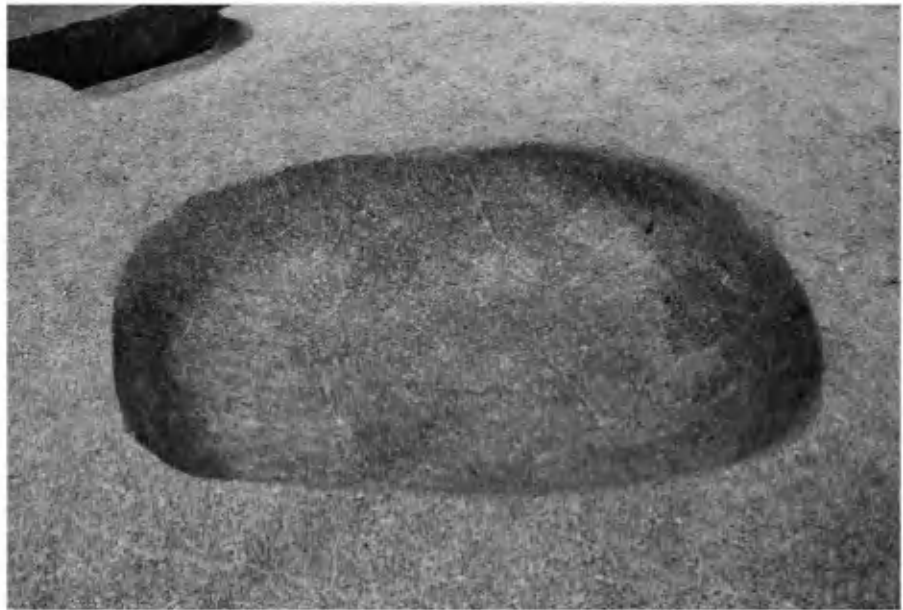


2 土壌3 (南から)

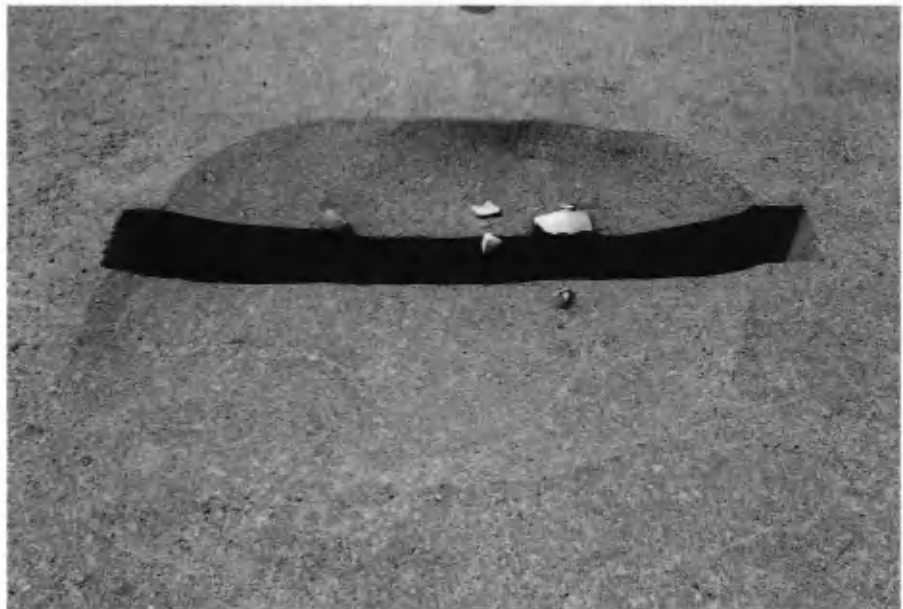


3 土壌4・6・7  
(南から)





1 土壇4 (南西から)



2 土壇5 (東から)



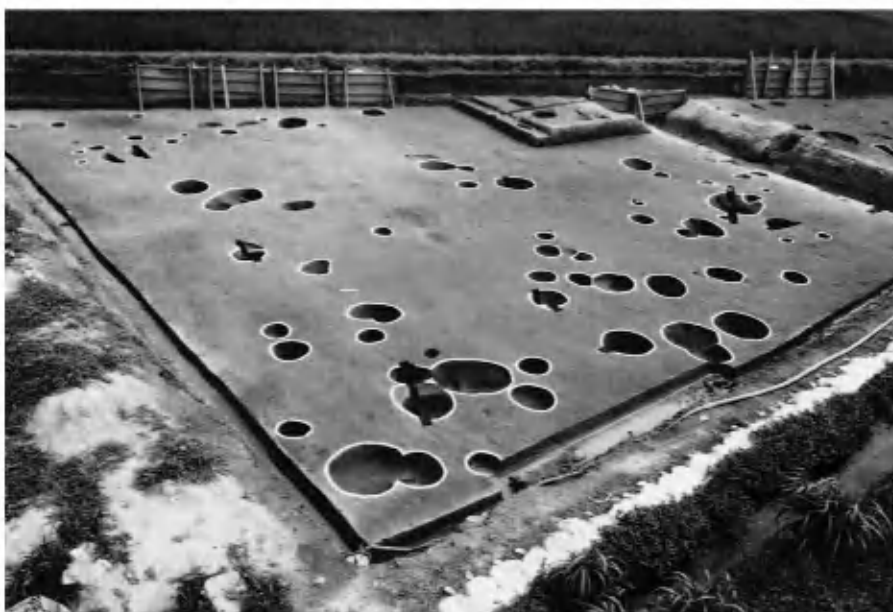
3 土壇6 (南から)



1 土壌 8 (南から)



2 土壌 9 (南から)



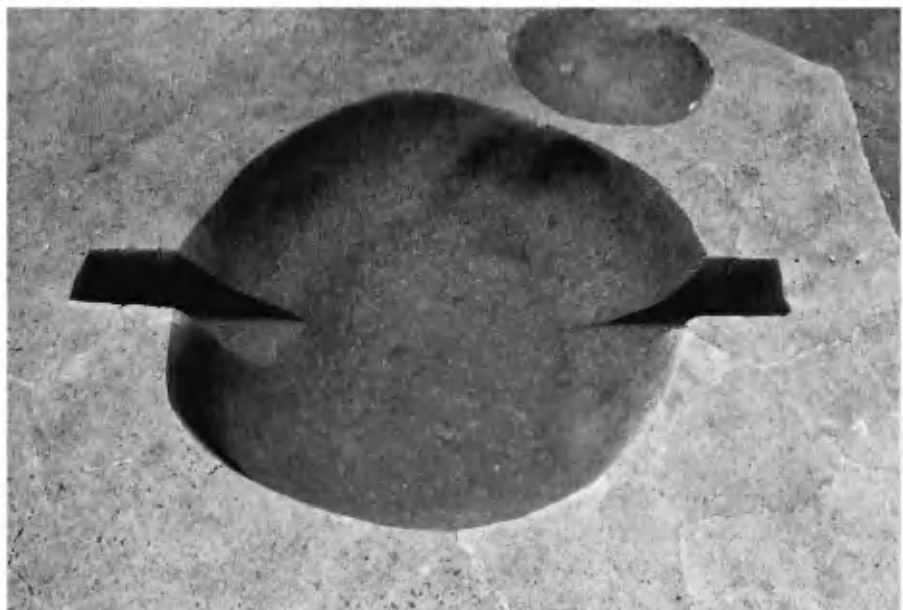
3 88E 遺構検出状況  
(北東から)



1 土壌10 (南西から)



2 土壌11 (南から)



3 土壌12 (南東から)



1 土壇13 (南から)

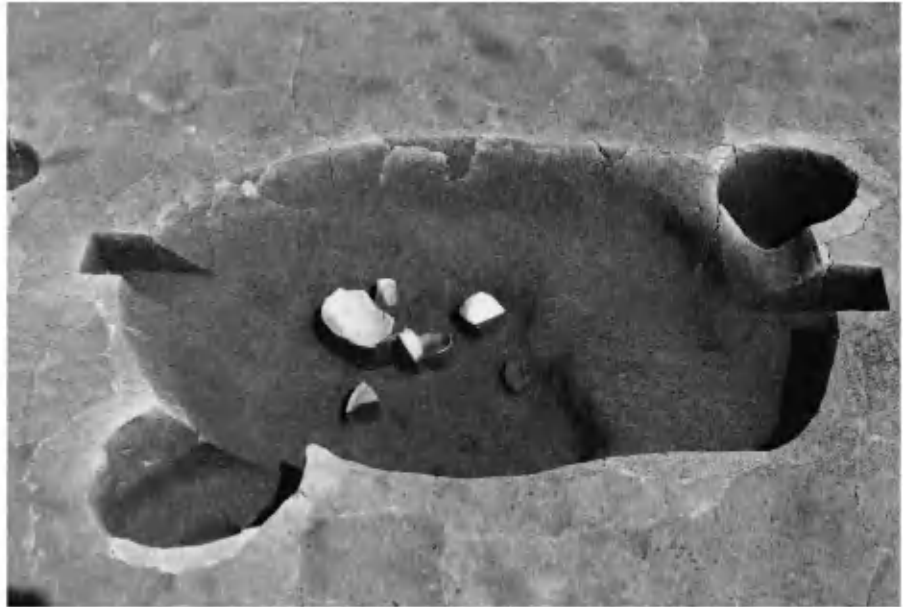


2 土壇14 (南から)



3 土壇15 (南から)

1 土壘16 (南から)



2 土壘17 (西から)

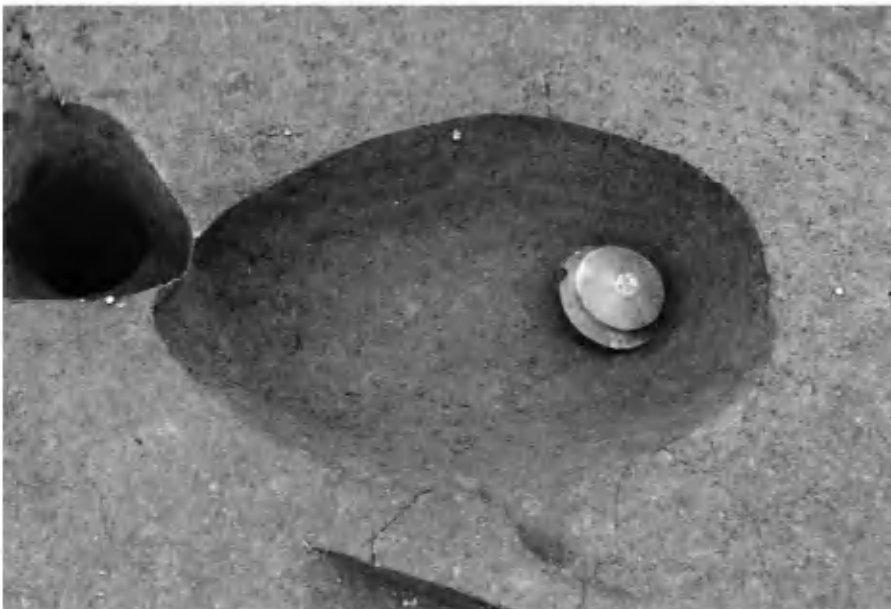


3 土壘18 (東から)





1 土壌22 (南東から)



2 土壌23 (南から)



3 土壌24 (南から)



1 土壌25 (西から)



2 土壌26 (南から)



3 土壌28 (南東から)



1 土壇30 (南東から)



2 土壇31 (南から)



3 土壇32 (東から)



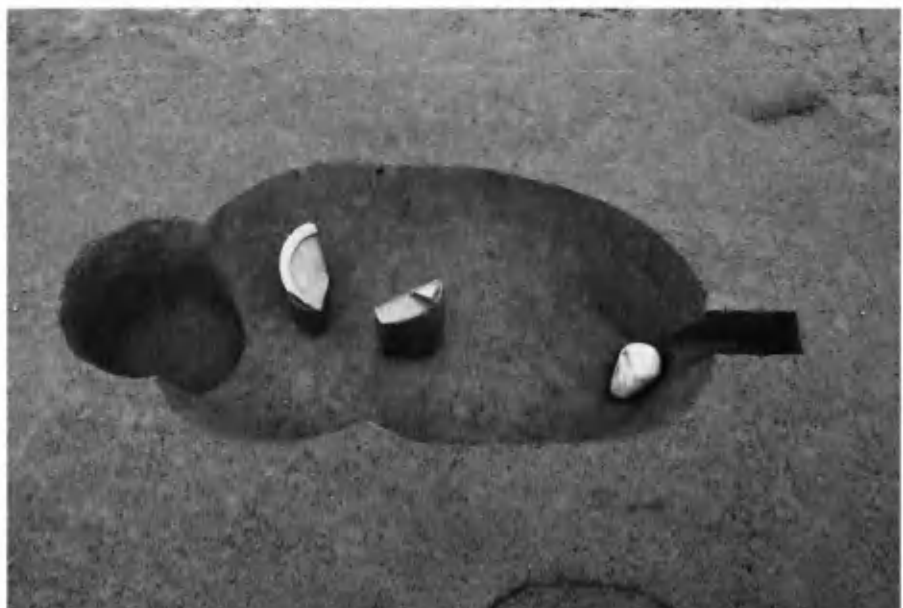
1 土壌33 (北西から)

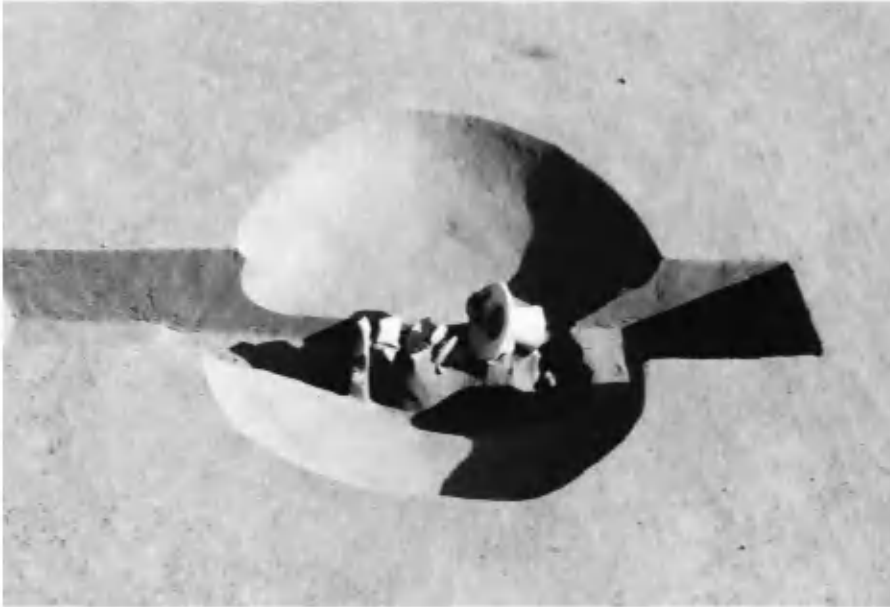


2 土壌35 (南から)



3 土壌37 (南から)





1 土壌38 (西から)



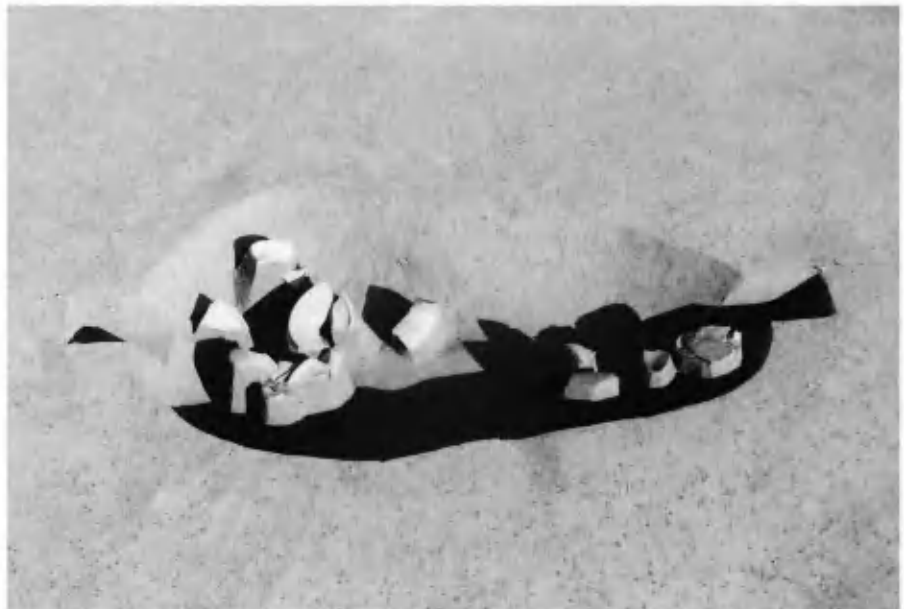
2 土壌39 (南から)



3 土壌40 (南から)



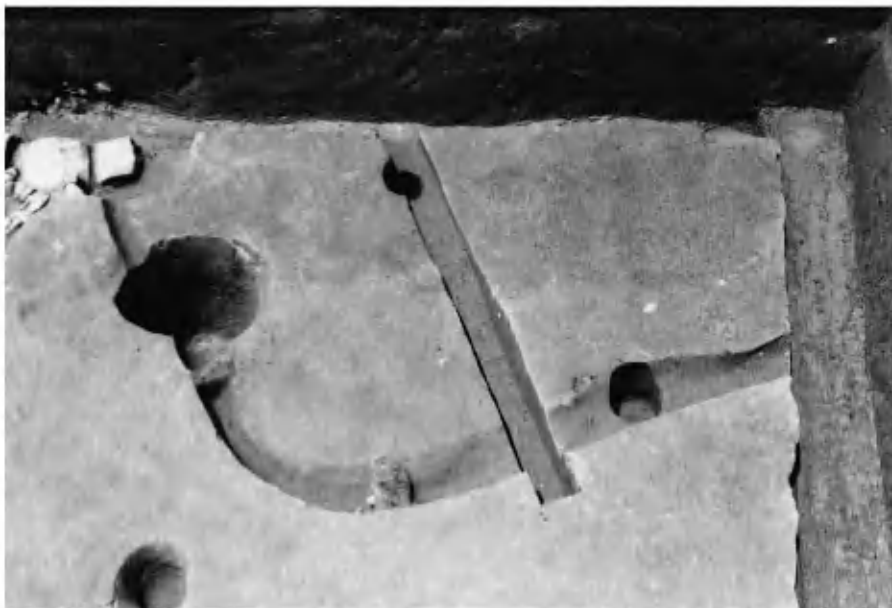
1 土壇41 (南から)



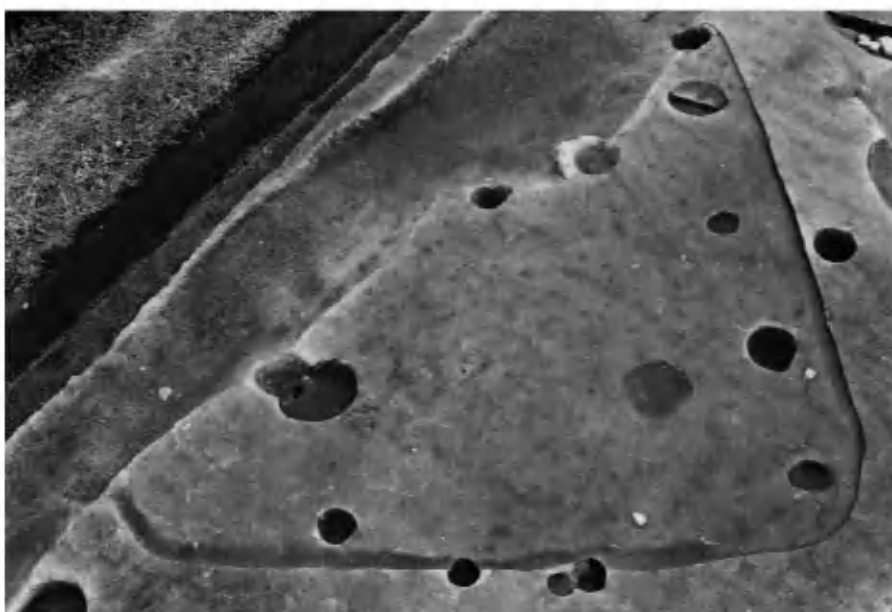
2 土壇42 (南西から)



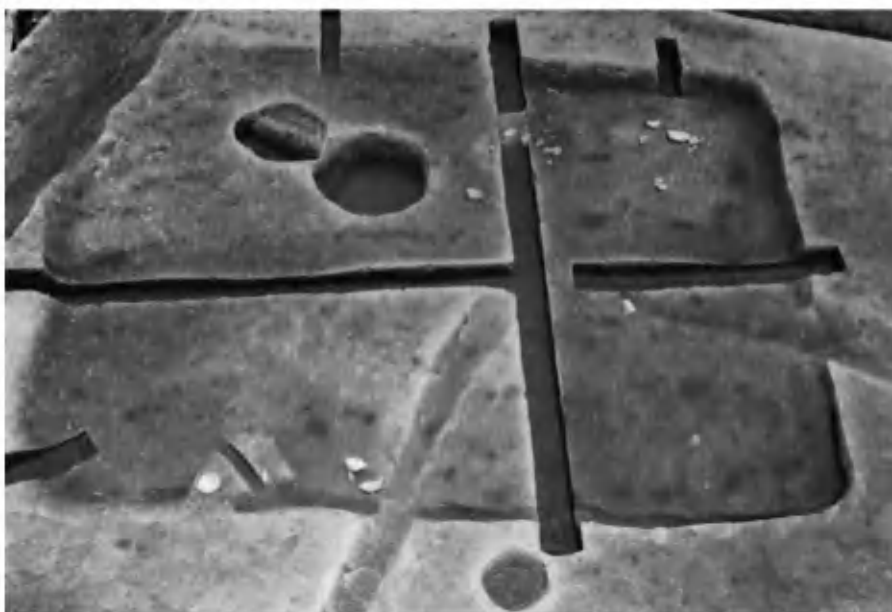
3 土壇43 (西から)



1 竪穴住居 3  
(東から)



2 竪穴住居 4  
(南西から)



3 竪穴住居 5  
(南から)

1 竪穴住居6  
(東から)

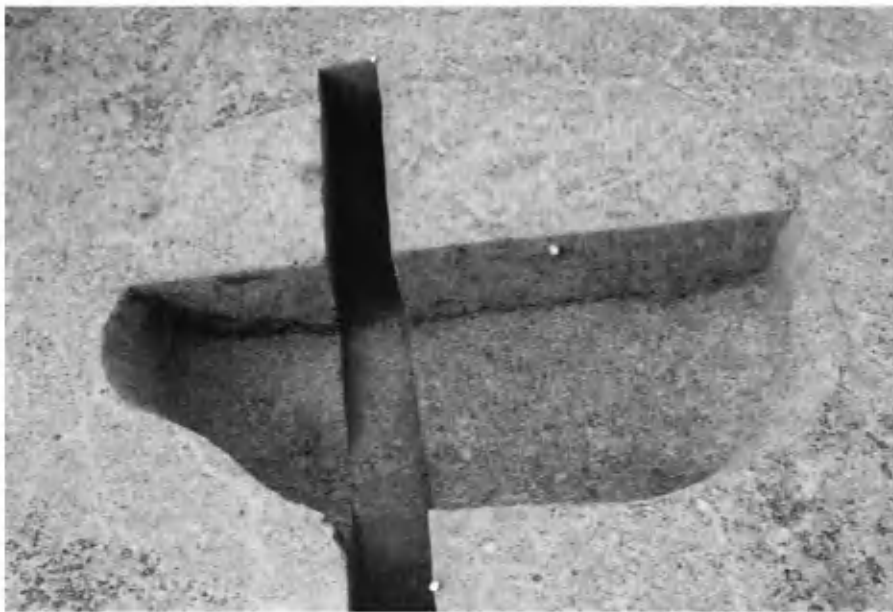


2 竪穴住居6 カマド  
(南西から)

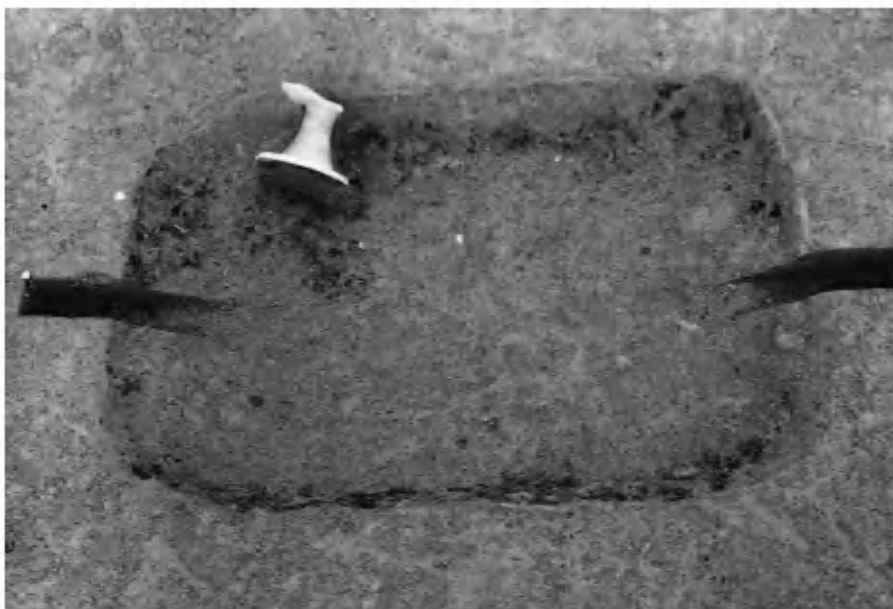


3 竪穴住居7  
(北から)





1 土壇45 (南から)



2 土壇46 (西から)



3 溝2 (西から)



1 溝2断面 (西から)



2 溝2断面 (南から)



3 土器溜まり2  
(西から)



1 土器溜まり 2  
(南東から)



2 土器溜まり 4  
(西から)



3 土器溜まり 4  
(北から)





1 河道1 (北東から)



2 河道1 (東から)



3 河道2 (南東から)



1 河道 2 (北西から)



2 河道 2 (南東から)



3 河道 2 (北から)



1 河道 2 (北西から)



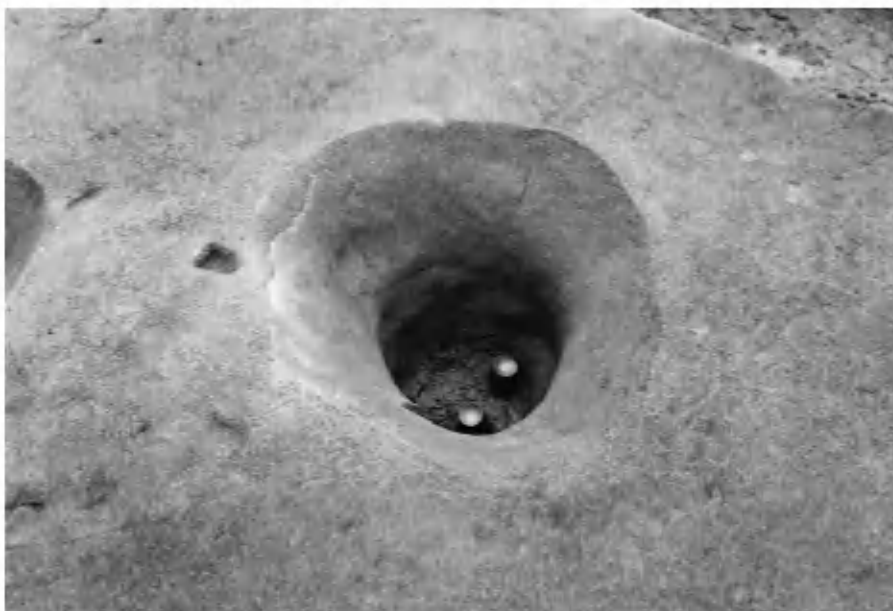
2 河道 2 瓦出土状況  
(南から)



3 河道 2 陶馬出土状況  
(西から)



1 掘立柱建物 4  
(東から)



2 井戸 1 (西から)



3 土壇墓 1 (南から)



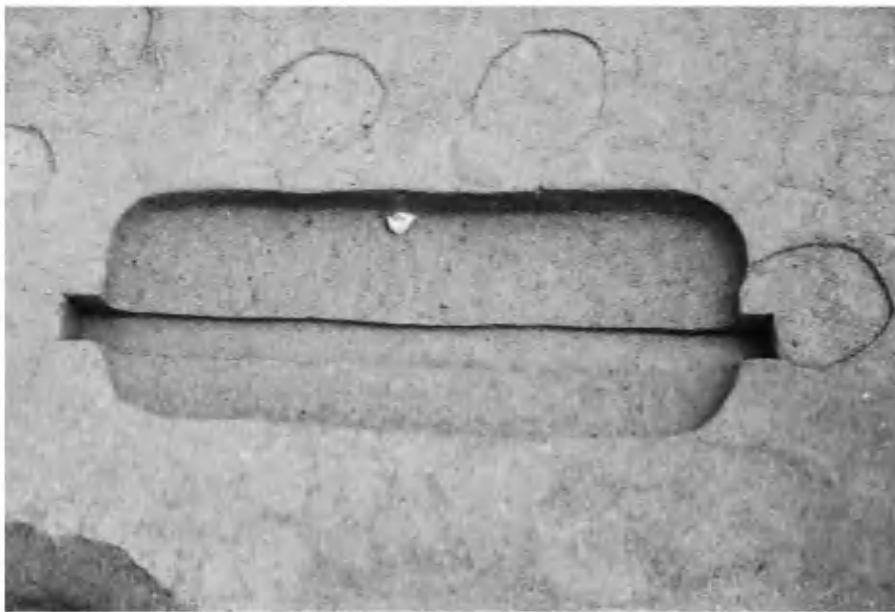
1 土壌墓 2 (南から)



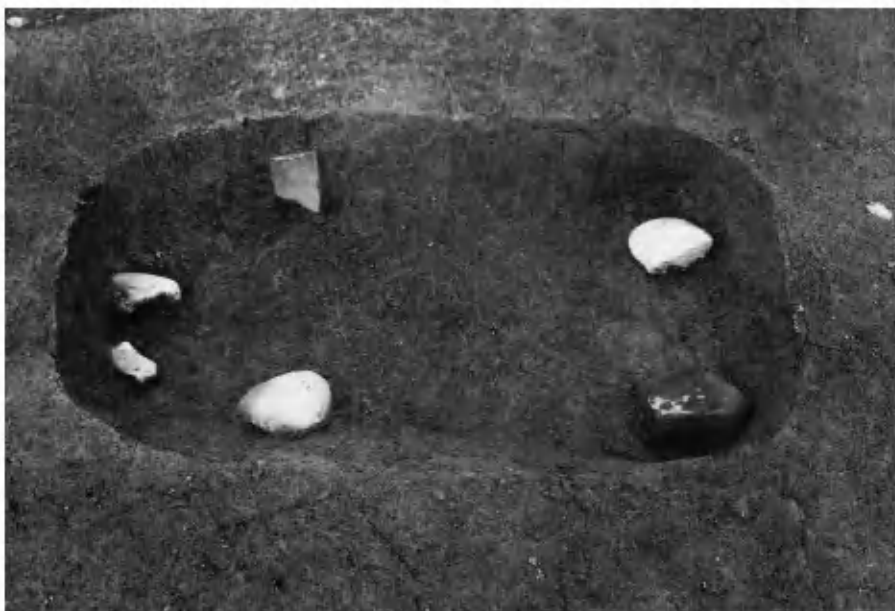
2 土壌墓 3 (南から)



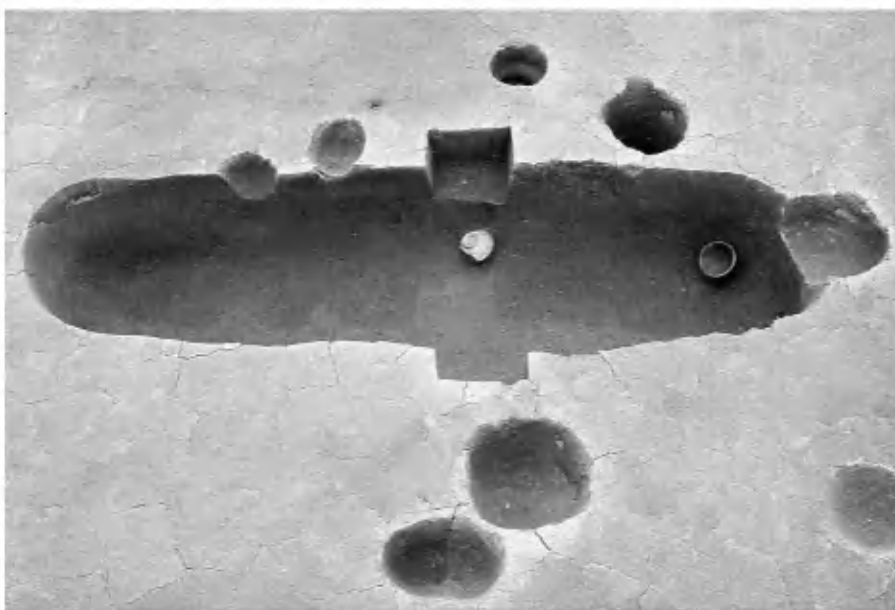
3 土壌墓 4 (西から)



1 土壙墓 5 (西から)



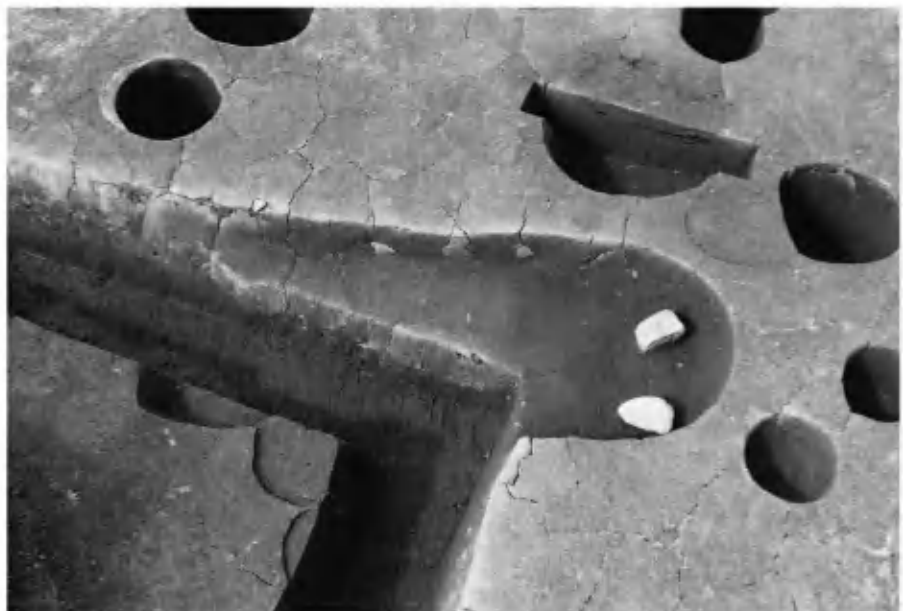
2 土壙墓 6 (西から)



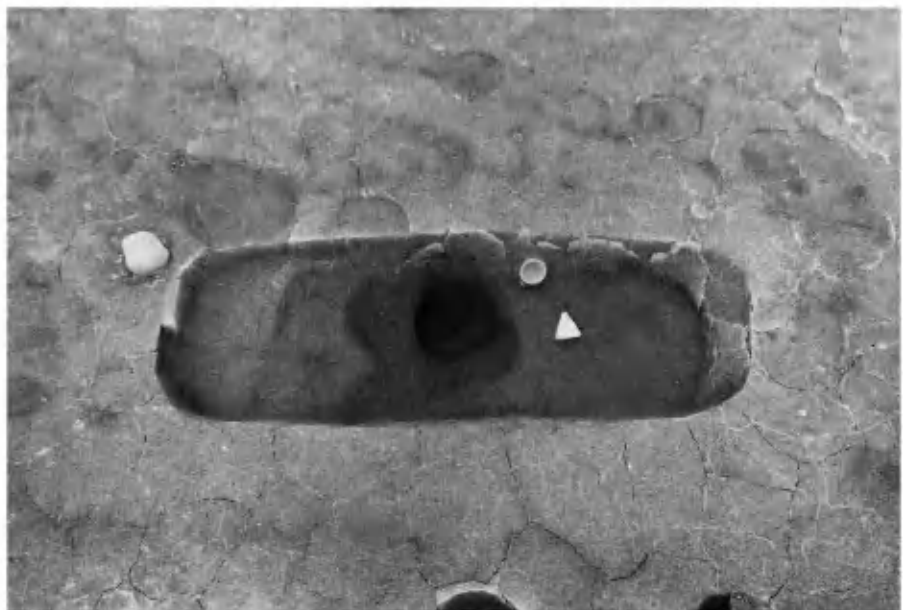
3 土壙墓 7  
(南東から)



1 土壇墓 8 (南から)



2 土壇墓 9 (南から)



3 土壇墓10 (南から)



1 土壙墓13・14  
(南から)



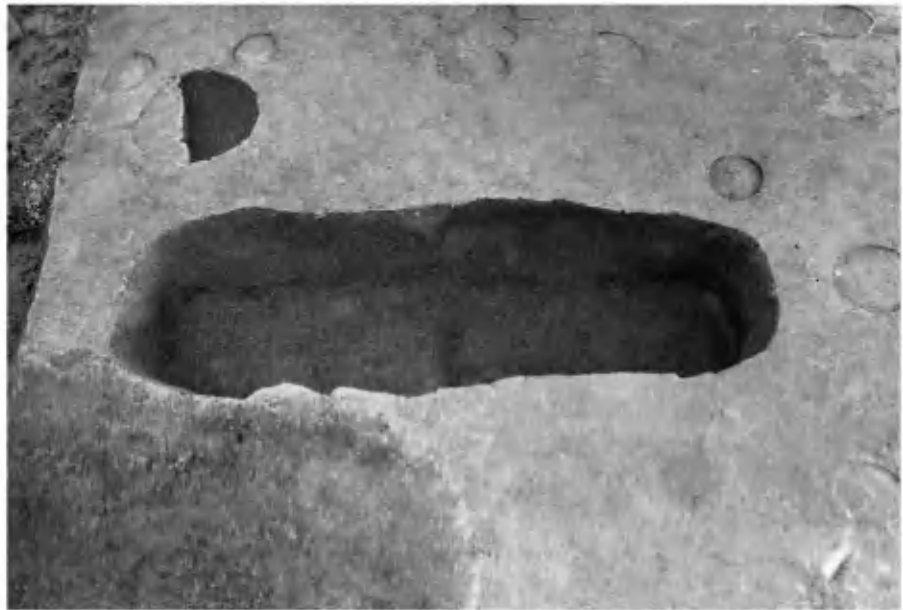
2 土壙墓13・14  
(南から)



3 土器棺1  
(北東から)



1 土壇48 (南から)



2 土壇49 (南から)



3 土壇50 (南から)

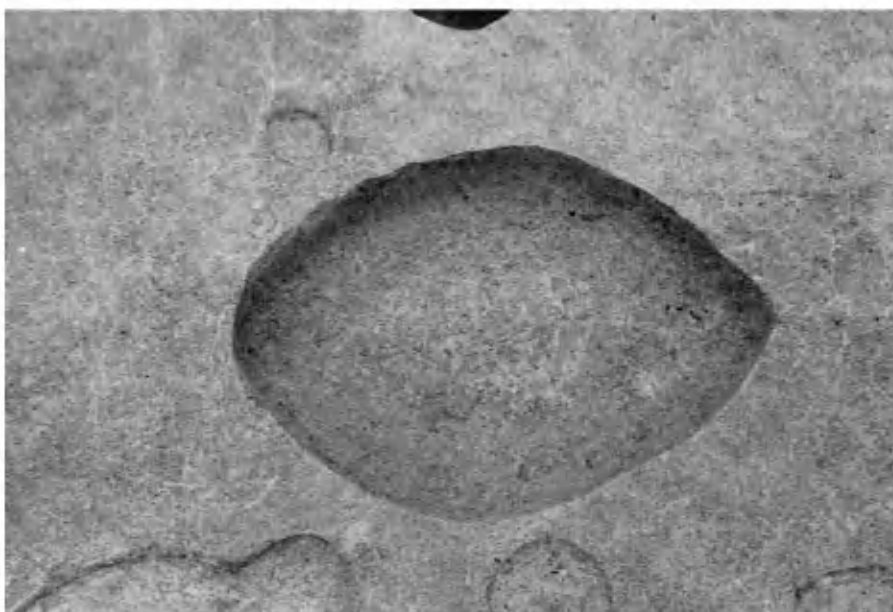




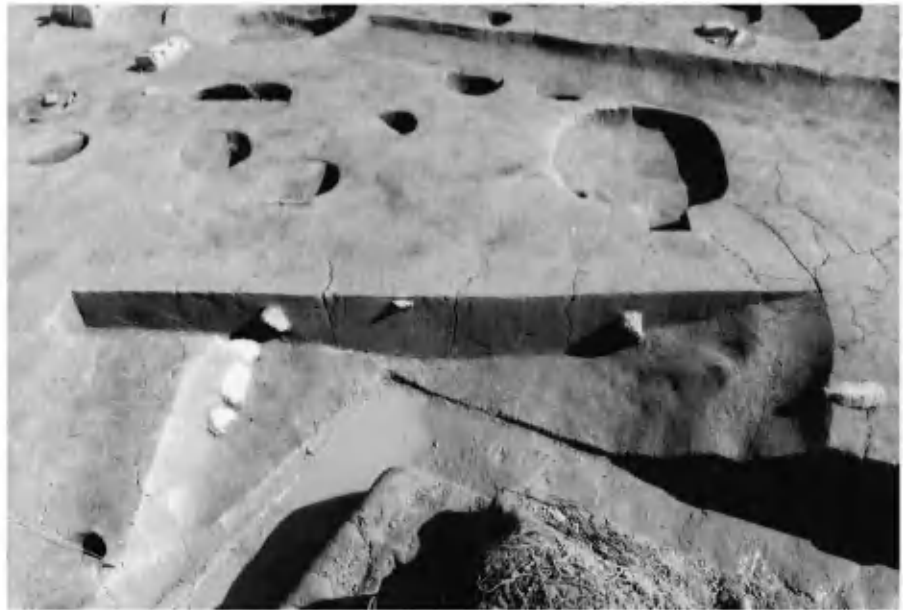
1 土壌51 (東から)



2 土壌52 (東から)



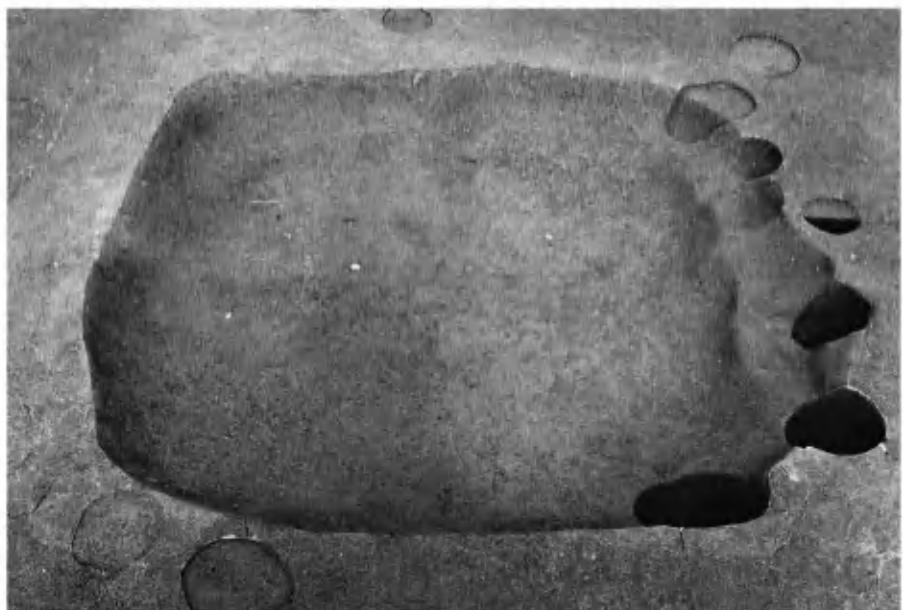
3 土壌54 (西から)



1 土壇55 (西から)



2 土壇56 (南から)



3 土壇57 (西から)



1 土壇58 (南から)

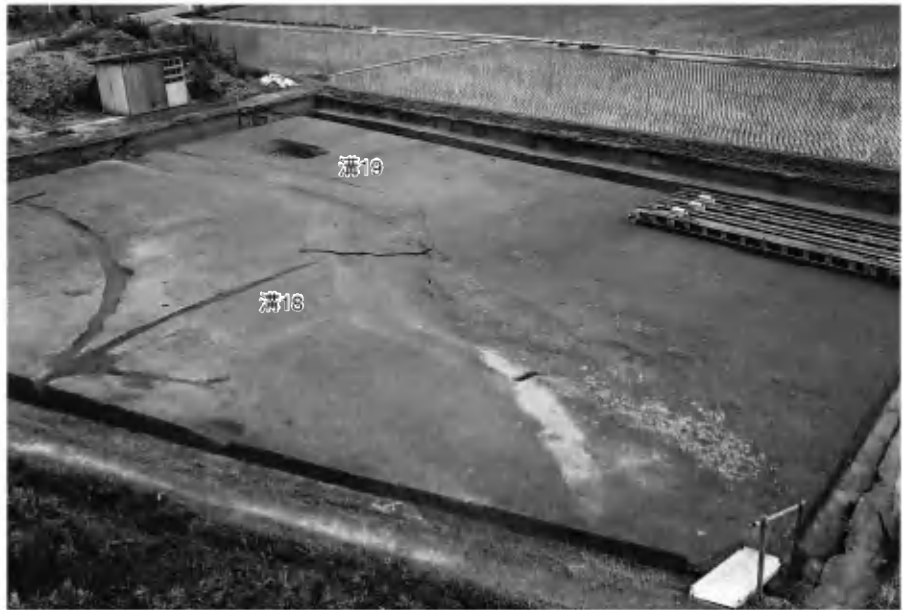


2 土壇62 (南から)



3 土壇63 (北西から)

1 溝18・19  
(北西から)



2 溝20 (北から)



3 素掘溝群 (東から)

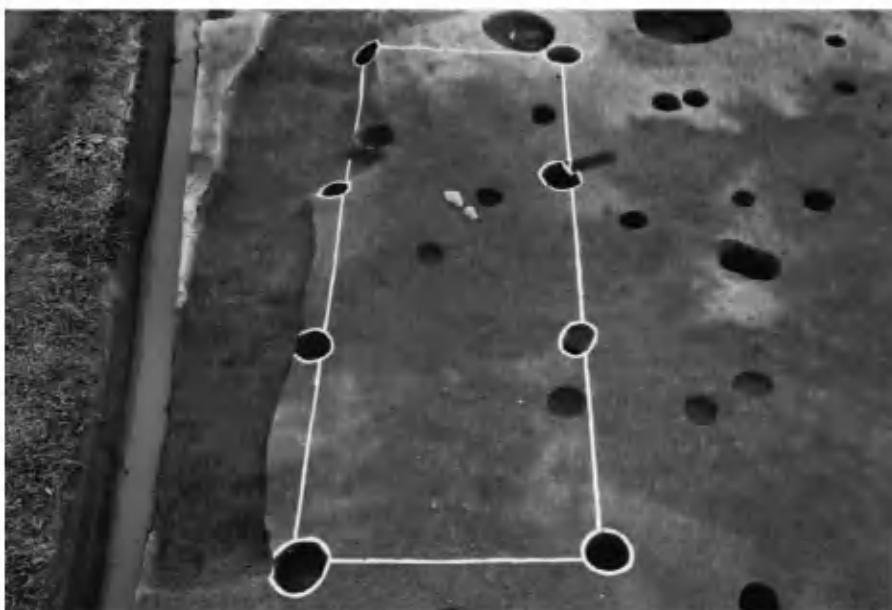




1 82・84 E G  
近世建物群全景  
(北西から)



2 掘立柱建物10・11  
(北東から)

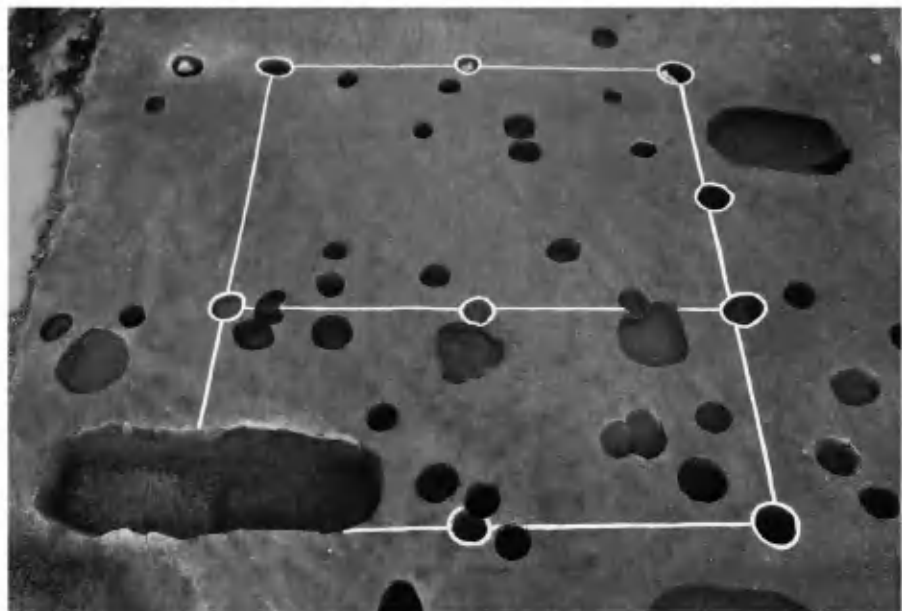


3 掘立柱建物12  
(西から)

1 掘立柱建物12  
・溝32周辺  
(北西から)



2 掘立柱建物13  
(南から)



3 井戸2 (南から)

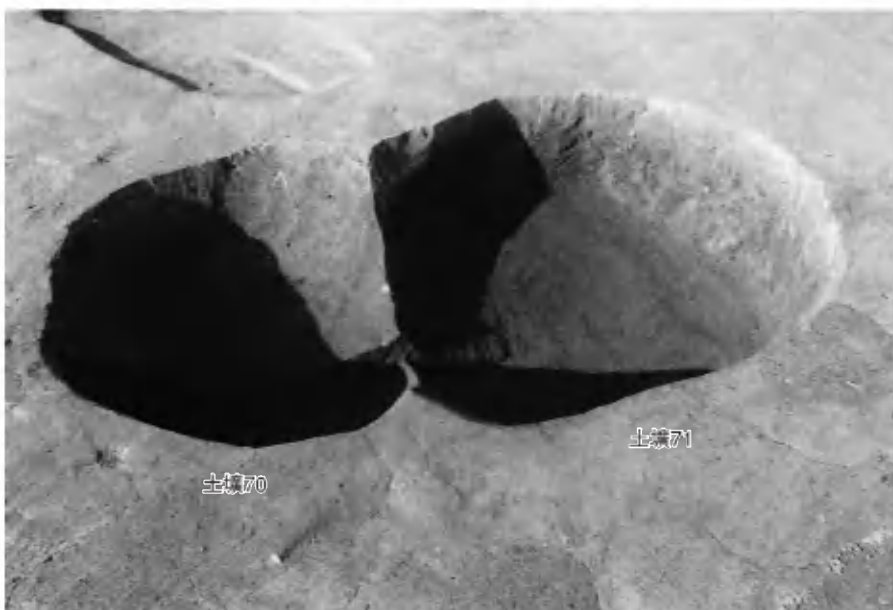




1 土器棺 2  
(南東から)



2 土器65 (西から)



3 土器70・71  
(南から)





1 土壌72 (北西から)



2 土壌73 (東から)



3 土壌74 (東から)



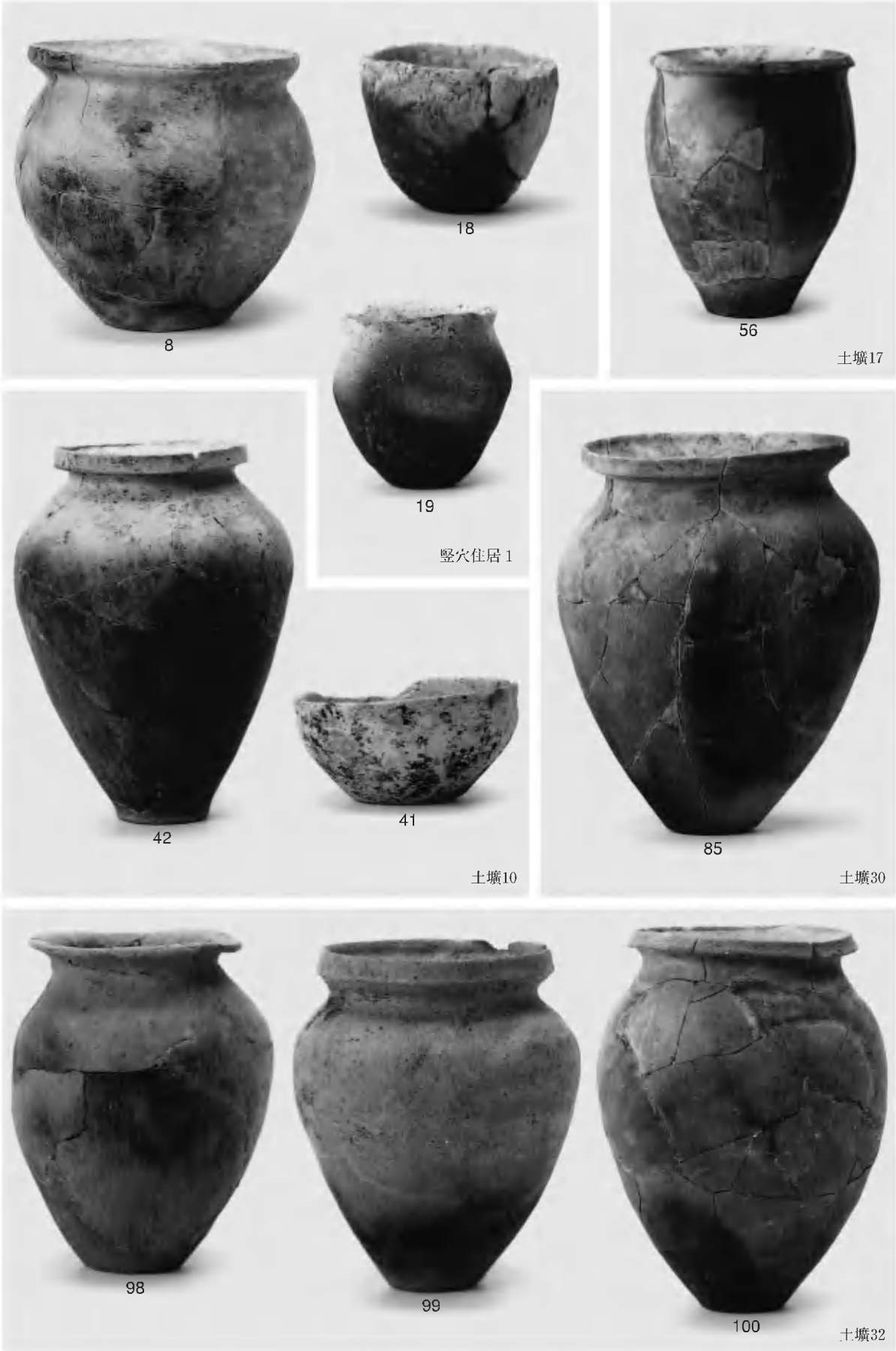
1 土壌79 (南から)



2 溝32新段階 (北から)



3 溝32古段階 (北から)



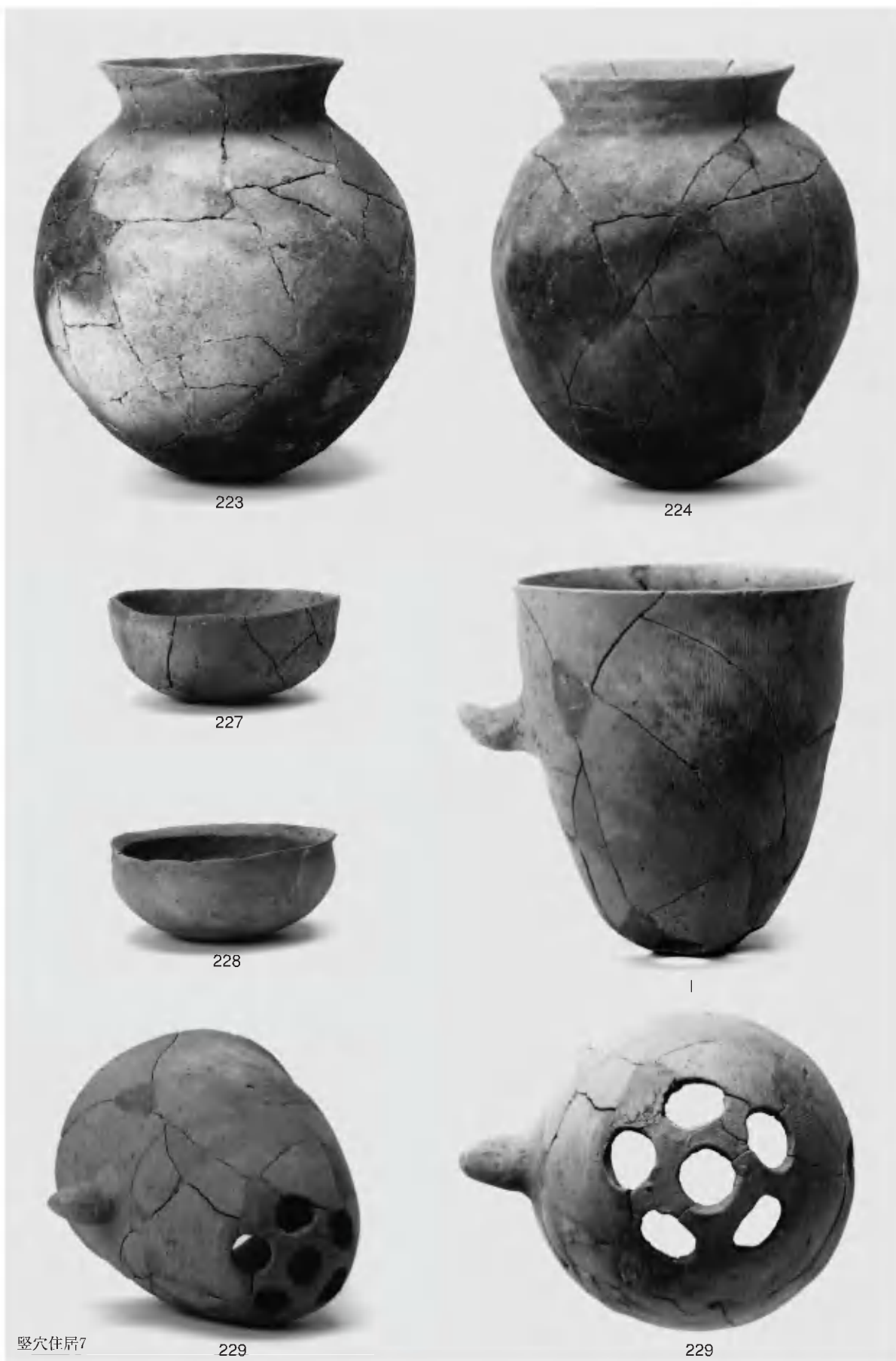
土器 (弥生土器)



土器 (弥生土器)



土器 (土師器・須恵器)



土器（土師器）



土器（土師器）



土器溜まり4

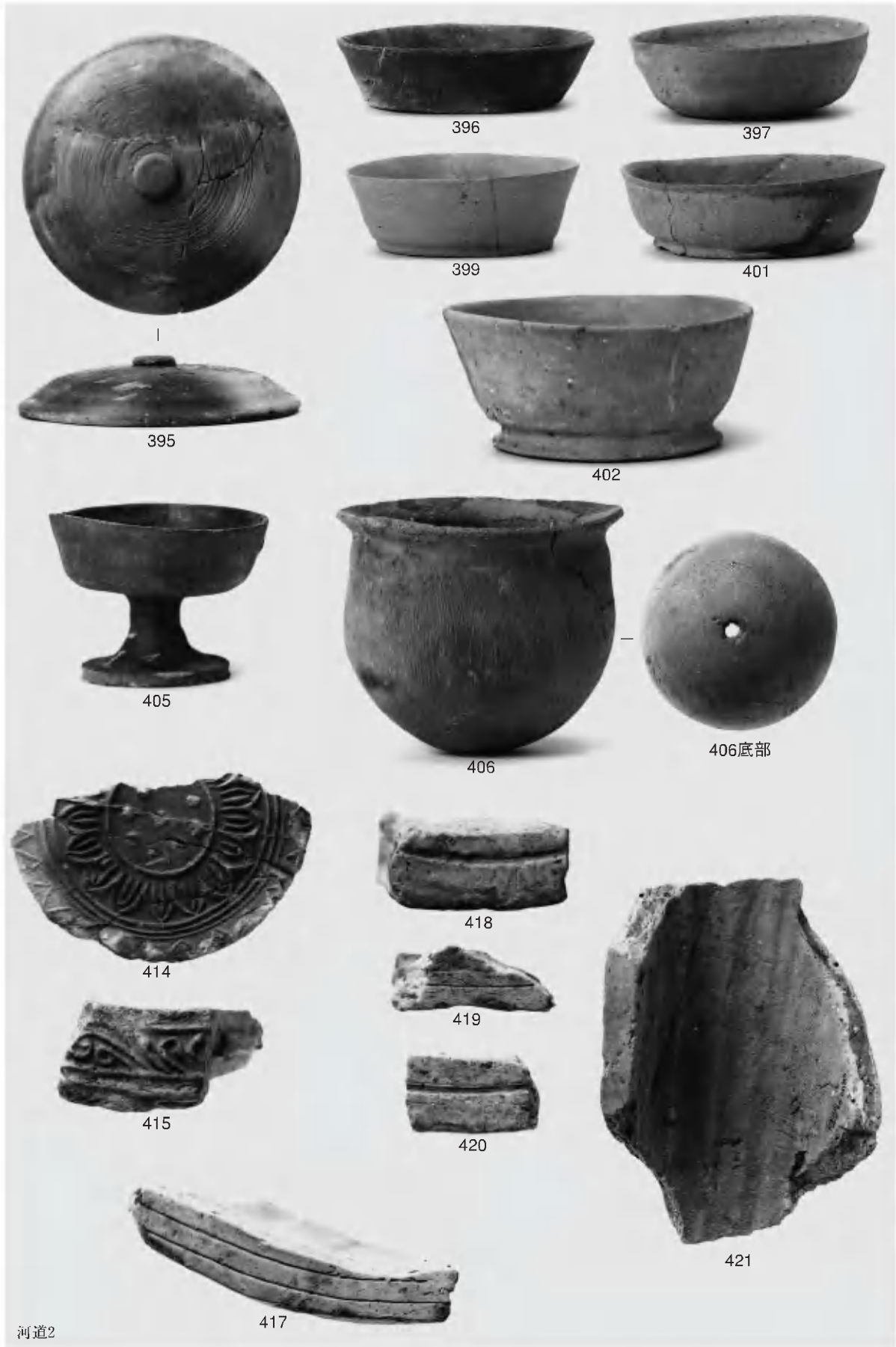
土器（土師器）



南溝手遺跡



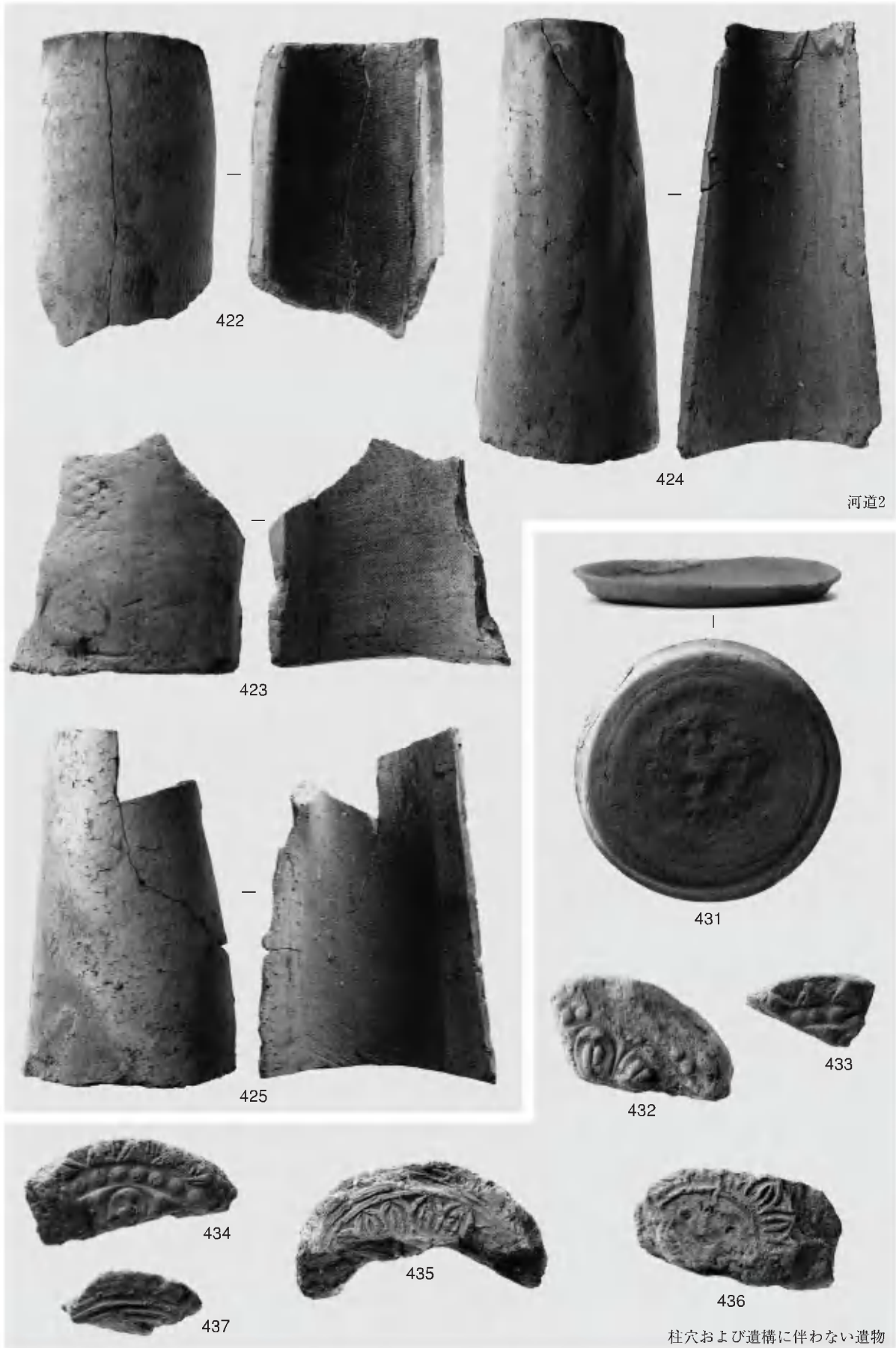
土器 (土師器・須恵器・黒色土器・瓦)



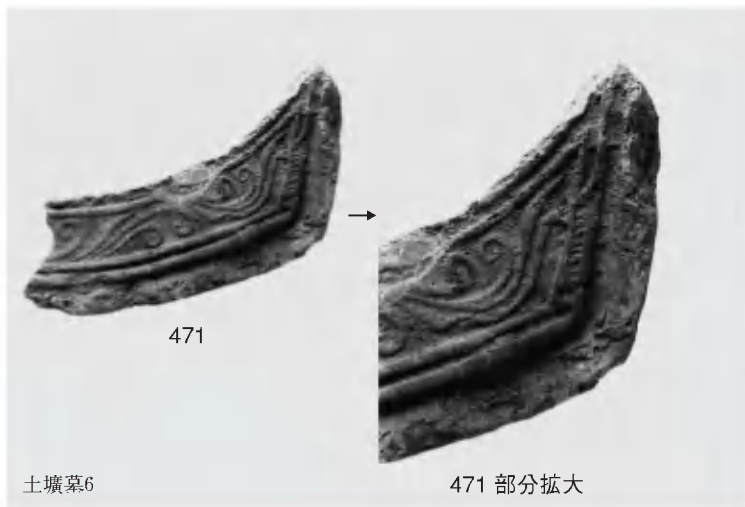
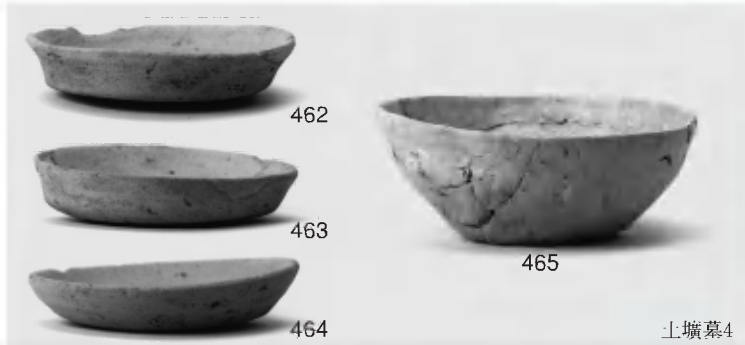
河道2

417

土器 (土師器・須恵器・瓦)



土器 (土師器・瓦)





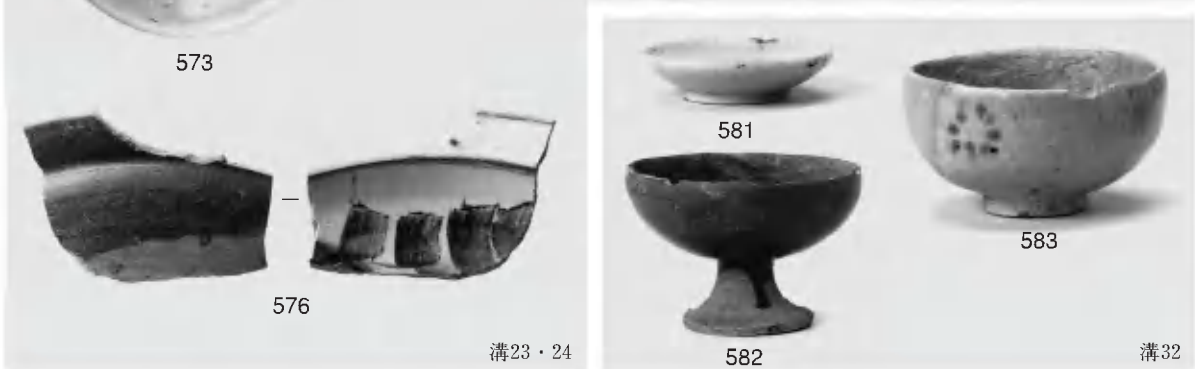
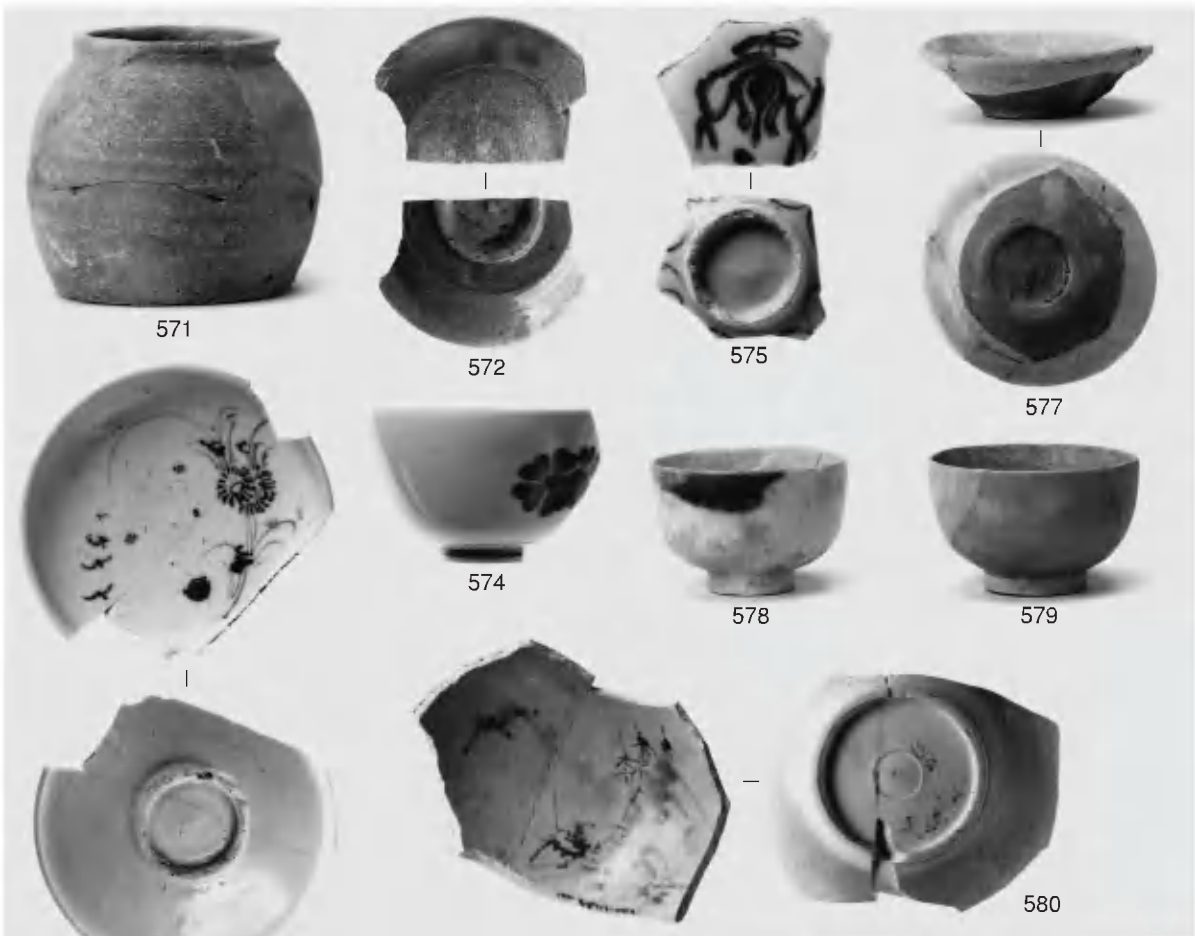
土器 (土師器・亀山焼・瓦質土器)



土器（土師器・亀山焼）・磁器（青磁）



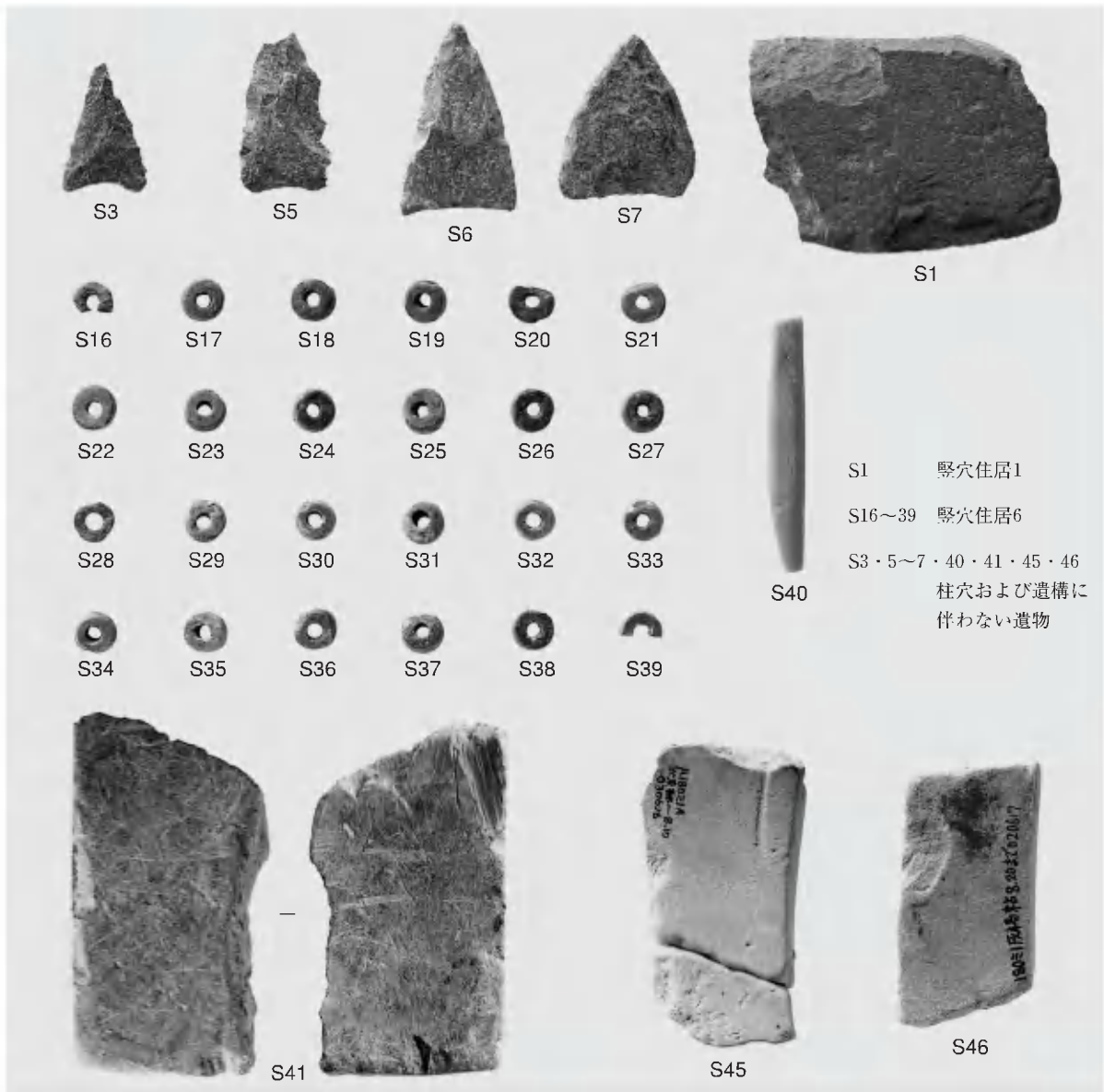
土壙79



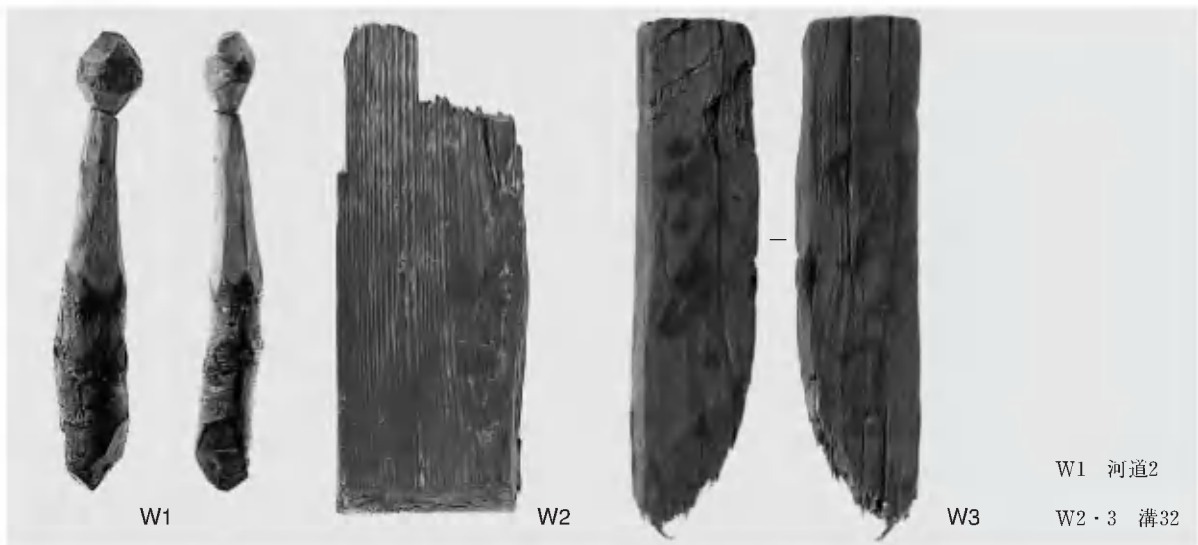
溝23・24

溝32

土器（土師器・瓦質土器）・陶磁器

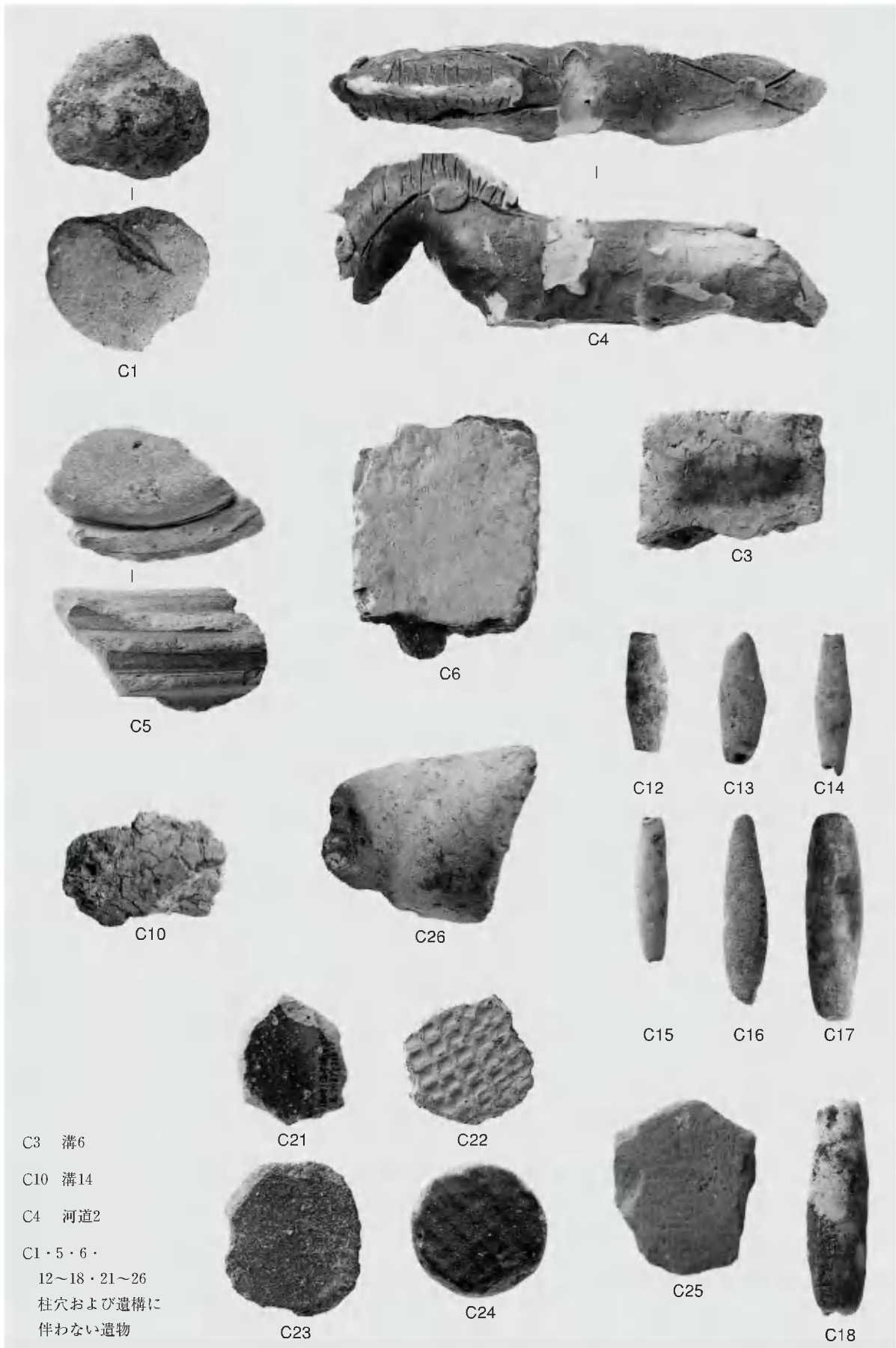


1 石製品



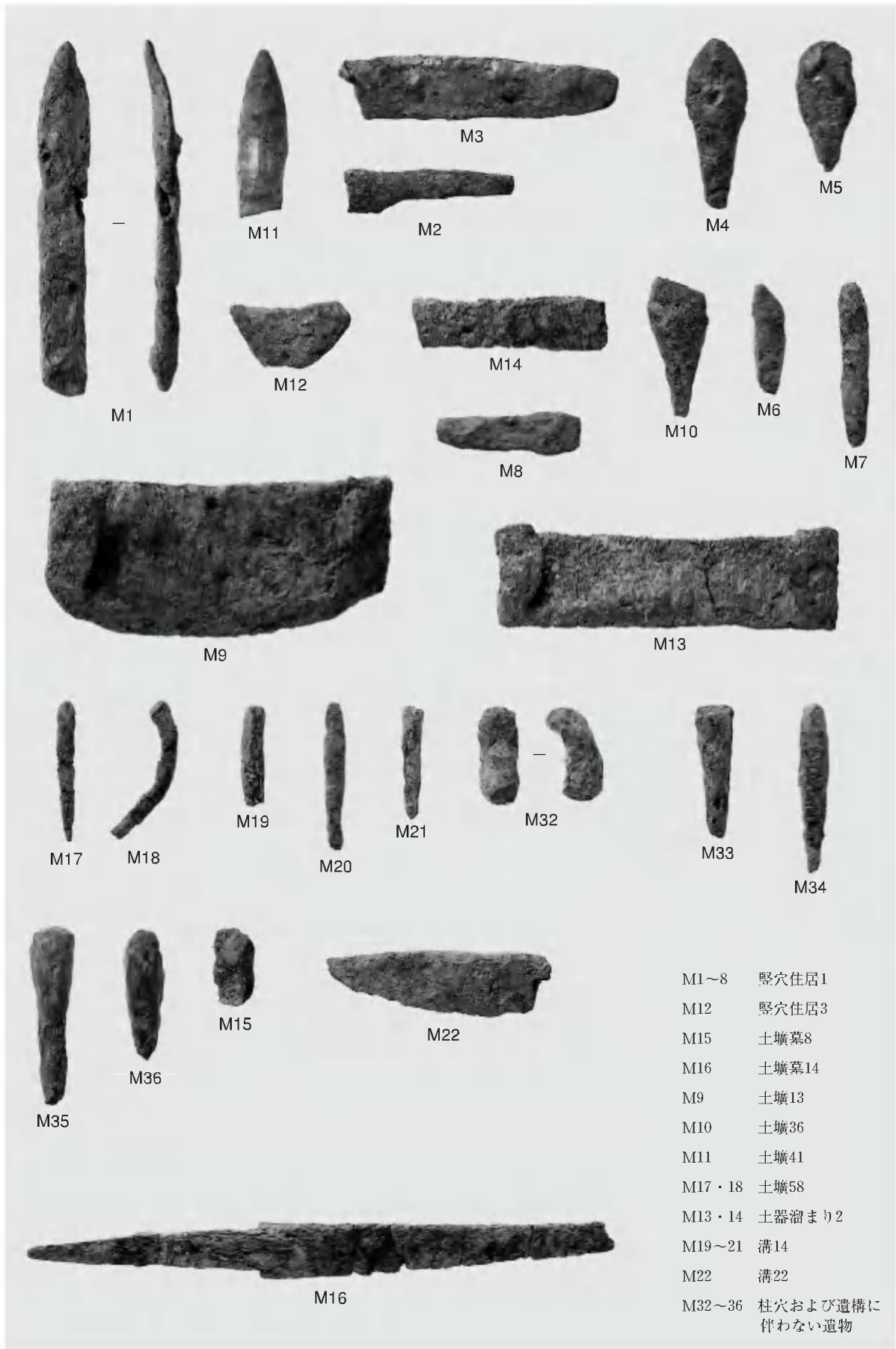
2 木製品





C3 溝6  
 C10 溝14  
 C4 河道2  
 C1・5・6・  
 12~18・21~26  
 柱穴および遺構に  
 伴わない遺物

土製品



- M1~8 竪穴住居1
- M12 竪穴住居3
- M15 土壇墓8
- M16 土壇墓14
- M9 土壇13
- M10 土壇36
- M11 土壇41
- M17・18 土壇58
- M13・14 土器溜まり2
- M19~21 溝14
- M22 溝22
- M32~36 柱穴および遺構に伴わない遺物



1 窪木遺跡東端より北西方向を望む（東上空から）



2 窪木遺跡遠景（西上空から）



1 竪穴住居 1  
(東から)

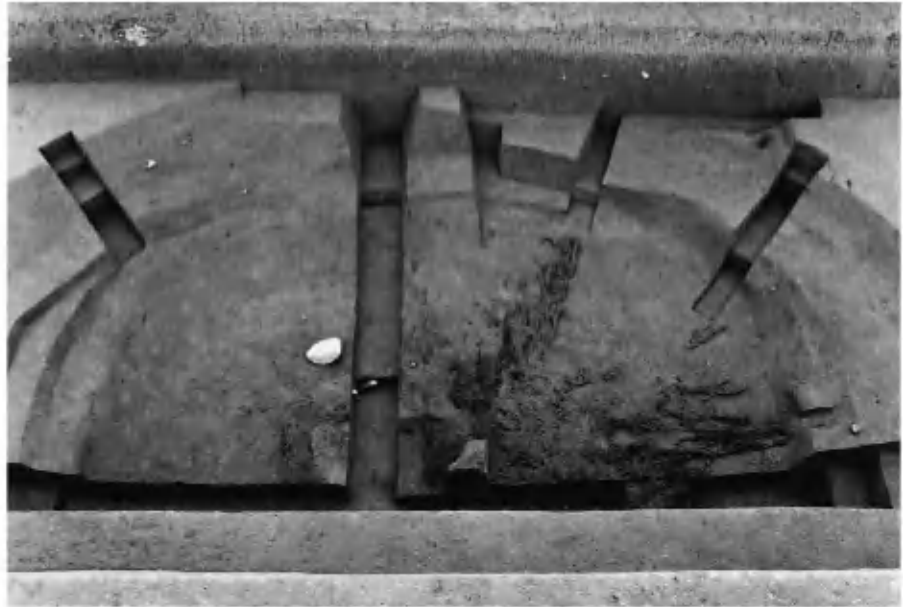


2 竪穴住居 2  
(東から)



3 竪穴住居 3・5  
(東から)

1 竪穴住居 3  
(北東から)



2 竪穴住居 3  
(北東から)



3 竪穴住居 3 断面  
(東から)





1 竪穴住居 4・6  
・7 周辺 (東から)



2 竪穴住居 4  
(北から)

1 竪穴住居 4 中央穴  
(南東から)

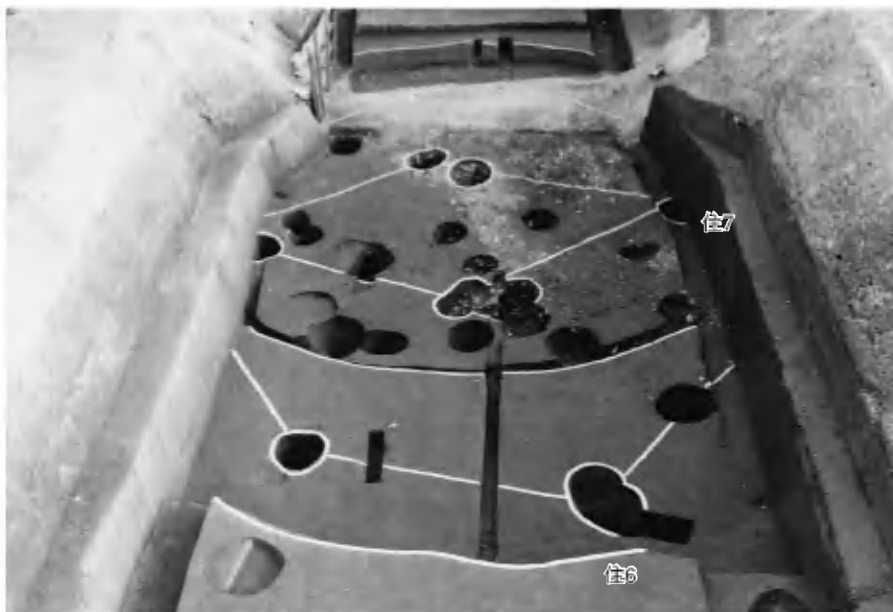


2 竪穴住居 5  
(北から)



3 竪穴住居 5  
(南東から)





1 竪穴住居 6・7  
(西から)



2 竪穴住居 6 P5  
(東から)



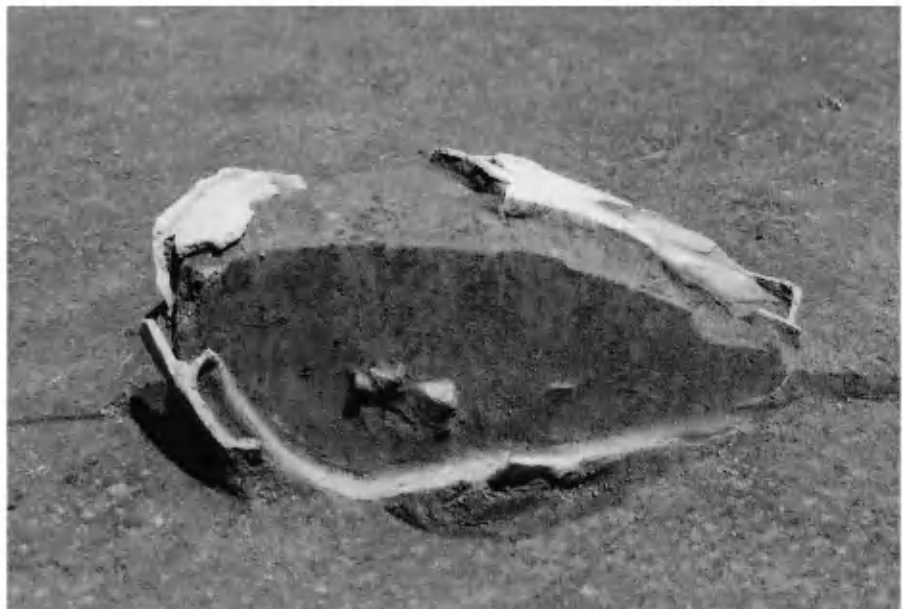
3 対策委員会  
H17.11.18



1 土器棺 1 (南から)



2 土器棺 2 (東から)



3 土器棺 3 (南西から)





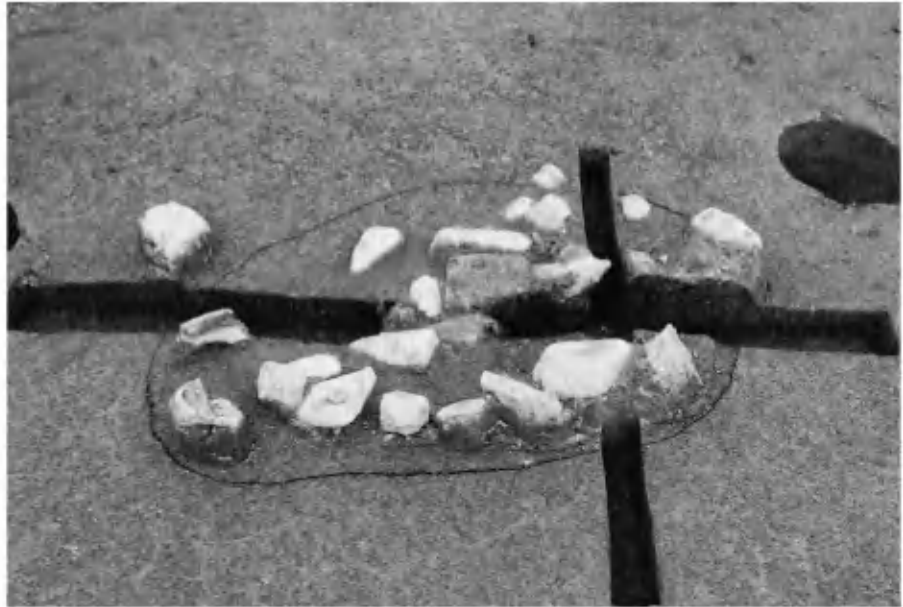
1 土器棺 4 (南から)



2 土器棺 5 (西から)



3 土壇 1 (南西から)



1 土壌 2 (南から)



2 土壌 3 (南東から)



3 土壌 4 (南から)



1 土壇 7 (西から)



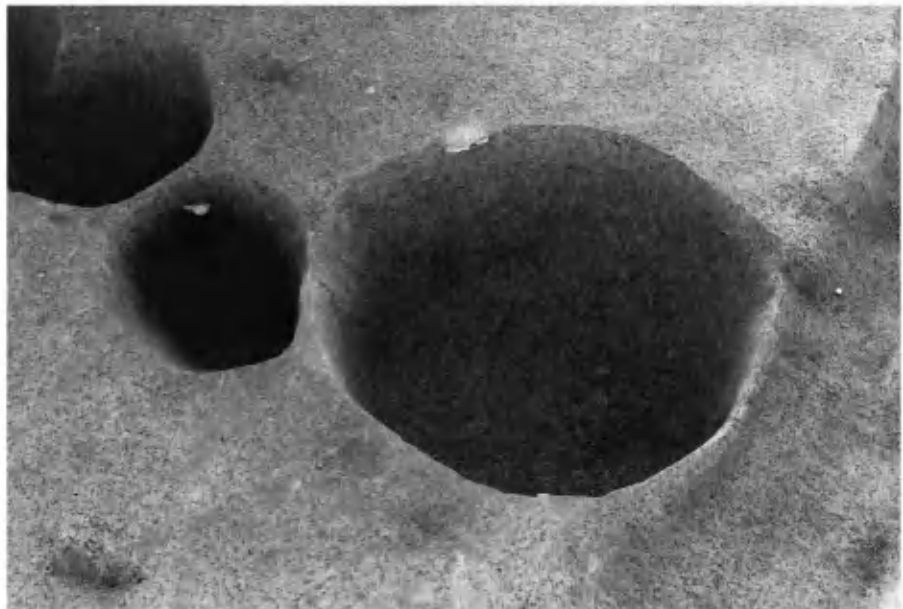
2 土壇 8 (南から)



3 土壇 9 (南から)



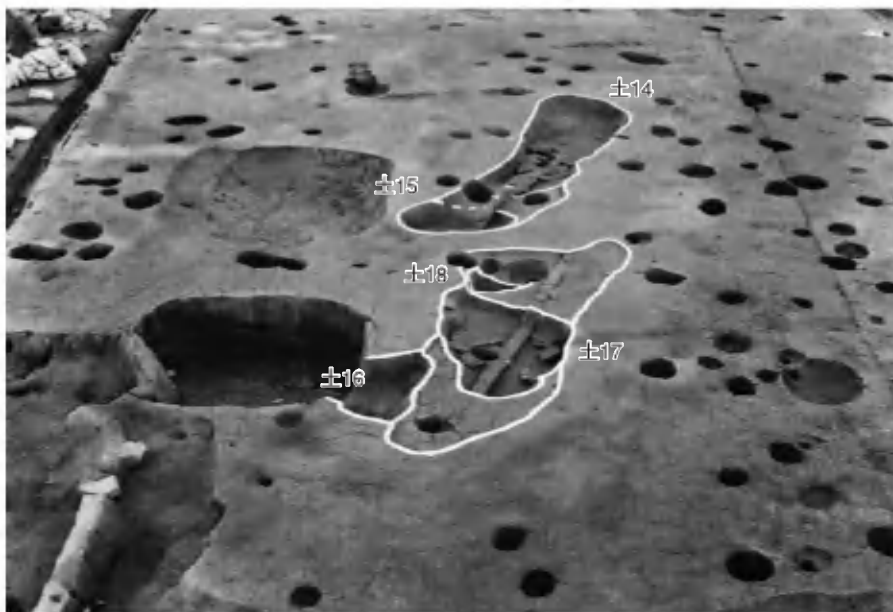
1 土壌10 (東から)



2 土壌12 (南から)



3 土壌13 (南から)



1 土壌14~18  
(東から)



2 土壌14・15  
(南から)



3 土壌16~18  
(北から)

1 土壇19 (北東から)

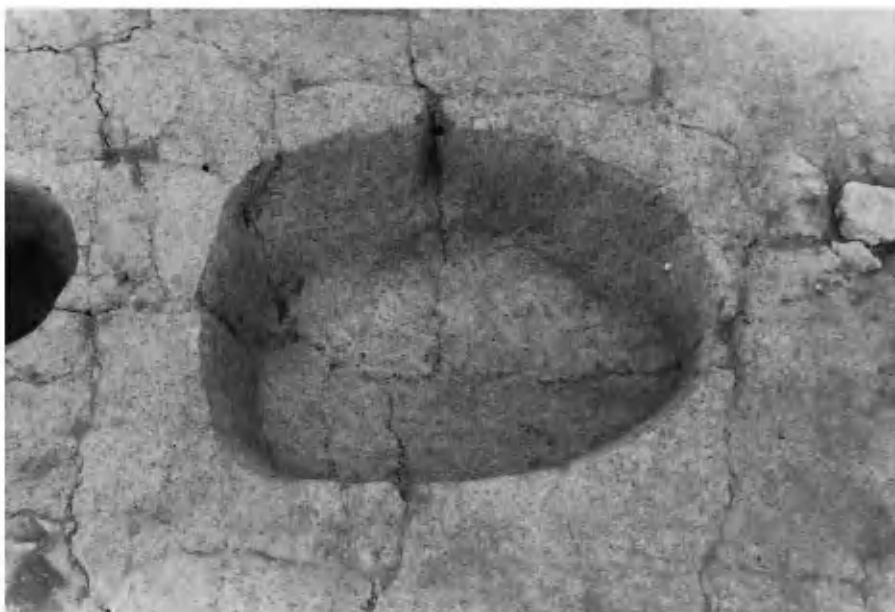


2 土壇24 (南から)



3 土壇25 (東から)





1 土壌26 (南から)



2 土壌27 (北から)



3 土壌28 (西から)

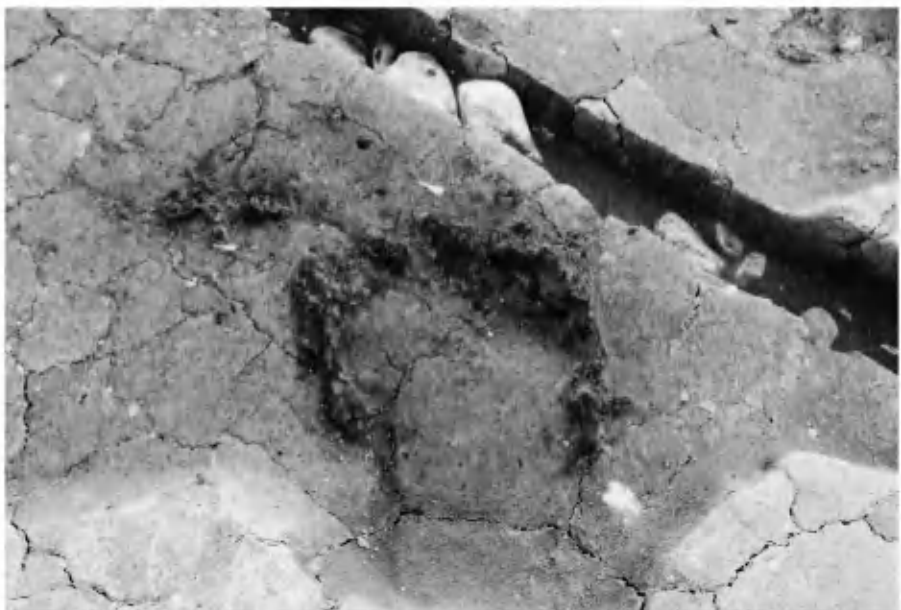




1 土壌31 (北東から)



2 土壌31④ (西から)



3 土壌31① (北から)



1 土壌32 (西から)



2 土壌33 (北から)



3 土壌34 (南から)



1 土壌35 (西から)



2 土壌36 (南から)



3 土壌39 (北から)



1 土壇40 (東から)



2 土壇42 (南から)



3 土壇44 (東から)

1 土壇45 (南から)



2 土壇46 (南から)



3 土壇47 (北から)





1 土壇48 (南から)



2 土壇49 (北西から)



3 土壇50 (北から)



1 土壇51 (北東から)



2 土壇52 (東から)



3 土壇53 (西から)



1 土壇54 (東から)

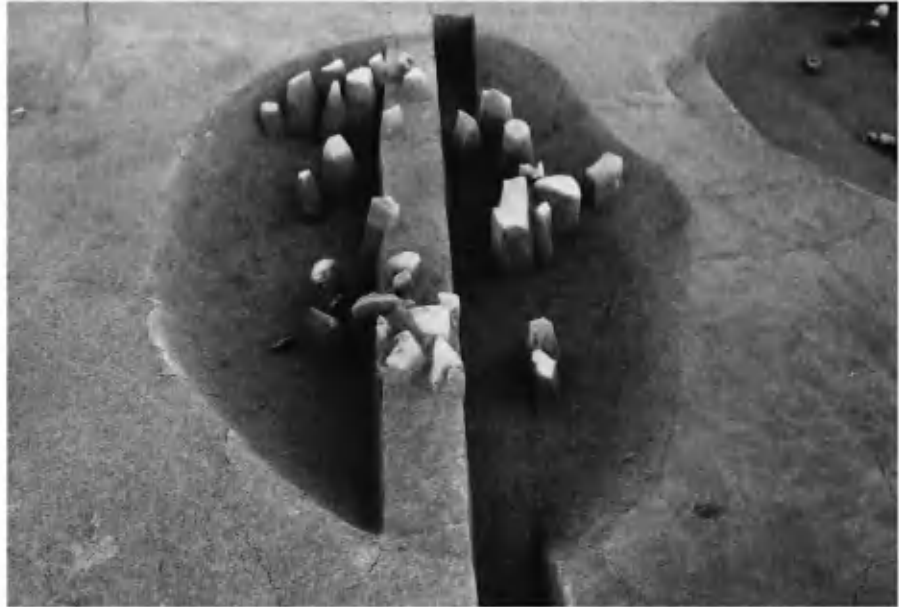


2 土壇55 (西から)



3 土壇57 (北から)





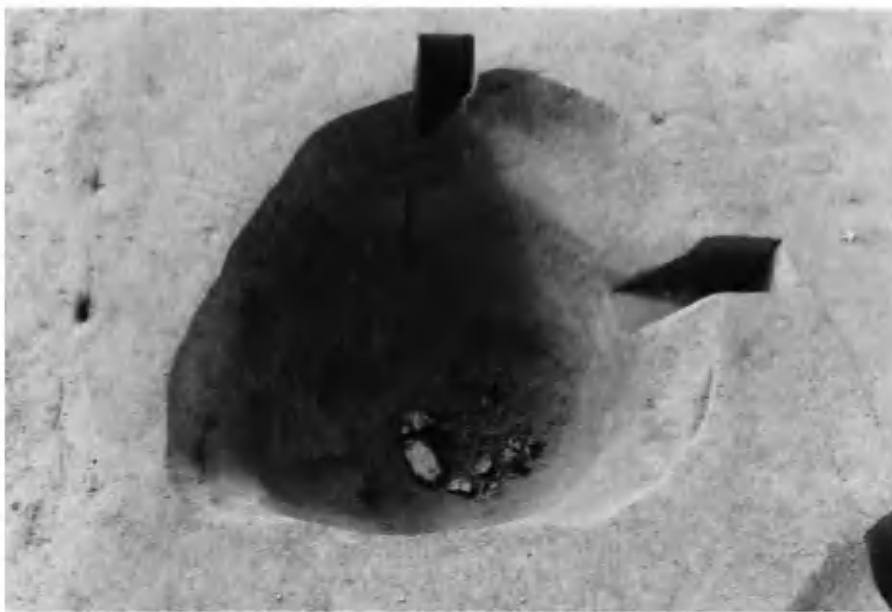
1 土壌58 (北から)



2 土壌59 (南から)



3 土壌60 (北東から)



1 土壌60完掘状況  
(西から)



2 土壌61  
・窪地 4 周辺  
(北西から)



3 土壌61 (北西から)



1 土壌62 (北から)



2 土壌65 (北から)



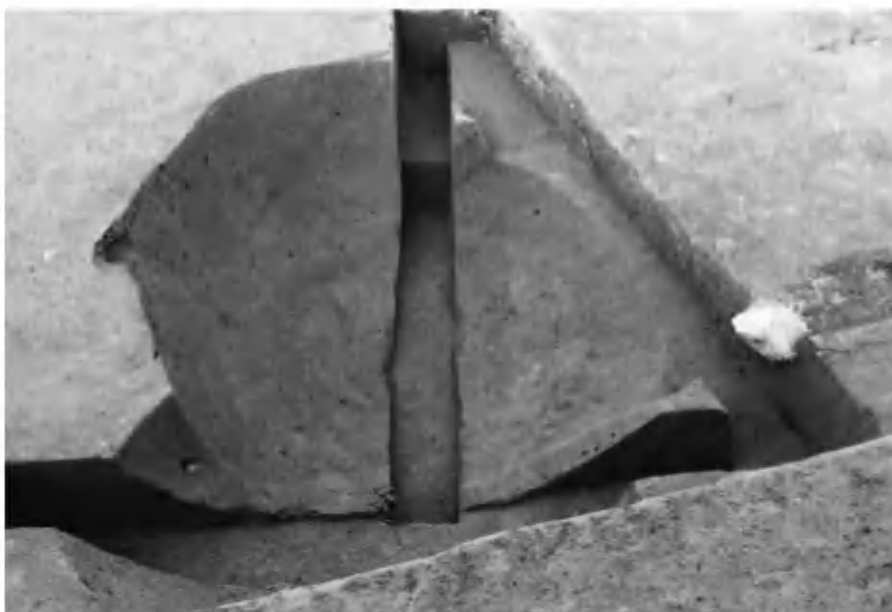
3 土壌70 (東から)



1 土壌72 (南東から)



2 土壌72 (南から)



3 土壌73 (南から)

1 土壇74 (北から)



2 土壇75 (南から)



3 土壇76 (北から)





1 土壙77 (北から)



2 土壙78 (北西から)



3 土壙78 (西から)



1 窪地 1 (南東から)



2 窪地 4 (北西から)



3 窪地 5 (北から)



1 土器溜まり 1  
(北から)



2 土器溜まり 1  
(北から)



3 土器溜まり 1  
(西から)



1 土器溜まり 2  
(南東から)



2 土器溜まり 3  
(西から)



3 土器溜まり 4  
(北から)





1 竪穴住居 8  
(東から)



2 竪穴住居11  
(南から)



3 竪穴住居11  
(南から)

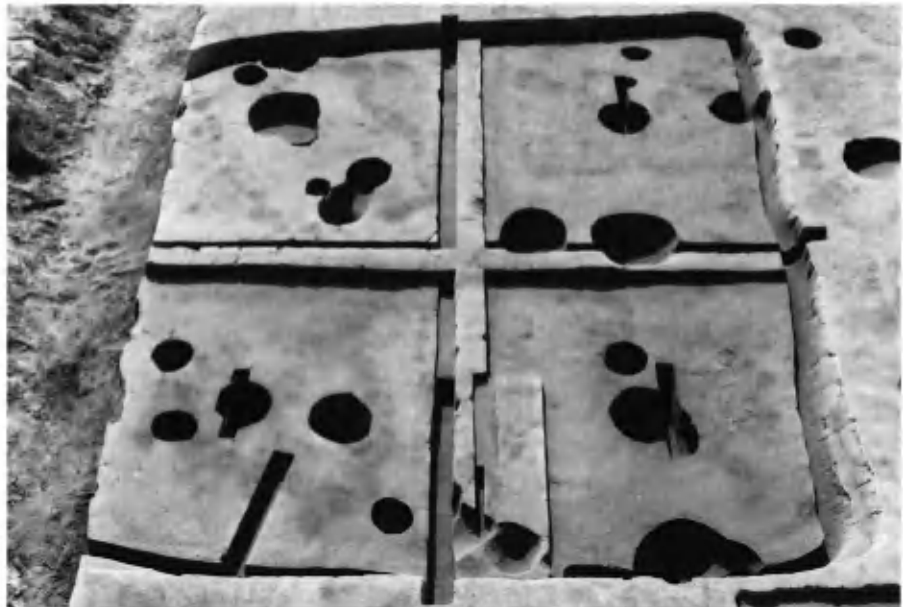
1 竪穴住居12  
(南から)



2 竪穴住居13  
(西から)



3 竪穴住居13  
(北から)





1 竪穴住居15  
(北から)



2 竪穴住居16  
(南から)



3 竪穴住居16  
(南東から)

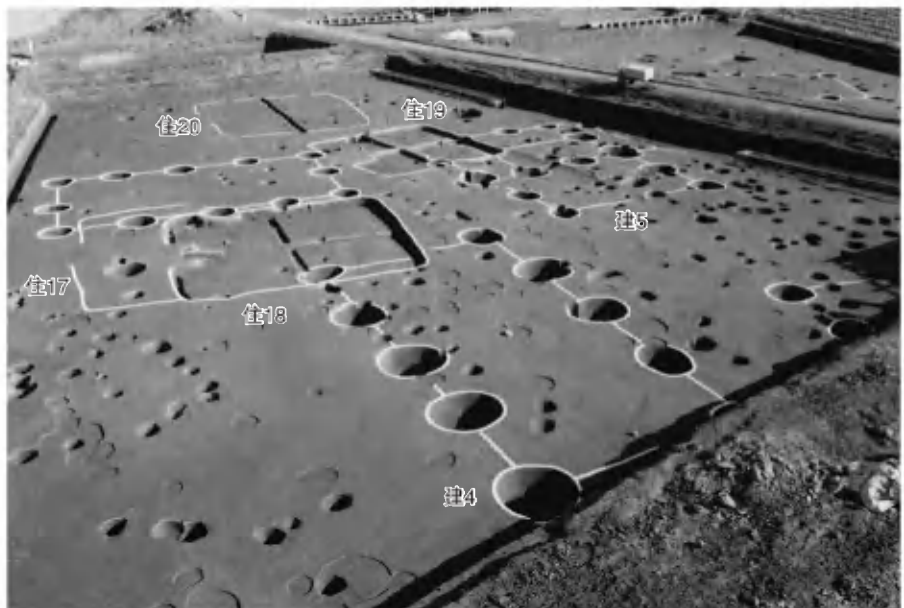
1 竪穴住居16  
カマド出土土器  
(西から)



2 竪穴住居16カマド  
(南から)

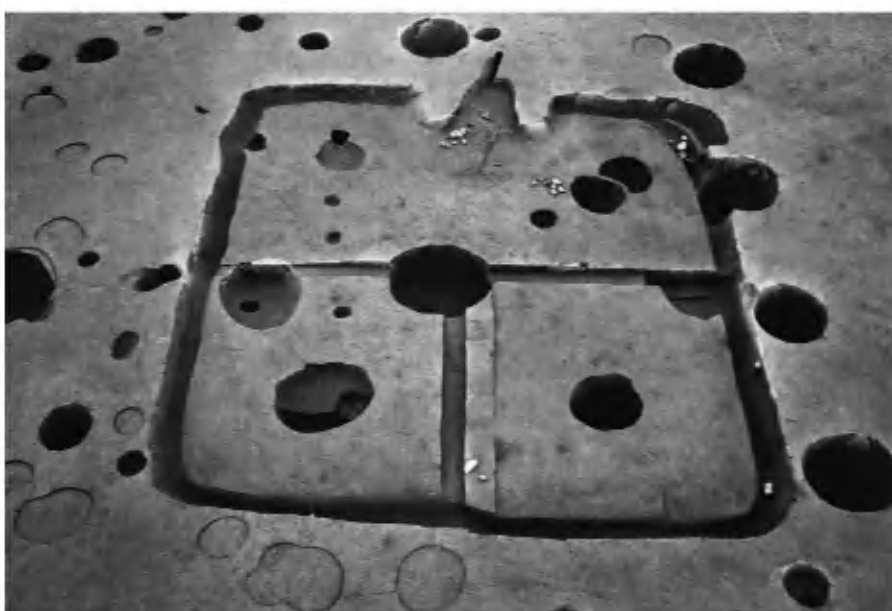


3 106C  
竪穴住居17周辺  
(西から)





1 竪穴住居17  
(南から)



2 竪穴住居18  
(南から)



3 竪穴住居19  
(南から)

1 竪穴住居22  
(南から)



2 竪穴住居23  
(東から)



3 竪穴住居24  
(西から)





1 竪穴住居25  
(北から)



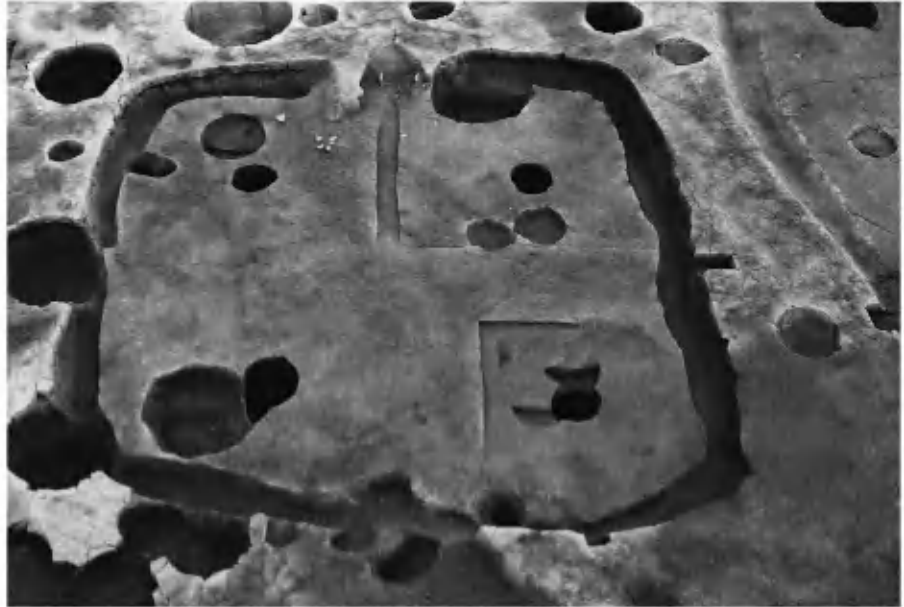
2 竪穴住居26  
(南西から)



3 竪穴住居27  
(南から)



1 竪穴住居28  
(南から)



2 竪穴住居29  
(北から)



3 竪穴住居30  
(東から)





1 竪穴住居30カマド  
(南東から)



2 竪穴住居31  
(北から)



3 竪穴住居32  
(北西から)

1 竪穴住居33  
(南東から)

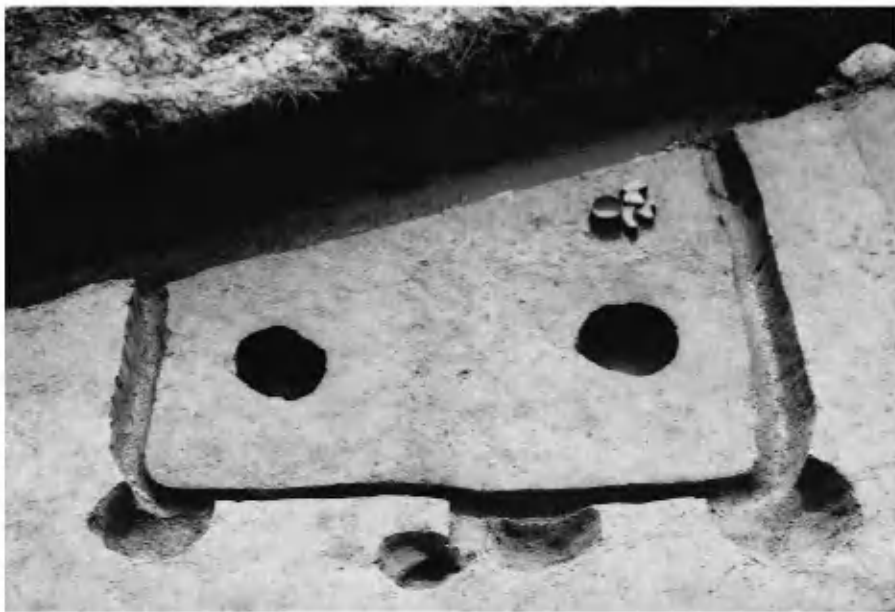


2 竪穴住居33  
(南東から)

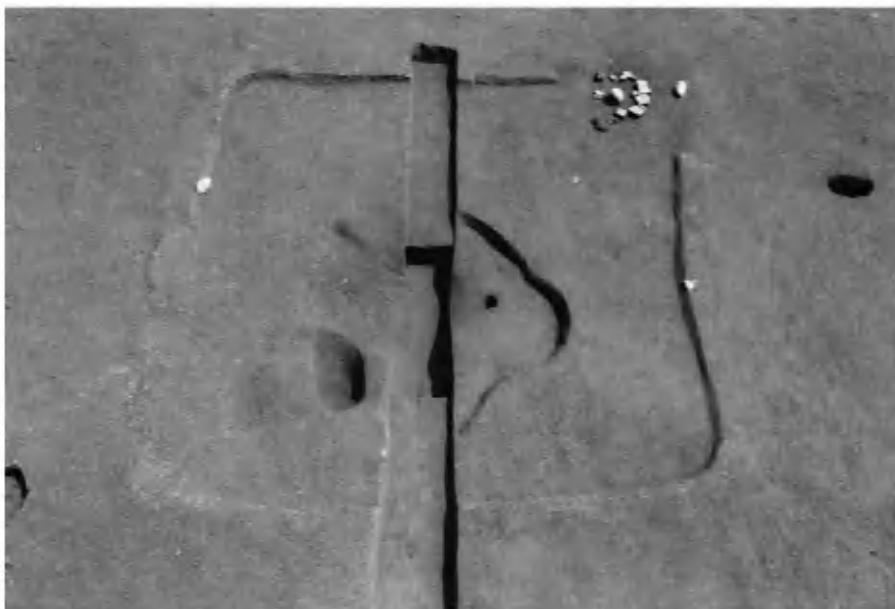


3 竪穴住居33カマド  
(南東から)





1 竪穴住居34  
(西から)

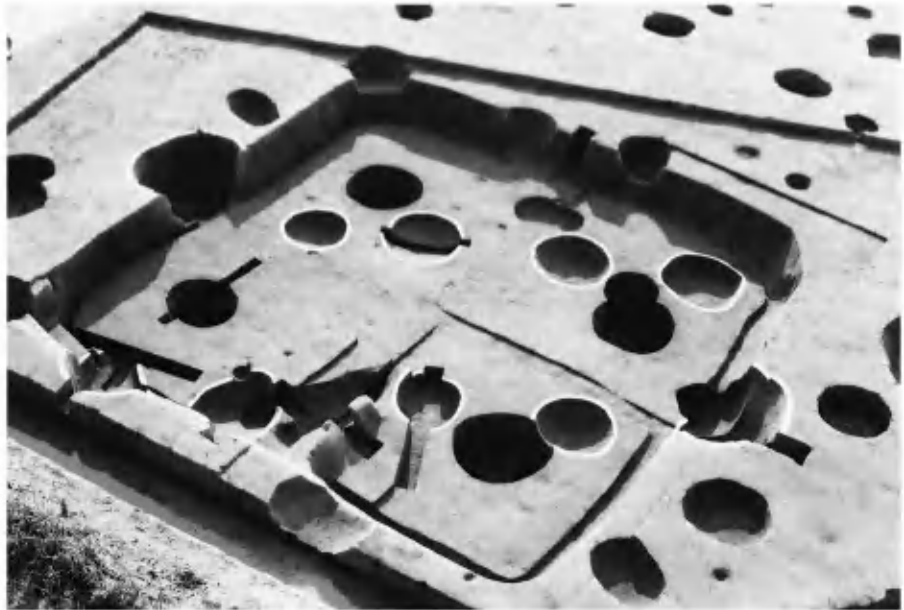


2 竪穴住居35  
(南から)



3 竪穴住居35カマド  
(南から)

1 掘立柱建物 1  
(北から)

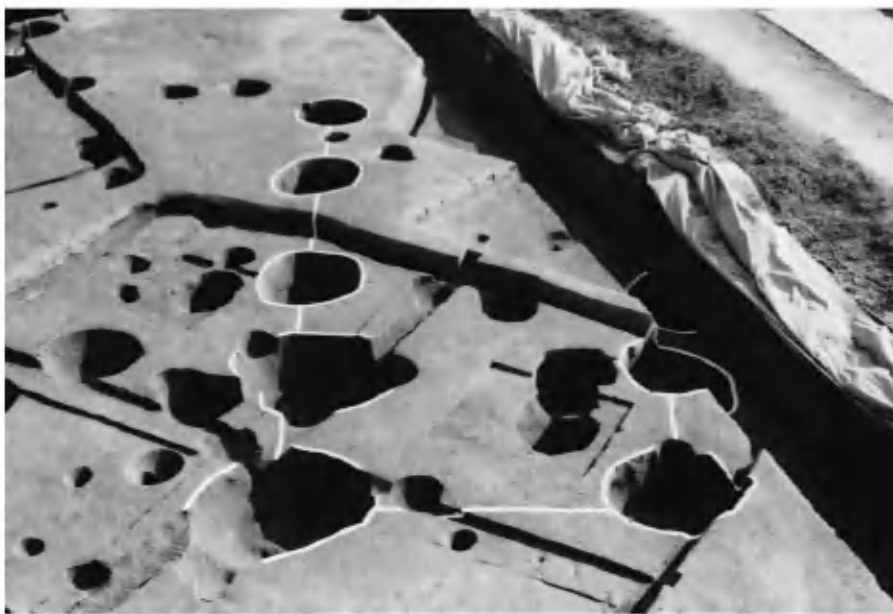


2 掘立柱建物 2・3  
(西から)



3 掘立柱建物 2  
(北から)





1 掘立柱建物 2  
(西から)

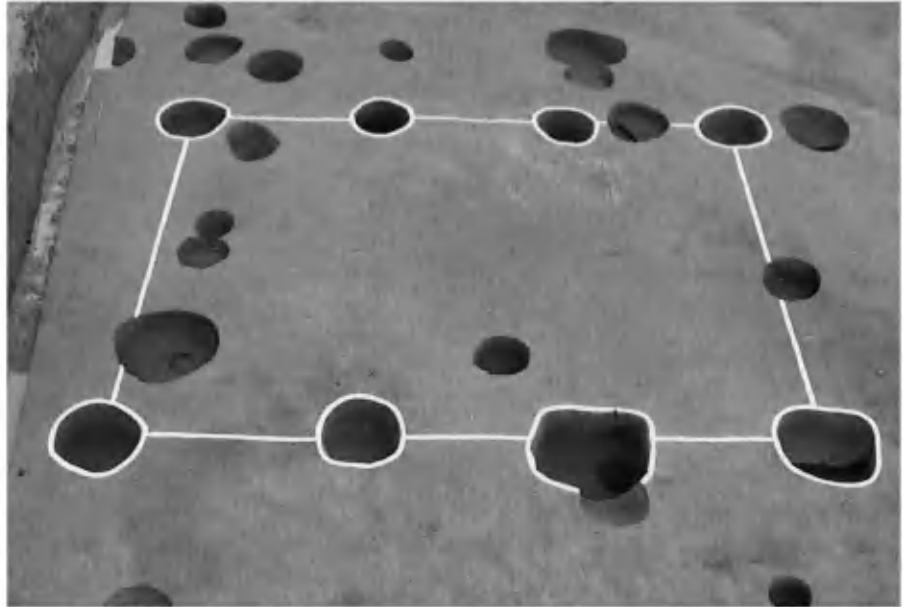


2 掘立柱建物 3  
(西から)

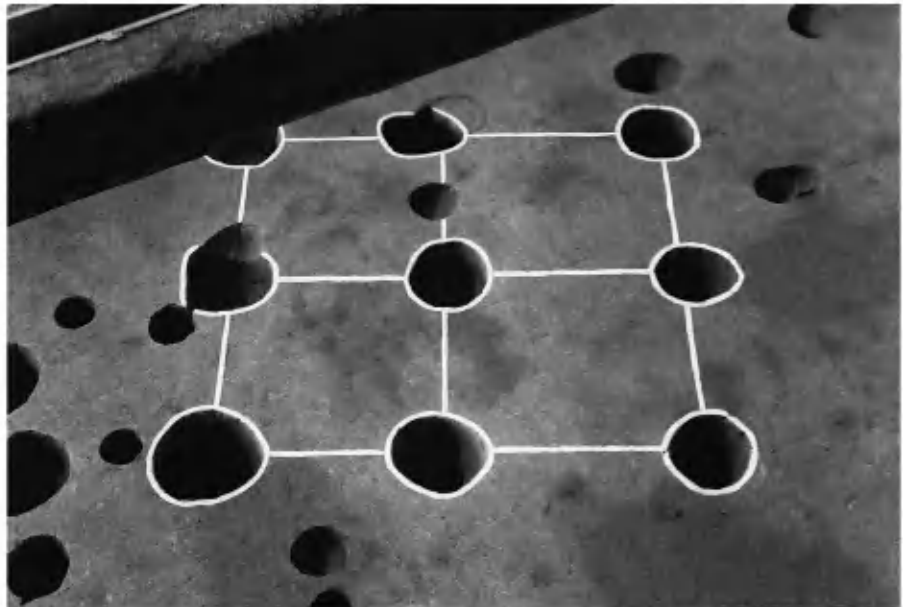


3 140 C  
掘立柱建物10周辺  
(北から)

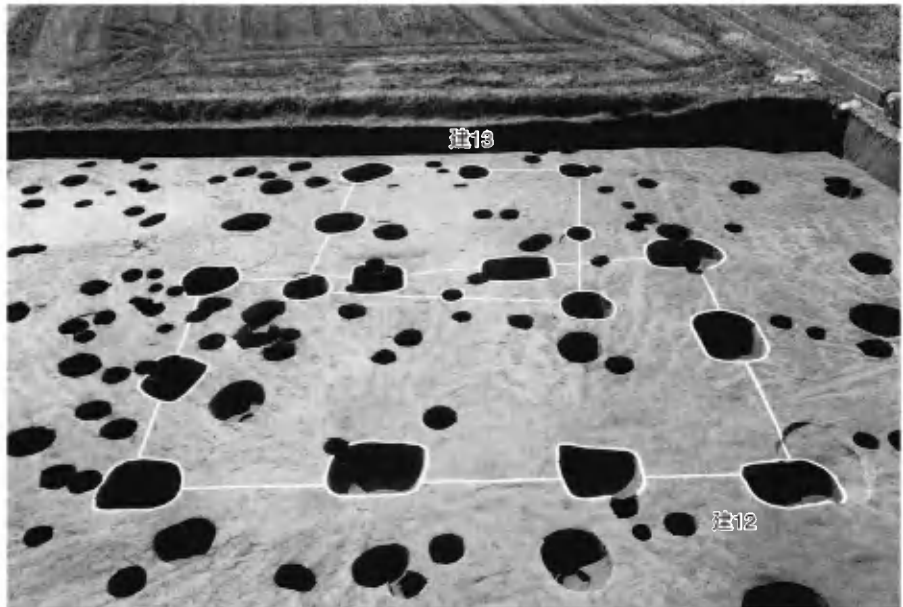
1 掘立柱建物10  
(南から)



2 掘立柱建物11  
(南東から)



3 掘立柱建物12・13  
(北から)





1 掘立柱建物14  
(西から)



2 掘立柱建物15  
(北から)



3 掘立柱建物16  
(西から)





1 土壌80 (西から)



2 溝8 (南から)



3 溝8断面 (南から)



1 埋置土器1  
(北西から)



2 掘立柱建物17  
(北から)



3 溝9  
およびその周辺  
(南東から)

1 埋置土器 2 (649)  
(南から)

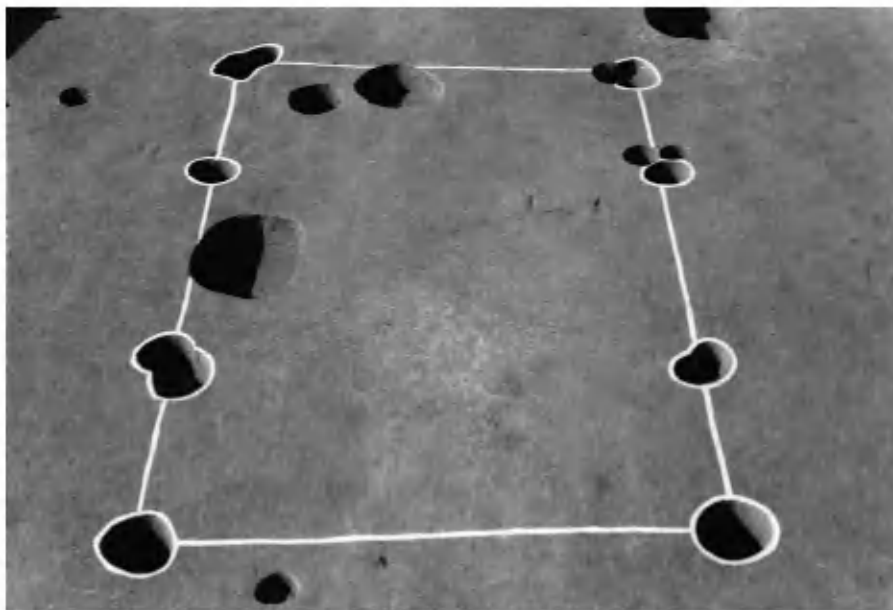


2 埋置土器 2 (648)  
(南から)

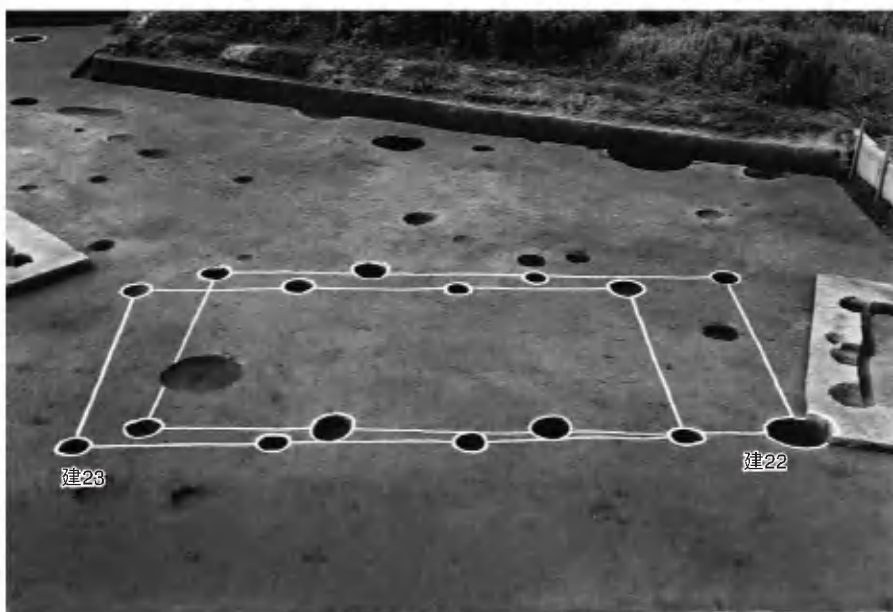


3 土器溜まり 5  
(西から)





1 掘立柱建物21  
(東から)



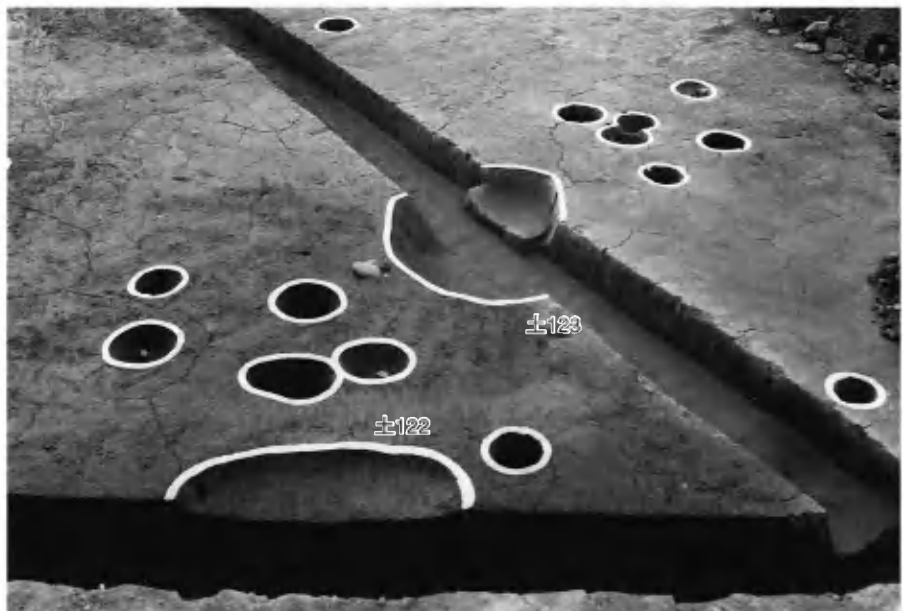
2 掘立柱建物22・23  
(南から)



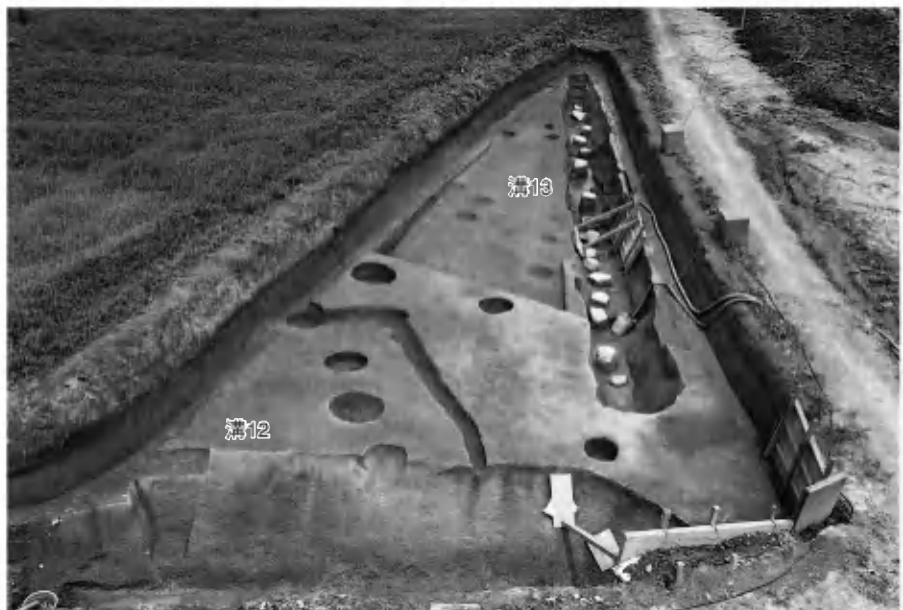
3 掘立柱建物24  
(南から)



1 土壌墓 4 (西から)



2 土壌123  
およびその周辺  
(北東から)



3 溝12・13 (西から)



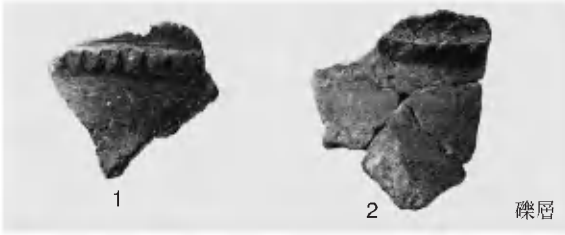
1 溝12断面（南から）



2 溝13断面（西から）



3 溝16（北西から）



土器 (弥生土器)



土器 (弥生土器)





土器 (弥生土器)



土城65

278

279

280



土城76

305

306

352



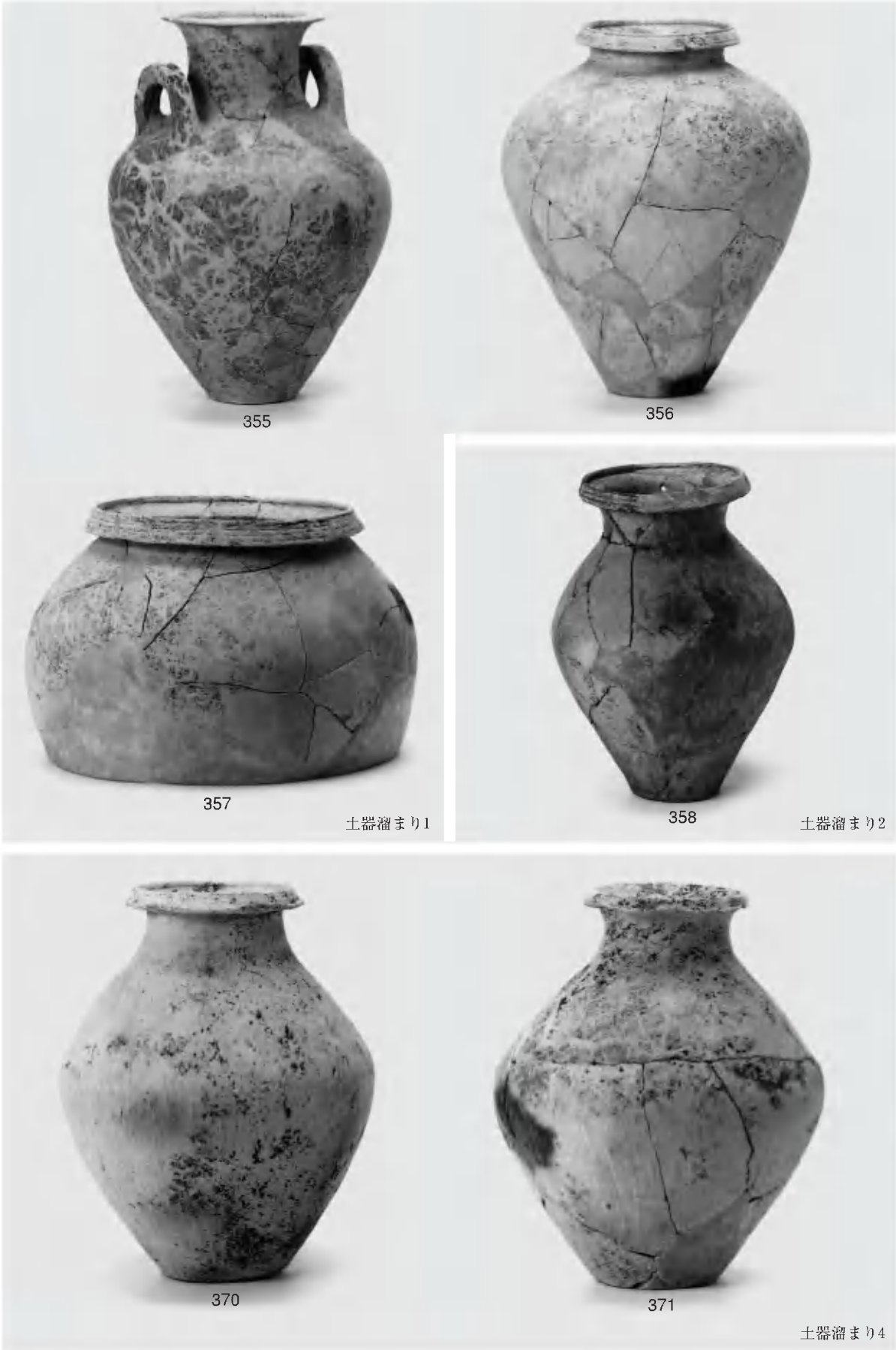
窪地4

339

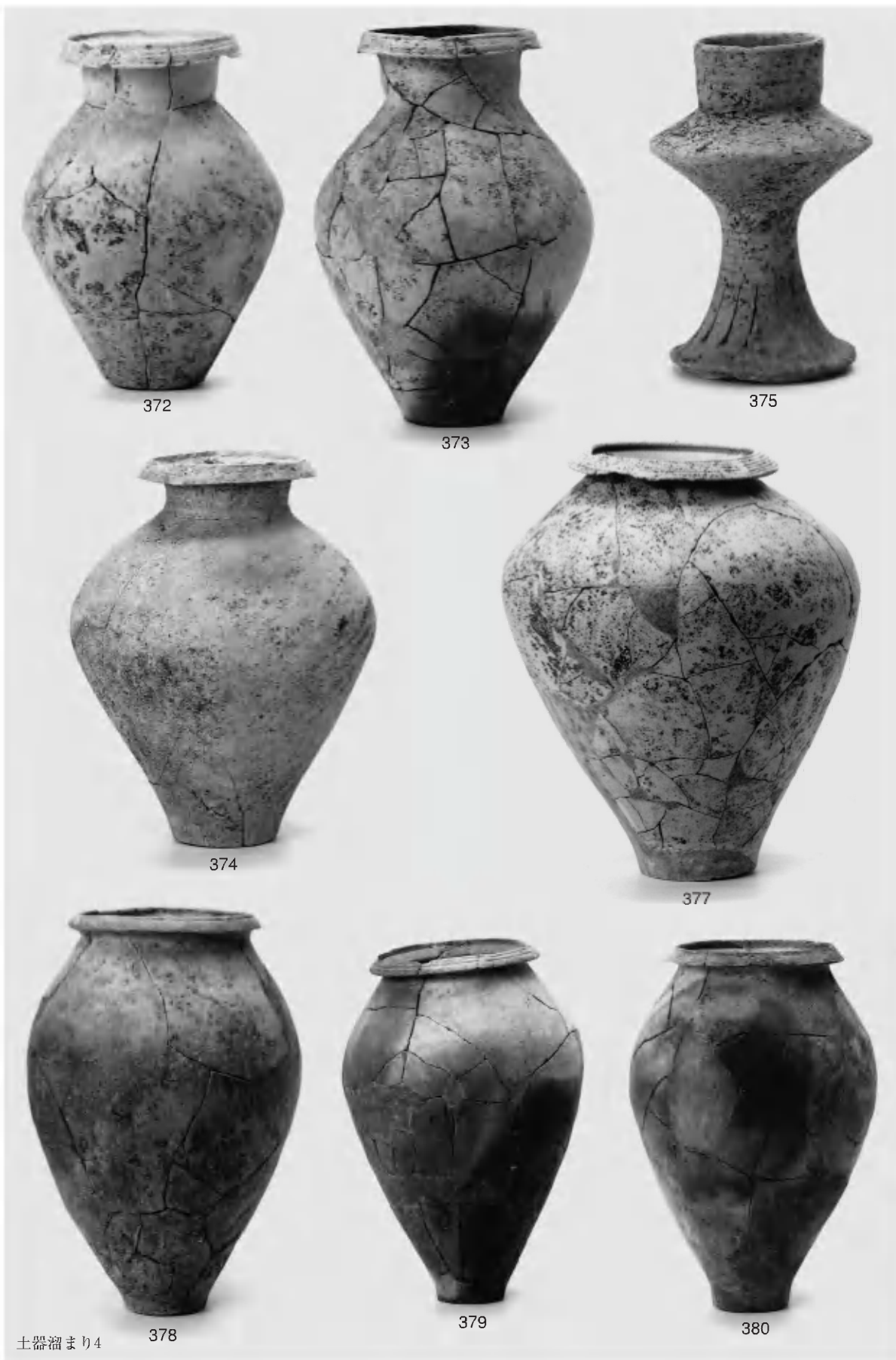


窪地5

354



土器（弥生土器）



土器 (弥生土器)



土器 (弥生土器)



竪穴住居8

434

437



439



竪穴住居10

442

444



竪穴住居11

449

451



土器 (土師器・須恵器)



土器 (土師器・須恵器)

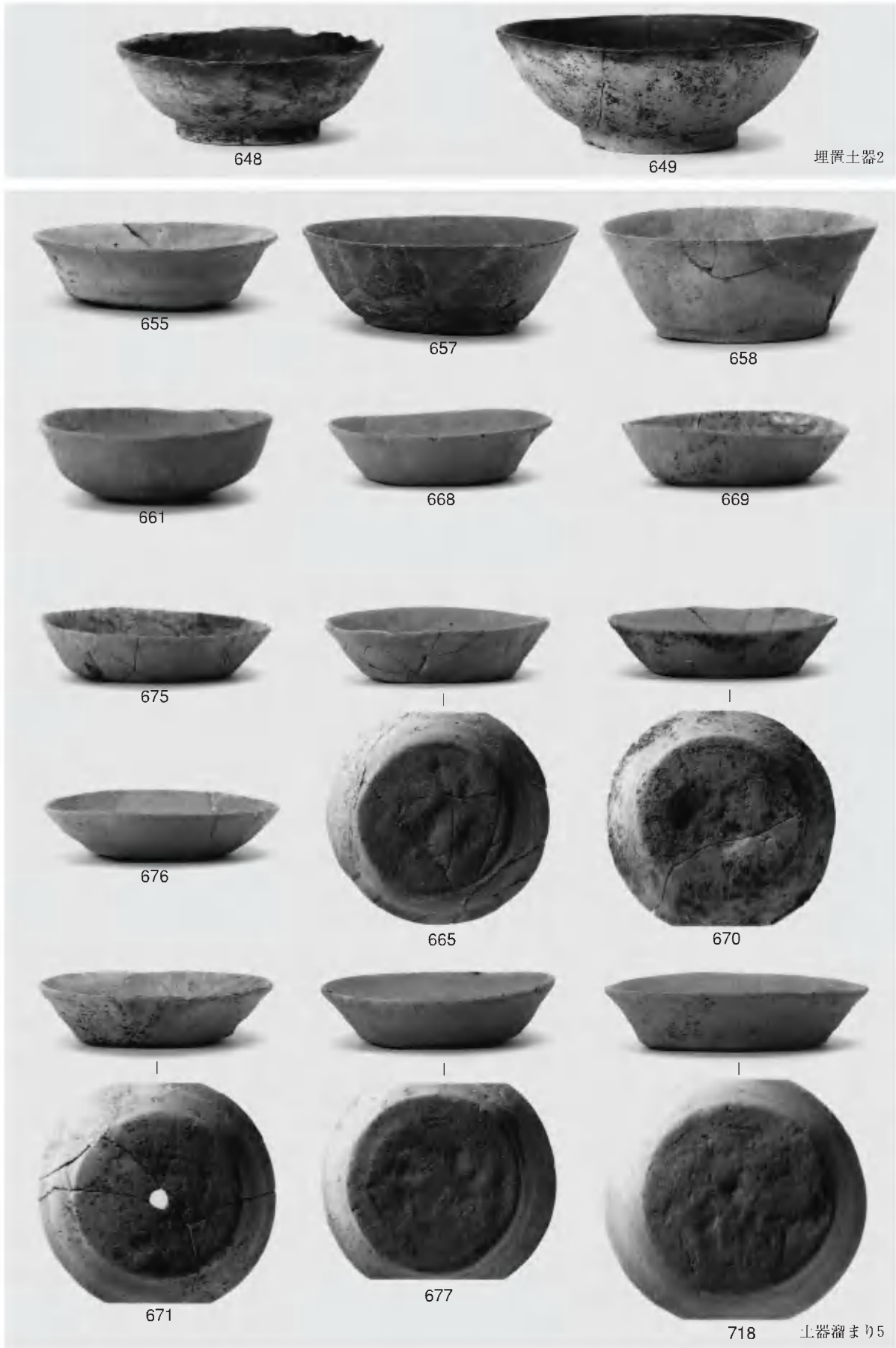




土器 (土師器・須恵器)



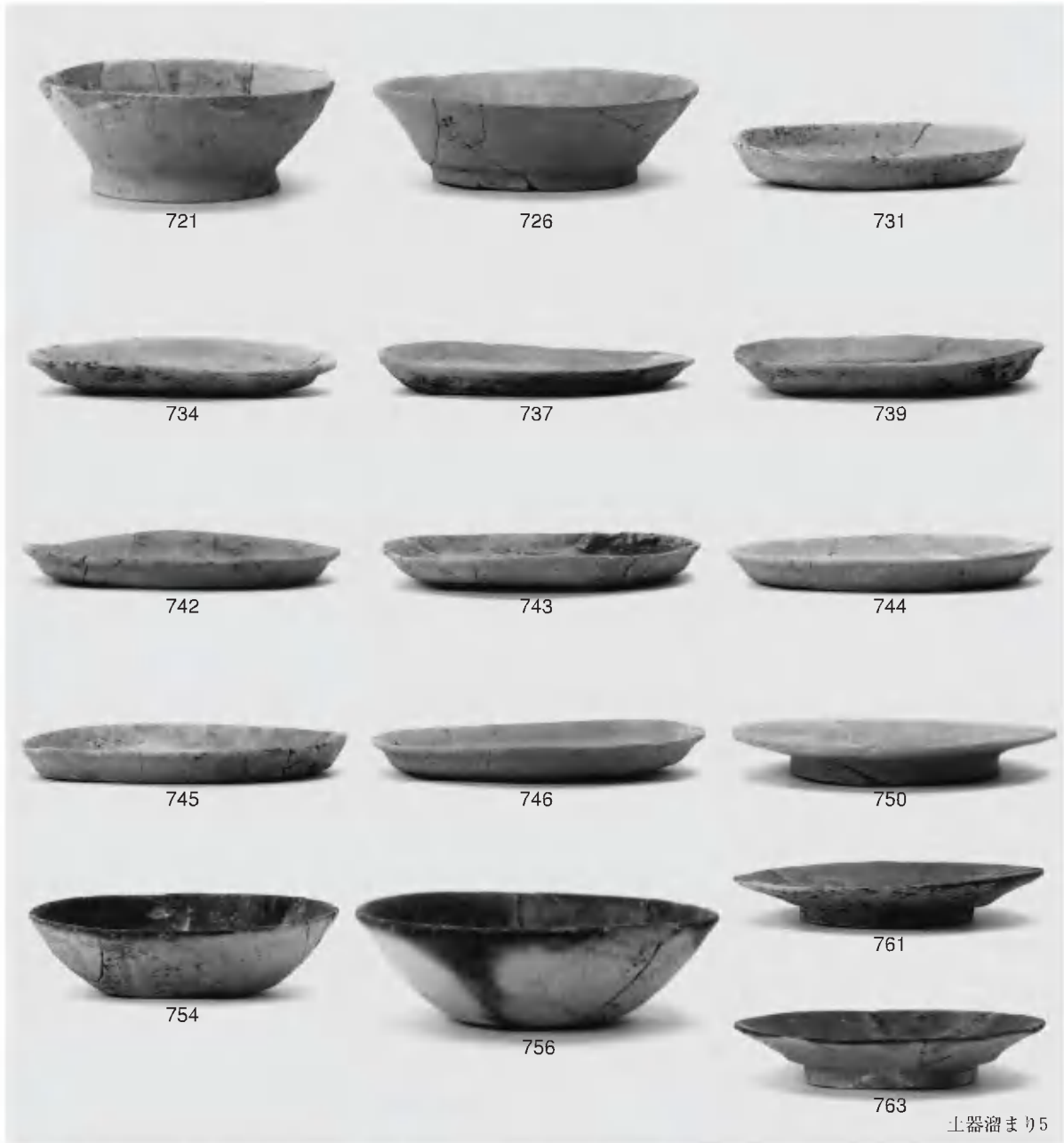
土器（土師器・須恵器・埴輪）



土器（土師器）



土器（土師器）



土器（土師器・須恵器・黒色土器）



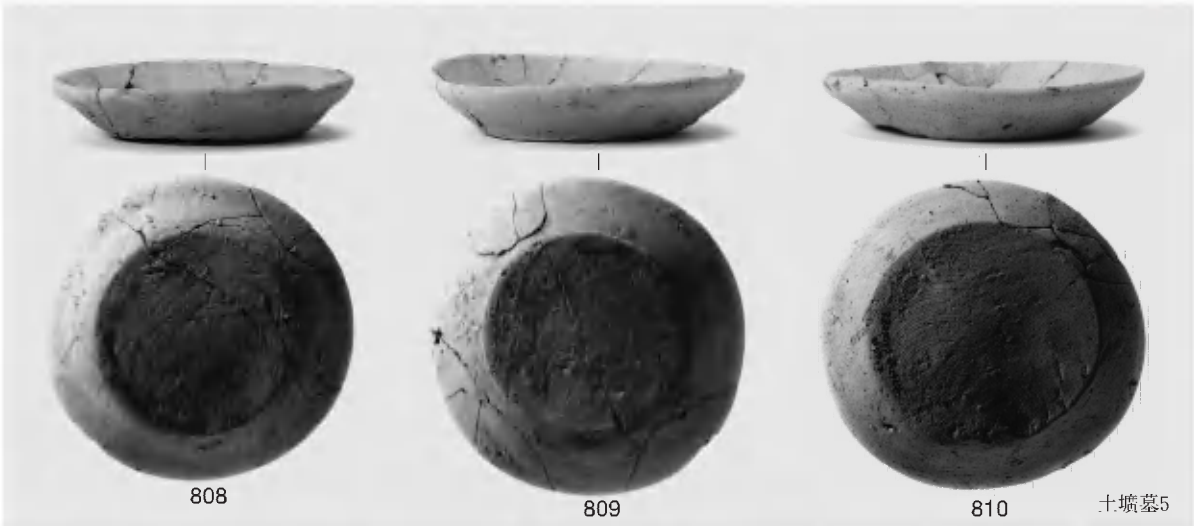
柱穴および遺構に伴わない遺物



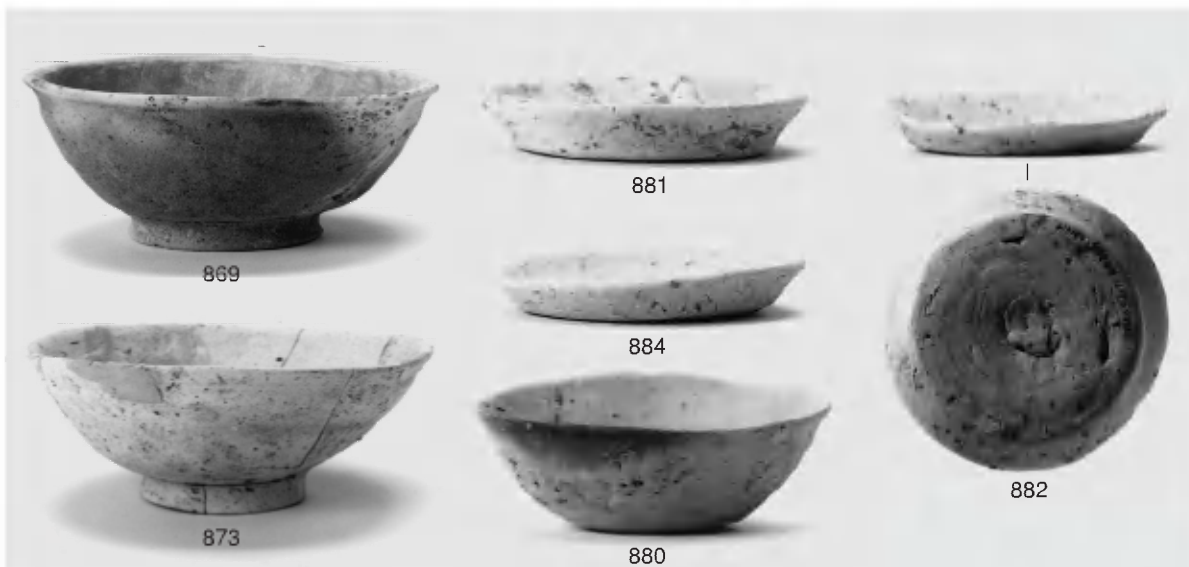
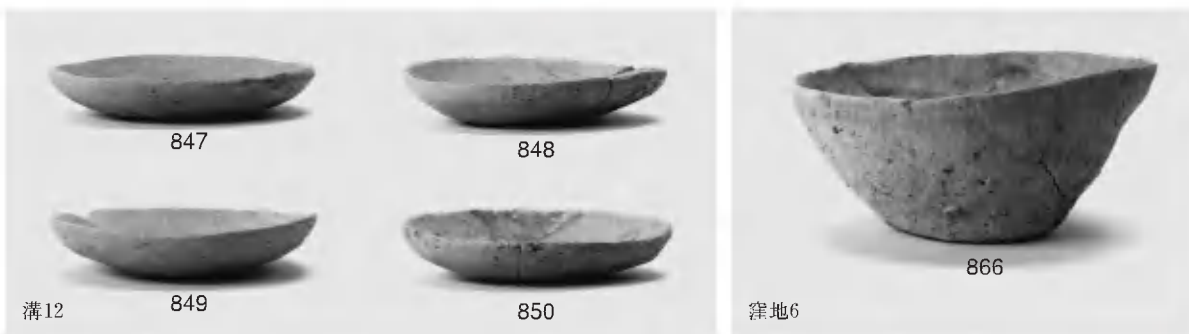
土塚墓2



土塚墓3

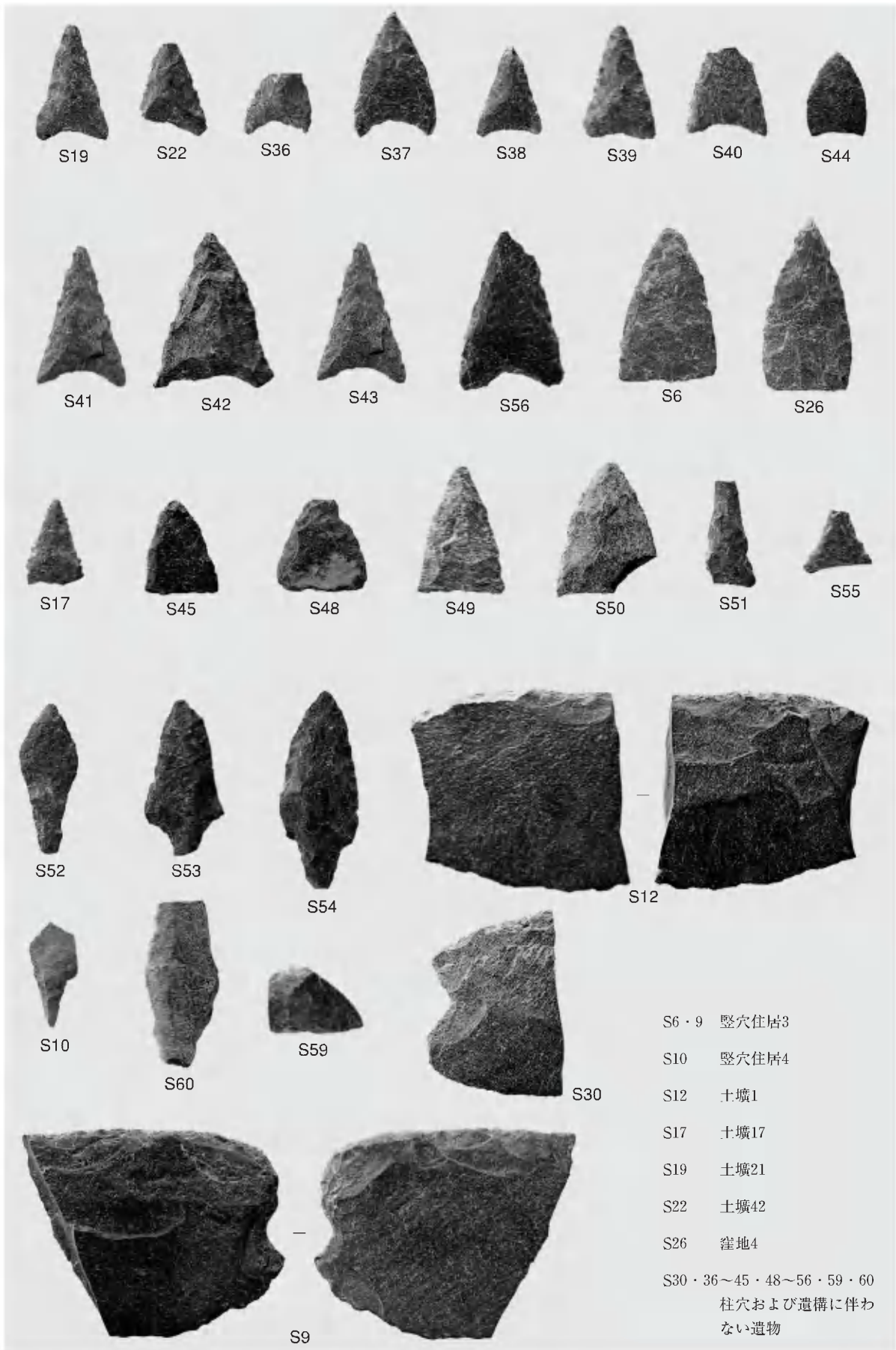


土器 (土師器・瓦)

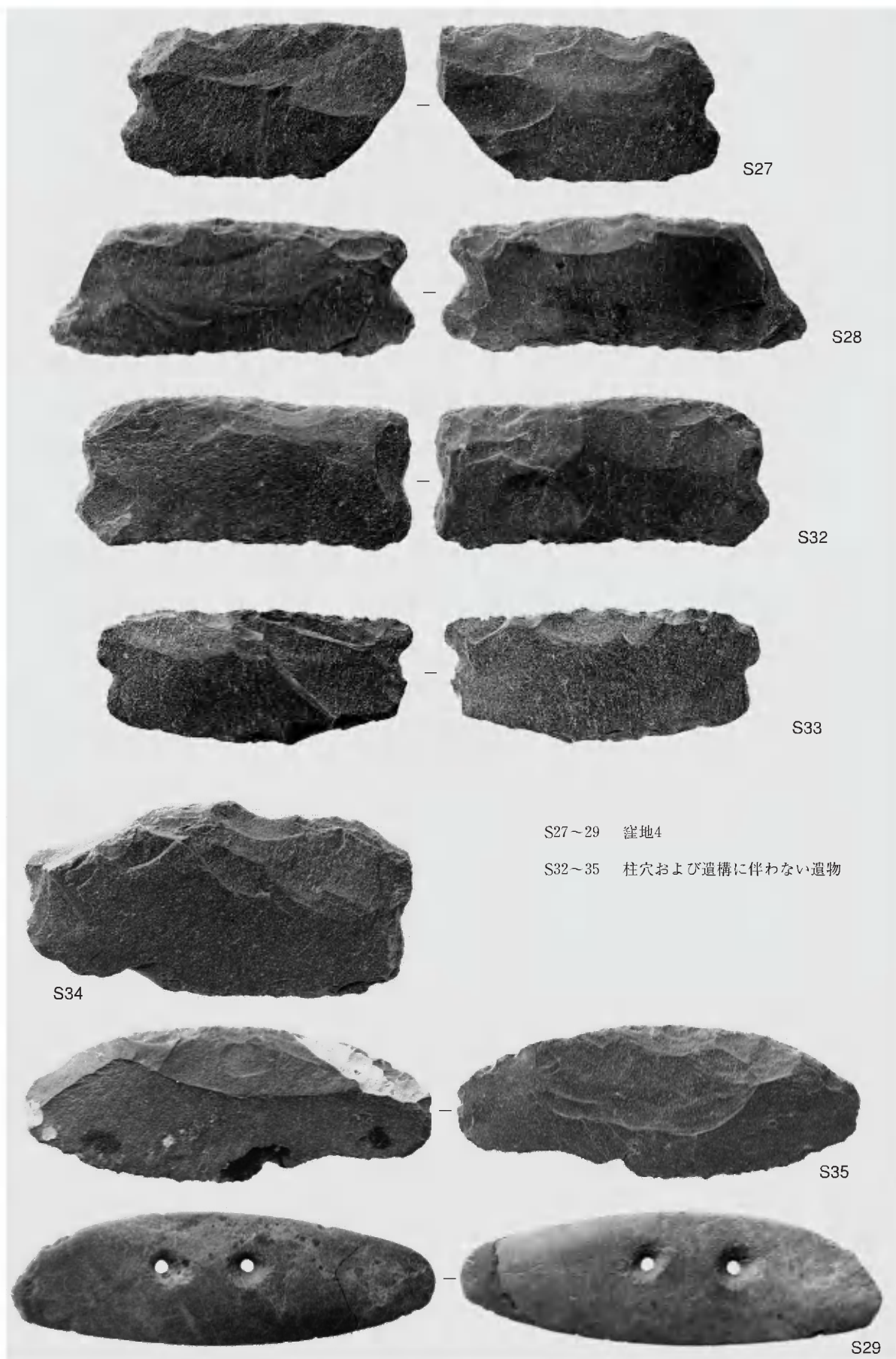


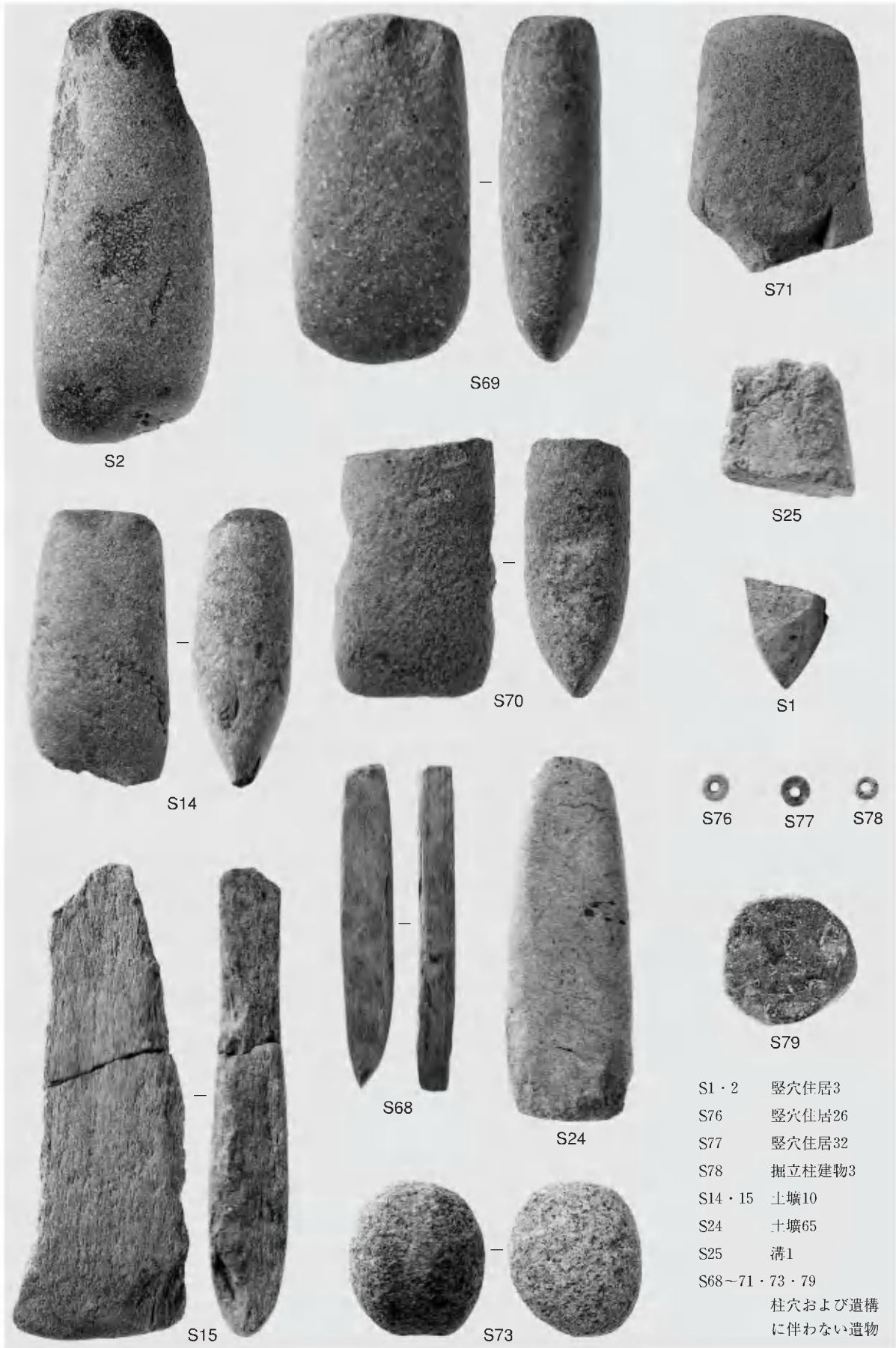
土器（土師器・瓦質土器・瓦）





石製品



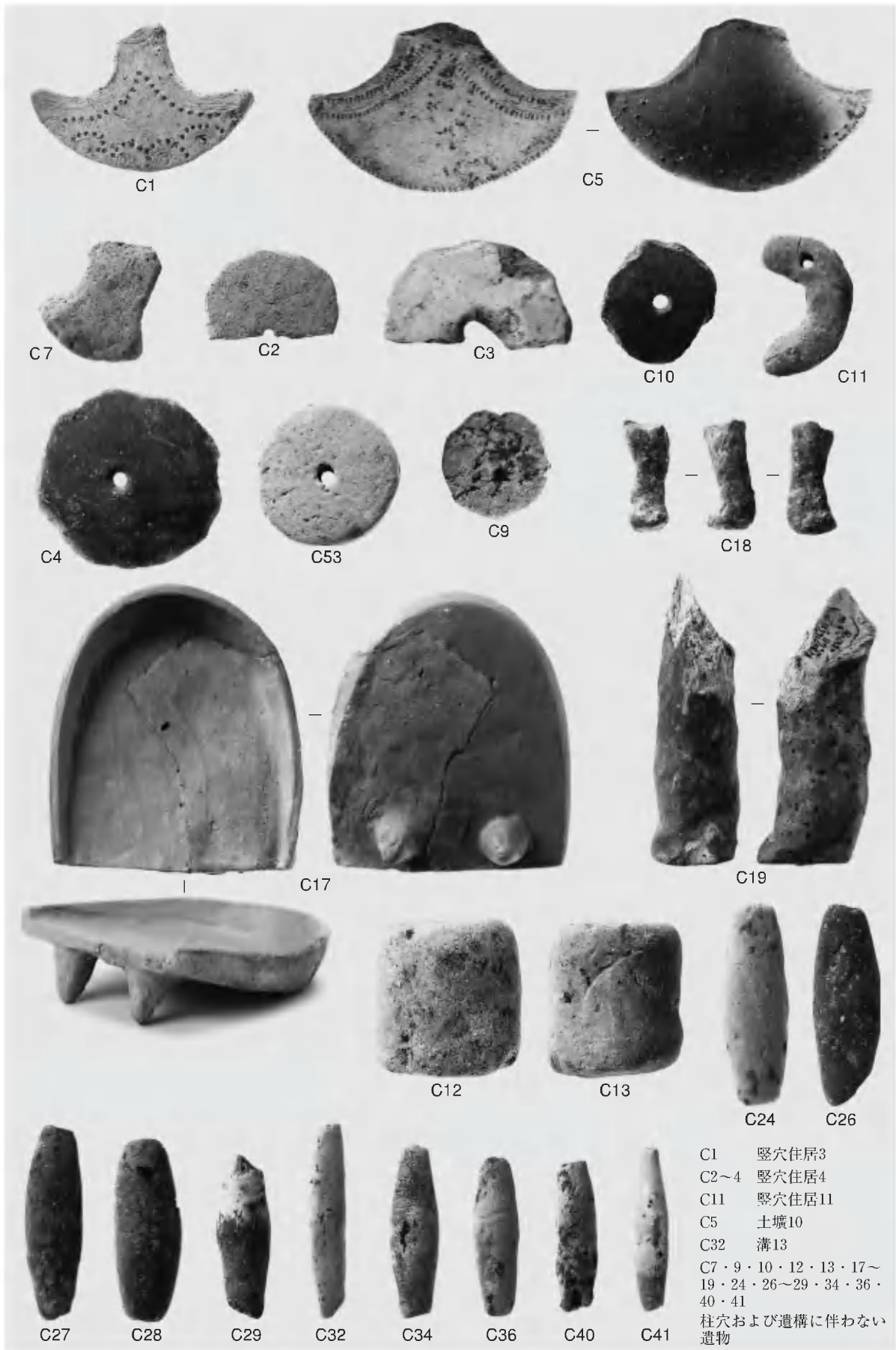


- S1・2 竪穴住居3
- S76 竪穴住居26
- S77 竪穴住居32
- S78 掘立柱建物3
- S14・15 土壇10
- S24 土壇65
- S25 溝1
- S68~71・73・79  
柱穴および遺構  
に伴わない遺物



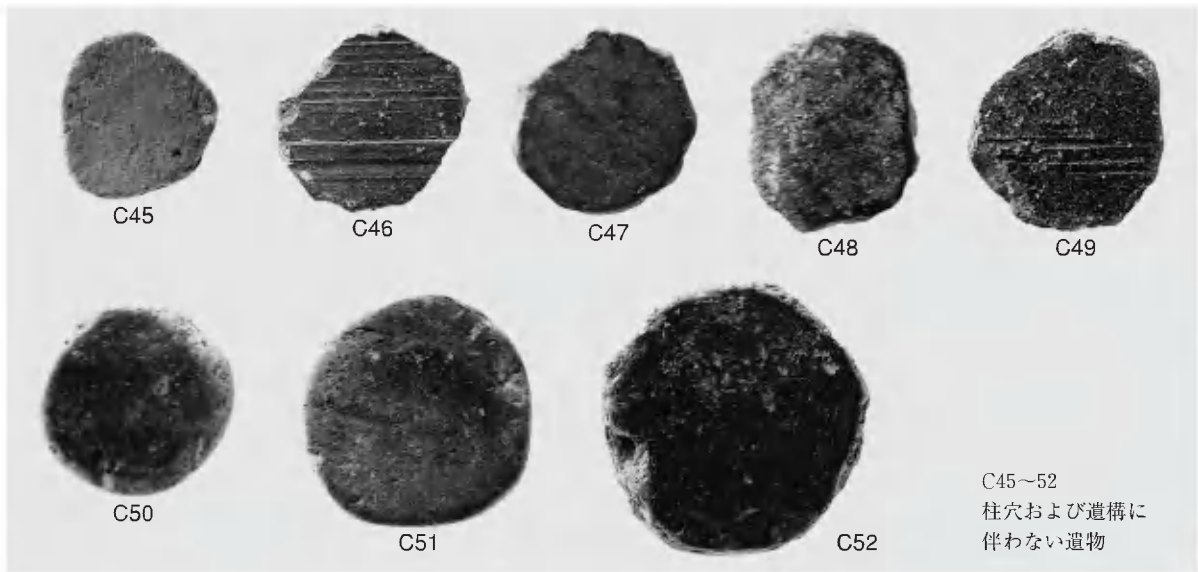
1 石製品

2 骨製品



C1 竪穴住居3  
 C2~4 竪穴住居4  
 C11 竪穴住居11  
 C5 土城10  
 C32 溝13  
 C7・9・10・12・13・17~  
 19・24・26~29・34・36・  
 40・41  
 柱穴および遺構に伴わない  
 遺物

土製品



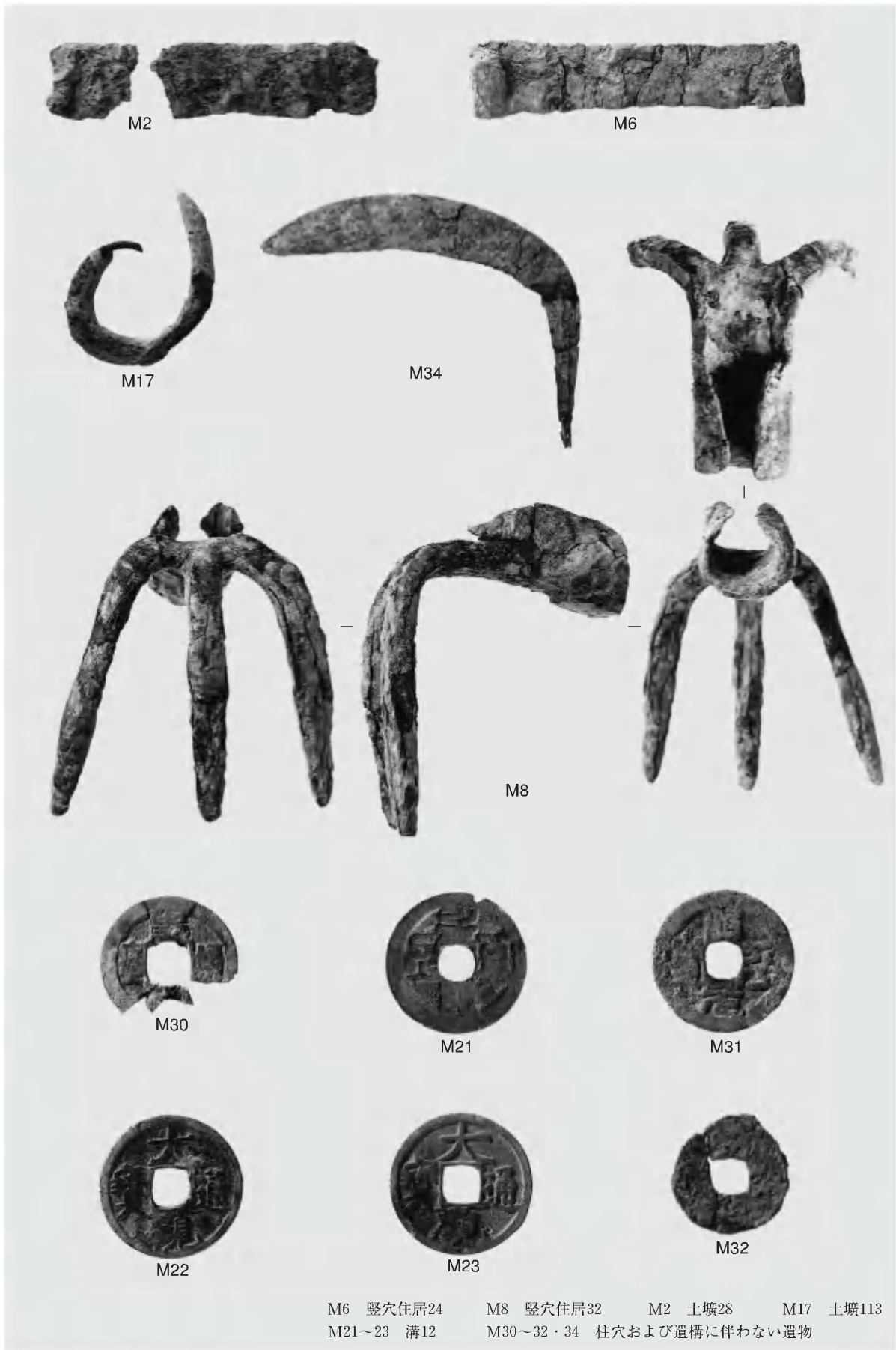
C45~52  
柱穴および遺構に  
伴わない遺物

1 土製品



M3~5 竪穴住居11	M7 竪穴住居26
M9 竪穴住居32	M10 掘立柱建物3
M11 掘立柱建物6	M12 掘立柱建物14
M13 土壙80	M14 土壙86
M15 土壙97	M18 土壙113
M19 土壙115	M24~29 溝12
M16・33・35・36 柱穴および遺構に伴わない遺物	

2 金属製品



M6 竪穴住居24    M8 竪穴住居32    M2 土壙28    M17 土壙113  
 M21~23 溝12    M30~32・34 柱穴および遺構に伴わない遺物

金属製品



溝12出土動物遺存体 (1・3ヒト、10・11・17・20・23・31・32・40ウシ、43・45・46・48ウマ)





1 備中国賀陽郡服部郷図（岡山県立図書館蔵）



2 「服部郷図」周辺航空写真

# 報告書抄録

ふりがな	みなみみぞていせき		くぼきいせき						
書名	南溝手遺跡		窪木遺跡						
副書名	一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査								
巻次	2								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告								
シリーズ番号	214								
編著者名	江見正己・松尾佳子・上椿武・畑地ひとみ・高田恭一郎・渡邊恵里子・氏平昭則・石田爲成・田中政之								
編集機関	岡山県古代古備文化財センター								
所在地	〒701-0136 岡山市西花尻1325-3 TEL. 086-293-3211 http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm								
発行機関	国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所 岡山県教育委員会								
所在地	〒700-8539 岡山市富町2丁目19-12 TEL. 086-214-2220 〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL. 086-224-2111								
発行年月日	西暦2008年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	おみやまけんそうしゃし 岡山県総社市	市町村	遺跡番号						
みなみみぞていせき 南溝手遺跡	みなみみぞて 南溝手		33208	332080807	34° 41' 12"	133° 46' 41"	2003.6~2007.5	9,055	一般国道 180号総社 ・一宮バイ パス建設
くぼきいせき 窪木遺跡	くぼき 窪木			332080808	34° 41' 11"	133° 46' 56"	2004.4~2007.1	19,458	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
南溝手遺跡	集落	弥生時代		竪穴住居2・土壇44		弥生土器・石製品・鉄製品			
		古墳時代		竪穴住居5・土壇2・溝2・ 土器溜まり4・河道1		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・ 土製品・玉類			
		古代		溝5・窪地1・河道1		須恵器・土師器・土製品・木製品・瓦		墨書土器・陶馬・円面硯	
		中世		掘立柱建物4・井戸1・土 壇墓14・土器棺1・土壇17・ 溝15・素掘溝群2		土師器・石製品・鉄製品・銅製品・ 土製品・瓦			
		近世		掘立柱建物13・柱穴列3・ 井戸1・土器棺1・土壇16・ 溝10		土師器・瓦質土器・陶磁器・石製品・ 鉄製品・銅製品・土製品・木製品			
窪木遺跡	集落	弥生時代		竪穴住居7・土器棺6・ 土壇78・溝4・窪地5・ 土器溜まり4・下がり2		弥生土器・石製品・鉄製品・土製品			
		古墳時代		竪穴住居28・掘立柱建物 16・柱穴列3・焼土面2・ 土壇20・溝4・埋置土器1		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・ 土製品・鹿角製品・玉類		鉄製又鋸・鉄製ヤス ・鹿角製鉤状製品	
		古代		掘立柱建物4・土壇3・溝3・ 埋置土器1・土器溜まり 2・下がり1		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・ 土製品・瓦			
		中世		掘立柱建物6・柱穴列2・ 土壇墓6・土壇22・溝5・ 窪地2・下がり3		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・ 土製品・木製品・瓦			
		近世				石製品・土製品			
要約	<p>南溝手遺跡では、大きく2か所の微高地を確認した。弥生時代後期から古墳時代にかけては、その微高地上に集落が展開し、河道からは当該期の土器が多く出土している。古代においては、河道より土器・瓦・陶馬・木製品などが出土し、近隣の栢寺廃寺との関連性が推察される。中世以降は低位部にも集落が営まれるようになり、近世には二重の溝に囲まれた館が出現する。</p> <p>窪木遺跡では、縄文時代晩期の土器を含む微高地2か所を確認した。西側の微高地上では、弥生時代中期中葉から、舟形土壇をはじめとする遺構を検出。続く弥生時代中期後葉から後期にかけては、東側の微高地上で集落が営まれるようになる。古墳時代になると、集落の中心は再び西側の微高地へと移り、6世紀代には東西幅150mの集落域を確認している。この集落内では、およそ7世紀を境にその景観が、竪穴住居から掘立柱建物へ推移すると考えられた。古代には、東の微高地において掘立柱建物および埋置土器、多くの土器が出土した土器溜まり等を検出。中世以降は、微高地のみならず低位部においても、集落が営まれる。</p>								

# 報告書抄録

ふりがな	みなみみぞていせき		くぼきいせき						
書名	南溝手遺跡		窪木遺跡						
副書名	一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査								
巻次	2								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告								
シリーズ番号	214								
編著者名	江見正己・松尾佳子・上祐武・畑地ひとみ・高田恭一郎・渡邊恵里子・氏平昭則・石田爲成・田中政之								
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター								
所在地	〒701-0136 岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm								
発行機関	岡山県文化財保護協会								
所在地	〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL. 086-224-2111								
発行年月日	西暦2008年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	おかやまけんそうじやし 岡山県総社市	市町村	遺跡番号						
みなみみぞていせき 南溝手遺跡	みなみみぞて 南溝手		33208	332080807	34° 41' 12"	133° 46' 41"	2003.6~2007.5	9,055	一般国道 180号総社 ・一宮バイ パス建設
くぼきいせき 窪木遺跡	くぼき 窪木			332080808	34° 41' 11"	133° 46' 56"	2004.4~2007.1	19,458	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
南溝手遺跡	集落	弥生時代		竪穴住居2・土壇44		弥生土器・石製品・鉄製品			
		古墳時代		竪穴住居5・土壇2・溝2・土器溜まり4・河道1		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・土製品・玉類			
		古代		溝5・窪地1・河道1		須恵器・土師器・土製品・木製品・瓦		黒書土器・陶馬・円面硯	
		中世		掘立柱建物4・井戸1・土壇墓14・土器棺1・土壇17・溝15・素掘溝群2		土師器・石製品・鉄製品・銅製品・土製品・瓦			
		近世		掘立柱建物13・柱穴列3・井戸1・土器棺1・土壇16・溝10		土師器・瓦質土器・陶磁器・石製品・鉄製品・銅製品・土製品・木製品			
窪木遺跡	集落	弥生時代		竪穴住居7・土器棺6・土壇78・溝4・窪地5・土器溜まり4・下がり2		弥生土器・石製品・鉄製品・土製品			
		古墳時代		竪穴住居28・掘立柱建物16・柱穴列3・焼土面2・土壇20・溝4・埋置土器1		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・土製品・鹿角製品・玉類		鉄製又鋏・鉄製ヤス・鹿角製鉤状製品	
		古代		掘立柱建物4・土壇3・溝3・埋置土器1・土器溜まり2・下がり1		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・土製品・瓦			
		中世		掘立柱建物6・柱穴列2・土壇墓6・土壇22・溝5・窪地2・下がり3		須恵器・土師器・石製品・鉄製品・土製品・木製品・瓦			
		近世				石製品・土製品			
要約	<p>南溝手遺跡では、大きく2か所の微高地を確認した。弥生時代後期から古墳時代にかけては、その微高地上に集落が展開し、河道からは当該期の土器が多く出土している。古代においては、河道より土器・瓦・陶馬・木製品などが出土し、近隣の栢寺庵寺との関連性が推察される。中世以降は低位部にも集落が営まれるようになり、近世には二重の溝に囲まれた館が出現する。</p> <p>窪木遺跡では、縄文時代晩期の土器を含む微高地2か所を確認した。西側の微高地上では、弥生時代中期中葉から、舟形土壇をはじめとする遺構を検出。続く弥生時代中期後葉から後期にかけては、東側の微高地上で集落が営まれるようになる。古墳時代になると、集落の中心は再び西側の微高地へと移り、6世紀代には東西幅150mの集落域を確認している。この集落内では、およそ7世紀を境にその景観が、竪穴住居から掘立柱建物へ推移すると考えられた。古代には、東の微高地において掘立柱建物および埋置土器、多くの土器が出土した土器溜まり等を検出。中世以降は、微高地のみならず低位部においても、集落が営まれる。</p>								

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

南溝手遺跡  
窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査2  
(第2分冊)

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省岡山国道事務所  
岡山市富町2-19-12

岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 富士印刷株式会社  
岡山市桑野516-3

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214

南溝手遺跡  
窪木遺跡

一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査2  
(第2分冊)

平成20年3月19日 印刷  
平成20年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県文化財保護協会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 富士印刷株式会社  
岡山市桑野516-3